
もののけがいっぱい

剣崎武興

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もののけがいつぱい

【Nコード】

N3861G

【作者名】

剣崎武興

【あらすじ】

俺は真田将仁。県立扶桑第一高校に通う17歳、性別男、出席番号12番。体力には自信があるが他はまあ人並みのただの高校生、のはずだった。が、”弁護士常盤”と名乗る女からかかってきた電話が、そんな俺の日常をひっくり返した。家財道具が、なぜか女の子に変身しはじめたのだ。ということが始まる非日常を描く擬人化いつぱいのハートフル(?)コメディー、ちよつとバトル風味な物語。

01・それは1本の電話から始まった その1

9月14日 木曜日

ジリジリジリジリ・・・

耳元でジリジリとやかましく鳴る目覚まし時計を引っ叩いて止めると、もっそりと布団から這い出す。

「ふわぁーああ」

こういうとき、誰か起こしてくれる人がいればありがたいんだが、一人暮らしの俺にはそんなもんはない。いたら怖い。マジ怖い。アホな考えを頭から追い出し、寢床から出ると、汗で臭くなったシャツを洗濯籠に放りこみ、風呂場に向かう。いつもは朝シャンなんかしないんだが、今朝は妙に蒸し暑くて寝汗を目いっぱいかいてしまったのだ。

素っ裸になるとシャワーをひねり、石鹸をスポンジにこすりつけて泡立て、体を洗う。男の入浴なんか詳細に説明しても面白くもなるとも無いだろうからあとは割愛する。

んで、鏡を見てヒゲの状態を確認し、急いで体を拭くと、さつさと着替える。そして、パンツだけ履いて冷蔵庫を開けると納豆パツクと卵を取り出し、お椀にぶち込みかき混ぜる。そして、炊飯器から飯をどんぶりによそうと、それらを持って居間に行き、座卓の横に座り、テレビをつけてニュースを聞きながら、納豆をかき混ぜて飯にぶっかけて、そしてかっ込む。

なんだそりやという奴もいるだろうが、朝は一日の最初のエネルギーだから食わないといかん。それに納豆は健康にいいって言うだろ？

それから、寢室に戻るとシャツに急いで袖を通し、ズボンを履いてネクタイをしめる。最後に洗面所で口をゆすぐと、部屋に戻りテレビを消して、充電器に差しとした携帯をポケットに突っ込み、そ

して部屋を出てドアに鍵をかける。

「まさにおはよー！」

となりのガキがそう言いながら俺の後ろを駆け抜けていく。

「おう、遅刻すんなよ！」

軽くそつちを見て挨拶を返す。

俺の名前は「真田将仁^{まなだまさひと}」。県立扶桑第一高校の二年生だ。

俺は今、アパートで一人ぐらしをしている。家から学校までが、電車を使っても1時間以上かかるんで、「もつと近いところから通わせてくれ」とむりやり頼みこんで、学校から歩いて15分のアパートに住むことにしたんだ。

今、実家には両親と、あと大学に通っている兄貴が住んでいる。兄貴が実家にいるのは、兄貴の通う大学が、家に近いからだ。

ちなみに実家と言っても本当の親じゃない。なぜなら俺は養子だからだ。両親も、兄貴も、俺と血のつながりはない。俺は、本当の両親の顔も知らない。物心ついたときから、孤児として施設で6歳まで育てられていたからだ。

それだけに、引き取られたときは不安だったが、今では親父もお袋も、そして兄貴も、俺の大切な家族だ。

と、そんな話は止めておこう。朝はただでさえ時間が無いんだ。アパートの階段を駆け下り、中庭に出て駐輪場の前を通過する。そこには俺のバイクが止めてあるんだが、学校はバイク通学が出来ないのでとりあえず通過する。

そのまま通りに出て学校に向かう。学校の門が見えたところで、移動スピードを走りから歩きに切り替える。腕時計を見るとまだまだ余裕だ。

「うーす」

校門のところで、一人の男と合流する。クラスメイトのシンイチだ。本名・高木進一^{たかぎしんいち}、出席番号15番、サッカー部所属。電車通学のこいつとは家の方向が逆になるんでこのへんで合流することが多い。

「見たか昨日の試合。あれ惜しかったよなー、前半はリードしていたのに」

「んーでも、まあありやしよーうがないんじゃない？相手がブラジルだもん、格が違うよ」

マイクラスである2 - Bの教室に入り、ホームルームが始まるまでの間、俺はシンイチと、というか、クラス中の男は昨日テレビでやってたサッカーの試合の話で盛り上がっていた。

俺はサッカーにはあんまり興味が無いが、それでも昨日の試合は思わず見てしまうほど白熱した展開だった。なにしろ、ブラジル側が主力を欠いていたとはいえ、全日本チームが、前半に先制ゴールを決め、しかもブラジルを完全に押さえ込んだままで後半20分ぐらいまで進んでいたんだから。俺だって、ブラジルはサッカーが強いことぐらい知っている。

結局、そこで本気スイッチが入っちゃったブラジルの猛反撃により、全日本は3 - 1で負けちまったんだが、その後でやってたスポーツニュースでも「日本大健闘」なんて言っていたし、今の日本サッカーレベルを考えるとよくやったと思う。

だがこいつは違うみたいだ。まあこいつの場合、バリバリのサッカー部員だからサッカーに向ける関心も俺なんかよりずっと強いんだが。

「ブラジルも大人気ないよなー、あんなところでむきになりやがって」

「それが試合つてもんだろ？勝ちつてのは勝ち取るもんなんだから、譲つてもらっても意味がないじゃないか。それにブラジルだって格下に負けたくはないだろうし」

「おいつす」

そこに、坊主頭が首を突っ込んできた。クラスメイトのヤジローだ。本名・近江弥次郎^{おひまやじろう}、出席番号5番、野球部所属。ちなみに、3年生が引退したためレギュラーに昇格し、出席番号と同じ5番の背番号をゲットしたとこの前自慢していた。

「何の話してんだ」

「決まってるだろ、ゆうべのブラジル戦だよ」

「ふーん」

「いまだ興奮冷めやらぬといった感じのシンイチと対称的に、ヤジローは全く冷めた反応だ。」

「当然といえばまあ当然だ。聞いた話だが、こいつは小学校からずっと野球をやっている、根っからの野球部員だ。だからこいつの場合、野球に向ける情熱が半端ないがそれ以外の球技にはほとんど興味がない。」

「ちなみに、俺は陸上部に所属していて、自慢だが棒高跳びでの県大会記録を持っている、県下きつてのアスリートである。ルックスもそんなひどくはないと思う。んだが、それとこれとは別物らしく、女子には「デリカシーがない」「歩く朴念仁」などと呼ばれて、正直もてたためしがない。」

「どーせ勝てなかつたんだろ？」

「なに言ってるんだ、そりゃ格が違う相手だったけど、いいとこまで行っただぜ？次にやりゃあ」

「格が違うって言い訳なんかすつから負けんだ、根性が入ってない証拠だ」

「根性で勝てりゃ世話ないって、強い相手は強いつて認めなきゃ」
「なんか二人のやり取りが禅問答みたいになってきたところで、チャイムが鳴る。」

「起立！礼！おはようございますー！」

「おはようございます、皆さん」

「委員長の佐伯の号令で挨拶が行われると、うちの担任が出席をとりはじめる。」

「うちの担任、徳大寺伊織とくだいじいおりは華族の末裔だそうで、その上品なルックスと、おっとりしてひいきをしない性格から男女問わず人気がある。担当は古文・漢文で、この先生のおかげで古文や漢文が好きになった生徒は結構いるようだ。」

ちなみに、目下の悩みは「胸が小さいこと」だそうで、過去自分が担任したクラスの女子全員よりもバストが無かったためにシヨックを受け、以来ブラの下にパットを3枚重ねて入れている、という噂がある。ホントかどうかは知らんが、でも胸がないのはスーツの上からでもわかる。

「二十四節気でいう白露もすぎました。暑さもだいぶ和らいで来ましたので、夏休み気分はそろそろ卒業して、勉強に身を入れていきましょうね」

古文の先生らしく、暦を交えて話を締める。

そして、先生が出て行つてから次の授業が始まるまでの間、ざわざわーっと教室が騒ぎ始める。

さて。一時間目は日本史だ。というわけで俺は机の中から教科書とノートと資料集を引っ張り出して授業に挑む戦闘体制を整えることにした。

01・それは1本の電話から始まった その1（後書き）

はじめまして。これが初投稿になる、剣崎武興です。

実は、ネット上で自筆小説を発表するのは初めてではなくて、自分のHPを作ったときにそこに載せたのが初めてなんです。

もっとも、開いて3年ほどたちますがまだ訪問者が2000人にならないようなページだし、ペンネームも違うので、知らんぞという人のほうが間違いなく多いと思います。

ついでに、作品も違います（笑）

ネタとしては、2ちゃんねるなんかではありがちで、でも小説としてはあまり見かけない擬人化モノです。

ここから先、もっと擬人化が出てきて賑やかになりますので、生暖かい目で見守ってください。

01・それは1本の電話から始まった その2

きーんこーんかーん。

4時間目の授業が終わると、教室は一斉にあわただしくなる。

うちの学校には食堂がある。AセットBセットCセットにラーメン、うどん・そば、カレーなどなど、食べ盛りの学生の胃袋を満たしてくれるメニューがそろっている。

俺なんかはそっちで飯を食うんだが、弁当持参している奴つてもいる。

そして、その中にはこんな羨ましい奴もいる。

「はい、お弁当」

「おっ、サンキユ。やはあ、また凝ってるなあ」

「そうかしら、でも最近こう言うじゃない。栄養のバランスとか考えると、一日30品目を目安に、ってこら、人が説明してるのにつー！」

「むっ、んぐっ、あー、わりいわりい、腹減ってたもんだからさ」

「んもっ、しょうがないわね。ほら、こんなところにソースついでる」

「わ、い、いいよそのぐらい自分で」

「鏡もなしでどうやって見るのよ。ほら大人しくしなさいってば言っておくが、これは俺が参加している会話ではない。俺の後ろの席で、俺とサッカーの話で盛り上がっていたシンイチと、クラス委員長の佐伯が繰り広げている会話である。」

この二人の仲については、俺がキューピッド役になってしまったこともあり、思い出すと腹が立つてくるので詳しい説明は控えるが、今ではクラス公認のバカップルなのだ。

夏休み明けに、「ついに一線を越えた」と自慢げに言われた時は、祝福の気持ちを込めて思いつき張り倒してやったもんである。

「あーあ、あんにやろ、毎回毎回見せ付けてくれやがって」

それを見て愚痴っているのは、俺と同じ女に縁のない野球小僧、ヤジローだ。俺とこいつは、そろってシンイチのことを「昼休みの裏切り者」と呼んでいる。

聞いているとさらにむかついてくるので、とつと食堂に向かうことにする。腹を立てる前に彼女を作ればいいだけの話なんだが、そんな簡単にはいかないのが現実だ。それこそ、俺にとつては県大会で棒高飛びの大会新記録を作るより難しい。

高木の奴にだって彼女が出来たんだ、俺だって、彼女はほしいんだ！

「よし、食うぞこの野郎！」

「当たり前だ、こん畜生！」

というわけで、俺は彼女がほしいという思いを食欲に昇華することにして食堂に向かった。

01・それは1本の電話から始まった その2（後書き）

どうも、作者です。

第2話にもなって未だに擬人化のぎの字も出ないですいません。

01・それは1本の電話から始まった その3

「今日は何にするかなあ」

放課後、というより部活が終わった後なんでもう夜に近いころ。俺はほとんど毎日のように通っている定食屋に向かっていた。家とは反対方向で、駅前大通りからはちよつと路地を入ったところだが、安くて美味しいなによりボリュームがあるので一人暮らしあーんど育ち盛りの俺には非常にありがたい店だ。

そして、角を曲がったらその店が見える、というところで、突然、携帯が鳴り出した。

取り出してみると、画面には見覚えの無い番号が点灯している。

「もしもし、真田将仁さんでいらっしやいますか？」

誰だろうと思いつながら通話ボタンを押すと、聞いたことの無い女の人の声が聞こえた。落ち着いた、品のいい声だ。

「はい、そうですが、どちらさまですか？」

「ああ、よかった。申し訳ありません。私、弁護士とまわかねの常盤花音代と申しますが、少々お時間、よろしいでしょうか？」

俺が答えると、電話の向こうの声はなんだか安心したような口調になった。

だが、こっちはその一言で一気に不安になってしまった。

なんでって、弁護士だぞ？普通の高校生には縁があるはずもない人だぞ？

なんでだ？家賃も学費もちゃんと払っているぞ、もとい払ってもらっているぞ。まさか、親父が事故ったとか夜逃げしたとかいいうんじゃないだろうな？それとも、兄貴が何か訴えられたのか？

色々と不安になってくる。

「あ、あのー、何か、あったんでしょつか？」

「何か、とおっしゃいますと？」

「あ、ですから、うちの誰かが事故ったとか」

だが、それに対する答えは、俺の想像を超えていた。

「いいえ。私は、将仁さんのご実家のことではなく、あなたご自身に用があつて、お電話を差し上げたのです」

「へっ！？お、俺え！？お、俺、なにもしてないっすよ！？」

なんで俺！？俺、何かやった！？何をやった！？

「そんなに取り乱さないください。ほら、ひとつ大きく深呼吸して」

電話の向こうの声に従い、俺は大きく深呼吸する。ちょっと落ち着いたが、それでも俺が弁護士世話になる理由は思い当たらない。

「どうですか？少しは落ち着きましたか？」

「は、はい、あ、そうじゃなくて、あの、弁護士さん？」

「何でしょう？」

「お、俺、何かやったんですか？」

「いいえ、心配しないでください。将仁さんは、まだ何もされていませんから。話というのは、今までのことではなくて、これからのことです」

電話の向こうの声は、ちょっと楽しげにそんなことを言うてくるが、余計にわからん。進路決定つてことはないだろう、先生ならともかく、弁護士がそんなもんで電話してくるわけがないし、そもそも理系志望の俺の進路予定には弁護士なんてカケラもない。

「……………もしかして、どつきりか？どつかで隠し撮りしているのか？」

「あらかじめ言っておきますが、これはいたずらでも冗談でもありません。まじめな話ですよ？」

すると、すかさず釘を刺すような言葉が電話の向こうからした。

な、なんだこの女！？俺の考えを、電話の向こうから読んでいるのか？

「……………ええつと……………」

答えられないでいると。電話の向こうの声もちょっと困惑気味になつてきた。

「将仁さん、混乱されているようですので、落ち着いたころに」
連絡をいただけますか？」

「は？」

すると、電話の向こうの声は一方的に切り上げるようなことを言ってきた。

「携帯電話でしたら履歴を追うことができますので」

「あ、あの、ちょっと」

「大丈夫ですよ。私でしたら、24時間、いつ連絡を下さっても」
「いや、そういうことではなく」

「ああ、その点もご心配なく。この電話のことが忘れられなくなるよう、今から手を打ちますから」

「え？え？あ、あの、どういうことですか？」

「おつかがみ 澳津鏡 へつかがみ 辺津鏡 やつかのつるぎ 八握剣 いくたま 生玉 たるたま 足玉 まかるがえしのたま 死返玉 まかるがえしのたま 道返玉 へびの 蛇比
礼 はちのひれ 蜂比礼 くまぐさもののひれ 品物比礼 ふるへづらゆいごころへ 布瑠部由良由良止布瑠部」

「へっ？」

な、なんだなんだ？なんかの呪文か？

「では、お電話のほう、お待ちしています」

チン。

昔の黒電話を切ったみたいな音がすると、プープーという音だけが聞こえてきた。

何だったんだ、今のは？勝手にかかってきて勝手に切れた、そんな感じだ。

念のためにもしもーしとか言ってみるが返事はない。これは間違
いなく切れている。

「なんだろう？」

携帯を耳から離し、一瞬だけ画面を見る。やっぱりそこには通話
終了を示す絵が表示されている。

俺は、終了ボタンを押すと、ぱたんと携帯を折りたたむ。

それが、ありえない世界を開く鍵とも知らずに。

01・それは1本の電話から始まった その3（後書き）

どうも、作者です。

どこまで引つ張るんだ！とお怒りの方もいらっしゃるかもしれませんが
ん。

断言します。次回には擬人化が出ますので、どうかお待ちください。

01・それは1本の電話から始まった その4

「なんだったんだろうな、今のって」

携帯が、軽い音とともに閉じられた、その瞬間。

カッ！

暴力的なまでの白い光が、その携帯電話から発せられた。

「なななななっ、なっ、なんだっ!？」

たまらず、俺は目を閉じて顔をそむけてしまう。

だが、それでは終わらなかった。なぜか、その光は俺に質量を持つて襲い掛かってきたのだ。

そんなものが来るなんて、想像すらしなかったから、俺はその光に押し倒されてしまった。

俺の体が地面に投げ出されて、どのぐらいの時間が過ぎただろう。ほんの数秒のような、おっそろしく長いような時間が過ぎた後、俺は、おそろおそろ目をあけた。

街灯が灯っている。

そして、それに逆光になる形で、俺の上に、何か、人の姿をしたものが覆いかぶさっているのが見える。

「お……」

「うっ、うわあああああああっ!？」

その何者かが声を発しよう、とした瞬間。俺は、まさにスイッチが入ったように、その人影を突き飛ばして立ち上がった。

「きゃああっ!？」

「わあああっ!？」

何か女の子みたいな声が聞こえたがそれどころじゃない。俺は、目の前に見える堀ぎわまでダッシュすると、物言わぬ壁を背にし、その声が出たほうに直った。

「ったたたたあ……」

そっちから、俺の今の状況とはまったく会わない、気の抜けた声

がする。

改めてそつちを見ると、どこかのレストランのウエイトレスからエプロンを取ったようなデザインの、青っぽい服を着た、俺より年下と思われる女の子が、尻餅をついた状態で後頭部をさすっていた。「もう、もつと丁寧に扱ってよお、これでも精密機械なんだからね、お兄ちゃんったらあ」

その女の子は、街灯の光の中で、ぷーっと頬を膨らませて俺を見上げている。

中学生ぐらいだろうか。頭の右上で、髪の毛をたばねている。目が大きくて、かわいい子だ。じゃなくて！

「な、な、な、なんだお前はっ？」

「何だっことはないでしょ？さっきまでお兄ちゃんの手の中にいたんだから」

立ち上がり、自分の尻をぱんぱんと払いながら、その子は俺の言葉に答えてくる。

手の中、と言われ、俺は自分の右手を見る。そこにあるはずの、俺が目を開く前まで持っていたものが、なくなっている。

「あ、ああつ、け、携帯がないっ！どどこ行っただ！？ききき君、知らないか！？」

混乱しながらも、俺はその女の子に言葉を投げかける。何かあったかは後で考えることにして、とにかく携帯をなんとかしなければ、実家とも友達とも連絡が取れなくなってしまう。

だが、それに対する答えは、俺の想像のはるか上をかつ飛んでいた。

「もう、私だったら目の前にいるでしょ？」

そう言っつて、目の前の女の子が腰に手を当てて仁王立ちした。

「……………へ！？携帯だぞ？」

「だから、お兄ちゃん目の前にいるっつてば」

その少女は、俺の質問にそう答え、自分自身を指差す。

目を閉じて何度か頭を振り、目を開く。その子はまだいる。

自分の頬をぱんぱんつと張る。痛い。でもその子はまだいる。
「……俺、本格的におかしくなったか？それともこの子がおかしいのか？」

「……あのなあ、俺だってしまいにや怒るぞ？君のどこをどう見たら携帯なんだ？」

と言いながらその子を眺める。さっきは薄暗くてよく見えなかったが、どこかのウエイトレスかと思ったその服には、よく見るとその右肩には受話器を上げた電話機の絵が緑色で、左肩には受話器を置いた電話機の絵が赤色で描かれている。そして、胸からおなかのあたりにかけて0から9までの数字と*と#が銀色で描かれている。

確かに、携帯電話のキーパッドをデザインした服装ではある。あののだが、だからってこの子が携帯電話だとはいくらなんでも話がぶっ飛びすぎている。

「でもホントなんだもん。私、お兄ちゃんの携帯だよ？」
すると、その子がすねた口調で俺をじっと見つめてくる。

ぱっちりとした、澄んだ目をしている。その目はどう見ても真剣だ。

「ほら、証拠だってあるよ、お兄ちゃん」

そしてその子は、ちよつと顔を横に向け、自分の右耳を俺に見せた。

ちよつと大きめの耳たぶに、どこかで見たようなものがぶら下がっている。青地に金で何かが刺繍された太い紐と、丸いかざりの模

型。
「……あぁっ!？」

それが判った瞬間、俺は思わず声をあげてしまった。

それは、ストラップだったのだ。しかも、うちの兄貴が韓国旅行の土産として買ってきた、日本では普通売っていない奴。それが、ピアスのようにその子の耳にぶら下がっている。

「ね？」

その子は正面を向くと、にこつと笑った。

01・それは1本の電話から始まった その4（後書き）

どうも、作者です。

妹機能つき携帯電話の登場です。

ちなみに彼女には個人識別機能があるので、「おともだち登録」を
しないとなつてくれないという設定です。

01・それは1本の電話から始まった その5

「もう一回聞くけど、君は誰なんだ？」

俺の目の前に、さっき出会った女の子が、ちょこんと正座して、ここにこしながらじっと俺を見ている。

ここは俺の部屋。結局、つれてきてしまったのだ。このままでは明らかに犯罪だ。

「お兄ちゃんの携帯だよっ」

俺の質問に、その子は何のためらいもなくそう答える。

「……ホントか？ホントーにか？」

「あー、まだ疑ってるう。そこまで言うんだったら、証拠見せよっか？メール読んでみる？」

メール、と言われて、はたと気づいた。俺は、メールが他人に読まれないようにロックをかけているんだ。読めるはずがない。

「よーし、読めるもんなら読んでみる」

売り言葉に買い言葉でそう答える。

すると、その子はひるむどころか逆に嬉しそうな顔をした。

「あ、いいの？じゃあ一番新しいのね。えーと、着信時刻は9月13日12時20分。タイトルは、今日の夜のこと。差出人はシンイチさんで、内容は『今夜のサッカーの試合、見るんだろ？』で、お兄ちゃんはこれに、『俺は全部見る前に寝るかも。結果だけ後で教える』って返してるでしょ？」

「うわーっ!？」

あるうことか、あまりにすらすらと、しかも何も見ずに、その子が見ることが出来ないはずのメールを読み上げたのだ。

思わず声を張り上げてしまった。

「もう、そんな驚かなくなたっていいじゃない。読めって言ったのはお兄ちゃんなんだし」

耳を塞いだその子が、迷惑そうな顔をして俺を睨む。が、いきな

り真顔になると、

「メールが来たよおにいちゃん」

と、いきなり歌いだした。しかも、俺がメール着信音にしている某名作マフィア映画のテーマに合わせてだ。渋いはずのこのミュージックも、こんな女の子の声で、しかもなんかかわいい歌詞をつけて歌われるとなんか全然違うもののような気がしてしまう。

その時、俺は、その子の胸元がチカチカ光っているのに気づいた。顔を近づけてみると、それは首に下げたペンダントのヘッド部分だった。それは四角く、確かに携帯の画面ぐらいの大きさがある。そしてそこには、俺の携帯にメールが着信したときに画面に出るアニメーションが、見事に表示されていたのだ。

ここまでやられると、本当に携帯なのかも、と思えてしまってくる。

「あ、お兄ちゃんエッチい。私の胸のぞいてるうー」

「へっ、あ、うわっ、ごめん」

「うふふふっ、ねねね、メール、見ないの？それともまた読みあげる？」

歌が終わると、その子は楽しそうに俺の横に擦り寄ってくる。

「あ、後でいいよ。俺はテレビを見る」

目の前の現実から逃避するため、俺はテレビを見ることにした。

「じゃあ私も見るー！横に座っていいでしょ、お兄ちゃん？」

するとその子は、まるで当たり前のように俺の横に座ってきた。

なんというか、ずいぶんと人懐っこい子だ。

うちのテレビは、60インチの大画面プラズマテレビだ。俺一人しか見ないんだからもっと小さいやつで、もっと古いブラウン管タイプで良かったんだが、うちのお袋が懸賞で当てたから引っ越し祝いに、ってことで持たされたんだ。

60インチは伊達ではなくでかい。迫力はあるんだが、部屋に比べてでかすぎるのが難点だ。

「わあ、テレビって見るの初めて」

その子は、目をきらきたさせている。そんな姿を見ると、こちまでなんとなく楽しい気分になってくる。

俺は、テーブルの上においてあったリモコンのスイッチを押す。

「あれ？」

点かない。何度かスイッチを押すが、やっぱり点かない。

「あれ？電池切れたか？」

と思つてリモコンの裏をひっくり返したとき、俺のケータイだと言う子がいくいと俺の服の袖を引っ張った。

「ねえ、お兄ちゃん……メインスイッチ、入ってないんじゃない？」

「……あ」

そりゃ点かなくて当たり前だ。主電源マークの横にあるLEDが消えている。

「あははは、こりゃ参った」

笑つてごまかすが、いつまでもそうしていてもテレビは点くわけがないので、立ち上がってLEDの横にある主電源のボタンを押した。

「今朝、お前のスイッチって、切つていったっけ？」

カチツ。

スイッチが入った、その瞬間。

甲高い、耳鳴りのような音がした。

そして、同時に暴力的なまでに凄まじい光があたりを包む。

「ま、まさかあーっ!？」

その光に押し流され、俺は目をつぶってしまった。

01・それは1本の電話から始まった その6

どのぐらい経っただろう。

ゆさゆさ、ゆさゆさ。

「お兄ちゃん、お兄ちゃんってば」

「起きてください、将仁さん。いつもはもっとお付き合いして下さっているでしょう」

誰かが、俺をゆすっている。

朝か？と思っただが、そんなはずはない。だって寝ていないんだから。

だが、目を開けるのはちょっと怖い。なにしろ、聞き覚えのない声が増えているんだから。

「あのー、将仁さん、起きてくれないと、いつもご覧になっているテレビ番組が、始まってしまいますでしょう」

その聞き覚えのない声が、俺に話しかけてくる。

テレビ、と聞いて、思わず俺は目を開けてしまった。そして、逃避しようと思っただけ矢先に、新たな現実を突きつけられてしまった。

髪を左でまとめた女の子と、黒ぶちの眼鏡をかけた女の子が、目と鼻の先で俺の顔をのぞいていたのだ。

髪をまとめた子は、さっきまで俺の横にいた、自分は携帯だと言う女の子だ。でも、こっちは人は？

そして、その時になって俺は、60インチあるあののでかいプラスマテレビが、跡形もなく消えていることに気づいた。

俺は、さーっと血の気が引いていくような気がした。テレビが、なくなってしまったのだ。

「わああああっ、て、テレビが、テレビがあああっ！」

跳ね起きてそのテレビがあったところに向かうが、テレビは確かになくなっていった。見えないだけかと思っただが、手を伸ばしても何も触れない。本当になくなっている。

「どっ、どこだっ、盗まれたのかっ!？」

「あのー、心配してくれるのは嬉しいのですが、私ならここにいますでしょう」

うちのテレビにしゃべる機能なんてなかったような気がするが、おそろおそろ振り向く。

そこには。さっき目にした、黒縁の眼鏡をかけた女の人が、手前に合わせて立っていた。髪はセミロングで、大人びてしっかりと感じの人だ。

そして、その服装を見て、俺は目をしばたかせてしまった。

ぶっちゃけて言うと、すねあたりまである黒いマントを羽織ったメイドさん、とでも言うべき姿だったのだ。メイド服の丈も同じくらいで、よくテレビで見るなんちゃってメイドのそれよりだいぶ長い。

黒マントがなかったら、完全に本物だ。

「私を呼び出して下さいまして、ありがとうございます」

そのメイドさんは、丁寧に頭を下げてる。しかし、俺、メイドなんか雇った覚えはないんだが。

「き、き、君は？」

「はい、将仁さんご愛用の、ミツイシ社製HDD内装60インチハイビジョンプラズマテレビでしょう」

「お兄ちゃん、学習能力ないよぉ？」

しれっと答えるそのメイドさんの横で、携帯の子が仁王立ちして眉を八の字にする。

「て、テレビって、どこがテレビなんだよっ!？」

思わず叫ぶ。携帯の子はまだいい。携帯を連想させる格好しているから。でもこのテレビだと言う人は、どう見てもテレビだとは、しかもあのでかい60インチのプラズマテレビとは思えない。

「そう仰いまして、私はテレビとして作られたのですから、テレビですとしか申し上げられないでしょう」

「しよ、しよ、証拠見せる、証拠ッ」

しどろもどろになりながら、俺はそのメイドさんを指差して言い放った。

「承知いたしました。それでは将仁さん、その場所を空けてもらえないでしょうか？」

だが、そのメイドさんはあっさりと俺の要望を受け入れた。

俺と入れ替わるように、そのメイドさんがテレビのあった所に来ると、四つんばいになって台の後ろにある空間に頭を突っ込んでこそごとやり始めた。何をしているんだろうか？

「えーと、アンテナ線はどれでしょう・・・あ、これでしょう」

ああ、アンテナ線を探していたんだ。確かにそれが無きゃテレビは写らんわな、ってそんなことを心配しているんじゃない。

なんとなく、手品を見ているような気分になってくる。

「えーと、これから、繋がりますので、もう少し待っていただけないでしょうか？」

そして立ち上がったメイドさんは、テレビ台の上に乗るところこっちを向いた。

「そんな時間かかるのか？」

「だ、大丈夫、接続は、すぐ、できますから」

そう言いながら、メイドさんは後ろ手で何かこそごと始めた。なんとなくだが、顔がちよっと赤いような気がする。

「では、つ、繋がりますっ！」

そして、繋ぐ準備ができたらしく、そのメイドさんは赤い顔をさらに赤くし、裏返った声で宣言する。

な、何だ、繋ぐのって、そんなに大変な作業なのか？

「くううっ」

そのメイドさんは、テレビ台の上で、一瞬何かに耐えるような顔をした。なんとというか、服は全部着ているのに、妙にエロい光景だ。・・・あれ？そういえば、アンテナ線、どこに、繋いでいるんだ？

「わ、わ、わぁ……」

携帯娘も同じことを考えたのだろうか、顔を赤くしながらその行為を見ている。

「はあっ、はあっ、つながり、ました、何チャンネルが、いい、でしょう?」

一瞬少しのけぞってから、メイドさんは大きく息を吐いた。

「あ、じゃ、じゃあ、いつもの、8チャンネルを」

「は、はい、では、参りましょう」

まだ若干息を切らしながら、メイドさんは俺の言葉に頷く。

そして改めて台の上に立つとマントの裏に手を引っ込め、そしてそのマントの前を合わせる。メイドさんのエプロンとかメイド服とかが、全部黒いマントに包まれた。

「では、どうぞー!」

そして、メイドさんの合図とともに、そのマントが、まさにバツという音がしそうなぐらいに勢いよく、大きく左右に広げられた。

俺は、そこに冗談のような光景を見た。

メイド服の上にマントを羽織っていたんだから、マントを広げたらメイド服があるはず。だが、実際は、マントの下は、全く何もなかった。そしてそのかわりに、広げたマントの内側から60インチのプラズマディスプレイが目の前に現れたのだ。

「勝ち抜きリレークイズ、スタート!」

その画面に、そう言いながらクイズ番組の司会者がこつちめがけて手を差し出している姿が目いっぱい映し出される。

「どうでしょう?言ってくたされば、画面サイズも音響も調整できますよ?」

そして、メイドさんはその画面の上に腕を載せて、テレビ画面の上から楽しそうにこちらをのぞいている。なるほど、頭だけじゃなくて肩ぐらいまでは出るんだ。……なんか変な感じだが。

「んー、バスをもう少し利かせてくれないかな?」

「はい」

メイドさんはそこで手を合わせ、指をくるくると動かす。すると、音響が明らかに変わった。

「わぁ、おねえちゃんすごーいー！」

携帯娘は素直に感心する。

「いえいえ、これが私の役目ですから」

テレビメイドさんはちょっと照れたようなしぐさを見せた。

01・それは1本の電話から始まった その6（後書き）

どうも、作者です。

スーパーメイドテレビの登場です。

彼女は、これから真田家のハウスキーパーとして家の中を切り盛りしていくことになります。

萌えやメイドに関心が無いひとでも、こんなテレビだったら欲しがると思いますw

01・それは1本の電話から始まった その7

メイドさんが出した60インチのテレビ画面は、芸能人たちがクイズの回答に大げさに一喜一憂する姿を映し出している。

「ねえねえ、お兄ちゃん？お願いがあるんだけどお」

そのクイズ番組を見てしばしの現実逃避をしていると、携帯の子がおねだりするような声をかけてくる。

「あのね、私、名前つけてほしいなあ」

「へ？名前？」

「ああ、そういえばそうですね。いつまでもお前とか君とか呼ばれるのはちょっと寂しいでしょう」

テレビの上から顔を出すメイドさんも、賛同してくる。

でも、いきなり名前って言われても俺は困ってしまう。もし本当に彼女らが携帯電話やテレビだとすると、俺は携帯電話やテレビに名前をつけることになる。なんだそりゃ。

しかし、今はどっちもかわいい女の子だ。俺がおかしくなったんじゃないければ、だが。

「ねーえー、名前名前えー」

悩んでいると携帯娘が俺の腕をゆさゆさとゆすつてくる。こりゃ、早いところ何かつけないと、開放されないかもしれない。

「わーかった、わかった、んじゃ、携帯電話だから、ケイなんかでどうだ？」

「やったあ、かわいい名前！じゃあ、今からケイはケイだね、ありがとーお兄ちゃん」

「わっ！」

名前がつけられたのがそんなに嬉しいのか、俺がケイと名づけたその子は俺に思いつきり飛びついてきた。おかげで、俺は押し倒されてしまう。

「お兄ちゃん、ケイ、がんばるからね」

「わっ、わっ、判ったから、ちよつと、離せ、離せっ!」

抱きつかれた瞬間、ぷにぷにした感触がした。こいつ、ホントの本気で携帯電話なのか?と疑いたくなる感触だ。

のみならず頬ずりまでしてくる。イケナイ衝動が盛り上がってくる。

「じゃあ、ケイ、さっそくだけど頼みがあるんだ、やってくれるか?」

「うんっ ケイ、がんばる!」

なんとかケイを引き離すと、俺は彼女にあることを頼んだ。それは。

「うん、わかった。弁護士さんに電話するのね?」

常盤花音代と名乗るあの弁護士に、連絡を取ってもらうことだった。

「本当にできるのか?」

「だーいじょーぶっ 電波状況も良好だし、履歴追ってリコールすれば一発だもん」

「電波状況?」

「うん。ほら、3本立ってるでしょ?」

そう言っ指差したのは、ケイから見て右のおでこの上だった。

見ると、前髪の一部が確かに3本、まるで触覚のように上向きで跳ね上がっている。ということは、これが、携帯の電波状況を示すメーターなんだろうか。

なんとというか、ずいぶんと芸が細かいもんだ。んじゃこの顔のどつかに電池のバッテリー残量とかも現れるのか?

「じゃあ、ちよつと待っててね?」

なんか心配だが、唯一の連絡手段がケイしかないのでしょうかがない。

すると、ケイは精神集中するように目を閉じて静かになった。

「……あのー、将仁さん?」

すると、違う声が聞こえる。あのメイドさんの声だ。

見ると、そのメイドさんが、「マーシャルを流すテレビ画面の上から、寂しそうにこつちをじーっと見ている。

「な、何かな？」

「私も、名前……つけてくれても、いいでしょう？」

「う、な、名前ね……」

うう、困った。テレビだからテレビじゃどっかのキャンペーンマスコットみたいだし、変な名前つけたらそれこそすねてテレビ見せてくれなくなるかも知れないし。

「ん？」

だがその瞬間、俺の頭にある言葉がよぎった。

「そうだ、これにしよう。君の名前は、テルミだ！」

その言葉を聞いた瞬間、メイドさん、もといテルミの表情がぱつと明るくなった。

「テルミ……はい、素敵な名前です。では今から、私のことはテルミとお呼びください」

そして、頭だけで礼をする。画面が出ている間は体は動かさないらしい。

名前の由来を聞かれなかったのはある意味幸いだったかもしれない。まさか、映画で見た「テルミットプラズマ焼夷弾」から取ったなんて、言えるわけがないよな。

「ははは、まあ、がんばってください」

俺はテルミにそれだけ声をかけた。

01・それは1本の電話から始まった その7（後書き）

どうも、作者です。

妹機能つき携帯電話及びスーパーメイドテレビの名前が決まりました。

ちなみに名前の由来は、ケイはそのままなのですが、テルミのほうは最初「テレミ」でした。

テレビ テレ美 テレミ、って感じです。でもそれじゃあんまりだろ、ってことでもうちよつと改良を加えてテルミにしました。

01・それは1本の電話から始まった その8

「とうるるるるるるる。とうるるるるるるる。とうるるるるるるるるるるる」

ふと見ると、ケイがどこか一点を見つめてそんなことを言っている。なんだか本当に電話みたいだ。って、電話なんだっけ。

「ちん。はい、常盤です」

えっ？あれ、声が変わったぞ？

「もしもし。真田将仁さんですね？お電話、お待ちしていましたわ」

どういう仕組みになっているのかは分からないが、ケイは、その今までと違う声、間違いないあの弁護士の声で喋り始める。

「あら？もしもし、もしもし？真田さん？どうしたんですか？あれ、すいません、そちらからの音声が届いていないみたいです。聞こえていますか、真田さん？」

いや、あの、音声は聞こえているんだけど。

「こんなの、どうやって答えるって」

「あ、ああ、将仁さん。聞こえていたんですね」

「へっ、聞こえるんですか？」

「ええ、はつきりと。良かった、もし途切れていたらどうしようかと」

ケイの口調、じゃなくて、ケイの口を通して喋っているあの女の声、ほっとした口調になる。

どうやら、ケイの耳と口を通して、向こうの相手と通話ができるようだ。

そういえば、今気がついたが、ケイの目の色が、鳶色から水色に変わっている。

「それで、どうになりましたか？もしかして、面白いことになっているのではありませんか？」

「え、あ、あー、まあ」

その瞬間、俺は確信した。この人は、俺の回りでこんな事が起きることを、知っている。

いや、もしかしたら、この人が、すべての物事を引き起こしたというところもありうる。

この人、弁護士だって言っているけど、本当は魔法使いか何かじゃないのか？

「教えてください。あなたは、誰なんですか？」

ひとつ大きく深呼吸すると、俺は腹をくくって聞き返した。

「私は弁護士の常盤です」

「ふざけるなあっ！」

俺は叫んでいた。そのときの俺はかなりすごい顔をしていたのだろう、電話としての役割をしていたケイが、びくつと体を震わせた。表情も明らかに怖がっている。

「何が弁護士だ、ふざけやがって！お前、俺に何しやがった！今、俺んちがどうなっているのか、分かってんのかコラ！？」

「直接は分かりませんが、どんなことが起きているかはある程度推測できます」

だが、通話中は体と口は別なのか、驚いた様子も無い落ち着いた声がつむぎだされている。なんかそれが余計に腹が立つ。

「やっぱりあんたのしわざか！こん畜生ふざけやがっ、げふんっ、げふんっ！！」

「あ、将仁さん、お水です。これでも飲んで落ち着いたほうがいいでしょう」

いつのまにかテレビ画面をしまった（？）テルミが、水の入ったコップを差し出してくる。

一気に飲み干すと、空になったグラスを渡す。

「あ、ありがとう」

「いえいえ、この家に厄介になる者として、このぐらい当然のことでしょう」

テルミは、にっこり笑ってそのグラスを受け取ると、流しのほうへ歩いていく。なんだか本当のメイドさんみたいだ。黒マントがちょよっと怪しいけど。

気がつくのと、ケイが指を啜えてじーっとこっちを見ている。そういえば通話中だったんだ。

「教えてください。俺に、何、したんですか」

とりあえず、話を続けることにしよう。そう思って、声をかけると、ケイはぱつと表情を明るくする。

「私は、特になにもしていませんよ。ただ、きつかけを作っただけです」

だがその口から出てくるのは違う人の声だ。

「きつかけ？」

「ええ。あなたには特別な力が備わっているのですよ。私は、たとえて言うなら、扉にかけられていた錠前をはずしただけです」

じゃあ何か。俺はびっくり箱みたいなものなのか？

えらいことになったと、頭をかかえこんでしまう。

「どーすりゃいいんだ、こんなの」

「ええと、将仁さん？宜しければ、明日、そちらに伺って説明いたしますが、よろしいでしょうか？電話口で全てを説明するには、少々込み入っていますので」

「あ、明日？うちに来るんですか？」

「はい。今日はもう遅いですし、お待たせするのなんですよ」

「うー、わ、分かりました。明日も学校がありますんで、えーと、4時ごろでいいですか？」

「判りました、では午後4時にそちらにお伺いします」

「は、はい、お願いします」

「では、これで失礼します。明日、お会いすることを、お待ちしていますね」

最後に「ちん。」と言って、その声は切れた。

なんとというか、また完全にむこうのペースで話が進められてしま

った。さすが弁護士、交渉ごとのプロフェッショナルだ。

「もぉーっ、お兄ちゃん、お電話長すぎだよぉー」

そのとたん、ケイが口を尖らせて抗議をする。その仕草はかわい
いんだが、電話のくせに電話として使われるのは嫌なのだろうか？
と疑問に思ってしまう。

目は驚色に戻っている。どうやら通話中に色が変わるのは間違
いようだ。

「長すぎて、お前電話だろ？」

「でもでもぉー、ケイ、電話が繋がっていると喋れなくなっちゃ
うんだもん。せつかく人の姿になれたんだもん、もっとお兄ちゃん
とおしゃべりしたいよう」

「これからも共に生活していくのですから、お互いのことを知る
のは良いことでしょう」

テルミはケイの意見に賛成らしい。

俺も、この二人には色々聞きたいことがあるので、とりあえず話
をすることにした。

01・それは1本の電話から始まった その9

「そうなんですか。ケイさんって、多機能なのですね」

「えへへーっ、でもワンセグはついてないから、テルミお姉ちゃんの名前はできないけどね」

「うふふ、でも、大画面の迫力と映像の美しさこそが、プラズマテレビの最大の売りですから。これだけは、譲れないでしょう」

「テレビねえ。うちのテレビには音声操作機能は無かったはずなんだが」

「それは将仁さんのおかげでしょう。おかげさまで、他にも嬉しい新機能が追加されましたし」

「新機能？なにになに？」

「ケイさんも経験していますでしょう。歩くこと、手を使うこと、そして何より、こうして将仁さんとお話ができること。何よりも素晴らしい機能でしょう？」

「あ、そっか。今まではどんなにお話したくても何もできなかったんだもんね」

「なんだ、話なんかしたかったのか？」

「うんうん。すっごくしたかった。他にもお話したい子っていっぱいいると思うよ？」

そう言われて、思わず部屋の中をぐるっと見回してしまふ。

「じゃあ、ベッドと話ができたら、「俺の上で寝るなーっ、重いじゃないかーっ！」とか言われるのかな」

「あ、それあるかも。本さんだったら「もっとよく読め」とか「冷蔵庫さんだったら「詰めすぎはダメよ」とかおっしやるのでしょっね」

「いやあ、それは無いだろ。俺は一人暮らしだから、冷蔵庫あんまり使ってないし」

「では、「もっと活用して」と言われるのでしょうね。詰めすぎ

も、少なすぎも、電気効率が良くないと言いますでしょう」

「電気か……あれ？　そういえば、テルミって今は何で動いてんだ？　ケイは携帯だから中にバッテリーが入っているけど。コンセントとか無さそうだし」

「あら、そういうえは何でしょうね？　人の姿になっていきますから、やはり食事なのでしょうが？」

ぐうううう。

そのとき、ものすごく良いタイミングで、俺の腹の虫が鳴いた。忘れていたが、今日は色々あって飯を食ってないんだった。

「え？　今の音、何？」

「あ、もしかして将仁さん、まだご飯食べていないのでしょうか？　テルミにずばり言い当てられ、ちよっと恥ずかしくなる。

「まだ鳴るのかな？」

何を思ったか、ケイが俺の腹に耳を当てる。

「わ、こらなにすんだよっ！？」

「やーん、ケイはお兄ちゃんのおなかの音が聞きたいのー！」

「聞いてどうするんだそんなの！　は、恥ずかしいからやめろって！」

あわてて引っぺがすが、ケイはじたばたと暴れて抵抗する。いくら元が携帯電話だからって言っても、今はぶにぶにした感触のある女の子の姿だ。そんなのに腹に耳当てられたら変な気分になってしまっ。

「おい、ちよっと、見てないで助けてくれ、こいつのこと押さえしてくれ」

正座してにこにこしながら俺たちを見ているテルミに助けを求めてしまっ。

「じゃあ、私、何か作ってきましょう」

すると、くいつと眼鏡を上げたテルミは、その笑顔を崩さないまま立ち上がった。

「へっ、作るって？」

「ですから、軽く食することが出来るものをでしよう。伊達にテレビをしていないこと、見せて差し上げましょう」

「ちょ、ちよつと待て、テレビと料理とどこが関係あるんだ」

「あら、料理番組というものが、ありますでしよう？心配は無用でしよう。それより、冷蔵庫の中を改めさせてもらってもよろしいでしようか？」

テレビの料理番組って、時間を短縮しているんじゃないっけ？
と
思っているうちにテルミはキッチンに歩いていく。いよいよ本当のメイドさんみたいだ。

そして、俺はケイと二人、居間に取り残された。

01・それは1本の電話から始まった その10

普通ならテレビでも見て時間を潰すんだが、いまはそのテレビが台所で飯を作るといいうわけの判らない状況になっているためどうしようもない。

何か他のもので時間つぶしするにしても、下手にいじるとまたそれが女の子になったりするかも知れないのでうかつに手を出せないなにしろどういいうきっかけで変化するのか、全然わからないんだから。

ぐっぐっぐっぐ。

その瞬間、また俺の腹が鳴った。くそー、なんつータイミングだ。

「あ、また鳴った。面白い」

うーん、笑われてしまった。

でも、屈託のないその笑顔を見ていると、何か笑われてもいいかなと思えてしまう。

「ねえねえねえ。何でおなかが鳴るの？ケイも鳴るようになるのかな？」

「なるのかなって言うてもなあ。ケイは何か食べるのか？」

「んー、わかんない。まだ食べたことはないし」

「そっか」

よいしょつと立ち上がる。

「あれ？お兄ちゃん、どこ行くの？」

「ああ、ケイの分も作ってもらうんだよ」

「その必要はないでしょう」

その時、テルミの声がした。見ると、大きな鍋を両手に持って立っている。もう作ったのか。

「冷蔵庫がほとんど空でしたので、素^{そうめん}麺にしました。今、おつゆを持って来ましょう」

その鍋をテーブルに置くと、流しに用意してあった別のお盆を持

つてくる。そこには、めんつゆが入ったマグカップとかお椀とかが乗せられている。その中のひとつは皿で、薬味の刻み葱がこんもりと盛られている。そういえば素麺そうめんは買ったけど茹でるのが面倒だったから作らないでいたんだっけ。

それと別の皿には、パックで買っておいたおしんこがつけあわせとして乗っている。

「さ、どうぞ」

箸が手渡される。うう、なんか緊張するな。

「ねえお兄ちゃん、これってどうやって食べるの？」

「どうやってって、ん？ケイ、箸は使えたのか？」

「んー、わかんないけど、やってみるっ。だから、使ってみせてっ！」

と言いながら、手に箸を握り締めている。こりゃ、もしかしたら箸の使い方から教えなきゃなんないかもしれないと心の中で苦笑してしまった。

テルミのほうはただにこにこしながら。やっぱり俺を見ている。

こりゃ、俺が食わないと始まりそうにない。意を決し、箸を右手に、マグカップを左手に持った。

「じゃ、じゃあ、いただきますっ！」

ずるるるるっっ！

もぐもぐもぐ。

じゅっくん。

「どう、でしようっ？」

すかさずテルミが聞いてくる。なんとなく緊張しているような感じがする。

「うん……うまいよ」

「ああ、よかった。将仁さんにそう言ってもらえれば安心でしょう」

「おい、ちょっと待て、俺は毒見役か？」

「あらあら、そんなに怒らなくてもいいでしょう、ふふふっ」

正直、素麵そうめんの味なんかそんなに変わらないんだろうが、女の子が茹でた、と思うだけで美味しいような気がしてしまう。

「ふうん、お箸って、こう使うんだ……. よいしょ、あ、あれ？」

「ああ、ケイさん、お箸は、こうやって持つんでしょ」

「えっと、こう？あ、あれ、うまくいかない」

「ほら、一本目はこう持って…….」

テルミがケイの手を取りながら箸の持ち方をレクチャーしている。なんだか本当の姉妹が見せるような、ほのぼのした風景に、目じりが下ってしまう。

「テルミさんって色々できるんだね」

「それはもう、テレビですから。最近はテレビでもお箸の使い方を取り上げていますでしょう？」

「うん、でもケイももうメモリーしたよっ」

でも、やっぱりこいつらの本質は機械なんだよなあ。

ちよっと寂しい気持ちになりながら、俺は素麵そうめんをすすった。

01・それは1本の電話から始まった その11

「ふう、おいしいってこういうことなんだね。いい経験しちゃったな」

ケイがニコニコしながら自分のおなかをさする。

「明日はもつと手間がかかるメニューに挑戦してみよう」
テルミが食器を片付けながらそんなことを口にする。

腹が膨れたせいか、その二人に対する疑問が再びわきあがってくる。

すなわち、なぜ人の姿になったのか、だ。あの弁護士は俺にもとからそういう力があつたと言っていたが、正直言って信じられない。だいたい、あいつが本当に弁護士なのかもあやしいもんだ。

そういえば、あいつ、電話口で変な呪文みたいなのを唱えていたな。この21世紀に非科学的な話だが、やっぱり魔法使いなんじゃないか？そいつが弁護士のフリをして俺に魔法をかけ、そして水晶球かなにかで俺を見て笑っているんだ。

それとも、大掛かりなトリックなのか？なんかこれがいちばんありえそうな感じがするが、ただの高校生の俺にそんなドツキりを仕掛けて何の利益があるんだ。

もしかして、アレか？どっかの映画でやってた、人生それ自身がテレビのショーだったとかいうオチなのか？でも、それが本当に俺が監督だったら、こんな疑念が持たれるような展開にはしないぞ？

「お兄ちゃん？どうしたの、そんな難しい顔をして」

「将仁さん、よろしければ、相談に乗りましょう」

俺の悩みは、二人の介入で中断された。

うーん、やっぱり、二人とも何か企んでいるようには見えない。

「なあ、二人とも、どうやって人の姿になったのか、判るか？俺ぜんぜん判らないんだ」

思い切って聞いてみた。変わった当事者の二人なら、何かわかる

かもしれない。

二人は、黙り込んでしまう。これは、何か、言えないような理由でもあるのか？

「……………ごめんなさい、ケイ、よく判らないの」

「……………すみません、正直、私にもその瞬間の記憶はあいまいで……………」

違った。やっぱり判らないのか。

「あ、でも、昔から、モノには魂があると言う考えもあるでしょう。そしてその魂は、精霊となり人の形を成すと。もしかしたら私達は、それぞれのモノに宿る魂が姿をとったものなのかも知れないでしょう」

魂、ねえ。一番納得したくない理由を持ってきやがったな、こいつ。

「じゃあ、ケイは携帯電話の精で、テルミはプラズマテレビの精つてところか？」

「わあ、それってかわいいかも」

ケイがはしゃぐ。そんな簡単に納得していいんだろうか。もしかしたら妖怪かもしれないじゃないか。

もし妖怪だとすると。ケイは座敷童つてところか？じゃあテルミは……………メガネで目の周りが黒いから化け狸とか。

「あら？将仁さん、どうしたのでしょうか、私の顔を見て」

「あ、い、いや、なんでもない」

いかん、目が動いていたらしい。何か誤解されてしまいそうだ。

「さ、さて、俺は宿題やるけど、みんなはどうするんだ？風呂にでも入るか？」

言いながら立ち上がると、二人はちよつと変な目でこっちを見た。しまった、女の子相手に風呂なんて言ったら余計に変な目で見られるじゃないか。

「お兄ちゃん？ケイたちがおフロに入れると思うの？」

「へ？」

あれ？予想と違う反応だぞ？

「あの一、将仁さん、私達は二人とも電気製品、それも水に弱い種類でしょう？」

「そうだよお。ケイ、データ飛ばしたくないもん」

あ、そういえばそうだった…….のか？

「でもテルミ、さっきの料理とか食器洗いするときかに水を使っ
てなかったか？」

「将仁さん、プラズマテレビでも、濡れた布巾で拭いたぐらいで
は壊れないでしょう？」

「それともお兄ちゃん、覗くつもりだったの？あははっ」

うう、言い返されてしまった。確かにちよつとその気はあったが、
そううまくいくわけもない。

俺の家のはずなのに、気がついたら弱い立場になってしまった俺
は、ちよつと気落ちしながら自分の部屋に引っ込んでいった。

01・それは1本の電話から始まった その12

「んーっ」

机に向かっついて硬直した背筋を伸ばす。とりあえず宿題は終わった。これでひと段落だ。

なんか今日は色々あって疲れた。今日はもうシャワーで済まして寝ちまおう。

「……………ん？」

「静かだな……………」

あの二人は、俺の部屋には入ってこなかった。一応、家主である俺に気を使ってくれたのかも知れない。

でも、静か過ぎる。

「もしかして、さっきのって、夢だったのかな」

いつの間に寝たのか覚えがないが、一度そう考えると「やっぱり夢だった」という思いが一気に強くなっていった。当たり前だ、携帯電話やプラズマテレビが人になるなんて非常識、あるはずがない。だが、そう思うとちよつと寂しい気持ちにもなった。

夢であってほしいような、現実であってほしいような、不安定な気持ちになりながら、俺は、部屋の扉を開いた。

「あつ？あ、将仁さん、お疲れ様でしょう」

テーブルに頬杖をついて船を漕いでいたテルミが、顔を上げてこちらを見た。

二人は、居た。思わず、体が縮みそうなほどのため息をついてしまふ。

「将仁さん？どうしたのでしょうか？」

その様子がよほど大げさだったのか、テルミが心配そうに近寄ってくる。

「ああ、二人が居るのが、夢じゃないんだなって思ってたさ」

「まあ」

テルミは、俺の返事が可笑しかったのか、くすくすと笑った。

「わ、笑い事じゃないぞ。俺、本気で心配したんだから」

「くすくす、ご、ごめんなさい、先ほどと、反応があまりに違ったものですから」

「ひっでーな」

「うふふつ、でも、そんなに心配してもらえるなんて。私たちは幸せモノでしょう」

ちよつと悪態をつきながらも、俺は、やっぱりほつとしていた。

そしてそのときにはじめて、俺はテルミのエプロンの胸のところにポケットがあつて、その真ん中に「MITSUISHI」というロゴの刺繍があることに気づいた。

「ミツイシ、ねえ」

「え？どうしたのでしょうか？」

「あ、いや、こんなところに刺繍があるなんて気づかなかつたからな」

「あら。でも、家電製品であれば、メーカーのロゴが入っていてもおかしくないでしょう？」

「んー、まあ、そうか……あ、ケイは……寝てるのか？」

ふと視線をはずすと、ダイニングのテーブルにうつぶせになってケイがすうすうと寝息を立てていた。

「少し前まで、起きていたんですよ。お話がしたいと言って」

「そうか、悪いことしたかな」

携帯電話も、寝るのかな？それとも、人の姿だから寝るのかな？もしかしてバッテリー切れとか？

そんなことを考えながら、そつとケイの頭をなでてやる。

「……にいちゃん。ケイ……ばるから……」

ケイが、寝言を言った。なんだか、本当に妹ができたみたいなきがして、ちよつと嬉しい。

だが、そこで、あることに気がついた。

ケイとテルミって、どこで寝るんだ？俺、一人暮らしだから、寝具はワンセットしかない。客が来ることなんか想定していない（来ても泊まっていくことなんかない）から予備なんかない。もとのモノの姿であれば、気にもしないんだろうが、今はどっちも女の子だ。女の子に「床で寝ろ」なんて薄情なことは言えない。

「テルミ、あのな……悪いんだけど、今日は、俺のベッドで寝てくれないか？」

考えた末、狭いうえにあまり綺麗じゃないので申し訳ないんだが、床で寝るよりはましだろうと思って、俺はテルミにそう提案した。すると、テルミは、目をぱちくりさせた後、くいつと眼鏡を上げて、ちよつと顔を赤くしながらもじろつと俺を見つめてきた。

「将仁さん？それは、私に、夜のお相手をしろということでしょうか？」

「は？」

「いけませんでしょう、そんなこと。いくら将仁さんが性欲有り余る若人であるとはいえ、そんなことを軽々しく口にはいけないでしょ」

「ちよつと待て！お前、今、変なこと考えただろう！」

なんか、おかしなほうに考えているな、こいつ。テルミって、しっかりしているようで意外ととぼけた奴なのか？

「俺はだな、ベッドがひとつしかないから、テルミとケイはそこで寝てくれて言おうとしたんだよ！」

言っつてこつちが恥ずかしくなって来たじゃないか。

「え、でも、将仁さん、よく、夜中に、その、私の前で、自力で発散されていらっしやっただので」

うっ、そ、そういえば、俺、DVDを見ながら、テレビの前で、自家発電したことがあるな。しかも結構な回数。

は、恥ずかしいぞ、これは。もう、自分ちでエロDVDは見られなくなっただじゃないか。

じゃなくて！

「その話は、もう後だ後！俺はケイを連れて行くから、テルミは先に行つててくれ」

強引にテルミを部屋に押し込む。そして、珍しそうにきよろきよろと俺の部屋を見回すテルミを尻目に、俺はケイを抱え上げ、そして俺のベッドに横たえる。そして、フロに入るためのバスタオルと換えのパンツ、そして冬用の掛け布団を引っ張り出した。

「俺はこれからフロに入るから」

そして、自分の部屋のドアを閉める。ついに自分の部屋まで追いつけなかったが、しょうがないと自分に言い聞かせた。

01・それは1本の電話から始まった その13

「ふーっ」

今日は久しぶりにシャワーではなく湯船に入る。

なんか今日は、学校を出てからやたらと変なことが起きて、ムチヤクチャに疲れた。はっきり言ってしまうえば、学校からの帰り道に異次元の扉をくぐったような気分だ。

「夢ってことはないよなあ、さっきの火花は痛かったし、今、風呂に入っていてあつたかいし」

湯船の中でぼりぼりと体をかくと、ずれのないタイミングでそれを感じられる。やっぱり夢じゃない。

が、繰り返しられる現象はまるで夢、いや、夢でもなかなか実現できないような話だ。

俺、本格的におかしくなったのかな。それともんでもない妄想症になったかな。

他人に相談するにしても、真面目に受け取りそうな奴はいないだろうし、いたとしても唯一の通信手段である電話があんなことになったのではもう手詰まりだ。

「ええいもう考えるのは止めた！」

どんどんどつぼにはまっていくような感じがしたので、俺は顔に湯をかけて頭の仲を切り替えることにした。

それとはまったく別の場所。書斎のような部屋に大きなデスクが置かれており、その前に一人の若い男が座っている。何かを調べているのだろうか、デスクの上には百科事典のような大きな本が開かれている。その横にはノートが開かれ、男は万年筆でそこに何かを書き込んでいる。

「隼人様」

その部屋に、一人の老人が現れた。燕尾服を身にまとい、ぴんと

背筋を伸ばし、動きも機敏ではあるが、薄くなつた白髪交じりの髪の毛、しわがれた声、そして何より、仙人を思わせる胸にかかるほどの見事な白いあごひげが、その男が老人であることを高らかに述べている。

老人の声に、隼人と呼ばれた青年が書物から顔を上げた。顔の作りは整っているほうだが、目が削いだように鋭く、近寄りがたい雰囲気を漂わせている。

「じいか」

隼人、というらしい青年は、その老人の姿を認め、そう言い放つ。

「調べ物中でしたかな」

「いや、かまわない。何かあったのか」

「は、お耳に入れておきたいことが」

じいと呼ばれた老人は、そう言つて青年のそばまで歩いてくる。

その様はまるで、執事とその主人のようだ。

「じいが自ら報告に来るとは、よほどの話のようだな」

そう言いながらも手を止めることなく、青年は万年筆で何かを書き続けている。

「は、例の女が、動き出したという報告がありました」

その瞬間、青年の手がぴたりと止まった。そして、今まで使つていた高級そうな万年筆のキャップをぱちんと閉めてペン皿に置き、老人のほうを向く。

「例の女というのは、常盤という弁護士のことか」

「左様でございます。その常盤めが、今までとまったく関係ないところに、電話をかけておつたようです」

そして、老人はMDディスクを取り出して見せた。

「その会話を録音したものです」

老人は、そのMDを持ったまま部屋の端に歩いていく。

その壁には、大きなディスプレイをはじめとしたさまざまなオーディオ機器が壁に埋め込まれており、その両端をスピーカーが挟み込んでいる。

老人は、そのMDを挿入口に差し込むと、再生スイッチをオンにする。

「……し訳ありません。私、弁護士の常盤花音代と申しますが、少々お時間、よろしいでしょうか？」

しばらく雑音が続いたあと、女の声がスピーカーから聞こえてきた。

その瞬間、青年の眉がぴくりと動いた。そして、まるで声の主が見えているかのような目つきで、そのオーディオ機器をにらみつける。

それはまさしく、弁護士常盤花音代が電話で会話している内容そのものだった。電話線などから直接引つ張っているのではないらしく、相手の声はほとんど聞こえず、常盤本人の声も時々雑音で途切れているが、それでも会話の内容はだいたい掴めるものだった。

「……なんという奴だ、後継者を本当に見つけ出してしまうとは」

ほんの数分ほどの会話が終わると、青年は椅子の背もたれに身を投げ出し、天井を見上げてため息をついた。

「あと少しで全て終わるはずだったのに」

「隼人様、いかがいたしましたしょう」

青年のそばに来た老人が、姿勢を正したままそう聞いてくる。

「……マサヒト、か」

「は？」

青年の口から、不意にひとつの名前が出てくる。

「まずは、今の会話に出てきた、マサヒトという奴を探ろう。どこのどいつかは判らんが、おそらくそいつが後継者だ」

体を起こした青年が断言する。

「じい。常盤の監視を続けるように伝える。後継者が見つかったならば、常盤は近いうちに必ずそいつと会うはずだ」

「……承知しました」

青年の言葉に、若干の間をおいて、軽く会釈をした老人がそう答

える。

「不満か？」

「いえ、私は別に」

「無理をするな、言いたいことは判る。俺もこういうやり方は好きじゃない」

そのとき、青年ははじめて年相応の表情を浮かべた。

「だが、これが先代の、親父の遺言だ。その理由が馬鹿げたものであっても、やらなければならないんだ」

それは、誇りの中に自虐が入り混じった、複雑なものだった。

01・それは1本の電話から始まった その13（後書き）

ども、作者です。

最近、こんなのを書いているせいか、うちの電気器具に向かって話しかけることが多くなりました。

人が見ていたら、危ない人に見えるかもしれませんw

では、次回作で遭いましょう。

02・なんかおかしな展開に その1

9月15日 金曜日

今日は、目覚ましではなく、体中が痛くて目が覚めた。

俺は、なぜかダイニングにいた。しかも、毛布に包まり、床に寝ている。

腕時計を見ると、いつも学校へ行く時間よりかなり早い。

「なんで？」

いつもとあまりに違う状況に、最初に口から出た言葉が、それだった。

起き上がると、目の前に俺の部屋のドアが見える。それは俺の侵入を阻むように閉じられている。

そのドアを目にして、俺はあることを思い出していた。携帯電話とテレビが、女の子の姿になったっていう、まるっきりマンガな世界のできごとを。

「夢だよな、そんな事ありえない。マンガの見すぎかな」

そう自分に言い聞かせながら、でも、少しでも不安な気持ちで、俺は部屋の扉に手をかける。

もしかしたら、の気持ちもあつたので、できるだけ静かにドアを開ける。

遮光カーテンのせいで部屋の中は薄暗いが、その隙間から差し込む光が、朝であることを告げている。

そして、俺のベッドのところに、二つの人影が見えた。

「……………夢じゃなかったのか……………」

なんだか、残念なようなほつとしたような複雑な気分だ。

とりあえず、鞆も制服も全部部屋の中にあるので、取りに行かなくてはならない。俺は、二人を起こさないよう、なるべく静かに部屋の中に入っていった。

なんだか、緊張する。ここは元々俺の部屋だ。何も悪いことはないが、やっぱり女の子が寝ている部屋に入るとなると、イケナイことをしている気になってしまう。

忍び足で中に入り、壁にかけた制服と、机の前に置いておいた鞆をそっと持ち上げる。……。なんだか、朝帰りしたお父さんになったみたいでちょっとみじめな気分。

引き返すところで、二人の寝姿が目に入った。

ベッドに寝ているのは、ケイだった。折りたたみ式の携帯電話だった頃の名残なんだろうか、俺から見ると窮屈なほどに体を縮め、丸まった状態ですやすやと寝息を立てている。

そして、そのすぐ横で、まるで看病か付き添いでもしていたみたいに、ベッドの端に顔を伏せ、床に座り込んだ状態で同じように寝息を立てるテルミの姿があった。

その光景に、なんだかほのぼのしたものを感じてちょっと見とれてしまった。

だが、いつまでも見ているのもアレなので、足音を立てないようそっと部屋を後にした。

02・なんかおかしな展開に その1（後書き）

ども、作者です。

今回から、第2章とでも言うべき部分が始まります。

この小説は、こいつほどのものではないかもしれませんが1日が1章といくくりになっていまして、それぞれが結構長くなってしまっているので、発表の際は細切れにしています。

そのため、なんか変なところで終わっているな〜と思われるかもしれませんが、そのへんは大目に見てください。

ちなみに、次話では、また新たな擬人化が現れます。

どんなのが出るのかお楽しみに。

ヒントは、第1話の背景として出てきた、赤いモノです。

02・なんかおかしな展開に その2

下まで降りてきた俺は、ふと、駐輪場においてある赤いバイクに目が行った。

俺が免許を取った折、兄の龍之介が饒別せんべつだつてことしてくれた、カワスギ社製、排気量400ccのオフロードバイクだ。400ccというバイクではそんなに大きいほうではないが、「オフロード仕様」となると俺が知る限りかなり大きなクラスになる。

俺が免許を取ろうと思ったのも、もとはといえば兄貴がバイクに乗っている姿に憧れたからだ。その時に乗っていたのがこのバイクなので、ある意味このバイクに憧れて、俺は免許を取ったとも言えるのだ。

ちなみに、元の所有者だった兄貴は、最近、車を買ったんだそうだ。二輪から四輪に乗り換えたということ、なんだろうかね。

そういえば、最近はあまりこいつに乗ってない。うちの学校は2輪免許の所持はOKなのだがバイク通学禁止となっているし、実は結構ガソリン代がバカにならないんで、実家から持ってきた方がいいがあまり乗っていないんだ。

「そうだなあ、こんどの日曜あたりに、久しぶりに乗ってみるかな」

ちよつと申し訳ない気持ちになりながら、なんとなく、サドルを撫でた。

その瞬間。

聞き覚えがある、甲高い、耳鳴りのような音がした。

そして、同時にこれもまだ記憶に新しい、暴力的なまでに凄まじい光があたりを包んだ。

「ちよつと待てーっ！」

そう思う間もなく、目の前が真っ白になっていった。

それからどのぐらいの時間が過ぎただろうか。

「よう」

突然、俺の首周りに、誰かが腕を回してきた。

「将仁お。お前、最近付き合いが悪いんじゃないかい？ええ？」

その腕は、そのままヘッドロックを掛けて、さらにコブシをグリグリと押し付けてくる。

「んがががが、イタイイタイイタイっ」

なんで朝っぱらからヘッドロック&グリグリなんかされなきゃならないんだ。

渾身の力で引っこ抜くと、その勢いで後ろにひっくり返ってそのまま1回転してしまった。

「っ、な、なんなんだよ一体」

地面にぶつけてしまった頭をさすりながら顔をあげる。

そこには、見覚えのない人が立っていた。

全身を赤と黒のライダースーツに包み、首に銀色のマフラーを巻いた、背の高い日焼けした女の人だった。なんか、ライダーかレーサーみたいだ。ヘルメットを被っていたらもろライダーだが、彼女はそのかわりに幅が広く色が濃い、サンバイザーをしている。

ゆるやかなウェーブのかかった黒い長髪を背中に流し、顔つきは彫が深く、日焼けしていてマレーシアとかタイとかあっちのほうのルックスをしている。そして強気なそのまなざしは俺をしつかりと捕らえている。

「だ、だだだ、誰!？」

「誰ってのはごあいさつじゃないか。あたしを呼んだのはあんただろ、将仁」

そのライダーな人は、俺の顔を覗き込みながらそう言い放つてくれる。

「……………ってことは、まさか」

「ああ、そのとおり。あたしは、最近めつきり使われなくなった、あんたのバイクだよ」

そして、ぎろりと睨まれる。

なんとというか、ずいぶんとワイルドなのが出てきたもんだ。もしかしてオフロード仕様だからか？

なんて言っている場合じゃない。なんか、変なことを言ったらぶん殴ってきそうな雰囲気がある。殴り合いだったら俺も多少は自信があるが、なにしろむこうはバイクだ。ケイやテルミの件から想像するに、外見は人だが、中身にエンジンの馬力とかスピードとか何かを持っているに違いない。

「いや、それはその、うちの学校はバイク通学ができないからでしどろもどろになっていると、そのバイクだと言う女の人は、ふつと表情を緩めてにかつと笑った。

「あつはははは、そんなビビるなって、将仁。こう見えても、あたしを呼んでくれたことは感謝しているんだぜ？偶然だったとしてもさ」

思わずほつと息を吐いてしまった。よかった、どうやら怒ってはいないらしい。

「ただ、判ってるよな？」

再度、バイクだった人がずいつと顔を近づけてくる。

「な、な、なんでしよう？」

「とぼけんなよ、名前だよ、あたしの名前。変なのをつけたら、その時は……判ってるよな？」

指先でサンバイザーのひさしをくいつと突き上げる（どうやらひさし部分は可動式らしい）。その目に、再びあの鋭い光が灯る。思わず震え上がってしまう。バイクに乗った人にならともかく、なんでバイクに脅されにやならないんだ、俺は。

「うう、判ったよ、ちよつと待ってくれ……ん、じゃあ、ヒビキってのは、どうだ？」

「ヒビキ……？」

バイクの人は、噛み締めるようにその名前を繰り返した後、一転してにっこり笑った。

「ふぶん、やるじゃないか。じゃああたしは今日からヒビキだ。」

よろしくな、将仁」

そしてライダーグローブをはめた右手を差し出してくる。ちよつと戸惑いながらその手を取ると、ぐいっと引っ張りあげられた。

やっぱりエンジンを積んでいるだけあって見かけ以上に力がある。殴り合いにならなくて良かった、と、素直に思ってしまった。

名前の由来が、元になったバイクが、特にフカしたときの音が異常に大きく響くから、というのは、伏せておこう。

だが、ほっとしたのもつかの間、俺は現実に引き戻されてしまった。

「わあっ!?!」

いつのまにか、俺とヒビキのまわりにやじ馬ができていた。

「ちよ、ちよつと、すいませんっ!」

思わず、ヒビキの手を取ってその場から駆け出してしまった。

02・なんかおかしな展開に その2（後書き）

まいど、作者です。

3人目の擬人化、剛力姉御バイク、ヒビキの登場です。

擬人化モノではこーゆーアネゴ的キャラってのはちょっと珍しいと思います。

あまり萌えないかもしれませんがw

では、次回作をお待ちください。

02・なんかおかしい展開に その3

「うーす……あれ、マサ、どうしたんだ？えらく疲れた顔してるじゃないか」

シンイチが俺の後ろから声をかけてくる。

「うーす、そんな疲れてるか？」

「ああ、なんか睡眠時間足りてないって感じだぜ。深夜番組でも見てたのか？」

「うーん、その、なんだ」

本当のことなんか言えない。言えるかそんなもん。携帯電話やプラズマテレビやオフロードバイクが女になって押しかけたなんて、いまだきマンガでもやらんぞ。

「なあ、シンイチ。ちょっと聞きたいんだけど」

「ん？」

「自分ちに、いきなり新しい住人が増えたら、お前はと思う？」
俺の質問に、シンイチは変な顔をする。

「どうって言われても、なあ。かわいい子だったら大歓迎だけだな、んでお兄ちゃんなんて呼んでくれたら」

「うーん、そうか」

いつもだったら速攻突っ込む返事だが、俺は唸ってしまふ。だって、俺、今、お兄ちゃんと呼ばれてるんだもん。携帯電話にだけど。

「なんか変だぞ、お前。何かあったんじゃないのか？」

あまりに不審だったんだろう、逆に突っ込み返されてしまった。

「い、いや、なんでもない、なんでもないぞ、さ、さっさと学校に行こう」

その場を取り繕うために、俺は早足で学校に向かった。

だが、学校についても、今日ははっきり言って、授業に身が入らなかった。

朝食食ってないのもあるが、うちに置いてきた3人娘のことが気

になつてしょうがない。

実は、あの後、ヒビキのことを何も言わずに部屋に押し込んでそのまま来てしまったので、中にいる二人とケンカしていないか気になつてしょうがない。

おかげで、今日は指されて答えられないということがいつもよりずっと多かつた。

「どうしたんだよ、マサ。お前、ホント変だぞ？」

休み時間にヤジローがかけてくる言葉もどこか上の空で聞き流していた。

心配するなつていうほうが無理だ。帰ったら大喧嘩の真つ最中、なんて才チは勘弁してほしい。それでなくても、俺、なんとなく居場所がないんだから。

「はあーあ」

今日、何度目になるか判らないため息が、口から吐き出された。

02・なんかおかしな展開に その3（後書き）

どうも、作者です。

今回はちょっとしたつなぎの部分なのでさらっと読み流してください。

次回は、01で出てきた二人が新顔の擬人化と初邂逅します。

まあ基本的に仲を悪くするつもりはありませんのでご安心ください

（何を）

02・なんかおかしな展開に その4

そのころ。

「へえ、家の中って、こんなふうになってんのかい」

将仁に家の中に押し込められたヒビキは、玄関に仁王立ちしながら、興味深げに眺めていた。元が屋外で使われる「バイク」というものだっただけに、屋内は見るのも感じるのも初めてだった。

「どちらさまでしょうか？」

そのヒビキに、声をかけてくる相手がいた。それは、モノトーンのメイド服に身を包みその上から黒いマントを羽織った、若い女性だった。

互いに知らない同士なので、少しの間だけその場を沈黙が包む。

そしてその沈黙の後、何かを思い出したように、ヒビキが口を開いた。

「あんた、もしかして、モノが人になった奴かい？」

「えっ？」

「いや、将仁がさ。うちには擬人化しかないからって言ったから」

「まあ、それではあなたも、将仁さんの力で人の姿を得たのでしようっ。」

「ああ、ついさっきな」

「そうでしたか」

いいながらそのメイド、テルミはヒビキの後ろを覗き込む。そして、少しだけ眉をひそめた。

「その肝心の、将仁さんはどちらにおいでなんでしょう？」

「ん？将仁かい？あいつならとくに学校に行っちゃったぜ。遅刻するーっとか言っつてよ」

「ええええ……ッ!？」

突然、悲鳴のように甲高い声が部屋中に響いた。

それと同時に、だだだつと部屋の奥から何かがものすごい勢いで飛び出してくる。

そして。

ぼふっ。

「きゃ!?!」

「おわっ!?!」

その子は、玄関に立っていたヒビキの胸板に頭からぶつかった。その勢いは結構なもので、体格の違うヒビキの体が弾き飛ばされたほどだ。

「つたたた………てだつ、誰?」

跳ね返されて上がりかまちにぺたんと座り込んだその子、ケイが鼻の頭をさすりながら、玄関に立つヒビキを見上げる。

「つたく、いきなりタツクルをかまして、ダレはねえだろうよ」
体勢を立て直しながら、ヒビキが自分の胸元をパンパンと払う。

「ケイさん。私たちの、新しいお仲間ですよ」

「へえ、お前、ケイっていうのかい。あたしゃヒビキってんだ、よろしくな」

そしてヒビキは、大人が子供の視線に合わせるように身をかがめ、ケイの顔を覗きこんだ。

だが、そのケイの視線は、ちょっと外れたところをじーっと見つめている。ヒビキがその視線をたどってみると、自分の胸にたどりついた。

「ん?あたしの胸が、どうかしたのかい?」

「えっ!?!」

そこで我に返ったらしいケイが、振り切れそうな勢いで首をぶんぶん振りながら。

「ななななんでもないなんでもない胸が大きいなんて思ってないよっ」

なんてなことを口走る。

その様子を見て、テルミとヒビキは吹き出してしまった。

「かわいい奴だなあ、お前」

ヒビキの、ライダーグローブが嵌められた手が、ケイの頭を軽くぽんぽんと叩く。

「むうううっ、子ども扱いしないでよおっ!」

「まあまあ、ケイさん。怒るとおなかが空いてしまうでしょう?」
それに対し、ケイはぷうっと頬を膨らまし、テルミがなだめに入る。なんとなくほのぼのした空気がそこに流れた。

「それで、さっき見ていたこいつだけどな」

ひと段落したところで、ヒビキが自分の胸をぽんぽんと叩く。

「これ、エンジンなんだよね」

「エンジン?」

「ああ。あたしやバイクだったからね。この姿になる前はこんな感じだったんだ」

言いながら、ヒビキが玄関口で四つんばいになる。そうすると、着ているライダースーツの模様も相まって確かにバイクを思わせる。そして、バイクのエンジンがあるところには、確かにヒビキの胸のふくらみがあった。

「そういえば、あんたたちは元々なんだったんだい?」

立ち上がりながら、ヒビキが2人に話しかける。

「あ、ケイは携帯電話なんだよ」

「へえ、ケータイかあ。やっぱ将仁のか?」

「うんっ!」

「あつははは、元気な子だ。よろしくな」

そして、ヒビキの目が今度はテルミに向けられる。

「あ、私は、プラズマテレビのテルミと申します。よろしくお願
いしますでしょう」

テルミは、そこで深々と頭を下げる。それは、本職のメイドのよ
うに丁寧なものだった。

「ははっ、いいよそんな丁寧に挨拶しなくても。同じ将仁の持ち
物じゃないか。ま、これからよろしくな」

「はい、将仁さんのために頑張らしましょう」
「うん！」

三人目のモノが、受け入れられた瞬間だった。

02・なんかおかしな展開に その4（後書き）

どうも。作者です。

キャラが違う連中がいきなり同じ部屋に押し込められてすぐに仲良くなるのか、と突っ込まれたら返す言葉も無いんですが、まあそのへんは軽く流してください。

次は、擬人化三人組のまつたりした会話シーンです。

02・なんかおかしな展開に その5

「あ、そうだ」

ヒビキが部屋に上がり、三人でしばらく談笑している時、思い出したようにケイがそんなことを言った。

「どうしたんだい？」

「あのね、今日ね、お客さんが来るの」

「まあ、お客様ですか？」

「うん。昨日、メールで来たんだ。今日、こっちに来るって」

そして、ちよつと目を閉じると、そのメールをそらんじる。

「へえ、あいつが来んのか」

「えっ？ヒビキお姉ちゃん、その人のこと知ってるの？」

「そりゃ知ってるもなにも、そいつはあたしの前の持ち主だよ。」

で、将仁のやつは、そいつが今日来るってこと、知ってるのかい？」

ヒビキがそう聞き返すと、ケイは首を左右に振った。

「メールが来たときに教えてあげただけど、後でいいって言われて、そのまま言いそびれちゃったの。いつもだったら、来たって言えばすぐ見るんだけど、ケイがこんなになっちゃったから、ちよつと遠慮してたみたい」

そして、ペろつと舌を出す。

「そうですか……. それでは、私たちでお迎えしなくてはならないでしょう」

口元に手をやり、ちよつと考えるような仕草をしたテルミが、独り言のように口を開く。

「全く、昼間に来るなんてタイミングが悪いよな、あいつも。金曜日は将仁が学校に行つて留守だってぐらいのことは判つてんだろ
うに」

「あ、でもね、ほかにも来るかもしれないんだ」

そのヒビキの様子を見たケイが言葉を続ける。

「ほら、テルミお姉ちゃんは聞いているでしょ？昨日の夜、電話で話した、あの人」

心当たりがあったのだろう、テルミが納得したような顔をする。

「ああ、そういえば四時ごろこちらにおいでになると、仰っていたでしょう」

「うん。お兄ちゃんが帰ってくるのはその後になると思うから、その人もケイたちが迎えなきゃ」

「へえ、今度は誰が来るんだい？」

「あのね……」

02・なんかおかしな展開に その5（後書き）

ども、作者です。

予告どおり擬人化3人組のマツタリ（でもないか）会話です。
ここで言う「あいつ」と「あの人」も、すでに話の中では登場して
おります。
そして、どっちも間もなく登場します。
楽しみにしてください。

02・なんかおかしな展開に その6

きんこーんかーんこーん。

昼休みを告げるチャイムが校内に響きわたる。

と同時に、黄色いヘアピンで前髪を止めた女が俺の横を通り過ぎる。それはつまり、俺にとってマジムカツク以外の何者でもない儀式の始まりを意味している。

なんて遠回りな言い方は空しくなるからやめよう。

「まったく、うらやましいよな。女の子の手作り弁当なんて」

早くも聞こえてきたマジムカツクやり取りをなるべく聞かないよう、席を立って学食に向かう。

「………待てよ」

そういえば、今、うちには女の子がいるんだ。

「はいっ、お兄ちゃん、今日のお弁当。残しちゃダメだよ？」

「将仁さん、差し出がましいかも知れませんが、お弁当を作らせて頂きました」

「ほら、将仁。今日の昼飯、作つといたぜ」

かるーく妄想して、最後のは無いなと思った。

そして、もうちょっと妄想したら、なんか悲しくなってしまった。いくら女の子の姿になったとはいえ、元は携帯電話とテレビとバイク。肉体を持っているという意味では確かに生身だが、それとは別の意味で生身の女にはそういうことをしてもらえない、という事実を思い知らされてしまったからだ。

真実を知っている奴がいたら、贅沢だなんだと言うかもしれないが、人間ってのは贅沢だから、こういうことをしてもらおうならやっぱり生身がいいと思ってしまうのだ。

それに、こう言うてはなんだが、あいつらに本当に飯が作れるのか、ということも疑わしい。昨日はテルミが素麵そつめんを作ったが、素麵ぐらいなら袋に作り方が書いてあるから、字が読めれば作れる。レ

シビ無しだとどんなもんが出されるのか、心配を通り越して怖くすらなる。

結局、「あまり期待しないほうがいい」と自分を納得させ、空腹を満たす為に学生食堂へと向かうことにした。

02・なんかおかしな展開に その6（後書き）

どうも、作者です。

今回は、メシ時の主人公のボヤキです。
興味がねえー！という方は読み飛ばしてくださいまし。

ただ、これって、私自身がこういう状況になったら、考えそうな事
なんですよね〜。
やっぱり贅沢ですかね？

さて、次ですが。

前作でヒビキが「あいつ」と呼んだ人物が登場します。
請うご期待！なんちゃってw

02・なんかおかしな展開に その7

今日は掃除当番も部活もふけて、家に直行した。

あいつらが変な騒ぎを起こしていませんように。それだけを祈りつつ、俺は家までの道を走った。いつもよりハイペースで飛ばしたため、家に着いた頃にはさすがに息が上がっていた。

「ぜい、ぜい、よ、よかった、騒ぎ、には、なって、なさそうだ」とりあえず、部屋の周辺はいつもどおりだった。

息を切らせたままで入るのはかつこ悪いので、ドアの前で息を整える。

そして、いざ入ろうとドアに手をかけたとき。

がちゃ。ドアノブが勝手に動き、勝手に開いた。

「おつかえりなさーいっ！」

そしてその中から、何か人の形をしたものが飛び出して来た。

「わっ!?!」

「んもーっ、お兄ちゃんたら黙って出て行っちゃってえ。ケイ、

寂しかったんだからあ！」

ケイだった。俺の首根っこに力いっぱい抱きついている。

「わ、こら、は、離せっ！」

「やーだよっ、だって寂しかったんだもおん」

「じゃっ、ちょ、ちよっつと、緩めてくれ、く、苦しいっ」

抱きつかれるのは嬉しいが、首を絞められているに近いので、マジ苦しい。ちよっつと緩めてほしい。しかし、ケイは緩めるどころかますます力を込めて抱きついてきて、さらに頬ずりまでしてくる。

「なんだなんだ、お前ずいぶん人気もんじゃねえの」

ちよっつと目の前が白くなったところで、聞き覚えのある男の声がした。

男?うちに男なんかいたか?と思って必死にそっちに顔を向けると、なんかえらくがたいのいい、見覚えのある奴がニヤニヤしながら

ら立っていた。

「り、りゆう兄!？」

苦しさも手伝い、声が裏返る。

そこにいるのは、実家にいるはずの、俺の義理の兄、現在大学3年生の真田龍之介さなだりゅうのすけその人だったのだ。

「なつ、なんでりゆう兄がうちにいるんだ!？」

「なんでって、薄情な奴だな。せつかく、わが愛する弟の生活の様子を見に来たって言うのによ」

「だったら、いきなり来ないで連絡のひとつもしてくれりゃ」

「連絡ならちゃんとメールでしたぞ、ちゃあんとな」

「って、あのな、携帯電話がこんなになつた状態で、メールが見れるかっ!と言おうかと思つたが、りゆう兄はこの子が携帯電話だつてことを……」

「だから言つたでしょ?メール見ないの?って」

「それとも何か?お前、読まれたら恥ずかしいメールでもあるのか?あ、もしかして彼女からのメールとかあるのか?いっちょまえに色気づきやがって、このこのっ!」

と思つと、ケイの耳元で、でも俺にも聞こえるぐらいの声でこう言いやがった。

「女からのメールなんかあつたら教えてくれよ?話のネタにすつから」

「ざーんねんでした。ケイ、そんなメールもらつたことありませーん」

知っていたよ、こいつは。何で疑問に思わないんだりゆう兄、お前確か大学で物理学を専攻しているはずだろ、こんな物理的にありえん事になに普通に納得してんだ。

「ほらあんたら、いつまで玄関でたむろつてんだい」

そのさらに後ろから、今朝初めて聞いたヒビキの音がする。

「ほら将仁も、早く入りな。お客さんが中で待ってんだから」

「客?」

まだ居るのか？というのが正直な気持ちだった。なにしろ、姿が見えるだけでも4人。誰も居なかったはずの1DKにそれだけ入ると、一気に狭くなったような気がする。さらに中には、テルミというメンバーがもう一人。出てこないということは多分その客の相手をしているんだろうが、そうなると本当に狭いぞ、うちの中が。せめてその客が一人であってほしい、俺は素直にそう願った。

02・なんかおかしな展開に その7（後書き）

どうも、作者です。

ヒビキが「あいつ」と呼んでいた将仁の兄貴、真田龍之介氏の登場です。

べらんめい口調の江戸っ子なキャラ、の予定なんです、実はこの人の江戸弁、かなり怪しいです。

江戸ツ子の方、べらんめい口調にあやしいところがありましたら、遠慮なく指摘してください。

02・なんかおかしな展開に その8

ケイを首にぶら下げたまま、りゅう兄に連行されるようにして、俺は自分の家の中に入った。

ダイニングでは、テルミが、まるでホンモノのメイドさんみたいに、見知らぬ女の人にお茶を出していた。グレーのスーツを着込み、眼鏡をかけた、まさに「知的な女性」というより「ビジネスウーマン」と言いたくなるような人だ。頭の後ろで髪をだんご状にまとめ、それをフリルつきのハンカチで包んでいるのが、ちょっとしたアクセントになっている。

その女の人は、俺の顔を見るなり、席を立った。

「あ、お帰りなさい。お待ちしておりましたわ」
先手を打たれた。

「真田将仁さん、ですね。私、こういう者です」

こちらが返事をする前に、その女の人は、俺に名刺を差し出した。『常盤弁護士事務所 主任弁護士 常盤花音代』と書いてある。

思わず、その名刺と女の人の顔を交互に見比べる。その襟元に、向日葵ひまわりに天秤の模様が刻まれた、金色に輝く丸いバッジが光っていた。

「って、もしかして」

「はい。昨日お電話差し上げました、弁護士の常盤です。お探ししましたよ、将仁さん」

そして、につこりと微笑む。上品な笑い方だと思った。

「将仁さんが時間を守る方で安心しました。4時ごろと仰っていたので、少し早めに伺ったのですが」

そういえば、そんなことを、昨日言ったような気がする。

が、次の瞬間、俺はこの目の前にいる、常盤という女が全ての元凶だということを思い出した。

「そういえば、うちに来て、事情の説明をするって、言いました

よね」

なるべく冷静を装い、問いかける。この状況、携帯電話やプラズマテレビやオフロードバイクが人の姿になるこの現象をどう説明してくれるのか、当事者ですら混乱するこの状況にどんな理屈をつけてくれるのか、はつきりしてほしい。そして、収められるなら早いところ収めてほしい。

「はい、私もそのつもりで伺いました」

すると、常盤さんは湯呑ゆのみを静かに置いてから、表情を引き締めた。少々長くなりますが宜しいですね。そう前置きしてから、常盤さんは話をはじめた。

「まず、将仁さんが置かれている状況と、その原因について説明しましょう。これは、「擬人化ぎじんか」と呼ばれる現象によるものです」

「擬人化？」

なんか、どっかで聞いたような言葉だ。

「人でないものを人になぞらえることでしょう。古くは「海は招く」「森が泣く」などの表現がありますし、最近ではテレビアニメでもそのような表現がありますでしょう」

さりげなくテルミがフォローしてくれる。言われてみれば、コマーシャルとかで顔がついた電車や車のアニメなんかが出ているし、マスケットキャラなんかもその類なんだろう。他に、「萌え擬人化」とか言って戦闘機とかを女の子がコスプレしたみたいな姿にしている絵を見たこともある。

だが、あれは全部マンガや観念や空想の世界であって、現実でなっているのはありえない、いや、あっちゃまずいと思う。人間の倫理観をどうにかする話だ、そんなの。

「あなたには、擬人化を現実に引き起こす力を受け継いでいるのです。お解かりいただけますか？」

そんなので解るかっ！と叫びたくなるのをぐっとこらえ、首を横に振る。

だってそうだろう。昨日までそんなことこれっぽっちも知らずに

生活して来たのに、いきなり「そういう力がある」といわれてはいそひですかと受け入れられるほど俺は単純ではない。つもりだ。

「なんで、俺にそんな力があるんですか」

「それは、あなたが、先祖代々、その力を受け継いできた一族、西園寺家の末裔だからです」

「サイオンジ？」

「はい。そして、西園寺家の遺産を受け継ぐ資格がある人物、それがあなたなのです」

なんか、俺が知らないところで話が膨れ上がっているみたいだ。

そして、常盤さんは、デタラメここに極まりな力を引き継ぐ「西園寺家」というものについて説明してくれたが、これがまたマンガのような話だった。

まず、この西園寺家というのは、平安時代から存在する旧華族の一派で、さらに遡ると、なんと聖徳太子の時代に、仏教伝来について蘇我氏と対立した、物部氏という一族にたどり着くという。

その名前は、日本史の授業で聞いたことはあるが、自分がそれに関わりがあるとは予想外だ。

「そして、この物部一族が持っていた力、それが当時は靈代、現在では「擬人化」と呼ばれる力なのです」

常盤さんがそう断言する。

「物部の一族は、物部神道と称される術を伝えていたといわれています。日本書紀などによると、その真髄は、魂を奮い起こすことにより精神の力を高め活力を生み出すことと言われていますが、実際はその奮い立たせる相手は人でなくとも良く、特に、武器・道具のように、自らは動かない「物」の魂を、活力を与えて行使したことで、「物部」と呼ばれたのです。

あらゆる物に神がいる、八百万の神という日本古来の考え方にも通じるものがありますね」

そこまで聞いて、ちよつと驚いた。似たようなことを昨日、テルミが言っていたからだ。

ちらつとそつちを見ると、テルミは困った顔をしながら頬をぽりぽりと搔いた。テルミもそこまでは考えていなかったらしい。

その後も、「物部もののへ」についての話はしばらく続いた。さすがに物部のへ一族がなぜそんな力を持つようになったのかはあまりに昔過ぎてはつきりしないらしいが、「仏教」という新しい考えとソレが持つ「力」を恐れた物部もののへの一族は、やがてその仏教を擁護した蘇我氏そがと対立、その後の戦争で頭首である物部守屋もののへのもりやが死に、一族は没落、というより壊滅状態となる。その後、大化の改新に登場する中臣鎌足なかとみのかまたり、後の藤原氏ふじわら一族に保護されて生き延びた一部の生き残りの子孫が、やがて藤原氏に吸収され、やがてまた分かれたときに西園寺を名乗るようになったんだそうだ。

そして、その末裔が俺。という訳らしい。

「はー……」

ここまでスケールがでかくなると、ホントでもウソでもどうでも良くなってくる。

「ここに、先代の遺言書があります。ご確認ください」

アホの子のように口をあけてぽかんとしていると、常盤さんが白い封筒を差し出してきた。素人の俺でも判る、上質の和紙を使ったそれには、綺麗な字で「遺言書」と書かれている。

すこしためらったが、俺は口を開き、中身を引っ張り出した。

02・なんかおかしな展開に その8（後書き）

どうも、作者です。

前回の真田龍之介氏に続き、実はこれからのキーパーソンになる弁護士、常盤花音代氏の登場です。

この人の名前、判る人は判る語呂合わせになっていますので、良かったら覚えていてください。

02・なんかおかしな展開に その9

中に入っていたのは、同じ和紙に丁寧な字が書かれた、1枚の紙だった。

読んでみると、そのとおりの遺書だった。内容は、はしょって言えば「西園寺家は、西園寺の血と力を引く者を当主とし、その者に全ての遺産を譲渡する」というもの。ついでに、後見人として常盤さんの名前も記載されていた。

「そこにある、西園寺の血を引く者、というのが、貴方なのです。将仁さん」

「……………なるほど」

そこまで聞いて、俺の口から出た言葉が、それだった。

俺は西園寺のだれかの私生児だったところか。都合が悪いから切り捨てて、孤児として施設にあずけ、そして今、他の誰かの都合で、遺産相続のネタにしようとかいうんだらう。

サスペンスドラマとかによくありそうな話だ。

「……………それで？俺に、西園寺に戻って来いと言っんですか？」

「いいえ。あなたには、西園寺家を継いでもらいたいのです。言い換えれば、あなたが西園寺家に来るのではなく、西園寺家の遺産が、あなたのところに来るということです。あなたには、その資格があるのですから」

「なあ、その、遺産ってのはどんなもんなんだい？」

ヒビキが口を出す。

それに対する答えが、またスケールのでかい話だった。

「具体的に言うのは難しいのですが、土地、家屋、債権、株、貴金属類その他諸々を現在の価値に換算すると、およそ5千億円程度になります」

「ごせんおくー!？」

常盤さん以外が口をそろえて叫ぶ。1億2億なら、それでも十分大金だが、宝くじが当たったと考えれば納得できる。海外の宝くじだと50億円相当なんてのもあるらしい。が、それとはさらにケタがガッツリ違う。個人資産だと言われても、個人でどうこうできる額じゃない。

「正確に言つと、これは今から11ヶ月前に西園寺家の資産が凍結される前の額ですから、多少上下はあると思いますが」

「な、な、な、なんで、俺なんですか？ははは話から察するに、俺は私生児なんでしょう、そんなもの、俺が受け取ったら、その、いろいろ、まずいんじゃないですか」

思わずそう聞いてしまった。急に怖くなってしまったからだ。

それに対し、常盤さんは首を横に振った。

「あなたは、私生児ではありません。その証拠はあなたの左手首にあります」

そのことを言い当てられ、俺は戦慄せんりつを覚えた。

実は、俺の左手首には、おたまじゃくしが踊っているのを連想させる変な丸い模様がある。輪郭がぼけているのでアザなのか刺青なのかはわからないが、少なくとも物心がついたころからあったと思う。

「これは、西園寺家の家紋、左三つ巴。あなたがまだずっと小さいころに、あなたのお母様が命じて彫らせたものです」

俺の手首を見ながら、常盤さんがうなずく。

「あとは、将仁さん、あなた次第です」

「あなた次第って言われても……」

正直、困ってしまう。500000000000円（実際にゼロを並べるとあらためてすごい額だと思う）をくれるって言うなら貰いたい。が、そんなぶっ飛んだ大金持っていたら、命を狙われるんじゃないかなろうかとか、へんな連中が寄ってくるんじゃないかとか色々余計なことも考えてしまう。

それに、金額云々以前に、遺産を引き継ぎたくないという気持ち

も、真面目な話、ある。この遺産は、物心がつく前に俺を見捨てた連中の遺産だ。素直に引き継ぐにはちよっと引つかかるものがある。「どうしよう?」

「どうしようって、俺に聞くなよ。てめえのこつたるうが、俺らが口出しするべき話じゃねえよ」

「そんな、冷たいぞりゆう兄いいい」

「なんだオイ、おめえ男だろう、自分のことぐらい自分で決めやがれっての」

思わず、一番近くにいる兄貴に助けを求めたが、冷たくあしらわれてしまった。りゆう兄って、変なところで江戸っ子だとも言うおうか、金に執着しないんだよな。

「ケイ?」

「ケイはお兄ちゃんの言うとおりにするよ。ケイはお兄ちゃんが居ればそれでいいもん」

「テルミ」

「お忘れかも知れませんが、私は将仁さんの所有物でしょう。主である将仁さんの決定に、私は従いましょう」

「ヒビキい」

「なんだいその腰が抜けた声はよお。あんたあたしらの頭かしらなんだろう、あんたがすっかりしなくてどうすんだい」

困った。マジで困った。誰も助けてくれない。

うう、いやだ、こんなこと俺一人で決めるのか?

「……どうやら、決めかねているようですね、将仁さん」

悩んでいた俺に助け舟を出してくれたのは、以外にも、俺が困る原因を作ってくれやがった、常盤弁護士さんだった。

「心配しなくても、時間はまだあります。じっくり考えて、お決めになってください」

すぐに決めなくてもいい、その一言で、ちよつとだけ安心した。

「まだ、って、期限があるみたいな言い方だねえ」

「仰るとおりです」

だが、ヒビキの一言が、また俺に不安を抱かせる言葉を引つ張り出してくれた。

「この遺言書の有効期限は、書いた者が亡くなってから1年。私は、それまでに、西園寺の血を引く人を探し出さねばなりません。そして、期限まで一月を切った昨日、ようやくあなたのことを探し当てたのです」

「それはつまり、あと1ヶ月で決めろってことだな。うん、五千億を手に入れるかそれとも一円ももらえないか。その間はないんだよな。うんうん、こりや悩むよなあ、なあ将仁」

「あつうつうつうつ」

そんなこと判つとるわい。なんでそう煽るようなことを言つんだこの脳天気兄貴は。

「ねえねえ、五千億円あったら、何が出来るかな？すつごく遠くまで届くアンテナとかがつけられるのかな？」

「超薄型、立体映像の画面、音だけじゃなくてにおいなども再現できるかも、はうう、なんて素敵でしょう……」

ケイとテルミはなんかすでに手に入れたような気分になっているし。言っていることはオーバースペックどころかオーバートクノロジーだし、だいたい、お前らはそういうふうに変造できるタイプじゃないだろう。

なぜかヒビキだけは調子に乗らず、うさんくさい目で常盤さんを見ながめている。

でも改めて考えると、それだけあれば、たしかに俺がしたいことのほとんどはできる。っていうか、一回でいいと思ったことでもいくらでも出来そうだな。

そんなのが、あつさり俺のになるなんて、こりや間違いなく、何かあるな。

「えーとあの、すみません、もうちょっと聞きたいことがあるんですが」

「はい、なんででしょうか？」

常盤さんは、あくまでも冷静だ。あくまでも仕事は仕事と割り切っているのだろうか。

「俺以外の、西園寺の人って、どうしたんですか？」

「……それは……」

すると、初めて常盤さんの表情が曇った。そんなにもいい家柄なんだったら、俺なんかよりずっとそれらしい奴がいるはずだ。それなのにこの弁護士は俺のところに来た。ということは……

「……皆さん、お亡くなりになっています。その最後の当主、西園寺静香様さいおんじしずかがしたためたのが、その遺言書なのです」

なんとなく、想像はついた。だが、断言されたときに何の気持ちも湧かないのは、自分でもちよつとだけ驚いた。遺産がほしいという気持ち、血の繋がった両親に遭いたかったという気持ち、俺を捨てた家の遺産なんか意地でも引き継ぐもんかという気持ち、そんなのがないまぜになって、結局は中和されてしまったというところか。

「……考えさせてください」

俺は、そう答えるのがやっとだった。

02・なんかおかしな展開に その9（後書き）

どうも、作者です。

なんだか、スケールのでかい話になってまいりました。つて、書いている作者が言う台詞ではありませんがw
ちなみにここで出てきた五千億円という数字、実は何も根拠が無い話ではなく、日本の長者番付上位の人の総資産額から拝借したものです。

もしこれだけのお金があったら、何をしようかねえ・・・
・なんかろくなことしないような気がしますな。

次は、ちょっとまったりした時間が流れます。
息抜きとして読んでください。

02・なんかおかしいな展開に その10

常盤弁護士さんが、遺言書を持って、うちのドアを閉じた瞬間。

「将仁、うらやましいぞこのヤロウ。夢のハーレムじゃねえか、ええ?」

りゆう兄がヘッドロック&コブシグリグリをやってくる。

「いだだだだ、止める止めるこのバカ兄ツ」

これ、今朝、ヒビキもやってきたよなあ。こいつらの性格って、使っていた奴に似るのかな?

で、そのヒビキはというと。

「ハラ減ったな。なんかねえかな?」

「ヒビキお姉ちゃん、どうしたの?冷蔵庫の中なんて見て」

「今日は買い物をしていないでしょう。お米と納豆しかないですよ?」

「んなこと言ってもさあ、ハラ減ったんだからしゃあないだろお。あたしゃ燃費が悪いんだから」

「ふーん、そうなんだ。ケイたち電気製品とは違うのかな?」

「まあ、内燃機エンジン閉持ってるからねえ」

やっぱり人とは違うなと、一瞬思ってたんだが。

「ぐああああ、イタイイタイコラ離せ離せえいかげんにしろこのバカ兄貴!」

「バカとは言ってくれるなあこの」

グリグリが俺を現実引き戻した。ヒビキのときは、ヘッドロックされたときに後頭部に柔らかいモノが当たって実はちょっと嬉しかったんだが、兄貴にされるとごっごっで痛いだけで嬉しくもなるともない。そのくせ、俺が首を抜こうとしても器用に角度を変えてホールドしてくるので全然抜けない。

なにしろこのバカ兄貴、真田流兵法術まなだりゅうほうじゆつとかいう、インチキのようであつた。それとしたホンモノの武術を身につけているのだ。

ただでさえ体格で負けている上にそんなハンデがあるせいで、俺は兄貴にケンカで勝てた事がただの一度もない。負けっぱなしは悔しいので俺もその兵法術をやってみたんだが、同じ格闘術と一緒にやっていたら兄貴に到底追いつけないことに気付いて、結局止めてしまった。

兄貴はそれから俺の頭が変形するんじゃないかと思うほどグリグリを続けた後、やっと開放してくれた。

「おーし、んじゃ、みんなでメシ食いに行くか!」
で、俺を解放した後。兄貴はいきなりそんな事をぶちあげた。

なんでも、臨時収入があったからぱーっとやるっ、ということらしい。

「やつほーう、龍之介兄ちゃん話せるうー!」

「わああ、助かったでしょう、龍之介さん」

「さつすがあたしの昔の持ち主だ、気前いいねえ!」

モノ軍団は、さつそくメシに釣られてくれた。やつぱり、外でメシを食うのは楽しいんだろう。

「ねえねえ、お兄ちゃん、行こうよお、ねえ行こうよお」

と思つたら、ケイがまとわりついてくる。

「将仁お、悩むことないだろ。学生が貧乏なのは当たり前前なんだからよ」

そしてヒビキが俺の襟首をむんずと掴んで、ものすごい力で引きずっていく。

「うわこら引つ張るな、伸びるっ」

「はいはい、将仁さん、靴ですよ、どうぞー」

その横で、引きずられる俺の足に、テルミが器用に靴を履かせる。なんでこいつは居間にでーんと鎮座していたテレビだったくせにこんなに器用なんだろうか。

「ほらぁお兄ちゃん、立ってよ。ズボン破けちゃうよ?」

玄関まで引きずられたところで、ヒビキが手を離すと同時にケイが俺の腕を取って立たせようとする。

兄貴に飯を奢られるのはちょっと癪だったが、モノ軍団の楽しそうな顔を見ると、まあいいかと思ってしまった。

02・なんかおかしな展開に その10（後書き）

どうも、作者です。

ちよっと息抜き、といったシーンでしょうか。

実は、まだ02・は終わりません。

主人公が寝付くまでにあと一人、擬人化が登場します。

しかも、場合によっては年齢制限が要るかも（笑）

そのへんは、少しだけ期待しててくださいw

02・なんかおかしな展開に その11

「あー、疲れたあ」

兄貴が帰った後、俺はそのまま風呂に入った。なんかたるんでるなーと自分でも思うが、なんかもう精神的に参っているからしょうがないと自分に言い訳する。

ざばあつと頭から湯をかぶり、シャンプーをつけてわっしやわっしやと髪を洗う。そして手探りでスポンジをつかんで、ボディソープをつけて馴染ませるとごしごしと体をこする。

元携帯電話のケイとプラズマテレビのテルミは（昨日素麺なんか食ってたくせに）水が苦手らしい。オフロードバイクのヒビキは、水は大丈夫のはずだがどうやらめんどくさがっているらしい。見た目はみんな年頃の女の子なのに、そんなことでいいんだろうか。

というわけで、風呂はトイレと並んで「俺が一人になれる」場所になったのだ。

目をつぶったままでごしごし体を洗いながら、今日あったことを考える。

昨日から、俺の周りではどっかのマンガみたいな出来事が立て続けに起きている。携帯やテレビやバイクが人になったり、まったく知らない遺産の話が転がり込んできたり。

そして何より、その全部をつなぐ鍵が俺だと言う。あまりにぶつとんだ話だ。

「俺がそんな力を持っているなんて、まだ信じられないよなあ」
がしがしと体を洗いながら、そんな言葉を吐き出す。

遺産がどうこう、というのはまだ実感がないから考えないこともできる。今はそんなことより、今、目の前にある（正確に言うとうちの居間にいる）危機にどうやって対応しなければならぬか、のほうの問題だ。

なにしろ、男一人住まいのところいきなり女の子が3人も現れ

ただ。いくら彼女がほしいからといっても、これはないじゃなからうか。しかもその子らはもともとモノだったから、下手すれば俺は彼女らの前を素っ裸とかパンツ一丁とかで歩き回っているはず。

相手がモノの姿であればいいんだが、女の子の前を素っ裸で歩きまわれるほど、俺は図々しくないし、それにこう言っちゃなんだが自信がない。

「なんだってこんなことになったんだ、これじゃマジでマンガじゃないかよ、なあ」

考えると耳鳴りがしてきそうだ。

「じじじ」。

「まあ、家の中がにぎやかなのはいいけどな」

それに、考え方によっちゃこれは確かにりゅう兄が言うように男の夢であるハーレムな世界だ。もっと増えたら、ふっきれて楽しくなるかも知れない。

「じじじ」。

ずるずる。

なんか俺の体を洗うスポンジの感触が変なような気がする。

「まあ気のせいだよ」

一通り洗い終わった。よし、そろそろ洗い流そう。と思ってスポンジから手を離して手探りで洗面器を探す。なにしろシャンプーは流していないし顔は泡だらけだし、このままで目を開けたら石鹸が目に入っただけでも痛い。

だが、なぜかその洗面器がない。

「どつぞー」

ざばあーっ。

突然、頭の上からお湯がかけられる。それと一緒に、頭が軽くわしわしとすすがれる。

はて、いつのまに俺じゃない奴が風呂に入ったんだろう。

お湯の流れが一度途切れたところで、薄目を開けてみる。

目の前に、ぼんやりと、肌色の、ぷるんぷるんと揺れるものが二

見える。

何だ、これは。こんなもん、風呂にあったか？

「どうしますかぁー？もう一度、おかけしますかぁー？」

「もう一度？」

「はいいー、お体のほうも、お流ししますよお」

はて、聞いたことがない声だ。

見上げると、なんかほわわんとした感じの、白い髪の女の子が、洗面器を手をしている。アルビノってやつだろうか、眠そうに半開きにした瞳が赤い。

「こんばんわぁ、将仁さぁん」

その子は、目があった俺に、にっこりと微笑んできた。

一瞬、頭が真っ白になる。そして、つつつと目を再び下にやる。泡にまみれた肌色の体に、ひときわ目を引くきめ細かい泡をまとった肌色の大きなふくらみが二つ。さらに下に目をやると、同じように泡にまみれた、すべすべした太ももが目に入る。その柔らかいラインは男のものではない、と思う。それは。つまり。

見知らぬハダカの女の子が、俺の目の前にいる。

「うわ、うわあああああああつ！？」

なんだそりゃあ！

前後不覚になって、俺は風呂場から飛び出していた。

「あぁん、まだ背中に泡がついてますよお」

後ろからなんかのんびりした声が聞こえるが、そんな場合ではない。脱衣所に置いてあったバスタオルを腰に巻きながら、俺はそこも飛び出した。

02・なんかおかしな展開に その11（後書き）

どうも、作者です。

こういうハーレムものにはつきもののお色気キャラの登場です。スポンジの擬人化といえばかの有名なスポンジボブがいますが、私だったらこっちのほうが断然いいですw
次は、このふんわりスポンジ娘と、それ以上に主人公がモノたちの間に騒ぎを起こしますので、ご期待ください。

02・なんかおかしな展開に その12

「どうしたの、お兄・・・きやーっ!？」

「うわっ、こら、将仁っ、なんてカツコしてんだっ!？」

「まっ、将仁さん、体、体は、拭いてから歩くべきでしょうっ!？」

当たり前だが、リビングは一瞬で大混乱に陥る。なにしろ俺以外みんな女だ。お恥ずかしい。

「ああん、逃げないでくださいよう」

その後ろから、びしゃびしゃと水を滴らせながら、あの謎の女が追いかけてくる。

「きやーっ!ー!みーずうーっ!データが飛んじゃうよおーっ!」

「きやーっ、こつち来ないでくださいーっ、漏電してしまうでしよーっ!」

びしょぬれの俺とその女から、ケイとテルミが必死になって逃げる。家電製品な二人はマジで水が怖いらしい。

だが、俺は追いかけてくる女のほうが怖い。

「コラ将仁ッ!」

「わあっ!？」

突然、俺は背後からがつちりと羽交い絞めされた。まさかあの女に捕まったのか、と思っただが、同時に聞こえたのはまだ聞き覚えがある声だった。

ヒビキのそれだ。

「てててめえ、あたしゃてめえが、そそそそんなオヤジなやつだたあ思わなかつたぞこるあ」

「んなこと言っても、あのな、オイこら放せ!」

俺が何か言おうとしても、テンパツたヒビキはかまわずに俺をブン振り回して俺に反論させてくれない。

だから、そんなことしていると・・・

はらり。

適度に湿り気を帯びたバスタオルが、パラシュートのように空気を含み、ゆっくりと床に落ちていく。

その瞬間、家の中が静寂に包まれた。

動けない。ヒビキの押さえられているのもあるが、それ以上に、まるでメデューサに睨まれて石になったかのように、体が硬直して動けない。

なぜなら、そこにいる4人の、8つの目が、俺の股間にある、硬直した一点をじつと見つめたまま、固まっているからだ。しかもみんな（正直に言うと、後ろで羽交い絞めしているヒビキの顔はうかがえないが）顔が赤い。

ぱたっ。

床に水滴が落ちる音が、妙に大きく聞こえる。

「ぎゃあああああああああああああああああああああ！」

その瞬間。俺の家は阿鼻叫喚あびきょうかんの修羅場と化した。

「うわああああっ！」

いきなり、俺の体がぶわつとぶん投げられる。その視界の端ではヒビキが大慌てでどこかに走り去るのがちらりと見えた。

「はうろう」

それと違う方向へ、白い髪の素っ裸のあの子がだだつと走っていく。そしてどこかに入ったのか、ぱたんという音と共がする。

「おにいちゃんっ!？」

なすすべもなく今の床に生まれたままの姿で投げ出された俺に、ケイが、バスタオルを持って駆け寄ってくる。が。

「きゃあっ!？」

濡れた床で足を滑らせ、俺の目の前でつるつると滑った。

「んがつ!？」

そして俺の顔面に頭突きを食らわしてくれた。いくらぶにぶにの女の子だと言っても頭蓋骨は硬い。

「きゅう……」

しかもケイはそのまま動かなくなってしまう。痛いのは俺なのに。ふと、静かにしているテルミのほうを見ると。

「え、映像では見たことがあるでしょうけれど、モザイクのない画像を見たのは初めてでしょう。で、でも、モザイク映像のむこうにあるものが、こんなのだとは、知らなかったでしょう……」

正座したまま、どこかあらゆる方向の一点を見つめ、なにやらうわごとを言っていた。

だ、だめだこいつらっ！

そう悟った（悟らなかつたら多分いつまでもこんな状態が続くだろうから）俺は、上に乗ったままのケイを押しつけ、バスタオルを拾って、タンスがある部屋に全力で逃げ込んだ。

02・なんかおかしい展開に その12（後書き）

どうも、作者です。

とうとう主人公、擬人化とはいえ女のこの前でストーリーキングをや
つてしまいましたw

なんでみんなのところへ行ったかというところ、彼らが今住んでいるの
が1Kのアパートで、衣類とかがそこにあるからです。決して主人
公が露出狂なわけでは在りません。

次はいよいよ、おさわがせスポンジ娘に名前がつきます。

02・なんかおかしいな展開に その13

「あんだ、いったい何者なんだ？」

新しく現れた白い髪の女の子が、ダイニングで俺とモノ軍団に囲まれている。

「ど、どうもあ、はじめましてえ。私、お風呂の、スポンジです」

ちよつとおどおどしながら、その女の子はぺこりと頭を下げた。

また一人、増えてしまった。俺は頭を抱えるが、それでいなくなるわけでもない。

それだけならともかく、その、素っ裸だ。白い肌に、おっきなオツパイ、いい感じのヒップ、と、目のやり場に困ってしまうんだが、目が離せない。

その時の俺はよっぱどいやらしい目で見ていたのだろう、他の子達にじろつと睨まれて、後ろを向かされてしまった。

「なんであんだ、裸なんだよ。いきなりあたしらの頭を誘惑しようとかいうんじゃないだろうね？」

俺の後ろで、同じ女で、同じモノだったモノ軍団たちがその子につめよりはじめる。

「なんでって言われましてもあ、私、おフロに居たものですからあ。おフロに服を着て入るのは変じゃないですかあ」

「だからと言って、裸でうるうるされるのは困りますでしょう。私たちの主、将仁さんは、その、思春期真っ只中の若人わかくらなのでしよう」

「テルミお姉ちゃん、その言い方、お兄ちゃんがすごくエッチな人みたいだよあ」

「そんなのどうでもいいだろ。そんなことより、どうすんだよこいつ」

「と、とにかく、何か着せなければならぬでしょう」

「何かって、どうするのよお、着せるものなんてないよお？」
なんか、着る物についてもめているらしい。そういえばこいつら、
着替えとかはどうしているんだろうか。俺は男だ、女物の服なんか
持ってない。もちろん下着なんか余計に持つてるわけがない。
しょうがない。」

「ほれ」

俺は、もう一度タンスのところに戻り、あるものを引っ張り出し
て来た。そして戻ったところでソレを投げてよこした。

私服の色物カッターシャツだ。

「と、とりあえず、それ、着てる」

そしてすぐ後ろを向く。そのまま見ていると何を言われるかわか
ったもんじゃない。

「ほう、将仁さん、優しいですっ」

「いいなあ、お兄ちゃんのシャツっ」

そしてそのシャツを羽織らせたところで、前を向くことを許され
たんだが。

その白い髪の子が、さっき渡した俺のシャツを羽織っており、な
んというか、エロい。この子のスタイルの良さはさつき風呂場で見
たので知っているんだが、それがシャツ一枚で隠されている姿は、
もう、アレだ。色々想像してしまい、下手なAVなんか目じゃない
ぐらいエッチだ。

またいやらしい目つきになったようだ。その子がぽつと顔を赤ら
め、ケイは羨ましそうに指をくわえ、テルミがじろっつと非難する
ような目で俺をにらんでいる。ヒビキは額に青筋を立て、面白くな
さそうにそっぽを向いている。

「あ、あのお、将仁さん、お願いが、あるんですけどお」

「な、何かな」

うっ、いかん、声が上がっている。

「あ、名前か」

するとその子はごくごくとうなずいた。

「んー……………」

フロ。スポンジ。せっけん……………ソープランド、ローション……………って違う！

泡。フロ。洗う……………アワ踊り、ボディ洗い……………って、その考えから離れる俺！

でも、そういえば俺、この子を使って、体を洗っていたんだよね……………でへ。

「お兄ちゃん？」

ケイに冷たい声をかけられて、現実には引き戻された。

「う、ご、ごめん」

まずいますい、このままでは嫌われてしまう。自分の頬を貼って気合を入れなおして考えた。

スポンジ、石鹸、泡、フロ……………バスルーム、バス……………

…ん？

「そうだ、クリンだ、クリンにしよう」

結構いいかもな、と思ってその子を見たんだが、その子はぼかんとしている。

「あ、あれ？イヤか？」

ちよつと不安になってしまう。入浴剤のバクリンから取ったのがまじったのか？今まで、名前つけたときにイヤと言われなかったから、けっこう自信があったのに、もしかしてホントは俺がつけた名前ってセンスないのか？

「……………あは」

俺が思わず他のモノ軍団に聞こうかとしたとき、目の前で、その子が笑った。

「クリンですねえ、かわいい名前をありがとうございますっ」

よかった、嫌われたワケではないみたいだ。にしても、自分のことなのにすぐ反応しないとは、なんというか鈍いなオイ。

「気に入ってくれたんならいいや。よろしくな」

「はい、よろしくお願ひしますっ」

そしてクリンはぺこりと頭を下げた。その瞬間、彼女の胸の谷間が俺の視界に飛び込んでくる。

「おおっ、と思った瞬間、目の前が真っ暗になった。

「もう、ダメっ!」

ケイがぶら下がっているらしい。後ろに引つ張られてこけそうになるのをぎりぎり踏ん張ったが、おかげで目が痛い。

「まあ、これからよろしく頼むわ。あ、あたしゃヒビキ、元オフロードバイクだ。よろしくな」

その闇のむこうで、ヒビキの声がする。また、肩とか組んでいるんだろうか。

「元プラズマテレビの、テルミです。これから、一緒にがんばりましょう」

「はい。こんな私ですけど、皆さん、よろしく願いしますう」
そしてにぎやかな笑い声が上がった。

02・なんかおかしな展開に その13（後書き）

どうも、作者です。

ふんわりスポンジ娘にやっと名前がつけました。

彼女はこれから真田家の中でエロとドジを振りまいていく予定です。もともと、年齢制限が入っていない場での公開なので限界はありませんがw

次は、01のラストで出てきた謎(?)の2人の再登場です。

02・なんかおかしな展開に その14

「ふむ……」

重厚なデスクの前で、一人の青年が何かの書類らしい紙を見ている。

そこには、とある人物のプロフィールが記されている。

「真田将仁、児童養護施設出身。11年前に真田祥太郎・松子夫妻に引き取られ養子となる。家族構成はその両親と、兄が一人。ただし今は通学に都合がいいよう一人暮らし。」

県立扶桑第一高校に在籍、成績は比較的優秀、陸上部に所属し棒高跳びでは県大会のレコードホルダーである」

その紙にかかっているであろうことを、青年は鋭い目で追いながら読み上げる。そして一通り読み終わったところでその紙を無造作にデスクの上に投げ出した。

「なるほど、いかなる書類を探っても、こいつと西園寺家とのつながりは出てこない。まったくの赤の他人だから、見つからなかったというわけか」

「はい。それを探し出すとは、敵ながらあっぱれですな」

青年の横に控えていた執事服の老人が答えるが、青年は腕を組んで何やら考え事をしている。

「力の顕現は」

「報告によりますと、今朝、真田将仁が住まう集団住宅の駐輪場で、それと思しき現象が確認されたとのこと。また、未確認の情報ですが、昨日の夜、駅付近の路上で謎の発光現象が確認されています。おそらくこれも顕現のひとつではないかと」

「……となると、この男が西園寺の血を引くことはほぼ確実ということか」

「はい、さようで」

老人の回答を受けると、青年は疲れたような表情になり大きく伸

びをした。

「面倒なことだ」

そしてはき捨てるように言い放つ。

「遺言書には、物部神道の力を有する者が遺産相続の資格を有するとある。それを見つけてしまった以上、常盤はこの真田将仁という男に相続させるための動きをとるだろう。額が額だから、1日やそこらで手続きが完了することはないだろうが」

そして、青年は先ほど投げ出した書類に視線を落とす。

「こいつも、死んだ人間の遺志に踊らされるといふわけか。しかも、血のつながりがあるとはいえ、生まれて一度も会ったことがない、存在すら知らなかった奴に」

気の毒にな。青年は最後にそうつぶやき、自嘲気味に笑う。

「まあいい。俺は俺のやるべきことをやるだけだ」

そして顔を上げると、青年は老人に向き直る。

「今後はこの真田将仁も監視しよう。こいつの顔写真を渡しておけ。それから、常盤がこの男にどうアプローチするかも続けて監視するように」

「確かに、あの者は相続の立会人も兼ねておりますからな。承知しました」

老人は、青年の言葉を受け、深深とお辞儀をすると、すっと闇の中へと消えていった。

「死んだ人間に踊らされる、か」

それを見届けてから、青年は大きな椅子の背もたれに寄りかかった。

「それは、俺も同じか」

そして、再び大きく息を吐いた。

02・なんかおかしな展開に その14（後書き）

どうも、作者です。

黒幕が、動き出したようです。

ちょっとしか登場シーンがないこの2人ですが、だんだんと絡んでまいりますので、良ければ気にかけておいてください。

03・そして何かが動き出した その1

9月16日 土曜日

昨日、寢床に入ったのが早かったせいかもしれないが、なんか、早く目が覚めた。

昨日と違ってとても楽な感じがする。枕が替わったら寝られないなんて繊細なことは言わないが、やっぱり、床で寝るよりはベッドのほうがいい。

「ん？」

なんだこりゃ？俺の横の毛布がふくらんでいる。これは確かに、ベッドの中に何かある。というか何かいる。

おそるおそるめくってみる。そして、思わず声を上げそうになった。

「すう………ん……すやすや………」

窮屈なほどに体を丸めた子が、俺のベッドの中ですやすやと寝息を立てていたのだ。

ケイだった。………って、なんで俺の布団に入っているんだこいつはっ！

というか、入られたのに気づかなかった俺もかなり疲れているんじゃないだろうか？

起こしたら騒ぎになりそうなので、なるべく音を立てないようにそーっとベッドから出る。

ふと、その視界の端に何か黒いものが見えた。足音を忍ばせてその黒いものに近づくと、その物体はまるで呼吸するように膨らんだり縮んだりしているのが判った。

それは、いつも羽織っているマントにくるまり、古雑誌を枕にして眠っているテルミだった。このマントって、こんな使い方もあるんだなあ、と違ってしまったが、これから寒くなるんだからそれじ

や風邪ひくんじやないだろうか。

「……って、こいつら、風邪ひくのか？」

考えるとまた判らなくなってくるので、起こさないようにダイニングへと移動する。

「んがががが……ぐお……」

すると、ブルドーザーのエンジン音のような異様な音が聞こえた。なんだ？と思ってその音がするほうを見ると、赤い人影が、玄関に片足を突っ込んだ状態でエンジン音のようないびきを上げて、大の字に寝転がっている。

「……ヒビキって……」

オフロード仕様だからワイルドなのはまあわかるが、ここまでガッツでなくてもいいだろ。一応、女の姿しているんだから。

にしても、あんなびっちりしたライダースーツを着て、窮屈じゃないんだろ？と心配になってしまふ。

とりあえず、顔を洗うために洗面所に行く。

ばしゃばしゃと顔を洗い、タオルで顔を拭いた、そのとき、浴室へのドアが目に入った。

横にある脱衣籠には、昨日の洗濯物のほかに、俺の色物シャツが入っている。

「昨日、クリンの奴、風呂場に戻ったみたいだけど……」

「ちょっと気になって、浴室のドアを開ける。」

すると、クリンはそこにいた。それも浴槽の中で、きのうの残り湯の中にぶかぶかと浮かんで、口を半開きにして寝ている。

一瞬、溺死体のように見えてしまったが、近づくとちゃんと息はしていた。そして、その下には、毛布か何かのかわりなんだろうか、タオルが浮かんでいるが、その下からあの結構なサイズのオツパイが2つ、浮き袋のようにタオルを押し上げている。

湯船にタオルを入れるのはダメなんじゃなかったかな、なんてしょーもない事を考えながら、俺は浴室のドアをそっと閉めた。

「はあ、どうするよ、俺。夢ならいい加減覚めてほしいんだけどなあ」

ゆうべは夢の中で寝てまた夢を見た、というおかしなことになるのはこの際考えないことにする。

俺は、洗面台の鏡に映る俺の姿に、思わず愚痴をこぼしていた。

なにしろ、1DKトータル8畳ほどの俺の部屋に、4人もの女の子が寝泊まりしているのだ。部屋も狭くなるし、なんというか、立場がない。

そういえば、なんで女ばかりなんだろう。りゅう兄のセリフではないが、考え方によっちゃ確かに男の夢、ハーレムな世界ではあるが、この狭い1DKではそれにも限度がある。

「だいたい、女には言えないことも、見られたくないことも、男にはあるんだって」

鏡に映る自分の姿に語りかけてしまうと、どうやら、俺、本格的に疲れているらしい。

「な、お前もそう思うよな？」

そしてそれとなく伸ばした手が、その鏡に触れた瞬間。

きいいいいいん、と、甲高い、耳鳴りのような音が聞こえた。

そして、真っ白な光が俺の視界一杯に展開する。

「またか　　っ！」

まだみんな寝ているにも関わらず、俺は叫んでいた。

03・そして何かが動き出した その1（後書き）

どうも、作者です。

ようやっと3日目になりました。

そして主人公氏は3日目の朝っぱらから騒ぎを起こしていますw
さて、本作のラストの光景からのご想像通り、次は鏡の擬人化の登
場です。

もしかしたら、読者の方々の予想を裏切っているかもしれません。
請うご期待！

03・そして何かが動き出した その2

あまりにまぶしすぎる真っ白な光に、俺は思わず自分の目をおおっていた。

またやってしまった。というか、何がきっかけで発動するのか未だに分からないこの力は、動き出してしまったらどうしようもない音が収まったのを確認してから、俺は目を開く。

洗面台の、俺が映っていた鏡がなくなっている。これは何となく想像できた。多分、また擬人化したんだろう。

ふと、右に人の気配があるのを感じ、俺はそっちを見た。

俺が立っていた。

眉をひそめて顔を突き出すと、そいつは同じように眉をひそめて顔を突き出す。

改めて向き直ると、そいつも同じように俺に向き直る。バンザイをするとそいつもまったく同じようにバンザイをする。大根踊りをするるとそいつも同じように大根踊りをする。

「なんだ、鏡か」

そう言いながら目をそむけると、そいつも同じようにそっぽを向く。本当に鏡のようだ。

と見せかけてすばやくファイティングポーズを取る。すると、そいつも同じようにファイティングポーズを取った。あくまで真似する気か。

だがこいつは真似出来まい。

「シュツッ！」

「ぶがっ!?!」

その瞬間、今まで俺と同じことをしていたそいつが、軽く吹っ飛んだ。俺のジャブを食らったのだ。自慢じゃないが、俺、パンチの早さには自信がある。なにしろ、週一でボクシングジムに通っている身だ。兄貴にケンカで勝つための手段として、兄貴がやったこと

のない、そして殴り合いになった時に強いといわれるボクシングを選んだからだ。

「つててて、将仁さん、いきなり殴って来るらなんてひろいりやないスカ」

そいつは、すつ転んで鼻を押さえている。さすがに風呂場で本気でやったことはないの、知らずにモロに喰らったようだ。

「それは悪かったけど、でもお前だつて構えただろ。一応、聞いておくけど、お前……」

「そうっす、俺は、鏡の擬人化っすよ」

俺とそっくり、というか同じ姿なそいつは、顔の真ん中を軽くさすりながら立ち上がる。幸いにも、鼻血が出るほどのダメージではないようだ。

それにしてもこいつ、声が低い。結構体格もいい。ぶつちやけて言えば、ぱつと見は俺だ。

やっぱり、男なのかな？

「ひとつ、聞いていいか？お前、男か？」

「男かって、見たとおりっすよ。そう見えないですか？」

「あ、いや、今まで擬人化したのが、みんな女だったもんだからさ」

いきなり殴つちまった相手にこんなことを言うのはなんだが、実はちよつとほつとしていた。りゅう兄が言っていた独占ハーレム状態は無くなったが、俺はそれ以上に強い味方が得られたような気がしていた。なにしろ、初めての同性だ。異性には判ってもらえないような事にも、理解を示してくれるだろう。

「殴つたりして、悪かったな。鏡介」

「いや、俺も悪ふざけが過ぎました……つて、え？鏡介？」

「ああ、お前の名前だよ。よろしくな、鏡介」

そして俺は、右手を差し出した。

鏡介という名前は、鏡の擬人化を見た瞬間に、すつと浮かんでき

「お、お、お、お兄ちゃんが、増えてるううう！？」

ケイのその発言が、家人たちの驚き具合を能弁に語っている。

無理もない。鏡介との経緯は、俺しか知らないんだ。

というわけで、俺はみんなに鏡介のことを紹介しなきゃならなくなった。そしてその時、人が増えることに抵抗があまり無くなってきている自分に気づき、ちょっと悲しくなった。

03・そして何かが動き出した その2（後書き）

どうも、作者です。

鏡の擬人化にして初の男性擬人化、真田家のミラーマン、鏡介の登場です。

女性を期待していた方、ごめんなさい。

鏡からもう一人の自分が出てくる、というのはどっちかといえばホラーな作品に見られるネタですが、この真田家ではそんな雰囲気にはならなそうですw

次回は、鏡介と先輩擬人化たちとの顔合わせです。

乞うご期待！

03・そして何かが動き出した その3

「どうも、鏡の擬人化、鏡介つす。よろしくお願いします」

「へえ、鏡なんだ。ケイは、携帯電話の擬人化、ケイだよ。よろしくね鏡介お兄ちゃん」

「プラズマテレビの擬人化、テルミです。よろしくお願いしますでしょう」

「あたしはオフロードバイクの擬人化、ヒビキだ。よろしく頼むよ」

「浴用スポンジの擬人化、クリンですう。同じお風呂で使われるもの同士、仲良くしましようねえ」

そんな中、初めての男性陣追加を、俺は、なんとなくだが心強く思っていた。

「うっわ、ヤバいつ！」

だが、ふっと時計を見た俺は、非常にまずいことに気がついた。

いつもなら家を出ている時間を、とつくに過ぎていたのだ。今日は土曜日、週休二日制の公立高校は本来授業はないんだが、うちのクラスは土曜日に半日の補講があるのだ。

しかも、名前は補講だが、実際は普通の授業と何ら変わりが無く、休んだら他の授業と同じように減点がつく。だから休むわけにはいかないのだ。

全員がダイニングにそろっていることを目ですばやく確認し、自分の部屋に駆け込み、大急ぎで身支度をする、一目散に玄関にダッシュする。

こう言うてはなんだが、俺は高校に入ってからまだ無遅刻無欠席なのだ。こんなところで、こんなことで、遅刻する訳にはいかない。

「ああっ、将仁さん、ご飯は!？」

「ごめん時間がないっ！」

それだけ言い残し、俺は家を飛び出した。

はあ、昨日に続いて今日も飯抜きだよ。また、午前中はボーっとして過ごすんだらうか。

だが、せめて遅刻だけはするまいと自分に言い聞かせ、足を動かすことにした。

03・そして何かが動き出した その3（後書き）

どうも、作者です。

今回は鏡介の顔合わせです。

擬人化したちから見ても男の擬人化は珍しいみたいです。

次も鏡介の顔合わせですが、さて、鏡介君はどうなるんでしょうかw
乞うご期待！

03・そして何かが動き出した その4

「…………お兄ちゃん、最近、冷たいよう」

将仁が出て行ったドアを、指を咥えたままじーっと見つめ、ケイがぼつりともらした。

「いつも、外に行くときは必ずケイのこと連れて行ってくれているのに」

「小さい子供じゃないんだからそんな駄々こねるんじゃないよ、ケイ。あたしなんてな、将仁と最後につきあったの、もう一ヶ月以上前なんだぞ?」

「きゃ~~~~~っ、いたいたいいたいよヒビキお姉ちゃん、そこはアンテナだからダメっ、離してえっ」

ケイがヒビキにヘッドロックされて悲鳴をあげる。

「本当に、将仁さんにそっくり。さすがは鏡の擬人化さんでしょう」

「はうう、このへんの筋肉のつきかたとかまでそっくりです」

その一方で、テルミとクリンがものめずらしそうに鏡介の体をぺたぺたと触りまくる。

「ちょ、や、やめてくださいよ」

そう言いながらもまんざらでもない様子の鏡介。

「ふえーん、鏡介お兄ちゃん助けてえ」

そこに、ヒビキのヘッドロックを抜けたケイが飛びついてくる。

「改めて見ると、将仁って、あたしより背が低かったんだな」

一人残されたヒビキが、鏡介の横に並んで肩を組み、そして見上げる。

男一人を、女性陣4人がおもちゃにしている感じだ。でも鏡介はちよつと嬉しそうだ。

だが、反撃なんだろうか、その一人を見ながら、こう言った。

「あのさ、その格好、ちよつと、刺激的すぎるよ、クリンさん」

その瞬間、他の3人の視線もクリンに注がれる。

無理もない。なにしろクリンはバスタオルを巻いただけの姿なのだ。昨日のシャツを羽織っただけのそれに劣らない、欲情をそそる格好である。

「うーん、これは、ちょっと困りましたでしょう」

「将仁と同じってことは、やっぱり欲情するだろうしなあ」

「ちよつとお、みんな、お兄ちゃんのことひどく言いすぎだよ」

「でも、その格好は本当に刺激的すぎっスよ。俺だって変な気になる」

「そんなことを言ってもお、着る服なんてないですよ」

そして、5人は考え込んでしまう。

沈黙がその場を包んだ、そのとき。

「ん？」

ケイがはつと顔を上げる。そして。

「電話だつよー、電話だつよー。どうするーのー、でーるうーのー？」

着信音である某大泥棒3代目のテーマに乗せて、歌いだした。

「誰からだよ？」

「弁護士ーのーとーきわーさーん、どうするーのー、でーるのー？」

「弁護士って、なんでだ？将仁さん、何かやったんスか？」

「違います、西園寺という家の、遺産相続者が将仁さんでしょう」

「ねえはやーくー、きーめてーよー、とーきわーさーん、まってるーよー」

ケイが、歌いながら、ちよつとイラついた様子を見せる。

「分かったよ、出ようぜ」

ヒビキが返事すると、ケイが一度頷いた。と同時に、瞳の色が鳶色から水色に変化する。

「もしもし？将仁さんですか？弁護士の、常盤です」

その瞬間から、ケイの声が変わった

「いえ、将仁さんは学校でしょう」

「ああ、その声はテルミさんですね。どうですか、そちらの様子は？」

「あれ、ケイちゃんの声が変わった？」

「そう、ですねえ。電話だから、でしょうか」

「あら、新顔さんがいらっしやるみたいですね」

鏡介とクリンの会話が聞こえたのだろう、電話のむこうの常盤弁護士がそう問いかけてきた。

「あ、ど、どうも、こんにちは、はじめまして。えーと、鏡介といます」

「はじめましてえ、クリンですう」

「はじめまして、鏡介さん、クリンさん」

そこで、思い出したように、電話の向こうの常盤弁護士が口をはさんだ。

「そうですね、皆さん、今、将仁さんの家に居るんですか？」

「ああ、いるよ。擬人化した奴は全員な」

「それは好都合です。今から、そちらにお伺いしてよろしいでしょうか？」

「いいぜ。今から来るのかい？」

それに、ヒビキが答えた。誰にも相談なしで。

「ひ、ヒビキさん!？」

「ちようど、あたしもあなたに聞きたいことがあったところだ。待ってるよ」

「分かりました。では、さっそくそちらに伺います。それでは失礼します」

「あつ、ちよつと、待ってほしいでしょうっ、もしもし!」

「ちん。切れちゃった……」

目の色が鶯色とよに戻ったケイが、残念そうに言葉を口にする。

「もう、ヒビキさん、勝手に話を進めないでほしいでしょう。ちよつと目を鋭くして、テルミがヒビキを睨みつける。」

「ヒビキさん、俺だつて聞きたいことがあつたんよ」
鏡介も、ヒビキを同じように睨む。

だが、ヒビキはどこ吹く風といった様子だ。

「心配しなくても、あつちが来るつて言っているんだから、待つてればいいだろ？」

「あうう、どんな人が来るんでしょうかあ」

クリンが、ちょっと不安そうな顔をしてみせる、が。

「……………やっぱり、その格好はまずいんじゃないスか？」

「……………うん、ケイもそう思う」

鏡介とケイが、バスタオル1枚で正座するクリンの格好を見て、しみじみと言う。

「あうう、そんなしみじみ言わないでくださいよあ」

さすがのクリンも、ちょっとへこんだようだった。

きんこーん。

そんな話をしていると、早くも家の呼び鈴がなった。

03・そして何かが動き出した その4（後書き）

どうも、作者です。

先輩擬人化たちにいじりまわされる鏡介くんの図、と思いきやなぜか常盤弁護士まで登場します。

が、今回はそれとシーンが変わって主人公の学校シーンになります。乞うご期待！

03・そして何かが動き出した その5

そのころ。

「よう、マサ。昨日はずいぶんと豪勢じゆうせいだったみたいだな」

学校に行った俺は、休み時間にいきなりヤジローのやつに冷やかされることになった。

「ん？あ、ああ、兄貴が来てさ。メシおごってやるからつきあえ
って」

「へー、いいよなお前の兄貴って弟思いでさ」

それは違うと思う。弟思いだったら出会った瞬間にこっちの頭が痛くなるまでヘッドロック&グリグリはやらかさないとと思う。

「だってよ。あの子らってお前の兄貴の知り合いなんだろう？」

「は？」

なんか、話が俺の想像してたものと違う。あの子ら？

「お前の兄貴って守備範囲広いよな、ロリっ子から年上まで。

うらやましいよ、俺にもそんな兄貴がほしいぜ」

そう言われた瞬間、俺は背筋が寒くなった。

そいつらは違う、人じゃないんだ、と言いつつになるのを懸命にこらえる。

「もしかして将仁、紹介されたんじゃないか？」

「なになに、何の話？」

「へー、将仁クンにもついに春が到来ってやつ？」

「いやいや甘いな、こいつに春が来るのは絶対に俺の後だって」

なんか、クラスメイトの間に、俺の心配をよそに変なほうに話が膨らんでいる。所々おかしな中傷が混じっているが、そこはあえて聞き流すことにする。

おかげで、ちよつとの間だが言い訳をひねり出す時間が稼げた。

「こら待てお前ら、勝手なこと言つなよオイ」

「でもなあ、俺見たぜ？お前とお前の兄貴が3人の女連れて焼肉

屋に入っていくの」

「なんでそういう発想しかできないんだお前は。その3人は俺の親戚なの。近くに引越してきたっていうから顔合わせしただけだって。あ、兄貴はその引越しの手伝いしてだな」

だが、そう言いながらも、心の中では冷や汗を目いっぱい流していた。なにしろ全部が俺一人で組み立てた嘘だから、これ以上突っ込まれたら誤魔化し切れる自信はない。

だが、俺が断言した瞬間、クラス中にしらけた雰囲気広がった。

「なんだ、つまんねえの」

「そうだよなー、歩く朴念仁にそんな甲斐性かいせいないよなー」

なんかひどい言われようだが、それでも俺はひとまずごまかせたことにほっとしていた。

あとは。

「なー、親戚ならさ、一人ぐらい紹介してくれよ。俺たち友達だろ?。」

しぶとくたかってくるヤジローをどうやってごまかすか、だった。

03・そして何か動き出した その5（後書き）

どうも、作者です。

今回は主人公の学校での1シーンです。

必死になって隠そうとする主人公をお楽しみください。

しかし、こういうシチュエーションになると、たいがいの人はそれを隠そうとしますが、なんでなんでしょうねw

次回はまた家に戻ってまったりした時間が流れます。

03・そして何かが動き出した その6

「それじゃ、行ってきまーす」

「ヒビキさん、クリンさん、留守番、頼んます」

そして、玄関のドアが閉められる。

「さてと」

くるっと玄関に背を向けたヒビキは、そのまますたすたとキッチンのほうへ歩いていく。

「やっぱり何も無いよなあ」

そして、冷蔵庫の中を見て改めてがつくりする。

「ヒビキさん、さっきあんなに食べたのに、もうおなかすいたんですかあ？」

「あー、いや、別にそういうわけじゃないけど、ガス欠にならないよう確保は必要かなってね」

「ふうん、ヒビキさんはあ、食いしん坊さんなんですなあ」

「そう言わないでくれ、燃費の悪さはあたしだって自覚してる」

ちよつと苦笑しながら、ヒビキが冷蔵庫を閉めた。

ケイ、テルミ、そして鏡介は、電話の後で本当に来た常盤弁護士に率いられ、日常消耗品と、クリンの服を買いに行っている。

もとはといえば、クリンが「自分の服を一切持っていない」ということから、下着ぐらいは要るだろうという話になったのが始まりだった。そこから「石鹸や歯ブラシなどの消耗品を揃えよう」「外食は金がかかるから、自炊できるよう食料を買い入れよう」などという話になり、そしてそれらをまとめて買出しに行くことになった。なんだかんだと言っても、真田家モノ軍団はあまり家の外のことを良く知らないため、引率と財布も兼ねて、常盤が彼らを案内することになった。

そして着る服が無い以上、クリンは外を出歩くことができない。

鏡介は男なので、裸のクリンと一緒にすると危ないということで買

出しに駆りだされた。そして「外に行きたい」と主張しまくったケイと、金銭感覚がある程度しつかりしていそうなテルミが行くことになり、この二人が残ったのだ。

「さてと、することもないし……どうするかね」

「テルミさんも行っちゃいましたからあ、テレビも見られませんか」

「昼前にはみんな帰ってくるって言うってたし、今日は土曜日だから将仁も午後になりや帰ってくるし……留守番ってのもめんどくさいもんだね」

そして、ヒビキは暇そうに大きなあくびをする。

「あ、そうだあ。ヒビキさん、お風呂掃除、いつしよにしませんかあ？」

思い出したように、クリンが口を開いた。

「フロ掃除い？なんでまた」

「だあってえ、お風呂は私のいた所ですからあ。それに、将仁さんが一日の疲れを、体の汚れと一緒に落とすところですよ、綺麗にしておきたいじゃないですかあ」

ちよつと照れくさそうに、クリンは自分の頬をぽりぽりと掻いた。

「悪いけどあたしや遠慮しとくよ、二人じゃ狭いだろ」

「あはは、そういえばそうですねえ」

そして家をきよるきよると見回してこうつぶやいた。

「でもあ、将仁さんも大変ですよねえ。今まで一人暮らしでしたのにい、いきなり5人も増えちゃったんですからあ」

「うーん、そうだなあ、こう言っちゃなんだけど、あまり広くないもんなあこの部屋」

「そうですねえ、私ももっと広いお風呂で洗って差し上げたいですよ」

「……ちよつと待て、クリンお前、そんな姿になってまだ将仁と一緒にフロ入る気か？」

「えっ!?!? あ、あはは、じよ、冗談ですよあ、あはははあ」

「……お前、さっきマジだったろ」

「はづう、そ、そんなこと言っていじめないでくださいよう」
「どうやら、本音を漏らしてしまったらしい。ちよっとの沈黙の後、
クリンは思いつきり突っ込まれていた。」

03・そして何か動き出した その6（後書き）

どうも、作者です。

ヒビキとクリンのキャラがなんとなく判るような話かな〜と思って
います。

今まで書いていみせんでしたが、作品に対するご意見・ご感想など、
お待ちしております。

次は、主人公と合流です。

乞うご期待！

03・そして何かが動き出した その7

「うん？」

買出しの帰り、買ったばかりのナップサックを背負って歩いていたらケイが、突然立ち止まった。

「ケイちゃん、どうしたのかしら？」

手に買い物袋を提げた常盤が声をかける。

それに対し、ケイは振り向きもせず立ったままで、ぼつりところ漏らした。

「…………お兄ちゃんだ」

「お兄ちゃん？ってことは、将仁さんかい？」

両手に買い物袋を目いっぱい下げた鏡介が声をかける。

「うん！お兄ちゃん、絶対に近くにいる！」

ぴよんぴよんと飛び跳ねながら断言する。

「ひそひそ、なんで断言できるんでしょう？」

「GPSでもついているんすかね？ひそひそ」

フランスパンが顔を覗かせた大きな紙袋を抱えたテルミと、両手に買い物袋をぶら下げた鏡介がひそひそと話し合う。

「ふむ、これは面白いですね」

その様子を眺めていた常盤がちよつと楽しそうにつぶやいた。

「ケイさん、本当に将仁さんの居場所が分かるのですか？」

「うん！ねねね、お兄ちゃんのところ行ってもいい？」

今にも飛び出しそうに、ケイがぴよんぴよんと飛び跳ねる。

「それは、確認してみる必要がありますね」

常盤も興味を持ったらしい。

「皆さんも、確認してみますか？」

「いや、俺はいいです。早く帰って荷物降ろしたいんで」

「私も遠慮しておきましょう。生ものは早めに冷蔵庫に入れないと悪くなってしまうでしょう」

というわけで、ケイと常盤は下校途中の将仁のところへ向かい、鏡介とテルミは家に帰ることになった。

03・そして何か動き出した その7（後書き）

どうも、作者です。

ケイがなにやら規定外な力を発揮しはじめました。

平和でいいですねえ。

この次は、ヒマをもてあましたヒビキが主人公の部屋を探り始めます。一体何を見つけてるのでしょうか。

乞うご期待！

03・そして何かが動き出した その8

「ふわ〜ああ、ホントヒマだな」

クリンが風呂場に消えていって、いよいよヒビキは暇をもてあましてきた。今まではエンジンをかけられなければ動けなかっただけで、元々動き回るのが好きな彼女にとってはじっとしているのは苦痛なだけである。

とはいえ留守番を引き受けてしまった以上、外出してしまうわけにもいかない。

「なんかねえかなあ、暇つぶしになるようなもん」

そして、ヒビキは将仁の部屋に何のためらいも無く入った。

「んー、なんだよ、マンガとか無いのかよ、全く」

まず目をやったのは本棚だったが、たった一つの本棚は問題集と参考書と、趣味のラジコンの本でいっぱいだった。

「なんだあいつ、バイクの本が一冊もないじゃないか。後でじっくり問い詰めてやる」

その本棚の一冊を取り出し、ぱらぱらと中身を眺めたヒビキは、その本をばいと部屋の隅に放り投げた。

「ありゃ、ハズレか。どっか別の所に隠したか？」

何を期待したのかベッドの下をのぞいたヒビキだったが、そこには埃ぐらいしか見当たらず、期待したお宝は影も形もない。

「ん？なんだこりゃ？」

次に、部屋に備えられたクローゼットを開けたヒビキは、その中に水色と白の分厚い板のようなものが放置されているのに気がついた。

引つ張り出してみると、それはノートパソコンだった。

「ふーん、あいつ、パソコンなんか持ってたんだなあ」

そしてなにげなくそのノートパソコンを開きスイッチを入れる。

「ん？」

だが、電源が入らない。ひっくり返してみたが、うんともすんとも言わない。

ヒビキは知らなかったが、実は使われないでいた時間があまりに長く、内部のバッテリーまで切れてしまっていたのだ。すぐ横には接続用のACアダプタが転がっているのだが、少し前までバイクだったヒビキがその使い方など知るわけも無い。

こりゃ動かないんだ。そう判断したヒビキは、そのノートパソコンをもとあった場所に戻した。

そしてさらに暇つぶしの道具をあさる。

「あ、こいつか、この前将仁が飛ばしていたやつ」

ふと見上げたタンスの上に、ヒビキにも見覚えのある物体が乗っていた。

手にしてみると、それは全長40センチほどの、銀色のプロペラがついた、ラジコン飛行機だった。しかも、知る人ぞ知る、第二次世界大戦時の日本の名機、零式艦上戦闘機れいしきかんじょうせんとうき、通称ゼロ戦だ。

セスナでもいいだろうにわざわざゼロ戦にするあたりが渋い。深緑に塗り上げられた胴体と翼に、日本を象徴する真っ赤な日の丸がくつきりと描かれている。

「そんなに面白いのかねえ？」

そんなことを言いながら、ヒビキはぱちんとコントローラーのスイッチをオンにした。

実は、ヒビキがまだバイクの姿をしていたときに、将仁がそのラジコンを飛ばしているのを見たことがあった。見よう見まねでコントローラーをいじっていると、そのゼロ戦のプロペラが低いモーター音をあげて回り始めた。

03・そして何かが動き出した その8（後書き）

どうも、作者です。

モノ代表・ヒビキによる主人公の部屋の家捜しやさがしでした。

実は今回出てきた物の中に、後で擬人化するのがいます。どれが擬人化するか、予測してみてください。

今回は、買い物から帰った組と留守番組との間でひと悶着あります。乞うご期待！

03・そして何かが動き出した その9

「ふうー、重かったあ」

アパートのドアの前で、両手いっぱいになった荷物を地面におろす。

「鏡介さん、お疲れ様でしょう」

「エレベーターがあったからいいけど、さすがに5人分は重いわ。いっぺん測ってみたいね」

床に置いた買い物袋の中からペットボトル入りの烏龍茶を出してごくごくと一気飲みする。

「ただいま帰りましたでしょう、ヒビキさん、クリンさん、手伝ってもらえないでしょうかー」

紙袋を片手で抱え、テルミがドアを開けた。

その瞬間。

「ぶはあっ!?!」

床におろした荷物を持ち上げようと、身をかめた鏡介の顔面に何かが飛び込んでぶち当たった。その衝撃で鏡介は後ろにひっくり返った。

「き、鏡介さん!?!」

「あー、わりいわりい、大丈夫かい?」

目を丸くするテルミを尻目に、中からそんな悪びれた様子も無いヒビキが出てきた。

そして、鏡介と衝突した後にそのまま動かなくなったそれを拾い上げる。

「やっぱり、ラジコンは部屋の中で動かすもんじゃないねえ」

それは、さっきまでいじっていたゼロ戦のラジコンだった。

「つてえ……」

「ひ、ヒビキさんっ、あなたは一体何をしているんでしょうかっ
「!」

「いやあ、あまりにヒマだったもんでさあ」

「だからって、人にぶつけることはないじゃないスか。俺、傷がつくぐらいならまだしもまだ割れるのは嫌っすよ!？」

ヒビキに噛み付くテルミの横で、ラジコンが衝突した額を押さえながら、鏡介が起き上がる。

その手の下は見事に腫れていた。

「まあっ、腫れているでしょう、鏡介さんっ」

「わ、冷やせ冷やせ、あとはあたしがやっとかくから」

そして、ヒビキが鏡介の腕を引っ張る。

「うわあっ!？」

すると、まるでワイヤーアクションのように、鏡介の体が中にくっ飛んでいった。

03・そして何かが動き出した その9（後書き）

どうも、作者です。

なんか、鏡介が痛い目に遭っていますw

こういう、女性ばかりの中で男が主人公という話の場合、たいがい痛い目に遭うのは主人公なんですが、その身代わりってところでしょうか。

別に鏡介がキライだからこういう目に遭わせているのではありませんのでご理解のほどをw

03・そして何かが動き出した その10

「あー………ひどい目に遭った」

額に湿布を貼った鏡介が、しきりにその額をさする。そして、体の調子を見るように肩をまわす。

「だから、悪かったって言ってるじゃないか。お前男のくせにいやみったらしいぞ？」

さすがのヒビキも凹んでいる。バイクだったときに積んでいたエンジンの出力が今の姿になっても残っているようで、その馬鹿力の中で飛ばされた鏡介は、背中を壁にぶつけてしまったのだ。

「ヒビキさん、御自分の力ぐらい把握してもらわないと、こちらが困るでしょう。鏡介さんが粉々になってからでは遅いでしょう？」
テルミもちよつと冷たい目で見ている。

「今度買い物に行くときは、ヒビキさんに物を持ってもらいましよ」

「わ、分かったよ、怪我させたのは反省してる」

その一方で、鏡介は家の中をきよるきよると見回している。

「そっぴや、クリンさんは？」

その鏡介の一言で、テルミとヒビキもあつと顔をあげた。

「ヒビキさん、確かあなたと一緒に、お留守番していたはずでしょっ？」

「ああ、確か、風呂掃除するとか言って………出てきてない？」

その一言と同時に、3人の視線が一齐に洗面所の半開きになったドアに集中する。

「まさか、また風呂桶の中でプカプカ浮いたまま寝ているんじゃないか？」

「………ありうる。なんか静かすぎるし」

そして3人がそっぴやに向かうが。

「鏡介さん？中を見るつもりでしょうか？」

「へ？だつてクリンさんの中に」

「……………あのな、ここから先はフロだぞ？クリンがどんな格好していると思ってるんだ？」

というわけで鏡介は引つ込まされ。

「じゃあ、ヒビキさんお願いしますでしよう」

「へ？なんでだよ？」

「私は電子機器、ヒビキさんほど耐水性が無いでしょう」というわけでヒビキが洗面所に押し込まれた。

「つたく、しょうがないねえ」

一人洗面所に残され、ヒビキは一度大きく息を吐いた。

「おい、クリン、買出し組、が……………」

がらりと風呂場のドアを開いた。そして、そのまま固まってしまった。

目の前に、白い背中と白いお尻が揺れている。

それが、素っ裸のクリンのそれだと気づくのに、少しかかってしまった。彼女は、なぜか風呂場の床にはいつくばって、なぜか顔を床に近づけ、なぜか首を小刻みに首を上下に動かしている。

「……………うん？」

やっとヒビキの存在に気がついたらしく、クリンが頭を上げた。

そしてくるりとこちらを向く。

なぜか、クリンは舌を出していた。それも、普通ではありえないほど長い舌をだ。

「あらあ、ヒビキちゃん。ごめんなひゃい、気がつきませんでしたあ」

その舌を、掃除機のコードのようにしゅるんと口の中に引っ込めながら、クリンが口を開く。

「な、な、何してたんだお前！？」

「あ、はい、お風呂の床をお、きれいにしていましたあ」

「きれいにつて、お前、じゃあさっきのベロは何だよ！？」

「はい、ああするとお、手でするより綺麗になるって分かったんです」

「ああすると、って……」

その続きはあまり聞きたくないが、ヒビキの口はそう動いていた。

「舐めるんです」

あっけらかんと、クリンはそう答える。そこには嫌悪感も何も無い。

「お前……どこかの妖怪じゃないんだから」

「えええ？おいしいんですよあ？」

「……うえっ」

クリンの言葉に、ヒビキは思わず口を押さえてしまふ。どういう味覚をしているんだ、ヒビキは悪いと思いながらもそう思ってしまった。

それを頭から追い出すように、ヒビキは首をぶるぶるっと振る。

「そ、そんなことより、て、テルミと、鏡介が、帰ってきたからさ。一旦、出て来いよ」

「はあい、分かりましたあ」

クリンは、そう言ってバスタオルに手を伸ばした。

「下着は、これで、いいでしょう」

「はうう、ちよっと窮屈です」

「文句言つな、そのぐらい我慢しろ」

鏡介を締め出した部屋の中で、テルミとヒビキがクリンに着付けを行っている。ちなみに、男なので入れない鏡介は、その扉によりかかって、ヒビキが自分にぶつけたラジコンのゼロ戦を色々な方向から眺めている。

「それにしても、クリン。改めてみると、あんたの胸、けっこうあるねえ」

「そうですかあ？ヒビキさんはあ、背があるじゃないですかあ」

「やっぱり、フラットディスプレイだからでしょうか、お二人と比

べると、私の体ってフラットでしょう?。」

「そうか?別にそんなに気にするほどじゃないと思うけどな?。」

「テルミさんの場合はあ、メリハリがあるって言ったほうがいいですよ、ウエストも細いですしい。」

しかし鏡介も男、扉の向こうから聞こえる会話には思わず聞き耳を立ててしまう。

「なんだかなあ。」

自分がまだ鏡だった時に将仁に言われた言葉が、なんとなく分かってしまった鏡介だった。

03・そして何かが動き出した その10（後書き）

どうも、作者です。

今度は鏡介がハブられています。

何度も言いますが、別に作者は鏡介が嫌いなわけでは決してありません。

次はやっと主人公たちと合流です。

乞うご期待！

03・そして何かが動き出した その11

今日は土曜日、補講は半日で終わり。普段だったら午後はこのまま部活動へと向かうんだが、今日は、とうかここ数日部活動をやるような精神状態ではないので、適当なことを言っただけで部活を休み家に帰ることにした。

「お兄ちゃん！」

その帰り道、駅前通りを歩いていると、なぜか聞き覚えのある声
が、俺の耳に入ってきた。

「なんでこんなところまで？」と思いつつ、声が出た方向を見る。
がばつ。

すると、どこから現れたのか、その声の主であるケイが飛びかか
って来た。

「おかえりなさいっ！」

よける間もなく、ケイが俺の首根っこに抱きついてぶら下がって
くる。

「わ、ちょ、ちょっと、なっ」

「んもっ、お兄ちゃんついたらケイのことどこにも連れてってくれ
ないんだもん。だから出てきちゃったよう」

「こ、は、離せ離せ、まわり、まわり見ろ」

あわててそんな事を言ってしまう。

ぶら下がられるのは昨日経験しているからまだいい。だが、場所
が悪い。土曜日の昼の駅前通りは、人出が多いのだ。

そんな中であんな大声で「お兄ちゃん」なんて呼ばれて、あま
つさえ往来のど真ん中で抱きつかれた日には、当然のようにじろじ
ろと見られてしまう。

「お勤めご苦労様です。将仁さん」

そこに、違う人が顔を出す。

「うえっ、べ、弁護士さん？どこから湧い、じゃなくて、なんで

「……」

「ええ、ちよつと買い物に」

思わず失礼なことを言いそうになったのに、常盤さんは怒ることなく対応してくれる。ありがたい話だ。なんで買い物でこの二人が一緒なのかは別として。

「買い物、ですか？」

「はい。お宅の皆さんと話し合った結果、これから色々と要り様になりそうだ、という話になりましたので」

「ほら、みんなのぶんの歯ブラシだよ」

ケイが、買ったばかりの赤いナツプサックを開けて中身を見せる。中には何本もの未開封の歯ブラシと新品の歯磨き粉、そして俺が使ったことの無いマウスウォッシュなんかが入っていた。

「マウスウォッシュなんて、誰が使った？」

「あ、それクリンちゃんが好きって言ったの」

なんでそんなもんが、と思うが、まあ女の子のすることだから口出しは控えておこう。

そして、二人の持ち物を見たところで、俺はあることに気がついた。

「何か少くないですか？」

色々入用、と言ったわりには、荷物らしいものはケイのショルダ―バッグと常盤さんが持っているポリ袋1つしか見当たらない。まあ常盤さんは俺らと違うところに住んでいるから除くとしても、歯ブラシとマウスウォッシュだけってことはないだろう。

「ああ、他は、テルミさんと鏡介さんをお願いして、先に帰ってもらいました。中には生ものもありましたしね」

「へえ？」

なんとなく、男だから荷物もちをさせられる俺、もとい鏡介の姿が連想される。

「あいつも大変だなあ、俺が呼んじまったせいでこき使われているのか」

思わずかわいそうに思ってしまったのと同時に、俺でなくてよかったと思ってしまった。

03・そして何かが動き出した その11（後書き）

どうも、作者です。

ケイのブロンズぶりに拍車がかかってきました。

こういうのを書くにつれ、うちの携帯電話は私をどう思っているのか、とっても知りたくなってしまいましたな。

次回、久しぶりに新しいメンバーが加わります。

乞うご期待！

03・そして何かが動き出した その12

「ただいまー」

「おう、お帰りい」

ドアを開けると、ヒビキが出迎えてくれた。

中に入ると、買ってきた食料品を冷蔵庫にどうやって入れるかをああでもないこうでもないとやっているテルミ（ああしていると本当にメイドさんみたいだ）と、新しく買ってきたのであろう皿を洗っている鏡介の姿が目に入る。

クリンはどこに行っただらろう？と思っていたら、洗面所から、見覚えのあるジャージとTシャツを着て出てきた。ちよつと残念だ。こうして改めてみると、うちの中が本当に狭くなっただな〜と思うてしまう。

「引っ越しを考えたほうがいいかな、こりゃ」

「え？引っ越すの、お兄ちゃん？」

俺のつぶやきを耳ざとくケイがききつける。そして。

「ねえねえ常盤さん。お兄ちゃんが、引っ越したいんだって」

「あら、そんなんですか？では、心当たりを探っておきましょうか」

常盤さんまでがそのつぶやきに乗り気になっている。俺がまだ、簡単に引越しの資金が簡単に出せない、一介の学生であることを忘れてるんじゃないだろうか。いや、そのへんは出してくれるのかもしれない。

まあ、あまり気にしないほうがいいだろう。実際に引っ越すと決めたわけじゃないんだ。

「よう、将仁の奴が帰ってきたんだからよ、メシにしない？」

「ちよつと待ってほしいでしょう、もう少し片付けないと」

「んー、どれどれ」

そして、冷蔵庫の前に陣取る二人の後ろから覗き込んだ。

「うわ、こりやすごいな」

そして、中の様子を見てそう口にしてしまった。なにしろ、今までほとんど空っぽだった冷蔵庫の中が、食料品でいっぱいだったからだ。

うちの冷蔵庫は、3ドアタイプの大型冷蔵庫だ。とうてい一人暮らしで使うようなサイズじゃないのだが、実家のほうで冷蔵庫を買い換えることになったときに「古いのもまだ使えるからお前が使える」ということで持たされたシロモノだ。

古いと言っても、まだ5年ぐらいしか経っていないから十分すぎるぐらいに使える。うちのお袋曰く、モーター音が大きくて気になるんだそうだが、俺には別に気にならない程度だ。

「大丈夫なのかな、こんなにいっぱい詰め込んで」

二人の後ろから身を乗り出す。と無意識のうちに左手が冷蔵庫についていた。

「この程度なら大丈夫でしょう、逆に今までが少なすぎたのではないでしょうか？」

「確かに、さっきまではほとんど空っぽだったもんなあ」

「まあ今までそんなに入れる必要はなかったからなあ。今までが逆にやりがいが無かったのかもな、お前も」

と、そこまで言った瞬間。

「うっ!?!」

きいいいん。

あの耳鳴りのような音が、聞こえてしまった。

「やっちまつたー!ー!ー!ー!ー!」

そして、目の前が真っ白になっていく様を見ながら、俺は叫んでいた。しかも、今までと違い、俺以外に人がいる前で、だ。

当然ながら、その光の波を受けたほとんどは、悲鳴とも歓声とも取れる声を上げている。

そして、俺の手から、冷蔵庫の感覚がふっと無くなった。

03・そして何かが動き出した その12（後書き）

どうも、作者です。

すいません、新しい擬人化登場とっておきながら、登場する前で切ってしまいました。

次回にはちゃんと登場します。

乞うご期待！

03・そして何かが動き出した その13

「……………お、収まったか？」

恐る恐る、薄目を開ける。

視界が真っ白ではないことを確認した俺は、思い切って目を開いた。

冷蔵庫が、やっぱり消えていた。余程驚いたのか、目の前でその様を体験したテルミとヒビキが、ならんで床に座り込んでいる。

そして。

「お呼び出しいただき、ありがとうございます」

冷蔵庫のかわりに、真っ白な着物、まさに着物を着た女の人が、正座していた。色白で目元が涼しげで、癖がない黒髪を背中に流している。そしてその座り方も自然で、そのまま生け花なんかをはじめそうに見える。

雪女？と、本気で思ってしまった。

「私、ただいま擬人化いたしました、冷蔵庫でございます。将仁様、そして皆様。ふつつかものですが、どうぞ、よろしくお願いいたします」

あっけに取られる俺たちを目の前にしながら、その雪女？は三指をついて丁寧な頭を下げる。テレビでも見たことがないその仕草に、ちよつとどきりとしてしまった。

「さて、挨拶はこのぐらいにして、将仁くん」

ん？と思ったところで、その女の人は流れるようなしぐさで立ち上がり、こちらを見てにこっと笑った。

「な、何ですか」

「あなた、昨日、今日と朝ご飯を食べていないでしょう？」

「は？」

「朝ご飯は一日の前半のエネルギーを補給するためのものなので、摂らなければいけないわ。特に将仁くんは育ち盛りなのだし」

なんだなんだ？口調が変わったと思つたら、いきなり飯の講義が始まってしまった。

「私が来たからには、そのあたりはちゃんと管理しますからね。良いかしら、将仁くん」

「あ、は、はあ、お願いします」

そついい切られ、思わず頭を下げてしまふ。

雪女を連想させるこの冷蔵庫さん、ヒビキほどじゃないが意外に背が高い。俺と同じぐらいだ。着物を着ているので体のラインはよく判らないが、プロポーションは悪くなんじゃないだろうか。

「おにいちゃんっ！？」

「いでえーっ！？」

そんなことを考えたとき、なぜか俺はわき腹をケイに思いっきりつねられた。

「な、なにすんだよっ」

思わず手を上げそうになつてしまふ。だって俺はまだ何もしていない。

「ううう、だつて、だつて、だああつてえええ」

う、そ、そんな泣きそうな目で見ると、怒れなくなるじゃないか、まったくこの妹もどきは俺のあしらいばかりが上手くなりやがつてからに。

「あああああ、わかつたわかつた、泣くなつてば」

ケイの頭をなでてやると、ケイは目をうるうるさせながらも嬉しそうに笑つた。

03・そして何かが動き出した その13（後書き）

どうも、作者です。

前回、登場寸前で切ってしまった、クールな雪女冷蔵庫の登場です。最近の雪女キャラは、なんか「可愛い」のが多いような気がしたので違う方向を目指したのですが、どうでしょうが。

次は、料理談義をぶった雪女冷蔵庫の包丁捌きが公開されます。乞うご期待！

03・そして何かが動き出した その14

「さて、呼んでもらったお礼も兼ねて、お昼ご飯は私が準備するわ。構わないかしら？」

そんな俺の様子を横目に、冷蔵庫さんは遠慮なくそう言い放つてくれる。

「ち、ちょっと待って欲しいでしょう、この家の家事は、私の役目でしょう」

それに対し真っ先に反論したのは、テルミだった。なんか、本当は炊事洗濯掃除といった家事には一番縁遠い家電製品のテレビのはずなのに、メイドさんがすっかり板についた感じだ。というか、何故にメイド？と今でも疑問に思う。テレビで有名な某家政婦のごとく、うちの秘め事でも見るつもりなんだろうか。

「まあまあ、テルミさん。せつかく本人がやる気になっているのだし、ここは任せてもいいのではないかしら」

そこに助け舟をだしたのは、常盤さんだった。そして、常盤さんはテルミにそつとこゝろ耳打ちする。

「新顔さんの力量を測る、いい機会になるでしょ？」

だと。常盤さんって、以外に策士みたいだ。弁護士だからかな。

「そうそう、その前に、将仁くん」

ふと、その冷蔵庫だった人が俺に向き直る。

「物事には、順序というものがあると、思わないかしら？」

そして、じつと見つめてくる。

「きやあ!？」

と同時に、なぜか俺の横で悲鳴があがる。

見ると。なぜか鏡介（今でもまだ、「俺?」とちょっと驚くが）が、ケイの首と手を後ろから羽交い絞めにして押さえている。ケイのやつ、また何かやろうとしたんだろうか？

「将仁さん、名前、名前!」

はなしてよおっ、とじたばたと暴れるケイを押さえながら、鏡介が言葉を投げかける。

そして、それでやっとなを思いつくのかを思い出した。もう5回もやっているのにどうして忘れるかな、俺。まだ慣れていないんだな、これって。

「名前、って言ってもなあ、じゃあ冷蔵庫だからレイ」

「ぶーっ、それじゃケイと区別できないよお！」

鏡介に押さえつけられながら、ケイがすかさず反論してくる。言われりや確かに、ケイとレイだとほとんど同じだ。が、「冷蔵庫だからレイ」というのは、なんか響きがいいから生かしてみたい。

「じゃあ、レイコ、はやめて、レイカはどうだ！」

個人的には、口にしてみてもイイと思った。雪女 寒いところにいる 零下何十度 レイカという発想なんだが、これなら「レイ」も入っているから個人的にもアリだと思う。

ちなみにレイコはレイゾウコの短縮だがちょっとやぼったい感じがしたのでやめた。

「どうだって言われてもちよっとそれは……………」

「え、ダメ？」

「ううん、気に入ったわ。じゃあ私のことはこれからレイカと呼んでね」

ちよっとびびらされてしまったが、結果はまあ気に入ってもらえたらいいからいいか。……………からかわれただけのような気がするが。

「それでは、仕切りなおしに。少し待っていて」

その冷蔵庫女あらためレイカは、そう言いながら、自分の右腕の袖に左手を突っ込み、なにやらごそごそとやっている。

と思うと、手に何かを持って引っ張り出した。

今日、ケイたちが買ったんだろっ、透明なフィルムの袋に入った、梨だ。なんでそんなところに入っているんだろっと思うまもなく、レイカは袋の口をあけると、その梨を手早く洗い、そして、いつの

まにか手にした包丁で皮を剥き始めた。

その様子を見ていた全員が、一瞬どよめいた。

梨に包丁を当てた瞬間からほんの数秒で梨は丸裸になり、4つに切られ、芯まで取り除かれて、大皿の上に乗せられたのだ。プロ料理人も真っ青になる早業だ。

なおもレイカの手は止まることなく梨を剥き続け、一袋5個入っていたそれはものの1分ほどで真っ白なデザート小山へと姿を変えてしまった。皮むきのビデオを早回しで見ているような感じだ。

「すっげ………」

「ふふん。私も無駄に長いこと台所にいるわけではないのよ」

そう言いつつも、ちょっと照れくさそうに笑う。と、突然、その梨が山盛りになった大皿が俺の前に差し出される。

「それじゃ、手伝わない人は邪魔だから、隣の部屋でこれでも食べて待っていてちょうだい」

そして、梨を受け取った俺は、レイカに部屋を追い出された。

03・そして何か動き出した その14（後書き）

どうも、作者です。

冷蔵庫に名前がつけました。

最近は料理できる冷蔵庫もあるので、こんなのもアリかなと。
次また、まったりした時間が流れます。

乞うご期待！

03・そして何かが動き出した その15

結局、全員がダイニングキッチンを追い出され、すでに個室ではなくなった俺の部屋で梨を食べながらまったりとテレビを見ることになった。

そういうわけで、今、2日ぶりにテルミが前に立って、60インチのテレビ画面を広げていた。

そのスクリーンに映し出されるお昼の情報番組を、今はみんなで仲良く見ている。

「なあんかこういうのーんびりした時間ってのも、いいもんだねえ」
ヒビキが俺の横から手を出して、その梨を片端から楊枝で刺してはひょいひょいたいらげていく。

「はい、お兄ちゃん、あーん」
素早く俺の横に陣取ったケイが、楊枝に刺した梨を俺に差し出してくる。

ぱくりとやると、ケイはにこーっと本当にうれしそうな笑顔を見せた。ちよつと俺も幸せな気分。

その俺の後ろでは、クリンと常盤さんが何か話している。

「舌が、ですか？」

「はいい。ごらんになりますかあ？」

「ええ、ぜひともこの目で」

「それでは」

その後、ちよつとの間だが二人の間の会話が途切れた。

「……………な、なるほど」

その後に聞こえたのは、驚きと関心の入り混じった常盤さんの声だった。一体、何を見せたんだろう、後で教えてもらおうことにしよう。「皆さん、私の分の梨も残しておいて欲しいでしょう」

テレビ画面の後ろから体乗り出し、こちらを見ていたテルミが、声をかける。この前見ていたときには気がつかなかったが、どうや

らテルミはテレビの仕事、つまり画面を出しているときには足まで動かなくなるらしい。

「難儀だな、テルミも」

「でも、これこそが私の本来の役目ですから、疎かにしてはならないでしょう」

俺が声をかけると、テルミは立ったまま殊勝な言葉を返してくる。

「はい、テルミお姉ちゃん。このままだとなくなっちゃいそうだから」

「ありがとうございます、ケイさん」

ケイが立ち上がって、楊枝にさした梨を持っていくと、テルミは嬉しそうにそれを受け取った。

「ちょっと、将仁さん。すごいツスよ、レイカさんって」

気になったのか、それともテレビの内容が気に入らなかったのか、ダイニングキッチンの様子を覗いた鏡介が驚いた声を出す。

なんだろうと思って覗き込むと、確かにすごい光景が広がっていた。流しでは狭かったのか、レイカはまな板をテーブルの上に置いていた。そして、さっき梨を取り出した時のように左手を右の袖の中に突っ込むと、また何かを取り出した。

それは、どう見てもその袖には収まらないほどの、長ネギだった。

2本が束になったそのテープをはがすと、まず根を取り、青い葉の部分と白い根の部分を切り分ける。

そしてそこからがすごかった。剣のように包丁を掲げたレイカが、そのネギに包丁を当てるや、見る間にそのネギが細かく細かく刻まれていったのだ。そしてあつという間に、30センチほどはあったネギの白い部分が全て薬味になってしまった。

その横で青い葉の部分もまたたく間に細かく刻まれる。そしてそのネギの葉を近くのボウルにまとめて入れると菜ばしでかき混ぜる。

そのボウルには何か別のタネが入っていたらしく、白い液体の中に赤いものがばらばらと見える。桜海老かな？それとも紅しょうが？かき揚げでも作るんだろうか、見とれるほどに手際がいい。

「何？」

そこで、自分を見ている俺たちにやっと思ついたら、気がついたレイカが、手を動かしたまま声をかけてくる。

「あ、いや、ものすごい手際だなんて思つて」

「あたりまえでしょう。野菜は切つた瞬間から鮮度が落ちていくのだから。ほら、邪魔するんだつたら引つ込んでなさい」

レイカが追い払うように菜箸をくいくいと動かしたので、俺と鏡介はそのまま引つ込んだ。

03・そして何か動き出した その15（後書き）

どうも、作者です。

ご飯が出来るまでの待ち時間です。

まったりとお楽しみください。

次は、ちよっとハプニングがあります。

乞うご期待！

03・そして何かが動き出した その16

うちの冷蔵庫、料理する機能はなかったと思うんだが。なんてなことを考えながら、部屋の中に向き直ろうとした時。

視界の端に、深緑色の物体が床に転がっているのが入ってきた。そしてそれが何なのか、俺の頭が把握した瞬間。俺はそっちに飛び出していた。

「な、な、なんでこれがここにあるんだ!？」

それは、床に転がっているはずがない、俺の数少ない趣味のひとつである、ラジコンのゼロ戦だったのだ。思わず拾い上げ、表裏とひっくり返して状態を確認する。

「ああっ、それ、ヒビキさんが俺の顔面にぶつけた奴!」

後ろで鏡介が声を上げる。そうか、あいつのデコに貼ってあるシッブはその名残(?)か。

「おい、ヒビキっ!」

俺の声にヒビキはめんどくさそうにこっちを向いたが、俺と鏡介の顔を見るとばつが悪そうな顔を見せた。

「このお前、なんてことしてくれたんだコラ!」

「そうだそうだ、この程度で済んだからまだいいけど」

「このラジコンが壊れてたらどうしてくれるんだ!」

「ちょ、お、俺のこと心配してくれたんじゃないんすか!？」

「お前は今のところ影響なさそうだからいいよっ!」

後から考えると、ヒビキにも鏡介にもずいぶんひどい事を言ってしまったと思うが、そのときは本気でそれどころではなかったのだ。

「ああああ、大丈夫かオイ、どこか壊れたところはないか?」

あまりに心配で、つい必死になってそのゼロ戦を表裏とひっくり返して見てしまった。

そのとき。

きiiiiiiiiいんっという耳鳴りがした。

「わ、忘れてたぁーっ！」

もう遅い、と判っていても叫ばずにはいられない。

そして俺の叫びは、目の前を押しつぶす真っ白い光の壁に吸い込まれて行った。

03・そして何かが動き出した その16（後書き）

どうも、作者です。

いよいよこの次、新しい擬人化の登場です。

今までと微妙に違うキャラなので楽しみにしてください。
乞うご期待！

03・そして何かが動き出した その17

とはいえ、さすがに6人目ともなると慣れてしまつたもので、光が収まつたかなと思つたところで目を開ける。趣味の道具だつたものだけにどんなのが出るのか、ちよつとだけ楽しみだ。

「ふはははははは！」
な、なんだ？いきなり笑い声が？

思わず目を開ける。すると、そこには、深緑色の和装の女の子が、なんか偉そうに腕組みをして立っていた。和装と言つても、大正時代あたりの女学生が身につけているような上張りに女袴だ。だが、袖にはでかどかど日の丸が描かれており、袴のすそから見える足は、第二次世界大戦の飛行機乗りが履いていそうな、頑丈そうな皮のブーツになつている。やっぱり戦闘機だからか。

そして、ヘアスタイルも少し変わっていた。肩口あたりで切り揃えられた髪は黒色なのだが、頭のとっぺんで髪を1房だけまとめて後ろに流しており、なぜかその髪だけが銀色をしている。しかもその髪だけが妙に長く、背中にかかつている。

「零式艦上戦闘機二一型、上官殿からの召集により、唯今参上した！」

その女の子は、力の入った目元で俺を見つめ、もとい睨み付ける。元がゼロ戦だからだろうか、きりつとした、サムライっぽい感じの子だ。

「あ、う、うむ」

なんであなたはのっけからそんなに偉そうなんですか、と、突っ込みたのみに気圧されてしまった俺は、上官と呼ばれたのにそれらしくない生返事をしてしまう。まさか怒つたりしないよな、ちよつと不安になり俺はそのゼロ戦娘（正確に言えばラジコン娘なんだろうが、なんとなくこっちのほうがしっくり来る）を見てしまう。

が、その時、ゼロ戦娘は、俺を見ていなかった。

「な、なんだよ？」

その目は、確かにヒビキを睨んでいた。しかも明らかに怒っている。「貴様」

腕組みを解いたゼロ戦娘は、その手でびしっとヒビキを指差した。

「さつきは、よくも痛い目に遭あわせてくれたな。その落とし前、きつちりとつけさせてもらう」

そして、すつと腰を落として身構える。何か武術の心得でもあるんだろうか。そういや、全盛期のゼロ戦って、格闘戦が得意だったんだっけな。格闘戦といってもいわゆるドッグファイト、近距離での空中戦のことなんだが。

「なんだ、やるのかい？」

売り言葉に買い言葉、というわけでもないんだろうが、ヒビキも身構える。

ちよつと場違いなことを考えていたら、いつのまにか話が危険なほうに進んでしまっていた。

「ちよ、ちよつと、こんなところでケンカなんて、止めてくれよ。」

狭い部屋なんだから

俺が現状の把握に手間取っていたとき、その二人の間に、鏡介が割って入った。

「じょうか…….…….ではないな！？邪魔するなっ！」

その姿を見たゼロ戦娘は、俺と同じ姿の鏡介を目にして一瞬ためらった。が、次の瞬間。

「うわ!？」

鏡介の体が大きく縦回転し、そして、床に仰向けになって投げ出された。ゼロ戦娘が、鏡介の手を取り、柔術の達人のように一瞬で投げたのだ。どうやらこのゼロ戦娘、マジで武術の心得がありやがるらしい。

ゼロ戦娘は、床に転がったままの鏡介をすばやくまたぎこし、素早くヒビキに迫る。

「くらえ!」

他の誰もが、それどころかターゲットにされたヒビキですら動けない。それほどのスピードで、ゼロ戦娘は、ヒビキの顔目がけて掌底を突き出した。さすがゼロ戦、格闘戦は強い、じゃなくて、止めない！と思うんだが、体はついていっていなかった。

「あつ！？」

だが、その掌底がヒットした瞬間、ゼロ戦娘とヒビキ、そして他の誰も顔が引きつった。

ゼロ戦娘の掌底は、確かに顔面を捉えていた。だが、それは、ヒビキのそれではなかった。

あわててゼロ戦娘が手を引く。

目をぎゅっと閉じた、白い髪の娘が、そこにいた。

その娘は、ちよっとの間のあとで、目を少し開き、口を開いた。

「みなひゃあん、ケンカひひゃ、らめれふよあ」

「クリン！？」

クリンだった。いつものように、ほわわんとした笑顔を浮かべているが、顔面に掌底を喰らった直後ということもあり痛々しく見えてしまう。

「す、すまぬっ！」

「大丈夫か！？」

ゼロ戦娘は素早く離れ、それ以外のそこにいた人物が一斉にかけよる。

「ら、らいらいよつぶ、らいらいよつぶ、わらひ、ヒュフォンヴィ、れふからあ」

クリンはいつものほわわんとした笑顔で答えるが、その顔にはゼロ戦娘の手形が赤くなって残っている。

「・・・くすっ」

その手形があまりにはつきりしていたためだろうか。

誰とも無く、笑いが漏れた。そしてそれはあつという間に全員に伝染していった。

少なくとも笑い出したのは俺じゃないが、ついつらられて笑ってしまった。

03・そして何か動き出した その17（後書き）

どうも、作者です。

やきもちやきなゼロ戦娘の登場です。

登場直後からなにやらトラブルメーカーの匂いがする彼女ですが、
かわいがってやってください。

次回も乞うご期待！

03・そして何かが動き出した その18

その日の昼飯は、レイカ力作のざるうどんだった。しかもどうやら手打ちらしく、適度な歯ごたえがあり、もちもちした食感を持ったそれは、学食や立ち食い蕎麦屋で食うそれなんか比べ物にならない美味さだった。

さらに、そのおかずとして出されたのは、さっき見たかき揚げをはじめ色々な野菜の天ぷらが大皿に山盛りになっている。これも具材への熱の通り加減といい衣のサクサク感といい、文句なしの絶品だ。あんな短時間でこれだけのメニューを作るなんて、ちょっとどころかものすごい手際だ。

ただ惜しむらくは、レイカ本人とゼロ戦娘（仮名）が増えてしまったためにうどんの漬け汁を入れるお椀が足りなくなってしまったことだ。もつとも、レイカはそうなることを予測して「味見を兼ねて先に食べたらしい。というわけで、今は給仕に専念している。」

「こ、これはッ!?!」

そのうどんを口に入れたテルミが、そう口にして硬直した。かと思つと一息で全部をすすり切り、さらにうどんの漬け汁まで一気に飲み干して箸を置いた。

そして席を立つと、険しい顔のままレイカのところへ歩いていき、彼女の目の前で止まった。

「・・・・・・・・」

「なに、かしら?」

なぜかすごい迫力を出しているテルミに、レイカもいささか気圧されている。

すると、テルミは突然レイカの手を取って。

「私の完敗でしょう、レイカさんっ！厨房は、あなたが担当するのが、ふさわしいでしょうっ!」

一気に破顔した。

「全く、驚かさないで。怖い顔をして迫ってくるから、不安になつてしまつたわ」

レイカも、ほつとした表情になる。そして、レイカがおかわりを勧めると、テルミも喜んでそれに応じていた。家事が出来るもの同士の住み分けが成立した瞬間だった。

「うまいっ！おかわりっ！」

その横で、ヒビキはいつもどおりの食欲を見せて、ものすごいスピードでうどんをたிரらげていく。……うどんで走るバイク。なんだかすごく環境によさそうだ。

「ねえねえお兄ちゃん。ケイね、お箸うまく使えるようになったよー！見て見てー！」

かと思うと、ケイが箸をこつちにぐつと突き出してみせる。確かに、この前に比べると上手になっているようだ。

「ねねね、ケイ偉い？偉いでしょ？」

なんか目を追うごとにケイの精神年齢が低くなっているような気がする。

「フン、軟弱な。その程度のこと、日本人なら出来て当たり前だ」その横で、こつちを向くことすらせずにうどんをすすっていたゼロ戦娘が、淡々と言い放つ。……ちよつと、トゲのある言い方で。

当然、ケイはむくれる。が、俺が頭をなでてやると、不愉快な言葉なんか聞かなかつたみたいにニコニコの笑顔に戻る。なんか俺もケイのあしらいがうまくなつてきたなあ。

ゼロ戦娘は、一瞬だけこつちをぎろりと睨んだ後にふいつと正面を向き、うどんをすすりはじめる。なんか機嫌が悪いみたいだ。

「まあまあ、そう怖い顔するなつて。みんなうちにあつたモノなんだから、えーと」

「零式艦上戦闘機二一型です、上官殿」

あ、忘れてた。こいつ、まだ本当の意味では名なしなんだ。

「ちよつと、それじゃ長いからさ。もつと短い名前にしよう」

「れいしきですからあ、レイさんはどうでしょうかあ？」

最初に意見を出したのはクリンだった（顔の手形はいつのまにか消えていた）が。

「それはさっき却下されたばかりよ」

自分につけられそうでつけられなかった名前だからだろうか。レイ力が速攻で反論する。

「んじゃ、ゼロ戦からゼロ子ってのはどうだい？」

「うーん、いまいち、洗練されていませんね」

めがねをなおした常盤さんが、厳しい指摘をする。

「ゼロは止めようよお、なんかかわいくないもん」

「それでは、二一型ですから……」

気がついたら、女性陣はまだ名前が決まっていないうゼロ戦娘や常盤さんまで巻き込んであでもないこうでもないとおしゃべりを始めている。

そして、男性陣、つまり俺と鏡介は、そこからちよっと取り残されていた。

「なあ、鏡介よ」

「皆まで言わなくても判るよ、将仁さん。お互い、大変っすよね」

「まったくだ」

そして俺たちは、苦笑しながらうどんをすすった。

03・そして何か動き出した その18（後書き）

どうも、作者です。

みんなで昼ごはんです。

次は、新顔のゼロ戦娘の名前が決まります。

一応、ゼロ戦に関係が無くは無い名前になります。

乞うご期待！

03・そして何かが動き出した その19

「シデン?」

ゼロ戦娘の手が止まる。

「ああ、ゼロ戦の後継機と呼ばれた紫電二一型、通称紫電改しでんかいから取ったんだ」

「紫電改って、育毛剤ではなかったのでしょうか?」

「そっちのが後だって。他のも考えたんだけど、これが一番人名っばいかなって」

テルミの横槍を軽くいなして、ゼロ戦娘のほうを見る。ゼロ戦は海軍機だから、海軍機のほうがいいかなーと思ったんだ。

ゼロ戦娘は、箸の先を咥えた状態で何か考えているようだ。

「ど、どうだ?悪くないと思うんだが」

ちよつと不安になり、思わずお伺いを立ててしまう。

すると、ちらつとこちらを見たゼロ戦娘の口元が、小さく動いた。

「何をうるたえているのだ、上官殿」

そしてそつと箸を置く。と思ったたら、びしいつと指を指し。

「貴様、いやしくも私の上官であるならば、それらしく振舞え!そんな弱腰の上官に使われていたなどと、私に思わせるでない!」

と、時代がかつたというか、無遠慮な言葉を投げかけてくる。

なんか、あきれてしまった。

「そうか、イヤか。じゃあ別の名前を考えないとな」

「待てっ!」

と思うと、なぜか俺の肩をがしつと掴んでこつちをにらんでくる。

「いつ、いつ私が嫌だと言った上官ッ、私はッ」

「だめえっ!」

そんなやり取りをしている間に、不意にケイが強引に割り込んできた。

ケイは、そのまま俺とそのゼロ戦娘とを、両手で押しつけるように

して引き離すと、そのまま俺にしがみつく。そして、その引き離したぜ口戦娘のほうを、きつとにらみつけた。

「お兄ちゃんを困らせるなんて許さないんだからっ！」

口調がきつい。結構本気で怒っているみたいだ。

「そもそもあなた、どうしてそんなに偉そうにしているのでしょうか!?」

それに触発されたのか、テルミまでが口を荒げる。なんか偉そうだと思っていたのは俺だけじゃなかったらしい。

さすがに分が悪いと思ったのか、ぜ口戦娘は言葉を詰まらせる。が、目つきはさらに凶悪になっていく。言い換えれば、暴れる気満々だ。

「ちよ、ちよつとお、みんなあ、け、ケンカは、止めようよお」

横からクリンが仲裁に入るが、その場の雰囲気気圧されて小声になっってしまった。

その時になって、ようやく俺は、自分がやるべきことに気がついた。

「ほらほら、そのへんにしとけ。こんな狭い部屋の中でケンカなんかすんな」

立場がなくなっただとはいえ、一応ここの部屋の主は俺、そして、こいつらの本来の所有者も俺だ。俺がしっかりしなくてどうするんだ。とりあえずその一言でその場を鎮めると、俺はぜ口戦娘に向き合った。

03・そして何かが動き出した その19（後書き）

どうも、作者です。

ゼロ戦娘の名前が決まりました。

ゼロ戦関係ないじゃないじゃないか、とおっしゃるかも痴れませんが、ゼロがつく女の子の名前が出てこなかったんです（TT）

次回も乞うご期待！

「もう一回聞くけど、シデンって名前はイヤか？」

今度は俺がその子の両肩に手を置いてじっと見つめてみる。

すると、その子は困ったような表情を浮かべながら、恥ずかしそうに頬を赤らめる。なんか、ちょっとかわいいぞ。

「う、そ、その、い、イヤというわけでは……」

「じゃあ決まり、お前の名前はシデンだ。いいな」

「う、じよ、上官が、そう仰るなら……」

なんか、話し方までかわいくなっている。いつもこうならいいのにな、こいつも。

「んじゃ、シデン。まずは、みんなに謝れ」

肩から手を離れた俺は、そう言っつてシデンをみんなの前に出した。

「なっ！？じよ、上官っ、なぜ私が頭を下げねばならぬ！私は」

ちよっとの間面食らったシデンは、じたばたと抵抗する。が。

「シデンさん。状況は貴方に不利ですよ？」

そうきっぱりと断言する人がいた。常盤さんだ。

「あなたは、こちらの男性、鏡介さんを皆の前で有無を言わずに投げ飛ばし、そして、こちらの女性、クリンさんの顔を殴りケガをさせました。これは傷害罪に問われてもおかしくありませんよ？」

そこまで言われて、シデンは言葉を詰まらせてしまった。

「な、そういうわけだから、謝っつけ。同じ家に住むモノ同士、いつまでもいがみ合っつていてもしょうがないだろ」

お説教された子供みたいな顔でこっちを見るシデンの肩をぽんぽんと叩いて促す。

「うっうっ……わ、わかりました」

完全に意気消沈してしまったシデンは、あきらめたようにモノ軍団に向き直る。

と思うと、突然ものすごいスピードでうずくまった。

「申し訳ないッ！全てはこのシデンの思慮の浅さが招いた事、許していただきたいッ！」

土下座だった。俺、そこまでやれと言ったつもりはないんだが、極端な奴だな。

どうやら、モノ軍団もそこまでやられるとは思っていなかったみたいで、みんなそろってぼかんと口をあけている。

「……あ、いや、その、あんたのことを乱暴にあつかったのはこっちだしさ」

最初に口を開いたのは、そもそものきっかけを作ったヒビキだった。

「だからさ、頭を上げてくれよ」

そしてモノ軍団から一歩進み出てかがみこんだ、その瞬間。

「かかったな」

土下座ポーズのまま固まっていたシデンの口から、そんな声がした。と思った瞬間。シデンがさっきの土下座もかくやというスピードで上体を起こした。と同時に、まるで弾き出されたように、シデンの右掌底が繰り出された。

「わつと!?!」

それを、ヒビキは真正面から受け止める。バチンツという音が聞こえ、ふたりはその体勢で固まっていた。

「ふん、この一撃を受け止めるとは、なかなかやるではないか」

右手を受け止められた状態のまま、シデンが口元に笑みを浮かべる。

「へっ、このヒビキ様に不意打ちをしかけるなんざ十年早いんだよ。なぜかヒビキのほうも口元に笑みが浮かんでいる。

どうも、この構図は、ライバル誕生つてとこみたいだ。

「そんなことをしていると、こっちがいつまでも片付かないのだけれど?」

その場に、まったくの外野だったレイカからの声が投げかけられ、そこにいた全員が食事中だったということを出したのだった。

03・そして何かが動き出した その20（後書き）

どうも、作者です。

雨降って地固まる、ってことで。

次回から、ちょっとだけ雲行きが怪しくなっ
てきます。
乞うご期待！

03・そして何かが動き出した その21

「ありがとうございましたー」

いつもなら学校で部活に汗している土曜日の午後。

俺は、ケイと常盤さんと一緒に、不動産屋の前にいた。引越しのシーズンから真裏に当たるこの時期ではあるが、あの家では狭すぎるので引越すことにしたのだ。テレビでやっていた貧乏人バラエティじゃあるまいし、4人ぐらいならまだいいが1DKに8人（しかもそのうち6人はうら若き乙女（？））も住むのはいくらなんでも無茶だ。

とはいえ、行き先が無ければ引越せるわけがない。そして引越すにしても、8人も住むとなるとさすがにアパートの一室、というわけにはいかない。それにこう言ってはなんだが、発動のきっかけが分からない以上まだ増える可能性も十分にあるから、ある程度余裕を持った大きさが要だ。

そんな都合のいい物件なんかあるのかな？と思っていたら、なんとそれがあつたのだ。具体的には、今の家より駅二つぐらい遠くなり、木造2階建てで築10年とちょっと古いが、電気ガス水道完備で広さも申し分ない。

そしてさらに驚いたことに、その家は「常盤さんの持ち家」だったのだ。もっとも、実際に住んでいるわけではなく、管理人みたいな立場なんだそうだ。だから、名義は常盤さんで、俺と、ケイをはじめとするモノたちはそこに居候する形となる。

常盤さんって、金持ちなんだな。素直にそう思ってしまった。

それで、今の部屋を管理している不動産屋に引き払いの手続きをしに来たんだが、その引越しの日が、気がついたら「明日」ということになっていた。あまりにいきなり話なため、俺だけでなく不動産屋も面食らっていた。とはいっても、実際は引き払う1ヶ月前に申請が必要なので、つまり書類上はあと1ヵ月、実際にはいなくて

もあのアパートに住んでいることになるらしい。

「常盤さん、本当に大丈夫なんですか？」

「心配は無用です。みんなに話をして、手伝ってもらいましょう」
不安になった俺を、一緒に不動産屋から出てきた常盤さんがそう勇気付けてくれる。だが、俺はそこで余計に不安になってしまった。

住んでもいない、しかも10年前に建てられた家を、なんで常盤さんは持っていたんだろう。もしかしたら、その家は、「西園寺の遺産」のひとつなんじゃないだろうか。そしていつのまにか家の名義が俺に書き換えられていて、俺はなし崩し的に遺産を受け取らなければならなくなるのだろうか。そこまで考えていたとすると、この人は本当に抜け目がない、というか悪賢すぎる。西園寺の遺産って確か総額五千億だっけ。こんなこと学校で自慢できないよなあ。これで間違いだったりしたらどうしよう。

「はあーあ……あ……あ？」

なんかものすごくネガティブな考えが頭の中にモリモリ湧いてきて、思わずため息をついてしまった、そのとき。

俺の横を歩いているケイの様子がおかしいのに気づいた。妙に静かなのだ。よく見ると表情もいつもより固い。何か不安なことでもあるのだろうか。

「ねえ、常盤さん？」

そして、ケイが常盤さんの袖をくいくいと引っ張る。

「あら、どうしたのケイちゃん？」

常盤さんは、まるでちよつと年の離れたイトコにでも接するように声をかける。なんかこういうのもいいな、と思ったんだが。

その表情から、笑顔が消えた。

「なにか、あったのかしら？」

「うん……」

ケイは、不安そうにうなずくと、うしろをちらりと見て、とんでもないことを口にした。

「あのね……ケイたちにね、さっきからずっとついてくる

人たちがいるみたいなの」

「なっ!？」

思わず顔を上げて後ろを見る。が、目に入るのはごく普通のありき
たりな光景だ。道端でおしゃべりに花を咲かせるおばちゃんたちや
ギヤル、鞆を脇に抱えて小走りになっているビジネスマンなど、ど
れも怪しいような怪しくないような微妙な連中ばかりだ。

「マジかよ」

こういう、尾行されるっていうシチュエーションは、マンガとかド
ラマとかだとけっこう見るが、いざ自分がされるとなるとなんと
もイヤなもんだ。

「それって、いつからかしら？」

「わかんない。気がついたのが、不動産屋さんに入った後だったか
ら」

なんでも、俺たちが不動産屋に入ったときに、「今、不動産に
入りました」と話している男の声が聞こえたんだそう。それはど
うやら、携帯電話かなにかを使ってやり取りしている、その電波を
拾ったものらしい。そして今も、その声の主は俺たちをどこから
見ているらしい。

さすがは携帯電話、というか携帯電話の能力を超えてしまっている
ような気もするが、ケイは俺には嘘は言わないと思う。となると、
やっぱり俺らを尾行する奴がいるってことになる。

なんで?と思ったが、そうなる心当たりはいやというほどある。「
西園寺家の遺産」だ。

こういうときはどこかの人ごみに紛れて蒔く、というのが定番だが、
実際にやったことはないし、第一つけてくる奴がどんな奴かも分
らないのでは、蒔けたかどうかも分からない。それに今は俺一人じ
やないからそんな動きもできない。

「そうだ、その喫茶店に入ろう」

考えた末。俺は2人を連れて、外が良く見える喫茶店に入ること
にした。

確かこういうときは、出入り口が見える場所に座って、いつでも立てるようにするんだったよな。そんなことを考えながら、俺はその喫茶店に入っていた。

03・そして何か動き出した その21(後書き)

どうも、作者です。

なにやら怪しい動きがあるようです。

こいつらの正体は何なのでしょう？

そのうち明らかになります。

乞うご期待！

03・そして何かが動き出した その22

その日の夕食は、立食スタイルになった。ダイニングのテーブルに結構な量の惣菜がいくつも並び、茶碗と吸い物の椀、そして箸は用意されているが、椅子が足りないため全員が立って食べることになったのだ。ちなみにこの食事は全部レイカが一人で作ったそうだったのだ。せっかくだからということで、常盤さんも夕食を一緒にすることにした。お客さんなんだから座ってもらおう、と思ったんだが、みんなとの交流を深めたいということで、同じスタイルで食べることになった。

「何、お前もか!？」

夕食の席で、さっき尾行されたらしい、という話をしたところ、俺の耳を疑うような言葉が返ってきた。

俺とは別行動で、増えたメンバー分の備品と食料の追加買出しに出していた鏡介らも、やはり何者かにつけられていたというのだ。

そのときのメンバーは、鏡介、ヒビキ、レイカ、そしてシデンの4人だ。鏡介はともかく、他の3人は目立つ（なにしろあのままの格好で行った）からさぞやあっちも尾行しやすかっただろうなあと思いきや、あっちの尾行もあまりに下手だったため、逆に捕まえて締め上げたんだそうだった。

「どんな奴だった？」

「どんなって言われても、見るからにパシリって感じだったぜ」

「その点については我も同感だ。まさにこれこそ一番の下っ端であるという輩であったな」

だが、そこでレイカが一言こう言った。

「でもあれは、少しやりすぎだと思っただけねど」

「やりすぎってなあに、レイカお姉ちゃん？」

「あ、俺らをつけていたのって二人組みだったんですけど、ヒビキさんがその一人をぶん投げて星にしちゃいました」

「ゑ！？」

「ちよ、こら鏡介、それは言うなよ。ちよつと力が入っちまっただけだつて」

「ほう。貴様はちよつと力が入っただけで成人男子を一人星にするのか」

「な、なんだそりゃ。思わず、すすっていた味噌汁を噴出しそうになつてしまった。いくらバイクのエンジンが何十馬力出ると言っても、それはありえないだろう。」

「はわわあ、ヒビキさん、すごい力ですう」

「ヒビキさん、その馬鹿力は制御してくれと、前から何度も言っているでしょう？」

「そ、それを言ったら、レイカだって人のこと言えないんだぞ。逃がさないためって言っても、氷付けにするのはひどくね？」

「こ、氷付けえ！？今度は飲み込んだ飯が胸に詰まってしまった。それじゃホントに妖怪雪女じゃないか。」

「まだ暑い日が続くから、ちよつと良いのではなくて？」
レイカはさらりとそう言つてのける。

「うん、こいつらの能力つて、モノだったときの能力をはるかに超えているぞ。もしかして俺、とんでもないバケモノを生み出しているんじゃないだろうか。本来の意味で色々な電波が受信できるケイの能力が、まだまだかわいいもののように思えてきた。」

「なあ、鏡介。お前つて、あれみたいなのがあるのか？」
思わず、いちばん普通そうな鏡介に聞いてしまった。

「やつぱ、気になります？」

「うん、やつぱり、ああいうことを聞かされるとな」

「んー、ええ、まあ一応ありますよ。あそこまで派手じゃないっすけど」

見せてくれと頼んでみると、鏡介は箸を置いてケイのほうを見た。その瞬間。鏡介の姿がぶれた。

そして、ケイの目の前に、ケイがもう一人現れた。

「どうかな？」

もう一人のケイが、驚いて目をぱちくりさせる本物のケイの目の前でこつと笑ってみせる。すごいことに、声までケイと同じだ。

「おい、鏡介、だよな？」

「もちろんっすよ」

俺が声をかけると、そのケイとそっくりな子は、ケイの声ながらも鏡介の口調で答える。

言われてよく見ると、その子は左右が逆転していた。いつも右でまとめている髪が左になっていて、服に書かれた模様も全部左右逆、まさに鏡に映したようになっていた。

「鏡は、目の前にいる相手の姿を映すものですからね」

そして、もう一人のケイの姿がぶれると、今度はテルミの姿になる。ここでも芸が細かいことに、エプロンのポケットにあるMITSUISHIの刺繍が裏返しになっている。

「それでも、鏡の端くれですから」

そして、また姿がぶれると、もとの（と言っても俺とそっくりの）姿に戻った。

なんかこれって、擬人化というより「妖怪化」のほうが近くないか？と、思ってしまった。

03・そして何かが動き出した その22（後書き）

どうも、作者です。

だんだん擬人化たちが人間離れしてまいりました。

でもこれから先もつと人間離れしていきますw

乞うご期待！

03・そして何かが動き出した その23

常盤さんが帰った後、俺らは引越しの準備に取り掛かった。

フロヤトイレを別にする、今住んでいる部屋はダイニングと俺の私室兼寝室だけになるので、ダイニング側に4人、寝室に4人という組分けにする。

分け方ではひと悶着あったんだが、寝室は俺と鏡介とヒビキとシデン、ダイニングはケイとテルミとクリンとレイカが分担してやることになった。

「よつと、これとこれとこれはいらぬいな」

「こらヒビキッ、貴様ッ、何をしているのだっ！」

「ああ？何って、いらぬ雑誌を分けているんだよ」

「嘘を言うな！貴様が捨てようとしておるのは全てラジコンの本ではないかっ！」

「別にいいじゃねえかよ、シデン。全部捨てるわけじゃないんだから」

「ダメだダメだっ、天が許そうと私が許さんッ！」

本当は俺のものなんだが。

「クリンさん、あなたは何をしていますのしょう？」

「あ、いえ、ちよつと汚れていたのですね」

「だから舐めるのは止めてくださいと、何度も言っているのしょうっ！」

「あううう、すみませえん」

「まったく、電気製品に水は大敵でしょう」

クリンの奴、何を舐めたんだろうか？

「この家を離れるのは、ちよつと名残惜しいわね」

「え？そうなの、レイカお姉ちゃん？でも……」

「そりゃあ、この姿になったのはついさっきだけれど、私はそのずっと前からここにいたのだもの。愛着だつてわくというものよ。」

ケイちゃん、あなただって、ずっといた所には愛着が湧くでしょう？」

「そうなのかなあ。じゃあ、ケイがお兄ちゃんのそばにいつもいたって思うのも、いつもお兄ちゃんが持ち歩いてきたから、なのかなあ？」

「そうそう、きっとそうよ。あ、ケイちゃん、そのお皿はこっちね」「はい」

そういえばケイって、うちのモノ軍団の中では一番初めに擬人化したのに、一番幼い感じがするよなあ。

そんなことを聞きながら、俺は机周りをごそそと片付けていた。去年、このアパートに引っ越したときに使って、そのまま取っておいたダンボール箱をもう一回組み立てなおし、教科書とか参考書とか身の回り品とかを、鏡介に手伝ってもらって詰めていく。

「あれ？」

「どうしました？」

「ん、あ、いやここに入れといたお宝本、どこにやったかなって」

「本ツスか？いや、俺、その引き出しは開いてないですけど」

そして、鏡介がずいっと顔を突き出してくる。

「それってやつぱアレっすか？アダルトなやつですか？」

「なんだよ、判るだろそのぐらい？」

「そりゃそうすけど、そういうのがあるんなら見せてくれても」

「無茶言っつなよ、まわりにこんな女がいるところで見れるか？俺だっつて見てないんだぞ」

「あー、それもそうっすね」

とりあえず、どこに行ったのか判らない（たぶんうちのモノ軍団の鏡介以外の誰かが捨てた）お宝本は諦めることにして、片付けを再開することにした。

03・そして何か動き出した その23（後書き）

どうも、作者です。

引越しの準備を一晚でやるというのはかなり無理がありますが、そこは多めにみてくださいw

次回は、新しい黒幕が現れます。とはいっても主人公とは後々堂々と張り合うので楽しみにしてください。

乞うご期待！

03・そして何かが動き出した その24

晴れ渡った空が、大きな窓いっぱいに広がっている。

雲ひとつない空から照りつける太陽は、コンクリートとアスファルトで固められた広大な地面をてらし、その上で動きまわるものをはつきりと映し出す。

それは、航空機だった。俗にジャンボジェットと呼ばれる巨大な旅客機が、空港のターミナルビルからいくつも見えている。

そして、そのターミナルの待合スペースに、一人の女が立っていた。彫りの深い顔立ちに豊かな金色の巻き毛、そしてすらりとした体をブランドもののコートで包んだその姿からは、一種の気品のようなものが漂っている。

「お嬢様。飛行機の準備が完了いたしました」

そこに、スーツ姿の背の高い男が近寄ってきて声をかける。髪は黒く、顔立ちも東洋系だが、若くも老けても見える不思議な感じの男だ。顔立ちにはいささか似合わない口ひげと仕草の落ち着きぶりがその年齢不詳ぶりに拍車をかけている。

「そう。ご苦労様、セバスチャン」

お嬢様と呼ばれた金色の巻き毛の女は、どう見ても東洋人であるその青年の言葉にそれだけ答えると、すっと横を見る。

そこには、巻き毛の女より少し背の高い、女性用の黒いスーツに身を包みサングラスをかけたショートカットの女が立っていた。

「イリーナ、これからのスケジュールはどうなっています？」

「はい。午前10時50分にこのロサンゼルス国際空港を飛び立つ許可をいただいております。ただ今の時間は8時45分ですので、まだしばらく余裕があるかと」

イリーナと呼ばれたサングラスの女は、手元のファイルを見ながらまるで秘書のように答える。

「途中、ハワイにて各種補給のため3時間ほど駐留しまして、日本

に着くのは、現地時間で17日の午後6時頃になる予定です」

「フライトまでに、時間がかかりすぎなのではなくて？」

“お嬢様”は、不服そうな表情でそう口にする。

「ドールのメンテナンスを行うためです。飛行機に乗せてしまったら整備が難しくなりますから」

イリーナは、ファイルに視線を落としたままそう答える。

「そう、では仕方ありませんわね」

“お嬢様”はそう答えると、手にもった扇子で口元を隠しながらあくびをする。

「でも、お嬢様。今更ですが」

不意に、イリーナがファイルを閉じて”お嬢様“のほうを向く。

「お嬢様がわざわざ日本まで出向かれなくても」

すると、“お嬢様”はすいっとそのイリーナのほうに向き直った。

「あら、だからこそ、ですわ」

そして得意げな顔をする。

「私の威光でひれ伏させてこそ、その者を意のままに使えるというもの。それに、日本はお父様のお生まれになった国、訪れてみたいと常々思っていたところですよ」

そして、口元に手の甲を当てて笑ってみせる。

「少し構内を散歩して来ます。あなたたちは準備を進めてちょうだい」

そして、深々と頭を下げたイリーナを尻目にすたすたと歩き出す。

だが、そこにさつきまでいたはずのもう一人、セバスチャンの姿はそこにはなかった。

彼は一足早く待合スペースの隅へと移動し、そこにあるベンチのひとつに腰かけていた。

背中合わせになった別のベンチには、ハンチング帽を被り、手にした新聞に目を落とす一人の男が座っている。

「ホークのお手並み、拝見といこうか」

つぶやくような声で、セバスチャンがそう口にする。

すると、新聞を読んでいた男が声を返してきた。

「判っている」

そして新聞から目を上げる。

男は、以外にも若かった。10代後半ぐらいだろうか、ぱっと見た限り、セバスチャンより若い。だが、削いだような目つきは、とても普通の人生を送った者のそれではなかった。

そのまま、男は立ち上がると、“お嬢様”の後ろを尾行するように歩き出す。

セバスチャンはそれを、ガラスのような目で眺めていた。

03・そして何かが動き出した その24（後書き）

どうも、作者です。

やっと3日めが終わりました。

ここで出てきた人たちもそのうちシナリオにからんでいきます。

はたして、どう絡んでくるのか？

乞うご期待！

04・引越しは大変だよ その1

9月17日 日曜日

きんこーん。

朝の八時ちよつと前。朝飯が終わってしばらく片付けなんかをしていると、呼び鈴が鳴った。

「はい！」

ケイがたたたと走って行ってドアを開ける。するとそこには、えらくごつごつい男が立っていた。

「りゅう兄ちゃん、いらっしやーい！」

「ようケイちゃん、元気だったかい？」

「うんっ！」

もしやと思ったが、やっぱりりゅう兄だった。昨日の夜、引越しをするから手伝って欲しいと電話したら、テスト休み中で暇だからと快諾してくれたのだ。

「ん？なんかまたずいぶんと女の子が増えてねえか？」

そして、ケイの頭をぐりぐりつと撫でたりりゅう兄は、ぐるつと家中を見回した後、真顔で鏡介に話しかける。どうやら俺と間違っているらしい。

「あー、りゅう兄りゅう兄、そっちは違う。俺はこっちこっち」

おどかしてやるつもりりゅう兄に横から声をかける。そしてりゅう兄はこっちを見て、案の定硬直した。

そしてきよるきよると俺と鏡介を繰り返し見る。

「……………おめえまで増えやがったのか？」

大抵のことには動じない（擬人化を見てもすんなり受け入れていた）りゅう兄も、さすがにびっくりしたみたいだ。その様子を見て、うちのモノ軍団たちもクスクスと笑っている。

ちよつとした優越感に浸りながら、俺は鏡介の横に立つ。

「「びつくりしたろ、りゅう兄」」

そしてさらにハモってみる。さすが鏡介、うまいこと合わせてくれる。おかげでりゅう兄はあっけにとられてぼかんと口をあけている。そしてさらにモノ軍団はクスクスと笑う。

「ここまで驚いてもらえると、なんか嬉しくなりますね」

鏡介のやつもなんか楽しそうだ。

「悪いなりゅう兄、驚かせちまって。こいつ、鏡介っていうんだ」

「はじめましてりゅう兄さん。鏡の擬人化の鏡介です」

「な、なんだ、鏡か、びつくりした」

そして、俺に促されて鏡介が挨拶をしたところで、りゅう兄はやつと何があつたのが分かったようだった。

「く、くくつ、ふはははははっ、なっ、なんと間の抜けた面をしておるのだ、上官殿の兄君よっ！」

その瞬間、突然大声で笑い出した奴がいた。誰かは、この偉そうな物言いから分かるだろう。シデンの奴だ。

「滑稽だ、あまりにも滑稽だぞ兄君ッ！」

おいおい、いくら女の子にやさしいりゅう兄でもしまいにや怒るぞ？うちのりゅう兄、ヘタすりやお前より強いかも知れないんだから。「なあ、龍之介、こいつどう思うよ？」

と思っていたら、いつのまにかヒビキがりゅう兄の肩に手をかけてそんなことを言っている。ヒビキは以前はりゅう兄の持ち物だったせいか、りゅう兄ともけっこう気が合うらしい。

「こいつってば新入りのくせに偉そうでさあ。出てきて早々鏡介のことをぶん投げるし」

「何を言うか貴様ッ、このシデンは上官殿の寵愛を最も受けていたのだ、貴様よりは上だ！」

また始めてしまった。この二人、まだ仲直りしていないのか。だいたい何が上なんだ。

面倒になったので、俺は鏡介をつれて奥に引っ込むと、荷物の搬出に取り掛かることにした。

「こちらは今もうすぐ終わります、そちらはどうでしょう？」

「あうう、待って下さいよお」

ダイニングでは、2人のメイドさんがいて、捨てるものの分別や床の拭き掃除をやっている。

黒い髪でメガネをかけた黒マントのメイドさんは、もちろんテルミだ。いつものようにてきぱきと素晴らしい手並みでゴミの分別をしている。

そしてもう一人の、白い髪のメイドさん。実はクリンだ。背格好が一番近いテルミにメイド服を借りたらしい。が、こっちはどうも危なっかしいというか手つきがおぼつかない。なんというか、メイドのプロと新人という感じた。

テルミの服がどこから出てきたのかは、この際考えないことにしよう。

「きゃ！？」

と思うそばからクリンは手を滑らせた。昨日買ったばかりの茶碗が宙を舞う。落とすまいと手をわたわたと動かすが、なぜか掴むことができない。

落とした、と思った瞬間。何かがその茶碗を受け止めた。

「・・・おい、大丈夫か？」

「はううう、ら、らいいりょうつれふう」

掴んだと思った瞬間、その茶碗が再びつるんと舞い上がり、そしてクリンの顔面に落下していたのだ。昨日のシデンの掌底といいこれといい、いくら柔軟性に富んだスポンジだからって、わざわざ顔面で受けなくてもいいだろうに。

「とにかく、ケガしないように、注意してな」

茶碗を顔から下ろしたクリンの肩をぽんぽんと叩く。また顔が赤くなっている。

「テルミも、はらはらするかもしれないけど、よろしく頼むよ」

「お任せください、この程度ならすぐ終わるでしょう」
声をかけると、テルミはにっこり笑って答えてくれた。

04・引越しは大変だよ その1（後書き）

どうも、作者です。

ようやくと4日目に突入です。

引越しといっても一筋縄ではいかないのでそのへんを楽しみにして下さい。

では、次も乞うご期待！

04・引越しは大変だよ その2

「はー……」

俺の目の前に、赤いライダースーツの女が立っている。

「なあ将仁、こいつはどのへんに乗せるんだ？」

その女、ヒビキは、荷物を担いだ状態で俺にそう聞いてくるが、俺はその姿にあっけにとられていた。

なにしろ、そいつが担いでいるのは、俺のベッドなのだ。しかも俺の部屋からここまで一人でそのベッドを担いできて、平然としている。

「お、重くないのか？」

「なあに言っただよ、こんなの将仁や龍之介乗せて走るのに比べりゃ全然軽いじゃないか。あんたの体重が何キロだと思っただい？」

ヒビキは平然と答える。言われてみれば確かにそうだ……だが、それでもそのベッド、パイプベッドとかじゃないから、4〜50キロはあるぞ。

と思っていると、こんどは何かバタバタと羽ばたきのような音が聞こえてきた。

そっちを見て、思わず飲みかけていたスポーツドリンクを嘔き出してしまった。

シデンが、まっ逆さまになって、アパートの壁に沿って落ちてくるのだ。両腕を広げているので、袖の日の丸がくつきりと見える。まるでゼロ戦が急降下しているみたいだ。と思っただ次の瞬間、俺は飲みかけのスポーツドリンクを放り出して駆け出していた。

何を考えているのかは分からないが、こんなところで身投げなんかさせるワケにはいかない。が、受け止めるにしても、落下地点までは10m以上ある、間に合わないッ！と思っただ瞬間。

シデンの体が、地面すれすれのところで翻った。かと思うとそのま

ま重力に逆らい急上昇する。

つまり、どういう理屈か判らないが、シデンは空を飛んでいるのだ。飛び出した勢いが止まらず、壁に激突してひっくり返った俺を尻目に、シデンはもう一度上空を旋回した後、俺の前に着地した。

「なんだ、上官殿。そんなところで醜態しゆうたいをさらして」

そのシデンは、俺の前で偉そうに腕組みしている。誰のせいでもひっくり返ったと思っっているんだ。

「……お前なあ、自分が何をやったか分かってんのか？」

「ふん、我は上官殿の荷物を運んだだけだ。見る」

そしてシデンはくりと後ろを向く。そこには、荷物を詰め込んでばんばんにふくらんだ、昨日買ったばかりの赤いナップザックが背負われていた。和服にナップザックというのも変な組み合わせだがそれはまあいい。

「いや、そういう意味じゃなくて、お前、さっき空飛んだらうが」「何を寝ぼけたことを言っている。飛行機は空を飛ぶものであるう、そんなことも分からぬのか？」

いや、そうじゃなくて、腕広げただけで空を飛ぶのはあまりにデタラメが過ぎるだらう。

と言っても、考えてみたらうちの女の子+1は、デタラメのカタマリみたいな連中なんだよな。

なんかそう考えるとちよっただけ悟れそうな気がした。

04・引越しは大変だよ その2（後書き）

どうも、作者です。

ヒビキとシデンの人外つぶりが現れて来ました。

なんでアパートのほかの住人が何も言わないのかとツツ込みたいかもしれませんが、そこは多分「夢だ」と思っていることにしてくださいw

では、次回も乞うご期待！

04・引越しは大変だよ その3

「将仁くん、いつまでひっくり返っているのかしら？」

「まだ、部屋の中に荷物はあるでしょう」

と思っていたら、テルミとレイカが両手に荷物をかかえて降りてきていた。

そういえば、こいつらはモノだった時は、60インチのプラズマテレビに3ドア式冷蔵庫と、共に特大サイズの家電製品だったんだよな。普通の引越しだと動かすのも苦労するようなモノが自分で歩いてきてくれて、のみならず他の荷物まで持ってくれるんだから便利なもんだ。

これで洗濯機がいれば三種の神器勢ぞろいかな、と思った、その矢先。

ずどどどどっ！

「あわわわわっ！」

ものすごい音と間の抜けた悲鳴とともに、黒い塊が階段の上から転がってきた。

「あいたたたた・・・」

その塊は、一抱えほどのダンボール箱を抱えた状態で、目をぐるぐる回しながら階段の下にぺたんくと座り込んでいた。

「くっ、クリンっ、大丈夫かっ!？」

思わず駆け寄って声をかけると、クリンがやっと目の焦点を合わせて、顔を上げた。

「ああ、将仁さあん。私は大丈夫ですよ、それよりこれえ」

まだメイド服を着たままのクリンが、持っていたダンボール箱を差し上げる。受け取ってみると結構重い。何が入っているんだろう。

「体を張って、守りましたあ」

そして、にっこり笑うと、よっこらしよと立ち上がり、ぱんぱんと埃を落とした。

「おめえんとこつて、いつつもこんなにぎやかなのか？」

その後ろから、衣装ケースを抱えたりゆう兄が降りてきた。なんか、やっと当たり前の光景を見た気がしてなんかほっとしてしまった。

「なーんかさ、日を追うごとに、現実ってなんだろうなって思っちゃうよ」

ほっとしたついでに、そんな愚痴がぼろつと口から出てしまう。すると、りゆう兄は抱えてきた衣装ケースを下ろして、

「そう後ろ向きに考えんなよ、おめえの悪いくせだぞ？」

と言いつつヘッドロックをかまして来た。いつものパターンなのに、なんで避けられないんだ俺。

「考えてもみろつて、これだけのかわいい子と同居できんだぞ？男ならこの状況を楽しまねえでどうすんだよ」

「いででででで！」

だからつてチヨークスリーパーに持って行くな！

楽しむつて言われても困る。確かに、かわいいのは認める。(ただし鏡介は除く。自分の姿をかわいいとは言いたくない。)が、同時にものすごく疲れるんだということを、この能天気兄貴には分かってもらいたい。なにしろ俺、ちょっと前までは一人住みだったんだぞ？

「お兄ちゃん、さぼっちゃダメだよお」

そのきっかけを作った第一号ちゃんがボストンバッグを両手で持つて降りてきた。確かあれは俺の部活動グッズ、ジャージとシューズが入っているやつだ。

「りゆう兄ちゃんもほら、遊んでいないで荷物運んでよね。今日中に荷物の運び入れまでやるんだから」

「おおっと、悪い悪い」

ケイに怒られて、やっとりゆう兄は俺を解放する。俺はそのままそこに座り込んでしまった。

「はあ、はあ、こ、殺されるかと、思った」

「だいじょうぶ？お兄ちゃん」

ケイはその前にちょこんとしゃがんで俺の顔を覗き込む。

「ああ、心配してくれてありがとな」

頭をなでてやると、ケイはとっても嬉しそうな顔をする。それを見ているとなんか俺も和んだ気持ちになれた。

「それより将仁さん。さつき、常盤さんから電話がありましたよ」
そのケイと一緒に降りてきたらしい鏡介が、手に持っていたダンボール箱をよっころしよと降ろしてから口を開く。

「常盤さんが？」

「ええ、先に行って待つてるそうっす」

なんでも、家の様子を確認するんだそうだ。実は昨日は結局あのまま帰ってしまったので、間取りや住所は知っているがその家がどんな家なのかは俺も知らないのだ。

そんな状態で引越そうというのだから、冒険というか無謀というか。でも、うちのモノ軍団は元々俺の所有物だった連中だからか、俺が決めたことには基本的に従ってくれる。まあそんなだから昨日家を決めて今日引越すなんてことができるんだが。

しかし思い返してみると、その日程を決めたのは俺じゃなくて常盤さんなんだよなあ。なんか、俺、常盤さんに振り回されているような気がするぞ。

よし、あっちに行ったら、家の主は俺だって、はっきりさせてやろう、うん。といっても、その家自体は常盤さんの所有物なだけだな。

「おい、りゅうのすけー、荷物上げるの手伝えよー」

と決意を新たにしていると、ヒビキが中庭に停めたアルミバン（荷台が箱状になったトラックをこう言うんだそうだ）の入り口でベッドを片手で担いで空いた手を振っている。

あのアルミバンは、りゅう兄が今日乗ってきたやつだ。この前うちに乗ってきた車と違うのでどうしたんだと聞いたところ、レンタカーから借りてきたんだそうだ。

ちなみに、これも今日はじめて知ったんだが、うちの兄貴はなぜか

大型の自動車免許を持っている。もし職を失ったときに運送屋でも食えるように、なんてことを言っていたが、いくらなんでも大学を出ていきなりトラドラをするのではないと思う。

そしてふと反対側を見ると、両腕を広げたシデンが、地面を蹴って今まさに離陸するところだった。その時に気がついたんだが、そのシデンの頭の上で何かかなりのスピードで回転しているようだ。

飛行機の先頭で回るといえばプロペラだが、そんなもんがあいつにあったか？あいつの頭にあったのは髪の毛だけだったと思うんだが、まさかそれで飛んでるんじゃないだろうな？

なんてなことを考えている間にシデンの奴は離陸し、急上昇すると真っ直ぐ俺の部屋があるあたりに飛んでいった。

「飛行機って、垂直に飛べるんだな………」
なんか感心してしまった。

04・引越しは大変だよ その3 (後書き)

どうも、作者です。

荷物運び出し第2弾です。

前回に比べると普通なので面白くないかもですw
次回も乞うご期待！

04・引越しは大変だよ その4

「さてと、こんなもんか」

最後に残った小さいダンボールを積み込んで、部屋の引き出しは終わった。

兄貴は気を利かせて4トントラックで来たんだが、男の一人暮らしでそんなに入用になるわけもなく（モノ軍団の私物はまだほとんどないわけだし）終わってみると結構な空間が残っていた。

だが、荷物が減った分増えたものがある。人だ。

借りてきたトラックの座席は3人分しかない。そのうち、ドライバーであるりゅう兄は絶対乗ってないとダメだ、ということを考えるのと、あと2人しか乗れない。対して、こっちはりゅう兄を除くと俺、ケイ、テルミ、ヒビキ、クリン、鏡介、レイカ、シデンと8人もいる。ヒビキあたりは、同じ「乗り物」ということで車の扱いとかは判ってそうだが、現実的に考えて免許なんか持っているわけではない。

仕方がないので、何回かに分けて運ぶことにした。

「りゅう兄と俺と、あと一人か」

「はいはいはい！ケイが行きまーす！」

いきなり立候補したのは、ケイだった。

「お前かあ？」

「だってお兄ちゃん、行ったことないんでしょ？ケイなら、住所教えてくれればナビできるもん」

「って言っても、お前はカーナビじゃないだろう、と言おうとしたら「最近の携帯サービスってね、道順案内とかも出来るんだよ。お兄ちゃんも、ケイのこともつとちゃんと活用してくんなきゃダメだよお」

と諭されてしまった。一応、その家の周辺地図は貰ってあるんだが「ねえ〜いいでしょ〜お兄ちゃん。ちゃんとナビするからあ〜連

れてっよ〜」

ちよつと考えているうちに、ケイは俺の腕にぎゅつとしがみついて上目遣いで言ってくる。擬人化してまだ4日目だったのに、こいつは一体どこでこんな仕草を覚えてくるんだ。

でもまあ確かに、地図以上に詳しい案内が出来るのであればそれに越したことはないわな。

「わかったわかった。じゃあ、お願いしようかな」

「わーい、やったあー!」

ケイは、ぴよんぴよんと飛び跳ねて喜んでいる。何がそんなに嬉しいんだろうか。

「…………俺、そのへんが判らないから、朴念仁だのと呼ばれるのかな。」

「なあ、引つ越す家つてのは、ここからどのぐらいかかるんだい?」
今度はヒビキが聞いてきた。

「駅2つぐらい先だから、車で行けば15分ぐらいかと思うが」
ヒビキが来てくれれば、その桁外れの膂力じりょりょくで荷物降ろしも簡単に済むんだろうが、ケイを乗せちゃったらそれもムリだ。とはいえ、ケイを置いていったらまたすねるだろうし、ナビのレベルが落ちて到着に余計な時間がかかることも考えられる。まさか荷台に乗せるわけにもいかないだろうし。

「思ったら、ヒビキは変なことを口走った。」

「なんだ、そんなもんか」

「そんなもんつて、歩いて来るつもりか?歩いてくるんだつたら、待っていたほうが結局速いと思うんだが」

何が言いたいんだ、こいつは?と思いつながら正直なところを答えると、ヒビキはチチチツと舌打ちをしながら、真っ直ぐ立てた人差し指を小さく左右に動かした。

「将仁、おまえ、あたしが何だったか忘れてない?」

そして、その指先でサンバイザーを軽く突き上げ、にやつと笑う。

「あたしは走るために作られたバイクなんだぜ?走るのは得意中の

得意だつての。あんたらが乗ったトラックの後ろを走って追いかけるから、案内のほうしつかり頼むよ」

マジかい、と思う目の前で、ヒビキはなにやら屈伸や伸脚などの準備運動をやり始めた。どうやら、本気で走るつもりらしい。

確かにバイクだったら車と同じぐらいのスピードは出るが、今のヒビキは人の姿だ。タイヤで走ると足で走るのは勝手が違う、と思うんだが、当の本人はすでに走る気満々だ。

その少し離れたところでは、シデンが首や腕を回している。こいつも走る気かと思つたが、こっちはどちらかというと一仕事終わって筋を伸ばしているだけみたいだ。

「おい、そろそろ行くぞー」

そんなやり取りをしていると、りゅう兄の声がした。見るとすでにりゅう兄がトラックのエンジンに火を入れて待っている。

「あー、今行くー」

そう返事して、ケイを呼んだ。

「それじゃ行ってくるねー」

そう言つて手をひらひらさせたケイがトラックの座席に入る。

そして俺も乗り込むと、ばたんとトラックのドアを閉めた。

「んじゃ、後は頼むな」

窓をあけて、外にいる鏡介とクリンに声をかける。

「ういっす、任しといてください」

「いつてらっしやあーい」

二人は、並んで俺を見送つてくれた。

04・引越しは大変だよ その4（後書き）

どうも、作者です。

荷物より人のほうが多い引越しはこんな感じでしょうかw

次回、なにやら準備運動していたヒビキの実力が発揮されます。
乞うご期待！

04・引越しは大変だよ その5

「りゅう兄ちゃん、この先二つ目の信号を左ね」

「左だな、オーケイ」

俺らに乗せたトラックは、2車線の大通りを走っている。免許を取ってから、はじめてトラックの運転をする、というりゅう兄の言葉にちょっとびびらされたが、実際に走らせてみると別にヘタクソということもなく、快調に進んでいる。

また、ケイのほうも順調のようで、何も見ていないのに適宜^{てきぎ}りゅう兄に指示を出して、ちゃんとナビの役割を果たしている。

それは、まったく不満はない。トラックの座席も、思っていたより座り心地がいい。

が。

「うわあああああー！だああああー！だああああー！だああああー！」

ひっきりなしに後ろから聞こえる叫び声に、俺はすこし参っていた。この叫び声、実はトラックが走り出してからずっと聞こえているのだ。と言ってもトラックが叫んでいるみたいな怪奇現象の類ではなく、ドアミラー越しに後ろを見ると、その声の主が確認できる。

赤と黒のライダースーツで全身を包み、黒い髪を振り乱したそいつは、すでに時速80キロは出ているこのトラックの後ろを、叫び声をあげながらつかず離れずの距離を置いて、全力疾走でついてくるのだ。これもある意味怪奇現象だ。

「ヒビキの奴、あの叫び声はどうかならねえもんかね？」

そう。そいつこそ、ヒビキだった。銀色のマフラーを靡かせ、赤い風となつて、本当にトラックの後ろを二本足で走って追いかけて来ているのだ。

人間はたしかオリンピック級のスプリンターでさえ時速40キロが限界で、しかも10秒程度しか走れないはず。馬だつて時速60キロが限界だ。それなのに、ヒビキの奴はそれをはるかに上回る時速

80キロで走る車に、5分以上もあの二本足でついてきているのだ。これは、さすがバイクと言つべきなんだろうか。

「あああああああああー！ー！ー！ー！がああああああー！ー！ー！」

なんか、どっかの都市伝説で、ものすごいスピードで車を追いかける婆さんの話なんてものがあつたのを髣髴ほうふつとさせる姿だ。しかも、ヒビキの場合はそれに輪をかけて怖い。その凄まじいスピードや、振り乱した髪は確かに鬼気迫る迫力だが、こいつの場合なによりこの叫び声が怖い。

なんの予備知識も無くその姿を見たら、夜寝たときに夢に出てうなされそうだ。

「……あ、もしかして」

突然、ケイが口を開く。

「どうしたケイちゃん。道順でも間違つたかい？」

「ううん、道の話じゃなくて、ヒビキお姉ちゃんのこと。あの声つて、オートバイや車が走るときの、エンジン音のつもりなんじゃないかな？」

なるほど、と思つてしまった。言われてみれば、ヒビキの名前の由来、それこそが、エンジン音の大きさからだったんだ。

「そうは言つてもなあ、アレは怖えぞ」

ハンドルを握りながら、りゅう兄がちらりとサイドミラーを見やる。

「だあああああー！ー！ー！ー！うらあああああー！ー！ー！」

そこには、髪を振り乱しながら、スピードダウンする様子すら見せないで追いかけてくるヒビキの姿が、はっきりと映っていた。

「あ、りゅう兄ちゃん。そこ曲がったらスピード落としてね。道が狭くなつてるから」

「んじゃそろそろ減速しといたほうがいいな」

つて、ちよつと待て、最近の携帯サービスはそんなことまで分かるのか？

と思う間もなく、アルミバンはスピードダウンを始めた。

04・引越しは大変だよ その5（後書き）

どうも、作者です。

仮にもバイクなんだから一度はヒビキにも走ってもらわなきゃと思い、都市伝説で有名なターボ婆ちゃんよろしく走ってもらいました。

街中でこんなのが走っていたら交通事故が多発すること間違いなしですが、そのへんは見逃してくださいw

次回はいよいよ引越しの家が登場します。

乞うご期待！

04・引越しは大変だよ その6

ききーっ。

閑静な住宅街の一角に、ブレーキ特有の甲高い音を立てて、アルミバンが停車する。

「はー……コレか」

アルミバンから降りた俺は、その目の前にそびえる建物を見て、思わず声を上げてしまった。

まず、思っていたよりずっとでかい。屋敷と言ってもいいんじゃないか、と思うぐらいだ。しかも、築10年とは思えないほど綺麗な状態で残っている。さらにその前にある塀の長さから想像するに、結構広い庭があると思われる。

なんか、ある程度成功した芸能人が見得をはって建てた家を想像してしまう。

「これはまた、ご立派な家じゃないの」

その家を眺めたヒビキが、俺の肩をぽんと叩いて、同じように屋敷を見上げる。

そのヒビキなんだが、少し息を弾ませてはいるが、馬も真っ青なスピードで走ってきたとは思えないほどに平然としている。

「お前、大丈夫なのか？」

「いやー、久々に走ったけど、やっぱり気持ちいいもんだね。もうちょっと走っていたかったんだけどねえ」

ヒビキは、俺が心配したのがバカだった？と思うほどあっけらかんと、そして楽しそうに答えてくれた。

「あ、将仁さん、お疲れ様です」

門の前で踏み出せないでいると、その屋敷の玄関のドアが開いて、見覚えのある女の人が顔を出した。

「こんにちは、常盤さん」

俺に続いてアルミバンの座席から降りたケイが、ぺこりとその人、

常盤さんに挨拶をする。どうやら常盤さんは家の中を掃除していたらしく、いつものジャケットを脱いで、腕まくりなんかしている。そして俺も挨拶をしよう、と思った矢先。

「遅いではないか、上官殿。我を待たせるとは、良い度胸だ」
聞き覚えのある、偉そうな声が入ってきた。

まさか、と思つて、その声が出たほうを見ると、そこには腕を組んで不遜な笑みを見せる和装の女の子の姿があつた。

「し、シデン!? なんでいるんだ!??」

「ふふん、貴様の行動など全てお見通しよ」

驚く俺を見てよほど嬉しかったのだろうか。すっごくうれしそうな顔になっている。

「なあに言つてんだよ、あたしらの頭の上をずーっと飛んでついてきていたくせに」

「うっ、うっうっ、うるさいっ、黙れ黙れ黙れっ! 貴様誰の許しを得て口を開いておるか!」

だが、ヒビキがばらすと、真っ赤になつてしどろもどろになる。なんか子供っぽい。

なるほど、空を飛んできたわけね。

「な、何を笑つておるのだ上官ッ!」

「いや、かわいい奴だなと思つてさ」

「なっ……」

「ふふふっ、面白い方ですね」

常盤さんまでが笑い出し、シデンはさらに真っ赤になり黙り込んでしまった。

「そんじゃ、あつちで待つてる連中もいるこつたし、とつと荷物を下ろしましょうや」

なにが「そんじゃ」なのかは知らないが、アルミバンから降りてきたりゅう兄に促され、俺らは全員で荷台の前に移動する。

いや、一人、移動しない奴がいた。

シデンだ。さつき茶化されたのがよほど堪^{こた}えたのだろうか、あれか

らずーっと突っ立ったままでうつむいている。

「何やってんだあいつは。ケイ、ちょっと呼んできてくれ」

「はい」

気持ちいい返事をして、とててと、ケイがシデンのところに走っていく。

「それにしても、将仁。よくこんな家見つけやがったなあ」

「俺じゃないよ、常盤さんの家だって」

りゅう兄がかけてくる言葉をはぐらかしつつ、俺はアルミバンの後ろ扉に手をかけた。

がちゅん。と重い音を立ててアルミバンのドアロックが外される。

「せーの、よいしょっ」

そして、扉をりゅう兄といっしょに開く。

「もう、やっと開いた。着いたのならばすぐに開けなさい」

「本当です、全く待ちかねましたでしょう」

すると、その中からいきなり声が聞こえた。

「れ、レイカ、テルミ、なんでここにいるんだ!？」

そう、アルミバンの中から家具と一緒に出てきたのは、テルミとレイカの大量電化製品コンビだった。しかも、いつもの格好で平気な顔をしているテルミに対し、レイカはよっぽど暑かったのだろうか、どこからかうちわを持ち出して着物を思い切りはだけさせた状態ではたばたと扇いでいる。

レイカの奴、着物なんか着ているくせに日本人離れしたスタイルしているもんだから、正直、目のやり場に困る。

「なんでって、乗ってきたからに決まってるじゃない」

はだけた着物を直してから、レイカが荷物をひとつ持ってひよいと飛び降りる。

「もう、気がついてくれないなんて。将仁さんったら、ちょっと薄情でしょう?」

同じように荷物をひとつ持って、テルミもアルミバンの中から降りてきた。

どうやら、気がつかないうちにこの2人を入れたままドアを閉めてしまったらしい。

「そうそう、常盤様。家の中を、案内していただけないでしょうか？」

あ、そういえば、引越したとはいえ常盤さんの他はこの家の中のことを知らないんだっけ。荷物をどこから入れるかとかも考えないといけないし。

「ああ、そうですね。じゃあ、今から案内しましょう」というわけで、トラックの扉を閉めると、全員でその新居の中に入っていた。

04・引越しは大変だよ その6（後書き）

どうも、作者です。

やっと引越し先に到着です。

これから先は、ここがメインステージになります。

感想・評価・苦言・提言などお待ちしていますので、良ければ書いて行ってやってください。

それでは、次回も乞うご期待！

04・引越しは大変だよ その7

「うっわぁー、ひろーい！」

真っ先にリビングに駆け込んだケイが無邪気にはしゃぐ。

確かに広い。そのリビングだけで、1時間前までいた部屋全部と同じぐらいの広さがある。しかもそこには大きな窓が2方向にあり、テラスがあつてそのまま庭に降りることができる。とても開放的でいい。

「ええと、アンテナ線のコネクタは、と……ああ、やっぱりここだったでしょう」

テレビであるテルミは、やっぱりそのアンテナ線のある場所が気になるらしい。

「ふむ、カウンターがあるのね。これなら、すぐに料理が出せるわ」そのリビングはダイニングを兼ねており、キッチンに隣接している。そしてそのキッチンに真っ先に入ったレイカが、そこからダイニングを見ている。

「2階にもトイレがあるんだな。さすが広いだけはあらあ」
2階にあがつたりゆう兄がトイレを見つけて感心した声をあげる。

確かに、実家には1階にしかトイレはないがそれで十分だった。

「ふむ、これが畳というものか。涼やかで良いものだ」

北のほうにある和室に入ったシデンが、部屋の真ん中に正座してつぶやく。元はラジコンだったくせに、なんか妙に似合っている。

「いやーいいねえ。日当たりがいいし、風通しもいいし、アパートの駐輪場とはほんつとに大違いだねえ」

庭の西にある駐車場に立ったヒビキが、大きく伸びをしながら江戸っ子のおっさんのような言葉を吐き出す。

そして俺は。

「こない家なのに住んでいなかったなんて、常盤さんも不思議な人だよな」

そう思いながら、2階のある一室をながめていた。そこはドアがひとつと、ちよつとしたバルコニーがあつて、今までいた部屋と似た環境だ。

個人的に、俺はここを自分の部屋にしたいと思った。なにしろ、ちよつと情けない話だが、女だらけの家に住む者として、男としてのプライベートスペースは絶対に欲しい。

「このへんに机を置いて、本棚はこのへんかな、ベッドは北枕にならないようにすると……」

「楽しそうですね」

「うえっ!？」

誰も見ていないと思つて、まだ持ち込んでいない私物のレイアウトを考えていたら、いきなり声をかけられてしまった。

見ると、いつのまにいたのか、ニコニコ顔の常盤さんが部屋の入り口に立っていた。

「とつ、常盤さん、いつから見ていたんですか？」

「今来たところです。それより将仁さん。みなさんが、下に集まっていますよ」

「あ、はいはい」

そう言われて、俺はあわてて部屋を出た。

そして、常盤さんの後を追つて階段を下りようとしたとき。南西にあるバルコニーへと続く部屋に、見覚えのないダンボール箱が積み上げられているのが目に入った。箱の大きさは一抱えぐらいで、表面には何も印刷されていない全くの無地。よくテレビでマルサとかが踏み込んで運び出すあのダンボール箱によく似ている。

が、異常なのはその量だ。一つや二つなら気にならないが、今のダンボール箱は、狭くない部屋の中に茶色い壁を築いているのだ。ざつと見ただけでも30〜40個ぐらいはあるんじゃないだろうか。

「常盤さん、ちよつとすいません」

階段を降りかけていた常盤さん呼び止めて、上に来て貰う。

そして、この荷物についての心当たりを聞いてみたところ、常盤さ

んは聞き捨てならない答えをしてくれた。

「ああ、これですか。私の荷物です」

「え？わたしのって、常盤さんのですか!？」

「ええ。ほとんどは、弁護記録などの書類ですけれど」

なんでも、弁護士はそういう書類は一定期間必ず残さなければならぬんだそう。って、そういうことではなくて。

「なんでそんな書類がここにあるんですか？」

「あら、この家の名義人は私でしょう？そこに私のものがあることは不自然ではないことだと思つのですが」

確かに、ここの名義人は常盤さんだ。でもここに住んでいたわけじゃないはずだ。それにこの量は尋常じゃない。

まさか……

「もしかして、常盤さんも、ここに住むんですか？」

「近くにいて、すぐに連絡を取り合えるようにしておいたほうが、お互いに都合が良いと判断しましてね」

ダメですか？と常盤さんは聞いてくるが、そんなのダメといえるわけがない。平穩だが退屈な毎日を過ごしていた俺に、疲れるけど賑やかで楽しい、そして他人からみたら羨ましいだろう（俺も第三者だったら羨ましがる）新しい日常を与えてくれた恩人なんだから。

うちのモノ軍団のことを判っている人だし、何より弁護士という社会的地位の高い人だから味方に付けておいたほうがいい、という打算があつたことは、わざわざ言わなくてもばれているだろうからあえて言うことは止めておく。

来た早々、家の中が少し狭くなったな。そんなことを考えながら、俺は荷物下ろすのために下りていった。

04・引越しは大変だよ その7（後書き）

どうも、作者です。

今まで別居していた常盤弁護士と一緒に住むことになりました。

正直、弁護士の部屋ってどんなふうになってるのか良く判らないので、適当になっちゃいましたが、その辺は見過ぎてください。

なお、感想・評価・苦言・提言など今後もお待ちしていますので、良ければ書いて行ってやってください。

それでは、次回も乞うご期待！

04・引越しは大変だよ その8

荷物を半分ほど運び込んだ頃、りゅう兄がクリンと鏡介を乗せて帰ってきた。

所詮は一人分の荷物。これだけの大人数で運べばすぐに終わってしまう。というわけで、昼を少し回ったところで、荷物の運び込みは全て完了してしまった。

「みんなーごはんできたよー！」

そして、俺が荷物を解いていたところに、ケイの呼び出しボイスが響き渡った。

「もうそんな時間か」

「いくぞ鏡介。遅れたら全部食われちゃうぜ」

本棚に本を入れてある鏡介に声をかける。そして、もうちよつとで終わるとのことだったので手伝うことにした。

「あら、将仁さん、鏡介さん。ごはんは？」

そこに、別の部屋で自分の荷物の整理をしていた常盤さんが顔を出した。

「あ、常盤さん。あと少しで終わるんで」

「将仁さん、大丈夫ですよ、俺一人でもできますから」

「いいって、それに、どこに何が入っているか把握しとかないと後で困る」

これはホントのことだ。明日の用意をするときになって、教科書がない参考書がないなんてことにはしたくない。

「よし終わった。じゃあ行くか」

「おにいちゃん、鏡介おにいちゃん、常盤さん、早くー！みんな待ってるよー！」

立ち上がるのと同じタイミングで、ケイの呼び出しボイスが再度聞こえてくる。

「早く行きましょう。あまり待たせたらかわいそうでしょ？」

常盤さんに促され、俺らは1階に下りて、ダイニングへと向かった。「もう、お兄ちゃんたち遅いよ、ケイもうおなかぺこぺこだよ」

下につくや否や、ケイに引つ張られてダイニングへと向かう。

ダイニングには今まで使っていたテーブルを持ってきていたんだが、なにしろ椅子が4脚しかないの、そのテーブルは脇によせて、床にごさを敷いて、そこに各種のおかずが置かれている。

なんだか、山小屋でメシを食っているような感じだ。

「よう、先に頂いてるぜ」

最初に声をかけてきたのは、あぐらをかいたりゆう兄だった。行儀が悪いことに、左手で茶碗を、右手で魚を箸でつまみ上げてこっちに合図を送っている。

「龍之介さん、行儀が悪いでしょうっ！」

その向かいでは、正座して吸い物のお椀を置いたテルミが眉を吊り上げる。その横では。

「離さぬか貴様」

「やだね、あたしが先に取ったんだぜ」

「何を言うか。先に狙いをつけたのは我だ」

中腰の状態でひとつのアジフライを器用にふたりでつまんでにらみ合うヒビキとシデンがいて。

「まさひとさあん、こっちですよお」

正座した状態で手をひらひらさせるクリンがその横にいた。

「ああ、ケイちゃん、いい所に来たわ。これを持っていつてちょうだい」

「はいー！」

そのとき、キッチンのカウンターからレイカが顔を出し、そしてカウンターに大きな器を置いた。

器の中には、ニンジンやレンコン、シイタケ、大根、鶏肉などの煮物、いわゆる筑前煮がたっぷり盛り付けられている。ぷんと匂う醤油のにおいが食欲を刺激し、よだれが出そうになる。

「いいよ、俺が持つていく」

思わず手が伸びて、その器を持ち上げてしまった。

「えー？でもケイがいわれたのにい」

「このぐらいいいって。ケイだって疲れてるだろ」

真っ先に食いたいたいからだ、というのは伏せておく。

「レイカさんも早めに切り上げてメシにしましょうよ」

「ええ、ちようど終わったところだし」

鏡介が声をかけると、レイカは厨房からタオルで手を拭きながら出てきた。その姿に、何となくだが実家のお袋を連想してしまう。

「将仁くん、何か言いたいことでも？」

ちよつと不思議そうな顔をされてしまった。お袋を連想したただなんて言えるか！

「な、なんでもない」

「そう」

レイカはそう言つと、もう関心がなくなったようですささと自分の席についた。

04・引越しは大変だよ その8（後書き）

どうも、作者です。

引越したばかりなのにもう生活感がいっぱいですw

大家族の食卓ってこんな感じかなと想像して書いております。

なお、感想・評価・苦言・提言など今後もお待ちしておりますので、良ければ書いて行ってやってください。

それでは、次回も乞うご期待！

04・引越しは大変だよ その9

「はいお兄ちゃん、お箸」

「おつ、すまんね」

「えへへー」

手が空いたケイは、先に座っていた。そして俺が筑前煮を置くと、箸を差し出してくる。

「んじゃ、いただきまーす！」

床の空いたスペースに座ると、さっそく筑前煮に手を伸ばし、レンコンをつまんで口に入れる。

しゃくつという歯ざわりがちょうどいい。煮え加減も塩加減も絶妙だ。本気で美味しい。下手な総菜屋で売っているものなんか目じゃない、食べば食うほど食欲が湧くつてやつだ。

「んぐつ！」

「ああもうお兄ちゃんったら。そんなに急がなくてもご飯は逃げないよ？」

がつつきすぎて、またメシを詰まらせてしまった。

だが、いくら逃げないと言っても、無くなることはある。なにしろ、ヒビキという大食漢がいるし、あれほどではないにしてもりゅう兄もけっこう食う。

それにその、アレだ。これからまだ増える可能性もあるのだ。

「……うちの食費、大丈夫なんだろうか？」

「ああ？」

と、俺の左側に座っていたクリンが変な声をあげる。と同時に、何か生暖かいものが俺の頬をかすめていった。

なんだ？と思つてそつちを見ると、いつもどおりのちよつと眠そうな顔をしたクリンが、吸い物をすすっているところだった。

頭にクエスチョンマークを浮かべて見ている俺に気がついたのか、そのクリンがこつちをみてにこつと笑う。

今のはなんだったんだ？と思いつながらも再びメシに戻る。すると、さつきと同じ何かが、また俺の頬をかすめていく。今度は間髪を入れずにそつちを向く。

「んあ？」

クリンが、ご飯茶碗と箸を持ってこつちを向いている。が、それを見た俺は、口の中に入れたものを思わず嘔き出しそうになってしまった。

なんでかって、そのクリンの口から、40センチぐらいのピンク色の何かが伸びていたのだ。その先は俺の顔に触れそうなところで止まっている。

俺が口の中のものを強引に飲み込む間に、そのピンク色の何かはクリンの口の中に引っ込んでいった。

「な、なにをやっているんだお前は！？」

一息ついてから、俺はクリンに詰め寄った。

「いええ、ごはんつぶがついていたのでえ」

いや、そういう意味ではなくて。なんなんだその口から出ていたモノは。

「あ、そういうえはまだ将仁さんにはお見せしてなかったんですねえ」クリンはそう言つと、あの長いピンク色の物体をまた口からべろーんと出した。

そうやって出ること、やっと「舌だ」と判つたんだが。なんだその異常な長さは。

しかも今度はその舌がひょいっと動いて俺の頬をなでていった。

「わわっ！？」

俺が反応できずにいると、その舌はしゅるしゅるっとまるで掃除機のコードのようにクリンの口の中にひっこんだ。

「んふ、ごちそうさまでしたあ」

そして、クリンはそのままとっこりと笑いながら手を合わせる。

なにがご馳走様なんだ、オイ。だいたい、お前は風呂のスポンジだろう、その長い舌は何なんだ、どっかの妖怪かコラ。

とりあえず、怒って問い詰めてもしようがないので、座りなおして茶碗と箸を持ったところで。なんか、今度は反対側に気配を感じた。「んー……」

ちらつと横目でそつちを見ると。なぜか、頬を赤らめたケイが、こつちは標準的な舌を伸ばしてもものすごく近くまで迫っていた。

「なにをしている」

「ひゃ!？」

「おわあ!？」

俺が声をかけると、ケイは目を丸くして奇声を上げ、そしてバランスを崩しかけた。

なんとか転ばずに済んだ俺は、同じようにふらついていたケイを受け止めて座らせた。

「こらケイっ、お前何やってんだ!？」

「うっうっうっ、だって、だってえ、羨ましかったんだもん」

「羨ましいってお前な……」

「だってだって、ケイだって、お兄ちゃんのご飯粒、欲しかったんだもん」

ケイの言い訳を聞くと、こつちまで恥ずかしくて体がむずがゆくなってくる。

これは、素なのか?それとも、「かわいい妹」を演じているのか?そうやって俺に取り入って、自分の立場を確保しようとかしているのか?

わからん。なんてなことを考えていると、そこにいるみんなの視線が俺に注がれている。モノたちはともかく、りゅう兄と常盤さんに見られるのは非常にはずかしい。

「とにかく、犬じゃないんだから、人の顔を舐めるのは禁止な」

ケイは、目を潤ませて唇をふるふるさせて泣きそうな顔をするが、こればかりは認めてしまっわけにはいかない。

ふと視線を感じて振り向くと、モノたちが色々な表情で俺達を見ている。

「なんだよ、こっち見るな、あっち向けオラ」
その場はなんとかそれで乗り切ったんだが。俺、ホントにやっ
けるんだろっか。
なんか不安になってしまった。

04・引越しは大変だよ その9（後書き）

どうも、作者です。

平和な昼ごはんのはずが、なんか変なことになってしまいましたw

なお、感想・評価・苦言・提言など今後もお待ちしていますので、良ければ書いて行ってやってください。

次回は、昼食も終わって、残りの後片付けですが。

そのまま何事も無いわけがありませんw

乞うご期待！

04・引越しは大変だよ その10

色々と騒々しかった昼飯が終わり、俺たちは再び荷物の整理に取り掛かることにした。まあ、整理と言っても、搬入は終わってしまったので、せいぜい箱から出して並べるぐらいだし、数も少ない。

それよりも、椅子が足りないとか食器棚がないとかいう話のほうの問題だということになり、午後は「買い物班」と「整理班」に分かれて行動することになった。

ちなみに俺は、自分の部屋の荷物が片付いていないので残ることを申し出た。俺以外では、あの山のような書類入りダンボール箱の整理がある常盤さんと、1階の整理及び掃除などをするためにケイとテルミが残っている。昼メシ前は俺と一緒に部屋の整理をしていた鏡介は、またも力仕事要員の一人として買い物班に引きずられていつている。

「りゅう兄がトラックドライバーとして向かっているわけだし、積み込むだけならヒビキがいれば充分だと思うんだけどなあ」

「ごめんなさいね、手伝ってもらって」

そして俺は、常盤さんの手伝いをしていた。なにしろ、俺の荷物なんかよりずっと多い。それを一人で片付けてたら、夜が明けるところか次の日が沈んでも終わなそうだからだ。

その荷物を開封して思ったんだが、常盤さんはよく言えばアンテイークな、悪く言えば古臭いものを好む傾向があるみたいだ。万年筆とかソロバンとかなら今でも使われているからまだいいが、めっちゃくちゃ形の古い黒電話が出てきたときには、思わず目を疑ってしまった。

常盤さん、こんなもの、まだ使う気なんだろうか。それ以前に、電話として繋げられるんだろうか。

「あら、将仁さん。パソコン、お持ちなんですね」

今では博物館入りしそうな黒電話を眺めていると、常盤さんの声が

聞こえてきた。

そういえば常盤さんの荷物の中にはパソコンとかがなかったなあ、なんてことを思いながら俺の部屋に行くと、常盤さんが机の上に置かれたモノを物珍しそうになでていた。

ノートパソコンである。水色の外装の真ん中には柑橘類を半分だけ輪切りにしたような、パソコンメーカー・オレンジ社のマークとロゴのレリーフがはめ込まれている。ずっとほったらかしだったんで引越したのを機に今度こそ何でもいいから使おうと、久しぶりにコンセントをつないで充電していたんだ。

「いや、持っているだけですよ」

「あら。そうなんですか？」

「インターネットとかやろうと思って買ったんですが、うまいこと繋がれなくて。そのまま、使わなくなっちゃったんですよ」

あけてみると、キーボードはまだ真っ白でほとんど使われた形跡が無い。使ったことがないんだから当たり前だ。俺だっぴりまどきの若者なんだからパソコンぐらい使えないと、とは思うが、それはそれでなんか難しそうな気がする。

「そうですね、最近の電気製品って、本当に複雑ですよ」

すると、常盤さんはぱつと表情を明るくして、ITに対応できないで時代に取り残された中高年のおっさんのような発言をする。

それでいまどきの弁護士の仕事ができるのか？と思ったら、なんと常盤さんは書類は全部手書きで、計算はソロバンでやっているんだそうだ。ということは、常盤さんはここにある山のような書類を全部手書きしたことになるのか。

「常盤さんって、ずいぶんとアナクロな人なんですね」

「これでも結構昔に生まれましたから」

そして常盤さんがにっこりと笑う。顔に目立つシワとかがあるわけでもないし、白髪があるわけでもなし、女性だから髪が薄くなるわけでもなし、そんな年には見えないんだが、もしかして意外にお年を召しているんだろうか？

が、聞けない。聞いちゃいけないような気がする。

「うーん、インターネットのこと、お前が、直接教えてくれればなあ」

ごまかそうと思って、そのノートパソコンを撫でる。

それが間違いだった。

きいいいいいいん。

聞きたいような聞きたくないような、あの、耳鳴りのような音が、聞こえてしまった。

「やべっ！」

思わずそんな言葉が出るがもう手遅れだ。

後悔する間もなく、引越し後一発目の発光現象はこうして訪れてしまった。

「うわーいっ！」

目の前が、目も開けないほどの真っ白い光に包まれ、俺は目を閉じてしまった。

04・引越しは大変だよ その10（後書き）

どうも、作者です。

あんなアナクロナ頭で弁護士なんかやってられるのかと仰る方もおられるかもしれませんが、そこは仕事をしぼっているからだと理解してください。

そのほかにも、感想・評価などお待ちしていますので、遠慮なくお願いします。

さて、ラストにああいうシーンが出たということは。

お待ちかね（待ってないか）新しい擬人化の登場です。

さて、どんな子が出るのか。乞うご期待！

04・引越しは大変だよ その11

「Hi, Master!」

光の向こうから、また知らない女の子の声が聞こえた。

目を開けると、まだほとんど使っていないノートパソコンが、光といつしよに消えていた。そしてそのかわりに、俺の机の上に、知らない女の子が腰掛けて、大げさに手を振っていた。

どこかの高校の制服みたいな、袖は白くて体の部分が水色のブレザーに、白地に黒のチェックの膝丈ぐらいのスカートを身に着け、明るい金髪の巻き毛が印象的な、そしてどう見ても日本人じゃない顔つきの女の子だ。ふちのない丸いメガネをしており、胸元には、電源スイッチみたいなマークがついたブローチをつけている。

「Nice to meet you! I'm glad to see you, Master!」

そしてその子は、なんともネイティブな発音でそんなことを口にした。

「は?」

いきなり英語で言われると言葉が出てこない。俺がぼかんとしていると、その外人っぽい子はひょいと机から飛び降りて、今度はちょっとたどたどしい日本語で話しかけてきた。

「ハジメましテ! 才会いできテ嬉しいデス、マスター!」

「.....まさか?」

「イエス。I'm your PCデス。My best regards (よろしく), Master!」

アメリカのメーカー製だからなんだろうか、その子は英語交じりの言葉を口にしながら、満面の笑みを浮かべ、俺の手を強引に両手で取ってぎゅつと握ってくる。

なんか仕草が大げさなんだが、これもやっぱりメイドインUSAだからなんだろうか。

と、そこまで近づかれて、その子は顔だけじゃなくて首から下も日本人離れしているのが判った。とにかく、着ているブレザーがはちきれそうなほどに胸がでかいのだ。そのわりにウエストなんかは結構余裕があるみたいだ。

「Master、アナタ、とてもとても、薄情デス」

それに圧倒されていると、その子は握ったままの手を胸元までもちあげ、寂しそうな、それでいて責めるようなまなざしで俺のことを見つめてきた。

「へ？」

「ミーのこと、ちょっとoperate（操作）して、あとはずっとneglect（放置）しまシタ。ミーは、very very lonely（とてもとても寂しい）だったのデス」

そして、その子はいやいやするような仕草をする。

「いや、それは、その……ごめん、えーと、I'm sorry」

確かに、電気屋の店員に薦められたとはいえ、欲しいと思って買ったのは俺だし、使わないでお蔵入りさせてしまったのも俺だ。お蔵入りさせていたモノ自身から責められるとは思わなかったが、悪いのは確かに俺だから言い訳はできない。

だから、俺は素直に頭を下げた。

04・引越しは大変だよ その11（後書き）

どうも、作者です。

陽気なスーパーコンピューターの登場です。

パソコンの擬人化というのはけっこう見かけますがなぜかロリっばいが多いので、奇をてらって巨乳にしてみましたw

こんなのがマイPCだったらメールもろくにできなくなりそうです。

さて、出てきた子にいきなりひどい人といわれてしまった主人公ですが、これからどうなるのでしょうか？

乞うご期待！

04・引越しは大変だよ その12

これからどんな罵声が飛んでくるのか、ちょっと怖かったんだが。その頭の上から聞こえたのは、想像とは全く違う愉快そうな笑い声だった。

「アハハハハッ、気にしナイでください、Master」
そして、ぱつと手を放された。訳が判らずに顔を上げると、その子はとても楽しそうに笑っていた。

「ミーは、not angry(怒っていない)です。Masterが、internet(インターネット)にPlug-in(プラグイン)できないだったのコト、ミーは覚えてマス。全部、ミーがteach(教える)できるとgoodだったですが、あの時のミーには、handも、mouthも、なかつたです。Don't worry(心配要りません)、Master!」

それどころか、逆に、俺のほうが慰められてしまった。なんというか、元から人間だった俺のほうが、人間ができていないなーと思わされた。

「ええと、なんて呼べばいいのかしら?」

俺の後ろから、今まで事の成り行きを見守っていた常盤さんがようやく口を開いた。

「Ah. Hello, Miss.....Hm.....」
(あ、こんにちわ、.....ええつと.....)

「Kaneyo. I'm Kaneyo Tokiwa. Niceto meet you.」(花音代、常盤花音代です。よろしく願います)

「Oh, can you speak English?」(あら、英語が喋れるんですか?)

「Of course. The ability of English conversation is indispensable

able to the lawyer. Aren't you
?」(もちろん。弁護士にとって、英会話の能力は不可欠ですから。
)

「Wow! Are you really a lawyer?
(わあ！本当に弁護士さんですか!?)」

「Surprised?」(驚きました?)

その子と常盤さんは、ぼかんとする俺の前で、なんと英語で会話を
して盛り上がっている。知らなかった、常盤さんって、英語も話せ
るんだなあ。

って、ちよつと待て。

「おい、ちよつと待ってくれ、日本語で話してくれ、日本語で」
こんなふうにベラベララツと話されると、わからないことはない
が正直言っについていけない。

「Oh, sorry, My master. English
のほうが、easy to speak(話しやすい)デスから」
すると、その子はちよつとぼつの悪い顔でこつちに顔を向けた。常
盤さんも、すまそうな顔でこちらを見ている。

「あ、いや、日常会話レベルだから、判らなくはないんだけどさ、
正直、ちよつとついていかれないというか、口が出せなくて」
でも、考えてみればこれは、英語の勉強になるかもしれない。まあ
こいつの英語が本当の英語だとすれば、なんだけどな。

「So, Master. ミーとcommunication
コミュニケーション)をしまシヨウ。Please name f
orme.(私に名前をつけてください)」
すると、むこうからコミュニケーションを取ってきた。

「ん、な、名前か。……オレンジ社のパソコンだから……
……ミカン?」

口にしてから、失敗したと思った。どう見ても日本人ではないこい
つに、こんな和風な名前をつけたって似合うわけがないじゃないか。
「……んー、prettyですケド、もつとsharpの

ものを、pleaseです」

まあ当たり前だろうな。でも、シャープってなんだよ。

「それじゃ……バレンシアは？」

うちのモノ軍団はみんなもとのモノに関係があるところから名前をつけているから、同じように考えたんだが、オレンジというとミカンに関連したものしか出てこない。その中のバレンシアオレンジから強引に取ったんだが、なんか自分の語彙いひごの乏しさにちょっと悲しくなってしまう。

「Valencia……OK、sharpでprettyでgoodです。では、今から、ミーはバレンシアです。よろしくお願いをするです、Master！」

「わ!？」

と言うや否や、その元パソコン娘は俺に思いっきり抱きついてきた。こんな所までアメリカンなのか?と思つた俺の胸に、なんか幸せな感触があつてちょっとにやけてしまいそうになるが、こんな所を他の連中に見られたらまずいので顔を引き締めた。

すると、その子、バレンシアは常盤さんにまで抱きついていて。さすがの常盤さんも、これにはちょっと驚いたみたいだ。

「お兄ちゃん、常盤さん。そろそろ休憩にしようよー」

その時、俺の耳にケイの声が聞こえてきた。

ケイがバレンシアのことを見てどんなことを口にするか、常盤さんと思わず顔を見合わせて苦笑してしまった。

04・引越しは大変だよ その12（後書き）

どうも、作者です。

パソコン娘に名前がつけました。

今までと比べて色々と毛色のちがうキャラですが、じっくり見守ってやってください。

ご意見・批評・感想などお待ちしています。
よかったら一言かきこんでいってください。

次回、バレンシアがモノたちの前に現れます。
モノたちはどんな反応をするでしょうか？
乞うご期待！

追伸：あやしいと指摘された英語を直してみようとしたんですが、
どうもうまくいきません。やっぱり苦手なことはしないほうが良か
ったようです（TTT）

「お兄ちゃん大丈夫！？ケガはない！？」

「すいませえん、あと少し早ければ、受け止めることができたんですけどお」

「んもう、将仁さんを投げるなんて、ありえないでしょう」

そしてケイとクリンとテルミが俺に駆け寄って、起こしてくれる。

「くっ、おっ、降りろレイカっ、我はあの軟派な輩に天誅を加えなければならぬのだっ」

「天誅なんてバカなことを言っていないで、頭を冷しなさい」

そして声のほうを見ると、床に押さえつけられうつぶせになったシデンの背中の上にレイカが正座して乗っており、シデンはその場でじたばたしていた。空を飛ぶ力のあるシデンも、基本的な体力は普通の女の子程度しかないらしい。……元冷蔵庫だからレイカが重いのもかもしれないが、でもそんなに重そうには見えないうんだがな。

「降りろおおっ！レイカ、貴様は自分以外に目を向けられて、悔しくないのかあっ！」

「私は、あなたが呼ばれるひとつ前に呼ばれました。でもそれを怒ることはしませんでした」

下でじたばたするシデンに対し、正座の状態で器用にバランスを取りながら、レイカが平然と言い放つ。

「将仁さん、その新人さんがこっちを見ているわよ」

その中で、唯一傍観者としてなりゆきを見ていた常盤さんが、俺のところに来てそう耳打ちする。

思い出してそつちを見ると、中の騒ぎを聞いていたらしいバレンシアが、心配した表情でドアの陰からこちらをのぞいている。

「あ、ごめん、入ってきてくれ」

「Hello, everyone! My name is Valencia. I'm personified from Mr. Masahito's laptop computer. Nice to meet you!」

招き入れると、ぱつと笑顔になったバレンシアが、いきなり英語で自己紹介をして飛び込んできた。なんとというか、相変わらず大げさな奴だ。

それに反して、在来モノ軍団の反応は、鈍いというか、なんとも薄いものだった。さっきのシデン取り押さえで疲れちゃったのか？

「・・・・・・・・ええと」

その沈黙の後、ぼつりとレイカが口を開いた。

「何て言ったの？」

その一言で、その反応の薄さの理由が一つ判った。英語が、聞き取れていなかったらしいのだ。

「悪い、バレンシア。話し辛いかもしれないけど、日本語で言いなおしてくれないか？」

「Oh, I see .」

だから、そこで英語で答えるなつて。大丈夫か？

「それデハ、日本語で、言いなおします。ワタシの名前は、バレンシアデス。将仁さんの、ノートパソコンカラ、擬人化しまシタ。よろしくお願いしまース！」

俺の心配は杞憂だった。バレンシアは、相変わらず片言ではあるが日本語でちゃんと自己紹介をして、今度は日本の風習に合わせてか、最後にお辞儀をした。

その瞬間、在来モノ軍団の雰囲気が変わった。

「なんだい、あたしらと同類かよ」

そんなことをヒビキが口にした。後でできいてみると、バレンシアのことを「何かから擬人化した存在だ」ということは判ったが、俺以外の奴によって擬人化したのが送り込まれたんじゃないか、と思っ

て警戒していたんだそうだ。
送り込む、は判るんだが、擬人化なんて冗談としか思えない力を、俺以外に持っている奴がいるのかと、思いつきり突っ込みたくなっ

てしまった。
「ま、そういうわけだから、みんなよろしく頼むよ」

あんまりいろいろ言うと話がややこしくなりそうなので、俺からの紹介はその程度にしておく。それよりも個性的な子が話に花を咲かしているのを見ているほうが楽しい。

とそこに、りゅう兄がにやにやしなからすすすと近寄ってきて。

「将仁お、引越したその日にさっそく新人を呼ぶなんて、お前もずいぶんと気が多くなつたねえ。お兄ちゃんは嬉しいぞお？」

なんてなことを言いながら俺の肩を組んで空いた手の親指を立てる。

「バカ言つなよりゅう兄、ありやモノだぞ、ノートパソコンだぞ？」

「照れるな照れるな。男の夢、ハーレムに向かってがんばれよお？」

お兄ちゃんは応援してっからな！」

そう言ったりゅう兄は、なにが楽しいのか俺の頭をがしがしとこね回すと、がっはっはと笑いながらモノ軍団のほうに行ってしまった。

04・引越しは大変だよ その13（後書き）

どうも、作者です。

なんかシデンと兄貴がかつとばしていますw

個人的に、シデンは結構お気に入りだったりします。

それでは、次回も乞うご期待！

04・引越しは大変だよ その14

そういえば、常盤さんも、気がついたらそのモノたちに混じっておしゃべりをしている。妙になじんでいるんで、なんか常盤さんまで何かの擬人化なんじゃないかって気がする。

まあ、家族が増えてにぎやかになるのはけっこうなことだ。・・・
・ちよつと増えすぎのような気もするが。

「そういえば。バレンシアさん。あなた、パソコンだったのよね。データの処理とか得意かしら？」

そのバレンシアに、常盤さんがそんなことを聞いてくる。

「Eh？」

「データ処理って、常盤さん、データなんか持っているんですか？」
たしか、常盤さんって、未だに黒電話を使っていて、弁護士書類は全部手書きしていて、計算はソロバンでやっているんじゃないかってっけ？

「ええと、最近のパソコンって、書類を読み取ることができるのよね？」

「Ah, scanning of dataのことデスねー？ Maybe できマース！」

バレンシアは、常盤さんの申し出に簡単に答えると、左手を後ろに回し、何かを取り出した。

「Everyone, look here」.

それは、雑誌程度の大きさの四角い板で、皆に向けているほうに絵が描かれている。と思ったら、それはどうやらノートパソコンのディスプレイのようだ。

ディスプレイを左手で持ったバレンシアは、その片隅に開いたウィンドウを右手で指差す。そこには、見覚えのある一団が、真正面よりちよつと横を覗き込む様子が映し出されている。

「ああー！？もしかしてこれってケイ達！？」

その瞬間、ケイが声をあげた。そう、そこに映っているのは、リビングに集合して、バレンシアのディスプレイを見ている俺たちの姿だったのだ。どうやら、彼女が見ている光景が、そのままウィンドウの中に映っているらしい。

「イエース！ミィは、lookしたdataをrecord&playできるのデース！」

そして得意そうに胸を張る。おかげで、本人はそんなつもりはないんだろうが、ただでさえ目立つ胸がさらに強調される。

確かに誇りたいような胸ではある。鏡介とりゅう兄は（自分の顔は見えないが多分俺も）ちよつと鼻の下を伸ばし、ケイは自分のそれと比べてしょぼーんとしてしまい、シデンは悔しそうに歯をかみ締めている。それなりのものを持っているヒビキやレイカ、クリンも無関心ではいられないらしく、ちらちらと画面ではなくバレンシアの胸に目をやっている。

「あの、ひとつ、よろしいでしょうか？」

その中で、妙に落ち着いている奴が一人いた。その落ち着いている一人、テルミが、小さく手を上げる。

「その程度のことなら、私にも出来るでしょう」

「へ？」

その瞬間、今度は全員の視線がテルミに集中する。

「ホントか、テルミ？」

テルミって、テレビだよな？そんな機能あったか？

「はい。ご覧になりますか？」

だが、静かに立ち上がった彼女は、特に驚いた様子もなく自分のマントに手をかける。

そしていつものように一旦閉じたマントを広げると、その下から60インチのディスプレイが現れる。

俺らにとっては見慣れた、というほどでもないが免疫のある光景だが、初めて見るバレンシアにとってはこのでかさは衝撃だったらしく、目を丸くしている。

「では皆様、画面をご覧ください」

そして、テルミが手を打つとスイッチが入り、60インチの画面に見覚えのある映像が映し出される。

さつきバレンシアが見せた映像に似ている。それもそのはず、そこに映っているのは、やはり今のこのリビングの光景だった。それも、うちのメンバーが勢ぞろいして何かを覗き込んでいる、確かにテルミが見ているであろう光景だ。

「見た画像を記録して再生するぐらいなら、私にも出来るでしょう。私はHDD&DVDプレイヤー内蔵の、ハイビジョンプラズマテレビですから」

平静を保ちながらも、テルミが少し得意げになっているのがわかる。そしてその目は、後輩にあたるバレンシアに向けられている。

まさか宣戦布告か？と思ったが、テルミに見られていたバレンシアは、ちよつと苦笑いを浮かべ、左手に自分のディスプレイを持ったまま両手を挙げていた。

「OKOK, give upデス。ミーにはそんなwide displayはありませーん」

そして、左手のディスプレイを後ろにしまった。なんとなく落ち込んでみるみたいだ。

それを見てテルミもマントを閉じてもとの姿に戻る。

「お前らな、張り合うのはいいけど、ケンカはすんなよな」

ひと段落したところで、そう言うておく。引越したその日のうちに大喧嘩なんて事態は俺的にも避けたいし、まだ引越しは完了していないんだから。

「さて、それじゃ話を戻しましょうか」

どうやら、その話が終わるまで待っていたらしい。常盤さんが、ぱんと手を叩くと、バレンシアのほうに向き直った。

04・引越しは大変だよ その14（後書き）

どうも、作者です。

バレンシアは、これから先、常盤さんの秘書みたいな感じで活躍させる予定です。

こんな作品ですが、ご意見・ご感想などがありましたら遠慮なく下さいませ。お待ちしております。

それでは、次回も乞うご期待！

04・引越しは大変だよ その15

「バレンシアさん。あとでお願いしたいことがあるのだけれど」

「What?」

テルミの大画面プラズマディスプレイを見て自信を無くしたのか、バレンシアの声が暗い。

「ええ。2階に、私が持ってきた資料があるのだけれど、それを記録して欲しいの」

どうやら、常盤さんは自分が持ってきた弁護士資料の一部を電子データ化したらしい。さすがにあのハンパない量の資料は常盤さんもどうにかしたいと思っっていたみたいだ。

「どう、できるかしら?」

常盤さんがそう聞いた瞬間、バレンシアの表情がぱつと明るくなった。

「Yeah!できマース!やらせてくだサーイ!neglectされるのもうunpleasantデース!」

そして、常盤さんの手をとってぶんぶんと上下に振る。別に俺もやりたくてneglect、つまりほつたらかしていたのではないのだが、あんなに嬉しそうにされては文句は言えない。

「ネットへのつなぎ方、聞きそびれたな」

ぼろつと、そんな言葉が俺の口から漏れる。

「お兄ちゃんつて、インターネットに興味があつたの?」

すると、いつのまにいたのか、ケイが俺のすぐそばで、なんかちょっと暗い表情でそんなことを聞いてきた。

「へ?ああ、ちよつとな」

そんな深刻な顔をして聞くようなことではないと思うのだが、確かにパソコンを買った一番の理由はそれだから、正直にそう答える。

すると、なぜかケイは俺の右腕にぎゅーっとしがみついてきた。別にそんなことをしなくても俺は逃げるつもりはないんだが。と思っ

たら。

「なああああんでケイに言ってくれないのおおおおっ！ケイだつてっ、インターネットに接続するぐらいはできるのにいいいっ、わざわざパソコンに手を出すなんてええええっ！お兄ちゃんのうちわきものおおおおお！」

思わず何かを噴出しそうになる。ちよつと待て、なんでそうなるんだ。

「確かにケイは胸は小さいしっ、金髪じゃないけどっ、ずうずうううっと一緒にだつたのにいいいいっ！」

俺の混乱をよそに、ケイの口調はヒートアップしていく。これじゃ、知らない人が聞いたら俺がとんでもない浮気者みたいに思われてしまう。

だいたい、俺がインターネットをしようとノートパソコンを購入したのは、うちのモノたちが擬人化する前だから浮気者よばわりはないだろう。

「いや、だからこれはだな」

「お兄ちゃんのこと一番知ってるのはケイなんだからああああああっ！あっ！」

「だからそこでヒートするなあああああっ！」

こんなのどう対応しろってんだ？正直、俺は女の子の扱いは得意ではない。だから歩く朴念仁などと呼ばれるのだが、そうじゃなくてもこのシチュエーションは困惑すると思うぞ。

「あー、レイカさん。このイチゴショート、食っていいツスカ？」

ふと、その後ろから、俺のことなんか目に入っていないみたいなおんな声が出た。あの声は鏡介だな、まったく呑気な奴だよ。

と思っていたら、その声にケイがびくつと反応した。

「だめええええっ 鏡介お兄ちゃんっそれケイのなのおおおっ！」
と同時に、ぱつと俺から離れてそっちにすっ飛んでいく。

「将仁さん、大丈夫スか？」

そのケイと入れ替わるようにして鏡介が顔を出す。

「あ、ああ、携帯電話“で”ならまだ判るけど、携帯電話“に”浮気者と言われるとはな」

「それだけ、将仁さんのことが好きなんですよ」

まあ、そう言われると悪い気はしない。言う相手が俺と同じ姿をした鏡介なので、自画自賛しているような気にもなってしまうが。

「それにしても、ケイの奴、イチゴシヨートが好きだったとは知らなかったな」

「俺も昨日知ったんですよ。まあ俺が擬人化したのも昨日ですけど」「そういうボケはいらないぞ」

で、改めて聞きなおしてみると、昨日の昼に買い物をした帰りに、常盤さんの紹介で喫茶店に寄ったそう、そこで食べたイチゴシヨートがお気に入りになったらしい。

なんか、そういう話を聞くと、女の子なんだなあ、と思っちゃうもんだ。

ちなみに、一緒に行った常盤さんはモンブランを頼んで、テルミはレアチーズケーキが気に入っているらしい。

「そういえばお前は？」

「俺はチョコレートケーキを頼んだんですけど、さすがに恥ずかしかったですよ」

なんとなく判るな、それ。外で女に囲まれてケーキを食べるのは俺でも恥ずかしいと思う。

まあとりあえず、これから先ケイがへそを曲げたらイチゴシヨートでご機嫌を取るのがいい、というのが判った。

そして、そんなところがかわいいな、なんて思うようになってきている自分が、ちょっと心配になってしまった。

04・引越しは大変だよ その15（後書き）

どうも、作者です。

バレンシアがいよいよ常盤さんの秘書として働き始めました。

はたして、趙アナクロナ常盤さんが最新鋭（言い過ぎか）コンピューターのバレンシアを使いこなせるのか？

まあ見守っていてくださいw

ご意見・ご感想などありましたら遠慮なく入れてくださいませ。

次回、そのバレンシアの働きっぷりが発揮されます。乞うご期待！

04・引越しは大変だよ その16

新しく買い込んできたテーブルや椅子を運び込んで、家の中の片付けなんかをしていると、いつのまにか夕飯時になってしまっていた。

「もうこんな時間じゃねえか。道理で腹が減るわけだよ」

ひと段落して、みんなでまったりとテルミを、もといテレビを見てみると、ヒビキがそんなことを口にした、

「貴様の場合は常に空腹なのであろう」

すかさずシデンがツツコミを入れる。だがその直後、そのシデンの腹がぐうと鳴った。いいコンビだな、こいつら。

「じゃあ、そろそろ夕食の支度に取り掛かりましょうか」

レイカがそう言って立ち上がった。

「はい、じゃあケイもお手伝いするー！」

すると、ケイもぴよんと立ち上がった。

そして2人がキッチンに入っていくのを眺めていると、ふとこのりビングの入り口が目に入った。

「そういえばあの2人、まだやってやがるのか？」

同じほうを見ていたりゆう兄がダレともなく聞いてくる。

あの2人とは、常盤さんとバレンシアだ。あの後、常盤さんがバレンシアを連れて2階に上がったんだが、そのまま下りてこないのだ。何をしているのかちよつと気になったので、1時間ぐらい前に行ったら、なんか2人してあのダンボールの山の目の前に陣取っていた。

「ええつとこれは、2003年5月の……」

「Yes、passしてください」

常盤さんが書類を引っ張り出して渡し、バレンシアが受け取って食い入るように読んでいる。

なんでも、それがバレンシア式のデータ変換の方法なんだそうだ。

詳しいことはよくわからないが、目で見た書類を画像データに変換

し、それをフォルダに分類して保存しているらしい。
なんか暗記術みたいな記録方法だが、それでこの山をマジで克服するつもりなんだろうか。

「Don't mind, don't mind. もう3 year分、recordしたデース」

聞いてみると、バレンシアはさらっとそう答えた。

「さすがコンピューターね。このぶんだと、今日中に5年分ぐらいの資料は取り込めそうだわ」

これには常盤さんも絶賛だ。スペックをよく知らないで買った俺もアレだが、どうやらバレンシアの奴は俺の想像していた以上に優秀なパソコンらしい。

「そうだ、Master」

ひと段落したのだから、見ていた分厚い書類の束をとんとんとまとめながら、バレンシアがこつちを向いて声をかける。

「Master、ミーは欲しいものがあるのデース」

「欲しいもの？」

「イエース。ミーはexternal hard diskとantiviral softwareが欲しいデース」

へ？なんだそりゃ？ハードディスクとソフトウェアは判るが、エクスターナルとかアンチウイルスとかってなんだ？

「悪い、日本語で頼む」

「Oh, sorry. ー、外部接続のハードディスクと、アンチウイルスソフトが欲しいデース」

そう言ってもらうと判るんだが、確かにパソコンが欲しがりそうなものではある、が。

そんな簡単に手に入るものなんだろうか。思い返してみれば、買ったときにすぐ近くにハードディスクも売っていたがそんなに安くなかったような気がするし、パソコンのソフトってのはゲーム機のそれより高いと聞いたことがある。

そう言われて、ちょっと困ってしまった俺は、常盤さんに話を振る

ことにした。

「えーと、常盤さん？」

「え？」

常盤さんは、珍しくぽかんとしていた。どうも、ハードディスクやアンチウイルスソフトというものの自体が判っていないらしい。そこまでアナクロなのか、この人は。

だが、設備投資、言い換えればお金の話だと判ると、納得したようだ。

「それって、今すぐ必要かしら？」

「んー、right now（今すぐ）ではありませんけれど、コレからall dataをrecord&conserve（記録し保存）するナラ、必要デース。Important（重要）なdataはback-upも、^{バックアップ}必要になるデース」

「そう、それじゃあ、近いうちに買いに行きましょう。将仁さん、構いませんよね？」

「構いませんよね、と聞かれても、今この家の財布を握っているのはその常盤さんだ。」

「いいんじゃないですか？」

俺は、そうとしか答えられなかった。

04・引越しは大変だよ その16（後書き）

どうも、作者です。

コンピュータのデータ記録というのは、必要・不必要を振り分けな
いで全部記録するというイメージがあったので、丸暗記させました。

ご意見、ご感想、またイメージイラストなどありましたら遠慮
なく私宛に送って下さい。

首をながくしてお待ちしています。

次回も、乞うご期待！

04・引越しは大変だよ その17

で、その後することがなくなった俺は、そのまま下りてきたが、あの2人はそれから一向に下りてこない。いくらトイレが2階にあるからと言っても、部屋から出た様子もないのはやっぱり気になる。

「データのインプットでしたっけ、まだやってるんスかね？」

「さっきテルミが危機感を煽ったから、がんばっちゃってるんじゃないか？」

「がんばるのはいいですけどお、無理はしないで欲しいですねえ」
そんな話をしていると、とんとんと階段を下りてくる足音がした。

そして、2人がリビングに現れた、が。

「大丈夫？気分はどう？」

「Sorry、うー、I feel bad headache（すっごく頭痛い）……………」

バレンシアは、常盤さんに肩を支えられながら入ってきた。もともと色白な顔が若干赤くなっており、そしてまるで重病人のようにふらふらで足元がおぼついていない。

「Fuuuu……………」

そしてバレンシアは、今日買ってきたばかりの椅子に大儀そうに腰を下ろし、大きく息を吐いた。

その元気のない姿を見たうちのモノ軍団とりゅう兄が、何かと駆け寄っていく。

「おい、大丈夫か？」

「Hmmmmmm……………overheatしたデース……………」

「オーバーヒートお？」

「そうなのよ」

付き添いの常盤さんが、うちわを持ってばたばたとあおいでいる。

なんでも、バレンシアの奴は、常盤さんが何度か休もうと言ったにもかかわらず、全然休んでいないらしい。それで、あと少して終わる、というところで頭から湯気が出てきたので、危険を感じた常盤さんが無理にでも休ませようと下に連れてきたらしい。

本人の口からは聞いていないが、さっきテルミにしてやられたために対抗意識を燃やしていたんだろう、とは常盤さんの弁だ。

「オーバーヒートか、ありや確かに辛いもんなあ」

ヒビキが、りゅう兄のほうを見ながらそんなことを口にする。りゅう兄は苦笑している。どうやら、りゅう兄はヒビキをオーバーヒートさせたことがあるようだ。

「オーバーヒートということは、冷せばよいのでしょうか？」

テレビ画面を収納したテルミが、ワントンポ遅れてやってくる。

「冷した手ぬぐいでも貰ってこよう」

そして、シデンがすつと立ち上がって洗面所へ走っていった。

「テルミい、お前も先輩なんだから、後輩の事をいじめるなよな？」

「ううううう、でも、私だって、不安だったんですよう……」
自分の役割を奪われるのは、耐え難いことでしょう

テルミが、珍しく弱気な発言をした。どうやらさっきのアレは、テルミのテレビとしてのアイデンティティーを示したかったための行動だったようだ。

なんか、そういうところでむきになるこいつらが、余計にかわいく見えてしまった。

04・引越しは大変だよ その17（後書き）

どうも、作者です。

バレンシアがオーバーヒートしました。

機械のオ・バーヒートが人間にとってどんな感じになるのか想像してみたんですが、やっぱりしんどいものなんでしょうね。

ご意見・ご感想などお待ちしています。

次回も、乞うご期待！

04・引越しは大変だよ その18

「んじやなー、また来っからなー」

トラックから顔を覗かせたりゆう兄が手を振る。

「ばいばーい、りゆう兄ちゃん、気をつけてねー」

「今度おいでになるときはあ、お土産を持ってきてくださいねえ」

「はいとこ帰って、新しい彼女の尻でもなでてやんなー！」

「こら貴様、兄君に向かつてなんとという口の聞き方を」

なんか好き勝手なことを言われている中、りゆう兄の乗ったトラックはぶーっと走り去っていった。

「まったくあのバカ兄、晩飯までしっかりたかっていきやがって」

「でも、楽しかったし、いいじゃないスか」

「そうそう。あんなふうに美味しそうに食べてもらえると、こっちも作った甲斐があるもの」

「Yes, I think so. それに、ミーにとっては、first time のdinnerだったカラ、taste like diamondデース」

「そういえばバレンシアさん、意外とお箸の使い方が上手でしたでしょう」

「うんうん。ケイも、最初はお箸使えなかったもん。どこで勉強したの？」

「Oh, Internetで、dataをcollectしたデース」

「って、おい、いつのまにっないだんだお前は。」

「えー？インターネットってそんなことまでわかるのー!？」

俺より先にケイが反応する。そういえばケイもインターネットに繋ぐことができるんだっつけ、って、ちよつとまで。

「理屈がわかっただけですぐに出来るようなもんなのか？」

「うん、そうだよ。ケイの場合、データは直接頭に入ってくるから、

全部記憶になるんだもん。それが体にフィードバックされるにはちよっと時間が必要だけどね」

「Yes、ミーの場合は phone wire が必要デースけど」
「はー、便利だな、そりゃ。・・・なんか、必要ないというか知らないほうがいいようなことまで分かるようになりそうなんだがとりあえず、兄貴も行ってしまったし、メシも食ったし、あとは。」

「全く、なんか疲れたな、今日はフロ入ってさっさと寝るか」
実際は明日の用意もせにゃならないんだが、なんかもうそんなのどうでもいいやという考えが頭をよぎる。まあ、宿題はやってあるから困ることはない。だから、あとは授業中に居眠りしないようにさっさと寝ちまおう。そんなことを考えていた。

04・引越しは大変だよ その18（後書き）

どうも、作者です。

とりあえずはひと段落、といったところですが。

このままおわるはずもなく。

まあ何があるのかは次回のお楽しみということでは。

では、次回を乞うご期待！

04・引越しは大変だよ その19

「あ~~~~」

ざばーっと湯をあびたあとで、俺は湯船に身を沈めた。自分で想像した以上に疲れていたんだろうか、四十過ぎのおっさんが出すような音が口から出ていた。

今、この家にいるメンバーの約半分は風呂に入らない、というか入れない。電化製品なので、湯につかった瞬間ショートしてお陀仏なんだそう。女の子なんだから湯船につからないまでも体を洗うぐらひはしてもいいと思うんだが、考えてみるといつも同じ服装だから、「脱げない」のかもしれない、なんてことを考えてしまう。うちのモノで、違う服装をしたことがあるのは、俺の分身とでも言うべき鏡介と、最初から服を着ていなかったクリンぐらひだ。どっちも風呂回りにいた連中だ。

でも、クリンは今は（理由は不明だが）テルミと同じメイド服だよな、ってことは、テルミはどこかに予備の服を持っているということなんだろう。そうなるると他の連中も換えぐらひ持っているのかもな。

なんてなことを考えているうちに体が温まったので、体を洗うために一旦浴槽から出る。そして椅子に座ると、タオルにボディーソープをつけてあわ立てる。

お風呂スポンジがあんなことになってしまったのでタオルを使うことにしたんだが、やっぱりどうも泡立ちがよくない。しかし、どうもうちのモノたちは縄張り意識が強いようで、みんながみんな「自分ができること」は「自分がする」と主張するのだ。だから、さっきバレンシアが出てきた時には、共通する能力があるケイとテルミがあんなに強く主張したらしい。

だから、新しいスポンジとかを買うわけにもいかず、結局今まで何度か風呂で使ったことのあるタオルを使うことにした。

この場はこういうもんだと割り切って、そのタオルを顔に当てて「しごとこする。なんか、引越した初日の一番風呂というのは気分がいいもので、いつもより念入りに体を洗ってしまう。」
んで、一通り洗い終わったのでタオルを置き、手探りで洗面器を探す。

むにゅ。

「きゃん」

ん？なんだ今のは？手が、何か柔らかいモノを掴んだぞ。

軽く指を動かすと、その柔らかいモノは強くもなく弱くもない力で俺の指を押し返してくる。

「うふふつ、将仁さんったら、手つきがいやらしいですよお」

こっ、この声はっ!?!?

顔を洗っている途中だったというのに俺は目を思いつきり開けてしまった。そして、一瞬だけ開いたその視界に、忘れられない光景をみてしまった。

大きくて丸くて柔らかい肌色の物体に、俺の指がめり込んでいる。

そしてその上に、見覚えのあるほわわんとした笑顔が乗っている。

「どうわあっ!?!?」

その直後、俺は思いつきり飛びのいていた。そして、濡れた床に脚を取られ、俺は頭を風呂桶に突っ込んでしまった。

04・引越しは大変だよ その19（後書き）

どうも、作者です。

やっぱり静かには終わりませんでした。

風呂のシーンお入れた時点で予想していたかもしれませんがW
さて、主人公の貞操はどうなるのか!?

乞うご期待!

04・引越しは大変だよ その20

「がぼがぼがぼっ、ぶはっ」

引越した初日の一番風呂で溺れるなんてまっぴらなので、必死になつて頭を湯船から出す。すると、俺の背中に、えもいわれぬ柔らかな感触が2つ、のしかかってきた。

「もう、大げさなんですからあ。私と将仁さんとの仲じゃないですかあ」

それと同時に、耳元でその声が囁いてくる。

「くっ、く、くくくく、クリン、なんでここに？」

「いやですよあ、私は何だったか忘れちゃったんですかあ？」

「い、いや、そういうことではなくて、俺は」

「将仁さんの体を綺麗にすることこそが、私の一番の役目なんですよあ？タオルなんか任せられませんよあ、うふふっ」

と言いつつクリンは、後ろからぐいっとその身体を押し付けると、わざわざ見せるように俺の前で手を合わせてこすり始める。すると、何もつけていないはずのそのこすり合わせた手の間から、泡が湧き出してきた。

ここでもまた熾烈な縄張り争い、ってそんなことを言っている場合ではないッ！ムネの、ムネの感触がっ、をををッ、や、やばいっ、俺のモノが反応してきたっ！あっ、相手は、スポンジだぞっ！おっ、お風呂のっ、スポンジだぞっ！

だ、だいたい、ここは、風呂であって、ソープランドではっ！って何を考えているんだオレは！

「心配いりませんよあ、私が見たいのはあ、将仁さんの体を洗うことだけですからあ」

俺の心理状態を知ってかそんなことを言うが、その直後に肩に頭を乗せて。

「でもあ、将仁さんがしたくなつたのでしたらあ、私はいつでもい

いですよお?」

「うひゅうおおっ!?!」

みっ、耳に何か入ってる!うわわっ!こっ、これはっ!

「まひゃひとひゃん、みみもひゃあんとあらわらいひよ、ひけまひえんよお?」

クリンの喋り方が変だ。まさか、俺の耳をまさぐっているのは、さつき見たあのクリンの舌なのか!?!ってこら、耳の穴に入れるなあ!そして背中を滑る胸の感触が!胸板を官能的に撫で回す泡を目いっぱいつけた掌が!こいつ、絶対に俺を、18禁の世界にいざなおうとしている!

「うふふっ、将仁さんって、ここが弱いんですよえ」

「うわひゃっ!」

クリンの手が、俺のわき腹をつつく。ってうわっ!?!なんかびりりと来たぞ!?!

「おまえ、なんで」

「うふふう、私い、いつも将仁さんの体を洗ってましたからあ、隅々まで分かるんですよ」

ううう、何も言えない。確かに俺はこいつで体を洗っていたもんなあ。

でも、このままじゃオレは、スポンジ相手にしてしま・・・
ってもいいかこれはあっ!

「うふふう、それじゃ、ここも綺麗にしませんとねえ」

そして、いよいよクリンの手が、完全に臨戦態勢になった俺のソコに伸ばされた、その時。

「はい、そこまで」

「ふえっ!?!」

ばたんという音と、別の女の声とともに、クリンの体が引っぺがされた。

「クリン、お前いなくなっと思ったたらまだ諦めてなかったのかよ?」

「ふええええ、ヒビキさん離してくださいよお、せめて完遂させてください」

「自分の体見て言えつての。悪かったな将仁、ゆっくり入っとくれ」風呂の鏡越しに、じたばたする素っ裸のクリンが、赤いライダースーツ姿のヒビキに羽交い絞めされて出て行くのが見えた。

「ふうふうふうふう」

盛大なため息が漏れる、と同時に、風呂場は静かになった。

その風呂場の中でタオルを再度手にとり、残りの部分を洗う。

「まだ諦めてなかったって、もしかしてあいつ、今みたいなこと、前からやるうとしていたってことか？」

洗いながら、俺はヒビキが残していった言葉を、思い出していた。

「クリンって、いつもぼんやりしているけど、実はけっこう強かなんじゃないか？」

そんなことを口走るが、ふと視線を下にやると、俺の股間には未だに臨戦態勢を保ち続けるICBMがそそり立っている。

さつきはいきなりで気が動転していたが、思い返すと、アレはいままで経験したことがないぐらいに気持ちが悪かった。それに思い返してみれば、モノたちが姿を現して以来、俺のまわりに女の子があふれかえっているのに手を出せない、加えて自家発電で発散もできないという生殺しに近い状態なんだ、性欲が暴発してもおかしくない。

「……………ほとぼりが冷めたら、後でお願いしてみよう」

そんなことを考えると、俺は股間のICBMにざっと湯をかけた。

04・引越しは大変だよ その20（後書き）

どうも、作者です。

もっと先までを期待していた方、ごめんなさい。

さすがにこれ以上やってしまったらR15どころかR18になってしまうので、このへんで勘弁してください。

4章、というか4日目の出来事は、もうちょっとあります。とはいえ工口はありませんw

まあそれでも、乞うご期待！

04・引越しは大変だよ その21

あの後、結局風呂で自分の性欲を自力発散させた俺は、風呂の湯をまいて後始末したあと、まっすぐ部屋に戻った。一度発散させたとはいえ、今うちのモノ軍団を見たら、一旦引ッ込んだ性欲がまた噴出しそうだったからだ。

部屋に戻り、ドアを閉めると、カバンから数学の教科書と問題集を引ッ張り出して、勉強を始める。自分の家で自習することはめつたにないし、特に数学は苦手なんだが、今日はこうでもしないと沈黙化しそうにないからだ。

「えーとこの前は、と」

ぺらぺらとページをめくり、付箋紙を貼っておいたページを開き、問題を解く。特にこのへんは式がややこしく、教科書で数式を見ながらでないといけない。

「バレンシアって、こういうの得意そうだよな」

ふと、今日現れたパソコン娘、バレンシアのことを思い出す。元パソコンだから計算は得意中の得意だろう。

だが、妄想がすぐに鎌首をもたげてくる。なにしろあのアメリカンサイズだし、それに、軟らかかった。今の俺に妄想するなというほうが無理だ。

あわててその妄想を頭から追い払い、机に向かいなおすと、再び数式に向かう。

どのくらいたっただろうか。

とんとん。誰かが、部屋のドアをノックした。

「将仁さん、起きてますかー。俺です、鏡介です。入っていいですか」

そのむこうから、鏡介の声がした。

「なんかあったのか？」

鏡介を部屋に入れ、ベッドに座らせる。

「いや、用件は別になんスけど、なんか下に居づらかったんで鏡介は、そう言ってベッドの上に寝転がった。

「ホントに寝るなよ？俺の寝る場所が無くなる」

「ういっす」

軽い冗談のつもりだったんだが、鏡介はすぐに起き上がってベッドから降りる。そして、こつちを覗いてきた。

「これ、数学っスか」

「ん、面倒だけどやっとかないとな」

ふと思い出して鏡介のほうを向く。

「お前もやるか？」

すると、鏡介が困惑したような顔をした。さすが鏡、頭の中も似ているのかこいつも数学は苦手みたいだ。

「俺はいいっスよ、学校行ってないし」

「でも後ろで眺められていると集中できないし」

言いながら、ノートと教科書と参考書をまとめて、座卓のほうに持っていく。

で、未使用のノートと問題集を渡して向かいに座らせると、鏡介もあきらめたらしく、シャープペンを持って問題集を開いた。

そして勧めた手前、俺もそこに座って問題集を開いた。

しばらく無言でお互いに問題を解く。かりかりとシャープペンを走らせる音が部屋の空間を包む。

「うーん……ん？」

ふと頭を上げると、一心不乱に問題に向かっている鏡介の姿が見えた。

「鏡介、お前やっぱり左利きなんだな」

「そりゃ、鏡ですから」

そう言われればそうなんだが。と思いながらノートに目を落とす。そして目が点になってしまった。

「お前、字、下手だなー!？」

俺もそんなに字は上手じゃないが、鏡介のそれは、もう本当にミミ

ズがのた打ち回ったような字なのだ。はっきり言って、書いた本人じゃないと読めないシロモノだ。

「しようがないじゃないですか、慣れてないんスから」

鏡介は苦笑しながらそう答える。って、ちよっと待て、慣れるってなんだ？

「慣れるって、お前、字を書いたことが無いのか？」

しかし考えてみると、うちのモノたちはもともと手がなかったから、「書く」ってのは苦手なんだろうか？

「いや、字は書けますよ」

だが、どうやらそうでもないらしい。だったらこの下手さはなんだよ？

「こうだったら、書けるんスけど」

そして、鏡介は数式の一部を左手ですらすらっとノートに書いた。

「って、これ左右逆じゃないか!？」

なんと、鏡介が書いた数式は、左右が逆だった。

「鏡文字って言うてくださいよ」

苦笑しながら、鏡介がその数式を消す。

これは、徹底しているなと感心すべきなんだろうか、やりすぎだと呆れるべきなんだろうか。

困惑していると、鏡介が言葉を続けた。

「このままじゃまずいんで、鏡じゃないほうでやったんですが、慣れてないもんで」

ばつの悪い顔をしている鏡介を見ると、俺も非常に悪いことをしているような気がしてしまう。

「鏡介、無理しなくてもいいぜ？」

「え、でも」

「人に見せるわけじゃないんだから、鏡文字でもいいじゃないか」

「あ、それもそうツスカ」

すると、鏡介はほっとした表情になった。

04・引越しは大変だよ その21（後書き）

どうも、作者です。

男同士のやりとりなんか見ても面白くないかもしれませんが、書いてしまいました。

では、次回も乞うご期待！

04・引越しは大変だよ その22

それからしばらく、俺と鏡介は一緒になって取り組んだ。

意外だったが、鏡介と一緒にやると、問題集が快調に進む。外見だけではなく頭の中のレベルも同等なのか判らないところもほとんど同じで、そうなると二人してうんうん考えるからだ。

そうやって予定の半分ぐらいが終わったので、一息つくことにした。「あーっ、疲れたーっ！」

とたんに、鏡介がごろんと寝転がった。相当疲れたみたいだ。

「なあ鏡介。お前が下にいたとき、あいつらは何していた？」

「あー、バレンシアさんを真ん中にしておしゃべりしていましたね。常盤さんがうちのモノとしての心得を話して、お互いに自己紹介して」

ごろんと寝転がったまま、鏡介がそんなことを話してくれる。鏡介も自己紹介して、みんなの前で変身して見せたらしい。

「あ、そうだ」

と、何か思い出したように、鏡介が起き上がった。

「そういえば、クリンさんがみんなに怒られていましたね」

クリンが、と聞いて、思わずあの感触を思い出してしまふ。

「将仁さんと一緒に風呂に入ろうとした、ずるい、抜け駆けだーっ
て」

「ぬ、抜け駆け!？」

つてことは、他に俺と風呂に入りたい奴がいるってことか!？」

「そりゃ居るでしょ、年頃の男女が一つ屋根の下で集団生活しているんですから」

「そ、そんなもんか？」

なんか、鼻の下が伸びてしまふ。いかん、また妄想が膨らんできた。うん、嫌われていないのはいいことだ・・・よな?惜しむらくは、俺を好いている彼女らが普通の人間じゃないってところだが。

「俺がいる前で、そういう話は勘弁して欲しいんすけどね。一応、俺だって男なんだし」

その俺の前で、鏡介がそんなことをこぼす。

「そういえばお前と風呂入ろうっていう奴はいないのか？」

「いないっすねえ」

ちよつとからかってやるうかと思ひ、そんなことを聞いてみると、速攻で返事が来た。

「マジ？」

「マジっす。俺もなんですけど、擬人化は擬人化を見抜く、って言うんですかね。普通の人とは違うなって感じるんすよ。で、俺は将仁さんの二セモノだから、俺に媚売ってもなんにもないっていうか、男としても見られていないみたいで」

なんか、こいつ、苦勞しているんだなあ。可愛そうになってきた。

「鏡介、気にするな。他の連中がなんと云っても、俺はお前の味方だから」

思わず俺は鏡介と肩を組んで、慰めの言葉をかけていた。

「くーっ、鏡介お兄ちゃんったら、お兄ちゃんと仲良く肩なんか組んじゃって〜」

「この我でさえ、まだ手も握っておらぬというのに〜っ」

そのとき、俺は気がつかなかったんだが、ドアのむこうで、お茶を持ってきたケイとシデンが、ドアの隙間を覗きながら、悔しそうに歯噛みをしていたんだそうだ。

「ふたりともー、いつまでかかっているのー！」

俺が聞いたのは、レイカの声と、その後に続いた、ばたばたと廊下および階段を下りていく足音だった。

そして、鏡介はあとでその2人に相当責められたそうだ。

04・引越しは大変だよ その23

「うむ……」

隼人は、頭を抱えていた。

「お疲れの様子ですな」

その横に、かちゃ、という音を立てて白いコーヒーカップが置かれる。

「ん、じいか」

「大学の課題に頭を悩ませている、というわけでもなさそうですね」
「課題なんぞ半分寝ていても出来る」

隼人は、コーヒーカップを手に取りブラックのコーヒーをすする。

「じいも、真田の話は聞いているだろう」

「擬人への接触到、失敗したという件ですな」

「ああ、全く冗談のような話だ」

そしてカップを置くと、隼人は体を背もたれに投げ出し、大きく伸びをした。

「やれ真田将仁が2人に増えただけの、その真田と一緒にいた女にぶつ飛ばされて星になっただけの、氷づけにされただけの、まるでマンガだ。そんなものが信じられるか」

「お言葉ですが、隼人様。その件に間違いはありません」

そして、じいと呼ばれた見事な髭を生やした執事風の老人は、ひとつ咳払いをしてから言葉を続ける。

「擬人は、いわば人の姿をした道具。その道具が持つ能力は全て持ち合わせておるものです。隼人様も一時は西園寺のそばにおられた身、そのことは存じておられるでしょう」

「あれが擬人だと!？」

隼人は、バンと机を叩き、顔を上げてこういい返した。

「擬人は『人の姿をした道具』のはずではなかったのか!?これが事実だとしたら、いわば『人の姿をし、モノの能力を持ったバケモ

「だ。そんな奴らを相手にするなど想定外だ」

擬人が存在すること自体、非常識なんだ。隼人はそうはき捨てる、適度に冷めたコーヒを一気に喉に流し込んだ。

「……僭越ながら……」

その様子を、黙って見ていた老人が、見事な髭のむこうから声を出す。

「確かに、擬人は物が化けたもの、妖怪の一種だと言えなくもありません。餅は餅屋、その筋の専門家に頼んでみてはいかがでしょう」

「専門家？妖怪退治のか？」

「はい。このじいめに心当たりがあります。任せてもらえませぬか」
隼人は、胡散臭そうな顔を向けるが、じいの表情は真剣だ。

「まあいい、じいに任せる」

「承知いたしました」

そして、じいは隼人に深々と頭を下げた。

04・引越しは大変だよ その23（後書き）

どうも、作者です。

やっと4日目が経過しました。

だんだん1日が長くなってきていますが、そのへんは軽く流してください。

さて、どうやら新しい刺客が送り込まれるようですが、どんな相手なのでしょうか？

次回から第5章が始まります。

乞うご期待！

05・連休も大さわぎ その1

9月18日 月曜日

今朝は、目覚ましをかけていなかったのに、結構早く目が覚めた。やっぱり昨日早めに寝たからだろうか。

むっくりとベッドから起き上がると、部屋の中の風景が見慣れたものと違う。一瞬焦るが、昨日引越したことを思い出して自分を納得させる。

ふと横を見ると、床に布団が敷いてあり、誰かがいびきを立てて寝ている。

鏡介だ。結局、「男だから」ということで俺と同じ部屋に押し込まれてしまったのだ。考えてみれば、お互いにちょっと気の毒な話である。

俺は、鏡介を起こさないようになるべく静かに制服を着ると、鞆を持って静かに部屋を出る。そして腕時計を見ると、いつも家を出る時間にはまだかなり余裕がある。

まあ引越しをして駅2つ分遠くなったから、その分早めに出なければならぬのは確かだ。

その俺の耳に、どこからかいびきが聞こえる。ヒビキのそれだ。ヒビキの部屋も2階にあるのだ。あと2階にいるのは、常盤さんと、そこに相部屋になっているバレンシア（なんか早くも常盤さんの助手みたいな扱いになっている）、それとは別の相部屋のシデンとケイだ。

どうもまだ誰も起きていないらしく、2階は薄暗くひっそりとして……はいないか。ヒビキのいびきが聞こえるからな。

1階に下りると、テルミがからからと雨戸を開けているところだった。

「おはようございます、将仁さん」

テルミは、本職メイドよろしく、俺のほうを向いて丁寧に頭を下げる。

「おはようさん、テルミ。朝早くから大変だな」

「いえ、これが勤めですから当然でしょう。あ、将仁さん、見たいテレビでも、あるのでしょうか?」

「いや、後でいいよ。他のメンバーは?」

「レイカさんが朝食の用意をされていますでしょう。あの方の方は、まだ顔をお見せになっていないのでしょうか?」

うちの大型家電は、本当に働き者だ。こんな朝早くから仕事とは頭が下がる。

「おはよう、将仁くん」

そのレイカが、キッチンから顔を出す。着物の上からエプロンをしているのでなんか明治初期のお給仕さんみたいだが、割烹着だと袖が隠れて、入れた物が出せないのが不便なんだそうだ。袖が汚れるんじゃないかと最初から出しておけばいいのにかと思うが、本人がそれがいいというんだからあえて口にはしない。

「あら?」

そのレイカが、おかしなものを見たような声をあげる。

「将仁くん、制服なんか着て、何かあったのかしら?」

「へ?」

今度はこちらが変な声を出す番だった。制服を着るのなんて、学校へ行くときぐらいいしかないと思うんだが。

「何かって、学校にいくんだけど」

「え?」

すると、今度はテルミまで変な声を出した。なんなんだ一体。かと思うと、今度は女同士で顔を見合わせ、そしてぷつと吹き出した。

「……あのさ、俺、なんか変なこと言ったか?」

何がおかしいのかくすくすと笑う二人に、俺は尋ねてみる。なんか間抜けな光景だが、まさかサボリ魔だとか思われてるんじゃないだ

ろくな。自慢じゃないが俺は今のところ皆勤賞なんだぞ。

「将仁さん、今日が何月何日の何曜日か、忘れていませんか？」

「は？今日って、9月18日の月曜日だろ？」

「将仁くん。9月の第三月曜日は、国民の祝日、敬老の日よ？」

「あっ！」

忘れていた。敬う老人がいらないとはいえ、休日忘れるとは、この俺としたことが不覚だ。

「うーん、ここ数日で、覚えなきゃならないことが一気に増えちまったもんでさ」

なんてなことを言っでごまかすが、これじゃ物忘れがひどくなったおっさんだな。

だが、ふとその一言で、俺はあることをひらめいた。

「そうだ、ついでだから今日は学校に行ってみよう」

家政婦大型家電の2人がぼかんとした顔をしている。授業がないのに何をしに行くんだ？といった表情だ。

言っとくが俺はボケたのではない。ちゃんと理由はある。

「いやな、学校に着くまでどのぐらいかかるのか、シミュレートしようかと思っただけ。それが判れば、俺も明日から何時ごろ起きればいいのかもわかるし」

すると、頭のいい2人はすぐに納得の表情になった。

「じゃあ、将仁くん、お昼はどうする？必要ならお弁当を作るけれど」

「いや、いいよ。行って帰ってくるだけだから、遅くとも昼過ぎには戻るだろうし」

「そう、判ったわ」

そして、レイカは再びキッチンに戻る。

「では将仁さん、朝食ができるまでもう少しかかるでしょうから、着替えてきたほうが良いでしょう」

「ん、判ったよ」

テルミに促され、俺は持って降りてきた鞆を再び持ち上げて、2階

の俺の部屋へと戻った。

05・連休も大さわぎ その1（後書き）

どうも、作者です。

いよいよ5日目の始まりです。

そして今日もまた平穩無事には終わりません。

というわけで、期待してください。

感想などありましたら是非とも足跡を残していつってください。
それでは、次回も乞うご期待！

05・連休も大さわぎ その2

「そんじゃ行ってくる」

「いつてらっしゃい。迷わないように注意するのよ」

「うつつうつつ、早く帰ってきてねえお兄ちゃああん」

何人かに見送られ、俺は最寄の駅への道を歩き出した。

常盤さんから聞いた情報によると、俺の家は駅から徒歩15分の住宅街にあるらしい。とはいえ、実際に歩くのはこれが初めてだ。

朝飯の席でこのことをみんなに話したところ、案の定何人か「一緒に行きたい」と言う奴がいたのだが、今日はあえてそれを全部断って俺一人で行くことにした。この前ケイとテルミとヒビキと一緒に外食したとき、学校と全く違う方向なのに見ている奴がいた。まして今日は学校のすぐそばまで行くんだから誰が見ているか判らない。そして見られたときにどう答えればいいか分からんからだ。

門を出て右に曲がり、最初の十字路を左に曲がりしばらく真っ直ぐ行くと、国道に出る。国道は両側2車線あって広いため交通量が多い。向こうへ行くには、右のほうへ少し行ったところにある陸橋を渡る必要がある。

その陸橋を渡り、同じ方向に道伝いに行くと、左に曲がる大きな道がある。その道を曲がって真っ直ぐ行くと、明日から通学で使う駅の前のロータリーに出る。

そこまで来て腕時計を見る。うちをでてから、10分ちよつといたところか。

「ま、こんなもんか」

駅の入り口下は、スーツを着たサラリーマンなどでごった返している。明日からこのクソ暑い中、このスーツ軍団と毎日すし詰め状態になって通学するのかもしれないだろうな。と羨望を覚悟を決めるしかないだろうな。

「えーと、ここは朝賀^{あさか}で、降りる駅は成榎^{なります}だから……15

0円か」

券売機にコインを入れて切符を買うと、俺はホームに向かう。向きを間違えないよう、指示をちゃんと確認してホームに出ると、ちょうど電車が出て行ったところだった。

ちよつと悔しいが、おとなしく待っていると、5分ほどで次の電車が入ってきた。

電車に乗り込んでつり革につかまると、なんとなくぼーっと窓の外を眺める。電車は高架橋の上を走るのでけっこう見晴らしがいい。

今日は天気がよさそうだなうなんてなことを考えていると、電車が目当ての駅に着いたので、置いていかれないよう人を掻き分けてホームに降り立つ。

あとは何度も来た道だから進むのも簡単だ。駅前の商店街を抜け、通いなれた道に出ると、そのままてくてくと学校に向かって歩いていく。

やがて学校の校門前に到着した。グラウンドのほうを見ると、休日返上して練習をしているテニス部やラグビー部の姿が見える。

そして、自分の足が校門の前にたどり着いた時点で、俺は再度腕時計を見た。家からここまで34〜5分。電車にちゃんと乗れていれば5分ぐらい早く着いていたかもしれない。

「早くついたからどうだ、ってことはねえんだけどな」

実際、来たからといって何かをするわけではない。練習するにしても着替えもシューズも持ってきていないし、勉強するにしても筆記用具はあるが教科書も参考書も持ってきていない。図書館に入つて読書するというのもちよつと考えたが、そうまでして読みたい本とこのも今のところない。

まあ、学校の周りにはコンビニとか本屋とかCD屋とか喫茶店とかがけっこうあるので、このへんで多少の時間を潰すのは別に苦にならない。とはいえ、ひとりでそんなことをするのはちよつとさびしいのも事実だ。

だいたい分かっているこのへんで暇つぶしをしても面白くないので、

今日は知った顔に合わないうちにさっさと帰ることにした。

05・連休も大さわぎ その2（後書き）

どうも、作者です。

今回は、ごく普通にありそうな光景にしてみました。

タイトルに偽りありだ！と思われるかもしれませんが、まあ息抜き
のつもりで読んでください。

次回、また話が転換します。

さて、何が起きるのでしょうか！？

乞うご期待！

05・連休も大さわぎ その3

「ん？」

駅を出て、国道への道を今朝と逆方向に歩いていると、今朝は目に付かなかった店が、ふと目に入った。

リサイクルショップだ。それも、全国展開している、けっこう規模が大きいやつ。

「へー、あんなところにリサイクルショップなんかがあったんだな」
実は俺、こういうリサイクルショップに足を運ぶのがけっこう好きだ。前の持ち主がどんな奴だったか思いを馳せるのが面白いし、普通の店にはないこの雑多さを見ているのもなんとなく楽しいからだ。まあ、来る回数が多いが見るばかりで買わないから、店にとっちゃ嬉しくない客なんだろうが。

というわけで、ちょっと遠回りになるが、俺はその店へと足を向けた。

中に入ると、耳慣れたミュージックが耳に入ってきた。

リサイクルショップにしては大振りな店構えだったが、入ってみるとそれでもけっこう物があふれ返っていた。

古着がずらりと並んでいたかと思うと、通路をはさんで食器とか陶器がこれまたずらりと並んでおり、また別の通路を挟んだ向こうには釣り竿とかスキーの板とかゴルフクラブとかが並んでいたり、ママチャリや折りたたみ自転車がおいてあったりする。

「そーいや、バレンシアの奴、ハードディスクが欲しいとか言ってたなあ」

パソコン本体や周辺機器が陳列された一角に来たときにふとそれが頭をよぎったが、それらしきものは見当たらなかった。そういえば最近テレビでもよく「情報漏洩防止」のためにパソコンやその記憶媒体の処分には気を使っている、と言っていたのでそれが関係するのかもしれない。

「……最近のリサイクルショップって、ホントにいろんなもんが置いてあるもんだな」
なんとなく足が止まったのは、なぜか調理器具コーナーだった。包丁とかフライパンとかが置いてある。

そしてその中でも特に目を引いたのが、いわゆるかんとん広東鍋と呼ばれる、両把手のでっかい中華鍋だった。そのサイズたるや周りにはあるフライパンと比較しても圧倒的にでかく、家庭用というよりは中華飯店とかで大人数に出すチャーハンとか野菜炒めとかを作るときに振るような、普通の主婦では到底扱えなさそうなシロモノだ。しかも、メッキの剥げ具合といい表面の焦げ付き具合といい、相当に使い込んでいそうな感じがする。

横にはそれとセットになっているらしい、やっぱりこれも年季の入った中華お玉が置いてある。

これってやっぱり、どっかの中華飯店でも使われていたんだろうが、店の命と言っても差し支えないと思う鍋を、なぜこんなリサイクルショップに売らなきゃならなくなったんだろうとか、どんな料理が作られていたんだろうとか、もとの持ち主に色々と思いを馳せながら、俺はその中華鍋に手を伸ばしていた。

「ずいぶん使い込まれてるなあ、お前。どんなもん作っていたんだ？」

その瞬間。

きいいいいいいいん。

あの耳鳴りが聞こえた。

背筋が寒くなる。またやらかしてしまったのだ。

そして後悔する間もなく、俺の目の前は真っ白になっていった。

05・連休も大さわぎ その3（後書き）

どうも、作者です。

主人公君、とうとう屋外でやってしまいました。

さて、どんな子が現れるのでしょうか？

ちなみに、普通のリサイクルショップは、使い古した鍋などの調理器具は引き取らないそうです。

ただ、それを言ってしまうと話が続かないので、この場はめをつむつてください。

さて、次回は、今回擬人化させた中華鍋が現れます。

乞うご期待！

05・連休も大さわぎ その4

やばい、やばいぞ、ついに自分のモノでないモノまで擬人化させてしまった。いや、それ以前に、擬人化の現象を、ホントに人がいるところでやってしまった。

こんなことが公に知れたら……

「謝謝我叫出、感謝感謝！」

「わっ!？」

「誰か知らないけど、呼び出してくれて感謝よ！」

突然、俺は違う意味で現実を引き戻された。

目の前に、赤い人影が立っている。いや、赤い人影と思っていたのは、膝丈ぐらいの赤いチャイナ服を着た、ちよつと小柄な女の子だった。頭の左右でわっかにした髪型も、なんとなくだが中国を連想させる。

「……えーと、確認するけど、君は」

「ハイな、ワタシ、そこにあた中華鍋アルよ！」

そのチャイナ服娘は、漫画の中国人のような言い回しで返事をしてくる。

改めて見ると、丸顔でぱっちりした目元に愛嬌がある、かわいい子だ。

あわててまわりをきよるきよると見回すが、人影は見当たらない。それに騒ぎも起きていない。どうやら、いつものように大声を出したりしなかったせいで、本当に俺以外は気がついていないようだ。こんなにでかい店の防犯レベルがこんなもんで本当に大丈夫なんだろうか。と、それはまあ、この擬人化が他人にばれないということだからいいとして。

「ホントに中華鍋か？」

思わず口にしてしまった。だってそうだろう、中華鍋と言われても、服装が黒いわけでなし、体が丸っこいわけでなし、肌のつやは良す

ぎるぐらいにいいが脂ぎってテカっているわけでなし、どこにもその面影がないんだから。しいて言えば、頭の左右でわかかして前髪を切りそろえた髪型が、さっきの鍋を連想させなくも無い。

「ホントよホント。ホラ、これ見るヨロシ」

すると、その子はくるつと後ろを向いた。そして、ちよつとだけ納得してしまった。

なぜかその子は、あのでっかい中華鍋を背負っていたのだ。なんか亀の甲羅みたいだ。ついでに腰帯のところにな大きな中華お玉が横渡しになっている。

なんか、中華鍋というよりは、漫画なんかで出てくる「さすらいの料理人」みたいだ。おおっ、さすらいの美少女料理人。なんかマンガのネタにありそうだ。

「うん？どしたアル？」

あ、しまった、あの子をほつたらかしにしてみました。

「ごめんごめん、ちよつと考え事してた」

「アイヤー、もしかしてワタシの名前、考えてたアルか？」

なんか、その子はキラキラした目でこつちを見ている。

まだ俺のものじゃないのに俺が名前をつけていいのか？と思うが、そんなふうにはキラキラした目で見られると、否定することができない。

しかし、はつきり言っただけで考えてないぞ。もともと中華鍋で、チャイナドレスときたらやっぱり中華的な名前が合うんだろうが、正直、中国人の名前なんて毛沢東とか袁世凱とか孫文ぐらいしか知らない。しかもこれ全部おっさんじゃないか。楊貴妃はありや通称だし。

うちの担任である徳大寺先生が、漢文つながりで中国フリークなんので俺もほんのちよつと中国語は知っているんだが……

「じゃあ……紅娘は？」

ない知恵を絞って、搾り出したネタを告げる。赤い服着た女の子だということ、それぞれを強引にくつつけたものだ。

「紅娘アルか？じゃあワタシ、仲人するアルか？」

「へ？仲人？」

「紅娘つて、中国語だと、仲人サンのことアルけど」

「う……」

知らなかった。仲人のことなのか。

「他にも、テントウムシをそう呼ぶこともあるアルな」

「いや、別にそういうつもりじゃなくて、えーと、紅い服の子だから、ひねらないほうがいいと思って。あまり中国語とかわかんないもんで」

「アイヤー。でもそれ、ワタシ結構悪くないと思うアルね。んじゃ、ワタシの名前、紅娘でいいアルか？」

よかった、嫌ではなかったらしい。けど、そういう意味があるとなると、逆にそんな名前をつけたらまずいんじゃないか………
つて、まあ本人がいいと言っているんだからいいか。

「ああ、よろしくたのむよ」

俺はそう言いながら肩に手を置いて、くるりと後ろを向かせた。

「ほえ？」

「ちょっと、この鍋、貸してくれ」

「え、ちょちょちょ、やんっ、なにするアルかっ!？」

俺がその鍋とお玉に触ると、紅娘は体をびくつとさせてから、素早く体を返して肘を繰り出してきた。まさかとは思うが、これって中国拳法つてやつか？

「わったっ!？」

とっさに、というよりほとんど条件反射でその肘を受け止める。マジで痛い。

「あ、アイヤー、對不起對不起、ごめなさい、つい」

「ててっ、なにするって、お前はまだこの店の売り物だもんよ、黙って持っつていたら泥棒だろ」

「うっううう、そいえばそうだったアルう」

紅娘は、俺に攻撃してしまったこともあってか、しゅんとしてしまった。

とはいえ、いつまでもここでこうしているわけにはいかない。うちのメンバーには昼までに戻ると言って来た以上、遅くなったら色々問題がありそうだ。

結局、中華鍋は買い取らなければならないということをお願い聞かせ、紅娘と一緒にカウンターへ持っていった。

どうやら紅娘にとってはその鍋に触られるのは体に触られるような感じがするらしく、カウンターで店員がレジを打っている間も紅娘は所在なさそうにもじもじしている。顔までちよっと赤くなって、本当に「紅娘」だ。

そして、レジの処理が終わると、ほっとした紅娘は、嬉々としてその中華鍋を自分の背中に背負ったのだった。ちなみに、その中華鍋、3000円だった。

05・連休も大さわぎ その4（後書き）

どうも、作者です。

中華ハイパー鍋っ子、紅娘の登場です。

主人公氏の持ち物でないものが擬人化してしまいました。最終的には「道具」のほうは主人公氏のものになったので大目に見てください。

次回、紅娘をつれて帰った主人公氏は、ある事件に遭遇します。

どんな事件でしょうか？

乞うご期待！

05・連休も大さわぎ その5

「アイヤー、ここが将仁サンの家アルかー」

紅娘は、初めて見る俺の家に、感動しきりのようだ。まあそうだろう。自分と同じように擬人化した存在が、いきなりたくさんいる家なんだから。

ちなみに、帰りがけに色々紅娘から聞き出したところ、紅娘は在日中国人が経営する中華飯店で使われていたらしい。それが、都合により中国に帰国しなければならなくなり、前の持ち主が荷物を減らすためにリサイクルショップに売り払ったんだそうだ。

売り払われるのは寂しかったそうだが、モノである以上受け入れるしかない。他に使われる可能性があるリサイクルショップに売られたのが幸いだったと語る紅娘の顔は、ちょっと寂しそうに見えた。

まあ、今日からは寂しくなくなるぞ、と言おうと思った矢先、俺は家の様子がおかしいことに気がついた。

もう昼時だというのに、家の中が妙に静かなのだ。まるで、誰も居ないみたいだ。

ふと、家のガレージに目をやる。そこには、見覚えのある赤いオフロードバイクが、うんともすんとも言わずに停まっている。

まさか。

「将仁サン、どしたアル？」

俺の様子がおかしいと気付いたのだろう、紅娘が不安そうなまなざしでこちらを見つめる。

「悪い、ここで待っていてくれ。家の様子がおかしい、ちょっと見てくる」

「わかたアル」

頷く紅娘を玄関のポーチに残し、俺は、引越したばかりの家の中に入ってしまった。

まず、俺はリビングに向かった。テーブルには食事の用意が10人

分しつかり用意されていて、出来立ての湯気がほんのりと立ち上っている。しかし、人影はない。

そのかわりに、そのリビングの片隅に、見覚えのある60インチのプラズマテレビが、ででんと鎮座ましましている。

キッチンを覗くと、そこにも人影はなかった。そのかわりに、見覚えがある3ドアタイプの冷蔵庫が、部屋の隅にもものも言わずに立っている。

「テルミ？レイカ？」

声をかけたが、返事がない。まるで声をかけるほうがおかしいと言っているように、じっとしてそこにあるだけだ。

まさかと思い、風呂場に向けこむ。

そこには、こぶし2個大の黄色い塊が、風呂桶の横にある石鹸置き場においてあった。

「……どうなっているんだ？」

信じられなかった。うちのお騒がせモノ軍団が、ことごとくもとのモノに戻ってしまったている。

俺は、2階にかけ上がると、まず常盤さんの部屋に向かった。常盤さんなら何か知っている、そんな気がしたからだ。

常盤さんの部屋のドアをちよつと乱暴目にノックする。

返事がない。何度か繰り返し返してノックをしたが、やはり返事がない。女の人の部屋に無断で入るのはちよつと抵抗があったが、意を決してドアに手をかけると、あっけなく開いた。

中に入ると、そこには誰もいなかった。部屋の片隅には常盤さんの机があつて、その机の上には、何やらびっしり書き込まれた書類とか、万年筆やペンが入ったトレイとかが、ついさっきまで使われていたように置かれている。

そしてそのテーブルの端には、ディスプレイが閉じられたノートパソコンが置かれている。

言葉が、出なかった。

みんな、いなくなってしまうた。いや、いることはいるが、言葉を

交わしたりは、できなくなってしまった。

なんか、心にぽっかりと穴が開いたような気分だ。

「・・・これで、おわりなのか・・・」

心に穴が開いたような気分のまま、俺はふらふらと自分の部屋へと歩いていった。

05・連休も大さわぎ その5（後書き）

どうも、作者です。

いきなりみんないなくなってしまうました。

さて、何が起きたのでしょうか？

そしてこの話は、ここで終わってしまうのでしょうか？

乞うご期待！

05・連休も大さわぎ その6

そこにも、誰もいない。プライベートが欲しいと思っただけだ。置いて手に入れた個室だが、今となっては寂しさを助長するだけだ。ひとつ大きく息を吐くと、俺はベッドの上に腰を降ろし、そのままごろんと寝転がった。

「……静かだな……」

ぼんやりと天井を見上げながら呟く。呟いてから、静かどころではないことに今更ながら気がついた。

しばらくの間、俺はそのままぼんやりと天井を眺めていた。

どのぐらい、経ったのだろう。

ちやっちやらっちやー、ちやーちやらーらー。

俺の耳に、しばらく聞いていなかった携帯の呼び出し音が聞こえてきた。

体を起こすと、その発信源を探す。その発信源である携帯電話は、俺の机の上に無造作に投げ出されていて、早く出ると催促するようにチカチカとランプを点滅させている。

ベッドから降りた俺は、その携帯電話に手を伸ばすと、画面を開き、通話ボタンを押した。

「はい、真田です」

「もっしもし、お兄ちゃんですかあ？」

すると、その電話の向こうから、聞き覚えのある、いや、聞き間違えるはずがない声が、俺の耳に聞こえてきた。

「ケイ？ケイなのか!？」

「うんっ　もしかしてびっくりしてる？」

「び、びっくりって、からかうなバカ、どこにいるんだ!？」

「どこって、お兄ちゃんの手の中だよ。もしかしてケイの元の姿、忘れちゃった？」

「……え？」

「えへへ、お兄ちゃんの手、とつてもおつきいね。ちょっとごっこつしていているけど、やっぱりお兄ちゃんの手が一番いいな」

思わず、俺はその携帯電話を耳から離し、まじまじと眺めてしまう。すると、携帯電話の画面がぱつと変わり、ケイの顔が映し出された。「もう、そんなにじろじろ見ないでよう、なんだか恥ずかしくなっちゃっ」

その画面の顔は、ちょっと顔を赤らめながら、俺が見えているかのようにそんなことを言ってくる。恥ずかしいと言われても、こっちは携帯電話を見ているだけでしかないから、あえて言えばテレビ電話しているぐらいの感覚でしかないんだが。

「それにしても、一体何があつたんだ？」

「え？何って？」

「何って、みんなもとのモノの姿に戻ってるじゃないか。なにかあつたのか？」

すると、ケイはにんまりしてからこんなことを言った。

「ああーっ、お兄ちゃんもしかして寂しいのぉ？」

「え、ばっ、おま、あのなあ」

正直な話、この家は一人で住むには広すぎる。だが、素直に認めてしまうのは悔しいので、そこはちょっとだけごまかす。

「あははっ、やっぱり寂しいんだー」

ぬう、見破られてしまった。が、こんなやり取りができることが、少しだけ嬉しい。

「もうしょうがないなあ。それじゃ、寂しがりなお兄ちゃんのために、ケイが一肌ぬいであげよっかな！」

なんか妙に張り切った声と表情で、ケイがそんなことを言った。

「んーーーーーっ！」

そして、携帯画面のむこうで、縮こまるような顔をしてから。

「もおおおおおおいいいいいいいいよおおおおおお

おおおおお！」

と、ものすごい声量で叫んだ。どのぐらいすごいかというと、携帯のスピーカーがその大声で壊れるんじゃないかと思ってしまったほどだ。思わずその携帯を放り投げて耳を両手で塞いでしまった。まずい、と思ったそのとき。俺の目の前でくるくると宙を舞っていた携帯が、まばゆい光に包まれたかと思うと、その光ごとぶわっと膨れ上がった。

人間大に膨らんだそれは、そのままとんと着地した。

「えへ、ただいま、お兄ちゃん」

「け、ケイ!？」

気がつくと、いつのまにか光は消えており、いつものあの服装で、髪をサイドテールにしたケイが、にこにこしながら立っていた。

「ケイ!」

「きゃあ!？お、お兄ちゃんちよつとお!」

思わず抱きしめてしまった。自分でも驚いたが、俺は自分が思っていた以上にこいつのことを気にしていたらしい。

強く抱きしめすぎたか、ケイが痛そうな顔をしている。気付いた俺は、ケイの体を離す。

そして、額に軽くでこピンを入れた。

「きゃ!？」

「俺を心配させた罰だ。この広い家に俺一人で住むのかって不安になっちまったじゃねえか」

「だからってえ。ここケイのメモリーなんだから、壊れたらどうするのよお」

おでこをおさえて、すねたように口を尖らせるケイの姿は、正直言っただけかいいい。

が、頭をなでてやろうとしたそのとき。

「上官ツ！貴様、我を探さぬとは如何なる了見なのだ!」

突然、バルコニーに続く窓ががらっと開いて、緑の服を着た子が部屋に入ってきた。

「Master、諦めが早いデース！Powerをonするトカ、

displayをopenするトカぐらい、してくだサーイ！」
そして、入り口のドアがぱんつと開かれて、金髪丸めがねの子が駆け込んでくる。

「もうう、元の姿になれば、また使ってくれらると思いましたがのにい
その後ろから、白い髪の女の子がぽこつと顔を出す。

「俺にも気付いてくださいよ、もろに上に乗っていたんスから」
一方で、ベッドの上に乗っていた夏掛けをのけて、俺と同じ姿の男が現れた。

「もう、皆さんそんなにはしゃいで。食事の用意は済んでいるですよ」

「早く食べないと、冷めてしまうわよ」
その後ろから、仕切るような2人の女性の声が聞こえる。

「………ははっ」
なんか、口元から笑いが漏れた。

正直言って、嬉しかった。こいつらとまた一緒にやっつけていける。そう思っただけで、俺の心はすつと明るくなっていった。

「とりあえず、メシにしよう。テルミとレイカもあ言っているし
さ」

俺はそう言ってみんなを立たせた。
そしてその時、俺はあることをすっかり忘れていたのだった。

05・連休も大さわぎ その6（後書き）

どうも、作者です。

当然ながら、話はまだ続くのでした。

というか、あんなところで終わらせたなら、読んでくださる方々に申し訳が立ちませんのでw

次回は、紅娘が我が家の擬人化たちと出会います。

どんな反応をするでしょうか？

乞うご期待！

05・連休も大さわぎ その7

「ちよとアナタ、何するアル、引ばらなくても、ワタシ逃げないアル」

「ごちやごちや喚わめくなつての、こつちだつて取つて食うわけじゃないんだから」

俺たちがリビングに勢ぞろいして昼飯をいただくとしたとき、玄関のほうからそんな声が聞こえた。

勢ぞろい、と言ったが、実は今、メシ時に真つ先に現れるヒビキの奴が、席についていないのだ。

「どうしたのかな、ヒビキお姉ちゃん？」

「大方、不審者でも捕らえたのであるう。あやつは外にいたからな」
「引つ越したばかりだというのに、物騒な話」

「番犬を飼うか、ホームセキュリティの会社を頼むのが良いでしょうか」

事情のわからないモノたちが勝手なことを言っているその横で、俺はちよつと苦笑したまま固まってしまっていた。

なぜかって、そりやあみんなが「不審者」と言つその正体について、心当たりがありすぎるくらいにあるからだ。

「あれ、どうしたんスカ、将仁さん、変な顔して」
「ん、ああ、いや、そのな」

どう答えたらいいか、考えていると、ヒビキがその騒ぎの元となった相手の襟首をつかんで引きずるようにしながらリビングに入ってきた。

「待たせちまつたかな」

「誰ですかあ、その人お？」

「ああ、なんか玄関のところで家の中をしきりに伺うかがつてたんで、怪しいから捕まえてきたんだ」

「怪しいとは心外アル、ワタシ、ソコで待てる言われたから待てた

だけアル」

ヒビキに引つ張ってこられたその女の子は、負けん気が強いのかそれでもちゃんと言り返す。

と、その子が俺に気付いたらしく、たたたとこつちに駆け寄ってきた。

「もう将仁サン、ワタシのこと忘れるのダメダメよ。とても乱暴な人に捕またアル」

その瞬間、部屋中の視線が俺に集中した。

「お兄ちゃん、その人、だあれ？」

うちのモノ軍団の意見を代表するかのよう、ケイが重たーい声で聞いてくる。

こういう時に頼りになる常盤さんは今外出中だ。引越しに関する手続きをするために役所に行っていてまだ戻っていないのだ。

いつまでも黙っているわけにはいけないので、俺は覚悟を決めることにした。

「えー、今日から新しくうちの一員になる、紅娘ほんにゃんさんだ」

学校の先生みたいな言い方になってしまったが、あらかじめそう紹介してから紅娘本人を前に出す。

「二ーハオ！ワタシ、ただ今紹介されました、中華鍋の擬人化、紅娘言いますネ。得意なのは、火の扱いと料理アル、ミナサンよろしく頼むのコトね！」

相変わらぬマンガ的中国人のような喋り方で紅娘が自己紹介する。そして一通り言い切ると、ぺこんと頭を下げた。

05・連休も大さわぎ その7（後書き）

どうも、作者です。

紅娘がモノたちと初邂逅しました、ってそんな大げさなものではないですが。

さて、紅娘は真田家のモノたちに受け入れられるのでしょうか？

そして、主人公の運命は？

乞うご期待！

05・連休も大さわぎ その8

それに対する反応は様々だった。

「Yeah, Miss Hong-nyang. Nice to meet youネ!」

「一緒にい、頑張りましょうねえ」

「さつきは悪かったね、首根っこつかんだりして」

「もう、ヒビキさんたら早とちりなんですから。セキュリティの見直しまで考えてしまったでしょう」

そんなふうに分を売り込む奴もいれば。

「お兄ちゃん、の浮気者おおおお！今度は中国の人のおおおお!？」

「将仁くん、和食は口に合わないのかしら？」

「上官つ、昨日といい今日といい、貴様は何故にこうも節操がないのだ！我々では不服であるというのか!」

こんなふうになぜか俺に詰め寄る奴もいる。浮気者とか節操がないとか言われても、この擬人化の力自体、出物腫れ物ではないが、いっどこでどういつきっかけで発動するのか、未だに判らないので俺にもどうしようもない。

「しょうがないだろ、俺にだってコントロールできないんだから」

「なんでよお！お兄ちゃんの力なんでしょおっ！なんで発動するのか考えたことないの、お兄ちゃんんんんっ!？」

「いていてててっ、つねんなつねんなっ!」

はつきり怒った表情のケイが俺の頬をぐにゅとつねる。マジで痛いぞ。

「上官、掌には感覚が集中する場所があつてな。軽く圧した時は大したことが無いが、力の加減を間違えるとのた打ち回るほどの激痛が走るそうだ。試してみようか？」

「いや、それはマジ勘弁して」

親指の腹で俺の掌をなぞりながら、静かな迫力をにじませてシデンがつぶやく。表情がいつもどおりな分、マジで怖い。

「要望があるなら、はっきり言いなさい。好みに合わないものを出したとあっては、台所を預かるモノとしての沽券に関するから」

だが、一番怖いのはこのレイカのあまりに真剣すぎるまなざしだ。

新人が調理器具、台所に関係するモノだってことが、よっぽど気になってるらしい。

「だから何度も言ってるだろ、事故みたいなものなんだから」

俺には、そうやって宥めるのが精一杯だった。

「まあまあ三人とも、そんな目くじら立てないでさ、これも何かの縁だと思おうよ」

鏡介が助け舟を出してくれるが。

「鏡介お兄ちゃんまでそんなこと言うのこの裏切り者おおおおお

おお！」

「鏡介ええええええええ！貴様もそういうことを言うのかあああああああ！」

どうやら地雷を踏んでしまったらしく、ケイとシデンの2人は今度は鏡介に食って掛かっていった。ここまで増えたら一人ぐらい増えても同じだと思っただが、ここでは言わないでおく。

というのも。

「怒らないから、本当のことを言いなさい。彼女の話は、本当に故意に呼び出したのではないの？」

「だからさつきから何度もそう言ってるだろ！」

このとおり、今回現れた新顔、紅娘のことを同じ台所用品として一番気にしているレイカに、ほとんど尋問のように詰め寄られているからだ。

全くキャラクターが被らない相手をこれほど警戒するとは、うちのモノたちのポジション争いは俺が想像したよりずっと厳しいものらしい。

そういう意味だと、鏡介はポジションを脅かすモノが同じ鏡しかな

いからいいのかもしれないなあ。

「ちよつと将仁くん、聞いているのかしら？」

「うひゃああっ!?!?」

05・連休も大さわぎ その8（後書き）

どうも、作者です。

やっぱりというかなんというか、また大騒ぎになってしまいました。最後に主人公氏がなにかされていますが、それが何かは次回に判ります。

さて何をされたのでしょうか？

次回も乞うご期待！

05・連休も大さわぎ その9

突然、首筋にすごく冷たいものが触れ、思わず俺は飛び上がった。しまった。

しかもその冷たいものは襟首から俺の服の中にするりと入り込んだ。「うわ、うわ、うわ！」

おかげで、俺はその冷たいものを出すために悲鳴をあげてシャツの裾をズボンから引つ張り出すことになった。

「れっ、レイカお前、いきなり服の中に氷入れるたあどっいう見だっ!？」

「将仁くんが人の話を聞かないのが悪いのよ。全く、私はあなたを人の話を聞かないような子に育てた覚えはないのだけれど、どこで間違ったのかしら？」

俺も冷蔵庫に育てられた覚えはない、と言いそうになったんだが、俺の目の前にかざされたレイカの右手を、正確に言うとその手に握られた何かを見た瞬間に、言えなくなってしまった。

それは透き通っていて細長く、先端に向かうに従って細くなるという、つららみたいな形をしている。で、最初はそのとおりつららかと思っただが、その認識は甘かったと教えられてしまうことになった。

「ってオイ、ほ、包丁じゃねえか！」

どうやって作ったのだろうか、氷でできた細くて先のとがった、そして刃の部分が見たことが無いぐらいに長い包丁が、レイカの手に握られていたのだ。日本刀なんかで「抜けば球散る氷の刃」なんて慣用句があるが、これはマジで氷の刃だ、輝きの冷たさはその比ではない。

そしてそれは、まさに俺の目の前に突きつけるようにして向けられている。

「生ものを切るときには、刃物との摩擦で熱を持って、そこから鮮

度が落ちてしまうの。でもこれなら、その熱が中和されて鮮度を保つことができるのよ。

それにこれは刺身包丁、関西では柳葉包丁とか言われているのだけれど、肉や魚を切るのに最も適した、数ある和包丁の中でも最も切れ味がいいものなのよ」

眉ひとつ動かさず刃物をこっちに向ける姿は、まるで俺を今から三枚におろそうとしているようで、あまりに怖すぎる。

「今なら申し開きも通るわ。彼女を召喚した理由を答えなさい」

誰でもいいから助けてくれえ、と心の中で悲鳴をあげた、その時。目の前を、何か黒いものが右から左へと通り過ぎた。と同時に、ぱきいんと軽い音がして、レイカが持っていた氷の包丁の刃がちょうど中ぐらいから折れた。その折れた破片はくると宙を回転しながら舞い、そして天井に硬質な音と共に突き刺さった。

ほとんど同時に、その黒いものが通り過ぎたほうから、何か固いものが壁にぶつかったような大きな音がする。

何事かと音がした方を見る。

そこには、こわんこわんこわんと独特な音を立てながら回る、でかい中華鍋が転がっていた。って、あれって確か紅娘が背負っていたやつじゃないか？

「先輩、先の尖った刃物、人に向けるのよくナイね」

と思っていたら、その紅娘が、床で回っていた鍋を拾い上げ、そして背中に背負いなおした。まさかと思うが、あいつ、あの鍋を投げたのか？

ふと見ると、レイカがその折れた包丁を、ちょっとだけ驚いたようにしげしげと見ていた。

そして。

「これ、あなたがやったのかしら？」

すっと目を細め、その折れた包丁を紅娘のほうに向ける。レイカってあまり表情が豊かじゃないんだが、確実に怒っている。

「将仁サンのこと、助けるためアル」

一方の紅娘は、背中に回した鍋に指をかけたまま、それがどうしたといわんばかりにさらりと答える。

そして、しばしの間、2人のにらみ合いと、緊張した沈黙が流れる。マンガ的な表現だが、その二人の間に火花が散っているようにさえ見える。その隙に俺はレイカから離れた。

二人は、そのままにらみ合っている。縄張り争いがこんなにすさまじいものとは思わなかったので、俺はただただ気圧されるだけだ。そのとき。

「ぶええつくしよい！」

鼻がむずむずつととして、くしゃみが出てしまった。緊張感のない鼻だ、と呆れてしまう、が。

その瞬間。なんか、空気が緩んだ。

「やめましょ、こんなこと」

ほう、と小さく息を吐いたレイカが、折れた包丁を左の袖の中にしまう。

「そアルね、ケガしてもつまらないアル」

そして紅娘のほうも鍋から手を放す。

怪我の功名とでもいうんだろうか、俺のくしゃみ一発で、2人の間にあつた緊張がきれいに消し飛んでいた。

「なー、もういいだろお。飯はできてんだから食おうぜ、もうあたしやハラペコだよ」

「全く貴様は、何もしていないくせに何故そう空腹を訴えられるのだ？」

「しょうがないだろ、あたしや燃費がよろしくないんだから」

「上官、なぜこんなくつぶしを呼んだのだ、食費がかさむぞ」

「でも、食べないと冷めておいしくなくなっちゃうよ？」

「それに、このままでは片付くものも片付かないでしょう。とにかく、話は食べてからにしたほうがいいでしょう」

「ん、そうだな。じゃあ悪いけどケイ、紅娘のぶんの茶碗と箸を出してやってくれ」

「はい！」

俺の言葉に気持ちのいい返事をしたケイが、とててと台所に駆け込んで、予備の茶碗と箸を持ってきた。

05・連休も大さわぎ その9（後書き）

どうも、作者です。

レイカがだんだん本当の雪女になってきました。

そしてやっと紅娘が仲間に迎えられました。めでたしめでたし。
とはいきません。

乞うご期待！

05・連休も大さわぎ その10

「それにしても、紅娘、だっけ。またえらい思い切ったことやったね」

「ほへ？」

鏡介が声をかけると、紅娘は目をぱちくりさせる。ちなみに、いい加減間違えられるのがうっとうしくなってきたので、今日から鏡介は俺と違う服を着ることにしている。

すると、鏡介はすたすたと壁際に歩いていくとその一角を指差した。「ここ、見事に跡になっちゃっている」

その壁には、さっき紅娘が投げた鍋が当たった跡が、三日月形にえぐれた傷跡となってくっきり残っていた。

「あ、アイヤ……」
さすがにまずいと思っただらしい。紅娘はその傷跡の前に膝をついて覗き込んだ。

「上官、昨日引越したばかりだというのに、どう始末をつけるつもりなのだ」

一方で、シデンが俺の目の前に仁王立ちになり、その傷がついた壁を指差す。その口調は、なんだか妙に勝ち誇っているように聞こえる。

「考えなく動くような輩は迷惑である」

「あんまりお前も人のことは言えないと思っただが」

「な、なんだと!？」

「出て早々鏡介はぶん投げるわクリンの顔に掌底ぶち込むわヒビキにケンカ売るわ」

「うっ、だ、だが上官ッ、我は、物を壊したり傷つけたりはしていないぞっ！」

「物を壊さなきゃあいってわけじゃないだろうが」

ここまで言ったら、シデンはうっむいてしまった。いつも偉そうに

しているからか、こいつの悔しそうな顔を見るとなんかちよつとだけ気分がいい。

「……俺って陰険かな。でもまあこの後ぶん投げられるだろうから、それで勘弁してもらおう。」

「……じつ……上官ツ、貴様あつ！」

ほら、やっぱり胸倉を掴んで来た。とはいえそのまま投げられるのも癪しやくなのでちよつと抵抗して腰を引いてみる。

「うわ!?!」

「きゃあ!?!」

だが、勢いに負けて軽く一步下がったところ、何か冷たいものを踏んでしまい、足が滑った。おかげで、俺はそのままリビングの床にひっくり返ってしまった。

「つてえ……」

また背中を床にしたたかにぶつけてしまった。こんなことを毎日やっていたら、本気で受身が上手になりそうだ。

ふと、何かが乗っているような感じがしたので、目を下に向ける。

そこには、珍しく俺と一緒にコケたらしいシデンが、俺の胸倉を掴んだまま、俺と一緒に床に寝転がっていた。

「……」

が、なんだか様子がおかしい。どういうわけか、うずくまったままじつとして動かない。小さな声で何か言っているようではあるのだが、小声すぎて聞き取れない。

まさかと思うが、変なところを打ったんじゃないだろうな。

「おい、大丈夫か？」

自分の上に女の子が乗っかっているというこの状態はいささかアレなんだが、いつまでもこの状態で寝そべっている訳にもいかないの
で、その声をかけて、軽くたたいてみる。

「!!!!!!!」

すると、シデンはなぜか体を強張らせて、よけいに縮こまってしまった。なんなんだ、こりゃ。いい加減下りてくれないと、俺も起き

上がれないんだが。

「あのよ、シデン、ちよつと……」

「いつまで乗ってんだい」

俺が声をかけようとしたら、いきなりシデンの体が俺の上から離れた。

「ひゃあ!？」

どうやら、ヒビキがシデンの腰帯をつかんで引つ張りあげているらしい。宙吊りになったシデンは、赤い顔で困惑したまま、それでも俺の胸倉をしっかりとつかんでいる。

「わわわ、こら、ひっぱるな、襟が伸びる」

一緒に俺の体まで引つ張られたので思わずそう叫ぶ。すると、それで我に返ったのか、シデンがぱつと手を離れた。

あわててそこから這い出し、体を起こすと、ヒビキに腰帯を片腕でつかまれて宙吊りになったシデンが、その状態でヒビキとにらみ合っていた。もともとつり目気味なこともあって襟首を捕まれた猫みたいでかわいくもあるが、その表情は明らかに怒っている。

「……ヒビキ、貴様……今日という今日は!」

もともと赤かった顔をさらに赤くした、シデンが叫んだ。

「許さん!」

その瞬間。腰帯を捕まれて宙吊りになっていたシデンの体が動いた。右足を大きく前に振り、体を大きくひねると、まるで魔法のようにそのシデンの足がヒビキの腕に絡みついた。

「んがっ!？」

そう思った瞬間、鈍い音とともにヒビキが間抜けな悲鳴をあげ、前につんのめり、そして本当に倒れてしまった。

そうすることでやっと俺はシデンがヒビキに何をしたのかが判った。腕ひしぎ十字固めを裏返しにしたとでもいおうか、腰帯をつかんでいた腕を両膝で挟み、そして両方のむこうずねをそれぞれヒビキの後頭部と背中にかけている。しかもご丁寧に足首をクロスさせ、両足と腰だけでヒビキの腕をねじりあげている。そして、引き抜こう

にも手に腰帯がからみついており抜けなくなっている。

「いだだだだだっ！」

「どうだっ！」

「ま、まいった、まいったっ！まいったから、離してくれっ」

「だが断る！」

そしてシデンは自分のひざを曲げる。それによってヒビキの腕は逆方向に曲げられる。

「いだだだだだだっ、こっ、こらてめっ、あだだだだだだっ、やめろって、アームが曲がるっ！」

ヒビキが床をバンバンと叩きながら悲鳴をあげる。ヒビキの馬鹿力でも振りほどけないとはたいしたもんだ、なんて言ってる場合ではない。

全員でヒビキの腕をシデンの足から開放する。

「貴様らあ！離せええ！」

「離せじゃないだろ、駄々っ子かお前は！」

「降参した相手に攻撃するのは、ルール違反でしょう！」

なおもじたばたとするシデンを何人がかりで押さえ込んでおとなしくさせる。

「ヒビキさん、大丈夫ですかあ？」

「氷嚢を用意したわ。痛いのは腕かしら、肩かしら」

「ああ、すまないね。ったくむきになりやがって」

一方で、被害者になってしまったヒビキを気遣う者もいる。

「この家で、ずいぶんにぎやかアルね」

「ミーもthink soデース。The day before yesterday(おととい)は、this number of people(この人数)でone-room apartment(ワンルームマンション)にliveしていたのデ、very very surprise デース」

「……えーと、よく判らないアルけど、ワタシ、この家好きになれそアル」

そして、こんなふうに傍で見ている連中もいる。

横で見ていると面白いかもしれないが、そのとき俺はシデンを抑えていたので、自然とそっちに顔が向いていた。

05・連休も大さわぎ その10（後書き）

どうも、作者です。

シデンは相変わらずトラブルメーカーですw

ちなみに、彼女がシデンにかけた関節技。あれは私が想像したもので、実際に効くのかは判りませんがここでは効くということにしてください。

さて、この後どうなるでしょうか。

乞うご期待！

05・連休も大さわぎ その11

「シデン、おまえって奴はどうしてそう攻撃的なんだよ、同じモノ同士なんだからよ、仲良くできないのか？」

「我は悪くない！仕掛けてきたのはむこうではないか！」

「それ以前の問題だろ、他人の失敗を見て喜ぶなんて最低だぜ」

「うるさい！上官、貴様が、貴様が節操がないから！」

「なんだと!？」

口数が減らないシデンに、ついこつちも声を荒げてしまう。

「お兄ちゃん、もういいんじゃないかな、シデンちゃんのこと許してあげても」

だが、俺たちへの仲裁は意外なところからやってきた。

「ケイ？」

「シデンちゃん、お兄ちゃんにかまってほしくて、すねてるだけなんだよ。人の姿になって、みんなお兄ちゃんにかまってもらえるようになったけど、シデンちゃんはかまってももらえなくなったんだもん」

ケイのその言葉は、俺の心にぐさりと突き刺さった。言われてみれば確かに、ラジコンのときは毎日のように手にしていたのに、人の姿となったシデンに対してはちよつと距離を取っていたような気がする。

振り返つてみると、真っ赤になったシデンが、泣きたいのか怒りたいのか混乱したような顔をして、黙って立っていた。

「……そうか」

俺がすつとそつちに手を伸ばすと、シデンはちよつと体を縮こまらせる。どうやら引っ叩かれると思ったようだが、女の子を叩くのは俺も嫌だ。

「悪かったな、気付いてやれなくて」

その手を、シデンの頭の上にそつと乗せ、撫でてやる。ケイがすね

た時によくやるアレだ。

シデンの場合、頭のとっぺんで髪を束ねているので少々やりづらい。なんてなことを思っていると、妙にシデンがおとなしい。どうしたんだろうか、と違ってシデンのほうを見ると、さっきと違って思いつきり驚いたように目をぱちくりさせていた。

どうしたんだろう。昨日のバレンシアじゃないが、オーバーヒートでもしたんだろうか。

「あ……あ……あ……あ……あ……あ……」

心配になる俺の目の前で、シデンが体を小刻みに震わせ、声にならないような声を出す。これって、何かヤバい兆候なんじゃないだろうか。

「おい、大丈夫か？」

頭から手を離そうとした、まさにその瞬間。

シデンが、いきなりだだだだどと駆け出し、部屋を出て行ってしまった。

「お、おい！」

部屋を出ると、どたどたとたつとけたたましい音を立てて階段を上っていくのが見えた。それをそのまま追いかけてみると、上のほうではたんつとドアを開ける音がした。

まさか引きこもるんじゃないだろうな、と思ったんだが、それは杞憂だった。というか、シデンはもっととんでもないことをやらかしてくれた。

2階に上がると、シデンがかけこんだとおぼしき方に目を向ける。

すると、まさにシデンがベランダの柵を飛び越えようとしたところだった。

「あ、あぶねえっ！」

いきなり目の前で身投げなんかされてはたまったもんじゃない。そう叫びながら全力でそっちに駆け寄るが、とつてい間にあわない。

が、結果から言うと、間にあわなくても問題なかった。

柵を乗り越え、飛び立った瞬間。両手を大きく広げたシデンは、そ

のまま飛び上がったのだ。

忘れていた。シデンは、空を飛ぶことができるんだ。

もつれる足をなんとか操ってベランダに飛び出した時には、シデンはすでに20メートル以上離れたところを飛んでいた。そして、そこで急激に飛行経路を上に向けると、その姿をどんどん小さくしていく。

あっけに取られているうちに、とうとうシデンの姿は見えなくなっ
てしまった。

「……………なんなんだ、ありや……………」

「さあ……………」

俺と、俺を追うように飛び出した鏡介は、半ばあっけに取られてその光景を見ていた。

「まったく、シデンちゃんってば照れ屋さんなんだから。」

すると、同じようにシデンを追ってきたらしいケイが、俺の横に来てにこにこしながらそのシデンが飛んでいった方向を見る。

「あれって、照れてるっていつのか？」

「だって、シデンちゃんってすごい意地っ張りさんなんだもん」

「嬉しいがる顔を、見られなくなかったんですねえ」

いつのまにかクリンも来ていたらしい。のんびりした声が後ろから聞こえた。振り向くと、ほかにも何人かのモノたちがそこに来ている。まあこいつらは女だしモノだから俺よりはシデンの気持ち判るんだと思う。

「おい、ほつといていいのか？」

しかし、そのモノたちがそのまま下へと降りていこうとしたので、思わずそんなふうな声をかけてしまった。すると。

「ほつときゃいいんだよ、腹が減ったら帰ってくるって」

なんて無責任なことをヒビキが口にした。

「おい、いくらなんでもそりゃないんじゃないか？同じモノ同士だる？」

「そんなこと言ったって、どこに行ったのか判らないんじゃないか？」

ようもないよ?」

「それにい、シデンさんが帰るところってここしかないんですからあ。帰ってきますよあ」

「そうそう。それよりはやく飯にしようぜ。いつまでも片付かないと、テルミヤレイカがうるさいだろ」

俺の意見を代弁した鏡介の言葉は、あっさりと却下されてしまった。そして、その言葉は正しかった。

しょうがないと諦め、下に降りて昼飯を食べていると、ひよっこりとシデンの奴が帰ってきたのだ。そして、何食わぬ顔で自分の席に座ると、そのまま飯を食い始めた。

「お前、どこに行っていたんだ?」

「うむ、ちよっと成層圏までな」

「そんな所までなーにをしに行ったんだ」

「少々、頭を冷やしに」

俺の質問にシデンは淡々と答えながら、止まることなく箸を動かす。成層圏といえば確か地上から10キロぐらいの、エベレストよりも高いところだ。確かに寒い所だ(何度ぐらいかは知らん)が、そんな所にわざわざ頭を冷やしに行ったのかコイツは。

まあ突っ込むのは止そう。確かめる手段もないし、またへそを曲げられたらめんどくさい。

「将仁サン、大変アルね、毎日こんな騒がしなトコロにいるアル」
本日入ったばかりの紅娘がしみじみとそんなことを口にする。そして、俺もそう思いながら、吸い物をすするのであった。

05・連休も大さわぎ その11（後書き）

どうも、作者です。

やっぱりシデンはトラブルメーカーでした。

ラジコン飛行機の推進力で成層圏まで行かれるか！というシッコロ
はなしでお願いします。

これだけやってもまだ午前中なんですよね。

というわけで、次回から午後が始まります。

乞うご期待！

05・連休も大さわぎ その12

昼飯の後、俺はトレーニングウェアに着替えた。ここ数日トレーニングを怠っていたので、ちよつと走ろうと思ったからだ。

「あれ？お兄ちゃんどこ行くの？」

それで玄関で運動靴を履いていると、それを目ざとく見つけたケイがたたたたつと駆け寄ってきた。

「ん？あ、ちつとばかり走ってこようかと思ってな。ここ何日かサボってたし」

「走りこみつてやつ？」

「まあそんなもんだ」

「そうなんだあ」

そう言いながら、ケイはジャージ姿の俺を上から下までまじまじと物珍しそうに眺める。

「ね、お兄ちゃん。ケイも一緒にいい？」

「は？一緒に来るう？」

と、突然、ケイがそんな事を言った。

今度は、俺がケイのことを頭のとっぺんからつま先までじろじろと見てしまう。

こう言っちゃなんだが、俺は棒高跳びの県大会記録を持っているそれなりのアスリートだ。足のほうも人間としては速いほうだ。そして、どう鼻屑目に見ても、ケイは俺についてこられるほどのスポーツウーマンには見えない。

「俺がやるのはジョギングじゃなくてランニングだぞ。ついてこれんのか？」

すると、ケイはちよつとの間きよとんとしてから、ちよつと意地悪な顔になった。

「やだなあお兄ちゃん。ケイ、走るなんて一言も言っていないよ？」
「ん？どういうことだ？空を飛ぶ………訳やないか。シデンじ

やないんだから。

そうなる何かに乗ってくる、ということになるが、うちには自転車も三輪車も、スケボーもローラースケートもない。唯一あった「乗って動かすもの」のバイクはヒビキに化けちまったし。

「……あ、もしかして。」

「お前、ケータイに戻るのか？」

まさかと思って聞き返すと、ケイは思いつきり首を縦に振った。

「元の姿に戻るだけだもん、簡単だよ」

そして、ケイは上がりかまちに両手を広げて立つと、タイミングを合わせるようにトントんと軽く跳ねはじめた。

そして。

「えいっ！」

気合を入れると同時にぴょんつと飛び上がり、空中ですばやく体を丸めた。

その瞬間、ケイの体がまばゆい光に包まれ、俺は思わず顔を背けた。そしてその光が収まった頃合を見計らって上がりかまちに顔を向けると、玄関にケイの姿はなく、かわりに一台の携帯電話が玄関マツトの上にぽつんと置かれていた。

「ちゃっちゃんちゃー、ちゃーちゃーらー」。

そのケータイが、聞きなれた呼び出し音を鳴らす。

「はい、もしもし」

「えっへへー、もしもし」

電話に出ると、そのむこうからケイの声がした。

耳からケータイを離して顔の前に持つてくると、そのディスプレイにケイの顔が現れる。

「考えやがったな」

「えへ、これならどこにでも一緒にいられるでしょ？」

確かに、これなら運ぶのに苦労しないわな。毎日のようにポケットに入れて持ち歩いていたもんなんだし。

しかし、「人の姿」を知ってしまったせいか、いつものようにポケ

ツトに入れるのはちよつとためらわれてしまう。想像だが、狭くて暗い上にいるんなものとかゴミとかが入ってくる所だから、そこに居ると言われたら非常にきついのではないだろうか。かと言つて、手に持つて行くのも問題だ。

「どうしたの、難しい顔して」

いろいろと考えていると、ケイが声をかけてきた。

「ええー？お兄ちゃんそんなことで悩んだの？」

正直に言つと、ケイはちよつと呆れたような顔をした。

「ケイはいつもどおりでいいよ。お兄ちゃんのポケットの中、好きだもん」

「暗くて狭いところがか？」

「んー、確かに暗くて狭いけどお、置いていかれるよりずうっといいもん。それに、お兄ちゃんのおいとかがあつたかさとか、感じていられるしい」

「……ぐう、これは、聞いている俺も恥ずかしいぞ。これから、こいつらのすることを根掘り葉掘り聞くのは止めにしよう。」

「わ、わかつた、じゃあ、ポケットに入れておくつてことでもいいか？」

「う、うん」

どうやらケイのほうも恥ずかしかつたらしい。勝手にぱたんと閉じてしまった。

05・連休も大さわぎ その12（後書き）

どうも、作者です。

やっと午後です。

そういえば主人公は一応アスリートだったんですね。
忘れていた人も結構多いのではと思いますw

さてこれからランニングに行こうとする主人公氏ですが、素直にスタートできるわけもなく。

まあ何があるかは。次回を乞うご期待！

05・連休も大さわぎ その13

「何をしておるのだ」

「うわわわっ!?!」

「わわわわわっ」

突然、別の声が背後からした。あまりに突然だったので携帯を、もとい、ケイを取り落としそうになった。ケイのほうもびっくりしたらしく、携帯形状のまま変な声をあげる。

なんとかキャッチして振り向くと、いつのまに來たのか、シデンが仁王立ちしていた。

「お、おまえ、いつの間に」

「うむ、ケイがその姿になって上官と話をしている頃か」

つてことは、ケイとのやり取りを聞かれたということか。これは恥ずかしいぞ。

「それで、上官。貴様、どこかに外出でもするのか？」

上官という呼び方と貴様という呼び方は矛盾しているような気がするが、突っ込むとすねてごねる光景が浮かぶのであえて聞き流すことにする。

「ちよつと走りこみだつて」

「走る?どこへ行くというのだ?」

俺に先んじて、自動的に開いたケイが答えると、シデンはこっちに顔を向けた。どこと言われても、ただの走りこみだから場所の目標なんぞないと答えると、シデンは今度は顎に手を当て考えるようなしぐさをした。

「ならば我も随行すいこうしてやろう」

そして、そのポーズを解除すると、シデンは突然そう申し出てきた。

「ええ?」

「なんだその顔は。この我が、わざわざ貴様の身を案じて護衛してやろうというのだ。本来であれば感謝してもらっても良いぐらいだ

ぞ

偉そうな口ぶりは今に始まったことではないので聞き流すとして。

「護衛だなんてそんなおおげさな」

どこぞのVIPじゃあるまいし、こんな一介の高校生を襲ったってたかが知れてるってもんだ。と言おうとしたところ、シデンは呆れたような仕草をしながらこちらを見た。

「このうつけ者。一昨日、己の身に起きたことをもう忘れたか？」

「一昨日……?」

うつけ者とはずいぶん言い方だが、実は最近非現実的なことが色々とまわりでありすぎて、覚えきれていないのが現状だ。

「ほらあ、あの時、ケイが変な電話を聞きちゃったときだよ」

言われて、やっと思い出した。確かあの時は、俺とケイと常盤さんで不動産屋に行つて、ケイが何処かからかけられた電話を受信したんだっけな。

そういえば、シデンは別のグループで行動していたな、そこで怪しい奴を捕まえて、締め上げたとか言っていた。あの時は、うちのモノたちの超常な能力に圧倒されて話を聞きそびれたが、聞きだすいいタイミングかもしれない。

「言つておくけどな、ランニングだぜ。手加減しねえからな」

「ふっ、望むところだ」

「あれ、将仁サン、シデンサン、こんなところで何してるアル?」
外へ行くためにスニーカーを履いていると、今度は紅娘が現れた。
なんかよく人が来るな。

「ああ、ちよつと腹ごなしをしようかと思つて」

「それじゃワタシも行くアル!」

「なにいつ!？」

俺が反応する前に、シデンがすごいスピードで反応した。なんか知らんが、いきなり顔を上げると、紅娘に掴みかかつて行つたのだ。

「貴様、今日来たばかりだというのに生意気な奴め! 我は認めぬ、認めぬぞおっ!」

「アイヤー何するアルかー！ワタシだて将仁サンに呼ばれたアル、アナタの言うことお門違いのコトね！」

とたんに取っ組み合いが始まる。二人とも武術の心得がある（らしい）から、お互いに掴みかかる手をいなし合って勝負がつかない。

「ねえお兄ちゃん、止めないの？」

その二人を尻目にスニーカーを履きなおす俺を見て、ケイが声をかける。

「あれを見て、止めて聞くとと思うか？」

だが、徐々に加速する二人の手の取り合いを見せてからそう聞き返すと、ケイはちよつと困ったような顔をしながら携帯画面のむこうで首を左右に振った。

「先行つてるぞ」

しかし、そのまま黙って行くのも悪いような気がしたので、家を出る前に、取っ組み合いをする二人にそう声をかけた。

すると、効果は靨面てきめんだったようで、庭先で準備運動をしているとその2人が先を争うように家の中から飛び出して来た。

「こら上官っ！何故先に行ってしまうのだ、護衛の意味がないではないか！」

「将仁サン、ワタシのコト置いていくのダメダメアルよ！」

そして、息もぴったり俺に文句を言い、同じタイミングで互いにらみ合う。なんつーか、似てるなこいつら。

「ケイ、ナビのほう頼むわ」

その隙に、ケイに道案内を頼む。

「え？うん、いいけど、どこに行くの？」

「近くに総合運動公園ってのがあから、そこまでだ」

「総合運動公園……って、ええっ！？そんなところまで走って行くの！？」

妙にケイが驚く。はて、地図で見た限りはそんな遠くなかったと思ふんだが。

「そんな遠いか？」

「だって5キロぐらいあるよ?。」

ランニングだと、道の込み具合とかも考えて20分ぐらいか?そんなに目くじら立てるほどじゃないだろう。

だが、こいつらにとってはそうではないようだ。

「な、なあ上官、途中で飛んでいいか?。」

「あつ、シデンサンずるいアル!ワタシが飛べないのコト知って!」そんな自信が無いなら来なきやいいのに、とは言ったらかわいそうか。この2人は俺より背が低い、つまりは足も短いからその分早く動かさなけりゃならないんだ。

しょうがない、ちよつとペースを落としてやるか。そんなことを思いながら、俺は走りはじめた。

05・連休も大さわぎ その13（後書き）

どうも、作者です。

トラブルメーカーのシデンと、売られた喧嘩は買う紅娘がついてきてしまいました。

さて、ランニングは無事にできるのでしょうか？

それでは次回を、乞うご期待！

05・連休も大さわぎ その14

予想より時間を多めにかけて、俺たちは総合運動公園に到着した。

「はーっ、はーっ、はーっ……」

「ぜーっ、ぜーっ、ぜーっ……」

後ろから、呼吸困難なんじゃないかと思うほどの息切れの音がする。振り返ると、深緑の服のシデンと赤い服の紅娘が、その公園の入り口で息を切らしてうつむいている。

「大丈夫か、お前ら」

その様子があまりにつらそうなので、思わずそう聞いてしまう。俺としては結構ペースを落としたつもりだったんだが、それでも女の子の足にはきつかったみたいだ。

まあ、シデンはえらくかさばる和服を着ているし、紅娘に至ってはでっかい中華鍋なんかを背負っているんだから、長距離走るのには向いていないんだろうな。

と、その二人がほんの少し顔を上げて、俺のほうに手を伸ばしてきた。ちよつとゾンビっぽいその動きにひるんでいると、その2人分4つの手が俺のジャージを掴み、そして二人はそのまま崩れてしまった。

なんか、振り払うのもかわいそうなので、そのままにしておいたものの、このままでは動けない。

ポケットに手をつ込み、携帯電話を取り出して開く。

「ケイ」

「なに、お兄ちゃん？」

携帯の画面に、ぱつとケイの顔が出る。

「悪いが、人の姿に戻ってくれ」

「え、なにかあったの？」

「ん、ちよつとな」

ちよつと心配そうな顔をしたケイにも判るように、携帯の画面をシ

デンと紅娘に向ける。

「うわ、どうしたの二人とも!？」

「走ってついてきたはいいんだが、体力の限界みたいだ。悪いがケイ、その自販機で、何か飲み物でも買ってきてやってくれ」

「うんわかった!」

言うが早いか、携帯電話が俺の手の中からぴよんと飛び出し、空中で光に包まれると、ケイの姿になって着地した。

そして、俺から財布を預かると、すたたたと手近な自販機のところまで行き、ペットボトル入りのお茶とウーロン茶を手にして戻ってきた。

「はい、シデンちゃん、紅娘ちゃん」

ケイがそのペットボトルを差し出すと、二人ともひったくるようにそれを取り、一気に飲み干した。色気も何にも無い飲みっぷりが、二人の消耗ぶりを示している。

「はあ、はあ、じよ、上官、なぜ、貴様は、平然と……っ」
「んも、頭はフラフラ、目はチカチカ、足はガクガクねえ」

やっと手を離れた二人を手近なベンチまで引っ張っていき、座らせる。いくらなんでも、あのまま地べたに座らせておくわけにはいまい。

「しゃーねーな、お前らはしばらくここで休んでろ。俺はもうちょっと走ってくる。ケイ、こいつらの相手をしてやってくれ」

「はあ、はあ、ま、待て、待つのだ、上官、ご、護衛を、置いて、どこへ」

ケイが返事する前に、苦しそうに顔をしかめながら、シデンがむんむんと俺のジャージを掴む。

「そんな泣きそうな顔すんなよ、その競技場のまわりをぐるっと一周してくるだけだ」

「そ、そうか」

そんな遠くに行かないと判ったからか、シデンがほっとした表情で手を下ろした。

「ふう、ふう、ま、マシヤヒトしゃあん、ワラビのこと、おいてかえたら、怨むアルよ」

「だあからそんなことしねえって。俺を信じろよ」

「そうだよ、お兄ちゃんがそう言うんだから信じなきゃ」

ケイは俺に助け舟を出してくれる。

「えらいな、ケイは」

「えへへ、褒められちゃった」

ケイの頭をなでて一言ほめてやると、ケイは嬉しそうにニコニコする。

シデンと紅娘のほうを見ると、肩で息をしながらも恨めしそうな目でじっとこっちを見ている。そんなふうに見て訴えられてもどうしたらいいのか困るんだが。

ふと気がついて周りを見ると、さっきより人影が増えている。昼飯の腹ごなしといったところだろうか、ジャージ姿のやつとか、犬の散歩をしている奴とかだ。

そして、そのうち何人かは、物珍しそうにこっちを見ている。

連れてこなければ良かった、と思ったが、これは口にはいけな
いよな。

「じゃ、行って来る。ケイ、タイムを計ってくれ」

なんかそこにいたたまれなくなった俺は、そう言い残して逃げるようにそこから走り出した。

05・連休も大さわぎ その14（後書き）

どうも、作者です。

どうやら擬人化たちは、特殊なところ以外は普通のようにです。

でもまあ、擬「人」なんですから、人間くさいところがあったても良
いかとw

さて、おいてけぼりになった3人娘ですが、主人公が帰って来るま
でに復活するのでしょうか？

次回も乞うご期待！

05・連休も大さわぎ その15

競技場のまわりなんて言ってもせいぜい1キロ程度しかない。5分もあれば一周できてしまう。

で、一周して帰ってきたところ、うちのモノが座っていたベンチに、ちよつとした人だかりが出来ていた。

まあ、コスプレじみた格好した女の子が3人もいるんだから、そりや目につくよな。しかも一人は鍋なんか背負ってるし。

が、近づいてみると、ちよつと不穏な空気が流れている。

「何度言わせれば判るのだ。我は貴様らなどに用は無し」

「なーそんな怖い顔すんなよ、美人が台無しだぜ？」

「黙れ。この顔は貴様らに見せるためにあるのではない」

「それに、残念アルけど、ワタシさつきお茶飲んだばかりで喉渴いてないアル」

「ね、ねえ、ちよつと、止めようよお、お兄ちゃんが帰ってくるよお」

「じゃあそのお兄ちゃんつてのが帰ってくるまで休むつてのはどうだい」

なるほど、どうやら何人かの男にナンパされているところみたいだ。で、そのナンパ男たちに対し、完全に立ち直ったシデンと紅娘が断りの返事をしている。しかも、紅娘のほうはのらりくらりとあしらっているのに対し、シデンは明らかに嫌悪感をむき出しにしている。ケイはその2人の後ろに隠れ、顔をのぞかせている。

ケイって人懐っこい奴だと思っていたけど、実は人見知りみたいだ。最近の携帯電話はやたらとセキュリティがしっかりしているから、もしかしたらそのへんもあるのかもしれない。

はたから見たら、気弱な妹をかばう2人の姉、って感じた。なんか微笑ましい光景なんだが、ほつとくと切れたシデンが男たちを投げとばしてしまうかもしれないので、そうなる前に声をかけることに

した。

「どうしたんだ、お前ら？」

「あつ、お兄ちゃん！」

何食わぬ顔でそいつらがいるベンチのところに顔を出すと、今まで二人の後ろで小さくなっていたケイが、俺に飛びついてきた。

「ふええーん、怖かったよう」

そして俺に抱きつくくと、そのままべそをかきはじめる。

「将仁サン遅いアル。もう、帰っちゃたと思たのコトよ！」

「あと少し遅かったら、天誅を下しているところであつたぞ」

そんなことを言いながら、シデンと紅娘がこっちに来て俺の横に立つ。

一方で収まらないのがこのナンパマンたちだ。せつかく見つけて、口説き落とそうとしていた獲物を、後から来た奴に横取りされたんだから、面白くないと思うのも無理は無い。

「なんだてめえは？」

で、自然とこうなる。

「こいつらの身内だ」

言いながらそいつらのなりを見る。まあアレだ。即に言う不良ルックスってやつだ。年は俺とそんな変わらないと思うんだが、正直言つて運動場には似合わない風体だ。

「あん？身内だあ？」

かっこつけようとしているのか、そいつらは少しばかり凄んでくる。

「あつう、怖いよう」

言いながら、ケイがすすすつと俺の影に隠れる。なんか俺を前に出そうとしているような気がするのはいかのせいかな？

「お、お兄ちゃん、帰ろうよ、怖いよう」

しかし、こんなふうに頼られるとかっこつけたくなってしまうのは男の性でも言おうか。

「そつちこそなんだ、人の身内怖がらせやがって」

逆にこっちからも凄んで見せてしまふ。後の展開が読めるので止め

ておきやよかつたと思うが、口から出た言葉は取り返せない。

「なんだとてめえ、女の前だからってかっこつけやがって！」

案の定、ナンパマンたちの一人が声を荒げた。こっちはそんな気はないんだが、まったく判りやすい連中だ。こいつらの正体を知ったらどんな顔するかね。

「カコつけよとしてるのはアナタたちアル。自分のしよとするコトも判らないアルか？」

「ふっ、所詮は、弱いくせに力を誇示しようとするだけの愚か者どもよ」

俺が答える前に、紅娘とシデンが挑発するようなことを言う。なんでそんな、地雷を自分から踏むようなことをいうんだお前は。お前の発言の責任を取るのは俺なんだぞ。

「このアマあふざけやがって！」

案の定、ナンパマンたちは最悪にもその二人に手を上げた。

05・連休も大さわぎ その15（後書き）

どうも、作者です。

気がついたら累計アクセスが10万を超えていました。

こんな稚拙な作品がこんなに沢山の人に読んでいただけているなんて感謝の極みです。

これからも頑張りますので、生暖く見守ってください。

さて、今回は。復活した3人娘（と言ってもももとは携帯電話とラジコン飛行機と中華鍋ですが）がナンパされていますが、相手が少々よろしくないようです。

さてどんな顛末になるのでしょうか？

次回を乞うご期待！

05・連休も大さわぎ その16

さて、ナンパマンズに手を挙げられたわけだが、それは結果としてあつちに凶となった。

なにしろ、空中で一回転して頭から落とされる奴、掌底喰らって吹っ飛ばされる奴、見事な飛び回し蹴りを喰らってひっくり返る奴など、数どころかいろいろなところで劣っている相手に一方的にフルボッコにされたからだ。と言っても俺がやっているのではない。俺も一応心得がないわけではないんだが、俺が動くより先に、まるで打ち合わせていたかのようにシデンと紅娘が動いていた。

女に手を上げる時点でまあくなく奴じゃないんだが、その女の子2人に、見ているだけで気の毒になるほど一方的にフルボッコにされるといふ屈辱まで受けることになったんだから、当人たちにとってはシャレにならない事態だろうな。

「お、覚えてやがれ！」

拳句の果てには、もうカビが生えるどころか土に還りそうなベタな捨て台詞を残してそいつらは逃げ出してしまった。

「あつつう、怖かったよう」

心底ほつとした顔をして、ケイが俺にしがみつく。

「一昨日来るが良い、痴れ者め！」

売り言葉に買い言葉でもないんだろうが、シデンが一步踏み出し、腕組みをしてふん反りがえりながらそう言い放つ。

「そんなコト覚えてるホド、私は物好きナイアル。ね」

一方の紅娘は、可愛い仕草などしてこつちに同意を求めてくる。しかし、「ね」なんて言われても、俺にはそんなもん判らんぞ。

「でも、紅娘ちゃんって、強いんだね」。ケイ、あこがれちゃうなあ

その紅娘に、ケイが羨望のまなざしを向ける。

「あれは、中国拳法か？中々に興味深いものを見せてもらった」

そして、シデンも紅娘に珍しく賞賛（？）の声をかける。

確かに、紅娘の動きは只者ではなかった。初対面時に見せた肘打ちは、伊達ではなかったということ、なんだろうか。

しかし、中国人で拳法使いで料理人とは、ますますもってベタな奴だな。

「それに比べ、先日の輩といい今の連中といい、昨今の日本男児のなんと軟弱になったことよ。嘆かわしい、ああ嘆かわしいっ」

ほうほうの体で逃げていった連中を見て、シデンが大げさに嘆いて見せる。

おまえはどここの東郷平八郎のじいさんだ、と言いそうになって、ふとあることを思い出した。

「ところで、その先日つてのは、あれか？」

あれ、というのは当然、一昨日の昼の話だ。不動産に行っていた俺は何者かに尾けられていた。結局その連中は捕まえられなかったんだが、シデンたちはその連中をとっ捕まえたんだった。

「どうしたのだ、いきなり。ははあん、そうか、判ったぞ。この見目麗しき乙女が、いつどこの無礼者の毒牙にかからぬかと心配しておるのだな」

しかし、聞こうと思ったところでそのシデンが惚けた先手を打ってくる。

「何言つてんだ、触れた相手を片っ端から吹っ飛ばす機雷みたいな奴のくせに。俺が聞きたいのは、一昨日の話だ」

「なんだ、つまらん」

と言いながらもそんなつまらなそうな顔はしていない。やっぱり冗談だったみたいだが、もしそれに乗ったらどうという反応をしただろうか、ちよつと惜しかった。

とりあえず立ち話もなんなので、2人を手近なベンチに座らせると俺もその横に腰掛ける。

「はいお兄ちゃん、スポーツドリンク」

「お、サンクス、気が利くな」

俺の横に座ったケイが、水滴のびっしりついたペットボトルを差し出してくる。ペットボトルを受け取り、かわりに頭をなでてやると、ケイはさっきとうってかわって満面の笑みを浮かべた。

「じいーーーーっ」

「じいーーーーっ」

キャップを開けて中身を胃袋に流し込んでいると、シデンと紅娘が恨めしそうな顔をしてこっちを見ているのが見えた。

「なんだよ、欲しいのか？」

「ち、違っわっ！」

シデンはぶいっつと顔を背ける。

一方の紅娘は、無言ですつくと立ち上がると、なぜか俺の前に回ってきた。

そして、ひよいと俺の飲みかけのペットボトルを取り上げて、物珍しそうにそれを眺めながらこんなことを口にした。

「将仁サン、ワタシ、もつと効率いい回復剤知ってるのコトよ？」
回復剤って、また大げさな。これはただの水分補給だって。と言おうと思ったんだが。

「回復剤い？」

ちよつとだけ興味を持ってしまった。

「そうアルよ。中国四千年の漢方の集大成、こおんな水なんか目じやないアルよう？」

すると、紅娘は俺の目の前にそのペットボトルをぶらぶらさせながら顔を近づける。

「貴様」

「あいた！」

と、そのペットボトルを持った手の手首を、シデンの手が伸びて掴んだ。どうやらそれが筋のあたりを押さえていたらしく、紅娘の手からまだ中身の入っているペットボトルが俺の前に落ちてきた。

「何するアル！」

「変な色気を出すな！上官が変な気を起こしたらどうする！」

変な色気って、なんだよそりゃ。

「もう、二人ともケンカしちゃダメだよ」

その二人の間にケイが手を伸ばす。おかげで俺の目の前で女の子の腕が立体交差する。

「ここらここら、俺の上で取っ組み合いすんな、人が見てる」

実際はそうでもなかったが、そう言っとそれぞれの手がぱっと離れていった。

05・連休も大さわぎ その16（後書き）

どうも、作者です。

前回に続いて今回も主人公はなにもしていませんw

しかし、ナンパしていて腕ずくで退けられるというのは、男として
やっぱり悲しいもんでしょうなw

さて。主人公はシデンに何か話しかけていたが、何を聞こうとしたのでしょうか？

では、次回を乞うご期待！

05・連休も大さわぎ その17

なんとかかひと段落したので、改めてシデンに話を聞くことにする。

「なあシデン、さっきの話だけど、お前、あの時捕まえた奴らから、何か聞きだしたのか？」

「あの時？ああ、一昨日の話か」

大したことは聞き出せなかったぞ、シデンはそう前置きしてから話しました。

「その、下つ端の中の下つ端連中だが、上からの命令で、上官の、ひいては我々の住まいを突き止めるために尾行していたのだそうだ。そういう意味では、あの後ですぐ引越したのだから、まったく意味が無かったと言えるのだが」

上官ってというと、俺のことか。ということは、そいつらに命令を出した「上」って奴は俺の顔は知っているってことか。

「ほかに？」

「うむ、その“上”からの指示を誰から受けたのか、についても吐かせたのだが、そやつは他の仲間から伝え聞いただけのようだった。ヒビキの奴が一人星にしたのを目の前で見て、それでなお吐かなかったところから察するに、本当にそれ以上のことは知らぬものと思われる」

なんか、ひどい扱いだな。ちょっとかわいそうになってしまふ。

「そついや、そのもう一人ってのはどうしたんだよ？」

「うむ、レイカが氷付けにしたので、そのまま放置してきた。まあここ数日天気も良かったから、もう溶けておる頃だろう」

そついやそんなこと言っていたな。……死んでないよな。

心配になるが、口にしたら事実になりそうで怖い。

「ふつ、心配は無用だ。このシデン、上官に累が及ぶようなへまはせぬ」

シデンが腕を組んでふんぞり返りながらそんなことを言う。俺が心

配しているのはそういうことではないんだが。

「ま、まあとにかく、殺さない程度にな」

「承知の上だ」

「モシモシ、将仁サン。もしそんなコトまたあったら、ワタシもやつちやていいアルか？」

なぜかそこに、部外者であるはずの紅娘が口を出してくる。しかも口調からして思いきりノリノリだ。うちのモノは武闘派が多いんだろっか。

「ケイは、そんなことしないよな」

思わず、横にいるケイに聞いてしまう。さっきまで怖い怖い言っていたんだからそんなわけはないと思うが、念のため。

「えー、しないよう、だって怖いし、お兄ちゃんに心配かけちゃうもん」

想像通りの答えをしてくれるケイに、なんかほっとしてしまう。

「偉いな、ケイは」

ケイの頭を撫でると、ケイは喉を撫でられた猫みたいに目を細めてにこーっと笑顔になる。本当にいい子だ、こんなのが本当に妹だったらいいなあ、って、これじゃただのロリコンじゃないか。

「じいーーーーーっ」

「じいーーーーーっ」

意識をこっちに引っ張って来たとき、俺はまたシデンと紅娘がまた恨めしそうな目でこっちをじーっとしているのに気がついた。

「上官、我は今、自分が身につけている技術を、少しだけ恨んだぞ」

「将仁サン、強い女はキライアルか？」

二人が悲しそうな声をあげる。なんか、世話が焼ける妹みたいだ。でも、そんなすねた態度も可愛いと思ってしまうあたり、俺も毒されて来ているなー、と思ってしまうのだった。

05・連休も大さわぎ その17（後書き）

どうも、作者です。

なにやらきな臭い話になっているようです。

あまり色々と書くとネタバレに繋がるので、今日はこの辺にしておきます。

さて、次回は。

妹好きな人なら、萌える、かもしれませんw

それでは乞うご期待！

05・連休も大さわぎ その18

帰りは、のんびりと歩いて帰ることにした。一人だったら遠慮なく走って帰るところだが、俺一人ならともかくそれだけの体力がないことが判明したシデンや紅娘をさらに走らせるのはさすがにかわいそうなので、二人に合わせることにした。……よく考えたら、シデンは成層圏へ飛んでいくだけの体力があるはずなんだが。ちゃっかりしたもので、歩いていくと聞いた瞬間、ケイも歩くと言い出し、結局みんな歩いて帰ることになったのだ。

「あつ、スイーツが有名な喫茶店はっけーん！」

と、そのケイが声を上げた。えっ、と思った瞬間、俺より先にモノたちが反応した。

「ワタシ、杏仁豆腐あんことうふが食べたいアルー！」

「ケイよ、その店に餡蜜あんみつはあるのか？」

耳聡いというか抜け目がないというか、喫茶店という言葉に紅娘もシデンも反応して勝手なことを口にしてている。こいつら、確か走りこみのために外に出た俺についてきただけだったはずじゃなかったか？

でもまあ、仲がいいことはいいことだ。特に紅娘は他のメンバーとちがってうちに来たのすら今日だから、こうして仲良くやってくれているのを見るとなんか安心するし、それに話題がお菓子なことだなんてすごくかわいいじゃないか。

ちよつと暖かい気持ちになってその三人娘を眺めていると、なぜか彼女らは集まって小声でなにやら相談？をし始めた。

何の相談をしているんだろう、ちよつと興味があったので、聞こえてくるのを聞くのはいいだろうと自分に言い訳をして聞き耳を立ててみた。

「なにい！？そ、そんなこと、我が口にするのか！？」

「だって行くって言わせなきゃダメじゃない」

「し、しかしだな」

「ワタシがそんなコト言うの、ちょっと図々しくないアルか？」

「ないってばあ、ほらみんなでがんばる？」

「なんだなんだ？何を相談しているんだ？」

と訝しがつっていると、いつのまにかその3人に囲まれていた。

「わ！？」

そして、なぜか3人いつせいに俺のジャージを掴んできた。

「ねーねーおにいちゃん、あそこ行こうよあ」

ケイがジャージの袖をぐいぐいとひっぱる。見るとそっちのほうに

喫茶店らしい店がある。あれが、さっき「はっけーん」とか言っ

いた店だろうか。

だが、次の瞬間、俺はふき出しそうになってしまった。

「お、おにーちゃん、シデンね、あ、あんみつ餡蜜が、食べたいのっ！」

いつも偉そうにふんぞり返り、そして腕っ節も男顔負けのあのシデ

ンが、上目遣いアンドかわいい言葉遣いで、あんみつ餡蜜をねだる姿を見て

しまったからだ。

やっている本人も相当恥ずかしいらしく顔が真っ赤だが、なんかぐ

らっと来てしまう。これがギャップの威力という奴だろうか。

「オニちゃん、かーいい妹の願いアルう、聞いてちょうだいア

ル」

驚いて硬直しているところに、後ろからぴよいと別の子が飛びつい

てきた。

思わずそっちを見ると、につこにこ顔の紅娘が俺の首根っこに腕を

回して抱きついてた。その笑顔に加え、背中になんと形容しが

たい軟らかい感触があたっている。

うーん、紅娘のやつ、舌足らずなのに発育がいいな。じゃなくて。

なんでみんな俺をお兄ちゃんと呼ぶ。ぱつと見の容姿は、3人とも

中学生ぐらいに見えるからおかしくはないが、でもケイはともかく

シデンも紅娘も俺のことそんな風に呼んだことないだろうが。

「「「ねえ、いいでしょあ？」」」

うっ、こ、こいつらはっつ。そろって上目遣いしやがって。か、かわいじゃないか。

はっ、こいつら、さっきケイに、入れ知恵されたな。

「おにいちゃん」

うぬぬぬうっ！な、なんとという破壊力っ！

「わ、わーかったわかった！餡蜜あんみつでもケーキでも食べえ！」

く、屈してしまった。無念。

「やったあー！」

「ばんざー！ばんざー！ばんざー！ばんざー！」

「杏仁豆腐あんじんとろたくさんたくさん食べるアルねっ！」

がつくりと力尽きた俺と対照的に、3人娘は弾けたように大喜びしている。

しかし、予想外の出費になったが……でもまあ、あいつらの満面の笑顔が見られたから、いいか。とあきらめることにした。

05・連休も大さわぎ その18（後書き）

どうも、作者です。

年少組がみんなして主人公にたかっておりますw

でも、こんなふうに頼られるのもありじゃないかと思えます。

さて、これから帰るのですが。

帰ったら帰ったでまた何かありそうです。

では、次回も乞うご期待！

05・連休も大さわぎ その19

喫茶店で3人娘の相手をしていた(ジャージ姿で喫茶店に入って女の子3人の相手をしているのはかなりはずかしかった)ら、うちに着いた時には4時を回ってしまっていた。

「あらあ。将仁さん、皆さんもおかえりなさい」

玄関でほうきを持って掃き掃除をしていたクリンが、いつものほわわんとした笑顔で俺を出迎えてくれる。

と、そのクリンの顔がぬつと近づいてきた。突然のことにちよつとどぎまぎしていると、クリンは犬のように鼻をひくひくさせてからこんなことを言った。

「コーヒーの匂いがしますねえ。どちらに行っていたんですかあ?」
えっ!? 思わず口元を両手でぬぐってしまふ。

「止さぬかクリン、無礼であろう」

俺とクリンの間にシデンが割って入ると、クリンは今度はそっちに顔を近づけて鼻をひくつかせる。

「あら、シデンさんは緑茶と餡蜜ですかあ」

「な、なっ!?!」

「クリンちゃん判っちゃうの!?!」

「うふふふ、私い、鼻はいいんですよあ」

「アイヤー、杜伯曼ドールマン犬もビツクリアル」

鼻がいいという話ではないと思うんだが、なんか突っ込めない。

「あー、クリン、ちよつと聞きたいんだが」

「はい、何でしょうか」

「常盤さんは帰ってきたかい?」

「あ、いいええ、まだお戻りになってないですう」

「そっか」

引越しの手続きって、そんなに大変だったっけな?と首を傾げてしまふ。実家からアパートへ引っ越すときの手続きは親父やお袋に全

部任せていたし、気にもしなかつたんだが。

まさか、俺が知らないところで、変な手続きとかして来ているんじゃないだろうな？

とりあえず、途中で涼んだとはいえ汗をかいたので、3人娘の相手をクリンに任せ、着替えることにする。

中に入ると、なんか妙に静かだ。掃除機をかける音がしたのでそっちに行くと、テルミが鼻歌を歌いながらリビングで掃除機をかけているところだった。

「あ、将仁さん、おかえりなさいませ」

俺に気づいたテルミが、わざわざその掃除機のスイッチを切って頭を下げる。テルミって、テレビっていう浮ついたモノだったのに、本当に真面目だよな。

「ん、ただいま。なんか家の中が静かだけど、何かあったのか？」

「あ、それは多分、レイカさんがヒビキさんと鏡介さんを連れて、先ほど買い物に向かったからでしょう」

レイカ、ということは食料品の買出しあたりか。そこに馬鹿力のヒビキと男の体力を持つ鏡介を連れて行ったということは、相当買い込むつもりだな。

ん？

「バレンシアは？」

ケイ、シデンと紅娘はまだ外でクリンと喋っている。で、常盤さんは役所に手続きに行っていて、レイカはヒビキと鏡介を連れて買い物に行っている。で、テルミは今目の前にいる。所在がわからないのはバレンシアだけだ。別に管理するつもりはないんだが、ちょっと気になる。

「ええと、お昼の後、2階に上がってから一度も下りてきていないでしょう」

俺の問いに、テルミが顎に指を当てて考えこみながら答える。

「何やってんだ？」

「さあ、詳しくは存じませんが、常盤様のお手伝いではないでしょ

うか？」

なるほど、確かにバレンシアは今や常盤さんのデータベースであり助手だもんな。でも、常盤さんがいないときに勝手にやっていいんだらうか。

というわけで、俺は静かに常盤さんの部屋へと向かった。

05・連休も大さわぎ その19（後書き）

どうも、作者です。

なんか、普通のような普通でないような光景です。

ちょっと大人しい光景なので、物足りないかもしれませんがw

次回は、バレンシアが登場します。

乞うご期待！

05・連休も大さわぎ その20

開いているドアの隙間から中をのぞく。隙間と言っても顔半分ぐら
いあるので、それほど注意しなくても中をつかがうことは出来る。
そしてその部屋の中で、見覚えのある金髪が、応接用のソファにじ
っと座っているのが見えた。

「なにやってんだ、バレンシア？」

「Oh, Mashter. Gurro everrhng.」
そう、それがバレンシアだった。

まあバレンシアは今や常盤さんの秘書みたいなものだから、ここに
いてもおかしくない。が、その光景はちよっとおかしかった。

バレンシアは、なぜか何かのケーブルを口に咥えていたのだ。そし
てバレンシアが咥えているケーブルの反対側は、壁にある電話用の
モジュラージャックに繋がっていた。

要は、電話線を咥えているのだ。

「何やっているんだ、お前は？」

「見て、わかやライレーふか？」

そんなもんを咥えながら喋っているので、滑舌が悪いのはしょうが
ない。

「電話線を咥えているのは判るけど、なんでそんなことしているん
だよ」

「Oh, shorry. ミーは、stock prif tre
ngoを、heckひていたレーフ」

「……なんだそりゃ」

「Yapaneseれ言えヴァ、かヴかのろうこうレーフ」
「……とにかく、ケーブル抜いて喋れ。何言ってるか判ら
ん」

元々日本語と英語をませこぜにしたバレンシアの喋りは聞き取りに
くい。それに加えてコードなんぞ咥えられていては、何を言ってい

るのか本当に判らん。

バレンシアの啜えているケーブルをくいくいと引つ張る。すると、バレンシアが口を開けたので、開放された電話線が俺の手の中に残った。

「で、何をしてたんだ？」

「んー、さつきもsayしたデースけど、stock price (株価)の動向をwatchingしていたデース」
「株う？」

うちにそんなもんが関係あるか？と思っただが、よく聞いてみると常盤さんが持っている株に関係するものらしい。あのアナクロナ常盤さんが株を持っているとはちよつと驚きだが、株で大もつけなんて話も聞いたことがあるので、ちよつとだけ、関心がある。

でも、それでは電話線を啜える理由の答えにはならない。

「それハー、internetにplug-inするためデース」
その疑問をぶつけたところ、帰ってきたのはそんな答えだった。よく話を聞いてみると、バレンシアは電話線を使ってインターネットに接続しているんだそうだ。それがなんで啜えることになるのかはちよつと疑問だが、今日の前にいるバレンシアという女が元々ノートパソコンだったことを考えると些細さいさいなことのような気もする。それになにより。

「インターネットって、今繋がっているのか？」

「No、nowは、connectしてナイデス。Telephonewireを、set offしているデスから」
バレンシアは、俺の質問に対しさつきまで啜っていたコードをぶらぶらさせながら答える。

「Reminds me (そういえば)、MasterはInternetにinterested (興味を持つ) しているデスよね」
「？」

と、思い出したかのようにバレンシアはそんなことを言って、コードのコネクタをこつちに向けた。

「ん、まあ、興味はあるけど」

「Then、Masterもinternetをenjoyしない
デスか？」

「できるのか？」

「Yes! Leave it to me)お任せください」
Master!

俺の問いかけに、電話線をぐるぐると回しながら、バレンシアは自信満々に答えた。

05・連休も大さわぎ その20（後書き）

どうも、作者です。

今時ダイヤルアップはないだろうと思われた方。

仰るとおりです。その通りなのですが、引越して1日もたっていないので、そのへんの手続きが出来ていないのですよ。

というわけで、見逃してください。

次回、バレンシアとネットサーフィン、が普通に出来るわけも無く。

さて何が起きるのか。

次回を乞うご期待！

05・連休も大さわぎ その21

ふと、その俺の視線が、その電話線の横でゆれるモノに釘付けになる。

バレンシアの胸だ。俺も男だ、女の体に興味はある。特に、俺の目の前にいるバレンシアは、今うちにいるモノの中でも一番の巨乳なんだから。

「Master、どこgazing（凝視）しているデースか？」
頭の中で言い訳しているうちに、凝視してしまっていたらしい。バレンシアのちよつと冷たい声が聞こえた。

「Master、suchなactionを、sexual harassment（セクハラ）と言うデースよ？」

顔を上げると、バレンシアがメガネをくいつと上げながら、こつちを真顔で見ているところだった。ってちよつとまで。

「……………あのな、お前、言うに事欠いてセクハラってなんだよ」

「わからナイデースか？Japaneseでは、性的イヤガラセと言うデース」

「だからそう言う意味じゃなくて。俺はだな」

「シャープ！Sexual harassment（セクハラ）は、targetがfeel unpleasant（不快に感じる）したら、成立するのデース！」

ぴしゃりと言い切られてしまった。セクハラって、そんな簡単に成り立つのか。

「な、なあバレンシア、俺、そんないやらしい目で見てたか！？」
こんなことで訴えられたらシャレにならない。うちのモノたちからいつせいに罵声を浴びてしまう。それだけならまだしも、パソコンにセクハラだなんて、世間的に問題がありすぎる。

頭の中が悪い方向へ向かい始めたとき、突然俺の顔面が、何か柔ら

かいものにめり込んだ。引き込まれた、と言ったほうが合っているかもしれない。

「もう、Masterはreally really serio us（真面目）なんデースから！。It's a jokeデース、アハハッ」

そして、頭の上からバレンシアのあつけらかなとした声が聞こえる。どうやら、さっきのは演技だったみたいだが、目を開けようにも、俺の頭が後頭部から押さえつけられ、顔が余計にそっちにめり込んでいく。

「Master, how about the touch of my breast（私の胸の感触はいかがですか）、ah？」

そう、俺が顔を埋めているのは、思わず見てしまっていたバレンシアの胸なのだ。俺は今、そのバレンシアに抱きしめられているのだ。男として、これはすごく幸せな状況である。他の男が見たら羨ましがらるだろうし、俺だってわかった瞬間は、幸せに股間が反応してしまった。

そして、さらに俺の顔はバレンシアの胸に沈んでいく。

「……………う、く、くるっ、くるひいつ」

い、息が、息ができないっ！顔がめり込んでいる、ということはずなわち、鼻も口も塞がっているということなのだ。

「こら、バレンシア、離せ！苦しい！」

喉はそう叫んでいるんだが、声になって伝わっているのかすら判らない。いやたぶん伝わってない。

「Master, decline（遠慮）しないでください。ミーは、Masterのためにaliveしているデスねー」

だって、バレンシアの奴、離すどころか、穏やかな口調でこんなこと言っただけに俺のことを強く抱きしめようとしているんだから。このままでは、マジで窒息してしまう。覚悟を決めた俺は、俺のことを離そうとしないバレンシアの体を掴んで、無理やりに引き離し

た。

「はあ、はあ、はあ、し、死ぬかと思った……」

やっと開放された俺は、まるでスポーツ直後のように荒れた呼吸を、なんとか宥(なだ)めようとしていた。

「……n, m, Master……Master
rって……意外に、aggressive(積極的)、デ
ース……」

ふと、バレンシアの歯切れの悪い声に我に返って顔を上げる。そして、目の前の光景を見て、状況を把握するのに数秒かかった。

なぜか、俺の両手の指が、バレンシアの胸にめりこんでいた。どうやら、さっき引っぺがした時にそこに手を当ててしまっていたらしい。

とたんに、顔が熱くなってくる。

「わっ、っ、ごっごっめんっ!」

思わず、手を引っ込めてしまう。まずいぞ、思いつきり掴んだから、今度は本当にセクハラだ。今度は、言い訳のしようがない。

「……どうして、apologize(謝る)するデース
?」

すると、顔を赤らめたバレンシアがそう聞き返してきた。怒ってないのか?

「え、いや、だって、バレンシアの胸に」

「M, Masterとcommunicateできるナラ、ミーは、
not unpleasant(嫌ではない)デース」

な、なんだって!?!その瞬間、頭の中にいるいろんな妄想が膨らんだ。クリンといいこいつといい、うちの巨乳はそーゆーことに抵抗がないんだらうか。

「だってミーはMasterのPCデスから、Masterにmo
re and more operateして欲しいデース」

あ、ナルホド。つまりはもっとかまえてことか。まあそう言われ
てみると、バレンシアは俺より常盤さんに構われているような感じ

だもんな。

でも、だからって色仕掛けはないだろう。ちょっとグラッと来たけど。

「ただいまー、帰ったよー」

「お帰りなさい。あら、常盤様もご一緒だったのでしょうか？」

「ええ、帰り道で偶然会ったのです」

「テルミい、椅子はこっちでいいかい？」

「あー、それ紅娘ちゃんのお茶碗？」

そのとき、ちょうどいい、というよりわざわざ合わせたようなタイミングで、外出していたメンバーが帰ってきたらしく、階下が急に騒がしくなった。

それを聞いた瞬間、俺たちは顔を見合わせると、なんかおかしくなっ
って互いに吹きだしていた。

「その話は後にしようか」

「ソーデスねー」

そして俺は、今更ながら着替えるために自分の部屋に戻ることにした。

05・連休も大さわぎ その21（後書き）

どうも、作者です。

インターネットするつもりが逆に遊ばれております。いっぺん、こつという形で窒息してみたいものですw

さて、次回ですが。

違う意味で楽しくなるアイテムが投入されます。

徐々にカオスになっていく様をお楽しみください。

では、次回を乞うご期待！

05・連休も大さわぎ その22

その日の夜は、なんか「食事」と違う感じのメニューが並んでいた。なんでも、紅娘の歓迎会をするため、そういう宴会用のものがそろっていたのだ。

モノたちが出てきてから飯はほとんどが立食タイプだったから、おかずが種類ずつ皿に乗っているのも、取り皿が人数分出ているのも別にいい。この人数だったらそっこのほうが作りやすいだろうし。

「あらあ、これ、おいしそうですねえ」

「ああ、これワタシが作ったアル。本場四川の干焼明蝦（エビチリ）アルよ！」

おかずの中に毛色が違う中華風料理が混じって置かれているが、それは紅娘が作ったらしい。さすが中華鍋と言おうか、見た目も匂いも大いに食欲を誘う。確か今日の夕食は紅娘の歓迎会のはずなのに、それを働かせるのはありなんだろうか。

だが、一番困惑したのは、そのテーブルの上に何本も置かれたビン類だ。楕円形のラベルが貼られた茶色いビンとか透明な液体が入った透明なビンとかが並んでいる。

「なんだこれは」

「なんだって、お酒でしょう。はい、将仁さん、どうぞ」

俺の質問に、瓶を両手で持ったテルミが答える。ビール瓶なんだが、メイド服を着てソムリエのように瓶を持っていると、なんかワインのボトルみたいに見える。

「どうぞって、ちょっと待て、俺、未成年だぞ」

「いいじゃねえかよ、これも社会勉強って奴だ」

俺の質問に、俺の横に座っていたヒビキがビール瓶の蓋を次々と開けながら答える。しかも素手でだ。左手で瓶を持ち右手で王冠を掴み、軽く動かすと、シュポツと小気味いい音を立てて開封される。軽々とやっているが、普通は開けられるもんじゃない。

「新参が来た折には、酒宴を催し結束を高めるのが、我が国の伝統であるからな」

俺の前に置かれたコップにビールを注ぎながら、シデンが偉そうなことを口にする。なんか俺より年下っぽいこいつに言われるとなんか納得できないんだが。

「いいんですか、常盤さん。20歳以下の飲酒は、法律で禁止されているんじゃない？」

「心配無用ですよ、将仁さんが飲んでも、将仁さんが罰せられることはありませんから」

「へ？」

「未成年飲酒禁止法というものはありますけれど、そこには飲酒をした本人への罰則は記されていないのです」

なんか、常盤さんまでノリノリだ。法律を尊守するはずの弁護士がこんなんでいいんだろうか。だいたい、その言葉どおりとすると、常盤さん、あんたが罰せられるんですが。

「まー細かいことはいいいじゃないっすか」

「Wow, Mr. 鏡介。Goodな飲みっぷりデース！」

鏡介の奴が、待ちきれなかったのかビールが入ったコップを手にしている。こいつももう飲んでいるのか。バレンシアも、止めればいいのにニコニコ顔でビール注いでいるし。

「ごめんね、お兄ちゃん。お酒なんて、ケイは反対したんだけど」

「いいよいいよ、ケイのせいじゃないから」

「えへへー」

「ほらその3人、突っ立っていないで、料理を運びなさい」

唯一まともなことを言っていたケイと喋っていると、レイカがキッチンカウンターのむこうから盛り合わせを置いて声をかけて来た。

「はい！」

それを受けて、ケイがててとそっちに走っていった。

05・連休も大さわぎ その22（後書き）

どうも、作者です。

今夜は飲み会です。

これから、本当のカオスに向かって逝きますw
とはいえ、本格的にはまだ始まっていないので、まだおとなしめで
ございます。

次回、みんなに酒が入っていきます。

見た目ではまだ飲んではいけない連中もちらほら見受けられますが
そこはまあご愛嬌ということ。

では次回を乞うご期待！

んで、そんなことを聞いてくる。そういえば、俺と常盤さん以外は酒を飲むのも初めてなんじゃないかなーと思っただが、飲酒に抵抗を持つていそうな奴はほかに見当たらない。鏡介なんかは率先して酒飲んでいるし、ヒビキとかレイカとかいった誰が見ても大人な連中はすでに2杯目に行っているし。

「……もしかして、俺が飲めるからなんだろうか。」

「あんまり無理しなくていいぞ」

酔っ払いにしたくはないので、勧めるのはそのへんにしておく。

「どうぞ」

「お、サンキュ」

そうしていると、空になった俺のグラスにテルミが2杯目を注いでくれる。このへんの気配りはさすがだ、と思っっていると、どうやら自分のらしいグラスに常盤さんからの酌を受けているところだった。そして、ふと視線を戻すと、意を決したらしいケイが、目をぎゅつとつぶってグラスを傾けたところだった。

「んっ……ん……ん……っ！」

とたんに、ケイは今まで見たことがないような渋い顔になった。大きな目が、泣きそうに潤んでいる。

そして、その一口を懸命になって飲み込んだあと、こう叫んだ。

「おいしくなーいっ！」

なんか見たとおりの反応をしてくれるケイが、いつも以上にかわいく見えてしまう。

「無理すんじゃないぞ」

そんなケイの頭を撫でてやる。だが。

「一気行きます！」

やにわに立ち上がったヒビキが、片手にビール瓶を持って立ち上がると、素手でその栓を開け、ラツパのみの体制に入った。

いつから、うちはそんな体育会系になったんだらうか。

「おー、ヒビキ、いい飲みっぷりだな」

「ぶはっ、ま、あたしにとっっちゃ、酒も飯も燃料だもんな」

あつという間にビールが空になり、わつと歓声が上がった。

その様子をじつと見ていたケイが、自分のグラスに視線を向ける。そして、何を思ったのか、そのまま一気してしまったのだ。

「ぶあぁーっ」

飲み干した直後、ケイらしくない野太い声が吐き出される。

「だ、大丈夫か？」

「あ、お、おにいちゃあん、ケイ、がんばったよお」

くてつとなったケイが俺にもたれかかる。その顔色は、早くもほんのり桜色になっていた。良かった、とりあえず悪酔いはしていないみたいだ。

「さつきも言ったけど、無理すんなよ。気持ち悪くなったら言えよ？」

俺の言葉に、ケイはこくこくと頷く。

改めてまわりを見回すと、それぞれがそれなりに盛り上がっていた。

「レイカ、爛かんをつけたものはないのか？」

「爛かんをつけるのは邪道よ。日本酒の味わいは冷ひやで飲んでこそ判るものだよ」

「へええ、そうなんですかあ、さすがレイカさんですう」

こつちではレイカがシデンとクリン相手に日本酒論をぶっているし。

「H m m、ミーはすこしdrunkデース」

「アイヤー、バレンシアサン、お酒弱いアルか？」

「お前、実は虚弱体質なんじゃないか？」

あつちではバレンシアと紅娘とヒビキの、ぱつと見外国人なトリオで喋っているし。

「常盤様、私たちはこれからどうしていくべきなのでしょう？」

「そうですね、私は、早く将仁さんに遺産相続をして、肩の荷を降ろさせてもらいたいのですが」

「ですが、将仁さんがイヤだという気持ちも、少し判るでしょう」
そつちでは常盤さんとテルミがなにやら話し込んでいる。そういえば、常盤さんは俺に遺産相続させた後どうしたいんだろう、何も考

えてないってことはないだろうし。

「あれ？ケイちゃん、どしたの？」

そして、妙に陽気になった鏡介が、とろんとした目つきになったケイの顔を覗き込んだ。

「ちよつとビールが効いたみたいだ」

「ううう、おにいちゃん、なんだかおなかが変な感じだよ」

なんか色っぽいその口調に、支えているこつちがちよつと驚いてしまふ。

「悪い鏡介、ちよつと預かってくれ、トイレ行ってくる」

「りよーかいつす」

ぐったりしたケイを預けると、鏡介はおどけた敬礼を返した。

05・連休も大さわぎ その23（後書き）

どうも、作者です。

未成年をいっぱい巻き込んだの酒宴がはじまってしまいました。読者の方々は、お酒は二十歳になってからにしましょうね。

さて、次回ですが。トイレから戻った主人公を、カオスが襲います。どんなカオスなのでしょう？
次回を乞うご期待！

05・連休も大さわぎ その24

「にゃあ〜ん」

トイレから戻り、リビングのドアを開けた瞬間。いきなり、ケイが飛びついてきた。

いつも以上に勢いがあつたため、俺はそのままひっくり返ってしまった。

「おにいにゃあん、ダツコするにゃあ〜ん」

ケイは、ひっくり返つた俺の上で、ごろごろと喉をならして丸まっている。まるでネコだ。

「にゃあ〜ってなんだよ、もう」

「だめニヤ〜！ダツコするニヤ〜！」

「わだだだだっ！」

下ろそうとすると、何を思ったのかジタバタと暴れる、のみならず爪を立てて引つかいてくる。マジでネコだ。猫の霊でもとりついたのか？

「だ、大丈夫ですか、上官殿？」

そこに、おっかなびっくりの様子で顔を出す、深緑の服を着た子が一人。

「ほ、ほら、ケイさん、上官殿が、重そうにして……………」

「うにゃ〜あつち行くにゃ〜！」

「きゃあつ、ひ、引つかかないでくださいましー！」

その子は俺の上から降りようとしないうケイをなんとかどかさうとして、ケイに引つかかれそうになる。そして、その爪の一撃から身を守るためにかざした着物の袖には、真っ赤な日の丸がしっかりと描かれていた。

これが、シデンなのだ。こんな弱気なシデン、初めて見たぞ。

「うにゃ〜っ！」

「あーれーっ」

ネコケイが爪を立てて飛びかかり、弱気シデンは悲鳴をあげて逃げていく。おかげで、俺はやっと起き上がることができた。

「いよゝうあーにきーい、ずーいぶん長い便所でげたねゝ、へへっ」

そこに、今度は俺とそっくりな奴が顔を出す。鏡介だ。なんかむちやくちやにごきげんだ。

「なゝにしょぼくれてるんスカ、飲みが足りねえんじゃねえですかい？げえっぶ」

「うわっ、こつち向いてゲツプすんなよ！」

「かーてえこと言うなつてえ、固くすんのはぶっ」

たちの悪い酔っ払いのおっさんと化した鏡介の顔面にどこからかでつかいクツションが飛んできてクリーンヒットし、鏡介はそのままひっくり返る。

「One , Two , Three ! I m Number One !」

いや、クツションではなかった。バレンシアだった。その巨乳で鏡介を組み伏せたバレンシアは、まるでプロレスでフォールしたみたいに自分で床を叩き、カウントを取っていた。そしてスリーカウントを取ると、その鏡介を片足でふんずけて天井を指差しウイニングポーズなんかを決めている。

そこに、なぜか小ささまのシャボン玉が飛んできた。

「くかゝ」

飛んできた方向を見ると、白い髪のメイド、クリンが一升瓶を抱えて寝息を立てていた。そして、寝息を一度立てると、その鼻と口から、小ささままなシャボン玉が吹き出されて宙に飛んでいく。

なんか、もうカオスな空間だ。

顔を横に向けると、常盤さんがバルコニーに面した窓際に座り込んで、外を眺めているのが見えた。そこだけがカオスではないような感じだったのでそつちに向かう。

「ぶう」

常盤さんの横に腰を下ろし、やっと一息つく。

「ぐすつ」

と、そこに、なんか鼻をすすするような音がした。びっくりしてそつちを見ると、その常盤さんが、メガネを外して目の辺りを抑えている。

「ど、どうしたんですか!？」

「あ、グス、将仁さん」

声をかけると、常盤さんは、表情を崩して鼻をすすりながらこつちを向く。

「うう、ぐすつ、す、少し、思い出してしまつて」

そつち常盤さんは、もう完全に泣き顔だった。

「ま、将仁さんの、今の御姿を、グスツ、静香様が、御覧になつたら、うっ、な、なんと仰られたか」

言いながら、ぽろぽろと涙をこぼしている。これは、もしかして泣き上戸というやつか？

「し、静香様あー！将仁さんはあ、こおんなに、ご立派になられましたよあーっ！うわあーん！」

そつちしているうちに、とうとう常盤さんは本格的に泣き出ししてしまった。どうしたらいいんだ。

「まゝさゝひゝとゝくゝん？」

その俺の首に、違う腕がからみついてきた。こういうことをしてくるのはヒビキしかいない、と思つたが、なぜかその腕が黒い。ヒビキだったら赤か銀色はずだよな？

それに第一、あいつは俺を君付けでなんか呼ばない。

「人のこと泣かせて、なーにやっているのでしょゝう？」

この喋り方は!？と思つて、腕と声の主のほうを見る。そこには、四角い黒ぶちメガネと、その奥になんか意地悪そつちな光をたたえた瞳があつた。

05・連休も大さわぎ その24（後書き）

どうも、作者です。

おまちなか、みんな酒飲んでカオスになるの図です。
もうとにかく、楽しんでくださいw

次回もこのカオスはまだ続きます。

どんなカオスでしょうか。乞うご期待！

05・連休も大さわぎ その25

「て、テルミ!?!」

「そんなことしているなんて、飲みが足りない証拠でしょう」と言いつつ、腕で俺の首を締め上げる。マジで痛い。いつもの礼儀正しいテルミはどこいったんだ。

「まーさひとくん、自分のコップ、持ってくるのでしょーう」

「もってくるって、じゃあ離して」

「そーやって逃げようだったって、そうはいかないでしょう」

「でも離してくれないと、取りに行けない」

「ふっふっくん、そっちの都合なんてえ、私は聞いてないでしょー? だーいたい、まさひとくんはねえー、自覚がたりないでしょー」

なんかすぐくタチの悪い酔っ払いに絡まれたなあと辟易していると、こんどはなんか愚痴が始まってしまった。

「あら、将仁くん?」

その前に、白い人影が立ちふさがる。

「れ、レイカ!?!」

その白い人影はレイカだった。よかった、彼女は無事そうだと
思ったのもつかの間。

「ほら」

自分の襟元に手をやったと思ったら、いきなり着物の胸を開いたの
だ。

和装という鎧に隠されていた、雪のように白いレイカの素肌が、目
に飛び込んでくる。いや、肌だけではない。見えたのは、モロ谷間
だったのだ。しかも、危険なところは見えないがそれでもかなりの
大きさが想像できてしまう。

「どーこ見ているのでしょーこのスケベさんは」

だが、その直後、俺は首を締め上げられる。そうだ、まだテルミの
腕から開放されてないんだ。

くそ、こいつらがこんなに酒に弱いとは思わなかった。こんなことだったら、ケイが言うとおりに、酒なんか飲ませるんじゃないかと、と今更ながら後悔する。

一緒に酔っ払って記憶をとばしてしまえばいいんだが、生憎それはできない。なぜなら俺は「酔えば酔うほど意識がはつきりする」からだ。

10歳ごろ親父にビールを飲まされて以来、俺はしょっちゅう親父や兄貴の酒の相手をさせられた。それだけならいいんだが、実はこの二人、酔っぱらうと笑いながら殴りかかってくるという非常に迷惑な癖があつて、それから身を護るために、飲むと警戒心が強くなり酔いにくくなってしまったのだ。

「もう、照れちゃってかわいいんだから。知っているのよ、将仁君は胸が好きなんでしょう？ほらほら、お母さんだと思って、甘えていいのよ」

そんな俺の心中を知つてか知らずか、いつも表情に乏しいレイカが、胸元を大きく開けた状態で、まだ小さい親戚の子をかわいがるように俺の頭を撫でながら抱きついてくる。口調もいつになく柔らかいので、余計に色々なことが妄想されてしまう。

彼女がぐいっと動くことに着物の胸元が少しずつ広がっていく。すでにそのふくらみはかなり出ており、見えてはいけないところがあと少しで見えそうになる、んだが。

「あなたというひとはまったく、節操なしのスケベでしょうっ」「うぐ、こ、こ、で、テル、ミ、しまつてる、しまつてるっ」

さっきまでは片腕で俺の首を挟んで絞めていたテルミの腕が、いつの間にか両腕でがっちり俺の首と頭をロックした、本格的なチョークスリーパーとなって俺を締め上げており、それどころではなくなつていた。ギブアップだとテルミの腕をタップするが、離すどころか緩めてもくれない。

どこで覚えたんだこんなテクニク、じゃなくて、なんとか外さないと、ホントに落ちてしまう。

う、やばい、目の前が白くなってきた。と思った、そのとき。

ぐわんつという鈍く響く音がして、俺の首を締め上げていたテルミの腕が、ふつとゆるんだ。

「わ!?!」

だが、チヨークスリーパーは緩んだだけでまだ外れてはいない。その腕に引つ張られて、俺はひっくり返ってしまった。

一緒に倒れたテルミを見ると、黒ぶちメガネのレンズに、俗に砂嵐と呼ばれるアレが映っている。これって、テレビだからなのか？

「将仁サン、ダイジョブアルか？」

俺の頭の上から声がある。見上げるとそこには、いつもは背中に背負っている中華鍋を手に提げた赤ら顔の紅娘が立っていた。あれでテルミをぶん殴ったんだろうか、精密機械なのに大丈夫だろうか。しかし立っているだけなら気にならないだが、なにしろほとんど真下から見上げるようなアングルで、チャイナ服のすそが目の前でチラチラとゆれている。ズボンを履いているので下着が見えたりはしないのだが、イメージーションは膨らむ絵である。

「どこ見てるアル!」

突然そんな声がある。なんとその紅娘が、手にしたあの鍋を思いっきり振り上げていたのだ。

「だわー!」

とっさに身をかわす。直後、ぐわんつとひときわ大きな音を立てて、鍋が床に叩きつけられる。

「何するんだ!?!」

「うるさくいつ!酒よこすアル!」

「わっ、あぶねっ、鍋振り回すな!」

反論しようとして飛び起きたその目の前、まさに鼻先ギリギリを、鉄の塊である中華鍋が空を切って通り過ぎる。冗談だろ、こいつも酒弱いのか!?

これは危ない。逃げなければ殺される。そう思って俺が逃げ出すと、紅娘は中華なべを振り回しながら追いかけてきた。

しかし、その途中で、紅娘はなぜか立ち止まり、振り返るとそつちに中華鍋を構えたのだ。直後、かんかんかんつという硬いもの同士が連続してぶつかったような音が響く。

振り向くと、紅娘のむこうに、着物を着崩し、胸元をはだけた状態のレイカが、刀のようにでかい包丁や手裏剣のような刃物を両手にいくつも持って立っているのが見えた。どこから持ち出したんだそんなもん。

「どきなさあゝい！」

そのレイカが叫んで左手を振ると、手に持っていたいくつもの刃物が飛んでくる。その後ろには俺もいるんですが。

「なんのーっ！」

それに向かった紅娘は、手にした鍋をぐるぐると振り回して次々とそれを弾き飛ばしていく。うまいもんで、レイカの投げたそれは俺のほうには一つも飛んでこなかった。

と思っていると、弾かれたうちの一つがくるくるくと放物線を描いて俺の足元に落ちた。どうやら弾かれたときに欠けたんだらう、果物ナイフみたいなのは真ん中あたりでぱっきりと折れている。

なんか透き通っているな、と思っで見ていると、それは目の前で見える溶けてしまった。

氷のナイフだった。レイカの奴、製氷機能をまた無駄遣いしたらしい。

で、その当のレイカはというと。

「台所は譲らないわよ〜！」

「勝ち取って見せるアル〜っ！」

同じように氷で作ったらしい、刀のようにでかい包丁を、紅娘の鍋めがけて振り下ろしているところだった。そして二人はそのまま氷と鍋でチャンバラを繰り返す。当然ながら氷のほうが弱いので何回か打ち合うと折れてしまうのだが、その度にそれを袖の中に突っ込んで引き出すと、折れた筈の刃は見事に再生され、そしてまたチャンバラをはじめめるのだ。

なんかもうムチャクチャだ。

どうしよう、と思っていると、俺は突然後ろから何者かにむんずと襟首を掴まれ、そしてひょいと担がれてしまった。

05・連休も大さわぎ その25（後書き）

どうも、作者です。

カオスがカオスを呼ぶ展開になっております。

さて、この先どういう展開になるんでしょうか。

次回は、ちょうど100話目になります。

それにふさわしい話になるかどうかは保障できませんが、次回を乞うご期待！

05・連休も大さわぎ その26

何が起きたのかわからずにいると、隣接した和室に運ばれて、そのままずっと下ろされる。

この部屋は、うちの家政婦トリオ（テルミとクリンとレイカのことを指す）が寝室として使っている部屋で、3人分の布団がすでに敷いてある。

「大丈夫かい？」

言いながら、その俺をここまで引つ張つてきた奴が腰を下ろした。

「お、俺は大丈夫だ………けど」

言いながら、俺は警戒を解かない。アルコールのせいもあるが、なにより他の連中でさえ俺の手には負えないのに、目の前にいる奴は暴れることに関してはそれを軽々と越えるスペックの持ち主だからだ。

「ほら、コップだしな」

俺の前にあぐらをかいたそいつは、あのカオスの中から一緒に持ってきたらしい一升瓶を差し出す。そして俺のコップを酒で満たすと、自分はそれをラッパのみする。

「にしても、あいつらがあんなに酒に弱いとはねえ」

そして、口元をライダーグローブの甲でぬぐうと、ふすまの向こうを眺めながらつぶやく。

ふと、その口調があまりにいつもどおりなのに、少し驚いた。

「ヒビキ、お前は、大丈夫なのか？」

ちよっと危険かもしれないが、その相手、ヒビキに声をかける。

「ん？」

すると、ヒビキの奴はその一升瓶を持ったままこっちを向いた。改めてみるが、やっぱりいつもどおりに見える。

「あ、いや、お前、さっきから結構飲んでるわりには、あんまり変わってないから」

「あ、あー、そういうことかい」

「ちらりとふすまの向こうを見て、ヒビキは納得したかのように小さく何度か頷いた。

「心配すんな、あたしやまだ自分を失ってないから。なんでって言われるとこつちも困るんだけど、飯も酒もあたしにとつちやそんなに違いがないみたいでね」

そしてはっはつはと笑ってみせる。そういえば、自動車なんかだとアルコールでも走るやつがあるっていうし、どこかの国じゃガソリンにアルコールを混ぜて使っているらしいから、そう考えると、モノのときに内燃機関を持っていたヒビキは、アルコールも同じように消費しているのかもしれない。

「でも、そういう意味じゃ将仁もそんなに変わってないじゃないか。あの中にいて、飲んでないってことはないだろ？」

と、今度はヒビキがこつちに向けて聞いてくる。……このことは、話しても大丈夫なのだろうか、もし竜兄がそういう性癖の持ち主だと知ったとき、ヒビキが同じ行動をしないと限らない。

「うーん、ガキの頃から、親父とかに付き合わされてたから、強くなっただんじやないか？」

「その割には、鏡介の奴はあんなだけど」

そして指差す先には、半笑いのままバレンシアにコブラツイストをかけられる鏡介の姿が見える。なんとというか、この家の男の立場を象徴しているようで情けなく思えてしまう。

その横では、競り合いに疲れたらしいレイカと紅娘が、互いに抱き合った状態でへたり込んでいる。あの様子だと台所の覇権争いは終了していないようだが、そのままでも自分の得物を手放さないと恐れ入った根性だ。

テルミはまだひっくり返ったままだし、クリンも相変わらずシヤボン玉を吐き出している。家政婦トリオがこんな状態で、明日の俺の家は大丈夫なんだろうか。

「まったく、あの弁護士さんまでがあんなに酒に弱いとは思ひもし

なかったよ。もうけっこういい年のくせにさ」

ヒビキが愚痴りながら、いまだに窓際に座り込んでえんえんと泣いている常盤さんを見る。あの姿は、正直、昼間のきりつとした姿からは想像できないものだ。

そして、また一升瓶を俺の目の前でラツパのみする。もうほとんど空だ。

「ヒビキって、頼もしいよな」

その姿を見て、なんとなくそうつぶやく。

と、一瞬その酒が逆流した。ヒビキがふき出したためだ。そしてビンから口を離し、げほんげほんとしんどそうにむせ返る。

「なっ、なにを言い出すんだよお前は！」

そしてやっとながれおさまったヒビキは、ちょっと赤くなった顔で反論してくる。なんとなく視線も泳いでいるような感じだ。

もしかして、ヒビキの奴、酔うと照れ屋になるのか？面白く奴だな。「別に、思ったとおりのことを言ったまでだろ。酒は飲んでも飲まれるなって言うけど、うちでそれを実践できているのはヒビキだけだもんな。どれだけ助かっているか」

そうと判ると、試してみたいくなるのが人情というもの。いつもはめつたに出てこないほめ言葉をひねり出して投げかけてみる。

すると、今度は頭についているサンバイザーのひさしを下ろし、目のあたりを隠した。照れているのを見られまいとでもしているんだろうか。やっぱり、少なくとも今のヒビキは相当の照れ屋になっているようだ。

と、突然、ヒビキが一升瓶を置いて立ち上がった。やばい、ちょっと言い過ぎたかな、と思っていると、そのままくると背中を向けた。

「ね、寝ちまつた奴を、運んで、くる」

その声は明らかにどもっていた。それに気づかれまいという配慮なのだろうか、そのまま大またで部屋の出口へと歩いていく。

それと入れ替わりに、何かが部屋に入ってきた。

05・連休も大さわぎ その26（後書き）

どうも、作者です。

ついに100話です。が、100話というメモリアルなわりには、地味な話になってしまいました。

さて、5日目はもうちょっと続きます。

では、次話を乞うご期待！

05・連休も大さわぎ その27

「にゃーん」

ネコのようににゃあにゃあ言っているが、これはネコではない。耳も尻尾もヒゲも生えていないし、なによりうちではネコは飼っていない。

そんなことを考えているうちに、そいつは四つんばいのままちよちよこと近づいてくる。

「ふみやあああん」

そして、俺のひざの上でに乗るとひとつ大きくあくびをすると、そのまま丸まってしまった。

何度も言うがこれはネコではない。酔っ払ったケイだ。さっきは言葉も喋っていたが、今はにゃーとしか言わないし、なんか眠そうに自分の顔をこする仕草もネコっぽい。

なんか可愛くなって頭とか背中とかを撫でてやると、気持ちいいのか喉をごろごろと鳴らす。

ふと、部屋の外から視線を感じる。顔を上げると、こわごわといった感じで、それでもじーっとドアの陰からこつちを覗く顔があった。「なにしてたんだ、シデン？」

「ひうつ！？」

声をかけると、その子はびくつと体を振るわせる。

そんなに入りたいたいだったら、と招き入れると、一瞬の硬直の後、恐々と聞き返してくる。

「あ、あの、その、それが、その」

そして、ぶるぶるとケイを指差す。さっき襲い掛かられたのがまだ響いているらしい。

「大丈夫だよ、今は大人しくしているからさ」

俺のひざの上で丸くなってているケイの様子を見てようやく、それでもおっかなびっくりといった足取りで、シデンが部屋に入ってくる。

お酌でもしてくれるんだろうか、ビール瓶を丁寧に抱えているんだが、そのまま部屋にちよこんと正座した。

「なにやっつてんだ？そこじゃ注げないだろ？」

「え、あ、その」

「だから襲わないって、なあケイ」

「にゃあ」

俺のひざの上で丸まったケイが、気だるそうに顔を上げて返事し、また丸まる。

「ほらな」

それを聞いて、シデンはやっと腰を上げた。かと思うと、今度は俺の横に座る。

「どうぞ、上官殿」

そして、丁寧な仕草で俺のグラスにビールを注ぐ。自然に上品なその仕草は、あのいつもえらそうにしているシデンとはとても思えない。

「ん、ありがとう」

注がれたビールを飲みながら、シデンの姿を横目で見る。正座を崩さないのはまあいつもどおりなんだが、控えめなその仕草がとても淑やかで、なんとというか、見とれてしまう。

いつもこんなふう淑やかだったらいいのになあ。なんて思ってしまう。

「ん、ありがと……あれ、お前は？」

ふと見ると、シデンが持っているのはビール瓶だけだ。シデンのグラスは見当たらない。

そのことを聞いてみると、シデンはいきなり恐縮してしまった。

「それは、上官のことを差し置くようなことは、できませんから
そして照れくさそうに笑う。その品のよい仕草に思わずどきりとしてしまう。

「じゃあ、これ使えよ。俺一人で飲んでいても面白くないしさ」

淑やかなシデンがもつと見たくて、でもケイをひざに乗せて動けな

い俺は、持っていたグラスを差し出した。

はっとした表情のシデンから瓶を取り上げ、グラスを持たせると、ビールを注ぐ。注がれることにシデンの顔がどんどん赤くなっていったような気がするが、まあすでに酔っ払っているんだからこれ以上酔っ払っても同じだろ。

グラスから泡があふれない程度のところまでストップすると、シデンはそのグラスを真っ赤になってじっと見つめている。

何かをためらっているようだが、ちよつと促すと、それを一息に飲み干した。

「…………ご、ご馳走様でした」

そして、グラスを置くと、深々と頭を下げ、そしてほうとため息をついた。

「あの、上官殿…………これは、その…………上官殿と、私との、間接キスになりは」

いきなり、シデンが不穏なことを言う。なるほど、そうか、こいつがためらっていたのはそういうことなのか。ませた奴だ。

と、考えた瞬間。

「うにゃああああ！」

俺のひざの上で丸まっていたケイがいきなり目をさまし、シデンに飛び掛ったのだ。

「きゃあああ！」

シデンが逃げ出すと、ケイはそれを追いかけて、部屋を飛び出していく。

またそれと入れ替わりに、テルミとクリンを担いだヒビキが部屋に入ってくる。

「何だい今の？」

「さあ、よっぱらいのすることは判らん」

ヒビキの言葉を受けて、俺はちよつと肩をすくめた。

05・連休も大さわぎ その27（後書き）

どうも、作者です。

主だったメンバーがダウンしてしまった中、本当は飲ませちゃいけない連中が生き残っているというのもおかしい話ですが、そこはまあ大目に見てください。

さて、やっと5日目が終わりました。

次回から6日目が始まります。

では、次話を乞うご期待！

06 季節外れの転校生 その1

9月19日 火曜日

「よし、これでいいか」

机に立てかけた四角い鏡を覗きながらネクタイを締める。

「ありがとな、鏡介」

そしてその鏡に映る姿に礼を言う。すると、鏡の中の俺が、俺と違う動きで大きさに肩をすくめて見せた。

この鏡が、実は鏡介本人だ。ケイが携帯電話の状態であれ俺と会話したのに似ているが、どうやら本来の姿に戻った状態でも、鏡介の奴はそこに映った像の姿として意思表示ができるらしい。もともと、こっちが言うことは聞こえてはいるらしいが、あっちが何を言っているのかは聞こえない。本当の鏡像としてしか動けないらしい。

だが、そうは言っても鏡に映る自分の姿が自分と違う動きをしているのを見るのは変な気分だ。昔のホラー映画とかで「鏡像が鏡から飛び出して襲ってくる」なんてのがあったが、なんとなくそれを連想する。

すると、その鏡が光に包まれ、そして膨れ上がって人の形になった。「っと、んじゃいきますか」

人の姿になった鏡介（今の俺と同じ格好）が、大きなあくびと伸びをしてから声をかけてくる。

「別に、まだ寝てていいぞ？ 鏡介は学校行かなくていいんだし」

「いや、目が覚めちゃったからいいつすよ」

「そっか、悪いな」

そして俺と鏡介は部屋から出るために部屋のドアをあける。

「おつはよーお兄ちゃん、鏡介お兄ちゃん」

すると、その真正面にニコニコ顔のケイが立っていた。こいつも早起きしたのか。そういえばこいつ、昨日はあんなに飲んでいたのに、気分のほうは悪くないのかな。

なんてなことを思っていると、ケイがすすつと俺の横にやってきて、腕を掴んだ。

「えっへへー、つつかまえた」

「？」

「お兄ちゃん、今日こそは、学校に連れて行ってもらうからね」

「……え！？」

思わず、鏡介と顔を見合わせてしまつ。学校に来るだ？

「嫌だなんて言わせないんだからね。いつも一緒だったのに」

予想外だ。つてその前に、こんなん連れて行けるか！

「あのなあケイ。学校っていうのは、その先生と生徒とそこで働いている人しか入っちゃいけないんだぞ？わかるか？」

「知ってるよう、だから言ってるんじゃない」

へ？だからつてなんだそれ？

「もう、お兄ちゃんつたら、ケイが携帯電話だつてこと、忘れてるでしょ？」

そうだった。うちのモノ連中は、みんなモノの姿になれるんだつた。他の連中は学校に持って行ったらちよつと問題があるが、ケイは携帯電話だから、学校に持っていつてもおかしくない。

「ねえ、いいでしょ。携帯のままにいるからあ」

ケイが俺の手を取つて、駄々っ子のように左右にゆする。まったくこいつは、どこでこんな仕草を覚えてくるんだ。

「まったく、しょうがない奴だな」

「じゃあいいの！？わーいやつたやつたーあ！」

オーケーを出すと、ケイはぴよんぴよん飛びはねて全身で喜びを表す。なんかここまで全力で喜んでもらえると、なんかこつちも嬉しくなるな。

「さて、そんじゃ行くか」

通学かばんを手にとると、俺は階段に向かって歩き出した。

06・季節外れの転校生 その1（後書き）

どうも、作者です。

6日目スタートです。

そして、学校にはじめて擬人化を連れて行くことになりました。

さて、ケイは大人しくしてくれるのでしょうか？

次回を乞うご期待！

06 季節外れの転校生 その2

「ふー……」

やっとの思いで、ぎゅぎゅぎゅづめになった電車から這い出し、一息つく。

こんなのに、明日から毎日乗ってくるのか、少々滅入ってしまう。ちゃーちゃーちゃーちらちらちゃっちゃちゃー。

そんなときに、携帯が鳴る。この呼び出し音はケイからだな。

「もしもし」

「ううう、お兄ちゃん、ケイ、なんだかもう疲れちゃったよお」

そのむこうから、疲労困憊なケイの声がした。あの混み方は、携帯電話にとっても辛いものだったらしい。

「ねえええ、これから毎日、こんなのに乗ってくるのぉ？」

「他にないんだからしょうがないだろ、うちの学校はバイク通学は許可されていないし、送迎してもらおうわけにもいかないし」

「ううう、それはそうんだけどお」

「ぐずるなぐずるな、俺だって同じなんだ。それより、今何時だ？時計見せてくれ」

何とかケイをなだめ、時計を見せてもらう。うん、まだ多少余裕はある。

改札を通り、少し歩いて、見慣れた通学路に出ると、今までのように学校へと歩いていった。

「うーす」

校門が見えてきたところで、珍しくヤジローと合流した。

「今日は早起きだな。いつも朝練がないときはけっこうギリギリに教室に入ってくるのに」

珍しいこともあるもんだと思って声をかけると、ヤジローは変な顔をした。

「そりゃこっちの台詞だぜ、お前が遅いんだよ。時計見てみな」

「へ？」

言われて、携帯電話を取り出し時間を見つめる。

「げっ!？」

そして、そんな声をあげてしまった。いつもなら席についている時間だったからだ。

うーん、ケイと一息ついてたら予想以上に時間が過ぎていたらしい。くそー、すべりこみの常習犯であるヤジローに声かけられた時点で気が付くべきだった。

「こらやべえじゃねえか！先行くぜ！」

こんなところで無遅刻の記録を途切れさせて内申書の点数を悪くするわけにはいかない。

何やら言いたそうなヤジローを後に残し、俺は学校の校門目掛けてダッシュした。

06・季節外れの転校生 その2（後書き）

どうも、作者です。

満員電車で疲労困憊の主人公と携帯電話の図です。

ちなみに作者が同じ立場だったら、逆に電話に怒られていること間違いないでしょうな。

さて。サブタイトルにも出ているのにまだ姿を見せない転校生ですが、字話でようやくお目見えとなります。

さてどんな人物なんでしょうか？

乞うご期待！

06 季節外れの転校生 その3

「なあ、いよいよだな？」

俺が席に着くなり、後ろの席に座ったシンイチがそんなことを言うてきた。

「は？いよいよって、なんだよ。文化祭か？」

そう答えると、シンイチは一瞬「この人何いってんの？」みたいな顔をしてから、こう言い放った。

「なにつて、聞いてなかったのか？今日、転校生がくるって話」

「ムダムダ、ほっとけて興味なさそ」
だから

あ、そういえば。土曜日のホームルームでそんな話があったの思い出した。なんでも、うちのクラスに、今日、女子が一人転校して来るらしい。その土曜日以降にいろいろなことがありすぎたもんで、頭の中からすっかり吹き飛んでいた。

改めて教室を見回してみると、すでに教室じゅうがその噂でもちきりだった。

「この時期に転入するなんてな」

なんとなく、俺はその転校生が気の毒だった。高校生ってのはまだ未成年、法律上はまだ子供だから、親か保護者の都合で動かされることもある。家庭にはそれぞれ事情があるんだろうが、転校というのはやるほうはあまり楽しいものではない、と聞いたことがある。だが、クラスを見回すと、俺みたいないなことを考えているやつは皆無らしい。

「なんか、すごい美人なんだってよ」

「うちだけじゃなくて、隣のクラスにもすごい美人の転校生が来るんだって」

「すげーなあ、いーなあ、お近づきになりたいねえ」

「ふん、たいしたことないわよ。ねえ」

「鼻の下のばしちゃって、だらしない」

なんか男子と女子でテンションのベクトルが違う。特に男子は浮かれモード全開でテンションが高くなっている。まあ、あれだ。この年頃の男連中にとっちゃ、年頃の女の子成分はいくらあってもいいことなのかも知れんが。

「あれ、マサ、お前テンション低いなあ」

噂話で鼻の下を伸ばしていたヤジローの奴が、真顔に戻ってそんなことを言ってくる。

俺が低いんじゃないかってお前らが高すぎるんだ、別に俺はそういう色気には困っていない、と言いつつになるのをこらえる。今、うちがハーレム状態になってるなんて言ったら殺されて………なわけないか。逆におかしくなったと笑われるのがおちだ。

そんなことを考えて黙っていると、やっぱりこいつはミスター朴念仁だからということで話が収束してしまった。あまりに寂しい称号だが、すでにみんなの関心は俺から反れていて反論するヒマもなかった。

あのなあ、俺だって、美人に興味はあるんだぞー、と言おうとしたところで、きーんこーんかーんこーんとチャイムが鳴り、クラスメイトがいつせいに席に着く。

そしてざわざわしているところに、担任の徳大寺先生が入ってきて教壇に立った。

クラス委員の佐伯の号令で挨拶を済ませると、先生が口を開いた。

「皆さん、おはようございます。もう皆さん知っていると思います。今日は皆さんに、このクラスに転入して来た人を、紹介します」その声に、クラスの半分は先生のほう、残り半分は戸口のほうを見る。

ちなみに戸口のほうを見ているのは男ばかりだ。あんまり期待していると、その分落差が大きいぞ、と思いつつ、俺の目もやはり戸口に向いてしまう。

クラス中の男子の視線が集中する中、美人と噂の転校生がからりと

ドアを開けて入って来た。

06・季節外れの転校生 その3（後書き）

どうも、作者です。

転校生の登場だなどどぶち上げておきながら、寸止めしてしまいました。

次回には必ず出てきますので許してください。

というわけで、次回を乞うご期待！

06・季節外れの転校生 その4

「ごめんやす」

なんか聞きなれない言葉と共に、転校生が教室に入ってくる。

その転校生の姿をみた瞬間、ほんの一瞬だが、俺はその転校生に見とれてしまった。

確かに美人だった。まるで美人画から抜け出したような清楚な風体に、均整の取れたスタイル、そしてなにより、俺たちとはちよつと違う、派手ではないが、ミステリアスな雰囲気を持っている。

「みなさん、始めまして。うち、賀茂杏寿かもあんじゅと言います。京都のほうから下って来ました。関東のほうに来る人は初めてで、右も左も判らんことばかりですが、よろしゅう頼みますー」

その転校生が妙に古臭い京訛なまりで挨拶すると、クラス中がどよめいた。男子の中では、変な角度に構えて決めているつもりをやつもいる。一方の女子は、その転校生をにらむか、鼻の下をのばした男子を見てあきれるかだ。

ホント単純だな、こいつらは。

「それで、賀茂さんの席ですけれど……どこか希望はある？前のほうがいいとか」

「んー、せやつたら……」

先生の言葉を受けてその転校生は少し考えこむような仕草をして、教室をぐるりと見回す。

「ん、あのへんやつたら、多分問題ないと思います」

指をさしたのは、そこら中で放たれる“こっちこいオーラ”に反し、特に何も考えていなかった、俺のあたりだった。前のほうでも後ろのほうでもない、かといって真ん中でもない、あえていえば真ん中よりちよつと前の正直微妙なあたりだ。

えっ、と思ったその瞬間、俺はその杏寿という女に、尋常ならざる鋭い視線でにらまれたような気がした。

「ええと、それじゃ、真田君のとなりにしましょう。近くの男子は、賀茂さんの机を運んであげて」

その瞬間、数人の男子が席を立って、教室の後ろに置かれた机一式を運んでくる。転校生、賀茂さんに対しポイントを稼ごうとでもしているんだろっか。

「みなはん、こないなことさせてしもて、えろっすいまへんなあ」だが、その一言でそいつらはぐずぐずになって鼻の下を伸ばす。だらしのない奴だ。決して、ポイント稼ぎができなかったからひがんでいるのではない。

「よろしゅう、真田はん」

と、席についたその転校生、賀茂さんがにこやかにあいさつをしてくる。

「あ、ああ、よろしく」

確かに、美人だ。間近で見るとさらによく判る。微笑まれただけでぐずぐずになるのも無理はない。

だが俺は、なんとなくだが、この転校生、賀茂杏寿に、気を許してはいけない気がした。さっき俺を見たときの目線の鋭さが、妙に気になるのだ。

そのことをちよつと話そうかな、と思つたところで、先生が朝のホームルーム終了を告げて、教室を出て行った。

すると、待っていたかのようにクラス中の男子が賀茂さんのまわりに群がり、質問攻めにし始めた。とはいえ、聞くことといえはお決まりの、どこに住んでいるかとか彼氏はあるのかとかいうものばかりだ。お前らはそんなことしか聞くことがないんかい、とツッコミを入れたくなる。

そんなこんなで立つタイミングを逸してしまったので、その男子に交じって話を聞くことにする。せっかく席が隣になつたんだ、このぐらいでバチは当たるまい。

それで判つたことなんだが、彼女は今、とある事情で親元を離れ、^{よしがち}四賀茂神社というところにお世話になっているらしい。それで、土

日などはその神社で巫女さんのアルバイトをやっている、と言っていた。

ちなみに、巫女さんと聞いて、男どもの数人が変に盛り上がっていた。別に巫女さんなんて初詣とかで見ることができると、そんなにありがたいもんでもないと思うんだが、口にしたらまた朴念仁なんだとバカにされるに決まっているのでここは黙っておくことにした。

ホームルームと授業の間の休み時間はごく短く、あつという間に一時限目の始まりのチャイムが鳴る。男どもがあわただしく席に戻り、教科書を出し終えたところに、一時限め、日本史の先生がやってきた。

「あおう、すんまへん」

不意に、賀茂さんが声をかけてきた。

「な、何ですか？」

「うち、時間割が判らんかったさかい、教科書忘れてしもてん。見してもろて、よろしおす？」

ちよつと緊張してしまつたが、ただ単に教科書を忘れたから見せて欲しい、というだけだ。そう来られると、断るのも問題があるので、机を近づけて、教科書が賀茂さんにも見えるようにする。

「おおきになあ」

賀茂さんは恐縮している様子だが、俺はそれと別の意味で困ってしまった。というのも、クラス中の男子の怒りと羨望が入り混じつた視線を一斉に浴びることになつてしまつたからだ。

異常に居づらい状況だが、そんなことはお構いなしに授業は進んでいく。

気を紛らわすために教科書に目をやると、ちよつと明治から大正に切り替わるあたりをやっていたため、「西園寺公望さいおんじきんもち」という単語が眼に入りちよつとびっくりする。ちよつと考えれば、俺が西園寺という家系の一員だつてことは、俺しか知らないはずだからそんなにびびる必要はないんだが。

ちらつと横を見ると、賀茂さんはこつちに目もくれず、黒板の内容

を書き写している。そんな状況では話しかけるわけにもいかないの
で、こっちも真面目に授業に取り組むことにする。

しかし……これが、針のむしろというやつか。学校の授業
がこんなに長く感じるのは、生まれて初めてかもしれない。なんつー
かも、全部放棄して廊下で立っていたほうが楽だ。

授業時間がまだ半分ぐらい残っているのに、俺は、隣に座って俺の
教科書を一緒に見ている女が、なんでその席を選んだ、と恨めしく
思ってしまうのだった。

06 季節外れの転校生 その4 (後書き)

どうも、作者です。

やっとサブタイトルにもあった転校生の登場です。

主人公氏のとおりというのには昔からあるベタな展開でツマランかもしれないませんが、大目に見てください。

ちなみに、この転校生・賀茂杏寿があやつる京都訛りですが、実はかなりいい加減です。

イメージは、祇園の舞妓はんがしゃべるような京ことばなんです、これが難しくて難しく。まあ、今時の高校生で京ことばをデフォでしゃべるような人はいない、と言われてしまえばそれまでなんです。

というわけで、拙作をお読みいただいている方々の中に、京ことばに詳しい方がいらっしやいましたら、ご指摘・ご意見のほうよろしくお願いします。

もちろん、それ以外のご意見・ご感想もお待ちしています。

長くなってしまいましたが、それでは次回も乞うご期待！

06 季節外れの転校生 その5

きーんこーんかーんこーん。

「ふい〜・・・終ったあ」

長い長い1時限目がやっと終わり、俺は机に突っ伏してしまった。なんか、だいぶ精神が磨り減ったような気がする。

「真田はん、どないしりましたん？」

賀茂さんが不思議そうにこっちを見ている。彼女は多分、自分がその原因だとは夢にも思っていないんだろうな。

そうしている間にも、賀茂さんのまわりにまた人が集まりだし、俺は蚊帳の外へと追い出される。

と、その時、不意に携帯がぶるぶると震えだした。学校にいる間は一応マナーモードにしているためだが、それにしても誰からだろう。開けてみると、携帯の画面にケイの顔が出ている。口の動きと表情で何うかがう限り、早く出ると言っているらしい。ってことは、ケイ本人か？

「はい、もしもし」

「もう、早く出てよね、休み時間は短いんだから」

電話に出ると、案の定ケイの声が受話器から聞こえた。

「お前、おとなしくしてるんじゃないのか？」

「えー、だから、授業中はおとなしくしてたでしょ？」

「そういう問題じゃないだろ」

「でも休み時間に電話かけたことあるくせにい」

「う、それは、まあ、でもなあ」

「大丈夫だよお、横から見たら、普通に通話しているみたいにか見えなもん」

こっちの心配をよそに、ケイはさらっとそう言い放つ。まあ確かに、ケータイを持って話しているのを見て、ケータイ“と”話していると思うやつはまずいないだろうが、しかしバレたときのことを考え

ると、どうも不安になってしまふ。

「人前で、人の姿になるなよ。言い訳がつかんから」
「うんっ！」

こんな近くにおいて顔も見ずに話だけして面白いとは思えないんだが、本人がいいというんだから突っ込まないことにする。

そういうわけで、休み時間はケイの相手という、まったく休めない時間になってしまった。

06・季節外れの転校生 その5（後書き）

どうも、作者です。

休み時間はケイといっしょの巻です。

まー実際の妹はここまでなつくことはないでしょうし、なつかれたらちよつとウザイという方もおられるでしょうが、まあ軽く流してください。

さて、次回ですが。

前回を読んだ方はおぼえているかもしれませんが、転校生は実は一人ではありません。

というわけで、次回を乞うご期待！

06 季節外れの転校生 その6

次の授業は英語だった。どうやら賀茂さんは俺とは比較にならないぐらい英語が苦手らしく、本当に受験して高校に入ったのかと思うようなぶつとんだ訳をして失笑を買っていた。

だが、そのおかげでクラスの女子も彼女に対する嫌悪感はかなり薄れたらしく、俺の隣の席は1時限の休み時間よりもさらにやかましくなってしまうた。

さつき行きそびれたので、トイレに行こうと席を立つたときだ。

いきなり、扉ががらつと開かれ、隣のクラスの男を何人が引き連れて、見たことが無い女が一人入ってきた。

クラス中の視線がその女に集中する。

「ねえ、あの人って、A組に転校してきた子じゃない？」

クラスメイトのひそひそ話が耳に入る。なるほど、転校生か。どうりで見覚えがないわけだ。

そして改めて見ると、その女は噂に違わぬ美人だった。おそらくハーフなのだろう、彫の深い顔に金色の縦ロールな巻き毛。そしてすらりと背が高く、モデルと見まがうスタイル。なんか、漫画とかに出てくる「お嬢様」をそのまま実写化したような感じだ。

うちの転校生の賀茂さんとは対極に位置する、派手で華やかな美人だ。おんなじ美人でも、こうもタイプがちがうもんなんだな、と、感心してしまう。

その女は、自分に関係ないはずの、知り合いもいないこの教室を何のためらいもなく横切り、なぜか俺の前で立ち止まった。

そして、手にしていた扇子をぱちんと閉じると、その先を俺に向けてこう口を開いた。

「あなたが、真田将仁さん？」

会うことはおろか、見たことすらない女にいきなり名前を呼ばれる。

「な、なんだよお前は」

あまり気持ちの良いものではないので、とりあえず聞き返す。すると、その女は、ふふん、という表現がぴったり当てはまるような表情になった。

「ああ、これは失礼。私、本日を持ってこの学院に通うことになりました、近衛クローディアと申しますの」

そう言つて、お辞儀でもするのかと思いきや、扇子を広げて口元に当て、高笑いをして見せた。少女漫画のお嬢様みたいなその仕草が、また妙にはまっている。

「へいへいそうですか」

だが、付き合っていたらまたトイレに行く時間がなくなりそうなので、適当にあしらって出口に向かって歩き始めた。

06・季節外れの転校生 その6（後書き）

どうも、作者です。

もう一人の転校生の登場です。

真田家のシデンのごとく色々と騒ぎを起こしそつな子ですが、その時はまあ楽しんでやってください。

さて、次回ももうちょっとこのお嬢様がにぎやかしてくれます。それでは。次回を乞うご期待！

06 季節外れの転校生 その7

すると、その行く手に一人の男が、まるで幽霊のように現れて立ちふさがった。

一見すると目立たない奴だ。うちの男子の制服を全部のボタンをきつちり締めている。こいつも転校生なんだろうか、見たことがない奴だ。

だが、その男が全身から醸し出す雰囲気は、俺たちのような一般学生のそれと明らかに違った。なんと言おうか、目の前に立っているだけなのに、得体の知れない恐怖を感じるのだ。

「お待ちなさいっ！私をないがしろにするなんて、許さなくってよ！」

すると、近衛お嬢様が、俺の後ろから声をかける。

「全く、この程度の礼儀もわきまえない者が西園寺の後継者だなんて、期待はずれもいいところですよ」

振り向いた俺に向けて、近衛と名乗るこの女は、腕を組んで、がっかりだとも言いたげな表情をしている。こいつはいったい、俺になにを期待していたんだ。

「まあ、よろしいですよ。真田将仁さん、いいえ西園寺将仁さん。

あなたを、私の下僕にして差し上げますわ。感謝なさい」

拳句の果てに、俺にしもべになれたと。何で西園寺のことを知っているのか、少し引つかかったが、それ以前に、いくら相手が美人のお嬢様でも、こつも神経を逆撫でられると腹が立つ。

「なんだと？」

「あら、清華家の分際で、撰家たる近衛の一員である私に楯突くおつもり？」

「撰家だか石器だか知らんが、なに訳のわからんことを言っているんだ。アホかお前は？」

「な、な、なんですってっ！この私に向かって阿呆だなんて、この

無礼者！」

「俺が無礼だったらお前は非常識だろうが！なんで縁もゆかりも義理も恩もない、今日会ったばかりの奴にこの俺がこき使われなきゃならねえんだ！」

「きいいいいいっ！この私がつ、わざわざここまで出向いてやったというのにつ！その口の聞き方は何ですの！？」

「てめえが勝手に来たただけだろうが！こっちは頼んだ覚えはねえやい！」

いつの間にか双方ヒートアップして口論になってしまっている。

「迅っ！」

どうやらこのお嬢様は反論されることに慣れてないようだ、横を向いてそこにいる男子生徒にヒステリックに声をかける。

ふふん、勝った。と思ったのもつかの間。その声をかけられた男を見て、背筋に冷たいものが走った。

というのも、その男は、さっき俺の前に立ちふさがった、あの得体の知れない恐怖を放つ男だったのだ。そうか、この男、迅しんというのか。ではなくて。

「この男をいためつけておやりなさい！」

「こら待て」

と言えたかどうか。気がつくと、俺は床にひっくり返っていた。しかも、仰向けになった俺の喉元には、迅と呼ばれた男子生徒のつま先が突きつけられている。

何をされたかすら分からない。ただ、体のいろんな所に鈍痛が走っている。投げられるのはシデンの相手とかで慣れてきたが、これはただ投げられただけではない、ような気がする。

なんなんだ、この迅とかいう男は！？

「何やってるんですかーっ！」

口論ぐらいならともかく、教室の真ん中で実力行使は目に余ったらしい。うちのクラス委員、佐伯さへびがすっ飛んでくる。

それと同時に、始業のチャイムが鳴る。

「ふん、チャイムに救われましたわね。この場は退いてさしあげますわ」

近衛お嬢様は、口元を扇子で隠しながら笑う。絵にはなるが、憎らしくもある。

そして、彼女は高笑いを残しながら、取り巻きと共に隣のクラスへと消えていった。

「なによあの女！」

「おい、大丈夫か？」

すでにうちのクラスのほとんどが俺のまわりに集まっていた。

女たちはあの高飛車ぶりがさうとう気に入らなかつたらしく、口々に悪口を言っている。

男のほうはと言うと、心配そうに声をかけて来てくれた奴がいた。やっぱり持つものは友達だ、と思つたら。

「お前、あの美人とどんな関係なんだよ」

「なんでお前にばっかり美人が集まるんだ！」

「メアド知ってるのか？電話番号は？」

だと。美人を独り占めした報いだ、とでも言いたいのだろうか、俺の心配をしてくれる奴は一人としていなかった。

俺は何もしていない。賀茂さんが隣になつたのは偶然だ（と思う）

し、今の近衛お嬢様に至つては会つたことはおろか、2時限目の休み時間に入るまで、存在すら知らなかつた。

だが、状況が悪い。訴えても誰も聞く耳を持たないのが現状だつた。所詮、男の友情なんてそんなもんだ。俺は心の中で人知れず泣いた。

06・季節外れの転校生 その7（後書き）

どうも、作者です。

クローディアのボディーガードらしき男、迅の登場です。

実は私、この迅という男のことを、フルメタルパニックの相良宗介なみのぶつとんだキャラで構想していたんですが、そもそも世界観が違うからかそこまでは突き抜けられませんでした。

彼も、これから多少はストーリーに絡んできますので、楽しみにしててください。

それでは、次回を乞うご期待！

06 季節外れの転校生 その8

4時限目は、隣のクラスと合同の体育だった。

隣のクラスというのはA組、言い換えればあの近衛お嬢様のいるクラスだ。

とはいえ、男と女はやる種目が違う。女子は体育館でバスケットボール、そして男子は外でサッカーということになっている。

ただし、今はその準備運動として、グラウンドを大回りで各自のペースで3周走っている。そして俺は、いつもより早いペースで走っていた。

これには、わけがある。

実は、俺とまったく同じペースで走っている奴がいるのだ。しかもそいつはまったく息を切らせず、それどころか顔色一つ変えずに、ぴったりとついてくる。

そいつは、あの近衛お嬢様に影のようについて回っていた、「迅」と呼ばれていた男だった。フルネームは「かけいじん 算迅」で、近衛お嬢様と一緒に今日転校してきたらしい。

気味が悪いのでペースを上げて振り払おうとしたんだが、迅は、同じようにペースをあげて、ぴったりついてくる。気味が悪いことこの上ない。

「真田。話がある」

一周を走り終えたころ、不意に、後ろから声をかけられる。感情を押し殺したような、そして走っているとは思えない、低い声だ。それが、迅の声だった。

「なんだよ、走っている最中に」

「お前は聞くだけでいい。他の奴らには聞かれたくない話だ」

なんだそりゃ、と聞き返してやるうかと思っただが、ペースを上げているので返事もつらい。そう思っている間に、迅が少しペースを上げて無表情のまま俺の横にぴたりとつけた。

「手短に言おう。我々は、お前の力のことを知っている」

その無表情の口がそう動く。だが、そこで告げられた言葉は、到底無視できないものだった。

「なんだって!?!」

「立ち止まるな」

驚きに立ち止まりそうになった俺の腕を引っ張り、迅は俺を走らせる。

06・季節外れの転校生 その8（後書き）

どうも、作者です。

前回初登場した迅が、主人公に接近して来ました。

と書くとなんかB Lな話になりそうですが、そんなことはありませんのでご安心ください。

さて、迅の話とはどんな事なのでしょう？

次回を乞うご期待！

06・季節外れの転校生 その9

「お前もまだ、西園寺との関係は、周りに知られていないのだろう」
迅は、アスリートなはずの俺を半ば引きずりながら走る。本当に同級生か？と疑いたくなるが、問題はそこではない。

「お前、力のこと、なんで知っている？」

こいつらが言う「力」というのは、物部神道の力、つまりは「擬人化」のことだろう。それを知っているのは、常盤さんとりゅう兄、そのりゅう兄から聞いた俺の両親ぐらいのはずだ。

だがそこで、俺はそれ以外にもその力のことを知っている奴がいることに気づいた。引越し前に俺たちを付け狙っていた奴らだ。まさか、こいつは、あの連中の一味なのか？

「それこそが、あのお嬢様がこの学園に來た理由だ。一部の旧華族の間では、西園寺家に伝わるその力は有名らしいからな」

「な、なにが目的だ」

「詳しくは知らん。俺はあのお嬢のボディーガードとして、雇われているだけだ」

なんでも、あのお嬢様がいる近衛家このえというのは、ぶつちやけて言えば世界屈指レベルの金持ちなんだそうだ。そして、彼女の身を護るためにつけられたのが、この迅ということらしい。

なんかマンガみたいな話だが、こんなハイペースで走っても息ひとつ切らせない体力や、意識すらできないほどの速さで俺を組み伏せた技を見せられては、とてもじゃないが冗談だと笑い飛ばせない。ボディーガードだと言われても、素直に納得できてしまう。

が、同時に、ガードする相手からこんな離れたところにいて大丈夫なのか、と突っ込みたくもなった。なにしろ、俺たちは今女子が体育の授業をしている体育館とは、グラウンドをはさんだ反対側を走っているのだ。

ただ、この男だったら、何かあっても一瞬ではせ参じてしまうよう

な気もする。

「だが、あのお嬢様は、物人を問わず欲しいものは財力や権力を駆使して必ず手に入れてきた。そして今の関心は、西園寺家に伝わる、ものべしんとう物部神道の力だ」

迅はそう淡々と喋る。嘘か本当かはうかがい知れない。

「お前はそれに、つき合わされているって、ところか？」

ちよつと皮肉のつもりで迅に言葉を投げる。すると、意外な言葉が返ってきた。

「そんなところだ。まったくあのお嬢様のわがままにも困ったもんだよ」

そう言う迅の口元には、わずかに苦笑いが浮かんでいた。そうか、こいつも、苦勞しているんだな。俺は迅にちよつとだけ同情してしまつた。

「算。一つだけ、教えてくれ」

3周目があと半分で終わる、というところで、俺は思い切つてあのことを聞いてみた。

「この前、俺たちを、付け回したのは、お前らか？」

返事は、すぐに返ってきた。

「違つ。少なくとも俺は、そのようなミッションは与えられていない」

ちよつとだけ納得した。もし迅がそういう命令を受けていたとしたら、少なくともうちのモノたちに捕まるようなことはないだろうからだ。

そうしているうちに、3週のランニングが終わつた。

俺はすでにへとへとだが、俺と一緒に走っていた迅のやつは涼しい顔をしてストレッチなんかをしている。

バケモンだ。失礼ながら、迅を見て俺はそう思つてしまった。

06・季節外れの転校生 その9（後書き）

どうも、作者です。

おかげさまで、この小説のアクセス数が20万を突破いたしました。感謝の意と、昨日ネットワークトラブルで投稿できなかつたことも合わせまして、今日は2話投稿します。

と言っても、前回の続きで、またも男しか登場しないのですが。

さて、次回ですが。

主人公氏は、なぜかクラス担任に呼び出されます。

何をやらかしたのでしょうか？

次回を乞うご期待！

06・季節外れの転校生 その10

今日の昼飯は、購買で買ったパンとコーヒー牛乳だった。いつもは食堂で日替わりランチなんかを食べるんだが、今日はそうはいかない。ケイの奴、携帯電話の姿になっていても腹は減るようで、「おなかついたー！」と催促されてしまったからだ。

その日は屋上に出て、二人でフェンスによっかかってパンを食った。妙にケイが嬉しそうだったのが印象的だった。

そして、腹には少し物足りない昼飯を済ませて降りてきたところで、俺は、今度は生徒指導室に呼び出された。正確に言うと、職員室に呼び出されたのだが、その呼び出した先生に、生徒指導室に行くよう指示されたのだ。

生徒指導室と言っても、実のところ使われたことがほとんどなく、部屋の真ん中にテーブルと椅子が置かれた物置、と言ったほうがあっている。問題のある生徒がいない、というわけではないが、校則がゆるーいのと、うちが基本的に進学校なので、進んでそのゆるーい校則を破って内申書を悪くしようとするやつがおらず、使われないので物置になってしまったというのが現状だ。

「ごめんなさい、待たせちゃったかしら」
しばらく待っていると、うちのクラスの担任である徳大寺先生とくだいじが入ってきた。俺を呼び出したのは、この徳大寺先生なのだ。

「話というのは、2時限目の休み時間にあつたことなのだけれど」
先生は、そう言いながら俺の向かいに腰掛けた。

2時限目の休み時間、というと、近衛お嬢様に下僕になれと言われ、迅に転ばされたあの時だ。あれはどう見ても俺が被害者なんだが、まさか俺が悪者になっているんだろうか。

「あのとき、近衛さんが言っていたこと、本当なの？」

「へ？」

だが、先生の話の焦点は、騒ぎを起こしたこと自体ではないようだ。

「あなた、西園寺と呼ばれていたでしょう。心当たりはあるのかしら？」

「あ、ああ、その話ですか。……ええ」

言われてみれば、あのお嬢様は確かに俺のことを「西園寺」と呼んでいた。それを、先生に聞かれてしまった、ということらしい。

「実は、俺のことを西園寺っていう古い家の跡取りだって言う弁護士の人が、うちに電話をかけてきたんです」

聞かれていたんじゃない。俺は、常盤さんが現れてからのことを、なるべくあたりさわりのない範囲で話した。もちろん、擬人化のことは伏せてだ。

「……そう、そうだったの」

すると、先生は妙に感慨深げに、大きく頷いた。なんなんだろう。

06・季節外れの転校生 その10（後書き）

どうも、作者です。

主人公氏と担任の先生が急接近です。

何さて、何があつたのでしょうか？

それは次回に明らかにあります。

それでは、次回を乞うご期待！

06 季節外れの転校生 その11

「世の中というのは、狭いものね。こんなところで、西園寺家の人に会えるなんて」

「へ？」

思わず間抜けな声が出てしまう。あの、すみません、話が見えないんですが。

「先生、誰か西園寺の人と知り合いだったんですか？」

それに対する答えは、俺の想像を超えていた。

「真田君。徳大寺家はね、明治のころから、西園寺家と親交があった家系なの」

そう言う先生のまなざしは、不思議なぐらいに穏やかなものだった。言うなれば、成長した親戚の子を見ているような感じだ。

なんでも、日本史の教科書にも載っている明治時代の総理大臣、西園寺公望いおんじきんもちは、徳大寺家から養子として迎えられた人物なんだそう。西園寺家と徳大寺家はそれ以来の長い付き合いなのだという。

「知らないと思うけれど、先生がまだ学生だったときには、当主だった静香様に色々とお世話になったのよ」

「……静香……」

その名前には、聞き覚えがあった。確か、常盤さんが持っていた遺言書にあった名前が、静香だったはずだ。

「……多分、真田君の本当のお母様よ」

先生は、懐かしがるような口調でそんなことを言う。

だが、俺は何の実感もなかった。だってそうだろう。いくら生みの親だからって、生まれて一度も会ったことがなければ情も沸くわけがない。それどころか、死んでまで、いや、死んでから俺に迷惑をかけるその西園寺という家に、俺は嫌悪感すら抱いている。

「でも俺は真田将仁です。西園寺じゃありません」

「そうね、無理もないわね。たぶん、私も真田君と同じ立場だった

ら、素直に受け入れることはできないと思うから」

先生は、俺の発言を聞いて、否定こそしなかったが、一瞬悲しそうな表情になった。古くから親交がある家系だけに、否定されるのはショックらしい。

「あ、いや、別に跡取りがいやだってわけじゃないんですよ」

思わず、そんな無責任なことを言ってしまう。嘘は言っていない。

西園寺家の遺産は喉から手が出るくらい欲しいし、俺の周りで相続に反対するやつもない。変な親戚が増えたり、金目当てで近づいてくる奴が増えるのも想定内だ。気になることといえば、その遺産を狙って俺らの周りを嗅ぎまわっている奴らがいるらしいことだが、それもまあ資産額から考えれば無理からぬ話だ。

結局のところ、西園寺家の問題はすべて俺の気持ちで解決される問題なのだ。しかし、俺の気持ちは、話を聞いてからすでに何日か過ぎたが、いまだに整理ができていない。ここ数日、イベントがいるいるありすぎてそっちに頭が回っていないというのが実状だ。

「そう、これから決めるのね。じゃあ、決心がついたら、先生に教えてね」

「え？」

「私は、親交がある徳大寺家の一員として、西園寺家がどうなるの
かを見届けたいの。どんな結果になっても、文句はないわ」

先生は、俺にそう言った。だが、俺はその言葉に、「西園寺家の消滅は見たくない」という気持ちが込められているのを。うっすらとだが感じた。

06・季節外れの転校生 その11（後書き）

どうも、作者です。

担任教師と、意外な関係が発覚しました。

さて、これからどう発展していくのでしょうか？

ちなみに、本文でも記されている西園寺公望氏と徳大寺家のくだりですが、実はここだけフィクションではなかったりします。

最後の元老と呼ばれる明治の大政治家、西園寺公望氏は徳大寺家の次男と生まれ、4歳の時に西園寺家に養子になったのだそうです。ただ、今でも良家が仲が良いかはわかりません。

さて脱線はこのぐらいにして、次回はやっと放課後になります。

どんなことが起きるのでしょうか？

乞うご期待！

06 季節外れの転校生 その12

「んー！かあーっ」

やっと授業が終わり、針のムシロから解放された俺は、大きく伸びをする。

「なあ、真田はん」

その俺に、今日一日、ずっと教科書を共有していた賀茂さんが話しかけてきた。

「真田はんって、なんやえらい記録を持ったはると聞いたんやけど、ほんま？」

「そーなんだよ。こいつ、棒高跳びの県大会記録保持者でさあ」

俺が答える前にヤジローが口を出す。他人の口から言ってもらえると楽だが、多分こいつはそれをネタに賀茂さんと話したいだけだろうな。

「ほんま！？や、どこぞで見たことがあるお人やと思っただんやけど、インターハイやったんやね」

そんな感動の面持ちで言われると照れるんですが。賀茂さんも出ていたのかと思っただが、彼女はギャラリーとして参加したらしい。言われてみれば、今年のインターハイは大阪だったな。

自慢すると自分でも痒くなるが、賛美されると悪い気はしない。

「うちも体動かすんはクライやないけど、個人競技は苦手なんどすわ。な、いつペン、跳ぶとこを見してくれまへん？」

そして、賀茂さんも興味を持ってくれたらしい。願ったりかなったりだ。ついでにこのまま陸上部に入ってくれたら嬉しいんだが、個人競技は苦手だと言っているし無理かな。でもまあ応援してくれるだけでも……

ちやつちやらーらー、ちやららーらー

そのとき、マナーモードにしていたはずの携帯電話が鳴り出した。おかしいな、いつの間に変わったんだらう。

「ちよつと待って、電話だ」

このままではせつかく知り合った美人を逃してしまう。そんなことを思いながら、俺は受信のスイッチを押した。

「もしもし、真田です」

「お〜に〜い〜ちゃ〜ん〜!?」

出た瞬間、ものすごく恨めしげな声が聞こえる。驚いて思わず吹きだしそうになる。

電話の主は、ケイだった。

「な、なんだ、お前か」

「なんだじゃないよう、まったく鼻の下伸ばしちゃってだらしないしかもかなり機嫌が悪い。

「あ、こ、これはだな、って別にいいだろ」

「よくないよくない〜っ！お兄ちゃんはだらしくしちゃいけないの！」

「誰が決めたそんなこと」

「ケイが決めたの！」

「ケイがって、あんな」

そこまで言って、俺は、クラスメイトたちが俺を奇異の目で見るのに気がついた。

はっとなって、思わず折りたたんでポケットに突っ込む。すると、

抗議するかのように間髪を置かずに呼び出し音が、しかも一回り音量が大きく、さらにバイブレーション機能まで活用して騒ぎ出しやがった。

「まったくいい加減にしるよ！」

仕方なく、その携帯を開く。

「あっ！そんなこというの!?じゃあこれから誰かから電話がかかってきても取り次いであげないもん！メールも見せてあげないもん！」

それは、携帯電話としての存在意義を放棄してないか？

「ちよ、ちよつと待て、なんだよそりゃ!?」

「へへーんだ」

思わず顔の前に持ってくる、ケータイの画面に映るケイがあかん
べーをしやがった。

06・季節外れの転校生 その12（後書き）

どうも、作者です。

放課後になっても安心はできないようです。

まあ、隣には美人の転校生、ポケットにはかわいい妹（？）がいる状況では安心できないのも当然かとw

もし私が同じ状況に置かれたら逃げるかもしれません。

さて、電話のふりをしたままで騒ぐケイですが、どうやってこの場を収めるのでしょうか？

では次回を乞うご期待！」

06 季節外れの転校生 その13

「誰と話してんの」

「うわっ!？」

だが、横からシンイチにかけられた声で、俺はまた現実に戻される。「あ、こ、これは、ええと、そう、し、親戚の子だよ。最近引越してきてな、懐かれちゃったんだよ、ははは」

本当のことを言ってしまうわけにもいかないのです、とっさにケータイをおさえ、そうごまかして場を取り繕う。自分でも分かるぐらい動揺しまくっている。

いかん、これでは変な奴に見られてしまいかねない。と思ったんだが。

「お前、よっぽど女の扱いに慣れてないんだな」

そいつには、やれやれといったため息とともに、肩にポンと手を置かれてしまった。違う、違うんだと心の中で叫んでも伝わるはずもない。

ちくしょーめ、あらいざらいぶちまけてやりたい!

「もーっ!抑えないでよーっ!ケイはまだ話が途中なんだからーっ!お兄ちゃんのスケコマシーっ!」

俺の手の下でケイがわめく。ってバカ、こんなところでそんなことを言うなって。

「お、おい、人が見てるじゃないか」

「ふーんだ、もうあることないことばらしちゃうもん!」

「わ、こら!あることはともかく、ないことはやめろ!」

「ふうーん、あることならいいんだ」

「そ、そうじゃない、そうじゃないが、ここじゃまずいよ、みんな見てる」

そこまで言ったとき。隣からすつと手が伸びて、ケータイをひっさらっていった。

「かし」

「あつ!？」

賀茂さんだった。彼女は、開いたままの俺のケータイ、もといケータイを自分の目の前に持ってきた。

「もしもし、こんにちはあ」

そして、画面いっぱいに映っているケイの顔に驚く様子も無く、それどころかケイに向かってにっこりと微笑んで挨拶したのだ。

「悪いけど、将仁はんはうちと話をしてはるのやわ。あんたはんは、ちびつとおとなしゅうしてな」

「え、ちよ、ちよつ」

そして、テンキーの上で指をすばやく細かく滑らせると、ぱたんとケータイを閉じた。

「これで、しばらくはおとなしゅうしてくはりまっしゃろ。ほな、行きまひよか？」

そして、俺にそのケータイを手渡しながら、そんなことを言う。改めてそのケータイに視線を落とすと、あれほどぎゃいぎゃいと騒いでいたのが嘘のように静かにしている。開いて画面を見ると、最近ちよつと見なくなっていた、かつて設定していたデジタル時計の画面が出ていた。

「なにを、したんだ？」

「へえ? いややわあ、ちびつと挨拶しただけです。そないことより、ほら、うちに跳ぶとこ、見してくはるんでっしゃろ？」

賀茂さんは、それをごまかすかのように俺の制服の袖をひっぱってせかす。

俺は、何をしたのかを追求しなかったのだが、それ以上に、その場の男どもの視線に耐えられなくなり、逃げるように教室を後にした。

06・季節外れの転校生 その13（後書き）

どうも、作者です。

美少女転校生を連れ出すのに成功したようです。

これからの部活動でいいところは見せられるのでしょうか？
それでは次回を乞うご期待！

追伸：本編のサブタイトルの番号が、その14になっていましたので、その13に修正しました。

結局、賀茂さんは俺の高飛びの実力を見ると、そそくさと退散してしまった。

言っておくが、俺のせいじゃない。美人が来たもんだから、うちの男子部員が舞い上がってしまい、逆に賀茂さんに引かれたためだ。

「ほ、ほな、うち、他にも寄りたいたいところがありまっさかい、ごめんやっしや」

そう言つと、逃げるようにどこかに行つてしまった。後で他の部員に「なんで逃がした」と文句を言われたが、濡れ衣もいいところだ。そうこうしているうちに部活が終わり、俺は帰途についた。

ふと思いつ出したのだが、お嬢様のほうはアレ以来、まったくちよっかいを出してこなかった。なんだかちよつと気味が悪い。

だがそれ以上に気味が悪いのが、今、俺のポケットに入っているケータイだ。あれから、喋るのはおろか、震えもせず、うんともすんとも言わないのだ。最初はありがたかったが、ここまで静かだとさすがに何か変だと思う。

電車から下り、駅を出たところで、ケータイを取り出して開けてみる。すると、画面がいつのまにかデジタル時計からケイの顔に変わっていた。しかし、いつもと違い眠っているように目を閉じている。

「おい、ケイ？」

「……………んー……………あれ、おにいちゃん……………?」

声をかけると、ケイはとても眠そうに眉をひそめる。そして、うっすらと目をあけると、とても眠そうな声をあげた。

「大丈夫か？もうすぐ家に着くけど」

「……………うん」

本当に寝てたのか、かなり眠そうだ。家に着いたら起こすと言っただけ、小さくあくびをして、そのまま目を閉じてしまった。

珍しいこともあるな、と思いながら、ケイをポケットに入れた。

06・季節外れの転校生 その14（後書き）

どうも、作者です。

転校生に逃げられ、お嬢様には放置され、電話も相手にしてくれない寂しい主人公氏の図です。

まあ、家に帰ったらまた騒がしくなるので、今回は軽く読み飛ばしてください。

今回は、モノたちのお出迎えです。と言っても、別に総出というわけではありませんが。

乞うご期待！

06・季節外れの転校生 その15

「ただいま」

「む、ようやく戻ったか」

「おかえりなさいアル」

うちの門をくぐり、庭にいたシデンと紅娘に声をかける。向き合つて手や足を交差させていた二人は、俺の声に反応してすたたとと駆け寄ってきた。

「なにやつてたんだ二人とも」

「ふっ、見て判らなかつたのか？話を切り出すきっかけとしては悪くはないが……」

「何してたんだ紅娘」

「はいな、鍛錬してたアル」

「あつ、こ、こら上官、貴様が話をしていたのは、我ではないか！」

「だつてお前だと長くなりそうなんだもん」

「きつ、貴様あつ！」

「じゃあ何の鍛錬をしていたかを説明してくれ。手短にな」

「う、よ、よかるう、では説明してやるから耳の穴をかつぽじつてよく聞くがよい！」

だからそれが長いんだ、と言いたいのをぐっところえ、シデンの話に耳を傾ける。

話を要約すると、どうやら昨日のこと、つまり走つて俺について来られなかったことがさうとう悔しかったらしく、体力トレーニングをやっていたらしい。元々はシデン一人でやっていて、途中から紅娘が加わったんだそうだ。そして、締めとして、二人とも格闘技の心得があるということとスパリングみたいなものをやっていたところに、俺が帰ってきた、というわけだ。

「そちらが我々に合わせぬというから、こちらが合わせてやるうというのだ。感謝するが良い」

あれでも合わせたつもりなんだが、と言ったらまたすねて暴れだし
そうなので黙っておく。こいつは軍人氣質のわりにわがままだから
なあ。そのぶん分かりやすいけど。

「あ、そいえばケイチャンサンは？一緒じゃなかつたアルか？」

「ああ、なんか眠いって言ってたから、寝かせてやってるんだ」

紅娘の質問に、ケータイのままのケイを入れたポケットを指差して
答える。

「そうアルか、じゃあ静かにしないといけないアルね」

「そうならそうと先に言わぬか、気が回らぬ奴め」

すると、紅娘だけでなくシデンも声のトーンを落とした。

やっぱりなんだかんだいってもケイのことはかわいいんだな。そう
思うと、なんとなく目じりが下がる感じがした。

06・季節外れの転校生 その15（後書き）

どうも、作者です。

やっぱりシデンも紅娘も多少はお姉さんぶりたいようです。

とは言っても、二人とも現れたのはケイより遅いんですがw

それでは、次回を乞うご期待！

06 季節外れの転校生 その16

「あ、おかえりなさい」

もう少しスパリングをするという二人を残し、家のドアを開けると、そこには床にモップがけをするクリンの姿があった。

「こんな時間になるまで掃除か？」

「ええ、手持ち無沙汰だったものですからあ」

なんかほっとする。こいつはいつもどおりだ。

「あらあ？ケイさんはどちらに行かれたのですかあ？」

「あ？ああ、ちよつとな。眠いって言うから寝かしてやってる」

「あらあら、それでは静かにしなくてはいけませんねえ」

紅娘と同じようなことを言って、クリンはにこつと微笑んだ。

自然なその微笑にちよつとどきつとする。

「他の連中は？」

「あ、はい、レイカさんとヒビキさんとテルミさんはあ、買いだしに行っていますっ」

「今日もか？」

確か、昨日も買い物には行っていたはずだ。そんなに毎日買い足すものがあるんだろうか。

「皆さん、毎日たあつくさん食べますものねえ」

だが、その一言で納得してしまった。11人の大所帯だから食べる量も半端ではないということだ。かくいう俺もその一端を担っているわけで。

「常盤さんは？仕事？」

「いいええ、バレンシアさんと一緒にい、鏡介さんの字の特訓をされていますっ」

字の特訓？鏡文字を矯正するってことか？

「普通に書く字が鏡文字だとお、なにかと不便だ、とおっしやいましてえ」

まあ、言われてみれば、鏡介だって字を書くことはあるだろうしな。それを見過ごしていた俺は、もしかしたら甘いのかも知れない。あとでなにか差し入れでも持っていてやってやるか。そう思いながら、俺は自分の部屋へと向かった。

06・季節外れの転校生 その16（後書き）

どうも、作者です。

なんか、内容がサブタイトルと関係なくなってきました。

ですが、1日はまだ続くので、これから話題に上るであろうことを待っていてください。

それでは次回を乞うご期待！

まだ眠そうなケイを部屋の充電器に置いて、下の階に下りる。差し入れできそうなものを物色するために台所に行くと、またクリンと遭遇した。

「あらあ、将仁さあん。また、お会いしましたねえ」

「あれ、こんどは何やってんだい？」

「はあい、手すきになりましたのでえ、流し台をお、綺麗にしているんです」

なるほど。暇つぶしになるようなものもないもんな。なんてなこと考えながら、流しを覗き込む。クリンの言うとおり、白くて細かい泡が、ステンレス製の流しの内側にたくさんついている。

だが、そこに本来あるはずのものが、一つない。

「たわしとかは使わないのか？」

そう。普通は洗剤とかクレンザーとかをつけたたわしやブラシを使ってゴシゴシ磨くものだと思うのだが、なぜかクリンはそういうものを持っていないのだ。のみならず、普通は手あれを防ぐために手袋とかをしようと思うんだがそれすらしていない。

だが、クリンはきよとんとして俺を見たあと、くすつと笑い出した。

「いやですよお、私がおなのかあ、忘れちゃったんですかあ？」

「へ？何なのかって、スポンジだけどありゃ風呂用じゃ」

「もう、私だって日々研鑽しているですよお。見ていてください、綺麗になりますからあ」

にこつと笑うと、クリンは水を張った荒い桶に手を入れた。手についた洗剤の泡が水面に浮かび、そして再び引き上げると、ぼたぼたと水が滴り落ちる。

クリンが鼻歌混じりに手をぎゅつと握ると、まるで水を含んだスポンジを握ったかのように、激しい勢いで水が滴り落ちた。

そして、手で流しを撫でるようにこすると、ステンレスのシンクが

顔を出した。

続けて、ステンレス製の三角コーナーを同じように手でこすると、汚れが見る見る落ちていく。

洗い桶の中の水をざばーっと流し、蛇口をひねって水を出すと、流れに手を浸し、鼻歌交じりに両手をこすり合わせたり握ったりする。すると、汚れたスポンジをゆすいだように桶の中の水が濁っていく。さすが元スポンジといったところだろうか。

「うふふっ」

「楽しそうだな」

「ええ、だつてえ、綺麗になるのはあ、気分がいいじゃないですかあ」

そして洗い桶の汚れた水を再びざばーっとあけ、三角コーナーにネットを被せる。

「それじゃ、最後にい」

まだ何かやるのか？と思つて見ていると、クリンはシンクの端から中を覗き込むように身を屈め、そしてなぜか舌を出した。

舌といっても、クリンのそれは口の中に収まると思えないほど長い。40センチはある肉色の帯が、銀色のシンクにべろんと投げ出されると、まるで蛇のように動いてシンクの壁にべたつと張り付く。

そしてその舌がまるでワイパーのようにシンクの表面を舐めていく。なんかどっかの妖怪みたいな光景だが、その舌が通過すると、シンクの表面がまるで磨いたような光沢を放ち始めた。

「はいっ、これでえ、お掃除完了ですう」

「………あ、えーと、おつかれさん」

嘘のような光景を面白がっていると、いつのまにか最後まで見ていってしまった。

06・季節外れの転校生 その17（後書き）

どうも、作者です。

クリンのスポンジとしての本領発揮です。

なんかすでに浴用という肩書きが無くなっていますが、頑張っているのはわかってもらえたと思います。

さて、この後ですがもうしばらくクリンとのやり取りが続きます。

どんなことをするのでしょうか？

次回を乞うご期待！

06・季節外れの転校生 その18

「そういえばあ、将仁さんはあ、何をされに来たのですかあ？」
「あ」

そうだ、思い出した。鏡介に差し入れをと思つて物色しに来たんだ。しかし改めて考えてみると、差し入れに向いたものはほとんどない。その最大の理由は、この家の台所を管理している冷蔵庫のレイカが中身ごといなくなっているのと、そのレイカがかなりの健康志向なため、いわゆる「菓子」の類の買い置きがないのだ。

それでも探してみると、カウンターに置かれた籠に、2個の梨が入っているのが見つかった。

「これでいいか」

食器棚から皿を出し、流しの下から包丁を取り出す。レイカが使う氷の包丁が印象的ではあるが、その前から俺が使っていた包丁も持つてきてあるのだ。それに俺だつて一人暮らしのときは多少自炊していたから包丁ぐらい使える。

その梨を洗つて、皮をむく。リンゴなら皮ごと食べるが、梨の皮は食えたもんじゃないからな。

ふと、その視界の端に、クリンがちょっと顔を引きつらせて見ているのが見えた。

「どうした？」

「きゃあ！」

俺がそつちを向くと、クリンは悲鳴をあげた。

「そ、それ、こっちに、向けないでください」

「それって、包丁か？そんな怖がらなくてもいいだろ、刺すわけじゃなし」

「あう、そ、そんなこと言つてもあ、刃物って苦手なんですよう。すっぱりと切れちゃうじゃないですかあ」

どうやら、クリンは刃物が苦手らしい。こころなしか顔色まで悪く

なっている。まあ確かに、殴ろうが蹴ろうがスポンジは元に戻るが、刃物で切れたら戻らないしな。

しかし、どんなことがあってもほわわんとしていそうなクリンにも、怖いものはあつたんだなあ。

「いてっ！」

そんなことを考えながら梨をむいていると、手元が狂ってしまった。クリンがさつききれいにしたばかりのシンクに、むきかけの梨と包丁が転がり、そして切ってしまった左の親指から流れる血が、ぱたっ、ぱたっ、と赤いしみを作っていく。

「あちゃー……」

とりあえず血がついた梨なんか食わせるわけにはいかないので、梨を拾い上げてシンクの横に置く。そして改めて傷口を見ると、これが綺麗にすっぱりと切れていて、今も赤黒い血が湧き出している。

ちよつと深そうだが、すっぱり行っているみたいだから、これなら絆創膏でも巻いておけばすぐ治るだろう。と思っていると、突然そこにピンク色の何かやわらかいものが巻きつき、そして引っ張られた。

なんだなんだ、と思っていると、俺の親指がぱくつと啜えられてしまった。

06・季節外れの転校生 その18（後書き）

どうも、作者です。

クリンの怖いものがひとつ判明しました。

とはいえ、別にいじめようというつもりはないので「安心ください」。

さて次回ももうすこしクリンとの会話をお楽しみください。

それでは次回を乞うご期待！

クリンの口だった。何を思ったのか、クリンは俺の指をその長い舌でからめ取ると、そのまま自分の口へと引き込んでしまったのだ。

「なっ、何やってるんだお前は!？」

「あううう、ごえんらひゃい、れも、らりかひらいとろおうおっれえ」

「う、こらしやべるな、くすぐりたい」

指を啜えられたままで喋られると妙にくすぐりたい。変な趣味に目覚めるんじゃないだろうか、と思いはじめた矢先、その指からの感触に、俺は違和感を持った。

よく、怪我したときには「つばつけときゃ治る」という。実際、唾液には殺菌作用があるらしい。が、それでも神経を傷つけているわけだから、痛みはあるはず。なぜか、それが無いのだ。あるのは、その表面を撫でまわすような感覚だけ。

「ちょ、ちよっと待ってくれ」

「はひ?」

クリンの意識がこっちに向いたのを見計らって、クリンが啜えている指を引く張る。

「ひゅああああ、らりひゅるんれふかあ」

すると、俺の親指が、クリンの舌といっしょにゆるんといった感じで顔を出した。

クリンが舌をひっこめるのを横目に、俺はまだクリンのつばがついている自分の親指を表裏とひっくり返しながら見て、さっきの違和感の理由を探った。

そして、すぐにその理由が分かった。指の傷口からの出血が、止まっていたのだ。それどころか、傷口自体がほとんどふさがっており、指の皮を切った程度になっている。

「どうなってるんだ?」

「え、どうかしたんですかあ？」

「あ、ああ、傷口が、塞がっている」

「えええ！？」

そして指を見せると。クリンのほうも驚いていた。こいつの口の中でおきた現象なのに何があったのかが理解できていないらしい。

念のため、水道の水で洗ってみるが、やはり傷口は塞がっていた。

「あああ、本当ですねえ。傷口を舐めると早くなおると言われていますけどお、本当になおるものなんですねえ」

「そうかもしれないが、いくらなんでも早すぎだろう」

そう言いながら、ちよつと考えてみる。うちのモノたちは、大概の場合人の姿になった際に本来無いはずの能力も得ている。もしかしたらこれもそのひとつなのかもな。スポンジと傷とのつながりがいまいちよくわからないが。

「ま、いいか。ケガのほう、ありがとうな」

考えても判らないものは判らないので、さつさと頭を切り替えて傷を塞いでくれたことに礼を言う。

「いいええ、この程度でしたらあ、いくらでもしますよお」

クリンは、いつものほわわんとした笑顔で返してくれた。が、すぐにその顔が引きつる。

俺が包丁を再び手にしたからだ。

よっぽど怖いんだな。そんなことを思いながら、俺は梨の皮むきを再開した。

06・季節外れの転校生 その19（後書き）

どうも、作者です。

クリンの新たな特殊能力が発揮されたようです。

舐めてケガがなるといっなのはなんかエロいような感じがしますなw

さて、今回はバレンシアが登場しますが、そこで彼女がちょっと暴走します。

次回を乞うご期待！

06 季節外れの転校生 その20

「No, no, no, そこは違うデース!」

「もう少し肩の力を抜いて、ほら、そうです」

「いて、いでででででで」

常盤さんの部屋の前に行くと、常盤さんとバレンシア、そして鏡介の声が聞こえた。

声から想像するに、鏡介のやつ結構しごかれているみたいだが、痛いつてのは何事なんだろう。

「常盤さん、鏡介、バレンシア、入るぞー」

一応他人の部屋なので、ノックをしてから中に声をかける。

「Oh, Master. おかえりなサードース!」

がちや、とドアを開けて出てきたのはバレンシアだった。

ちようど一休みしようと思っていたようで、俺が持ってきた梨を見ると快く中に入れてくれた。

中では、常盤さんが座るはずの席で鏡介がつつぶしていて、常盤さんはその横で家庭教師か何かのように立っている。

「お帰りなさい、お疲れ様」

常盤さんは、こっちを向いて笑顔を返してくれる。一方、鏡介のほうはよほど疲れたのだろう、片手を小さくひらひらさせただけだ。

「Master, todayは、return to home) 帰ってくる)が a little late (ちよつと遅い)デスねー」

「ん、今日は部活だったん……」

そこまで言って、俺は鏡介の右腕に何やら見慣れないものが取り付けられているのに、気がついてしまった。

「なんだこれ!?!」

思わず叫んでしまう。なにしろ、鏡介の右腕には、大小色とりどりのコードと、コンデンサやらトランジスタやらがついた基盤が組み

合わさった、昔のロボットを想像してしまう奇怪な装置がついていたからだ。

すると、バレンシアは一瞬メガネをきらんと輝かせ、そして高らかに宣言した。

「Yes!これこそミーのinvent(発明)したspecial machine、名づけて“シビレルフウリンカザン”デース!」

思わず、ひっくり返りそうになった。なんだその、シデンが聞いたらきりもみ宙返りしそうなネーミングは。さすがにこれは常盤さんも苦笑するしかないようだ。

「で、なんなんだこれは」

ひっくり返るのをなんとかこらえ、改めて質問をする。なんかこの後になが〜い説明が待っているような気がするが。

「O.K!それでハ、explain(説明)するのデース!」

案の定、バレンシアは再びメガネをきらんとさせた。

「これハ、Mr.キョースケに、right handでcharacter(字)をneatly(綺麗)にwriteさせる、specialなitemなのデース!」

「そうか、説明ありがとうな」

最初の発言で機能が判ってしまったので、ちょっとかわいそうだがそこで打ち切る。だって、多分その後が長いもん。

「Hey, Master! My explanation(説明)は、まだnot finishデース!」

予想通り、バレンシアはもつと喋りたいのか抗議を始める。

「じゃあ3分で説明してくれ。長いと眠くなる」

そう言えば諦めるかな、と思ったんだが、甘かった。

「O.K. Master. でハ、3 minuteで、explainしマース!」

そう言うなり、バレンシアは後ろからディスプレイを取り出し、そしてメガネをくいと上げてから両手でしっかりと構えたのだ。と

同時に、ディスプレイのスイッチがオンになり、画面が浮かび上がる。マジで3分で説明するつもりか、オイ。

「Look here. Are you ready?」

そして、バレンシアはそのメガネをきらりんと輝かすと、解説する時には普通は言わないようなことを言いやる。

ちよつと待て、と思う間もなく、バレンシアの説明が始まってしまった。

06・季節外れの転校生 その20（後書き）

どうも、作者です。

サブタイトルに関係ない話が続いておりますがご容赦願います。

陽気なスーパーコンピューター（と作者が呼んでいる）バレンシアは、マッドサイエンティストもどきでもあったみたいですよ
ちなみになんでモドキかというと、一応は無差別じゃないからです。

さて、バレンシア作「シビレルフウリンカザン」とは一体どんな machine なのでしょう？

次回を乞うご期待！

06・季節外れの転校生 その21

「
というわけです。Do you understand?
」

それからおよそ3分後、バレンシアの説明は終わった。が。

「No! 判るか!」

思わずそう叫んでしまった。

なにしろ、画面はよく判らない図形や記号が把握できないようなスピードで切り替わっていき、それに合わせたらしいバレンシアの言葉も早口すぎて聞き取ることすらできない。何かのプレゼンを超高速で早回しして見せられたような感じた。

「Hmm、それデハ、beginning(最初)からexplain(説明)を……」

「ストップ!」

思わず手を伸ばしてバレンシアの口をふさいでしまう。こいつ、こんな性格だったのか。

「ほら、な、のどが渴いただろ、梨でも食って一休みしろ、な」

手にしたディスプレイを振りまわしながら口をもごもごさせていたバレンシアだったが、まもなくおとなしくなった。

「……もう、Masterには、no arguing) かなわない) デース」

手を離すと、バレンシアはそう言うてから、楊枝が刺さった梨に手を伸ばした。

ふと横を見ると、常盤さんがにこにこしながら立っている。

「常盤さん、見てないで止めてくださいよ」

「ふふつ。ごめんなさい、微笑ましい光景だったものですから」

なんか、親戚のお姉さんみたいなのを言っている。あのー、一歩間違えたら、セクハラになるんですが、これ。常盤さん、内々でやることについては本当に甘いと言うかルーズだよな。

「ほれ、鏡介も」

梨をひとつとつて鏡介に差し出す。

ぐったりした鏡介が、机に突っ伏したまま手で伸ばした、そのとき。

「うっぎゃー！ーっ！」

いきなり悲鳴をあげ、鏡介がひっくり返った。

「うわ、ど、どうした！」

「ぐううううう」

驚く俺の目の前で、鏡介が右腕を押さえている。ちょうどそこにはあのバレンシアが作ったわけの判らない装置の一部がくっついている。

なんでも、仕組みはよく判らないが、正しくない動きをすると電気ショックが流れるんだそう。なんつーものを作るんだバレンシアは。

「Oh, sorry sorry. Power offするのをforgetしていたデース」

そう言いながら、バレンシアが基盤のコネクタを引き抜く。が、一つかと思ったら、4つあった基板上のコネクタを全部抜いたのだ。

「なあ、電源のスイッチとはないのか？」

「Ah, quickle(急ごしらえ)なdevice だったのデー、omit(省略)したデース」

まったく悪びれる様子も無く、バレンシアがそんなことを言い放つ。

「そんないきあたりばつたりの機械を、俺はつけられていたんスカ」それを聞いた鏡介が、改めてげんなりしてしまった。

「Don't mind, don't mind. Next timeからハ、ちゃんとswitchをつけマース」

鏡介の心のうちを知らないバレンシアは、あっけらかんとそう宣言する。

「なあ、鏡介、えらい奴に目えつけられちまったなあ」

「まったくツスよ」

そして、俺と鏡介は向き合ってたため息をついた。

06・季節外れの転校生 その21（後書き）

どうも、作者です。

こういうシチュエーションだと主人公のほづが痛い目に遭うことが多いのですが、今回は鏡介が痛い目に遭っています。

私も鏡介はクライじゃないんですが、なぜかこういう役回りになっちゃうんですよ。

とりあえず開放されたところで、次回に続きます。

乞うご期待！

06 季節外れの転校生 その22

「あ、そうだ。常盤さん」

ふと、あることを思い出した俺は、梨をくわえている常盤さんのほうを向いた。

「はい？何ですか？」

「常盤さん、清華家とか撰家とかって、知っています？」

その瞬間、梨をもう一口かじろうとした常盤さんの動きが止まった。

「ええ、知っていますよ。でも、それが何か？」

だが、すぐになんでもないように梨を一口かじる。昨日の夜に、泣きながら外を見ていた人とは思えないほどの落ち着きっぷりは、さすがと言わざるを得ない。

が、一瞬止まったということとは、何かあるのではないか？そう思うのは当然だ。

「なんなんですか、それ？」

俺は、隣のクラスに転校してきた近衛お嬢様の話をした。

あのお嬢様は、清華家のくせに撰家にはむかうのか、と言っていた。そんなもんに従うつもりは毛先ほどもないが、気にはなる。

「清華家や撰家というのは、鎌倉時代に制定された、公家の格式のことです。格が高いほうから、撰家、清華家、大臣家、羽林家、名家、半家となっていて、たとえば西園寺家は、上から2番目の清華家に属しています」

いつのまにか、電話線を啜えたバレンシアがディスプレイを持っていた。そのディスプレイには、ネットで拾ってきたらしい、その華族についての説明が載ったホームページが映し出されている。

「そして、近衛という家名は、最上格の撰家に確かに存在します。

それも、5つある撰家の中でも、九条家と並んで古くから在る家名だと言われていますね」

常盤さんは、そう言いながらバレンシアのディスプレイの一部を指

差す。そこには確かに、「近衛家」の文字が書かれている。

「ですが、今では、旧華族というだけでは何の力にもなりません。今の近衛家は、公達きんたちとしてよりは、資産家や事業家、投資家としてのほうが有名ですね」

「資産家？」

「はい。今の頭首、近衛幸太郎氏は、高度経済成長期にアメリカに渡って、一代で巨万の富を築きあげた人物です。そして鉄鋼王の娘を妻として迎え、今では、アメリカ全体の株の7%から8%を握っているとさえ言われています」

アメリカの株がどんなもんかは知らないが、途方もない額であろうことは想像がつく。そんなのが後ろ盾にあつたら、高飛車にもなるうというものだ。

だが、そんなすごい家なら、わざわざこっちにちよっかいを出す必要がないのではなからうか。

「それだけ金持ちなら、なんでわざわざ将仁さんを名指しで下僕にするとか言ってきたんスかね」

同じことを考えたのだろう、鏡介が梨を口に運びながらつぶやく。

だが、その瞬間、常盤さんの手が止まった。

「世の中には、どんなにお金を積んでも手に入らないものもあるのですよ。特に将仁さんは、あなたにあつて近衛さんにはない、そしてお金では絶対に手に入らないものを持っているでしょう？」

「金で手に入らないもの？」

そう言われて、思わず俺は鏡介と見詰め合ってしまった。

そして、ひとつの結論がひらめいた。

「擬人化の力!？」

「その通りです。それは、今では西園寺家でもただ一人にのみ引き継がれる無形の力。お金では買えないものでしょう？」

うーん、言われてみれば確かにすさまじいものだよな。役に立つかはまいち自信が無いが、毎日が楽しくなることは間違いない。

「近衛家と西園寺家は、過去の歴史を遡ってみても、決してよい関

係を保っていたとはいえませんが、特に戦後は完全に断絶していません。ですが、物部神道とその力のことは、正確にはないにしても旧華族全体に知られていますから、近衛家の人間も知っていますもおかしくありません。だから、これは少し強引な推理ですが、クロードイアさんはそれを自分の意のままに使いたいと思い、そしてその力を使うのが同じ高校生であると知って、アプローチをかけてきたのではないのでしょうか」

なるほど。と思わず納得してしまった。

06・季節外れの転校生 その22（後書き）

どうも、作者です。

今回はちよつと真面目（？）な話です。

清華家や摂家のくだりは、Wikipediaより引用させていただきました。

ちなみに、今回に限らず、旧華族に関わるところについては、資料の内容をそのまま引用させてもらっているところがあります。

それでは次回を乞うご期待！

それにしても、あのお嬢様はそーやって奪い取ることしか頭にないのだろうか。それに屈するのは非常に腹立たしいし面白くない。友達だからどうこう言うならまだ納得できるのに。

「Mafteer?」

不意に、電話線を咬えたままのバレンシアが声をかけてきた。

「Now, imprudent (不謹慎)らコロ、thinkしまヒェンれヒタか?」

「は?」

なんだ、不謹慎って。マサカ。

「お前、俺があのお嬢様を彼女にしたいとか考えたとかいうんじゃないだろうな?」

「Exghachory. (Exactry そのとおり) D
ifferenhoreフカ?」

「んなワケあるか、あんな性格悪い女、彼女にしてもしんどいだけだ」

「Really?」

「疑り深いな、彼女は欲しいけど、会うなりいきなり“下僕になれ”なんて言う女は、いくら金持ちでもどんな美人でも願い下げだね」

「I unrerhyutanno.」
そこまで言っつて、やっとバレンシアは納得したらしくほつとした表情になった。

「けど、そのお嬢様って、物部神道のこと、どのくらい知っているんスかね」

奇妙な装置から(まだくつつけた状態ではあるが)やっと開放された鏡介が梨をかじりながらそんなことを口にする。

言われてみると、俺はお嬢様自身から「西園寺家に伝わる力」について聞いたわけではない。お嬢様のボディガード迅から聞いた「

力」という単語だけだ。

いっそのこと目の前で発動させてやるうかと思ったが、9人も擬人化させておいてこう言うのもアレだがいまだに正確な発動方法はわからない（何をしたら発動しそうかは判ってきたが、それも確実ではない）し、もしできたとしても出てきた子がなんとなくひどい目に合わせられそうで気が引ける。極端な話、どっかの変な研究所に連れて行かれて検査とか実験とかされてしまうような……
発想が貧困だな、俺。

まあとにかく、あのお嬢様にはうちの連中のことをなるべく見せないようにしておこう、と思った。

06・季節外れの転校生 その23（後書き）

どうも、作者です。

今回は短いです。

本当だったら昨日の分に一緒にしてもよい分量なんですけど、今度は他に比べて長くなりそうだったので切ってしまいました。

次回、ちよつと賀茂さんに関係する話が出てきます。

乞うご期待！

06 季節外れの転校生 その24

「へえ、もぐもぐ、転校生かい」

「うん、それがね、すっごくいやーな感じなの！」

飯時になってようやく起きてきたケイが、今日学校であったことをぶちまけた。

「ケイさん、口の中にもものを入れて喋るのは、お行儀が悪いでしょう」

「でもでもあーっ、さっきまでケイが寝ちゃったのも、その人のせいなんだよお！」

「賀茂さんのことか？挨拶しただけだろう」

「ちがうーっ、絶対違うのーっ！その人、きつとケイになにかしたんだよお！」

よっぼど気に入らないのか、ケイは賀茂さんを一方的に悪人にしようと思っただけで。

「食わないならもうよ」

その横から、ヒビキがケイの皿に箸をのばし、おかずをつまもうとする。

「あーっ！だめえーっ！それケイのぶん！」

さすがに取られるのは嫌らしい。そっちに注意が向く。

「でも、その賀茂って人、ケイちゃんにはずいぶんと嫌われたみたいね」

その様子を見たレイカが、動じることなく味噌汁をすすする。

「んー、俺は、違う転校生のほうが、気に食わなかったけどなあ」

「そう。引っ越しのシーズンでもないのに、珍しいことね」

俺の発言にレイカが静かにコメントする。まあ半分は隣のクラスなだけでな。

「近衛クローディアって言って、超金持ちのハーフなんだけど、こいつがまた高飛車でなあ。会うなり俺に「しもべになれ」だよ」

「アイヤー、それはまたひどいコト言うアルな」

「上官よ、まさか了承したのではあるまいな」

「するかっ!」

なんか、思い出すとよけいに腹が立つ。だいたい、クラスメイトが何人もいる前で、本来関係ないはずのやつから高笑いしながらあんなことを言われていきなり屈したら男じゃないだろう。

「ケイちゃん、ちょっといいですか?」

その中で静かに箸を進めていた常盤さんが、その箸を止めてケイに話しかけた。

「今お話しになっていた、賀茂さんって、どういう人ですか?主観を抜いて教えてくれませんか?」

「え?」

物静かに言われたせいも、あれだけ騒いでいたケイまでが一瞬静かになった。

「え、ええつと、なんか、へんな喋り方してた。うちとなんとかか、なんとかかどうとか」

「京都のほうから来たそうです」

「あ、そうだ、写メ撮ってたんだっけ。えつと、こんな人」

俺の助け舟で思い出したのか、ケイがそう言っただけに首に下げたペンダントヘッドに何かを写す。いつの間に撮ったんだろうか。

そして、視線がそこに集まるが、画面が小さいため、特に遠い席に座っているレイカやテルミにはほとんど見えないうら。

だが、常盤さんはケイの向かいに座っていたので、少し身を乗り出すだけで見えたようだ。

常盤さんは、少し考えるような仕草をする。

「賀茂……京都……」

「何か知っているんですか?」

「えつ、あ、心当たりが、少しだけ」

もしかしたらという程度なのですが、と前置きしてから、常盤さんは話をはじめた。

06・季節外れの転校生 その24（後書き）

どうも、作者です。

久しぶりに全員集合です。

今日、はじめて顔を出した子もいますが、もちろんいなかったわけではありません。

さて、常盤さんは賀茂さんについて何を知っているのでしょうか？

それは次回明らかになります。

それでは、次回を乞うご期待！

06 季節外れの転校生 その25

「関西に、賀茂の姓を持つ氏族がいるのを、思い出したんです」

「氏族？また昔の貴族とかですか？」

「なんか、俺のまわりに、旧家の連中が集まっているなあ。類は友を呼ぶってやつだろうか。」

「いいえ、華族ではないのですが、もしかしたらもっと面倒かもしれないのです」

「面倒、ですかあ？何をされているのですかあ？」

「クリンの言葉に対し、常盤さんは一呼吸置いてから、こう言い切った。」

「陰陽師、です」

「おんみょうじい？」

「みんなが同じように頓狂な声をあげる。今度はまたよくわからないものが出てきたもんだ。」

「陰陽師って、あの映画とかで出てくる、安倍清明みたいなのですか？」

「俺にしても、そんなイメージしかない。あんな魔法使いみたいなのが、この科学万能時代にいるんだろうか。」

「その安倍清明に陰陽道を教えたのが、賀茂一族の賀茂忠行だと伝えられています。そして、賀茂一族は、今もその陰陽道を伝えていると言われているのです」

「だが、常盤さんの口調はあくまでも真面目だ。そういえば、俺、最初はこの常盤さんを魔法使いだと疑ったこともあるんだよな。」

「オンミョージは、Japanのsorcererライクなpeopleデスよね？Very unscientific（非科学的）なものがappear（出現）したデース」

「でも、バレンシアさん、そんなことを言ったら、私たちはもっと非科学的でしょう？」

「…… Ah、それでシタ」

「まあ、バレンシアが言いたくなるのも判らなくはねえけどな」

「世の中には、科学では説明し切れぬことなど我らのほかにいろいろでもある」

「極端な話、こいつらがいる最大の理由、擬人化の力だって科学では到底証明できないしろものだ。質量保存の法則をはじめ現代物理学を色々と無視している。」

「しかし、もし賀茂さんが陰陽師だったとして、何がやっかいなのだろうか。映画みたいなことができるとなると、術で天変地異を起したり化け物と闘ったりつてことになるが、実際にそんなのをやっていたら今頃はテレビや新聞とかが大騒ぎしているはずだ。」

「それに、俺から見たら、近衛お嬢様のほうがやっかいつーか面倒な存在だ。美人からアプローチされるのは、ある意味男の夢である。だが、あの高飛車なふるまいは勘弁してほしいし、あのお嬢様には迅といつてもないボディガードがついている。」

「アレに比べれば、陰陽師だろうが魔法使いだろうが賀茂さんは別に怖くもなんとも無いからマシだと思う。それにもし賀茂さんが本当にそーゆー類の人だったとしても、敵に回す理由がない。」

「じゃあじゃあ、ケイが眠らされたのも、そのおんみよーじの術なのかなあ？」

「根拠もなく決め付けるのは、短絡的ね。本人が何か術を行使した現場を取り押さえるとか、関連品の所持を確認するとか、そういう決定的な証拠がないと」

「羅盤持っているとかがアルか？」

「それは中国の道士や風水士でしょう。陰陽師といえば五芒星や御札が定番でしょう。それで、こんなふうにして、急急如実令、つて「へえー、テルミ、詳しいねえ」

「ふふつ、伊達にテレビをやってはいないでしょう」

「しかし、いまだき五芒星のついたものなど珍しくもなからう。天神様などでは堂々と掲げておるし、近頃は映画や書物、てれびなど

でもよく見られる」

「あー、そういや、文具店とか100円ショップとかにもそんな星がついた消しゴムとか鉛筆とかがあったっすね」

「Pentagram(五芒星)は、Hexagram(六芒星)にcomparison(匹敵)する、worldwide(世界中)でmystic(神秘的)なmarkデスから、suchなmeaningでもvery very popularデス」
だが、モノたちの関心は完全に賀茂さんと陰陽師にあるようだ。別に賀茂さんが陰陽師だろうが何だろうが俺にとっちゃどうでもいい、と思って飯を食っていたのだが。

「陰陽師は、陰陽道という技術体系を基に、暦を見たり託宣を行ったり、場合によっては悪鬼や妖怪を退治したりする、と言われていますが」

「妖怪退治い？このご時世にかい？」

なんかまた変な方向に話が向かっている。まあ、常磐さんを除いたこいつらは、物の化けたものだからそういう意味じゃ人間より妖怪に近いのかも知れないから、警戒したくもなるんだろうが。

「しかし我らがここに存在することは、まごうことなき事実である」

「アイヤー、紫電サン、自分のこと妖怪と認めるアルか？」

「あう、でもお、私い、妖怪だって言われたら、否定できないです」

「そう言われてしまうと、確かに私たちは普通の人間ではないですよ。でも」

「人間社会にはちゃんと順応しているわ。人並みの感覚がどの程度なのかも理解しているつもり」

うーん、人を氷付けにしたり街中を車並みのスピードで走り回ったりビルの谷間を飛んだりしている連中が、順応していると言えるのだろうか。

「まあ、もし戦うことになったとしても、こっちは11人もいる。」

むこうは一人、なんとかなるっスよ」

これは鏡介の弁だ。自分の身を守ろうとするのは、本能に根ざす感情だからなあ。しかし1対1はやりすぎだろう。あの賀茂さんに……ちよつと待て。

「おい、11人つて、俺や常盤さんも入っているのか？」

「将仁さん、今更無関係を気取るうつつたつてそうはイカのなんちゃらっスよ」

鏡介。お前は昭和初期のおっさんか。

「ケイは、確かに多分人間じゃないと思うよ。でも、呼んだのはお兄ちゃんでしょ？」

ぬう、ケイ、そーゆー目で見上げるな。それは反則だぞ。

「時がくれば潔く散る覚悟はある。しかし孤立無援での犬死は不本意だ」

散るなんてシデンの奴、大げさだな。特攻隊じゃあるまいし。

「もう、私たちは将仁さんの所有物でしょう。所有物が主を困らせては」

テルミ、お前いつもこうやって自分を殺しているから、酔うとあんなになるんじゃないか？

「あんな、俺は、人数に入れるのはいいがお前らのケンカには巻き込むなつて言つてんの。そんなことになったら、俺、確実に死ぬから」

「あつ、その言い方はひどいアル！ワタシは将仁サンにケガなんかさせないアル」

「でも火傷はさせるんじゃないの？中華は相当な火力を使うから」
表情ひとつ変えずに箸を進めるレイカが、さらりと言。

「むっ！ワタシはそんな抜けてないアル！」

「二人とも、メシの途中でガタガタ騒ぐんじゃないやねえよ。将仁が困っているだろうが」

ヒビキの言葉に、紅娘ははっとなつて俺のほうを見てからしゃがみこんでしまった。

06・季節外れの転校生 その25（後書き）

どうも、作者です。

今度は賀茂さんについて、妙な憶測話が飛び出しました。

ちなみに、常盤さんの台詞の中に出てきた安倍清明と賀茂忠行の話は、一応事実だと伝えられている話から持ってきました。

さて、この賀茂さん陰陽師の話ですが、もうちょっと続きます。
では、次回を乞うご期待！

06・季節外れの転校生 その26

ヒビキの奴また適当なことを言いやがって、俺は別に困ってはいないぞ。

「ですが、1対1ではない可能性も、十分にありえます」

常盤さんが、少し話を戻す。

「陰陽師は、式神しきがみと呼ばれる一種の怪物を、召還して使役すると言われていきますからね」

言われてみれば、映画とか漫画とかの世界だと、式を放つとか言って、人の形に切った和紙とかお札とかが、鬼とか鳥とか人とかに化ける……って、人になったら俺の物部神道の力と同じか。

「役行者えんのかみが使った前鬼・後鬼とか、安倍清明あへのせいめいが使役した十二月将とか」

常盤さん、ずいぶんと詳しいのね。弁護士には全然関係なさそうなんだけど。

しかし、名前からして、なんか凄そうだ。そんなものと激突するような事態にはなりたくないし、こいつらがぶつかるような事態もごめんこうむりたい。

「But, まだthat's Miss KamogがJapan ese sorcererだというevidence(証拠)はnothingデース」

「いつそのこと、その賀茂とかいう奴、うちに連れてきたほうが早いんじゃないかい?」

「ぶっ!」

突拍子も無い方向にいきなり話が飛んで、思わず噴出しそうになる。「待てえー!勝手に話を進めるなー!」

なんとか口の中のを飲み込んでから叫ぶ。

なんてつたって無理だそんなの。自分で言ってしまうのもあまりに悲しいが、正直、俺は女の扱いは不得意だ。話しかけることはでき

ても、話のネタは今日でたぶん使い果たしたから長続きしない自信がある。明日は多分、ちゃんと教科書を持ってくるだろうし。……考えれば考えるほど自分がヘタレに思えてくる。

「だ、だいたいだな、今日会ったばかりで、次の日にいきなりうちに来いなんて言って、来る奴がいるか？」

「そうそう！来ない来ない来ないもん！」

俺が発言するとすかさずケイがあいの手を入れる。ケイの奴、そうとう賀茂さんが嫌いらしいな。

「おいおい、なにマジになってんだよ。ちょっとした冗談じゃねえか」

「落ち着きなさい、だれも将仁くんがそんなことをするなんて思っていないわ」

すると、他の連中はそろってそんなことを言いやがった。こいつらまで、俺を朴念仁とと思っているのか。モノにまでそう思われているのか。落ち込むぞ畜生。

「まあまあ将仁サン、そう落ち込むことナイアル。ハイ、たたきひとつどうぞアル」

「あ、ど、どうも」

「ぬううっ！上官！これを食べうのだ！」

「うわ、もがっ！」

何を考えたのか、シデンが俺の口にかつおのたたきを突っ込んできた。

「あっ、シデンちゃん抜け駆け！はい、お兄ちゃん、あーんしてっ！」

今度はケイがかつおのたたきを俺の前に差し出す。

お前ら、飯ぐらい普通に食わせろ、こら。せめて違うものを出せ。思わず目で鏡介のほうを見てしまうが、鏡介はさっさと自分の分を平らげて食器を流しに持っていくところだった。あのやる、逃げやがったな。

「ほら、ケイさん、シデンさん、紅娘さん。お行後が悪いでしょう」

そんな俺の状況を助けてくれたのはテルミだった。本当に助かる。
「将仁さんも、早く食べてしまったださいな。今日は火曜日、もうすぐ鑑定士の時間でしょう」
今度は俺にも釘をさしてくる。最近には本当にすっかりしてきたよな、最初はすつとほけたこと言っていたのに。
まあ、見たいテレビがあるのは確かなので、素直に飯を平らげることにした。

06・季節外れの転校生 その26（後書き）

どうも、作者です。

賀茂さん陰陽師疑惑その2です。

考えてみれば、一応現代が舞台なのにネタは平安時代とか飛鳥時代とかからの伝統と、昔話に出てきそうなほどに古いんですね。

でも多分、これ以上古いものは出てこないと思いますので、お付き合います。

さて、次回は食後のまったりした時間ですが、そこでも話にひと展開あります。

乞うご期待！

06 季節外れの転校生 その27

「あら、鑑定士ですか？」

テルミが広げたテレビを見てみると、声をかけてきた人がいた。

俺が見ているのは「発見なるほど鑑定士」という、家にある骨董品やグッズなんかを出展してプロの鑑定士たちに鑑定をしてもらうという、今や全国レベルで有名なバラエティ番組だ。

「あ、常盤様」

テレビ画面の上から顔を出しているテルミが、そっちを向いて軽く会釈する。

顔を向けると、確かにそこには常盤さんがいた。夕飯の後の、こののんびりした時でも、常盤さんは髪を解かず、服装もスーツのままだ。窮屈じゃないだろうか。

「意外です、将仁さんがこれを見ているなんて」

「いいえ、常盤様。将仁さんは、毎週ご覧になっているのでしょ

う」
「あら、そうだったのですか。私も、時間があるときは見ているのですよ」

なんかとても納得できてしまう気がする。常盤さんって、弁護士なんていう仕事をしている割に、計算に電卓ではなくそろばんを使ったり、黒電話を使っていたりする、見かけによらず古い人だもんな。ちなみにあの黒電話、業者に頼んでほんとうにつないでもらったらしい。つまり、うちの置き電話はあの黒電話ということになる。まあ、あの電話をメインで使うのは常盤さんだけだろうから、問題ないだろう。バレンシアが啞えるプラグイン型の電話線は別にある（しかも、家中に何箇所もある）し。

ふつと顔をテレビに向けると、2羽の鶴の絵が描かれた掛け軸が映っていた。持ち主らしいじいさんがその横に司会者と一緒に立ってうんちくを述べている。曰く、これは丸山応挙まわらやまおうきよの絵で、非常に価値があるらしい。続いて、その作者である丸山応挙についてのプロ

ファイルのVTRが流れ、そこで「贋作が多い」という、いろんな意味で盛り上がるナレーションが入っていた。

「応拳ねえ。常盤さんはどう思います？」

「そうですね、ナレーションの方が言ったとおり、偽物の可能性が高いと思います。あれはたぶん、応拳の落款を入れただけの別人の絵、といったところではないでしょうか」

何気なく聞くと、常盤さんはさらりとそう答えた。俺には全然わからんのだが。

「常盤様、お詳しいんですね」

テルミが感心した声をあげる。

「ふふ、別に大したことではないですよ。多くのものを目にする機会に、恵まれていただけです」

常盤さんはそう言って謙遜するが、そういうチャンスがあること自体大したことだと思う。

そして、さらに大したことに、番組に今出ていた丸山応拳の絵に「他人の絵に応拳の落款を入れた偽物」だという鑑定結果が出たのだ。常盤さんの読んだ通りの結果だ。

「わ、常盤さん、言ったとおりじゃないですか！」

「そんな、大げさですね。ちょっと知っていただけです」

常盤さんはちよつと照れくさそうに答えるが、偶然だったとしても当てたのは事実だし凄い事だ。やっぱり、弁護士ってそっちのほうの知識もあつたほうがいいのかな。

「それだけじゃないだろ？」

不意に、ヒビキが後ろから現われて口をはさむ。

「あなた、西園寺の遺産を管理してんだろ。その関連で、アレに似たのを見たことがあるんじゃないの？」

そういえば、そうだった。引越して以来口にしないから忘れていたが、常盤さんは、西園寺家の遺産（推定総額5千億円）を引き継がせるために、俺たちと同居しているんだった。

でも、それとこれとは別だろう、と思っただが。

「鋭いですね、ヒビキさん」

常盤さんは、メガネをきらっと光らせて、そんなことを言いやがった。ちよつと驚いたが、考えてみたら、西園寺家は古い家系で金持ちなんだから骨董品の一つや二つや三つや四つあってもおかしくないわな。で、常盤さんはそれを管理しているんだから、確かにそういう古いもんを見ている可能性はある。

とはいえ、同じものを見ることはそうあることじゃないだろうと思っただが。

「西園寺家の遺品には、応挙の真作もありましてね。大寫しになったときのタツチを見たのですが、応挙の絵はもつと写実的で、躍動感があつて、繊細なんです」

鑑定士の口調を真似たらしい常盤さんの発言に、マジか、と思つてしまった。情報源はこの番組しかないんだが、それでも前からあれだけ贋作が多いと言われているのに。………なんか、いつペん見てみたいと思つちやつたぞ。

「ふうん、それって価値があるのかい？」

「そうですね、最近是有名になってきたので、1000万ぐらいでしようか」

「まあ、本物はさすがに高価でしょう」

「いや、戦火をいくつも潜り抜けたものなのだからそのぐらいあつてもよからう」

いつものまにシデンがやってきて口を出す。

「お前、価値判るのか？」

「ん？何を言っている。そんなの判るわけがあるまい」
ちよつと意地悪心を出してシデンに聞いてみると、あっさりと返される。

「みなさん、次のコーナーが始まるでしょう」

そのテルミの発言で、俺たちは再び画面に向かった。

06・季節外れの転校生 その27（後書き）

どうも、作者です。

久しぶりにテレビになったテルミと、まったりとテレビ観賞です。
ちなみに、番組の元ネタは、今や言わなくても判るであろうアレで
すw

さて、主人公氏も高校生である以上勉強はしなくてはなりません。
そう素直に行くわけがありません。

さてどんなことが起きるのでしょうか？

乞うご期待！

「ふう。さてと」

鑑定士が終ったので、俺は席を立った。

「あら、将仁さん、もうお休みですか？」

「いや、宿題があるんで、やる前にひとつ風呂浴びようかと思ってと、ここまで言っただと思っ出す。」

「そういえば、風呂はできてるのかね？」

「ちやあんと沸いてますよお」

そう言いながらリビングに顔を出したのは、クリンだった。

クリンはうちのモノたちの中で水周りを得意とする唯一のメンバーなので、特に風呂まわりなど遠慮なく濡れるところはクリンの受け持ちになっているのだ。

「ささ、どうぞこちらへ」

気がついたら、クリンはいつのまにか俺の後ろに回って、背中をぐいぐいと押している。

「お、こ、こら押すな」

「さささ、遠慮なさらずにい、うふふっ」

「こらちよつと待てちよつと待てって」

「待ってたらあゝ、おっふるがさあめちやあいまっすよおゝ」

なんか妙に楽しそうだ。何かいいことでもあったのかな、ちよつとこつちも嬉しくなる。

とそのとき。

「まあだ懲りてねえのかおめえは」

「抜け駆けは許さんと言っただははずだ」

そのクリンの両脇に、俺とテレビを見ていたうちの武闘派コンビのヒビキとシデンが現れた。しかも、半ば呆れ顔だったヒビキに対し、シデンは明らかに怒っている。

その発言で、やっと俺は昨日の夜あったことを思い出した。

二人は、息のあつた動きでクリンの腕をがっちりホールドすると、そのクリンを部屋の奥へと引きずっていった。

「ふええええええ後生ですううう離してくださいさあああいいいいわたしのアイデンティティがあああ」

クリンは情けない悲鳴をあげながらそのままずると引きずられ、そしてリビングに隣接する和室へ消えていった。

「まったく、クリンさんにも困ったものでしょう」

その様子を見ていたらしい、人にもどつたテルミが、やれやれといった様子でそれを見ていた。

「ねえねえお兄ちゃん、さっきクリンちゃんがヒビキお姉ちゃんとシデンちゃんに引きずられていったけど、何かあつたの？」

そこに、レイカの手伝いが終わつたらしいケイがひよこつと顔を出す。

テルミから、今あつたことの説明を聞くと、案の定むつとした顔になる。

「もー、クリンちゃんったら勝手なことしてえ。ホントは、ケイだつて、お兄ちゃんの背中とか、流してあげたいのに………ぶつぶつ………」

なんかえらい発言があつたような気がするが、聞かなかつたことにしよう。

とりあえず、着替えを取りに一旦部屋に戻ることにした。

06・季節外れの転校生 その28（後書き）

どうも、作者です。

私だったら、こんなシチュエーションがあったら、二人を押しつけてでもお願いしたいところです。

とはいえ、実際にそれをやってしまったら他のモノから嫌われるのは間違いなしですw

さて。

毎回ネタバレを仕込むのも問題があるので、そろそろこういうあとがきも止めようと思います。

というわけで、次回も騒ぎがあるとだけ言っておきましょうか。

それでは。次回を乞うご期待！

「アイヤー、将仁サン。ちょうど良かったアル」

着替えを手に降りてきたところで、今度は紅娘と鉢合わせした。だけなら別になんともないんだが、今はなぜかいつも背負っている鍋を両手でかかえている。

まだ何か食うのか？と思って鍋の中をのぞくと、そこに入っていたのは水だった。いや、熱気が僅かだが伝わってくる、これはお湯か？においとかはしないからスープってこともないだろう。

「将仁サン、お風呂入るだったら、ちよとそのドア開けてほしいアル」
「その前に、なんだそれは」

「何て、ただのお湯アル。ミナサンでお茶しようと思って、茶杯（湯飲み）とか小茶壺（急須）とか暖めるのに使たアルけど、汚れてナイし捨てるの勿体無いアルからお風呂にいれよと思たアル」

「油污れとかこげつきとかついてないだろうな」

半分冗談でそう言うと、紅娘はむっとなった。

「将仁サン、アナタ私のこと、そんな汚い女と思てたアルか？」

「え、あ、そういうわけじゃなくて」

「調理の道具は、常にちゃんと手入れして綺麗にする、コレ常識アル。ましてやコレはワタシの一部、それ貶すのはたとえ将仁サンでも許さないアルよ！」

どうやら逆鱗に触れてしまったらしい。紅娘は身を乗り出して怒り出してしまった。

「わ、わかったわかった、ごめん、いらない事言ったのは謝るよ」
その迫力につい視線をそらした時、ふと彼女が両手に持っている鍋の中が見えた。その鍋底にはさつきは無かった気泡がびっしりついていた。その気泡は、俺が見ている前でだんだんと数を増し、そして大きくなっていく。その様子は、鍋に水を張って火にかけ、加熱した様子に似ている。

まさかと思うが。

「・・・・・・・・紅娘」

「何アル」

「煮立ってないかこの鍋」

俺の指摘に、ふと我に返った紅娘が鍋の中に視線を移す。

「あ、アイヤー、やてしまたアル」

そして、一転してばつが悪そうな表情になった。

すでに鍋の中の湯は熱湯に変わり、もうもつと湯気を上げている。

こんなのを風呂に入れられたら、すこし前にバラエティ番組でやっていた熱湯風呂になってしまう。

だが、さつき見たときは鍋の中に泡なんかなかったし、ましてや湯気なんてほとんど出ていなかった。ということとは、紅娘が持っている間に、勝手にお湯が沸いたということになる。

「ま、将仁サンがあんな事言うアルから、つい熱くなてしまたのトよ」

何をやったのかと問い詰めたところ、最初に帰ってきたのはそんなセリフだった。

かつとなりやすい人のことを「瞬間湯沸かし器」なんて表現することがあるが、これはそれを地で言っているということか。

「しかし、なんでお前にそんな能力がある？鍋には熱出すものなんかないだろ」

「何を言うアル、中華の真髓は火と熱を御することにあるのトトね。強い火、弱い火、ワタシにかかれば自由自在アル」

「・・・・・・・・そうか」

火を制御するのは中華鍋じゃなくて料理人だろうとか、火はどこにあるとか、熱源なしで湯を沸かす説明になっていないとか、突っ込む余地がたくさんある話だが、とりあえずは黙っておくことにする。下手に逆鱗に触れると、今度こそ本当の熱湯になってしまっただろうし、そんなのを風呂に入れられたら、熱いどころの騒ぎではないからだ。

……最近、モノたちの人外度に驚かなくなってきたな、俺。

「とりあえず、そのお湯、風呂に入れちまおう。ずっと持っている
と重いだろ」

「ん、謝アル」

そして洗面所のドアをあけようとしたときだ。

06・季節外れの転校生 その29（後書き）

どうも、作者です。

紅娘に何か鍋に関する特殊能力を持たせようと考えた結果、こうなりました。

実は、鍋単体で紙が自然発火するぐらいにまで熱くなります。

さて次回、風呂から誰かが出てきます。

何があるのでしょうか？

乞うご期待！

「なにやってんスカ」

そのドアが勝手に開いて、なぜか風呂上りの俺が顔を出した。というのは冗談で、ちよつと考えれば鏡介だと判るんだが。

「うよえー!?!」

予想外だったからか、紅娘が奇声を上げて、思い切り驚いた仕草をして見せた。

うよえーってなんだよ、と突っ込もうかと思ったがそれどころではない。なにしろ、紅娘が手を振り上げた瞬間、あの鍋が宙に舞い上がったからだ。

鍋が飛ぶだけならまだいい。だが今、その鍋の中には煮え湯がなみなみと入っているのだ。被ったら火傷どころの話ではない。

鏡介は洗面所のドアを閉めてその熱湯から身を護る。

「どわあ!?!」

俺は、条件反射的に後ろに飛びのいた。はいいんだが後ろがすぐトイレだったためドアに後頭部をぶつけてしまった。

そして紅娘は。

「アイヤーっ!?!」

ひととき大きな金切り声とともに、鍋の中身をもろにかぶってしまった。しかもその直後に、鍋がひっくり返った状態でコントの金タライのように紅娘のアタマに命中し、紅娘はちよつとふらふら〜とした後、ぺたんと床にへたりこんだ。

「なんだなんだ、何がありやがった!?!」

「今の声は何!?!」

「な、なんだこの湯気は!?!」

「おにいちゃんっ、大丈夫っ!?!」

「What happen!?!」

紅娘の声に、2階にいたバレンシアを含むうちのモノたちが一斉に

廊下に飛び出してきた。

そして、廊下の惨状に一瞬皆が呆然となる。廊下は水浸しで湯気がもうもうと立ちこめ、その真ん中にぬれねずみになった紅娘がへたりこんでいるのだから、誰でも「何事か」と思うだろう。

紅娘の頭に、まるで三度傘のように乗っていた鍋がずり落ち、ごとんと鈍い音を立てて床に落ちる。その下から、目を回した紅娘の顔が出てくる。

「ほっ、紅娘！大丈夫かーっ！」

最初に我に返ったのは俺だった。思わず駆け出すと紅娘の肩をゆすり、頬を軽く叩く。

「……ふ、ほへ、あ、将仁サン？」

「よかった、気がついたか。熱くないか、どつか痛くないか？」

そして、視界の端に白い着物姿を見つけた俺はそっちに声をかけた。

「レイカなにやってんだ！早く何か冷やすものを！」

「え？」

レイカは元冷蔵庫なだけに冷やすことにかけてはプロ、のはずだ。

熱湯を浴びたんだから、火傷なんかする前に冷やすのが先決だ。

だがそのレイカがちょっと戸惑っている。

「いいから早く！」

「わ、判ったわ」

返事をしたレイカが身構え、そして気合と共に左手を突き出した。

だが、俺はマジで知らなかった。話半分では済まない、レイカの力のすさまじさを。

その瞬間、目の前が真っ白になり、何か恐ろしく冷たい空気の塊のようなものがぶつかってきた。それは、まさしく吹雪（本物はテレビでしか見たことがないが、そう呼ぶのがふさわしいと思った）だった。コレじゃ本当に雪女じゃないか。

「わあ！？」

屋外ならともかく、俺が今いるのは民家の廊下だ。その吹雪はまるで雪崩のように突き進み、紅娘がもたれかかっていた洗面所の扉に

ぶつかった。

俺はとっさに飛びのいたため直撃は逃れたが、意識が朦朧もろろとしていた紅娘は、その吹雪をもろに食らってしまった。

その衝撃で家が軽くゆらぐ。それが収まると、さっきまで湯気だったものがきらきらとした氷の結晶となつて宙を舞い、天井や床に撒き散らしたあのお湯が凍りつき、まるで廊下が冷蔵庫の中になつたような異様な光景になつていた。

そして。

「わ、ほ、紅娘ちゃん!？」

その端に、真っ白な霜に覆われて、崩れた雪だるまのような姿になつた紅娘がいた。

「レイカ、お前やりすぎだつて、ちつたあ手加減してやんなよ」

「それは、将仁くんが何か冷やすものを早くと言つたから」

「そうは言つても、凍らせるのは極端でしょう」

「時間短縮を重視しただけよ」

他のモノたちから非難されるのもかまわず、レイカは手を頭の後ろにやつて、ぱつと髪を広げた。

腰にかかるほどの癖の無い黒髪が、まるで翼を広げたように空中に大きく広がり、そしてレイカが大きく左右に首を振るのに合わせて空中を踊り、そして静かにおさまる。

何のまじないかと思うが、実はこれ、熱を逃がしているんだそう。冷気を出した後は熱がたまるそうで、その熱を髪から放出しているらしい。

つて、こっちはそれどころではない。さっきは火傷の心配をしたが今度は凍死になる可能性が大だ。

「お、おい、紅娘、生きてるか!？」

「紅娘ちゃん、これからお茶なんだから、しつかりして!」

俺とケイで、紅娘の体についた霜を払い落とす。すると紅娘の顔や体が出てくるが、さっき熱湯を被っていたせいでその湯までが凍結し、いわば紅娘の体の表面に氷がびっしり張り付いたような感じに

なっている。

06・季節外れの転校生 その30（後書き）

どうも、作者です。

レイカがいよいよ本当に雪女と化して参りました。

今頃の季節にいてくれたら、嬉しいかもしれませんねw

さて、熱湯を浴びた後で雪だるまになってしまった紅娘ですが、無事なのでしょうか？

それは、次回を乞うご期待！

やばいぞこれは。マジで凍死したか？

「おい、レイ……」

レイカのほうを見て、何かいつてやろうかと思ったときだ。

氷と霜で白く染まった廊下の床に、黒くて丸いものが落ちているのが見えた。紅娘の中華鍋だ。凍りつく前に引掛けたのか、左手が鍋の取っ手をしっかり掴んでいる。

それだけなら別になんということはないのだが、あの吹雪の中でも、鍋は凍り付いておらず黒鉄色の輝きを放っている。それだけではない。鍋のまわりの氷も解けていて、床の板目がはっきり見える。

さっきのように、鍋が熱を出して氷を溶かしているのだ。そして鍋に触れている左手にも、氷どころか霜すらついていない。

そのとき、紅娘の体のほうから、ぴしぴしっ、みしみしっという音がした。

「あー、びくりしたアル」

そして声がした。

振り向くと、さっきまで氷に包まれていた紅娘の顔があつた。そしてそのまま紅娘は、何事もなかったかのように立ち上がった。ぱらぱらぱら、とその体から氷のかけらが剥がれ落ちるが、そのかけらは床に落ちるまでに水になっている。

「ぶっつう」

そして、水浴びしたあとの犬のように首を激しく振るわせると、水の飛沫が飛んできた。

なんかあまりに平気そうなので逆に心配になってしまい、紅娘に声をかける。

「お、おい紅娘、お前、体のほう、大丈夫なのか？」

「ん？何アルか、将仁サン？」

「なにつて、熱湯かぶったり、かと思えば氷づけになったり」

すると、きよとんとしていた紅娘が、にたーつと表情を変化させた。「将仁サン、ワタシのこと、心配してくれてるアル？」

「心配って、そんなの当たり前だろ、普通だったらタダじゃすまないもん」

「アイヤー、謝謝ワタシとても大四喜アルー！」

突然、満面の笑みとともに紅娘が飛びついてきた。心配されたことが相当嬉しかったらしい。

「むうっ」

と、そこにケイが割り込んできて、俺と紅娘をぐいつと引き剥がす。「お兄ちゃん、鼻の下伸びてるっ」

そして、怒ったような目つきで下からにらみつけてくる。思わず俺は自分の鼻の下を押さえてしまった。

いたたまれなくなって視線をケイから紅娘に移すと、紅娘はあの中華鍋を両手で持ち直して、俺に向けていた。

「将仁サン、心配は無用アル。ワタシは火に直接かけられる鍋アル、熱いのは慣れっこアル」

そしてその鍋を曲芸のようにくるくる回すと、自分の背中に背負いなおした。

どうやら、本当になんともなさそうだ。俺はちよつとほつとした。が、そのとき。

どんどんどん。という何かを叩くような音が聞こえた。

「まーさひーとさーん、ドアが開かないんすけどー、なーにやってんすかー」

そして、ちよつと間延びした男の音がする。

そのときになって初めて、俺はこの廊下の惨状に気がついた。廊下の床や壁についた氷は気温で解けてきているが、それはすなわち廊下が水浸しになるということだ。

そして、その余波を食らった洗面所のドアが、完全に凍結してしまっていた。つまり早い話、鏡介は洗面所に閉じ込められてしまったのだ。

「すんませーん、開けてくれないと出れないんすけどー」

「悪い、こっちからも開けられないんだ。悪いけどしばらく待っててくれー」

とりあえず、鏡介にその声をかけてなだめておく。

そして、それからしばらく、うちのモノ総出で水浸しになった廊下の掃除をすることになったのだった。

06・季節外れの転校生 その31（後書き）

どうも、作者です。

さすがは元鉄の塊、あの程度ではなんともないようです。

しかし、この後、どうやって家の中を元通りにしたのか。作者である私もちよっと不思議に思っています。

さて、今回で6日目は終了です。

次回から7日目がはじまります。

相変わらずのドタバタが続きますが、ちょっとだけ核心に触れていくこととなります。

それでは次回を、こっご期待！

なお、次回から、あとがきは毎回に入らなくなります。

なにげに面倒くさいし、ネタバレにも繋がると、つい先日気がついたもので。

それではよろしく願います。

07・穏かな日は遠く その1

9月20日 水曜日

「おはよーございまーす！」

その日は、突然のケイのそんな声で明けた。

うん、これは夢だ。ねぼすけのケイが俺より早く起きるはずがない。そんなことを思いながら夏掛けの中でもうちよつと惰眠をむさぼろうとしていると、今度は誰かが俺の体をゆさゆさと揺すりだした。ずいぶんリアルな夢だな。

「ほおらあ、お兄ちゃん、朝だよー！起きないと遅刻しちゃうよ！」

「ん、あと10分」

邪魔されないよう布団に潜ろうとしたときだ。

「んもつ、そんなのだめ！今日は全体朝礼があるから早く出ようつて言ったのはお兄ちゃんでしょ！えいつ！」

「ぐえつ!?!」

突然、体の上に何かが乗っかってきた、ちがう、落ちてきた。これはヒザだ。ニードロップだ。全体重を乗せた膝が、布団の上から俺のどてつ腹にめり込んでいるのだ。

「はーやーくー、起きなさいーっ」

すかさず今度は鼻を摘まれた。って、マジで痛いじゃねえかコラ。こっちは無抵抗だぞ!?!

「起きた？」

たまらず開けた目の前に、顔があった。全力のケイの笑顔だ。

「わああっ!?!」

普通なら驚かないだろうが、あまりに距離が近い。近いので、思わず突き飛ばしてしまった。

「きゃあああっ!?!」

人間にしてみたら超軽量級のケイは、驚きの表情で空中に放り出される。

そして、落ちた。

「ぐえっ!？」

どすんという音に混じって、今度は男の声がした。

なんだ?と思つて、体を起こしてベッドから下をのぞいて、見えたのは。

尻餅をついたケイ。夏掛け布団。

そして。

「うぐうううっ……」

その2つの下敷きになり、必死になつて這い出そうとしている寝巻き姿の男。

「きゃあああつ、鏡介お兄ちゃん、大丈夫!？」

それこそ、鏡介だった。

「な、なんで朝から、こんな目に……」

「ごめんなさーいつ、でも悪いのは突き飛ばしたお兄ちゃんだから文句はお兄ちゃんに言つてねーっ!」

「どさくさにまぎれて変なこと言うな!おい、鏡介、大丈夫か!」

「す、すいません、将仁さん」

ケイと二人で引き起こすと、鏡介はやつと顔をあげた。

「迷惑ついでに、ヒビとが入っていないか、見てもらえないっすか」「ヒビ?」

柔軟性のある肉体になつたんだからそんなもん入らないと思う(入っていたらすごくシユールだ)んだが、痛いというので見てみることにする。

寝巻きの背中をめくつてみると、案の定ヒビらしきものはなかった。

それを鏡介に伝えると、鏡介のやつはなんかほっとした顔になる。

これが女の背中だったらちよいと楽しいんだが、男の、しかも俺と同じ姿の奴のものでは面白くもなるともない。

だが、ケイには少々刺激的だったようで、顔が真っ赤になっていた。

07・穏かな日は遠く その1（後書き）

どうも、作者です。

ちよつと更新が滞ってしまいました。

いないとは思いますが、もし気にされている方がおられましたら、改めてお詫び申し上げます。

それでは今後もよろしくお願いします。

07・穏かな日は遠く その2

「ほおら、お兄ちゃん早く来てよお。ぐずぐずしてると、昨日と同じ電車になっちゃうよ?」

「わ、ちよつと待て、ネクタイがまだ」

ケイに腕を引つ張られ、ネクタイを締めながら、俺は玄関へ向かっていった。

うちの朝は、人数が多いわりにのんびりしている。朝から時間に追われるのが俺と常盤さんぐらいしかいないからで、あと早起きなのといえ、朝食の用意をするレイカと、朝のニュースを流すテルミの家政婦コンビぐらいだ。

「じゃ、行ってきます」

リビングをのぞくと、テレビ画面を出して朝のニュース番組を流すテルミと、そのニュース番組を真剣になって見ている常盤さんがいたので、その二人に声をかける。

「いってらっしゃいませ、将仁さん、ケイちゃん」

テルミが、体がテレビになっていて、首だけで挨拶する。それに向かっていた常盤さんも、こつちを向いて手を振っている。

「あ、ちよつと待ちなさい将仁くん」

と、そこに他の人が顔を出した。キッチンで仕事をしていたレイカだ。

なんだろうと思いつながら待っていると、手に何かの包みを持って出てきた。

「これを持って行きなさい」

そう言って渡された包みはずっしりと重く、またなぜかほんのり暖かい。

「なんだコレ」

「お弁当よ」

俺の質問に、レイカはこともなげに答える。おかげで、俺も一瞬そ

の意味を掴み損ねてしまった。

「弁当か……って、弁当!？」

思わず聞き返してしまう。なにしろ高校に入ってこのかた、弁当なんて持つていったことなんぞ一度もないし、他人に作ってもらったこともない。

「何か問題でもあるかしら？味も栄養バランスも考えて作ったのだけれど」

「あ、いやその、なんで弁当なんて」

「外食だと、栄養バランスが把握しにくいから、作ってみたのよ。

将仁くんの栄養管理は、私がすっかりやっていくと言ったでしょ」「そう言われれば、初めて俺の前に現れたときにそんなことを言ってたっけ。」

「あ、ありがとう」

「ふふ、当然なことをしただけよ。将仁くんに限ってそんなことはないと思うけれど、残したら駄目よ」

礼を言うと、レイカはわずかに照れくさそうにそう言った。

「レイカお姉ちゃん、ケイのはないの？」

不意に、横からケイがレイカの袖を掴む。

「心配しなくても、ちゃんと用意してあるわ。少し待っていなさい、持ってきてあげるから」

「うんっ!」

そして、レイカがキッチンにまた入っていく。

「あーっ、将仁サンそちだたアルか!」

かと思うと、今度は違うほうから違う声が聞こえた。

そっちを向くと、紅娘が紅いステンレス製水筒を両手に持つてこっちに来るところだった。今日は起きていたんだな。

「ハイ、将仁サンこれ持つていくヨロシ」

俺たちの前に来ると、紅娘はその水筒をこっちに差し出す。なんか今日は色々渡される日だ。

「これは？」

「お茶アル。喉渴いた時とかに飲むヨロシね」

水筒を受け取った俺を見て、紅娘がにっこりと微笑む。

「昨日飲んだウーロン茶かなあ？」

「んー、ちよと違うアルね。説明は省略するアルけど、お昼ぐらいまでならあつたかいと思うアル」

「あつたかいほうがいいの？」

「そうアル」

ケイはそのお茶に興味を持ったらしい。そのことを紅娘に色々と聞いている。

「将仁くん、ケイちゃん、お待たせ」

そこに、俺のそれより2回りほど小さい弁当包みを持ったレイカが現れた。

「ん、ああ、ご苦労さん、レイカ」

「わあ、ありがとうレイカお姉ちゃん！」

「ふふ、どういたしまして。それでは、次の仕事に取り掛かりましょうか」

「じゃあワタシもそろそろ行くアル。二人ともいてらしゃいアルね」

「ああ、がんばってな、二人とも」

バッグに渡された荷物をしまいながら二人を見送ると、ケイのほうに向き直る。

「そんじゃ行くか。今何時だ？」

「えつと、7時15分だから、今出れば、7時32分に間に合うよ」

「そうか、じゃあそろそろ出ようか」

「了解っ！」

俺が靴を履くために上がりかまちから片足降りると、ケイがびしつと敬礼してから、ぴよんつと飛び上がって空中で丸くなり、光と共にケータイに変身する。

「んじゃいつてきまーす！」

その携帯電話をポケットに入れると、俺は家を飛び出した。

07・穏かな日は遠く その3

「ふーっ……しんどかった……」

人の波に流され、改札を出たところで一息つく。

ちよつと早めに出ればピークに当たらないと思ったのだが、それが甘かった。それどころか今日のほうが混んでいたような気がする。

ちゃくちゃくちゃらあらあ、ちゃくちゃらあ。

柱にもたれかかって一息ついていると、ケータイの呼び出し音。この某宇宙人映画の呼び出し音はケイからだ、なんかバッテリー切れ寸前みたいへ口へ口だ。

「どした、ケイ」

「ふにゆく、なんか今日って、昨日より混んでたみたい」

ケイのほうも相当まいつているみたいだ。

「こんなの毎日乗っているんだから、日本のサラリーマンは強いはずだよなあ」

「うとう、ケイのお友達はみんな毎日こんなところにいるのかなあ、なんだかかわいそう」

うーん、お友達っていうのは他のケータイのことなんだろうが、少し詰め状態のサラリーマンのポケットにそれぞれケイみたいな子が入っているのを想像すると、なんか眩暈がしてくる。

「シユールな世界だな……」

「えっ？なに？」

「あ、いやなんでもない。えーと今何時だ？」

「7時53分だよ」

「おい、マサじゃねえか？」

「うえ！？」

いきなり聞き覚えのある声が後ろからかかった。思わずケータイを落としそうになる。

「あら、本当。真田君って徒歩通学じゃなかった？」

振り向くと、制服姿のシンイチと、委員長の佐伯がかばんを持ってこつちを見ていた。

「ねえ、どうしたの？」

なんとか持ち直したケータイから、ケイの声が聞こえる。

「ごめん、クラスの奴だ。ちよつと切るぞ」

「ええーっ!？」

「後でちゃんと埋め合わせするからさ、頼むよ」

「………もーっ、しょうがないなー。その言葉、忘れたら怒つちゃうからね(ブツツ)」

向こうから切りやがった。機嫌を損ねてしまったかな。

それはともかくとして。俺は、大急ぎでケータイをポケットにしまった。

「今のは誰でえ？」

その後ろからぬらつと首を出したシンイチが、ねちっこい口調で聞いてくる。

「な、なんだよ」

「ちーつと聞こえたけど、年下っぽい女の子の声だったよなー。知らなかったなあ、お前ロリコンだったんだなあ」

「は？ちよつと待て、なんでそうなる」

「となりにあんな美人が来て、昨日は机まで一日くつつけばなしだったのになあ。ロリコンはいかんよロリコンは」

「こらてめえっ！勝手に人をロリコンにするな！」

「へへっ」

とっ捕まえてやるうかと思っても、シンイチの奴は動きに変なフェイントを織り交せていて捉えることができない。本気でぶん殴つてやるうかとも思ったが、朝の駅前でケンカなんかやってらんないもんな。

ふと横を見ると、そのシンイチを御することが出来る人間が、じゃれる子供を見るような暖かな目でこつちを見ていた。

「おいこら佐伯！お前委員長だろ、止めなくていいのかよ！」

「あら、友人のコミュニケーションに水をさすほど、私は野暮じやないわ」

「そーい問題か！」

お前、夏休み前はがちがちの堅物だったのに、二学期になってからキャラが変わりすぎだ。

これはすべてシンイチが懐柔したのか？だとしたら恐るべきシンイチ、である。

「そろそろ時間ね。二人とも、そろそろ行かないと遅刻するわよ」その委員長が、腕時計を見てからやっと思めに入る。するとシンイチはあっさりと思まった。

結局そうなるまでシンイチの奴は捕まえられず、そして時間もないので、3人そろってそこから駅に向かって歩き出したのだった。

07・穏かな日は遠く その4

「話は戻るけれど、真田君。どうして駅にいたのかしら？真田君って徒歩通学だし、アパートは駅と方向が違うはずよね？」

歩き出してすぐその話になる。当然といえば当然だ、引越しのことは、クラスの連中にはまだ話してない。

「そっぴや、昨日は来るのがいつもより早かったよな。昨日から電通だったんだろ、なんで隠してたんだ？」

「別に隠してた訳じゃないよ。でも昨日のうちのクラスはそれどころじゃなかっただろ？」

うん。嘘は言っていない。昨日はクラス中が賀茂さんと近衛お嬢様のことので一日中もちきりで、俺の話なんか誰も聞いてなかったじゃないか。

「それはそれ、これはこれでしょ。連絡網とかも作り直さなきゃいけないし」

さすがに委員長、押さえるところはしつかりしている。

「けど、変わったのは住所だけだから連絡網は問題ないんじゃないか？あれ電話番号しか載ってないだろ」

「なに！？お前、引越したのか！？」

あ、しまった。自分で墓穴を掘ってしまった。

「ん、ああ、ちよつと訳があつてな。えーと、親戚同士で、共同生活することになって、その親戚のうちに、居候することになったんだ」

本当のことなんて言える訳が無い（そつちのほうがずっと嘘っぽい）ので、とにかくその場はごまかしにかかることにする。

「親戚つて、さつき電話で話していた子？」

「ああ、まあそんなところだ」

その後もちよつと問答があつたんだが、通学途中ということもあつてあまり細かいことは聞かれなかった。だがそれは単に尋問が後回

しになっただけに過ぎない。そう思いつと、ちゅつと、げんわりして
しまった。

07・穏かな日は遠く その5

今日の朝礼はいつも以上に長かった。なんでかつつと、新しい養護教諭、つまり保健の先生が来たことに端を発している。今もすでに一人いるんだが、新しい試みとして2人目の養護教諭を置くことになったんだそうだ。

そのお披露目がこの朝礼だった。名前は「由利水江^{ゆりみづえ}」。背は高いほうで体格は細め。養護教諭の資格を取ったのが去年だったと言うから今いる保健室の先生よりはかなり若いはずだが、なんとというか、年の割にすごく地味な印象を受ける人だった。最近美人がまわりに増えてきたのでそう思ったのかもしれない。

その人は自己紹介も控えめだったが、その後の校長の話が長かった。新しい試みを行う、ということがスイッチだったらしく、「皆さんはまだ若いのだから、何事にもチャレンジしよう！」なんて言い出してえらく長くなってしまい、気がついたら朝のホームルームの間までつぶれてしまった。

「ふー、ほんま足が痛いわあ。ここの校長先生って、いつもこんな長話ですのん？」

席に着いた賀茂さんがまわりのクラスメイトにそんなことを言っている。どっちかというと思痴か。

「なんで校長の話ってどこに行っても長いんだろうな、小学校のも中学校のも長かったし」

「年寄りには長話したくなるんじゃないの？」

「若い保健室の先生って、憧れはあったけど、アレってなんかイメージと違うよな」

「マンガじゃあるまいしそんな都合よく行くかよ」

ヤジロー、お前は養護教諭に何を期待しているんだ。

「冷めてるねえ、やっぱ親戚とはいえ女の子と同居するようになって奴は違うってか？」

「なっ、シンイチなに言ってる！」

「なにっ！？こらマサてめえ、女と同居だとお！？てめえムツツリだったのかあ！」

その瞬間、俺はヤジローに胸倉を掴まれていた。

「わっコラバカ違う違うそんなんじゃないっ！」

「じゃあなんだってんだよお！昨日といい今日といいなんでお前の周りにはかり女が集まるんだよおっ！」

ヤジローの奴が血の涙を流して俺をがくんがくんと思いつきりゆる。何でお前はそんなに必死なんだ。

と、その時はしんつと何かを叩く音がして、俺の胸倉から手が離れた。

開放されたついでに自分の席に腰を下ろし、乱れた胸元をなおしながら前を見る。すると、頭を抱え変な声でうなる坊主頭と、それをにらみつけるメガネの女子がいた。

「もう授業が始まるわよ！いつまで喚いているの！」

委員長だった。手には1時間目に使う英語の辞書を抱えている。まさかあの辞書で殴ったのか？痛いぞこれは。

「ヤジローの奴もワンパターンだねえ」

それを、俺のななめ後ろの席に座って見ていたシンイチが、ちょっと呆れたようなようすで眺めていた。

「そこもっ！授業が始まるわよ、準備はどうしたの！」

と、その怒りの矛先がこっちに向かう。

あわてて、俺とシンイチはかばんの中から教材一式を取り出したのだった。

07・穏かな日は遠く その6

きーんこーんかーんこーん。

午前の授業の終わりを告げるチャイムが鳴り響く。同時に教室の中は待ちに待ったランチタイムに突入するので大騒ぎになる。

大騒ぎと言ってもその行動は様々であり、ロケットスタートで教室を飛び出すのもいれば、のんびりと歩いているもの、机でござこそとなにやらしているものなど様々だ。中には授業中ぐーすか寝ていくたくせにチャイムが鳴ると同時にすっ飛んでいく奴までいる。

ちなみに、日替わりランチなどは人気があるため、あっという間に売り切れになる。

「ねえ、賀茂さん。一緒に食堂行こ」

「せやね、はよう行かんと売り切れてまうさかいな」

クラスの女子に誘われ、賀茂さんも席を立つ。京言葉の印象からおっとりしているように見えるが、賀茂さんは実は意外に負けず嫌いらしい。昨日、食堂で自分が狙っていたB定食が売り切れてしまい、結構悔しがっていた。

「よいしょつと」

一方、俺の後ろの席では、委員長が妙にでかい包みをシンイチの机の上ののせる。

「あれ、俺の分は？」

「あ、ええつと、今日は弟の学校で社会見学があつて。弁当持参だったから、お弁当箱をそっちに使っちゃったのよ。箱はひとつだけど、中身はたくさんあるから」

そして、包みの中身は、まさに重箱だった。こいつら、高校の教室の中で臆面もなく二人で一つの弁当を食うつもりらしい。

「裏切り者はほつといて行こうぜ」

俺同様、いたたまれなくなったヤジローが、食堂へ行こうと誘ってくる。だがしかし、俺は今日はそうするわけにはいかないのだ。

「いや、今日は遠慮しとくわ」

「あれ？将仁はん、今日は食堂には行かへんのん？」

賀茂さんが席を立たない俺のを見て声をかけてきた。

「ん、ああ、今日は弁当があるから」

「……なにいつ!?!」「」「」

俺が机の上にその弁当が入ったバッグを置いたその瞬間、俺の周りの人間が一斉にどよめいた。

07・穏かな日は遠く その7

「あの朴念仁が、弁当だとお！？」

「あいつ、今一人ぐらしだったよな。まさか自分で作ったんじゃないだろうな」

「うっそー、将仁くんって料理できるの？」

教室に残っていた連中がざわつきはじめ。お前ら、自分の飯はどうでもいいのか？

「おいマサ。誰に作ってもらったんだよ」

やにわに、俺の前の席にこっち向きで座ったヤジローがいきなりそんなことを聞いてくる。なんか、刑事ドラマの取り調べみたいだ。そのまわりには暇なクラスメイトどもが壁となつて興味津津にこっちを見ている。ある意味さらしものである。

「証拠は拳がつているんだ、正直にゲロしちまえよ」

俺が机の上に出したバッグの紐をつかんで、ヤジローがコントようなセリフを吐く。

「お前ら、自分のメシはどうすんだよ」

「何言つてやがる、こんな心配事抱えたままじゃ喉を通らねえつてなもんだ。なあ！」

ヤジローの呼びかけにひま人もがそろつてうんうんとうなづく。つくづく、ヒマな連中だ。

「あのお前ら、言つとくがお前らが想像してるようなもんじゃないぞ」

ヤジローの手から弁当入りのバッグをひったくる。

「これはだな、うちの都合で一緒に住むことになった、えーと親戚の人に作ってもらっただけだ」

「それって昨日のケータイの子か？」

「へ、あ、いや、違う」

不意に、ヤジロー以外から質問が飛んできた。警戒していなかった

ためそのまま答えてしまったが、直後、NGワードを答えてしまったことに気がつかされた。

「ってことは……ああ！お前何人と同棲してんだよ！」

「お前ってそういう奴だったのか！？実は隠れナンパ師だったのか！？」

「てめーらちゃんと話を聞けーっ！」

思わず叫んでしまう。全く、お前らは俺がどこまで朴念仁だと思ってるんだ。

ちゃーちゃーちゃらららちゃーちゃちゃー。

その時、ちょうど呼び出し音が鳴った。

「もしもし今取り込み中っ！」

着メロでケイだと判っていたので、即効で取り出し言いきる。

「ごはんはっ！？」

「だから今取り込み中だっ！」

「でもおなかすいたーっ！ごはんー！ごはんごはんーっ！」

ケイがだだをこねる。幼稚園のガキかこいつは。いつもがいい子なだけによけいそう感じるのかも。

小さく舌打ちしてから、はたと困ってしまう。

言われてみれば確かにケイの分の弁当ももってきてある。が、ここで食うことはできない。俺一人であればなんとかなると思うが、それではケイが食えない。かといってケイを今ここでみんなの前いきなり出したらクラス中がパニックになること必定、メシどころではないくなる。

しかも、脱出するにしても廊下への出口はすでに固められている。

「マサ、てめえいい度胸だな、俺らを無視して女とラブい話かぁ！？」

その俺の様子を見ていたヤジローが、目つきをさらにきつくして聞いてくる。気がつくくと、野次馬の中に、ヤジローと同じような目をした奴がいる。そいつらはみんな彼女がいない（ということになっている）連中だ。

これは危険だ。一刻も早く脱出しなければ、メシ食う時間がなくなる。いや、それだけならまだしも、どんな目に合わされるかわかったもんじゃない。

ふと横を見ると、空気の入れ替えをするために、窓が全開になっているのが見えた。

幸い、そのまわりには誰もいない。机はあるがその席の奴は不在。

ここしかない、今しかない！

その時はそう思った。いや、それしかないと思った。

だから俺は、右手に携帯、左手に弁当入りのバッグを引っつかむと、全速力でそっちに駆け出していた。

07・穏かな日は遠く その8

ワントンポ遅れて暇人どもが動き出すがもう遅い。

だんっ、だんっ、だんっ！

そして、我に返った時。俺の体は、宙に浮いていた。

なんかまわりの風景が妙にゆっくり動いている。後ろのほうで騒ぎが聞こえる。

下に目をやると、結構遠いところに、地面が見えた。いや、見えただけならともかく、少しずつ近づいて来ている。

忘れていた。ここは、2階だったんだ。つまり俺は、2階の窓から飛び出したということになる。ざっ。

しかし、状況が判れば、2階ぐらいの高さならたいしたことは無い。多少高いところから落ちるのは慣れているので、俺はなんとか体勢を立て直して地面に着地した。下が土だったこともあり、また足から着地したので少々足首が痛い、動きに差し障りがあるほどではない。

上を見上げると、うちのクラスの奴らが、窓から身を乗り出し、こちちを見ている。

みんな、あっけに取られていて動く様子はない。無いんだが、今度は下の（今は俺と同じ高さにある）教室が騒がしくなってきた。上の階から人が落ちてきたんだから当然か。

これはちよつとやばいかも。そう思った瞬間、俺の脚はその場から駆け出していた。

「あつ、に、逃げたぞ！」

「追えーっ！」

俺が走り出すのとはほぼ同じタイミングで、硬直が解けたらしいクラス連中が騒ぎ出す。しかしさすがに俺みたく窓から飛び出そうとする奴はいないようだ。これではばらくは時間が稼げる。

その隙に、俺は校庭の南にある並木へと急いだ。あのへんなら多分誰もいないだろう。

そこについてみると案の定誰もいない。校舎に近いところには外で飯を食うやつもいるが、さすがに校舎から遠いこのへんまでは来ていない。

「はあ、はあ、はあ……」

さすがに疲れてしまった。バッグを地面に置き、木に寄りかかって懸命に息を治める。

「お兄ちゃん、大丈夫？はい、お茶」

いつのまに人の姿になったケイが、バッグから水筒を取り出し、お茶を注いで差し出す。

礼を言つて受け取ると、一気に飲み干す。魔法瓶なのでまだ暖かかったが、がぶ飲みしても問題ない程度だ。そして、飲んだ後味はともさっぱりしている。ちよつと漢方薬っぽい匂いが残っているから、ただの烏龍茶というわけではなさそうだ。

「ふーっ」

飲み干したところで、そのままそこにしゃがみこむ。まさか、弁当持ってきただけであんな騒ぎになるとは思いもしなかった。人間のネガティブなエネルギーってのは凄いもんだ。

だが、考えてみたら俺も少し前まではあっち側にいたんだよな。そう考えるとちよつとだけ申し訳ない気分になった。

07・穏かな日は遠く その9

「はい、お兄ちゃんお弁当」

いつのまにか俺の横に座ったケイが、バックの中から包みを取り出し、大きいほうを俺に差し出す。こんなところを見られたら、クラスメイトに何されるか判らるので、念のためまわりをもう一度見回す。そして、こっちを見ていそうな気配が無いことを確認してから、レイカ力作の弁当の包みを開ける。

そこには、さすがレイカ自信作というだけのメニューがぎっしり詰まっていた。バランスを考えて、と言っていたとおり野菜が多めでまたそのテイストも和風にまとめられているので見た目は少々地味だが、レイカの料理の腕、特に「和食」を得意とする彼女が作った和食テイストの弁当とあつては期待が膨らむのも当然だ。

さらに、ご飯とおかずは別々になっていて、ご飯はのりで上を覆われた、いわゆるのり弁になっているという手の込みようだ。

「わぁ、手が込んでるねー」

横で自分の弁当のふたを開けたケイが、中身を見てはしゃいだ声をあげる。ケイのほうはひとつの弁当箱にご飯とおかずが一緒に入っていてサイズも俺のそれより2回りほど小さいが、メニューは俺とほぼ同じだ。

「じゃあ食つか。いただきます」

「いただきますー」

箸を手に合掌する。施設時代の習慣でついやってしまっただが、横ではケイも俺の真似をして合掌していた。

まずはのり弁から。黒いつややかな面に箸を入れる。割ってみるとご飯の真ん中にものが挟んである2層構造になっており、のりの下にはかつおぶしが敷かれている。

口に入れるとほんのり磯の香りと醤油の香りが口の中に広がる。冷めてもいいように味付けは濃い目になっているが、それでも各素材

の味わいを相殺しないようになってる。などと偉そうなことを脳内で言ってみるが、要するに美味しい。

「わあ、おいしーい！さっすがレイカお姉ちゃんだね！」

きんぴらを食べたケイも絶賛する。俺も異論は無い。文句が言えるのはよほどのグルメか、和食が大っ嫌いな奴か、味覚がおかしい奴だろう。

おかずも、さっき言ったきんぴらをはじめ、サトイモの煮物、焼き鯖の切り身、たまねぎとにんじんの天麩羅、マグロ赤身のツケなど、一見ちよつと弁当には不向きなメニューもあるが、食べてみると見た目ではわからない細工がされていて意外な味わいがある。

「こんな凝った物作るなんて、レイカの奴何時起きしてるんだろっかな」

「うん、この前聞いたんだけど、レイカお姉ちゃん、テルミお姉ちゃんより早起きなんだって」

「うえ、そうなのか？」

朝の準備ってそんなに時間がかかるものなのか。一人暮らししてからずと適当に済ませていたから別に大したこと無いと思っていたんだが。もしかして人数の関係かな？

「あーっ、お兄ちゃん食べるの早いよお。ご飯はよく噛んで食べないとちゃんと消化できないんだよ？」

そう言われ、我に返ってみると、半分以上なくなっている。考えながらも箸は動いていたらしい。無意識で箸を進ませるとは、恐るべしレイカの弁当。

「もうお兄ちゃんったら食いしん坊さんなんだから」

すると、不意にケイが自分の弁当箱から里芋の煮物をつまみ上げ、こっちに差し出してきた。

「ほら、ケイのおいもあげるから。はい、あーん」

「……へ？」

「あーん」

「……ちよつと待て、どこで覚えたそんなもん。さてはこい

つ、ネットで余計な情報を仕入れたな。

「んもう、お兄ちゃん口開けてよお」

こっちがどうすべきか戸惑っている、ケイはすねだしてしまった。仕方がない。辺りを見回し、見ている奴がいないのを確認してから、覚悟を決め、ぱくりとやる。

すると、機嫌が直ったらしくケイはにこにこ顔になる。なんかこの笑顔をみていると、さっきのも許せてしまうような気がする。とはいえ、人前でやれと言われたら困ってしまうが。

とりあえず、その後は昼食を済ませた連中が出てくるまで、ケイと一緒にのんびり弁当を食ったり、たわいもない話をしたりで時間を潰した。教室に戻ったらまたしようもない質問攻めにあうんだろうが、それは仕方ないと、覚悟を決めた。

07・穏かな日は遠く その10

同じころ、こちらは校舎の屋上に、ひとつの影があった。

その影は、屋上の柵に寄りかかり、両手を変わった形に組み、意識を集中するように手を組んでいる。

そこに一陣の風が吹き、くせのない黒髪とチェックのスカートを揺らす。

「ふうん、あない正体を隠してはったんか……」
形の良い唇が動き、言葉が漏れる。

ふと思いついたように、その女が顔をあげて空に目をやる。
すると、そこに一羽の赤い鳥が飛んできた。

女が、鳩程度の大きさがあるその鳥に向けて手を差し伸べる。すると、それが判っていたかのように、小鳥は女の手のひらに留まった。手に止まったその鳥を、女はそっと自分の顔と同じ高さにまで持ってくる。

「おつかれはん、戻ってよろしおすえ」

そして、鳥に向かってそう言うと、ふっと息を吹きかけた。
すると、その鳥の姿が背中から脱皮するように姿を変え、そして、中央に星が描かれた掌大の長方形の紙となった。

その星の真ん中に、手も触れないのに小さな火が灯る。

「旧華族、西園寺家に伝わる物部神道。日本古来の宗教観、八百万の神を具現化する業。昨日見たときはまさかあ思ってたけど」

火が紙全体に瞬く間に燃え広がり、灰となっていく様を眺めながら、その女が独り言を言う。

「まさか、電気製品をまるごと変えてまうほどのモンやとは思ってもせえへんかったわ。他にもいはるようやし、しばらく探りを入れて、その上で作戦の練り直しをしたほうがよろしおすなあ」

そして、面白いものを見つけたように、くつくつと笑った。

07・穏かな日は遠く その11

「おい、マサ。お前、今日は部活休め」

帰る準備をしていると、いきなりヤジローのやつがそんなことを言ってきた。

「今日は、お前んちにみんなで行くことに決まったから」

「な、ちよつと待て、俺は何も聞いてないぞ!？」

「女と同棲するような奴の都合なんか誰が聞くか」

ヤジローの奴は、臆面もなくそんなことを言ってくれる。しかもどうやら本気らしく、シンイチや委員長も荷物をまとめて待ち構えている。

「……非常に、まずい。」

なにがまずいって、うちにいるモノたちを、どう言えばいい。

こいつらの目的は、ほぼ間違いなく「俺が同居している相手に会うこと」だ。俺がいやだと言っても強引に押しかけてくるだろう。そして、来たら絶対にうちのモノの誰か（下手すれば全員）に会う。

そして、非常にまずいことに、学校の連中にはモノたちのことを「親戚」と言っているが、こうなることは想定していなかったので「モノたち」にはそのことを伝えていない。

「ちよ、ちよつと待ってる、うちに話をする」

とりあえず、何も知らせないわけにはいかない。ポケットからケイタイを取り出し、開きながらヤジローたちから離れる。

ついでこよつとするシンイチとヤジローの耳を委員長が引つ張って押さえてくれている。

「もしもし、ケイ?」

「あ、お兄ちゃん」

開けてすぐ耳に当て、声をかけると、ケイの返事が返ってくる。

「悪いけど、今すぐ家につないでもらえないかな。今のことを伝えなきゃならないから」

「今のつて、お兄ちゃんのお友達がおうちに来るって言ったこと？」

「ああ。同居者は親戚だつて言つてあるから、それだけでいいから口裏を合わせてほしいんだ」

「ホントに来るのかなあ？」

「来るなつて言つたつて、あいつらのこつたから、多分強引についでくるだろ。でも一回会わせれば、納得すると思つんだ。だから、今のうちに会わせておけば」

「うん、判つた。えつと、うちつていうと、常盤さんのところかな？」

「ああ、頼む」

すると、少しの沈黙の後に呼び出し音が聞こえた。と思つたら、ちん、という音がしてから、今度は声が聞こえてきた。

「Hello. This is Tokiwa lawyer office. Miss Tokiwa cannot take your call now.」はい、こちらは常盤弁護士事務所です。ミス常盤は唯今留守にしています。」

留守電メッセージのつもりだろうか。事務的だが思い切り英語だ。

コラ、ここは日本だぞ。しかもこの声は。

「何やつてんだバレンシア」

「Oh, this voice is Master デスねー。May

I help you? (何か御用ですか)」

相手が俺だと判つたとたん、バレンシアの口調がいきなりフランクになつた。

「えーと、常盤さん、はいないんだよな。えーとそれじゃ、他に誰がいる?」

「Wow, wow, wow! What happen?」

なんか、妙に興味津々な声がするんだが。

「Whatって、お前トラブルを喜ぶようなことを言うなよ。こっちは困っているんだから」

「Ah, sorry, sorry. But, なーに困っているのデース?」

どうも他の奴に繋ぐつもりはないらしい。仕方が無いので、ちょっと不安はあるが、今からクラスメイトを連れて帰ることを伝える。

「O.K, Master. それデ、ミーたちはwhat should do デース?」

「ああ、うちにいるのは、みんな俺の親戚ってことになっているから、そっちでも口裏を合わせておいてほしいんだ」

「Only it? Welcome by us (私たちでの出迎え)は not need デースか?」

「いらんいらん、どうせすぐ帰らせるから」

「Hm, I see. That's a pity, ha. (残念だなあ)」

なんか最後に変なことを言っていたような気がするが、聞き流すことにする。

「とにかくさ、みんなに話しといてくれ。くれぐれも、擬人化のことは秘密にしといてくれて」

「O.K. By the way, Masterのreturn to homeは、what timeになるデース?」

「へ?えーと、今からだど、4時ぐらいじゃないのか?」

「Mmm、でハ、return to homeを、late a

bout 30 minute できるデスか？ We have
to clean inside our house (家の中を
掃除しなければならぬ) デース」

「ん、わかった。じゃ、頼んだよ」

最後にこのことをみんなに伝えておくよう頼んでから、電話を切る。

「バレンシアちゃん、何やってたのかな？」

「電話番なんだろ、今や常盤さんの秘書みたいなもんだし」

「大変だね、バレンシアちゃんも」

「まあ本人がいいと言ってるんだから」

通話が終わったあと、少しケイと話してから折りたたんでポケットに入れた。

「すまん、待たせた・・・なあ！？」

そして、待たせているヤジローたちのほうを向いた、その光景を見て、一瞬固まってしまふ。

「ずいぶんと長電話どしたなあ」

そこに、さっきまでいなかったはずの、長い黒髪の女が座っていたからだ。

「か、賀茂さん、いつの間に!？」

「嫌やわあ、ここはきんのからうちの席どすえ。うちの席にうちが座るんは、当たり前でっしゃる?」

いや、そういうことじゃなくて。

「さっき帰ろうとしてなかったか?」

「うん、何ぞおもしろな話したはるから、よせてもらおう思ったんどすわ」

「そういうわけで、賀茂さんも真田君の家に行くことになったから」

「はあ!？」

委員長が平然と言い放ってくれる。

「よろしゅう」

畳み掛けるかのように、賀茂さんがにつこり笑いかけて頭を下げてくる。いつの間にお前ら仲良くなったんだ。

ふと、昨日の晩飯で話題に上がったことを思い出した。陰陽師か。

「うちに連れてきたほうが早いんじゃないかい？」

ヒビキの言葉が、頭の中をよぎる。

「・・・一人や二人、増えても同じか」

そんな言葉が、自然と口から漏れた。

07・穏かな日は遠く その13

それからおよそ1時間後。

俺たち5人は、閑静な住宅街を歩いていた。

「お前、こんなところに住んでいるのか」

ヤジローが声をかけてくる。

このへんは高級住宅街らしく、結構大きな家が多い。この前まで俺が住んでいたところを知っているこいつからすれば、確かに雰囲気はまるで違つところだ。

「ほれ、ここだ」

家についたので、ついてきた連中に向かって声をかける。すると、シンイチとヤジローはぼかんとした顔になった。

「……………ずいぶん大きな家ね……………」

委員長も予想外だつたらしく、驚いた顔をしている。まあ、無理もないか。今住んでいる俺だつて、最初はびっくりしたもんな。

「……………ふーん……………」

唯一、賀茂さんだけはそんな驚いた顔をしていない。京都のほうじやこのぐらいの家は珍しくないのだろうか。

「……………おい」

ようやく我に返つたらしいシンイチが声をあげた。

「お前、いつのまにこんな金持ちになつたんだ？」

今度は、俺が固まってしまった。……………金持ち、という言葉にだ。

俺は、西園寺家の最後の継承者、そしてその遺産は総額五千億円。確かに金持ちだ。

だが、考えてみたら、その遺産の話はうちのクラスの奴らじゃ誰も知らないんだつた。西園寺という言葉が俺と何か関係がありそうだということを知れているだろうが、その「西園寺」が何かを知っているのはうちのクラスにはいないはずだ。

「だといいんだけど、これ、俺の家じゃないのよ。俺はただの居候なんだよね」

だから、ここは適当にごまかしに入ることにする。まあ実際、相続していないからまだ俺のものではないし、この家の所有者は常盤さんだ。

とにかく、ここまで来ちまったもんはしょうがない。腹を決めるか。「言つとくが大したモンはないぞ」

一応、釘をさしてから、ドアを開ける。

「将仁さん。お帰りなさいませ」

すると、そこに一人の女が立っていた。黒いマントの下にメイド服を着込んだ彼女は、ノックもなしに入ってきた俺たちに対して、怒るところか、丁寧なお辞儀をして、にっこりと微笑みかけてきた。テルミだった。どうやら待ち構えていたらしい。

「め、めっ、メイドお!？」

その女を見て、今度はヤジローが声をひっくり返した。

「こ、ま、マサ、なんでお前ん家にメイドがいるんだよ!？」

「わっ、ちよつと待て、だからっ、俺のじゃないって!」

そして、人の胸倉を掴んで、渾身の力がつくんがつくんゆすつてくる。お前そんなにメイドが好きだったのか。

「ふふっ、将仁さんのご学友だけあって、元気な方でしょう」

止めてくれるかと思っただが、テルミはにこにここと笑っているだけだ。

しかしメイド好きらしいヤジローには十分効果があったようで、ぱつと手を離しやがった。

07・穏かな日は遠く その14

「皆さん、ようこそおいで下さいました。私は、当家に仕えるメイド、三石輝美と申します。ご案内しましょう、どうぞこちらへ」

そしてテルミは手を奥に差しのべ、そして歩き出した。なんか、ホントのメイドさんみたいだ。

そっぴや、今、ミツイシとか言ってたな、オリジナルの苗字をつけたのか。ちよつと心配だったんだが、バレンシアはちゃんと話をしておいてくれたらしい。

そうになると、他の連中も何かオリジナルな苗字を考えているのかな。「では、しばらくここでお待ちください。何か御用があたりの際は、遠慮なくお呼び下さって結構でしょう」

俺らを全員リビングに案内したテルミは、そのままお辞儀をして出て行くこととする、

「テルミ、ちよつと待っていてくれ」

俺は、そのテルミを呼び止め、そして近づいた。これからのやり取りは、聞かれると少々まずいからだ。

「はい？」

「こいつのこと、頼む」

他人に聞こえないよう小声でいいながら、ポケットに入れていた携帯を手渡す。

「これは、ケイさんですか？」

察してくれたらしく、テルミも小声で返す。返事するように、ケータイの電飾がチカチカと光る。

「ああ、こいつのことだから、多分出てきたがると思うんだ。でもここで変身させるのはまずいだろ？」

「ふふつ、了解でしょう」

テルミは、すぐ納得して携帯を受け取ってくれた。まあここは事情が判るもの同士だからな。

「じゃ、頼むよ」

「はい、お任せください」

言いながらテルミから離れると、テルミもそれに応えてにつきり笑い、そしてリビングを後にした。

とりあえず、第一の難関は突破、といったところか。他の連中がどういう設定で来るのかを把握していないのでこれからがドキドキモのだが、とりあえずなんちゃらの擬人化だとぶち上げられることはないだろう、と思う。

「おいマサ、今の、本物のメイドだよな？」

「へ？あ、すまん、聞いてなかった。なんだって？」

色々考え事をしていたら、不意にシンイチに声をかけられた。

「いや、だからな。あのメイドさん、本物だよな？なんちゃってじゃないよな？」

「は？まあそりゃ、多分」

「いやよなー、家事を専門にやってくれる人がいるなんてなー」

その横で、うんうんとヤジローが頷いている。と、その顔をはっと上げて聞いてくる。

「もしやあの弁当はあのメイドさんが！？」

「ん？いや、違うぞ」

「なにいいーっ！？」

正直に答えると、ヤジローはどっかのマンガじみた絶望の表情になる。

こいつは、相当俺の弁当を作った奴を知りたいらしい。まあ基本的になんでもできるテルミなら、弁当ぐらい作れると思うが。

「この、この、この、贅沢モンがっ！メイドさんだけじゃ不満か！かと思うと、また胸倉を掴んでがっくんがっくんとゆすつてくる。

お前、そんなにメイドが好きだったのか。なんてなことを考えながら揺さぶられていると。

「そこまでだ」

そんな声とともに、ヤジローの手首が、横から伸びてきた手に掴ま

れた。

そして、じろつと佐伯をにらみつける。あいかわらずけんか腰だな、こいつは。

こんな対応をされれば、委員長もむっとなる。

「なっ、何よ、聞いているのはこっちよ」

「人に名を尋ねるなら、まずは自ら名乗るのが礼儀であろう」

「ちよつと、こっちは客として来ているのよ。それ相応の対応ってものがあるでしょう」

「ふん、聞いているぞ。お前たちは本来招かれざる客だ」

その瞬間、きつ、という音がしそうなほどに鋭い視線を、委員長がこっちに向ける。

「ちよ、待て、俺はそんなこと言ってないぞ」

「聞かずともその程度のこと、上官の表情でわかる。伊達に共に暮らしてはおらぬ」

俺のかわりにシデンの奴が得意げになって答える。なんかシデンの奴、調子が出てきたのか、口数が多くなっている。

「それはご挨拶ね。でも今は真田君の招きで来ているの。立派な客でしょう？」

委員長も負けていない。まあクラスの連中と議論して負けたことが無い委員長だけに、見るからに自分より年下の奴に負けたくないという思いがあるんだろう。

強気な者同士、にらみ合いが続く。一方、それを眺めるシンイチや、さつきひっくり返されてから復活してきたヤジローは、なんだありやといった様子だ。

「止めへんかてええんどすか？」

それとまた違う、穏やかな様子でやり取りを眺めていた賀茂さんだったが、さすがに気になったのか、こっちに聞いてくる。

止めて聞くような奴らじゃ無いとは思うが、このまま放っておくといつまでも続けそうなので、間に割って入ることにした。

「シデン、おまえ、なんでそう誰に対してもすぐケンカ腰になるんだよ。悪い癖だぞ、ちよつと落ち着けよ」

まずはよく知っているシデンに声をかける。続いて「委員長も委員長だ」と切り返し、喧嘩両成敗、と持つて行こうかと思つたが。

「じ、上官こそ、なぜ我をいつも悪者にしようとするのだ！我は、我は悪くないっ！」

なんて言われてしまった。俺はそんなつもりはなかつたんだが、声に出してそう言われてしまうと、俺が悪かつたような気になつてしまふ。

「晴香も晴香だよ。あつちはまだ子供じゃないか、お前が大人の態度をとれよ」

「そつどすえ、あんさんはうちのクラスの委員長はなんでつしやる。落ち着きなはれ」

見かねたシンイチと賀茂さんが、委員長のなだめに入ってくれた。

だから、俺はとにかくシデンをなだめることに集中することにした。

「お前を悪者扱したのは謝る。確かにそれは悪かつたよ。でも、今回はむこうは何もしていないじゃないか。そこに言いがかりをつけるのはまずいだろ」

「わ、わ、我は悪くないっ！我はぶ、無礼を働く輩を、成敗したのだ、誉められこそすれ、せ、責められるいわれはない、我は悪くない、悪く、ない、のだ」

どうやら、シデンは「自分にも落ち度があつたことは分かっているが、認めたくない」らしい。わかりやすいといえればわかりやすいが、そこで涙目になるのは反則だろう。

「全く、世話が焼けるね、お前は」

こんな事で泣かれてはかなわんで、シデンの頭に手を乗せ、軽く撫でる。こうすればこいつがおとなしくなるのは証明済みだ。

「ひよ!?!」

案の定、シデンは一瞬体を硬直させておとなしくなる。

「お前、おとなしくしていればかわいいんだからさ。少しはおとなしくしてなっつて」

おとなしくするため、もう少し撫でながら説得する。

「う、し、しかしだな」

「心配してくれるのは嬉しいけどさ。な」
なでなで。

「わ、我は……別に」

「あとで餡蜜おごつてやるから、な」
なでなで。

「……ふ……」

しばらくすると、シデンはすっかり大人しくなった。ここまで効果があるとは思わなかったが、静まってくれたからいいとするか。……
……なんか顔が赤いような気がするが。

「さて、それじゃ。自己紹介……」

大人しくなったシデンの背中を押して前に出、そうとして、ちょっと戸惑う。

なんでつて。うちに押しかけてきた外来種どもが、妙に興味津々な目でこつちを見てるからだ。

「なんだ、お前ら、その目は」

「いやあ、最後の朴念仁と呼ばれたあのマサが、女の子をこれだけなだめられるなんてなあ」

「うん。ちよつと、真田君を見る目が変わったかも」

「……なんか、負けた気がすつぞ」

「……おまえらなあ」

苦笑してしまう。こいつらは俺をどこまでの朴念仁にしようとしているんだ。

「うち、昨日来たばかりやさかい、よう判らへんねやけど、そやつたんどすか?」

見る。なんにも知らない賀茂さんが信じちゃったじゃないか。

このままでは話が進まないので、話題を変えることにする。

「ほれ、挨拶、挨拶」

言いながらシデンの背中を軽く押す。

すると、シデンは紅くなっただままこっちを恨めしげな目でにらみつけてから、押しかけクラスメイトたちに向き直る。

「中嶋^{なかじま}、紫電^{しでん}だ」

そして、ぶっきらぼうにそう言い放ち、深々と頭を下げた。

07・穏かな日は遠く その17

「えーと、こいつの実家って色々厳しいところみたくてさ。なんとかいう武術を教えていて」

「零式柔術だ」

こいつのオリジナル苗字は中嶋か、と思う間もなく自己紹介が終わってしまったので、ちよつとフォローを入れる。すると、すかさずシデンが返してきた。

「零式？聞いたことないな」

「柔術自体、私たちには縁が無いからね」

シンイチたちが口々にそんなことを言う。当たり前だ、俺も今日始めて聞いたんだ。

「ふん、当たり前だ。零式柔術は、その成り立ちからして秘密が多いのだ」

すると、不意にシデンの口数が多くなった。

「零式柔術とは、第二次世界大戦時に日本軍が編み出した格闘術のひとつで、相手を手早く沈黙させることに重点を置いたものだ。だが沈黙させると言っても永遠に沈黙させてはならない場合もあり……」

もうすっかりいつもの調子に戻ってしまったようで、零式柔術とかいうあの武術？のことを得意になって話し始める。そんな設定があったとは知らなかったのだ、俺もちよつと関心を持って聞いてしまった。

聞いていると、不思議と矛盾がない。もしかしたら、俺らが知らないだけでそういう武術が実際にあるのかも知れないと思わせるものだった。事実、矛盾があると必ずツツコミを入れる委員長ですら感心して聞いている。

そうしているところで、ドアがぱんつと開けられて、誰かが入ってきた。

「お兄ちゃんおかえりなさい！」

その誰かは、そう叫んで俺に飛びついてきた。まあこんなことをする奴は一人しかいない。さっそく変身して来たのか。

「おー、ケイか。ただいま」

そう言いながら、俺の胸元に抱きつくケイの頭をなでる。するとケイも満面の笑みで俺を見上げる。………なんか、幸せだ。と思ったとき。

「おにいちゃんだあ？」

そんな頓狂な声が背後からした。

振り向くと、シンイチのやつがあっけに取られた表情でこっちを見ている。

「おい、マサ。お前、妹なんかいたのか？」

その目がなんか羨ましそうだ。知らなかった、こいつって妹好きだったのか。そういえばこの前、「お兄ちゃんなんて呼んでくれたらもう」なんて言ってたよな。今朝はロリコンはいかんと言っていたが、お前がロリコン（というには少々育っているが）だったってことか。

そんなことを考えていると、いつのまにかケイが俺の後ろに回ってうちのクラスメイトたちをこっそりと覗いていた。明らかに警戒している。

「ちょ、ちょっとシンイチ、怯えているわよっ」

「お、おいらに言うなよお」

「なに言ってるの、あんたが無用心に聞くからじゃないのっ」

「だっておいら聞いたこと無かったんだもんよ、マサに妹がいるなんて」

「そんなわけないでしょ、親戚だって真田君も言ってたじゃないのっ」

なんかシンイチと委員長が小声でやり取りをしている。シンイチが時々委員長に小突かれているのが、二人の力関係を如実に現している。けど、まあこっちは大丈夫だろう。

「あらら、難儀どすなあ」

賀茂さんはそれを見てか、困ったような笑顔を浮かべているし。

「ううう、なんでマサばかり」

「こらそこっ！私を無視するなっ！」

「アッー！」

こっちではヤジローがシデンにひっぱたかれているし。

と、そのシデンがツカツカとこっちにやってくる、ケイに視線を合わせるようちよっと身を屈めた。

「ケイよ、この連中は怖くはないぞ。不屈き者は我がすでに成敗してある」

そしてケイにそう言う。成敗というのはさっきヤジローにやったアしだろうが、確かに痛そうだったな。そのせいかヤジローもちよっとシデンに対しては萎縮しているっぽい。

「ほら、お客さんだぞ。挨拶しなさいって」

俺からも背中を押してやって、やっとケイが出てきた。

「あ、こ、こんにちは。真田^{さなだ}蛸^{けい}、です」

そしてぺこりと頭を下げた。

「あーっ、その声、マサのケータイで話してた子か!？」

シンイチが素っ頓狂な声をあげる。あんなだけでよく判ったな、さすがロリコン。

「それより、ちょっと。真田ってどういうこと? 真田君と同じ苗字じゃないの、もしかしてホントの妹さんなの?」

委員長は相変わらず耳ざとい。

だがおかげでまたケイは萎縮してしまい、泣きそうな顔でぎゅーっと俺に抱きついてきた。ケイって、初対面の人にはほんとに警戒心が強いな。

「お前ら、こんな小さい子を脅かしてどうするんだよ」

ケイの頭を撫でながら庇ってやる。

「別に、苗字が同じの親戚がいたっておかしい話じゃないだろ。この子は人見知りが激しいんだから、あまりいじめないでくれよ」

「そうだ。貴様らこそ人の家に取り込んできて偉そうに」

シデンも俺の横に来てそう言い放つ。偉そうなのはお前もなんだが。

「あ、将仁さんお帰りなさいアル!」

そこにまた新しい、今度はやたらと機嫌のいい声がする。

そっちを見ると、赤い服を着た女の子がキッチンに続くドアを開けてニコニコ顔でこっちをのぞいていた。

こんな妙ちきりんな喋り方をするのはあいつしかない。

「紅娘、何してんだ?」

「はいナ、客人が来ると聞いたアルから、飲茶ヤムチャの準備してたアル」
それと同時に、ぷんと食欲をそそる匂いが漂ってくる。

確か、中国の飲茶ってのは、お茶を飲みながら、点心ディンチンつてやつを食べるんだよな……はて。うちに、そんなもん作れるような道具があったかね?

「シデンさん、ケイちゃんさん、ちょっと頼まれて欲しいアル。カウ

ンターに置いた茶器と食器、テーブルに持ってもらえるアルか？」
「あ、は、はい」

ちよつと考え込んでしまった俺の後ろから、紅娘に促され、ケイが出てきた。

「いたしかたなし。では上官、その客たちを席に案内してやるが良
い」

客を迎える側にしては尊大な言葉を残してシデンが続く。

そして、二人は湯呑ゆのみや急須やポットをカウンターで受け取り、リビングのテーブルへと持っていくと、かちやかちやと音を立てながら並べ始めた。

どうやら、モノたちはこいつらを歓迎してくれるみたいだ。

「じゃあ、テキトーに座ってくれ」

俺はとつと帰ってもらうつもりだったんだが、ここは張り切っているモノたちの気持ちを尊重することにする。

そして、シンイチと賀茂さんは各々適当な席に座る。

「なんで、なんでなんであいつばかり」

ヤジローは、席にもつかず、俺よりでかい体を縮こめてしゃがみこみ、床にのの字を書きながら何やらぶつぶつとつぶやいている。

まあ、あいつはほつといてもいいだろ。どうせ食い物が出てきたら機嫌が直る。

「ちよつと、真田君。今の子は？」

委員長は、紅娘に興味を持ったのか、俺の横でカウンターをのぞいている。その委員長の言葉で、俺は紅娘を紹介していなかったのを思い出した。

07・穏かな日は遠く その19

「おい、紅娘。今、手え離せるか？」

カウンターからキッチンを覗いて声をかけてみる。

「はいはいはい、今行くアルー！」

すると、返事と同時に、紅娘がすっ飛んできた。

「あつ、ニーハオ！ワタシ、李紅娘アル！ヨロシク！」
リーホンニャン

そしてカウンターから半身乗り出し、満面の笑みを向ける。何も言っていないのにたいした洞察力だ。それともただ単に愛想がいいだけなのか。

「あ、うん、よろしく」

それに圧倒されたのか、委員長も苦笑しながら頭を下げる。

そんなやり取りを横目に、キッチンの中を見てみると、色々使ったはずなのに綺麗に片付いている。レイカもそうなんだが、料理が上手い人は、料理が終ると後片付けも終わっているというが、使う本人が元々台所用品だっただけに、いっそうその気持ちが強いのかも知れない。

唯一使われているのと言えば、コンロの上に乗せられた、紅娘の本体とも言うべきあのでかい中華鍋だ。自分の一部を火にかけて大丈夫なんだろうか、とは考えないことにする。元々そうやって使われるものだし、何より鍋いっぱいの水を煮立たせる熱量を自力で出す程だから熱いのは慣れっこなんだろう。そう自分を納得させる。そして、その鍋の中から、肌色つばい直径30cmほどの円柱状のものが生えている。あれは、蒸籠だろうか。知らなかった、中華鍋って蒸し料理にも使えるんだ。

紅娘の料理の腕前は、さすが元調理器具だけあり、中華料理を作らせたなら天下一品だ。台所を管理するレイカの実在もあり、実際に作ったのは彼女がうちに来たその日だけだが、そこで彼女が作った料理はレイカのそれと張り合えるほどに旨かった。

そんな紅娘の作る本場点心だから、期待も高まるというものだ。

「どしたアル、もしかしてもう待ちきれないアルか？」

色々と考え事をしていたら、にゅっと出てきた紅娘に声をかけられた。

「ん、あ、そうだな、いい匂いしてるし、何作ってんだろうな！
って」

「んふふ、それは秘密アル。もうちょっと出来るアルから待ってるヨロシ。ね」

うーん、気になるが、そう可愛らしく指を立ててウインクされては文句も言えない。

「……しょうがねえなあ」

足取りも軽くコン口のほうへと進む紅娘を見送り、テーブルのほうへと向かう。

「ほら、湯呑を出すがいい。茶を注いでやろう」

「ありがとうございます……俺が客なのに」

なんかヤジローの奴、シデンに完全に下に見られてるな。

「あら、でもこのお茶すごく美味しい」

「ほんまやわ。宇治のお茶さんにはかなわんけど、中国茶もなかなかええもんどすなあ」

いつのまにか戻った委員長と賀茂さんは茶飲み話を始めてるし。

「……俺、もうちょっとぬる目がいいんだけど」

「え、ええつと……紅娘ちゃん、ちょっとぬるいお湯ってあるー？」

「あ、いいっていいって、ちょっと待てば冷めるから」

自分の言葉を聞いてケイがけてけとカウンターのほうへ向かったのを見て、シンイチは慌てて止めたりしている。

なんかもう、まったりとした時間に突入しているな。

07・穏かな日は遠く その20

「失礼します」

そこに、ドアをノックして、テルミが入ってくる。

ちよつと聞きたいことがあったので、シンイチたちの相手をケイたち任せ、テルミのほうへ行く。

「なあテルミ、今、うちにあと誰がいるんだ？」

メイドという意識が強いんだろうか、テルミはいつも1歩引いたところからみんなを見ている。だから多分、今でもうちのモノたちについて、おおよそのところは把握しているだろう。

「あ、ええと、鏡介さんと、クリンさんと、バレンシアさんが居るでしょう」

「常盤さんと他のメンバーは？」

「常盤様はお仕事からまだ戻られていないでしょう。それから、レイカさんとヒビキさんは、食料品の買出しに」

「……レイカも、毎日大変だな。その二人にも、話はずいているんだよね？」

「はい、常盤様以外全員に話がされているでしょう。常盤様は今日は少し帰るのが遅くなるのでしたので、心配することは無いでしょう」

「そうか」

微笑みながら答えるテルミの様子を見て、一安心する。

「はい、点心出来たアルよー！」

そこに、紅娘の元気な声が響く。見ると、紅娘が、さっきまで鍋に乗っていた3段重ねの蒸籠を、お盆に載せてこっちに運んで来るところだった。蓋はまだされた状態だが、それでも一気に食欲を湧かせる匂いを漂わせている。

その場にいる全員の視線を集める中、そのお盆に乗った蒸籠がテーブルの上に置かれる。

「お待たせしましたアル、この紅娘特製小籠包ショウロンポウ、どうぞ召し上がるヨロシ！」

そして、一番上の蓋を開けると、立ちのぼる湯気とともに、直径3センチほどのつややかな白い塊が整然と並んで顔を出した。

そして2段目・3段目と蒸籠を開けていくと、次々と紅娘特製の小籠包が顔を出す。

「とつてもとつても熱いアルから、口の中ヤケドしないよに注意するヨロシね」

最後に蒸籠の蓋を持った紅娘が、かわいらしくウインクする。

「あひーっ！」

次の瞬間、シンイチの悲鳴が上がる。どうやら、出来立ての小籠包をそのまま口に入れたらしい。小籠包つてのは中に熱いスープが具と一緒に入っているから、うまく食べないと口の中がヤケドすることと有名、なはずなんだが。そんなに飢えていたのか、こいつは。

「アイヤー、だから熱いと言ったアルのに」

「もう、シンイチったら食いしん坊なんだから」

口を押さえてのた打ち回るシンイチを見ながら、紅娘と委員長が半笑いになる。

「出来たてなんだから熱いのは当たり前だろう、小籠包知らないわけじゃあるまいに」

俺も、ちょっとあきれてしまったのでそんなことを言ってしまう。

「うるへー、あんらあふいひよわおうおわらかつらんらよ！」

復活したシンイチが、ヤケドしたらしい舌を出しながらどこか謎の国の言葉でわめきちらす。

「シンイチ、お前大げさなんだよ、多少熱いぐらいで」

その横でヤジローの奴が小籠包を口に入れ、そして噛んだ。ヤジローよ、お前もか。

そして案の定、口の中に熱々のスープが飛び出したらしく、驚きと苦しみがごっちゃんになった顔になり、さらにその顔が見る見る真っ赤になっていく。

だが、ヤジローの奴は悲鳴をあげることなく咀嚼そしゃくをはじめ、そして飲み込んでしまった。

「美味しいな、これ」

相当ガマンしているんだろう、ちょっと涙目になって肩で息をしな
がらも、ヤジローはそんなことを言ってみせる。

「はい、どうぞ。冷やすと良いでしょう」

すかさず、テルミがコップに入った水を二人に差し出す。どうやら、
テルミは今日はいつもの以上にメイドに徹するらしい。

その一方で、コップを受け取ったシンイチとヤジローの対応はかな
り違った。礼もそこそこに、ひたたくるようにコップを受け取り水
を含むシンイチと対照的に、ヤジローの奴は優雅なつもりらしい動
きでコップを受け取り、一口飲むと、テルミに向かってさわやかな
つもりらしい笑顔を向けていた。

メイド好きのヤジローだけにテルミにいい格好したかったのかもしれないが、これにはテルミも苦笑するしかないようだった。

07・穏かな日は遠く その21

「ほんまにそないお熱いもんなんですかあ？・・・ふあつ」
ちよつと大げさに見えるシンイチとヤジローの様子に呆れながら、
賀茂さんが小籠包を箸でつまみあげ、一口かじる。その瞬間、細い
眉が八の字になった。

「あ、あつひゆ、あつひゆ、あひゃいわ、ほんわ」
そして、口元を押さえて奇妙な言葉を口にする。

「はあ、はあ、な、なんえこれ、むつちや熱い何かができはった
え！？いきなりやったから、つい飲み込んでしもたわ」

その瞬間、耳を疑ってしまった。まさか聞き違いかと思っただが、周
りを見るとみんな驚いた顔をしている。ということは、みんな同じ
言葉を聞いたってことだよな。

「え？え？うち、なんぞけつたいなこと言っただ？」
判ってないのは、賀茂さんだけらしい。まさかと思うが。

「もしかして、賀茂さん、小籠包を食べたことがないの？」

俺が疑問に思っていたことを、委員長が聞いてくれた。委員長も同
じことを考えていたということだろうが、でもいまだき？と思っ
たんだが。

「う・・・へえ、そうなんどすわ」

どうやら賀茂さんは本当に小籠包自体を知らなかったらしい。さら
に話を聞いてみると、なんと賀茂さんは、中華料理自体ほとんど食
べたことがないそうだ。

「アイヤー、日本人なら皆知てると思ったから小籠包にしたアルの
に。餃子のほうが良かったアルか？」

「我でも知っておるといふのに、真に珍しい奴だな」

「シデンちゃん、そんなこと言っちゃダメだよあ」

うちのモノたちがそんなことを言う。俺としては、ちよつと前まで
人ですらなかったお前らが知っていることのほうが不思議なんだが。

こんこん。そこに、ドアをノックする音がした。

「将仁さん、俺つす。入っていいツスか？」

そしてドア越しにそんな声ができる。男の声ってことは鏡介か。

「ああ、いいぞ」

俺はそう答えた。すると、がちやという音とともにドアが開いた。

「おまえん家、ずいぶんと大所帯だなあ。まだいるの……」
ちよつと呆れ気味のシンイチの言葉がそこで切れる。シンイチだけじゃない。ヤジローも、委員長も、賀茂さんも、入ってきた奴の姿を見て、自分の目を疑っているみたいな表情をしている。

そういえば忘れていた。うちの連中に会わせるのは、これが初めてだったんだっけ。何も予備知識がないところに、俺とそっくり、どころかマジそのまんまな奴が現れたんだから、そりゃ驚くわな。

「あ、お客さんがいたんですか、ってどうしたんスか、みんな固まっちゃって」

「悪い、お前のこと紹介するの忘れてたんだ」

鏡介は鏡介で、何を驚いているといった風情だ。仕方が無いので、また俺がフォローに回ることにする。

「こいつ、鏡介って言っつてさ。えーと、俺の双子の弟なんだ。んー、俺らがずつと小さい頃に別のところに里親に出されたらしくてさ、音信不通だったんだ」

俺、嘘が上手くなつたな。いいことなんだろうか、悪いことなんだろうか。

「ども、はじめまして。加賀見鏡介かがみ かがみつていいいます。よろしくたのんます」

そうやって鏡介が頭を下げると、ようやく納得したらしく委員長たちの硬直が解けた。

「そ、そうなんだ、真田君つて、双子、だったんだ」

「双子つて、ホントにそっくりなんだな」

そうはいってもやはり、俺がもう一人現れたようなものなので、驚きの色は隠せないようだ。無理もない。初めて現れたときは、モノ

たちですら悲鳴をあげて驚いていたぐらいだからな。
だが、そのとき部屋に入ってきたのは、鏡介だけじゃなかった。

07・穏かな日は遠く その21（後書き）

どうも、久しぶりにあとがきを書く作者です。

ちよつと、擬人化たちの苗字についてコメントします。

テルミ：三石・・・ミツイシというメーカーのテレビだから。

シデン：中嶋・・・ゼロ戦のエンジンを開発し作っていたメーカー・中島飛行機より。

ケイ：真田・・・苗字を決める、という話をきいていなかったため、とっさに主人公と同じ名前を出した。

紅娘：李・・・擬人化する前に使われていた中華飯店の主人の苗字。
鏡介：加賀見・・・そのまんま、鏡から。

ちなみに、まだ出てきていない擬人化たちにもちゃんと苗字がついています。

そのうち出てきますので、楽しみにしてください。

07・穏かな日は遠く その22

「Hello」

「おじゃましますう」

鏡介が開けっ放しにしていたドアから、また別の奴らが入ってきたからだ。

俺はもう、誰が入ってくるか判っている。そして判っているだけに、ちよつと危ないような気がする。

「!!!!!!」

そして想像したとおり。その二人を見た瞬間、シンイチとヤジローががたんといすを跳ね飛ばして立ち上がった。

「パツキンだ！」

「メイドだ！」

「巨乳だあああああ〜っ！」

そしてバカ二人が叫んで身を乗り出す。

「What!?!」

その中でも特にでかい方、バレンシアがちよつと面食らった表情になる。

まあ、この二人は、我が家の巨乳ツートップだもんな。しかも、どつちもそれほど胸を強調しない格好なのに判るほどのサイズだから、シンイチやヤジローにとつちや妄想がいくらでも広がるというもんだ。

「うおおっ！てめえーっ、羨ましいぞこの野郎！」

「晴香よりでかいじゃねーか、うらやましいだだだだだだだ！」

そのシンイチが、機嫌が悪くなった委員長に耳を引っ張られ、引っ込んでいく。佐伯はクラスの中でも小さいほうだから余計に気に障ったんだろう。

「.....はあ、圧倒的やわ.....」

均整が取れたスタイルを誇る賀茂さんも、さすがにこの二人のそれ

には敵わないので軽く落ち込んでいます。まあ無理も無い。特にバレンシアが現れたときは、うちのモノたちがみんなそろって落ち込んでいたぐらいだしな。

「おいマサてめえ、もしかしてあの外人の胸、揉ませてもらったりしたことがあるのかよ？」

俺をヘッドロックしたヤジローが、締め上げながらそんなことを聞いてくる。どうやらこいつは巨乳に対して幻想を抱いているクチかだが、こう言っちゃなんだが俺の場合、この巨乳でいい思いをした記憶は無い。クリンは俺の性欲を暴走させようとするし、バレンシアは俺の顔をめり込ませて窒息させようとしたし。

「そんなもんじゃないわい！」

「うそつけ、これだけいるんだから一人ぐらいいるだろ」

「そんなセクハラじみたことできるか！」

だから、そう叫んだんだが、どうもこいつは納得してくれない。

「だめえーっ、お兄ちゃんをいじめないでーっ！」

「貴様、まだ痛い目に遭いたいのかあ！」

ケイとシデンのちびっこコンビ（この名前で呼んだらシデンに殴られた）が止めに入って、俺はやっと解放された。

「Hey, Mister! ? このimpolite（無礼）なguysは、ダレですカー？」

開放された俺に、ちよつと機嫌が悪そうなバレンシアが聞いてくる。そんなイヤなことは言われてないと思うんだが、巨乳と言われるのはイヤなんだろうか。

「あ、俺の学校のクラスメイトだよ、ってお前さつき電話を受けただろ」

「What! ? このimpolite（無礼）なguysがMisterのclassmateデース？」

「そう怒らないでやってくれ、悪気はないんだから」

「Of course. Vicious（悪い）なWillあるナーラ、ミーはnot forgive（許さない）デース！」

だんだん腹が立ってきたらしい。バレンシアは腰に手をやり仁王立ちしている。そうすると余計に胸が目立つんだが。

そういえばこいつ、俺をMasterじゃなくてMisterと呼んでいるな。こいつはこいつなりに考えてくれたらしい。

ふと、もう一人の巨乳、クリンが何をしているのかと思って周りを見してみると。

「あのお、将仁さんにい、そんなことをお、しないで下さいよお。

クリンからのお願いですう」

クリンは、ヤジローの腕を取ってぎゅっと抱きかかえ、ヤジローのことを困ったような目でじっと見つめながらそんなことを言っていた。

意識しているのかどうなのか、彼女の大きな胸がヤジローの腕に押し付けられている。メイド好きで巨乳好きのヤジローは、それだけで鼻の下がいつもの倍ぐらいに伸びただらしない顔になって、こくこくとうなずいている。

07・穏かな日は遠く その23

「写真とか録画とかしておきたいな、このヤジローの情けない姿」
「していますでしょう」

「うわ!？」

ぼつりとこぼしたところ、後ろからいきなり声がけられた。いつものまにか、テルミが後ろにいた、というか、俺がいつのまにかテルミがいるところに来ていたといった方が正しいか。

「私もただここに立っているだけではないでしょう。私の内臓HDDに、この部屋の様子を記録している所でしょう」

「へ?どうやって」

「私は、見たものを画像にできます。そして画像をHDDに記録することが出来ます。完璧でしょう」

小声でそう言うてにっこり微笑むテルミ。さすがといえはさすがだが、この抜け目の無さはちょっと怖い。

「でもなんでそんなことを」

「ええ、後で見直して、ご学友の人となりを把握するのに役立てようかと」

なんかいらぬことまで知られてしまいそうだ、と思つのは気にしすぎだろうか。

「何の話をしてはりますのん?」

そこに、今度は賀茂さんが顔を出してきた。

「へ、あ、いや、別にたいしたことは、なあ」

「はい、庭の手入れの話を少々」

「そうそう、ちょっと、草むしりが必要かなーってさ」

「はあ、そうどすかあ」

とっさのでまかせだったが、テルミはしれつと俺に合わせてくれる。おかげで、賀茂さんも納得してくれたらしい。

「それより、輝美はん、どしたな。お手水ちよすずはんはどちらですのん?」

「お手水はん？あ、はい、少々お待ちください」

賀茂さんは、テルミに何か小声で尋ねていて、テルミはそれにやはり小声で答えている。しかし、小声と言ってもこの距離だと十分聞こえてしまう。

「将仁さん、こちらの方を、トイレまで案内してきます。宜しいでしょうか？」

「ああ、いいいいいよ、そんなことまで断らなくても」

「はい。では、どうぞこちらでしょう」

賀茂さんは、どうやらトイレのある場所を聞いていたらしい。テルミの案内に素直についてリビングを出て行った。

「さて」

ドアが閉じたのを見届けて、改めてリビングの中を見回す。

「うへへへいたたたたた」

「貴様、なんとこの弛んだ顔をしているのだ！」

「シデンさあん、お客様なんですからあ、顔をつねるのは止めましょうよあ」

まず目に付いたのは、クリンに腕を抱きかかえられて鼻の下を伸ばしながら、シデンに頬を引っ張られて顔を歪めているヤジローの姿だった。

野球部では同級生や後輩から鬼と呼ばれているヤジローだが、そいつらが今の姿を見たらどう思うだろう。

「もう、シンイチったらいつもいつも」

「あ、そのぐらいにしたほうがいいんじゃないスか？」

「真田君は黙ってて。これは私たちの問題よ」

「あのー、俺、将仁さんじゃないんすけど」

「あ……えーと、加賀見さんだっけ」

「ええ、その、あまりの剣幕に、この子もびびっちゃってるんでこっちでは、正座しているシンイチに向かって、委員長が説教をしている。そこに声をかけた鏡介まで一喝されており、その後ろではケイがこわごわといった様子で覗き込んでいる。

なんとというか、委員長とシンイチのカップリングが出来たときに想像したことのある絵だ。鏡介もそんなところに口を出さなけりゃいいのに。なんてなことをぼんやりと考えた。

「アイヤー、将仁サン、そなたコロで何してるアル？」

「Come on, come on. Come here & amp; let's eat the shou-ryu-ken. (こつちに来て、ショールューケンを食べましょう)」

「バレンシアサン、違うアルよ。ショールューケンじゃなくて、小籠包アル」

「Ah, sorry.」

テーブルの前に座った紅娘とバレンシアが呼んでいるのでそっちに向かう。バレンシアがちょっとぼけたことを言っているが、バレンシアの場合本気ボケなのか考えボケなのか判らない。

「ハイ、将仁サン。まだ食べてないアルよね。ちょっと冷めてしまったアルけど」

俺がいつも座っている席に座ると、右に座った紅娘が箸と取り皿を出しながら顔をよせてくる。

「Well, ショーロンポは、this way でeatするでシタね？」

一方、俺の左側に座ったバレンシアも、そんなことを言いながら顔をよせてくる。

「Master. Now, Miss Terumiがescort (案内) したgirlですケド」

「昨日、話に出た、オンミョージかものヒトアルね？」

そして、小声で一緒に俺にそんなことを聞いてきた。

「……………気づいていたのか」

「After dinnerに、Miss Keiに、photoをshowしてもらったデス」

「みんな、賀茂サンのコト、注意(気づく)しているアルよ」

「そうか……………!お、お前ら、まさか!？」

ふと、非常に危険な発想、すなわち早いうちに叩きのめすことが頭に浮かび、椅子を飛ばす勢いで立ち上がりながら叫んでしまう。そんなことをしたもんだから、部屋中の視線が一齐に俺に集まってしまう。

「あ、いや、その」

「将仁サン、なに驚いているアル？」

「Aha、もしかしてMister、ginger（生姜）はno goodデースか？」

「アイヤー、對不起對不起、それは知らなかつたアル」

俺がやってしまったオーバーリアクションに対して、二人が気を利かして誤魔化してくれる。なんか、これでは俺が一番迷惑をかけているじゃないか。

「お兄ちゃん、シヨウガ、嫌いなのか？」

ケイがいつのまにか来て俺を下から見上げている。

「まあまあ、それじゃ、生姜入てないタレどうぞアル」

にこにこ顔で新しい取り皿を出しながら、紅娘は空いた手で服のすそを軽く引つ張って座ることを促してくる。そして、バレンシアは俺のほうを向きながら、自分の口元に人差し指を立てて見せた。

「あ、ありがとう」

「ほらほら、食べるヨロシ。ワタシの特製アル、食べ方は判るアルよね？」

「Mister、open your mouthネー、ほーら」

「わーん、ちよつとそれはケイがやるのー！」

俺が椅子に座ると、俺のまわりでモノたちが騒ぎ出す。すると。

「なんでだよあうひひおわただだだ！」

「きつさまあ！鼻の下を伸ばすなあ！」

「うふふふつ、将仁さんに似てえ、甘えん坊さんなんですなえ」
ヤジローは一瞬羨ましそうなそぶりを見せたが、すぐシデンとクリンにいじくりまわされ。

「まったくもう、あなたはいつつもいつつも……」

こつちではシンイチと、なぜか鏡介が委員長の前で正座させられて説教されている。

「おい、委員長。鏡介のやつ、何かやったのか？」

「え？」

気になったのでそのことを聞いてみる。すると、なぜか我に返ったようなきよとんとした表情をこつちに向け、それから説教をしていたほうを見て、すつとんきような声をあげた。

「あれ、なんでさな……じゃなくて、加賀見くん、どうしたの？」

「え、あ、いや、なんとなく」

どうやら、怒られているシンイチを見て影響されたらしい。もともと鏡だかららしいといえばらしいのだが、鏡介の奴、俺が受ける災難を代わりに蒙ることが多いような気がする。

07・穏かな日は遠く その25

しかし、俺が言うのもなんだがおよそ客らしくない連中だ。人の家に勝手に押しかけてきてこんな自由なのはある意味賞賛に値するな。

「ったく。ほら鏡介、紅娘がせっかく腕を振るってくれたんだから、こっち来て食おうぜ」

「ういっす」

「あ、じゃ俺も」

「……そうね、せっかく用意してくれたんだし」

鏡介に声をかけると、シンイチと委員長もいっしょに返事をしてこっちにやってきた。

「さあ、参りましょお」

「こら、貴様。いい加減そのしまりのない顔を直さぬかつ」

それにつられるかのように、ヤジローがクリンとシデンに引っ張られながらこっちに來て適当な席に座った。

ヤジローが席につくと、クリンがやっとヤジローの腕を離した。と思つたら、すすすつとこっちに近づいてきて、俺の耳元でささやいた。

「一人陥落しましたよお」

思わずそっちを向くと、すでにクリンは俺のもとを離れ、再びヤジローのそばにいた。となると、あの胸を押し付けていたのは故意だったってことか。

ふと、そのクリンが着ているメイド服から、うちのもう一人のメイドのことを思い出した。

そのもう一人のメイド、テルミが、賀茂さんをトイレへ案内すると、言つて部屋を出たまま、帰つて来ないのだ。

まあ、あの抜け目のないテルミだから、何かあつたら何か行動を起こすだろう。

「戻りましたえ」

そんなことを考えていると、賀茂さんがテルミと一緒に帰ってきた。
「ただいま、戻りましたでしょう」

「ん、ご苦労さん」

ずいぶん長いトイレだったなーとは思ったが、あつちは女なので自重することにする。(人間というより妖怪に近い存在がほとんどはいえ)何日か女だらけの環境で生活していたので、ちょっとはデリカシーというものを理解したつもりだ。

「将仁さん、ちょっと、報告したいことがあるでしょう」

すると、近くに来たテルミが、俺に小声で耳打ちしてきた。

「あの方、トイレで本来の目的と違うことをしていた可能性が」

「は？違うこと？」

「はい、ドア越しでよく聞こえませんでした。何か小声で呟いていたのでしょうか」

「……電話でもしてたんじゃないか？ケータイくらい持っているだろ」

「そうでしょうか。とにかく、もうしばらく観察すべきでしょう」

「まあ、それは任せるよ」

「はい、それでは」

最後の一言だけを通常のボリュームで言って、テルミは俺から離れた。

「にしてもマサ、お前んちつてずいぶん大所帯だなあ。しかも女ばつか。これ全部親戚なの？」

「ソレについてハー、ミーがexplainするデース」

シンイチが俺に質問してくるが、それに答えたのはバレンシアだった。

すると、視線がバレンシアに集中する。この大所帯の人物関係がどうなっているのか、少なくともうちのモノ以外は気になる話だろうが、俺はこの家の状況を本当に説明するのが心配になる。

「いらぬことまで言うなよ？」

思わず釘をさしてしまっが、バレンシアはこっちを見て自信ありげに笑みを返してきた。

07・穏かな日は遠く その26

「Hello. ミーは、Valencia McQueenと言います。At first, this houseについてexplainします」

どうにも怪しい、というよりうさんくさい口調だが、それでも聞いていると、内容は以外にまともだった。

最初に、この家が「弁護士常盤」つまり常盤さんの持ち物で、他のメンバーはそこに「とある事情で」一つ屋根の下で生活をしていることを説明した。

次に、この家に今いる連中の関係についての説明になったのだが、実のところこれが結構すごいことになっていた。

まず、俺が家の外で話した「親戚」は、俺、ケイ、鏡介、シデン、紅娘と、外出して不在のヒビキの6人に絞られていた。鏡介はさっき俺が言ったとおり「別々に引き取られ、生き別れた双子の片割れ」ケイは俺から見て「父方のはとこ」シデンは「母方のはとこ」とさわれていた。そして、その格好と時々口にする中国語、そして何よりあのインチキくさい喋りのせいで日本人に見えない紅娘は、「中国残留日本人孤児の孫」という、ないことはないだろうが少々無理のある設定になっていた。なお、今ここにいないヒビキについても説明があり、ここでは「父方の親戚がマレーシア人女性との間に設けた子」という、ベタといえばベタだがちょっと問題がありそうな設定だった。

そして、親戚ではないとされたメンバーのうち、バレンシアは自分を「日本の法律を勉強するためにアメリカからツテを伝って常盤弁護士の元へ来て、住み込みで働いている助手」と説明。テルミとクリンは、「大所帯になってしまったこの家の家事を切り盛りするために、常盤弁護士に雇われた家政婦」ということにされており、レイカは、「栄養管理のために常盤弁護士に雇われた調理師」という

ことになっていた。

そして俺たちと常盤弁護士との関係だが、バレンシアはそこでどうとう「遺産」という言葉を使ってしまった。とある人物（具体的な名前は出さなかった）の残した遺産を継ぐ資格を有するのが俺達6人であり、どうやって分配するかを決めるために集まってもらったのだそうだ。さすがに遺産総額や分配方法についてはぼかしていたが、それでも高校生に対しては少々刺激の強い話だ。

この設定について、うちのモノたちの間ではちゃんと話し合いがもたれていたらしく、誰も異論を唱えなかった。あえていえば、ここでそれを初めて聞いた俺が、一番違和感を覚えていると思う。正直、電話をしてから俺が帰ってくるまでの間にこれだけの設定をよく作ったもんだと、ちょっと感心してしまった。

「And so, Miss Tokiwa andミィは、the estate（遺産）がfairly（正当）にsplit（分配）されるヨウ、lawyer（弁護士）とシテobserver（監視）しているのデース。Do you understand?」

最後にそう言つて、バレンシアの説明は終わった。

「おいマサ、なんで黙つてたんだよ？」

「ホントに金持ちになれそうじゃんか」

最初に反応したのは、シンイチとヤジローだった。俺の両脇にやつてくると、いきなり肩を組んできて、左右からグリグリとウメボシをしてきたり、ゴツゴツとコブシで小突いてきたりしてくる。

なんか悪意が込められているような気がする。それが証拠に。

「こんだけ美人に囲まれて、さらに金持ちになるだなんて、羨ましいじゃねえかこの野郎！」

「明日からしつかりタカつてやつからな、覚悟しろよ？」

リビングの床に引き倒され、二人からチョークスリーパーやら腕ひしぎやらを仕掛けてきやがった。これが結構マジで痛い。

「コラ、痛い、痛いっ！離せ、マジ痛いって！」

俺も結構本気で叫んでいるんだが誰も止めてくれない。というのも。

「あーあ、はしゃいじゃってもう」

「いいなー、ケイもあんなふうにお兄ちゃんじゃれてみたいなー」

「上官も大げさだな。あんないい加減な技、痛いわけがなかるう」

と、誰一人俺の危機を察してくれない。

「い、いい加減にしろーっ！」

渾身の力を振り絞り、暴れようとする、二人はぱつと手を離しやがった。

「ところで、マサ。お前んちって、でっかいテレビなかったっけ」
「やっとな開放され、ほっとしたのもつかの間。シンイチの奴が、嫌なことになりきやがった。」

「テレビ？」

「ほれ、あのすっごく高そうなでっかいプラズマテレビ。どこにあるんだ？」

「一瞬、血の気が引く。」

さらに。

「なあ、冷蔵庫ってどこだ？」

「キッチンをのぞいたヤジローがそんなことを聞いてきた。」

非常に、まずい。なにしろ、サイズの差はあれ、テレビも冷蔵庫も今の家庭には普通にあるシロモノだ。逆にないほうがおかしい、シンイチとヤジローは、引越す前の俺の部屋にそれぞれがでんと鎮座しているのを見ている。

「あ、い、今、修理に出してるんだ」

とつさに口から出た言葉がそれだった。

「修理？どっか壊れたのか？」

「いや、壊れたってわけじゃないんだけど、ちょっと調子がおかしくて、メーカーのほうに出して調べてもらってたんだ」

もちろん、嘘だ。冷蔵庫は今買い物に行っているし、テレビに至っては同じ部屋の中にいる。

ちらっと、そのテレビだったテルミのほうを見ると、テルミは言いたいことを懸命に我慢しているような顔をして立っている。

ごめん、テルミ。俺としては、そんな顔をされると非常に申し訳ない気持ちになるんだが、そんなこと知っているはずもないシンイチは、そのテルミの目の前で、大変なことを口にしてしまった。

「壊れたんだったら、買い換えたほうが早くね？」

「なんてことを言うのでしよう!」

その瞬間。テルミがいつにない声をあげた。

「お客様の発言とはいえ、聞き過ぎることは出来ないでしょう。壊れたらすぐ捨てるなんて、そんなの、ひどすぎるでしょう!」

近頃はものを大切にしない人が増えているとよく言われますが、まさかここまでだなんて」

なんかずいぶんと気合が入った言い回しに、シンイチは啞然となる。

「まあまあ、テルミさあん、落ち着きましようよお」

「これが、落ち着いていられるわけがないでしょう!もうっ!」

クリンが止めに入るが、テルミはそれでも鎮まらない。

「お前も、もう少し考えて発言しろよ。あんな何十万もするようなテレビが、そう簡単に買い換えられるわけないだろ。今の俺がそんな金持ちだと思うか?」

「そうだそうだ、今のはお前が全面的に悪い」

「ケイ、ものを大切にしない人、嫌い」

ヤジローのほともかく、ケイにそう言われたのはダメージが大きいらしい。シンイチの奴、なんかがつくりきっている。

07・穏かな日は遠く その28

そんなとき。今度はヤジローが顔をあげた。

「何の音だ、これ」

言われてみて耳を澄ますと、わずかにではあるが家の外から自動車やバイクの排気音みたいな変な音が聞こえてきた。それも、俺たちが住んでいる閑静な住宅街にはおよそ似つかわしくない、俗に暴走族と呼ばれる連中の車やバイクが出すような騒々しいものだ。

「なんだよあれ、うるせえなあ」

窓の外をちらりと見て、さも鬱陶しそうにヤジローが呟く。音の感じからして、まだ窓からみえるほど近くではなさそうだが、俺からしても確かに気にはなる。

「なあ、あれ、あの音、近づいて来てまへん？」

そして、賀茂さんが言うとおり、その爆音はだんだんと大きくなっていく。そして、大きくなるに従い、それが1台や2台じゃないことがはつきりと判るようになった。

うちに関係あるバイクといえばヒビキだ。今は外出しているし、元のバイクの時に排気音がかかったから判らなくはないんだが、あいつは一人しかいないから「複数」ってのはありえない。

「ちよつと見てくる」

野次馬根性旺盛なシンイチが立ち上がったのをきっかけに、うちのモノたちやヤジローたちがぞろぞろと野次馬と化して外を見る。行動力のある連中になると靴をはいて外に出てみたりする。実は俺もその一人だった。

そして、俺が家の前に出ると、ちよつどその騒音の元が、30mぐらい先の曲がり角を曲がって姿を現したところだった。

案の定、それはバイクだった。しかも10台ぐらいの集団だ。そしてそのバイクは、風除けにこてこてした裝飾がついていたりマフラーが長かったりと、改造していないのが見当たらない。

さらにはその中に1台、紫色のワゴン車が混じっており、そいつにも羽みたいな奇怪な装飾がついている。

そして、そのバイクに乗っている連中も異様だった。いわゆる暴走族、最近では珍走団とか言われている、特攻服と称されるなにかがっこいいの的理解に苦しむ改造学生服みたいなや、派手なワツペンや刺繍がついたライダースーツを着込んだやつらだ。中にはもう時代遅れな応援団の旗みたいなのを掲げた奴もいる。

だが、そんな外見に似合わず、そいつらは妙にふかす事も(うるさくなるような改造をしているんだからそれでも十分うるさいんだが)変なスピードを出すことも危ない運転をすることもなく、気持ち悪いぐらいに模範的な運転をしながら、こっちに向かつて走ってくる。なんだありゃ?と思つて見ていると、そいつらがうちの前にせまつて来たので、さっさと通り過ぎてくれと思いつつ道をあける。

だが、その妙にお行儀のいい暴走族の、唯一の四輪走行であるあの紫色のワゴン車が、なぜかうちの家の前でできーっとブレーキ音を立てて停止した。それに伴い、他の族連中も停止する。

と同時に、その特攻服やライダースーツを着込んだ連中がものすごい勢いでバイクから降り、紫色のワゴン車のまわりに集まってくる。その中の一人が、そのワゴン車のスライドドアに手をかけると、あつけに取られて見ている俺達の前で一呼吸置いてから、がきょんとそのスライド式のドアのロックを外す。

「お疲れさんつしたッ！」

「『お疲れさんつしたッ!!!!!!』」

その瞬間、リーダー格らしい奴の聲に続いて野太い野郎どもの大声が響き、特攻服の男たちが一斉に頭を下げる。

なんなんだよ、これ?なんてことを考えている俺たちの目の前で、ドアが開いたワゴン車の中から聞き覚えのある女の声が出た。

「まったく、だからそんなことするなって言ってるんだろ」

そして、声の主がワゴン車の中から現れた。

彫の深い、東南アジア系の顔つき。緩やかなウェーブのかかった黒い髪。赤と黒のライダーズーツに銀色のマフラー、そして、幅が広く色が濃いサンバイザー。

「ひ、ヒビキ!？」

思わず、俺はその女の名前を呼んでしまっていた。

「あ………将仁、いたのかい、参ったねこりゃ」

ヒビキは、目を丸くした俺たちの姿を見ると、とても居心地が悪いように苦笑いした。

「まったく、ひどい乗り心地ね。トラックの荷台のほうはまだましだわ」

そのヒビキの後ろから、違う女の声とともに、また一つ人影が現れた。

季節外れの雪女といたいでたちのその女性は、その紫色のワゴン車から降りると大きく伸びをする。

「れ、レイカまで………」

確か、二人とも夕食の買出しに行っていたんじゃないか？

「うつつ、姐さん、お荷物ですッ!」

あっけに取られて立ち尽くす俺達の目の前で、特攻服の連中がポリ袋に入った食料品をヒビキに差し出した。

ここまで来てようやく、ヒビキがこの暴走族たちを何らかの方法で手なずけたんだと理解できた。

「あー、もういいから、とっとと帰って、メンテしてやんな。もうバカなことすんじゃないよ」

「ウツス、失礼しますッ!」

「………失礼しますッ!」「………」

ヒビキがめんどくさそうに手をひらひらさせると、暴走族どもはまるで軍隊のように畏まり、綺麗に頭を下げて挨拶をする。そして、我先にと自分たちが乗ってきたバイクに飛び乗ると、来たときは対照的に、ものすごい勢いで逃げるように走り出した。

来たとき以上のものすごい爆音が消えると、暴走族はきれいに姿を消していた。

「……………ヒビキお姉ちゃん、なんかすごかったの……………」

「……………お前、何かやらかしたのか？」

「あ、あー、いやちよつと……………」

「外にいと往來の邪魔になるわ。さつさと中に入りなさい」

俺の質問に歯切れの悪い返事をするヒビキ。それを見かねたのだから、レイカが外で立ち話をする俺達を家の中へと追い立てる。

そして、何人かは買物袋を持たされ、そして家の中に消えていった。

07・穏かな日は遠く その30

「あんたたち、将仁のクラスメイトなんだってな。あたしは川杉響^{かわすぎひびき}。一応、将仁の親戚^{おかしや}つてことになつてる。よろしく頼むわ」

「私は、この家の食事と栄養管理を担当している、氷室怜香^{ひむろれいか}よ。よろしく」

「そういえばご挨拶していませんでしたあ。私い、こちらに住み込みで働いていますう、安房久倫^{やすふさくりん}と申しますう」

3人が自己紹介して、ようやくこちら側全員の挨拶が完了した。驚いたことに、ケイ以外はみんな真田以外の姓を名乗り、この共同生活が始まるまでまったく関係が無かったことを強調している。モノたちの努力に、俺は頭が下がる思いだったんだが。

「んじゃ、マサ、えーと真田の弁当を作ったのは、氷室さんだったんですか？」

「ええ。それも仕事のひとつだから」

「あー、そ、そうだったんですか、そうっすか、仕事っすか」

「なに？何か言いたいことでもあるのかしら？」

「あ、そのー、マレー語とか、判るのかなーと」

「へ？あたしがかい？」

「ええと、マレーシアとのハーフなんすよね、ヒビキさんって」

「あ、あー、そういうことかい。残念だけど、あたしや物心付いた時から日本に住んでいたもんでね、日本語しか判らないんだわ」

「Why ユーはsuchなことをinquireするデース？」

「そ、それは、その……ねえ」

「But、このspecも、なかなかhardデースよ？Stiff backはhaveしてしまうシ」

「……いやみにしか聞こえない」

「そういえば、貴様、京の都の生まれだそうだな」

「はあ？あ、へえ、そうどすけど？」

「京の人間は、靖国をどう受け止めておるのだ？」

「ヤスクニ？靖国神社のことですか？」

「他にあるまい。支那の者どもや半島の輩は英霊の眠る地を目の仇にしておるが」

「どうと言わはりましたも……うちは、そんなに気にしてまへんえ？」

「気にしてない？」

「どこにあっても、お社はお社でっしやる？」

それに気づくやつはいない。それだけ作りこまれた設定だつてことなのかもしれないが、ここまであつさりスルーされるとなんか不憫ふびんになってくる。

「ま、いいか。変なこと言われなけりゃ」

さつさと頭を切りかえると、俺は席を立った。

「あれ？お兄ちゃんどこ行くの？」

「ん、ちよつと着替えてくる。うちにいるのに制服でいることもないだろ」

「うん、わかった」

「行ってらっしゃいませ」

ケイとテルミに見送られ、俺はリビングを後にし、ようとしたときだ。

「そう。あなたも、お弁当を作つてほしいのね？」

レイカの声が聞こえた。ちよつと気になって覗いてみると、ヤジローがレイカと向き合っていた。

「いいんすか！？ホントすか！？」

「別に構わないわよ。1つ作るのも2つ作るのも3つ作るのもそんなに手間は変わらないもの」

そして、レイカは軽く微笑んだ。整った顔からのそれは見ていてもなんかいい。

「いやつだ。と思つたんだが。」

「ただし、タダというわけにはいかないわね」

その笑みを浮かべたまま、レイカは何とも冷たいことを口にした。

「おい、金とるのかよ!？」

「当たり前でしょう、こっちは仕事でやっているのだから。将仁君の友達だからといって、それだけでそこまでしてあげるいわれは私には無いもの。それに材料費もタダではないし」

びっくりして質問したら、レイカの奴は平然とそう返しやがった。

「そうね、まずは代金から。みんな学生でお金がないだろうから、1食につき500円にしておいてあげるわ。それから、容器は自分で用意して、自分で取りに来ること。そして、嫌いなものがあつたとしても残さないこと。どれか一つでも守れなかったら契約はそこまで、再契約は無いと思いなさいな。ああ、それからもうひとつ。

将仁君に持って行かせるのも不可ね」

前言撤回。なんつーことを言うんだ、こいつは。ヤジローのやつは、そんな生っぽい話をされたもんだから啞然とした顔をしちゃってる。でもまあ、ヤジローのぶんの弁当を学校に持っていくのは確かに嫌だ。

気を落とすな。そういう思いを込めて、ヤジローの肩をぽんぽんと叩いてやった。

07・穏かな日は遠く その30（後書き）

どうも、作者です。

ちよつと、モノの名前についてコメントの続きを。

バレンシア：マックイーン・・・この世界の、バレンシアと同じメーカーのパソコンの名称。

クリン：安房・・・もともとは「あわ」という読み方だったが、そのままでは面白くないのでちよつと読み方を変更。

ヒビキ：川杉・・・カワスギというメーカーのバイクだったから。

レイカ：氷室・・・雪女のイメージと冷蔵庫のイメージから、昔からある「氷室」を連想したため。

ちなみに、現実世界ではどこに該当するかは、言わなくても判ると思います。

ご意見・ご感想などお待ちしています。

では、続きをお楽しみください。

「まだいたのか」

制服を脱いで甚平に着替えて下りてきたら、外来種どもはまだリビングでくつろいでいた。テレビもゲームも玩具もないのによく嫌にならないもんだ。

と思ったら。

「なあに一人で悩んでんだ、このバカチンがあ」

テルミが、どーいうわけかそのくつろいでいる連中の前で、日本で一番有名な学園ドラマの先生のモノマネをしている。しかもそれが妙にうまい。性別の違い&衣装の違いという絶対的なものがあるのに、その姿が見えてきそうなくらいにそっくりだ。

これは、さすが元テレビ、ということにしておこう。あの大画面テレビでそのドラマを見た覚えはないが。

それはそれとしてこのモノマネ芸人以上のモノマネは大うけしている。うちのモノどもも一緒になって楽しんでるのがその証拠だ。見せたことないから珍しいのは珍しいだろう。

「じゃあ次に、ゆう りんをやります。似ていたら拍手喝采をお願いしますでしょう」

調子に乗ったらしいテルミが、こんどは別惑星から来たというキャッチフレーズのグラビアアイドルのマネをはじめめる。が、素直に始めると思ったら。

「社長は、そろそろ りん星を爆発させよー言うてるんやろ？」

「それマネージャーですう、社長はまだ大丈夫って言ってますう」

「んな！？社長はまだイケル言うтонのか！」

一般人イジリに関しては芸能界一と賞される出っ歯関西人と某番組でやったやり取りを一人二役で再現させていた。ちなみに、グラビアアイドルのほうはあの微妙に遅れたテンポの喋り方なんかクリオンと通じるから、ふたりにコント仕立てにするなんてのもありかも

しれない。

にしても……似ている。テレビでやっているモノマネ芸人は「ホントにそっくりにやる」か「特徴的なところを誇張してやる」かのどっちかだが、テルミのそれはあえていえば前者に相当する。が、そのそっくり加減は相当なものだ。ぶっちゃけて言えば、そっくり度をウリにしているモノマネ芸人の過半数は軽く追い抜ける。なんでそんな芸達者がこんなところでメイドなんかしとるんだと言われたら、返答に困るであろうほどだ。

困ることといえば、こいつらのサービス精神だ。なにしろ、呼んでもいない客なのにあんな芸見せて退屈させまいとしている。そんなことするからこいつらが帰らないんだ。

「お前ら、ホント図々しいな」

「まあまあ、いいじゃないスか」

なぜか入り口そばにいた鏡介になだめられ、俺は部屋の中に引き入れられる。

そして、なぜかヤジローらの前に引っ張り出されると、鏡介のやつがいきなり宣言しやがった。

「それじゃ、鏡をやりませう」

「はあ!？」

ちよつと待て、なんだそりゃ。俺は何も聞かされていないぞ!?!? そう思いつつ鏡介のほうを向くと、鏡介はその俺と同じポーズ、もとい、鏡に向かったように左右対称なポーズでこつちを向いている。鏡というのは、つまりはそういうことらしい。こいつがはじめて俺の前に現れたときの光景を思い出す。

なんの打ち合わせも無くこれをやるんだから、傍から見たらすごい。よく、一卵性の双子だと意識せずに言葉がハモったりするというが、今の俺の場合、俺はタイミングを合わせようとかはせず、全部鏡介がやっているんだから、ある意味双子のそれよりすごい。

だが、なんで勝手に押しかけてきたこいつらを楽しませにやいかんだ、という気持ちがあるので、あまり面白い動きはやってやらない。

かった。だが、簡単な動きばかりだったのが幸いしてしまったのか、鏡介は本当に寸分たがわず俺の動きをトレースしてみせ、余計にうけてしまった。

「どうも、「ありがとうございましたー！」」

そんなわけで調子に乗ってしまい、最後には思わず二人して漫才コンビみたい頭に頭を下げてしまった。

「って、ちがーっ！お前らいつまで居座るつもりだーっ！」

委員長までが完全に腰を落ち着かせて、賀茂さんや紅娘らとまつたりとお茶している状況を見て、思わず叫んでしまった。つまらないところからこいつらの正体がばれるんじゃないかとか、何も知らない（はずの）常盤さんがこれを見てどう思うか（常盤さんの場合、クラスメイトが来たぐらいでは怒りはしないと思うが）なんてことを考えると、やっぱり不安になってしまう。

「将仁、そんなかつかすんなって。あんたのダチなんだろ？」

ヒビキ、俺はお前らの正体がばれないか心配してるからこんなことをしているんだぞ。

「そうね、もう6時になるものね」

最初にそう言っただけで立ち上がったのは委員長だった。シンイチに感化されたとはいえ、そういうところはちゃんと締めてくれるのがありがたい。

それに従い、他の連中もぼちぼちと（男性陣は不満いっぱいな様子で）鞆を手に立ち上がる。

その気持ち、わからなくはないが、お前らがいると俺が安心できないのだ。

「あら、帰るの？」

夕食の支度にとりかかっていたレイカが、キッチンから顔を出す。

「せっかく、今日は少し多めに作ろうと思ったのに」

「ここで金とるなんて言うなよな」

「まさか、今はお客様ですもの。ここも料理店じゃないし」

俺の失礼な質問を、レイカは笑って許してくれる。しかしさっきの発言はインパクトが強すぎたぞ。

「レイカさんもああ言ってるし、もうすこしいても……」

「殴られたいのかためーは」

そう言っただけで居座ろうとするシンイチに握り拳を見せると、あつちは降参したように小さなバンザイのポーズを見せる。

「李さん、小籠包とお茶、美味しかったわ。今度作り方を教えてね」

「お任せするヨロシ！」

紅娘よ、そーいうことを軽々しく引き受けるんじゃない、また来ちまうだろうが。

「あ、せやせや」

そんな中、何かを思い出したらしい賀茂さんが、自分の学生鞆の中を「ごそ」とまさぐると、何か小さなものを取り出した。

「真田はん、今日はおよばれさせてもろて、おおきにな。これ、もろといてくれへん」

そう言つて差し出したのは、小さな鈴と赤い紐細工がついたキーホルダーだった。

「これは？」

「うちが身いよさせてもろとる、四賀茂神社のお守りどす。こないなもんしかのうて、かんにんな」

「え、そんな悪いよ」

「せやかて、今日はうちらが勝手に押し掛けたんやさかい、なんもせんのも気いひけるんどす。そない高いもんやおまへんから、もろといて」

断つても押し付けてくるので、結局受け取ってしまった。何人かのじと「つとした視線を感じるが、だからといってここで突っ返すのもそれはそれで失礼だからな。

「それに比べて、お前らはたかるだけか？」

帰ろうとする連中をじろつとにらむ。ヤジローとシンイチはそそくさと目をそらす。が、委員長は平気な顔でこう言い返した。

「それじゃ、今度真田君が何かしたら弁護してあげるわよ」

「アホ、こいつらと一緒にすんな。まああてにしてねえがな」
「ならいいじゃない」

なんて感じであっさりとかわされてしまった。

07・穏かな日は遠く その33

ぱたんとドアが閉まって、やっとうちを騒がした連中が姿を消す。

「ふう〜・・・」

ここ数日で何度目かの、身がしばむような息を吐く。なんか寿命が数年分縮んだ気分だ。

よく考えたら、こいつらしょっちゅう外出しているし、そこで人目にさらされているし・・・。さてよ、確かこいつら、街中で空を飛んだり時速80キロで走ったり人を氷漬けにしたりしている・・・。けど、モノだからってことは判ってないよな。

「お〜に〜い〜ちゃ〜ん？」

その俺の背中をくいくいと引つ張り、恨めしげな声を出す奴がいる。振り向くと、とつても不機嫌、を通り越して恨めしそうな顔のケイが、俺を見上げている。

「出して」

そして、なんかくわってな感じで手をこっちに差し出す。が、声のトーンの低さはただの「なんかくわ」って感じではない。

「へ？何を？」

「さっき、賀茂さんから何か貰ったでしょ。出して」

「うえっ!？」

思わずポケットの中に手を突っ込んでしまう。そこには、さっき賀茂さんからもらったお守りが入っているのだ。

「出してっ!」

すると、ケイが獲物に襲い掛かる肉食獣のごとき動きで俺の手に飛びかかってきた。

酔っ払ったときといい、こいつはどこかネコっぽいところがある。ってそれどころではない。

取られたらどうなるかわかったもんじゃないので、すばやくそのお守りを指に引っ掛けて引き出し、高々と差し上げる。ケイは俺より

頭一つ小さいしそのぶん各リーチも短いからこれで届かない。

「わーんっ、それお兄ちゃんが持ってちゃだめっっ、ケイに渡すの
おっっ！」

びよんびよんと俺に飛びつくきながらケイはそのお守りを取ろうとする。ちなみにそれをやろうとするのはケイだけで、他のモノは仲のよい兄妹がじゃれているを見守るかのように楽しそうに眺めているか、そそくさとそこから離れて自分の仕事、もしくは手伝いに取り掛かるかだ。

「これは俺が貰ったんだ、だから俺のもんだろ！」

「やっっ、やだっっ、持ってちゃだっっ！」

なんか知らんがそこでもみ合いになる。なんでそこまで執着するんだ。

ちりんちりん。

そうやってもみ合っていると、お守りについていた鈴が鳴った。まあ頭の上に掲げてあれだけ暴れば鳴るのは当たり前だ。

だがその瞬間、おかしなことが起きた。

あれだけ暴れていたケイが、一瞬体をびくつと震わせると、耳を押さえて俺から飛びのいたのだ。

「ど、どうしたんだ？」

「や、やっぱりいらぬ！」

そしてくるりときびすを返すと、リビングへと逃げるように消えていった。

「どうしたんだ、ありゃ？」

「その、鈴のせいじゃないですか？」

次に声をかけてきたのは鏡介だった。だがこいつの場合、このお守りを俺から取り上げようとする気配はない。

「その鈴の音ですが、将仁さんはどう思います？」

と思ったら、妙なことを聞いてくる。手の中にあるそのお守りの鈴に目をやるが、そこにあるのはどうってことはない、直系5ミリ程度の金と銀のめっきがされた鈴だ。

ためしに、自分の耳元で鳴らしてみるが、そこから聞こえる音も、ちりんちりんというごくありふれた鈴の音だ。

だが、ふと横を見て、俺はその音がどこか普通ではないことに気づいた。

鏡介が、なにか嫌な音でも聞いたように両耳をふさいで顔をしかめている。そして、いつのまにか俺から数歩離れていた。

「……………なんか、嫌な音ですね」

「そうか？俺はどうとも思わないけど」

「本当ですか？」

鏡介が、とつても嫌そうな顔でそう聞き返してくる。こいつにとつては、この鈴の音は「なんか嫌」な音のようだ。

お守りの本体、というか赤い紐細工の部分を見ると、金糸で「厄除け」などと書かれている。つーことは、このお守りは厄を除けるもので……………じゃあなにか、このお守りについては鈴の音が嫌いなケイや鏡介は災厄だったことか。そんなアホな。

しかし、考えてみりゃ、災厄とは言わないが、妖怪に近いといえはそうともいえる連中だよな。

「でも、ま、この音が嫌なら、みんなの前には出さないようにしようか」

俺はそう言いながら、そのお守りをポケットの中に押し込んだ。

07・穏かな日は遠く その34

常盤さんが加わった夕食の席は、俺が連れてきたお騒がせ軍団の話
題で持ちきりになった。

「まあ、そうだったのですか」

「うんうん。レイカサン買い物行っていたから、ワタシが小籠包で歓
迎したアルよ」

「将仁くんが追い返してしまわなければ、私の料理もご馳走してあ
げたのですけれど」

「けど、それに味をしめて毎日来るようになってしまったら、それは
それでまずかないかい？」

「貴様は、そのぶん自分が食するぶんが減るのを危惧しておるのだ
ろうが」

「Boysは、a little impoliteでしたネー。
Master、friendハ、よくchooseするデース」

「でもお、そんなに悪い方々ではないと思いますけどお」

「そういえば、テルミ。さっき、リビングの様子を録画したって言
つてたよな」

「ああ、はい。将仁さん、ごらんになりたいのでしょうか？」

「え？じゃあもしかして俺が説教されている様子も撮られているん
スかね？」

「そういえば鏡介お兄ちゃん、なんでお説教されてたの？」

いきなり、そして有無を言わさない状況で押しかけてきたうちのク
ラスメイトどもだったが、うちのモノたちはそんな連中に対し問題
ない、というより十分すぎるほどなもてなしをしてくれた。

何にも事情を知らないで傍から見ているだけなら面白いことこの上
ないと思う。俺があいつらを連れてきたことに対しても、常盤さん
は怒ったりする様子は無いし、それどころか遭ってみたかったとか
言っている。

とりあえず、難関はひとつ突破したのだが、今後無条件に押しかけられるのは身を挺してでも止めさせようと思った。

「ところで、ヒビキよ。さっきお前らと一緒においでになったあの団体は、何なんだ？」

ふと、さっきの超体育会系な暴走族のことを思い出したため、聞いてみることにする。

「え？あ、ああ、あれね……」

すると、ヒビキはちょっと困惑したような表情になった。それでも箸が止まらないのはさすがヒビキだが、ペースは明らかに落ちていく。

「話してあげたらいいじゃない、減るものでもなし」

一緒に外出していたレイカが、味噌汁をすすりながら平然と言い放つ。

「いや、でもよお」

「ミーも want to knowデース。どうやって tame したデース？」

「膂力でも見せ付けたのであろう、違うか？」

シデンが少々皮肉っぽく口を開く。すると。

「なんで知ってたんだ」

ヒビキの手が今度は完全に止まった。

そして、観念したらしいヒビキが、口の中のものを飲み込んでから話し始めた。

07・穏かな日は遠く その35

将仁が友人を連れてきていた頃。

食材を目いっぱい入れた袋を提げ、ヒビキとレイカはスーパーから出てきたところだった。

そしてその駐車場で、彼女らはあの奇妙な連中と遭遇してしまった。買い物客でこった返す夕方の駐車場で、暴走族とおぼしき連中が、人の迷惑も顧みずに爆音を撒き散らしながら暴走行為をしていたのだ。

「迷惑な奴らだねえ」

ヒビキが、その連中を怒り半分呆れ半分といった様子で眺めながらそう口にする。

「まったく、あんな改造しやがって。される側の身にもなれよな、まったく」

「ほっときなさい。そのうち、モノのほうからしっぺ返しされて痛い思いするわよ」

「チツ」

最初はレイカ言葉に従って、舌打ちしながらも無視していたヒビキだったが、そいつらの一人が自分にぶつかりそうな所をバイクで走っていったのを見て、ついに切れてしまった。

「てめーら!」

振り向きざま叫ぶが、すでにヒビキにニアミスしたバイクは走り去っている。しかしヒビキの声は他の暴走族連中にも聞こえていたように、さっきと別のバイクが近づいてくる。

そっちがそうくるなら。

ヒビキは、振り向きざまそのバイクに乗った暴走族に向けて、食材が目いっぱい入った買い物袋を持ったままの自分の腕を叩きつけた。プロレス技のラリアートだ。そして、それは見事に決まり、食らった暴走族はバイクの上で仰向けにひっくり返った。

そしてそのバイクごとフェンスに激突し、暴走族はそのまま転倒した。

普通、そんなことをすればやった本人もただではすまない、下手をすれば腕を骨折する可能性もある。

だが、ヒビキは薄ら笑いさえ浮かべ、平然と仁王立ちしている。

そんなことをされ、なめられたら終わりのな暴走族連中が黙っているわけがない。

爆音を撒き散らすバイクに乗った連中が、駐車場中からヒビキとレイカのまわりに集まってくる。そして、まるで映画かなにかのシーンのように二人のまわりをぐるぐると回りだす。

「全く、だから無視しなさいって言ったじゃないの」

「けど、あんなことされておとなしくしてなんかいられるかって」

「腹を立てるのは構わないけれど、巻き込まないで欲しかったわね」その煙の中心で、ヒビキとレイカが戦場に取り残され敵に囲まれた兵士のようなやり取りをする。

と、その二人の前に、ひときわ装飾が多いバイクが停まる。それに伴い他の族連中もバイクを止める。そして、レザーのベストを着た男が、そのバイクから降りてきた。

そいつがこの族のリーダーなのだろう。髪型をリーゼントに決めた体格がいいその男は、威嚇するように肩をいからせながらヒビキのほうへと歩いてくる。

「おいアマあ。なめたことしてくれんじゃねえの。どういってもりだ、ああ!？」

そして、触りそうなところまで顔を近づけ、巻き舌ですごんでくる気が弱い一般人であれば、縮み上がって何も出来なくなるだろう。だが、ヒビキは違った。

「顔が近いんだよ、うっとうしい」

ちぢみあがるどころか、平然とそう言い返したのだ。

「て、てめえこのアマ!」

その一言で頭に血が上った族のリーダーは、反射的にヒビキの胸倉

に掴みかかる。

「最低だね、女に手え上げるのかい」

だが、ヒビキはそれに対して静かに言い返した。

そして、自分を掴んでいる族のリーダーの手首を握り返す。

「んがああっ!？」

すると、リーダーが悲鳴をあげ、そして手を離す。

「やられたらやり返すのが、あたしの主義でね」

すかさず、ヒビキの手がリーダーの胸倉を掴み、そして片手で軽々と持ち上げる。

「しばらく、頭冷やしてきな!」

そして族のリーダーを掴んだまま、ヒビキは数歩助走をつけると、槍投げのようなモーションでその腕を思いっきり空へと振りぬいた。

「うひゃあああああああああああ……」

今まで誰にも聞かせたことがないような情けない悲鳴をあげながら、リーダーの姿が空に吸い込まれていく。やがて、きらーんという輝きを残し、族のリーダーは星になった。

「こ、このアマ!」

その光景を見て浮き足立った暴走族のメンバー数人がかかってくる。だが、次の瞬間その足が止まり、そして情けなくも残らず腰を抜かしてしまった。

その前に、怖い顔をしたヒビキが立っている。だがそれだけなら怖くはない。怖いのは、その頭上に高々と掲げられた右手、そしてその上に乗っているものだ。それは、さつき空に消えていったリーダーが乗っていた、大型バイクだった。大の男でも全身を使わなければ起こすことすらできないようなそれを、目の前の女は片手で、しかも軽々と持ち上げているのだ。

「どうすんだい?やるんだったらあたしは構わないぜ?おら!」

挑発的なことを言いながら、ヒビキは右手を大きく振り回す。それに従い、彼女に掴まれた状態の大型バイクがうなりをあげて空を切り、腰を抜かした族連中の頭上をかすめ、そしてヒビキの頭上に再

び戻ってくる。

「ば、バケモノ……」

蒼白になった族の一人の口から、そんな言葉が漏れる。

「おおおい女！おおおとなしくしろ！」

ライダースーツの女は、相手にしたら命がいくつあっても足りない。そう思ったのであろう族の何人かが、どこからかナイフやら特殊警防やらを取り出し、今度はレイカにかかっていく。

「全く、これから帰らなくてはならないというのに。食材が痛むわしかし、レイカは自分が攻撃の対象になったのに、いつもどおり落ち着いている。その右手が、さりげなく左の袖に差し込まれていると同時に、レイカの体が踊るようにくると回転し、白い着物の袖と癖のない黒髪が広がる。それと同時にひゅっとそのレイカの前の空間が切り裂かれ、族の足が止まった。

再び正面を向いたとき、レイカの右手には、街中で持ち歩くと間違はなく銃刀法違反になりそうな、抜き身の刀のような巨大な刃物が握られていた。

レイカの得意技、氷の柳刃大包丁だ。それを、レイカは頭の上で軽く振り回すと、その包丁を正面に構える。その姿はまるで絵画のように美しいものだが、それ故に静かな迫力を感じさせる。

「仕方ないわね、相手してあげるわ」

そして、整った口元をくつと上げる。

「こ、このっ」

それを見た暴走族の2人がナイフを振り上げた瞬間。鋭い金属音と共に、そのナイフが宙を舞い、地面に転がった。

レイカの包丁が弾き飛ばしたのだ。

そして、冷たい目でその一人に向けて包丁の切っ先を突きつける。

「さあ、どうすんだい？」

そこに、バイクを片手で掲げたヒビキが近寄ってくる。

「お、おい、もしかしてこいつら、うわさの」

「すっ、すいませんでしたーっ！」

こんな連中を相手にしていたら、命がいくらあっても足りない。そう悟った瞬間、暴走族一団はその二人の足元にひれ伏していた。そ

07・穏かな日は遠く その36

「でさ、とつとと帰ろうとしたらさ、どーしてもお供させてくれって言うから」

荷物を持たせて、うちまで送らせた、と。やれやれ、バイクが暴走族に説教するとは、世も末だね。

なんて言っている場合ではない。下手すりゃ傷害罪になるんじゃないか、これ。

「先に手を出したのは向こうだから、それは正当防衛ですね。星にするのは過剰防衛になりかねませんが、オートバイを振り回したぐらいで怪我をさせていないなら、障害にも脅迫にもなりませんね。包丁も、氷製ならすぐ融けてなくなるでしょうし」

だが、常盤さんはいくつか根拠を並べて平然と「こっちは悪くない」と言ってくれる。なんか、常盤さんがいれば、多少悪いことをしても無罪に出来てしまいそうだ。うーん、だから偉い悪役は優秀な弁護士を味方につけているのか。まあするつもりはないけど。

それにしても、こいつら、特にヒビキとレイカは、平気で力を発揮しているなあ。ただでさえ目立つ連中なのに、そんなことをされたら俺はどうすればいいんだ。

「あ、常盤様。そういえば、先日話題になった方が、将仁さんのご学友と一緒に、おいでになったでしょう」

そんな俺の心中など意にも介さずといった感じで、話題はいつのまにか賀茂さんのことに移っていた。

「Oh、そう言えば、certainlyデース。Indeed、yesterdayのtodayにcomeするとハ、ミーのCPUでもout of expectだったデース」

予想できるわけないだろ、俺だって帰り際まで知らなかったんだから。ついでに言うと、今話題が上がっている賀茂さんはいいでだったんだし。

「でも、そなに坏的人には見えなかつたアルけど」

「いや、我はあれをなかなかの狐だと見たぞ。こちらが不審に思っていることには気づいただろうにそれに気づかぬ振りをしている」

「きつね、ですかあ？耳もしっぽもなかつたですけどお」

「あのね、妖怪じゃないんすから」

「そういう鏡介も妖怪みたいなもんなんだが。」

「でもでもお、あの人、ぜええええつたい、何か企んでるよお！」
その中でそうぶち上げたのは、他でもないケイだった。

「だあってあの人、お兄ちゃんに何か渡してたもん！昨日はじめて会つたのに馴れ馴れしすぎるよお！」

よっぽど気に入らなかつたらしい。まだ晩飯の途中だつてのにケイの奴は箸を持つた手をぶんぶん振り回しながら元気に文句を言っている。おかげで横に座っている俺はいいとばかりだ。

「ね！ね！シデンちゃんも紅娘ちゃんもそう思うよね！」

「おい、ケイ。まだメシの途中なんだから、箸を振り回すのはやめろつて」

注意をすると、ケイはおとなしくなるが、面白くなさそうな顔をして箸の先をがじがじと噛んでいる。俺が賀茂さんから何か貰つたのが相当気に食わないらしい。

「何を貰つたのですか？」

だが、この話になぜか常盤さんが乗ってきた。

「なんか、鈴がついたお守りみたいなのを、貰つてましたよね」

「言わなくてもいいのに鏡介が口を出す。」

「お守り？」

常盤さんが、箸をおいてからこっちを向く。

「将仁さん。そのお守り、見せてくれませんか？」

「なんか、ちよつと目が怖い。目をそらすと、今度はレイカと目が合った。こっちもなんか怖い目をしている。そこで気が付いたが、女性陣全員がなんか黙つてこっちをにらんでいる。」

「我々に隠し事をするのか、上官」

箸を置いて、シデンがドスを聞かせた声を出す。俺は、お守りを貰っただけで、他に何も変なことはしてないぞ。

「えーと………これです」

このままだとあとでどんな目にあうか判らない（これは鏡介でも肩代わりできないだろうし）ので、あきらめてポケットからあの厄除けのお守りを取り出す。

そして、常盤さんに差し出したとき、お守りについた鈴が、ちりんちりんちりんと澄んだ音を立てた。

その瞬間。

「わあっ！！！！！！」

耳元で爆発音でも聞いたかのように、モノたちが一斉に飛びのいて耳を押さえたのだ。それも相当のものだったらしく、食事中は箸と茶碗を絶対に離さないヒビキがそれを放り投げてまで耳を押さえているし、表情の乏しいレイカですら眉間に皺を寄せている。素早いケイとシデンはあっという間にそこから姿を消し、メガネツ子コンビのテルミとバレンシアは耳をふさいでその場にしゃがみこみ、紅娘は何を勘違いしたのか頭に鍋を被りながら耳をふさいでいる。クリンに至っては耳を押さえたままひっくり返って痙攣けいれんを始める始末。その中で、鏡介は一度聞いたことがあるからか、顔をしかめて耳を塞いでいるが一見すると落ち着いて座っている。

一体、なんなんだ？と思って自分の手の中にあるそのお守りに目をやる。

が、持っていたはずのあのお守りが、手の中から消えていた。

07・穏かな日は遠く その37

「このお守り、何か細工がされているようですね」

それは、常盤さんの手に収まっていた。いつのまに取られたのか、全然気づかなかったぞ。

「鈴というものは、形の違いこそあれ、古今東西その清らかな音で人の心を和ませ、魔を祓うために使われてきました」

そんな俺を尻目に、常盤さんは食い入るようにそのお守りを見ている。

「神社の境内にあるのも、その音で場を清めるため。それにあやかって、神社で取り扱われるお守りにも鈴がつけられることがあります。たいていの場合、鯛の頭も信心から、というところですが……
……これは、違います」

そして、鋭い目つきになる。常盤さんは、冗談を言わない人じゃないが、こんな真剣な顔で冗談を言ったことはないから、多分本当なんだろう。

「おそらくは、退魔の呪法ですね」

「退魔の呪法？」

なんかまた、弁護士が口にするにはあまりにうさんくさい単語が出てきたな。

「これは推測ですが、鈴の音が持つ“魔を祓う”要素を、呪法で強化しているのです。それで、普通の人間である将仁さんには影響がないのですが、“擬人”である皆さんには影響があった」

「ちょっと待っとくれ、じゃああたしらは魔物ってことかい？」

常盤さんの言葉に、ヒビキが噛み付く。まあそりゃそうだろ、自分のことをいきなり魔物だなんて言われりゃいい気はしない。かく言う俺も、うちのモノたちを妖怪みたいなものだとしても心の隅で思っているのはこの際黙っておくことにする。

「でも、“人間”であるか“擬人”であるか、私たちと将仁くん

との決定的な違いがそこにあるのは事実よ」

「アイヤー、やっぱりワタシ、妖怪変化だたアルかー」

「お、お兄ちゃん？あの音、もうしない？しないよね？」

まもなく、逃げ出したみんなも戻ってきた。

「気にすることはないよ、魔物だろうが妖怪変化だろうが、おまえ等はおまえ等だし、居なくなったら寂しいもんな」

そう言っただけで、やっとみんなの顔にほっとした表情が戻る。判っていても、自分が魔物だと言われるのはやっぱり嫌だもんなあ。しかし話を戻すが、なんで常盤さんはそういうオカルトチックな事を知っているんだろうか。もしかして、霊感商法とかに関係したことがあるとか……でも霊感商法や新興宗教ってのは大抵が人の不安に付け込むインチキだから、そんな知識なんかなくてもいいような気もするし。

「いずれにしても、将仁さん。このお守りの鈴は、極力鳴らさないように注意してください」

常盤さんはそう言いながらお守りを俺に渡す。

言われるまでもない。俺もモノたちを苛めるつもりはない。

だが捨てるのは忍びない。何か裏があったとしても、アレだけ美人の女の子からのプレゼントを捨てるのはやっぱりもったいないもんな。

何人かが恨めしそうな目でこっちを見る中、俺はそのお守りをポケットに入れた。

07・穏かな日は遠く その38

「じい、いるか」

「なんでございましょう、隼人様」

重厚なつくりのデスクに向かった男が声をかけると、見事な髭が印象的な、執事服を身につけた老人がどこからともなく姿をあらわした。

「真田将仁に、我々以外でちよつかいを出している奴らがいると聞いたが、調べはついたか？」

「はい。ちょうど今、その資料をお持ちしたところです」

そう言いながら、老人はA4ぐらいの肌色の封筒を隼人の前に置く。隼人がその封筒を開き、中に入っていた書類を取り出すと、ページを一枚めくった。

「……近衛クローディア？」

「はい。アメリカの資産家の娘だとか」

「ふむ……」

そして、隼人はぱらぱらとその資料の束をめくっていく。

「目標は、擬人を作り出す“力”か」

「はい。クローディア本人がそれにさうとう執心しておるようで、そのためだけにわざわざアメリカから真田将仁と同じ学校に転入してきたようです」

「ふん、金持ちの道楽か」

そして、隼人はひと通り目を通した資料をばさっとデスクの上に投げ出す。

「いかが致しましょう？」

「暫くは様子見だ。我々の敵になるか味方になるか、早急に見極めなければならんのは確かだが、今は判断材料が少なすぎる。送球に情報を集める」

「承知いたしました」

執事服の老人は、そう言つて頭をさげる。

ふと、隼人が、思い出したように老人のほうへ向き直った。

「そういえば、じい。お前が手配した者はどうなんだ。ちゃんと動いているのか？」

「その点についてはご心配なく。先ほど、真田の家に行つて、様子を探つたという報告を受けております。もつとも、外部の人間も居合わせたため、派手に動くのは避けたようですが」

「確か、同級生として紛れ込んだんだっただな」

「はい。それで、少々手強そうなので、これから自分の手駒を増やしていくと言つておりました」

「む、人手の要請か？」

「いえ、新たに式神を呼ぶとのことですよ」

「しき……まあい。妖怪大戦争でもなんでも、依頼を達成すれば俺も文句は無い」

少々疲れたような顔をして、隼人は椅子の背もたれにもたれかかった。

「全く、今はいつだ？科学が迷信を払拭する21世紀じゃなかったのか？」

「お言葉ながら、隼人様。それを言うなら、この私めも」

「わかつてる、わかつてるからもう少し考えさせてくれ」

老人の言葉に、隼人は、椅子に沈みこんだまま、口だけでそう答えた。

07・穏かな日は遠く その38（後書き）

どうも、作者です。

ようやく7日目が終わりました。

ところで、そろそろ書き溜めてきたものが少なくなってきたので、投稿はしばらく休んで書き溜めたいと思います。
それでは、再開するまで、ごきげんよう。

08・慣れといづのは恐ろしい その1

9月21日 木曜日

ちっ、ちっ、ちっ、ぽーん！

じゃっじゃっじゃーちゃらららららじゃっじゃっじゃーちゃららちやらっ！

「おはよーございます！今日は渋谷の駅前から生中継です！」

「わあああっ!?!」

その日は、いきなりの軽快な音楽とレポーターの声に叩き起こされた。

「なんだなんだなんだ!?!」

跳ね起きて何事かとあたりを見回す。

すると、どアップの女性ナレーター顔が眼に飛び込んできた。

「わあっ!」

なんなんだ、これは!?!まだ夢の続きを見ているのか!?!

「うふふっ、おはようございます、将仁さん」

パニックに陥っていると、その音と同じほうから、聞き覚えのある声が出た。

見ると、四角く切り取られた空間の中にはデパートが立ち並ぶ光景と、半そでの女性レポーターの姿が映っており、そしてその上に縁の四角いめがねをかけた女の首と腕が乗っかっている。

「て、テルミ!?!」

「はい 目が覚めたでしょう?」

落ち着いて見れば、なんのことはない。60インチのディスプレイを出したテルミが部屋の入口あたりに立っていて、その画面に俺が良く見ている朝の情報番組が流れているのだ。

どうやら俺を起こしに来たらしいが、それにしてもなんつー起こし方をするんだ。

「もう少しやさしく起こしてくれよ、寿命が縮まるじゃねえか」

「だって将仁さん、やさしく起こしたら起きないでしょう？だから、強硬手段に出たのでしょ」

「ケイさんから聞きましたよ。そう言われると確かに反論できない。

だがこの部屋には俺だけではなく鏡介もいるんだぞ、鏡介まで叩き起こすことはないだろうと思えばいいベッドから下を覗くと、なぜか鏡介の姿が無い。

「鏡介さんなら、1階でしょう」

「マントをかけなおしてメイド姿に戻ったテルミが教えてくれる。

「へ？」

「寝汗をかいたから風呂に入ると言っていたのでしょ」

言われて思い出したが、そういえばゆうべは天気予報どおり熱帯夜で寝苦しかった。来ているシャツも汗でびっしょりだ。

「それでは、私はこれで失礼致します。将仁さん、二度寝なんかしてはダメですよ？」

そう言つて、なんちゃってメイドは絶対にやらないぐらいに深深とお辞儀をしてから、くるりと向きを変えてテルミは部屋を出て行くとする。

ふと、そのメイド服のスカートのすそから、何か黒い紐みたいなものがはみ出ているのが見えた。紐というか何かのコードのようで、先端がテルミのスカートの中に固定されているらしく、テルミが歩くのに伴いずると床を引きずられている。

「おい、テルミ、何かスカートから出てるぞ？」

「え？」

「ほら、そこ。何かのコードみたいなのが」

俺に声をかけられて、振り向いたテルミがそのまま視線を下に移し、そしてあつと声をあげた。

「あ、こ、これは、UHFのアンテナ線、でしょ」

「アンテナ線？」

「ほら、私はテレビですから、テレビアンテナと繋がってないと、

番組が、放送できないでしょう」

何が恥ずかしいのか、少し赤くなつたテルミが早口にまくしたてる。言われてみればそうだ。テルミの本来の姿であるプラズマテレビは据え置き型だから、アンテナ線を繋がないと映らない。ってことは、1階にあるアンテナのコネクタからここまで、接続用のケーブルを延ばしてきたってことか。

「そ、それでは、失礼しますでしょうっ」

一人で考えて納得している俺を尻目に、テルミはそのケーブルを引きずつたまま足早に部屋を出て行った。

「何だありゃ？」

一人取り残された俺は、妙に恥ずかしそうだったテルミの姿を反芻していた。

別に、テレビがアンテナ線を繋ぐのはおかしいことでもなければ恥ずかしいことでもない。というか、繋がなければテレビとしての機能は果たせないから、本来は繋がないと役に立たない。

そう考えたところで、ふと思った。

テルミって、アンテナ線をどこに繋いでいるんだろうか。コードがスカートの中から延びていたことから推測するに、上半身ではなさそうだ。

「・・・・・・・・・・ということとは・・・・・・・・・・わ、まさか、うわ」

朝っぱらから18禁な光景を考えてしまった。アンテナ線の先を×××に挿すテルミの姿を想像しただけで、朝立ちしていた股間のICBMがさらに膨れ上がる。そういえばテルミの奴、最初にアンテナ線を繋いだ時になんかへんな動きをしたな、こりゃ間違いなさそうだ。

頭を振ってその妄想を振り払い、熱くなってきた顔を張ると、汗まみれのTシャツを脱ぎ捨て新しいシャツをタンスから引っ張り出した。

08・慣れといづのは恐ろしい その1（後書き）

どうも久しぶりです。帰ってまいりました。

とりあえず、そこそこ書き溜まったのでまたしばらく投稿を
していきたいと思えます。

もし、ご意見・ご要望・ご指摘・ご忠告などありましたら、遠慮な
く送ってください。

では、次回を乞うご期待！

（久しぶりだな、このフレーズも）

08・慣れというのは恐ろしい その2

「んーっ！ん　　っ！」
1階に降りて、洗面所の前を通りかかったとき、中から男のくぐもつた声が聞こえた。

この家にいる俺以外の男と言ったら鏡介しかいない。朝風呂に入ると言っていたらしいからこの声の主は鏡介に間違いない。

「あいつ、ヘンな声出して風呂に入るんだなあ」
なんて思いながら通り過ぎようとしたとき。

そのドアのむこうから、何かドンドンと床や壁を叩くような音が聞こえてきた。

「うふふ………らうえれふよお………」

ついでに、鏡介と明らかに違う”女”の音が聞こえる。この声はクリンだな。

………なんか変だ。風呂に入るのにこんな音するか？

「入るぞ〜」

顔を洗うために洗面所に入る。そこで見たのは。

「ん　っ！ん　　っ！ん　　っ！」

「観念ひてくらはいれえ、がわんろ限界らんれふう」

洗面所の床に半裸で仰向けになり、じたばたと暴れる鏡介と、その上に身を投げ出すように横たわる白い髪のメイドさん、つまりクリンの姿だった。

だが、こんなところで何をしているんだと思ってちよっと覗き込んでみて、絶句してしまった。

鏡介の奴、何をん　ん　　言っているのかと思ったら、口をクリンの手で塞がれていた。が、絶句したのはそこではない。

なんと、クリンの奴、長い舌を出して、鏡介の顔やら耳やらをべろんべろんと嘗め回しているのだ。しかも興奮しているのか、鼻息が荒い。

「はあ、はあ、はあ……」

なんつーか、朝立ちしたICBMがさらに硬直しそうな光景だ。普通は男が女を押し倒すもんだと思うんだが、逆というの……
・っって違う！

「おい」

「ごろ時間らら、ヒビキはんもシデンはんも起きてないでふからあ」

「うおいっ！」

「ひゃいつ！？」

一言では聞こえなかつたんだろうか。少し大声で呼びかけると、クリンはびくつと体を硬直させて顔をあげる。

そしてこちらを向くと、長い舌をべろーんと出したまま、いつもは眠そうに半開きになっている目を見開いた。

「あ、あえ？まひゃひとひゃん？りゃんれひよこい？」

「……まず舌を引つ込めてから喋れ」

俺の言葉に従ってか、クリンが舌を掃除機の電源コードのようにしゅるしゅると口の中に引つ込める。

「で、クリン、お前は何をしていたんだ？」

風呂場はクリンのテリトリーだが、今日は服を着ているぶんこつちが有利だ。その優位を保つように、股間のICBMのことを一旦忘れて俺はクリンへ改めて問い掛ける。

「……だつてえ……」

俺が怒っていると思っただろうか、起き上がったクリンがしょんぼりしたクリンが口を開く。

「……本来の役目を、果たしたくてえ……」

「……は？」

「私い、浴用のスポンジですからあ……体を洗うのが本来の役目ですからあ……そのお、どうしても、洗いたくなつてしまつてえ……」

そう言われて、少し考えさせられてしまう。

人の姿をしているからつい忘れがちになるが、うちにいる連中はそ

のほとんどがもとは道具だった連中だ。で、道具というのはある用途に使うために存在するから、それが出来ないとなると存在意義が無くなってしまふ。

目の前でしょぼくれているクリンの場合、それが「人の体を洗う」ことだが、今のクリンにそんなことをさせたら、正直自制できる自信はない。クリンひとりなら（本人もいいと言っていたし）何の問題も無くヤツてしまうのだろうが、うちにはあと8人も女がいるのでそんなことをさせたら大騒ぎになってしまう。

クリンもそのへんが判っているからガマンしていたが、それにも限界があるってところか。そう思うと、目の前のクリンが妙に可愛そうになってきた。

「・・・なあ、クリン」

声をかけると、クリンはしょんぼりした顔を上げる。

「じゃあ、顔を洗ってくれ」

「・・・え？」

「これから学校に行かなきゃならないから、朝風呂するほど時間がないんだ。顔だけでガマンしてくれ」

その瞬間、クリンの顔がぱあっと明るくなり、全力で飛びついてきた。

そしてすかさず、俺の顔を満遍なくあの長い舌で舐めまわしはじめる。なんか久しぶりに主人に遭った犬みたいだ、と思っていたのもつかの間、俺の体が、特に股間がヤバイことになってきた。

まず、クリンの舌は、頼んでもいないのに俺の耳や首筋まで舐めまわしてくる。しかも、長さだけでなく形まで変わるらしく耳のせまい所まで舐められ、その度にくすぐったいような妙な感覚が走る。次に、クリンに抱きすくめられているため、メイド服越したがクリンの胸、どころか全身が押し付けられている感覚がある。

最後に、興奮したクリンの吐息が嫌でも耳に入ってくる。これがもうダイレクトで、喘ぎ声のようにさえ聞こえてしまうのだ。

なんというか、非常に、ヤバイ。ICBMが、触りもせずにも暴発し

てしまいそうだ。

だが、止めると言おうにも、俺の口をクリンの手が塞いでいるためうめき声しか出せないし、その力もバカみたく強く振りほどけない。助けを求めようにも、さっきまでいたはずの鏡介はいつのまにか姿を消しており、さらにドアが閉ざされている。そして。

「ふう、ご馳走様でしたあ」

クリンの欲求が解消され、ようやく開放された時には、俺は気力と精神力を使い果たしてくたくたになっていた。なんかクリンに色々吸い取られたような気分だ。

こんな理由で言うのもかつこ悪いが、学校に行きたくないと思ってしまった。

08・慣れというのは恐ろしい その3

朝食を多めに食って消費した気力・体力を補ったものの、通勤ラッシュでその分も消耗してしまふ。慣れれば平気になるんだろつが、さすがに1日や2日では無理だ。

徒歩通学も真面目に考えたが、そうすると1時間ぐらい歩くことになる。歩くのはいいんだがその分早起しなきゃならなくなるので考えから除外した。バイク通学は、ヒビキなら喜んでやるだろつが校則違反なので却下。チャリ通（自転車通学のこと）は、自転車を買わなきゃならなくなるし、学校に駐輪の申請をしなきゃならないのと、これが一番の問題で、気付かないうちに力が発動して擬人化させちまう可能性があるんでこれも却下。

そうなるをやっぱり電車通学しかない。慣れるまでの辛抱だ。そう自分に言い聞かせつつ、駅を出たところで壁にもたれて一息つく。

すると、昨日に続いて某宇宙人映画の着メロが鳴ったので、ポケットからケータイを取り出した、そのときだ。

俺の視界の中に、何かが飛び込んできた。ぽくつ。

とっさに両腕を上げてガードすると、謎の飛行物体はガードされそのまま下に落ちた。

見ると、それはポストンバッグだった。しかも大いに見覚えがある。

「おつす、相変わらずいい反射してんな〜」

顔をあげると、やっぱりあのサッカーバカだった。

「シンイチ、出会うなり人にポストンバッグ投げつけるたあどういっつ了見だ？」

そのバッグを投げ返すと、さすがサッカーバカ、サッカーボールのように胸でトラップピングし、そのまま足の甲に滑らせ着地させた。

「ただの挨拶じゃねえの、そんな目えとんがらせんなって」

何をぬかす、そんな挨拶したことないだろうが。

「ちよつとおく、お兄ちゃん、通話にしているんだから出てよう」

そこに、電話の通話口からケイのすねた声が聞こえる。

「悪い悪い、バカに捕まって」

「だーれがバカだよ」

「お前だお前だ」

「そーだそーだ、お兄ちゃんとの時間を邪魔するなー！」

ケイが電話の姿でわいわいとわめく。わめくのはいいんだが、どさくさにまぎれて恥ずかしいことを言うのは止めてほしい。

「あれー？またケイちゃんとラブトークかあ？」

「お前も乗るな」

顔を出したバカの面に裏拳を入れ、ようとしたがよけられた。

「だってぶつちやけ羨ましいじゃん。あーんな可愛い子に囲まれた生活なんて」

「……こいつはやつぱり判ってない。あいつらが一人残らず道具だつてことに。気づいていたら大事だが。」

「あら、一人じゃ不満かしらあ？」

「いででででっ！」

そのシンイチの耳を引っ張っていく奴がいた。うちの委員長、佐伯だ。昨日は気づかなかったが、どうやらこいつらは毎朝一緒に登校しているらしい。

シンイチよ、俺はお前が羨ましい。こう言っちゃなんだが、うちにいるのは元々道具であつて「生身の女」ではない。そして「生身の女」にもてた覚えがない俺は、もとモノであつても女の子に好かれるのは嫌ではないのだが、最近になってちよつと寂しいと思えて来ているのだ。

「……正直、普通の女ではしてくれないようなことまで、さつきされてしまったのは忘れておくことにする。」

なんか俺、朝一からちよつと情けない気分になってしまった。

08・慣れというのは恐ろしい その4

「おっす、モテ男」

学校についてふうつと一息ついた瞬間、後ろから首に腕を回された。振り向くとそこにはいつもの坊主頭がいた。

「言っておくが、お前のぶんの弁当はないぞ」

先制パンチを繰り出すと、案の定ヤジローは舌打ちをする。レイカは仕出し弁当屋じゃないんだからそんなのは当たり前だ。ちなみに俺とケイのぶんの弁当はあるから誤解のないように。

「友達がいのない奴だなあおめーはよお」

「メシたかるだけの友達なんかいらん」

そんなやり取りをしていると、扉から入ってきた女子集団の一人が隣の席にやって来た。

「おはようさんどす」

その女子、賀茂さんはカバンを自分の机に置いてから、にこやかに挨拶をしてきた。

うん、京美人の笑顔は絵になる。

「あ、真田はん。きんのはお呼ばれしてもらて、ほんまおおきになそんなことを思っていると、律儀にも賀茂さんは昨日の件のお礼を言ってくる。」

「あ、いや、俺は別に何もしてないから、礼なんていいよ」

改めて礼を言われるとなんか照れくさい。が、この一言でやっぱりきてもらって良かった、と思ってしまう。やっぱり、単純なのかな、俺って。

「なんだおまえ、顔赤くしゃがって。朴念仁のくせにいつちよまえに照れてんのか？」

「るせえっ、だいたいてめえも昨日うちでさんざん食ってったくせに感謝の言葉もねえのか」

「あらあら、仲がよろしおすなあ」

「そーなんすよ、こいつとは入学当時の腐れ縁でして」
「ヤジロー、その言葉昨日から何回言った？」

ジト目で俺がヤジローを見たとき、不意にケータイが鳴る。

「はいもしも・・・」

「おにーちゃんのバカー！」

通話にしたとたん、大声で頭をガンツと殴られた。

「な、なんだよいきなり」

「お兄ちゃん顔が赤いー！浮気者ーッ！スケコマシーッ！」

「・・・ふう」

確か、この前もこんなやり取りをしたよなあ。

「挨拶ぐらい誰だつてするだろ、お礼言われてちょっと照れくさかつただけだよ、変なこと考えたわけじゃないって」

「うーっ、ホントお？」

「ホントだよ、だから機嫌直せつて」

そうやってなんとかケイをなだめ、ケータイを閉じてポケットに収めた。

そこでふと視線を感じたので後ろを向くと。ヤジローがニヤニヤして、賀茂さんがにこにこしてこっちを見ている。

「なんだよ、二人とも」

「いや、そうやってるとなんか浮気を問い詰められているみたいだなーと」

「なんだよそれ、浮気も何もそういう相手なんかいないだろうが、今のはうちのケイだよ」

「ああ、あの大人しかつた子ですか。ほんにええお兄はんどすなあ」

「うーん、まあお兄ちゃんって呼ばれてるから」

「じゃああのメイドさんには「ご主人様」とか言われてんのか？」

「だから俺のメイドじゃないんだって何回言わせるんだ」

実際は人でもないんだが、口にするわけにはいかないのでそこで黙っておく。

「せや、真田はん。きんのあげたお守り、持ったはる？」

不意に、賀茂さんが聞いてくる。お守りといったらあれのことだろうが。

「あ、ごめん。無くしたら悪いと思ってうちに置いてきた」

「ほんまどすか？」

「ホンマホンマ、なんか学校に持ってきたら盗られそうな気がしてさ」

これは、半分は本当だ。今やクラス男子の羨望の的である賀茂さんの隣の席だつてことでクラス男子の大半に睨まれているのに、そこにその賀茂さんから貰ったものをこれ見よがしに持っていったら何をされるか判つたもんじやない。

残りの半分は、あの鈴を警戒したからだ。昨日の鈴の一件で、どうやらあの鈴はうちのモノたちが本能的に大嫌いな音を出すことが判つたので、うっかり鳴らしたらケイが人前で携帯電話から人になつてしまうかもしれないからだ。

そして正直、俺もあの件で賀茂さんへの警戒心が戻りつつあった。なにしろあのお守りを渡した張本人である。何にも知らないとは思えない。そう考えると、一昨日からの彼女からのアプローチも何か裏があるような気がしてくる。

とはいえ、その”裏”がどんなものかは見当がつかない。心当たりはありすぎるぐらいあるが、それが賀茂さんにどうプラスになるかと思いつかないからだ。

それに、たとえ裏があつたとしても、やっぱり美人からのアプローチは嬉しかったりする。

「そつどすか……」

俺の返事を聞いて、賀茂さんはちよつとがっかりしたみたいだったが、俺はそれに構っている場合ではなかった。昨日のことを2人組のバカが言いふらしたせいで、クラスの男子から敵視&質問攻めされる羽目になつたからだ。

まあ、あいつらが黙っているとは思ってなかったから予想はできたが、同時に、クラスでの地位が格段に落ちたな、と思い知らされて

しまつた。

08・慣れというのは恐ろしい その5

今日の3時限目は理科。隣のA組と合同の移動教室だ。

ふと、昨日は大人しかつた近衛お嬢様のことが思い出される。A組は、あのお嬢様と自称ボディーガードの迅がいるクラスだ。まあ理科は物理・科学・生物・地学の4分野に分かれていて、教室もそれぞれ別になっているから、一緒にはならないだろう。と、思っていたら。

「ああら、真田さん。あなたも物理を専攻していらっしやるの？」
物理学教室に、なんとあのお嬢様がいた。この前同様、取り巻き数人を引き連れてだ。

このお嬢様がいるってことは。軽く教室内を見回すと、少し離れたところで迅のやつが妙にごついナイフで鉛筆を削っているのが見えた。やっぱりボディーガードだからお嬢様のそばにいるってわけか。「ちよつと、この私が話しているというのに、余所見をするとは失礼ではなくって!？」

ヒステリックな声に気が付いて振り向くと、お嬢様が口元を引きつらせながら俺を見ていた。

こういうのに深く関わったら大変そうなので、ここは軽く流すことにする。

「はいはい、授業が始まるから手短にな」

「うっ、それなら手短に言いますわ。あなた、私の下僕になる決心はつきまして?」

一瞬ひるんだお嬢様だったが、すぐにポーズを取り直すと、閉じた扇子の先を俺に向けてそんなことを言ってくる。こいつはまだあきらめてなかったのか。

「じつくりと考える時間を差し上げたのです。そろそろお判りになったのではなくて?」

「あー………忘れてた」

「・・・・・・・・え？」

「そんなこと考えるほど暇じゃなくてね」

あいかわらずの人を上から見下ろすような物言いにかちんと来たので、俺はそう答えてやった。

「あ、あなた撰家たる近衛の家を敵に回すおつもり!?」

「何が近衛だよ、撰家とか清華家とかそんなもん鎌倉時代のほこり被った骨董品じゃねえか。この21世紀にそんなもん何の役に立つよ?」

「あら、少しは勉強されたようですね。でも、あなたと私では、私のほうが社会的地位が高いことには変わりありませんのよ?」

「地位が高いのはお前の親だろう。お前はその七光りで偉ぶっているだけじゃねえか」

「くっ・・・・・・・・」

さすがに返す言葉がなくなったらしい。お嬢様は言葉をつまらせ、俯いてしまった。こんな姿はクラスでも見せたことがないらしく、A組の取り巻き連中もどうしたらいいか判らずおろおろしている。

・・・・・・・・ちよっと、言い過ぎたかもしれない。目の前でそんな態度を取られると、さすがに罪悪感が頭をもたげてくる。

だが、謝ろうと思ったところで、お嬢様は予想外の動きをした。

「・・・・・・・・ふ、ふふふ、ふふふふふふっ」

なぜか、突然低い声で笑い出したのだ。追い詰めすぎておかしくなったか?と思っただけ。

「おーっほっほほほ、なかなかおっしやいますわね!この私にそこまで口ごたえする殿方には、久しぶりにお会いしましたわ!」

突然の高笑いと共に、そんなことを言い放ちやがった。かと思うと、俺を真正面に見据えて、

「判りました。それならば、私が全てにおいてあなたに勝っていることを証明して差し上げますわ!あとで吠え面かかぬよう、せいぜい精進なさることですわね!」

扇子をびしっところっちに向け、そう宣言しやがった。軽く流すつも

りだったのが、いつのまにかむこうは本気になってしまったようだ。
「ふーん、全てにね……」

俺は、そんな熱くなっているお嬢様のことをちよつとからかってみ
たくなつた。

ちよつと近づくと、目の高さをお嬢様と一旦同じにし、その顔を覗
き込む。

「……な、なんですの」

俺が何がしたいのかがよく判らない、といった様子のお嬢様は、微
妙にうるたえたような表情を浮かべる。

そこから顔を上げ、自分本来の高さに目線を持ってきてから、俺は
こう言つてやつた。

「まず、背の高さは俺の勝ち、と」

その瞬間、自分がからかわれたと判つたらしいお嬢様の顔が、一瞬
にして真つ赤になつた。

「そ、そんなの卑怯ですわ！統計学的にも生理学的にも女子より男
子のほうが身長が高いのは、当たり前ではありませんの！」

「当たり前だつて言うなら最初からやらなきゃいいだろうが！言つ
とくが俺はお前の下僕なんか死んでもご免だからな！」

「きいいいいいっ！せつかく譲歩してあげたというのになんとい
う礼儀知らず！それでもサムライの子孫ですよ！？」

「人のことが言えるか！お前こそ」

軽く流すつもりが、いつのまにかこつちも本気で反論してしまつて
いた、その時。

ひゅっ。

俺とお嬢様の間を、何か空を切つて飛び去つていった。

そして、その何か飛んでいった方を見て、俺は言葉を失つてしま
つた。

視線の先にあるのは、廊下側にある漆喰塗りの壁。そして、そこに
さつきまで無かつたはずの何か細い棒のようなものが突き刺さつて
いる。

それは、鉛筆だった。先を削っただけの何の変哲も無い鉛筆が、漆喰の壁に突き刺さった状態で止まっているのだ。

飛んできたほうを見ると、そこには迅がいた。削っていた鉛筆が一本なくなっている。ということは、迅の飛ばした鉛筆が、硬い漆喰の壁に突き刺さったということだ。

ということとは。人間に当たったら痛いじゃすまないぞこれは。

「お、おま………」

「先生が来ている」

だが、それをやった迅は、気持ち悪いぐらいに静かに、教壇のほうを見ると眼で促してくる。

教壇には、確かに白衣を来た物理の先生が、出欠簿を手にして困ったようにこつちを見ている。

「えー、そろそろ始めたいのですがー………よろしいでしょうかー」

先生が、めがねの向こうから訴えるような視線をこちらに投げかけてきて、我に帰った俺はあわてて席についた。どうやら、先生の所からはあの鉛筆が見えていないらしい。

「覚えてらっしゃい」

お嬢様は、そういい残し、自分の席へと向かう。その時になつてはじめて、俺のまわりに野次馬が出来ていて授業が始められる状況になかったことに気付いてしまった。

内申書に悪く書かれたりしないだろうな。まず考えたのはそんなことだった。

まもなく野次馬やお嬢様の取り巻きどもが席に着いて、ようやく授業が再開される。

その授業中、お嬢様こと近衛クロードディアという人間が、確かに「勝っていることを証明する」と自分で言うだけあると思ってしまうた。

「えーではー、近衛さんー、この問題を前に出て解いて下さいー」
授業中、先生に指されて前に出て問題を解いたとき。

「はい。ここでこの積分値を代入すると・・・」
お嬢様は、教科書も参考書も、自分のノートすら見ずにすらすらすらと複雑な問題を解いて見せたのだ。さらにその説明も、教壇に立っている物理の担当教諭以上に流暢で判りやすい。

少なくとも、勉強はできるようだ。

また、これは後で迅から聞いたんだが、あのお嬢様は自分のクラスであるA組内に確固たる基盤を作るため、昨日1日かけて色々と手を回していたらしい。昨日、俺にちよっかい出してこなかったのはそのためなんだそうだ。

おかげで今、あのお嬢様を敵に回すと2年A組の大半を敵に回すことにもなりかねないらしい。

ただ、以外なことに、一番そのお嬢様に近いはずの自称ポディーガード、迅の奴は他のクラス男子ほど「クローディア万歳」ではないようだ。

一見ただの高校生だが雰囲気はただ者じゃない、言ってしまうとポディーガードとして雇われている時点で俺たちと別モノとさえ思えるこの迅という男だが、どうも自分を雇っているお嬢様のワガママにはかなり苦労させられているようだ。

「お嬢が飽きるまで、ヒステリーは軽く受け流しておけ。正面から構えようとしても疲れるだけだ」

そう言う迅の顔は、微妙に疲れているように見えた。

08・慣れというのは恐ろしい その6

きーんこーんかーんこーん。

長かった午前の授業が終わり、やっと昼休みになる。ちやーらーちやららららららー。

それと同時に、催促するようにケータイが鳴り出す。この音はケイからの呼び出しだ、多分腹が減ったから早くメシを食わせろという催促だろう。

「はい、今教室をでるからちよつと待つてろ」

話をするため、ケータイを取り出し通話にする。

「どこ行くの？」

「外だ外、昨日と同じところでもいいか？」

「うんっ！」

だが、このほんの少しの時間が命取りだった。

いざ弁当が入ったバッグを手にして席を立とうとしたとき、そのバッグの下げ紐を誰かがむんずと掴みやがったからだ。

見ると案の定、弁当がないことを逆恨みしたヤジローの奴だった。

「どこへ行くのかな」

眼が怖いぞ、ヤジロー。弁当作って貰えなかったからってそんな眼で睨むな。

「昼休みに最初にするこつて言ったら昼飯だろうが」

「だったら一緒に食おうぜ？」

そう言いながらも、ヤジローの眼はすでに獲物を見つけたハンターのそれになっている。すなわち、狙った獲物は逃がさないといった感じだ。

一方の俺は、ここでメシを食うわけにはいかない。何にも事情を知らないこいつらの前でケイを変身させるわけにはいかないし、かといってこのままにしておくとかケイは昼飯抜きというあまりにかわいそうな（そして後で機嫌をとるのが大変な）結果を招いてしまう。

「はなせよっ」

「焦ることはないだろ、それとも見られたくないような弁当なのか？」

「そうじゃないけどちょっと問題なんだって！」

片手でケータイをかかけ、片手で弁当の入ったバッグの下げ紐を掴み、なんとかそこから離脱しようとするのだが、相手は毎日のように金属バットを握っている奴だ、簡単に振りほどけるような握力はしていない。

「うわうわうわうわ」

図らずも振り回すことになってしまったケイが、閉じたままスピーカーからヘンな声を出す。

男に逃げるなど言われても嬉しくないことこの上ないのだが、バッグの紐を掴むこいつともう一人、俺たちのことなどどこ吹く風で愛妻弁当をその愛妻とぱくついているアホが俺の家の事情を言いふらしてくれやがったせいで、特に男どもは誰一人として助けしてくれない。それどころかヤジローの応援をする奴まで出る始末だ。

女子のほうは興味ははなからないみたいで、自分たちでおしゃべりするのに夢中だ。

「あわわわわ、た、たふけてえ、がくがくすゆうきぼぢわゆいい」
ケイは俺の手の中でケータイフォームのままこんなことを言い出すし。

くそー、誰でもいいから助けてくれー、と叫びそうになったその時。想像すらないところから、以外すぎる援護が飛び込んできた。

「チエストオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

聞き覚えのある勇ましい女の子の掛け声とともに、何か濃い緑色のものが、視界の外からものすごいスピードで突っ込んできたのだ。

「ぶべらっ」

そいつは、どげしつという小気味良い危険な音とともにヤジローを教室の隅に蹴りとばし、そして空中でくるりと身を翻し、器用に俺の前に着地した。

そして、ゆつくり立ち上がると、顔を上げて俺を見た。

「待たせたな、上官」

深緑の着物に女袴。袖に描かれた日の丸。肩口で切りそろえた黒髪に、アクセントとなる頭頂部で束ねられた長い銀髪。そしてなによりこの不遜な物言いに偉そうな態度。

「誰かと思ったらシデンか、別に待っていないって言うか何しに来た？」

こんなやつは日本広しといえどもこいつぐらいだ。窓がある方向からかつ飛んできたから、窓の外から飛び込んできたのもほぼ間違いない。誰もそこにツツコミ入れないのは多分認めたくないからだろう。

だが、わざわざ学校まで何をしに来たんだ？

「何しにとは無礼な奴。家に置き忘れた数学2の教科書、わざわざ持ってきてやったのに礼のひとつも言えぬのか」
えっ？忘れ物？

「疑うのか貴様、ならば証拠を見せてやるっ」

答えを詰まらせていると、シデンは背負ってきた赤いナップザックを俺の机の上にどっか下ろし、ごそごそと中を探り始めた。

「あれ、え、ええと、たしかここに……あ、あつたあつた！さあ、これを見るが良い！」

そして中から1冊の本を掴んで俺のほうに突きつける。

そして、飾り気が全くないその本の表紙には、“数学2”とはっきりと印刷されている。

「どうだ！コレが無ければ貴様は6時限目の授業で困窮したであろう！それを我がわざわざ届けに来てやったのだ！さあ感謝するかい！」

シデンはまるで鬼の首でも獲ったかのように腰に手を当て偉そうにふんぞりかえる。俺としてはそんな珍しくない姿だが、しかしこいつはここがどこだか判っているんだろうか。

「……えーと、感謝はするが、お前、ここがどこか判って

る？まわりを見たか？」

「・・・・・・・・えっ？」

俺の言葉に、シデンははっと我に返ってまわりを見る。そして、自分がクラス中の注目を浴びているのにやっとな気が付いたようだ。

「な、なんだ貴様らっ！我は見世物ではないっ！そんな目で見るなっ！」

と、とたんに恥ずかしくなったらしく、顔を赤らめながら腕をぶんぶん振り回す。うん、こいつにも人並みの羞恥心はあるようだ。

と思っていいたら、少し落ち着いていたケータイがまた某宇宙人のテーマを奏でた。

開けると、むくれたケイが画面越しにこっちを見ている。

「シデンちゃんに替わって」

通話にして聞こえた第一声がそれだった。

わけを聴いても「替わって」としか言わないので、しょうがないといまだに両腕をばたばたさせているシデンにケータイを差し出す。

「おい、シデン、ケイが話がしたいって」

軽く息の上がったシデンが、訝しげな表情でそのケータイを受け取り、耳に当てようとすする。

「シデンちゃんずるい！」

その直後に聞こえたのが、ケイのこんな声だった。しかも横からでも聞こえる大音量でだ。

ケータイを耳に当てようとしていたシデンは、当たり前だが突き飛ばすようにそれを耳から離し、そしてそのケータイと向き合った。

「いきなり耳元で叫ぶな！耳がおかしくなるじゃないか！」

「だあってシデンちゃんその姿でこんなところに来るなんてずるいんだもん！」

「ずるいって、貴様こそ何だ！さんざん役得を享受してきたではないか！」

「ケイはこれがお仕事だしお役目だからいいんだもん！」

「なんだとお！」

そして、シデンは教室の真ん中でケータイを片手に持ち、多分画面に顔が映っているケイと口げんかをはじめめる。どうもケイにとっては、シデンが学校に現れたことが面白くないらしい。

「……しかし、どうやって收拾つけるんだ、これ。」

「なあ、真田。あの子、お前の知り合いか？」

ケータイと口げんかをやるシデンを横目にそんなことを考えていると、クラスの男子が俺に声をかけてきた。

「ん、あ、ああ、俺の、えーと、はこの子だよ」

とりあえず、昨日決めた設定どおりに答える。

こいつら、あのシデンが元々ゼロ戦のラジコンだと知ったらどんな顔する……なんて言えるわけがない。言ったらまず「バカか」と言われるだろうし、現実を見せたらひっくり返るか自分の物を擬人化しろと言ってくるだろうし。

まあやれと言われてやるのは構わないのだが、実は未だにやり方がわからない（なんとなくは判っているので意識してしないようにしてはいるが確証は無い）し、その擬人化で出てきた子がどんな扱いを受けるかも心配だ。乱暴に扱っていたら嫌われるかもしれない。そういう意味だとうちのは……なんてことを考えつつシデンのほうを見ると。

「でええいこのおー！」

シデンがケータイを振り上げ、今にも床に叩きつけようとしているところだった。

「だわー！っ！何するつもりだー！っ！」

思わず飛び出し、シデンの手からケータイをもぎ取った。一瞬シデンが「そっちを取るの」みたいな顔をするがこっちはそれどころではない。

「もしもしお前、シデンに何を言った!？」

「だって、だってだってだってえ〜」

ケータイを耳に当て聞いてみると、案の定ケイがぐずりだす。こうされると俺も文句が言えなくなってしまふ。

「まったく世話が焼けるな、それじゃ迎えに行くからそこで待ってる」
「えっ？」

「いいから動くなよ！」

そうとだけ言つて、俺はケイとの会話を打ち切りケータイを折りたたみ、しっかり握り締めた。

08・慣れというのは恐ろしい その7

「ちょっと行ってくる！」

そして、シデンのほうを向いてそう一言声をかけると、俺は教室を飛び出した。

「あっ、ちょ、待て待つのだ上官ーっ！」

シデンの叫びを背中に受けながら、俺は人がまばらな廊下を全力で疾走する。同級生のほとんどはすでにメシに取り掛かっており、廊下には邪魔になるほどの人はいない。

「うおりゃーっ！」

1階への階段を一気に飛び降り、一目散に玄関へ向かう。

シデンが来たことを利用し、ケイも来ていることにしてしまおう。

今の時間なら、生徒用玄関には人がいないはずだから、ここで変身させて連れて行けば、シデンもケイも文句はないだろうしクラスの連中にも言い訳ができる。その時はそう考えていた。

「はあ、はあ、よ、よし、人の気配、なし」

後ろからだたとたと走ってくる足音が聞こえる。時間がない。

「ケイ、人になれ、早く！」

握り締めていたケータイを開き、まだ困惑気味な表情を浮かべるケイにそれだけ言うと、俺はそのケータイを放りなげた。

「え、わ、うわー！」

一瞬何のことだか判らないような声をあげるケイ。だが、そのケータイは床に触れる寸前、まばゆい光を放ち、そして姿を変えた。

「……………ったあい……………」

そしてそこには、コンクリートの床に尻餅をついた、ケータイのキーパッドを意匠した服の子が現れた。

「んもっ、お兄ちゃんったらもっとう優しく扱ってよお、精密機械なんだからあ」

その子、ケイが俺を見てぶくつとぶくれる。

一呼吸置いて、うちのクラスの野次馬が到着する。そして、ケイの姿を見て一瞬だけ動きが止まった。一方でケイのほうもそいつらを見てびくつと体を硬直させる。

「こいつ、俺の、はとこなんだ、今さっき、来たって」

野次馬とケイの間に入り、まだ半分ぐらいいぜいぜいする喉から声を出し、ケイを紹介する。もちろんでまかせだ、ケイがヘンに口ごたえしたらその時点で瓦解する。

だが、人見知りするケイは、どつと現れた野次馬を前にして口を閉ざしてしまった。

だから、これ幸いと俺はケイを「シデンと一緒に来たが、中には入らずここで待つていた」ということにした。

「おら、判つたらとつと戻れ。ケイが怖がるだろ、こいつは人見知り激しいんだから」

後ろから俺の制服を掴んでしがみつくとケイの感覚を覚えながら、俺は腕を振り回しその野次馬を追い返す……そうとしたが、誰も帰らない。というか逆に興味津々といった様子だ。

おかげでケイはもっと萎縮してひしつと俺にしがみついてくる。

困った。このままではメシ食う前に昼休みが終ってしまう。

しょうがないので、ケイにしがみつかれたまま、俺は野次馬どもと共に教室に戻った。その道すがら好奇の目で見られ、とても恥ずかしい思いをした。

だが教室に戻ると、その一角に妙な人だけが出ていた。

「ねえ君？名前、なんていうの？」

「中嶋紫電だ、ってそんなこと聞いてどうするのだ」

「真田君の親戚？じゃあもしかして真田君と一緒に住んでいるの？」

「それがどうしたっ！」

覗いてみると、その中心に居るのはシデンだった。クラスの連中がいきなり現れた和装の少女シデンに興味津々らしく質問攻めになっているのだ。

特に、俺の弁当には無関心を決めていた女子に人気があるみたいだ。

「こら上官！こいつらをなんとかしろ！」

俺が教室に戻ったのに気付いたシデンは、助けを求めにこっちへ向かってくる。

「なんとかって言うても、あんな目立つ登場すりゃ注目されて当然だろ」

「う、だ、だがっ、私の援護があればこそ、貴様も助かったのであるう！だから我も助ける！」

わがままな奴だな、と思いつつも、強がりながらも微妙に泣きそうになっている眼で睨まれると、やっぱり可愛そうになってきてしまう。

「まったく、しょうがない。おいシデン、昼飯はどうするんだ？」

声をかけると、シデンはぱあっと表情を明るくしながら、嬉々としてこっちに来る。

「う、うむ、備えてきたぞ」

その手には、さっき背負っていた赤いナップザック。教科書のほかに昼飯まで持ってくるはずいふんと用意がいい、というか多分最初からここで食うつもりだったんだろうな。

「そか。んじゃメシにするか。ほら、ケイ、そろそろ離してくれ」

「うつつうつつう」

そして、未だに俺にしがみついて離れないケイにも声をかける。それでやっと俺から離れてくれたが、この人見知りはなんとかならんもんか。いかに個人識別機能があるからって、普通にしていれば普通の女の子なんだから。

「それから、ためーら。そこの野次馬！昼飯の邪魔だからとっとと散れえ！」

そして、そのケイが怯える原因になっているクラスの野次馬を散らす。それに伴い、野次馬どもはぶーたれつつ散っていき、俺はようやく一安心する。

食堂や中庭でメシを食う奴もいるため、昼休みの教室にはいくつか空席がある。手近なところから椅子を二脚ほど拝借して俺の席のま

わりに二人を座らせると、バッグから弁当を取り出し、その中のひとつをケイに渡すと自分のぶんを前におき、手を合わせる。

「じゃ、いただきます」

「いただきます」

「いただきます」

俺に倣い、ケイとシデンも合掌する。まだちょっと怯えているのか、昨日にくらべてケイの声のトーンが低い。

そこまで怖がらなくてもいいだろう、そんなことを考えながら弁当箱を開けると、また今日も凝ったおかずが一杯に詰まっていた。やはり野菜多めで和食テイストにまとめられているが、昨日に比べ彩りがカラフルになっていて胃袋を刺激する。

さすがレイカ、いい仕事をする。

そんなことを考えながら卵焼きに箸を伸ばしたとき、ふとシデンが食べているものが目に入った。

それは俺が持ってきた弁当ではなく、海苔を巻いた握り飯だった。シデンの前を見ると、広げられたアルミホイルから顔を出す黒い塊がもうひとつ。女の子が食べるにはちょっと大きめだが、それだけしかない。

「シデン、お前、おかずは持ってきてないのか？」

「む？」

俺の質問に対し、シデンは口の中のものを飲み込んでから口を開いた。

「持ってきていない。握り飯ぐらいしか作る時間がなかった」

「そうか」

どうやら、握り飯はシデンが自分で作ったようだ。そう言われて見れば三角の形状が微妙に歪んでいるような気がする。

わざわざ学校に教科書を届けるために、自分で昼飯を用意して来た。そんなシデンが、その時は妙に殊勝に見えた。

「あー、シデン。おにぎりだけじゃつままないだろ？」

「ん？いや、別に我は気にせぬが」

「俺が気になるんだ。ほら、好きなのって良いぞ」

言いながらおかず箱をシデンのほうに動かすと、シデンは一瞬顔をぱつと明るくさせたが、すぐにそれを引き締める。

「あ、いや、武士は食わねど高楊枝」

そんなことを言いつつも目は俺のおかず箱に注がれている。全く素直じゃない奴だ。

「シデンちゃんっ、これ、あげる！」

だが、こんどはシデンより先にケイが動いた。自分の弁当箱から厚焼き玉子をつまむと、シデンが半分ぐらい食べて具が見える（色からして多分梅干だろう）握り飯の上に置いたのだ。

「シデンちゃん、おにぎりしか無いってことは、お箸無いんでしょ？」

そしてそうたたまかける。言われてみれば確かにシデンの箸が見当たらない。

なるほど。握り飯の上に置けばおかずを手づかみする必要はないか。気が利くじゃないか、と思ったんだが、なんかケイの表情が微妙に険しい。本当はあげたくなかったのに、シデンがもの欲しそうにしているからあげた、そんな感じだ。

「ほら、俺の卵焼きやるからそういう顔すんなって」

「わ、ありがとー」

「.....むう.....」

俺の弁当箱から卵焼きをつまみ上げ、ケイの弁当箱のフタに載せると、ケイは嬉々としてそれを自分の口に入れ、シデンはケイから貰った卵焼きを握り飯ごと口に入れ、面白くなさそうな顔をしながらもぐもぐとする。

マズいということはありません。シデンの握り飯は食ったことがないから判らんが、レイカの料理の腕は天下一品だし、実際にこの弁当のどのおかずをとっても絶品に旨い。それにシデンもうちで飯を食うときはきれいにたいらげていくもんな。

「ほらシデン、お前揚げ物が好きだろ、かき揚げやるから機嫌直せ」

シデンの機嫌をとるために、今度は自分の弁当から桜海老のかき揚げをつまんで握り飯の上に乗せ、ようとした瞬間ぱくつ。

シデンの奴はかき揚げを俺の箸から直接食いやがった。

そして口のなかげもぐもぐしながら、ふふんと勝ち誇ったような表情でケイを見る。

「うう~~~~っ」

今度はケイが、自分の箸の先をかじりながら悔しそうにした、かと思つと俺のほうを向いてこんなことを言った。

「お兄ちゃん、ケイにもっ！あーんっ！」

そして口をあける。わざわざ学校にまで押しかけてきて何を張り合っているんだこいつらは。

「あのなあ、お前ら自分のぶんがあるだろ、これじゃ俺のぶんがなくなっちゃう」

そうやってなんとか二人をなだめすかし、昼飯を再開する。ふと、背中に無数の視線を感じる。

「くそお見せ付けやがってロリ ド野郎」

「あんにやろ、朴念仁のくせにあんなかわいい子独占しやがって」

「ううう俺にもあんなふうになついてくれる妹がほしい」

今日もまた心静かに弁当を食べることは出来ないようだ。

いつになったら安心して弁当が食えるようになるんだろ。そんなことを思いながら俺は大根の煮付けを口に運んだ。

08・慣れというのは恐ろしい その8

昼飯が終わっても、二人は俺を解放してくれなかった。

「上官よ。どうせこれからすることもないのであろう。貴様が勤めるこの学校を見たい。案内しろ」

昼飯をたிரらげたシデンが、いきなりそんなことを言ってきたからだ。

「案内しろっておまえなあ、本来部外者だろうが、勝手にうるついでいいと思っっているのか？」

「いいんじゃないの？」

いきなり後ろから女の声が出た。振り向くと、なんか笑顔を浮かべた委員長が立っていた。

「昼休みの間だったら邪魔にならないし、せつかく来てもらったんだから案内してあげれば？」

いいのか、学級委員長がそんな校内秩序を乱すようなこと言って。

「上官っ、上官というものは部下の要望に耳を傾けるものであるろう！」

シデンはシデンでその言葉を追い風に話を通そうとするし。

「んじゃおいらが案内してやろうか？」

「あつてめこの勝手なこと抜かすな！」

「おめーは顔が怖いんだよ！見る、怖がってるだろ！」

こつちの男子どもは無責任にもこんなふうに盛り上がっている。おかげでまたケイが怖がって俺にしがみついてくる。

「……気は進まんが、しょうがない。」

「はあ、全くお前らは人の日常を引つ掻き回しやがって。昼休みの間だけだぞ？」

頭を撫でてやると、ケイはぱあつと表情を明るくした。

「全く、最初からそう言えば良いのだ、気の利かぬ奴め」

腕を組んで、ふふんと言いたげな表情でこつちを見ているシデンも、

なんか嬉しそうに見える。

一方で、見事に振られた男子一同と一部の女子はなんか暗いオーラを放ちながらこっちをじっとりした目で睨んでいる。

「さ、さてと、昼休みは限られているから、さっさとまわるうか」とりあえずそのオーラに捕獲されないうちに、俺たちは教室を後にした。

「しかし、よく考えたらケイは結構この学校のことを知っているんじゃないのか？」

廊下を歩きながら、ふと浮かんだ疑問をケイに投げかけてみる。なにしろケイは元携帯電話であり、俺はその携帯電話をほぼ毎日持って来ていたんだから。

「えー、それはそうだけども、でもケイが知っているのってごく一部だよ？」

「え、そうなのか？」

「だって普段はポケットの中だもん、出してくれた時の光景しかわかんないもん」

「……あ、そうか」

そりゃそうだ。擬人化前は動くと言っても震えるだけだもんな。

「なあ上官、何か音楽が聞こえるのだが、これはなんだ？」

「ああ、これはオケ部が練習しているんだ。学園祭も近いしな」

「ガクエンサイ？」

「生徒が主催でやるお祭りだよ。クラスごとや部活ごとに色々な展示や催し物をするんだ」

「ふうん。ねえ、お兄ちゃんは何をやるの？」

「え？ああ、うちのクラスで中国をモチーフにした模擬店をやるらしい」

「あ、だから昨日、あの委員長さん、紅娘ちゃんに色々聞いてたんだね」

うーん、それは気がつかなかった。昨日は色々な意味ではらはらしっぱなしで、そこまで気が回らなかった。

なんかそんな話をしながら歩いていてうちにケイも学校の雰囲気慣れてきたのか、シデンと一緒に楽しそうにはしゃぐようになってきた。

うん、はしゃぐのはいい。いいんだが、学校中どこを歩いても注目されてしまうのは少々困ってしまった。なにしろ、本来いないはずの年頃の子が、コスプレじみた格好ではしゃいでいるのだ、注目されないわけがない。

生徒ならともかく、先生に見つかったら、これはまずいかも。

「真田君」

そんなことを考えて内心穏やかじゃなかった時に、とうとう声をかけられてしまった。

覚悟を決めて振りかえる。うちのクラス担任の、徳大寺先生がそこにいた。

「真田君、あの子たちは、どこの誰かしら」

そう聞いてくる先生の声は、とても事務的な感じがする。参ったな、徳大寺先生って、意外と校則違反には口うるさいんだよなあ。

「あ、えー、その、二人とも俺のはとこで、忘れ物を届けに来てくれて、えー」

なんとか言い繕おうと言葉をひねり出す。すると、俺のことを気にしたのか、二人がててつと俺のところへと駆け寄って来た。

「上官、何奴だこの女は」

先生のことをじろつと睨みながら、シデンが思いつきり失礼なことを言う。

「バカ、何てことを言うんだ、俺のクラス担任だよ」

「ええっ!?!?じゃあお兄ちゃんの先生!?!」

「こらっ、大声出すなっ!」

シデンを叱るとこんどはケイが驚いた声をあげる。お前はいい子だと思ったのに、なんでそう困らせるようなことを言うんだ。

「ずいぶん、元気な子たちね」

先生の表情も、微妙に引きつっている。非常にまずい兆候だ。

怒られるのは俺なんだぞ、判っているのか二人とも。いや、そもそも数学の教科書を忘れさえしなければこんな事にはならなかったのだ。今度から準備は間違いなく行おう。うん。

そんな自問自答を頭の中で繰り返しつつ、ふと顔を上げると、先生はなぜかケイとシデンのことをじいっと見つめていた。

「……真田君、ちょっと聞きたいことがあるの。二人を連れて、生徒指導室に来てもらえないかしら」

と、先生が妙に改まった様子で俺にそう言うてくる。

これは、お説教かそれとも反省文か。俺は、二人がはしゃぐのをほっといたことを、今更ながらに後悔し、がっくりと肩を落とした。

08・慣れというのは恐ろしい その9

「失礼しまーす。ほら、シデン、ケイ、入るんだ」

自分は悪くないと主張するシデンをなんとか説き伏せ、俺らは徳大寺先生が待つ生徒指導室のドアをくぐった。

生徒指導室は、半ば物置と化しているため非常に狭い。この前に先生と2人で入ったときでさえ狭いと思っただぐらいなので、4人で入った今回は言わずもがなだ。

「とりあえず、座って」

先生は、俺たちに椅子を勧めると、自分はその向かいの椅子に腰掛けた。

「………なんか、様子が変だ。」

先生と俺たちの間には長机が置かれているが、机の上には何も乗っていない。先生の表情も、感じる雰囲気も、なんか年下の親戚を見るみたいに穏やかだ。

「ふたりのお名前、教えてくれないかしら？」

そして先生は、椅子に腰掛けたケイとシデンの二人に、やさしく話しかける。

二人は、どうしよう、といった感じでこっちを見てくる。まあ名前ぐらいなら大丈夫だろう。俺は軽くうなずき、返事を促した。

「あ、あの、真田、蛭です」

「中嶋紫電だ」

「ケイちゃんに、シデンちゃんね。ふふっ、可愛い名前ね」

まだ警戒を解いていない二人の返事に、先生は保母さんのように微笑みながら頷いた。

へんな感じだ。説教されるのではないのだろうか。

「聞きたいことってというのは、その子たちのことなのだけれど、本当に真田君の親戚？」

そして、俺に向けて切り出してきた先生の口調もとても穏やかだっ

た。だから、その言葉が持つとんでもない意味が、すぐには判らなかつた。

「えっ？」

「あ、違つたらごめんなさい。その子たちが、ただの人じゃないなつて気がしたから」

「あー、まあ確かにただの人じゃないかも……え？」

「やっぱり、そうだったのね！」

何の気なしに口走つた言葉に、先生はこっちが驚くぐらいの反応を見せた。そして次の発言には、今度は俺のほうに驚かされた。

「その子たち、擬人化でしょ!？」

「ええっ!？ちよ、な、なんでするか擬人化つて!？」

そのへんの事情を知らないはずの先生から、いきなり擬人化と言われたのだ、驚くなどというほうが無理だ。なんとか繕おうとするが、それ以上の言葉が出てこない。

「おいっ、上官っ、話したのか!？」

「お兄ちゃん口が軽いようっ!ケイたちには黙っているって言ったのに!」

「お、お前ら落ち着け、俺だつて言つてないっ!」

シデンとケイの二人も、半分パニックに陥っている。

「……あ、ええつと、ごめんなさいね。脅かすつもりはなかつたのだけれど」

一方で先生は、俺達の取り乱しようを見てちよつと戸惑つたように頬を掻いている。

じゃあ一体なんなんだ、昨日直接うちに来た連中ですら気付かない、というか知りもしなかつたことを知っているなんて。

「真田君、私の実家の徳大寺家は、西園寺家と親交が深かつたつて話したでしょ？」

先生の言葉に、少し落ち着きを取り戻してきた俺は、ここ数日の記憶を掘り起こしてなんとかそれを思い出す。確か、明治時代からのつきあいなんだっけ。

「その縁で、私がまだ学生だったときに、西園寺家当主だった静香様による擬人化の方々と、お会いすることがあったのよ。だから知っているの。西園寺家における擬人化は、概念とかなぞらえなんかではなく、人でないものを実際に人の姿にしてみようことだって話せば答えてくれる、意思の疎通が出来る、人にね」

「・・・・・・・・」

「ね、二人ともそうなんでしょう？」

そして、改めて真顔で俺に聞いてくる。

普通であればかなりデンパなやりとりに見えるだけの光景だが、今回の場合それが事実なのだからまたややこしい。

「・・・・・・・・先生、それを知って、どうするんですか」

考えた末、まずは先生にそうきいてみることにした。

クラスの連中と違い、徳大寺先生は少なくとも擬人化の力のことを知っているようだ。しかしそれだけでは同時に、それを狙っている可能性にも繋がる。だからまずは軽いジャブで相手の出方を見ることにした。

見方によつては先生の問いを肯定することにもなるが、まあ元々見抜かれているようだしな。

「え、どうつて言われても・・・・・・・・私にはどうもできないでしょ？それは真田君の特権みたいなものなのだから」

だが、返ってきた返事はこんな間の抜けた、欲のないものだった。

「そりゃあ私だって、愛用の万年筆とか急須とかがこんなかわいい子になって、おしゃべりとかができたら、楽しいだろうなあっと思っければね」

なんかもう、先生はこの二人がモノであることを、すでに確証しているみたいだ。

「ねえ、ケイちゃんにシデンちゃん。二人は、何の擬人化なのかしら？」

「あ、ええと、ケイは、お兄ちゃんの携帯電話なの」

「我は、零式艦上戦闘機二一型、通称ゼロ戦、の模型だ」

そしてとうとう、二人の口から、彼女らの正体がバラされてしまった。まあすでに先生にはばれていたらしいから、今更な感もあるが。案の定、先生はそんなに驚いていなかった。

「ふふっ、真田君、二人ともいい子じゃない。毎日が楽しいでしょ？」

「え、あ、まあ」

「歯切れが悪い返事だな、上官。せっかく師団長殿が誉めて下さったのだ、もつと喜ばんか」

喜ばんかって、俺は誉められてないんだが。だいたい、師団長ってなんだ、うちの学校は軍隊じゃないんだぞ。

「でも、真田君が西園寺家由来のこの力を受け継いだってことは、西園寺家の継承に前向きに考えてくれてるってことよね。先生は嬉しいわ」

先生は先生で無責任なことを言っているし。先生は、元々親交があったらしい徳大寺家の人だし、俺が知らない俺の生みの母に相当世話になったらしいから、西園寺家に思い入れがあるんだろう。でもこの力、俺が西園寺との関わりを知る前に手に入れたんだけど。それはともかくとして、だ。

「先生、擬人化のことは、口外しないでもらいたいんですが」
なにはともあれ、このことだけははっきりさせておかないといけない。

なにしろ、擬人化したものが現実に存在するだけで充分非常識なのだ。正体が知れ渡ったら騒ぎどころではない。俺が槍玉にあがるだけならまだいいが、うちのモノたちが大変な目に逢うのだけはどうしても避けなければならぬ。

「ふふっ、心配性ね、真田君は。大丈夫よ、私だって先生だもの、生徒を陥れるようなことはしたくないわ。このことは、ここにいる人だけの秘密にしましょう」

にこやかな先生の言葉を聞いて、俺はやっと安心できた。そして、安心すると同時に、どっと疲労感が押し寄せ、俺はそのまま椅子に

もたれかかった。

そして、何とはなしに外を見ると、そこにいた奴と目があつた。と言つても、人ではない。

窓の外には暖房用の灯油が入つたドラム缶などが置いてあるのだが、そのドラム缶の上にちよこんと座つていた白いネコとだ。

正確に言つと、白地に黒い虎縞という、白いトラを縮めたような感じのネコだ。そのネコが、ドラム缶の上に座り、時々顔を洗つたり毛づくろいをしたりしている。

「あ、ネコだ」

ケイも気づいたらしく、その窓に近づいて声を上げる。

「ネコ？」

「うん。ほら窓の外」

「まあ、こんな所に入ってくるなんて珍しいわね」

シデンと先生も窓の外を見て声を上げている。3人はそろつてネコ好きのようだ。

だが、こつちが騒いだせいか、その虎縞白ネコはドラム缶から飛び降り姿を消してしまった。

「あつ、逃げちゃつた……」

「あらら、残念だつたね」

「仕方あるまい、飼いならされていない動物は人を警戒するものよしょんぼりしたケイをシデンと先生がなぐさめる。

その光景を見ながら、俺は、ペットとかがうちにいたら、うちのモノたちは喜ぶかも、なんてことをぼんやりと考えていた。

08・慣れというのは恐ろしい その10

じゃあ、車に気をつけて帰るんだぞ」

「ふっ、心配は無用だ。上官こそ、午後の勤めをしつかり行つのだぞ」

昼休みの終わり間際、俺はケイとシデンを見送るため生徒用玄関に来ていた。

「ねえ、お兄ちゃん、ケイも帰らなきゃ、ダメ？」

「くいくいと俺の袖を引いたケイが、小声で聞いてくる。

「おうちと連絡が取れなくなっちゃうけど、いいの？」

そう言いながらも、目はそれ以上に「寂しいよう」と言っている。

普通ならケータイになってもらってからポケットなりに収めるのだが、今日はそうするわけにはいかない。

なぜか、と説明するまでもない。玄関にいるのは俺だけではないからだ。次の授業に向かうために外から帰ってくる連中や逆に出て行く連中のごった返している上に、うちのクラスから暇な連中が何人も見送りに来ているのだ。

「悪いけど、今日のところは帰ってくれ。残られるのもちょっと問題があるし、な」

「うっうっうっうっ、わかったよう」

相当不満がありそうだが、それでもケイは俺から手を離してくれた。

「では皆の者。我等はこれで失礼する。上官のこと、よろしく頼む」
かわりにケイの手をつかんだシデンが、俺たちのほうを向いて手を振っていた。大げさな奴だな。

だが、うちのクラスメイトはそれに輪をかけて大げさだった。

「またなにかあったらおいで、歓迎するよ」

「他のお姉さんでもいいぞお」

と、まるで引越しを見送るかのように、口々に見送りの言葉をかけているのだ。全く、このムダなエネルギーを他のことに費やせとい

うんだ。

そして、二人の姿が見えなくなったとき。

「マサもあなどれないねえ」

クラスメイトの一人が、俺の肩に手を回してくる。

「あんなかわいい子と一緒に住んでりゃ、他の女には目も行かないかあ？」

「お前、朴念仁じゃなくて、ムツツリだったんだなあ」

「さーで、戻るかあ。色々と聞きたいこともあるしなあ」

そして、俺は連行されるようにして教室へと引っ張られていった。

ふと、その視界にひとつの白い塊が入ってきた。1匹のネコだ。白地に虎縞という、さつき生徒指導室の窓から見たネコと同じ柄なので、多分同じネコなんだろう。

そいつはすぐにどこかへ行ってしまったんだが、なんか妙に気になった。

気にはなつたんだが、その時の俺は両脇をがちりガードされていたため追いかけることも適わず、俺はそのまま教室へと連行されてしまった。

08・慣れというのは恐ろしい その11

「ふうー……………」

本日最後の授業が終わり、肩の荷が下りた俺は、ひとつ大きく息を吐いた。

今日は、シンイチもヤジローも部活へと向かっている。あいつら、部活は休まないんだよな。

「そういや、今日はケイもないんだよな」

昼にうちに帰ってしまったからなあ。思い返してみると、ケイを連れて登校したのは今日でまだ3日目なんだが、ポケットの中でさわぐあいつがないとなんか寂しい。

まあそれはそうとして。今週に入ってから始めて、俺は誰にも付きまとわれない、完全にフリーな状態になったのだ。

「さてと、そろそろ行くかね」

そして、今日は俺も部活があるからとつとと帰るわけにはいかない。仮にも棒高跳びのレコードホルダーでしかもまだ2年生なんだから、怠けるわけにはいかない。

しかし、先週の今日あたりから色々ありすぎて、結果としてトレーニングをサボっていたから、あまり偉そうにも言えないんだよなあ。1日さぼると取り返すのに1週間はかかるし。

でも、だからこそこれ以上さぼってはいけない。

思考がだんだんとマイナスによつてきたので、考えるのを一旦止めて荷物をまとめ、席を立った。

「おっ、マサ今日はもうお帰りかい？」

「大変だねえお兄ちゃんも」

「バーカ、部活だよ部活。レコードホルダーは大変なんだよ」

ヒマ人連中に冷やかされながら教室を後にし、急ぎ足で下駄箱へ向かうと、上履きから靴へと履きかえる。

「あら、真田はん。どちらいかはるのん？」

外へ出ようとしたところで、外から入ってきた賀茂さんと鉢合せした。って、なんでこの時間帯に外から来るんだ、忘れ物でもしたんだらうか。

「どちらって、部活だよ。そういえば賀茂さんは部活入ってないの？」

「あ、へえ、今ここは」

「ホント？色々引つ張りだこなんじゃないのか？」

「そつどすなあ、今日もこれから茶道部とおおけすとら部にお呼びれしてます」

「そつか、大変だなあ」

「ま、のんびり決めさせてもらいますわ」

そしてにっこり微笑む。もうちょっと話をしていたかったが、時間もないことだし、むこうも用事があるので、適当なところで切り上げ、俺はその場を後にした。

08・慣れというのは恐ろしい その12

将仁が去って、ほんの数秒後のこと。

「にゃー」

後ろから聞こえてきた泣き声に応じるようにして、女がすつと振り向いた。

1匹の猫が、物陰から顔を覗かせ、こちらを伺っている。

女がその場にしゃがみこみ、右手を出すと、猫は物陰から飛び出し、女の前に駆け寄るとその場にちょこんと座りこんだ。ぱつと見たときは白猫のようだったが、その猫は体に虎のような縞模様があり、猫というよりは白い虎のミニチュアのように見える。

「今日は一日おつかれはん、と言いたいところやけど」

女は猫の喉元を指先で撫でながら、その猫が言葉が判るかのように話しかける。

「悪いけど、あとちつとばかり張りついてもらえへん？」

すると、猫のほうもそれがわかったかのように顔を上げ、抗議するかのように一声鳴いた。

「愚痴りたいんは判るけどなあ、うちもまだ手え離せへんのやわ。

炎雀えんじゃくはんも違つとこに張りついてもるとるさかい、動けるんはあんたはんだけなんどす。あとでおととあげるさかい、頼めまへん？」

それに対し、女は本当に申し訳無さそうに言葉を続ける。

やがて、その猫は諦めたように下を向き、にゃーと一声鳴くと、そのままくるつと向きを変えて駆け出し、そして再び物陰に消えていった。

「あら、賀茂さん。こんなところで何してるの？」

入れ替わるようなタイミングで、彼女の後ろから声をかけられた。立ち上がって振り返ると、自分と同じ制服を着た女子が数人、こちらを見ている。

「ああ、滝田はん、すんまへんなあ。お猫はんがいはったさかい、

つかまつてしもてん」

女は、髪を靡かせながらその女子たちのほうへ走っていく。

「へえ、賀茂さん、猫好きなんだ？」

「せやなあ、猫だけやのうて、おケモノはんならみんな好きでっせ
？」

「そうなんだあ。じゃあ今度うちにおいでよ、うちネコ飼ってるから、見せてあげる」

「ほんまどすか？やあ、おおきになあ」

「あ、いつけない。そろそろ部活が始まっちゃう。行かないと」

「あー、おおけすとら部やったっけね。早う行きまひよ」

そしてその女子たちと一緒に、黒い髪の女の姿は校舎の中に消えていった。

08・慣れというのは恐ろしい その13

「おにーちゃあん！おかえりなさい！」

部活を終え、帰ってきた俺が、通用門をくぐったと同時に、ケイが飛びついてきた。

「どうやら俺を待っていたらしい。どこそのロリコンに見せたら地団駄踏んで悔しがる光景だな、と思いつつケイの頭を撫でると、ケイは満面の笑みで答えてくれる。」

「もう、ケイがどんなに心配したと思ってるの！？怪我してないかな、道に迷ってないかな、電車に乗り遅れたりしていないかなって、気が気じゃなかったんだからあ！」

「悪かった、悪かったって、そんな怒るなよ」

「やだもん！ゆるさないもん！えへへっ」

そんなことを言いながらも、ケイはぎゅーっとしがみついてくる。いくら人通りが少ない夕方とはいえ、外でやられるのはいささか恥ずかしい。

「あ、そだ。お兄ちゃん、ちょっと見て欲しいものがあるんだ」
ふと我に帰ったケイが、ぱっと離れてからくいくいと俺の袖を引っ張る。

「見て欲しいもの？なんだそれ？」

「えへへ、すっごくかわいいものっ！ほら、早く早くっ！」

そう言っつ俺を引っ張るケイの目は、さっきと別な意味でキラキラしている。

かわいいものって、なんだろう。携帯電話から見てかわいいものと言っつ心当たりがあるのはストラップぐらいだが、だったら家の中に置いておかなくてもいいだろうから……じゃあなんだろう？

ケイに引っ張られるまま家の中に入った俺は、そのままりビングに通され、そして奇妙な光景を目にした。

なんか知らんが、そのリビングのすみのほうに人だかりが出来ているのだ。集まっているのは格好からしてうちのモノ集団なのは間違いないが、みんなで何かを取り囲むようにしてこっちに背中を向け、互いになにやら小声で話し合っている。

「みんなあ、お兄ちゃん帰ってきたよお」

ちよつと不満げなケイの声でやつと俺のことに気付いたらしく、モノたちが動き出した。

「あ、お、お帰りなさい、お勤めご苦労様でしょう」

真つ先に動いたのはやっぱりテルミだった。ぱつと身を翻してこっちを向くと、メイド立ち（というのがあるかどうかは知らんが）になつて頭を下げてくる。ほんと真面目だなあ、浮ついた番組ばかり流しているテレビだとはとても思えん。

「ああ、将仁か、お帰り」

「ずいぶん遅かったわね。いつもは私が買い物から帰るころには家にいるのに」

「おおかた、寄り道でもしていたのであろう」

なんか変な中傷が混じっているような気がするが、それは聞き流すとして。

「なにやっつてんだ、お前ら？」

その一団に割り込みながら、一番気になることを聞いてみる。

「何って、まあ見てくださいよ」

そう言つて場を譲る鏡介に促されてそつちに目を向けると、上向きに口を開けた段ボール箱の中に、毛布の塊が安置されているのが見えた。

クリンが、その毛布をめくり上げる。

枯れ草のような色をした動物が、そこに横たわっていた。大きさは豆芝よりちよつと小さいぐらいだろうが、犬に似ているが、犬に似ては顔が細い。また耳がとんがってて大きく、ふさふさした大きな尻尾が特徴的だ。

これに似た動物を、どこかで見たことがあるような気がする。俺は

脳のシナプスをつなぎまくってその記憶を懸命にたどり、そしてようやくそれを思い出した。

「これ、狐か？」

「Certainly. This is a Japanese foxデース」

バレンシアが答えるまでもなく、それは日本人になじみが深い、しかし今では絶滅とまではいかなくてもかなり数の少ない動物、狐だった。しかも、体の大きさからしてまだ子供だ。

だが、自然と言ったら公園とか街路樹ぐらいしかないこのへんに、なんているんだろう？どっかで飼っていたのが野良になったんだろうか？

「なんでここにこんなのがいるんだ？どこから拾ってきたんだ？」

その疑問を素直にぶつけてみたところ、答えはあっさり返ってきた。

「拾ってきたっていうか、いたんスよ。床下に」

「床下あ？」

なんでも、紅娘の奴が床下に500円玉を落としてしまい、探そうとのぞいてみたときに見つけたんだそうさ。

08・慣れというのは恐ろしい その14

「んー、あれ、ナニアルかなー？」

「何してんだ、紅娘」

真田家のリビングの、南側に向いた大窓はバルコニーに続いている。そのバルコニーにうつ伏せになって床下をのぞいている紅娘に最初に気づいたのは、ヒビキだった。

「あ、ヒビキサン。やー、そこに何かいるのが見えたアルから」

頭をあげた紅娘が、床下を指差す。そこには、床下の湿気を逃がすための風通し用の穴があいているのだ。

「床下にかい？ネコか何かじゃないかい？」

「私もそかなーと思うアルけど、暗くてよく見えないのコトよ。それになんか、動いてる様子ないアル、もしかしたらただのゴミかもアルね」

「どれ」

紅娘に促され床に降りたヒビキが、同じように地面にはいつくばって床下をのぞく。

ほとんど光が入ってこない床下は、当たり前だが真っ暗である。いくつが開けられている風通し用の四角い穴が逆に暗い空間の中に浮かんでいるように見える。

今のぞきこんでいるのもその穴のひとつであり、本来は鉄格子がはまっているのだが、彼女らがのぞいている穴に限ってはそれが外れていた。

「あー。こりゃ確かによく見えないわ。お前、よく見えな」

「やっぱそう思うアルか。明かりになるもの、借りてくるアル」

「いや、ちよっと待ってな」

そう言っ立ち上がろうとする紅娘を引きとめると、ヒビキは一度目を閉じ、そして開いた。

すると、ヒビキのところから床下の奥まで、まっすぐ照らし出す光

の道が現れた。しかも、懐中電灯などよりずっと明るい。

「あー、確かに何かあるな、ただのゴミじゃなさそうだ」

「……あー、ちょっといいアルかヒビキさん。それ、ナニア
ルか？」

「ん？何ってそりゃ、暗いから中を照らして」

「そじゃなくて、なぜ目が光ているアルか！」

そう。中を照らす光は、なんとヒビキの両目から放たれているのだ。

「あー、こいつか。こりゃヘッドライトだよ。夜道を走る際には必
要だろ」

つまり、モノの時にヘッドライトだった部分が、人になったときに
目になっているということらしい。

「便利アルなー、羨ましいアル。さすが文明の利器は違うアル」

「うっ、お、おい、変なこと言うなよ、照れるじゃねえか、あはは
は」

紅娘の言葉に本気で照れたのか、少し顔を赤らめながら、照れ隠し
といわんばかりにヒビキが紅娘をばしーんとひっぱたいた。

「アイヤー！？」

叩いたところがちょうど紅娘の背負う鍋だったため直撃はしなかつ
たが、ヒビキがパワーセーブを忘れていたらしく紅娘の体はそのま
ま数メートルふつとばされ、ごろごろごろつと床を転がった。

「な、何するアルか！ワタシじゃなかつたら大怪我だたアル、注意す
るヨロシ！」

その数メートル先で起き上がった紅娘が、まさにぴゅーんつといっ
た感じで戻ってくると、ヒビキに向かって抗議する。

「わ、判った判った、悪かったよ、ごめん」

さすがに今のは自分が悪いので諸手をあげて非を認める。

「それよりさ、床下の奴、どうすんだよ」

「あ、そうだたアル」

そして、二人は再び軒先にしゃがみこむ。

「うーん、何だろ、毛皮っぽいように見えるんだけど」

「毛皮アルか？やはりイヌサンネコサンネズミサンアルかな？」

「そんな気になるんだつたら、あたしがここで照らしてるから、お前、中に入って見てこいよ」

「は？」

「あたしじゃ頭しか入らないよ。お前ならあたしより小さいだろ」

「それは無理アル、試したけどワタシも頭までしか入れなかつたアル」

「

「その鍋置いて行つたら入れんじやないか？」

「それ以前に肩がつかえるアルね」

そして、その場でああでもないこうでもないと言論が始まつたとき、通りかかつた者がいた。

「何をしてらつしやるんですかあ？」

クリンだつた。取り込んだばかりの洗濯物が一杯に入つた洗濯籠を抱えている。

「おう、クリンか。いやな、この中に何かいるみたいなんだ」

「ええ？何かつて、何ですかあ？」

どうやら、クリンも興味を持ったらしい。リビングの床に洗濯籠を置くと、二人が陣取つている風通し用の穴の前にしゃがみこんだ。

「それが判らないから、どうやって確認しよか考えてたアルよお」

「とりあえず見てみな、あたしが照らしてやつから」

「は、はい」

そして、再びヒビキが目をライトのように光らせて中を照らす。

「ほら、あたしが照らしてるどころ。見えるだろ？」

「ああー、確かに何かいますねえ。お休み中なのでしょうかあ？」

「ワタシが見つけたアル。イヌサンネコサンネズミサンかなと思つアルけど」

「ここから入つたみたいだけど、いかんせん狭くてさ。うちらじや入れないんだよ」

「そうですねえ、お二人とも固そう、じゃなくてえ、頑丈そうですしい」

そして3人が穴の前でうーんと考え込んだ、そのとき。突然、紅娘が何かを思い出したようにぽんと手を叩いた。

08・慣れというのは恐ろしい その15

「そだ、クリンサン、スポンジだたと言てたアルな。アナタ入れないアルか？」

「そうですねえ、私があ……ええええ！？私が入るんですかあ！？」

紅娘の言葉に、ワントンポ遅れてクリンが驚きを示す。

「ああ、それは試してみてもいいかもなあ」

「あつづつう、ヒビキさんまでえ」

紅娘の言葉にヒビキも同調する。クリンは不利な状況に立たされてしまった。

ちらりと、その風通し穴を見る。振り向くと、ヒビキと紅娘がじつとこちらを見ている。

「うづうづ、わかりました、やってみますう」

断れないと観念したのか、一つため息をついてから、肩幅もなさそうなその穴をのぞきこむ。

「借り物の服が汚れるのでえ、あまり気は進まないんですけどお前置きをして、まず四つん這いになった状態から左手を穴の中へ入れる。そしてそのまま体を前に進め、肘が入ったところで頭を左腕に押し付け、もそもそとねじ込むようにして体を押し込んでいく。そのまま、体をぐいぐいと押し込むようにしながら進んでいく。

そして、クリンはやはりスポンジだった。明らかにその穴より大きい胸のあたりや腰まわりも、もそもそと体が動くとまるでその穴の形に合わせたように縮み、そして穴の中へと入っていくのだ。やがて足が抜け、クリンの体がすべて穴の向こうへと抜けた。

「うづうづ、やっぱり暗いしい、天井は低いしい、埃っぽいしい、長居したくないですねえ」

そして、四つんばいになった状態で鼻をひくひくさせて、

「それに何か腐ったみたい匂いがしますう」

そう言つてうなだれる。天井が低いので頭を上げたくても上がらないのだが。

「おい、クリン、こっちだこっち、右のほうだ」

その後ろから、目を光らせたヒビキが指示を出す。その眼光、文字通りの眼の光が、クリンの右側にある「なにか」を、まるでサーチライトのように照らし出している。

ヒビキの声に従い、四つんばい、というよりほとんど這うような感じで、クリンが方向転換してずりずりとそちらに向かう。

ロングスカートに苦戦しつつも、クリンはその「なにか」のそばまでやってきた。

「うっ……」

そして、そこにあつたものを見て、思わず眉をひそめ顔を歪めて口元を押さえてしまった。

それは、2匹の動物の死体だった。一見犬のようにも見えるが、犬とは明らかに違う大きな尻尾が特徴的だ。親子なのだろうか、片方はもう片方に比べ、2回りほど小さい。そして、死んで日が経っているらしく、腐敗臭がするそのまわりにはハエがぶんぶん和不快な音を立てて飛んでいる。

「ひ、ひゃあああああっ！し、死体です、動物さんの死体ですう！」

そして、悲鳴をあげ、床下の梁や柱に頭や顔や腕をぶつけながらも全力で穴のところまで戻り、にゅっと頭を突き出した。

「はあ、はあ、はあ……びつくりしましたあ」

「死体って、なんのことでしょう？」

せいぜいと息を切らせている、クリンのその頭上から、さっきまでそこになかった声がする。

「あ、て、テルミさん」

そこには、掃除機を横に置いて仁王立ちし、見下ろす黒マントのメイド、テルミがいた。

「全く、いつまで経っても洗濯物を持ってこないから、何をしてい

るかと思つたら」

「あう、こ、これはあ」

「まあまあテルミ、そうクリンを責めないでやってくれよ。あたしらが頼んだんだ」

なんとか言い訳をしようとするクリンに、ヒビキが助け舟を出す。その後ろでは、同じく床下に入ることをクリンに要求した紅娘がこくこくと頷いている。

「実はアルね……」

「……そう、ですか、確かにそれは気になるでしょう」

紅娘から説明を受けて事情を把握したらしいテルミが、あごに手をやって考えるような仕草をする。

「うん、動物とはいえ、床下に死体があるのは気分がいいものではないでしょう」

そしてその場にしゃがむと、こう言った。

「ではその死体を床下から出しましょう。クリンさん、やってくれるのでしょうか？」

「え、ええええええ！？」

「これに入れば、触らなくても外に出せるでしょう。洗濯物のほうは私がしますから」

いつも半開きの目をむいて驚くクリンに、テルミが買い物用ポリ袋を差し出す。

そして、紅娘がどこからか持ってきた庭弄り用の移植ごてを差し出されるに至り、断れなくなったクリンは袋と移植ごてを手に、不満顔で穴の中に引っ込んでいった。

「うとうとうう、なんで私がこんな泥だらけにならなければならぬいのでしょうか」

クリンは、ポリ袋と移植ごてを持ったまま、薄暗い中を四つんばいになって、床下の動物の死骸へと進んでいく。すでに彼女が着ているメイド服は埃まみれで汚れきっていた。

「あああああ、こんなに汚れちゃいましたよお、私にとって、汚

れと乾燥は天敵なのに」

「おーい、見えるかー？」

「あああああ、はいいいいい……」

力が入らないのか、目のスポットライトで奥を照らすヒビキの声への反応もいつも以上に鈍い。どうやら、クリンは汚れたり乾燥したりすると力が入らなくなるようだ。

「ほら、終わったらフロ直行していいから、がんばれ」

ヒビキの言葉に後押しされ、へろへろになりながらも、小さいほうの亡骸をポリ袋に入れる。さっきは気がつかなかったのだが、一方は中型犬ぐらいの大きさがあり、とても持ってきたポリ袋には入りきらなかったからだ。小さいほうですら、豆芝ぐらいの大きさがあ

る。
姿は犬に似ているが、なんとなく犬とは違う動物だ。

「はあ、ふう、はあ、ふう……も、持ってきましたあ……」

クリンは、カタツムリかナメクジのようにぐんにやりとなりながら、這うようにして自分が入った穴へたどりつくと、袋を両手で外に出し、バルコニーに置いた。

その袋を紅娘が持ち上げたのを確認すると、自由になった腕がじたばたとものがくように動き、そして今度はクリンの頭が出てくる。なまじ色白で髪まで白いものだから、汚れがよけいに目立つ。

「ぶはあ、苦しかったあ……」

なおももぞもぞと体を動かすと、徐々にクリンの体が穴から出てくる。普通の人間であれば頭ぐらいしか入れないその穴を、ありえないポーズで潜り抜ける様は、さすが元スポンジといったところか。

「うきゆう……」

だが、ウエストのあたりまで出たところで、クリンは力尽きたようにそこにのびてしまった。

08・慣れといづのは恐ろしい その16

「お、おい、大丈夫か？」

「クリンサン、目を覚ますヨロシ！まだ半分しか出てないアル！」
ヒビキと紅娘が起こそうと懸命にゆするが、クリンはまるで船酔いか熱射病にでもなったかのようにぐったりしている。

「アイヤー、ヒビキサン、どうしよ、困たアル、意識戻らないアルよお」

「あ、あたしに言われても、あたしだって、どうしたらいいか」

「とととにかく出さないといけないアル、ヒビキサン引つ張るヨロシ」

「バカ、あたしの力で引つ張ったら千切れちまう」

二人はそこでパニックになってしまった。なにしろ、クリンに行けと言ったのは自分たちである。その意味では責任の一端は自分たちにある。

だが、二人がおたおたしているところに、意外なところから助けが入った。

「ほら二人ともどきなさい」

そこにいる3人以外の声がした。ヒビキと紅娘は、その声の主を見ると、あわててそこから数歩離れた。

その直後。

ざばあー！

クリンの上から、突然大量の水が落ちてきた。

「……ふえ……」

すると、うつぶせになったままぐったりして動かなかったクリンが、声をあげた。そして、意識を取り戻したように小さく頭を上げ、いつもどおりの半開きの目でまわりを見回す。

「お、おい、大丈夫か！」

「……私、どうして、濡れているのでしょうか？」

「私が水を浴びせたからよ」

クリンが、体をひねって自分の後ろから聞こえる声の主を見た。

そこには、白い着物を着た女が立っていた。手に洗い桶を持ってるので、その桶に入っていた水をクリンめがけてぶっかけたらしい。

「れ、レイカさん」

「こんなところで何をしているのかと思えば。ほら、早く出てきなさい」

そう言われて、まだ自分の下半身が床下にあるのに気付いたクリンは、あわてて体を起こし、残った部分の引き抜きにかかる。

やがて、全身を抜き出したクリンは、風呂に入って汚れを落とすために、ヒビキに付き添われながら家の中に入っていった。

「それで、紅娘。何をしていたのかしら？」

そして、レイカは取り残された紅娘に声をかける。その口調はいつもと変わりなく、表情も変わらないが、その背後からなんとなくレイカが不機嫌なことを察した紅娘は、ありのままを話すことにした。「それで、コレがそのケモノサンアル」

最後に、さつきクリンが床下から持ち出したポリ袋を前に出す。

「そう。確かに、目につかないとはいえ床下に死体があるのは気分が良くないわね」

「ワタシもそう思ったアルし、テルミサンも同じコト言てたアル。」

風水的にもよろしくないアルから、除いてもらたトコロ……ん？

だが、不意に紅娘がその死体が入っているポリ袋を触りながら、怪訝な顔をした。何かに気がついたようだ。

「どうしたの？」

「……少しあつたかいアル」

「えっ!？」

レイカが驚き、サンダルを履いてバルコニーへと下りてくる間に、紅娘は袋を置くと袋の口を急いで開いた。

死臭が鼻を突く。そのにおいに眉を潜めながらも、紅娘はその袋の

中に手を入れ、そして中に入っている動物の亡骸に手をかざす。

「どう?」

「………やっぱり、ちょっと温かいアル」

一緒にのぞきこむレイカの目の前で、意を決した紅娘が、その体に指先で触れてみる。そして声をあげた。

「生きてる!」

なんと、その動物はまだ生きていたのだ。弱弱しいながらも心臓は動いており、息もしている。

「ホントか!？」

いつのまにに来ていたのか、ヒビキが後ろからのぞいて声をかける。

「や、ど、どうしましょう、どうしたらいいでしょう」

同じく、いつのまにかリビングに戻っていたテルミもばたばたと落ち着き無く歩き回る。

「ど、ど、どうすると言われても、ど、ど、どうしようアル」

そして、その犬みたいな動物が生きていることを発見した紅娘も、そのポリ袋を持ったまま右往左往する。

だが、その中でも一人、冷静なのがいた。

「みんな落ち着きなさい、じたばたしても始まらないわ」

レイカの一言で、その場のパニックは一瞬収まった。しかしこれからどうしたらいいかはそのレイカにも判らなかつた。

「とにかく、見るからに衰弱しているから、なんとかしないと本当に死んでしまうわ」

「なんとかって言っても、どうすりゃいいんだよ」

「判らないわよ、生かすのは私の分野じゃないもの」

「あ、暖めてあげましょう」

そこで新しい意見を出したのは、今度はテルミだった。

「この前、ドキュメント番組でそんなシーンを映した覚えがあつたのでしよう、暖めて、体温を上昇させれば、意識が戻るかも知れないのでしよう」

「ようし判った!こいつ、風呂に入れてくらあ!」

やることが決まっ
てからの、モノ
たちの動きは早
かった。
ヒビキがその犬
のような動物を
風呂へと連れて
行くと、他の3人
もめいめいに動
き出した。

08・慣れというのは恐ろしい その17

「えーと、あの大きさだから、毛布を二つ折りすれば、一枚で十分でしょうか、あとタオルと・・・」

自分たちの寝室へ向かったテルミは、あの犬のような動物をくるむためのタオルと毛布を取りに行った。

「シデンが炊いたご飯がまだ少し残っていたわね。かなり弱っていたから、おもゆのほうがいいかしら、それとももっと単純に、暖めた牛乳のほうがいいかしら」

レイカは、衰弱したその動物が食べられるもの作りに取り掛かった。そして紅娘は、あることをするために2階へと駆け上がった。

「バレンシアサン、ちょっといいアルか!？」

彼女が向かったのは、常盤弁護士の姿は無く、代わりに金髪碧眼の見るだった。だが今は常盤弁護士の姿は無く、代わりに金髪碧眼の見るからに外国人の女性、元ノートパソコンのバレンシアが座っていた。そのバレンシアが、紅娘の声に反応しこっちを向く。彼女がかけている縁が無い大きな丸メガネには、傍目には全く意味が判らない無数の数字や記号の列が映りこみ、それらが下から上へと流れていく。そして、口には電話線の端をくわえ、右手には外付けのハードディスクから伸びたケーブルを握りしめ、左手にはいつも背中にしまっているディスプレイを自分に向けて持っている。そのディスプレイにも、いくつものウインドウがめまぐるしく開いては閉じている。

「Oh, ホンヤンヒヤーン、wharrahaffen?」
電話線を啜えたまま、バレンシアが返事をする。

初めて見たときは何事かと思うだろうが、実は彼女は今、放置されていた西園寺家の株や不動産などの管理および処理を行っているのだ。

普通の人間には到底不可能なことだ。コンピューターの面目躍如と
いったところか。

「ちょっと見て欲しいものがあるアル、下に来るヨロシ」

このバレンシアを呼びに行くこと。それが紅娘のしたことだった。

「H m m , O K レイフ、j u s t a m o m e n t .」

紅娘のただならぬ様子を察知したのである。うバレンシアは、一通りをクローズすると紅娘と一緒に部屋を出た。

そして、今家にいるモノたちが、風呂に入っているクリンを除いてリビングに集まる。ちなみに、ケイとシデンは将仁が通う学校へ外出中、鏡介はレンタルDVDの返却のためこれまた外出中、そして常盤弁護士も仕事でこれまた外出中である。

「まああつたく、ミーのworkをinterruptさせるなんて、what happen デース？」

リビングに来るまでは仕事を中断されて文句を言っていたバレンシアだが、部屋に入るとこんどはそこに用意されたものに驚きを見せた。

「Hey , why s u c h なt h i n g がp r e p a r e (用意)されているデース？」

そこには、引越し時に使った大きめのダンボール箱が、上側に口をあけてでんと置かれていたのだ。その箱の底には、タオルが数枚敷かれていた。そして、その箱の外に毛布が1枚、そしてタオルが3枚ほど置かれている。

事情を知らないバレンシアにとっては確かに“なんだこれ？”である。

「Hey , 誰かミーのquestionにanswerしてください」

「ふう、あつたまりましたあ」

そこに、風呂からあがったクリンがバスタオルを体に巻いた状態が入ってきた。さつき床下から出てきたときとは見違えるように元気になっている。

そして彼女は、さつきその床下から引き出した犬のような獣を、真っ白なバスタオルに包んで抱きかかえていた。ぴくりとも動かない

のはあいかわらずだが、風呂で温まったからか、少し顔色が良く
なっているように見える。

それを見て、バレンシアは一瞬目を凝らした。

「……これ、foxじゃないデースかー！ Where から
carry of f^{カウ}したデース！」

そして声を張り上げた。

犬のような動物の正体は、狐だった。テルミはなんとなくそうでは
ないかと思っていたのだが、確信がなく断言できなかったのだ。

「人聞きの悪いことを言うなよ、この床下にいたんだから」

「床下、under the floorデース？」

「はい、潜って捕まえたんです」

そう答えながら、クリンはダンボール箱の寝床に、大きさからして
まだ子供であるうその狐を、バスタオルでくるんだままそつと置い
た。

「クリン、悪いけど、その子の口を開けてくれない？」

「あ、はい」

そこに、レイカが入ってくる。手にはそれぞれティースプーンとお
椀を持っていて、お椀の中には離乳食のようなものが入っている。

「よいしょ、こうですかあ？」

「そうね、しばらくそのまま支えていて」

クリンが開けた子狐の口に、スプーンで少しその離乳食を流し込む
だが、子狐には飲み込む体力もないのだろうか、口の端からぼたぼ
たと毀れていく。

「……駄目かしら」

「ううん、ダイジョブみたいアルよ？」

そう口を開いたのは、クリンの横から手を入れ、その子狐の体を支
えていた紅娘だった。

「今、ちよとだけ喉が動いたのコトよ」

「本当か!？」

「ああ、良かったでしょう！ 希望が見えてきたでしょう!」

「Certainly! Circumstance (事情) は certainly not under stand けど、life が saved したのは very good デース!」

「はあああ、苦しい思いをしたかいてありましたあ」

その瞬間、その場にいたモノたちが一斉に歓喜の声をあげた。

08・慣れというのは恐ろしい その18

「なるほどねえ」

ひと通りの説明を受け状況を把握した俺は、毛布に包まった子狐を改めて見た。

うちのモノたちが、全力をかけて助けた命だ、俺としても、助かって良かったと思う。

それにしても、犬や猫、ネズミやモグラとかならともかく、よりによつてなんで「化ける」と言われる、言い換えれば妖怪に一番近い動物の狐なんだろうか。まさかマジで妖怪じゃあるまいな、なんてことを考えてしまう。なにしろうちにいるほとんどがモノの化けた（正確に言うと俺が化かした）連中なので、仮にそうだとしてもおかしくはないような気がするのだ。

うーん、類は友を呼ぶと言っしなあ、そんなのが寄ってくる家なんじゃないだろうな。

そして、そういうモノノケが「いる」前提で物事を考えるようになっていくことに、少し悲しくなる。

まあ、悪く考えるとどつぼるだけだ。お稲荷さんの使いでもあるんだから、うちに福をもたらしてくれると信じよう。うん。

「とりあえず、まだ万全ってわけじゃないだろう。常盤さんに話して、明日医者につれていこう」

「OK。じゃア、ミーはnearbyなanimal hospitalをsearchしておくデース」

「ん、気が利くな。それじゃついでに、どんな予防接種が必要かとかも調べといてくれ。しばらくうちに置くことになりそうだからな」

「Leave it to me.（任せてください） ちゃん
とexamine（調査）するデース！」

バレンシアは、そう言って小さくガッツポーズすると、軽快な足取りで2階へと消えていった。さっそく調査にとりかかるらしい。

「あら、いけない。もう夕食の準備に取り掛からないと」

「じゃあワタシも手伝うアル、遅くなってしまたし、二人でやたぼうが早くできるアルでしょ？」

「ふふっ、そうね。それじゃ、手伝って貰おうかしら」

「了解アル！」

そしてレイカと紅娘はキッチンへと消えていく。

「あ、そうそう。忘れないうちに言っておきましょう。クリンさん「はあい？」

「あなたには、明日もう一度、床下に入ってもらいたいのでしょうか」「え……ええええええええ！」

テルミの言葉を聞いて、クリンが、動きは緩慢ながらも全身で拒絶の態度を示す。よっぽど嫌らしいな、床下に入るの。

でも、テルミがその程度で引き下がるはずもなく、ちょっと厳しい口調で言葉を続けた。

「えーじゃありません。床下には、この子の親御さんがいらっしやるのでしよう。お外に出してあげないとかわいそうでしょう」

「で、でもお、もうお亡くなりになってますよう、臭いも凄かったしい、ハエさんが飛んでましたしい」

「じゃあ尚更でしょう。大体、床下に入れるのはあなたしかいないでしょう」

テルミにびしゃりと言い切られ、クリンはずーんと落ち込んでしまった。

「うっうううう、私い、こんな事をするためにいるんじゃないはずなのにい」

そうつぶやくクリンの背中が、すすけているように見えた。

「キツネちゃん、元気になるといいね」

「うむ、我々にこれだけ世話を焼かせたのだ、責任をとって元気になつてもらわねばな」

「まあ目立った外傷はなかったみたいだし、目を覚ませばあとは大丈夫だろ」

「目を覚ますまで、見守っていようかなあ」

「だったらあたしがみてようか？ケイは明日学校があんだろ？」

「あ、そうだったの」

こっちでは、ケイとシデンとヒビキがその子狐を前に何か話し込んでいる。

なんか、こうしているとすることがない。意識が戻らない子狐に何かする気にはなれないし。

「それにしても、すごいタイミングだなあ」

ふと、今日の昼に学校であったことを思い出す。あれは猫だったが、先生と一緒にってかわいいを連発していたあの二人の姿は、なんかほのぼのするものだった。

あのときは、「うちにペットがいたらいいかもな」と確かに思ったが、まさかその日のうちにペットが出来るとは思わなかった。

「そうっすねえ、ホントによかった。見つかるのがあと少し遅かったらと思うと」

鏡介が、ちよっとずれた相槌を打ってくるが、まあここはそういうことにしておこう。俺もこのチビの命が助かったことは嬉しいのだ。あとは、常盤さんがどんな反応をするか、それが少しだけ気になった。

08・慣れというのは恐ろしい その19

「別に、構わないと思いますよ?」

帰って来た常盤さんにさっそく床下から出てきた子狐の話をしたところ、そう即答された。

「狐は天然記念物ではありませんから法律上も問題ないですし、それにここまで関わったのですから、どうせなら最後まで責任を持って世話をするのが筋だと思いますし」

ただし、常盤さん本人は弁護士の仕事を優先させるつもりらしく、あまり関われないと明言していた。まあ、世話をしたがっている連中はいつぱいいるから、問題はないだろう。

というわけで、常盤さんからのお墨付きも貰ったその子狐は、元氣になり次第晴れてうちのペットになることになった。

だから、夕飯の後にみんながその子狐のまわりに集まるのも自然なことだ、と思う。

「名前、何にしようか?」

そして、そんな流れになるのも当然といえば当然なんだが、これが意外に難航した。

まず、童話とかでよく見られる「コン」を案に出したところ、賛同する奴が少なかった。どうもあまりにベタすぎるので「適当にやっている」と思われたらしい。特にバレンシアは、「Foxのcryはnot “konn” デース、コンというnameはI can't approve (賛同) デース!」と、インターネット上で拾ってきた狐の鳴き声のサンプルを披露してまで反対していた。

また、風呂に入れたクリン曰くこの子狐はメスなのだそうで、もつとかわいいのがいいとのこと。俺はコンもかわいいと思うんだが。

だが、じゃあそういうモノたちがどんな案を出したかというと、これがまた「お前らも人のこと言えないレベルじゃないか」と突っ込みたくなるものばかりだった。

たとえば「チビ：ちっちゃいから」「トンガリ：耳が尖っているから」「くつした：足の毛色が靴下をはいているように見えるから」「フサ：しっぽがフサフサしているから」「いなり：お稲荷さんより」「あぶらあげ：狐の好物と言われるものだから」「firefox：コンピューターソフトの名前」「ライデン：第2次世界大戦の戦闘機の名前」「九尾：伝説の九尾の狐より」などなど。

九尾なんて名前をつけたら本当に妖怪になってしまいそうだ、なんて思いつつ、箱の中で動かない子狐の姿を見る。生きてはいるらしいが、ぴくりとも動かないのでちよつと心配だ。

ふと、その子狐を包んでいる毛布から何かまつ白いふさふさしたものがはみ出しているのに気がついた。何かと違って毛布をめぐってみたら、なんのことはない、尻尾の先端だった。マンガやイラストだとキツネの尻尾の先は白くなっているのをよく見るが、実際に白いとは知らなかった。

しかし、クリンが懸命になって洗ったのだろうか、数時間前まで床下で泥まみれになっていたとは思えないくらいにきれいな毛並みだ。全身はキツネ色、というのだろうか、枯草というよりなんか金色に近いような毛で覆われ、さっき見た尻尾の先と頬のあたりは本当に真っ白だ。

狐って、生で見るとこんなにきれいな動物なんだなあ。

「………そうだ」

そいつを眺めていたら、不意にあるフレーズが頭に浮かんできた。

「名前、魅尾みおなんてどうだ？」

誰となくまわりに聞いてみる。尻尾がきれいだったからなんだが、口に出してみたらこれ以上はない、というぐらいにしっくり来た。

「Meow?今度はcry about catデースかー？」

「それを言うならニヤオだろ。将仁が言ったのはミ・オ」

「でもお、バレンシアさんが披露したキツネさんの鳴き声、ネコさんのに似てましたよお」

「ミオちゃんかあ。ケイはかわいいと思うな」

「少し軟弱な感じがするが、悪くはないな」
反応も、コンのときよりは悪くない。
そんなこんなで、子狐の名前はめでたく「魅尾^{みお}」になった。

08・慣れというのは恐ろしい その20

一羽の鳥が、完全に日が暮れた中を飛んでいた。

その向かう先には、この地の鎮守の森、そしてその森をすべる神社がある。とはいえ、日が沈んだ今は、周囲に比べ明かりの点が少なく、削り取られたように暗い空間となっている。

神社というものは、初詣や行事の無い時は閑散としているものである。ここ、四賀茂神社も例外ではなく、訪れる者もない社は明かりもなく静まり返っている。

その右手のほうに、神社の社務所があり、そこは人がいることを証明するように煌煌と明かりが点っている。

鳩ぐらいの大きさがあるその鳥は、その社務所の明かりが点いている部屋の一つへと向かっているようだ。

やがて目指す窓の外へたどり着いた鳥は、窓枠につかまり、こつこつと窓ガラスを嘴で叩く。すると、それに応えるかのように窓が開かれた。

窓を開いたのは、くせのない黒髪が印象的な、まだ高校生ぐらいの若い女だった。

「おつかれはん、はようお入り」

女は、その鳥の姿を確認してから、そう声をかける。鳥は、その女に促されるように窓をくぐって部屋の中に入り、床に着地した。

部屋の照明に照らされたその鳥は、全身が真っ赤だった。その赤い鳥の前に女が座り、そしてその鳥に改めて向き直る。

すると、不思議なことが起きた。

その鳥が女を見上げ、一声鳴いた直後。その鳥の体が、何の前触れもなく真っ赤な炎に包まれたのだ。正しくは、鳥が、自分の体から炎を噴き出し、そして燃え上がった。

そしてその炎は、鳥一羽を燃やしたとは思えないほどに燃え上がり、一瞬のうちに天井まで届きそうなほどの火柱になった。しかも、女

はそれを平然と見つめている。

その炎が、突然、幻のように消えた。それと一緒にあの鳥の姿も消え、代わりに、今までとは全く違うものが現れていた。

それは、ひとりの女性のようにだった。炎をあしらった、赤い生地に金色の模様がきらきらと輝く振袖のような着物を着崩した、妙齡の女性。だがその髪はまるで染めたように赤く、そして複雑に束ねられた先が跳ねたり流されたりしているため、冠のようにさえ見える。その女性は、黒髪の女の前に降り立つと、そのままひざまずき、よく通る声でこう言った。

「炎雀、唯今戻りましたわ」

「はい、お疲れはん」

黒い髪の女が劣いという言葉を、その炎雀と名乗った女にかけた。その直後だ。

「ずいぶん時間がかかったじゃねえか」

二人と全く違う、低めだが間違いなく女性の声が出た。

声のほうを見ると、そこには床にあぐらをかいて座る、別の人影があった。

和装ではあるが炎雀のような着物ではなく、体にさらしを巻いて法被を羽織り、金属的な光沢を放つねじり襷たすきをした、どちらかと言えばお祭りで神輿みこしを担ぐような格好だ。そこから浮かび上がるボディラインは確かに女性のものだが、かなり筋肉質である。銀色の髪はまるでヤマアラシのように逆立ち、そこに所々黒いものが入り混じっている。

「あら、もう戻ってらしたの、虎鉄さん」

「そっちが遅えんだよ、こっちはお待ちくたびれたつての」

「仕方がないでしょう、あなたと違って、この炎雀は鳥目で暗いところはよく見えないのですからねッ！」

その物言いがカチンと来たのだろう、炎雀と呼ばれた女性はそこからすつくと立ち上がり、虎鉄と呼んだ女性のほうへと歩いていく。

「なんだよ、やる気かい？」

売り言葉に買い言葉、虎鉄もゆらりと立ち上がり、炎雀をにらみつける。右手を顔の辺りまで上げ、指を蹴爪のように曲げる。すると、その手が見る見るうちに金属的な光沢を帯びていき、同時に指先が刃物のように尖り、皮膚も金属片のようにごつごつしたものに替わっていく。

「ふん、金気は火気に勝てないということ、一度はつきりさせておいたほうが良さそうですね」

一方の炎雀も、両手を胸の前に持っていき、ボールを持つような形にする。するとその中にオレンジ色の火の玉が現れ。そして少しずつ膨らみ始める。

「はいはい、二人とも。そのへんにしとき」

だが、もうひとりの黒髪の女がパンパンと手を叩いてそう言うのと、二人は我に返った。

「あ、も、申し訳ありません杏寿さま」

「こいつが挑発しやがっから、つい」

そう言いつつ、虎鉄は右手を普通の手へと戻し、炎雀は手の中で膨れつつあった火を両手で押しつぶし、そして黒髪の女の前に座った。「まあ、別にかましまへんけど、炎雀はん。その前に報告をしてくれまへんか？」

二人に対し、杏寿と呼ばれた黒い髪の女は、慣れた感じで炎雀にそう促した。

「は、はい」

炎雀は改めて座りなおすと、頭を下げてから口を開いた。

「では、本日の報告をいたします。まず、最重要人物である常盤ですが、1日のほとんどを外出で過ごしており、日が沈むまで戻りませんでしたわ。あとは、昼ごろ、中嶋紫電が外出をし、真田螢をつけて帰宅しましたが、それ以外は昨日の行動から推測されるものばかりで特に目立った動きは……あ」

そこまで言ったところで、炎雀は何かを思い出したように声をあげた。

「そういえば、午後にちょっとした騒ぎがありましたわね。家の床下に何かが巣を作っていたようで、捕まえてみたところ、それが狐であったということですよ」

「キツネえ？こんな街中にかい？」

それに対して声を上げたのは、虎鉄のほうだった。

「ええ。この私、炎雀の名に掛けましても、偽りは申しませんわ。

あれは確かに狐です。もつとも、今日捕らえられたのは子供のほうで、しかもかなり衰弱しているように見受けられましたけれど」

すると、杏寿は顎に人差し指を当てて考えるような仕草をした。

「なんか引つかかりますなあ」

「引つかかるって、何がだ？」

「ん、お狐はんゆうたら、お稲荷はんどすからなあ。この四賀茂神社にもお稲荷はんがあるし」

「あ、でもその心配はないと思いますわ」

そこに、炎雀が口を挟む。

「稲荷神に祭られている狐は基本的に白狐ですけど、あれはそうではありませんでしたわ」

「やっぱ、狐は狐色だったってことかい？」

「そうですねえ、狐色と言うにはずいぶんと綺麗な毛並みでしたけれど。いずこかで飼われていたのが野良にでもなったのではないかと」

「床下にいたのに綺麗な毛並みねえ、鳥目で見えなかったんじゃねえの？」

「あら、言っていないませんでしたかしら？床下から出した後、お風呂に入れていましたのよ」

「なんだ、そうかい」

炎雀の答えに気が殺がれたのか、虎鉄はあぐらをかいた状態で頭を掻く。そしてふと頭を上げると、黒髪の女、杏寿に向かって口を開いた。

「なんか風呂なんて言葉が出てきたもんだから、久しぶりに風呂に

入りたくなつたな。なあ杏寿、風呂出来てるかい？」

そう言いながらよっこらさと立ち上がる様は、女と言つよりおっさんくさい。

「ちよつと虎鉄さん、お待ちなさいな。あなた、式神の分際で主のため口ですのツ!？」

その馴れ馴れしさがかちんと来たのだろうか、すつくと立ち上がった炎雀がつかつかと虎鉄に詰め寄り、指差しをしながらいささかきつめな口調で問い詰める。

「いいじゃねえか、あたいらは元々そういう立場じゃねえんだし、杏寿だつて気にしてねえんだからよ」

すると虎鉄はめんどくさそうに答える。が、そこで何かを思い出したように、にやつと満面の笑顔を浮かべると炎雀のほうへと顔を向けた。

「あ、そうか。お前、水には入れねえんだっけな」

「なっ」

「そりゃあそうだよなあ、火が水に入ったら消えちまうもんなあ。」

「だ、だれがその話をしていると言うんですのっ!」

「いやーかわいそうだねえ、風呂上りの一杯が死んでも体験できないだもんな」

そして虎鉄は勝ち誇つたように笑う。それに対し、炎雀は真っ赤になりながら悔しそうに拳を震わせている。

「………言いたい事は、それだけですかしら?」

その炎雀が、搾り出すような声を吐き出した。

ふと我に返つた虎鉄がそつちを見る。そして、今度は引きつった顔になる。

無理もない。怒りに身を硬直させた炎雀のまわりには、さっき彼女の手中で光っていた炎と同じものがいくつも浮かんでいるのだ。

「それほどまでにお風呂がお好きなのでしたらっ!貴方のことも水のごとく溶かして差し上げてよおっ!」

炎雀が叫ぶと同時に、その炎が一斉に虎鉄へと向かつて飛んでいっ

た。

虎鉄もとっさに両手を硬質化し、襲い来る火の玉、というより炎の槍をなぎ払うが、これはどう見ても分が悪い。

「あばよっ！」

不利を悟った瞬間、虎鉄は、くるりと背を向けて部屋を飛び出した。

「お待ちなさい虎鉄さんっ！逃げるなんて卑怯ですわよっ！」

その後ろを炎雀が追いかける。まわりに浮かんでいる火の玉も一緒にだ。のみならず、あれだけ放つても炎は消えるどころかささらにその数を増やしている。

どたどたと走る音にごうっという炎が飛ぶ音が廊下から聞こえてくる。

「呼ぶ式神はん、間違えてしもたかなあ」

それを聞きながら、杏寿は軽く頭を押さえた。

08・慣れというのは恐ろしい その21

それからさらに数時間後。

皆が寝静まり、照明も消されて真つ暗なはずの真田家のリビングに、オレンジ色の光が浮かんでいた。その光は、炎のように揺らぎながら、質量も熱量も無いように空中をふらふらと漂っている。

そのオレンジ色の発光体の下には、上を切り開いたダンボール箱が置いてある。

「・・・・・・・・なんじゃ、こじは」

そして、誰もいないその部屋に、なんともアンバランスな声が聞こえた。

「むう・・・・・・・・どうやら、家の中のようじゃな、気付かぬうちに引き上げられたのか」

発光体あたりを探るようにゆらゆらと飛び回ると、声はようやくく満足したようだった。

そして、発光体の下にあるダンボール箱から、小さい手がにゅっと生えてきて箱の縁を掴む。続いて、その手の主であるう人物の頭が、その手に引つ張り出されるように出てきた。

年のころは4、5歳ぐらいか。ぱっちりした大きな目とまつすぐな鼻梁が、成長した後の美しさを予想させる。また、発光体の光を受けて、透き通った白色の髪がキラキラ輝いている。

だがしかし、その子は普通の子ではなかった。なぜなら、漫画などでしかお目にかかれない、狐のような大きく尖った耳が、頭の上に乗っていたからだ。しかもそれが飾りではない証拠に、耳の先端がまるで生きているようにびびびこと動いている。

「うむう、体に力が入らぬ・・・・・・・・」

声は外見どおりの幼い少女だが、口調は老人そのものの狐耳の娘は、箱から出ようとしたのかダンボール箱の縁に両手をかけた。そのときだ。

箱がぐらりと傾いた。立ち上がるつと手を掛けた後、全身をその壁にあずけてしまったためだ。

「あ、わ、わわっ、わひゃあっ！」

そして、狐耳娘は、箱と共になすすべなくひっくり返り、ごん、という鈍い音と共にフローリングの床に顔面をしたたかに打ちつけた。背後から、ダンボールの底に敷かれていた毛布やらバスタオルやらが一斉に少女の背中にどさどさどさっと被さってくる。

オレンジ色の光が消えていくその中で、少女は再び意識を失ってしまった。

08・慣れといっつのは恐ろしい その21（後書き）

どうも、作者です。

ここに書くのは久しぶりになります。

で、今回で8日目が終わります。

というわけで、9日目の書き溜めに入りますのでまたしばらく投稿
ができなくなります。

では、9日目にまた遭いましょう。

09・幽霊って何ですか その1

9月22日 金曜日

ぐおおわわわわわわわ~~~~んつ。

「どわあああああつ!?!」

その日は、銅鑼びんのような凄まじい轟音で目が覚めた。

思わず布団を蹴つ飛ばして耳を塞いだ俺の目に、赤い色が飛び込んでくる。

「早上好おーしゃーおーしゃーおー早上好、はやく起きるヨロシー!早起三文利アルねー!」

それが赤い服を着た女だということには、すぐ気付いた。まあこんな判りやすい口調でよく判らないことを言う奴は我が家には一人しかないが。

「起きない力、それナラもう一回行くアルつ!」

そいつがそんな不穏なことを言うので、思わず跳ね起きる。あんなのをまた鳴らされては敵わないので、止めるために飛び出す。

が、間に合わなかった。

そいつが左手に下げているでっかい中華鍋を、右手に持っていたお玉で叩く。

叩き方は、せいぜいコンという音がする程度だった。だったのに、音は飛び出した俺自身が空中で撃墜されるほどに凄まじかったのだ。これはもう一種の音波兵器だ。

「くおらあーつ、紅娘ーつ!やめんかーつ!」

両耳を塞ぎ叫ぶ。今日はどうやら紅娘が起床担当のようだ。

全く、なんでこいつらは普通に起こしてくれないんだろうか。ただでさえここ数日の間に色々ありすぎて疲れてるのに、そこに朝っぱらからこんな起こされ方をしたら、最後には倒れてしまつぞ、俺。

「あ、起きたアルか。それじゃ早くベッドから出るヨロシ」

騒音の主である紅娘は、全く悪びれる様子もなく鍋とお玉を背負い

なおした。

あんなでかい音を聞かされたら、嫌でも起きざるを得ない。ベッドに腰かけた状態で一息つくくと、俺は大きくあくびをした。なにしろたたき起こされたようなもんなので、正直まだちょっと頭がぼーっとしている。

しかしいつまでもぼーっとしていても進まないの、着替えるためにベッドから立ち上がる。ふと、そこでなぜか紅娘がまだこっちを見ていることに気がついた。しかもちら見ではなくじーっと凝視している。

「あー、えーと、紅娘」

「気にしないでヨロシ、二度寝しないように見張てるだけのことアルから」

「いや、そうじゃなくて、ちょっと出て行ってもらえね？」

「ほへ？なんでアル？」

「なんでって、着替えるんだよ」

「あー、ダイジョブダイジョブ、襲ったりしないアルか……」

「そついうことじゃなくて、と言おうとしたところで、紅娘が言葉を詰まらせやがった。そして顔を真っ赤にして俺のある部分に視線を向ける。」

「言わずもがなだ。俺だって健康な若人、それどころか体力は人並み以上にあるから、生理現象だって元気に起きる。」

「そして、それをうら若き乙女に見られるのは、恥ずかしすぎる。まさか見たいと言っくんじゃないだろうな。」

「ご、ごめなさいアルッ！」

しかし、どうやらあっちも恥ずかしくなったらしく、真っ赤になつて部屋を飛び出すと、ぱたんという音を立てて部屋のドアを閉めやがった。ああいう姿を見ると、一瞬であれ「現物を見せて脅かしてやるつ」と思っただのが今度は恥ずかしくなってしまう。

だが、着替えを始めようと思って動き始めたとき。閉めたドア越し

に、紅娘の声がした。

「あ、えーと、その、き、き、着替え、手伝おアルかっ!？」
そんなのいらんっつーに、手伝わたら逆に俺が暴走してしまいそ
うだ。……って、まさか、ホントに見たいんじゃないだろ
うな。

だいたい、あいつらが現れて妙齡の女の子がうちの中にあふれ返っ
たもんだから、今までよりアレは加速度的に溜まっていくのにか
つにナニもできない、モロ生殺し状態なのだ。

ふと、そのときになってようやく俺は、鏡介がいないことに気がつ
いた。あの野郎、いつのまに逃げやがったか。俺より早く起きたん
だったら、ついでに俺のことも起こしていつてほしかった。男に起
こされるのはいまいち嬉しくないが、あんな命を削られるような起
こされ方をされるよりはずっとマシだ。しかも、このぶんだと明日
も叩き起こされそうだ。誰に起こされるかは判らんが。

愚痴ってもしょうがないので、今日のところは着替えを進めること
にした。

09・幽霊って何ですか その1（後書き）

どうも、作者です。

連載再開です。

これからしばらく、9日目のネタが無くなるまで連載を続けますので、ご意見・ご希望・ご指摘などありましたら遠慮なく送ってくださいませ。

特に、私は英語が本当に苦手なので、バレンシアの英語のおかしい所など教えていただけると非常に嬉しいです。

それでは、これからもよろしくお願いします。

09・幽霊って何ですか その2

下に行くと、リビングにはすでに人だかりができていた。

「あっ！お兄ちゃんおはよー！今日は遅いんだねー！」

入った直後、ケイがとびついてくる。正確には、俺が起きた時間はいつもと同じなのでケイが早いんだが。

ケイの頭をなでながらそんなことを考えつつリビングの中に目を向けると、珍しいことに家族全員がリビングに集まっていた。いつもならヒビキなんかはまだぐーすか高いびきなのにな。

やっぱり、みんなで助けた魅尾のことが気になるんだろう。一番遅かったのが俺だったのがちょっと恥ずかしい。

そんな中で茶碗と箸を受け取った俺は、にぎやかな朝餉あさげの輪に早速加わった。

俺のまわりでは、常盤さんを交えた面々が色々とおしゃべりをしてる。魅尾の世話の話かなと思いつつ聞き耳を立ててみると、どうもそうではないらしい話が混じっていた。

「ホントですよ、私い、見ちゃったんですよ」

いつになく顔色が悪いクリンが、そんな事を言っている。

「見たって、何をだ？まさか、コレじゃねーだろうな？」

ヒビキが、自分の前で両手を指を下に向けて垂らす。一般的に幽霊を意味する仕草だ。

すると、クリンはごくんとひとつ頷いた。どうやら、クリンはタベ幽霊を見たらしい。

「……マジ？」

「Unbelievableデースねー、ghostがappearしたなんて」

「どのような奴であったのだ？」

案の定、うちのメンバーの大半は（自分自身が妖怪みたいな存在だというのに）それを信じていない。しかし、クリンの顔色の悪さか

らして、ただのホラ話とも思えない。

「ゆ、夕べですねえ、ふと夜中に、目が覚めたんですよ。するとですねえ、そのお、リビングにい、オレンジ色の、ひ、ひ、火の玉があ、浮かんでいたんですよお」

話しながら思い出してしまったらしく涙声になるクリンを見て、ちよつとかわいそうになっってしまう。

「火の玉あ！？それって、人魂ってこと！？」

敏感に反応したのはケイだった。しかしこちらはどちらかというに興味津々といった感じだ。

「夢でも見たのでしょうか、全く昨日あんなDVDなんか見るから味噌汁をすすりながら答えるのはテルミだ。昨日俺らが学校へ行っているときに、うちにいた連中はDVDでいろいろいるな映画を見ていたらしく、その中に四谷怪談ものがあつたそうだ。

「けど、あれに出ていた人魂って、青緑じゃなかったっけ」

今度は鏡介が口を出す。そういえば怪談物に出てくる人魂はそんな色をしてるな。昔、防虫剤とかで使ったしょうのうを燃やすとそんな色になると聞いたことがある。

しかし、メシ時にする話じゃないだろ。

「だからあ、夢じゃないですよ。私、見たんですよ」

クリンは、懸命になってみんなに説明するが、みんなほとんど取り合わない。そこまでいくと、なんだかわいそうになっってくる。

「本人が見たって言うてるんだから、見たことにしておけばいいじゃないか。狐火つてのもあるし、床下の親狐が子供の様子を見に来たのかも知れないだろ」

なので、クリンへ援護射撃をしてしまった。もちろん根拠のない意見だ。俺は基本的に幽霊は信じていないし、オカルトなんかも同列だと思っている。もっとも、妖怪とかUMAとかは、それに近いものに囲まれて生活しているせいで信じる気になっているのも事実だ
が。

しかし、俺の発言でこんどはクリンが鬼の首を取ったように勝ち誇

ってしまった。

「ほらあ、将仁さんだつてそう言っているじゃないですかあ！」
ふと口にした「狐火」という単語が、昨日その存在を知った狐のことと相まって、クリンの中で信憑性を持ってしまったらしい。

「将仁さあん、私の味方をしてくれるなんてえ、クリン、嬉しいですう！」

と思っていると、突然そのクリンが抱きついてきた。

ちよつと待て、まだメシの途中だぞ。と思いつながらも、以前あったあの柔らかい感触を思い出し、頬がちよつと緩んでしまう。

「ちよ、クリンさん、まだ朝食の途中つすよ」

「ほえ？」

だが、俺にはその感触は来なかった。見ると、クリンは鏡介に抱きついており、鏡介が迷惑そうにクリンのことを見ている。

どうやら俺と鏡介を間違えたみたいだ。さっきまで俺を見ていたのに違うほうへ向かうとは、随分と器用な奴だな。

「お兄ちゃん、鼻の下伸びてる」

そして、ケイの思いつきり不機嫌な声に、俺は現実に引き戻されたのだった。

09・幽霊つて何ですか その3

未だに慣れない満員電車で運ばれた後、駅のホームに吐き出された俺は、改札を抜けたところでまたもあの二人に捕まることになった。「おっす」

「おはよう、真田君」

シンイチと委員長だ。まあ昨日と同じ時間の電車に乗って来たんだから当然だ。

「今日も朝から疲れてんなあ」

「俺はまだ通勤ラッシュになれてないの」

「そんなこと言っつてえ、一緒に住んでる子たちの相手してきたんじやねーの？」

「アホ、そんなことできるわけねーだろ。メシ食っただけだつて」
そしてシンイチはまた絡んできて、委員長はそこから一歩引いて見ているという、昨日と同じ展開が繰り返られる。なんか日を追うごとに話題が下品になっていると思うのは気のせいだろうか。

「はいはい、二人とも。そろそろ時間よ」

そして腕時計を見た委員長にたしなめられ、通学路を一路学校へと向かう。これも昨日と同じ。

この3人でいくと必ず俺が仲間外れになるんだが、どうせ行くところは同じだし一人で行くのも味気ないので結局はこいつらについていってしまっつ。

しかし、付き合いだしてまだ一ヶ月程度だからしょうがないとは思うんだが、一応はまだ独り者の俺のすぐそばでラブトークされるのは苦痛なことこの上ない。

「なあ委員長。知ってたら教えて欲しいんだけど」

なんとか話題をそらしてやろうと、タイミングを見計らって俺は委員長に話しかける。

「ん、何？」

「狐の生態について、なんか知らね？」

すると、案の定きよとんという顔をされる。

昨日、うちの床下から狐が出てきたという話をすると、やっと納得された。

「あのへんのどっかで飼ってた狐が野良になっただと思っただけど、犬や猫と違うからどーしたもんかと思っただけ」

「うーん、狐の生態は私もよく判らないわね。よく、体は犬で性格は猫とか言われるけど」

「確か、エキノコックスとかいう寄生虫を持つてるんじゃないかと思った」

シンイチが横から意外なことを口にする。そういえば聞いたことがあるが、あれって寄生虫だったのか。そのへんの予防接種とか、あいつらちゃんとやってくれるだろうな。

そんなことを話し合っていると、うちの学校の校門のところまで来ていた。

とりあえずの目標はクリアだな、と思ったとき、俺は現実味のない光景に遭遇してしまった。

何かというと、生徒でごった返している校門の前に、真っ白でものすごく高級そうな外車がすーっと入ってきて停まったのだ。これは確か、ロールスロイスとかいう奴ではないだろうか。

がちゃ。

その運転席が重厚な音を立てて開き、背の高い男が下りてくる。運転手なんだろうか。見るからに高級そうなスーツを着込んだ男だ。

髪は丁寧に整えられており、またルックスも悪くない、というか男の俺から見てもかなりかっこいい部類に入る。そのせいか、車のまわりにいる生徒の、特に女子からきゃーっという黄色い声があがっている。

だが、男はそれに目をくれることもなく車の反対側に回りこむと、そこにあるノブに手をかけ、そしてうやうやしくそのドアを開いた。なんとなく、一昨日見た暴走族のお出迎えを連想するが、こっちの

ほうがずつと気品がある。

「どうぞ、お嬢様」

そして、運転手の男が一言その声をかける。

「ん、ご苦労、セバスチャン」

そう言つて、車の中から出てきたのは。彫りの深い顔に金色の縦口
ールな巻き毛。そしてすらりと背が高く、モデルと見まがうスタイ
ルの持ち主だった。

もうお分かりだろう。近衛クローディアお嬢様だ。こいつ、毎朝こ
んな大げさな登校をしているのか、回りの迷惑も少しは考えろと言
いたい。

しかしまあこの派手な登場は嫌でも注目されるわけで、登校中の学
生たちの多くが足を止めてその様子を鑑賞している。写メを撮る奴
は当たり前で、中には一眼レフの本格的なカメラを持参する奴まで
現れる始末だ。そしてお嬢様は、その高校生カメラマンの真ん中で
まるでモデルのようにポーズを決めている。

お嬢様が毎日車で送り迎えされているということは、噂では聞いて
いた。だが、ただでさえ時間がない朝の登校時間にこんなことをし
ているとは。

「金持ちのすることはよくわかんねえな」

思わず、そんなことを口にしていた。

09・幽霊って何ですか その4

そのとき、不意にケータイが鳴った。着メロが某宇宙人映画のテーマなので、ケイからだ。

「ねねねお兄ちゃん、写メ撮ろうよ写メ！」

出ると、妙にテンションの高いケイの声が聞こえてきた。

「だってあこがれるんだもん！」

あこがれる、ねえ。俺としては関わりたくないんだが。

とはいえ、珍しい光景なのは確かなので、ケータイのカメラレンズをお嬢様のほうへ向ける。

そして、カシャツというシャッター音がした（俺がシャッターを押したのではない）、その瞬間。

お嬢様が俺に気がついたらしく、こつちに顔を向けると、そのままつかつかと歩み寄ってきたのだ。

「おはようございます、真田さん」

お嬢様は、俺の前まで来ると、ふんぞり返りながら俺に挨拶をしてくる。

それは人に挨拶する態度じゃないだろう、と思うが、指摘するためんどくさいことになりそうなので、軽く流すことにする。

「あ、おはよう」

そして、ケイに「悪い、切るぞ」と言ってからケータイを折りたたみ、ポケットに入れて、そそくさと立ち去ろうとしたら、案の定また声をかけられた。

「お待ちなさいっ！この私が声をかけているというのに、どこへ行くつもりですのっ！」

きんきん響く金切り声に引き止められ、俺は立ち止まる。そしてふとまわりを見回すと、野次馬どものほとんどが俺を珍獣を見るみたいな目で見ている。

お前ら、近衛にひれ伏さない奴がいるのがそんなに珍しいのか、と

言ってやりたくもなかったが、それをぐつと我慢して振り返る。

「どこつて教室に決まってるだろ、学校に来ているんだから。お前
らも、こんなところにたまってる遅刻するぞ」

それだけ言つてとつと去ろうと、俺はした。

が、駆け出そうとしたところで何かが足に絡まり、俺の動きを邪魔
した。おかげでバランスを崩し、俺はその場に前のめりに転んでし
まった。ポケットの中からケイの悲鳴が聞こえてきたので、体をひ
ねってケータイを潰さないようにするが、おかげで尻餅をついてし
まった。

「な、なんだ？」

ナニがあつたのかと思つて自分の足元を見ると、いつのまにか紐み
たいなものが俺の脚に絡み付いていた。その紐の両端には石がくく
りつけられている。

なんだこりゃ！？と思つて顔を上げると、お嬢様が俺のすぐ近くに
来て俺を見下ろしていた。

「私があると言つているのです。聞かないことは許さなくてよ
この大勢の中で、朝っぱらから人の都合を聞かない奴だ。」

仕方がない、ここはあきらめてお嬢様の言いたいことを聞くことに
しよう。

「明日、我が家でパーティを催しますの。迎えをやりますから、必
ず参加しなさい」

だが、わざわざ俺の足を封じてまでお嬢様が言い放つたのは、それ
だけだった。どんなことを言われるのか、ぶつ飛んだことを言うん
じゃないかと不安だったんだが、正直拍子抜けしてしまった。

「お前なあ、この時間のない忙しい時にする話じゃねえだろ」

「あら、この私の用事より大事な用など、あなたにありますか？」
そして、いつも持っている扇子を開いて、ほーっほほほほと高笑
いする。

どうやら、このお嬢様には羞恥心というものが無いらしい。俺なん
か珍獣扱いされているこの場を一刻も早く去りたいというのに。

そんなことを思いながら、なんとか足に絡まった紐を解くと、やっと俺は立ち上がった。

「話は終わったか、じゃあもう行くぞ」

尻についた砂を払うと、投げ出してしまったカバンを手にして去ろうとした。のだが。

お嬢様はよつぽど俺を邪魔したいらしい。

「お待ちなさい！」

と一括され、思わず立ち止まってしまふ。くそ、優位に立たれるのは非常に癪なんだが。

「セバスチャン。あれを」

その俺の目の前で、お嬢様は横に立っていた運転手、というか執事みたいな男に声をかける。

なーにがセバスチャンだ、どう見ても東洋人じゃないか。お嬢様がアメリカ人とのハーフでアメリカから来たんだから日系人なのかも知れないが、でもセバスチャンって顔じゃねえだろ、似合わない口ひげなんか生やしやがって。

なんてことを考えていると、そのセバスチャンがすたすたと俺に近づきながら、懐から白い封筒を取り出し、俺の前に着くと全く同じタイミングで俺にその封筒を差し出した。

まるで計算したかのようなその動きにも驚いたが、間近でそのセバスチャンを見てさらに驚いた。と言ってもルツクスなどについてではない。

目だ。なんといいばいいか、俺らのまわりにいる奴では見ることがない目だ。あえて言えば迅のそれが近いが、もっと表情がない感じだ。

なんだ、こいつは。お嬢様のまわりにはこんな不気味な連中ばかりがいるのか？なんてことを考えつつ、俺の手はその封筒を受け取っていた。

「招待状ですわ。明日までに、目を通して下さいませね」

ソレを見たお嬢様が、にっこりと笑う。うーん、こいつもこういう

表情が出来るんだな。元はいいんだから、もっとそういう感じであ
てくれればいいのに。

「では、参りますわよ。明日、楽しみにしていますわ」

そんな俺の前で、お嬢様はもう感心が無くなっただらしくそう言い放
つと、いつもの高笑いをしながら校舎のほうへと歩いていく。取り
巻きでもないだろうに、そこにいた野次馬の大半がぞろぞろとつ
いていく。

そして俺は、手にその招待状を持ったまま、ぼつんと取り残された。

09・幽霊って何ですか その5

「……………プライベートな集いなので、楽な格好でおいでください……………と言っても、TシャツにGパンじゃまずいだろうなあ」

1時間目、現代文の授業中、俺は渡された招待状に目を通していた。さすがアメリカから来たから、というわけではないのだろうが、手触りのいい洋紙に達筆な横文字で書かれている。見たところ手書きっぽいけど、誰が書いたんだろうか。あのお嬢様が書いたとは思えないが、もしそうだったとしたらわざわざ俺のために手書きで書いてくれたってことになる、そうだったかもと考えたらちよっただけ嬉しくなってしまう。俺ってこんな単純だったかな。

で、内容はと言えば。要するに、明日自分の家でパーティーをやるから来い、というもの。こっちの都合なんか微塵も考えていないところなんかはらしいといえはらしいんだが、ただ飯が食えるであろう誘いを断るのはもつたいたない。あのお嬢様がどのぐらいの金持ちかは知らんが、俺も遺産を受け継げばあいつと張れるぐらいには……………って、ナニを考えているんだ俺は。

それにしても、明らかに見下している俺をパーティーにさそうなんて、どういう風の吹き回しだろう。もしかしてあのお嬢様、実は俺に気がある……………なわけないか。あいつが欲しいのは、俺じやなくて、俺が持っている西園寺の力だ。おそらくこのパーティー招待もその一環で、何とか頑張って自分が俺より上だと見せびらかしたいんだろう。

なんかそう考えると、変なところで一生懸命になっているあのお嬢様がかわいく思えて来てしまった。

「真田はん、真田はん」

不意に声をかけられ、俺は現実を引き戻された。

見ると、クラス中が俺を見ている。そのときになって、俺はようや

く教科書朗読の順番が俺に回ってきたことを知った。

「あ、は、はい、えーと……」

急いで立ち上がり教科書を手にする。およそ見当をつけていたはずなのに、なかなかそこが見つからない。あせったらダメだと思つと余計にあせってしまう。

「あ、あー、そんな中で、イカ捕りに続いて始まった実益を兼ねたレジャーで……」

なんとかその読む場所を見つけて朗読を始める。正直言つて冷や汗ものだった。

読み進めながら、俺は心の中でお嬢様に悪態をついていた。

そして。

「なあマサ、お前あのお嬢様に何やったんだ」

休み時間になると、今朝の野次馬に混じっていたらしいクラスの連中に取り囲まれ、今朝のことについて質問攻めされることになった。なんか知らんが、今週に入ってからずいぶん注目されるようになってしまったな、俺。そのほとんどはあの傍若無人なお嬢様のせいだが。

「俺はなにもやってない」

「うそつけ」

正直に答えたら速攻で否定された。

「やっぱあれかね、お嬢様だから自分に敵しい態度をとられると弱いとか」

「それはないよー、あの人どう見てもSだもん」

「でもさー、あれだけちよっかい出してくるってことはさー、絶対なにかあるよねー」

「あるある、真田君が何か秘密を握っているとか」

「なにつ、マサお前そんなもの掴んでるのか!？」

「んなわけあるかつ!」

答えようがないので黙っていると、連中は勝手な推論を進めて勝手に盛り上がっていく。

なんか俺と近衛をくつつけたがつているみたいに聞こえるが、正直それは勘弁してほしい。あんなのと毎日つきあっていたらそれだけで疲れるのは間違いない。彼女ができるのは確かに嬉しいが、俺にだって相手を選ぶ権利はあるだろう。

勝手に盛り上がる連中を尻目に、俺はひとつため息をついた。

09・幽霊って何ですか その6

その日の10時半ごろ。

「おい、どうだー、そろそろいいかー？」

床下の風通し穴をのぞきながら、ヒビキが中へと声をかける。その手にはナイロン製の荷造り用の紐が握られており、そして目はサーチライトのように穴の中を照らしている。

「はいいいい、引っ張ってくださいあ〜いいいい」

穴の中から、気の抜けた声が返ってくる。クリンの声だ。二人は今、親狐の遺体の回収にとりかかっているのだ。

回収の方法は単純だ。まず床下にクリンが入る。続けて、スコップと遺体を入れるための大きなゴミ袋、そして丈夫なナイロンの紐の端が風通し用の穴からクリンに手渡される。紐の反対側は外で待ち構えているヒビキが持つており、遺体を袋に入れ、口を縛った後に外で待つているヒビキが引っ張り出すのだ。

そして、中からその遺体を袋詰にしたという合図があったので、ヒビキはその遺体を引き出しにかかった。

紐を引っ張ると、一瞬ずつしりとした感触があった。実際は動物1匹の死体にしては重過ぎるのだが、なにしろ紐を引っ張るのは人間離れた腕力の持ち主、ヒビキである。とくに踏ん張るようすもなく、いとも簡単にナイロンの紐をたぐりよせると、すぐに口を閉じたゴミ袋の口が風通しの穴から顔をのぞかせた。

そしてもう少し引っ張ると、それにしがみつく、うっすらと汚れた人の手が出てきた。

「ぶっ!？」

驚いたヒビキは、思わず手を離してしまう。だが良く見ると、その手の持ち主に心当たりがあった。

「おいクリン、脅かすなよ、何か変なものまで引っ張り出したかと思っただじゃないか」

「すいませえん、楽だったので、ついい」

どうやら、袋に捕まってクリンも引きずられてきたらしい。

「まあいいや。そこまで来たんだったら、穴から出すの手伝えよな」
「判ってますよう」

そして、二人は親狐の死体搬出に取り掛かった。

袋越しとはいえ、死体に触るのはあまり気持ちがいいものではない。特に、昨日引つ張り出した魅尾とは違い、この親狐はすでに蛆がわき腐敗が進んでいるので余計にだ。

しかしそのまま引つ張っても穴からは出ないので、なるべく袋に穴をあけないよう、中のものの位置を調整しつつ、なんとかその死体をその穴から外へと出す。

そしてそれが終わると、続けてクリンも同じ穴から這い出してくる。

昨日に比べて時間が短かったためか、穴から這い出す途中で力尽きることはなかったものの、それでも穴から出たクリンはしばらくその場でぐったりしていた。

「どうでしょう、運び出せたでしょうか？」

そこに、これから干す洗濯物を抱えたテルミが顔を出す。彼女はいつもどおりに家事をこなしているのだ。そうでなければ真田家の中は立ち行かないからだ。

ちなみに、いつもと同じ仕事をしているのはもう一人いる。バレンシアだ。彼女はこの家の中で、常盤弁護士を除いて唯一、職を持っている。それが西園寺家の資産管理であり、今では電子化が進んでいる株や証券の取引や管理などを全て一人で行っているのだ。さすがに不動産や美術品などの「現物」は扱っていない（まだ将仁が正式に西園寺家を継承したわけではないため）が、それでも扱う情報は膨大であり、さらに金額が大きいため1日として休んでしまうわけにはいかなかったのだ。

09・幽霊って何ですか その7

そして他のモノたちは、魅尾の状態を診てもらったためと、飼育用の道具を購入するために、全員外出をしていた。

二手に分かれた一方は、そのころ大通りに設けられた歩道を歩いていた。

常盤弁護士と鏡介だ。そして、鏡介の手には、正面に扉がある、プラスチックで出来たペットケースが提げられている。その扉を透かして中を見ると、昨日床下から見つかった子狐、魅尾が、毛布に包まれて眠っているかのようにじっとしている。

二人は、動物病院から帰るところだった。

「まああなたにもあれ、命に別状が無くてよかったですね」

鏡介が、並んで歩く常盤にそう声をかける。

医者に診て貰った結果だが、魅尾は結局病気などではなく単純に体力を消耗し切っていただけだった。そこで、今回は栄養剤の注射を1本打つだけにしておいて、各種必要な予防接種は後日元気になってからということになった。今は体力が無さ過ぎるので、ワクチンで病気になってしまう可能性もあるからだ。

事実、その栄養剤の注射をされても、魅尾はほとんど反応しなかった。

「でも、油断は禁物ですね。早く回復させないと、違う病気にかかるとかもしれません」

常盤は、そう厳しい発言をする。

「それにしても、彼女たちは、ちゃんとやってくれているのですよ
うか」

そして、メガネをくいと上げてから、日の高い青空を見上げた。

そのころ、もう一方は。

「何アルか、コレ？」

「知らぬのか、これは油揚げというものだ」

「それぐらい判るアル、油豆腐は中華でも使うアルから。ワタシが聞きたいのは、どしてこなに沢山買うの力てことアル」

「ならば説明してやるう。狐がいるからだ。古来より油揚げは狐が好物とするものであるからして」

「だから、棚がカラになるほど買う必要はないアル、生ものだから悪くなってしまうのこトね」

スーパーの中で、買い物籠を間に挟んで、まだ少女と呼んだほうがいい年頃の2人が言い争いをしていた。

言わずもがな、シデンと紅娘だ。そしてその2人の間にある籠には、袋に入った油揚げが山と積まれている。普通ひとりがまとめて買うものではないので、油揚げのコーナーは空になってしまっている。

「もう、二人とも何をしているの」

そこに、カートを押しながらもうひとり、レイカが現れる。そのカートはすでに食料品でいっぱいになっている。毎日のようにこれだけ買ってもすぐ無くなるのが今の真田家なのである。

「おお、レイカか。言ってやれ、狐はいかに油揚げを好むということを」

先に反応したのはシデンのほうだった。和装同士、意見が合うと思つたのだらう。

「シデンサン、話が違つアル。ワタシは、今日買わなくてもいいと言てるダケアル」

紅娘も負けじと反論する。

「何を言うか、備えあれば憂いなしだ。補給を断たれては戦線は立ち行かぬではないか」

「だからワタシは程度の問題と言てるアルよ、過剰な供給しても無駄増えるだけアル」

そしてまた口論をはじめ。

レイカは、まるで妹同士の口論を見守る姉のようなまなざしでそれを眺めていたが、しばらくして口を開いた。

「言いたいことは判つたわ。確かに、狐の好物は油揚げだって言わ

れているわね」

「ほら、見る。我の言ったとおりだろう」

その言葉を受け、シデンが得意げに胸を張る。

「でもこれは明らかに多すぎね。買うのは三分の一以下にしましよ
う」

だが、次にレイカが発したこの言葉で、紅娘とシデンの立場は逆転してしまつた。

「だーから言たアル。？木桶波及？好象（過ぎたるは及ばざるがごとし）と言つアル」

「くつ、わ、判らん例えを出すなっ」

得意そうにふんぞり返る紅娘の前で、シデンは悔しそうにうつむき紅娘を睨みつける。

「レイカっ！貴様、紅娘の肩を持つのかっ！？」

かと思つと、今度は自分の意見を否定したレイカのほうに噛み付いた。

「シデン、その油揚げを沢山買っていったとして、誰が保管すると思つているのかしら？」

だが、レイカはその一言には反論できず、そのまま黙り込んでしまつた。なにしろその「食料品の保存」をしているのが目の前にいる元冷蔵庫のレイカであり、また冷蔵庫の容量には限界がありその限界を最もよく判っているのもレイカなのだから、これには誰も文句が言えない。

「近々で使うのは、このぐらいかしらね。じゃあ私はお会計を済ませて来るから、残りの油揚げを棚に戻しておきなさいな」

レイカが、買い物籠いっぱいに入った油揚げから適量を取り上げてカートに乗せる。

「さ、シデンサン、棚に戻すヨ。ワタシも手伝うアル」

そして残つた油揚げが入つた籠を持ち上げ、紅娘が未だに悔しそうにうつむくシデンに声をかけながら籠の中身を棚にもどしはじめる。

「・・・・・・・・・・き・・・・・・・・・・」

そのシデンが、うつむいたまま、声を漏らした。見ると、拳を握りしめ、体が小刻みに震えている。

と、何事かと彼女を見つめる二人の前で、シデンはいきなり顔を上げた。泣くのを堪えているのか、両目に涙がたまっている。

泣かすようなことを言ったかしらん、と二人が顔を見合わせた、その瞬間。

「貴様らなんて、嫌いじゃー！ーっ！！」

シデンは、突然半べその顔でそう叫ぶと、だだだだだっ、と、もの凄い勢いでどこかへと走り去ってしまったのだ。

平日の昼前とはいえ、スーパーの中には買い物客が少なからず居る。店の中を泣きながら全速力で駆け抜けていくシデンの姿を、そのほとんどの何があったのかと怪訝な表情で見つめていた。

「……ワタシ、何か悪いこと言たアルか？」

「まああの子は意地っ張りなところがあるから」

それだけ言うと、レイカはカートを押して違う方向へと歩き出した。

「あ、ちょ、追わなくてヨロシアルか？」

「私たちじゃ追っても無駄よ、どうせ追いつけないし、あの子には翼があるし。それに」

「それに？」

「あの子には他にいくところもないし、おなががすいたら家に帰ってくるでしょ」

「……それも、そアルな」

あっさりとレイカに迎合した紅娘は、空の買い物籠を手を下げて、レイカと一緒に歩き出した。

09・幽霊って何ですか その8

ただいま、11時55分。昼休みのチャイムが鳴るまであと5分。今日こそはつかまるわけにはいかない。そのためには、教室から脱出するスタートダッシュがキーになる。おととい・昨日は出遅れて捕まってしまったので、今日こそは脱出を成功させなければならぬ。

安心して昼飯を食うのになんでこんなに苦勞せにやならんのか。そんなことを考えながらも、足はすぐマックススピードで駆け出せるように暖気運転をしている。

きーンきーンかーんきーン。

そうしているうちによくやく昼休みを告げるチャイムが鳴った。

「起立！礼！ありがとうございますー！」

委員長の号令による挨拶が済むと、教室は一斉にあわただしくなる。その瞬間、俺は弁当が入ったバッグを掴むと、部屋を飛び出していた。

入口で妨害しようとした奴の頭上を体操選手ばりのジャンプで飛び越え、本当は走ってはいけけない廊下を全速力で突っ切る。

目指すは屋上だ。一応出てはいけけないことになっているが、今日は見逃してもらおう。………なんか、最近、やってはいけけないことをいくつもやっている気がする。

そうこうしているうちに屋上への階段を昇りきった俺は、屋上に出る重い扉を開く。

そして、人が通れる程度の隙間ができたところで自分の体を滑り込ませ、背中を押して扉を閉める。そこでしばらく息を殺して、扉のむこうから聞こえる音を確認するが、追って来る足音は聞こえない。どうやら、今日は振り切ることができたようだ。

「はああああああ」

体が萎みそうなたため息とともに、扉によりかかったまま座り込む。

なんか、逃亡者になった気分。

ポケットに手を通すので、携帯電話を取り出すと、画面を開いた。

「お兄ちゃん、大丈夫？ なんだかすごく疲れた顔してるよ？」

開口一番、ケイにそんなことを言われてしまった。どうやら俺は、相当疲れた顔していたようだ。

「そ、そか」

なんか本当の妹（そんなの実際はいないが）に心配されたみたいで、なんか照れくさくなってしまふ。

「それよりホラ、メシにするぞ」

そして携帯電話を屋上の床にそつと置き、反対側に置いたバッグに手を掛ける。

「ホレ、ケイのぶん」

その中から2つの包みを取り出し、そのうち一つを振り向きながら差し出す。そこにはすでにケイが人の姿になって、ちょこんと座つてスタンバっていた。

「わーい、ありがとー」

ケイが、満面の笑みでその包みを受け取ると、さつそくその包みを開きはじめる。

そして、俺もその包みを開いて、弁当箱を開けようとしたとき。

「ほんま、仲がよろしおすなあ」

突然、聞き覚えがとおつてもある声が聞こえた。

そつちを向くと、やっぱり見覚えのある黒髪美人が立っていた。

「か、賀茂さん！？ なんでここに！？」

「なんでで言われましたもなあ、うちもここが好きやさかい、来ましたんえ？」

俺が聞きたいのはそういうことじゃないんだが。

「フーツ！」

ケイは、賀茂さんを警戒してか、素早く俺の後ろに隠れると、俺にしがみついてうなっている。お前はネコか。

「それ言うたら、あんたはんかてそこなケイちゃん、なんしてここ

にいてはるんどす？」

「う、な、なんでつて、連れてきたからだよ」

「ふーん、そうなん」

そう言うと、賀茂さんはさりげなく俺の横に腰を下ろして、手に持っていた包みを開いた。

出てきたのは、表面に純和風な模様が金色や朱色で描かれた、漆塗りっぱい黒い箱だった。大きさはケイの弁当箱とほとんど変わらないんだが、俺の目には明らかに高級そうに見える。

そして、ぱかっと開けると、ちんまりしたおにぎりが2つ、そして純和風なおかずがきれいに並んでいる。賀茂さんらしいといえば、とってもらしいお弁当だ。

「ほな、いただきますー」

その弁当箱を軽くささげ、頭を下げてそう言う。

「ん？どないしはりました？うちのお弁当が珍しゅうおすか？」

一口食べたところで、賀茂さんが俺にそんなことを聞いてくる。どうやら、俺はそれほど彼女の弁当を凝視していたらしい。

「あ、いやその、そういうワケじゃないんだ、ごめん」

我に返った俺は自分の弁当箱を開けると、いつものように合掌する。そこでふと横を見ると、口をへの字に曲げたケイがじとーっとした目でこつちを見ている。

「な、なんだよ、別に変なこと考えたわけじゃないぞ」

そんな言い訳をしながら弁当箱を開けて合掌する。

「あらあ、これはまた美味しそくなお弁当はんやねえ」

その俺のおかずを覗き込んだ賀茂さんが声をあげる。

「むう、お兄ちゃん、あつち行こー！」

すると、それが気に入らなかつたのかケイが乱暴に弁当箱の蓋をしめると制服の袖を引っ張った。どうもケイは賀茂さんが気に入らないようだ。

「まあ待てつて、別に今すぐ取って食われるわけじゃないだろ」

そのケイを引っ張り返し声をかけると、ケイは明らかに不機嫌そう

にしながらもそこに座りなおす。そしてじとーっとした目で俺を見ている。

確かに、賀茂さんの横からどきたくない、というのはある。彼女いない暦17年の俺にとって、これだけ親しくアプローチしてくる彼女を邪険にするのはあまりにももったいない。

だが、それだけではない。というか、こっちのほうがメインだ。今、屋上にいるのは、俺とケイと賀茂さんの3人だけだ。それはつまり、他の人に聞かれたくないような話でも、外野に邪魔されることなくできるということだ。

「ふう、ご馳走様」

昼飯を平らげると、空になった弁当箱を手早くしまった。

「ところで、賀茂さん。ちよっと話があるんだけど、いいかな？」

「え？へえ、かましまへんけど、なんどすか？」

話しかけると、賀茂さんは箸を止めてこっちを向いた。弁当はまだ少し残っている、やっぱり女の子は食べるペースが遅いようだ。

「むうっ、ちよっとお兄ちゃんっ」

直後、背中をペンチでねじられたような激痛が走る。

「いてえーっ、ケイなにすんだーっ！」

「鼻の下伸びてる」

振り向くと、ケイが怖い顔で俺を睨んでいる。

「そんなわけあるか、俺にそんな甲斐性があると思うか!？」

言っただけから、思いつきり後悔した。俺はすごいダメ人間だと言っているも同じじゃないか。

「うう、そうじゃないけど、その人はあ」

こら、そこで半べそは卑怯だぞ、俺が一方的に悪人にされかねないじゃないか。

しょうがないので、自分の口を少々強引にケイの耳元に持って行って、小声で説明することにした。

「これからその探りを入れるんだ、変なことはしないって」

そしてようやく静かになったケイを横において、改めて賀茂さんに

話しかけることにした。

09・幽霊って何ですか その9

「陰陽師って、知ってる？」

すると、一瞬だが賀茂さんが眉をひそめた。

「へえ、知ってますけど、なにか」

すぐに賀茂さんは表情をいつもの穏やかなものにする。もうちょっとカマかけてみようか。

「いやね、別に深い意味はないんだけどね。陰陽師を題材にした映画があつてさ、そこに出てくる、安倍清明だっけ？が、すごいなつて話をしたら、そいつに陰陽師の術を教えたのが、賀茂ナントカっていうやつだつて教えられたんで、もしかしたら賀茂さんのご先祖様とかなのかな、と思つてさ」

ちよつとのつもりだったのに、なんかべらべらと喋ってしまった。ふと我に返り賀茂さんのほうを見ると、なんかきよとんとした顔をしている。

一氣にまくし立てたから、聞き取れなかったのかな？といぶかしんでいると、不意に賀茂さんが小声で笑い出した。

「ふふふつ、真田はんで、おもしろいこと言わはりますなあ」

なんかコロコロと笑う賀茂さんを見てみると、なんか自分がとても間抜けなことを聞いたような気がする。単純だな、俺。

「まあ確かに、うちのご先祖はんはそないなお人やと聞かされてますけど」

「あー、やつぱりそうなんだ。賀茂なんて珍しい苗字だから、もしかしたらって思つて」

「ゆうたらあんさんかて、真田つちゅう有名な武将はんがいてはるやないの？」

「ん、真田つて、真田幸村か？」

「違うよおー！」

そのとき、今まで大人しくしていたケイが、突然声をあげた。

「お兄ちゃんは違うもん！お兄ちゃんのご先祖様は真田幸村じゃなくってさいもごっつ」

「わーっ！」

とっさにケイの口を塞ぐ。西園寺、と言おうとしたんだろうが、ここでその名前を出すのはまずいと思ったからだ。

賀茂さんはそんな俺のことをきよんとした顔で見ている。

「さい？」

「いや、なんでもないなんでもないんだ、あはははは」

自分でやってもわざとらしいと思うような愛想笑いを浮かべつつ、口を押さえられてじたばたするケイを引きずって賀茂さんからちよつと離れる。

「西園寺の名前はまずいだろっ、頼むからちよつとだけ我慢っ！」

そして、ケイの耳元で言っつて聞かせる。

「もごおおおおっ！」

「後でケーキ買ってやるからっ！なっ！？」

「もご、もごもごっつ」

よし、大人しくなった。出費は痛いが、この際しかたあるまい。

手を離すと、ケイは開口一番、微妙にすねた感じでこんなことを言っつた。

「約束だからねっ」

「なにが約束なんです？」

そこに、図つたように賀茂さんが顔を出す。そのおっとりした口調からはどこまで聞いていたのかは伺えない。

「え、あ、あはは、こっちの話だ。な？」

その場を繕おうとケイに同意を求めたが、ケイはぶいっつとそっぽを向いてしまった。

のみならず、すつと立ち上がると俺に背を向けずんと歩いていっつてしまっつ。

「お、おい」

「お邪魔みただから、あっちに行っつてる」

声をかけたら、そんな返事を返し、そして出口棟の陰へと消えていった。

「参ったな」

後を追ってその陰へと入るが、そこにはケイの姿はなく、代わりに1台のケータイが、ちよこんと段の上においてあった。

さつき、そこから光が見えたのでなんとなくは予想はついていたのだが、ケータイフォーム（なんか某ロボットアニメみたいな表現だが）に戻ってしまったらしい。

「あ、あれー？ケイのヤツ、どこに行っただ？」

俺のことはほつたらかしかい、と心の中でちよつと悪態をつきつつ、ケータイを拾い上げると内ポケットへと滑り込ませる。

「どないしました？」

戻ると、ちよつと食べ終えたらしい自分の弁当を包みなおしながら、賀茂さんがそんなふうに聞いてくる。

「あ、うん、ケイのやつ、一人で帰っちゃったみたいでさ」

「あらら、うち、嫌われてしもたかなあ」

残念そうな顔をしながら賀茂さんがそんなことを言う。白々しいと思ってしまうのは、ちよつと先入観をもってしまっているからだろうか。

「それより、真田はん。さつきケイちゃんが言うてはりましたけど、あれ、どういう意味どす？」

その賀茂さんが、頭を上げてそんなことを聞いてくる。

「真田はんの家は幸村はんと関係ありまへんの？ただ単に苗字はんが同じなだけどすか？」

「いや、実家のご先祖様は確かに幸村に続くらしいんだけど、俺は無関係なんだ」

これは本当だ。親父曰く、ご先祖様はかの有名な戦国武将、真田信繁（通称：真田幸村）に繋がっているんだそうだ。意外と知られていないが、幸村の次男が伊達政宗で有名な仙台藩に保護されて、血筋を残していたらしい。もっとも、俺には直接は関係ない話なんだ

が。

「へえ？どないな意味どす？」

「あ、賀茂さんは知らないのか。俺、養子なんだ」

「え……ほんま？」

その瞬間、賀茂さんの顔がひきつった。

「……な、なあ、聞いても、よろしおすか？その、養子に入りはる前で、どこにいてはったの？」

「ん？ああ、施設だよ。児童擁護施設。6歳のときに真田の家に入っただ」

「……ええと、その……うち、そないつもりで聞いたんとちゃいますのや、ほんま、ほんまかんにんどす」

そして、すごく申し訳なさそうに頭を下げてきた。どうも、すごく失礼なことを聞いてしまったと思っただらしい。なんかそういう顔をされると、俺が悪いような気がしてしまう。

「別にそんな、気にしなくていいよ。うちのクラス連中はみんな知っっている事だからさ」

「せやけど、ほんまは気にならるんでっしゃろ？」

「いや、あのさ、気にされると余計に気になっちゃうからさ。今は一応、家族はいるし、それに同居人もいっぱいいてにぎやかにしているしさ」

俺がそこまで言って、やっと賀茂さんはほっとした顔をした。

09・幽霊って何ですか その10

そのころ。

「……………気にしなくていいよ……………俺も気になっちゃ
うから……………」

屋上にいるその2人を、双眼鏡で見ている者がいた。

その者の口が動く。それは、双眼鏡で見ている相手の口の動きを見事にトレースしている。読唇術を使っているのだ。

やがて、二人が屋上から出て行ったのを確認して、ようやくその人物は双眼鏡を下ろした。

水色の瞳がそこから現れる。どうやらこの人物、日本人ではないようだ。

「ふむ、こちらで掌握している情報に間違いはないようだわ。昔から彼と西園寺は完全に切り離され、そのつながりを示すものも徹底的に消されている」

そしてその人物は、脇に置いてあるファイルを取り上げると、読唇術で読み取った言葉を自分なりに取捨選択しつつ、サラサラと書き写していく。やがて、B5程度の大きさの紙がその言葉でほぼ埋まる。

ひと通り書き終わった青い目の女は、そのままファイルを閉じると、無造作に近くのブックスタンドに差し込んだ。

「それから、私たちの他に物部神道の力を探っている者がいるという話だけど……………彼女がそう、なのかしら」

続けて、近くにあったデスクトップパソコンの操作を始める。

カタカタとキーボードを操作していくと、画面に名簿のようなものが映し出される。この学校にいる全校生徒についての一覧である。

やがて彼女は、とあるデータにたどりついた。そこには、黒い髪をまっすぐに伸ばした、一人の女生徒の写真が添付されている。

「賀茂杏寿、9月22日付で2年B組に編入……………お嬢様と

同じ日に転入。現住所は、朝賀市喜多野原3427-2 四賀茂神社。転入前は京都府の府立平安高校に在籍……ん？」

そこまで見て、女は少し怪訝な顔をする。

「……不自然な履歴の持ち主だわ」

一見すると、転校こそ多いがおかしなところは見られない履歴。だが、彼女はそこに不自然なものを感じていた。

「どういふ関わりがあるのかはわからないけれど、調べたほうが……」

そして女の指がキーボードの上を動きはじめる。女の指はまるでピアノストが曲を奏でるように滑らかにそして正確にキーボードの上を動き、それに合わせてパソコンのディスプレイが目まぐるしく変化していく。その様はまるで、キーボードを介してコンピューターと会議をしているように見える。

だが、その作業は結果が出る前に中断されることになる。

こんこんこん、と彼女がいる部屋のドアをノックする音がしたからだ。

女の体がびくつと跳ね上がり、キーボードを叩く指がぴたと止まる。

「由利先生、ちょっといいですか」

続いて、外から少しのんびりした女性の声がする。

「ちょ、ちょっと待ってくださいっ」

いかにも慌てたような口調で女はそう答え、ポケットから小さな容器を取り出すとパソコンの横に置いてある卓上用の鏡を覗きこんだ。

「す、すみませんっ、お待たせしましたっ」

そして、女は部屋のドアを開く。茶色い瞳に野暮ったいメガネをした彼女は、どこから見ても日本人女性だった。

「……由利先生、なにしていたんですか？」

ドアの外には、白衣を羽織ったおばさんが、少し呆れたような顔をして立っていた。

「いえ、あの、ちょっと、パソコンを」

「……まあいけど、生徒に見られないようにね」
「は、はい」

その女、この学校では2人目の擁護教員、「由利水江」は、先輩の擁護教員に申し訳なさそうに頭を下げた。

その日の昼下がり。奇妙な一団が、土手脇を歩いていった。

女ばかりの集団に一人だけ男が混じっているその集団は、見てくれの年齢も国籍もバラバラで、身につけているものも、女物のスーツに始まり和服とかメイド服とか統一感がない。

しかし、見た目の統一感のなさと逆に、その一団の雰囲気はとてものなごやかなものだった。

「いい天気ね」

「そうツスねえ、こう天気がいいと気分まで晴れてきますね」

「でもお、私はそのせいでえ、床下に入ったんですけどお」

「愚痴をいわない。いずれにしろいつかはやる事なのだから」

「Why, out of our siteにgoするのデース？」

「さつきも言たアル、院子（庭）に墓のアルは風水的に不好アル」

「たまにはいいじゃねえか、たまには外に出ねえとカビが生えるぜ？」

「そうだそうだ。見る、青い空、白い雲。そのうちなんとかなるだろうと言つではないか」

「それは植 等でしょう、全くシデンさんはいつの人でしょう」

言うまでもない、真田家モノ軍団プラス常盤弁護士の一団である。

その中で、ヒビキはどこから持ってきたのか大きなシャベルを肩に担ぎ、鏡介が何かの入った大きなポリ袋を背中に担いでいる。そして、レイカが正面に扉がある、プラスチックで出来た奇妙な箱を手にて提げている。

その箱の扉を、紅娘がひよいとのおぞく。中には金色の毛玉にも見える何かがじつとつづくまっつており、動く様子はまだない。

「魅尾は、まだ元気ないアルなあ」

「栄養剤打っただけツスからねえ、まあ命に別状はないみたいだし」

「そのほうが都合がよからう、親の亡骸を埋めるのを見て、騒がれ

るのも厄介であるしな」

「なんかそういつ言い方すると、あたしらが殺したみたいに聞こえるな」

「止めましょうよお、本当に出てきそうな気がしますっ」

シデンの言葉に対しヒビキが口にしたことに、クリンが本当に怖そうに口を開く。

昼食の後、モノたちは床下から引っ張り出した親狐の墓を作ることにしたのだ。

最近はずっと用の霊園というものもあるが、歩いて行けるところにないので、自分たちの手で墓を作ろうということになった。そしてその墓は、最初は家の庭に作る予定だったのだが、「庭に墓を作るのは風水が悪い」と紅娘が言い出し、結局は墓に適した場所に埋葬することになったのだ。

やがてモノたち一同は、家から歩いて10分ほどにある土手の上にもやって来た。土手の上はサイクリングロードとして舗装され、その左右は雑草が生い茂る坂になっている。そして南東に向いた斜面は川へと続いている。川の流れは比較的穏やかだが、土手と川の間にあるせまい川原は公園などのように舗装されておらず、大小様々な石がごろごろ転がっている。

「Hereは、aboutフースイでgoodではないデースカー？」

遠くを見るように手をかざし、あたりを見渡したバレンシアが、紅娘に問いかける。

「そうアルなー。川の流れは穏やか、向きは南東。絶好の立地アルな！」

紅娘がそう断言したところで、大きく息を吐いた鏡介が、今まで背負っていたポリ袋を下ろす。そのポリ袋の中に、これから埋葬する亡骸が入っているのだ。

「重かったー……」

「ご苦労様、鏡介くん。はい」

そのまま土手に座り込む鏡介に近づいたレイカが、冷えたペットボトル入りお茶を差し出す。

「あ、ありがとつす、レイカさん」

「ふー、ミーも a little tired デース」

近くにバレンシアが腰を下ろす。

「ふん、貴様は運動不足なだけだ、毎日部屋に籠ってからに」

「まあまあ、それがバレンシアさんのお仕事なんですからあ」

腕組みをして不満そうにしているシデンを、クリンがまあまあとないだめた。

「こんなところにお墓なんか作って、大丈夫でしょうか？」

「それについては心配ないと思います。こちら側の斜面ならば民家に面していませんし、それに、そんな大げさにする必要もありませんから」

「それに、穴を掘るのはあたしらだしな。よっ」

テルミと常盤の話に横から口を出したヒビキが、シャベルを担いだままで前に飛び上がる。ごく軽く踏み込んだだけに見えたが、彼女の体は土手の斜面をその一歩だけで軽々と飛び越えていく。

「ほっ、と。おーい、紅娘、どのへんがいい？」

そして土手のふもとに着陸したヒビキが、振り向きながらシャベルを下ろして声を上げる。

「ん、今行くアルー、ちょっと待つヨロシー！」

それを見た紅娘は、やにわに背中から鍋を下ろした。

そして丸い面を下にして地面に置くと、両方にある普通は手で持つ取っ手に自分の足を片方ずつ乗せて鍋の上に立つ。

「ひゃほーっ！」

そして、そのままずざざざと、土手を滑り降りてきた。そして一番下までやってくると、足で鍋を器用に操って動きを止め、そしてそこから飛び降りると、その鍋を背負いなおした。

「……器用なことするなあ、お前」

その動きの見事さに、ヒビキは思わず感心の声をあげる。

「ま、ワタシの一部アルからね」

そう言う紅娘の表情は、褒められたと思っただらしく満面の笑みだった。

「調理器具をそんなふうに使つのは、あまり感心できない事だけれどね」

そこに、いつの間の下に降りてきたのか、レイカがそう言葉を挟んでくる。足元がひんやりしたのでそちらを見ると、スノーボードのような形をした半透明の白い板が彼女の足の下に横たわっている。

レイカが氷で作ったそれはかなり薄いらしく、見る間に溶けていく。「それより、風水とやらでは墓はどこにするのが良いのだ？」

そして、空から舞い降りたシデンが問いかける。

「うーん、そうアルなあ、そのへんが良さそうアルな」

紅娘は少し考えてからそう答え、土手の中腹あたりまで駆け上る。

「ここなら川も良く見えるし、周囲から邪魔されるのこトもないアル」

「おし、わかった。ちょっと待つてな」

続いて、ヒビキがそこまで駆け上がる。そしてそこに着くや否や担いできたシャベルの先端をなんの躊躇いも無く地面に突き立てた。

それから10分ほどで、草に覆われた土手の中腹に縦長の穴が口を開けた。

そこに、土手の上から降りてきた鏡介が、親狐の亡骸を出しながら横たえる。そのまわりに常盤弁護士とテルミが昼前に買ってきた木炭や竹炭などをぱらぱらと落とすとしていく。

そして土をかけて埋葬された場所に、ヒビキが川原から人の頭ほどもある石を持ってきて土の上に置き、墓標にした。

「ほら、おかあさんのお墓ですよ」

土手のふもとからその石を見上げ、クリンが優しい口調でそんなことを言う。その腕には、さっきまで手提げ箱の中にうずくまっていた子狐の魅尾が抱きかかえられている。その半開きの目は、判っているのか、じーっとその墓石をみつめている。

最後に、その墓標に向かって、全員が思い思いの形で祈った。黙禱して頭をたれるもの、合掌して小声でお経らしきものを唱えるもの、十字を切るもの、シスターのようにひざまづいて手を組んで祈るものなどそのやり方は様々だが、その想いはひとつだった。

そして、その時に彼らをじっと見ている者がいることに、最後まで気がつくことはなかった。

それは、黒い甲羅を持った、一匹の亀だった。そいつは、川の中からまるで潜望鏡のように首を突き出し、川の土手に集まったその奇妙な一団のことを、そこから立ち去るまでじーっと見つめていたのだ。

やがてその一団が立ち去ると、その亀は波も立てずすーっと水の中へと消えていった。

09・幽霊って何ですか その12

「あーあ……」

午後の授業を受けながら、俺はちよつと後悔していた。

ケイを怒らせるというリスクを負ったにも関わらず、結局俺は賀茂さんに対し、大した事は聞き出せなかったのだ。自分の話術の無さにがっかりしてしまう。

ただ、盛り上がった話題が、ないわけではなかった。

うちの兄貴の話だ。

「ご実家のお人で、真田はんの今の状況、知ってはるん？」

きっかけは、こんな賀茂さんからの質問だった。

「ああ、うちの兄貴が来たことがあるから、知ってると思うけど」

「え、真田はん、お兄はん居てはるの？」

「ん、ああ、まあ血は繋がってないけどな。なんでだ？」

「いやあ、うち、養子はん言うたら、お子が居てない夫婦はんが貰うもんやと思うとったさかい。氣い悪うせんというて」

「別に気にはしねえけど、んー、俺が言うのもなんだけど、親父もお袋も兄貴も、ちよつと変わってるからなあ。ホントかどうかは知らねえけど、兄貴が「弟が欲しい」って言ったのがきっかけなんだと」

「へえ？そら羨ましゅうおすなあ」

「そうか？そういう賀茂さんは、兄弟とか……はいないんだっけ」

「うちは一人っ子どす。お兄いはんとか、おったらええなあ、と思たことはありますけど。そんお兄いはんって、どないなお人ですん？」

「どないって、まあよく言えば前向き、悪く言えば楽天的バカかな」

「あらら、ずいぶん言われようどすなあ」

「そんなもんだって。当事者の俺だって混乱するうちの状況を見て

も、「女の家族が増えた」なんて言っただけであっさり受け入れていたし」

「はあ、理解あるお兄いはんどすなあ」

「いや、あれは何にも考えてないだけだと思っぞ」

こんな感じだ。思い返すと、兄責を出しにするつもりが、逆に出しにされたような気がする。

「まあ、ケイとかを出しにしなかっただけましか」

今日のところは、そう思っただけで納得することにした。

09・幽霊って何ですか その13

「るんるんるんるん たつのしつみだなー」

そしてその日の放課後。部活をサボった俺は、人間フォームになったケイを連れて、シャッターが下りた店がちらほら見える夕方の商店街を歩いていった。

ちなみにここ、信責しんせきは、俺の通学路からは少々外れている。ぶつちやけていえば、駅一つぐらい遠回りになる。

なんでわざわざ遠回りしてまでこんなところに来たかというところ、このイチゴショートがケイのお気に入りな喫茶店が、こつちにあるからだ。

「あのお店じゃなきやイヤだもーん」

今日の昼休み、ケーキを買ってやるなんて言っちまったもんだから、そこに行くハメになってしまったのだ。

「黄色い煉瓦の小道」、月曜日にケイとシデンと紅娘を連れて初めて入った、ケイ曰く「スイーツがおいしい」店。決して大きな店ではないが、コーヒーは美味いと思うし、置いてあるスイーツなんかも甘すぎなくていい。いいんだが、一介の高校生にはちよつと値が張る。そんな店だ。

ちなみに、当のケイはといえば。よつぽど嬉しいらしく鼻歌交じりで俺のまわりをスキップしながら歩いている。

「……ま、いいか」

それでも、ケイの本当に嬉しそうな顔を見ると、それだけでいいような気がした。

「晩御飯が食えなくなっから、ケーキは一個だけだぞ」

「うんっ！」

こつちを向いて、ケイが満面の笑みで頷いた、その時だ。どんっ。

あまりにはしゃぎすぎたせいか、ケイが近くをとおりかかったグル

「プの一人にぶつかってしまったのだ。」

「あ、ご、ごめんなさい……」

とたんにしゅんとなり、ぱつと飛びのくとケイが頭をさげる。別にそんな怖がることはないだろ、わざとじゃないんだし、ちゃんと謝ってんだから。

と思ったんだが、今回はぶつかった相手が悪かった。

「あああああつ、てめえはっ！」

ケイがぶつかった、ニット帽を被った男が、俺を見るなりそんな頓狂な声をあげたのだ。それにびっくりしたケイは俺の後ろに隠れてしまう。

それを追いかけて、というわけではないんだろが、ニット帽の奴がこつちにずんずんと近づいてくる。そいつがまた、どっかで見たような随分とガラの悪い格好をしている。

「おいてめえ、この前はよくもやってくれやがったな、ああ？」

そして俺の目の前まで来てそんな風に凄んでみせる。

「この前？」

「忘れたたあ言わせねえぞ？あんどきやお前、女3人連れてたよなあ？」

女3人、という発言で、やっと何の話かを思い出せた。こいつは、俺がケイとシデンと紅娘を連れて走りこみをしていた時に、彼女らをナンパして、そして手を上げて返り討ちに遭った連中の一人なんだ。

そいつの発言を聞いて思い出したのか、ニット帽と一緒にいた男たちが数人、こつちに来る。そつちにも、あの時のナンパマンズの誰からしき奴がいる。

と、そつちに気を取られた瞬間、ニット帽が俺のネクタイを掴みあげた。

「おかげで俺あ前歯を1本折っちまったんだよ。どう落とし前つけてくれるんだよ、ああ!？」

そして、鼻息がかかるぐらいまで顔を近づけてくる。

こういう連中は無視するのが一番なんだが、ネクタイを捕まれているのでそれもできない。

「そりゃ災難だったね。で、悪いけど、ネクタイ放してくれない？これから用事があるから」

そして、なるべく神経を逆撫でないように言った、つもりだったんだが。

「てめえなめてんのか!？」

余計に怒らせてしまった。せつかく凄んでみせたのに俺がびびりも何もしないのが気に入らないらしい。しかしここでびびったらあっちの思う壺だ。

なにしろ、俺は何もしていない。こいつの歯が折れたのは自業自得だし、それに、折ったのはシデンが紅娘のどっちか、つまりここにはいないからだ。

「俺あ今ムシャクシャしてんだ。てめえの身内だろ、だつたらふざけてねえで誠意見せるや!」

「俺は関係ないだろ!」
と言ったところで、この手のやからには通じるわけもなければきつ。

「ぐはっ!？」

気がついたら、殴られていた。

殴ると同時にネクタイから手を離れたのだろう、俺の体は、そのまま舗装された道の上に投げ出された。

「きゃあああああああつ！おにいちゃああん！」

後からケイの悲鳴がする。とつさに顔を向けると、ケイが後ろからニット帽の男に抱きすくめられていた。逃げようとじたばたしているが、うちで一番非力なケイでは振り払えるわけもない。

「なにしゃがる！」

「てめえが誠意みせねんなら、こつちの子に見せてもらうんだよ」その瞬間。本当に一瞬だが、ぷちつと、何かが頭の中で切れたような気がした。

「ふげ！？」

次の瞬間。俺の左ボディーブローが、ニット帽の右わき腹にめり込んでいた。そこに、今度は自分の意志で、右拳でアッパーカットを喰らわせる。

ニット帽の男は、その両方をモロに喰らい、ケイを離してひっくり返った。

「て、てめ」

それを見て、ナンパマンズの一人が手に棒みたいなのを持って殴りかかって来た。

こつちから間合いを詰め、上体を屈めると、その頭上を棒が通過していった。

すかさず体を起こしつつ、右フックを繰り出す。だが、それはかすっただけだった。

そこまでやって、俺はようやく我に返った。そして、非常にヤバイ今の状況に気付くことになる。

こつちより数が多いナンパマンどもが、臨戦態勢になっていたからだ。それも、どこから出したのか特殊警棒やらチェーンやらメリケンサックやらといった武器を持っている。もしかしたらナイフとか持っているやつもいるかもしれない。

今ならまだ、全力で逃げれば100%振り切る自信がある。だが、俺の後ろにはケイがいるのだ。

拳を握りしめ、ファイティングポーズを取り、睨みつけてハツタリをかます。

「おい、こいつやる気みてえだぜ？」

「女の前だからカツコつきたいんだろ」

ナンパマンズはこっちをバカにしたような目で見ている。

「……………単騎で複数にあたるなら、相手をよく観察し、頭となる者を討つべし。相手に隙があるようなら、迷わずそこを突くべし……………」

一方、俺はかつて親父から聞いた言葉を反芻していた。

そして。

「ケンカは度胸！」

「ぶっ！？」

連中の一人が武器を振り上げたのを見計らい、自分に言い聞かせるためにも一言叫んでからそいつの前に踏み込み、軽いジャブを1発顔面にぶつける。そして動きが止まったところに左のブローを叩き込む。

止めに右フックを顎に叩き込んだところで横に逃げる。こういう場合、一箇所に留まっているのは危険だからだ。本当は一人ずつ引き離し各個撃破するのがセオリーなんだが、ケイのそばを離れるわけにはいかない。

そこでむこうの反応を見たところ、ちよつと戸惑っているように見えた。どうやらこいつらは、俺にボクシングとかの心得があるとは思っていないかったらしい。

もつとも、スパリング以外、特に路上で人を殴るのは俺も初めてだ。どの程度ならいいのか判らないし、殴ってしまったことに対する不安や後悔が後から沸いてくる。

「てめえ！」

そして、その戸惑いから先に立ち直ったのは、あっちのほうだった。

俺よりはケンカ慣れしているようで、今度は一斉に二人で攻撃してきた。

とっさにスウエーしながらバックステップで後ろへ動く。もちろん、避けるためだ。マンガや映画だと武器を持つ手を掴んだりするところだが、それよりこっちのほうが楽だし、動きを止めなくて済む。と、2人のうち一人が、そこでバランスを崩し転びそうになる。そこにもう一人がけつまづき、その二人は一緒になって本当に転んでしまった。つまり自滅だ。転んただけだからすぐ起き上がるだろうが、それでもこっちに有利に事が運んでいる。

そいつらの横を駆け抜け、まだ無傷の一人に右フックを繰り出す。今度はうまいことそいつの左頬に入り、そいつは足元をふらつかせて尻餅をつく。しかし。

「きゃああああっ！」

また、ケイの悲鳴がした。思わずそっちを見ると、またケイがナンパマンズに捕まっていた。

しまった、ケイから離れてしまった。それに気を取られたのが、命取りだった。

その直後、側頭部に激痛が走り、目の前に星が散った。おかげで、一瞬だが意識が朦朧とする。

そしてその一瞬のうちに、俺は何者かに羽交い絞めにされてしまった。

「やってくれるじゃねえの」

俺を羽交い絞めにした奴が、そんなことを言う。

状況を把握したので、腕を振り上げながら力を抜き、自分の体をそのままに落とす。うまくいけばこれで抜けられるはず、だったが、うまくいかず、右手を抱えられてしまった。久しぶりに使った真田流兵法術だったが、不発に終わってしまったようだ。

だが片手があれば。俺は自由になった左腕を振り上げ、そこにあるであろう男のすねを狙って、肘を思い切り振り下ろした。

鈍い感覚が肘に伝わり、命中したと語る。そして、情けない奇声を上げながら、男が手を離れた。

手が自由になったところで、ケイのほうを見たときだ。

目の前に、スニーカーの組みひもがアップで飛び込んできた。

「ぐあっ！」

よける間もなく、そいつの蹴りが顔に当たった。さっきのとは比べ物にならない痛みが走り、目の前が今度は赤くなる。そのまま、俺はまたアスファルトに投げ出された。

しかも、今度はあつちも容赦がなかった。立ち上がるのを待たずに、今度は腹を蹴られた。それを皮切りに、頭、腕、腹、足と、遠慮のない、明らかに複数の蹴りが、よく聞き取れないがおそらく俺への悪口であろう声とともに打ち込まれる。

「いやあああああっ！やめてえええええっ！」

そのなかで、ケイの叫びだけが妙にはつきり聞こえた。ケイは、無事なんだろうか。自分のことより、そっちのほうが気になってしま

う。

だが、蹴りのダメージで体が思うように動かない。

ケイ、ごめん。俺、お前のこと、助けられそうもないや。

そんなことを思いながら、意識を手放そうとした、そんな時だった。

「許さない！」

突然、そんな声が聞こえた。いや、聞こえたという言葉では足りない。マイクに向かって叫んだ声がでかいスピーカーで増幅され、さらにそれを耳元で聞かされたような、凄まじい音量だった。怒っているのか？情けない兄貴だと。

「お兄ちゃんを、ひどい目に遭わせるのも、お兄ちゃんをいじめるのも、許さない！」

ああ、違う。俺じゃなくて、ナンパマンたちに向かって怒っているのか。

そこまで来て、ふとあることに気がついた。

「許さない！」というケイの言葉が聞こえた直後から、俺を蹴る足の動きがぴたりと止まったのだ。

なんとか顔を上げると、ナンパマンのうち3人ほどが頭を抱えて、とんでもなく怯えたような仕草をしている。他の連中は、それをなだめようとしたりどうしたらいいのか判らずにオタオタしている。その反対側を見ると、ケイがいた。だがその様子が尋常じゃない。乱暴はされなかったようで、衣服などに乱れはないんだが、髪の毛が逆立っており、今まで見たことがないほどに怖い目つきでナンパマンズを睨んでいる。

その目が、ここから見てもおかしいぐらいに、赤いのだ。

「絶対に、絶対に許さないいいいっ！」

ケイの叫びが再び聞こえた。だが、不思議なことに、ケイの口は全く動いていない。

そしてその時、俺はようやくあのケイの声が、耳ではなく頭に直接聞こえたもの、つまりテレパシーのようなものだったと気がついた。おそらく、怯えているヤツは、俺と同じものが聞こえているんだろう。

「受けた痛み、何千倍にして返してやるうっ！どこへ逃げても、絶対に探し出して、死んだほうがましだったと思わせてやるうっうっうっうっうっ！」

だんだんとケイのテレパシーの声質が、ホラー映画の怪物がしぼり出すような、低く、気持ち悪いものになっていき、同時にその内容も恐ろしいものになっていく。

そして、とどめに。今までは声だけだったのが、とんでもないビジョンが見えてしまった。それは、目隠しされた状態で全身を何箇所も串刺しにされ、血を吐きだす男の姿だった。

しかも、目が隠れているのではつきりとは言えないが、その男は、俺だったのだ。

どこからこんなビジョンを手に入れたんだ、こいつは。

同じものが、ナンパマンズにも見えたのだろう。怯えていたヤツが、奇声を上げながら逃げ出した。それを追って残りの奴らも逃げ去っていく。

「許さない！」

赤い目の、怖い顔をしたケイが、そいつらを追いかけようと駆け出した、その手を掴む。

「えっ？」

驚いたような声を出して、やっとケイがこっちを向いた。同時に逆立っていた髪の毛が寝ていき、目も恐ろしい赤からいつもの鳶色へと変わった。

と同時に、その目があつという間に潤んでいく。

「う、うわああああああああん、ごめんなさああああい」

そして、俺にしがみついて泣き出してしまった。

今更だが、ここは町の中だ。人通りは少ないとはいえ、ゼロではない。そして、そんな中、女の子にしがみつかれて泣かれるのはいささか恥ずかしい。

さっき一方的にボコられてた時には無関心を決めていた一般人の目も、今度はチラチラとこっちを見ている。俺にはこっちのほうに対

処に困る。

「大丈夫、大丈夫だ」

そう言いながら、泣きじゃくるケイを抱きしめ、ケイの頭を何度も撫でてやった。

「おかえりな……ま、将仁さん、どうしたの
でしょう、そのケガ！」

家に入ると、テルミが出迎えてくれて、そして即座に騒ぎになった。警察沙汰になったら面倒なのであの後速攻で帰ったんだが、やっぱり大怪我に見えるようだ。まあ確かに体中が痛い、ここまで自力で、支えなしで帰って来られたんだから実際は大したことないと思う。

だが、抱え込まれたリビングでは、あつという間に大騒ぎになってしまった。

「誰だ！どこの馬の骨にやられた！言え！」

「そいつらの脳天勝ち割って、内臓引きずり出して、叩き潰してやらあ！」

「そんなの甘いデース！3 minute make charcoal（黒焦げにしてやる）デース！」

俺に怪我させたヤツに仕返ししようとするモノ。

「冷やすわよ。腫れたら炎症を起こして熱を持つから」

「アイヤー、将仁サン、肚子出すヨロシ、内？器官（内臓器官）に怪我ないか診るアル」

「うわああ、将仁さあん、アザだらけですう」

俺の体を心配するモノなどなど、様々だ。

「そんなひどいか？」

「ひどいなんてもんじゃないツスよ、顔、こんなになってますよ！？」

そう言いながら、鏡介は自分の顔を変化させる。その顔は、右目のまわりにアザがあり、左の頬が見事に腫れ、また口元が少し切れていた。これはどこから見ても怪我人だ。

「こりゃひどいな」

「感心してないで下さい、これが今の将仁さんなんすから」

呆れた口調で鏡介が返し、そしてもとの顔に戻る。

ちなみに、俺と一緒にいたケイは、ここに帰ってくるまで、ちっちゃい子がいじめられたみたいに、ごめんなさいを繰り返しながらずーっとめそめそと泣いていた。

「だって、だってええええええ！ケイが、あんなこと、言わなければ、お兄ちゃんは、お兄ちゃんはあああああ」

どうも、自分のせいで俺が怪我をしたと思っっているらしい。まあ確かにある意味そうではあるのだが、だからといっていつまでも泣かれても、正直困ってしまったってわんわんわーんな犬のおまわりさんである。……何を言ってるんだ俺は。

「ケイちゃん。どうしてこんなことになったのか、教えてもらえませんか？」

そのケイは、常盤さんにその時の状況を問われ、鼻をすすりながら、懸命にその状況を説明している。

「とにかく、一度お医者様に見ていただいたほうが良いでしょう」
騒ぎがようやく少し収まってきたところで、テルミが俺の顔に手を沿えながらそう口にする。

「そんな、大げさだよ」

「大げさじゃないでしょう、さっき鏡介さんに見せてもらったでしょうっ？」

「そうツスよ。誰が見ても大怪我じゃないツスカ、痛くないわけないっしょ」

だが、うかつなことを言っつてしまい、テルミと鏡介に説教されてしまった。

「参ったな」

思わず、そんな言葉が口から漏れる。

「む、相手を取り逃がした事か？ならば、そ奴らを見つけ出し、天誅を食らわせて参ろう」

シデンが、平然とした顔で物騒なことを言う。せひともお願いしま

す、と言いたいが俺が心配しているのはそんなことではない。

「いや、その話じゃなくて。明日、ちょっと予定があるんだよ」

「そんなものは後回しでいいでしょう。将仁さんの体のほうが大事でしょう」

「その通りね。いくら将仁くんが若いと言っても、無理をしたら治るものも治らないわ」

モノたちは俺の心配をしてかそんなことを言ってくるが、今回はそうも言ってもらえないのだ。
なにしろ。

「そうもいかないよ、こんなもんまで貰っちゃったし」

言いながら、カバンの中から一枚の封筒を取り出す。近衛お嬢様からの招待状だ。

「あ、それ、招待状」

やっと泣き止んだケイが、不意にそんなことを口にする。

「招待状だ？」

ヒビキがひよいとその封筒を取り上げる。ごついライダーグローブをした手で持たれると、その封筒が妙に小さいように見える。

「Hey、youではtearしてしまっテース。ミーにgiveするテース！」

それをバレンシアがひよいと取り上げ、中身を取り出す。

「どれ………むう、横文字か」

出てきた中身をシデンがひよいと取り上げて広げるが、一瞬顔をしかめる。

「ケイちゃんサン、あの招待状、誰から貰たアル？」

「え、ええっと、お兄ちゃんの隣のクラスに転校してきた、近衛クローディアってお嬢様から」

「お嬢様、ですかあ？」

「おい、上官。まさかそ奴におべっかを使うために行くというのではあるまいな!？」

「バカ言うな、俺だってそこまで卑屈じゃねえやい」

なんかおかしいな方向に誤解されそうになったので、思わず断言してしまっただ。

「前に話しただろ、そのお嬢様も擬人化の力を狙っているって。せっかくの誘いだ、あっちの手の内を調べるいいチャンスだろ」

「無茶は感心しないわね。第一、その腫れ上がった顔で行くつもり？」

「う、だからそれ貰ったときはこんな顔じゃなかったんだって」
レイカの突っ込みに、一瞬言葉を詰まらせてしまう。

「あ、そうだクリン、お前、キズとか治せたよな。この顔、なんとかならないか？」

ふと、この前クリンに舐められたら指のキズがあつという間に塞がったことを思い出し、クリンに聞いてみる。体のほうはちよつとまじが、顔がなんとかなれば。と思ったのだが。

「ええ！？ やつてみてもいいですけどお、私がかきれいにできるのって、表面だけですよお？ 擦り傷とかあ、アザぐらいならなんとかなるかもしれないですけどお、腫れたのは無理だと思えますう」

だと。たしかに腫れだけが残っているのは、おたふく風邪みたいでかつこよろしいものではない。

「この招待状は、あくまでも将仁さんを招待しているだけで、強制力は全くありません。先方には、私から理由をお話して、欠席する旨を伝えます」

招待状を読んでいた常盤さんが、くいつとメガネを動かしてから、丁寧にそれを畳んで、封筒に戻してから自分の胸ポケットに納めてしまう。って常盤さん、それは俺がもらったんですが。

「ちよ、ちよつと待つてくださいよ、俺は行かないなんて一言も「いいえ駄目です。顧問弁護士として、そんな危険な行為を、認めることはできません」

「Miss Tokiwaのopinion(判断)はrightと、ミーもthinkしマス。Information(情報)がneedなら、ミーがnetworkにdivideしてgetする

デスから、Masterはquietlyにrestを取
るデース！」

反論したが、逆にバレンシアまでが反対意見を述べ始めてしまった。

「生情報がほしいんだったら、俺が代わりに探ってきますよ」
なおも食い下がろうとした俺の横から、男の声がした。

「え、鏡介？」

「ほら、俺なら将仁さんと寸分違わない姿だし、声だって同じじゃないスカ。影武者として、これ以上の存在はないでしょ」
影武者って、お前、どっかの戦国武将じゃないんだから。

まあ確かに、俺の代わりとしてこれ以上の存在はいない。さすが鏡とでも言おうか、鏡介は俺から見ると色々ところが微妙に逆なんだが、そんなのは普通にしていれば判らない。箸を使ったり字を書いたりすればさすがに左利きとばれるが、あのお嬢様は俺が右利きか左利きかなんて気にも留めないだろう。

だが、それでも素直に頼む気にはなれなかった。というのも。

「あのお嬢様のやつ、擬人化のことを知ってたんだぞ？もしお前がそうだとばれたら、何されるか判ったもんじゃねえぞ？」

そう。うちのクラスメイトたちと違い、あの近衛お嬢様は、西園寺に伝わる擬人化の力を知っていて、そして明らかにその力を欲しがっている。どの程度知っているのかは探ってみなけりゃ判らんが、目の前にその力で出来たモノが現れたら、普通はほつとかないだろう。

「大丈夫ツスよ。いざとなりや逃げますから」

だが、鏡介のやつは俺の心配なぞどこ吹く風といった様子だ。絶対にばれないという自信があるのか、それとも逃げ足に相当の自信があるのか。

「逃げるってどうやってだ？俺が前住んでたアパートとかなら判るけど、あっちはリムジンで登校するような奴だから、家も相当でかいだろうし、使用人とかもいるだろうし、防犯設備だってものすごいだろうし。逃げ回ってもまた捕まるのがオチだろ」

加えて、初めての場所じゃ、逃げるのも大変だろう、と思ったんだが。

「追われない逃げ方をすればいいんすよ」

鏡介の奴が、突然妙なことを口走った。

「追われない逃げ方あ？」

「ええ、例えばワープするとか」

ワープ、と聞いて、艦首に巨大な砲口を持ち宇宙空間に行く、日本最大の戦艦のことが思い出される。って、何を言っているんだ、こいつは。

「なんだよそりゃ、魔法使いや超能力者じゃあるまいし」

「あ、そういえば将仁さんは知らないんだっけ」

だが、しょうもない冗談だと思つてツツコミを入れたら、鏡介のやつは真顔でそんなふうに応えやがった。

そして俺の目の前で、鏡介は自分のポケットから、何か黒くて平べつたい、手のひらに収まる程度のものを取り出した。携帯電話かな、と思つたが、それよりずっと小さくて薄っぺらい。

それは、俺のエチケツトブラシだった。開くと、片方が鏡に、もう片方がブラシになっている。

そしてその鏡を自分に向けると、鏡介はとんでもない事を口にしたのだ。

「今日気がついたんですけど、俺、そういうことが出来るんすよ。

まあ、出来る場所には制限があるんすけどね」

一瞬、鏡介が何を言っているのか、理解ができなかった。

「ええっ！？てことは鏡介お兄ちゃん、ワープできるの!？」

ケイの驚いた声で、俺も鏡介が言わんとしたことが判つたんだが、今度は到底信じる気になれなかった。なんでって、そんなの当たり前だ。瞬間移動だぞ？SFの世界ではともかく、物理的には不可能なんじゃなかったのか？

「ま、見てもらったほうが早いッスね。んじゃ、行きますよ」

混乱した俺のを見て、ちよつとため息をついた鏡介が、そんな

ことを言う。

行ってくつて、今からどっかに行くのか？どこに行くんだ？なんてことを考えている俺の目の前で、鏡介はエチケツトブラシの鏡をじっと見つめた。

瞬間。鏡介の姿が真っ白な光になったかと思うと、その次の瞬間には、光とともに鏡介の姿が消えてしまったのだ。それが証拠に、持ち手のなくなつたエチケツトブラシが、重力に引っ張られ、まっすぐに床に落ち、硬質な音を立てる。

「・・・・・・・・・・な、何があつたんだ？」

「・・・・・・・・・・鏡介お兄ちゃん？」

俺とケイは、何が起きたのか判らず、ただただ床に落ちたエチケツトブラシに目を落とすだけだ。

我に返り、鏡介がさつきまでいた空間に手をやるが、やはり何も無い。まさかと思つてさつき鏡介がいた足元を踏んでみるが、床の感触しかない。

つまり、手品なんかと違い、本当に鏡介はその場所から消えてしまつていたのだ。

「……お、おい、ちよつと待て、なんだよこれ!？」
思わず叫んでしまう。

だが、俺とケイ以外は、仲間が一人消えたというのに、誰も慌てた様子が無い。

「カコイイアルなく、ワタシもあんな能力ほしいアル」

「全く、自分の力なのに自分で知らないなんて、マヌケな話だよなあ」

「うーむ、我にも新たな力が何か眠っておらぬものか」

それどころか、のん気にそんな事まで言っているのだ。

「ちよ、ちよつと待て、お前ら心配じゃないのか!? 鏡介が、鏡介がいなくなつたんだぞ!？」

何か鏡介を見捨てたかのようなモノたちの発言に少し力チンと来た俺は、そう怒鳴ってしまう。
すると。

「……もうそろそろですね」

常盤さんが、リビングに掛けられた時計を見て、そんな事を言った。そろそろって何だ?と思った直後だ。

「ただいまー」

聞き覚えのある声が、リビングの入口のほうから聞こえた。

全力で振り向き、そこにあるものを見る。

そこには、俺と寸分変わらない、奴の姿があった。

「きよ、鏡介!？」

「将仁さん、その顔、すごくマヌケっすよ」

そう。そいつこそが、ついさっき俺の目の前で消えた、鏡介だったのだ。

「……どうなってんだ?」

「だから、さっきから言ってるじゃないツスか。俺はワープができ

るって」

まだ混乱から立ち直らない俺に、鏡介が「なんで判らないんだ？」
と言いたげに答える。

「もつとも、鏡のあるところにしか移動できないんすけどね、へへ」
照れたように鏡介が頭を掻く。つまり、鏡介の奴は、鏡のあるところから別の鏡のあるところへ、一瞬で移動できるらしい。ちなみに、今回は洗面所の鏡のところに行っていたんだそうだ。

「うわぁ、鏡介お兄ちゃん、凄いの、超能力者みたいなのー！」

正体を知ったケイは、素直に感心してみせる。超能力といえば、ケイの奴はさつきテレパシーみたいなことをやってみせたから、他の連中もそういうのが出来るのかも知れない。

「……なんつーか、こいつら、元々妖怪じみた奴らだとは思っていたが、最近、それに加速がかかってきていないか？」

「魅尾の親御さんの墓を作った後、暇があつたんで、DVDでも見るかって事になって、レンタルビデオ屋に行つたんですよ。そしてら、ミラーマスクっていうのを見つけましてね。ミラーなんて名前があるからには、鏡として見なければ、と思つて借りて、見たんすよ」

なんで今日になって気がついたのか改めて聞いてみると、そんな答えが返ってきた。

ミラーマスク。確か、赤と銀の全身ツナギの宇宙人が巨大怪獣と戦う例のアレの亜流で、親父がまだ小学生ぐらいのときにテレビでやっていた、あれよりはマイナーなヒーローの名前だ。

「そんで、真似したら出来ちゃったんすよね」

そして、鏡介は照れたように笑う。なんとという非常識。

「真似したら出来たって、そりゃいくらなんでもムチャクチャじゃねーか？ありや特撮のフィクションだぞ？」

「でも、そう言われても出来ちゃったモンは出来ちゃったんだから、しょうがないじゃないスか。将仁さんだつてさっきのアレ、見たっしょ」

「そりゃ見たけどさあ、普通は変身するとか目からビームを出すとかバリヤーを張るとか、アクションが判りやすいトコロから始めるもんじゃねーのか？」

「そりゃーやりましたよ。ビームも撃てましたしバリヤーも張れませんでしたけど、体の大きさはどうやっても変わらなかったし変身もできませんでした」

「へえそうか、そんじゃ変身ヒーローってわけじゃ………」

「瞬間き流してしまっただが、今こいつ、すっごくムチャクチャなことを言わなかったか？」

「………ビームが撃てる？」

「ええ、撃てますよ。まあ出るのは手からで、目からじゃないスけどね」

そして、バルコニーに出ると、鏡介の奴はそこから数メートルほど離れたところにある芝生を指差すと、そこを見ていてくださいと言う。

何事かと思いつつそっちを見ていると。その芝生に向かって、鏡介が両手を自分の胸元に水平に構え、そして掛け声とともに先を突き出すように両腕を伸ばした。

なんのまじないだと思っただ瞬間、その指先に青みがかつた白い光が点り、そしてそこから同じ色の光線がさっき指差した芝生へと真っ直ぐに伸びていったのだ。

つまり、鏡介の奴は本当に「ビーム」を発射しやがったのだ。データラメもここまでぶつとんで来ると、感心してしまう。

しかも、その光が当たったところからは、まるで花火のような火の粉が飛び散り、そしてバシバシという爆音がしていた。そしてその跡には見るも無残に焼け焦げた芝生と、はつきりえぐれた地面が見えたのだ。人間に向けてやったら、確実に痛いでは済まされない。

改めて、うちのモノたちには物理法則を無視したところがあると、思い知らされてしまった。

「鏡介、お前は怪獣とでも戦うつもりか？」

「そういうふうにしたのは将仁さんでしょ、俺に戦わせたいんすか？」

バルコニーから戻ってきた鏡介にその声をかけると、つつこみ返されてしまった。

しかしまあ、影武者として行かせるって話に戻って考えると、俺以上に自分の身を護れる奴ってことだから、俺が行くよりはよっぽど安全だ。

「そんじゃ、明日はよろしく頼むよ。くれぐれも人に向けてソレ発射しないようにな」

「任せてください」

改めてお願いすると、鏡介は自分の胸を叩いて見せた。

今日の夕食はレイカと紅娘による、手作り餃子づくしだった。テールに100個以上の餃子が並ぶのは結構迫力がある。しかも、皮から手作りという懲りようだ。

実家でもお袋が造ったことはあるが、あの時はさすがに皮は市販品だったな。

ちなみに、この餃子の作り方にしても二人の違いは出ている。餃子という焼き餃子のイメージがあるが、紅娘曰く、実は本場中国には焼き餃子は正式なメニューとしては存在しなくて、ほとんどが水餃子や茹餃子なんだそうだ。というわけで、焼き餃子はレイカ、水餃子（正確にはスープ餃子）は紅娘の作ということで一緒に並んでいる。

とはいえ、どっちも美味しいことには変わりが無い。

夢中になって食っていると、餃子のタレが無くなってしまった。タレなしでも美味いが、少々ものたりない。

「レイカお姉ちゃん、お醤油とお酢貸してー。お兄ちゃんがタレがないと物足りないってー」
と、突然ケイが声をあげた。

「タレ、作ってあげるね。お兄ちゃんはお酢とお醤油、どっちが多めかな？」

回ってきた醤油差しを手にしながら、ケイがこっちを見る。

俺は、餃子のつけダレは酢が多目がいいが、そんなにこだわらないほうだ。

「ん、お酢が多めね。」

その俺の目の前で、ケイが楽しそうに餃子のタレを作っている。

そこで、俺はふと疑問を感じた。

俺、口の中にメシがはいっているの、さっきから一言も喋ってないのだ。それなのに、ケイはなぜかあたかも俺が言ったかのように

動いている。

「おい、ケイ」

さすがに気になったので、口の中身を飲み込んでからケイに聞いてみることにした。

「ん？お酢多すぎちゃった？」

「いや、それはいいんだけど、俺、さつきから喋ってねーんだけど？」

「え？」

その瞬間、ケイの手が止まった。

「ケイ、お兄ちゃんが言ったって思ってたんだけど、違うの？」

そして、怪訝な顔でこっちを見る。そしてその瞬間、やっぱり、と思ってしまった。

ケイの目が、白ウサギのごとく赤くなっていたのだ。俺をボコしたナンパマンズを追い払った時と同じだ。

「え？やっぱりって、もしかして鏡介お兄ちゃんと間違ってた？」

そしてそっちを向こうとするケイを呼び止める。

「ちよっと、ケイ、いいか？」

「え？なに？」

今はいつもの鳶色だ。

「ケイ、お前さつき、俺が何を考えてるのかって、考えてなかったか？」

「え？」

「いや、だから、俺が何をしてほしいのかわかって、思わなかったか？」

すると、ケイは目をぱちくりさせて、本当に驚いたような顔をした。

「え、お、お兄ちゃん、ケイの考えてることが判るの！？」

その瞬間、和気藹々と餃子を食ってたモノたち&常盤さんが一斉にこっちを向いた。

「ま、将仁さん、変な力に目覚められたのでしょうか！？」

「頭殴られたからか！？記憶なくしたりはしてないよな！？」

「Wow! It's marvelous! Master, it's very very すっぱらしいコトデース!」
そして一斉に盛り上がる。しかも、俺がそーゆー力を持つてるとゆーことになってやがる。

「ちがーうっ!俺じゃねええええええっ!」
とりあえず、ありったけの大声でそう言っておく。

「なにを言っておるのだ、上官?せつかくの力、否定することもあるまい」

「んだからそれが違うっつての!それは俺じゃなくてケイなんだよっ!」

「え、ええええええええええっ!?!」

俺が真相を力いっぱい叫ぶと、ケイがちよつとやりすぎなぐらいに驚いて見せる。自分でやってて気がついてないのか、おまえは。

「うそ!?ケイなの!?!」

「だって俺、さつきから口に出してないのにタレ作ってくれたりお酔多めにしたりしてんだろ」

「えー、だっってお兄ちゃんがそう言ってるのが聞こえたんだもん」

「だからそれは、お前が俺の考えたことを読み取っているんだっつてそれに、さつき俺を助けてくれたのもケイじゃないか」

そして、ケイの仕業であるうあの「許さない」テレパシーのことを話す。

「.....うそ.....ケイがそんなことを.....」
全部聞いた後だというのに、ケイはまだ信じられないといった様子でいる。

「Hmm, maybe コレは、Masterのbrain waves (脳波)をreceive&sendしてるデースねー」
突然、バレンシアがそんなことを言い出した。

「Essentially (本来)、cellular phone (携帯電話)は、specific frequency (特定の周波数)のwaveしかcannot receive (受信出

来ない)なの二、Miss Keiはanother frequency(別の周波数)のwaveもreceiveしまし夕。そのon the extension line(延長線上)で、Master of brain wavesをreceiveしているのデース」

要するに、ケイは俺の脳波から思考を読んでもというわけらしい。結構ぶつ飛んでいる話だが、“共感”というのは脳波の同調によるという説を聞いたような気がするのどうかつには笑い飛ばせない。それに、さっきの鏡介といい、最近こいつらの人間離れ度には拍車がかかっているから、そういうことがあってもおかしくないような気がしてしまうのだ。

「お兄ちゃんひどいー！人間離れなんて言っちゃだあ！」

と、俺の服の袖が思いつきり引つ張られる。見ると、涙目になったケイがこつちを見ているのだが、その瞳がまた赤く光っている。

なんだかんだ言いながら、ケイのやつはテレパシーの使い方をもうマスターしてしまったらしい。恐ろしい話だ。

「おい、ケイ。あんまり、それ、やるな」

俺は、ケイの肩に両手を置いて、そう諭す。時には「察してくれ」と思うことはあるが、考えていることを片っ端から読まれるのはそれ以上に困るからだ。

「ううううっ」

たぶん、俺の考えていることが判るのだろう、ケイはすつごく恨めしそうな顔で俺を見ているが、そんな目で見られてもこればかりは安易にオツケーとは言えない。なんでって、誰だって心を読まれるのは嫌だろう。昔話に出てくるさとりがなんで怖がられるのかは、それこそ考えていることを読まれるからだ。

そして、俺は、ケイをそんな怖い存在と想いたくはない。

「うううううう……わかったよお……」

ケイは拗ねたような顔で俺を見る。そのうるうるした赤い瞳が、徐々に鳶色へと変わっていく。

それが完全にいつものケイのそれに戻ったのを確認した瞬間、俺は
思わず大きく息を吐いてしまった。

夕食が済んだ後、俺はリビングの隅にあるダンボール箱をのぞいてみた。

その中には、金色の毛の塊がとぐるを巻いている。

「どうだ魅尾、ちったあ元気になったか？」

しゃがみこんでその金色の毛玉に声をかけるが、反応しない。

「栄養剤を注射しただけツスからね、リハビリ兼ねて、もう少し時間が必要なんじゃないスか？」

そこに、俺の後ろから鏡介が声をかけてくる。

「予防接種とかはしてねえのか？」

「お医者さんが言うには、弱りすぎてて予防接種で使うワクチンで病気になる可能性があるから、もう少し元気になってからのほうがいいって」

「なるほどねえ」

と、そのやり取りを聞いたからって訳ではないのだろうが、その毛玉がもぞりと動いた。

気だるそうに頭を上げると、目を開いたのだ。

「お、起きたか」

狐目というと細くつり上がっているものだが、初めて見る狐の目は、思ったより丸い。そして犬や猫のように白目がほとんどない。

「わあ、かわいいーっ！」

いつの間にかいたのか、俺の横から箱の中をのぞきこんだケイが黄色い声を上げる。

そう言うのも判らないではない。俺だってそう思った。思ったが、素直に言ってしまうのは恥ずかしいのだ。

「おっ？あのチビ助、気がついたのか」

「まあ、ぬいぐるみみたいでかわいいですう」

「紅娘よ、美味そうなど言うてはならんぞ？」

「言わないアルっ！中国でも狐はそな食べないアルっ！」

「Hey, Mio. Look this side」

いつのまにか、魅尾のまわりには人だかりができていた。まあ、女は基本的にかわいいものが好きらしいから、当然といえば当然だ。

ちなみに集まっているのは全員ではなく、テルミとレイカは食後の後片付けがあつてまだキッチンにいて、常盤さんはちよつと仕事があると云つて2階にさつさと上がつてしまつている。

それ以外がみんなここに集まつているのだが、さすがに手を出すやっはいない。意識が戻つたからと言つても弱つているのは変わりないからだ。俺だつてそうだ。

「どうだ、食べるか？」

つい、と、箱の中にシデンが小皿を差し入れた。そこにはいつの間につつたんだろうか、小さく刻まれた油揚げが載つている。

昔から油揚げは狐の好物、と伝えられている。だから油揚げなんだろうが、狐つて犬に近いから本当は肉とかドッグフードとかのがいんじゃないだろうか。

もっとも、その心配は無用だつたらしく、魅尾はくんくんと臭いをかぐと、その一切れをぱくりと口に啜え、そのまま食べてしまつた。そして、気に入つたらしく、ぱくぱくとその油揚げを平らげていく。その仕草がかわいいもんだから、うちの女性陣は盛り上がつてしまい、シデンがレイカから袋入りの油揚げをもらつて封を切りそのまま出すことになつた。

それは大きいままだつたが、魅尾はそれを前足で押さえながら器用にかじり取り、むしゃむしゃと食べて見せる。

と、半分ぐらゐまで食べたところで、はじめて気がついたように油揚げから口を離し、じつとこつちを見つめてきた。

うーん、なんとなく、何か言いたそうに見える。何が言いたいんだろつ。

「お兄ちゃんもそう思う？お礼が言いたいんだつたら、いいんだけどね」

「なに見てんだよ、だつたら目も当てられんな………つてこ
らケイ、また勝手に人の心呼んだな!？」

「あう、だつてえ、そのほうが早いんだもん」

ケイがちよつと決まりが悪そうな顔をしてこつちを見る。そんな顔
をされると俺もあまりきついことを言えなくなつてしまふ。くそう、
俺のほうがいいようにあしらわれているじゃないか。

「じゃケイちゃんサン、テレパシーで、魅尾の心読んでみたらどア
ルか？」

「ええー?できるかなあ、ケイ、狐語わかんないけど」

そんなのムツ　ロウさんだつて判らんだろ。

「ムツ　ロウさんつて、誰?」

「だあ、読むところが違うだろ、なんで俺の考えてることばかり読
むんだつ」

「えう、だつて読みやすいんだもん」

「Maybe、onceにtunesしたwaveは、easy
lyにreceiveできるのでショウウねー」

なるほど、履歴が残るつてことか………できればその履歴は
残さないでほしいんだがなあ。

「ほら、やつてみるよ」

ヒビキに促され、ケイが魅尾のほうに向きなおる。

そこにいる全員が固唾を呑んで見守っていたが、魅尾が面白くなさ
そうにぶいっつと顔を背けると、ケイはため息をついてしまった。

「はあ、だめだあ」

そして額を押さえる。

「?呀、やぱりダメアルか」

「うん、なんか真つ白でなんにもわかんないの。最初、ちよつと見
えたんだけど」

「真つ白お、ですかあ?」

「まさか空の極意ツ!?なはずがないか、こんな畜生ごときが「
シデンの奴がまたなんかワケのわからんことを言つてる。」

「なんスかその空の極意って」

「言葉で説明するのは難しい、後にしろ」

「ホントはお前も判ってねえんだろ、シデン？」

「ぬうっ！この口か！この口が余計なことを言うのかっ！」

「んぎいてコラなにひやがんだよ！」

「ぐっ、こらヒビキ、人の回転翼^{プロペラ}を掴むなーっ！」

そこに突っ込まれたシデンがヒビキの頬をつねり、ヒビキはお返しとばかりにシデンの頭のとっぺんから生えている一房の銀色の髪の毛をむんずとつかんでいる。

「もうっ、こんなところで喧嘩しないでよーっ！」

やがてそれは取っ組み合いに発展し、ケイと鏡介と紅娘がそこに止めに入っていた。

09・幽霊って何ですか その21

「But、Master。これはgoodなhintかもデース」
大変だなあ、なんてことを考えていると、すすすつと、バレンシアが寄ってきて耳打ちする。

「ヒントって、なんのヒントだよ」

「Masterのideaをreadされナイウェイデース。Miss Keiハ、maybe nowこのmomentのthinkしかreceiveできナイデース」

「ああ、何も考えないってことですねえ？」

その横からクリンが口を挟んでくる。

「って、それ、なんか何処かのSF映画で聞いたことがあるんだが。」

「でも、一瞬ならともかく、ずっと何も考えないなんて無理だろ、元々脳みそつてのは、考えるためにあるんだし」

そういう意味じゃ、本能で生きている動物は、なにも考えてないから“真つ白”なのかもな、なんて事を考えていたら。

「If so、anotherな事をthinkしてbrainをfullにすればOKデース！」

バレンシアが、なんか企んでいるみたいにしたーりと笑って、脇を閉め、手を広げるような仕草をして見せた。

その両腕に挟まれ、我が家ナンバーワンの巨乳がさらに強調され、ついそこに目が行ってしまう。

「For example、like this（たとえば、こんな風に）！」

次の瞬間。突然、バレンシアが、笑みを浮かべながら、俺の右腕に抱きついてきた。

同時に、右の二の腕から、むにゅうつ、という表現がぴったりな感触が伝わってくる。

「うふふつ、そうですよねえ」

すると、今度は左の二の腕に、これまたむにゅつとした感触が。見ると、クリンが俺の左腕を、抱き抱えるようにしている。

思わず、頭の中にピンク色な妄想が湧き上がってくる。だってしょうがないだろ俺だって男なんだから。

だが、そこでふと我に帰ると、俺の目の前にケイが立っていた。しかも、いるだけではない。瞳を赤く光らせながらも、半べそになっているのだ。

「え、あ、いや」

「お兄ちゃんのスケベっ！スケコマシっ！オツパイ星人ーっ！」

そして、そんなふうに言いたいことを叫ぶと、ふえーんつと泣きながら走り去ってしまった。だってしょうがないだろ、こんな状態で何にも考えないなんて無理だ。

「ケイさん、どうしたのしょう？」

それとすれ違ったのだから、テルミが手を拭きながらこっちにやってきた。

そして。

「……………な、な、な、何やってるのしょうっ！」

バレンシアとクリンに抱きつかれたままだったので、顔を赤くしたテルミに、叱られてしまった。

09・幽霊って何ですか その22

鬱蒼とした鎮守の森が周りを取り囲む四賀茂神社の夜は非常に暗い。参道を出て200mもいけば繁華街に出るというのに、そこは訪れる者もなく、ただ参道を照らす街灯だけがぼつんぽつんと立つだけの静まり返った空間となっている。

その一角、社務所の窓には、人がいることを示すように明かりが点いている。

がたがたと、その窓が動く。そしてその窓が5cmほど開くと、その隙間から何か細長いものが中へと滑り込んでいく。

それは、青緑色をした、長い蛇だった。青大将のような姿のそれは、部屋の中に入ると、その部屋の一角にとぐるを巻く。そして、その部屋の主である黒い髪の女に向かい、鎌首をもたげると、挨拶をするようにそのままぺこりと頭を下げた。

すると、その蛇の体に変化が現れた。無数のつる草や木の枝が、まるで映像の早回しをしているかのような勢いでその蛇の体から生え始め、母体の蛇を包み込んでいったのだ。

そののみに治まらず、木の枝とつる草の塊となったそれは瞬く間に人間大に膨れ上がる。

と、そのつる草の塊が正面から割れ、中から何かが、つる草の塊を掻き分けるように出てきた。

それは、人の姿をしていた。三国志にでも出てきそうな緑青色の鎧に身を包み、腰に剣を下げたその姿は一見して武人であることが見て取れる。いわゆるポニーテールのように後ろでまとめた青い髪は癖が無く背中流され、目元は2本の小さな角が生えた仮面で隠されている。だが、その下から見える顎のラインは柔らかで、明らかに女性であることが窺い知れる。

「龍樹りゅうじゆ、ただ今戻りました」

その背中につる草の塊が消えると、その武人は目の前にいる自分の

主に跪き、頭を下げた。

「おつかれはん。呼び出して早々こき使つてしもて、かんにんな」
主と呼ばれた黒髪の女、杏寿は、柔らかな表情を浮かべてねぎらいの言葉をかける。

「いいえ、主の命に従う事こそ我らの勤めゆえ」

少しハスキーな声をした仮面の女は、かしこまったままそう答える。
「それで、どうでしたかしら？あの家を見た感想は」

そこに、主とは別の声があった。見ると、そこには燃えるように赤い着物を着崩した妙齡の女性が立っている。その髪も燃えるように赤い。

「炎雀！帰っていたのか！？」

「この炎雀、鳥目ですので夜は出歩きませんの」

「なあに言つてんだか。昨日は真つ暗になつてから帰つて来たくせによう」

その横から、法被に襷がけをした、筋肉質で背の高い、ヤマアラシを連想させるヘアスタイルの女が茶化すような口調でそう言い出す。

「な、で、ですからあれはっ、帰るのに時間がかつただけですわっ！」

「へー、鳥だから空を飛んでけば速いんじゃないのか？」

「くっ、この炎雀は、貴女のように夜行性ではありませんのよっ！
ですから暗い所は不得意なのですっ！」

「なんだとお？だあれが夜行性だつて！？」

「貴女のことですわよ、虎鉄さん。今日お休みされていたのも、明るいうちに動くのが本当はいやだったからじゃありませんの？」

「勝手なこと言っんじゃねえ！あたいは今日は、杏寿に言われて天井裏のネズミ捕りをしてたんだよ！」

「あーら、やつぱり薄暗い屋根裏にいたんじゃないやありませんの！」

そして、炎雀と虎鉄の二人は、昨日と同じように口論をはじめてしまふ。

昨日はこのまま喧嘩に発展してしまつたのだが、今日は違った。

「騒々しい！喧嘩をするなら他所でやるが良い！」

仮面の武人、龍樹が声を上げた。鋭いその声に、炎雀と虎鉄はぴたっと口論を止める。

「あーあ、おこられてやんの」

それを見ていた杏寿の横で、昨日はいなかった、10歳ぐらいの少年が舌を出しながら二人を見ている。

その少年だが、やはり少し変わった格好をしていた。杏寿よりさらに深い黒色の髪は、前半分はざんぎり頭とでも言うのかぼさぼさにしているが、後ろ半分は襟元でひとつにまとめている。まとめた先を縄のように結ったその髪は非常に長く、それを、まるでそういうデザインの服のように、細いが引き締まった裸の上半身に幾重にも巻きつけている。

そしてその髪の束の先は、少年が持っている、彼の身長とほぼ同じ長さの棒の尻に繋がっている。黒い色をした棒の反対側には、細長い舌を出した銀色の蛇の頭を模した飾りがついており、さらに舌の先端が2つに分かれ、それぞれが鋭く尖っている。身につけている衣服は黒い色の丈の短いズボンだけで、背中には背中から腰あたりまで隠れそうな大きさの、黒い亀の甲羅を背負っている。

「うーん、やつぱし相剋の関係にある火と金やからかなあ」

「そーこく？なんだよそれ」

「そうそう、相剋。陰陽五行では撃ち滅ぼして行ってまう関係のことです」

杏寿は、その子をまるで年の離れた弟をかわいがるように頭を撫でながら、優しく言葉を紡ぐ。

「こどもあつかいすんな！おいらだつてしきがみだぞー！」

「はいはい。ほな、龍樹はん。報告、してくれませす？」

そして杏寿は、むきになって叫ぶ少年の頭から手を離すと、さつき現れた緑青色の鎧の女に声をかける。

「はっ、それでは」

すると、龍樹はすつと杏寿の前までやって来てひざまづいた。

「龍樹はん、そないかしこまらんでもよろしおすえ？」

「いや、式として仕える以上、けじめは必要かと」

「ですつて。主にもため口な貴方とは大違いですわね」

「うるっせーなあ、杏寿がいろいろつってんだからいいじゃねえかよ」

「そういういい加減な気持ちだから、天井裏のネズミ捕りなどをやらされるのですわ」

「それとこれとは話が別じゃねえか！」

「そこっ！今は私が話をしておるのだぞ！少しは黙らぬか！」

また口論をはじめようとする炎雀と虎鉄に対し、龍樹がまた声を荒げる。

「ほんま、玄水げんすいはええ子どすなあ。ケンカせえへんもんなあ」

「だあつ、やめろーっ！こどもあつかいすんなーっ！あたまをなでるんじゃねーっ」

一方では杏寿が黒髪の少年 玄水というらしい をまるで親戚の子をかわいがるように満面の笑みで撫で回し、少年がそれを止めさせようとじたばたしている。

「杏寿殿っ！」

「ちゃんと聞いてます。で、どないでした？」

杏寿の返事を聞いて、やっと龍樹は自分の報告を始めることができた。

09・幽霊って何ですか その22（後書き）

えー、またお久しぶりになります。作者です。

今回を持ちまして第9部はおしまいです。

そして、例によって例のごとく、これからしばらく連載を休止します。

今回は、また新キャラが登場します。

そろそろ收拾がつかなくなりそうですが、見守っておくんなさいまし。

10. なにがお嬢様だ その1

9月23日

今日は9月23日。土曜日だが国民の祝日である秋分の日なので補講はない。

だが、それなのに俺の目の前にはうちの制服を着た男が立っている。

「なあ、本当に大丈夫か？」

「大丈夫ですつて。将仁さんこそ、ちゃんと病院行ってくださいよ。誰かなんてわざわざ言う必要はない。今日1日、俺の身代わりをする鏡介だ。」

こういう時、まるつきり任せっぱなしというのはやはり少々不安だなにしる、こいつがこれから向かうのは、あの近衛お嬢様の屋敷、言い換えれば俺を下僕にしたがつている奴の所なのだ。

まあ俺のフリすることに関しては並ぶ者がない（鏡なんだから当たり前だが）鏡介だから簡単にはボロは出さないだろうし、いざとなったら鏡ワープで逃げることになっているから大丈夫だとは思いますが、それでもやっぱり心配なものは心配だ。

「変な挑発には乗るなよ、ケガしないよう気をつけるんだぞ」

「大丈夫ですよ、バレたらごめんなさいして逃げるだけツスから」
声をかけると、鏡介はあっけらかんとそういい返して来た。全くこいつは呑気というかなんとというか、外見は俺と同じだが性格は微妙に違うんだよな。

「あうう、なんか緊張するよう」

その鏡介の手の中で、ケーターフォームになったケイが、緊張と期待の入り混じったような表情をディスプレイに映している。実はケイもそのパーティーに行くことになっている、もとい、した。行くといつても、ケイの場合はこつちとの連絡を取るための「携帯電話」
としてなので、「人の姿」になるチャンスは多分ないだろう。

「けどさあ、パーティーに制服っていうのはちよつとアレだよなあ」

「日本男児なら紋付羽織袴で行くべきだと思っただが」

「No, no, no! Miss KonoeはStatesに
long timeにstayしたデスから、タキシードtuxedoでg
oがmannerとしてgoodデース！」

その横では、置いていかれるモノたちが無茶なことを言っている。
行かれないのでひがんでいるのかもしれない。だってしょうがない
だろ、招待されたのは俺だけなんだし、大勢で押しかけてヒンシュ
クなんか買ったらお前らもどうなるか判ったもんじゃねえんだぞ。
特にバレンシアなんかはヒビキヤシデンと違って戦闘能力皆無なん
だから力づくで逃げるなんてことも出来ないわけだし。

第一、俺は紋付羽織袴もタキシードも持ってない。

「そろそろっすかねえ」

そんなやり取りを横目に、鏡介はエチケツトブラシをケイと反対側
の手に持ち、備え付けの鏡を眺めながらそんなことを口にする。

なんでも、鏡介の奴は、鏡から鏡へのテレポートができるだけでは
なく、「鏡を通して、別の鏡に映った物を見る」ことも出来るらし
い。

相手側からこっちが見えるのかはまだ調べてないらしいが、もし見
えないとしたら、絶対にはれることなく入浴シーンが覗き放題、と
いうことになる。

口に出しては言えないが、羨ましいぞこん畜生。

「鏡介さん、ケイさん。お迎えの方が、いらっしやいましたでしょ
う」

そんなこんなで時間を潰していると、テルミがそこにやって来た。時
計を見るとちょうど9時。招待状にある、迎えが来る時間ちょうど
だ。

「うつうつうつ、来ちゃったよう」

「大丈夫だって、ケイはいつもどおりの仕事をしてればいいんだか
ら」

「……うつ、うん」

緊張しているケイに一声かけ、そして閉じさせる。

「じゃ、行ってきます」

ケイをポケットに入れた鏡介が、部屋から出る時にもう一度振り向き、敬礼をしてきた。

「ん、気をつけてな」

俺はそれに敬礼で返す。別にそんなに深い意味はない。うちは軍隊じゃないんだが、シデンが俺を「上官」と呼ぶせいか時々ふざけ半分でこういうことをする。。

「じゃ、あたしらも見送ってくるわ」

そして、他のモノたちもそろそろと俺の部屋から出て行き、俺一人が取り残される。

本当は俺も見送りたいのだが、俺が姿を現したら鏡介の言う「影武者」のことがばれてしまいそうなので、部屋で待つことにした。

「あいつ、大丈夫だろうな」

ぼんやりしていると、まだ少し腫れている左の頬がずきんずきんと痛みだした。

10・なにがお嬢様だ その1（後書き）

どうも、お久しぶりです。作者です。

第10話を始めます。

今回は、休日ということで委員長やシンイチやヤジローは出てきません。

ヤジローあたりは勝手に来そうな気もしなくもないのですが、そのへんはモノたちが上手くあしらったと思ってください。

拙い文章ですが、楽しんでいただければ幸いです。

それでは、ご意見感想ご指摘などありましたら遠慮なくお願いします。

10. なにがお嬢様だ その2

「ふう」

病院から帰った俺は、部屋に戻るとそのままベッドの上に寝転がった。

全治1週間の打撲、それが診察の結果だった。骨にひびが入るとかあるかなーと心配したんだが全くの杞憂だった。俺の骨は予想以上に頑丈だったらしい。

ま、全治1週間と言ってもそれはアザが消えるまでで、痛みは今日明日ぐらいには引くだろうとのこと。左の頬を触ってみると、腫れ用のシップの感触があるが、これも明日には取れるはずだ。腫れた顔で学校に行かなくて済むのは幸いだった。

ベッドの上からぼーっと天井を見上げていると、俺の身代わりとしてお嬢のところへ行った鏡介と、それに同行したケイのことが思い浮かんだ。

近衛の屋敷って、どんなのなんだろうか。実物を見たわけではないからなんとも言えないが、まあ資産家の家だから無意味にでかいんだろうな。

そういえば、西園寺の家ってどのぐらいの規模なんだろう。やっぱり無意味にでかいのかな。それとも、意外とこじんまりしているのかな。

「Master」

そんなどうでもいいことを妄想していると、部屋のドアがノックされ、そんな声が聞こえてきた。

「ん、バレンシアか、どした？」

よっこいしょと、微妙に痛みが残る体を起こす。はて、今日は仕事はいいんだろうか。

「A little bit用があるデース。Enterしてもno problemデスかー？」

「ん、ああ、鍵なら開いてるから、好きに入っつていいぜ」

「Then、オジヤマシマース」

がちゃ、とドアを開けて金髪巨乳のメガネっ子が入ってくる。

そして、寄りかかるようにしてドアを閉めた彼女は、何のためらいも無く俺の横に腰掛けた。ちよつとどきつとする。

「Master・ミーはMasterにpresentがあるデース！」

腰かけて開口一番、バレンシアはそんなことを言い出した。

「Here you are！」

そして、ハンドボールぐらいの大きさの、ぱつと見スポンジかなにかでできた白い塊を差し出して来た。スポーツ選手とかが握力のリハビリとかで使うボールかと思ったが、よく見ると、なぜかその一部にちよこんと小指の先ぐらいの突起がついている。

それは、すべすべというかささらとした手触りの白いスポンジみたいなものが出ていた。

「……なんだこれ？」

受け取りつつ、聞き返してみる。だつてしょうがないだろう、微妙に卑猥なものを連想しちゃったんだから。

「This is ミーのinvent（発明）したspecial item、名づけて“ベンテンボール”デース！」

その言葉を聞いて、ふと数日前に鏡介の腕に取り付けられた、一昔のSF映画に出てきたロボットみたいなアレを思い出す。だがこれは、見たところ電線も基盤も見当たらないし、それどころかメカメカしい雰囲気も無い。

「これハ、MasterがMiss Keiにthinkをreadされるのをguardするitemデース。Please grasp it。」

grasp、握れつてことか。言われたようにその奇妙な物体を手にとつて握つてみる。

スポンジのように柔らかいが、水風船のような反発もあり、なんか

いい感触だ。今はやりの、低反発素材つてやつかとも思ったがあれよりも柔らかい。

だが、これがケイのテレパシーを防ぐのにどう役立つんだろう。マンガとかだとヘルメットみたいに被るやつが出てくるが、これは被るにはあまりにも小さいし、そもそもそういう形になっていない。

「Miss Kei八、nowにthinkした事しかreceiveできナイデース。So、readされたとsenseしたら、anotherなコトをthinkすればgoodデース。And、このベンテンボールは、そのanotherなthinkをhelpするのデース」

俺が何度かその物体をにぎにぎしていると、バレンシアが少し顔を赤らめながら、説明をはじめ。って、なんか顔が近い。

「Next stepがimportantなのデース、Master」
「へ?」

俺の目の前でバレンシアが微笑んで見せる。そして、空いていた俺の手を取る。

「Here you are」
そして、何を思ったのか、その手を自分の胸に持っていったのだ。思わず握ってしまった指が、やんわりした抵抗と共に我が家ナンバードワンの巨乳にめり込んでいく。そしてバレンシアは嫌がる素振りすら見せない。

「ぶっ!?!」
「Do you understand? ベンテンボールは、ミーのbreastとsame size、same shape、same feelingなのデース」

一瞬で頭に血が上る。こいつ、こんな朝っぱらから色仕掛けか!?

「Masterが、ミーのbreastのtouch(感触)をremember(記憶)して、ベンテンボールをgraspすれば、Masterはミーのbreastでbrainがfullになッ

テ、thinkがcannot readになるデース。だから
Master、もつとrub（揉む）しても、no problem
mデースよー？」

そのバレンシアは、説明しつつも俺の手を自分の胸に引き付けてめ
り込ませ、頬を染めながら、俺のほうに迫ってくる。

うをををつ、やばい、やばいぞつ、俺の下半身がバリバリに反応し
ているツ！コラ、俺、理性を保てつ、相手はノートパソコンだぞつ、
精密機械だぞつ、クリンと違って、壊れるんだぞつ！やっちゃった
ら、壊れる……かどうかわからないけど、とにかくヤバいん
だぞつ！

必死になって理性を保とうとするが、手は俺の意思をよそに勝手に
バレンシアの胸を揉んでいる。これがまた、服の上からだつてのに、
すぐくやわらかいんだ。

「Nmm、Master、youつて、hylum、unexpectedly（意外）に、technicianデスう」

そしてバレンシアのほうも相変わらず全然嫌がらない、それどころ
か妙に幸せそうな顔してこつちを見てくるもんだから余計にヤバイ。
ああ、もういいかも。シンイチの奴だつてこの夏にグッバイチェリ
ーボーイしたんだ、俺だつていいじゃないか。バレンシアだつて明
らかに誘っているんだ。

だが、俺が次の段階へ進もうとしたときだ。

「バレンシ、うわあああ！？」

突然、俺の耳の穴に何か柔らかいものが入り込み、同時に俺のわき
腹を何かがつついてきたのだ。

10. なにお嬢様だ その3

全くの予想外な攻撃に思わず飛びのいてしまい、俺はベッドからずり落ちた。それだけならまだしも、まだ腫れが引いていない左頬をベッドの角にぶつけてしまったもんだからたまらない。

「ぐおおおおおおおっ！」

生命の危機すら感じる激痛に俺は床を転げ回る。

「M、Master!？」

「どうしたんですかあ!？」

そこにかげられる、2人ぶんの女の子の声。

少し痛みが引いてきたところで、一旦は腫れが引いてきた左頬をpushさえつつ顔を上げる。

「Are you all right?」

「また、腫れちゃったんですかあ?」

そこには、金髪メガネの巨乳娘と、銀髪（白い髪だとおばあちゃんみたいなのでこう言うことにした）メイド服の巨乳娘が、共に心配そうな表情で俺を覗き込んでいた。

「……クリン、お前なんでここにいるんだ」

痛みをこらえながらメイドのほうに声をかける。

バレンシアの乳を揉むのに夢中だったせいかもしれないが、入ってきたのに全然気がつかなかったし、音も聞こえなかった。

「あう、お体のキズやアザを、落として差し上げようと思ひましてえ」

腫れたのがあ、なんとかかなりそうだって聞きましたのでえ、とクリンはそう続ける。そういや、キズとかアザとかならなんとかできるかも、とか言ってたっけな。

「But、doorはcloseしていたハズデース」

「はい、鍵が掛かっていましたのでえ、ドアの隙間からあ、入らせてもらいましたあ。そうしたらあ、将仁さんがあ、バレンシ

アさんとお、そのお、なにかしてらしたのでえ」

ちよっかいを出した、というわけか。しかしそれならそうと声をかけてくれてもよさそうなもんだが。

「でもお、将仁さん、ひどいですっ」

一人で納得していると、いきなりクリンが、上目遣いでそんなことを言ってきた。

「私を差し置いてえ、バレンシアさんにちよっかいをかけるなんてえ」

「………は？」

「胸が揉みたいのでしたらあ、私に言ってくればいいのですのにいちよつと待て、なんでそうなる。」

「だあってえ、将仁さんとはあ、全身くまなく肌を合わせ合った仲間じゃないですかあ」

そう言いつつ、妙に色っぽい目をしたクリンが俺の首に手を回してくる。

「そりゃ、お前は元々浴用のスポンジなんだからそうなんだろうってこら顔が近うわっ」

ちよつとあせりながらそんなことを言っていると、いきなりねつとりしてあったかいなにかが俺の顔の左を下から上へとねぶっていった。クリンの長い舌が、俺の顔を舐めていったのだ。

「まひゃひとひゃあゝん、ろうれふかあ？ひもひいいれふかあ？」

「わ、うわ、あわ、わわ」

しかも、舐めるだけではなく体まで密着させてくるのだ。ふんわりとしたなんか柔らかい感触が左の腕越しに伝わってきて、その、頬が自然と緩んでしまう。

「Hey, Master! Youはミーとのphysical

スキンシップ

contactをtakeしているのデース! Please show

me (私を見て) デース!

その一方で、さっきまで自分の胸を俺に掴ませていたバレンシアが、負けじと俺の右腕を抱きかかえてくる。こっちは、サイズで上回り、

くわえて適度な反発力があり、その……いいもんだ。

鏡介、ゴメン。お前に苦勞かけている間、俺はこんな幸せなシチュエーションを満喫しちゃってる。ケイ、こんなお兄ちゃんを許してくれ。

鼻血が出そうなのこの状況を満喫していると、不意にバレンシアの予想外な台詞が耳に入ってきた。

「OK. I see Miss Chrin. Youはyour breastでMaster's interest（関心）をcatchしタイデースねー?」

な、なんだ?と思つてそつちを見ると、そのバレンシアのメガネが一瞬きらりと光つたような気がした。こいつ、なんかやる気か?と思つた直後。

「ひゃあああ?!?」

クリンが変な声を上げた。

見ると、バレンシアの右手が、なぜかクリンの胸に伸びており、のみならずそれをもんずと握っていたのだ。

「らっ、なっ、何するんですかあつ」

舌を引つ込めつつ、クリンがその手を振り払うと逃げるように後ずさる。

「ミーがyouのベンテンボールをmakeするデース!それにハmany many dataが必要デース!」

一方、バレンシアのほうはなんか目が据わっている。その目のぎらつき方は怒っているようでもあり、実験したくてうずうずしているようでもあり、いろんな意味でちよつと怖い。

「You大人しくresearch（調査）されるデース!」

そして再びクリンの胸に手を伸ばし、むぎゅつと驚掴みにする。

「ひゃあああああつ?!?」

「Don't escapeデース!Hate（痛い）なコトはnot doデース、ダカラ大人しくresearchされるデース!」

クリンは当然ながら逃げようとする。結果として俺から手を離れたのだが、今度のバレンシアの手からは逃れられなかった。同じように俺から手を離れたバレンシアが、空いた左手でもクリンの胸をむんずと掴んでいたからだ。

クリンはそのまま仰向けに倒れる。その上にバレンシアがマウントポジションで乗っているので、クリンがバレンシアに押し倒されたような感じだ。しかもバレンシアの手は相変わらずクリンの胸を掴んでおり、のみならず何やらわきわきと指を動かしている。

なんかレズもののエロDVDにでも出てきそうな光景に、俺の下半身は思わず反応してしまう。

「Hmm、ミーのbreastよりa little bits
of tidesネー。Formハ……」

「ひゃっ、ふえええ、ま、将仁さあん、た、助けてくださあいいい」

マウントポジションのままいいようにされ、クリンは顔を赤くしつつ涙目でこっちに懇願してくる。

正直、助けたくなる、というより股間のICBMを以って襲いたくなる光景だが、実は襲い方がよく判らん。一応、まだ17歳だし。というわけで、俺が取った選択肢は。

「邪魔みただから退散するわ」

クリンを見捨てて、部屋を後にすることだった。

10・なにがお嬢様だ その4

「つてて……」

部屋を出たはいいが、さつきベッドの角にぶつけた左頬がジンジンと痛くなってくる。湿布が効いていないような感じた。

もう一度冷やしたほうがよさそうだ。そう思った俺は、そんな冷たいものを管理している奴のところへ向かうことにした。

1階に降りて、キッチンを覗き込む。

案の定、お目当てのレイカはそこにいた。テーブルの横にある椅子に腰掛け、自分で準備したのであるうお茶を一人ですすっている。

なんか、その姿が妙におばあちゃんじみている、すごく寂しそうに見える。

「あら、将仁くんじゃない」

俺に気付いたレイカは、顔を上げてこつちを見た。その表情はいつもどおりで、寂しそうな感じはすでない。

「……なんか、あったのか？」

「どうしたの、突然？私は特に何もなければ」

いつものクールで凜としたレイカとあまりに様子が違うので、少し心配になってそう声をかけたら、平然と返されてしまった。

「あ、その、なんか妙に寂しそうに見えたもんだからさ」

「あら、そんなふうに見えてしまったかしら？一人のときはいつもこんな感じだけね」

それはそうと。そう言うてから、今度はレイカがこつちに話しかけてくる。

「将仁くんもほら、立ってないで座りなさい。今、お茶を入れるから」

そして、自分の隣の開いている席を勧めると、レイカ本人は急須を手にした。

「いや、いいよそのぐらい自分でやるから」

「人の好意は素直に受けておくものよ。いいから、座ってなさい」
そういい切られ、俺は椅子に座ったまま、レイカがお茶を入れるのを眺めることになった。

茶色い急須からこぼこぼと緑茶が注がれ、そして湯気が立つ湯呑みが差し出される。

「それで、将仁くん。何か用かしら？」

「ん？」

そのお茶をずずすとすすり、俺もちよっとおじいちゃん気分を味わっていると、横に座ったレイカが話しかけてきた。

「お茶をしにきた、って訳ではないのでしょ？小腹でもすいたのかしら？」

「はは、ヒビキよりは燃費はいいつもりなんだけどな」

ヒビキが聞いたら怒るかもしれない台詞を返してから、俺はさつき2階であつた事を話した。

「で、また痛くなってきたから、何か冷やす物を貰おうかと思ってさ」

「そう。あの二人にも困つたものね」

「全くだよ、おかげでまた腫れちゃってさ、ははは」

そして俺は、いつもより微妙に積極的なレイカと日本茶を飲みながら、そんな他愛もない話をしばらくした。これが本当の茶飲み話、なんてな。

「ところで、将仁くん。打撲による腫れは、冷やすだけでは駄目だということは、知っているかしら？」

俺が最後の一口を口に含んだとき、レイカがそう切り出してきた。

「んっ、んっ、確かあとは、患部は心臓より高いところへ持つていって安静にして、包帯とか巻いて圧迫するんだよな」

一般にRICEと言われる、捻挫とかの基本的な応急処置のことだ。俺もアスリートの端くれ、そのぐらい知っている。

「そうね。それから、打ち身や捻挫は生肉で湿布をすると早く良くなるというの、は知っているかしら？」

「ん、ああ、まあな、プロスポーツの世界だとやっているらしいけど」

しかも不思議なことに、湿布薬なんかを使うよりもサクツと治ってしまうらしい。理屈は俺もよく判らんが、そんなもん貼り付けたらベタベタギトギトして気持ち悪そうなんだが。

しかし、なんでレイカはそんな話をしているんだろう。まさか俺の顔に生肉を貼り付けようとか考えているんじゃないだろうな。

そんな勘繰りの目を向けるが、その目がある一点に釘付けになってしまった。

なんでって、そりゃ。レイカが、胸元を大きく開いていたんだから、無理もないだろ。見えるんだぞ、真っ白な胸の谷間が、その左右にある膨らみの形が。

残念ながらトップまでは見えなかったが、せつかく収まっていた俺の下半身がまた起立してしまう。しかもレイカは、我が家でナンバ―3の巨乳と、さっきの2人にはない大人の色気があるのだ。

頭にも血が上ってきて、腫れた左頬が余計に痛みはじめた、そのときだ。

「というわけで、冷やしてあげるわね」

という声と共に、視界が真っ暗になり、そして顔が何か柔らかいものに包まれた。

10・なにがお嬢様だ その5

「むぶっ!?!?!」

「合理的だと思わない? こうすれば冷やすだけじゃなくて圧迫もできるものね。しかも生肉だし」

つまり、レイカに抱きすくめられ、その胸に俺の頭が挟み込まれているのだ。

レイカの肌は確かに冷たく、熱を帯びた患部を冷やすのに適している。人肌にしては冷たすぎるんだが、元冷蔵庫だし、懐からアジの開きや生ハムなんかを取り出すのを見たことがあるからなんとなく納得することにする。そして、抱きすくめることで患部への圧迫も確かにされている。

「どう、気持ちいいでしょ?」

レイカは嫌がる様子はないし、正直、胸の谷間に挟まれるのは男の夢でありロマンでもある、と誰か言っていたし、俺も男なので嬉しくない訳がない。

だが、これは絶対に安静にはなれない。胸に頭をめり込ませるのは以前バレンシアにしてもらったことがあるが、あまりに刺激が強すぎる。

それに、刺激以上に大変なことがある。

「んーっ、んーっーっーっ!」

息が、完全に出来ないのだ。この前やられたバレンシアの場合は衣服の上からだったから、まだ繊維の隙間とかがあった。それに対し今回、俺の顔が触れているのはレイカの素肌。完全に鼻も口も塞がれてしまっているのだ。加えてレイカの肌はきめが細かいもんだから、むこうから吸い付いてくる。

って待てよ、これって、凍ったものに手とかを当てると、くっついてしまうアレと同じじゃないのか?

「んぐ、んむぐーっ」

男のロマンより自分の命を選んだ俺は、そのことを伝えようとしたばたと手を動かす。

「ふふ、遠慮はいらないわ。将仁くんのためだもの」

だが、レイカはそれをいい方に勝手に解釈し、さらに強く抱きしめてきた。なんか、こっちの危機を感じ取ってくれないところまでバレンシアに似てるぞ、ってそういうことじゃない。

ヤバイ、さっきまでピンク色だった頭の中がだんだん霞んできた。その時だ。

突然、俺の頭を包み込み、そして俺を窒息させようとしていた物の感触が消えた。

訳がわからないまま、俺はそのまま後ろに腰を落とす。なんか、瞬間移動でもしたかのような感じた。一体何があったのだろう。

「た、たすかった……」

命があることにほっとしたところで、ふと顔をあげる。

すると、胸元で腕を交差させ、珍しく目をぱちくりさせたレイカと目があった。

むこうも、何があったのか判らないといった様子だ。

「こんなところで、何をしているのですか？」

そこにまた別の声が聞こえる。

「と、常盤さん!？」

いつのまにか、俺たちの横に、片手を腰に当て、仁王立ちする常盤さんがいた。微妙に呆れ顔をしている。

「なんだか騒がしい、と思ったら」

「み、見てたんですか?!？」

「あんなに騒いでいたら聞こえてきますよ」

そして、腰に当てていない手に持った湯呑みを顔の近くに持つてくと、なぜかちよつと顔を顰めた。確かあれは、レイカが飲んでいたやつだよな。

「ちよつと、レイカさん。これ、お酒じゃないですか!」

つて、え!?酒!??

「あはは、ばれました?」

「ばれました?じゃありません。全く、まだお昼前じゃないですか、一体どうしたんです!??」

「それは、将仁くんが一日家にいるから、楽しくなっちゃってしまっただけね?」

「ね、じゃありません」

「どうやらレイカの奴、こんな朝っぱらから酔っ払っているようだ。思い出してみれば、この前の飲みるとき、レイカは同じように胸元をはだけて頭をナデナデしながら俺に抱きついてきたな、甘えさせ上戸(そんな表現があるかどうかは知らん)というか、そういう酒癖らしい。」

「じゃ、バレちゃったから、将仁くん。一緒に飲みましょ」
「そんなことを考えている前で、開き直ったキッチンドラムカー・レイカはさらに暴走を始める。頬がほんのり赤くなって、いつもは見せないにこやかな笑顔を浮かべているのは、見ているぶんにはいいが、言っていることがなんかおかしいので対処に困る。」

「レイカさん、そうじゃないでしょう。本当に、大丈夫ですか?」
「酔っ払ったレイカを見たのが初めてなためか、さすがの常盤さんも戸惑っている。(みんな酔態をさらしていたときは、外を見て泣いてて他の人を見ていなかった)」

「んんっ」

「はい、どうぞ」

「痰でも絡んだんだろうか。常盤さんが咳払いをする。するとすかさずレイカが湯呑みを差し出す。なんか飲み屋のママみたいだ。」

「……ん?今、常盤さんに差し出した湯呑みって、さっきレイカが使っていたやつじゃないか?」

「あ、ありがとう」

「当の常盤さんは、それに気付く様子もなく、素直に受け取ると、一気にその中身を飲み干してしまった。」

「おい、レイカ、これって、酒……」

「男の子なんだから、そんなこと気にしないのっ」

気にしないのっ、って言われても、そんなの無理だ。だって。

「……………うっっ……………」

ほら。ちよっと早すぎるような気もするが。

そっちを見ると案の定、湯飲みを片手で持ちながら、空いた手で眼鏡を押し上げ、目元を指でぬぐっている常盤さんがいた。

スイッチが入っちゃったようだ。レイカの飲みかけだからろくに入ってないと思うんだが、それでスイッチが入るなんてどんだけ酒に弱いんだ、常盤さんは。

「うっっ、ぐすっ、わ、私だってえ、ぐすっ、こんな、こんなこと、言いたく、ないんですよおっ、でも、ぐすっ、静香様との、約束だと思っ、ぐすっ」

そうしている間にも、常盤さんの泣き度合いはエスカレートしていく。どうするんだよコレ。

「あらあら、どうしたの？」

それをどうにかしたのは、意外にももう一人の酔っ払い、レイカだった。レイカは、まるで保母さんのように優しい口調で常盤さんに話しかけている。それに対し、常盤さんはレイカに向かって、涙声で、時に鼻をすすりながら、切々と何かを話し、レイカはそれに頷いたり相槌を打ったりしている。

さすが甘えさせ上戸というか、素面ではありえない構図に、俺の頭の回路がしばらく停まってしまっ。

「そう、本当に大変だったのね」

思考回路が復帰したところで最初に耳に入っしたのは、素面だったら絶対言いそうにない、レイカのそんな優しい言葉だった。

「判ったわ。胸を貸してあげるから、思い切り、泣きなさい」

話がどうなっているのか判らないのでぼかんとしていると、常盤さんは素直にレイカの胸元にしがみついて。

「うわああああああああああああああん！」
本気で泣き出してしまった。

レイカは、それを嫌がる様子も無く、それどころか子供をあやすように常盤さんを抱きしめ、ぽんぽんと背中を叩いている。

どうしようかと考えを巡らせたが、ろくなものが浮かばない。

やがて、「自分自身がここにいること自体が邪魔なのでは？」と思うに至り、俺は二人を残したまま、そつと台所を後にしたのだった。

10・なにがお嬢様だ その6

台所を後にしたが、自分の部屋に戻るわけにもいかないの、と
あえずリビングに出た。

「あら、将仁さん。こんにちは」

そこには、掃除機をかける黒マントのメイド、テルミがいた。律儀にも掃除機を止めてこっちに頭を下げてくる。

「よう、ご苦労様。毎日、大変だよな」

本当に大変だよな、炊事はできるのが2人いるけど、それ以外の家事はテルミ以外まともに出来る奴がいないからなあ。手伝いだっただけでいいけど。

そうだ、どうせ暇だし、部屋に戻るのも色々問題ありそうだし、掃除の手伝いでもしようか。

「なあテルミ、掃除、手伝おうか？」

いきなりやるのもあれだと思つので、一言テルミに断っておくことにする。

だが、掃除機に手を伸ばすと、テルミははっとなってそれを後ろへと退ける。はて、俺、なんか気に触ることもしたか？

「俺、何かしたか？」

「え、あ、いや、その……でしよう」

テルミにしては妙に歯切れの悪い返事だが、ひとつ咳払いをすると姿勢を正してこう続けた。

「これは我が家の、私の役目でしょう。他の人に任せるわけには、いかないのでしょう」

「でも、一人じゃ大変だろ？」

「で、でも今日はもう終わつたでしょう、将仁さんも本調子ではないのでしょう、ゆっくりやすんで欲しいのでしょう」

というわけでリビングの席に座らされると、テルミ本人は掃除機を片付けはじめた。

「……………将仁さんに触らせては、ダメでしょう、また擬人が出てしまうでしょう……………」

独り言のつもりなんだろうか、声はしっかり聞こえてきた。一応、何やったら出てくるか、当たりはついていてから不注意に擬人化させることはないと思うが、ここは黙っておくことにする。

そして、リビングの席に座ってぼーっとしている(だってテレビごとテルミは席を外しているし、何か飲み物をもっともそういうのは冷蔵庫ことレイカが管理しているし、かといって自分の部屋に戻るのもアレだしで、できることがない)と、黒いマントを翻し、黒ぶちメガネのメイドさんがリビングに駆け込んできた。

何かあったのかな、まさか台所の連中に飲まされて、酒乱モードになったんじゃないだろうな。

と思ったが、テルミは部屋に入ると、マントを正して、大人しく俺の近くのイスに腰掛けた。うん、大人しいということは素面らしい。「将仁さん、ちょっと相談したいことがあるのでしよう。よろしいでしょうか?」

そう言うテルミの手には、アンケートを書く時に使うようなクリップボードが準備されている。

「ん、別にいいけど、何が聞きたいんだ?」

「はい、将仁さんの呼び方についてでしよう」

「……………は?」

「いくつか候補を選んだので、選んで欲しいのでしよう」
「なんだ、そりゃ?俺の名前は将仁だから、それ以外ないと思うんだが。」

「あのさ、俺は別に、今までの呼ばれ方で不満はないんだけど」

「それでは示しがつかないでしよう。将仁さんは私の主なのですから、ふさわしい呼び方があるのでしよう」

「そういわれてもなあ」

「だめです。では始めましょう」

俺が反論することも許さず、テルミは話を進め始めた。

「まずは、旦那様。いかがでしょう、旦那様」
いきなりな言葉に、俺は噴き出しそうになる。

「旦那つて、俺はそんな年じゃねえぞ」
正直、言われて悪い気はしないんだが、なんか老けたような気がして素直に認められない。

「では、これはボツでしょう」
すると、テルミは手に持ったクリップボードに何かを書き込んだ。どうやら、そのクリップボードに、「候補」とやらが書いてあるらしい。

「ええと、将仁様は、どうでしょう？」

「いや、悪くはないんだけど、なんか妙にへりくだっているようで嫌だな」

「マスターは？」

「そりゃバレンシアだろ」

「お館様」

「俺はどこぞの戦国武将かって」

と、こんな感じでいくつか候補が読み上げられたが、これがまた「よくこんな探し出した」と思うほど、俺を偉い奴として扱う言葉なのだ。

「ご主人様、は、いかがでしょう？」

中でもこう言われたときは、正直、ぐらつと来てしまった。この前ヤジローに「ご主人様なんて呼ばれているんじゃねえの？」と言われ、その時はバカじゃねーのと思ったが、メイド服を着たテルミに直接言われると、確かに気分がよくなってしまったのだ。

「じゃあ、これもダメでしょう・・・うーん、困ったのでしよう、候補がすべてボツになってしまったのでしよう」

だが、そのクリップボードの下のほうに何かを書き込んだ後、テルミはため息をついてからそんなことを言った。

「別にいいじゃないか、今のままで」

「良くないでしょうっ！だって私は将仁さんの物でしょう、それ

なりの接し方があるのでしょうっ！」
「正直な気持ちを口にしたら、テルミは強い口調で、変なことを言い出した。」

10・なにがお嬢様だ その7

「だって、私は、元々家財道具でしょう、だから持ち主の将仁さんには、道具として使ってもらわないといけないでしょう」

「ちよつと待て」

その様子が、テルミが必死に「道具」になろうとしているような気がして、俺は彼女の両肩に手を置いて発言を止めさせる。

「テルミ、いいか。確かにお前は元々プラズマテレビだし、今だつてそつだ。俺だって、お前がテレビだつてことは忘れてない」

けどな。そこで俺は言葉を一旦切り、テルミをじつと見据える。

目があったところで、俺はテルミに向かって、言い聞かせるように言葉を続けた。

「今は、テルミのことを道具だとは思っていないぞ」

「・・・・・・だから、でしょう」

だが、そこでぼそつと言われた言葉に、俺はちよつとどきつとした。「私、最近、シデンさんの気持ちが悪しただけ判ってきたでしょう。将仁さん、私がこの姿になってから、私に向き合ってくれる時間が、少なくなつたのでしょつ」

言われて、気がついた。確かに、先週あたりからテレビを見る回数が減っている。一人暮らしのときは特に見るわけでもないのにBGMのつもりでテレビを点けていたし、それに、その、自家発電の時にもお世話になつたし。

「だから、私・・・・・・」

でも、俺は、今の「テルミ」のほうがずつといい。確かに不満、特に性的欲求が解消されにくいということはあるが、人間、性欲だけで生きているわけではないし、それに、大人数で生活するようになってから、寂しいと思うことが無くなつたのだから。

こういうときはスキンシップが大事だ、というのをどっかの本で読んだことがあつたので、それを実践することにした。

「きゃ!？」

スケベ心を押さえ込み、俺は、テルミを抱きすくめた。意外なことに、テルミは抵抗しなかった。

「ごめんな、テルミ。そんなつもりはなかったんだ。テルミは、常盤さんとかと別の意味でできる女だから、大丈夫だって思っちゃったから」

「……………」

「でもさ、俺が今の生活を送れているのは、道具じゃないテルミがいるおかげでもあるからさ。だから、道具になりたいなんて言わないでくれよ」

テルミは、俺に抱きしめられたまま黙っている。

「……………早く、なんでもいいから反応してくれ。自分で言った台詞を思い返して凄く恥ずかしくなったのと、テルミと抱き合っているこの光景を他の連中に見られたらどうしようという気持ちで、今の俺は、正直いたたまれなくなっていた。

自分の心臓が、やばいぐらいにドキドキしているのを感じる。

「……………将仁さんは、ずるいのでしょうか」

やがて、テルミが小さく声を上げた。

「そんなことを言われたら、道具として使われたいなんて、言えなくなってしまうでしょう」

「言わなくていいんだよ。だいたい、道具だったら、俺に言いたいことも言えなくなるだろ?」

「ふふっ、それもそうでしょう」

そして、テルミはやつと笑顔を浮かべて俺を見てくれた。

「まあ、コミュニケーションが少なくなったのは俺のせいでもあるからさ。何か、してほしいことがあったら、遠慮なく言ってくれよ」

「えっ、でも、それは」

「俺が持ち主だからってのは、なしだぜ。俺はケイと違って、頭の中は読めないから、言いたいことは言ってくれないと俺が困る」

「……………ふふっ、こんな世話の焼ける主に所有されるなんて」

「はは、世話になります」

「全く、仕方がないのでしょう。じゃあ、これからは、私とは特別なコミュニケーションをとってもらうことにするのでしょう」

「……あれ？なんか変なほうに話が行っている？」

そう思う俺の目の前で、テルミはさっきテーブルに置いたクリップボードを再び手にした。

「将仁さんのこと、これからは何とお呼びしたらよいでしょうか？」

「……ちよっと待て、そこからか。」

なんか、無限ループにはまったような気がして、ちよっとげんなりしてしまった。

10・なにがお嬢様だ その8

ききーっ。

乗り心地は最高に良いが、精神的に落ち着かない真っ白なロールスロイスに揺られること1時間ほど。ロールスロイスは、城壁のような塀に作られた、外国の映画にでて来そうな重厚な門の前に停車した。

「着いたんですか？」

執事服に身を包んだ、若いようにも老けているようにも見える運転手に声をかける。

「あと5分ほどです」

運転手は、そっけなくそれだけ答えた。
「がちゃん。」

運転手が答えるとはほぼ同時に、門のほうから重々しい金属音が響いてくる。窓から首を出してみると、閉ざされていたその門が、唸りを上げながらゆっくりと開いていくところだった。

その門をくぐったロールスロイスは、日本と思えないほど広い庭を走り、見事な噴水を右回りに通り過ぎると、大理石のような白い石で造られた、まるで城か国会議事堂のような建造物の前で停車した。
「どうぞ」

運転手さんがドアを開けて、中へと案内してくれる。

「………うわぁ………」

そして、中も凄かった。入り口のホールは天井から豪華なシャンデリアが下がり、真っ白な壁にはきらびやかな装飾がされ、床には靴で上がってはいけないような絨毯が敷かれている。

はつきり言つて、今まで住んでいたトコロとは別世界だ。
ポケットの中で携帯が震える。

取り出して開くと、ケイちゃんの顔が満面に映っている。

「うわぁ、すごいーい！」

ケイちゃんは、その状態で「あつち見せて」「今度はこっち」と指示を出す。そして、レンズをそっちに向けると同時に、カシャッというシャッター音をさせる。

「すっごくおっきいのー！映画のセットみたーい！」
それは否定しない。ただ、あまりはしゃぎすぎると、色々危険だと思う。

「あら、楽しそうですね」

その時、女の声がした。その瞬間、シャッター音がぴたりと止まる。見ると、今いる玄関ホール真正面にある、舞台のセットのような階段を、まだ昼前だというのにハリウッド女優が着るようなドレスに身を包んだ、金髪巻き毛で彫の深い顔をした女が下りてくるころだった。

「うん、あの人が、近衛さんだよ」

念のため、ケイちゃんをあたかも普通の携帯電話のように耳元に持って行き、聞いてみると、そんな答えが帰って来た。

あれが、将仁さんの言っていたお嬢様、近衛クローディアのようだ。「じゃあ、目いっぱい堪能したから、ケイは大人しく電話してるから。鏡介お兄ちゃん、がんばってね」

「ああ、やってみる」

ケイちゃんが最後にそう言葉をかけてくる。そうだ。俺は将仁さんの影武者としてここへ来たのだ。失敗は許されない。

ケイちゃんをたたんでポケットに収めると、俺は近衛さんのほうを向いた。

「あら、制服なんかで来ましたの？」

その女、近衛クローディアは、俺を頭のとっぺんからつま先まで舐めるように見てから、いかにも呆れたようにそう言った。

「昨日の今日だったもんでね、ちゃんとコーディネートする時間になかったんだ」

「華族の一員ともあるうものが、礼服のひとつも持ってらっしゃらないと仰るのかしら」

「生憎、俺は真田将仁であって、まだ西園寺将仁じゃない。金持ちの思考回路で判断しないでもらおうか」

高飛車な物言いにカチンとしつつも、俺は将仁さんが言いそうな言葉を選んでお嬢様の言うことに答える。

将仁さん、毎日こんな女につきあっているのか。俺もうちにいる時はモノたちの相手をするからそれなりに大変だけど、こいつは性格が悪そうだから苦労はそれ以上かもしれない。

でも、ま、なんとかなるだろ。相手は人間だ。いざとなれば逃げればいいんだ。

「まあ、今日のところは許して差し上げますわ」

そのうち興味がなくなっただお嬢様は、すいっと顔を横に向けると、そこにいた人に声をかけた。

「セバスチャン、彼を控え室に案内して差し上げて」

セバスチャンと呼ばれたのは、さっきまで白いロールスロイスの運転手をしていた男の人だった。……どう見ても日本人、少なくともアジア系なただけど。

「ご案内します。どうぞ、こちらへ」

そのセバスチャンさんは、眉ひとつ動かさず、そうやって俺の前を歩き出した。

10・なにがお嬢様だ その8（後書き）

どうも、作者です。

今回からしばらくの間、主人公が“将仁”から“鏡介”に変わっています。

判りにくく感じるところもあるかも知れませんが、なにとぞお付き合ってくださいませ。

10・なにがお嬢様だ その9

「おい」

セバスチャンさんの後について、豪奢で落ち着かない廊下を歩いていると、不意に男から声をかけられた。

振り向くと、年のころは将仁さんとそんなに変わらない、だが近寄りがない雰囲気を持っている男が立っていた。屋敷のほかの人と違い、上下ともゆったりしたトレーナーを着ている。

ゆうべ覚えたことを思い返すと、思い当たるのが一人いた。

「寛？」

たしか、こいつの名前は「寛 迅」、近衛クローディアにボディガードとして雇われているんだっけ。しかし同じ家に住んでいるとは意外だ。

と、その寛が、なぜか俺にずんずん近づいてくる。

そして、俺の腕を掴むなりこう言った。

「根津、俺はこいつに話すことがある。少し時間を取らせて欲しい」
「一体、何事だろう。将仁さんは彼とはトラブルを起こしていないと思っただけだ。」

「3分だな。それ以上は駄目だ」

「判った」

セバスチャンさんの答えを聞いた直後、寛は俺のことを引っ張りセバスチャンさんから引き離す。

「正直に答える。そうすれば危害は加えない」

「一体なんなんだと聞こうと思ったときには、俺の喉が驚つかみにされていた。今はまだ指先が僅かに触れている程度だが、すぐにも握りつぶされる位置にある。」

「危害つて……」

「貴様、何者だ」

一瞬、背筋が冷たくなった。バレるはずはないと思っていたのに。

「何者つて、俺はさな……」

「とぼけるな。真田将仁は右利き、お前は左利きだろう」

ごまかそうと思ったが、首に触れている筧の指が動いた瞬間、全部吹っ飛んでしまった。

指の動きは痙攣した程度だが、殺気とでも言うんだらうか、全身が凍りつくような冷たい雰囲気、筧の指から感じたからだ。もしかして、本当に人を殺したことがあるんじゃないかと思ったぐらいだ。それに、何かをしたわけでもないのに、利き手のことを見抜いているし。

「わ、かった、確かに、俺は、将仁さんじゃない。身代わりだ」

「本人はどうした」

「昨日、けがをして、病院に行っている」

「けが？」

「不良とケンカして顔が腫れた」

そこまで答えると、何か納得したらしく、筧は何の前置きもなく首から手を離れた。

「入院するほどなのか？」

「や、それは診てもらってからの判断」

「そうか。お前が倒れたら俺も困るから、大事にしると伝えてくれ。眉ひとつ動かさしはしなかったが、その瞬間、筧の雰囲気が少し柔らかくなった。

「それからこれは、身代りであるお前への忠告だ。この屋敷は、お前にとつての敵地。不用意な発言をしないよう、注意することだ」
そしてこう警告してくれた。最初は恐ろしかったが、この筧という男、以外にいい奴かもしれない。

「3分だ。話は済んだか」

その時、セバスチャンさんが、腕時計を見て声をあげた。

「ああ、済んだ。手間を取らせたな」

「終わったのなら問題ない」

二人はそんなそっけない挨拶を交わす。そして筧は足早に立ち去り、

俺とセバスチャンさんだけが残された。

「では、参りましょう」

「あ、ちよつと待ってください」

とっさに俺はセバスチャンさんに声をかける。

「何でしょう」

セバスチャンさんがすつと振り向く。俺が一応は客人だからか、そのへんには気を使っているのだろう。だがその表情はあくまでも事務的だ。

「さつき、笥さんに“ネズ”って呼ばれてましたが、あれってあだ名か何かですか？」

だが、そんな質問を投げかけると、セバスチャンさんは微妙に苦笑した。表情は全く変わっていなかったのだが、なんとなくそんな感じがした。

「私の、本名ですよ」

そして、そんな意外なセリフを吐いた。

「私の本名は、根津健介。セバスチャンは、お嬢様が私を呼ぶときの呼び名です」

「え、なんでセバスチャンなんです？」

「近衛様御付の執事になったとき、お嬢様が仰いましたね。執事の名前はセバスチャンだと。以来、お嬢様の前ではセバスチャンで通しているのです」

「はあ………苦労、しているんスね」

「慣れてしまえば気になりませんよ」

そしてセバスチャンさん、改め根津さんは、表情を引き締めた。

「余計な話をしてしまいました。では参りましょう」

「はい」

根津さんにそう促され、俺は控え室とやらへ再び歩き始めた。

10．なにがお嬢様だ その10

パーティーが始まるまでにまだ時間があるからと、なぜか俺は庭に連れ出された。

庭といってもこの城みたいな家の庭だから、これがまた嫌になるくらい広い。遠くに2つほど、ゆっくりと動く白いものが見えたが、あれは人が乗る大型の芝刈り機なんだそうだ。

その庭に面した、城のような屋敷の横にしつらえたオープンテラスで、近衛さんが、セバスチャン改め根津さんの入れた紅茶を飲んでいる。そして俺は今、同じテラスで、ティーカップ片手に所在無く立っている。椅子がないわけではないのだが、どうも落ち着かないのだ。

それに、ポケットの中にいるケイちゃんにも、悪いと思うし。

「今日はあなたに、面白いものを見せてご覧に入れますわ」

そして俺は、このテラスに連れてこられるときに聞いた近衛さんのセリフの意味を、考えていた。

面白いものって、何だろう。まさかあの芝刈り機ってわけではないだろう。ヘリコプターでも飛んでくるならちよつと驚くけど、でもそんなものの姿は全く持つて見えない。

「ああ、来たようですわね」

そう言われて振り向くと、使用人と思しき人たちが、これまた大きな台車みたいなものを数人がかりで押して運んでくる様子が見えた。しかもこの台車、車輪が戦車かブルドーザーのようなキャタピラになっており、また台車の台のところも分厚く、上面にガラスでできた扉らしきものがある。あえて言うなら、棺桶を横たえたような感じだ。ちなみに、その扉のところ以外は金属でできており、ランプがチカチカと瞬いていたりする。

そして、そのガラスを透かして見えたのは、一体のよくできた人形みたいなものだった。

最初は、暗い銀髪でロングのヨーロッパ系の女の子が、漫画で女性の軍人が着ているような制服を着て、上からグレーのコートを羽織って、この変な箱の中で寝ているのかと思った。だが良く見ると、その頭部には、目から耳にかけてを覆い、一部が頬のあたりまで伸びた、ヘッドセットのようなものが取り付けられている。さらに、人で言えば耳がある辺りには、アンテナか何かだろうか、上方向に伸びた羽根のようなものが生えている。ちなみに、ヘッドセットに隠れていない鼻や口元は、人のそれとそっくりに出来ている。

そして下に視線を移すと、膝から下が、まるでロボットアニメに出てくるロボットのようにつく作られている。

なにより、息をしている様子がない。胸も腹もピクリとも上下していないのだ。

人だったら死体にしか見えないソレが、棺桶の中で静かに横たわっている。ちよつと不気味だ。

「なんだこれ？」

「私専用の、護衛アンドロイドですわ」

俺の質問に、近衛さんはあっさりと答える。

「素晴らしいでしょう。最先端の技術を集結して作り上げた、最新鋭のアンドロイドですよ」

近衛さんは、そう言うってから得意そうにおーっほほほと高笑いをしてみせる。

しかし、驚いた。今、世間では、まだ人と同じ姿とはいえないロボットが主流なのに、これはあれと比べると格段に人間に近い。

もっとも、髪の毛があつて、服を着て、人間らしくない部分を隠しているから、そう見えるのかもしれないけど。

それに、穿った見方かもしれないけど、このキャタピラのついた台車自体が本当は護衛ロボットだ、なんてオチかもしれない。でも、アンドロイドっていうのは、人間に似せたロボットを指して言うから、この箱が動いたからって、アンドロイドとは言わないよな。

だが、そんなことを考えている俺の様子を見てか、近衛さんはこん

なことをあつさりと言って来た。

「興味がおありのようですわね。動かして差し上げましょうか？」

「あ、ああ、つて動くのか!？」

この申し出には、驚いたと同時に、凄い期待も持たざるを得なかった。

なにしろ、動くロボットを目の前にするのは、初めてのようなものだ。うちには機械から擬人化した人は何人かいるけど、そのいずれもが、もとの状態では歩くどころか自力で動くこともできない。

「ええ、動かなくては護衛の意味がありませんもの」

俺が驚いたことで気分が良くなったのか、近衛さんは得意になってそう吹きまくる。

そして、自分の横にいた人に声をかける。

「イリーナ」

「はい、お嬢様」

「この子を起動なさい」

「承知しました」

イリーナと呼ばれたのは、女性用の黒いスーツに身を包んだ、背が高くすらりとした、モデルのような女の人だった。サングラスをしているから目つきは判らないが、雪のように白い肌と、真っ白に近いプラチナブロンドは、セバスチャンのときと違い明らかに東洋人のそれではない。

そのイリーナさんは、どこからともなくノートパソコンを取り出して開くと、左手で持ちながら右手でカタカタと何かを打ち込んでいく。

それがひと段落ついた、と思った次の瞬間。

グイーンという低いモーター音がその台車からして来たと思ったら、なんと、さつき人形が横たわっていた台車のボックス部分が、立ち上がりはじめた。

ちよつと古いが、サンバーのテーマが聞こえてきそうな光景とともに、ボックス部分が少しずつ起き上がっていく。

そして、完全に垂直に立ち上がると、今度はそれが地面に降りていく。

着地すると、プシューッと空気が抜ける音がして、そして、今は正面を向いた箱の扉が、左右に開いていく。

こういった非常に大仰な動きの末、近衛さんが護衛用アンドロイドだというソレが、ついに俺の目の前に現れた。

箱の中を覗き込んでみる。やはり息をしていない。そして、近くで見たことで、それが人間ではないということがますますよく判った。というのも、さつきは髪の毛で隠れていた首の部分に、コードや金属部品など、人間には普通ないものが見えたからだ。

その俺の耳に、ウィーンというさつきより小さくて高いモーター音が聞こえてきた。

見ると、その箱の中で立っていたアンドロイドが、動き始めていた。目を開くようにヘッドセットの目の部分に緑色に光る線が現れると、微妙に俯いていた顔を上げ、上体を少し前に傾けると、箱の縁に手をかける。

そして、上体をその箱から外に出すと、それに追従するように右足が踏みだされる。人間に比べるとそれぞれの動きが微妙に途切れていてぎこちないような感じを受けるが、そのアンドロイドはさらにそこから1歩踏み出し、そしてついに自分の両足で地面の上に立った。

「Conditionally green・Sheshipped to autonomy movement mode・(コンディション・オールグリーン。自律行動モードへの移行、完了しました)」

サングラスの美女、イリーナさんがそう言ってノートパソコンを閉じる。

「すごいな、立つんだ。写真撮ってもいいか？」

「ええ、どうぞ」

了承を得たので、ケイちゃんを取り出し、写メを撮らせる。

それにしても、すごい。人間型ロボットだってだけでも凄いのに、これはほとんど人間で、しかも人間大の大きさがあるのだ。それが自力で歩き、自分の足で立っている。SFの世界が一気に近くなつたような気分だ。

「ナミ。こちらの方に、ご挨拶をなさい」

「はい。初めまして。私はコンバットドールタイプ73。コードネーム“望月ナミ”です。ナミとお呼びください」

のみならず、このアンドロイド、喋ってお辞儀をしてきた。声は電子音がかつていてイントネーションも少々おかしいし、お辞儀の動きも固くぎこちないが、メカニズムだけでここまで出来るとは驚きだ。

「はー、こんなことまでできるんだ」

「もちろんですわ。最新鋭と申し上げたでしょう」

近衛さんは得意そうにふんぞり返り、扇子を口元に当ててほーほーほと高笑いする。凄いのはお前じゃないだろう。

しかし、改めてそのアンドロイド ナミと呼べと自分で言ったのでそう呼ぶことにする。を見て思ったのだが、確かに高性能ではあるのだから、「護衛」に本来に使えるのだろうか？軍服みたいなを着ているからなんとなくは戦闘向きのように見えるが、ものすごく高そうなので、逆に何かあって壊れたらもつたいないんじゃないだろうか。

「ナミは、元々軍事に開発された次世代ロボットの延長上にあります。いわば兵装を積み込んだ、人間大のジェット戦闘機といったところですかしら」

だが、近衛さんはあっさりとそう言い放った。超金持ちだからジエ

ツト戦闘機1機ぐらいはなんでもないってことなんだろうか。

「でも戦闘機はないだろ、せいぜい装甲車じゃないのか？」

「あら、装甲車には飛行能力などなくってよ」

「・・・・・・飛行能力う？」

耳を疑ってしまふ。某科学の子じゃあるまいし、空を飛ぶ必要性がどこにあるんだらうか。

と思つて聞き返してみると、普通の人間にはできないような作戦展開をさせるために、人間にない機能を持たせているんだそうだ。

さらに、この体格で武器まで積み込んであるらしい。人間が使う重火器が使えるように人間の形にしたって言っていたが、そんなものがあるんだつたら余計に人の形は要らないだろう。

「それでは、ちよつとしたデモンストレーションをお見せしますわ」
物理的に無理なんじゃないか？と言つてみたら、お嬢様はそんな返事を返してきた。

10・なにがお嬢様だ その12

どうやら、軍事機密満載なこのお人形の性能を見せてくれるらしい。いいのか、こんなところでそんなことして。

「ナミ。まずは、10メートルほど飛んでみせてあげなさい」

そんな俺の心配を他所に、近衛さんはアンドロイド・ナミにそう命令する。

ナミは、頷くと10メートルほど歩いて離れた。その時に判ったのだが、ナミの背中には、金属製のバックパックみたいなものが背負われていた。よく知られる電動式二足歩行ロボットは、でっかいバッテリーをリュックサックのように背負っているから、あれもその類だろうか。

そんなことを考えながら見ていると、立ち止まったナミはくるとこちらに振り向いた。その直後、ナミの背中から何かがガシガシッという金属音と共に横へ広がっていった。それは、金属板をいくつも連ねて形成された鳥の翼みたいに見える。

それが完成されると、羽ばたくのかと思いきや、爆音と共に足の裏からジェット？を噴出し、そしてロケットのように垂直に飛び上がった。

その姿がぐんぐん小さくなっていく。やがて小指の爪程度の大きさになると、突然方向転換し、下へと降りていく。そして芝刈り機のさらにむこう、多分庭の端あたりに降りると、今度はこっちにまっすぐ突っ込んできた。

「わ、おい、こっち飛んでくるぞ」

と言った直後、俺達の頭上を物凄いスピードで黒い塊がかつ飛んで行った。ごおっという音が巻き起こり、突風が通り過ぎる。

ジェット機と言うのがなんとなく判った。

ちなみに、俺は思わず頭を抱えてしまったが、近衛さんは何度もやって慣れているのか平然と立っていた。金色の髪がその突風に靡き、

太陽の光を受けてきらきらと反射している。

その後、ナミは空を飛びながら戻ってきて、器用に空中で静止した。ジェットの噴射口が、足だけではなく背中にもあるようで、それらの噴射口を調整してやっているっぽい。さっき背中に見えたアレは、バッテリーではなく飛行用の道具だったみたいだ。

少なくとも、機動力はV T O L 戦闘機並にありそうだ。

そしてその戦闘能力も戦闘機並、下手をすればそれ以上だった。

「打ち落とさない」

ナミが空中で停止して間もなく、近衛さんはさっきまで自分が紅茶を飲んでいたカップとソーサーを手にし、やにわにそれを空中停止中のナミ目掛けて投げつけたのだ。

だがその次の瞬間。ナミの掌がうなるような音とともに光ったかと思つと、パンツという音と共にそれが2つとも空中で砕け散つた。

パラパラと地面に落ちる陶器の破片。そしてそのむこうでは、ナミがちょうど着地するところだった。爆音と噴射した熱風で足元の草を激しく揺すりながら地面に降り立つと、再びガシガシガシという金属音を立て、羽根を背中に収納していく。

「……………今のは？」

「レーザー砲ですわ。T H E L の技術を応用したもので、両腕に内装されておりませうのよ」

うむ、はつきりしたことはよく判らないが、どうやらナミは両腕からレーザーが撃てるらしい。確か、最新の戦闘機でもレーザー砲は積んでいなかったと思う。

ふと、パキパキという音がしたのでそちらを見ると、そのナミがゆつくりとこつちに歩いてくるところだった。パキパキというのは、地面に散らばったソーサーやカップの欠片を踏み潰す音だった。

「いかがでしたかしら、この余興は。楽しんでいただけましたか？」

ナミが自分の横に来たのを見計らい、近衛さんはさも自分が凄いとをしたかのように言い放つた。凄いのは確かなので頷くと、近衛さんはさらに得意そうな顔になった。

そんなことをしているうちに、根津さんがやってきて、パーティーの準備が整ったことを告げた。

「えーと、最後にひとつ、いいか？」

会場へと向かう道すがら、気になることをひとつ聞いてみた。

「あれ、なんで“望月ナミ”って名前なんだ？」

そう。日本製つてことはありえないし、外見上も日本人らしくないあのアンドロイドが、コードネームとはいえなんであんな和風な名前をつけられているんだろうか。

だが、理由を聞いたら、それはあまりに簡単なことだった。“望月”というのは、日本のロボット工学の第一人者でありコンバットドール設計の最高責任者でもある人の苗字らしい。なんでアメリカ製ロボットなのに日本人が研究しているのかというと、個々の機能はともかくとして、倫理的な理由から「人の形をした」ロボットの研究はアメリカより日本のほうが進んでいるんだそうだ。

それから、ナミというのは“73号”からの語呂合わせなのだそうだ。

あまりに単純な話に、ちょっとだけ眩暈がした。

10・なにがお嬢様だ その13

「あいつら、大丈夫かなあ」

みんなと一緒に昼飯を食べながら、俺はそんなことを独り言ちた。

「やっぱ、いいもの食ってるのかね」

ヒビキが合いの手を入れつついつもと変わらないペースでおかずを平らげていく。

「フン、毛唐の飯など口にしたくない」

その横ではシデンがそんなことを言っているが、不満がありありと見て取れる。

「料理は材料と調理法だけで決まるもの違うアル。食べる人がどれだけ食べて良かったと思うかアル！」

さらにその横では紅娘が茶碗片手に何やら力説している。

「ふん。ほーら、魅尾ー、食べるかー？」

「キユ」

箸でつまんだフライを、自分の膝に乗せた子狐の魅尾に差し出すと、魅尾はパクリとそれを口で啜える。ずいぶんと元気になったみたいだ。

「まあいいけど。ごはんおかわり」

「はいはい」

うちのモノたちの会話を聞きながら、空になった茶碗をレイカに差し出す。まだちょっとアルコールが残っているのか妙ににこやかだ。そして、ふとまだ空席になっている椅子を見る。

「バレンシアさん、まだ降りてこないんですかあ？」

さっきそのバレンシアに胸をもまれていたクリンが心配そうにそんなことを口にする。そう、バレンシアが下りてきていないのだ。

これだけ大人数だと、自然と食事をする時間は固まってくる。そのほうが、調理も片付けも手間がかからないからだ。

特にうちの場合、常盤さんと俺以外は家にいることが多いので余計

にその傾向が強いのだ。

「常盤様、彼女が何をするか、聞いていないでしょうか？」
ちよつとイライラした様子でテルミが愚痴をこぼす。

「ごめんなさい、私にもよく判らないのです。書類の写しを作ってもらおうと思つたのですが」

常盤さんも少し心配そうに箸を啜っている。

詳しく聞いてみると、どうやらバレンシアの奴は「近衛一族」について探りを入れていているらしい。あいつのことだからインターネットを經由してなんだろうが、変なところに入り込まないかが心配だ。最近ニュースとかで見る裏サイトとかアダルトサイトとかならまだいいと思う（アンチウイルスソフトは持っているらしいし）が、あいつの場合証券会社のデータベースとか防衛省のデータベースとかでも平気で入って行けそうだから怖い。なにしろ、ちよつと違うかもしれないが、SFでは敵によく現れる、自我持ったコンピューターだもんな。

ついでに言うと、あいつはオタクな性格してるから、やるときはそれこそ周りが見えなくなるし。

「あいつ、またオーバーヒートするんじゃないだろうな」

「氷嚢を作つて持つていつてあげようかしら」

「片手間に食べられる物でも作つて、持てこアルかな」

そして、なんだかんだ言つても同じモノ同士、互いを思いやる気持ちは忘れない。なんかそんなやり取りを見ていると、俺もちよつとあつたかい気持ちになるのだった。

「どこがプライベートな集まりなんだ」

パーティー会場の片隅で、レモネードが入ったカクテルグラスを片手に、俺は一人悪態をついていた。

昼を少し回ったところで、いよいよパーティーが始まったんだが、これがまた映画で見るとような、非常に豪勢なやつだった。タイプとしてはいわゆる立食パーティーなのだが、出されている料理は手を出すのもつたないくらい豪勢、しかもピアノやジャズバンドの生演奏つきだ。

そして招かれたゲストも、男はみんなスーツやタキシードといったビシッとした格好をしており、女はドレスなどで着飾っている。しかもそのどれもが、いわゆる良家のご息女やご息女らしく、聞こえてくるのはどこぞの大学で研究をしているとか、どこぞで起業したとか、どこぞに投資したとか、明らかに自分たちとは縁が無い話ばかりだ。

正直、学校の制服で来ている自分は非常に浮いている。近衛さんは将仁さんに恥をかかせようとしてこのパーティーに呼んだような気さえする。

「おやあ？こんなところに学生がいるぞあ？」

「本当だ、しかもあの制服は、公立のものじゃないか」

「全く、どこの貧乏学生かね」

案の定、そんな声が聞こえてきた。見ると、高級そうなスーツに身を固めた、いかにも“俺はエリートだ、青年実業家だ”と言いたげな奴らが3人ほど、あからさまにこつちを見ながら談笑している。本当にいるんだな、こんなマンガみたいなことをする人間って。付き合つと色々とめんどくさそうなので、チラ見だけして知らん振りを決め込んでいると、そいつらの声はさらに大きくなった。

「貧乏人には聞こえないのかね？」

「いいや、あれはおそらく、我々が怖いのだよ。持たざる者はその程度のことも出来ないのさ」

「誰だろうねえ、あんなのを招待したのは」

「私ですわ」

突然、そいつらとは全く別の、若い女の声があった。

見ると、そこにはドレスを着こなした金髪巻き毛の女、近衛クローディアその人が立っていた。

あの実業家たちも、さすがにパーティーのホストである彼女の顔は知っているようで、ちよつとばつが悪い顔をしている。

「あなた方、今、面白いことを仰ってましたわね。公立の学校に通うのは貧乏人だと。私も同じ学校に通っておりますけれど、私のことも貧乏人だと仰りたいのかしら？」

近衛さんがそう口にした瞬間、そいつらの顔がさつと青くなった。

「い、いえあの、これはですね、その、近衛様のことを言ったのではなくてですね」

「セバスチャン。こちらのお三方、お帰りになるとのことですわ。お送りして差し上げて」

懸命に弁解しようとする青年実業家たちを完全に無視し、近衛さんはそばに控えていたセバスチャン改め根津さんに、明らかに不機嫌な口調でそう言った。

いつのまに現れた根津さんの後ろには、さらに数人の黒いスーツを着たSPのような男が数人控えており、根津さんが合図を出すところという間に青年実業家たちの両脇をがっちり固め、そしてそのままそこから連れ出して行ってしまった。

青年実業家たちも、なんとか近衛さんの機嫌を直そうと思ったらしく、連れて行かれる道すがら弁解をしていたが、近衛さんは聞くとうとすらしなかった。

「それにしても、真田さん。あなたも、あそこまで馬鹿にされて、なんとも思いませんか？」

面白い見世物だったな—と知っている、それを仕向けた当の本人、

近衛クローディアさんがそんなことを聞いてきた。どうも、正面切つてバカにされたのに全く反論しなかったことが気に食わないらしい。

「言いたい奴には言わせておけばいいさ。いちいち反応するのも面倒だし、結局、自分で自分を小物だと言いふらしているようなものだしな」

俺はそう答えた。弱い犬ほどよく吠える、実るほど頭をたれる稲穂かなつて言うし、それに、ここで怒って騒ぎを起こして、最後に困るのは俺じゃなくて将仁さんだから、そんなことをするわけにはいかない。やつたら多分、うちのモノたちみんなから総スカンだもん。「ふん、耐えがたきを耐え、忍び難きを忍ぶ、とでも仰りたいのですかしら？ 黙っているだけでは、相手に通じませんわよ」

さすが半分アメリカ人でつい最近までアメリカに住んでいただけあつて、近衛さんはそういう所は遠慮がない。とは言つても、こつちも別に思い知らせようとは思っていないんだけど。

「そうそう、貴方には是非ともお会いしたいという方を、連れてきて差し上げましたわ」

近衛さんは、もう関心がなくなつたらしく、ころつと話題を変えてきた。

俺に、もとい、将仁さんに会いたい人って、何だろう?と思って近衛さんのほうを見ると、さっきは気がつかなかったが、その傍に背の高い男が立っていた。

ちらっと見た感じでは、さっきつまみ出された連中のように、高級そうなスーツを着込んだ青年実業家のようだった。

しかし、あの連中とは雰囲気明らかに違った。何というか、謙虚ではあるが、そこに隙が見られないのだ。少なくともこの男は、あのヘタレどもとは何かが違う。

「あなたが、西園寺家の新しい後継者ですか。はじめまして。私は、六角家当主、六角隼人と申します」

その男は、そう言うてにこやかに手を差し出してきた。

「あ、ええと、真田将仁です」

こっちらも手を出したが、考え事をしていたためについ左手を出しそうになった。本当に出す前に右手に切り替えたから大丈夫だと思いが、ちよつと変に思われたかもしれない。

「それでは、私は他のゲストの方々にご挨拶をしなければなりませんので、これで失礼しますわ。どうぞごゆっくり」

すると近衛さんは、自分の役目はここまでだとばかりにそう言い放って、さっさとどこかに行ってしまった。無責任な奴。

「えーと、六角さんは、西園寺の家とはどんな関係なんですか?」
とりあえず、目の前に現れた男に探りを入れることにする。なにしろ、そんな人がいるとは聞いたことが無かったからだ。

「当家は、代々西園寺家の補佐を司っているのです。常盤弁護士から聞いていませんか?」

すると、六角さんはそう言った。むこうから常盤さんの名前を出してくるあたり、西園寺家と関係があるというのもあながち嘘ではならしい。

「いや、聞いてないです」

「そうですか。実はここだけの話ですが、あの女、あまり信用しないほうが良いかと」

「……え？」

だが、六角さんは不意に顔を近づけると、小声で妙なことを話し始めた。

「あの女、実は素性に不明な点が多いのです。生まれがどこか、家族構成はどうなっているのか、どのような履歴を持っているのかすら明らかになっていません。それなのに、西園寺家の先代当主にもいつのまにか取り入っていましたね。何か裏があるかも知れませんが、注意したほうが良いかと」

どうやら、将仁さんに常盤さんへの不信感を吹き込もうとしているらしい。

そして、なんとなくだが、そんなことをする理由に思い至った。

「そんな悪い人には思えないですけど」

「人は見かけによらないと言いますからね」

「うーん、ちよつと、考えておきます」

だが、下手に聞き返すのはやめておくことにした。変なことを口にして警戒されるのは、俺はともかく将仁さんには得策ではないと考えたからだ。

そこで、ふとあることを思いついた。

「ん、ちよつとすいません」

俺は、ポケットから携帯電話のままのケイちゃんを取り出し、六角さんから少し離れると、今かかって来たようなフリをして耳に当てた。

「ケイちゃん、ちよつといいかな」

「えいつ！えいつ！」

……なんだ？と思って聞いていると、ケイちゃんの声のむこうから何かの音楽と共にきゅんきゅんという音が聞こえた。

「あっ！」

そして、ケイちゃんの声とともに、どかーん！ぴろんぴろんぴろんという音が聞こえた。ゲームか何か、やっていたんだろうか。

「もしもし？ケイちゃん？」

「ん、え？あ、鏡介お兄ちゃん、なに？」

やっと気付いたのか、ケイちゃんが返事をしてくる。

「ちょっとお願いがあるんだけど、いいかな？」

そして、ケイちゃんにこっそりと話をする。その話はごく簡単なものだったのですぐに終わった。

「すみません、お待たせしてしまって」

極力何食わぬふうを装い、六角さんのところへ戻ると、切り出した。

「携帯の番号とメールのアドレス、教えてくれませんか」

「え？」

「今、電話していて、ちょっと思い立っただけです。俺も教えますから」

そして、開いたままの携帯電話を見せる。いかにも普通の携帯電話であることを示すため、ケイちゃんには隠れてもらっている。

携帯電話は、今時誰でも持っている。きっかけとして悪くはないはずだ。

それに、一番欲しいのは、メールアドレスではない。

「ああ、構いませんよ」

「それじゃ」

六角さんが内ポケットから自分の携帯を取り出したので、こっちら番号を教える。

そして、交換のやり取りをする傍ら、さりげなくレンズを六角さんに向けた。

これが、ケイちゃんにお願いしたこと、「六角隼人の顔写真を撮影すること」だ。帰った後で将仁さんに話をする時、顔写真があったほうがいいと思ったからだ。

その後、俺は少し言葉を交わし、六角さんと別れた。

そしてその時、普通に「写真を撮っていいですか」と聞いてみれば

よかったんだと、ちょっと後悔した。

10. なにがお嬢様だ その16

「真田君?.....真田君じゃないの?」

六角さんと別れ、しばらく手持ち無沙汰にしていると、後ろから不意に声をかけられた。

振り向くと、20代半ばぐらいの、紺色のカクテルドレスを着た上品な感じの人が立っていた。

「やっぱり真田君だ。こんな所で会うなんて、珍しいこともあるのね」

その人は、互いによく知る間柄であるかのように、親しげに話しかけてくる。

だが、俺のほうは全く心当たりがない。もしかしたら将仁さんの知り合いなのかも。クラスメイトってことは.....年齢的にならうし、このパーティーに来る様な知り合いが将仁さんにいるとも思えないけど。

「あ、いや、そうですね、珍しいですか」

「そうですね、でもネクタイはもう少しちゃんと締めたほうがいいわよね?」

そしてその人は俺のネクタイをキュッと締めてくる。ずいぶんと親しい人みたいだが、それで余計に判らなくなる。そんな知り合い、将仁さんにいたのか。

「あ、す、すみません」

「学校だったら多少曲がっていてもいいけれど、こういう場はもう少し身だしなみに気を使ったほうがいいわね」

え?学校?ってことは?

「.....え、もしかして、先生ですか!??」

すると、その女の人の顔がぱあっと明るくなった。

「んもう、今頃気がついたの?」

「.....あ、ああ、って、ええっ!??す、すみません、気が

つきませんでした。その、なんか見違えたもんで」

そうか、学校の先生だったのか。人のつながりって、意外なところにあるんだなあ。

「んもう、褒めたって点数はあげないわよ？」

「いやあそんなこと考えていないっすよ」

こんなふうに調子を合わせていた、その時。

ちゃーちゃーちゃららら、ちゃっちゃちゃー。

不意に、手に持ったままだった携帯電話が鳴り出した。

「すみません、また電話が」

一言謝ってから、携帯を開く。この呼び出し音は Кейちゃんからだな。

「はい、真田です」

「もしもし、鏡介お兄ちゃん？」

将仁さんになりきりながら挨拶すると、受話器の向こうから聞こえてきたのは、案の定 Кейちゃんの声だった。

「ん？何かあったのか？」

「あのね、鏡介お兄ちゃんにね、ちょっとアドバイスしてあげようかなって思ったの」

アドバイス？なんのアドバイスだろう？

「あのね、その人、徳大寺伊織さんって言ってね、お兄ちゃんのクラス担任なの」

「へえ、そうなんだ」

「うん。それからね」

そして、ここで Кейちゃん は俺にとってすごく大切なことを教えてくれた。

「徳大寺さんね、ケイたち擬人化のこと、よおっく知っている人なの」

「ええっ!？」

思わず声を上げてしまった。将仁さん、クラスメイトがうちに来たときには、俺達にあれだけ口止めしたのに、実は本人は話しちゃっ

ていたってことか？

「もう、鏡介お兄ちゃん、声がおおきいよっ！」

電話のむこうから、ケイちゃんがぶんすかむくれた声を上げる。そこで我に返って辺りを見回すと、着飾った人たちが、何事かこっちを迷惑そうな顔で見ている。

「それってホントかい？」

体をちぢこませ、さっきの言葉を念のため聞きなおす。ケイちゃんが言うことだからウソってことはないと思うけど、念のためだ。もし本当だったら、そういうふりをしなきゃならない。

「ホントだよ。徳大寺さんのおうちって、西園寺のおうちと仲が良かったんだって」

というのはケイちゃんの言葉だ。どうやら、将仁さんがバラしたんじゃないくて、それ以前から知っていたってことらしい。

考えてみれば、西園寺の血筋は、名前こそ変わったけど1500年以上前から続いているわけだし、それに秘密の存在ってわけでもないんだから、関係者の10人や20人がいたっておかしくない。

「じゃあさ鏡介お兄ちゃん、徳大寺さんに代わってくれないかな？」突然、ケイちゃんがそんなことを言い出した。

「ケイから、先生にお話してみる」

「大丈夫かい？」

「大丈夫だよ。ケイ、この前シデンちゃんが学校に来たときに、先生とお話したことあるもん」

人見知りのケイちゃんにしてはずいぶんと自信があるような感じがあつたみたいなので、言うとおりに徳大寺さんに渡してみることにした。

「え、あ、ええとその、先生、なんか、先生に話があるって」

「え？私に？」

携帯を開いたままで差し出すと、先生は少し面食らった顔をした。そりゃそうだ、いきなり他人の電話に出ろっていうんだから。

「はい、もしもし、徳大寺ですが」

そして、訝しげな表情のまま携帯電話を耳にあてる。だが、その表情はすぐに明るくなった。

「もしもーし、お兄ちゃんがいつもお世話になってまーす」

「あら、この声はケイちゃん?」

「そつでーす」

徳大寺さんは、まるで友人と楽しい会話でもするかのようになり、携帯電話のケイちゃんと話している。会ったことがあるっていうのは、まんざら嘘でもなさそうだ。

「ええっ!? そうなの?」

と、突然、先生が驚いたようにこつちを向いた。そしてじーっと俺を見つめてくる。ケイちゃん、何を言っただろう。

「あなた……真田君じゃないって、本当?」

すると、先生は小声でそんなことを聞いてきた。なるほど。あのことを話したのか。でもさすがにわかには信じがたいらしく、混乱しているのを見て取れる。

「ケイちゃん、話しちゃったんですね」

「……じゃあ、やっぱり」

「ええ。俺もケイちゃんと同じです。まあこんなふうになったのは、色々とワケがあるんですけど」

一応、徳大寺さん以外にも人がいるので、“擬人化”という言葉は隠しておく。

「本当の、真田君は?」

「ええ、ちよつと具合が悪くなりましたですね。でも将仁さんって義理堅いから、呼ばれた以上は這ってでも行かなきゃって言ったもんで、それじゃあつてことで俺が身代わりになったんです」

「……そう、だったの」

俺は役割がら、色々な人の顔を見てきた(忘れているかも知れないが、俺は元々アパートの洗面所に備え付けの鏡だったから、将仁さん以外の顔も見ているのだ)から、人の表情を読むのは結構得意だったりする。で、先生は、見たところまだ納得できていないらしい。

だが、ここで「俺がモノである」ということを証明するのも、難しいんだよな。いちばん簡単なのは目の前で変身することなんだが、なにしろ人目があるのでそれはまずい。

そんなふうにかえ事をしていると、先生がまたケイちゃんを耳に当てる。そういえばまだ返してもらってなかったんだっけ。

「……はて、何を話してんだろう。ずいぶんと長話だなあ。」

それからたっぷり10分ほど、俺のことをほったらかしにして、先生はケイちゃんと楽しそうに何やら喋った後、俺に携帯を丁寧に差し出した。

「あなた、鏡なの？」

受け取ったとき、先生はそんなことを言ってきた。どうやら、さっきのおしゃべりの中で俺のことも喋ったようだ。

ここでなければ色々見せることが出来る、と言ってみたら、先生は疑り深いような驚いたような、それでいて興味津々みたいな顔をしていた。

そのころ。

「いかがでしたかしら、ファースト・コンタクトは」

「………思ったより、扱いづらそうな奴だな」

鏡介たちの目につかないところで密談をする男女がいた。

近衛クローディアと、六角隼人だ。しかも、六角のほうはさっきと違い、狡猾な雰囲気を漂わせている。

「あら、切れ者で知られる六角にしては、ずいぶんと面白い評価ですのね」

「俺は預言者でも超能力者でもないからな。だがあの男が俺の予想と若干違うのは確かだ。あの男は幼少時を養護施設で過ごした、そういう奴は得てして暗い面があるはずだがあの男はそれをあまり感じさせない。

腹を読ませないために演技をしているのか、それとも今遭った男は真田将仁のフリをした偽者なのか。いずれにしろ、面倒な奴だな」

「そうですの」

それに対し、クローディアは何のことはないという返事をする。

「でも、そんなことはどうでも宜しい。私は、彼が持つ擬人化の力が欲しい。それだけですわ」

「それは、あの男をものにするということか？」

隼人はそれを、茶化すような、小馬鹿にしたような口調ではやし立てる。

「それも止む無し、ですわ。私の魅力を以つてすれば、庶民の一人や二人、籠絡することなど造作ありませんわ」

クローディアは、さも当然という様子で口元を扇子で押さえ高らかに笑ってみせる。そしてくるりと振り向くと、ぱちんと閉じた扇子の先を隼人に向けた。

「貴方はその西園寺の資産をかすめとるつもりなのでしょう？あな

たはそのため暗躍しているのですものね」

「違うない」

隼人は、そして下卑た笑いを浮かべた。

「お嬢様、少しお話が」

その時、どこから現れたのか執事服を身につけた男が、クローディアの傍から声をかけてきた。

その男、根津は、クローディアに小声で何やら耳打ちをする。

「そう。それで、どのような対応を？」

「はい。無礼な輩には相応の報いを受けてもらうことになるでしょう」

「……なるほど。面白そうな趣向ですわね」

そしてくると華麗に振り向くと、訝しげにこっちを見ている隼人にクローディアが向かった。

「何があつた？」

「ええ、当家を不当に探ろうとした輩がいたようです」

「ほう？そいつは確かに面白いな」

隼人は、手にしたグラスのカクテルを一気に飲み干し、そして再度口を開いた。

「で、どうしたんだ？やられっぱなしというワケではないんだろ？」

「ええ、当然ですわ。今頃、こちらからのプレゼントに腰を抜かしているはずですよ」

そしてクローディアは、扇子を開いて口元を隠し、こう言い放った。

「こういつのを、日本ではのしをつけて返すと言つのですわよね？」

おーっほっほほほほほ！」

その様子を見て、さすがの隼人も「こいつらは、味方にしても敵に回しても色々めんどくさそうだ」と思うのだった。

あれからまた時間が過ぎ、ようやくパーティーがお開きになった。とりあえず、あの後はおかしな騒ぎが起きることも無く、なんとか俺も将仁さんの代役を果たすことができたわけだ。

ちょっと気がかりなのは、ずっと携帯フォームのままでないきゃならなかったケイちゃんに悪いと思って、沢山あったご馳走に手が出せなかったことだ。おかげで実は腹ペコなのだ。

帰ったら何か作ってもらおう。そんなことを考えながら、俺は帰る準備をしていた。

「ちよつとお待ちなさいな、真田さん」

その時だ。近衛さんがまた声をかけてきた。

「如何でしたかしら、今日のパーティーは。楽しんでいただけましたかしら？」

そしてそんなことを聞いてくる。将仁さんだったら皮肉の一つも言うだろうが、俺の判断でここは普通に答えることにする。

「ああ、それなりに、だな。どうもこういう格式高いところは慣れてないもんで、楽しみ方もよく判らなくて」

「あら、そうでしたの？そんなに深く考えずに、普通に楽しめば宜しかったのに」

近衛さんは、満足そうな笑みを浮かべつつそう言い返してきた。やっぱり、将仁さんと自分とは格が違う、と思い知らせたかったらしい。なんて単純なんだ。

「ああそうそう」

だが、お嬢様はまたすぐに話を変えた。ネコのように気まぐれな奴だ。

「真田さん。これを、持っていきなさいな」

そして、俺に何かを差し出してきた。

見ると、それは透明なケースに入った、一枚の光ディスクだった。

どうやらDVDディスクらしい。

「何のDVDだ、これ？まさかお前の歌とかプロモーションビデオとかじゃないだろうな」

「あら、この美声を堪能したいとおっしゃるのかしら。でも残念ながらあなたに聞かせて差し上げるほど、私の喉が安くありませんのいや、別にそんなの聞きたいとも思わないんだが。水着姿とかもつとあられない姿とかが収録されているんだったら、見たがる奴はいるかもしれないけど。」

それに、そういう類のものじゃないことは推測できた。急いで作ったようで、ディスク表面には何も書かれておらず、またケースも市販の透明なものでラベルの一つもない。

「まあ、いいですね。そのディスクに入っているデータは、あなたが家に帰った後に非常に重要となるもの。今日は特別に差し上げますわ」

非常に重要？一体なんだろう？

「………ありがとうございます」

なんかよく判らないが、俺はそのディスクを恭しく受け取ることにした。

そして、帰ったらテルミさんかバレンシアさんに徹底的に調べてもらおう、そう思った。

それは、何の前触れも無く起こった。

日が傾き始めてもなかなか帰って来ない鏡介とケイを待ちながら、みんなしてテレビを見ていたときだ。

突然、何かが爆発したような音がして、家が激しく揺らいだのだ。

「ひゃあ!？」

「な、なんだなんだ!？」

どこかでガス爆発でもあったのだろうか、それとも雷でも落ちたのだろうか。いずれにしても、これはただ事ではない。

俺が思わず部屋を飛び出すと、再び轟音がした。さっきは突然で気がつかなかったが、音は頭の上から聞こえてきた。

迷わず階段へ向かう。上からまた音がした、ということとは、2階かそれより上で何かがあったってことだ。そして階段を上りながら、あることに気がついた。

「2階って、待てよ、確かバレンシアがいるはずじゃないか!？」

そうだ。確かあいつは、昼飯も食わずにずっと、俺をパーティーに呼んだ「近衛」について探りを入れているのだ。昼飯を食った後や宿題を終わらせた後に顔を覗きに行っただが、下手すると仕事するときより高い集中力を持って彼女は何やらやっていた。と言っても彼女自身はケーブルを啜って座っているだけだが、手にしたディスプレイや丸眼鏡に映りこむ文字列の流れる速さがいつもより切れ目なく、そして気持ち早く流れていた。

そして、昼飯後に常盤さんが外出をし、そしてアルコールの完全に抜けたレイカがヒビキを連れて夕食の買出しに出て行っても、バレンシアは一向に降りてくる様子が無かった。

そんな時に、事が起きた。

あいつ、また何か妙なことをやらかしたんじゃないだろうな。ここ数日のあいつの暴走ぶりを思い返し、ちよっと頭が痛くなった。

「おいっ！バレンシ……」

だが、バレンシアの仕事場を兼ねている常盤さんの部屋のドアを少し乱暴に開けて中に入ったとき、事態は俺が思っている以上に深刻だということを知らされた。

バレンシアは、部屋の中にいた。こちらに背中を向け、机の横に立っていた。

だが、様子がおかしい。

「おい、バレンシア？」

「くあwせdrftgyふじこ1p:@:!!」

突然、バレンシアは、なにやらワケのわからない、言葉であるのかも不明な音を口から吐き出しながら、大きく体をひねる様にこちらに顔を向けた。

それだけならまだいい。バレンシアの目は白く不気味に光っていて、そしてなおかつその目のまわりに青白い火花を飛び散らせているのだ。

漫画だと目から火を噴いたりビームが出たりは日常茶飯事だが、実際に目の前で目から涙と視線以外のものが出ているのを見ると、正直ひいてしまう。

「ど、どうしたんだバレンシア!？」

バレンシアの名前を呼んだ、次の瞬間。

「mght塩w75h手wrmlfsm d:phgf:うえ@q^
えwd!」

訳のわからない声と共に、バレンシアの目から、雷を思わせる青白い火花が飛んできたのだ。

「どうわあっ!」

「わあっなにをうおっとおっ!」

「アイヤーツ!」

反射的に飛びのく。そのスパークは俺がいた場所を正確に打ち抜いていった。

俺の後ろを追っていたシデンは器用に身を翻してそのスパークをか

わたしが、さらにその後ろにいた紅娘は、あまりに急だったためかそれに直撃してしまった。

「きゃああああ!？」

しかも、その衝撃で壁に叩きつけられた紅娘は階段のほうへと跳ね返り、階段を上る途中だったクリンを巻き込んで、ずどどどどどどつというものすごい音と共に階下へと消えていった。つて、そんなのを眺めている場合じゃない。

「h t れれう j れわいおつれういうとえ w t j れ k m !」

「うわあっ!」

バレンシアが、叫びともうなりともつかない奇声を上げながら、部屋の中に入った俺へ目掛けてスパークを発射する。

ぎりぎりで何とかかわすが、その耳元でチリチリツと何かが焼ける音がした。

すでに部屋の壁紙は色々なところが焼け焦げ、下地のコンクリートが見えている。

「こら待てバレンシア!俺だ、将仁だ!落ち着け!」

「くあ w s e d r f t g y ふじこ 1 p ; @ : ! !」

壁に背中を預けながら声をかけるが、バレンシアは返事の代わりに目からスパークを叩きつけてくる。

これはマズイ。非常にマズイ。何があったのかは判らんが、バレンシアのやつ、完全におかしくなっている。

もしかしてあいつ、ウイルスって奴を喰らったんじゃないだろうな。パソコンの知識はそんなに無いが、ウイルスを喰らうと、パソコンはおかしな動作をするようになるって言うし。しかし、アンチウイルスソフトは持っているはずじゃなかったのか?

その時、部屋の隅に、大きなレンズの入った丸眼鏡が転がっているのが見えた。あれは確か、バレンシアがいつも掛けている奴じゃなかったか。と思い、改めて見ると、バレンシアはやっぱり眼鏡をしていない。眼鏡の代わりに、青白いスパークを飛び散らせているのだ。

この前テレビで見た、アメリカンヒーロー物の映画の登場人物が思い浮かぶ。目から破壊光線を発射するそいつは、目を開いている間は自力でその光線を制御できないので、特殊なサングラスでそれを防いでいた。

対して、床に落ちているあの丸眼鏡は、どう見てもただの眼鏡だが、“持ち主が目から何かを出す”“眼鏡をしているときは出ていない”という共通点があることに気付いたら、俺の思考は“その眼鏡を掛けさせれば、あのスパークは止められる”としか考えられなくなっていた。

それにはまず、アレを拾いに行かなくては。そう思ったら、体が勝手にそっちへと飛び出していた。

それを待っていたかのように、バレンシアの目からスパークが飛んでくる。喰らったらヤバそうなのは依然として変わらないので、なるべく狙いを定めさせないようフェイントを加えて動き回る。

「よし、取った」
そして、身をかがめて、なんとかバレンシアの眼鏡を拾い上げた、その時だ。

「わひゃあつ！」
頭上で、スパークが壁に命中した音がした。と同時に、聞き覚えの無い悲鳴がした。

10・なにがお嬢様だ その20

何だと思って顔をそっちに向けると、なんと、何も無いはずの壁から、人影が飛び出し出てくるところだった。

「どうわあっ！」

「あいつたあ！」

その人影は、そのまま俺の上に落ち、そして転がると床に尻もちをついた。

「な、なんや今のは？」

その人影は、床にしゃがみ込んで顔をあげる。年のころ10代半ばぐらいだろうか、鼻の回りにそばかすが見られる女の子だ。黄色いだぶだぶの服を着て、頭にはユニコーンみたいな角が前に生えた、昔の中国の役人が被ってそうな四角い緑色の帽子を頭に載せている。なんか、中国の映画に出てきた術師みたいだ。だが壁から出てきた時点でそんなもんじゃないのは明らかだ。さらに、カツラでも被っているのか、鬘のように豊かな髪の毛までが黄色、金色ではなく、染めたような黄色なのだ。

「あ、おおお呼びでないみたいやな、ほな失礼しま」

目があった瞬間、そいつは愛想笑いを浮かべて逃げようとした。

「おい」

「ひゃいつ!?!」

逃がしたらまずいと思った俺は、とっさにその女の肩を掴んだ。

「ななななんですか？」

「逃げるな」

「そないゆうたかて、あー、うちがおつてもお邪魔やる？」

「いいから逃げるな、お前も手伝え」

どうにかして逃げようとするその女(?)の首根っこを掴み動きを抑える。

「あ z s x d c f v g b h n j m k、l。 ; : . . . ¥ !」

だがそれ以上説得している時間はなかった。バレンシアがこつちを向いて、目から電撃を飛ばしてきたからだ。

「わひゃ!?!」

「こつちだ!」

「く、首ひっぱらんといて!」

急いでその場から離れる。その直後、俺たちがいたところに青白い火花が飛び散る。

そうしているうちに判ったのだが、どうやら、バレンシアの目から出るスパークは連続で発射することが出来ないらしい。とはいえ、一撃と次の一撃の間にはどの程度の間隔があるのかはまだ判らない。そして、ソレを突き止めるまで観察していたら、俺のほうが先にくたばりそうだ。

「くそ、どうすればいい」

そう考え、動きが止まってしまった、その時だ。

「上官!こつちだ!」

入ってきたドアとは反対側、バルコニーのほうから声がした。見ると、シデンがバルコニーへ出るガラス戸を開いて、その窓に半身を隠しながら懸命にこつちを手招きしていた。

考えるより先に体が動いていた。全速力で駆け出すと、俺はそのガラス戸に飛び込んでいた。

そこから俺が飛び出すと同時に、シデンが、ガラス戸が割れるんじゃないかと思うほど勢い良く閉めた。その後ろからバシッバシッという音がするが、絶縁体であるガラスは電撃を見事に防いでくれている。

「大丈夫か、上官!」

「あ、ああ、助かったよ、ありがとう」

「当然だ、指揮官がいなくては軍は成り立た……ん?」

俺を救助したということ得意げだったシデンだが、それがあるものを見て急に目つきを陰しくさせた。

その視線の先には。俺が首根っこを掴んで部屋から引っ張り出した、

黄色い服の女が目を回して横たわっていた。

我に返り、まだ彼女の襟首を掴んだままだと気付いた俺は、慌ててその手を放す。

「けほっ、けほっ、くはあっ、苦しかったわあ〜」

その女はまるで何かにもせたまよりに何度か咳をしてから顔を上げると、そこで仁王立ちして非常に怖い顔でこつちを睨みつけるシデンと目があつた。

「あ、ま、毎度」

「上官、この女は何だ。まさか、この緊急事態中に、10人目を召喚したのではあるまいな？」

壁から出てきた女は愛想笑いを浮かべるが、シデンはそれに対しあからさまに疑り深い目を向けている。シデンの奴は結構嫉妬深いらしく擬人化が増えるとそのたびに文句を言っているから、今回もまたそのケースだと思っっているんだろっ。

「俺にも判らん、さっき突然壁から出てきた、俺は何もしてない」だが、俺が正直なことを言うと、シデンはものすごい勢いでその女のほうに向きなおり、胸倉を掴んでぐいっつと引っ張り上げた。

「きつさまあ、どこから闖入した！言えッ！言わぬとただでは済まされぬぞッ！」

そして男より男らしい声で恫喝する。

「わひゃあ、暴力反対、暴力はアカン！うちなんもせえへんから！」それに対し、黄色い女は両手を上げてどこか怪しい関西弁で抗議する。

「落ち着けシデン、今はそれどころじゃないだろ」

とりあえずシデンの手を放させる。

「とにかく、ここはバレンシアの電撃を抑えなきゃならん。シデン、お前は電気に強かったりするか？」

「無茶を言うな、防水処理なら完璧だが、電気は別物だ」

「あ、あの一、うちも、雷は苦手なんやけど」

「貴様にいつ聞いた！」

黄色い子が口を開くたび、シデンがそれを叱り飛ばす。その様子を見てみると、正体がわからないとはいえ黄色い子にちょっと同情してしまう。

「ところでお前、さっき壁から出てきたな。また壁に潜ることはできるか？」

だが、これとそれとは話が別だ。まずは状況判断が必要、ということとで聞いてみる。

「へ？あ、ま、そらできますけど」

「だったら話は早い。壁の中に入って、バレンシア、えーと今、目から電撃を出して暴れてる奴を取り押さえてこい」

「うええ〜っ！？そんな無理やあ！うち土気やから木気の雷はホンマアカンねん〜っ！」

すると、女は速攻で泣きそうな顔になり、本気で嫌がりやがった。

そんな顔をされると俺もあまり強く言えなくなってしまうのだが。

「甘えたことを言うな！」

それに喝を入れたのは、同じ女であるシデンだった。そしてなおもぐずるその女の頭を、手に持った棒状の何かでボコンと殴りつけた。

「な、なにすんねんっ！」

黄色い女も、いきなり殴られてさすがに怒ったらしい。そして片手を振り上げたのだが、その自分の手を見てからなぜか固まってしまった。

「……………あれ、うちの杖、どこやった？」

「あれじゃないのか？」

なんとなく目に付いた、ガラス越しに部屋の中に見えたものを指差す。長さは1メートルほどだろうか、見覚えの無い琥珀色をしたのっぺりした丸棒が、部屋の床に無造作に転がっている。

「わあーっ、なんであんなとこにあんねんっ！」

どうやら探しているのは本当にあの棒だったらしい。黄色い女は、窓にべたっとな張り付いて、恨めしそうに中を覗き込んだ。あいつにとっては相当大事なものみたいだ。

が、その直後バレンシアのスパークが目の前に炸裂し（ガラスで遮られたので直接は当たらなかったと思うが）、黄色い女は悲鳴をあげてひっくり返るようにしてそこから離れた。

「わたたたたつ！？」

「うおっ、と！？」

その黄色い女がそのまま転倒しそうになったのを、とっさに受け止める。

そこで一瞬、目があってしまった。改めて見ると結構かわいいぞ、こいつ。でも、金色の瞳をしているところは、普通じゃないよなあ。カラコン入れているなんてのはないだろうし。

「何をしておるのだあ！」

ポゴン！

突然、何か固い物が俺の頭にぶち当たった。

10・なにがお嬢様だ その21

「いつてえーっ！」

「痛いだろう、そうだろう、殴っておるのだから痛いはずであろう！このっ！」

シデンだった。手に持った棒状の何かで、俺のことをぼこぼここと殴ってくる。

「うわっ、いてっ、やめっ」

「貴様は、貴様という奴はっ！」

「ちよつと、待てっ、俺が何をしたっ」

シデンの攻撃をガードしながら、彼女が手に持っている得物を見る。それは、木製の握りがついた黒い棒で、先端に半球形のものがついている。なんか見たことがあるが、それはいつもは違つとこで見ていたような……あ、思い出した。

「ってソレ、紅娘のおたまじゃねえか！」

受け止めながら、思わず声に出してしまう。なんでシデンが持つてるんだ？しかも、それにはなぜか、いつもはない黒いコードのようなものが先のほうに縛りつけてある。そしてそのコードは、ベランダの手すりを乗り越え、その向こうへと垂れ下がっている。

コードの先を追ってベランダの手すりのむこうを覗き込む。

「あ、将仁サン！無事だたアルか！」

「まずは一安心でしょう」

手すりのむこうは屋根が無いので、そのまま飛び降りるとうちの庭に出る。そしてそこに、2人の人影がこっちを見上げているのが見えた。紅娘と、テルミだ。

「将仁サン、さっきシデンサンに、急仕立ての手持ち避雷針持たせたアル！」

「こっちはアースをしてあるので大丈夫でしょう！」

そして続けざまそう叫んでくる。どうやら、アレは紅娘がシデンに

渡したものらしい。紅娘が投げたのかシデンが捕りに行ったのかは判らんがそんなことはどうでもいい。

これ（避雷針）を渡したということは、つまりこっちで何とかしろということだ。テルミは（プラズマという名前は冠しているが）電気製品だから過電流は苦手なんだろうが、紅娘はそういう意味じゃ鉄の体を持っているんだから電撃の一発や二発は平気そうなもんだが。やっぱり、少々コゲていたような気もするし、さっき直撃を食らったせいでちょっとびびったってところか。

振り向くと、シデンがあいかわらずあの黄色い女に掴みかかっている。

「さあとつとと白状しろ。貴様、誰の手の者だ。なにを探る間者だ」

「は、白状で、うちまだなんもしてへんてー！」

「当家の誰の断りも無く闖入した時点で、何もするつもりは無いわけがなかるう！」

「そら、そらそうやけどお、なんもでけへんかったんやて〜！」
「ということは、なにかやるつもりではいたんだな、こいつは。」

ま、それはそれとして。

「とにかく。なんとかしてバレンシアにこのメガネを掛けなきゃならん」

シデンと、名前のわからない黄色い女を前にして、俺はさつき確保した丸眼鏡を二人に見せた。メガネの効果については確証はないが、まずはやってみるしかない。

「シデン、お前はその避雷針を持って、俺と来い。バレンシアの電撃をそらすことに集中してくれ」

「承知した」

シデンは俺の指示にふたつ返事で答え、避雷針おたまを握りしめる。実際、どの程度電撃をアースしてくれるかは判らないが今はそれに頼るしかない。

「お前は、壁にもぐってバレンシアに近づいて、バレンシアを押さえ込め」

「うえ、う、うちが!?!」

「さっき言った「ひとりでやれ」よりはマシだろう。お前はあの杖も回収しなきゃならないんだろ」

「うづうづう、しゃあないなあ、床はフローリングやから潜れへんしなあ」

「どうやら、材質によって潜れるものとそうでないものがあるらしいが、とにかくそれはあとでいい。」

「しかし、俺も入れて3人か。くそ、テルミか紅娘が来てくれれば」「いや、あと一人だ」

中を伺っていたシデンが、そう言って中を指差した。

つられて中をそつとのぞく。所在無くなったバレンシアが、まるで動物園の檻に入れられた熊みたくうろろしながら、時々電撃を壁や天井に発射している。おかげで部屋の中が色々こげている。

ふと、そのむこうにあるドアが目についた。そして、そのドアの下で何か肌色の物が動いていた。それは音も無く、そして染み出すようなスピードで部屋の中に入ってくる。

それは、人の両手の形をしていた。その手に引っ張られるように腕が出ている。

「あれは、クリンか?」

自分で言っただけで、そして自分で思い直す。ドアの隙間から入るなんて芸当ができるのは、我が家ではクリンしかない。しかし、あんなふうに入ってくるってことは、あっちのドアはカギでもかかっているのだろうか。

「なんやあれ、気味悪いなあ」

俺の横から覗いた黄色い女が、その様を見てつぶやく。お前も、壁から染み出した時点で同類だと思っただが。

やがて、銀色の髪がドアの下から出てきて、そして顔が潜り抜けた。色白の顔が、一安心したという感じでほっとため息をついた。その時だ。

「ひゃあああああああああ!?!」

クリンの悲鳴が上がった。声をあげたのか、気付いたバレンシアがそっちを向いて、電撃をぶっ放したのだ。

あんな状況でかわせるわけがない。電撃は見事にクリンに命中し、彼女は情けない悲鳴をあげた。

「くそっ！続け！」

見ているわけにはいかない。俺は、ガラス戸を開けると、中に飛び込んだ。

10・なにがお嬢様だ その22

気付いたバレンシアがこちらを向く。幸い、さっきクリンに放ったおかげで電撃は飛んでこない。

「くは!？」

体勢を低くし、体当たりでバレンシアのことを部屋の壁に押し付ける。なんか肩に柔らかい感触があったが、今回はかりは楽しむ余裕は無い。

「じれ8wれt0れkmhtrrhをpsdtrwy！」

「ぬうつ！」

押さえつけられたバレンシアが叫ぶ。電撃を放つたらしいが、その電撃は俺の横を通り過ぎ、シデンが持っている避雷針へ飛んでいく。そして。

「すんまへんな」

俺がバレンシアを押し付けた、その壁からあの黄色い女の手と頭が出てきて、バレンシアの髪の毛と片手を掴んで身動きを、特に首の動きを封じる。

「うまいぞ」

ほとんど説明をしなかったにも関わらず、二人とも思ったとおりに動いている。その隙に、俺はメガネを取り出してつるを伸ばす。

「悪いな、乱暴して」

電撃が収まったタイミングを見計らい、バレンシアの顔を覗きこんで声をかける。白く光る目が俺を見たような気がする。

そこに、彼女愛用の丸眼鏡をかける。バレンシアは、あっさりとメガネを掛けられてくれた。

そして、俺の仮定は、どうやら正解のようだった。

ワケのわからない雑音をわめきちらし、じたばたと暴れようとするのは変わらないのだが、電撃を発射することは無くなったのだ。

「な、なにがあったんですかあ」

その俺達の足の下で、場にそぐわない声がした。

見ると、クリンの体が腰あたりまで出てきていた。さっき電撃を喰らったというのに、大丈夫なんだろうか。

「おい、クリン、怪我はないか？」

「あ、は、はい、私はもともと絶縁体ですからあ」

絶縁体に電撃は効かないということらしい。だったら、こいつに目隠しさせれば良かったな。

「まあいい。おい、シデン。その避雷針を返して、ついでにテルミと紅娘を呼んでこい。クリンはバレンシアを押さえるのを手伝え。

特に手を押さえておけ」

「了解した」

「は、はい」

俺の言葉に従い、シデンはおたまを持ったまま部屋を飛び出し、そしてクリンはまるでナメクジのように這いあがりながら、バレンシアの体を抱え込んだ。

「なあ、うち、そろそろ帰ってもええ??」

そのとき、壁から上半身だけ出したあの黄色い女が声を掛けてきた。

「ほら、この人のメガネもかけはったし、うちの杖も返してもらたさかい」

「杖？」

「せや」

その時、やっと気がついた。床に転がっていたあの琥珀色の杖が、跡形も無く消えているのを。そしてその杖が、バレンシアの横の壁から生えた手に収まっていることを。

「わっこらちよつと待て！」

「ほなお先っ！」

捕まえようと左手を離れた時には、黄色い女は杖もろとも壁の中に消えていた。

「くぁw背drftgよふじこ1p;@:~!」

ソレと同時に、首が自由になったバレンシアが暴れようとしたので、

また押さえ込みにかかる。

そして、下から3人が上がってくるまで、俺は巨乳美女を壁際に押さえつけるといふ、傍から見たら犯罪者と思われそうなことを続けるを得なかったのである。

10・なにがお嬢様だ その23

「なるほどねえ」

荷造り用のビニール紐で手足を縛られ、床に転がされたバレンシアを見たヒビキがそう漏らす。バレンシアは、逃げようとしているのか必死に体をよじるが、じたばたと暴れるだけとなっている。さらに今は口にさるぐつわを噛まされており、まともに声を上げることすら出来ない。

しかも、メガネが落ちて電撃を撒き散らさないようメガネの上からタオルを巻いて、目隠しのようにしている。

なんというか、人さらいが人質を絶対に逃がさないためにしているような姿だ。ちょっとやりすぎのような感じもするが、今のバレンシアは何をするか判らないのではないだろうか。

俺達は今、買い物から帰って来たヒビキとレイカを交え、未だに正気に戻らないバレンシアを前にリビングに全員集合していた。いつもならレイカたちが夕食の支度を始める時間だが、いまはそんな状況ではないからだ。

「それにしても、その壁から出てきた女、というのを逃がしたのは手痛いわね」

「う、す、すまん」

「おいレイカ、過ぎたことをどうこう言ってもじゃあねえだろ」

「ヒビキサンの言うとおりアル、カベから出てきてカベの中に消えたじゃ、将仁サンが追いかけるは不可能アル」

「今はそれより、バレンシアさんを戻すのが先でしょう」

「しかし戻すと言ってもどうすれば良い？叩けば治るといふものではないのだろう」

「はあ、困りましたねえ、こういう事態に一番詳しいのが、バレンシアさんだというのに」

そうやって、みんなで車座になって頭をつき合わせているのだが、

なにしろそつち方面に詳しい奴がないので、正直手詰まりなのだ。そんなときだ。

ききーっ、というブレーキ音が、外から聞こえてきた。どうやら、鏡介とケイが帰って来たらしい。

「私が、行って来ましょう」

「ああ、頼む」

テルミが立ち上がりながら口を開いたので、申し訳ないが二人の迎えは彼女に頼むことにする。

「ただいまー！」

「すいません、遅くなりましたー」

間もなく、ケイの元気な声と、鏡介のちよいとのんびりした声が聞こえる。

「あーっ、もう今日は疲れちゃっ……」

「結局ほとんど何も食べないで……」

そしてテルミに出迎えられながらリビングへとやってきて、そして絶句する。当たり前だ。この重い雰囲気に加え、バレンシアが手足を縛られ、さるぐつわを噛まされ、床に転がされているんだから。

「な、お兄ちゃん、バレンシアちゃん、どうしたの!？」

「何があつたんすか!？」

二人がそんな疑問を持つのも当然だ。

その二人のため、さっきあったことを話す。メガネを外してみせればすぐに納得してもらえらるんだろっが、ここには雷に弱い電気製品たちが多いので危険すぎる。

「ねえお兄ちゃん。ケイが、バレンシアちゃんの考えていることを見てみよっか？」

ケイがそう申し出てくれた。さっき、俺もちょっと考えた事ではあるが、却下させてもらった。なぜかって、もしこれがウイルスの仕事だとすると、それを見てしまったケイにまでうつる可能性があるからだ。パソコンから携帯電話へ感染するウイルスがあるかどうかは知らんが、データをやり取りすることはできるらしいから、無い

とは言えない。

こればかりは、常盤さんに相談しても無駄だろう。あの人は極めてアナクロな人だから、最先端技術のことは賀茂さんの英語なみにダメだからだ。

しかし、医者に連れて行くってわけにもいかないし、かといって修理屋に頼むってわけにもいかないし、全くどうしたもんか。

「……あ、まさか」

みんなして頭を突き合わせて考えていたところ、不意に鏡介が声を上げた。

何事かと視線がそつちに集中する中で、鏡介は制服の内ポケットから何か四角いものを取り出してみんなに見せた。

それは、どこにでもありそうなごく普通のCDのようだった。見ただけではCDかDVDかは判らないが、とにかくそういう記録媒体だ。

「なんだかよく判らないんすけど、パーティーの帰り際に、近衛さんに渡されたんすよ。何が入っているのか教えて貰えなかったんで帰ったらバレンシアさんかテルミさんに見て貰おうかと思ってたところなんです」

鏡介からそのディスクを受け取って見てみる。一見したところただのCDで、急ごしらえだったのかラベルも何もついていない。ケースのほうも同じでやはり何も書かれていない。

「ちよつと、見せてもらっても、いいでしょうか？」

そのディスクを見たテルミがそう言うてきたので、渡すことにする。テルミは元々DVD再生機能があるテレビだったから、限定的ではあるが中を見ることができるとだ。

テルミは、ケースからディスクを取り出すと、表裏を確認した上で、エプロンの胸のところにあるポケットにそのディスクを差し込んだ。何のまじないだ、と思うかもしれないが、実はあのポケットが、彼女のDVD再生機になっているのだ。

目を閉じ、テルミはそのディスクの中身を調べ始める。

その場にいた全員（正気を失っているバレンシアを除く）が固唾を飲んで見守る中、しばらくするとテルミのポケットからディスクがにゅーっと半分ほど顔を出した

「はぁ、残念ながら、音声でも画像でもないのでしょうか。私では見ることが出来なかったでしょう」

エプロンから出てきたディスクをケースに収めながら、本当に残念そうにテルミがそう言った。

「それじゃあ、やっぱりパソコンのソフトなのかなあ」

ケイがつぶやく。それは間違いないだろう。だが今のバレンシアに、読むことができるのだろうか。それに、仮に読めたとして、このディスクの中身がもつと悪質なものだったら、それこそバレンシアは再起不能になるかもしれない。

だが、今、他にできることがないのも確かなのだ。

「やらせてみるつきゃ、ないんじゃないかい？」

逡巡を繰り返していた、俺の背中を押したのは、ヒビキが発したその言葉だった。

「いいかげん、押さえるのも飽きてきたし、腹も減ったし」

「うむ、我も同感だ。下手の考え休むに似たり、と言うからなら」
シデンがそれに同意する。

おかげで。俺も腹が決まった。

火事場のバカ力とでも言うのだろうか。我が家一番のインドア派で頭脳労働者なバレンシアが、ヒビキに男2人を混ぜた8人がかりでも抑えきれないほどの力で暴れている。

「落ちつけ、暴れるなバレンシア！」

暴れるバレンシアを懸命に押さえつけながら、俺は必死になって語りかける。

その甲斐があつたのか、それともさっきのディスクに入ったプログラムが本当に効果があつたのか。バレンシアの動きが、少しずつではあるが大人しくなってきた。

やがて、バレンシアはピクリとも動かなくなった。

「お、収まった、か？」

動かなくなつたのを見て、みんながそろそろと離れていく。

「……………ん、ん……………」

息を呑んで見守っていると、バレンシアが、まるで今日覚めたような声を出した。

「ん、ん？んーん、んんんんっ？」

そして、さっきまでのワケのわからない声とは違う、普通に喋っているのにさるぐつわを噛まされているために聞き取れないという様子の声が、バレンシアの口から聞こえてきた。

「ぶはーっ、very chokkingだつたデース」

「おい、バレンシア、大丈夫か？」

「そのvoiceは、Masterデスか？Why ミーがblindされているデース！？」

「なんでって、貴様、覚えておらぬのか！？あれだけ暴れて迷惑を掛け捲つたことを」

「Whatをsayするデース！？In any case、このblindfoldをtake offするデース、I can't see anythingデース！」

どうも話がかみ合わない。覚えてないのだろうか。

「Hey, Master! Why ミーがblindされているの

か、explain（説明）するデース！」
目隠しを外したバレンシアの目は、はつきりとした意思が込められ
た、いつもの蒼い瞳になっていた。

10・なにがお嬢様だ その25

「うう、なんか今日はいつも以上に色々あったなあ」

みんなで食卓を囲んで夕食を食べていると、そんな言葉が口をついて出てきた。

今日は、一番の厄介ごとだと思っていたお嬢様のパーティーを鏡介に任せたら少しは楽が出来るかと思っただが、バレンシアの騒ぎで逆に疲れてしまった。ぶつけることこそ無かったが、また顔が腫れてきたのかビリビリする。

「うう、very very sorryデース、everyoneにtroubleかけてしまったデース」

そしてその、一番手近な原因を作ってくれたバレンシアだが、さすがに大人しくしている。

とりあえず、なんであんなことになったのか、バレンシアに聞いてみた。

「Hmm、ミーもremember not well（よく覚えていない）なのデス。But、beforeミーのmemoryがlostする時、ミーはKonoeのhost computerにlinkしたデス」

すると、バレンシアはこんなことを言い出した。

なんでも、最初は直接関係ないところから調べていたのだが、大した情報が得られなかったため、更なる情報を得るために危険を承知で近衛の家のホストコンピュータに入り込んだらしい。

つまり、バレンシアは、近衛の家のコンピュータにハッキングを仕掛けたのだ。

そして、各種セキュリティを潜り抜け、入り込むことには成功したのだが、いざ調べようとするとたんに攻撃されてしまい、そこから先の記憶がないらしい。

ここは、よくできたなと誉めるべきなのか、無茶やったもんだと呆

れるべきなのか。

「Next time は no problem デース！ミールに same type な attack は not work デース！」
いずれにしろ、攻撃に耐えられなかったのがよほど悔しかったらしく、バレンシアはそう叫びながら箸を振り回す。飯を食ってる最中にそんなことをするのは止めて欲しいんだが。

と。その時。

ぶぐん。

どこからか、八工の羽音が聞こえてきた。レイカと紅娘の料理の匂いでも誘われたのだろうか。

正直、メシ時には聞きたくない音だな」と思った時。

「Shut up！」

バレンシアの声がした。それだけじゃない。バチツ！という音と共に、バレンシアのほうから一瞬だけ火花が飛び散ったのだ。その火花が消えると、八工の羽音もなくなっていた。

火花の先には、自分のめがねを掛けなおすバレンシアの姿があった。そう。あれのせいなのかどうかは不明だが、バレンシアの目は今でも、メガネを外すことで電撃を放つことができるようになってしまったのだ。昔の歌謡曲に「君の瞳は 万ボルト」なんてのがあったが、それを素でやるとは、また一歩、うちのモノが非常に磨きをかけたつてところか。

そして、今の光景を見ても、うちのモノたちはほとんど驚かない。あえていえば、過電流に弱い電気製品チーム、つまりケイ、テルミ、レイカ、そしてシデンは少しびくっとなったが、それ以外のメンバーはもう慣れたもので、おしゃべりなんかしながら平然とメシを食っている。

俺も含めてだが、みんな、よほどのものじゃなければ驚かなくなってきたな。

「へー、ロボットか」

「ええ、いやゝもう、科学技術はココまで来たかつて驚きましたよ」

それが証拠に、話題はすでに鏡介が話す近衛家の突撃レポートに移っている。まあ俺も聞きたいからいいんだけどな。特に、あいつの家に行ったっていう戦闘アンドロイド、「望月ナミ」の話は俺も大好きだ。人型ロボットは男のロマンだ。今度行ったら是非見せてもらおう。

10・なにがお嬢様だ その26

「そういえば常盤さん。六角って家、知ってます?」

その話の中で、鏡介がふと聞き覚えの無い名前を言った。六角とはまた変わった苗字だな。

だがその瞬間、常盤さんの動きが止まった。よっぽど、聞き覚えがある名前みたいだ。

「おい鏡介、誰だよそれ?」

「あ、パーティーに来ていた人で、ちょっと話をしたんです。そこで、代々西園寺の補佐をしている家系だって言ってたんで、本当かなと」

「えっとね、こんな人」

ケイが、その六角という奴の写メを見せてくれる。鼻筋が通ったイケメンだ。ただ、目つきの鋭さが、裏で何かやってそうな感じをかもしている。

「……………常盤さん、知ってるんですか?」

「……………ええ、知っています」

常盤さんは、箸を置きながら、すっごく真面目な顔で俺の質問に答えた。

「鏡介さんが仰る通り、六角家は古くから西園寺家に仕え、補佐役を担ってきた一族です」

どうやら、本当らしい。マンガとかだと、お金持ちによくある設定だが、そういうのが実在すると言われると、凄いなと思うと同時に、生まれたときからそういう役目を負わされるのがちょっと気の毒な気もする。

「ですが、今はそうではありません」

だが、常盤さんはさっき自分が言ったことを速攻で否定した。

「違うとはどういうことだ?下克上でもしたというのか」

同じようなことを思ったらしいシデンが、尋問みたいな口調で問い

返す。だがいくらなんでも下克上は昔過ぎるだろう。常盤さんの言葉から推測するに、“そうではなくなつた”のはそんなに昔じゃなさそうだし。

「ええ、見方によつてはそうかもしれない。彼、六角隼人の父親、六角幸四郎は、一族を引き連れ、西園寺の下を離れましたから」

「それつて、首にしたんじゃないのか？」

「そのようなことはありません。傍から見たらそう映つたとしても、そうなる原因を作つたのは六角家のほうです」

なんでも、その六角幸四郎という男は、俺の實の母にあたる先代の西園寺静香にちよつかいを出してふられ、それでもしつこく迫つて、ついに本格的に嫌われ、傷心して西園寺を去つたんだそうだ。

なんつー女々しい奴。そんなのが補佐してたんじゃ、西園寺の家が滅ぶのも当然だ。

しかし、今になつて声をかけてくるつてことは、やっぱり西園寺の補佐に戻りたいのかな。

「ただね、その隼人さんツスけどね。なんか妙なことを言つてたんよ。常盤さんのこと、注意したほうがいいつて」

そのことに気がついていいのかいなのか。鏡介は飯を食いながら言葉を続けた。

「注意つて、なんだ？」

「聞く必要はないと思いますよ？正直言つて、その隼人さんつて人の話つて、将仁さんにあることないこと吹き込もうとしてるのが見え見えでしたから」

珍しく、鏡介が否定的なことを言う。

「へえ。そいつのほうがずっと怪しいんじゃないのかい？」

「そうですねえ」

ヒビキヤクリンがそれに賛同する。まあそれは俺も否定しない。確かに、今の俺にはその六角つて奴より常盤さんのほうが、一緒に暮らしているわけだし、ずっと信頼できる。

「けど、その六角つて奴の素性ははっきりしてるんだろ？西園寺家

の補佐に戻りたいって言うなら、もどしてやってもいいんじゃないか？」

「私は反対でしょう」

最初に口を開いたのは、以外にもそういうことを一番言わなさそうなテルミだった。

「将仁さんも仰ったでしょう、そんな奴が補佐をしていたら滅んで当然と」

「そうね。将仁くんが落ちぶれて不幸になるのは、私としても見たくない姿だから」

「うむ。そもそも、自分で嫌だから離れたというのに今更戻ろうとするその根性が気に食わぬ」

それに続いて、口々に俺の意見を拒否にかかる。会った事もないのに、六角って奴のことが相当気に食わないらしい。まあ、俺もそこまでして戻してやる義務も、義理もないよな。俺は、カレイの煮つけを口に運びながらそんなことを考えていた。

10・なにがお嬢様だ その27

「で、りんご麟士。貴様はそれでおめおめと逃げ帰って来たと申すか」
「うう、しゃあないやろ。あんなん聞いてへんかつたんやもん」

三国志にでも出てきそうな緑青色の甲冑を身にまとい、目元を小さな角が生えた仮面で隠した、武人然とした若い女の前に、中国の道士が着るようなだぶだぶの黄色い服を身に着け、前に小さな角をはやした四角い緑色の帽子を被った女がしゃがみこんでいる。そして、武人風の女はどう見ても腹を立てており、その矛先は明らかに黄色い道服の女に向けられている。

「のみならず、敵方の手助けをしてしまうなんて。獣類の長が聞いて呆れますわ」

それを横で見っていた、燃えるように赤い着物を着崩した妙齡の赤い髪のが、辛らつな口調でそう言い放つ。

「そない言うても、炎雀はん。うち、ホンマ雷だけは苦手なんやもん」

「ええい、ならば貴様そこになおれ！この龍樹自らが、恐れなくなるよう鍛えなおしてくれるわ！」

黄色い女、麟士の言いかたが気に障ったのか。吼えるような口調で、龍樹と名乗った甲冑の武人が、腰に下げていた剣を引き抜いた。

意外なことに、その剣は刀身が木で作られていた。反りはなく、両刃の形をしており、中ほどに、北斗七星を思わせる並びに穴が7つ開いているが、それ以外は特に目立ったところの無い剣だ。

だが、龍樹がその剣を抜き払って横に構えた瞬間。その刀身の表面が青白い光で包まれ、そしてその周りを小さな稲妻が取り囲むように光りだした。

雷が嫌い、というのは本当なのだろう。麟士と呼ばれた黄色い服の女は、小さく悲鳴をあげると、反射的にその場から一步飛びのいた。「貴様、逃げるなっ！」

それを追うように、龍樹が稲妻を帯びた剣を振りかざして駆け出す。だが、それを振り下ろされた瞬間。

何者かの手が、稲妻をまとったその剣を、真正面から掴んでいた。それは普通の手ではなく、金属的光沢を帯びた、しかし関節のつなぎ目などは全く見えないというものだ。

「おい龍樹、そんな目くじら立てなくなたっていいだろ。誰だって苦手なことの一つや二つはあるんだからよ」

剣を掴みながら、その手の主が口を開く。さらしを巻いて法被を羽織り、その上から襷がけをした、ヤマアラシを連想させる髪型の、筋肉質で背の高い女だ。

「虎鉄、貴様邪魔立てするつもりか」

「邪魔するつもりはねえけどよ、人間以上に五行に縛られるあたいらが相克を覆すのは、並大抵のこっちゃねえんだぞ？」

「うっ、く、そ、それは」

凶星なのか龍樹が口ごもる。

「でも麟土さん。本当にそれ以上のことは話していませんわよね？」

「そのへんは安心してや、そのへんは聞きもされへんかつてな」

一方で、龍樹から逃れた麟土は、赤い着物の女、炎雀のところへ逃れ、話をしている。

「おいあんじゅ、とめなくていいのかよ？」

そして、それを少し離れたところで見ている者がいた。

背中に黒い亀の甲羅を背負い、真つ黒な後ろ髪を体に何度も巻きつけ、その先端を手に持ったヤスの尻に繫げている、他の4人とは少し歳が離れて見える少年と、ニコニコしながらその少年を後ろから抱きしめ、時おり少年の頭を撫でたりしている、これまた黒い髪を、こちらはそのまま背中に流した、高校生ぐらいの女だ。

「ん？玄水、心配してるん？」

「べっ、べつにしんぱいなんかしてねーけど、でも」

玄水と呼ばれた少年がそう答えると、杏寿と呼ばれた黒髪の女は何を思ったかさらにぎゅっと少年のことを抱きしめた。

「んもっつ、ほんま玄水はええ子どすなあ〜っ」

「ひとのはなしをきけ〜！」

玄水は、自分の首まわりに回された腕を掴む。今の状況が恥ずかしいのか、顔が赤くなっている。その様は、同年代の男の子のそれとなんら変わらない。

「そこーっ！玄水！いつまで杏寿様にくっついておるのだ！離れぬか！」

すると、さっきまで虎鉄と口論していた龍樹が、今度は剣の切っ先を玄水に向けてきた。

「はなれぬかつて、りゅーじゅ、そーゆーコトはおいらじゃなくてあんじゅにいえよ！」

負けじと少年のほうも、ヤスを両手に構えて言い返す。

そして、杏寿がぱつと手を放すと同時に、玄水はヤスを手に龍樹へ飛びかかっていく。龍樹は、それを手にした木剣で受け止める。

「そーいや、炎雀はんもどっか行つとつたみたいやけど、どこ行つてたん？」

一方で、黄色い服の女、麟土が、赤い着物の女、炎雀に問いかける。

「ええ、全く人使いの荒いこと」

炎雀は、それに対し少し大げさにため息をついてみせる。そのため息の中に、オレンジ色の炎が混じる。

「やはり、空を飛べる、というのには、使い勝手が良いようですわ」

「ま、夜になつたら使いものにならねえけどな」

そこに法被姿の大女、虎鉄が口を出してくる。

「ちよつと虎鉄さん。余計なことを言わないで下さる！？」

案の定、炎雀はひるむことなくつかつかかかっていく。

「余計じゃねえだろうがよ、鳥目のトリ女が偉そうに」

「ふっ、そういうことは、ちゃんと役に立ってから仰つて下さらないかしら」

「んだとてめえ、あたいが役立たずだつて言うのかよ？」

「あら、でかい図体して、役に立ったことがおありかしら？」

今にもつかみ合いを始めそうな様子の虎鉄と炎雀。

「それはそうと、麟土はん。お願いしとった件、ちゃんとやってくらいました？」

それを止めようともせず、杏寿は口を開いた。

「え、ええんでつか、この状況、止めへんで」

「いつもこんなんやさかい、気にせんかてよろしおす。それより、麟土はん。どない按配ですのん？」

「あう、んー、いちおうやって来ましたけど、でもあんまし気が乗らへんなあ」

「お仕事、お仕事。」

そして、麟土は、不満を口にしつつ、得てきた情報を杏寿に話したのだった。

10・なにがお嬢様だ その27（後書き）

どうも、作者です。

この拙い作品を続けて読んで下さっている奇特な方はお気づきかも
痴れませんが。

あとがきがあるということは、つまり。この章が終わりだ、という
ことです。

そして次から第11章に入りますが、今までは結構書き溜めがあ
ったのですが、今回は完全に無くなってしまったので、お休みも長
くなってしまいそうです。

下手したら、年内再開は難しいかもしれません。

もし、覚えていて下さる方がいましたら、またその時お会いしまし
よう。

それでは。

11. そしてみんな動かなくなった その1

9月24日

「ん、もう朝か」

日曜や休日は、起こされなくても不思議と早く目が覚める。昨夜は寝苦しいと言うこともなく、久しぶりに気分のいい朝だった。

頬に手を当てる。さすがに一晩安静にしていたので、腫れは引いてきている。

一度大きくのびをしてから、部屋の床に目をやると、鏡介が無防備な姿で寝息を立てている。

うーん、俺の寝顔ってこんななのか。そのだらしなさに朝からちょっと悲しくなったが、気を取り直してベッドから降りると、起こさないようそつと部屋を出た。

廊下に出ると、いつもどおりヒビキのイビキが聞こえた。ドア越しでもこれなんだから、同じ部屋で寝たらどのぐらいうるさいんだろう。どっかのバイク屋に頼んで、排気音を小さくしてもらったほうがいいかもしれない。

下につくと、トントントントンというまな板の音と、暖かい味噌汁のにおいが漂ってきて、腹がぐうと音を立ててしまった。

キッチンを覗くと、白い着物に黒い髪の毛、季節外れな雪女が、シンクに向かって何かを刻んでいるところだった。

「あら将仁くん。随分と早起きね」

その着物の女、レイカがこっちに気づいて。声をかけてくる。

「ごめんなさい、朝ご飯はまだ出来ていないの。あと10分ほど待って」

「あ、いいよいよそんなに急がなくても」

レイカのことだから、早くやってもらっても問題ないんだろうが、ここはそう言うておく。なにしろ今日は日曜、急ぐ必要は全くないのだ。

「ん、こいつもよく寝てるなー」

その足でリビングに向かうと、そこに置いてある段ボール箱をしゃがみこんで覗く。中では、金色のふさふさした毛をした子狐、魅尾が、とぐろを巻いて寝ている。

狐つてのは夜行性だと思っんだが、俺はこいつが箱から自力で出たところを見たことがない。その気になれば出られないほどの高さでもないと思っんだが。

思い返すと、昨日はシデンがこいつを引っ張り出して抱いたりじやれたりしていたな。それで疲れたのかな？

「ま、寝る子は育つって言うし」

育って大人の狐になるうが野生に返ろうが俺は構わないが、それ以前に早いとこ元気になって、ちゃんと予防接種とかを受けてもらいたいもんだ。

「あ、将仁さん。おはようございます」

背中を軽くなでてその手触りを楽しんでいると、今起きてきたらしいテルミが、俺を見つけて驚きながらもぺこりと挨拶をしてくる。

まあ、いつもなら起こされるまで寝てるヤツが何の前触れもなく早起したんだから驚かれてもしようがないかな。

「ああ、おはよう」

「ええと、何か見るのでしょうか？」

「いや、いいよ。メシもまだだし」

そして立ち上がる。

「ちょっと新聞取ってくる」

「えっ、あ、私が取って来ましょうっ！」

すると、まだちょっと眠そうだったテルミが、目を見開いて速攻でそう答えてきた。

「……………そうか？じゃあ、雨戸でも開けて……………」

「そ、それも私の仕事でしょう！将仁さんは、大人しくしてほしいのでしょっつー！」

俺がなにか手伝おうとすると、テルミは目をむいて止めさせようと

する。こいつは、まだ俺が「勝手に擬人化能力を発動させる」ことを恐れているらしい。

「あのな、テルミ。俺だって多少の学習能力ぐらいはあるぞ？何をやったら発動するかは推測ぐらいできるって。だいたい、紅娘が最後に現れて、何日経ったと思ってるんだ？」

テルミはそう言い切った俺をうるんな目で見ている。俺の言うことがそんなに信用できないのだろうか。確かにうちの擬人たちはみんな無意識で呼んでいるが、さすがに9回もやれば傾向は判る。だから、これ以上何かあったらそれは俺のせいじゃないぞ。

「んじゃ新聞取ってくる」

そんな目をするテルミを尻目に、俺は玄関へ行つて、サンダルがないのでスニーカーを履く。

「心配すんなって」

不安なのかそこまで追いかけてきたテルミにそう言つて、俺は外に出た。

11・そしてみんな動かなくなった その1（後書き）

どうも、作者です。

年が明けて、ようやく再開となりました。

タイトルを見て、なんのこっちゃと思った方もいるかもしれませんが、しばらくお付き合いください。

11. そしてみんな動かなくなった その2

あまりすつきりしない空模様だ。そうか、太陽が隠れていたから過ごしやすかったのか。まだ暑い日が続くとはいえ、9月も後半になればねえ。

そんなことを考えながら郵便受けへ向かい、新聞を取り出す。この新聞は常盤さんがとっているやつで、俺は一面とテレビ欄ぐらいしか見ない。今日は日曜なので日曜版が入っていて、いつもより少し厚い。

「そついや、この新聞の日曜版って、中見たことないんだよな」
ふとそう思って、日曜版を中から引っ張り出す。

「わっ!?!」

そして、手を滑らせて、チラシを庭にぶちまけてしまった。

これはヤバイ。ヤバイが、このままでいるのはもつとまずいので、とにかく拾うことにした。チラシのほとんどはどうでもいいようなものだが、中にはスーパ―とかのチラシもあり、レイカとかが見るだろうから疎かにはできない。

「えーと、他には無いよな」

ひととおりかき集めて、チラシが落ちてないことを確認する。すると、さつきはなかったはずのものが、視界に入ってきた。

それは、なんか見覚えのある白いネコだった。正確に言うと、白地に黒い縞という、ミニチュアの白い虎みたいなネコだ。そいつが、なぜか新聞を啜えてちょこんと座ってこっちを見ていた。

自分が持っている紙の束を見ると、一番重要なはずの通常版がない。ということはこのネコが啜えているのが、その通常版なんだろう。

「おい、それは魚じゃねーぞ、食っても美味くないから、ほら、返せ」

日曜版とチラシだけ持って行ってもしょうがないので、そいつの前にしゃがみこんで、そのネコに新聞を離すよう言っ手を出す。

逃げる様子がないので、そーっと手を伸ばす。引っ搔かれるかもしれないが、テルミに啖呵切っちゃった以上は持つていかないとダメだろう。

そして、あと1センチぐらいまで近づいた時だ。

さっきまでじっとしていた白ネコが、まるでスイッチが入ったように全力で走り出したのだ。しかも、新聞を啜えたまままでだ。

「わっ、こら待て！」

つまり、新聞を持って逃げ出しやがったのだ。

とっさに、日曜版とチラシを丸めて郵便受けに突っ込み、そのネコを追いかける。スニーカーを履いてきて良かった。

道路に出ると、白いネコが左手のほうへと走っていくのが見えたので、ダツシュで追いかける。

登場人物が年をとらない某アニメのオープニングテーマよろしく、ネコを追いかけることになってしまった。ネコが啜えているのは魚ではなく、追いかける俺は裸足ではないが。

「くそ、あれ？」

つて、なんだこれ？あのネコ、めちゃくちゃ足が速い。全然追いつかない。

「まてーっ！」

もう恥も外聞もなく、全速力で追いかける。朝の住宅街を大声を出しながら走る、というのは色々と問題なんだが、そんな場合ではない。

そしてどの位追いかけただろう。

俺がいい加減疲れてきたところで、その白ネコが突然立ち止まった。そして振り向くと、今まで決して離そうとしなかった今日の新聞を、あっさりと地面に落とすのだ。

へろへろになりながらなんとか追いつき、新聞を拾い上げたときには、そのネコは近くの藪へと消えていた。

「はあ、はあ、な、なんだったんだ」

新聞を取りに行くのにいつまでかかっているんだ、と言われてしま

いそうだが、起き抜けで準備運動もなしに全力疾走したためか、なかなか息が収まらない。
ふと周りを見る。

「……どこだ、ここ？」

我に返り、周りを見回すと、見覚えの無い場所だった。

このへんは住宅地なので、電柱を見れば住所が判る。それを頼りに、ちよつと恥ずかしい思いをしながら、俺はなんとか自分の家に帰ってきたのだった。

思えば、これが今日の午後、わが身に降りかかる災厄のプロローグだったのかもしれない。

11. そしてみんな動かなくなった その3

ボスツ、ボスツ、ドスツ。

ボクシングジムに、鈍い音が響く。サンドバッグをぶん殴る音だ。

そしてそれを殴っているのは俺だ。練習のひとつとして、1ラウンド3分間の打ち込みをしている。

俺は週一回、日曜日の午前にボクシングジムに通っているのだ。

兄貴、というかうちの実家は、表向きは鍼灸院のくせになぜか真田流兵法術という武術が伝わっている。それを箸を持つ前からやっているうちの兄貴は、吹っかけることこそしないが、とにかくケンカが強い。かく言う俺も、施設にいたころは年上で番長格だった奴をぶちのめしたぐらいにケンカには自信があっただが、それが手も足も出なかった。

今から思えば10歳にもならないガキ相手のケンカにそんな武術を引っ張り出してくるのもかなり大人気ない話だが、その時こてんぱんにされたため、俺の中に「いつか兄貴を叩きのめしたい」という感情が出来たのは事実だ。

その手段として選んだのが、ボクシングだった。

「よし、おわりっ」

ジャージ姿に丸刈りの、ちょっといかついおやっさんが、サンドバッグを殴る俺に声をかけてくる。その声で俺は打ち込みをやめ、肩や手首をほぐす。

このおやっさんは、この三好ジムのオーナーの三好鉄太郎。昔はミドル級で結構ならしたボクサーだったらしいが、そのボクシングで目をやられて引退、でもチャンピオンになる夢が捨てきれずにジムを作ったという、どっかで聞いたような経歴の持ち主だ。

「相変わらずいいパンチだな」

おやっさんはさっきまで俺が叩いていたサンドバッグをぱしばしと手のひらで叩く。

「もうすぐプロテストがあるんだが、お前は どうする？」

「受けるつもりは無いです」

「そう言うな、うちのジムで一年以上やってて、テストを1回も受けたことが無いのはお前だけなんだぞ？腕試しと思っ てやってみろ」

「プロになるつもりはないですから」

おやっさんは、俺がいくら断つても、いつも「そういわずに」と食い下がってくる。

俺をプロにしたがっているのだ。このジムに入って間もないころから、おやっさんは俺のパンチを褒めては「プロテストを受けてみないか」と誘ってくるようになった。

なんでも、俺のパンチは「見えない」そうだ。しかも、プロですら見えないらしい。

プロですら出来ないことを簡単にやってみせるなんて、俺って天才！？なんて自慢したくなるが、実はこれには裏がある。それこそが、実家で中学生までやってきた、真田流兵法術の打法だ。

真田流の打法は、一般的な格闘技に比べ、確かにスピードが速いが、他にも色々あって、非常に見づらく、防御も回避も難しいものらしい。ここから先は親父からの受け売りだが、真田流兵法術は、戦国時代に合戦場で一対多となった際に各個撃破することを想定して作られた、いわゆる無刀取りの一種なんだそう。しかも敵を倒すために時間をかけていたらこっちが倒されてしまうので、一人一人をなるべく短時間で倒すことを理念とし、その結果、この打法になっ たらしい。

まあそれとはかく。そんな奴が目の前にいるんだから、おやっさんが期待したくなるのは判る。

だが、おやっさんには悪いが、俺はボクシングで世界を獲る気はない。そもそもそういつつもりでボクシングをやっているわけではないし、それに真田流の先人であるうちのバカ兄を倒さない限りは、（なれるとは思えないが）仮にチャンピオンになったとしても、目の前に壁があり続けるからだ。

「じゃあちよつと頼まれてほしいんだが」

やがてあきらめたのか、おやつさんはジムの真ん中にあるリングに目を向ける。

そこには、トレーナーを相手にコンビネーションの練習をする、俺より3歳ほど年上の男がいた。

彼は穴山真治。先日、バンタム級のプロライセンスを取得して、プロの仲間入りを果たした男だ。そして、再来週のデビュー戦に向けて目下調整中の身だ。ちなみに、俺より前からジム通いをしている、ボクシングにおける先輩の一人でもある。

そいつのスパリング相手をしてやってくれというのが、おやつさんからの頼みだった。

「全く、先週来ないから、何かあったんじゃないかって心配したんだぜ？」

俺がヘッドギアをつける間、穴山はロープにもたれかかりながら、とても楽しそうに声をかけてくる。

実はこの穴山真治という男、階級が俺とほぼ同じなので、俺がスパリングパートナーを勤めることが多く、結果としてこのジムで俺のパンチを一番食らっている奴だ。はじめは「プロになる気がない奴があんなパンチを打つなんてインチキだ」と言っていたんだが、最近では逆に「見えるパンチのスパリングじゃ物足りない」とわざわざ俺を指名するようになってきた。

おかげで、俺も色々教わることができた。何を隠そう、攻撃は最大の防御を地でいく真田流最大の欠点、「攻撃されたときのガードが甘い」という事実を知ったのも、こいつとスパリングをするようになってからだ。

「まあスパリングだし、互いに7割ぐらいの力で行くか」

「うつつす」

そして、リングの中央で互いの右拳を軽くぶつけるのを合図に、俺らのスパリングが始まった。

11.そしてみんな動かなくなった その4

昼を大きく回ったころ、俺はようやく家に帰って来た。

今回のスパーリングは、あっちもデビューを控えていることもあり1ラウンドだけで終わったが、それでもけっこういいのを喰らってしまった。

特に、先輩が最近得意にしているショートレンジから右腹に喰らったボディブローが強烈で、今でも腹に力を入れるとじわじわと痛くなってくる。まだまだ、防御と回避の練習が必要なようだ。

だが、玄関のドアを開けた、その先に展開する光景に、俺はその痛みも忘れて呆然としてしまった。

なんでって、そりゃ、玄関の上がりかまちに60インチのプラズマテレビがひっくり返っていれば普通は驚くだろう。

「何やってんだ、テルミ」

ひっくり返ったテレビを起こしながら、声をかける。また、こいつら、元のモノになって脅かそうってのか。

それに対し、テレビはウンともスンとも言わない。もしかして拗ねちゃったのかな。

とにかく廊下に転がしておくのはまずいので、リビングに運び入れる。プラズマテレビってのは意外に軽いから、一人で運ぶこともそんなに難しくない。

「よいしょっと」

部屋の隅に立てておく。そして部屋の掛け時計を見ると1時を回っていた。

ふと、リビングからキッチンを覗く。そして、そこにまた変な光景を見た。

ダイニングキッチンの前に、横倒しになった冷蔵庫が、それこそ無造作に投げ出されていた。そして、ガスコンロには鍋が載って、火が点いたままになっている。

「おい、レイカ、ガス点けっぱなしだぞ」

中を見ると、味噌汁らしい茶色の液体が煮立っていた。そしてその冷蔵庫はガスコンロの真ん前に横たわっている。申し訳ないと思いつつもその上に乗ってガスコンロの火を消す。

「全く、お前らしくない」

乗りっぱなしでいるのも悪いだろ。急いで下りて声をかける。レイカは、恥ずかしいのか反応しない。

とにかく、横倒しになったままでは邪魔すぎるので起こすことにする。

「メシはまだか？」

起きたところで声をかけたが、冷蔵庫はやっぱり返事をしない。こう無視されると、なんか不安になる。

が、とりあえず、走って汗をかいたので、着替えるために2階へ上がることにした。

妙に静かだ。どうやら、全員またモノに戻っているらしい。

部屋の真ん中に敷いてある布団では、A3ぐらいの大きさの鏡が夏掛けの下から顔を覗かしていた。夏掛けをはがして覗いてみると、俺の顔が映る。鏡だから当たり前だ。

と、突然それが異常なほど驚いた顔になった。それもただの驚き顔ではなく、まるで何かを訴えようとしているように、身振りを交えてじたばたと何かをしている。

鏡像が自分と違う動きをするなんて普通はホラーな光景だが、動きがなまじコミカルなのでなんだか笑ってしまう。

「おい、鏡介。何か言いたいなら、戻って喋れよ」

すると、鏡に映った俺は、猛烈に首を横に振り、自分の口を叩く。なんだろう？

ふと、その耳に何かの音が聞こえてきた。部屋を出ると、それはただの音ではなく、何かの音楽のようだった。

その音は、2階の南にある部屋から聞こえる。ケイとシデン、それからバレンシアが私室兼寝室として使っている部屋だ。そして流れ

ている音楽は、ケイが呼び出すときに流す、某宇宙人映画のテーマだった。

「入るぞ〜」

一応は女の子の部屋だ。言葉をかけてから部屋に入る。

遮光カーテンで薄暗い部屋の中には、布団が3人分敷かれ、夏掛けがそこに掛けられている。某宇宙人テーマの着信音は、その夏掛けの下から聞こえる。

夏掛けをめくると、いつもより大音量で着信音を鳴らす携帯電話があった。

「お兄ちゃん！」

通話にして耳に当てた瞬間。聞きなれたケイの、いつもしからぬ裏返った声で俺を呼ぶ声が、スピーカーから聞こえてきた。

「わっ、て、ケイどうし」

「たたた、大変、大変なのーっ！」

この口調はただ事ではないようだが、大変って、何が大変なんだろう？

そしてその後続く言葉は、確かにただ事ではないものだった。

「戻れなくなっちゃったのーっ！」

「へ？って、お前、また脅かそうとしてんだろ。この前みたいに」

「ちーがーうーっ！今度はホントなのーっ！ホントに戻れなくなっちゃったのーっ！」

うん、これは、どうやら、マジらしい。って、落ち着いている場合か、俺。

そして、事の重大さに気付いた俺は、慌てて隣の夏掛けを全力でめくり投げた。

そこには、ラジコンのゼロ戦が、ひっくり返って置いてあった。言うまでも無い。シデンだ。

「どうなってんだ？」

「わかんない」

「もしかして、俺の擬人化の力が、無くなったってことか？」

「うっん、それは違うと思う。だってそうなら、ケイもいなくなると思うもん。そうじゃなくて、なんて言ったらいいのかな、何かが、ケイが人の姿になるのを、邪魔しているみたいなの」

「邪魔！？誰が」

「そんなの、わかんないよお！」

ケイと話をして、事の重大さがわかってくるに従い愕然としてしまった。

11. そしてみんな動かなくなった その5

「マジか……」

とにかく、みんなの状況を把握するのが先だと考え、まずは隣のヒビキの部屋に入ると、布団の上に赤いオフロードバイクが横たわっていた。

そして俺の部屋には、さっき見た鏡介が、布団の上に置いた鏡のむこうで必死に身振り手振りしている。

そして、常盤さんとバレンシアの仕事部屋、またの名を常盤弁護士事務所をのぞく。

「やっぱりな」

書類と書物がびっしり入った本棚の前に、半開きになったノートパソコンが横倒しになって転がっていた。バレンシアだ。

「お前もか」

そのノートパソコンを拾い上げ、常盤さんのデスクの上に置く。

そして、この前うちの擬人化が（自主的に）モノになった時に言っていたことを思い出して、スイッチを入れてみる。

すると、フィィィィンという久しぶりに聞く音と共に、パソコンの画面に文字が出た。

そしてしばらくカリカリカリという音がすると、パソコンのディスプレイにぱつと人の顔が出た。

「Oh, Master! Are you sure!？」

そしてその顔、金髪碧眼でメガネの女の子が声を出す。どこで見ているのかは判らないが、どうやらあつちからも俺が見えているらしい。

「おいバレンシア、何があった!？」

「ミーにも can't know デース、What happen デス?」

「うーん、やっぱ判らねーか」

「バレンシアちゃんも判らないんだ」

「Hmm、ミーもnot dominion（神様じゃない）デスから」

うーん、何があったんだろう。

「あ、Master、ミーにpower cableをconnectして欲しいデース。ミーはa little bit hungryデース。Nowのミーは、batteryがdownしたらmaybe cannot moveデスから」

なんか、すごく久しぶりに感じる二人の会話を聞いていると、バレンシアがそんなことを言ってきた。つまり、バッテリー切れしたら喋れなくなるってことだ。

ACケーブルが近くに転がっていたので、それを拾ってコンセントに繋ぐ。

そして、ケイは充電とかしなくて大丈夫なのかな？なんてことを考えながらふと常盤さんの椅子を見ると、そこにはまるで着ていきなり中身が消滅したような感じに女物のスーツが散らばっており、その真ん中に、鈍く光る見覚えの無いものが置いてあった。

「なんだ、これ？」

それは、手の平におさまるぐらいの、極めて年代モノの懐中時計だった。首とかに掛けられるよう、金色の鎖が繋がっている。

フタをあけると、ローマ数字が書かれた綺麗な文字盤と、意匠が凝らされた長針と短針が見える。俺が見ても、骨董品としても美術品としても価値がありそうに感じられる。そして、相当の年代モノと思えるのに、ちゃんとチクタクと動いている。

もしかして、西園寺の遺品のひとつなのかも知れない。けど、なんでこんなところにあるんだ？

「あ、えつと、お兄ちゃん？」

すると、ケイが、おずおずといった感じで口を開いた。

「ん、どうしたケイ」

「あのね、その時計なんだけど、その……」

だが、今度は妙に歯切れが悪い。

問いただすと、「驚かないでね？」と前置きしてから、ケイは意外なことを口にした。

「その時計ね、常盤さんなの」

「ああ、常盤さんのなのね」

「ううん、そうじゃなくて、その時計が、常盤さんなの」

「……へ？」

時計が、常盤さん？一瞬、思考が硬直する。

モノが擬人化するのは何度も見てきたし、現に今話をしているケイやバレンシアもそうだ。

でも、常盤さんは俺が擬人化の力を発動させる前からいた。というか、常盤さんのせいで擬人化の力が発動するようになったはずなんだけだ。

つてことは、俺のほかに擬人化の力を持つ奴がいるってことか？

「That's differentデース」

すると、バレンシアがそんなことを言った。

「常盤さんはね、自分から人の姿になったの」

「……へ？」

「Master, do you know “Tsukumo-gami”？漢字でハ、write like thisデース」
そして、画面に映ったバレンシアが、“付喪神”と書かれたフリックを出す。

「ケイも、常盤さんから教えてもらったんだけどね。道具って、出来て100年を過ぎると、命を持つことがあるんだって。そういうのを、付喪神って言うんだって」

二人の説明を聞いて、ようやく思考力が回復してくる。

「……じゃあ、常盤さんは、その付喪神ってやつ、なのかな？」

「うん、そうなの。ごめんね、黙ってて」

「いや、いいよ」

うん、まあ確かに常盤さんが人間じゃなかったってことは衝撃だが、思い返してみると、常盤さんがうちのモノたちと妙に仲が良かったのは、自分も似たような存在だったからだろうし、オカルトっぽい知識を持っていたのも、自分自身がそういうオカルトっぽいものだったからなのだろう。

だが、それでもひとつ、気になる事がある。

「お前たち、いつからそのことを知っていたんだ？」

本当なら、これは俺だって知ってなきゃいけないはずの話だ。でも、ケイの口ぶりだと、それを知らなかったのは俺だけのようなのだ。どうして俺だけに知らされなかったのか。それを言い出したのは多分常盤さんだろうから、それはあとで本人から聞くことにして、今はこいつらが知っていることを聞き出すことにした。

「……あのね、ちょっと長くなるけど、いい？」

俺からの質問の後、二人ともしばらく黙っていたが、やがて、ケイが口を開いた。

11. そしてみんな動かなくなった その6

きんこーん。

今から1週間と1日前。鏡介が現れたばかりの、まだアパートにみんなが住んでいたころ。

将仁を送り出して、モノたちがわいわいと話をしていると、来客を示す呼び鈴がなった。

「はい！」

ぴょんつと立ち上がったケイが、たたたと玄関に向かって走っていく。

「こんにちは、ケイさん」

ドアをあけると、眼鏡をかけたスーツ姿の女性がそこに立っていた。電話で前もって来ることを告げていた、常盤弁護士その人だ。

「こんにちはです、常盤さん」

「ずいぶん早かったねえ、弁護士さん。もしかして弁護士ってヒマなのかい？」

ケイの後ろから、ヒビキが顔を出す。

「ええ、今の私は、西園寺の専属弁護士ですから」

常盤は平然とそれに答え、そして家の中に遠慮なく上がってくる。そして、ダイニングの昨日腰掛けた席に静かに腰掛けた。

「はい、どうぞ」

「ありがとう。突然の訪問、驚かせてしまったかしら？」

ケイが差し出したお茶を受け取りながら、常盤が笑いかける。

「ど、どうも、こんにちは、はじめまして」

「あ、はい、こんにちは……あら？」

だが、鏡介が顔を出すと、さすがに少し驚いたようだ。

「将仁さん、学校はいいんですか？先ほど、学校に向かわれたと」

「あ、すいません。俺、将仁さんじゃないんですよ。えーと、その、なんついたらいいんだろうな……」

「常盤さん、違つう。鏡介お兄ちゃんは、鏡の擬人化さんなんだよ」
「……鏡？なるほど、将仁さんの姿を模しているというわけなのですね」

ケイの言葉で全てを理解したように。常盤は顔をあげた。

「えっ、擬人化のこと、知ってんスか!？」

その事実にも、鏡介は逆に驚かされた。無理もない。鏡介は、将仁の擬人化の力がこの弁護士によって覚醒させられたことを知らないのだ。

だが、その常盤をしても予想外だったことがある。

「……鏡介さん。あなた、もしかして、男性ですか？」

「は？そ、そうですか」

「……」

「な、何スか、俺のことじーっと見て。だから俺は本当に将仁さんじゃないんですって」

「あ、ごめんなさい。擬人化の男性なんて、ちょっと予想外だったものですから」

「予想外って、男が出ることがかい？」

「ええ、だって、真田、将仁さんは男性でしょう?」

ヒビキの問いかけに対し、常盤は簡単に説明をする。なんでも、西園寺の擬人化の力は、行使する人物と対になる性別をもつ、という法則があるのだそう。たとえば、男性が擬人化を発動させる場合、対象は、その対になる女性になるといった具合だ。

「さかしまに映し出す、鏡というものの特性によるのかしら」

「ま、まあ、何事にも例外はあるってことじゃないッスかね?」

鏡介の言葉で、その場は一応収まる。

「それにしても、テルミお姉ちゃんとクリンちゃん、遅いなあ。何やってるんだろ?」

ちらりと、ケイが奥の扉に目を向ける。

「クリンさん、と、とりあえず。これを羽織るのがいいでしょう」

「あうう、でもこれえ、だぶだぶですよ」

「その格好よりはましでしょう、お客様の前にそんな格好で出るなんてダメでしょう!」

「ふみゆう、これ、なんだかごわごわしますう」

その扉の向こうから、テルミとクリンのそんなやり取りが聞こえる。どうやらクリンに何か服を着せようとしているらしい。

「ちっ」

その様子を聞いていたヒビキが舌打ちをする。

「まあいいや、ほら、鏡介もケイもそんなところでぼけっとしてないで座った座った」

そして、と、鏡介とケイを空いた席に座らせると、常盤が座った向かいの席にちよつと乱暴に腰掛けた。

「なあ、弁護士さんよ」

そして、テーブルに右ひじをついて、身を乗り出し、鋭い目をさらに鋭くし、どすを利かせた声を出す。

「あたしや、この前遭ったときから、気になっていることがあったんだ。聞いてもいいかい?」

「はい、私に答えられることであれば」

だが、常盤はまったく動じることなく平然と答える。

それを挑戦と取ったのか、ヒビキはにやつと笑った。だが、目は笑っていない。

「心配することはないよ、あんだったら絶対に答えられる事だからさ」

そして、再び表情を厳しくすると、バイザーを指で押し上げてあみだにし、常盤を睨みつける。

「あなた、一体、何者なんだい?」

「私は、弁護士の常盤花音代です」

常盤が答えた、その瞬間。ヒビキがテーブルをどんと叩いた。

「ふざけるなよ。あたしが聞きたいのはそんなことじゃない、あんなの本当の目的だよ。あなた、何が目的でうちの頭に近づいた? 将仁を使って、何をしようってんだい? ええ?」

そして、問い詰める口調をさらにきつくする。それはまるで、刑事ドラマで容疑者を取り調べる刑事のようだ。

「ヒビキさん、それって一体どういう意味なんだ？」

その展開についていけない鏡介が、困惑した口調で問いかける。

「……ヒビキさん、何か誤解をされているようですが……」

常盤は、一瞬眉をひそめたが、あくまでも落ち着いた答えを返す。

「へえ、誤解ねえ、じゃあ、あんたが人間じゃないってことは、どうやって説明するんだい？」

すると、ヒビキは上体を起こし、さらに鋭い目つきで睨みつけながら、指先を目の前の弁護士に突きつけた。

その瞬間、常盤は明らかに動揺した。

しばらく、沈黙がその場を包む。

「……いつから、気がついていました？」

やがて、常盤が、眼鏡をくいつと押し上げてヒビキに聞き返した。その目には今までにない鋭い光が宿っている。

「昨日、あんたの話を聞いているときに、なんとなくね。今日、改めて会って、確信したよ。ケイ、あんたも、なんとなくは気がついていたんじゃないのかい？」

言いながら、ヒビキはケイに目を向ける。

「う、うん……」

すると、いままで押し黙っていたケイが、自信なさげに頷いた。

「どういうことだ？」

「あのね、なんとなく、だけど、常盤さんから受ける感じが、お兄ちゃんやりゆう兄ちゃんより、ヒビキお姉ちゃんとか、鏡介お兄ちゃんに、近い感じが、するの」

はっとして、鏡介が常盤弁護士の顔を見た。

「うとうう、なんだかチクチクして歩きにくいですよ」

「まったくもう、お客様の前に裸で出ようなんて、失礼この上ないでしょう」

そのとき、見計らったように奥のドアが開き、メイド服の上からマントを羽織ったテルミと、将仁のものであるうだぶだぶのジャージを着たクリンが部屋から出てきた。

「よう、二人ともちよっとうどいいところに来た。弁護士さんが、あたしらに話したいことがあるってさ」

その二人に向かって、ヒビキがひらひらと手を振る。

「ヒビキさんっ、行儀が悪いでしょうっ！」

そこにつかつかつかつとテルミが歩み寄ろうとする。

「ちよっ、ちよっ、待ってくれ。よく分からないけど、大事な話らしいんだ」

だが、その前に鏡介が立ちふさがり、テルミの両肩を押さえると、テルミはうっとうしく黙り込んだ。

「ね、クリンちゃんも、話を聞いて。ね？」

「う、うん」

ケイがクリンの顔を見上げると、クリンは素直に頷いた。

そして、鏡介が立った席にクリンが座ると、全員の視線が、常盤弁護士に向けられた。

「さあ、全部吐いてもらおうか。あんたの正体、あんたの目的、洗いざらい全部ね」

「……俺、常盤さんとは会ったばかりですけど、疑いたくないんです。隠し事は無しにしてくださいませんか？」

「ええ、分かっています。私も、あなたたちを敵にするつもりはありませんから」

鏡介の言葉に、常盤は静かに答え、そして再び眼鏡を直した。

「皆さん、付喪神というものをご存知ですか？」

「長い時間を経て、道具に命が宿り、変化してなると言われる、妖怪の一種でしょう」

「道具に命が宿る、ですかあ？ 私たちみたいですね」

「でも、テルミお姉ちゃん、長い時間を経てって言ったよね？ ケイ、お兄ちゃんに丁寧に使われたことはあるけど、そんなに長い間使わ

れた記憶はないよう？」

「そこが、付喪神つてやつとあたしらとの違い、つてところなんじゃない？」

「それが常盤さんとどんな関係が……あ？」

そこまで口にした瞬間、気がついたように全員の視線が常盤に集中する。

「……そのとおりです」

そう言いながら、常盤はゆっくりと立ち上がり、全員に背を向ける。そして、後頭部に手をやり、そこで髪をひつつめてまとめている、フリルつきのハンカチをほどいて見せた。

そのとき、そこにいた全員が、目を丸くした。

そこにあつたのは、髪の毛ではなく、男性の握りこぶしぐらいの、丸い金属的な光沢を放つ物体だったのだ。球を押しつぶしたような形のそれには、ふちを囲むようにキザギザが並んでいる。

昔の腕時計や懐中時計などについている、ゼンマイを巻いたり時間を合わせたりするのに使う、リユーズと呼ばれる部分をそのまま大きくしたような感じだ。

「私は、その付喪神なのです。皆さんが知りたがっていた私の正体それは、今から108年と5ヶ月12日前に作られ、それから3ヶ月と3日後に西園寺家当主の手に渡り、そして使われていた、懐中時計なのです」

言いながら、常盤は再び皆に向き直り、後頭部のリユーズを右手で回し始める。すると、ちょうどゼンマイが巻かれるような、かちかちかちつという音がした。

「……私は、先代、先先代、その先代、と、西園寺家に来てからずっと、大事に扱われて来ました。それは私が命を得てからも変わることはありませんでした。私は、その恩を忘れたことは一瞬たりともありません。

今、その西園寺の家系が、先代の死により途絶えかかっています。

私の望みは、先代の意思を将仁さんに伝え、そして西園寺家を存続

させること。それだけです」

椅子に座りなおした常盤は、真剣な表情で言葉を連ねる。

「皆さんには、将仁さんが西園寺の後継者となれるよう、応援してほしいのです」

「それだけじゃないだろ、弁護士さん。まだ言っておくことが、あるんじゃないかい？」

だが、そこにヒビキが声を投げる。彼女はまた、腕を組んで険しい表情を崩していない。

「あんたは、将仁の手首にある刺青のことを、その経緯から知っていた。将仁がその西園寺家の人間だつてことを示すだけなら、あんながうちに来てそのことを話すだけで十分、あたしら呼び出さす必要はなかつたはずだ」

「そうか、俺たちが現れるつてことは、裏を返せば、いないはずの人が突然現れたのと同じこと。そういう意味では俺たちはみんな不審者、俺たちの存在自体が、色々な意味で危険なんだ」

そして、鏡介も同じ目を向ける。

「そういえば常盤様は弁護士、法律の専門家である以上、その程度のことは気づいて当然でしょう。私たちは将仁さんのお役に立つために居るのですから、迷惑をかけては本末転倒でしょう」

「じゃあ、常盤さんは、危険だつて知っていたのに、あえてお兄ちゃんの力を覚醒させて、ケイたちを呼び出させたつてこと？」

「はうう、どういふことなんでしょうう、私、頭が悪いので良くわからないですう」

そして、結局は全員の視線が常盤に注がれることになる。それほどことなく、この家にもとからあつた物たちが、常盤という外から来た物を見定めているようにも見える。

常盤が、ふうとため息を吐いた。

「わかりました。できれば、必要になるまで黙っていようと思つていたのですが………仕方ありません」

ふつと、常盤は今まで見せたことがないほど険しい顔を見せる。

そして、これから話すことは、まだしばらくは将仁さんには黙っていてください、そう前置きしてから、話し始めた。

「西園寺家の断絶、それは、とある人物と、その人物を頂点とする組織によつて、人為的に行われたのです。彼らの望みは、西園寺家の遺産」

「それつて、昨日、将仁が言っていたシナリオそのまんまじゃないか。冗談はやめとくれ」

「そう思われるのも無理はありません。ですが、これは紛れもない事実。昨日、将仁さんがそのことを口にされたときには、不審に思われないようふるまうのに気を使いました」

ヒビキの横槍も、常盤は今までにない口調でぴしゃりとはねつけた。「彼らは、もう20年近く前から、西園寺家を潰し、財産を奪うために動いていました。そして今から10ヶ月と20日前、西園寺家の最後の頭首を亡き者にしたところで、遺産は彼らのものとなり、彼らの計画は達成されてしまはずでした。」

西園寺家の方々も、それに気づいていないわけではありませんでした。ですが、気がついたときにはすでに彼らはその組織の者に監視されており、手も足も出なくなっていたのです。

そこで、先代は、せめて自分の子だけでも彼らの目の届かないところに、と思い、策を労したのです。それは、生まれてくる子供を、無事だったとしても死産であったとし、そして、その子を西園寺とは関係の無い子供として生きさせるといふものでした」

無謀な話ではあったが、幸運にも将仁が生まれた時に同じ病院で実際に死産があり、結果、その計画はうまく行ったのだそうだ。

その後、一度だけ西園寺の人間がその子に手を出したことがあった。それが、将仁の左手首に目印の「左三つ巴」の刺青をしたときだ。

間に人を介して行われたため、だれがどうやって行ったのかは花音代本も知らず、ただ「やった」という報告だけがあったのだそうだ。

「本当は、その後永遠に、その子には関わりを持たないはずでした。ですが、最後の最後になって、先代、西園寺静香様の心が、ついに

挫けてしまわれたのです。

そして、どこにいるのかも分からない、本当に生きているのかも判らない自分の息子に、西園寺の遺産を継がせるという、遺言を残されました」

そう言いながら、常盤は自分の懐から白い封筒を引っ張り出す。先代の残した遺言書だ。

「組織の者たちにとって、この遺言書と、まだ西園寺の血が断絶していないという事実は、大きな誤算でした。その二つが残っている限り、西園寺の遺産は再び手が届かぬものとなってしまっ、そのため、彼らは、遺言書と、後継者のどちらかを消してしまおうと動き出したのです」

遺言書を預かる花音代も、何度も命を狙われた。そして、遺言書を奪うことが難しいと見るや、むこうは時間切れを待つような構えを見せたが、つい最近になってその組織が、今度は後継者である将仁をターゲットにして動き始めたらしい。

「遺言書だけであれば、私の力で守りきることもできます。でも、将仁さんは懐に入れて持ち歩くわけにはいきません。ボディーパードを雇おうか、とも考えましたが、将仁さんの存在を知ったのはつい先日で、雇う人の身元を完全に調べるだけの時間がありません。迷った結果、将仁さんの体に眠る西園寺家の、物部神道の力を呼び覚まし、その力で自身を守っていたことにしたのです。将仁さんは西園寺の、物部の血を直接引く最後の一人。その資格は十分にあると思います。行動を起こしました」

「……物部神道の力、ということとは……常盤様は、私たちを、最初から兵隊として使うつもりだった、ということでしょうか？」

今度は、テルミの目が鋭くなる。物部の名は、自らは動かない「モノ」の魂を、活力を与えて行使したことによる。さすがに、チェスの駒のように思われていたのは気に入らなかったようだ。

「仰るとおりです」

その瞬間、真田家のモノたちの目が鋭くなった。明らかに怒気を帯びている。

「正直に言います。私は、将仁さんの力、物部神道の力を、将仁さん自身を守る「兵隊」を作らせるつもりで、目覚めさせました。でも、将仁さんの力は、私の想像をはるかに超えていたのです」

「どういうことだい」

怒気を帯びた声で、ヒビキが聞き返す。

「私は、擬人化、と言っても、主の命に従うだけの、いわばロボットの的なものしか出来ない、思っていました。先代、先々代にも同様の力がありました、顕現した存在はその程度のものに留まっていたからです。

もしその擬人化で現れたのがその程度の存在であつたら、私がすぐに伺い、指示を出して動かすつもりでした。

でも、皆さんは、「意思」というものを持ち合わせていました。私が100年かけてようやく手に入れた「意思」を、です。

だから私は、貴方達を「駒」としてではなく、「人」として扱い、「協力」してもらわなければならない、と考えなおしたのです」

お分かりいただけましたか？と、常盤は最後に付け加え、真田家モノ軍団のほうを見た。

しばらく、重い空気が流れる。

「なるほど、そういうことスか」

最初に口を開いたのは、腕を組んで考え込んでいた、鏡介だった。

「やつと、俺がするべきことが分かりましたよ。俺は将仁さんを守らなきゃならない。そのために俺は存在しているんだってことに」

「なんかあんたの手の上で転がされているだけのようないきもするけど、将仁を守るってのはあたしも賛成だね」

「私です。この姿を与えられたのは偶然なのでしょうけれども、この家にいる以上、将仁さんを幸せにする事は私もやぶさかではないでしょう」

「お兄ちゃんのためだもん。ケイもがんばるね。」

でも、みんな。無茶とか悪いことはしちや駄目だよ？そんなことしたら、たとえお兄ちゃんのためだったとしても、お兄ちゃん、絶対に喜ばないから」

「はい、将仁さん、優しいですからねえ」

鏡介の言葉を皮切りに、真田家モノ軍団の結束は一気に強くなったようだった。その様子、自分の提案に皆が理解を示してくれたことに、常盤は嬉しくなった。

11. そしてみんな動かなくなった その7

「After the time、ミーたちもそのaffair（役目）をmy family personからteachされたデース」

二人からひとおりの話を聞いて、俺は啞然とした。

「ごめんね、お兄ちゃん。ケイたち、お兄ちゃんをだますつもりはなかったの」

俺が黙っている理由が、俺が怒っているからだと思っただのだろうか。ケイが謝ってくる。

だが、俺は怒ってなんかいなかった。常盤さんが俺の擬人化の力を発動させた目的、西園寺の一族が滅んだ本当の理由、そして、俺が施設に送られた理由など、色々なことが一気にわかり、困惑のほう先立っていたからだ。

先代当主、西園寺静香の真意が、西園寺の血筋を残すことだったのか、俺自身をその敵の手から逃がすことだったのか、それとも他に
あるのか。それは判らない。

いずれにしても、施設で育ち、ここまで色々な紆余曲折があったが、それは全て俺を生かすためだったと判った。そして結果として俺は、何とか無事に今まで生きてこられた。

「いいよ、謝らなくて。お前らが悪いんじゃないから」

そう返事をしてから、俺は、机の上に並んだ携帯電話とノートパソコンに手を伸ばし、画面を閉じるために手を掛けた。

「きゃ！？お兄ちゃん、なに！？」

「ミーはnot sleepyデスよ？」

「いや、そうじゃない。とりあえず、下に集まってもらおう」

「集まるの？」

「ああ、リビングにはテルミがいる。ケイやバレンシアの様子を見ていると、テルミも同じ事が出来そうだからさ。俺が運ぶから心配

すんなって」

「あ、あー、OK、I understand．それでハ、power cableも、togetherにcarryしてほしい
デース」

「じゃあケイの充電器もっ！」

「ああ、分かってる。んじゃ閉じるぞ」

返事をしてから、ケイとバレンシアを閉じる。そして、パソコンのACケーブルを抜いて持ち直すと、携帯の充電器を取りに行くことにした。

11. そしてみんな動かなくなった その8

「申し訳ないでしょう、私たちが至らぬばかりに」

「テルミのせいじゃないよ、謝らなくていいって」

それから20分ほど経ったところだろうか。家のなかから集めてきた道具が、中にテルミの姿が映るプラズマテレビの前の床に並べられた。具体的には、ケイだった携帯電話、クリンだった浴用スポンジ、鏡介だった洗面用角鏡、シデンだったラジコンのゼロ戦、バレンシアだったノートパソコン、紅娘だった中華鍋とお玉、そして、常盤さんだった年代物の懐中時計だ。

その中で、まともに声が出せるのは、モノの時にもスピーカーがあったケイ、テルミ、バレンシアの3人。鏡介は、姿は鏡に映るんだが、声が聞こえない。シデンは、スイッチを入れたらプロペラが動くが、それはただのラジコンと変わらない。そしてクリンと紅娘はそういうものすらないので、全く反応がない。そして常盤さんだが、意識があるのかないのか、チクタクチクタクと動いてはいるのだが、それ以外の動きが見られない。

ちなみに、オフロードバイクのヒビキと3ドア冷蔵庫のレイカは、俺一人で運ぶのは到底無理（バイクを2階から1階へ下ろす方法がなく、冷蔵庫は一人で運ぶには重すぎる）なので、朝にいた場所ですぐ待機してもらっている。

「しかし、テルミも分らないのか」

「はい、あまりに突然で」

テルミに、何があったのかを聞いてみたが、その答えはケイやバレンシアと同じで、突然すぎて何があったのか判らないというものだった。

鏡介に聞いてみると、鏡の向こうで「そのとおりだ」と頷いている。困った。いきなり、手詰まりだ。何があったのか判らなければ、手の打ちようもない。

「お前たち、戻ろうとはしてみたんだよな」

「うん。でもそれがうまくいかないっていうか」

「意識ははっきりしているのですが、体が動かないような感じなのでしょう」

「Suchな phenomenon（現象）は、first experience（初体験）デース。Japaneseでは、probably”カラシミソ”と言うデスよね」

そして鏡介が鏡の向こうで一度頷いてから今度は激しく首を振り、さらに激しく体を動かして全力で否定している。

「それを言うなら金縛りだろ」

「Yes, yes, それデース！」

ちよつと呆れつつも一応突っ込んでやると、バレンシアはあたかも今初めて気付いたような反応をする。それデースじゃないだろ、全くこいつは、真面目にそう思っていたのか、ふざけただけなのか、判らないボケをするから困る。

だが、その一言で、場の雰囲気がちよつとだけ和らいだ。

しかし、こんなこと誰にも相談できないぞ。唯一そういうことが出来そうな常盤さんは時計になっちゃったし、ケイやバレンシアにインターネットで、なんてのも無理だろ。

「他に動ける奴は……」

いないと思うが、それでもぐるっと部屋の中を見回してみる。すると、部屋の隅に置かれたダンボール箱に目が止まった。

子狐の魅尾のベッドだ。あれは他の連中と違い元から動物だから動けるだろう。

「いや、常識的に考えて無理だろ」

だが、すぐにそれはダメだろうと思い直した。だって相手は獣だもん。話を通じるわけが無い。俺の力はどうやら生き物には通じないみたいだから、擬人化させることもできないし。

しかしそれでも、ちよつと気になって箱の中を覗いてみた。

「あれ？どこ行った？」

そして、俺が外に行くまで寝ていたはずの子狐が、影も形もなくなっていることに気付いた。

人間、出来ることと出来ないことが目の前にあつたら、出来ることに感心が向くものだ。その時の俺は、ケイたちを戻すよりも、魅尾を探することに気が向いてしまった。

「魅尾、いないの？」

「私が覚えている限りは、眠っていたはずなのでしょう」

「Hungryでfoodでもhuntしにgoしたデスカ？」

「野生に目覚めたってやつか？」

「Yes, yes, certainly」

そんな元気があったら、普段からもつと動き回ってもいいと思うんだが。

そう思いつつ、何気なく鏡介のほうを見ると、鏡介がなんか俺の後ろを指差していた。しかも、俺に「後ろを見る」と言わんばかりに指をつんつんと前後させている。

なんだ？と思いつつ、俺は後ろを見た。

そして、僅かに開いた部屋の扉からこちらを覗き込む、いないはずの何者かの姿を、見つけてしまったのだ。そいつは、こつちが何をしているのかを伺うように、きよろきよろと目を動かしている。

「誰だ！」

俺は、反射的に大声で叫んでいた。

今、家の中に居て、自力で動けるのは俺だけだ。それ以外にいたら、空き巣か泥棒か、それともこの前現れた壁から女か、いずれにしても外からの侵入者だ。

案の定、俺の声に驚いたらしいその人影は、ぱっとそこから逃げ出した。

「待て！」

反射的に声を荒げて駆け出す。

今、動けるのは俺だけだ。なら、俺が何とかしなくては。そのときは、それだけを考えていた。

11.そしてみんな動かなくなった その9

廊下に出ると、右手のほうへ逃げていく足音が聞こえた。それを追って廊下を曲がると真正面にある洗面所のドアが半開きになっていた。

さらにソレを追って洗面所に来たが、そこにはもう人影も何もなかった。

だが、ここから外に出ることはできないはずだ。洗面所は風呂場に続いており、洗面所と風呂場にはそれぞれ窓があるが、どちらも窓の外には格子が取り付けられている。仮に窓から出ようとしても、ネコぐらいの大きさか、もしくはクリンみたいに狭い所に平気で入れる奴でもなければ、到底無理だ。

つまり、ここに逃げ込んだということは、ここに隠れているはずだ。隠れられそうな場所を見回していると、洗濯機に目が行った。

洗濯機は、ちょっと型落ちした斜めドラム式で、洗濯だけでなく乾燥もできる。元々は常盤さんの持ち物だが、常盤さんは知つてのとおりのもの凄くアナクロな人だから（今となつては、齢百を超える付喪神だからと思えるが）俺らが引越してくるまではほとんど使つたことがないシロモノだ。

その、洗濯機の投入口が開いていて、中で何か動いているのが見えただのだ。

まさか、と思いつつも、俺は洗濯機の前に立ち、中を覗き込む。

そして、何かと目があった。

それは、まだ5歳ぐらいの、真っ白な髪の女の子だった。驚いたのか、俺のことをじっと見ている。

「だ、誰だお前」

驚いたのは俺も同じだ。とっさに、そんな言葉しか出てこない。

「ぎゃう」

だが、むこうは俺以上にテンパっていたらしい。言葉の代わりに、

なぜかそんなふうに鳴いた。

「あのな、ぎゃうじゃなくて、誰だつて聞いて……ん？」
その返事に無条件に突っ込む。だがそこでいくらか落ち着きを取り戻せ、おかげでその洗濯機の中にいる子が普通ではないことに気がつけた。

白い髪の毛を押しつけるように、頭の上から2つ、先が尖った耳が覗いていたのだ。

「……どこの親だ、ガキにこんなコスプレさせて人の家に入らせたのは」

「わ、わらわはガキではない！」

すると、その洗濯機の中の子が、妙に時代掛かった口調で言い返してきた。

「なんだ、喋れるじゃないか」

「あ、当たり前じゃ、わらわを誰じゃと心得る」

「だれでもいいから、まずはそこから出てこい。そこは服を綺麗にするための場所だ。服着てるからって、人が入る場所じゃねえぞ」

だが、その子は恨めしそうにこつちをじーっと見つめたまま、一向に出てくる気配が無い。

「まあいい、とにかく出て来い」

だが今はここで逡巡している場合ではない。俺をじっと見上げるそのちっちゃい子の襟首を掴むと、俺はその子を洗濯機の中から引っ張り出そうとした。

「ふぎや、こら何をするのじゃ！」

すると、その子は、洗濯機の中から出たくないのだろうか、投入口に両手両足を引っ掛けて抵抗する。

「おまえな。そこはすつごく危険なんだぞ？そこにいるとな、水攻めにあつ上になが回らだしてしつちやかめつちやかになつて、拳句の果てに思いつき振り回されてべつちやんこになるんだぞ？いいのか？」

「ふ、ふん、わらわを脅そうというのか」

「脅してどつするんだ。とにかくそこから出る」

「なっ、なぜわらわが貴様なんぞのいう事を聞かねばならんのじゃ！」

「いいから出て来いっての、別に取って食やしないから！」

「いやじゃ〜！絶対にいやじゃ〜！」

俺の希望をよそに、その子は抵抗を続ける。

こりゃダメだ、作戦を変更しよう。

「じゃあそこにおいていいから、質問に答えろ。うちは今緊急事態なんだ、あまりのんびりしてはられない」

俺はその子から手を離すと、洗濯機の前に座りこむ。

「そのぐらい、判っておるわ」

すると、その子はまるで巣穴から外を伺うように首を出した。

「よし。じゃあ質問だ。俺は真田将仁。この家の主だ。お前は誰だ」

「わ、わらわは、白狐の魅尾じゃ」

「魅尾？」

「忘れたのか？御主が、つけた名じゃろ」

「………へ？」

俺が、つけた？何を言ってるんだこのガキは？

「なんでその名を知ってる？俺が名づけた魅尾は、床下にいた狐だぞ」

「御主こそうつけじゃの、わらわは気狐じゃ。化けることなぞ造作も無い」

「………マジか」

思わず、頭を抱えてしまう。この家は、マジで妖怪が集まる家だったようだ。

「念のため聞くが。お前は、あの魅尾なんだな？床下において、ちょっと前に引つ張り出された、あの魅尾なんだな？」

「御主等がそう呼んでおったのじゃろ。それらしゅう振舞うのには苦労したぞ」

「ってことは、お前は妖怪って奴か？」

「御主等、人間はそう呼んでおるな」

このチビ、自分が妖怪だと断言しやがったよ。

まあここしばらく、妖怪みたいな連中と過ごしてたわけだし、それどころかついさっきまで人間だと思っていた常盤さんまで付喪神って妖怪だったって知っちゃったわけだし、また一人ぐらい出てきたってどうってことはないよ、こいつの存在自体を自分に納得させる。それより気になることがある。

「なんで、お前、今更になって正体をバラした？」

「わ、わらわだって、好きで正体を見せたわけではないわ」

すると、魅尾と名乗るその子は妙なことを口にした。

「御主はそうでもないが、この家の者はわらわに良くしてくれるから。もう暫くはそれに甘んじるつもりであつたのだが」

「あんな、俺だって別にお前を虐めるつもりはねえぞ」

「何を言うか、さつきわらわに乱暴しようとしおつたではないか」

「あれは、お前が逃げたからだって！だいたい、なんで逃げた？」

「おっ、御主が、驚かすからじゃ！待てと言って待つ奴がおるか！一瞬、納得してしまいそうになつたが、そこで話が違つほうへ行つているような気がした。

「いや、そうじゃなくて。なんでお前、そんなコスプレみたいな姿に」

「こすぶれではない！これがわらわの本来の姿じゃ！だいたいそのこすぶれというのは何じゃ！？」

「コスプレってのは、色々なコスチューム、つつつてもわかんねえか、色々な衣装とか装飾とかを身につけてそれになりきる、って、俺が聞きたいのはそれじゃなくって」

なんか、疲れてきた。

「俺は、なぜお前が、その正体を、俺に見せる羽目になつたかつてことを聞きたいんだ」

そう。見せたくもない正体を、ここで見せているということとは、何

か理由があるはずだ。もしかしたら、うちの同居人が元のモノに戻った理由もそこにあるのかもしれない。

すると、案の定（？）魅尾は困ったような顔をした。

「判ればこんなことはしておらぬ。何かが邪魔をしておるのだ」

邪魔、ねえ。ケイがさつき似たようなことを言ってたな。しかし、何のためにそんな邪魔をする必要があるんだ？

「そんなのは知らん。だが、普通の人間に出来る芸当ではあるまい」

「そんなことは判ってる。お前みたいな妖怪か」

「さもなくば、知識ある人間による、まじないによるもの、といったところか嘯」

まじないねえ。今って、本当に21世紀なんだろうか。実は10世紀ぐらいの平安時代なんじゃないだろうか、と思いたくなくなってしま

う。だが、今は他にあてに出来る物が無い。こうなりゃ、藁だろうが泡だろうがすがるしかないのだ。

「どんなまじないだ？」

「判るわけがなからう。わらわがまじないを掛けたのではないのじや」

「そりゃそうだけど、俺はそういう事に関しちゃ全くの素人だ。心当たりでもなんでもいいから、なんかないか？」

「ぬう、狐使いの荒い奴め。うーむ、この場にわらわたちの力を削ぐ陣でも張ったかの」

「陣？結界ってやつか？」

「うむ、調べなければ判らぬが、御主に何の影響もない様子から見て、その類であろうな」

やっぱり。だが、そういう真面目な話をするに従い、余計に気になることがでてきた。

「なあ、やつはお前、そこから出てこない？この光景、すぐくまヌケだぞ」

「なんじゃと、御主まさか」

「バカ、ガキ虐める趣味はねえやい。それに俺はごく普通……
・じゃないかも知れねえが、妖怪と正面切つて闘えるような技量な
んざ持つちやいねえ」

「ぬ、ぬう、仕方が無い喃」

話をして、納得したのか。チビは洗濯機の中で向きを変え、尻を俺のほうに向ける。そして、こいつは確かに狐だつてことを俺に納得させてくれた。

尻尾があつたのだ。真っ白い、ふさふさした尻尾が、神社の巫女さんみたいな緋袴の上で、ひよこひよここと動いていた。

魅尾は、その状態で片足を穴から出すと、床へと伸ばす。そしてその足をじたばたさせる。床に届いていないのだ。その様は見えていて微笑ましいものだ。

「ひゃ!？」

そして、中で手が滑つたのか、いきなりぶち落ちた。

勢いよく尻餅をついた魅尾は、そのまま床を1回ほど転がり、俺の脚にぶつかつて停まった。

「うづうづうづうづう」

「何やってんだお前は」

「う、うるしやい!入り口があんな高いところにあるのが悪いのじや!」

しばらく頭を抱えていたそのチビだったが、俺が声をかけると半べそになりながらそう怒鳴つた。

「へいへい、そりや後愁傷様で」

言いながら、俺はそのチビを両手で持ち上げる。

そして、床に置いた。

すると、チビ魅尾はちよんといった感じでそこに立った。

「な、なんじゃ」

「まずはともかく、お前のことをみんなに話しておく必要があるだろ。今はみんな動けないし」

そして、洗面所のドアを開くと、チビ魅尾に声をかける。

「来い」

「え、偉そうに言うでない。わらわは御主より」

「いいから来い。あまり時間が無い」

「う、わ、判っておる、仕方がない喃」

そして、俺の膝丈ほどしかないそいつは、ちょこちょこ俺についできたのだった。

11.そしてみんな動かなくなった その10

「わらわが、魅尾じゃ」

狐の耳と尻尾が生えた幼女を連れてきたときの、うちの電化製品トリアの反応は、みんな同じだった。すなわち、ぽかんとして硬直。そりゃそうだろう。さっきまで動物だったのがいきなり耳と尻尾の生えた幼女になったんだから。

モノから人になるのは経験がある（そのほうがおかしいような気もするが）が、動物が人になったのは初めてだったのもあるだろう。「これが、こいつの正体なんだと。まあ宜しく頼む」

と言っても、みんな無反応。まあクリンや紅娘はわかるとして、テルミお前、その大画面でぼーっとした顔を映すのは、ちよっと危険な映像だぞ。

「のう将仁、反応がないぞ」

「驚いてるんだよ、付喪神以外の妖怪を見るのは初めてだから」

「むう、わらわは仲間はずれか。自分たちも物の化のくせに、つまらん喃」

と言いつつ、その中でも特に小さい携帯電話のほうへ近づいていく。充電器の上で開かれた携帯電話の画面には、当然のようにケイの顔が映っている。魅尾は、その前にうずくまると、画面をじーっと見つめはじめた。

「あ、え、えつと、な、なに？」

正気にもどつたらしいケイが、なんかうるたえている。

「うーむ、お主、元はこんなに小さかったのか。いつもはわらわより大きいのに」

「しょ、しょうがないでしょ、ケイは元々携帯電話なんだから」

「うりゃ」

「きゃ!?!」

と思うと、魅尾が何を考えたのか携帯の画面をつつついた。

「御主、この前、わらわの考えを読もうとしたである」

「えう、だつて、何か言いたそうだったから」

「当たり前じゃ。御主等は道具であつても口をきくではないか」

そう言いながら、魅尾は携帯の画面に映るケイの顔目掛けてつんつんしている。なんか、おもちゃを手に入れた子供みたいだ。

「あ、あの、将仁さん。これは一体、どういうことでしょうか？」

テルミが、俺に話しかけてくる。もっとも、声はスピーカーから出ているので、内緒話にはしたくても出来ないのだが。

「見たとおりさ。俺らがただの子狐だと思つてたのは、実は化け狐だつたつて事」

「That's amazingデース、unbelievableデース、todayはmany many thingがproveするdayデース」

さすがのバレンシアも、驚きは隠せないようだ。

「で、でも、将仁さん。あの子に、狐色が、見当たらないのでしょう。本当にあの魅尾なのでしょうか？」

「本人がそう言つてる。今までは化けていたんだと。それがうまくいなくて、あの姿を晒してる」

「Hm、Japanese foxがshape shiftするナンテ、out of my knowledgeデース」

「で、その症状がお前らのそれと似てるような気がしたから、つれて来たんだ」

だから、本当だつたらここで話し合いをしたいのだが。

「わらわの考えを読もうなどと、100年早いのじゃ」

「ふええ、ごめんなさいい」

魅尾は、俺達の話が聞こえているのかいないのか、相変わらずケイの顔をつんつんしながら凄く楽しそうにしている。ますます子供っぽいんだが。

「ほら、魅尾、そのへんにしとけ」

「うひゃ!?!」

このままでは埒が明かないので、魅尾の襟首をつまんで引つ張ってくる。せいぜい5歳ぐらいの体格なので、片手でも簡単だ。

「とにかく、いつまでもこのままじゃアレだ、色々問題がある。特に常盤さんがあのままなのは、いろいろな点で非常にまずい」

そして、会話が出来る奴らを集めて、車座になった。一応、動作で意思疎通が出来るので、鏡介にもそこに加わってもらおう。

「いつもの姿になるのに、何かが邪魔しているって、言ってたよな？」

「う、うん。やり方はちゃんど判るの。でも、それをやってもうまくいかなくて」

「体の感覚はあるのですが、そこから先が拘束されているようなのでしょう」

「それは、魅尾もそうなんだよな」

「う、うむ、わらわの場合、元がこの姿ゆえ“動けぬ”ということはないが」

「ううう、魅尾ちゃん、羨ましいよう」

なんかケイが変なことを言ったようだが聞き流すことにして。

「さつき魅尾と話したんだが、この現象は、誰かが人為的に起こしたんじゃないかと」

「Hey, Master. What kind of thing ウツク happened」

「つまり、誰かがこの家に何かやったんじゃないかってこと」

「おそろく、わらわたちの力を削ぐ陣を張ったんじゃないかな」

さつきまでお子様丸出しな行動をしていた魅尾が、一転して真面目な顔で答える。

「この建物を結界が包んでおるのじゃ。あやかしがあやかしの力を振るえぬようにする、な」

「……じゃあ、ケイたちって、そのあやかしの力で、人の姿になっていたの？」

「そうなる喃。お主らは元が道具故、本来の道具の姿となっておる。」

もつとも、完全ではないようじゃがな。お主らの存在がよい例じゃ
なんでも、本当に完璧にこの陣が張られていたら、ケイたちみたい
に声や画像を映せる連中でも全くなにもできなくなるそうだ。

「では、その“陣”というものをどうにかしないと、私たちはずつ
とこのままということなのでしょうかね？」

「そうじゃろうな」

「ううう、そんなのやだよお」

ケイが泣き言を言う。まあそりゃそうだろうな。俺がこいつらと同
じ立場にいたら、俺だって同じ事を言うだろうし。

「もつとも、どうにかする手が、無いわけではないがな」

だが、その魅尾の一言が、全員の期待の視線を集めることになった。
「人間がそういう陣を張るには、界を結ぶための物が必要になる。」

それはまじないの力を持たせた道具である場合もあれば、複数の術
士が対象を取り囲む場合もある」

たとえば、家を建てる前、地鎮祭の際に青竹を四角く立てて注連縄
を張る、あれもいわゆる結界の一種らしい。

「こんな街中で、術者がずっとそこにいるとは考えにくい、ってこ
とは、道具を使っているってことか。じゃあ、それを除けばいいん
だな」

「うむ、知らんと言っていたわりには頭の回転が良いではないか」

「一応、赤点は取らないようにしてるんでな。よし、んじゃ探しに
行くぞ」

言うなり、俺は魅尾を小脇にかかえて立ち上がった。

「うひゃ！？こ、これ、何をする！」

「俺じゃわからねえんだ、おまえも来い」

「こりゃあ！そんなことせんでも行かれるわ！」

「俺が持つて行ったほうが早いだろ、いいから捕まってる」

そして、俺は部屋を飛び出した。

11.そしてみんな動かなくなった その11

「どうだ？」

「少し黙っておれ」

魅尾が鼻をひくつかせながらそう答える。警察犬が犯人の匂いを追跡する様子を思わせるが、それを言ったら気分を害しそうなので黙っておく。

こいつは今、「界を結ぶもの」を探している、らしい。なんでも、そういうものは大抵目に付かないよう隠されているので、見つけるにはそこから出る気配というか波動を感じ取るしかないんだそうだ。「む、ここがあやしい喃」

そして魅尾は、部屋の壁にべったりと張り付いた状態で上を見てそう言った。

この部屋は、常盤さんが事務所として使っている部屋だ。言い換えると、昨日バレンシアが電撃をばら撒いた部屋であり、あの怪しい関西弁をしゃべる黄色い服の女が壁の中から出てきて、また壁の中に消えた部屋でもある。

そして、魅尾は壁際に立ち、なぜかその壁の上のほうへ手を伸ばさうとする。別に何も見当たらないんだが、何かあるんだろうか。

「………何やってんだ？」

「とっ、届かぬのじゃっ、あと、少し上なんじゃがっ」

壁際でぴよんぴよんと飛びはね、上のほうを触ろうとする魅尾。その動きと、もふもふした白い尻尾と一緒に動く様は、小動物が何かにじゃれているようで目じりが下がりそうになるが、今はそんなことを言っている場合ではない。

「ちよつとじつとしてろ、今持ち上げてやるから」

いくら飛び跳ねても、こいつの手は俺の胸ぐらいまでしか届いていない。

俺は、魅尾の後ろに回ると、両脇に手を入れて持ち上げた。顔の向

いている方向こそ違うが、赤ん坊をあやす時に「高い高い」とやるような形だ。

「うひゃ!?!」

すると、魅尾は変な声をあげる。

「ななななにをやるのじやいきなり!」

「だってこうでもしなきゃ届かないだろ、今はガマンしろ」

変なところでも触ってしまったのだろうか、よく判らないがとりあえず今はガマンしてもらおう。

「どうだ、このへんか?」

どのへんか判らないので、俺の頭と同じぐらいまで持ち上げる。

「う、もう少し上じや」

「こんな高いもふっ!?!」

魅尾が上と言うので素直に持ち上げたところ、突然真っ白い毛玉が顔にぶつかってきた。

「ひゃ!?!こ、こらあっ、何をしておるんじやあっ!く、くすぐったいっ!」

その直後、その毛玉が動き出して、俺の顔をてふてふという感じで叩く。全然痛くはないんだが、ちよっとうつとうしい。

「こ、こら、待て、しょうがないだろ、尻尾動かすな、ふぁ、ぶえつきしっ!」

「ひゃあああああ、ゆ、ゆらすでない!怖いではないかあ!」
「わわっ、すまんっ!」

思わず謝ってしまったが、これは俺のせいだけじゃないぞ、魅尾。最終的に、魅尾を天井近くまで持ち上げ、俺は顔を下に向けて、なんとかやり過ごした。

「ふう、ふう、うむ、ここじや。ここに何かあるぞよ」

魅尾の手がぺしぺしと壁を叩く音が、頭上から聞こえる。

魅尾を下ろして、改めて見てみると、そこは本当に天井ぎりぎりの所だった。

「将仁。あの壁のところになにかがあるのを感じた。壁をはがせ」

魅尾は、俺に向かってそう命令してくる。

「まったく、ガキのくせに偉そうに指示すんな」

「わらわはガキなどではない！少なくとも御主の30倍は生きておるわー！」

「長く生きてりやいってもんじやないだろ、まったく少しはガキらしくしろって」

ぎゃいぎゃいと騒ぐ魅尾を後に、俺は常盤さんのデスクの引き出しから肥後守（カッターナイフじゃないところが常盤さんらしい）を取り出し、部屋にあった適当な椅子を引っ張って持ってくる。

ちなみに、常盤さんの服は、みんなを下に連れて行った時に一緒に持って行つてある。

「よつと、このへんだよな」

椅子を壁際に置くと、俺はその上に立ち、肥後守の刃を出して、指示されたあたりに刃を当てて壁紙に切れ目を入れる。昨日の騒ぎで壁紙はすでにぼろぼろで、近いうちに張り替える予定なので、多少傷が増えても問題ないだろ。

そして、壁紙をはがす。当然ながら、コンクリートの下地が出てくる。しかし今回はそこにプラスチックなものが現れた。

壁紙の下、コンクリートの壁に、漢字や漢字を組み合わせて新しい文字にしたような模様が、黄色の染料で書かれていたのだ。

なんだこれ。壁紙の下つてことは、この前壁紙を張つた時に書かれたつてことか？

「いや、違つうの。これはごく最近書かれたものじゃ。将仁、喜べ。」

この術者が如何なる方式で陣を張つておるのか、掴めてきたぞ」

だが、それを目にした魅尾は、はつきりとそう言ってくれた。さすが俺の30倍生きた妖怪だとちょっと感心してしまった。

「あれは、黄麟の名を借りた土気の祭文じゃ。あれから察するに、この家屋内に、強制的に五気の力が安定した空間を作ろうとしておるよつじや」

だが、その後の説明はまた良く判らない言葉が並んだ。

「その五気が安定してると、どうなるんだ？」

「全てのものが最も安定した状態となる。すなわち、あやかしの力が入り込む余地がなくなるということじゃ」

「だったらさっさと片付けようぜ。どうすりゃいい？」

「む、ならば、木で出来たものを持参するのじゃ。なるべく白木のものが良い」

すると、魅尾は腕を組んでちょっと考えるそぶりを見せ（むくれていられるようにも見えるが）、こう言った。

「木？なんでだ？」

「木剋土と言って喃、土気は木気によって打ち滅ぼされるのじゃ。

木の根は土より養分を吸い上げ土を弱らせるのである」

魅尾はそんなことを言っている。五行説という思想に基づいた考え方らしいが、本当にそんなもんで解除できるのだろうか。

いまいち納得できないまま、俺は1階に降りると、台所からすりこぎを持っていった。

「随分とつまらんものを持って来た喃」

「白木のものなんて今時このぐらいしかないって」

「まあ良い。ちと貸せ」

すると、魅尾がちっちゃい手を差し出してくる。何をするのかと思いつながらもそのすりこぎを渡すと、魅尾は何かぶつぶつとつぶやきながら（声が小さくて聞き取れなかった）その表面を手でぺたぺたとさわりはじめた。何のまじないだろう。

「こんなもんでよかる。ほれ、御主の出番じゃ。これであの祭文を叩くのじゃ」

暫くしてから、魅尾はそう言いながらすりこぎを俺に差し出した。

「お前が何とかするんじゃないのか？」

「わらわでは背が届かんのじゃ。あとは誰がやっても同じじゃ、さっさとせい」

魅尾に促され、半信半疑ながら、椅子の上に乗ると、すりこぎでその黄色い文字のあたりを軽く叩いてみる。すると、見たところ剥き

出しのコンクリートなのに、ゴムが低反発シートの上から叩いているような、妙な感触があった。

「なんだこれ？」

「相剋の関係にある故反発しておるのじゃ。軽くではその反発を越えられん、思いつきりやれ」

というので、俺はすりこぎを振りかぶると、思いつきりその壁に書かれた文字目掛け叩きつけた。

すると。硬い手ごたえがあった、と思った瞬間。ポゴツという音とホコリを立てて、コンクリートで出来た壁が向こうへ凹んだのだ。

「な、な！？」

そのホコリが俺の顔めがけて噴き出して来たので思わず顔を背ける。ホコリが散ったところで改めてそこを見てみると、さっき黄色い模様が書かれていた部分を中心に、直径1メートルぐらいの範囲で壁のみならず天井までがすり鉢状に凹んでいた。いくら使ったのがすりこぎだからって、こんな形になることはないだろうに。

そして、黄色い模様は、跡形もなく消えていた。

「うむ、成功のようじゃな。陣の力が弱まった」

自分の体をきよきよと見回しながら、魅尾がそんなことを言う。しかし、その割にはなんの変化も見られない。

「本当に成功なのか？何か変わった様子がないんだが」

「御主は、あやかして無いから判らぬのじゃ」

「本当かねえ？」

俺にも一応、擬人化の力が、魅尾の言葉を借りればあやかしを作る力があるんだから、多少は何か感じてても良さそうなものなんだが。

「さて、それでは次へ参るぞ」

そんなことを考える俺の前で、腰に手を当て仁王立ちした魅尾が、何やら不穏な言葉を発する。

「へ、次？」

「そうじゃ。まだ五気のうち土気を解き放つただけじゃ、あと火、水、木、金の気を解き放たねば全ては終らん」

いまいち状況が把握できない俺に、魅尾はそう言い放った。つまり、あと4つ、こつこつというのがあってこつとらしい。

「お前、そういうことは最初に言えよ」
「なんか、疲れてため息が出てしまった。」

11. そしてみんな動かなくなった その12

「む、あつたぞ将仁。ここじゃ」

家の西、敷地の入り口にある門のあたりで、魅尾が声を上げる。

魅尾は、入り口の横にある郵便受けの下にしゃがみこみ、そこから上を見上げている。

魅尾が見ているであろう郵便受けの下を覗き込むと、さっき家の中にあつたものと似たような、漢字みたいな新しい文字みtainな模様が、今度は白い染料で描かれていた。

「これって、さっき言つてた、西にある金気の祭文って奴か？」

「うむ、御主も案外理解が早い喃」

そう言う魅尾の顔は、ちよつと得意そうだ。

家の中にはもうないだろう、という推測のもと、俺達は家の外に出て調査を続行していた。

魅尾曰く、俺の家に張られた陣は、「五行説」という考え方に基づいて作られているらしい。その考え方によると、さっき俺達が潰した「土気」は「中央」にあたり、残りは「東に木気」「南に火気」「西に金気」「北に水気」となるんだそうだ。

そして、西にある金気、つまり金属のものを探しに来たところ、郵便受けがビンゴだったというわけだ。確かに家の西にあつて、金属製だもんな。

郵便受けの下にあるその模様を、ちよつと手で触つてみる。さっき家の中で見た黄色い模様のときは、すりこぎでは触つたが、直接は触っていないので、どんな感じになるのかちよつと気になったからだ。

そして、期待に外れて、そこには変な感触はなかった。ごく普通の、ブリキの手触りだけだ。

「ホントにこれなのかねえ？」

「何も感じぬのは御主が鈍いだけじゃ。それより、準備はよいか」

「へいへい」

言いながら、俺は古新聞を取り出すと、棒状に丸めて魅尾に渡す。そして、ちよつと緊張した面持ちで剣道の竹刀を持つようにして構える魅尾に、改めて声をかける。

「怖くないか？」

「ば、馬鹿にするな、わらわを何じゃと思つておる」

「代わるうか？」

「御主では呪がかけられぬである、い、いいから、早くせい」

「へいへい、んじゃ、とその前に」

マッチを擦ろうとしたところでふと思い出し、水を入れたバケツを持ってくる。

なにしろ、今度は火を使う。金気は火気に打ち滅ぼされるので、新聞紙に点けた火である字をあぶるらしいのだ。

さっきのアレから考えると、郵便受けがひどいことになりそうだが、それ以上に火事とかになるのが怖い。

「じゃ、点けるぞ」

マッチを箱から取り出し、擦る。シュツという音と共に、マッチの先にオレンジ色の炎が灯る。

それを、魅尾が両手で構える丸めた新聞紙の先に移すと、いとも簡単に火が燃え移った。

魅尾は、その火を見つめながらぶつぶつと何かつぶやく。これは呪いに対抗するため、こちらからぶつける「気」を高めているんだそう。そして、火は木と違って発散しやすいので、終わるまで何かやり続けなきゃならない、と魅尾が自分で言っていた。

「よ、よし、では参るぞ」

そして、覚悟を決めるようにそう言うと、火が点いた新聞紙を高々と掲げ、郵便受けに近づく。

そして、その火が郵便受けの下、あの白い文字に触れた、その時。

バババババババツ！

突然、まるでそこをに火薬が何か仕掛けられていたかのように猛

烈に火花が飛び散り、爆竹をほおりこんだようなもの凄い音がした。

「うわわわわわっ！？」

「ぬううううっ！」

しかも、火の粉がそこら中に飛び散っている。なんていうか、溶鉱炉のそばか溶接工事の現場が、こんな感じなんじゃないだろうか。

こりゃ、火事になるかもな、なんてことを思いながらも、魅尾にかかりそうな火の粉を振り払っていた、その時。

ポゴンッ！というひとときわ大きな、何かが破裂したような音と共に、爆風が飛んできた。

「うわっ！？」

思わず、魅尾を抱えてひっくり返ってしまった。

そして、静かになったので、郵便受けのほうを見る。

そこには、さっきまで銀色に光っていた郵便受けが、煤まみれで真っ黒になった上に、さっき字が書かれていた底面にぽっかりと穴が開いた、見るも無残な姿になっていた。

「あっちゃー……」

「う、うーん、うまくいったか、の？」

念のためその郵便受けを見ると、確かに文字は消えていた。正確に言うと、その文字があったあたりがごっそりとなくなっていた。だが。

「あ、こらー！」

さっき使った新聞紙が、火が点いたまま芝生の上に転がっていたので、あわててバケツの水をぶっかけて消したのだった。

11.そしてみんな動かなくなった その13

「一体、どうなっておるのだこれは！」

「どうと言われましてもお、うう、どうしたらいいのでしょうか」

「大丈夫だよお、お兄ちゃんが頑張っているんだもん、もうすぐ戻れるよ」

「そうでしょう。私たちは将仁さんと一心同体、私たちが信じなくて誰が信じるのでしょうか」

「そうだよ、第一、さっきまで何もできなかったみんなが、ここまですで回復したんだからさ」

「でも、誰がこんなコトしたアル？」

「It's under examination (調査中) デース」

バケツに水を汲みなおすため、外の蛇口へとバケツを持っていった、その時だった。

リビングから、とても聞き覚えのある、そして心待ちにしていた声が聞こえた。

思わず、窓から部屋の中を覗き込んだ。ひよつとして、みんな戻ったのか。

だが、そこには俺がさっき部屋を出たのと変わらない光景があった。すなわち、人の姿は全く無く、道具と機械だけがリビングを占拠する光景。

だが、声は確かにした。ってことは、まさか。

「お、おい」

ちよつと怖くなりつつ、窓から入った俺は、その機械と道具たちに声をかける。

「あ、お兄ちゃん！」

「ぬ、貴様あ！我らを放置して何をしておるのだあ！」

「無事ツスか、さっきすごい音がしてましたけど!？」

すると、声だけが聞こえてきた。

「お前ら、大丈夫なのか？」

「これが大丈夫言っているのかちよと迷うアルけど」

これはどうやら、例の祭文という奴を1つ消していく毎に、少しずつ本来（とっていいのか悩むが）の力を取りしていく仕組みらしい。それで、今は会話だけは出来るようになったようだ。

ちよつと考えると、ヤバい光景だ。なにしろ、そこにいない人の声
が聞こえるのだ。幽霊だ、怪奇現象だと言われてもおかしくない。

もっとも、ここ数日で色々と不自然なものを見てきた俺にとっては、
確かにちよつと慣れない光景ではあるがそれほど受け入れられない
話ではない。

念のため、リビングに集めたやつら全員、身振りは見えたが声が聞
こえなかった鏡介はもちろん、意思の疎通すらできなかったクリン、
シデン、紅娘まで話ができるようになったらしいので、理屈は後回し
にして、何があつたのかをかいつまんで話す。

「狐につままれたような話だな」

最初に答えたのはシデンだった。

「今回は、狐は俺達を化かすのではなく、見破る手助けをしている
んだがな」

「あらあ、そうなんですかあ？そういえば、その肝心の魅尾ちゃん
はどこですか？」

「つと、そつだ、外にいるんだ」

そつだった。俺は次の作業、南にあるこの家の南にあるはずの「火
気」を消すために必要な水を確保するために来たんだ。

「悪いな、細かい説明は後ですから、もうちよつと待っていてくれ」

「あつ！こら、貴様！我等を放置する気がーっ！戻ってこーい！」
シデンがわめくのを後ろに聞きながら、俺は蛇口へ向かった。

11.そしてみんな動かなくなった その14

洗い場にバケツを置くと、蛇口に手を掛ける。バケツに水を張るためだ。

「……………待てよ」

だが、あることを思いつき、俺はバケツに水を入れるのを中止した。そして。

「なんじゃ、これは？」

その代わりにあるものを持っていったら、魅尾に怪訝な顔をされた。「これはホースというものだ。見てのとおり中が空洞になっていて、あそこの蛇口から水が通って、ここから出てくる」

そう。持ってきたのは、庭の水撒き用ホースだった。バケツ1杯だと、使い切ったときにまた汲みに行かなきゃならないのが面倒だからだ。

「それで、南の火気つてのは、あれか？」

「見て判るである」

そして、俺は魅尾が促すほうを見る。

それは、今までの2つと違い、近くに来ればすぐ判るようなものだった。なにしろ、漢字のような模様の形にひび割れた地面から、オレンジ色の火が燃え上がっているのだ。それが幻でない証拠に、そのまわりは焚き火どころかキャンプファイヤーのそばにいるように熱い。

「随分とまた凝ったものを作るもんだ」

なんというか、ちょっと幻想的な光景だ。消すのが勿体無いような気もするが、消さなかったらあいつらは戻れない。どっちが大事かといえ、俺はもちろん後者を取る。

「おい、御主。水が出て来ぬぞ。これでは使い物にならないか」

そんなことを考えていると、魅尾がホースの端っこを俺に突きつけ

てきた。そりゃそうだ。元になる蛇口が閉まったままなんだから。その火にホースの先を向けておくよう魅尾に言つと、俺は蛇口を開けに行く。

「あけるぞー」

一言断つてから蛇口を開く。

「うわわわわわ！」

すると、なぜかそのホースがまるで蛇のようになた打ち回りながら庭に水を撒き散らす光景が目にとびこんできた。

あわてて水を止めるとその蛇は動かなくなる。そしてそこに、いるはずの魅尾の姿はない。

「つてお前、なんでここにいるんだ」

そしてその魅尾は、なぜか俺の横にいて俺のズボンを掴んでいた。

「お、御主が心配だから来たのじゃ」

「あんな、ここにいたら水が掛けられないだろうが」

「なら御主が近くへ行くがよからう！べべ別にわらは火が怖いわけではないぞっ」

別に俺はそんなことは言つてないんだが。狐火つてやつもあるから、妖怪の狐は火の扱いに長けていると思つたんだが、そうでもないのだろうか。もしかしたらこいつは、実は妖怪になりたてで、火を怖がる動物の本能がまだ残っているのかもな。

「世話が焼けるガキンチョだな。じゃあ、俺が行ってくるから、お前は、俺が合図したらここで蛇口をひねって水を出すんだ。いいな」
「どつちやるのじゃ」

「……………おいおい、そこから話をしなきゃダメなのか。本当に俺の30倍生きてるのか、こいつは？」

「ほら、ここをこう握つて、こう動かせば、水が出る。さらに同じ方向に回せば、水の勢いが強くなる。逆に回せば、水の勢いが弱くなる。さらに回すと止まる。止まったらそれ以上は回らない。判つたか？」

しょうがないので、ホースの先端を洗い場まで持ってきて使い方を

説明する。

「う、うむ」

さすがに水を撒き散らした後だからか、魅尾は感心より注意を先に立てて俺の説明を聞いている。そして、ひと通りの説明が終ると、魅尾は自分の小さい手を蛇口に寄せた。

「こうじゃな？」

そして蛇口をひねると、当たり前だが水が出てくる。

「おお、出たぞ出たぞ。見ろ、出たぞ」

「そうそう。んじゃ次は止めてみような」

「ん、こうか」

そして魅尾が逆に蛇口をひねると、これまた当たり前だが水は止まる。

「おっ、見ろ、止まったぞ」

そうやって楽しそうに蛇口を開け閉めする姿は、見かけどおりまるつきり子供だ。

魅尾が蛇口の使い方を理解したであろうタイミングで、俺は声をかけた。

「んじゃ、行ってくるから、ちゃんとやるんだぞ」

「判つておる。この程度、わらわには造作も無いことじゃ」

そんなのは誰にだって造作も無いことなんだが、突っ込むのも面倒になったので、軽く聞き流す。そして俺はホースを片手に、火災現場へ向かう消防士になったような気持ちで、燃え盛る火の祭文へ向かった。

適当なところで、手を上げて魅尾に合図を送る。まさかまたついてきていないだろうな、と心配したが、今度はちゃんと水道の蛇口のところにいてくれた。

「おらあゝっ、これでも喰らいやがれゝっ！」

そしてホースから勢いよく噴き出す水を、地面から噴き出す火にぶっつけた。

すると案の定、焼けた鉄板や炭火に水をぶっ掛けた時のように、じ

ゆーっという音とともにものすごい勢いで湯気が上がり、あっという間に目の前が真っ白になった。

しかも、この蒸気がまた、目が開けていられないぐらいに熱い。目を閉じたら水が掛かっているかどうか判らなくなる、と思つて懸命に薄目をあけるが、白の濃淡な光景しか見えないので結局あまり変わらぬ。

じゅうじゅうという音はするが、水がああ火に掛かっているのかどうか良く判らなくなつてきた、その時だ。

ポカーン！

なんの前触れもなく、俺の前のほうで何かが爆発しやがった。おかげで俺は数メートル吹っ飛ばされて芝生の上につぶ倒れ、手にしたホースから出て来る水を思いっきり浴びてしまった。

なんなんだ、一体！？

「無事か？」

何があつたのか良くわからず呆然としていたところに、魅尾がやつてくる。来るのはいいんだが、なぜか俺の顔をつんつんする。

そこではつと我に帰り、飛び起きる。そして、現場を見て、俺はやつと一安心した。

さつき火が燃え盛っていた場所は、きれいに吹き飛んで、地面がえぐれ、できた窪みに水がたまっている。どうやら、ああ火を消すのは成功したらしい。

とりあえずほつとした、その時になつて、なんかケツのあたりが気持ち悪いことに気付いた。

見ると、あたりは水浸しになっていた。そりゃそうだ。俺の持っているホースから、まだ水が出つ放したのだ。そして、俺のまわりも水浸しになつていて、その中に寝転がっていたのだから、すでにパンツまでびしょびしょだ。

「あークソ、なんでこんな年になつてこんな時期に水遊びせにやならんのだ」

あたる相手もないので、俺は一人でぶつくさ言いながらシャツを

脱いで絞ったのだった。

11. そしてみんな動かなくなった その15

今、消した祭文は3つ。残りはあと2つ。

口で言うのは簡単だが、どれもこれも力技でやっているせいか、ひとつ消すごとに家はどっかボロボロになるし俺自身も心身ともに確実に磨り減る。

この先もまだこんなことを続けにやらねえのかと思うと、気が重くなってくる。

「俺、死にやしないだろうな」

「なに不吉なことを言うておる、御主はこの家の主なのである」
俺を励まそうとしているのか、魅尾がそんなことを言ってくる。

だが、力技を提案したのがこいつだと思うと、ほんとうはもつと楽な方法があるのにわざとしんどい方法を取っているんじゃないかと疑いたくなってくる。

それに、ここは住宅地なわけで、しかも日曜日なわけで、お隣さんがいるわけだ。そんなところでさっきからどっかんどっかんと爆発が起きているわけで、なんで騒ぎにならないのか不思議ですらある。肉体的な疲労のせいでネガティブになってきた頭の中を切り替えるため、次にすることを考える。

残っているのは「木」と「水」、それぞれ家の東と北にあるらしい。そして、「木は金属の刃物で切り倒される」「水は土にせき止められ、吸い込まれる」ということらしいので、それぞれを消すには金属製の刃物と土が必要になるらしい。
ということ、俺は物置へ向かった。

うちの物置は、敷地の北東の隅にある。そのため、家の北と東を同時に見渡すことができる。はたして、それは簡単に見つかった。

まず東には隣の家とうちを区分けるフェンスがあり、そこに蔓性の薔薇（種類は知らん）が絡まっているのだが、その薔薇が異常繁殖しているので、多分あのあたりだろう。

そして北だが、こちらには暖房用の灯油が入ったドラム缶が2つほど置いてあり、片方の蓋に水がたまっていた。他に水気は見当たらないので、たぶんあのあたりだと思う。

ちよつと考えた末、爆発とかしなさそうだから安全だろうと思ひ、

「東の木気」を先に片づけることにした。

それで、改めて薔薇の棚までやってきたのだが。

「……改めて見ると、すごいな」

フェンスは、にわかには異常繁殖した薔薇の蔓と葉っぱに包まれ、完全に見えなくなっていた。それどころかその薔薇のつるは、互いに絡み合い、ひとつの塊のようになっている。

左右にもまだまだ場所があるんだからもつと伸び伸びと生えりゃいいんだが、そいつはぎゅうぎゅうに密集して生えている。あきらかに不自然だ。

「む、あのあたりじゃ」

魅尾が指をさしたのは、案の定その薔薇の蔓がひときわ密集して絡んでいるあたりだった。よく見るとそこは、蔓の色が部分的に本来のぶどう色から青緑色に変色しており、それが絡んで模様みたくなっている。そしてそれは、今までの例があるためかなんとなく漢字のような文字のように見える。

「なんつーか、だんだんと芸術作品っぽくなってきているな」

そんな言葉が口をついて出てくる。

「わらわにはよくわからん喃」

「お子様にはわかんないの」

「むうっ、わらわよりずつと短命のくせに子供扱いしおって」

「まるつきり子供だからな。まあ前衛芸術なんかは俺も良くわかんねえけど」

そんなやり取りをしながら、物置から持ってきた剪定ハサミを手にすると、俺は色が違う薔薇の蔓へと伸ばした。

11. そしてみんな動かなくなった その16

「おう将仁」

そのとき、不意に魅尾が話しかけてきた。

「なんだ、年の話なら片付けてからにしようぜ」

「いや、わらわの年は良いのだが、その枝な」

「へ？」

何だ、と思った時には、いい切れ味を見せたハサミが、青緑色の枝をチヨッキンと切断していた。

その瞬間。

めきめきめきめきっ！という音とともに、さっきまで互いに絡み合っている、固まっていた薔薇の蔓が、何かのスイッチが入ったかのように動きだしたのだ。

その様は、なんというか、枝を切られて怒った薔薇が立ちあがったようにも見える。

「な、なんだこれ!？」

「いや、今までと少し毛色が違うようだから、注意したほうがよいぞ」と言おうと思ったのじゃが」

驚く俺の横で、魅尾はしれっとそんなことを言う。

「あのなあ、言うのが遅えっての!」

目の前でざわざわと広がっていく薔薇の蔓を前に、俺は思わず立ちすくんでいた。

テレビゲームとかファンタジーものの映画とかでは、こんなふうによく蔓植物が出て来ることがある。だが実物を目の前にすると、うねうねとした動きも相まって非常に気持ち悪い。

そして。

びゅんっという音とともに、うねうねと動いていたその薔薇が、攻撃をしかけてきたのだ。

マジか、と思いつつとっさに右にステップを踏む。すると、その薔

薔の蔓が、さつき俺がいたところの地面を叩いてえぐっていった。さらに大変なことに、他の蔓までが、まるで獲物におそいかかる蛇のように俺に攻撃を仕掛けてきたのだ。

「くそっ」

こんなの、一介の高校生にどうにかできるもんじゃねえぞ。そう思った瞬間、俺はそこから背を向けて全速力で逃げ出していた。

距離を稼ぐことにしたのだ。あつちは植物、地面に根を張っているわけで、さすがに歩き回ることはないだろう。

案の定、蔓の長さには限界があるようで、5メートルほど離れると攻撃してこなくなった。とはいえ、えぐいトゲのある蔓は延びたまま、まるで威嚇するかのようにゆらゆらと動いている。

「はあっ、はあっ、あ、悪夢だ、こん畜生」

「ふむ、やはりな」

俺が、今やバケモノと化した薔薇をみながら悪態をついていると、さっさと安全地帯に非難していた魅尾の奴がそんなことを口にした。「あの真ん中あたりを見るがよい。他の蔓は動いておるが。祭文を作る蔓はその形を崩しておらん。やはり祭文は崩すことが出来ぬようじゃな」

言われてみると、まわりで蠢いている蔓は全てがぶどう色か灰色で、青緑の蔓は確かにほとんど動いていない。

とはいえ、あんなのどうしろというんだ。やられっぱなしなのは気に食わないが、なにしろ相手は植物だ。しかもトゲのある薔薇と来ている。殴ったところで効くかどうか分らないし、それどころか殴ったこっちがケガする。

「くそ、刀かチェーンソーがほしいぞこん畜生」

すると、魅尾はほれと言って何かを手渡してきた。

それは、大作業に使われる両刃ノコギリだった。

「ノコギリの32枚目の刃は鬼刃と言ってな、鬼を挽き殺す力があるのじゃ。少なくともその剪定ハサミでは相手にならんじゃろう」

「っってお前、ちょっと待て。俺に、これであれと戦えってのか!？」

「では御主は、こんないたいけないぷりちーな幼女をあの魔物の矢面に立たせると申すか」

「……このチビ、こういう時ばかり子供ぶりやがって。本当に俺の30倍、生きている大妖怪なら、その妖力であの薔薇も……」

なんとかしてほしいもんだが、と言おうとして、俺も都合がいいときに頼ろうとしていたことに気がついた。苦しい時の神頼みとはよく言ったものだが、こんなんじゃダメだ。

「いや、なんでもない」

そして俺は、腹を括ると、渡されたノコギリを握り締めた。

「おい、チビ魅尾。本当にコレで倒せるんだろうな」

「チビは余計じゃ。わらわにできることはやった。あとは御主次第じゃ」

「心強いお言葉ありがとうよっ!」

なんともあてにならない言葉を受けると、俺はファンタジー映画に出てくる騎士よろしくノコギリを両手で構える。

そして、ひとつ深呼吸してから。

「うおらあああああああああああつ!」
雄たけびと共に突っ込んだ。

間合いに入った瞬間に振り下ろされる薔薇の蔓に向かってノコギリの歯を叩きつける。ノコギリの使い方としては思いつきり間違っているし32番目の刃なんか狙って当てられるもんじゃないが、こうするしかないのだ。

そして、意外にもそれは正しかった。ノコギリの刃が当たった、と思った直後、その蔓はまるで居合いの達人が刀でやったようにすっぱり切り落とされたからだ。

だがそれに感心する暇はなかった。なにしろ蔓はまだ何本もある。そんなのが一斉に襲ってくるのだ。ボケっとしている余裕はない。

俺は剣か刀のようにノコギリを振り回し、真田流兵法術とボクシングで鍛えた動体視力で襲い掛かる薔薇の蔓を見切り、反撃しつつ、

祭文のところへと進む。

と言ったら簡単に終わったように思うかもしれないが、当然ながらそんなわけがない。バリアーを張れる鏡介とか氷漬けにできるレイカとか電撃をぶつ放すバレンシアとかなら楽勝なのかも知れないが、俺にはそんな便利なものはない。

幸いにも向こうに知恵というものはなかったようで、よくマンガとかである「意図的に手足にからみつかせ、締め上げる」ようなのは無かったが、それでも鞭のように振り下ろされる蔓は手や足にからみつき俺の動きを妨害する。しかも、叩かれるだけでも痛いというのに、トゲという無くてもいいオプションがついた蔓による直接攻撃というオマケつきだ。

こんなのを経験している高校生なんて、日本中どこを探しても俺だけだろう。

「畜生、人間をなめんじゃねえぞこの植物風情が！」

ノコギリはもの凄いい切れ味を見せ、刃に触れた蔓を次々と切り裂いてくれるが、それでも全部を迎撃はできない。そもそも、武器を使った戦い方なんて俺が知ってるわけがない。

俺は、とげだらけの蔓に体のあちこちを叩かれ、引つかかれた。体中の至る所がびりびりと傷む。

そして、どのぐらいの時間が掛かったのか分からないが、俺はようやく祭文らしき青緑色の蔓が絡みあつて模様を作っている手前までやってきた。

「くらえええええええええええええええええつ！」

俺は最後の力を振り絞り、その絡み合つた青緑の蔓目掛けてノコギリの刃をたたきつけた。

ガリツ、というちよつと嫌な手ごたえと共に、ノコギリの刃はその蔓の塊に食い込んだ。

最後の抵抗とでもいうか、中ほどまで行った所で刃が止められる。

だが、俺は両足を踏ん張り、力任せに振りぬいた。

さらに、今度は上から下へと切りつける。青緑色の蔓が描いた模様

が十文字に切り裂かれる。

だが、その直後。ぱきーんっという甲高い音がした。見ると、ノコギリの刃が真ん中から真つ二つに折れていた。酷使に耐えられなくなったのか、それとも変なほうに力を入れてしまったのか。折れたほうの刃はまだ鳶に食い込んでいる。

やばいぞ、武器が無くなってしまった。血の気がさーっと引いていくのが、自分でも感じられた。

しかし、そのノコギリは、自分の身と引き換えに、最後の仕事を成し遂げてくれた。

十字に切り裂かれた蔓の切り口から、さらに青みがかった汁が流れ出したかと思うと、そこから急激に薔薇がしおれ始めたのだ。

しゅわしゅわという変な音を立てながら、あれだけ茂っていた薔薇は見るも無残にしおれていき、やがて、さっきまで暴れていたと思えないぐらいに干からびたしおしおの姿になっていく。

そして、目の前には青臭いゴミの塊が残った。

「……………あれ……………」

それを見届けた直後。不意に眩暈が襲ってきた。

そして抵抗する間もなく、前進から力が抜けた俺は、そのままそこにひっくり返ってしまった。

11.そしてみんな動かなくなった その17

「……………ん……………」

どのぐらい時間が経ったのだろうか。

気がつくくと、俺は屋内に敷かれた布団の上に横たわっていた。

「お兄ちゃんっ!」

「気がついたのですねえ!？」

そこに、聞き覚えがある声が聞こえ、そして見覚えのある顔が見えた。

ケイトと、クリンだった。

「……………あれ?なんでこいつらが人の姿になっているんだ?確かまだ、北の水気が残っているはず、それに、俺ってさっきまで外にいたよな?」

「お前たち、なんで?」

つい、そんな言葉が口に出た。

「わかんないけど、気がついたら、動けるようになってたの」

なんでも、クリンやシデンが喋れるようになって、俺が顔を出した後、しばらくして人の姿になったんだそう。そして、その時はほとんど動けなかったのだが、その後しばらくしたら不意に動けるようになったらしい。多分、人の姿になったのは3つ目を消した時点、動けるようになったのは4つ目を消した時点なんだろう。

「将仁さんのことが気になりましたえ、外に行っただんですよう。そうしたらですねえ」

俺が庭でぶっ倒れていて、その横でおろおろしている魅尾がいたんだそう。

「びつくりしましたよ。将仁さん、キズだらけなんですものお」

「お兄ちゃんのこと、みんなどこまで運んできたんだよ?」

みんな?ああそうか。みんな、人の姿に戻れたんだっけ。

そういえば、他の連中はどうしたんだ?

「終わったぞー」

「おい、魅尾。本当に終わりなのだろうな」

「わらわがウソを言うわけが無かるう」

「にしても、人間の筋力で仕事するのって、意外と大変なんだねえ」
その時、外のほうから聞き覚えのある声が聞こえた。あの声は、鏡介、シデン、魅尾、それからヒビキか？

何が終わったのか聞こうとして体を起こす。体中色々なところが痛い、動けないほどではない。

「あつ、お兄ちゃんまだ動いちゃダメツ！」

すると、ケイが飛びついてきて俺を寝かせようとする。

大丈夫だと言おうとして、ふと自分の体に目が行って、そしてびっくりしてしまった。

包帯だらけだったのだ。まるでミイラだ。そして、着ていたはずのシャツもジャージもない。

まさかと思って、下半身にかかった夏掛けをめくると、さすがにトランクスはそのままだったが、ジャージは跡形も無かった。その代わりに、そこにも包帯が巻かれていた。

つてことは……むう。凄く恥ずかしい光景が連想される。

「あつ、将仁さん、目がさめたのでしよう」

そこに、何かを抱きかかえたテルミが入ってきた。

「上官、生きていたか！」

「うむ、なんとも無様な姿じゃの」

「ま、うちの頭がそう簡単にくたばるたあ思ってたけどねえ」

そこにどやどやと他の連中が入ってきて、6畳ほどしかない室内は一気にせまくなる。

「ええと。あなたたちがそこで固まっていたら、私が入れないのだけれど」

「Master、コンナコトモアロウカト、goodなapplicati
onをresearchしたデース！」

「将仁サン、滋養強壯な羹？作たアル、飲むヨロシね！」

そこにさらにモノたちが入ってきたので、余計に部屋が狭くなった。でも、俺はとても嬉しかった。

みんながいる。そのことが、どれだけ俺にとって大切なことなのか改めて、分かったから。

そして、俺はあることを思い出した。

「さつき、終わったって言ってたけど、何やってたんだ？」

さつき、外から帰って来たときに鏡介が言っていたセリフだ。

「ああ、最後の祭文を処分して来たんスよ」

鏡介が、少し泥に汚れた顔でそう答える。

魅尾曰く、家の北にあるはずの水の祭文。この家に何者かが仕掛けた、あやかしの力を遮る陣を形成する、最後の点。

つてことは、こいつらは、陣が完全に消えなくても、元に戻ったつてことか？

だが、よく話を聞いてみると、完全には元に戻っていないかったらしい。

「いやあ参ったよ。動けるようになってたけど、力が出なくなつてさあ」

「物を持ち上げられないヒビキさん、初めて見たツスよ」

最後に残った水の祭文は、俺が予想したとおりドラム缶の上にたまった水の上に、水面に墨で描いたような字だけが浮かんでいたようだ。見てみたかったもんだ。

水気には土気、ということ、最初はそのドラム缶をひっくり返し、地面に流してしまおうと思ったのだが、大型バイクを片手で持ち上げるヒビキの力をもってしても微動だにしなかったらしい。

そこで、近くの地面を掘り返し、そこから出た土をドラム缶の上にある水たまりに被せるという方法を取ることにしたのだが、そこで「いつもの力が出ない」ことに気がついたらしい。

そしてその時は、鏡介のバリアやビームも出せず、シデンも空を飛ぶことができないという、ごく普通の人間と変わらない能力しか出

せなかつたのだそつだ。

「でもまあやるしかないからやつたんだけどさ。あんまり気持ちのいいもんじゃなかつたねえ」

これはヒビキの弁だ。なんでも、その水たまりに土をぶっかけるとそこに溜まっていたものとは比較にならないほどの量の水が湧き出し、泥水となつてあふれだしたのだそつだ。

この現象に、作業していた連中は驚いたそつだ。当然だ、俺だつて水溜りからそこにある以上の水が溢れ出したら驚く。

だが、それでもしつこく土を被せていったら、泥水の量は徐々に少なくなり、やがて溢れなくなつたのだそつだ。

そしてさらに土を被せていくと、ぼふつという鈍い破裂音がして、そして完全に反応しなくなつた。

「終わつたかな？と思つてドラム缶に手をかけてみたら、さっきはぴくりとも動かせなかつたドラム缶が軽くなつちまつてさ。ついでだから、ひっくり返して土を落としてきたんだよ」

それはつまり、うちのモノたちが完全に復活した、ということだ。

これで、すべて元通りなのだ。

特殊な能力がない、「普通の人間」なみんなと、一度生活してみたかったが、今となつてはそれは無理だし、それにうちのモノたちは、そのことを喜ばないような気がするので、口にするのはやめておいた。

11. そしてみんな動かなくなった その18

「それにしても、魅尾。お前が妖怪だったとはねえ」

「妖怪妖怪と申すな。わらわは白狐なるぞ」

「確かに白いですねえ、私とおそろいですう」

「Japanese foxでbody colorがwhiteはrareデースねー」

「そうではなーいっ！御主らは白狐が稲荷明神の使いと言われておるのを知らんのかーっ！」

「じゃあ、お手柄の魅尾ちゃんに免じて、今日の夕食には稲荷寿司を作りましょう」

「お寿司っ！？わぁーい、ケイ初めてーっ！」

「寿司アルかー、生魚はちよと勘弁アルな」

「おい紅娘、好き嫌いしてると、でっかくなれねえぞ？」

「中国には生魚食べる習慣ないアルから」

「えーと、紅娘。稲荷寿司ってのは、味付けした油揚げの中にご飯を詰めたもんでな」

そして、大きな問題が終わった、という安堵感からか、そこは和やかなおしゃべりの場となった。

それにしても。うちのモノたちに頭やら尻尾やらを撫でられるキツネ耳の少女をみていると、狐って本当に化けるんだな、とちよつと複雑な心境になる。

そこでふと、もう一人の妖怪の存在を思い出した。

時計の付喪神、常盤さんだ。まわりを見まわし、その姿を探す。だが、見つからない。

「常盤さん？」

声をかけてみても、返事がない。そして、まわりのモノたちも気がついたらしく、きよろきよろと自分のまわりを見まわしその姿を探す。

「どこ行つたんだい、あの弁護士さんは」

「先ほどまで、リビングにいたはずでしょう」

「面と向かうのが、怖いのかしら」

「But、sameなhomeにliveするデスから、some dayはmeetするデスよ？」

「そうですね、けじめはつけなくてはなりませんね」

突然、常盤さんの声がごく近くで聞こえた。

「うわあっ!?!と、常盤さん、い、い、いつのまにっ!?!」

いつのまにか、その常盤さんが、俺の枕元に正座していた。しかも不思議なことに、他のモノたちは誰もどいた様子がなく、まるでレポートでもしたかのようにそこに出現していたのだ。

そして、その常盤さんは、とても真剣な表情をしていた。いつもどこかに持っている穏やかさは微塵もなく、それどころか真剣勝負のような気迫さえ感じる。

思わず、俺も体を起して、常盤さんの前に正座してしまう。

「将仁さん………本当に、ごめんなさい。」

そんな異様な雰囲気の中、常盤さんは俺の目の前で、床に両手をつき、深く頭をさげてきた。

「もうお気づきでしょう。私は、人間ではありません。付喪神という、妖怪です」

そして頭をあげると、手を後頭部へと持って行き、そこにあるものを包んでいるフリルのついたハンカチを外し、横を向いた。

話には聞いていたが、そこには確かに、懐中時計などのネジを巻くのに使われる、リユーズを人の拳大まで大きくしたものがくっついていた。

「このことを黙っていたのは、将仁さんに、私は人間だと思ってもらったほうが良いと、思ったからです。

ご存じのとおり、私は懐中時計が付喪神となったもの。ですが、私が西園寺の専任弁護士だということも、また事実。そして将仁さんは、私のような存在とは無縁の、ごく一般の学生として生活をされ

ていました。ですから、私は、妖怪のことは一旦伏せて、一介の弁護士として接することにしたのです」

納得はできる話だ。確かに、今の時代、”妖怪です”なんて言っても新手のパフォーマーか何かと思われるのがオチだし、だいたいオカルト大好き人間でもなけりやまともに取りあげないだろう。

でも、モノが人になる擬人化を目にしたら、妖怪だといわれても納得したと思うぞ。

「そして、相続の権利を有する将仁さんの近くにある機会を得た私は、その人となりを把握するため、観察を始めました。物を丁寧に使う人か、それとも乱暴に使う人なのか。自分たちを委ねて良い人かを、西園寺という家のモノの代表として、知りたかったのです」

「……それは、初耳です」

「皆さんには、黙っているようにお願いしました。他にも、いろいろなことを口止めていたのです。余計なことを知ったら、将仁さんは余計に西園寺の家を敬遠してしまう。そう思ったからです。

できれば、全てが終わってからお話ししたかった。何の心配も無くなってから、改めて西園寺の後継者になってもらおうと思っていた。でも……それも、今日でおしまいです」

そして、常盤さんは改めて俺に向かうと、眼鏡をなおし、再び言葉を紡いだ。

「これはすべて私が考えて、私が皆さんにお願いしたこと。でもその結果、私はあなたを騙すことになってしまいました。

皆さんにも、多大な迷惑をかけてしまいました。……本当に、申し訳ありませんでした」

そして再び、常盤さんは深く頭を下げた。いや、頭を下げるというより、完全に土下座だ。

常盤さんはそのまま、頭を上げない。

「常盤さ……」

声をかけようとしたその時、常盤さんの体が小さく震えているのに気がついた。そしていつのまにか、平たく床についていた両手が、

固く固く握り締められている。

さらに、とても小さな、押し殺したような、ひきつった声が聞こえる。

「……………さま、もう……………ません……………だ……………
……………した……………」

切れ切れだが、そんな感じだ。

それが、泣いているのだと判るのに時間はかからなかった。

常盤さんは泣き上戸だから、泣いた姿は何度か見ている。でも、素面で、しかもこんなふうに苦しそうに泣くのを見るのは初めてだった。

俺はその時、どんな顔をして、常盤さんのことを見ていたのだろうか。

「常盤さん。そんな事を聞かされて、俺が黙っていられると思ったんですか？」

声を殺しながらむせび泣く常盤さん、西園寺家を1000年見守ってきた付喪神に向かって、俺がかけた言葉は、そんなものだった。

「俺は、自分のことを他人に決められるのが大嫌いなんですよ。特に、知らないところで話を進められるのがね……………西園寺の専属弁護士を続けるんだったら、そのぐらい見抜いてください……………え？」

常盤さんは、驚いて顔を上げる。その涙でぐしゃぐしゃになった顔に向かって、俺は言葉を続けた。

「そ、それって……………」

「西園寺を継ぐって言ったんですよ。俺が西園寺を拒否したのは、俺を切り捨てた奴らだと思っていたから。そうでないと判った以上俺が西園寺という家を拒否する理由は、無いじゃないですか」

その言葉は、いともあっさり俺の口から出た。すると、常盤さんの顔が、ぱっと明るくなった。しかし、次の瞬間にはまた暗くしよぼくれる。

「で、でも、まだ、将仁さんを狙う輩が」

「さつきも言いましたが、俺は自分の知らないところで自分に関係することが決められるのは嫌なんです。それに」

俺は、そこで一旦回りを見まわしてから、言葉が続けた。

「こっちだって、何も出来ないわけじゃない。違いますか？」

「・・・・・・・・あ・・・・・・・・うあ・・・・・・・・あ・・・・・・・・」

すると、常盤さんは口元を押さえ、言葉にならないような声を上げた。

「ほら、立ってください」

そして俺が手を差し伸べると、常盤さんはそれが命綱であるかのよう
うに、両手でしがみついた。

「あ、あああ、あ、あ、い、い、がろヴ、ごらい、わ、ヴ、ヴ、ヴ、
ううううううう」

そして、常盤さんは言葉にならない声を上げて、その場に泣き崩れた。

11.そしてみんな動かなくなった その19

その後、ようやく泣き止んだ常盤さんを交え、俺達はそのままりビングで車座になり、今日のことについて話し合うことにした。

「我が思つに、昨日壁から出てきた輩と、無関係ということはあるまいな」

まず口を開いたのはシデンだった。それは俺も考えた。あの部屋にあった祭文は壁紙の下に書かれていた。そして魅尾曰くあれはごく最近に描かれたものらしいので、つまりあの模様は壁紙を？さないであの場所に描かれたということになる。

普通はそんなことは物理的に不可能だが、壁から出てきたあの黄色い女なら出来てもおかしくないような気がする。

そして、あの女が何の挨拶も無く潜入していたのは、こつちのことをスパイするためだろうし、そんなことをさせるのは、俺たちの「敵」にあたる連中しかいないだろう。

「魅尾、お前、今日の事件は、術者がいるとか言ってたな」

「うむ、確かに言った。それぞれに使われておつたのは五行の祭文であつたからな」

それで、うちにいる擬人化とか妖怪とかを邪魔する予定だったらしいな。

「でも、誰が？」

「誰つてそんなの、西園寺を潰そうとしてる連中に決まってるだろ。あつちもとうとう本腰を入れてきたつてこつた」

ヒビキがそのものずばりなことを言う。

「そのぐらいは私でも判ることでしょう。私が知りたいのは、その術を施したのが誰か、ということでしょう」

「そりゃあ・・・分らないけど」

「でも、なぜこんなことをしたのかは、推測は出来るわ」
そう言ったのはレイカだった。

「敵は多分、将仁君を孤立させるつもりだったのだと思う。彼らにとって最も邪魔なのは、西園寺の血族である将仁君。でも、いつもはそのまわりに私たちがいる。」

その私たちが、普通の女であれば力づくで事を進めることも可能だけど、そうではない」

「故に、先に我等を封ずる作戦にでたというわけか」

「孫子曰く、将を射んとすればその馬を射よ。外堀を埋める作戦アルな」

そのあたりは俺もそうだと思う。正確に言えばいつもってわけでもない（実際、ジムには一人で行ってた）が、大抵はケイと一緒だし、鏡介という影武者もいる。

だが、今日のケースは、最終的に何を意図して行われたのかがよく分からない。奴らにとって最も邪魔なのは、先代の遺言状と、そのターゲットである俺自身のはず。それに対する障害となるモノたちを封じたのは判るが、それにしてもその後の動きが無さすぎる。俺だったら、外で待ち伏せていて、発動と同時に押し入るとかして相手に考える時間を与えない。

俺ひとりでは何もできないとたかをくくって放置したのか、それとも、本当はいるはずの後詰が何かの手違いでいなくなったのか。

「それとも、俺たちにも気がつかないような爆弾が、どこかに仕掛けられているか」

ちなみに言っておくが、ここで言う爆弾ってのはダイナマイトとかそういうマジで爆発するものではない。実際にそんなもんが仕掛けられていたら警察沙汰になってしまう。

「ばばば爆弾ですかあ!?!」

「まるつきりテロっすね」

だが、中には額面どおりに受け取ってしまう奴もいるので、そういうもんじゃないと慌てて付け加えることになった。もつとも、常に誰かがいるこの家に爆弾を仕掛けるのはすばらしく不可能だろうが、「安心するが良い。物事を悪しきほうへ揺らがすようなまじないは、

「気配すらない」

「そういうのに詳しい魅尾が断言する。」

「てことはあれか？もしかしたら、今日の挨拶代わりだったとか？」

「They looks down on us very much（余裕ぶっこいてる）デース、disgusts^{むかつく}デース！」

「敵の正体さえ明らかになれば、こちらから乗り込み、殲滅してくれるのだが」

「一方で、常に後手になるせいか、こんな事を考える奴もいる。」

「どのみち、今日はこのまま治まってほしいがな。今日はもう疲れた」

そして俺は天井を見上げた。嘘は無い。体力には自信があるが、昨日といい今日といい精神面でも疲れることが多かったからだ。

「今日と言わず、ずうっと収まってくれたらいいんだけどなあ・・・」

「・・・あ？」

似たようなことを考えたのか、俺と一緒にそんなことを言っていたケイが、ふと何かに気付いたように口を閉じた。

「電話だつよー、電話だつよー。どうするーのー、でーるうーのー？」

かと思つたら、今度はいきなり歌いだした。ちょうどみんなが黙つた瞬間だったので、全員の視線がそこに集中する。

「はーやくうー、でーてよーねー、はーずかあー、しーからあー、りゅう兄ーちゃん、かーらだーよー、はーやあーくー、でーてえーよー」

今更だが、ケイの奴は着信音である某大泥棒3代目のテーマに自分の言葉を器用に乘せて歌っている。かわいいからもうちょっと見ていたいんだが、呼び出しの音である以上放置するわけにもいかないのだから出すことにする。

「ぴっ。もしもーし、将仁か、将仁だな、オレだ」

ケイの眼の色が変わつたと同時に、あのバカ兄の声がケイの口から聞こえてきた。

「なんだよバカ兄」

「おい、出るなりバカはねえだろ」

「ホントのことだろ」

そこまで言ったところでふとケイのを見ると、そのケイがシヨツクな顔でこつちを見ていたのに気がついてしまった。

「あ、違う違う、ケイのことじゃないから」

あわてて宥めに入ると、ケイはすぐ機嫌を直してくれるが。

「なんかおめえもすっかりお兄ちゃんしてるねえ。兄の苦労ってえのがちつたあ判ってきたか？」

その口から出てくるのはケイの表情とは全く違うあのバカ兄の声。

りゅう兄はいつもこんな感じなんだが、ケイの口から出てくると妙にムカついてしまう。

「用があるならさっさと見え、こつちや色々あつて疲れてるんだ」

おかげでついぶつきらぼうに言ってしまう。そう言ってもりゅう兄はいつも世間話とかすぐには話題に入ってくれない。

ごめん、ケイ。悪いのはりゅう兄だから。オレは心の中でケイに謝った。すると。

「ん、そうかい？んじゃ率直にいくが」

今日はやけに素直だな。と思っていたら、りゅう兄は妙なことを言い出した。

「おめえんち、今日なんかやんの？」

「へ？」

つい間抜けな返事をしてしまった。

なんでも、りゅう兄は今うちの近くに來ているらしいんだが、その俺の家の前に変な一団がたむろっているのを見かけたんだそうだ。

兄貴が何をしに來たのかも気になるが、うちの前にいる連中のことはそれ以上に気になる。

俺は、とっさにケイの両耳をふさぐと、そのまま他のモノたちに声をかけた。兄貴に変なことを動線られないためだ。

「シデン、2階に上がって、ベランダから外を確認してくれ」

「心得た」

「鏡介。確か近くの十字路にカーブミラーがあっただろ、そこから家のまわりを確認してくれ」

「了解ッス」

そしてシデンが部屋を飛び出し、鏡介がエチケツトブラシの鏡を覗きこむ。

「あー悪い悪い、んで何の話だったっけ」

そして、ケイの耳から手を離し、平静を装って答える。

「ああ、うちの前に誰かいるって話だっけ」

「ああ、知り合いじゃねえのか？」

「うちに用があるんだっいたら呼び鈴のひとつも鳴らすだろ。それよりりゅう兄こそなんでこっちにいるんだよ」

「なんでってそりゃ、心配だからに決まってるだろ」

「ホントかあ？」

「ウソなんかいわねえって、もっとも心配してんのはお袋だけどなんで、バイト帰りにでも見て来いってよ」

それで、実際に来て見たら、妙な連中がいたと。

そして、せっかく近くに来たんだからってことで、兄貴はやっぱりうちに来ることになった。まああの兄貴のことだから、来るなど言っても聞きゃしないんだろうが。

ただ、今日はその兄貴がいてくれることが、少し嬉しかった。決して口には出せないが、常盤さんが人間ではないと判ったとき、そしてこの家に人間は俺だけだと思った時、寂しさと不安が入り混じった、言いようのない気持ちになったから。

「なありゅう兄、どうせ来るならもう少し前もって言っといてくれよ。来年にや社会人なんだろ？」

「まだまだ学生のおめえが言うなっつての」

それがばれないよう憎まれ口を叩いたら、あっちからも憎まれ口で返されてしまった。

11.そしてみんな動かなくなった その20

通話をオフにすると、鏡を覗いていた鏡介が、声をかけてきた。

「確かにいるっすね。4人ぐらいスか」

りゅう兄がさつき言っていた、うちの前にいる変な連中についてだ。

「4人か、どんな感じだ？」

「うーん、小さくてよく判らないスけど、あまりちゃんとしてない風ッスね」

「年齢は10代後半から20代前半。だらしない風体。社会的地位はあまり高そうではない」

その時、泣き腫らして目を真っ赤にした常盤さんが口を開いた。その人の2割も生きていない俺が言うのもおこがましいが、目いっぱい泣いたからだろうか、それとも隠し事がなくなったからか、何かいろいろ吹っ切れたような感じがする。

それにしても、常盤さん、よく判るな。鏡介と同じものが見えるのかな？なんてことを思っていると、その常盤さんがさらに妙なことを言い出した。

「彼らは、このようなものを所持していました」

そう言つて、常盤さんは何かがちやがちやしたものを床に落とした。それを見て、思わず目が点になった。それは、特殊警棒やら金属バットやらメリケンサックやらといった、いわゆる「武器」だったのだ。これには、驚くなど言うほうが難しい。

「まだ隠し持っている可能性はありますが、聞くわけにもいかないのです」

「は、はあ、そうですね。うーん、やっぱりろくな……へ？あまりに淡々と話すので、俺はその裏にある不自然な点に気付くのに時間がかかってしまった。」

「……ちよつと待て、常盤さんいつのまに!？」

そう。常盤さんは、りゅう兄からの電話がかかってくる前から、ず

つとここにいたはずだ。それなのに、いつのまにか家の外にいる連中を見てきただけでなく、そいつらが持っていた武器を取り上げて、しかもここまで持ってきているのだ。

その謎に対する凄まじすぎる答えは、常盤さんの口から聞かされた。「ええ、ちよつと時間を止めまして、その間に取り上げてきました」時間を止める。SF系のマンガでよく使われる話のネタだ。よくあるのは、自分以外の時間を止めて何かをやるってやつで、されるほうは完全に無防備、というか何をされても認知すらできないという非常に厄介なシロモノだ。

思い返してみると、今まで起きたいくつかの不可解な現象が、常盤さんの「時間を止める」という能力で確かに説明できる。とはいえ、いくら常盤さんが時間に関係ある時計の化身でも、素直には信じられない話だ。

「マジですか」

「私は、将仁さんには嘘を言いません。正確に時を伝えるのは、時計の使命ですから」

そして、今まで見せたことが無い、屈託の無い笑顔を向けた。なんか言っていることが本筋から外れているような気もするが、とりあえず今は気にしないほうがよさそうだ。

なにしろ、その直後に事態が動いたからだ。

「あ、動いた」

鏡介がそんなことを言ったすぐ後に、ぴんぽーんとうちの呼び鈴が鳴ったのだ。

「りゅう兄かな」

「いや、うちの前にいた連中っす」

鏡を覗きながら鏡介が答える。どうやら、うちの前にたむろってた連中が入って来たらしい。しかしちゃんと呼び鈴を鳴らすとは意外に礼儀正しい連中だな。

だが、出ようとしたところでテルミに止められた。

「将仁さんは、晴れて西園寺の当主となられた身でしょう。ここは

私が参りましょう」

当主と言っても、そういうのには色々な手続きとかが要るだろうから本当はまだ違うんだが。

「いいから座ってなつて。今日は色々あつて疲れてんだろ。ここはあたしらに任せなつて」

背筋を伸ばして部屋を出て行くテルミと、その後ろをばきばきと指を鳴らしながらついていくヒビキを見て、ちよつと不安になったが、その時になつて体が痛くなつてきたので、つい任せようと思つてしまつた。

それから間もなく。

「う、うわああああああああああ！」

何人かの男の、情けない悲鳴が聞こえてきた。

11.そしてみんな動かなくなった その21

「お待ちください」

不穏な空気を感じつつ、テルミはドアの鍵を開けた。

そして、10センチほどドアを開いたときだ。

その隙間に何人もの手がねじ込まれ、ドアを掴むと一気に開いたのだ。

「きゃあ!？」

あまりに突然のことに、テルミは驚き、ドアノブから手を離すのを忘れていた。そしてバランスを崩したテルミは、その勢いのまま外に飛び出してしまった。

そこには、だぶついた服装を着た、いわゆる不良ルックスの連中が数人いた。そいつらは、出てきた相手を取り押さえようと手を伸ばす。

だがその瞬間、今度はテルミがかけた眼鏡のレンズがチカチカと光った。そして体をひねりながら地面に手を着くと、メイド服&マントというがさばって動きづらい格好と思えない動きで身を翻し、自分に伸ばされる手をすり抜けると、その先に膝をついて着地した。誰一人として捕まえることが出来ず、男たちの手は空を切った。信じられないといった様子で彼らの動きが止まり、そして自分たちの間をすり抜けていった黒い影のほうを見る。そこには、エプロンについた埃をぱんぱんと叩き落とす、黒マントを羽織ったメイドが立っている。

何があったのか、理解にわずかだが時間を要する。そして理解が出来たその時。

「てめえら、今、何しようとした？」

彼らが向いた反対側、家の玄関のほうから、どすの利いた低い女の声が出た。

「あだだだだだだだ」

ほぼ同時に、仲間の一人のそんな声が聞こえてきた。振り向くと、なんとその仲間の足が、地面から離れていた。頭を何者かに片手で掴まれ、そのまま持ち上げられているのだ。

掴んでいるのは、赤と黒のライダースーツを身にまとい、色が濃く幅の広いサンバイザーをつけた背の高い女、ご存知ヒビキだった。それを見た男たちの顔が、明らかに動揺する。それも当然だ。70キロはある人ひとりを片手で持ち上げるなど、相当の臂力の持ち主でないとは不可能だからだ。

「まったくびーびー騒ぐんじゃないよ」

そしてヒビキは、その持ち上げていた男を、まるで空き缶でも投げ捨てるようにその集団のほうへと放り投げた。

男は、仲間数人へとボディプレスをかまし、そのうち2人ほどを押しつぶした。

「は、話が違うぞ」

男たちの一人が、焦った口調でつぶやく。

「うるせえ、こうなりゃ」

どうやらリーダー格らしいスキンヘッドの男が、ポケットに手を突っ込み、何かを取り出す。そしてくるくると回すと、キラリと光を反射する刃が現れた。

いわゆるバタフライナイフという奴だ。

だが、それがナイフとしての形になるかならないかの瞬間。

「チエストオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」

深緑色の何かが、奇声と共に猛スピードで飛び込んできて、その男を吹っ飛ばした。

どげしつという小気味良い音とともに、スキンヘッドの体がひっくり返る。

一方で彼を吹っ飛ばしたそれは、木の葉のように身を翻すと、器用にその場に着地する。それは、深緑の着物と袴を身につけ、頭のとっぺんで束ねた銀色の髪を背中に流した女、シデンだ。

「貴様達、明日の太陽が拝めなくなる覚悟は、出来ているのだろうか」

な」

シデンは、すつくと立ち上がると、男たちのほうを指差して宣言した。

「て、てめっ」

「きゃ!？」

負けじと、男の一人がテルミを捕まえ、ナイフを突きつける。

「てっ、てめえらっ、動くんじゃねえっ」

テルミを盾にして逃げようという魂胆なのだろう。が。

「えーと、これは一体、何のつもりでしょう」

テルミは、全く怖がる様子も無くそう切り返した。

見ると、ナイフを突きつけているつもりだった男の手には、なぜか未開封のチーズかまぼこが握られていた。

何が起きたのか理解できずに、男が硬直した瞬間。

「はっ!」

「ぐえっ!？」

テルミの右肘が、自分を押さえつける男の鳩尾にめり込んだ。動きは微々たるものだったが、喰らった男の声から察するにその威力は相当なものらしい。

さらに、テルミは男のつま先を自分のかかとで思い切り踏みつけると、間髪を入れずに裏拳を顔面に叩き込み、反動を乗せたその拳を振り下ろす。そしてテルミの鉄槌が股間に命中した。

声にならない悲鳴をあげて男が悶絶する。

「全く、騒がしいですね」

その姿を見下ろしながら、テルミがくいつと眼鏡を直す。眼鏡の奥にある目がいつになく鋭い。そして。

「あなたたちは、銃刀法というものを知っていますか？業務その他正当な理由が無い場合、刃の長さが6センチを超える刃物を持ち歩く、2年以下の懲役もしくは30万円以下の罰金になるのですが」
そう言いながら、髪をひつつめたスーツ姿の女が、まるで手品師が

カードを見せるように、両手いっぱいナイフやら何やらを見せていた。

それはすべて、男たちがポケットなどに忍ばせていたはずの物だった。

何がなんだか、わけが分からなくなる。

そして、侵入者たちのとつた行動は。

「う、うわあああああああ！」

悲鳴をあげ、逃げることだった。

11.そしてみんな動かなくなった その22

情けない悲鳴が聞こえなくなる。なんかいつぱい出て行ったが、あいつら何をやらかしたんだろう。過剰防衛とかやらかさなきゃいいんだが、なんて俺らしくないことを考えていると。

「よう、将仁、元気してっかー!?」

何の前触れも無く、さっき外から電話をかけてきたりゅう兄がいきなりずかずかずかつと乗り込んできた。あの変な闖入者どもでも、呼び鈴は鳴らしたぞ、それもしないでいきなり人の家上がるのか、このバカ兄は。

「ちよつと、龍之介さんっ、挨拶も無しに勝手に上がるなんて、行儀が悪いでしょうっ!」

そして案の定、後ろから追いかけてきたテルミに怒られていた。

「にしてもよ、どうしたんだおめえのそのケガは」

だがりゅう兄はそんなテルミの言葉なぞどこ吹く風といった感じで床にあぐらをかくと、そう俺に聞いてきた。

「名誉の負傷ってやつだよ」

「戦国時代じゃあるめえし。どーせジムでボコにされやがったんだろ」

「ちがわい、このバカ兄」

このバカ兄貴、実は俺がボクシングジム通いしていることを知っている。それを通じて親父やお袋もジム通いしていることはとつくの昔にばれているんだが、誰一人として止めるとは言っ来ない。

まあ、うちの親は元々あんまりうるさく言っこない性質だし、兄貴には本当の目的を伏せて「ストレッチ解消と筋トレのため」にやると言っているから、それに乗っただけかもしれないが。

「のう将仁。この無礼なむくつけき男は何者じゃ?」

いつのまにか俺の傍に来ていた魅尾が、りゅう兄を見ながらそんなことを言う。むくつけきってえのは、今風に言えばむさくるしいと

かそんな意味だ。初対面の相手にはひどい物言いだ。

「あ、もしかしてアナタ、ウワサのお兄サンアル？」

そして、紅娘が今気づいたようにぼんと手を叩いて、変なことを言う。でもまあ、兄貴が最後に俺に会ったのは今から1週間ぐらい前で、紅娘が現れたのはその次の日だったし、魅尾に至っては、初めて見る俺の縁者だし、知らないよなそりゃ。

「ん？・・・んー、んっふっふっふ」

すると、兄貴は何を思ったか俺を見てにたりと笑い、そして一言。「お前よう、年下好きなのはかまねえけど、あんまし低すぎんのはどうかと思っぜ？」

「こらそこの脳筋バカ兄、自分の趣味を人に押し付けるな」

「おいおい、兄に向かって脳筋バカはひでえな」

だがりゅう兄は、俺の悪口に全く動じる様子はない。

「ところで、どんな噂を聞いてんのかな？」

それどころか、全く面識が無いはずの紅娘と魅尾にごく自然に話しかけている。

「んー、笑いながら人を殴るとか、トラックと正面衝突して無事だとかアルかな」

「のう、とらつくとはなんじゃ？」

「さらに馬鹿力を持ったヒビキのような奴だ」

「こらシデン、トラックは四輪だろうが、あたしゃ二輪だぜ？」

「地面の上を走るのは同じであろうが」

「お前なあ、空を飛べるからって上から目線で言っつなよ」

「まあまあ、お二人ともお、こんな所で喧嘩はやめましょうよお」

「にしても、トラックと正面衝突たあまた剛毅な話になってやがんなあ」

「違うアル？ワタシそう聞いたアルけど」

「全く、龍之介さんを人間じゃないみたいに言って。確かに外見は似ていませんが、これでも将仁さんの義兄様でしょう」

そうやってみんながおしゃべりする様は、ちよっと前まで人の姿で

すらなかった連中ばかりだとは思えないが、なんか、こんな光景がこの家のあるべき姿、そしてそれを俺が守った、と思うと、胸の奥が少し熱くなってくる。

「なあ、りゅう兄。前から思ってたんだけど」

ちよつと照れくさいが、それ以上に間違いなく人間なりゅう兄がこの擬人化や妖怪をあつさりと受け入れられるのか、ちよつと気になった。

「ん？おう何でい将仁」

「りゅう兄は、こいつらのことそんなに知らないんだよな。なんでそう簡単に納得できるんだよ」

正直にそう聞いてみると、りゅう兄はきょんとしたちよつと間の抜けた顔を向けたあと、こう言った。

「なんでってそりゃ、おめえが納得した上で家族同然に暮らしてる連中なんだろう？ だったらよそもんの俺が変に勘ぐんのは野暮ってもんじゃねえか。なっ？」

そして、グローブみたいなでっかい手で俺の頭を思い切り引っぱたきやがった。

普通だったら条件反射どころか脊髓反射で殴り返すところだが、今日はその手が出ない、と言うかその手を自制してしまった。

いいこと言うじゃねえか、バカ兄貴。素直に認めるのはちよつと悔しいので、心の中だけでそう言うておいた。

11. そしてみんな動かなくなった その23

部屋に入ると、常盤さんは自分の椅子に座り、俺たちにはデスクの向かいにある椅子に腰掛けるようすすめた。

俺たち、と言ったのにはちゃんとわけがある。今、俺の隣にはごつい男が座っている。

りゅう兄だ。兄貴はあの後も帰らずに、メシまでたかっていった。それどころか下手するとそのまま泊まっていくような勢いだっただ。

明日は月曜日だ。そんなのんびりしていいのかと突っ込んでみたところ、必修な講義が教授の都合で無くなったから問題ないらしい。そして、そのメシの席で俺が西園寺を継ぐことを話したんだが、兄貴はなぜか驚いた様子を見せなかった。いくら兄貴が金に無頓着でも五千億円ともなれば普通は多少心が動くと思うんだが、そういう意味でもうちの兄貴はやっぱどっか変わってる。

その夕食の後、俺は常盤さんに部屋に呼ばれた。これからのことについて、話しておきたいことがあるんだそうさ。

そしてそこに、兄貴がついてきた、というわけだ。常盤さんからの話ってことは、西園寺家についてだと思っただが、なぜか常盤さんが呼んだのだ。

「話というのは、他でもありません。西園寺の家についてです」

部屋に入った俺たちが椅子に腰掛けるなり、常盤さんはそう切り出してきた。

資産相続の手続きの話とか、しきたりみたいな話かな？と思って聞いてみると、その後の発言はそれと全く違っていた。

「改めて、覚悟を問います。将仁さんは、“西園寺”の全てを背負う覚悟が、本当にありますか？」

俺の腹積もりについてだった。一言一言区切るように、常盤さんがそう聞いてくる。

「西園寺の名を継ぎ、当主となるということは、その資産に関して

んのように、俺達を温かい目で見守っている。あんたは西園寺家専属の弁護士なのに俺を助ける気が無いのか。

そしてまた、俺は兄貴の気が済むまでヘッドロックをかけられることになった。なんか、今回は頭蓋骨だけでなく頸椎まで歪んだような気がする。

「言つとくがな、俺は金につられて西園寺を継ぐんじゃねえぞ。そこんとこ勘違いすんなよな、バカ兄貴」

やっと開放されたところで、俺はそう言っておいた。

「おっけーおっけー判ってるって」

りゅう兄は両手を大げさに広げて見せる。ここで一発ぐらい殴っておいても誰も文句は言わないだろうがここは自重しておく。

「宜しいですか？」

そして俺が落ち着いたところで、常盤さんはめがねを直して俺にそう聞いてくる。

頷くと、常盤さんはもう一度めがねを直した。

「将仁さんには、これからしてもらわなければならぬ事が、いくつがあります。今すぐとは言いませんが、そのことは忘れないで下さい」

「はい」

妙に神妙な気持ちになり、そう真顔で答える。

すると、常盤さんはなぜかりゅう兄のほうを向いた。

「龍之介さん。貴方にも、覚悟してもらわなければなりません。ご存知のとおり、西園寺には「敵」がいます。そしてこれから先、その矛先があなたに向く可能性もあるのです」

そして、真面目な口調でそんなことを言う。それって軽く脅迫になるんじゃないかと思うのだが。

「言われるまでもねえですよ。この真田龍之介、多少のことじゃくたばりませんって」

バカ兄には全く通じていなかったみたいだ。もともと、りゅう兄は殺しても死なないうような奴だからあまり心配はしてないけど。

すると、常盤さんは満足げに微笑んだ。かと思つと、部屋のドアをのほうに眼を向け、そしてふつと姿を消した。

どうやらまた時間を止めて移動したらしい。気がついたときには、常盤さんはすでにドアの前に立ち、ノブに手を掛けていた。

そしてなんにためらいも無くそのドアを開ける。

「わああああ!？」

すると。なぜかモノたちがみなして部屋にどたどたどたつとなだれ込んできた。どうやら、部屋の外で聞き耳を立てていたらしい。

「全く、こんなことをしなくても、皆さんにもすぐお話する予定だったのですけれど」

床にひっくり返るうちのモノたち、いつもは無関心を決め込むレイカまでそこに混じってひっくり返っているのを見て、さすがの常盤さんも苦笑をしていた。

11.そしてみんな動かなくなった その24

「ふう……」

寝床に入った俺は、天井の模様を眺めながら、常盤さんと話し合ったことを考えていた。

総資産額五千億円の西園寺家の遺産。それを相続することにしてしまった。と言っても、実感なんてもんはあるはずもない。

これから先、色々と手続きがあるらしいので、それをやっていけばだんだんと実感が出てくるのだろうか。

だが、金持ちになったという実感が出てきたら、俺はどうなるんだろう。そんなことを考えてまず思いついたのは、誰あろう近衛クローディアお嬢様だった。

俺も、あんなふうには偉そうに振舞ってしまうようになるのだろうか。だとしたらすごく嫌だ。あいつの場合まだルックスが良いから救われているが、俺があんなふうになったらクラス中から総スカン食らってしまう。もしくは金の力で服従させるようになるのかもしれない。いずれにしてもすごく嫌な奴になってしまう。

俺が嫌いな俺になるのだけは絶対に避けよう。でも、どうすればいい。

そんなことを考えてしまい、全く眠れない。

隣の床では鏡介がぐーすかいびきをかいて寝てやがる。俺と寸分違わないそいつがのんきに平和に眠りこけている様を見ると、人の気も知らないで、となんか妙に腹が立つてくる。

一発蹴っ飛ばしてやろうかと思った矢先。

階下から、がっはっはっはという男女入り混じった豪快な笑い声が聞こえてきた。

りゅう兄と、ヒビキの声だ。あのバカ兄は、結局うちに泊まっていたことになったのだ。それで、俺が遺産相続をすることにした祝いだとか言って、うちのモノたちを巻き込んで勝手に酒盛りを始めた

のだ。

俺は怪我人だからという理由でその酒盛りは遠慮させてもらったが、実はそれだけではない理由がある。

うちのりゅう兄には、酔っ払うと笑いながら殴りかかってくるといふ迷惑この上ない性癖があるのだ。しかもかなり本気で殴ってくるから始末が悪い。

そして、うちのモノたちでそれに応戦できるのは、頑丈なことこの上ないヒビキぐらいしかいないので、彼女が相手することになって今に至るのだ。殴られて平気なだけならクリンもそうなんだが、あいつはちよつと飲んだら寝てしまうので問題外だ。

明日になったら二人がどんな状態になっているのか、想像したらなんかちよつと怖くなってしまった。それにしても。

「あのバカ兄、やってくれるじゃねえか」

りゅう兄は昔からあまり偏見とかそういうのを持たない奴だったが、その相手が人間でなくても全く変わらないというのはある意味ものすごいことだと思う。もし自分がりゅう兄の立場だったら、まあ否定することはないだろうが、ちよつと引いてしまおうと思う。

でも、もしかしたら相手が女の子だからスケベ心が勝っているだけかもしれない。

まあ、いいか。俺が考えても何にもなんねえんだ。

そして、野良犬じゃないが、危害は加えないだろうと考え直すと、俺は夏掛けを頭から被りなおし、強引に寝ることにした。

11・そしてみんな動かなくなった その24（後書き）

どうも、作者です。

第11話、今回で終了です。

それで、もう恒例になりましたが、これからしばらくの間お休みします。

第12話の執筆をしなければならぬためです。

予定では、12話は比較的平和な話になると思います。

それでは、また次回お会いしましょう。

12・忘れていた学校行事 その1

9月25日

もぞり。

今日は、なんか下半身に夏掛け以外の違和感を覚えて、うつすらと目が覚めた。

「ん？」

だが、その違和感はすぐに消えた。時計を見ると7時5分前。タイムリミットまであと5分ある。

その5分をゆっくり味わおうと寝返りを打ったとき。また違和感があつた。

何かが足に絡み付いているのだ。

「なんだ？」

頭がまだぼんやりしている。そのまま首を起こし、違和感のあるほうを見た。

別に何も無い、ような気がしたので、寝なおそうと目を閉じた、その時だった。

かちゃ。

「失礼します……」

ドアが開く音と、聞き覚えのある声が聞こえた。

そいつは、そのまま部屋に入ってくると、静かに音を立てないで近づいてくる。

不審すぎるが、なまじ聞き覚えのある声であり、しかもいつもと雰囲気が違うため、様子を伺うことにしてしまった。

そいつは、俺のすぐ傍まで来ると、俺の耳元で、さらに小さな声でこう言った。

「お、おはようございます」

「……こんな朝っぱらから、飲んでるんじゃないだろうな？
間近で声を聞いたとき、頭に浮かんだのはこんな言葉だった。」

なにしろこの声の主は、いつもはもつと偉そうな物言いをする奴だからだ。

「ふ……前と変わらぬ、無防備な寝顔だ。昨日あんな覚悟を見せたばかりだというのに」
前言撤回。やっぱり偉そうだ。

「上官よ。気付いていたか？我はいつもタンスの上から、毎日上官の寝顔を見ていたのだぞ？」

そういえばこいつは擬人化させる前はタンスの上が定位置だったが、なんかその言い方、ちよつとストーリーカーじみているんだが、お前そんな性格だったのか？

「好きなだけ眺めていられたあの日々が今となっては……」
だが、そいつの言葉はそこで不意に切れた。

頭にクエスチョンマークが浮かんだ、その瞬間。

「何奴だああああああああ！」

いきなり、鼓膜がいかれそうなポリウムで叫ぶと、そいつは間髪をいれず俺の夏掛けをひっぺがしたのだ。

半覚醒状態だった俺の脳みそが、一気に覚醒する。

だが、その覚醒したはずの頭でも、すぐには把握できない状況が、そこには起きていた。

なぜって。俺の足のあたりには。

「あ、あららあ」

黒いメイド服を身につけた、色々な色素が薄い女が、うずくまっていたからだ。しかも、それだけならまだしも、どういつわけかそのメイドは俺の寝間着のズボンを、膝ぐらいまで下ろしている。

「く、く、く……」

そして、俺の夏掛けを引っぺがした深緑の袴姿の女が、それをにぎりしめ、顔を真っ赤にしながらも、二の句が告げないでいる。

そしてかく言う俺も、いったい何が起きているのか、訳がわからないでいた。

だが、確実にいえるのは。

かろうじて脱がされずにいたトランクスの前を、いつも以上に元気な俺の分身が持ち上げていたということだ。

「見つかってしまいましたあ、てへっ」

一方、俺のズボンをずり下ろしていたメイドは、体を起こしてベッドの上に座ると、いつもののんびりした口調のまま、自分の頭を軽く小突いて、ぺろつと舌を出した。

「クリンツ！ききききさま、我が上官に何をしておるのだああああああっ！」

その瞬間、顔を真っ赤にした袴姿の女、シデンが、ものすごい剣幕でクリンを怒鳴りつけた。

「うわああああああっ！」

我に返った直後、俺は膝まで下ろされていた寝間着のズボンを引つつかむ。なんでってそりゃ、いくら生理現象だと言っても起き抜けに自分のパンツの前が元気にテントを張っているのを見られたら恥ずかしいだろう。

が。クリンが脱がせかけた俺の寝間着を改めて履きなおそうと引張ったが、なぜかそれが動かない。

何かが引っかかっているのかと思ってもう一度引っ張ったときだ。いきなり世界が回転した。同時に寝巻きが動くようになったので、条件反射でズボンを一気に引き上げる。

だが、次の瞬間。頭と股間に激痛が走り、目の前に星が飛んだ。

「うぎよ！？」

気がつくと、俺はベッドから落ちていた。しかもその時に頭と、それから俺のいつも以上に元気になったICBMの弾頭を、床にぶつけてしまったのだ。

正直、何と表現したらいいのか判らない痛みが、股間のほうから頭を突き抜ける。タマのほうにダメージを受けたことはあるが、サオのほうにダメージを受けたことは無い。うん間違いない。

「ぐおおおおお・・・」

あまりの痛みに、うら若き乙女が2人も目の前にいるのに股間を抑

えて悶絶しそうになる。まさか俺、このままコイツを本来の目的で使わないまま、不能になつたりしねえだろうな。

どの程度のた打ち回つたのか。ようやく痛みが収まって回りを見る余裕が出てきた。鏡介の奴はこいつらが来る前に退散したらしく影も形もない。

だが、そこに展開する光景を眼にしたとき、俺はまた顔色を変えていたと思う。

だってそこにあつたのは。

ベッドの上にぺたんこ座つた状態で、白目をむき口からあの長い舌と一緒に尋常じゃない量の泡を吐き出すクリンと。

「この、貴様という奴はああああっ！」

そのクリンの背後からのしかかるようにして、左腕でチョークを決めつつ右腕でクリンの右腕を極め、左足でクリンの左腕を極め、というなんかもうよく判らない複雑な関節技をかけるシデンの姿だったからだ。

「うわー！ー！ーっ！シデン、ストップストップ！クリンが死ぬ！ストップ！」

急いでシデンに声をかけ、人間知恵の輪のような関節技を解かせる。はじめは不満を明らかにしていたシデンも、クリンが泡を吹いていることに気付いてさすがにまずいと思つたようですぐに技を解いた。すると。

「あう、くるひはつたれふう」

クリンは、なぜか速攻で意識を取り戻した。

「あえ？ろっひらんれふう？」

そしてクリンはこつちを向いた。口調はいつもどおりで、表情もいつもの緩んだものだった。しかし、顔は蒼白で、舌がだらしなく飛び出し、なによりさつき吐き出した泡が口の周りについたままだ。

「どうしたって、お前、泡吐いて」

すると、クリンは口の周りをぬぐってその泡を見る。

「え、ああ、こええふかあ？」

そして、飛び出した舌もそのままに、クリンは手についた泡を俺に見せた。

「……………とにかく、まずそのだらしない舌を引っ込めろ」

いつのまにか、俺に並んでクリンを見ていたシデンが、半ばあきれた口調で言い放つ。すると。

「ふっ」

何を考えたのか、舌を引っ込めたクリンは、手についた泡を、こっちに吹き付けてきたのだ。

「うわあっ!？」

「わっ、貴様、何をする!？」

思わず飛びのいてしまう。だって、これは口から吐き出したものだぞ!？シデンはさらに大げさに身を翻すと、部屋から飛び出して行ってしまった。

だが、クリンはそんな俺達を見て、「あははははっ」と笑い出したのだ。

「だ〜いじょうぶですよ。汚くなんてないですからあ」

「へ？」

「だあってえ、これ、シャボンの泡ですよ、ほらあ」

言いながらクリンは、自分の手についた、さつき自分が吐き出した泡を両手で握りつぶすと、さらに両手を擦り合わせ、そして両手の親指と人差し指で輪を作った。

見るとそこには、石鹸水で作ったような透明な幕が出来ている。

そしてクリンがそこにふつと息をふきかけると。

俺の部屋の中に、シャボン玉が飛んだ。

「私はあ、お風呂用のスポンジですよ？この体にはあ、将仁さん愛用のボディソープがあ、目一杯しみ込んでいますよあ」

そして、クリンがふつと天井に向かって息を吹くと、小ささまざまなシャボン玉が宙を舞った。

思い返せば一週間ほど前、酔っ払って眠ってしまったクリンは、寝息とともに小ささまざまなシャボン玉を鼻や口から吐き出していた

し、引つ越したばかりの時には手をこすり合わせるだけで泡を出すという芸当も見せたなあ。

ということとは。泡を吐いたのは、本当に死にそうだったからではなくて、俺達を驚かし、シデンの技を外させるための芝居だったってことか。やるなこいつ。

そして俺の部屋が、シャボン玉が舞うちよつとファンタジーな空間になった、その時だ。

「ふっ ではないわあああああああ！」
という叫びと共に、俺の横を深緑の風が通り過ぎる。

そして、ゲシツという鈍い音と共に、その深緑の風、シデンのとび蹴りがクリンに炸裂する。飛んでいくシデンの顔が赤かったのは、騙された恥ずかしさと悔しさによるものだろうか。

そのまま二人の姿はベッドの向こう側に転げ落ちて行った。

その光景を見て、やっぱりもう少し大人しく起こしてほしいな、と思うのだった。

12・忘れていた学校行事 その1（後書き）

どうも、お久しぶりです。作者です。

第12話、ようやく始まります。

今回は、比較的平和な一日となっております。

ただ、その中でも色々とは話は進行していきますので、どんな感じかな？と楽しみにしてください。

なお、何度か感想を下さっている r i s e t t e さんがクリンがお気に入りだということだったので、出番を多めにしてみました。喜んでいただけたら幸いです。

それ以外の方々も、ご意見・ご感想・ご要望・誤記などのご指摘等々ございましたら遠慮なくおっしゃって下さいませ。

それでは第12話をお楽しみください。

12・忘れていた学校行事 その2

「おっはよーお兄ちゃん」

階段を下りると、引越してからすっかり早起きになったケイが飛び出してきた。

「あれ？お兄ちゃん、まだ着替えてないの？」

そして俺の格好を見てちよつと驚いたように言う。

俺はまだ寝間着のままだった。だって今、俺の部屋では、クリンとシデンが取っ組み合いをしている最中だからだ。特にクリンは危険だ。だから避難してきた。

そのことを話す（さすがにズボン脱がされたことは伏せたが）と、ケイは羨ましいような変な表情を見せた。

「クリンちゃん、一体何をするつもりだったのかなあ？」

そしてケイは首を傾げる。うん、ケイにはまだ早い。もし仮にクリンがしようとしたことをケイがしたら、誰がどこからどう見ても犯罪だ。ちなみにその時罰されるのは間違いない俺だ。

「やっぱり、“よばい”なのかな？」

「ぶつ、おま、なんでそんなこと知ってる!？」

「ネットで調べたんだもんっ」

「こら、そんなこと調べるんじゃないやありません。すぐ忘れなさい」

ケイが不穏なことを口にしたので、慌てて止めさせる。

全くこいつは、知ってほしくないことばかり覚えやがってからに。

「早上好、おはよございますアル！」

そこに鍋を背負った中華娘、紅娘が顔を出した。

「アイヤー、将仁サンその格好でガッコ行くアル？」

そして同じようなツッコミを入れてくる。

「アイヤー、クリンサン余計なコトしてるアルな〜」

そこから先の突っ込み内容はさすがに違ったが、呆れているのは同じだった。まあ、我が家で（関心があるかどうかは別として）そう

いう行為に及ぶのはクリンだけだからな。特に同じメイド服のテルミなんかは拒否反応みたいなものまで起こすし。

「おはようござい……将仁さん、まだ着替えていないのでしよう?」

「Master、dress upはyour roomでするデース」

「その格好で学校へ行くつもり?」

そして、それからもうちのモノたちに会うたびにそうツッコまれたのだった。

12・忘れていた学校行事 その3

学校について一息つくくと、赤い水筒を取り出して、まだ熱いお茶を一口飲む。

レイカから弁当を受け取るのと一緒に、毎度紅娘から受け取るようになった中国茶だ。成分はよく判らない。お茶だけではなく漢方薬の成分を色々ブレンドしているらしいが、詳しく聞いたことはない。が、適度な苦味と爽やかさが俺は結構気に入っている。

「一口くれ」

するといつのまにか来ていたヤジローがそんなことを言ってくる。

「欲しいんなら湯呑かコップ準備しろ」

「おう、用意したぞ」

そのヤジローが、妙に準備良く紙コップを差し出した。この前にも同じようなことがあって、同じようなことを言われたことを覚えていたようだ。それが証拠に反対側の手には、包みのポリ袋に入ったままの紙コップの束が納まっている。

「んじゃ、ホレ」

仕方が無いので、少し注いでやる。なにしろ水筒の中身には限りがあるのだ。

ヤジローは、少し吹き冷ますとそれを口に入れた。

「面白い味だな、これ。烏龍茶みたいなさうじやないような」

そして妙にかっこつけたことを言う。お前はそんなことを言うほどお茶に詳しくねえだろが。

「うーん、やっぱりこのお茶は外せないわね」

同じようにお茶を飲んだ委員長が意味深なことを言う。

「お前もケチだねー、もう少しくれたっていいじゃねえの」

シンイチ、そういうお前は俺にたかるしかないじゃねえか。

とはいえ、自分のことじゃなくても賞賛されると嬉しいものである。

「……だっつの。ねー」

「それはちよーつといいすぎじゃない？」

「せやねえ、うちもそう思いますう」

そんなふうになつと嬉しくなっていると、数人の女子と一緒に、特徴的な京都弁の女が教室に入ってきた。

俺の隣の席、賀茂さんだ。あれだけ美人なのに嫉まれないでみんなに溶け込んでいる。

そしてそんだけの美人が隣りの席というのはやっぱり嬉しいものである。

「あ、おはようさんどす」

賀茂さんは俺の回りに集まっている連中に丁寧な挨拶をして、自分の席につく。

そしてその直後、俺に向き直っていきなりこう聞いてきた。

「真田はん、無事やってん？」

「は？」

いきなりだったので、変な声と共にそう答えてしまう。

「いやね、きんのうちが居候さしてもろとる神社はんに参拝してはつたお人が、なんや朝賀のほど事故があつた言うてはつたもんやさかい、ちいと気いなたんどす。なんともないんやつたらそれでよろしおすわ」

ちよつと早口でそうまくし立てると、賀茂さんはカバンからノートと筆記用具を取り出した。

「賀茂さんもどうだ？」

そこに、ヤジローが紙コップを差し出す。しかも使いさしではなく新品のやつだ。こいつ、一日で使い切るつもりか。

「マサの奴がお茶持ってきてっから。ほらこの前マサンち行ったときに飲んだお茶あるだろ」

そしてヤジローの奴はコップを薦める。が、賀茂さんは受け取ろうとしない。さすがに奥ゆかしい京都人、たかるのは遠慮したか。と思つたら。

「こほん、えー、近江くん。チャイムが鳴つたのに、気が付かなか

ったのかしら？」

いつの間にか、担任の徳大寺先生が教卓のところに来ていた。俺も気付かなかったから偉そうなことは言えないが、ヤジローの場合はちよつと席が離れているのが致命的だった。

あわれヤジローの奴は、クラス中の笑いものになってしまった。

「皆さん、学園祭まで1週間を切り、いよいよ追い込みに入ります。今週は午後の授業が無くなりますが、だからといって授業をおろそかにして良いというわけではありません」

先生の言葉を聴いて、そういえばそうだったことを思い出した。うちの学園祭は土日の2日にわたって行われるのだが、その前の週は授業が午前だけで終わり、午後は文化祭の準備に充てられることになっている。

そのため、いつもと違う変則的な時間割になるのだ。まあ変則的と言っても、他の日にやる授業が来るわけじゃないから間違えることはないのだが。

「それでは、今週1週間、責任を持って頑張つて、文化祭を成功させましょう！」

ちよつとぼーっとしていたら、いつのまにか先生の話が終わっていた。

「起立！礼！ありがとうございました！」

委員長の号令で我に返った俺は、あわてて立ち上がり、礼をしたのだった。

12・忘れていた学校行事 その4

きーんこーんかーんこーん。

今日の授業の終わりを示すチャイムが鳴り響く。
ちやーらーららららららららー。

ほぼ同時に、携帯電話の呼び出し音が聞こえる。

「お兄ちゃん、ごはんまだ？」

耳に当てると、さっそくケイからの催促が聞こえてきた。

「心配すんなって、今から出るところだ」

まわりを見渡すが、今日はヤジローをはじめとしたモテナイ軍は大
人しくしている。というか午後に備えてメシを食って英気を養うこ
とにしたようだ。

そうそう。人の昼飯を邪魔するなんて非生産的なことより、もっと
必要なことにエネルギーを使うべきだ。俺だって本当の意味でモテ
てるわけじゃないんだし。

そんなことを考えながら、教室を出るために、弁当の入ったバッグ
に手を掛けた。が、持ち上げようとした瞬間、俺の腕はそのバッグ
に引っ張られ、バッグを床に落としてしまった。

「どうしたの？」

「ん、いや、バッグがな」

なんか、バッグが異常に重い。そしてふと見下ろすと、弁当箱とジ
ヤージぐらいしか入っていないスリッパははずのボストンバッグが、
ファスナーが千切れそうなほどパンパンに膨らんでいる。

「悪い、一旦切るわ。重くてちよっと片手じゃ持てないから」

「えーっ、やだよーっ、切らなくていいじゃーん」

なんかいやな予感があるのでケイには引っ込んでいてほしかったん
だが、ケイは素直に応じてくれない。ケイも似たようなことを思っ
ているんだろうか。

仕方が無いので、ケイ帯を開いたままにして机に置くと、両手でバ

ツグを持ち上げ、その隣に置く。バッグはそれでもなおパンパンにふくらんでいる。軽く押してみると押し返してくるが、それ以外になぜか微妙に動いているような気がする。

ぶっ。

その時、バッグのファスナーが、その圧力に負けたのか、少し開くほうに動いた。

それだけならまだいいんだが、その少し開いた隙間からあるモノが出てきたのを見たときは、俺は悪夢を見ているのかと思ってしまった。

なぜって、そこから出てきたのは。色白な人間の指だったのだ。まるで怪奇現象なその光景に、クラス中の注目が集まる。

はじめは指先だけだったのが、まるで踊るようにじたばたと動きながら、少しずつ手の平が出てきて、やがて右手の形になる。そしてその手は、ファスナーのつまみを見つける（手が見つけるといふ表現もちょっと変だが）と、それをつまみあげ、さらにバッグのファスナーを開いていく。

最初は不気味に思えたその手だったが、動きがなんとなくコミカルだったので思わずそのまま見守ってしまう。そして俺には、その手の正体がなんとなく判っていた。

やがてその手、いや開いていくのに伴って腕が出てきたからその腕が、ファスナーを全体の三分の一程度開いたときだ。

「ぶああ、苦しかったです」

今度は、その開いた隙間から、ぽこつと頭が出てきた。その頭は、開口一番、そんなマヌケな言葉を吐き出した。

「ああ、将仁さんですう。やほ」

そして俺の姿を見つけると、緊張感の無い様子でバッグから出てくる右手を小さく振ってみせる。

「くっ、クリン、お前、何やってんだ!？」

俺は、思わずそいつに声をかけてしまった。

「はい、将仁さんが通われる学校というものがあ、見たくなりま

したのでえ。もぐりこんじゃいましたあ、てへっ」

そしてクリンは、バッグから出た右腕で頭を軽くこつんと叩く。つて、てへっ じゃねえだろ。

「あらあ、そこにいるのはヤジローさんじゃないですかあ。将仁さんがお世話になってますう」

かと思うと、ヤジローを見つけて、右手をついてぺこりと頭を下げる。

「え、あ、ども」

名指して挨拶されたヤジローは、ちょっと面くらいながら頭を下げる。

俺は、別に世話になんかなくてねえぞと心の中でつつこむ。

「むうーっ！なんでクリンちゃんが学校に来てるのぉ！」

その一方で、バイブレーション機能を使って向きを変え、クリンのそんな姿を見たケイが、明らかに不満そうな声で講義する。

「あらあらケイさん、もうお昼ですよ？」

「そんなの判ってるもおん！クリンちゃんが邪魔してるんだもおん！」

ケイがだだをこねる。傍から見ると、通話状態で放置された携帯電話がじたばたしているように見える。携帯のバイブレーション機能にしては激しすぎるのだが、その横でもっと激しすぎる光景が展開されているので誰もそれに気付かない。

「おいマサ、誰だあの美人は」

「知り合いか？」

そしてさらに、クラスのもてないメンズは“バッグから出た”ということよりも“美人が出た”というほうに興味があるようで、俺にそんなことを聞いてくる。こいつらは以前ケイやシデンが学校に来たときも目の色を変えていたが、お前らクラスの半分は女なのに新しい女のほうに目が行くのか。

「あれはだな、俺が今居候してる家の住み込みメイドだよ」

そう一言説明してから、今度はクリンのほうに声をかける。だって、

いつまでもこのままにしておくわけにはいかないだろうが。

「全く、お前も。とにかく一旦出て来い」

バッグの中身がどうなっているのかも気になるが、顔と右腕だけしか出ていないのは傍から見ているても窮屈なことこの上ない。

「あのお、出ちゃまずいと思うんですけどお」

すると、クリンはあんまり困ったような表情はしていないのにそんなことを言った。

そして理由を聞いてみると、納得すると同時に「何を考えてんだ」と思ってしまった。

「だって今あ、メイド服、着てないんですよ。ほらあ、メイド服つてがさばるじゃないですかあ」

「メイド服着て……っ!?」

こ、こいつはっ。

その発言で、集まってきた男連中が色めき立つ。メイドがメイド服を脱いだってことで、私服か下着姿でも連想したんだろう。

だが俺はそれで絶句したのではない。もっとヤバイものを連想した。今朝、ここまで持ってきたときは全然重くなかった。だから多分、クリンはもとのモノ、つまり浴用スポンジになってバッグの中に入っていたんだろう。そしてクリンが擬人化したときの姿は……
・何も着ていなかった。つまりは裸だ。

そして、うちのモノたちは鏡介以外、モノからヒトの姿になるとき、いつもその“初めて出てきたとき”の格好になる。(鏡介は、俺の鏡像のように、戻る前に俺が着ていたのと同じ服装になる)

そう考えると、確かに今出てこられたらまずい。

「な、中に俺のジャージとか、入ってるだろ、そ、それでも着てる」とつさにそのことを思い出して指示する。素っ裸で出てくるなんて公序良俗に反した行為を学校でさせるわけにはいかないし、それに他の連中に見せてやる義理も無いし。

「わっかかりましたあ」

すると、クリンは妙に嬉しそうな声で返事すると、右手をバッグの

中に引つ込めていった。

そしてクリンの頭だけがバッグから出ているような形になる。なんかこれ、どこかのパフォーマーがやってたなあ。

「むうーっ！お兄ちゃんクリンちゃんにばかりずるーいっ！」

その横でケイが騒ぎたて、ガタガタと身を震わせる。

「そう言うなよ、この際しようがねえだろ」

こっちからバッグに触れるような状況じゃなかったなので、手持ち無沙汰になって再びケイに手を伸ばす。どうやらかなりお冠のようだ。どうやってケイをなだめようか、そんなことを考えた、その時だ。

「んっ……くうっ……んっ……」

いきなり、クリンがあえぎ声を上げはじめたのだ。のみならず、表情までなまめかしくなっている。

「わーっ！わーっ！お前なにやってんだああああ！」

思わず、口を塞いでしまう。

「わーっ！わーっ！わあー！わーっ！」

だがそのせいで、今度は携帯を、つまりはケイを放り投げてしまった。

我に戻って振り返ると、その携帯が放物線を描いて教室のすみへと飛んでいくのが見えた。

「どけええええええええええ！」

今度は全力でそっちに飛び出す。途中にはクラスメイトの机があるがそんなのは構っていられないので強引に飛び越えていく。

そしてケータイをキャッチした直後。

どんがらがっしゃーんっという音と共に、俺は部屋の隅にあるゴミ箱に突っ込んでしまった。

12・忘れていた学校行事 その5

「つてえ……」

「大丈夫お兄ちゃんっ!？」

「つたく大丈夫じゃねえよ、つたく……」

「ふえええ、ごめんなさああいい」

なんか俺を心配するケイの声が聞こえたので、それに返事をする。そしてふと、俺の上にかかる妙な重量感に気が付いた俺は、ふと頭を上げた。

髪の毛を頭の右で束ね、くりつとした目をした女の子が、俺の顔を覗き込んでいる。

「け、け、ケイ!？」

そう。いつのまにか、ケイが人間の姿になっていたのだ。俺の腹の上で馬乗りはある意味ちよつと危ないので、降りてほしいんだが。

「あれ、ケイちゃん来てたんだ？」

「おいマサ、つれて来るんだつたら来るつて言えよ!」

「きゃーっ、ケイちゃんっ、いらっしやーい!」

間髪をおかず、うちのクラスメイトが群がってくる。お前らは、いないはずの奴がいることより、女の子が現れたことのほうが重要なのか。

「んもう、将仁さんつたらあ。落ちちやつたじゃないですかあ」

そこに毛色の違う、まさに毛色の違う顔が現れる。

クリンだ。見覚えのあるジャージを着ている。どうやら、マジであるバッグの中で着たらしい。

だがそれ以上に、顔の真ん中が赤くなっている。特に鼻の頭が、なにかぶつけたみたいに赤い。

「さつきい、顔から落ちちやつたんですよう」

聞くと、ちよつと口を尖らせて非難するような顔をする。なんでも俺がケイをキヤツチするために飛び出した際、俺の手だか足だかに

クリンの入っていたバッグが引っかかり、そこでバランスを崩して落ちてしまったんだそうだ。

鼻血とかが出ないところはさすがクリンといったところだが、なんか申し訳ないな。

「ああっ、クリンちゃんっ、ケイたちのごはんはっ!?」

そのとき、クリンの顔を見たケイが、俺の腹の上に乗ったままで声をあげた。俺としては、お前に降りてもらわないとメシも食えないんだが。

「はあい、ちゃあんとここにありますよお」

クリンはそんな俺の思惑を他所に、ジャージと一緒にバッグの中に入っていた弁当の包みを俺達に見せた。

「わあい!」

すると、ケイはぴょんとそっちに飛びついた。色気より食い気ってか、ちよつと悲しい。

おかげで俺はやつと立ち上がることができたが、だが安心はできなかった。

なぜなら。

「おいマサ、このムツツリ野郎。お前、こんな美人と住んでんのか」「ヤジロー、お前が泣いた意味、やつと判ったよ」

「飲もう!今日は飲もう!」

高校生でありながらなぜかオッサンじみた盛り上がり方を見せるモテナイ男たちと。

「クリンさん、本当にマサんちのメイドさんなんですか?」

「ずいぶんと体が柔らかいんですね!」

「どうしたらそんなに胸が大きくなるんですか!?!」

初登場のクリンに対して、あまり関係ない質問を浴びせる暇人どもが、俺達をぐるりと取り囲んでいたからだ。

全くてめーら、自分のメシはいいのか、と突っ込もうと思ったところで、自分もメシを食ってないことに気が付いた。

そしてもうひとつ。

「そついやクリン、お前自分のメシは？」

クリンが持っていた弁当の包みは2つ。いつものように、大きいほうが俺ので、小さいのはケイ用、のはずだ。レイカから受け取った弁当の個数も2つだったし。それに、シデンのときと違って、クリンはさつきまでずつとあのバッグの中にいたから、後で持ってくるというわけにもいかないし。

「あ」

案の定というか、クリンは今思い出したような顔をした。

「忘れてましたあ」

そしてあっけらかんとした笑顔を浮かべる。

「おにいちゃ〜ん」

さすがに不憫に思ったのか、ケイが俺を頼るような目でじっと俺を見てくる。全くこの、妹機能つき携帯電話は。そんな目で見られたらこつちもすげなく出来ないだろうが。

「ったくわあつたよ。んじゃ購買で何か買ってくつから、ちよつと待ってる」

本当は学食のほうが楽なんだが、この目立つ2人、特にほとんどの連中が初対面になるであろうクリンを連れていったら收拾がつかないことになりそうで怖い。

しょうがないので、俺は自分のサイフを確認すると購買へ向かって飛び出した。スタートダッシュに遅れたこの時間では大したもの残ってないかもしれないが、無いよりはマシだろう。それで足りない分は俺らのおかずを分けてやるう。

そんなことを考えながら俺は、運がよければまだ争奪戦をしているであろう購買へ向かった。

12・忘れていた学校行事 その6

そのころ。

「ちよつと、話が違つややおまへんか」

校舎の屋上で、癖の無い黒い髪を靡かせた女が、フェンスに寄りかかりながら、まるで誰かに話しかけるように独り言を言っていた。よく見ると、女の手の上には、白い紙を切り抜いて作った、人の形を極力簡略化したようなものが乗っていた。それもただ乗っているのではなく、ぺらぺらの紙なのに、まるで上から吊り下げられているかのように、女の手の上に立っているのだ。

その紙人形は、人間で言えば胸の辺りに、漢字を組み合わせて新しい漢字にしたような奇妙な模様が墨で描かれている。

「うちは、あんたはんらが“今回は碎呪の陣を張つて、擬人を封じる。あとはこちらがやる、余計な手出しはするな”なんて自信ありげに言うたから、手えださへんかったんどす。それ失敗したから言うて、うちにぐちぐち言われたらたまらんわあ」

その女は、まるでその紙の人形に聞かせるように言葉を続ける。すると、不意にその紙の人形の表面に、変化が現れた。黒い墨で描かれた文字がまるで生きているかのように人形の表面をすべり、そして人の顔を思わせるような形をとったのだ。

「言ってくれるのう。では、こちらの手の者が行ったときに擬人がいたのは、どう説明するのかね？」

そして、口に相当する模様の部分がまるで喋るように動くと、そこからしわがれた老人のような声が聞こえてきた。

「うちに聞かれても困ります、うちに判るんは、うちのせいやないちゆう事ぐらいどす。うつとこで調べた範囲じゃ、あの家にはうちの術に対抗するよな力は働いてへんかったし、真田将仁本人にしてもちゃんとした知識は持つとらんはず。それがなんで、うちがまるつと1日かけて準備したあの術を破らはったんか」

それに答える女の声も悔しげだ。

「敷地の外には人払いの術をかけたさかい、近所には助けにも行かれへんはずやし」

だが、女がそうつぶやくように言葉を続けたときだ。

「人払いだと？」

紙人形から聞こえる老人の口調が、厳しい物に変わった。

「なるほど、ではお前の責任も多少はあるようじゃな」

「はあ？なんでぞす？」

そう言われるとは思っていなかったようだ。女の口調も強いものに変わった。

「こちらから向かった者達が言っておったのよ。術が昼頃発動するというから、そのころを狙って行ったが、なぜかなかなかどり着けんかったとな。そんなバカなとは思ったが、なるほど余計なことをしてくれたのう」

「余計や言わはります？あない住宅街のまん真ん中でほたえたら、警察沙汰になりますえ？」

「ふむ、確かにそれは困る。だが、結果として失敗には変わりあるまい。お前さんの人払いのせいで、あの者に考えて解決する時間を与えてしもうたのだから」

だが、そこを責められると返す言葉が無い。いくら否定しても、事実は消えないのだから。

この話を続けることは不利だと悟った女は、別の話題を振ることにした。

「ほんま、かなわんわ。ほな、次は何をすればよろしおす？」

「いや、お前さんにはしばらく大人しくしてもらおう」

「……まさかあ、うちはクビぞすか？」

突然の言葉に女は一瞬だけ言葉を失った。

彼女は、正直自分の技術には自信があった。それがクビになるなど、屈辱以外の何者でもない。しかも、丸1日かけて術をかけたのに、その手間賃すら貰っていない。なぜなら彼女は、今回の依頼を、

成功したら後払いで報酬を貰う”という契約を結んでしまったからだ。今から考えればはめられたようなところもあるが、ここでクビになったら大損なのだ。

「いや、そうではない。今回の件で、どうやらあちらもまじない的なことに警戒を持ったようじゃからな。続けて行っても高い効果は得られまい。次は、むこうの力量が測れるようなやり方をやってみるだけじゃ」

だから、老人のその言葉に、女は少しだけ安堵した。まだ挽回の猶予はあるのだ。

「……はあ、しゃあない。ほな、あんたはんらのやり方、じつくり見していただきましょか」

女は、捨て台詞のようにそう言くと、自分の手の平にもって立っていた紙の人形をくしゃっと握り潰した。

「ふう、ちよろこい話や思とつたんやけどなあ」

「何の話？」

「!？」

その時、突然声を掛けられ、女は息を呑んだ。

そのままフェンス伝いに数歩離れ、声の主に目を向ける。

そこにいたのは、白衣を着た女性だった。第2養護教員としてやってきた人で、名前は確か水野由利。茶色い瞳に野暮つたい眼鏡をかけ、黒い髪を適当に束ねたその姿は、相変わらず歳のわりに地味だ。しかし、目の前にいるのに、まるでそれが幻のように、そこにいない気がしない。

「賀茂杏寿、2年B組、出席番号28番。9月19日づけで本校に転入。しかしその前にも数度の転校歴あり」

白衣の女は、手にしたファイルを読みあげ、最後にそのファイルをぱたんと片手で閉じる。

「養護のセンセが、うちに何の用どす？」

女、賀茂杏寿は、平静を装いながら、制服の襟の裏に指を差し入れ、そこにあるものを確認する。それは、真ん中に五角星が描かれた掌

大の長方形の紙だった。

「少し聞きたいことがある。何をするつもりかは知らないけれど、今のところ敵になるつもりはない」

そう言つて、水野はフェンスに寄りかかった。

「あなたは、真田将仁に対して、何をしようとしている？」

「……はて、何のことです？」

「とぼける必要はない。あなたたちの狙いも彼だということは、調べがついている」

そして、腕組みをしながら、眼鏡ごしにちらりと杏寿を見やる。

「真田将仁。西園寺の血を引く最後の人物。そして、その資産の相続権と、その家に伝わる力を継承する唯一の人物。それを付けねらう輩はまだ少ないが、確実にいる」

「ふうん」

杏寿は、関心が無さそうな返事を返す。

「私たちは、彼が持っている、彼とは分離できない“力”を手に入れるために動いている。そしてあなたは、それとは別の思惑で動いている。その思惑が何か、私は知る必要がある」

水野の言葉が、だんだんと硬直化してくる。杏寿は、その裏に圧力を感じた。

「そない言つたかて、うちは雇われの身やさかい、雇い主はんがしまいにどないしたいんかは知りまへんえ？」

「ならば、あなたは何をしようとしている」

牽制のつもりでそう口にしたが、水野にはそれが通じていない。見破られているのか、気付いていないのかは、完全に表情を殺した水野からは読み取れない。

このままでは話が進まない。そう思った杏寿は、ひとつ息を吐くと、改めて口を開いた。

「うちは露払いみたいなもんどす。真田はんのまわりは、あんたはんがさつきつから言うてはる“力”が生んだもんで護られてますさかい、それを退かすんがうちの役目どす」

杏寿の言葉に、水野は反応しない。

「“それ”は、言うなればあやかしみたいもんやさかい、モノによつちや普通の人には手に負えまへん。せやから、うちが雇われたんどす」

そこに、杏寿は言葉を連ねる。

「少なくとも、うちは真田はん本人に何ぞするつもりはあらしまへんから、あんさんらの邪魔にはならへんのとちやいます？まあ、おんなしクラスに居て、席が隣になってしもたんに何もせえへん言うのも不自然やと思いますけどなあ」

「なるほど、確かに、あなたは私たちの邪魔はしないようだ」

そこまで話して、水野はようやく理解したように腕組みを解いた。だが、まだ警戒を解いていないのか、水野は杏寿から視線を外さない。

「だが、その役割を負っているわりには、“それ”がいるのを見過ぎているみたいだけれど？」

「そら、学校にや人目がありませんさかいなあ。下手あこいて警戒されてしもたら、やり辛うなっしてしまいます」

少々大げさなジェスチャーを交え、杏寿が答える。もっとも彼女の場合、彼女らに直接会って、そのあまりに人間くささを知ってしまったことも、やりづらさのひとつとなっているのだが。

「そついや、センセは何が狙いなんどす？」

不意に、今度は杏寿が切り込んできた。

「えっ？」

「うちばっかり話すんも、平等やおまへんやろ。センセは、何をしたらるんどす？」

突然の申し出に多少動揺したのか、水野はちよつと眼鏡を直した。

「私の役目は、彼の情報を集めること」

「ほんまどす？」

「この場で嘘は言わない。その情報を収集している段階で引っかけたのが、賀茂杏寿、あなた」

名指しされて、杏寿はちよつと苦笑する。

「なるべく怪しまれんようしてきたつもりどしたのになあ」

「私たちの情報収集能力を、甘く見ないでほしい」

「ほんま、あんさんらは敵にしとうありまへんなあ」

「それは私たちも同じ。敵は少ないほうが望ましい」

そして、二人の視線が絡み合う。

「お互い、苦労しますなあ」

「間違いない」

ふと、そんな言葉が口から出てきて、二人は思わず苦笑してしまった。

12・忘れていた学校行事 その7

「ご馳走様でした」

「ごちそうさまでしたーっ！」

「ご馳走様でしたあ」

これからどうなるかと思っていた昼飯だったが、とりあえず食っている間はクラスのバカどもも大人しく（それでも一部の奴らからは恨めしそうな視線が送られていたが）していてくれた。

だが、平和だったのはそこまでだった。

俺ら3人がごちそうさまをした直後、男どもが一齐にクリンのところに押し寄せてきたからだ。

なにしろ、クリンはスタイルがいい。今は色気も何も無い俺のジャージ姿だが、それでもクリンの体はそのラインを主張している。

さらに言えばクリンはその性格なので、エロトークしても嫌な顔をしない。それがまた、性欲てんこもりの連中に受けがいいのだ。

多分、今日、帰ってからクリンをオカズにする奴が何人かいるんだろうな。

だが。

「ちよつと揉ませてくれませんか？」

「はあい、いいですよあ」

そんなやり取りが聞こえた瞬間、俺のマツハパンチがそいつをぶっ飛ばしていた。

「てめえどさくさに紛れて何とんでもねえこと言つてやがる！」

「いいじゃねえかケチ、おめえはひとつ屋根の下に住んでんだから触り放題だろうよ」

「ふざけんなバカ、俺だつて手えだしたことはねえ！」

手を出されたことはあるが、そのことは黙っておく。言ったら俺は一気にクラス中を敵に回してしまうのが目に見えている。ただでさえ敵がいる身だ、学校でまで身の危険を常に感じるなんてのは御免

こうむりたい。

「クリンもクリンだ、あんなバカ話に乗るんじゃないやねえっ！」

「いいじゃないですかあ、減るもんじゃなし」

クリンもクリンでとんでもないことを口にするし。お前には貞操感とか羞恥心とかいうものはないのか。普通は嫌がるもんだぞ。

「だいたい、将仁さんがいけないですよ？元々体をあわ」

「わーっわーっわーっ！」

さらにとんでもない事を言い出しそうになったので、俺はあわててクリンの口を塞ぐと、そのままそこから引きずりだした。

「おっ、お前、俺に何か恨みでもあるのかっ!？」

廊下まで引つ張っていくと、俺は口をもごもごさせるクリンの耳元で、小声で問いたです。

クリンの、モノとしての存在意義から見ると今の扱いは不満があるのかも知れないが、かといって「以前と同じ」扱いをしようとするのは他のモノたちから非難されるのは明らかだ。やきもちを焼かれるとかいった程度で済めばいいが、そのせいでギスギスしたりするのはイヤだぞ。

「だいたい、本当は俺だってお願いたいんだ。俺だつて17歳、思春期真っ盛りの成年男子、性欲はある。人並みじゃないかもしれないがゼロじゃない。」

「俺だつてなあ、俺だつてなあ、我慢してんだぞおっ!？」

「何を我慢しているのかしら？」

思わず本音を口にしてしまったその時、誰かが声をかけてきた。

見ると、女物のスーツを着た、上品なルックスの女の人在那里にいた。

「あ、先生。こんにちわです」

「あ、あらケイちゃん、こんにちは」

その人、徳大寺先生は、ケイに挨拶されてにつこりと挨拶を返したが、すぐに厳しい表情になり、俺のほうを見た。

「わわわ、せ、先生」

「真田君、こんな所で不純……」

だが、不意にその厳しい目がいぶかしむようなものになった。そして、顔を近づけると、小声で耳打ちしてきた。

「その子、擬人ね？」

どうやら、先生には判っていたようだ。さすが、西園寺に親交が深いと自分で言うだけある。

「ええ、連れてきたわけじゃないんですけど、勝手についてきちゃって」

「ぶは、野良犬さんみたいに言わないで下さいよお」

「お前はちよつと黙ってる、話がややこしくなる」

とりあえず、いつまでも抱えていると本当に不審者になってしまうのでクリンから手を離す。

「真田君。ちよつと話があるのだけれど」

先生は、俺達を見ながら、妙に静かにそう言った。だがなんか目が笑っていない。

「……先生、怒ってるのかな？」

ケイが小声で聞いてくる。しかし聞かれても俺に先生の胸の内なんか判るわけがない。

「……ん？」

「胸の内……」

だが、何気なく思いついたその一言で、俺の頭の中にびこーんと何かのフラグが立った。

判っちゃったのだ。先生がなんで機嫌が悪いのかが。

なにしろうちの先生、トクダイジという苗字に反して、体のある部分が非常に慎ましやかなのだ。どのぐらいかというところ、一年生を受け持ったときに、そのクラスの誰よりもソレが慎ましやかだったためコンプレックスになってしまったぐらいだ。

対するクリンは、それはもう見事なものを持っている。我が家でもバレンシアが現れるまでは文句なしのナンバーワンだったわけだし、今でも“巨”の称号を冠するのにふさわしいのは間違いない。もっ

とも、俺も見たことや背中を感じたことはあるが手で触ったことはないのだが。

こりゃ、怒るのもしゃーないか。クリンにしたらいいとばっちりだが、俺にしてみればクリンがここにいること自体がちょっと予想外なんだから、ここは諦めてもらおう。俺は勝手にそんなことを思っていた。

12・忘れていた学校行事 その8

その後、生徒指導質に連れて行かれた俺達は、昼休みが終わると同時に解放された。

指導室では、クリンの正体やら何やら色々聞かれたが、途中からそれとは関係ないはずの胸の話になってしまい、そこでクリンが「揉んでもらっている」なんてシャレにならない冗談を言ったもんだから先生は取り乱すわけいまで噛み付いてくるわけで、シデンのときよりも疲れてしまった。

そしてなにはともあれ、先生から開放された俺達は教室に戻ってきた。本当は指導室でクリンもケイもモノに戻して「帰った」コトにしようかとも思ったのだが、ちよっと思うところがあつたので2人ともそのままにしておいた。

案の定、教室では2人を待っていた奴らに拍手で迎えられた。しかし、俺はこの2人を、うちのクラスメイトを喜ばせるためにつれて来たのではない。

「お前ら、うちに帰って、することはあるか？」

教室で、俺は2人に聞いてみた。

「えっ、ううん、今日はべつに」

「私も、今日は特にないですっ」

案の定、2人ともそんな答えを返してくる。一応うちのメイドであるクリンが「することがない」というのはちよっつまずいような気もするが、まあもう一人のメイド、テルミが非常に優秀だから大丈夫だろう。色々と苦労しているかもしれないが。

「だったら、今日は午後から学園祭の準備で休講になるから、準備を手伝ってくれ」

これが、2人をそのまま連れてきた一番の目的だ。

うちの学園祭は、伝統的に2年生が中心になって行う。この時期になると、3年生は受験に向けての追い込みに入らなければならなく

なるからだ。

だが、盛り上がる理由は他にもある。実は、うちの学園祭は、出し物の出来によって賞金がでるのだ。それも名目上ではなく、現金がだ。もので釣るといふのは不健全のような気もしないでもないが、そのおかげ？でうちの学園祭は市内のほかの高校のそれより盛り上がりが凄く、人気があるのだ。

回りから期待されれば頑張ってしまうのは人の性、しかしいかせん高校生だからできる事には限界がある。そのため、いつからかうちの学園祭は、無償であればその準備に外部からの応援を呼んでも良いことが暗黙のルールになっているのだ。

そしてうちのクラスも、その例に漏れなく「賞金目指してがんばるぞー！」状態なのだ。

そういう考えの下、ケイとクリンに聞いてみると、二人の表情がぱつと明るくなった。

「いいの!？」

「がんばりますう!」

ケイとクリンは、嬉しそうに返事をする、そのまま女子の輪に加わっていった。

それを見届けた俺は、やっと自分の仕事に取り掛かることにした。

12・忘れていた学校行事 その9

俺は今、シンイチとヤジローといういつものメンバーと共に、学校から歩いて10分ほどのところにあるホームセンターの一角にいる。

「必要なのは、えーと、これか？」

「いや、こつちだろ」

「こいつは、このぐらいか」

俺たちがあーでもないこーでもないと言いながら選んでいるのは、全長2メートルほどの角材と、それよりちよつと短めの丸棒だ。どつちも、内装のギミックに使う。

まとめてみると結構重いので、ヤジローと俺とでかついで行くことにした。シンイチには、袋詰めした木っ端を持っていつてもらおう。

「んじゃ、せーのつと」

会計を済ませ、いざ帰ろうとした、その時だ。

「む、上官ではないか」

「? 呀、将仁サン。そなの担いでどしたアル？」

本来ならいないはずの、なんか非常に聞き覚えのある声が聞こえた。振り向くと、見覚えのある深緑の和服と赤いチャイナ服がそこに立っていた。

「や、シデンちゃんと紅娘ちゃん。久しぶり」

シンイチが目ざとく2人をみつけて声をかける。

そこにいたのは、本来いないはずのシデンと紅娘だった。

「お前ら、何してんだこんな所で」

そう言いながら2人の手元を見ると、なにやらこまごまとした物が入った籠が下げられている。

「販売店に来て何をしても何もあるまい、物資の調達だ」

「調達う？」

中をのぞくと、籠の中に入っていたのは書道セットと、洗剤、タオル雑巾なんてものが入っていた。

「お前ら、書道なんかやるのか？」

「ワタシじゃなくてシデンサンアル」

「本当か、シデン？」

「なんだその目は、我が書道をしてはならぬのか」

いや、べつにダメとは言わねえけど、こいつに文化系な趣味があるとはな。

「おいマサ、ちょっと耳かせ」

不意に、シンイチが手招きしてくる。

「ついでだからよ、この2人にも来てもらおうぜ」

「なんだって？」

「いいじゃん、すでに2人来てんだしさ」

シンイチは、俺の返事も聞かずに勝手に納得すると、2人に声をかける。

「ところでお二人さん、これから何か予定はあるか？」

「む？」

「よかつたら、俺らと学校に来ない？今日は午後授業ないし、それに君んちの子が2人、来てるからさ」

すると、2人はくるりと俺のほうを向いた。

「上官。それは本当なのか？」

「2人で、ケイちゃんサンとあと誰アル？」

「誰って、クリンが」

「なんと!？」

「? 呀、朝から見ないアルなー思たら、ガッコ行つてたアルか」

返事をする、シデンは色めき立ち紅娘はちよつと呆れ顔になる。

「よし、では参ろうぞ!」

「参ろうつてどこに」

「将仁サンのガッコアル、とーぜんアル」

よく判らないが、2人も速攻で行く気になっている。正直、あまり来てほしくないんだが。

「とーぜんつてお前ら、買い物はいいのか？」

少なくとも洗剤とタオル雑巾はお前らが使うものじゃないと思うんだが。

「我が良いと言ったらよいのだ！それとも上官、ケイやクリンは良くて我は来てはならぬと申すのか！」

「いやダメとは言わねえが、その荷物はどーすんだよ！」

「まあいいじゃねえの。紅娘ちゃんなんか本場中国の人なんだから、連れてつたら喜ばれるぞ？」

「いや、だから」

つれていくと間違いなく騒ぎになって作業にならなくなると思うからこう言ってるんだが。

「あいわかった」

すると、こういうときに一番文句を言いそうなシデンがそんなふう
に口を開いた。

「ならば紅娘。貴様は上官と共に行け。荷物は我が届ける」

「へ？いいアルか？」

「なに、荷物を届けたら、すぐに取って返す。それなら文句はあるまい」

「……結局、来るのか」

こいつら、うちにいるのは暇なんだろうか。

「なんだ上官、その嫌そうな顔は」

「別になんでも」

こいつは、自分の言うことを聞かないと怒るくせに、人の言うことは聞かないからなあ。なるべく騒ぎを起こさないでくれよ、俺はそう願うしかなかった。

そして、さっさと会計を済ませ、俺達は店の外に出た。

「では行ってくる。くれぐれも粗相のないようにな」

店の外で、シデンが俺たちに向かって敬礼をする。その背中には、こいつが外出する際に必需品となりつつある赤いナップザックが背負われている。その中に、洗剤やら雑巾やらといったさっき買ったものがつめこまれているのだ。

「注意して帰れよな、時間は十分あるんだ」

「心遣い、感謝するぞ上官！」

一応声をかけてやると、シデンはにっこりと笑ってからくるりと背を向けると、両腕をぱつと広げた。真っ赤な日の丸が姿を現す。

「つて、ちよつと待て。まさか？」

そのまさかだった。シデンは、何のためらいも無く、駐車場の中を走り出したのだ。

止める間もなく、ほんの数歩の助走を終えたシデンの体がふわりと浮き上がり、そのままぐんぐん上空へと舞い上がる。あつというまに、その姿は空のかなたに消えてしまった。

「……おい、マサ。今、シデンちゃんが」

当然のことながら、それを見たシンイチがビツクリした顔をしている。

「あれは、本当に人間か？」

シデンに対する苦手意識がぬぐえないらしく黙っていたヤジローも、空を飛ぶシデンの姿には驚いたようだ。

「俺もあまり自信ねえけど、俺の本来の家系って、時々ああいうのが出てくるんだと」

「んじゃマサにも何かあーゆーことが出来るのか？」

「さあ、どうかねえ。少なくとも空は飛べねーけどな」

まさかあれを作ったのが俺だとぶち上げてしまうわけにはいかないので、まだはつきりとは判らない話ということにして誤魔化しておく。

まあ、人手不足解消になるからいいだろうと自分を納得させる。

そしてふと、今ここに別の擬人化がいることを思い出した。

そいつは、にこにこしながら俺の横に立っている。まあコイツの場合、鍋以外は比較的人間離れ度が低いからまだ安全だと思うが。

「紅娘、ちよつと」

念のためその娘を呼ぶと、耳打ちする。

「なるべく、人間ができることだけ、してくれ」

すると、今度は紅娘が俺に耳打ちしてきた。

「心配しなくても、ワタシ将仁サンに迷惑なるようなコトしないア
ル」

その発言に、俺は少しほっとした。

12・忘れていた学校行事 その10

「ほー、これが将仁サンの通うしてる学校アルか」
はじめて見る学校を、紅娘が物珍しげにきよるきよると見ながら歩いている。

このまえケイとシデンを連れて歩いたときもそうだったが、学校というものに来たことがないから、見る物すべてが珍しいようだ。
まあ、俺たちはお使いの途中なので、あまり変な寄り道もできないわけだが。

「あら、李さん」

教室の前までやってきたところで、俺たちは委員長と遭遇した。そして委員長は、目ざとく紅娘のことを見つけた。

「？呀、委員長サン。元気だたアルか？」

紅娘のほうも委員長のことは覚えていたらしく、にこやかに返事をする。

「私は元気よ。こおんな問題児ばかりのクラスを引っ張っていくんだもの」

「ひでえ言われようだなあ」

「本当のことでしょ？特に男子はこいつみたくサボろうとするのが多いんだから」

「いててててっ、耳引っ張るなよ」

委員長は、すかさず突っ込んできたシンイチの耳をつまみながら答える。

「ところで李さん。午後、時間ある？」

そして唐突に、そんなことを聞いてきた。

「時間があるようだったら、ちょっと協力してほしいことがあるんだけど」

「協力？」

「そう、協力。李さんって、中国茶とか中華料理とかに詳しいんで

しよ？よかつたら、みんなに教えてもらいたいのよ」

「どうかな？と紅娘を見る委員長の目は真剣である。そりゃそうだ。中華の喫茶室をやるうとする奴の目の前にプロ級の奴が現れたんだから。」

「将仁さん、どするある？手伝っていいあるか？」

紅娘は俺に、伺うようなことを聞いてくる。が、口では“いいあるか”なんて言っているが、「いいアルよね」と暗に言っているような感じがありありと見て取れる。

「紅娘の判断に任せるよ」

「んじゃ、委員長さん。お手伝いさせてもらいますアル」

「わあ、ありがとう！」

紅娘の返事を聞いた委員長は、彼女の手を取り、大げさにぶんぶんと上下にゆすった。握手は英語でシェイクハンドというが、これこそそのシェイクハンドだと思ってしまうほどだ。

あまりの激しさに、紅娘のほうも面食らっている。

「委員長、あの2人はどうしてる？」

とりあえずそのことは置いておいて、俺は今気になるケイとクリンのことを聞いた。特にクリンのほうが心配だ。何かやらかしてなければいいのだが。

「2人には、裁縫のほうをやってもらってるわ」

「裁縫って、あのコスプレのか？」

「そ。女子のほうはだいたい出来てるんだけど、男子用のがまだちよつとね」

「・・・あー、あれか」

思い出して、ちよつとげんなりする。

うちのクラスの出し物は「三国志期の民俗学」という看板を掲げてはいるが実際は喫茶室であり、女子がそれっぽいコスチュームでウエイトレスをするのだが、コスチューム着るのは、実は女だけではない。と言っても女装してウエイトレス、というベタなものではなく（するやつもいるが）「三国志の武将」の格好をして、「歩く広

告塔」として校舎内を練り歩かなければならないのだ。めんどくさい話だが、過去優勝した出し物はすべて広告塔を出しているのだから、ちもそれに倣っているのだ。

そして、俺は裏方の方が良かったのだが、お前は有名人だからってことで俺にお鉢が回ってきたというわけだ。

俺がやるのは、魏のトップ、曹操だ。俺が知っている三国志ワールドでは「乱世の奸雄」とか言われて、基本的に敵役として登場するやつだ。個人的には趙雲とか馬超とかいった蜀の武将が良かったんだが、他の奴に取られてしまった。ちなみに、シンイチは委員長からの後押しがあつて蜀のトップで三国志ワールドで主役をはる劉備をゲットし、ヤジローはクラス中からの推薦もあつて、無所属だが三国志中で文句なしに最強の呂布をやることになっている。ちなみに、俺がトップを張る魏からは夏侯惇と司馬懿が、シンイチがトップを張る蜀からはあと関羽、張飛、諸葛亮、そして俺がやりたかつた趙雲がそれぞれ選ばれている。そして、三国志だからもう一つの国、呉も出さなきゃダメだろうということも呉からは孫権と周瑜が出る。そしてヤジローこと呂布は董卓と一緒に独立勢力になっている。

そして、ケイとクリンの2人は、俺のコスチューム作成に参加しているらしい。元々設計図（コスプレにそういうものがあるかどうかは知らん）があるのであとはそれに合わせてせっせと作るだけなのだが、それでもやつぱり手作りなので、数人がかりでぎりぎり間に合うかといったところらしい。

「じゃあ李さん、行きましょ」

「そんじゃ行ってくるアル」

委員長は、俺が思い返している間に紅娘と一緒に教室に入っていた。

廊下でぼーっとしていてもしょうがないので、俺らも教室に入る。

「帰ったぞー」

「おかえりなさいー！」

教室に入ると、そんな声と同時に何かが飛びついてきた。ケイだ。ケイが飛びついてきたのだ。

ちよつと、勘弁してほしい。ここは学校なんだぞ、見ている奴もいっぱいいるんだぞ。

目でまわりを見ると、教室にいる男の半分ぐらいと、一部の女が、じとーっとした目でこつちを見ている。だからいわんこつちゃない。

「ちよ、こら、離せ、周り、周り見る」

こういうときは下手に言い訳すると墓穴を掘るので、とりあえずケイに離してくれるよう頼む。

「あつ」

気が付いたケイがぱつと離れる。

「おかえりなさいですう、将仁さまん」

そこに、いつもと違うジャージ姿のクリンが、何か長くてカラフルな長い布みたいなものを両手に持って近づいてきた。

「早速ですけどお、着てもらえないですかあ？」

「お兄ちゃんのコスチュームだよ」

ということは、手に持っているのは曹操のコスチュームか。

「へー、よく出来てるな」

受け取って広げてみると、鎧の無い服の部分だけだが、結構よくできている、と思う。鎧は、マントがついた肩当てができていて、結構かっこいい。

「あとねー、これっ！」

その声と共に、ケイが何かをかぶせてきた。

どうやら兜らしい。市販のヘルメットのまわりをボール紙とかで飾り、兜に見せているのだろう。

ケイが、どう？とでも言いたげに顔を覗き込んでくる。そして何か言っているみたいだが、耳が塞がっているのでよく聞こえない。

「今、なんて言った？」

聞き返すためにハリボテの兜を外して聞きかえすと、ケイはちよつと不機嫌になった。

「ぶーっ、なんで外しちゃうの？」

「なんでって、耳が塞がって声がよく聞こえないんだよ、これ」

「あらあら、それじゃあ横に穴とか開けないといけませんねえ」

するとクリンが口を挟んでくる。うん、これはぜひともそうしてほしい。

「ただ、穴をそのままあけたらかつこ悪いから、網みたいなのを当てたらいいと思う」

「ふうーん、あ、ねねね、じゃあじゃあ、どこに開けるか見るから、もっかい被って？」

というわけで、兜をもう一度被せられてしまった。

なんつーか、俺、おもちゃにされてるな。

そして、兜の耳の位置をチェックすると。今度は服のほうを着てみてくださいという。

「ちよ、ちよつとまで、ここじゃまずい」

「えー？なんでえ？」

「なんでってお前、コレを着るということは、その前に今着ている服を脱ぐってこつたるーが！ここで服を脱げとか言うのかお前は！？」

「でも将仁さん、すてきな体しているじゃないですかあ」

「ぶっ！？」

クリンの一言で、俺は思わず噴き出してしまった。

「おっ、お前、なんつーことを言い出すんだ！？」

「だつてえ、背中中の筋肉とかあ、胸の筋肉とかあ。思わず触りたくなりますう」

「ええー？お兄ちゃんの背中って、そんなかつこいいのお？ケイも見たーい！」

「つてこら、ケイまでか！？」

「だーってケイ見たことないもーん！」

あのなお前ら、ここはうちじゃないんだぞ！？

俺は背中に無数の視線を感じ、頭を抱えたくなった。

12・忘れていた学校行事 その11

なぜか俺を脱がそうとする2人を何とか引っぺがし、自分の作業を始める。

しかしどうもやりにくい。なんとというか、俺一人が仲間はずれにされている感じた。それはまあやっぱり、さっきのケイとクリンがやってくれやがったアレのせいなんだろうな。

ちよつと前まではお前らと同じだったわけだし、本当は今でも同じなんだが、そう言ったところで信じてもらえとも思えないし、信じたら信じたでまたろくなことになるのが目に見えている。うん。仕方が無い、今日は黙って、嫌われ者になろう。曹操は三国志では嫌われ者なんだ。

そして、その原因を作ったケイとクリンも、今は俺から離れ、衣装作りのグループと一緒に仲良く衣装作りをしている。

「仲間はずれでもなんでも、仕事だけはしなきゃな」

諦めて、さっき買ってきた角材の長さを測りはじめる。教室のロッカーや厨房を隠すために立てる壁の枠だ。

案の定、だーれも手伝ってくれない。なんか泣けてきたぞこのヤロウ。

そんなことを思いながら、角材にのこぎりを当ててぎっこぎっこと挽きはじめた。そのときだ。

視界の端に、何か見覚えのある靴のつま先が現れた。

「一人で作業か？」

そして頭の上から聞き覚えのある偉そうな声がした。

顔をあげると、その声の主である深緑の女袴を着た女が、偉そうにふんぞりがえって立っていた。

「お前、ホントに来たんだな」

「なんだその迷惑そうな物言いは。孤立無援のところ援軍として参上してやったのだ。感謝されても良いぐらいだぞ」

その女、シデンは、俺の前にしゃがみこむと角材に手を添える。

「これを切るのだから。手伝ってやるぞ、上官」

そして俺の顔を見てにっと笑った。

が、その直後。いきなりシデンが、首を縦に振りやがった。それに合わせて、頭のとっぺんで束ねられた銀色の髪の毛が俺の顔に叩きつけられる。

「ぶは!？」

「人のことほつたらかして、勝手に話を進めんじやないの」

そして、聞き覚えのある、しかしいるはずのない女の声が出た。

「きつ、貴様、何をするのだ!」

頭を上げたシデンが、その声のほうへ食ってかかる。

はたしてそこには。赤と黒のライダースーツに身を固め、長い銀色のマフラーに色の濃いサンバイザーをした女が立っていた。

ヒビキだ。シデンがつれて来たんだろうか。

「えつらそうに。おめえこそ勝手に先行きやがって、危うく迷うところだったじゃねえか」

「勝手は貴様であろう、招きもせぬのに勝手について来たのではないか!」

いや、どうもそうでもないようだ。

しかしそれにしてもクリンといい紅娘といいこいつらといい、なんで学校に来たがるんだろう。うちにいるのがおもしろくないのか、それとも学校に興味があるのか。

そう考えると、ここに来ていないテルミ、レイカ、バレンシア、ついでにちよつと方向性が違うが魅尾も、本当は学校に興味があるのかもかもしれないな。

よし、学園祭になったら、みんなを招待しよう。モノたちも喜ぶしうちのクラス連中も喜ぶ。一石二鳥ってやつだ。

なんてなことを考えていると、さっきまで無視を決め込んでやがったクラスの男子が、俺に話しかけてきた。

「あのライダースーツの人、知り合い？」

「ん、あ、まあな」

知り合いかと聞かれたら、まあNOとは言えないだろう。

「お前ら、こいつの知り合いかい？」

と、突然誰かが俺の首に手を回して来た。

ヒビキだった。そして俺をヘッドロックすると、そのまま俺を引っ張り立ち上がりやがった。

「いててててつ、こら待てつ、俺ノコギリもってんだぞっ！」

「おいヒビキっ！貴様、上官に何をするのだ！」

そこにシデンが飛びつくと、俺の腕を掴んで引っ張る。……………ん？

「いでええええええ！」

その手に激痛が走り、ノコギリを落としてしまった。

「うがあああああ！てめえらああああ！なにしゃがるうっうっうっうっうっうっ！」

思わず叫んでしまった。学校でバイクとラジコン飛行機に殺されるなんて、絶対に嫌だぞ。

そして、開放されると同時に俺は床にうつぶせに落とされた。

頭を上げると、俺を痛めつけていたヒビキとシデンの二人が、少し心配そうに俺を見ている。

「ててて、このてめえらっ！」

立ち上がると、俺はその2人に叫んでいた。

「てめえら、俺にケガさせにきたのか、それとも邪魔しにきたのかあっ！だったら帰れっ！帰りやがれええええええ！」

そして俺は、その二人に怒鳴っていた。

「はあっ、はあっ、はあっ……………」

今まで出したことがないような大声を出したせいか、なんか息が切れてしまった。頭に血が上って少しくらくらする。

少し冷静になったところで、あたりが静かなのに気付いて顔をあげる。

クラス中が、俺を見て固まっていた。そして、ヒビキとシデンが、

少し怯えたような顔でこっちを見ている。

「……………あ、すまん、ちよつと言い過ぎた」

この我が家武闘派ツートップのそんな顔を見たら、自分が大人気ない気がしてしまい、俺は2人に、頭を下げていた。

ヒビキは初めてなんだし、シデンだってまだ2回目だ。多少興奮して舞い上がったも、しょうがないだろう。

「頭を上げてくれ、上官。此度のことは、我等にも落ち度があったのだ」

「こつちこそ悪かったよ、変にはしゃいじまってさ」
すると、2人のほうも謝ってきた。

「なあ将仁。これ、どうすりゃいいんだい？」

そしてヒビキが、床に転がっていた角材のひとつをひょいと持ち上げる。

「ここに、線が入っているのが見えるであろう。まずは、このノコギリで、その線に合わせて切れば良いのだ」

そこに、ノコギリを拾ったシデンが指示をする。

「そうだな、上官よ」

「ん、ああ、まあ、そうだな」

その2人の様子を見て、他の連中も落ち着いたので感じたのだろう、のそのそと自分の仕事に戻っていった。

「そういえばお前ら、こつちを手伝うのか？」

「うむ、先刻は上官に迷惑を掛けてしまったことだし」

「それに、あたしゃああいう細かい仕事よかこつちのほうが性に合ってるからさ」

「だいたい、我等が援護せねば、上官は孤立無援ではないか。来てしまった援軍は素直に受け入れたほうが良かるう？」

どうやら、さつき帰れと言ったばかりだが、こいつらにその選択肢はないらしい。

まあ、せつかくの貴重な労働力がやる気になっっているのだ、使わない手はない。特にヒビキのパワーは、俺らの仕事をする場合に重宝

すること間違いなしだ。

「じゃあ、俺らの手伝いを頼むわ」

「オツケー、頼まれたぜ」

「では上官。具体的に何をすれば良いか、指示を頂けないか」
そうお願いすると、2人はぱっと明るい表情になった。

12・忘れていた学校行事 その12

「よし、こんなもんか」

目の前の壁に、角材で作った枠がいくつか立てかけられている。

模擬店で、壁として使うパネルの枠だ。これに、壁の絵を書いた模造紙を貼って、壁が完成する、予定だ。

「なんだ、もう終わりかい？」

そして俺の横には、バイザーをあみだにし、金槌を手に爽やかな笑顔を浮かべたヒビキが立っている。この枠作りを手伝ってくれたのがヒビキだった。

それにしても、こんな早く終わるとは思わなかった。なにしろ桁外れにパワフルなヒビキがやるもんだから、電動ノコギリ並の速さで角材を切り、釘もまさにトンカチ一振りで根元まで打ち込まれてしまふのだ。それは、もしかしてヒビキってこういう大工仕事の才能があるのかもしれないと思わせるほどだ。

「いや、ただだけど、壁のほうが出来ていないからさ」

「ふーん？」

するとヒビキはちらりと、部屋の隅でその壁紙を作っているチームを見る。そっちでは、男女混合の一団が、懸命に模造紙に絵筆を走らせて壁の絵を描いている。

まあ、芸術作品ならともかく、普通の絵はパワーだけじゃ描けないもんな。

「そっいや、他の連中は何やってるんだろっな」

ちよっと手持ち無沙汰になったとたん、他の連中のことが気になり始めた。なにしろ、みんなして少し非常識な存在だ。ぶっとなだこをしていないとも限らない。

「ちよっと見てくる。ヒビキは、一休みしていてくれ」

「あいよ」

というわけで、息抜きを兼ねて様子を見て回ることにした。

まず気になったのは、ヒビキと一緒に来たシデンだ。なにしろあの性格だ、気に食わないことがあつたら暴れだす可能性もある。

そのシデンは、模擬店の装飾や小道具を作るチームに加わっている。「む、上官。良いところに来たな」

そつちに顔を出してみると、声をかける前にシデンのほうからこつちに駆け寄ってきた。

「ちょうど今、私の作品が完成したところだ。我が許す、見るが良い」

そして、何やら二つ折りにされた肌色の厚紙を差し出してきた。

折り曲げられた紙の真ん中より少し上に、綺麗な書体で、「菜单」と書かれている。確か、中国語でメニューのことだったっけ。

そして開いてみると、同じ書体の文字が、ぴつちり綺麗に縦に並んでいる。

「これ、お前が書いたのか？」

「どうだ、見事であろう」

「折り曲げただけなんてオチじゃねえだろうな？」

「むっ、失礼な奴だな。正真正銘、我が記したものだ」

俺の反応を見て、得意そうにシデンがふんぞり返る。念のため、そのチームの奴にも聞いてみたが、書く内容とレイアウトこそ指定したが、実際に書いたのは間違いなくシデンなんだそうだ。

意外だ、シデンがこんな綺麗な字を書くとは思わなかった。あの書道セットも、伊達ではないということかな。あの書

「書をたしなむのも武士の務めだからな」

素直に感心すると、シデンは少し照れくさそうにしながら、まんざらでもない様子だ。武士というのはちよつと違うような気がするが、まあ今この場では（女だけど）一番武士らしいからいいか。

それにしても、あのシデンが、よく癩癩を起こさないでいるな。字を書くとき集中するのかな、確かに墨で字を書くのは、ミスが許されない一発勝負だからかな。

「ところで上官は、何をさぼっておるのだ？」

「お前こそ失礼だな、俺はお前らが騒ぎを起こしてないかと思っただな」

「ふん、ならば心配は無用だ。我は職務を放棄することはせぬ」シデンは、胸を張って臆面も無くそう言い放つ。なんか俺がサボリの常習犯だと言っているみたいだが、まあ正直ちよつとだけあたっているから偉そうなことは言えない。

「上官もさぼってばかりおらず、自分の職務を進めたほうが良いのではないか」

それを察したのか、シデンのやつは俺にそう言い放ちやがった。次に向かったのは、同じ教室内だが今度は女子ばかりの衣装チームだった。ここには、ケイとクリンがいるはずだ。

ちよつとのぞいてみると、なんか和気藹々とやっているみたいだ。

「あいたっ！」

「あらあら、大丈夫、ケイちゃん？」

「ううう」

ケイははじめての針仕事に苦戦しているみたいだ。どうやら針を指に刺してしまつたらしく、軽く涙目になって指を啜えている。

一方のクリンは、こつちもはじめてのはずなのに、随分と順調らしい。鼻歌なんか歌いながらチクチクと作業を進めている。

「どうですかあ？」

「わあ、クリンさん仕事早いですね！」

「ふふ、これでも、家政婦ですからあ」

「………あれ、これは？」

「え、これ、ですかあ？………あ、あらあら、まあまあ」だが、やるのがいつもどこか抜けてるクリンらしく、器用にもジヤージの袖を衣装に縫いこんでいた。

「あのお、間違いの糸、切ってもらえませんかあ？」

そしてその縫いこんだ袖のところを、恐る恐るといった感じで近くにいた同じチームの奴に差し出す。そいつが糸切り鋏でちよんちよんと糸を切つてやると、にっこり笑って頭を下げ、また縫い物を始

める。そういえばクリンって、すっぱりと切れるからって理由で、刃物が苦手なんだっけな。針が大丈夫で刃物がダメってのはなんか矛盾しているような気もするが、まあ作業に差支えがないから、ここはよしとしておこう。

いずれにしても、仕事の邪魔はしていないようだから、わざわざこっちから邪魔することもないだろう。と思って、そっそこから離れると、教室を後にした。

12・忘れていた学校行事 その13

あとまだ様子を見ていないのは、紅娘だけだ。紅娘がいるハズの料理チームは、練習から火を使うから危険だということで化学教室に行っているはずだ。

「まああいつのことだから、ケンカを吹っかけることはないだろうけど」

「あいつって、誰のことですかしら？」

「わあっ!？」

いきなり声をかけられ、俺は思わず変な声を上げてしまった。

見ると、閉じた扇子を手にした偉そうな態度の金髪巻き毛の美人がそこに立っていた。

「く、クローディア、なんでここに」

「ふん、その問いに答える理由はありませんわね」

その女、クローディアは生意気にもそう言い放ちやがった。

ふとその後ろを見ると、数人の取り巻きがいるが、迅の姿は無い。

と思つたら、少し離れたところで壁にもたれかかり、目だけでこつちをうかがっている。その視線は、「厄介ごとを起こすな」と言っているように感じられる。

まあ俺も厄介ごとはゴメンだ。本当に、これ以上敵を増やしたくない。が。

「なぜなら、先に質問をしたのは私なのですからね。お分かりになりました?」

このお嬢様はそんな俺達の気持ちなぞこれっぽっちも考えてくれない。そういう高飛車な物言いは、可愛げがないと敵を作るだけだぞ。なんかそんなことを考えていると、いつのまにか俺の回りに人だかりができていた。当たり前だ。このお嬢様は何をしても目立つ要素がいっぱいなんだから。

「はぁー……判つたよ、答えりゃいいんだろ」

まあ、こいつには何を言っても通じないだろう。こいつは、俺が知る限り人の話を聞かないことに関してはナンバーワンなんだ。変に構うだけ時間の無駄、と思い直し、俺はあっちの発言に答えてやることにした。

「手の空いている奴が、うちから手伝いに来てるんだよ。一人が化学教室に行っているから、その様子を見に行くところだったんだ」

「手伝い？」

「あんたのここにも居るだろ、学外から手伝いに来てる奴が」

すると、お嬢様ははっとしたように取り巻きの連中を見た。まさか、気付いていなかったのか？その取り巻きの中にすら、制服でもジャージでもない、ましてや高校生でもなさそうな連中が混じっているんだが。

「あつ、あら、おーっほっほっほ、と、当然ですわっ！」

お嬢様は取り繕うように高笑いして見せるが、気のせいかなんかきこえない。こいつ、やっぱり気付いていなかったな。ここまで自分のことしか考えていないと、逆に感心してしまう。

「じゃあ、俺はもう行くぜ」

「お待ちなさいっ！」

だが、俺が去ろうとすると、お嬢様は閉じた扇子をこっちに向けてぴしゃりと言いつ切る。

「あなた、先ほど私が何をしているか、聞きたがっていましたがよね？」

「ああ？いいよそんなことどうでも」

「どっ、どうでも良いとは、なんて言い草ですよ！？」

面倒くさいので適当にあしらおうとしたが、どうも地雷を踏んでしまったらしい。お嬢様はいきなり激昂してしまったのだ。俺、やっぱりこつというのが下手なんだなあ。

「あなた、御自分の立場がわかってらっしやらないようですわね！？」

「何だとお！？俺にはな、お前にへーこらしなきゃいけない理由な

んざこれっぽっちもねえんだ！てめえこそ勘違いすんな！」

「な、な、な、なんですつてえ！？」

売り言葉に買い言葉で、俺もつい声を荒げてしまふ。構っていると紅娘のところに行くのが余計に遅くなるのは判っているんだが、ここで理由もなくへつらうのも癪だ。

おかげで、人だかりはさらに大きくなつてしまった。そして。

「上官。これは何の騒ぎだ？」

「何やつてんだ、将仁？」

あんまり来てほしくない武闘派の2人が、来てしまった。まあ、大人しくしているような連中じゃないとは思っていたが。

「む、その女ツ！貴様、上官に何をしようとしていたッ！」

その2人のうち特に気の短いほう、シデンが、俺とクロードディアの間に割つて入ると、クロードディアを睨みつけ、尋問するように指を突きつけた。

「な、何ですの、あなたは！？」

「我が名は中嶋紫電、そこな真田将仁の従姉妹！貴様、我が上官に何をしようとしていた！」

そのシデンの物言いに、さすがのクロードディアもたじろいでいる。いや、ここはあのお嬢様を黙らせるシデンが凄いと言つべきか。

「おーおー、張り切つてんなあ」

ライダースーツに身を包んだもう一人、ヒビキは、ちょっと楽しそうにそれを見ている。つてお前、もしかしてただ野次馬しに来たのか？

「おい貴様っ！答えぬかつ！」

「おっ、お黙りなさいっ！」

しかしまあ、クロードディアもあのクロードディアなわけで、黙つてやり込められてるようなタマではない。我に返つたらしく反論をはじめた。

「真田将仁ッ！何ですのこの無礼な小娘はっ！？」

と思いきや、矛先がまたこっちに向いてきた。堪忍してくれ。

「何ですのつて、さつき名乗ったじゃ……」

「貴様、どこを向いているッ！」

すると案の定、無視されて余計にかつとなったシデンの右手が、クローディアの胸倉を掴んだ。あいつはすぐ実力行使に出るからなあと思つた直後だ。

「ひよわ!?」

初めて聞くような変な悲鳴をあげ、お嬢様ではなくシデンの体が、宙を舞つた。

「ぐふっ！」

そして、なすすべもなく床に叩きつけられた。その右手を、制服姿の男が抱えている。

迅だつた。それが判つた瞬間、俺はその迅という男の力に、戦慄すら覚えた。

なにしろ、我が家の武闘派ツートップの一人で、大の男数人相手にほとんど無傷で勝利するあのシデンが、なすすべもなくぶん投げられ、床に転がされたのだ。多少は油断もあつただろうが、それだけであのシデンがこつもあつさりとやられるわけではない。

「おい、てめえ何をしゃがつた!？」

それを見て、笑みをなくしたヒビキが、迅の近くで指を差そうとでもしたのか右手を出した、その瞬間だ。

迅の体が何の前触れもなく動き、そして気が付いたときには、ヒビキの右腕をひねり上げた迅がヒビキの背後に立っていた。

「うわっ!?!がつ！」

そして、迅が無言で足元を軽く蹴り上げると、ヒビキの体はそのまま前のめりに倒れこんだ。しかも右腕は迅に極められたままで、しかもひねり上げた迅の肘が、ヒビキの背骨あたりに真っ直ぐ突きつけられている。おそらく、迅の体重がその1点にかかっているのだろう、あのヒビキが、一瞬ではあるが苦しげな悲鳴をあげた。

その光景の意味が理解できず、俺は自分の思考が止まってしまった

かのようにさえ感じた。

「おーっほっほほほ、無様ですこと。私に刃向かうから、そんなことになるんですよ」

その俺を現実に戻したのは、クローディアのそんな高笑いだった。つたくこいつは、偉そうにしていながら、結局自分では何もしていないじゃねーか。

だが、次の一言には、俺も背筋が凍った。

「良い機会です。迅、ついでですから、真田将仁のことも懲らしめてあげなさい」

そう、次は、俺がターゲットにされたのだ。情けない話だが、あの2人が勝てなかった奴に勝てる自信もない。思わず身を硬くしてしまふ。

だがそれは、結局のところ杞憂だった。

「断る」

迅は、そう言うなりヒビキをあっさりと開放し、離れてしまったのだ。

「な、なんですって？私の命令に、逆らうと仰るの!？」

「その命令は契約外だ。従う必要はない」

「くっ……」

いままでの誰とも違い、淡々と事実を告げる迅。さすがのお嬢様も、これには何にもいえないらしく、顔を真っ赤にしながら扇子を握り締めてぶるぶると身を震わせている。

「ふん！命拾いなさいましたわね！行きますわよっ！」

そして、そう捨て台詞を吐くと、くるりと背を向け、すたすたと足早に去って行ってしまった。

「お、おい、大丈夫か？」

はっと我に返り、床に投げ出された2人に声をかける。

「……な、何者だ、あの男は」

「……てて、一体、何があったんだよ」

どうやら2人にも大したケガは無さそうだ。だが、2人も混乱して

いるのは明らかだった。

「あれが、この前話した近衛クローディアお嬢様と、そのボディガードの筈だよ」

「むう、たかがぼでいーがーどのくせに我をいなすとは、小癩な奴」
「つてえ、あんにやる、ただもんじゃねえな」

腕を極められたぶん、ヒビキのほうがダメージは大きいようだ。

まあ、迅がただもんじゃないのは判りきったことだけど。やれ特殊部隊にいたとか、本職は仕事人とか、はてはサイボーグだとかいうムチャクチャな噂がいっぱい立っているような奴だし、身体能力が超高校生級なのは俺も身をもって体験している明らかな事実だしな。

「立てるか？」

まあ行ってしまうた奴らの話をしてもしょうがない。俺は、ひっくり返された二人に声をかけた。

「ああ、ちよつと腕が痛えけど」

ヒビキは肩をまわしながらゆっくりと立ち上がり。

「おのれ、いつか打ちのめしてくれ」

アクション俳優かダンサーのように跳ね起きたシデンは、そんなことを言っつて、クローディアたちが去っていったほうをにらみつけていた。

12・忘れていた学校行事 その14

「きゃーっ」

化学教室の近くまで来たとき、なぜか大人数の悲鳴が聞こえた。

「なんだなんだ？」

紅娘の奴、何かやらかしたのか？と思ったが、その直後、こんどはそっちから漂ってくる甘い匂いに気が付いた。

火を使っている（と思う）から、香ばしいにおいはするが、焦げ臭くはない。火事とかにはなっていないようだ。

じゃあさっきの悲鳴はなんだ？と思って耳を澄ますと、さっきほど高いトーンではないが、きゃいきゃいという声はあいかわらず聞こえる。

何が起きているんだろう。

その理由は、化学教室を窓からのぞいたときに、とつてもよく判った。

「わあっ、これサクサクでおいしー！」

「こつちのクッキーも甘すぎなくていい！」

「胡麻餡ってこんな爽やかな味なんだあ」

女子たちが、手作りのお菓子を食べて歓喜の声を上げているのだ。

何人か他のクラスの奴も混じっているが、そいつらも一様に賞賛の声を上げている。

「何だか照れくさいアルね、こなに褒められるするアルと」

そしてその真ん中には、いつも背負っている鍋をカセットコンロに載せた紅娘が、まんざらでも無さそうな表情で立っている。そしてまわりのテーブルには、紙皿に乗せられた焼き菓子やスチロールのお椀に入った汁物が並んでいる。

なんか、照れているのは紅娘だけみたいだ。ってことは、コレ全部紅娘が作ったんだろうか。相当頑張ったみたいだな。

と、ここにいたら声がかけれないことに今更ながら気が付いて、

俺は中に入ることにした。

こんこん。さすがに女だけの、特に生身の女ばかりの中に乗り込んでいくほど図太くないので、まずはノックをする。ノックしてから最近微妙に薄れてきた朴念仁キャラを押し出せば問題ないかも思ってたがまあいい。

「あら、真田君。どうしたの、自分の仕事は？」

化学教室のドアをがらりと開けて顔を出したのは、委員長だった。

「だいたい終わっているよ。うちから応援が来たから」

「応援？」

「学生でなくても来ていって判ったもんだから、ヒマなのが来るんだ」

言いながら中を覗き込む。紅娘の様子を見に来たんだから当然だ。委員長の肩越しに見えた紅娘は、クラスの女子に混じって、うちでは見えないような顔で談笑している。やっぱあれかな、中華鍋の化身なのに家だと台所はレイカが支配して思い切り料理ができないから、好きなだけ料理ができたのは楽しかったのかな。

「あつ、将仁サン！」

その紅娘が、俺に気付いて駆け寄って来た。

「どしたアル？おなかすいたアルか？」

「人を食欲の権化みたく言うなよ」

「まままま、将仁サンもどぞw」

「はぐあ？」

突然、何か口につつまれた。条件反射で噛むと、サクリとした歯ごたえとほんのりした甘みが口に広がった。

「もぐもぐ、なんだいこれ、変わった味だな」

「老婆餅アル。代表的な中国菓子ネ！」

得意そうに話す紅娘の顔はとても楽しそうだ。

「どアル？口に合わないアル？」

かと思うと、今度は心配そうな表情でこっちを覗きこんでくる。

「何言っただ、紅娘が作ったんだから不味いワケないだろ」

「につしつし、やた！」

そう答えると、紅娘は嬉しそうな笑みを見せる。

そしてそのむこうでは、料理班の女子がひそひそ話をしているのが見えた。ひそひそ話と言っても声は小さくないので何を言っているのかはまる聞こえだ。

「真田君って、意外とジゴロなんだね」

「女の人たちと同棲するようになったって言うけど、やっぱりそのせいなのかしら？」

「でも、それってここ2週間ぐらいでしょ？それであなるなんて、やっぱり天性のジゴロなんじゃない？」

「ふむ、残念だな。真田はもっと硬派な男だと思っていたのに」

なんかえらい言われようだ。俺だってお前らと同じ高校生なんだから異性に興味があるのは当たり前だろう。それが無いと思っていたのはお前らの勝手だ。

「変にハブられてないか心配だったんだが、まあ問題なさそうだな」
ちよつと泣きたくなったのをぐつとこらえ、紅娘にそう声をかける。

「？呀、将仁サン、心配してくれたアルか？」

すると、紅娘はかるーくニヤって俺の顔を覗き込んできた。

「そりゃ少しは心配するさ、いつもと勝手も違っただろうし」

「好！感到高？、謝謝、謝謝〜！」

思わず素直なことを口走ってしまったら、紅娘に手をとられ上下に思い切りぶんぶん振られてしまった。さつき委員長がお前にやってたのをオレにやり返しているのか、お前は。

「じゃじゃじゃ将仁サン、もっと味見するヨロシ！この紅娘の自信作アルね！」

と思う間もなく、紅娘は俺をぐいぐいと試作品の前に引っ張っていく。

「はい、？迎光？！どぞ座るヨロシ！」

そしてその試作品の前に強引に座らせる。

「コレ、芝麻蛋卷と言つアル。中国のロールクッキーアルね」

そして本人は俺の横に立つと、近くにあった白くて細長いものを手にして持ってくる。サインペンほどの太さのそれは、近くで見ると表面に胡麻がいつぱいついており、胡麻の匂いに混じって甘いにおいがした。

「はい、アーンするアル」

「い!？」

だが、次のその言葉には、俺も困惑、以上に面食らってしまった。だってお前、まわりにはうちのクラスの女子がいつぱい居るんだぞ!？

さらに言えば、紅娘は俺の知る限りこういうキャラじゃない。なんというか、紅娘は他の連中と張り合うことで被害を大きくするブースターみたいな奴で、単品では比較的無害なはずだ。

「ちょ、ちよつと待て、お前キャラ変わってないかオイ!？」
思わず立ち上がって叫んでしまう。

すると、まわりの女たちからクスクスと笑う声が聞こえてきた。もしかして、紅娘のやつ、クラスの女子にいらんことを吹き込まれたか？

「おつ、お前ら……」

なんか、俺への見方が急激に変わっていくのがありありと判るようで、もの凄く恥ずかしいぞ。

まあ、元々女ばかりの中に一人で入ること自体がすでに恥ずかしいんだから開き直ってしまえばいいんだろうが、恥の上塗りにしかならないような気もするし、かといってここで逃げるのもかつこわるいし。

考えた末。

ひよいぱく。

「ん、甘すぎなくていいなコレ」

女たちの目を盗んで、俺は胡麻が目いつぱいついたスティック菓子を自分の手で口に運んだ。

「? 呀ー、食べられてしまったアル」

すると、紅娘は嬉しいんだか残念なんだか良く判らない声を上げた。そして、まわりにいた女どもからはなんか白けたような空気が流れてきた。

どうやら、選択を間違えたようだ、って今更か。こういうときに選択肢を間違えるから俺は朴念仁だのなんだのと言われるんだ。それに、ばれたら他のモノたち、特にケイやシデンの外見年少組がむくれるのは目に見えている。だからこれでいいんだ。

なんて考えて自分で自分を納得させようとしたが、正直、あーんつてやってもらった時に素直に食っておけばよかったという後悔の思いが、心の中に沈殿していたのも事実だった。

ちなみに、その紅娘作の中華菓子はみんなにも好評で、うちのクラスに持っていったところあつという間に胡麻一粒、ぜんざいの汁一滴に至るまで全部が綺麗に無くなってしまった。まあ、中華鍋の化身の紅娘が作る中華なんだから不味いわけがない。不味いと思うやつがいたらそいつはよっぼど中華が嫌いかもしれない。味覚がおかしいかだ。

ただ心配なのは、それをうちの女子が本当に再現できるかだ。料理班の女たちは、確かにうちのクラスでは料理が得意だと自他共に認める連中だが、紅娘はある意味プロだから、その腕は趣味でやっているそいつらも及ばないぐらいのハズだ。

まあ、そんなことを言っただけで自信喪失されたら出し物が失敗する可能性もある。それは、わざわざ当日に曹操のコスプレをして練り歩く身としても避けたいところなので、今日のところはあえて言わないでおくことにした。

……なんか最近、こういうのが多いよね、オレ。

変に秘密が多くなってしまった我が身を振り返って、ちょっと悲しくなった。

12・忘れていた学校行事 その15

「んじゃ、また明日な」

6時を回ったところで、今日はみんなを帰すことにした。一応、外から呼んだ人は6時までには帰すことになっているからだ。で、みんなを帰さなきゃならなくなったんだが。

「帰らなきゃダメ？」

ケイが、そんなことを言ってきた。

「まだ出来てないんだけど、いいの？」

そして、作りかけの衣装を俺に見せる。確かに作りかけだが、それでも結構形にはなっている。

「そうは言っても、もう6時回っちゃったから」

「じゃあお兄ちゃんも帰る？」

すると、ケイは何を思ったか上目遣いで俺を見てそんなことを言うてきた。

とたんに、背中から無数の刺すような視線を感じる。うーん、人気者の妹を持つと大変だ。

「おい貴様ら！なんという情けない目をしておるのだ！」

「まあまたそのうち、ヒマになったら来てやるからさ」

シデンやヒビキが、その刺すような目で見ている連中に向かって声を出す。例によってシデンはケンカ腰だ。これでなんでクラスの連中に嫌われないのかが不思議だ。

「ま、まあ、しょうがないんじゃね？」

「そうだな、真田は大したことしてないけど、応援の人は凄く助かったし」

「それにまあ、明日もあるしな」

すると、うちのクラスの連中からもそんな声が出てきた。やっぱり男は、可愛い子には甘いんだな。

「ね、みんなもそう言ってるしい」

いきなり同意し始めたみんなを見てか、ケイがニコニコしながら俺の腕にしがみついた。

「ね、帰る？」

そして、上目遣いで俺を見た。

というわけで、俺はうちのモノたちを連れて帰ることになった。

「李さん、明日でもあさつてもいいから、もう1回来てね？レシビだけじゃ判らないところがあるから、細かいところとか教えて欲しいのよ。賞金が取れるかどうか、このお菓子に掛かってるんだから」

帰り際、委員長が紅娘の手を取って真剣に訴え、紅娘は満面の笑みで承諾していたのが印象的だった。

というわけで、俺は5人と共に駅へ向かう道をてくてくと歩いていく。

「ねねねお兄ちゃん、帰ったらさ、早速衣装合わせしよ？」

「そうですねえ、学校では袖も通してもらえませんでしたしい」

「おいおい、衣装合わせつてのは、出来た衣装を着てみるもんだろ。まだ出来てないじゃないか」

「うっ、で、でも、きついかもしれないかもだしっ」

「しかし、いささか面白いな。招待されたのは紅娘一人か」

「まあいいじゃねえの。あたしらも、来るなって言われたわけじゃねえんだし、それどころか喜んでもらえんじやないの？」

「そうアルそうアル。それに、ワタシは教える立場アルから」

「むう、なぜ料理は学ぼうとする者が多いのだ」

「そりやお前、メシは食わなきゃ死んじまうだろうがよ」

「ヒビキさんはあ、食べ過ぎのような気がしますけどあ」

「腹が減るんだからしゃあねえだろ。そいつあ燃費悪く作った奴に言っとくれ」

「んー、誰に言うアル？」

「知るかそんなの。カワスキの技術者じゃねえか？」

「でも、ケイもなんかお腹すいてきちやっ たなあ」

「今日はダメ。財布の中身そんなに無いんだよ」

「ぶう、別にあのお店に行きたいって言ってるんじゃないもん」

「でもダメ。時間的に、帰ったらすぐ晩飯だろうし」

「そういえば紅娘よ、今日は貴様、夕餉の支度をレイカだけに任せただな」

「……あ、そいえばそうだったアル」

「そうだったってえ、何も言っていないんですかあ？」

「荷物置いてくるとシデンサン言てたアルから、うまく説明してくれたと思てたアル」

「そういやシデン、おまえ、学校に来る前に一度家に帰ったんだよな。そこんところ、どうなんだ？」

「そつ、それはまあ確かにそうだ、だから話はしたぞ、紅娘は外出することになったと」

「だったら問題ないじゃん」

「そういえばクリンちゃん、お兄ちゃんと一緒に学校に行くって、朝、誰かに言ってきた？」

「ああ、んん、ええとそのお」

「お前、黙って来たのか！？」

「あうう、だつてえ、私もお、学校が見たかつたんですよ」

「見たかつたつて、あのなあ。土曜日に学園祭が始まりや一般公開されるんだから、それまで待てばいいじゃねえか」

「でもお、それつてえ、いつもと違う学校じゃあないですかあ。ケイさんやあ、シデンさんがあ、見たのと違いますものお」

「それを言うか、貴様。我だつてなあ、昼餉ひるげの時間だけしか居られなかつたのだぞ！？」

「将仁サン、今日食べた菓子の中で、何がイチバン気に入たアルか？」

「ん？あ、俺はあのロールクッキーみたいなのかな、中に胡麻餡が入ってたやつ」

「好、もしかして将仁サン、胡麻が好きアル？」

「ん、まあ嫌いじゃねえな」

「へえ、そんな美味かったのかい？あたしもサボってないで呼ばれになりや良かったな」

「まあまあ、後でうちで作てあげるアルから、楽しみにするヨロシ」

「おう、楽しみにしてっかな」

「あつ、スイーツがおいしいお店！」

「だーからダメだっつ」

うん、なんか、賑やかだ。たまにはこういうのもいいよな。

なんとなく楽しい気分になりつつ、俺はみんなと家路についた。

12・忘れていた学校行事 その16

暑さ寒さも彼岸までとはよく言ったもので、7時を過ぎてうちに着いたころには、あたりはすっかり夜になっていた。

「ただいまー」

俺が家のドアを開けて、そう言った直後だ。

2階から、どどどどどど、という激しい足音が降りてきた。

こんなふうには足を踏み鳴らして走るのには、大抵なら俺かヒビキ、もしくはシデンぐらいだが、今はどっちも後ろにいる。ってことは、誰だ？鏡介あたりかな？

と思いながら見ていると、その正体である黒い塊がもの凄い勢いで走って来て、上がりかまちの寸前で急に全身でブレーキをかけて停止した。

「くっ、クリンさんっ！」

その黒マントのメイドさんは、全速力で突っ走って乱れたメイド服と黒マントを手早く整え、ずり落ちかけた眼鏡を直すと、その眼鏡のむこうの目を三角にし、俺と一緒にだったジャージ姿で髪の毛の白い女に向かって金切り声を上げた。

普段は絶対にそんな物言いしないような奴だったので、正直驚いた。

「て、テルミ、一体どうしたんだ!?!」

「あ、将仁さん、お帰りなさいませ」

俺が声をかけると、一瞬だけいつもの真田家メイドマスター・テルミに戻ったが、すぐに視線をクリンに向ける。

「あなたっ、誰にも断り無く勝手に将仁さんの学校に行くなんて、一体どういうつもりなんでしょうっ!?!」

「あう、それはあ、そのお」

「言い訳は結構でしょうっ!さっさと着替えて、仕事に就くのでしよっ!」

そう言うなり、テルミはクリンの襟首をむんずと掴んだ。

ける。

「それじゃそゆコトアルからちよと失礼するアル」

そして、一度こつちを見て口早にそっつい残すと、レイカと一緒にキッチンに消えていく。

「Master!」

それからまた入れ替わりに、今度はでかい胸を揺らしながら、金髪碧眼の丸眼鏡が顔を出した。

「ちよとMasterに用があるデース」

そして、彼女はなぜか俺の右にすつと入り込むと、なぜか俺の腕を自分の腕に絡めてくる。

むにゅ。

すると、当然彼女の胸が腕に当たる。なにしろでかいからな。

それに気付いているのかどうなのか。彼女、バレンシアは俺を見上げるとにつこりと笑う。

うーん、こいつの場合、天然なのか、計算してやってるのが判らないんだよな。この所作も何を意図しているのか考えてしまう。

「あぁーっ！バレンシアちゃんずるいつ！」

そしてそれに最初に反応したのが、ケイだった。すかさずバレンシアと俺の間に割り込むと引き離しかかる。

「貴様、不意打ちとは卑怯だぞ！」

そして、シデンがなぜか俺の反対側の腕を抱えて引き寄せる。って、お前がやってることも結局は同じじゃないのか。

そして、そこに居合わせているヒビキは、やれやれといった様子でそれを見ている。助けるつもりはないってことか。

「Hey、don't misunderstand(誤解するな)デース! Masterにbusiness(用事)があるのはMiss Tokiwaデース! ミーは、Masterをcallしにcomeしただけデース!」

「ならば腕を取る必要はあるまいが! 上官は馬鹿ではないのだからな!」

「必要はあるデース！Masterがbecome happy）
喜ぶ）デース！」

「お兄ちゃんんんんっ!？」

「いってえええええ！こらケイツねるんじゃねえっ！」

お前ら、俺をなんだと思ってるんだ。時々忘れそうになるが、俺はお前らの所有者じゃねえか、せめてもう少し丁寧な扱ってくれ。

「ほら、そのへんにしときな」

その時、その場を収めてくれたのは、さっきまで傍観していたヒビキだった。

「あゝあ、全く世話が焼けるねえ」

そついいながら、ヒビキはシデンの間に入って俺から彼女を引き離す。

「お前らが将仁の所有を主張してどうすんだよ」

かと思つと、今度は俺とバレンシアを引き離れた。ちよつと待て、そこは引き剥がさないでくれと言いたいが、ケイが見てる前じゃ言えない。

「ほれ、将仁。とつと行つてこい」

「え、あ、じゃ」

なんかよく判らないうちに送り出された俺は、ぼかんとしている。人に声をかける。

「Hey! Master! ミーとtogether）一緒にするデース！」

「待てえいつ！よく考えてみたら、貴様が上官に付き添う理由は無いではないか！」

「Hey, Miss シデン！ミーをrelease）離す）するデース！」

「お兄ちゃん行つちやだーっ！」

「こら、お前が行つたら収拾がつかないだろ」

「うえーんっ！」

確かに収拾がつかなくなりそうなので、後のことは二人に任せて俺

はれっせんと監工がるじやうじだ。

12・忘れていた学校行事 その17

「どういうことですか？」

俺は、向かいに座る常盤さんにそう聞き返していた。

「ですから、明日の午後は、学校を休んで欲しいのです」

常盤さんは、平然とそう答える。

なんでも、俺が西園寺の遺産を継承するにあたり、「本人」が役所役場に出頭してほしいそうだ。

それにしても、学校を休むか。

「何か、問題でも？確か、午後は授業は無いと聞いていますが」

返事が出来ないでいる俺が気になったのか、常盤さんが俺にそう聞いてくる。

「いや、授業じゃなくて、学園祭の準備があるんですよ。で、クラスの間から「サボリだ」とか言われそうで」

「あら、そうですか？学校のほうには許可を取ってあるので、問題ないと思ったのですけれど」

「………いつのまに」

「私は、1分1秒でも早くこの役目を終わらせ、西園寺の基盤を確固たるものにしたいです。今の私は、そのためだけに存在している、と言っても過言ではありません」

そして、常盤さんは俺の目をじっと見つめてくる。すごくマジな目だ。まあ、常盤さんもとをただせば西園寺の家に伝わる懐中時計、つまりその遺産に含まれるのであり、遺産の扱いは今後の自分の扱いにも繋がるわけだから、マジにもなるわな。

一方の俺は、それにNOと言えるだけの理由が無い。

「役所に行って、何するんですか？」

とりあえず、具体的に聞いてみることにする。

「まずは、遺産相続のための書類を、いくつか書いていただきます」とすると、常盤さんはまるで用意していたかのように流暢に説明をし

でした。

さすが、人間じゃないけど人間の法律に詳しい弁護士だ。俺はその話についていくので精一杯だ。こんなにめんどくさいんだったら、全部任せてしまいたいと思う。

だが、その中でも聞き捨てならない言葉があった。

「離縁、ですか!？」

そう。俺が西園寺を名乗るためには、真田の家を出なきゃならないらしいのだ。芸名ならともかく、2つの苗字を持つのはやっぱりNGらしい。そして、詳しいことは良く判らなかつたが、真田家の養子として生きてきた俺の場合、苗字を戻す場合は離縁扱いになるんだそう。

まあ離縁と言っても交流がなくなるわけではないし、実際にやるのは何ヶ月か先でもいいみたいなので、あまり気にすることはないと常盤さんは説明してくれた。

でも、6歳のころから今まで10年ちょっと親しんできた、真田という苗字と別れなければならぬことには、少し寂しさを感じた。そして同時に、妙なことも考えてしまった。

「結婚する女の人ってのは、こんな気持ちになるのかな」

なにしろ、苗字が変わるつてのもっとも一般的なのは、女の人嫁ぐ時もしくは離婚するときだと俺だっと思うもん。まあ男の場合も婿養子ってパターンがあるが、俺の場合はそのきっかけになるパートナーもいないし、それにそうなる西園寺って名がなくなるから常盤さんもうんと言わないと思うし。

そしてそこまで考えたとき、俺はその常盤さんが、意地悪な継母のように「子供はいつできるの」とかいう姿を想像してしまい、ちょっと苦笑してしまった。

12・忘れていた学校行事 その18

「お兄ちゃん、明日学校休むの?」

晩飯の席で、さつき常盤さんから持ちかけられた話をしたところ、真つ先にケイが反応した。

「ああ、休むと言っても午後だけだな」

「午後というと、がくえんさいとやらの準備があるのでなかったか?」

「だから、そのへんはちゃんと学校の許可は取ってるって」

「? 呀、でもワタシ、も一度来るしてくれと言われているアルけど」「行くぶんには問題ないんじゃないスカ? 今週の午後なら、確か身内だったら誰が行ってもおとがめなしなんですよ」

「んーでも、将仁サンいないのに行くのもちよとつまらなそアルな」箸の先端を咥えながら、紅娘が呟く。

「でもそうなりますとお、やっぱり、持って帰ったのはあ、正解でしたねえ」

「そういうわけだから、お兄ちゃん? 汚しちゃダメだよ?」

そっぴいなながら、学校ではお裁縫チームだったケイとクリンがこっちを見る。

「無茶言つな、着せたのはお前らだろ」

そう。実は今、俺は、曹操の格好で席についている。

今日は晩飯がちよつと遅くなったせいで、手持ち無沙汰になったお裁縫コンビに着させられてしまったのだ。そしてこれが、脱ぎ着が簡単にできないへんてこりんな服なので、メシ時になっても脱げなくて結局着たままにしているのだ。

重ね着しているので少々暑苦しいが、ある意味オーダーメイドなのでサイズ自体はそんなにきつくない。だが、袖が長い上に袖の下が大きいので、垂れ下がった袖の先にソースや汁物がつきそうなのが不便だといえれば不便だ。

食卓についた俺の格好を見て、レイカが、珍獣か何かを見るかのよ
うに俺を見ていたのが印象的だった。

「But、なーせMasterが曹操なのでースカー？曹操はー、
三国志ではVillain（敵役）デース」

「そりやお前、その時はくじ運が悪かったんだよ。俺は趙雲がよか
ったんだ」

そして、当然のことながら、飯の席ではその話になる。

「何を言う、曹操は最大勢力である魏の頂点ではないか。恥じるこ
とはあるまい」

「それに、本当の曹操は、政治家としても軍人としても劉備や孫権
より優れていた、と伝えられているでしょう」

「徹底した実力主義だたらしいアルな。昔の中国のヒトには嫌われ
るタイプアル」

「確かに、儒教の精神に反しているので、悪役にされた、という説
はありますね」

常盤さんの台詞に、ちよつと救われた気分になる。曹操ってただの
嫌われ者じゃなかったんだな。

「でも、お兄ちゃんが嫌われ者をやるなんてえ。なあんか陰謀の匂
いがするよう」

「将仁さんはあ、クラスの方々にい、目の仇にされていましたから
ねえ」

「やだねえ、もてない連中のひがみってやつかい？」

「そう言うなよ、俺だってちよつと前までは同じような立場だった
んだし」

「将仁くんは曹操をするには人がよすぎる。嫌われ者ならもっと凶
々しく振舞ったほうがいいのではないかしら」

「そんなことしたら、その後でさらに嫌われるのがオチっすよ」

鏡介、そういうことは明言しないのがせめてもの情けじゃないのか。
それにしても、俺が曹操をやるからだろうか、妙に魏に肩入れする
発言が目立つ。

それで、俺も曹操への考えをちょっとだけ改めることにした。

12・忘れていた学校行事 その19

「No, No, No. This placeにハ、ofが
inするデース」

「え、fromじゃないのか？」

「これハですネー、one of idiom(定形区のひとつ)
なのデース。Idiomにハ、out of grammar(文
法に当てはまらない)がmany many あるデースねー」
飯の後、俺は自分の部屋で机に向かっている。

そして俺の横には、あやしい日本語を操る金髪丸眼鏡の女、バレン
シアが立っている。

何をしているかといえば、学校の宿題だ。明日提出の英作文課題を
見てもらっているのだ。

最初は軽く添削してもらっただけのつもりで、普段の会話でも英語が
出てくるほど英語に通じているバレンシアに見せたのだが、そこで
予想外にひどい点数をつけられてしまったため、結局見てもらうこ
とになってしまった。

俺は確かに、英語はそんなに得意じゃないんだが、そこまでひどい
とは思わなかった。

「Masterがno problemなラ、ミーがteachi
ngするデースよ？」

ということ、ついお願いしてしまった。

が、実際に受けてみると、これがまあマジで落ち着かない。
なにしろ、相手はあのバレンシアだ。ちょっと目を横に動かすと、
男をとりこにする巨大メロンが目に入るのだ。

「Master, handがstopしているデースよ？」

「あ、わ、悪い」

「Hm. Master、ずーいぶんconcentration(集中力)がloseのようデースねー」

バレンシアが、微妙にあきれた顔でそんなことを言う。って、そんな目で俺を見るな。俺だって健全な若人だ、そーゆーことに関心ぐらい持つ。

「そうは言っても、お前」

「Ok, Master. Just a moment.」
すると、バレンシアはそう言って、なぜか俺の後ろに回った。

「な、なんだよ」

「Look forward!」

なんとなく目で追ったら、怒られてしまった。

しょうがないので、言われたとおり前を向く。しかし前を見るって言うても、教える奴がいなかったら意味が無いと思うんだが。

ふと、そこにちよつとした妄想が沸き起こった。

「Master, spellがwrongデース」

そんな声とともに、背中に何か柔らかいものが当たり、腕が回される。

横を見ると、その腕とその柔らかいものの主が俺を覗き込んでいた。

「Hey, look forward, long forward.

You the assignment (宿題) が can't finish hデスよー?」

そいつが、そんなことを言いながらいたずらっぽい目で俺を見る。

なんか俺、随分と妄想が得意になったなあ。

と思った直後。

ぎゅっ、といった感じで、俺の頭に何かが巻きつけられた。

「This is my new invention、名づけてアシタノカミカゼマツリデース!」

「なんだ?」

なんかちよつと重い。それが何か、確認しようとして首を少し上に向け、その瞬間だ。

「うっぎゃああああっ!」

頭から雷が落ちたみたいなの激痛が背筋を突き抜けた。

ほぼ同時に、体中の筋肉が硬直し、床やら机やらを思い切り蹴飛ばした俺の体が空中に跳ね上がる。

人間の筋肉は電気信号で動いているってのは本当なんだなーなんてなことを考えているうちに、自分の体が大の字になって床に投げ出される。

椅子ごとひっくり返ったので、背中やら膝の後ろやらがその角に当たって痛い。

だが、右手だけは妙に柔らかいクッションの上に投げ出され、全く痛くない。

「ふぎや!？」

それが何かはなんとなく想像できたのだが、やっぱり確認したいので首を横にちよつと動かしたら、再び背筋に電気が走る。

どうやら、俺の頭に巻いてあるもの(多分またバレンシアが作りやがったんだろう)は、俺が首を動かすと電気が流れるらしい。

「っ、おいつ、で、電源、切れっ」

動いた量がさつきより少なかったためか、それとも1発で慣れてしまったのか、さつきよりショックが小さくて飛び上がるようなことはなかったが、手足が痙攣して自分の意思とは関係なく動きやがる。そして、右手が本当に意思と関係なくその柔らかいクッションにめり込む。

「Ah、yes、yes、yes、ok、I know、I know! Power offする德斯、した德斯う!」

バレンシアのいつになく慌てた声がする。

Power off、つまり電源を落としたというので、ちよつと不安に思いながら首を横に動かすと、確かに衝撃は襲ってこなかった。しかし、目にはもつと衝撃的な光景が飛び込んできた。

さっきのショックで真っ直ぐに伸びた俺の右手が、なぜかバレンシアの襟元に完全に突っ込まれていたのだ。乗っただけかと思っただからこれには驚いた。

なんでそうなっているのか、自分でも良く判らない。が、とにかく

非常にまずいことなのは確かだ。

「うわああああっ、ご、ごめんっ！」

今までないぐらいの反応速度で俺は右手を引きぬき、起き上がるとまだ床に横たわっているバレンシアのほうを見る。

バレンシアは、無言で起き上がると、俺から目をそらし、うつむいたまま自分の胸元を整えている。まずい、もしかして怒っているのか？

「Hm m、It's failure デース」

だが、それに続いてバレンシアの口から聞こえたのは、ため息交じりのそんな言葉だった。

そして、しゃがみこんだまま顎に手を当て、ぶつぶつとなにやら咳き始める。

見ると、丸眼鏡にももの凄い勢いで字が打ち出されてもの凄い勢いで上へとスクロールしていつている。

やがて、ぴこーんっという軽妙な音がして、その眼鏡のレンズ部分にでっかい電球の絵が映し出された。なんかコミカルなマンガだとはよく見る光景だが、現実に見るとなんか変、というか冗談にしか見えない。

「I finished the analysis of the failure! Master! そのアスタノカミカゼマツリをミーンに return するデース！」

「なんだって？」

「Cause of failure (失敗の原因) が provide したデース、now から remodeling (改造) するデース！」

お前なあ、そういうのは人体実験する前にやれよ。

そんなことを思っていると、なぜかいきなり柔らかいものに突き飛ばされた。

「わ!？」

「Don't miss you!」

「げふっ!？」

ひっくり返った俺の腹の上に何やら重たい物が乗っかってきて、一瞬目の前が暗くなる。

バレンシアの奴、何しやがった!？」

と思いつつ、何が腹に乗ったのか確認するために自分の腹のほうを見る。

「Fu, fu, fu, fu. 逃がさナイデースよー」

思わず目が点になり、何も考えられなくなってしまふ。

やがてシナプスが繋がりとすと、それがすさまじくヤバイものだと自分のCPUが判断してくる。

なにしろ、さつき俺をひっくり返したバレンシアが、いつのまにか俺にマウントポジションを仕掛けていたからだ。

太ももとお尻の柔らかい感触が伝わってくるうつつ、って思ってもいいかもしれない。スカートの方が短いからパンツが見えるうつつ、と思ってもいいかもしれない。いや、健全な男子なら、バレンシアにこんなことをされたら、みんなそう思うだろう。

だが、バレンシアの目を見たら、そんなのは吹っ飛んでしまった。

「Fu, fu, fu, fu, fu, fu, program rewritingするダケデース、hate(痛い)なコトはnothingデース」

目、というか、正確にはメガネだ。反射するような光はどこにもないのに、その丸眼鏡の向こうが真っ白になって見えないのだ。それどころかその眼鏡自身が光っているようにさえ見える。

しかも、両手をわきわきさせながら、不気味な笑顔で俺を見下ろしている。なんというか、マッドなサイエンティストが、今からマッドな実験を始めようとしている姿のようだ。

だが、表情は怖い、それ以外はとつても素敵な光景だ。だって、金髪で色白で巨乳な美人が自分の腹の上にまたがっているんだぞ、相当に無知な奴じゃなけりや妄想しまくるぞ。

ええい、こうなりや。やられっぱなしなのも腹が立つし、なんか違

うところも立ってきたし、体格はこっちのほうが勝っているんだから押し倒してやるっ！

と思ったときだ。

いきなり部屋のドアが開いて。

「おにいちゃん。飲み物持ってきた……」

お盆にグラスを載せて、とびっきりの笑顔を見せるケイが、非常にまずいタイミングで姿を現した。

そして、場の空気が凍りつく。

「……お〜に〜い〜ちゃんんんんっ!？」

その沈黙を破ったのは、トレイを持ちながら迫ってくるケイのそんな声だった。

顔は笑っている。だが、目が笑ってない。それどころか、その目が赤く光って、髪の毛がざわざわと逆立っているのだ。

「バレンシアちゃんとお、な〜にしてるのかなあ？」

「いや、な〜ってこれぶわ!？」

言い訳しようと思った瞬間。冷たいものが顔に落ちてきた。

ケイが、仰向けのままの俺の目の前で、持ってきたグラスをひっくり返して中に入った液体を俺の顔にぶっかけたのだ。

「ぶわっ、ぶあっ、な、いてっ」

液体だけ（麦茶か）にかだったらしい）ならまだいいのだが、こともあるうにそのグラスの中にはロックアイスが目いっぱい入っており、それがばらばらと俺の顔に落ちてくる。いくら角が融けて多少丸くなったとはいえ、ピンポン玉ぐらいの氷の塊が墮ちてくるのだ。当たり前に痛い。

「こら、やめっ」

麦茶も氷も落ちきったところで、改めてケイに止めさせようとした、その時。

さらにシャレにならないものが、目の前に迫っていた。さっきまでその液体とグラスが入っていたグラスだ。

さっきの氷と麦茶はフェイントだったので、と思うほどのタイミ

ングで落ちてきやがったため、よけられなかった。

ごん。鈍い音と共に、額に鈍痛が走り、目の前に一瞬星が散った。と、これだけならまだマシだったのだが。

バチツ。不吉な音が、その額から聞こえた、その直後。

「うぎゃああああああああああああっ！」

スイッチを切ったはずのソレから、凄まじい衝撃が俺の全身を駆け巡りやがったのだ。

「My g o o o o o o o o o o o o o o o o o o d ! ? 」

「きゃああああああああああああ！？」

まわりでケイやバレンシアが悲鳴をあげるが、それに構っている余裕はなかった。

なにしろ、さつきはほんの短時間で切れていた電流が、途切れないのだ。しかも水を被ってしまったものだから、その電流もダダ漏れだ。

「ぎゃああああああああああああ！」

俺は、まわりの状況を見る余裕もなく、ワケもわからずにのた打ち回った。

それからどれぐらい暴れていたのか。気が付くと俺は何人もの手で押さえつけられていた。

そして、電流が途切れていることが自分ではつきり感じられた直後、俺の意識はすーっと遠くなっていた。

12・忘れていた学校行事 その20

「うっわ、ほんまえげつないことしてはるなあ」

その光景を、家の外から見ている影があった。

その数は5つ。それぞれが、家の中の住人と比べても劣らないほどに目立つ格好をしており、そして普通では人が容易には居られない場所にいる。

不思議なことに、彼らがいる位置からでは中の光景は見えないはずなのに、まるで中の様子が見えているかのように会話が続いている。「うち、ちいとばかし気の毒になってきたわ」

その中の一人、窓の下にわずかに飛び出した屋根の上に座り込んだ、染めたように黄色い髪の人物が口を開く。中国の道士が着るようなだぶだぶの黄色い服を身につけ、前に円錐状の角が生えた緑色の四角い帽子を被り、親指ほどの太さの琥珀色の丸棒を抱えている。

「主に対する忠誠心の欠片も無く、それどころか時に害をなす、か御せぬ主にも問題があるようだ」

こう答えたのは、人が乗ったらそれだけで折れてしまいそうな庭木の枝の上に平然として立つ人影だった。その体は、古代中国の武将を思わせる青緑色の甲冑で覆われ、目元あたりを隠す同じ色の仮面には、左右端の生え際あたりに角のような飾りが生えている。

「ってことはさ、りゅーじゅ。おれたちにつごうがいつてことじやないか？あつちはなかがわるいんだろ？」

そこに、2階の屋根の上から上体を乗り出した人影が言葉を続ける。黒い髪はいかにもやんちゃそうに乱れ、乗り出した上半身に細く黒い帯を何度も巻きつけたその背中には、海亀のそれを思わせる大きな甲羅が背負われ、そして屋根の端からぶら下げた手には先端が銀色に輝く槍のような物を持っている。

「そう決め付けるのは、早計ですわね、玄水」

それに辛らつな口調で答えたのは、塀の上に立つ人影だった。一見

すると、炎をあしらった金色の模様がきらきらと輝く振袖を着崩した妙齡の女性だが、その髪は染めたように赤く、そしてそれが複雑に束ねられたり絡み合ったりして、真つ赤な冠のようにも見える。

「なんだい、炎雀。揚げ足でも取るうってのか？」

声をかけてきたのは、電柱のてっぺんに猫のように座りこんでいる、銀色というより研いだ刃物のような色をした髪をヤマアラシのように逆立てた人影だった。筋肉質だが女性的なラインを併せ持つ体にはさらしを巻いて法被を羽織り、その上から金属的光沢を放つ縄のようなものでたすきがけをしている。

「全く、品のない外野は黙っていてくださらない？」

「なんだとお？」

「あら、聞こえませんでしたの、虎鉄さん？あなた、お耳が遠いようですわね」

「へん、どこに耳があるかわかんねえような奴に言われたかねえや」

「あらあら、今度は目まで悪くなりましたの？」

すると、虎鉄と炎雀が恒例の言い争いをはじめた。

「またやってら。よくあきないな」

それを、屋根の上に寝そべりながら、玄水が呆れたように眺めている。

「いいや、それはちゃうで、玄水。古来より、ケンカするほど仲がええつちゆうやる。炎雀はんも虎鉄はんもあやって親交を深めてんねんで」

「いいかげんなこと言うんじゃねえ！こんな鳥目鳥頭な奴と親交なんざ深めたくねえや！」

「なんでこの私が、こあんな品位の欠片も無い山猫と仲良くしなければならないんですの！？」

だが、麟土の言葉には同時に反応し同時に麟土のほうを見て、そして同時に再び互いに向き合つと言い争いを続行する。

「ほれ見い、息ぴったりやる？」

「くはははっ、確かに愉快的な見ものじゃのう」

「貴様もそうやってはやし立てるな。だいたい、我等が何のためにここに集っていると思っている」

「うん？何をしにじゃ？」

「それは無論、敵情視察である」

「ほう、それで何か判ったのかの？」

「それがなかなか・・・って、何ッ!？」

そこまで言った龍樹が、我に返ってその声の主を見る。

そしてそこに至って、彼らははじめ、そこに自分たちと別の存在が混じっているのに気付いた。

それは、年のころ5歳ぐらいの、雪のように白い髪の少女だった。身につけているのは、その小さい体に合ったサイズの巫女服のような服。だがその頭には狐を思わせる尖った耳が飛び出しており、腰の辺りにはやはり雪のように真っ白な一房の大きな尾がひよこひよこ動いている。

「なにやら騒がしいと思うて見に来たら、面白い連中が集会をしておる喃」

その狐耳の少女は、腰に手を当てながら、少しつりあがった目あたりをぐるりと見回し、そう言い放つ。

それに最初に反応したのは、電柱の上にはいた虎鉄だった。

突然そこから飛び上がると、高さもさることながら結構距離も離れていたその少女の前に、ひとつとびで降り立ったのだ。

「おい、チビスケ。おめえ、どっから出てきた？」

そして立ち上がると、自分の膝丈もない狐耳の娘を見下ろす。

「ふん、人の住まいをこそこそ嗅ぎまわっておる輩に言われたくない喃」

狐耳の少女は、虎鉄を全く恐れる様子も無く見上げる。

「おまえ、もしかして、このいえにすんでいるってうわさの、きつねか？」

次に声をかけてきたのは、自分の周囲に霧をただよわせた、屋根の上にはいたはずの甲羅を背負った少年、玄水だった。こちらは、組ん

だ腕に穂先を天に向けた槍をかかえこみ、そこにしゃがみこんで目の高さを少女と同じにしている。

「ほほう、わらわもなかなか有名になったもんじゃ。いかにもわらわは気孤の魅尾。この家に住んでおる」

「その白い毛並み、やはりそうでしたの」

名乗りをあげた魅尾の横に、着物の裾にオレンジ色の火をまとわせた炎雀が、その火に乗ったようにふわりと降り立つ。

「以前お見かけしたときは狐色でしたので、てっきりただの狐かと思っていましたわ」

「なるほど、我が主の呪が破られたのは、貴様の所為か」

その炎雀の横に、青緑色の甲冑に身を包んだ龍樹が蔓につかまってするすると降りてくる。

「まあ、うちの存在に気付くつちゅうだけでも驚きやけどな」

最後に、何も無い庭の地面からせり出すように、黄色い服を着て琥珀色の杖を手にした麟土が姿を現す。

「ほんまやったら、うちの会話はうちら以外には聞こえんはずやし、存在にも気付かへんのに」

そう言いながら、少し目つきを鋭くさせ、手にした杖の先を地面に触れさせる。

「なんじゃ、御主。黄麟のくせに血の気が多いのう」

「な!？」

だが、魅尾のその一言に、麟土は明らかに動揺した。

いや、動揺したのは麟土だけではなかった。龍樹は腕に電光を走らせて腰に下げた剣に手をやり、炎雀は自分の前にかざした両手の中に激しく渦を巻く火の玉を作り出す。

いわば、戦闘体制だ。

「ほほう。御主ら、こんなたいけな幼子にそんな乱暴な態度を取るのかえ？」

だが、その視線の先にいる幼女、魅尾は、動じることもなくそう言い放った。

「そーだぜ、こいつどうみたってガキンチョじゃねーか」
そこに、そこでは2番目に幼く見える玄水が助け舟を出す。

「少しは考えろ、玄水。ただの幼子が我らの正体に気付くと思うのか？」

「そうですね。そもそも狐は人をだますもの、しかも同じだますにしても、狸よりもたちが悪いといえますわ」

「案外、その姿も、うちらを油断させるためなんとちゃうんか？」

だが、炎雀と龍樹、そして麟土は警戒を解かない。

「確かに、チビだと思ってなめてかかっていたいい奴じゃあねえみてえだなあ」

そして、比較的中立だった虎鉄までが、両手の指を伸ばし、鋭利な刃物に変えて魅尾を見下ろす。

自分たちの正体がばれることに警戒を見せているのだ。

「やれやれ、青龍、朱雀、白虎まで敵愾心丸出し、友好的なのは玄武だけとはいう。五獣も変わったものじゃ」

一方の魅尾は、他人事のようにその状況を見ている。

「しかし、御主ら。こんなところで時間を潰しておってよいのか？」

「あん？」

そして、魅尾のことばに虎鉄がガラ悪く聞き返した、その時だ。

「おい、魅尾見なかったか？」

「え？いないの？」

家の中から、男女の声でそんなやりとりが聞こえてきた。

「ここはわらわが住まう屋敷の庭じゃぞ。こんなぶりちーですーいーとなわらわが姿を見せぬとあつては、遅かれ早かれ住人が騒ぎ出すのは当然じゃ」

その言葉に、4人の間に動揺が走る。

「ぶりちーですーいーとつて、なんだ？」

一人、玄水だけは事の重要さが分かっているのか、そんな焦点の外れたことを口にする。

「このおバカ！そんなことを気にしている場合ではありませんわっ

「！」
炎雀がヒステリックな声を上げる。

「さてと、どうする？相手してやっても良いが、今日のお主らは敵情視察が主な役目なのである。式神としては、戻らねば役目を果たせぬのではないか？」

魅尾がそう言う間にも、家の中から聞こえる声は徐々に多くなってくる。

「くっ！」

龍樹が忌々しげに舌打ちをし、腰の剣から手を離す。

「引き上げるぞっ！」

鋭い口調でそう言い捨て、自分の裏にある樹を見上げると、地面を蹴ってその枝ぶりの中へ勢い良く飛び込んでいった。そして、そのまま見えなくなる。

「ふん、今日のところは出直しですわっ！」

炎雀は両手を大きく広げながら忌々しげに言い捨てる。その直後、全身が炎に包まれ、それが見る間に手のひらほどに小さくなると、ロケット花火のように天へと消えていった。

「ほら、行けぜ」

「うわっ、てめえ、いてえっ！」

虎鉄が、横にいた玄水の首根っこを掴み、そして地面を蹴って飛び上がった。そのまま、さつき立っていた電柱の上に着地すると、すぐに別の場所へと飛び移り、やがて姿が見えなくなる。

「なかなか、やるやないの」

最後に残った麟士は、魅尾を見てにやりと笑う。

「今日のところは、あんさんの顔を立って、おとなしゅう引き下がりますわ」

「なに？」

「ほな、さいなら」

そして、小さく手を振りながら、その場に現れた時は逆に、足から地面の中へと沈んでいった。

そして、一陣の風が吹きぬけた、その時。

「ふう、少々緊張してしもうたわ」

魅尾が、気が抜けたように大きく息を吐いた。

間を置かず、庭に面した部屋の大きなガラス窓が開き、一人の青年が顔を出した。

「あれ、そんなところで何やってんだい、魅尾」

その青年が魅尾に声をかける。

「ん、鏡介か」

「鏡介か、じゃなくて。もう雨戸閉めるよ」

「むう、少しぐらい待て」

すると、魅尾はてけてけと将仁のところへ走っていき、鏡介の横から家の中にあがりこむ。

「あつ、こらお前土足っ！」

「気付かぬほうが悪いのじゃ〜っ！」

だが気付いたときには既に遅く、白い毛玉が通った後には足跡がうつすらと残っていた。魅尾は、裸足だったのだ。

「よっ、と」

しかし、逃げおおせるものではなかった。

リビングから廊下にでようとしたところで、魅尾は襟首をつかまれ、そのまま持ち上げられてしまったのだ。

魅尾を捕まえたのは、ヒビキだった。

「わ、こら、離さぬかつ！わらわは犬や猫ではな〜いっ！」

さすがに逃げられない魅尾だが、手足やしっぽをじたばたさせて抵抗する。

「おい、捕まえたぜ」

「ありがとうございます。もう、悪い子でしょうっ」

そこに、まるで打ち合わせたかのようにテルミが手に雑巾を持って現れ、魅尾の足の裏をこしこしと拭く。

なんとなくほのぼのした空気に、鏡介の口元にも笑みが浮かんでいた。

12・忘れていた学校行事 その20（後書き）

どうも、作者です。

今回で第12章は終わりです。

というわけで、次の話ができるまでしばらくお休みします。

ちなみに、次はモノたちのバイオレンスな一面が見られる話にするつもりです。

頑張ってください。

13・ついに実力行使 その1

9月26日

今朝は、気がついたらベッドの中だった。どうやら、俺はまだ生きて
いるらしい。

あんな電気ショックを、しかも頭に受けていても翌日には普通に目
が覚める自身の生命力に、我ながら感心する。さすがにまだ少し痛
いことは痛い。

頭に手をやる。あの珍妙な名前の電気が流れる八チマキは巻かれて
いない。ちよつとほつとする。

ほつとしたところで、体を起こしベッドから静かに出る。はて、な
んか妙に外が暗いな。雨が降っているわけではないみたいだが、も
しかしたらこれから降るのかね？

「ぐうぐう、ひゅう」

珍しいことに、鏡介のやつがまだぐーすかといびきをかきながら寝
ていた。最近は大抵俺より先に起きているのだが、おかげで今日は
俺がいつもどんな寝顔でいるのかが確認できた。

でつけえ口開けて寝てんだな、俺って。なんてなことを考えながら、
ふと壁にかけられた時計を見る。

「5時い!？」

思わずそんなことを言ってしまふ。いつもだったらあと2時間は寝
ているはずの時間に目が覚めてしまったのだ。まだ太陽も出てない
だろうから暗いのは当たり前だ。

やっぱり、昨日、いつもよりかなり早く寝入ってしまったからだろ
うか。寝入るのと気を失うのとは違うような気もするが、こんな時
間じゃ鏡介どころかこの家で一番の早起きらしいレイカでも多分寝
ているだろう。別に確かめるつもりはないけど。

とりあえず、自分が生きていること、体のほうにもおかしいところ
が無さそうなのでいいとしとじう。

というわけで二度寝としゃれ込もう、と思ったが、ちょっともお
したので、トイレに行くことにした。
廊下に出ると、ヒビキのイビキという轟音が例のごとく廊下に響き
渡っている。

こんなのが廊下中に鳴り響いていたら多少別の物音を立てても判ら
ないような気もするが、まあ気分の問題で、廊下の突き当たりにあ
るトイレへなるべく静かに向かう。

トイレのドアからはなぜか明かりが漏れていた。誰か使って点けっ
ばなしなのか？

と思っていたら、じゃーっという音がした。ってことは誰か使って
いたのか。2階に寝てるのといえば俺と鏡介、それからヒビキとシ
デン、ケイ、バレンシア、それから常盤さんか。鏡介はさつき寝て
たし、ヒビキもこのイビキから除外、といってもまだ4人いるか、
誰だろう。

「Master!？」

そんなことを考えていると、ドアが開いて、まだちょっと眠そうな
金髪メガネが現れた。

「Are you all right? What are yo
u doing?」

「Whatって、トイレに来てすることなんて限られているだろ」

「Hm、それもソーデスねえ」

なんかその雰囲気にくわえないのんびりしたやりとりがされる。

そしてなんとなく下のほうに目をやる。初めて見る、半分輪切りに
なったオレンジ色の柑橘類の絵が白地に散りばめられた、パジャマ
を着ている。

うちのモノたちが人の姿で眠っているのは、この家に引越す前に
ちよつとだけ見たことがあるが、あの時は鏡介以外みんないつもの
あの格好で寝ていた。だから、俺はてつきり、姿を変えられる鏡介
と、最初から何も着ていなかったクリン以外はいつもの格好以外は
できないもんだと思っていたが、そうでもないみたいだ。

まあ元がモノだとはいえ今は女の子だから、いつもと違う服装がしたくなるのも当たり前か、と思ったところで、俺はあることに気がついてしまい、あわてて目をそむけてしまった。

バレンシアといえは我が家で一番の巨乳であり、そのサイズときたらどんな服を着てもその存在をアピールしまくるほどだ。そして今、その頂点に小さく突き出しているモノが、トイレの照明で影を作っていたからだ。まさか、バレンシアの奴、ノーブラなのか!?

「Master, really really にall rig
htデース?」

やっぱりその行動は不審だったらしいが、違う意味に取られたらしい。困ったような目で俺を覗き込むと、ずいっと俺に近づいてくる。つておい、ちよつと待て、バレンシア。胸を、存在感たっぷりなその胸を、押し付けるな、俺の胸に、押し付けるなっ、お前、ノーブラなんだろうっ! 実は朝立ち中で股間がすでに結構ヤバかったのが、本格的にヤバくなってしまっただろうがっ!

「お、おいっ」

頭のほうは完全に覚醒しているが、口のほうがうまく回らない。

「Master, your heartのpulseがintenseデスねー、早めにtake restするがgoodデースよ
l。Good night」

そんな俺の精神状態を知ってか知らずか。バレンシアは俺からぱつと離れてそっぴい残すと、そのまま自分の寝室へと消えていっちまいやがった。

「・・・なんだよ、おい」

そして後には、頭と下半身に血が集まった状態で、俺一人が取り残されてしまった。

13・ついに実力行使 その1（後書き）

この作品を読んだことのある方、お久しぶりです。
はじめて読む方、はじめまして。
作者です。

ずいぶんとブランクが開いてしまいましたが、第13話、ようやくお届けする運びとなりました。

今回は、活躍しないモノたちは本当に出番が少ない話になっていきます。
なるべく全員を均等に出したいなあとは思っているのですがなかなか難しいもので。
まあとにかく、しばらくの間、主人公・将仁氏の悪戦苦闘っぷりを
ご堪能ください。

13・ついに実力行使 その2

「ふわあゝあゝ」

自分の席についた俺の口から、大きなあくびが吐き出された。

あの後、なんとか用を足してベッドに戻ったはいいが、目が冴えてしまい結局は全然眠れなかった。

そして、飯を食って制服に着替え、通学してここまで来た今頃になつて、睡魔が鎌首をもたげてきたのだ。

「どうしたマサ、眠そうだな」

「深夜番組でも見てたんじゃねえの？」

「見てねえよ……」

自分でも判るぐらい返事に覇気が無い。

とはいえ、何があつたかは聞かれても答えられない。答えられるわけがない。本当のことを言ったら確実にクラス中の男子からフルボッコにされる。

ぶるるるるるっ。

話しかけてくる奴らを軽くあしらつて、机に突っ伏そうかと思ったその時、ポケットの中で携帯が震えた。

「あい」

「うあ、お兄ちゃん、大丈夫う？」

半分寝ぼけ眼で携帯を出して開いて耳に当てると、そのむこうからケイの心配そうな声が聞こえてきた。

「具合悪いんだったら、お休みしたほうがよかつたんじゃない？」

「ただ眠いだけだよ、心配いらなくて」

なんか、ケイのそんな声を聞いていると休んでもいいような気もしてくるが、それも今更な話だ。授業をふけて保健室のベッドで寝るつても定番中の定番だが、なんかそこまで行くのもかつたるい。

まあ、今日は移動教室はないし、午後は帰るんだから、授業中はちよつと寝かせてもらおう。

「真田はん？」

そんな時、俺は不意に声をかけられた。顔を上げると、いつのまに登校してきたのか、賀茂さんがこっちをのぞいていた。

「ああ、おはよう」

「がっこまで来て、おねむどすか？」

「ちよつとワケあつて眠れなかつたんだよ」

いつもなら嬉しい賀茂さんとの会話も、今日ばかりはめんどくさく感じてしまう。

だから、賀茂さんが、いつもとちよつと違う目でじつと俺を見ているのに気がついたのは、そう返事した後だった。

なんというか、俺の奥底を見通そうとでもしているかのような、深い目をしているような気がした。

「真田はん？」

「う、な、なんだ」

だから、改めて声をかけられた時、俺は次のことばを聞くまで、寝入ることができなかつた。

「今日の真田はん、凶相がでてますえ？」

「・・・・・・・・・・は？」

「災難に遭わはる相どす。色々、注意したほうがよろしおすな」

「ふうん、災難ねえ・・・・・・・・・・」

普通なら聞き流しているところだが、虫の知らせとでもいうんだろつか、なんとなくちゃんと聞いてしまう。まあ、死相が出てるのかじゃないからいいか。

「へえ、賀茂さんつて、そんなことまでできるんだ？」

「じゃあさじゃあさ、あたしの今日の恋愛運とか見てくんない？」

だが、その忠告に礼を言おうかと思つた時に、他のクラスメイト、特に占いとかが大好きな女子が、その話をきっかけに賀茂さんに話しかけてきて、何やら占い談義が始まつてしまった。

なんで賀茂さんはそんなことが判るのかとか、聞きたいことは色々

あった。だが、こうなってしまった以上、俺は話しかけるすべを持たない。

そう思った瞬間、自分の中の睡魔が抑え切れなくなり、俺の意識は一気に奈落の底へと沈んでしまったのだった。

13・ついに実力行使 その3

きーんこーんかーんこーん。

昼休みになると、今まで眠そうにしていた連中が一斉に動き出す。ついでに俺も動き出す。と言っても俺の場合は昼飯を食うためではない。

うちに帰るためだ。と言っても、すぐに常盤さんといっしょに役場へいくんだが。

ちなみに、役所に行つてやることを正直に言ったところ、先生はぱあつと表情を明るくして、「早く行つてきなさい！」と俺の背中を押したくらいだった。

「おいマサ、帰るならかわりに誰か呼んでくれよ」

「お前ら、うちのを出張へ 又かなにかと勘違いしてんだろ」

「いいじゃんか、ちゃんと相手するから」

「お前らに任せられるか、アホ」

帰る支度をする俺に、クラスの連中が声をかけてくる。

まあ、男連中はほとんどがただのにぎやかしだから、言うことは無視してもいい。

無視できないのは。

「ねえ真田君。紅娘さんは、今日は来てくれないのかしら？」

という委員長の言葉だ。

なんでも、紅娘のやつ、昨日、中国菓子のサンプルをあんなに色々作つていったくせに、そのレシ皮的なものを一切残していかなかったらしいのだ。

クラス委員長として出し物を成功させるには、この中国菓子が必要不可欠だ、と力説してくる委員長の姿は、ちょっと引いてしまつぐらいに迫力がある。

だが、そうは言っても今日は、ケイ以外誰も連れてきていないし、来いとも言っていないから、来てもらうには今から呼ぶしかない。

まあ、来いといえは多分大喜びで来るんだろうが、外出とかしていたら連絡がつかないから呼ぶこともできない。

「悪い、あいつ、携帯とか持ってないんだ」

「あ………そうなの？」

「ああ、えーと、あいつ、中国から来てそんなに経っていないからさ」

「そう………」

すると、委員長は見て判るほどにしょんぼりしてしまった。

それなのでつい、紅娘の都合も聞かず、明日は来てもらうよ、と言ってしまったのだった。

13・ついに実力行使 その4

後ろ髪を引かれつつ、昇降口へと向かっている。

「真田将仁ーッ！」

突然、女の声で名前を呼ばれた。

何事だ？と振り向いたとき。

「あでっ!？」

俺の顔に、何かが飛んできてぶち当たった。結構いてえ。

「なんだなんだ？」

振り向いて、床に落ちた俺の頭にぶち当たったものを見る。

そこに落ちていたのは、半分ほど開いた扇子だった。

誰だ、こんなところでこんなイタズラする奴は。って、うちの学校で扇子持ち歩いている奴なんてあいつしかいないか。

「何処へ行くこうというのかしら、真田さん」

顔を上げると案の定。まわりに取り巻きを引き連れた金髪縦ロールが、ふふんといった感じで立っていた。手にはいつもどおり扇子を持っている。どうやらいくつも予備を持っているらしい。

横をちらつと見ると、ちよつと離れたところに、腕組みして壁にもたれかかる迅がいる。相変わらず付き合わされているらしい。

「お前、いきなり人のツラに扇子ぶつけるたあどついう了見だ!？」

「ふふん、振り向くから顔に当たるのですわ」

「そんなの、名前呼ばれりゃ振り向くに決まってるだろ!」

「あら、貴方にもその程度の常識はおありでしたのね」

「それを言ったら、いきなり人に扇子投げつけるてめえのセンスのほうが非常識だろうが」

認めたくないが、なんかそろそろ定番化しつつある口論を、つい繰り広げてしまう。

「だいたいお前、そんなにヒマしてていいのかよ?」

「それは貴方も同じでしょう。この大事な時にどこへ行くこうという

んですの!？」

「それは俺のプライベートなことたるーが！」

「はん、プライベート？そんなものあなたに許されるわけがないでしょう！」

「なんでだよ！」

「当然でしょう、あなたは将来、私の元に仕えるのですからね！」

「勝手に決めんじゃねえ！お前が俺に仕えるんだったら考えなくもねえがな！」

俺、なんでこんなことをしているんだろう。常盤さんはもと時計だけに時間につるさいから、早イトコ帰りたいんだが。

ちやーちやーちやららら、ちやつちやちやー。

ポケットで携帯電話が鳴る。このコール音はケイからだ。いつもだつたらちよつと邪魔くさいときもあるんだが今日は非常にありがたい。

やかましく噛み付いてくるクローディアを無視して携帯電話を取り出す。

「はい、もしもし」

「んもう、お兄ちゃん？早く帰ろうよお。お兄ちゃん、早く帰らないと、常盤さんに怒られちゃうよ？」

「俺だつて帰りたいよ、でも因縁つけてくる奴がいるんだもんよ」

「えー、そんなのほつとけばいいじゃーん」

「俺だつてそうしたいけど、あいつしつこいんだもん」

「ちよつと、しつこいってどういふことですか？」

すると今度はクローディアが口を出してきた。

「わつてお前、人が電話してる時に首突っ込んでくんなよっ」

「あ、あなたこそ、この私が話している時に、どこの馬の骨とも知れない輩との話を優先させるなんてっ！」

うーん、怒らせてしまった。まあこいつだつたら当然だろうが。なんてのん気に思ってたら。

何を考えたのか、クローディアは携帯電話に向けて手を伸ばしてき

ただ。

「うわっ!?!」

普通の電話ならともかく、この携帯電話は渡すわけにはいかない。なぜってそりゃケイ本人だからだ。

「寄越しなさいっ!電話なんかっ、おやめなさいっ!」

「ちょ、何すんだっ」

よっぼど気に食わないのか、クローディアは懸命になってその携帯に手を伸ばす。

そうになると、自然に体と体が触れ合ってしまう。さすがハーフ、なかなかに悩ましい体をしている。というのは半分本気だが、じっくり堪能してはられない。だってケイの前でそんなことをしたら後でスケコマシだ何だと言われるのは目に見えているし、他の連中の目もある。

ちなみに、そのケイといえば。また振り回されて「気持ち悪い」と言ってる。

「私の言うことを、聞きなさいッ!」

「でえいつ、やめねえかっ!」

「きゃっ!?!」

その次の瞬間、俺が吹っ飛んでいた。そのまま後ろの壁に背中をたたかにつつけ、目の前が一瞬真っ白になる。

視界に色がついたとき、そこに見えたのは、微妙に混乱した表情で迅に抱えられたクローディアの姿だった。どうやら俺は、クローディアを振り払おうとした瞬間に、迅に吹っ飛ばされたらしい。

「じ、迅!?!あなた、私のボディガードなのでしょっ!?!?どうしてもっと早く助けに入らないんですのっ!?!?」

我に返ったクローディアは、すっくと立ち上がるや、今度は自分をさっきまで支えていた迅に矛先を向けた。

「真田があんたを傷つけようとしているようには見えなかった!」

迅は、それに律儀に答えている。その答えが気に入らなかつたらしく、クローディアが迅にぎゃんぎゃんと説教をする。まったく、律

儀に答えても適当に答えても怒鳴られるたあ災難だなと思う。
だが、おかげでお嬢様の注意は迅に向かっている。今なら、お嬢様
につつかかれる事無く、この場を去ることができそうだ。
そう判断した俺は、心の中で迅に感謝しつつ素早く鞆を拾い上げる
と、そのまま昇降口へとダッシュした。
後ろでクローディアの取り巻きらが声をあげるが、その時には俺は
下の階への階段を飛び降りていた。

13・ついに実力行使 その5

今、俺は、帰り道となっている国道沿いを歩いている。このへんは大きな店とかがないので、車道は車がビュンビュン走っているのに、歩道にはあまり人がいない。

「今日はとってもいい天気」

その俺の前を、何が楽しいのか人間形態になったケイがスキップしながら歩いている。

確かに、秋晴れと言ってもいいぐらいにいい天気だ。まあ浮かれている理由は他にもあるんだろうが、ケイがそうやっている姿を見ると、なんとなくほんわかした気分になる。

それだけなら文句はないんだが、ケイだけと一緒にいると、数日前にフルボッコにされたことを思い出してちょっとブルーになってしまう。しかし、ああも楽しそうにされていると止めるとも言えない。俺って、甘いのかなあ。

「おい、ケイ」

「なあに、お兄ちゃん？」

何の気なしにケイに声をかけると、ケイはぴたつと足を止めてたまたたと駆け寄ってくる。

最初はわざとやっているんじゃないかと思っていたこのかわいい（と俺は思う）仕草だが、最近、どうやらケイはこれが素らしいと判ってきた。さすがは妹機能つき携帯電話。

もしこれをシンイチの前でシンイチに向けてやったら、妹萌えのあいつのことだから、鼻血だして悶絶するんじゃないかなろうか。そしてそれを見た委員長がおもいきりむくれる、そんな光景までが一連で脳裏に浮かんでくる。

「どしたの？」

そんなことを考えていると、不思議そうな顔をしたケイが、小首をかしげて俺の顔を覗き込む。

「いや、他の人にぶつかんないように注意するんだぞ」

「あ……」

すると、さっきまであんなに楽しそうだったケイの表情が一瞬にしてくもり、声のトーンまでおちこんでしまった。多分、俺が軽くブールになる原因になったアレを思い出したんだろう。

そんなしゅんとされると、なんか凄く悪いことをしたみたいで罪悪感にさいなまれる。

「ごめん。そんなつもりで言ったんじゃないんだ」

「えう、でもお」

「心配すんなつて。あんときも一晩寝りや治つてただろ？」

「だけとだけとお、あれはケイのせいであ」

「だから、注意すれば大丈夫だつて。な？今はあんまり人がいないし」

そんな感じで、今度はケイをなだめなければいけないことになった。だから、俺の近くに怪しいワゴン車が近づいてきていたことにも気が付けなかった。

ふと、俺のすぐ後ろで、車がブレーキをかけるような音がした。信号どころか交差点も、コンビ二すらも無いところだったので、何で停まったんだろうと思ひ、そっちに目を向ける。

すると、すぐそばと言つてもいいぐらいすぐ近くに、型は新しそうだがこれと言つて何の変哲もない平凡な白いワゴン車が停まっていた。

別に気にするほどでもないかな、と思つて視線を外そうとした時だ。がちゃ。

そのワゴン車からそんな音がして、スライド式のドアが開き、そして人が一斉に降りてきた。

それだけならなんでもないし驚きもしないんだが、なぜかそいつらは降りてくるや一斉にこっちに向かつてきたのだ。

しかも、単にこっちに来るだけではなく、その視線が向いている先

は明らかに俺なのだ。

そしてその時になって初めて、そいつらがこの前俺に喧嘩を吹っかけてきて、さらにその数日前にシデンと紅娘を口説いて逆にボコられていた連中だと気がついた。

「持ってる！」

「きゃ！？」

カバンをとっさにケイに投げ渡すと、とっさにファイティングポーズに移行する。

「おらあ！」

先頭を切って駆け寄ってきた奴が、手に持った何かを突き出してくる。すかさず上体をひねってそれをかわしつつ左のジャブを、そしてすかさず右のフックを打ち込んだ。

まさか学校帰りに問答無用で喧嘩をふっかけられるとは思わなかったが、頭より先に体が反応してくれる。

だが、ぶっ飛ばしたそいつが落としたものを見た瞬間、俺は思わず目を見張った。

それは、雑誌とかで見たことがある、いわゆるスタンガンだったのだ。

これはマジでやばい。そう思った瞬間だ。

「がつ！？」

全身に、何度か感じたことがあるような、しかしそれより強烈な、重く鋭い衝撃が走った。

「お兄ちゃんっ！？」

ケイの叫びを聞きながら、俺の意識は一気に遠くなっていた。

13・ついに実力行使 その6

ゆさゆさ、ゆさゆさ。

「……………きて、お兄ちゃん……………」

誰かが俺をゆすつてくる。目が覚めると、俺は薄暗い部屋の中にいた。

「おにいちゃあん!」

その俺の目に、ケイの顔が映った。ほつとした顔をしている。

「つてて……………」

「大丈夫、お兄ちゃん?」

体を起こすと、どこかにぶつけたのか、色々なところに鈍痛が走る。思わず顔をしかめた俺の体をケイが支えてくれた。

大丈夫だと答えつつ、まわりを見渡す。

広さは、ざっと見て6畳程度。床は砂埃で汚れている。部屋の出入り口は、ドアがひとつだけ。明り取りの小窓があるが、意外に高い天井のぎりぎりにあるのでちょっと届きそうにない。

他には、いかにも古そうな、表面の破れた長椅子が部屋の真ん中に横たわっており、壁際に、縦長のロッカーがいくつか並んでいる。

今はその表面にスプレーで卑猥な言葉や意味の判らないアルファベットの羅列といったものが描かれている。

どうも、どっかの廃墟らしい。

床から立ち上がると、ケイはそのまましがみついていた。

とりあえず、ボロい長椅子に腰掛けると、俺はケイに聞いてみた。

「ケイ、ここは、どこだ?」

「わかんない」

だが、ケイは申し訳無さそうに首を左右に振る。

「うつうつ、どうしよう、どうしよう」

不意に、ケイの声が震えだした。声だけではない。全身が、がたがたと小刻みに震えている。今になって、怖くなってきたらしい。

がるだろうか。

それに、警察沙汰になったとしたら職務質問がされるだろうし、そうなるとうちの擬人化たちのことも色々探られて面倒なことになりそうだ。

ここ数日、ただでさえ結構面倒なことになっているんだから、これ以上ややこしくしたくない。

「警察？警察つて、110番だね、えっと」

「いや、ちよつと待て。ここからじゃ、電波が弱すぎる」

「でも、まったく駄目なわけじゃないから、頑張れば」

「頑張るつてことはそのぶん疲れるつてことだろ。体力は残しておいたほうがいい」

電話つてのは通話をするもので、特に電波状況が悪いところだとあつというまに電池を消耗してしまう。特にケイの場合、多分だが電池が切れたら気絶しちまうだろうから、余計に危険だ。無理はさせられない。

それに、警察に電話したとしても、ここがどこか判らないことには助けに……ん？

「そうだ、ナビサービスとかで、周辺の地図とかは探れないのか？」
「……あ」

携帯電話のナビサービスのことを思い出してケイに聞いてみると、ケイは今思い出したような、ちよつとばつの悪い顔をした。パニックになると当たり前のことまで思い至らなくなるというが、今のケイの反応なんかはまさにそのまんまだ。

それはそれとして。まずはここがどこなのか、ケイに調べてもらうことにした。ずっと通信し続けなきゃならない通話より、情報をやり取りする瞬間しか通信しないデータ収集のが、まだ時間はかからないから、消耗も少ない、と思う。

そしてケイがその通信に取り掛かっている間に、俺はその部屋の中を物色し始めた。

13・ついに実力行使 その7

どうやら俺は、拉致されてしまったらしい。目的は不明だが、心当たりはある。俺を敵と見る例の一団の仕業だ。そのときに、ケイも一緒に拉致られたんだろう。

ちなみに、俺のカバンは見当たらない。拉致られた時に落としたのか、それともどこかに確保されているのか、それは判らない。とにかく、大人しくしているわけにはいかない。

まず目に付いたのはロッカーだ。映画とかドラマとかだと、ドアの外には大抵見張りがいる。ここは日本だから、まさか銃を持っているなんてことはないだろうが、ナイフ程度なら持っている可能性もあるし、さっきはスタンガンとかも見た。あっちがそれだけ武装しているとなると、素手で挑むのはかなり危険だ。

一番右のロッカーを開けると、ほうきとかちりとりとかモップとかいった掃除用具が入っていた。

その中に、木の柄のモップがあつたので、そいつを確保する。

そして閉じようと思つて、何となく顔を上げると、ロッカーの扉の裏にあるものを見つけた。

鏡だ。手のひら程度の小さな鏡。

覗き込むと、当たり前だが俺の顔が映る。見たところ、顔に目だつた外傷はない。

鏡といえば、思い出すのは鏡介のことだ。あいつは、鏡をのぞくと他の鏡に映ったものが見えて、また鏡から鏡へと瞬間移動ができる。この鏡に映っているのが、俺ではなく鏡介だったら、非常にありがたいんだが。

「お兄ちゃん、ここがどこか、やっと判つたよ」

そう思いながら鏡を見てみると、長椅子に座っていたケイが口を開いた。

話を聞いてみると、どうやらここは、俺らが住んでいる町から30

キロほど外れた山の中にある、使われなくなった工場のような。となると、今俺たちがいるのは、その更衣室だった部屋、って所か。「なんか、歩いて帰るのは厳しそうだな」

「うう、ケイ、30キロも歩けないよう」

しかしまあ、ここがどこかは判った。そして、何もしないで待つことが無駄だということも。

ともかく、この建物から出ればなんとかなるだろう。家は30キロ離れていても、民家のひとつやふたつはもっと近いところにあるはずだ。

「とにかく、ここから脱出しよう」

モップから柄の部分をつまみこめて手に持つ。ケイは俺を見てこくと頷いた。

ふと、もう一度さっきの鏡に目が行った。

「全く、俺に鏡介みたいな力があればな……」

なんとなくその鏡像に声をかける。そこに鏡介がいるような気がして、ちよつとだけ勇気が出た。

だがその時、俺は鏡の中の像がおかしいことに気が付いた。

俺と同じ動きをしていないのだ。しかも俺はモップの柄を持っていないのに、鏡の中の俺は手に何も持っておらず、かわりによくわからない身振り手振りをしている。

そんなことが出来るのは、世界中探しても多分鏡介だけだ。つまり、なんとなくではなく、鏡介は本当にそこにいたのだ。なんとモタイミング良く鏡を見てくれたもんだ。

と思ったら、鏡介が今度は小さなジェスチャーをする。まず人差し指で俺を指差し、続いて頭ぐらいの何かを置いてからどかすような動きをする。

なんだ？どけてることか？

指示されるまま、俺は不審がるケイと一緒にその鏡の前から少し離れた。

すると。その鏡の表面が俺の目の前で音もなく真っ白い光を放った。

そして次の瞬間、その鏡の前には、見覚えのあるシャツにズボン姿の何者かが、未来からやってきたター　ネー　ーのようなポーズで現れたのだ。

「何スかこのきつたねえ部屋は？」

そいつは、立ち上がってこつちを向くと、拍子抜けするほどの軽い口調で話しかけてきた。

「やっぱりお前だったか、鏡介」

「こんなことが出来るのは俺ぐらいのもんでしょ。それより将仁さん、今日は早めに帰ってくるはずじゃなかったんスか？常盤さんがいつになったら帰ってくるのかってやきもきしてたツスよ？」

鏡介は、俺の置かれている状況も知らずにそんなことを言うってくる。まあこいつの場合、それまでに経てくる経緯を全部すっ飛ばしてここに来たんだからしょうがない。

「俺だつて帰れるなら帰りたさ、こんな廃墟で時間を潰す気なんてこれっぽっちもねえ」

「お兄ちゃん、さらわれちゃったの」

その時、今まで俺の後ろで縮こまっていたケイが口を開いた。どうやら、鏡介が現れたことで少し恐怖感が収まってきたらしい。逆に困惑の声を上げたのが鏡介だ。まあ普通はそうだろうな。

「さらわれたあ？マジっすか！？」

「こんな状況でウソついたってしょうがねえだろ。ケイが調べてみたところ、ここはうちから30キロ離れた山ん中にある工場跡なんだと」

30キロ、と言われて鏡介もちよつと驚いたらしい。

「そりやまた、随分と遠くまで来ましたねえ」

「しかも、多分俺をさらってきた連中が外にいるかもしれない。こんだけ喋って誰も気が付かないって所を見るとそんなに近くにはいねえのかもだけど」

ケイがこくこくと頷く。

すると、鏡介はさっき自分が出てきた鏡を覗き込みはじめた。

「何やってんだ？」

「近くにある鏡からあたりを探っているんですけど、えー……
・5人まで確認できました」

なるほど。鏡介は、他の鏡に映ったものが見えるからな。でもまあ、工場の建屋にはあまり鏡はないような気がするし、そもそもここは廃墟だから、鏡どころかマトモに残っている器具自体ほとんどないだろう。

だが、今は、自分の身の安全が最優先だ。

「まずは、なんとかしてこっから脱出しなきゃ、だ」

と、口では勇ましいことを言ってみるが、正直、敵のことが判らないので動きようがない。あっちが2人とか3人とかだったら正面突破もありえるが、多分もつというだろうし。

「将仁さん、警察には連絡したんスか？ケイちゃんがいるってことは、110番できるんじゃないんですか」

すると、鏡介がもつともなことを言ってくる。

「いや、まだだ。ここは電波状態が悪いし、警察沙汰になったらお前らに迷惑が掛かるだろ」

すると、鏡介だけじゃなくケイまで驚いた顔をした。

「ええっ！？だからケイに110番を止めさせたの！？」

「俺達のことより、将仁さんの身の安全が大事じゃないスか！」

そして2人してこんなことを言ってくる。

「だって俺達は、将仁さんあつての存在なんスよ！？俺らより自分の身を案じてください」

「ケイはお兄ちゃんのためだったらなんだつてできるもん！」

「それでお前たちに何かあるのが、俺は嫌なんだよ！」
思わず大声を出してしまった。

この前、こいつらが人の姿でなくなった時、俺は今までにない、そして二度と経験したくない喪失感を感じた。多分、あれが、家族を失ったときに感じるものなんだろう。

「俺は、お前たちを家族みたいに大切に思っている。お前たちが俺

を大切に思ってくれているようにな」

だから、俺は、あんな喪失感は二度と感じたくない。

「お兄ちゃん……」

ケイが、驚いたような嬉しいようななんともいえない表情をする。

その横で、鏡介は何か眉をひそめて考え込んでいる。何かまずいことを言っただろうか。

「わかりました」

そんな心配をしていると、その鏡介が口を開いた。

「鏡介お兄ちゃん？」

「将仁さんの言いたいことは判りました。でも、俺達同様、みんなも将仁さんのことを心配しているんすよ。ですから俺は、これから一旦家に帰って、状況を報告してきます」

「ねえ、鏡介お兄ちゃん。お兄ちゃんのこと、一緒に連れて帰れないの？」

すると、ケイが冴えたことを言った。そういえばそうだ、鏡介は瞬間移動ができるんだから連れて行ってもらえばいいんだ。

「あー、それは……」

すると、鏡介は妙に申し訳無さそうな顔をして、ぼりぼりと頭を掻いた。

「もしかして、できないのか？」

そう聞きなおすと、鏡介は頷いた。

「この前、試してみたんすよ。着ている服とか、手に収まるものとかだったら一緒に移動できるんすけど、手提げ袋とか人とかでかい物を持っていると、引っかかって入れないんすよ」

うーん、そうなのか。まあ確かにああいうヒーローは戦闘時とかに大抵身一つかせいぜい防護服を身につけるぐらいだから、そういう意味じゃそれが当たり前なのかもな。

「そうか……」

しかし、そうそううまく行くとは思っていなかったが、断言されるとやっぱり残念だ。

「……いや、ちょっと待てよ。」

「おい、鏡介。手に収まるものだったら、大丈夫なんだな？」

「あ、はい。DVDのケースぐらいの大きさまでなら」

「じゃあ、こいつを連れて行ってくれ」

そう言いながら、俺はケイを鏡介の前に押し出した。

「え、ええっ!？」

すると、ケイは驚いた表情をする。

「ケイは携帯電話になれる。そのぐらいの大きさだったら持って移動できるだろ」

「あ、まあ、試したことはないですけど、多分」

「だったら話は早い。ケイをつれて帰ってくれ」

「そんなあ、お兄ちゃん、ケイがいちゃダメなの!？」

ケイが半べそになってしがみついてくるが、俺は心を鬼にしてケイのことを引き離す。

「脱出するなら、身軽なほうがいい。お前はここから逃げることができるんだから」

両肩に手を置き、ケイの顔をじっと見ながら、諭すように言う。

「えううう」

「頼む、判ってくれ。お前を護りながらだと、それだけ大変になるんだ」

ケイは、唇をぶるぶるさせて泣き出しそうな顔で俺を見ていたが、やがてこくんと頷いてくれた。

「よし、いい子だ」

笑顔を見せて頭を撫でてやると、ケイは半べそながらも笑顔になってくれた。

そして、「ごしごしと目をこすると、ぴよんつと飛び上がって空中で丸くなる。次の瞬間、ケイが光に包まれると、携帯電話に変わって落下する。

それを地面に落ちる前にキャッチする。

「じゃ、鏡介。頼む」

そして、その携帯電話を鏡介に手渡した。

「確かに預かりました。10分待ってください、報告して戻ってきます」

「10分、か」

「10分です。だから、軽はずみなことはしないでください」

「ああ、判ったから心配すんな」

その時、鏡介の手に収まっていた携帯電話がぶるるつと震え、ひとりでに開いた。

「お兄ちゃん、無茶しちゃダメだからね？お兄ちゃんはすぐ無茶しちゃうんだから」

その画面にケイの顔が現われ、スピーカーからケイの音がする。今は、その一言がとても心強かった。

「さ、ケイちゃん。行くよ」

鏡介がその携帯電話に声をかけ、ぱたんと閉じる。

「じゃ、行つてきます」

その手に持った携帯電話を握り締めると、それを俺に見せて、ふつと笑ってみせる。

俺がかっこつけた笑みを浮かべるとこんな感じなんだろうか。かっこいいような悪いような、なんか微妙な感じだ。

なんてなことを考えている前で、鏡介の姿が光に変わると、出てきたロッカーの鏡へと消えていった。

13・ついに実力行使 その8

「さてと」

鏡介が姿を消し、ひとり取り残された部屋を見回す。さつきは6畳ぐらいかと思っただが、改めて見ると、もうちょっと広そうな感じがする。

さつき座った長いすを見ると、俺らの座っていたところだけ埃が薄くなっている。そしてはつとなり、あわてて自分のズボンの尻をぱんぱんと叩いて埃を落とした。

もしかしたらケイの尻にも埃がついていたのかも。だがまあ、今更気付いても後の祭りって奴だ。

「それよりも、ここから、どうやって脱出するかだな」

そして改めて自分に言い聞かせる。
まずはドアに目を向ける。窓こそないが、表面の塗装がはげちよるけた木製のドアだ。昭和初期を舞台にした映画に出てきそうな、のっぺりした真鍮製のドアノブがついていて、その下に大きな鍵穴が開いている。

今時、こんな古臭いドアが残っているもんなんだな、なんて思いながらドアノブに手をかける。

そして、まわしてから揺すってみるが、見かけのボロさに反して、開くどころかびくともしない。

「まあ、当たり前だな」

捕まえた相手を監禁する部屋が、中から簡単に開いたら意味がない。もし簡単に開いたら、その先に何か罠が仕掛けられているか、誰かが待ち構えているかしているだろう。映画やドラマではよくある話だ。

お決まりのパターンとして、鍵穴を覗いてみるが、廊下には明かりが無いらしく、暗くて良く見えない。人の姿は無いし声もしないから、近くには人はいなさそうに思える。

ドア自体は半分腐ったベニヤ製だから、けつとばすなり体当たりするなりでぶち破ることができらるうが、そうなるとでかい音がして人が来るからまずい。来るのが味方ならいいが、今ここに来るのは、100%敵だ。

そう考えると、正面突破は無理だ。頭を切り替えよう。

次に目に付いたのは、明かり取りになっている窓だ。もうかなり日も傾いてきているようで、その窓から入ってくる光もさつきより少ない。

近くまで行ってみると、窓は思ったより低いところにあつた。さつきまで座っていた長いすをその下まで持っていき、それを踏み台にすると、手を思い切り伸ばせば届きそうなところまで近づけた。

そして、愕然とした。それは、ロックはおるかレールもアームもない、はめ殺しの窓だったのだ。

ここから出るとなると、窓を割るしかない。だがもし割るとなると、素手というわけにはいかないから何か道具を探さなくてはならない。さっきのモップの柄では少々心もとない。

というわけで、ここもちょっと難しいと判断した俺は、また別の出口を探すことにした。

しかし、それ以外となると、隠し扉や秘密の通路レベルになつてくる。城とか秘密の研究所とかならともかく、放棄された工場の更衣室なんかには秘密の通路があるとは到底思えない。

念のため、いくつかあるロッカーを片っ端から開いて、何かないかと探してみる。

結果から言えば、役に立ちそうなものは何もなかった。あえていえば、壁の落書きを書いた連中が置いていったらしいロッカーの空き缶とか、割れたガラス瓶とか、武器にはなるかもしれないが使い勝手が悪そうなものばかりだ。

「くそ、手詰まりか」

最後のロッカーを勢いよく閉めた後、もしやと思つてそのロッカーを引っ張つてみた。もしかしたら、ロッカーの後ろの壁に穴か何か

無いかと思っってしまったからだ。

そして結果から言えばそこには何も無く、日焼けしていないためにまわりよりきれいな壁があるだけだった。

念のため、その壁を叩いてみたが、裏が空洞になっているような感じはない。

「何やってんすか？」

「うひゃっ!？」

その時、不意に後ろから声をかけられた。思わず飛び上がりながら、すぐく情けない声を上げてしまう。

あわてて後ろを向くと、いつのまにかそこに姿見が立っていた。

「いいっ!？」

思わず後ずさりすると、壁が背中に当たった。姿見の俺も同じような動きをする。

「つて、何やらせるんすか」

「え、な、なんだ鏡介か」

少し落ち着いてみると、それは姿見ではなく、鏡介だった。なんか急激に気が抜けてしまい、壁に寄りかかったまま大きく息を吐いてしまう。

「すみません、将仁さん。10分で戻るつもりだったんすけど、20分かつちまいました。ホント、すいません」

そして、鏡介が謝ってきた。俺はそんなに時間が経っていたことに全然気が付かなかつたのだが、待たせてしまったことを気にしているらしい。

だが、それに続く言葉を聴いて、俺はちよつと耳を疑った。

「むこうで、ちよつと会議になつちまいました」

「会議?何のだ？」

「そりやもちろん、将仁さんの救出作戦よ」

「へ?俺の?」

「実はツスね。家のほうに、誘拐犯から電話があったらしいんですよ。将仁さんの身柄を預かった、返して欲しければ10億用意しろ、

警察に連絡したら将仁さんの命はないってね。

そこに俺が戻って、将仁さんの無事とか居場所とかを教えたら、満場一致で将仁さんを自分たちで救い出そうって話になっちまいました。

これには、ちよつと驚いてしまった。どうやら、うちの連中は俺の予想した以上にバイオレンスな奴らしい。

「って、もつと危ねえじゃねえか！」

「将仁さんだって、警察には言うなって言ったじゃないか。それに、将仁さんの置かれた状況と居場所が判ったとたんに、何人が飛び出そうとしたんで」

「なっ」

「無手で暴れてもダメだろうってんで、緊急会議を開いていたら、こんな時間になっちまいました」

予想外だ。こいつらには迷惑をかけたくなかったから自力でなんとかしようと思っていたんだが、そうはいかなかったらしい。

「お前ら……」

なんでそんなバカなんだ、と言いつらになつて、止めた。俺がこいつらと同じ立場にあつて、俺がしようとしたことを聞かせたら、俺だってバカかと言つからだ。

「ありがとう」

だから、俺は言葉を変えてそう言った。

すると、鏡介はその俺の目の前で人差し指を立て、こんなことを言つた。

「その言葉は、無事に脱出できるまで取つときましよう」

そして、にっつと笑ってみせる。

気障なことを言うなあ、お前ってそういうキャラだったか？と思つた、その時だ。

ちゃーらーちゃららら、ちゃーつちゃちゃー。

聞き覚えのある音が聞こえてきた。

13・ついに実力行使 その9

「あ、いけね」

すると、さつきまでかつこつけていた鏡介がいきなり三枚目な動きになり、ポケットから何かを取り出した。

「ごめんごめん、忘れてた」

「んもう、鏡介お兄ちゃんったら。いつちばん大切なことじゃん、忘れちゃだめだよ」

その取り出したものが、ひとりでに開くと、とても聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「それ、ケイ、なのか!？」

「それってなによう、ひどいなあ」

すると、ぶんすかむくれた声が返ってきた。

「鏡介、お前、ケイのこと帰したんじゃないのか!？」

「いや、それは」

「ケイだつてやることあるからここに来たんだもん」

鏡介が言いよんどんでいると、それを遮るようにケイが口をはさんできた。

その携帯電話のままケイを、鏡介が差し出してきたので受け取る。

「もう、鏡介お兄ちゃんったら、前置きが長くて肝心なこと喋んないんだから」

携帯電話のままのケイが、俺の掌の中で文句をたれる。

それに答えるように鏡介が、申し訳無さそうに口を開いた。

「肝心なこと？」

「将仁さんの救出作戦のことツス」

そして、鏡介とケイは、その作戦の内容を説明してくれた。

とはいえ、20分弱で立てた作戦なので、内容は非常にシンプルなものだった。

まず、瞬間移動できる鏡介が、ケイを持って俺のところに来て、俺

に作戦の説明をしてケイを渡す。何のまじないかと思っただが、なんでも今回、ケイは精一杯電波を出して、俺の居場所を示すための発信機の役目をするんだそうだ。

鏡介以外の救出メンバーは、瞬間移動できないから自力で移動しているそうなんだが、それぞれが小型の受信機を持っており、発信源に向かつて一直線に向かうことにしているらしい。

ちなみにその受信機つてやつは、バレンシアがこんなこともあるのかと作っておいたんだそうだ。そんなもんがあるなら、隠してないで教えてくれればいいのに。

まあそれはともかくとして。こっちに向かっているのは誰なんだろう、つて、30kmも離れたところへ「自力で」来る能力があるのは、我が家では2人しかいない。言わずもがな、元オフロードバイクのヒビキと、元ラジコンゼロ戦のシデンだ。ラジコンが30kmもの距離を飛べるかはちょっと疑問だが、あいつだったら気合でやっつてしまいうような気がする。

そしてその2人は、いずれも我が家きつての武闘派だから、そう簡単にはやられはしまい。しいて言えば、シデンが飛んでくるだけで体力を使い果たしてしまわなかってことと、叫びながら走るヒビキを見た一般人たちがパニックにならないかってことがちょっと心配だ。

いや、ヒビキはバイクに戻って、誰か乗せて走れば問題ないか。いやでも待てよ、うちにバイクに乗れるやつなんて俺以外にいるか？運動神経がよさそうなのはいるけど。

「将仁さん、聞いてるっすか？」

そのへんの妄想は、鏡介に声をかけられたことで一旦中断された。そうだ、誰が来るかは、会えば判るんだ。今はそんなことを考えている場合じゃない。

「それで、将仁さんすけど」

「俺？」

「ええ。将仁さんは、ケイちゃんと一緒に逃げ回ってほしいんすよ」

「へ？じつと待つてなくていいのか？」

「ええ、待つてるのは将仁さんの性に合わないだろうし、それに将仁さんにはできるだけ建屋の外に出てもらいたいんすよ」

「なぜかというと、救出チームが持っている受信機つてのがつまりはGPSみたいなもので、地図的な位置しか判らないうえに、建物の構造が判らないので、屋内だと探すのに時間が掛かるらしい。」

「じゃあお前は、俺の護衛つてとこか？」

「いえ、俺は、部屋を出たら、将仁さんとは別れて行動します」

「え？」

状況がいまいち理解できないでいる俺の前で、鏡介はとんでもないことを言ってくれた。

「俺は、将仁さんが脱出できるまで、デコイに徹します」

あまりに意外なその発言は、俺が理解できるまで数秒を要した。

「な、お前、それは危険すぎるだろ！」

「そうだ。デコイ、つまり囮つてことは、敵方を誘い出すためにわざと見つかることが大前提なのだ。」

「そんなことをするならおまえ、まだ一緒にいたほうが」

「将仁さん」

だが、止めさせようとする俺の言葉を、鏡介は何かを言つて聞かせるかのように、わざと遮った。

「俺だつて、何も考えないでそういうことをやるほどバカでも向こう見ずでもないッすよ」

そして、ポケットから何か光るものを取り出す。

それは、何枚かの小さな鏡だった。

「そのこのロッカーにある鏡を、ちよつと拝借しました。これ以外に比較的近くにある備え付けと思われる鏡は合わせて27枚。そこを瞬間移動していけば、追いつかれることはないでしょ」

「ついでに、今手に持つている鏡を置いていけば、瞬間移動で行かれる先が増えるということらしい。言われてみれば、瞬間移動は飛んでくる前触れこそあるが、移動は距離に関わらず本当に一瞬で済む

らしいから、それを駆使すれば確かに逃げ切れるだろう。

「判った。無理はするなよ。やばいと思っただらさっさと逃げる」

「将仁さんこそ、無茶は厳禁ツスよ」

「ふっ、生意気なこと言うじゃねえか」

「その生意気な人と同じ姿スから」

そして互いに顔を見合わせて笑いあう。

「むうーっ!」

そのとき、俺が持っていた携帯電話から、女の子のそんな声が発せられた。

「お兄ちゃんずるいーっ、鏡介お兄ちゃんにはっかりいーっ!」

ケイの声だった。あまりに場違いなその声に、緊張していた空気が一気に崩れていってしまう。

「んじゃ、そろそろ取り掛かるか」

「そうツスね」

その雰囲気の中で、鏡介がドアノブに手をかける。

「ん?あれ?」

そしてノブを回したが、そこで怪訝な顔をしてドアを揺すってみせる。

そういえば、そのドアには鍵がかかっているってこと、言うのを忘れていた。

「鍵がかかっているツスね」

「ああ、悪い、言うの忘れてた。合鍵もないしぶち破ろうと思ってたところでさ」

言い訳をすると、鏡介は拍子抜けしたようなあきれたような顔で俺を見る。そんな顔で見なくなっただけだろうか、本当に言い忘れただけなんだから。

「だったら早く言うてくださいよ」

すると、鏡介はそう言いながらドアから数歩離れた。が、なぜかそのドアから視線を外さない。

その理由はすぐ判った。

そこで改めてドアに向き直った鏡介は、いきなり右手を振り上げると、指先をそのドアに向けて腕を伸ばしたのだ。

その直後、鏡介の指先から放たれたいくつかの楔状の青白い光が、ガガガツという音を立ててドアノブへと突き刺さる。

そして、そこから火花とパンツという破裂音を撒き散らし、俺達を閉じ込めていたドアは、その半分以上が木屑となって吹き飛んでいった。

忘れていた。鏡介はこういう芸当もできたんだっけ。今の技はこの前のはまた違うみたいだが、新しいバージョンだろうか。

「んじゃ、先に行って騒ぎを起こしてきます。将仁さんは頃合を見計らって、部屋を出てください」

あっけに取られる俺の目の前で、鏡介はたった今吹き飛ばしたドアのあったところをくぐると、軽く手をあげ、そして駆け出していった。

間もなく、別のほうからばたばたと走ってくる数人の足音が聞こえてきた。

「なんだ今の音は!？」

「お、おい、ドアが吹っ飛んでっぞ！」

「あいつ、逃げやがった!探すぞ！」

どうやら、俺を捕まえた連中らしい。物陰に隠れて息をひそめていると、そいつらは部屋の中を改めることもなくまたばらばらと散っていった。

「いたぞー！」

間もなく、かなり離れたところからそういう声が聞こえてきた。と同時に、爆発音と悲鳴も聞こえる。

「あいつ、えらく派手にやってんなあ」

「大丈夫なのかなあ、鏡介お兄ちゃん」

軽く頭を抱えた俺の手の中で、携帯電話の形態をとったままのケイも似たようなことを言う。

確かに、囃は派手に動いてくれたほうが注意を引きつけて良いんだ

が、これはちょっとやりすぎのような気がする。

だがまあしかし、このままここにいてもしょうがない。

「よし、行くか」

頭を切り替える。あいつなら、鏡が1枚あれば、逃げるのは可能だ。全部使い果たすみたいだな墓穴を掘ることはないだろう。

「ね、お兄ちゃん？」

そして、落とさないようポケットに入れようとしたとき、ケイが話しかけてきた。

「ケイのこと、ポケットじゃなくてね？手に持っていたほうがいいと思うの」

「……は？」

「ほら、建物の中だと、障害物が多くて、電波が飛びにくいから、ちよつとでも邪魔が少なくなるようにしたほうがいいと思うの」

「ん、そうなのか？」

「そうなの！」

こういうふうには逃げるときは、両手が空いていたほうがいいんだが、ケイの言うのももつとものような気がする。

「ん、判った。握りつぶしたらごめん」

「うん、落としたり、無くしたりしたら、嫌だからね？ぜええつたいに、ダメだからね！？」

軽く握りしめた手の中から聞こえるケイの言葉は、意外に落ち着いているように聞こえた。

「鏡介、死ぬなよ」

そして、部屋を飛び出した俺は、鏡介が消えていったほうへ目をやると、反対側へと走り出した。

13・ついに実力行使 その10

「待てやコラッ！」

俺の後ろを、懐中電灯を手に何人かの男が追いかけてくる。

そして俺は、そいつらが振り回すその懐中電灯がアトランダムに照らす一瞬の光景を頼りに、とにかく必死になって走っていた。

あれだけ派手に逃げ回っていた鏡介だが、やはり全員を引き付けることはできなかつたらしく、何人かが俺を追いかけてくる。

逃げるのはまあ、あつちが銃を持っているとかじゃないし、よく映画にあるトラップとかもないみたいなので何とかなる。

それより。

「お兄ちゃん何してるのよお！せっかく鏡介お兄ちゃんがおとりになつてくれているのにい！」

「ちよつと黙ってる！」

右手の中でやいのやいのと騒ぎ立てるケイの存在が、ちよつとだけ鬱陶しくなりつつあった。

なにしろ、ケイのことを握りしめながら走り回っているので、常に片手が塞がっているのだ。

そして意外にも、片手が使えないのは動きづらい。なにしろ塞がっている手ではどこにも捕まれない。屋外ならまだましなんだろうが、建物の中、しかも使い方が判らないのにやたらに大きな機械とかが放置されていて、見通しが悪いのもあつて、まるで迷路だ。

だがそれでも、俺はなんとか、トラックが通れそうな通用口の前にたどりつくことができた。

しかし敵もさるもの、その出口の前に3人ほど待ち構えている連中がいた。一体何人いるんだ。

「ためこのおおおお！」

俺に気がついたそいつらが、またも懐中電灯やらなんやらを手にこつちに向かってくる。

相手が多いし、武器を持っているので、正面突破は厳しい。だがいままで来た道を引き返すのは色々とまずい。逃げる途中で、片手を空けるためにモップの柄を捨ててしまったのが、今になって悔やまれる。

ふと横を見ると、長さ2mほどの木の丸棒が数本、鉄柵のむこうに放置されているのが見えた。加工に失敗したものだろうか。

「ケイ、ポケットに入れるぞ」

「え？」

「両手をあけるからポケットに入れるぞ」

ケイはまだよく判っていないようだったが今は一刻を争う。ケイを折りたたんでそのまま内ポケットの中に滑り込ませ、そして一番まともそうな棒を掴むと、その先を向かってくる奴らに向けた。

「おおおおおらあああああ！」

そして、走り出した。

戦国時代の合戦で槍を手に突進する雑兵みたいだと、自分で思った。だが、これはあっちを蹴散らすためではない。

あと3mほどで互いが交差するということで、俺は、床のある1点目掛けてその丸棒を突き立てた。そこには、床のコンクリートが割れてできた、隙間があったのだ。

棒の先がうまくいってそこに引っかかる。その勢いに乗り、俺はその棒をしっかりと掴んだまま、渾身の力で右足を踏み出した。

ふわっと、自分の体が浮き上がる。そして俺は、棒高跳びの要領で体を上へと跳ね上げた。

俺の真下ギリギリのところを、正面から向かってきた3人がスローモーションのように通り過ぎる。

そして、俺は見事にそいつらの頭上を飛び越えた。いつものカーボンファイバーの棒と違ってしならないので、うまく行くとは思わなかったが、やれば何とかなるもんだ。

だが、そこからがまずかった。

どうっ！

棒高跳びのくせが出てしまい、背中からコンクリートの上に落ちてしまったのだ。

「ぐふ!?」

その衝撃に息がつまり、頭が真っ白になって体が動かなくなる。

「お兄ちゃんっ!? な、何があったのっ!?」

ポケットから聞こえるケイの声に我に返り、頭をあげる。と、さっき俺が頭の上を飛び越えたやつらが、急ブレーキをかけてこっちにとって返してくるのが見えた。

「まずいつ」

逃げなければ。頭ではそう思っても、今のダメージのせいで足が素早く反応してくれない。

くそ、こうなるなら、受身をもっと練習しておくんだった。

そう思いながら、まだ微妙にふらつく足で立ち上がるうとした、そのときだ。

「いてえええっ!」

「ぎゃあああああっ!」

俺の少し前まで迫っていたそいつらが、何の前触れも無くいきなり悲鳴をあげてひっくり返った。

よく見ると、そいつらの体に、何か細長いものがいくつも、しかも上のほうから刺さっている。

「じょうかああああああんっ! ぶじかああああああっ!」

その直後、今度は頭上から聞き覚えのある声が聞こえた。

そして顔を上げる間もなく、その声の主が俺の前に降り立った。

袖や袴の横に大きく日の丸が描かれた女物の深緑色の羽織袴、肩で切りそろえたおかつぱ頭、そして頭のとっぺんから背中に流した一房の銀色の髪。

言うまでもない。シデンだった。気合を入れてきたのだろうが、白地にくつきりと日の丸と必勝の文字が描かれた八チマキを頭に巻いている。

「うむ、間に合ったようだな」

そのシデンは、俺の前で偉そうに腰に手をあててふんぞり返る。どうやら、俺の危機を救ったことで得意になっているらしい。

「ああ、助かった……ん？」

だが、その羽織の袖、ちょうど手首のあたりに、何か見覚えのない機械のようなものが装着されているのが見えた。小さな缶ジューズの缶のようなそれは、最初は何かの装飾品かなと思ったのだが、それにしても見栄えがせず、またそこからは鉛筆ほどの太さの短い筒が生えている。

「なんだその、手首についているのは」

そんなことを聞いているような状況ではないのだが、気になってしまったので聞いてみる。

「機銃だ。残念ながら20mm口径ではないがな」

それに対し、シデンはそうざらりと、しかし恐ろしいことを言ってみせた。

「き、機銃だあ!？」

「戦闘機に機銃の一つや二つ、搭載されて当然であろう」

驚く俺に対し、シデンはさも当然といった様子で言い放つ。ってお前は、確かに元ゼロ戦だけどそれ以前にラジコンだろうが。

だが、それを突っ込もうと思ったところで、逆に押しのけられてしまった。

「来たぞっ!」

言われて振り向くと、確かに工場の中から、さらに何人かの男が飛び出してくるところだった。

そこで、シデンは片膝をつき、そいつらを睨みつけ、両手を大きく広げた。

「上官ッ!ここは我が引き受けるッ!早々に逃げるのだッ!」

そして、一瞬だけ俺に顔を向け、そう叫ぶと、すぐ正面に向き直る。

「中嶋紫電、御相手仕るッ!」

そして、叫んだ。

すると、左右の手首に括りつけられたその装置の先から、何か細長

い物が凄い勢いで飛んでいったのだ。その様子は、機銃というにはちよつとしよぼく、ちよつど連射式のエアガンかなにかを撃っているようだ。

「うぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃっー!」

「いだだだだだだっ!」

そうは言ってもそれなりの威力があるらしく、当たった奴らは腹や足を押さえてひっくり返る。圧縮空気か何かで発射しているらしく、音はそれほど大きくない。

「何をしているッ!早く行くのだッ!」

ひととおり掃射したところで、まだそこにいた俺に顔だけ向けて、シデンが叫ぶ。

「こ、殺すんじゃないぞ!?!」

「心配無用ッ、急所は外してあるッ!」

うーむ、ライフルとかみたいなのなら急所を狙えるだろうが、ああいう弾をばら撒くような奴はそもそも狙うこと自体無理だと思うんだが。

「いいから行けッ!」

だがそれもつかの間、シデンのその一言に圧倒され、俺は思わずそこから逃げ去っていた。

13・ついに実力行使 その11

しかし、建物の外に出たからといって、すぐに逃げられるわけでもない。

俺のために囷となつて引き付けてくれている2人のためにも、俺は一刻も早く逃げるべきなんだが、なにしろ廃工場だ。ただでさえ日が沈んであたりが見えにくいのに加え、人の手が入らなくなって草ぼうぼうの荒れ放題。そこに、放置されたポンコツの自動車とか、さび付いて動きそうもない工作機械とか、廃材の固まりみたいなものとかがまるで障害物のように放置されていて俺を邪魔する。

それに加えて、敷地内にはほかにも何棟か建物が建っていて、どっちに行ったら良いのかがよく分からないのだ。

とにかく、立ち止まったらいけないと思い、闇雲に走り回る。だが、まずいことに袋小路に追いつめられてしまった。振り向くと広々とした道を伝って結構な数のバカどもが迫ってくる。後ろは金網のフェンスだが、穴でもあいているのか金網があるところにはさび付いたトタン板が括りつけている。錆びたトタンの端はノコギリみたいになっているから、触ったら手を切つてしまい痛いどころではない。そして左右のフェンスと建物の間には隙間があるが、幅は1mもないのでそこを走って逃げたら回りこまれたりしそうだ。全く、鏡介とシデンが引き付けているはずなのに、一体何人いるんだ。

ごめん、ケイ、鏡介、シデン。助けてもらったけど、俺、これ以上は逃げられないみたいだ。

そう覚悟したときだ。

ぶおおおおおおん！

背にしたトタン張りフェンスのむこうから、高らかな爆音が響いた。そして。

そのフェンスを飛び越え、俺の頭上に何かが飛び出して来た。

見上げた時に見えたそれは、1台の見たことがあるような気がするバイクだった。

「加^{よじ}あああ油^よおおお！」

そして、変な声が聞こえた。何事かと上を見上げた時、そのバイクから、何か丸い大きなものがうなりを上げて飛び出した。

大きな弧を描いて飛ぶそれは、狙い済ましたように俺を追いかけていた奴のほうへと向かって行き、何人かを次々となぎ倒し、そして追い散らす。

ほぼ同時に、そのバイクから人影が飛び出し、俺の近くに降り立った。そしてそいつが右手をすつと掲げると、さっきバイクの上から飛び出した丸い円盤のようなものが、まるで磁石に吸いつくようにぴたりと受け止められた。

まるでスタントの1シーンだが、そのスタントをやったのけた人物を見て、俺はまた度肝を抜かれた。

「中華美姫紅娘、推参アル！」

「ほ、紅娘!？」

そう。バイクから飛び降りたのは、見紛うことなき紅娘だった。となると、あの丸い円盤は、いつも背負っているあの中華鍋か!？だがそんなことを考えているうちに、むこうが復活してきて、倒れた奴を起こそうとしている。

そしてなにより、囲まれているのは変わらないのだ。ここから逃げるとなると、後ろの壁を飛び越えるか、もしくは正面突破をしない。

それが判っているのか、俺の前に立つ紅娘は、盾のように中華鍋を左手に持ち、お玉を剣のように持って、俺を庇うように身構えている。

その時だ。

どしいん!

俺から見て正面、追う連中の後ろから、地面が揺れるような鈍い音がした。

見ると、そこに立っていた電信柱が揺れている。

「おおおおおおおおりやあああああああああああああ！
そして、女声の雄叫びが響き渡ると。ばきばきばきつという破
砕音と共に、その電信柱がこつち目掛けて倒れてきたのだ。

その重さに耐え切れず、電線がブチンブチンと切れていく。すでに
通電はしていないようで、映画のように火花が飛ぶことはないが、
それでもこれはシャレにならない。

「うわあああああああああああああああああ！」

さすがに下敷きになったら下手すりゃ全治何ヶ月だから、蜘蛛の子
を散らすようにみんな逃げていく。

だがそれはこつちも同じだ。なにしろこつちに向かって倒れてくる
のだ。

「どうわああああ！」

逃げようとしたが、足がもつれてしまい、そこですっ転んでしまっ
た。

その間にも、電信柱はこつちに向かって倒れてくる。

ヤバイ。これでは下敷きだ。全治何ヶ月だ。

と思ったんだが、いつになっても倒れた音がしない。

「よう、待たせたな」

そこに、聞き覚えのある声があった。

見ると、赤いライダースーツに見覚えのあるサンバイザーをつけた
女が、目の前まで倒れてきていた電信柱を片手で受け止めていた。

「悪いな将仁、ちよつと道が混んでてよ」

そいつは、サンバイザーを指で突き上げながら、悪びれる様子もな
くそう言いやがった。

「お、おい、ヒビキっ！何てことするんだ、俺を殺す気か！」

それは、見紛うことなきヒビキの姿だった。やはりというか、あの
バイクはヒビキだったのだ。

「まあまあ将仁サン、結果無事だからいいじゃないアルか」

「男なんだから細けえこと言うなって」

そう言つて、ヒビキは支えていた電信柱をひよいと横に放つた。
どしいいいん。

そして電信柱が倒れきり、本当に地面が揺れた。

「さて。このあたしが来たからにやもう心配はいらないぜ」

そう言つたり、ヒビキは迫ってくる連中に向きなおり、楽しそうに指をばきばきと鳴らす。

ヒビキつて、こんな凶暴だつたっけ。

なんてなことを考えている間に、ヒビキは近くの建屋に近づき、やにわにそこにあるものをぐつと掴んだ。

「おおおおらあああああああ！」

そして、雄叫びとともにそれを引きずり出した。

ばきばきばきつという破断音、そして崩れ落ちる瓦礫の中から引つ張りだしたそれは、崩れた壁から一部だけ覗いていた、工場を支える鉄骨だつた。

「てめえら！死にてえ奴からきやがれえ！」

身長の数倍、重さ数トンはありそうな、コンクリートがへばりついたままの鉄骨を頭上に高々と持ち上げ、割れ鐘のような大声でそいつらに向かつて怒鳴り散らす。

その姿は、ライダースーツの色も伴つて、まるで地獄の話に出てくる赤鬼のようだ。心なしか、角が見えるような感じさえする。

「将仁サン、こつちアル！」

その様に呆気にとられていると、紅娘が腕を引っ張り、建屋とフェンスの隙間に向かつて走り出した。

13・ついに実力行使 その12

「出口だっ！」

それからどうやって走ったのか。俺は、なんとか敷地の出入り口にたどりついた。

所々崩れ、スプレーでなにやら書き殴られた古い門柱の間をくぐり抜ける。

そこは、アスファルトで舗装された道路だった。もつとも、舗装されているとは言ってもすでに網目状の亀裂が走り、ガードレールもさび付いた、かなり寂れた道だ。

すでに日はとっぷり暮れている。

「はあ、ふう、ま、将仁サン、やっぱり足速いアルな」

少し遅れて、息を切らせた紅娘が追いついた。

「大丈夫か？」

「わ、ワタシのことは、心配無用アル。それよりっ」

肩を貸してやるうかかと差し伸べた手を払いのけると、紅娘は鍋を手後ろを振り返る。

はたしてそこには、こっちに迫ってくるいくつかの人影があった。

「ホント、しつこいアルな！」

怒ったような口調でそう吐き捨てる紅娘。

そしてひとつ大きく息を吐くと、手に持った鍋を高々と降り上げ、たんつと踏み出し、そして空中でぐるりと身を翻すと、腕の振りにその回転を加えて、鍋を投げつけたのだ。

回転を与えられた特大の中華鍋が、フリスビーのように弧を描いて飛んでいく。

ごわんっ。

そして鍋は、狙いすましたように追っ手の一人に横から命中しそいつをぶっ飛ばす。なおも勢いの衰えないその鍋は、まるで操られたかのように飛び、合計4人をなぎ倒した後紅娘の手へと帰ってき

た。

その嘘のような光景に、残った追っ手の足がぴたりと止まる。プツッ、プツプツッ。

それを見計らったかのように、今度は車のクラクションが聞こえた。そっちを見ると、見たことのある白いバンが、その出口のところに停まっていた。それは、あるうことが俺をさらった連中が乗っていた、あの白いバンだった。

まずい。あいつ等、外にもいたのか。とっさに回れ右をしたときだ。

「将仁さん！」

後ろから、聞き覚えのある女の声が出た。

もう一度回れ右をすると、そのバンの運転席の窓から身を乗り出して懸命にこっちに手を振る人影が見えた。

不思議なことに、その人影は、メイド服を着ていた。

「将仁さん、早く乗るのでしょう！」

「て、テルミ!?!」

そう。運転席から身を乗り出しているのは、なんとテルミだったのだ。

「なんでお前が」

「議論は後、乗ってくれないと発車できないのでしよう！」

「そうアル、急ぐヨロシ！」

色々つつこみどころはあるものの、今は確かに一刻を争う。せかさるるまま、俺は横のスライドドアに手をかけると、中へと飛び込んだ。

「将仁さん確保! 紅娘、合図を！」

「了解アル！」

俺がワゴンの中に腰を落ち着けようとした時に、テルミは紅娘とそんなやり取りをしているのが聞こえた。

見ると、俺達に背を向け、左手に中華鍋を持ち、右手に持ったお玉をくるくる回す紅娘がいた。

「行くアルヨーっ！」

そしてお玉を高々と振り上げる。って、もしかして。

とっさに耳を塞ぐ。予想通り、紅娘は中華鍋をお玉でぶっ叩いた。

しかも、この前は軽くだったのに対し、今回は思いっきり叩きやがったのだ。

だが、その割には音が小さい。はて？と思つて覗き込んでみて、その理由がわかった。

どうやら、あの音波兵器には指向性が、つまり決まった方向へ強く響く傾向があるようだ。その音をモロに聞いたらしい、俺を追いかけて来ていた連中は、みんな揃つて耳を抑えたままぶっ倒れて悶絶していた。

その俺を押しつけて、紅娘がワゴンの中に飛び込んでくる。

「皆さん乗つたでしょうか！？では、シートベルトを締めるのでしよっつ！」

その途端、運転席に座つたテルミが妙に慣れた手つきでレバーを入れると、車のエンジンが大きく吼えた。

ワゴン車の後部座席にシートベルトなんかあるのか？と思つたら、

二点式の本当にベルトみたいな奴があつた。

そのベルトをカチツと締めた直後、俺達を乗せたワゴン車はもの凄い勢いで夜の山道へと飛び出していった。

13・ついに実力行使 その13

それからどの位経ったのだろうか。

俺は、左右に大きく揺さぶられながら車内にある座席や取っ手に必死になってつかまり、ジェットコースターなんか目じゃないスリルとGの中を耐えていた。

これは、実は悪い夢なんじゃないかと、思ってしまふ。いや、そう思わないと耐えられない。

「うおい！テルミ！もちつとスピード落とせ！」

「舌を噛みたくなかったら静かにしている」

「うわわわわわ、前、前、前！」

何度か、運転席でハンドルを握るテルミに向かって叫んだのだが、テルミの奴は別人にでもなったかのようにまったく聞き入れない。

それどころか、まるで楽しんでるかのようになり、急カーブにトップスピードで突っ込み、理解できないハンドルとレバー捌きで切り抜けて行く。その度にタイヤがキキキキキーツと悲鳴を上げ、信じられないGがかかる。

こんなのが、息をつく暇もなく続くのだ。

これは、死ぬかも。

三途の川が見えてくるんじゃないか、と思ったところ。ようやく、道が平坦なところに出た。

「はああああああああ……」

全身が縮むんじゃないかと思うほどに息を大きく吐き出す。

「ね、ねえ、おにいちゃん、ケイ、生きてる、よね？」

左右に揺さぶられているうちにポケットから飛び出していたケイが、人の姿になって、半分泣きながら俺にしがみついている。ケイの場合、乗ったときはまだ携帯電話のままだったから、ベルトなんか締めていない。だから、ずっと俺にしがみついてきやあきやあ騒いでいた。

「はらほろひれはれ〜@@」

さらに後ろ、3列目に座った紅娘は、やっぱりベルトを締めていなかったらしく、後ろの座席で本当にひっくり返りながら目を回している。どったんばったんやって騒がしいとは思ったんだが、どうやら騒いでいたのではなくGに振り回されていたらしい。

「もう大丈夫でしょう」

その中で、本当なら一番あせってもいいはずのテルミは、いつもどおりの口調に戻って、極めて落ち着いた様子で運転を続けている。

「皆さん、無事でしょうか」

「ううう、ああ、なんとか、生きてる」

「それはなによりでしょう」

そう言うテルミは、さっきとはうって変わって、ちょっとスピードは出ているものの非常に模範的な安全運転をしている。

「テルミい、お前、安全運転が出来るんなら最初からやってくれよ、死ぬかと思っただぞ」

「さっきはあの場から離れるのが最優先だったでしょう」

だからって、アレじゃまるでカースタントだ。せつかく助けられたつてのに、その後に自動車事故で死ぬなんてのは本当にイヤだぞ。

「でも、テルミおねえちゃんって、車の運転ができたんだね」

その俺の横からひょこつと顔を出したケイが口を挟んできた。

あれは、運転というよりは暴走というのではないだろうか。

まあ確かに、あれが全部計算ずくでやっていたのだとしたら、相当なドライビングテクニクだ。

「ホントに、なんでもできるんだね、テルミお姉ちゃんって」

「別に、タネがあることですから、たいしたことはないでしょう」
だが、そこでテルミは変なことを口にした。

タネがあるってどういうことだ？この車、実は遠隔操作で動いているとかいふのか？でもこの車は、テルミが乗りこむまでは、俺をさらった奴らのものだったはずだから、そんな改造をする暇はないと思うんだが。

ただでさえ今日は色々あったのに、余計に混乱してくる。

「将仁さん、私がHDD内蔵型のテレビだということは、ご存知でしょう?」

ヒントか何かのつもりなのだろうか、運転を続けながら、テルミがそんなことを言ってくる。

うん。確かに、テルミは元々そういうテレビだ。そしてそのHDDの容量もかなり大きい。だから、中には録画はしたがまだ見てないものもあつたりする。

でも、それが何なんだろう。もしかしてもう容量が足りないのか? つて、それが車の運転とどう関係があるんだ?

「HDDに取り込んだ映像は、再生するとスクリーンに画像となつて現れる、これは、録画の基本原理でしょう。ですが、今の私は、「画像を映すスクリーンを出すこと」と「HDD内のデータを再生すること」を別々に行うことができます。そうなると、どちらか片方だけを行った場合にどうなるか、が気になるでしょう?」

なんか、禅問答みたいになってきたぞ。ええとつまり、テレビを点けないで映画を再生したらどうなるかってことなんだろうか。普通のテレビだったら、ただ単に映らないだけだが、わざわざ言うってことは、どうやらそうではないらしい。

「試してみたところ、画像データの再生のみを行った時、データの内容が私自身に再生されることが判つたのでしよう」
テルミは、事も無げにそう答えた。

最初は、その意味が良く判らなかつた。だが、改めてよく聞いてみると、これがまた実にとんでもない話だつた。

簡単に言えば、テルミは、彼女の中で再生している映像の人物に、完全になりきれらしいのだ。しかもそれは、最終的にやることは変えられないものの、技術的なところまでなりきることが出来るらしい。

たとえば料理番組を再生した場合、作る料理のメニューは変えることはできないが、作る量を2人前から3人前にしたり、作る手順を

状況に応じて変えたりすることは出来るそうだと。

それだけならただの万能ですむが、どうやらテルミは、映画の登場人物のような現実離れた技術の持ち主にもなりきれてしまっている。たとえばさっきのもの凄い運転も、超凄腕のドライバーが主人公である映画の、まさにカーチェイス中の主人公になりきった結果なんだそうだと。

つまり、テルミは、何年もかけてやっと身につける経験と技術を、映像さえあれば一時的とはいえ瞬間にもものにしてみせるのだ。すごく羨ましい。

「もつとも、欠点もあるので、過度に期待されても困るのでしょう」なんて謙遜してみせるが、その「欠点」とは「なりきるので、人格まで変わる」「人間の女性が物理的にできないことはできない」「再生が終了もしくは中断した場合、なりきりも中断する」などといった、メリットに比べるとそれほど驚くほどのことはないものだと。なにしろ、言い方は悪いが、うちの擬人たちは、道具に人間の能力を上乗せしているわけだから、デフォで人間離れしているのだ。それに比べればテルミの「超なりきり」の欠点は、制御できる多重人格って感じだからまだ人間らしく感じられる。

今はとにかく、その能力が悪用されないことを祈るだけだった。

13・ついに実力行使 その14

盗んだバンに乗せられてしばらく走っていると、周囲に建物が増え
てきた。歩くと遠い30kmだが、車で走るとあつというまだ。
だが、それでももう完全に夜だ。この時間じゃもう役所とかは閉ま
っているだろう。

そんなことを考えていると、車は商店街の通りに入ってきた。商店
街と言ってもこのへんはいわゆるシャッター商店街で、しかも夜だ
から開いている店なんか1件もない。それに加えて、近いうちに区
画整理がされるそうなので、もぬけの空な店も多いらしく、実際に
取り壊し中な所も見られる。

それにしても、人氣がまったくない町並みというのは、どうしてこ
う不気味なんだろう。

「あいつら、本当に無事なのかなあ」

カーステレオから流れる、初めて聞くような情報番組を聞き流しな
がら、俺はぼんやりとそんなことを考えていた。

「多分、大丈夫アルよ。撤退の合図は全力で送るしたアルね」

紅娘が、後ろの座席から身を乗り出して声をかけてくる。

まあ、屋外にいたヒビキやシデンには聞こえただろうが、鏡介には
とどいたんだろうか。あいつのアレ、光線技は、使うと爆発音が出
るからそれで聞こえなかったとかいうオチじゃないだろうな。

うん、ありうる。あいつ、必要以上にビームぶっ放しながら逃げ回
っていたもんな。

「鏡介お兄ちゃん、よっぱどビームが撃ちたかったんだね」

「テロもびつくりってか」

「鏡介さんをテロリスト呼ばわりするのは、ちょっとひどいのでは
ないでしょうか？」

あたりを包む不気味さを少しでも緩和しようと、誰とはなしにくだ
らないおしゃべりをはじめめる。

その時だ。

ぱあんつという破裂音が鳴り響き、突然、車がかくと傾いた。

「きゃあっ!?!」

そのまま、視界が大きく蛇行をする。

「ひえええええええっ」

テルミが彼女らしからぬ声を上げながらハンドルを切るが、今回はそれが裏目に出て、ワゴンがスピニングしてしまう。

「うわああああああっ!」

「きゃああああああっ!」

「アイヤアアアアッ!」

リアルでスピンする車になんか乗ったことがないので、シートにしがみつかながら悲鳴をあげるしかできない。
そして。

どんっ、ぼぶっ!

何かにぶつかり、テルミの顔がエアバッグに埋まって、車はようやくスリップを止めた。

「お、おい、みんな、大丈夫か?」

車が停まったと判って、それから20ほど数えて、それからようやく声をかける。

「うきゆう、無事ナイナイアルう」

最初に返事があったのは。俺の足元でひっくり返っている紅娘だった。相変わらずシートベルトをしていなかったらしく、急停止した時に後ろから座席を飛び越えてきたのだ。

「あうつう、おめめぐるぐる、せかいもぐるぐる」

その横で、その言葉どおり目を回したケイが、いっしょに頭まで回している。

そして、運転席では、テルミがエアバッグのしぼんだハンドルを両手でしっかりと持ったまま、そこに額を押し付けてうつむいていた。どこかぶつけて、気を失っているんじゃないかな、と思いい顔を近づけてみると、テルミが何かぶつぶつ言っているのが聞こえてきた。

「わ、私は、私は、こまった、でしょう、どうしましょう……」
何気にパニックになっているらしく、微妙に震えながら延々と同じようなことを呟いている。

「おい、テルミ」

「ひゃあ！？も、ももも、申し訳ありませんっ！」

声をかけたら、今度はものすごく取り乱した。いつも落ち着いているテルミが取り乱すのも新鮮といえば新鮮だが、今はそういう反応をされると困ってしまう。

「ほら、テルミ、深呼吸深呼吸」

本当は俺だつて落ち着きたくないのだが、みんなでパニックってたら進む話も進まない。

そして何度か深呼吸すると、テルミもやっと落ち着いてきた。

あらためてまわりを見回す。怪我人はいないようだ。

「と、とりあえず、車から、出よう」

このままここにいてもどうしようもないので、外に出ることにする。外に出て判つたのだが、俺達が乗っていたワゴン車は電柱に激突しており、前がべっこりと凹んでいた。そして前輪もパンクしている。怪我人がいなかったのが不思議なぐらいだ。

本来の持ち主ではない俺達を護るために身を挺してくれた車に感謝したい気持ちだったが、力のこともあるので、それは心の中で述べるに留めておく。

それにしても。往來でこれだけの交通事故があつたというのに、野次馬の1人も出てこない。車で走っていた時も人の気配が無いな、とは思っていたが、こうなると完全なゴーストタウンだ。

「まあ、目撃者がいないのは、いいのか悪いのか……」

「誰？」

その時、ケイがワゴン車と違う方向を見て声をあげた。
いつの間に現れたのか。そこには、街頭の光を背にして、確かに誰かが立っていた。

野次馬1号か？と思ったのだが、俺はその姿に違和感を覚えた。ぽつんぽつんとしか無い街灯を背にしたその人影は、やっと涼しくなってきたばかりだというのに、すその長いコートを羽織っていた。逆光の中で見えるシルエツトは細めで女性っぽい、変な靴を履いているのか、足が不自然にごつい。

そしてもつとも違和感があったのが、頭だった。ちようど耳があるあたりから、角のようなものが生えて見えるのだ。さらに、目のところには緑色の光の筋が1本だけ横に走っている。

夜道にロングコートを着て立っている女、というのは、露出狂の変質者か、もしくは都市伝説に出て来るでかいマスクが有名なアレぐらしいか思いつかない。そして、現物はどっちも見たことがない。ついでに言えば、目の前の人影も見たことはないはずなんだが、こいつに関してはどこかで見たような気がする。

「あ、あのー……」

その人影に声をかけてみた。少なくとも、目が緑色に光る知り合いはいないが、もしかしたら思い出せないだけかもしれない。

すると、その人影は何も言わずに、すつと右手を上げた。掌をこっちに向けているが、近寄るなってことだろうか。

それが意味することは、すぐに判った。やはり拒絶だったのだ。

その人影の掌が、ウンツといううなるような音と共に、赤い光を放つ。まさにその直後だ。

ぐおおおおおおお！

何の前触れもなく、いきなり、後ろで何かが、もの凄い音を立てて爆発した。

「どわあああ！？」

「きゃああああつ！」

「ひええええええ！？」

「アイヤー……！？」

何があったのか判らず、俺達はその爆風に吹っ飛ばされ、アスファルトの上に投げ出された。

13・ついに実力行使 その15

頭をあげて、後ろを見た時、俺はさらに驚いた。

なんでつて、さっきまで乗っていたワゴン車が、もの凄い勢いで燃え上がっていたんだから、驚かないほうがおかしい。

ということは、今の爆発は、あのワゴン車が爆発したってことか。

「わっ、わっ、わっ、火事アル、火事アル、大変アルう！」

変にテンパった紅娘が、鍋を手にその燃え上がるワゴン車をガンガンと叩いている。火を消そうとしているのだろうか、江戸時代の家屋じゃないんだから壊しても火は消えないと思うんだが。

などのん気なことを言っている場合じゃない。あの女、一体何をしたんだ！？

「お、お兄ちゃん、あれ」

そのとき、俺にしがみついていたケイが、あの人影を指差して口を開いた。

俺達の後ろで赤々と燃え上がる炎に照らされたそれは、どっかの軍隊で女性仕官が着て出てきそうな服装の上からロングコートを羽織った、銀髪の女だった。もっとも、妙にメカメカしいでかいゴーグルで顔の上半分を隠しているので、顔はよく判らない。

「あれ、あれ、えっと、えっと」

ケイはどうやらそいつを知っているらしいが、詳しく思い出せないのか答えが要領を得ない。携帯電話が人の名前を思い出せないというのは、いろんな意味で問題があるんじゃないだろうか。

なんて場違いなことを考えつつ、もう一度その女性仕官に目をやったとき、俺は思わず飛び上がりそうになった。

そいつの手のひらから俺の足元へ、赤い光の線が走り、そしてその光が当たったアスファルトがジュツという音と共に溶けたのだ。

もしかして、いやもしかしなくても多分、この光って、レーザーってやつじゃないのだろうか。なんか、光学兵器ってのはまだまだ実

用に耐えないと聞いたことがあるんだが、違うんだろうか。

「あれ、えと、ロボット、人型のロボットだよ、この前近衛さんのところにいたの」

ケイにそう言われて、やっと思い出した。確かこの前、鏡介とケイが近衛お嬢様の家に行ったときに、マンガのように高性能なアンドロイドを見たと言ってたな。

望月ナミとかいうロボットらしからぬ名前で、足と背中にブースターがあつて、空を飛ぶんだよな。ってそんなのん気なことを言っている場合じゃない。

「おい、そのロボット！てめえ何をしやがんだ！」
立ち上がると、そいつに向かって叫んだ。

いかに相手が男のロマンたる人間型自律ロボットとはいえ、うちに帰るまでの足を潰されたのだ。文句のひとつぐらい言ってやらにや気がすまない。

「声紋確認。94.74%一致。真田将仁本人と認識。無事を確認」
それに対し、そのロボットは生意気にも口を動かして、淡々とそんなことを言う。

なんか知らんが、無性に腹が立った。人間型だったから余計に、かもしれない。

横を見ると、「ワイシャツ1枚95円」と書かれたクリーニング店のものらしきブリキ製の立て看板が放置されていた。ゴーストタウンに立て看板というのもちょっとシニールだが、今は笑っている場合ではない。

俺は、とっさにその立て看板を引っつかんで振り上げた。

「てめこのおおおおっ！」

そして、天誅を下すべく、数m先に立っているロボットへと向かっていった。

後から考えてみれば、自ら命を危険に晒していたことになる。なにしろ、そのロボット女がアスファルトを溶かすレーザーを撃てることは判っていたのだから、そんなことをしたら自分が撃たれたかも

しれないのだ。

幸い、その時は撃たれることはなかった。だが、違うことで、俺はびびらされることになった。

「どりゃああああ！」

枠は中空とはいえ、金属製だ。殴られりやダメージはあるはず。俺はそう思っただけで看板をそいつめがけて全力で振り下ろした。

よけるつもりもないのか、特に目立った反応もせず、ロボット女はそこに立っている。

このままいけば当たる。そう思った時だ。

そのロボットが、急に反応した。

体を不自然に前に傾けたかと思うと。

ポッ！

という爆発のような音と共に、俺の横をもの凄いスピードですれ違っただけだったのだ。

同時に妙な風圧を受けて、俺はバランスを崩し、そこに尻餅をついてしまった。

「て、てめ………」

そいつが向かった方向を見ると、そいつは、俺から数mほど離れた、さっきまで俺がいたところに着地していた。ちょうど、俺とそいつが位置を入れ替えたような形だ。

「ひっ………」

そして、そいつは、さっきまでそこにいたケイに、右手の拳を突きつけていた。

よく見ると、その女の拳から、爪が3本生えていた。その爪の生え方は、アメコミの某ミュータントのそれによく似ている。

それはそれとしてとにかく、怯えるケイのことは放っておけない。そんなことをしたら俺はお兄ちゃん失格だ。

だが、立ち上がるうとしたところで、俺は自分が手にしていたものを見て、絶句してしまった。

立て看板が、半分、なくなっていたのだ。そして、すぐそばの地面

に、その片割れが、1つの大きな部分と2つの細長い部分となつて、すっぱり切り落とされ、地面に落ちていた。

そういえば、さっきすれ違ったとき、爆音のほかに、何かがかすれ合うような甲高い耳障りな音がしていたような気がする。

つてことは、もしかして、看板を切ったのは、あの爪なのか!?まさか本当にアダ　ン　ウム製だなんて言わないだろうな?

「動かないでください」

そんなことを考えて戸惑っているうちに、そのロボット女は、丁寧だが冷たい声でそう言いながら、左手を俺に向けた。その手のひらの真ん中辺りが赤く光っており、そして俺の腹に赤い光点が浮かんでいる。

レーザーが当たっているのだ。出力をレーザーポインタぐらいに抑えているらしく、焼けも焦げもしないが、逆に言えば出力を上げれば俺を殺すこともできる、という無言の圧力でもある。

だが、次の瞬間、ロボット女はトンチンカンなことを口にした。

「真田将仁。私はあなたを救助する命令を受けています」

「へ?」

ぼかんとしている俺の目の前で、ロボット女は続けてとんでもないことを口にした。

「15秒待機してください。実行犯を処分します」

そしてロボット女は、おびえきつて動けないケイに対し、爪が飛び出した右手を振り上げる。

「やめるゴルアアアアアアアッ!」

その瞬間、体が動いていた。つくづく俺は、自分の命を軽く見ているらしい。

だが、ケイたちを誘拐の実行犯だと思っているのだつたら勘違いも甚だしいし、そんなことでケイたちを殺されるなんて到底耐えられない。

ごいんつ。

そして、俺のストレートパンチがロボット女の頭にヒットした。

しかし。

「・・・・・・・・・・いつてえっ・・・・・・・・・・！」

俺の拳のほうで悲鳴をあげた。なんというか、中身の目いっぱい入ったドラム缶を全力でぶん殴った、そんな感じだったのだ。

一方のロボット女は、多少上体をぐらつかせたものの、ダメージを負った様子も無い。

「なぜとめるのですか」

それどころか、まったく変わらない無機質な声でそう聞き返してくる。

「なぜって、そいつらは、みんなうちの家族だぞ！？それを*されそうになってるのを見て黙ってられるか！」

拳が痛くて殴るところの話ではない。だから俺は、ロボットに通じるかはわからないが、そいつにそう言った。

すると、ロボット女は意外な反応を示した。

ぴくりとも動きはしないのだが、かわりに色々なことを聞いてきたのだ。

「家族とはどういう意味ですか」

「どつって、い、一緒に暮らしているんだよ」

「ではなぜ、あなたは実行犯の車に乗っていたのですか」

「捕まってたところから、こいつらに助けてもらったからだ！」

「なぜ、彼女たちはあなたを助けたのですか」

「なぜって、そりゃ、心配だったから、じゃないのか」

こんなおかしなやり取りを何度か繰り返すと、ロボット女は黙り込んでしまった。

傍から見ていると、周りが見えなくなるぐらいに考え込んでいるように見えた。マンガならともかく、現実にロボットが考え込むというのも変な感じだが、声をかけてみても反応がない。

壊れたか？と思いい、ちよつと近づいてみた。そのときだ。

遙か遠くから、ちよつと聞き覚えのある声？が聞こえた。しかもその声はだんだんと大きくなってくる。

やがて、その声の主が、通りの向こうから姿を現した。

13・ついに実力行使 その16

「どらああー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

そいつは、叫び声を上げながら、マフラーをたなびかせ、もの凄い勢いで走ってくる。

そして、全身を包むのは赤と黒のライダースーツ。

「むああああさああああひいひいとおおおおお！ぬあああああにあがあつたあああああああ！」

それが視認できたと思ったら、そいつはすぐに全身が見えるところにまで来ていた。

そして。

「どうりやああああああつ！」

幅跳びでもするかのようにアスファルトを踏み込み、信じられないほど高く飛び上がると、そいつは、某バイクに乗る改造人間よろしく飛び蹴りを繰り返して、硬直していたロボット女に突っ込んで行ったのだ。

「！」

それが命中するか、と思ったとき。ロボット女が、反応を示した。くるりと振り向くや、両足からジェット噴射らしいものを噴射し、バックジャンプしたのだ。

そして、ライダースーツの女が飛び蹴りを外して着地し、アスファルトにクモの巣状の亀裂を走らせたとき、ロボット女は足だけでなく背中ブースターも噴射させ、周囲に暴風を撒き散らしながら、3mほど上空でホバリングをしていた。

「邪魔が入りました。作戦は中止。撤退します」

空中に浮かんだロボット女が、俺を見下ろしながら、相変わらずの無機質な声でそう言う。

それとほぼ同時に、がしががしっという金属的な音と共に、ロボット女の背中から横に何か広がっていく。

それは、まるで、メタリックな鳥の翼のようだった。

「では、ごきげんよう」

そして、翼を広げきつた直後。ロボット女は、無機質な声に似つかわしくないそんな一言を言い残すと、爆音とともに足と背中中的ジェット？を吹かし、まるで打ち上げたれたロケット花火のようにものすごいスピードで飛び出し、そしてあつというまに夜空に吸い込まれて見えなくなった。

「……な、なんだったんだ、今は」

その姿を見上げたライダースーツの女、ヒビキが、あっけにとられて言葉を漏らす。

「そりゃ、俺のほう聞いてえよ」

俺も、それにそう答えるのが精一杯だった。

そして、ふと我に返り、あたりを見回す。

「ふえええ〜ん、怖かったよう〜」

最初に目に付いたのは、そこにへたりこんで泣きじゃくるケイト。

「もう、大丈夫、大丈夫でしょう」

それをやさしく抱きしめてなだめようとしているテルミ。

「アイヤ〜、なんかとでもないことになたアル〜」

道端に鍋を立て、そこに顎を乗せて夜空を見上げてほうけて座っている紅娘。

「チツ、今度逢ったらとっちめてやっかんなっ」

ロボット女が飛び去った方向を睨んで悪態をついているヒビキ。

そして。

「じょうかああああああんっ！ぶじかああああああっ！」

違う声が頭の上から聞こえた。

見上げると、その声の主が、急降下爆撃でもするかのようにまっすぐこつちに向かって飛んでくるところだった。

「上官、これはなんたる有様だ!？」

着陸するなり、その声の主シデンは、燃え盛るワゴン車を指差してわめいた。

「そつちこそ何だよ、遅れて来やがって。空飛んでショートカットできるんだから、あたしより先に着くはずだろ？」

そこに辛らつな口調でヒビキが文句を言う。確かに見たところ、多少は疲れてはいるようだが、今のシデンの降り方は、墜落のそれとは思えない。

「仕方があるまい！怪しい人影を見かけたのでその相手をしていただの！」

売り言葉に買い言葉、でもないだろうが、シデンが声を張り上げる。

「あん？怪しい人影だあ？そんなのさつき飛んでつたじゃねーか」

「我が言っているのはそんなワケの判らぬ者ではない！そこに、黒ずくめの怪しい輩がおつたのだ！」

そうシデンが吠え立てて、ちよつと離れたところに立つ雑居ビルの上を指差す。

なんでも、屋上に、ライフルを構えた黒い人影がいたんだそうだ。

あからさまに怪しかったため、頭上から奇襲をかけて捕まえようとしたらしい。

そして奇襲には成功したらしいが、その全身黒タイトの怪しい人影は、ライフルをまるで生きているかのように操って、シデンの手業をきれいにさばいて見せたらしい。

「一度は取り押さえたのだ。だが、油断から、逃亡を許してしまったのだ」

そう言うシデンは、本当に悔しそうに見えた。ちなみにその全身タイトは、ビルの中に逃げ込んで鍵をかけてしまったので、それ以上は追えなかつたらしい。

「ん、まあとにかく、撃たれたりしないで、良かった」

俺の口から出た言葉は、そんなもんだつた。銃火器を目の前にしてびびらないシデンの胆力は相当なものだが、それでも銃口を向けられて引き金を引かれたら一巻の終わりだ。

いかに人間離れた連中だからといっても、無茶はしてほしくない。「無茶すんじやないぞ」

そして頭をなでてやると、シデンは真っ赤になって硬直した。
その時だ。

遠くから、サイレンが聞こえた。

「ヤバいっ！」

その音に我に返り、そして、車が燃えていることを思い出した。今まで気にしていなかったが、これは十分に火事だ。

「みんな、ずらかるぞ！」

俺は、そこにいるみんなに声をかけた。

警察沙汰にはなりたくない。俺だけならいいが、ここまで来てケイたちみんなを巻き込むわけにはいかない。そして多分、みんなは俺が捕まるのを望まないだろう。

中華鍋&お玉に戻った紅娘をシデンに背負わせて空から戻らせ、俺はバイクに戻ったヒビキにまたがり（考えてみたら、ヒビキに乗るのは、擬人化させて以来これからはじめてだった）、ケイをポケットに入れて、テルミは人の姿のまま後ろに乗せて帰ることにした。テルミは元が60インチもあるプラズマテレビなので、モノの姿にしたら運ぶのが大変だ。かといって人の姿の時は万能だけど身体能力は普通の女性とそんなに変わらないから、歩いて帰るとんでもない時間がかかる、ということでごんな形になった。

申し訳なさそうなテルミと、明らかに羨ましそうなケイが、ちょっと印象的だった。

13・ついに実力行使 その17

「おかえりなさい、将仁さん」

なんとか家にたどりつくと、みんなが出迎えてくれた。

その中で、常盤さんの顔を見たら、妙にほっとした。

「常盤さん、すいませんでした。今日は役所へ行く予定だったのに」
そして頭を下げる。

「今日のことは、不可抗力ですから仕方ありません。それより、
本当に無事でよかったです」

常盤さんは、そう言ってからめがねを外し、目元をハンカチで拭いた。

「そして、みんな。俺のことを助けてくれて、ありがとうな」

「礼なんて、当然のことをしただけツスよ」

無事に帰り着いていた鏡介が、そんなふうに見える。

「カクレンボマスターガエシがMasterのsave from
kidnapperのhelpになって、ミーはhappyデー
ス！」

バレンシアは、自分の発明？が役に立って嬉しそうだ。しかしその
ネーミングセンスはなんとかならないもんだろうか。

「皆さんがうらやましいですう。危機に駆けつけるなんてえ、かつ
こいいですう」

一方で、結局何もできなかつたらしいクリンが、魅尾を抱きかかえ
ながらそんなことを口にする。まあクリンの能力は戦闘向きじゃな
いし、しょうがないよな。

「それが適材適所というものじゃ。ふわああふ」
そのクリンの腕の中で、眠そうな魅尾が大きなあくびをする。狐っ
て夜行性だったと思うんだが、妖怪になると違ってくるんだろうか。
って、妖怪だったら余計に夜に活動するんじゃないんだろうか。も
しかして夜行性×妖怪で昼に行動するようになったんだろうか。

うーん、なんか助かったと思うと、ほっとしたからかしょうもないことを考えてしまう。

「はいはい、立ち話はそこまで。準備は出来ているから、ご飯にしましよう」

その一番後ろで、ぱんぱんと手を叩いたレイカが声をあげる。

「レイカ、今日のメインディッシュは何だ？」

「味噌烏団子鍋よ。みんな疲れて帰って来ると思ったから、おかわりもいっぱい準備したわ」

「おっ、嬉しいこと言ってくれるじゃないかい」

「貴様は腹に入れば何でも良いのであるうがっ！」

「ケイもうおなかぺっこぺこー！」

そんなことを言いながら、みんながリビングへと入っていく。

なんとなくそれを見送っていたら、なぜかそこに1人だけ入っていない姿があった。

今回の救出計画メンバーの1人であるテルミが、なぜか1人ぼつんと取り残されていた。なんか、本職のメイドが、家の住人を微笑ましく見送っているような感じだ。

「将仁さん」

そして、全員が部屋に入ったところで、テルミはなぜかマントの襟元を正した。

「お帰りなさいませ、そして、ありがとうございます」

そして、深々と頭を下げてきた。

「へっ、ど、どうしたんだ、ありがとうなんて？」

俺は、その言葉の真意を測りかねて、間抜けな返事をしてしまった。助けてもらったのは俺なんだから、礼を言うのは俺だと思うんだが。

「だって、さっき、私たちを、家族って、言ったださったでしょう」

「え？」

「ほら、先ほど、ロボットと対峙した時。“家族が*されそうになっているのを見て、黙っていられるか！”って仰ったださったでしょう」

そしてご丁寧にもテレビ画面を出して、その1シーンを(テルミ目線で)再生してくれた。

「私たちモノは、持ち主に大切に扱ってもらいことが、何より、嬉しいことなのでしょう。きっと、私は、今、世界で一番幸せなテレビなのでしょ」

メイド姿に戻ったテルミは、恥ずかしげもなく、それどころかいつになく嬉しそうに言葉を続ける。

なんかそこまで言われると。こっちが恥ずかしくなってくる。

「今回のことで、私、もっと将仁さんのお役に立ちたいと思うようになったのでしょ」

「テルミ……」

だが、テルミに声をかけようとした時だ。

「じいーんーんーん」

なぜかそこに、ジト目でこっちを見るケイがいた。

「うえっ、お、け、ケイ、お前、何やってんだ!？」

「お兄ちゃんとテルミお姉ちゃんが、いいつつまでも来ないから、なああにやってるのかなああって思って見に来ただけどおおおお
お」

なんか、怒っているような拗ねているような声を吐き出しながら、だんだんと髪が逆立って目が赤くなってくる。

「なああああにを、話していたのかなああああ? かなあああああ!」
「?」

そして案の定。ケイの言葉が直接頭の中に聞こえてきた。

全く、能力の無駄遣いをしやがってからに。どうせならさっきの逃亡劇中にやってくれば良かったのによ。いきなりテレパシーが飛んでくりや大抵の奴は腰ぬかすだろうに。

「それとこれとは話がちがうでしょ おおおお」

だから俺は、テレパシーでなく普通に喋れとっているんだ。大体俺は、他人に聞かれて恥ずかしいことは何も言っていないぞ。こっちが恥ずかしくなることは言われたが。

『なあにを言われたのかなあ？かなあ？ってなに？』

2歩ほど近づいて、ケイの頭をぺしつとひっぱたく。

「あたっ!?!」

「だからいい加減、その口調でテレパシーすんのは止める、かわいくないから」

「えう、せつかく勉強したのにい」

頭を抱えて涙目で上目遣いで、でもちよつと恨みがましそうに俺を見つめてくる。

「勉強ってなんだ、勉強って。だいたいどうやって勉強したんだ」

「うう、ネットでえ」

「お前、そういうことよりもっとほかに勉強することがあるだろうが」

「だって、バレンシアちゃんがあ、『on-line searchinglyにgetできるデース!』って」

「たくあいつは。もしかしたら仕事だとか言って本当は1日中そんなことばっかやってんじゃねえだろうな。」

「まあまあ、お二人とも。おなががすいたでしょう。とりあえず、夕食にしましょう」

「うううううう、お兄ちゃんが遠ざかっていくよう」

なんか非常に気がかりなことを言いながら、ケイがテルミに引っ張られていく。

その姿を見ながら、あとでフォロー入れとかなきゃな、と切実に思った。

13・ついに実力行使 その18

「で、話ってなんなんだ？」

その晩飯の席で、鏡介が俺に「話しておきたいことがある」と言ってきたので、その飯が終わって一息ついたところで改めてそのことを鏡介に聞いてみた。

すると、鏡介のやつが「みんなにも聞いてほしい」と言い出したので、片づけがひととおり終わったりリビングに集まってもらうことにした。

「話つてのは他でもありません、今日の事件についてです」

そして、みんなの視線が集中する中、鏡介が口を開いた。

「実は俺、その黒幕らしい奴を、あの廃工場で見かけたんです」

黒幕、という言葉聴いて、その場にいたモノたちが一瞬ざわついた。

そして、鏡介は、その「黒幕」を見た時のことを話してくれた。

「さてと、ここはどのへんかな」

鏡から飛び出した鏡介が、まわりを見回す。

そこは、暗い部屋だった。どうやら手洗い場のようだが、明かりになるものが無いので詳しくはよく判らない。

そこで鏡介は、ずっと右手を掲げた。すると、指先に白い光が灯る。さつきまで何度かぶつ放していたビームの、発射前状態だ。

その白い光が照らし出した光景は、やはりトイレの手洗い場だった。とはいえ、使われなくなつて長いらしく、天井の蛍光灯は残らず割れ、洗面台には砂埃が積もり、床にはそれにいくつか足跡が残っている。

そして、人の気配は全く無い。

「こりゃ、ハズレかな」

空いた左手でぼりぼりと頬を掻く。今の彼は困なので、見つからな

いと意味が無いからだ。

だが、その時。鏡介は、誰かの話し声を聞いたような気がした。少なくとも、誰かに見つければ困にはなる。そう考え、彼は通路に出た。

通路は、トイレよりまだ比較的明るく、光が無くてもあたりの様子が十分伺える。そして、どうやら移動前にいた建屋とは違うらしいことが見て取れた。

別の建物にいるってことは、関係ない連中なんだろうか。だとしたら、驚かせてしまつかもしれない。それとも、たまたま違う建物のほうにいただけの仲間か。

いずれにしても確認してみなければ。そう考えた鏡介は、その声があるほうに目を向けた。

すると、こうこうと明かりがついている部屋が通路に面しているのが見えた。声はそこからしているらしい。

「・・・・・・・・・・か」

「す・・・・・・・・・・さん・・・・・・・・・・」

少し進むと、だんだんとその声が大きく、はっきりと聞き取れるようになってくる。

そして、その声の主がどうやら複数で、会話をしているらしいことがわかった。

少し開いていたドアの隙間から中をのぞくと、ニット帽を被った頭の悪そうな男が、手に持った携帯電話に向かって何か怒鳴っているのが見えた。

「あの携帯電話もかわいそうだな。あんな乱暴に使われて」

鏡介の口から、そんな言葉が漏れる。一番身近な携帯電話であるケイイは、将仁に可愛がられているので余計にそう思ったのかもしれない。

実際はそんな親密な関係のほうが珍しいことは鏡介もわかっているのだが、モノの立場としては丁寧に扱ってもらいたいと思う。

「ずいぶんと、苦戦しているようだな」

そこに、ニット棒の男とは別の声が聞こえた。

「いや、すぐ見つかりますって」

すると、ニット帽の男は携帯を耳に当てながらも、その声の主へへ「コヘコと頭をさげている。その様は、いかにも不良な外見にはおよそ似つかわしくない。」

どうやら、こっちのニット帽の奴は、将仁を誘拐した実行犯のリーダーらしい。

とすると、そいつが頭を下げているのは、それを指示した奴なのだろう。

「ところで、お前たちが追っている奴は、本物だろうな」

「今回は間違いありません。学校から出てきたところをツケさしましたから」

「学校に偽者が行っているという考えは無いのか？」

「えっ……あ、いや、それは」

「ふん、まあ、直接助けに乗り込んでくるぐらいだ、偽者だったとしてもそれなりに大切な奴なんだろう」

中にいる連中は、自分に気付いていないらしい。

俺達にこんな苦労させるそもものきっかけを作ってくれやがったそいつは一体どんなツラをしているのか。そいつの顔が見えるように、覗きながらちよつと場所を動く。

「あいつは!?!」

だが、その男の顔を見た瞬間。ありのままを映す鏡としてはあるまじき事ながら、鏡介は自分の目を疑った。

鏡介は、そこに座っている人物を、見たことがあったからだ。

「……六角隼人……」

そこにいたのは、服装こそ違うが、クローディア主催のパーティーで一度だけ会ったことがある、西園寺家の補佐だと言っていた男、六角隼人その人だったのだ。

「……なるほど」

そしてその時、鏡介の頭の中で一つの推論が成り立った。

引越す前から、自分たちの生活を脅かしてきた存在。あいつはその頂点かもしくはそれに近い立場にあり、それを指示しているのだろう。

この前は西園寺の味方のような顔をして近づいて来たが、やはり、あいつは、敵なのだ。

そして鏡介は、さらに恐ろしいことを考えていた。

「あいつを殺しておけば、将仁さんを狙う奴は無くなる。そうすれば将仁さんも、うちのみんなも、安心して暮らせるはずだ」

その鏡介の右手に、さっきより大きな光が集まる。さっきの光が豆電球程度であったとすれば、今の光は言うなれば車のヘッドライトだろうか。

鏡介自身、まだその「光」の威力については完全に把握できてはいない。今日、この場に来るまで試す機会がなかったためだ。だから今、ここにある光を叩きつけた場合の威力がどの程度なのかも分からない。だが、ただではすまないだろうとは予想できた。

そして鏡介は、それを実践するために扉に手を伸ばした。

が、扉に触れるか触れないかというところで、鏡介の手が止まった。六角隼人を殺した、その後のことを考えたためだ。

確かに今ここで六角隼人を殺しておけば、当面はしのげるかもしれない。だが、そうは言っても、人を殺すという行為はそれだけで普通にとんでもない話だ。

自分が罪を被るならまだいい。だが、幸か不幸か、自分は将仁さんと同じ姿をしている。だから、事情を知らない奴が見たら、将仁さんが人殺しだ、と思われ、罪に問われる可能性も無いとはいえない。それに、今の自分の役目は、将仁さんが無事に逃げ出すまで、連中の注意をひきつけることだ。むやみに蹴散らすことじゃない。

そう思い直した鏡介は、右手に集めていた光の塊を、まだ誰の気配もない通路の先へと思い切り投げつけた。

ずどどおおおおおん！

光が床に触れた瞬間。カメラのフラッシュを同時に100個ぐらい

焚いたような強烈な光とダイナマイトでも爆発したかのような轟音、そして地震のような衝撃と振動が建物を大きく震わせた。

「おわっ!?!」

舞い上がった砂埃が消えたとき、光に包まれたその場所は完全に様変わりしていた。天井も壁も床もまるで抉られたように砕け散っており、そのかけらが天井からパラパラと落ちてきている。

放った鏡介自身、その予想以上の衝撃に吹っ飛ばされ、砂埃の積もった床に投げ出されて、啞然とその光景を眺めている。

あれをもし、そのまま六角隼人にぶつけていたら。肉どころか骨まで粉々に粉碎された、かつて人間であったものの姿を想像し、さすがの鏡介もぞつとした。

そして、鏡介がぶつ放したそれは、壁をはさんだむこうにいる奴らにも衝撃を与えた。

「なっ、なんだ今のはっ!?!」

「なんか爆発したぞ!?!」

野郎どものなさけない悲鳴が上がった後、部屋の中が瞬時にあわただしくなった。

当然だ。あれだけ派手なことをやれば、目立たないはずがない。

そして、その怒号で我に返った鏡介は、あわてて立ち上がると、自分が崩した通路とは反対の方向へと再び駆け出した。

「その後しばらくしてから、もう一度様子を見に行っただんですが、そんな時にはそいつらはもうどっかいなくなっていました」

最後に、鏡介はそう締めた。

確かに、そいつは黒幕っばい。

俺は、正直、六角隼人という人物がどんな奴なのかは知らない。西園寺の元を離れるようになった経緯などについてはこの前聞いたし、それが原因で西園寺を目の仇にしているのかもしれない、ということも聞いたことがある。

もっとも、さらにそいつをそそのかした真の黒幕がいる、なんてい

るゲームみたいな展開もなくはないような気もする。そういえば、六角は近衛の開いたパーティにいたらしいから、もしかしたらクローディアの奴がその真の黒幕なのかもしれない。

「むう、口惜しい。我であれば股関節脱臼ぐらいにはしてくれたものを」

なんかシデンが物騒なことを言っている。そんなことをしたら過剰防衛だぞ、おい。

「でも、将仁さん。これは、もしかしたら、チャンスかもしれない」

その時、常盤さんが予想外なことを口にした。

「今回のケースは、鏡介さんのおかげで、六角の家が関わっていることが明らかとなりました。かつては最も西園寺の近くにあった家柄、西園寺の内情にも精通していましたから、西園寺家自体に働きかけることが容易だったことも想像に難くありません」

「But, Miss Tokiwa. That's ただの circumstantial evidence (状況証拠) だとミーンはthinkするデース。これでハ、ミーンたちがtake a legal action (法に訴える) しても、I can't make them to guiltiness (有罪にできない) デース」

「ええ、確かに私もそう思います。ですが、見方を変えれば、今まで隠してきた尻尾を見せたということです。おそらく、将仁さんが遺産を相続することを知って、六角家側も焦っているのでしょうか。つまり、今まではなるべく秘密裏にやってきたが、もうなりふり構ってられないってことが。」

とはいえ。

「めんどくせえなあ」

というのが俺の正直な気持ちだった。

下手すりゃ俺になる精子ができる前から西園寺の遺産を狙っていた、六角家。誘拐が失敗したからと言っても、そう簡単に諦めはしない

だろう。それはつまり、また何かやらかしてくるということだ。

そして、家を継いだ以上、俺は西園寺の名を潰させるわけにはいかない。いかないんだが、そのためにはこれからも六角の連中を相手にしなきゃならないのだ。

ちよっと前までただの高校生だった俺には、はっきり言って荷が重い。

でも、こいつらがいれば、必ず乗り越えられる。確信のような気持ちだが、俺にはあった。

「なんかあったら、その時は、よろしく頼む」

そして、俺は、みんなに、そう声をかけていた。

13・ついに実力行使 その19

サーチライトが、うす曇りの空を照らす。

そこに蝙蝠が描かれていたらバツ マンを呼ぶ信号になるが、このライトにはそんな小細工はされていない。

その光の中を、一瞬、鳥のようなものが横切った。しかし、それはジェット機が飛ぶ時のような轟音を立て、しかも明らかに鳥ではないスピードで光の中を取りすぎて行った。

と、その鳥のようなものが、今度はかなり減速して、再び光の中に現れた。

それは、人の姿をしていた。ただしその背中には金属的な光沢を放つ鳥のような翼があり、両足の裏側から何かを噴射して、空中に浮遊している。

その人影が、その体勢を保ったままゆっくりと地上に降りてくる。その一角は、ナイターの試合がある球場のように明るく照らし出されており、使用人らしき人物が数人控えているのが見える。

そしてその真ん中には白い椅子とテーブルが用意されており、美しい金髪の女性が腰掛けていた。その傍らには執事姿の若い男がティーポットを手に控えており、女性のティーカップに紅茶を注いでいる。

翼のある人影は、その近くへと降りてくる。人影がまき起こす爆風で、使用人や執事姿の男、そして金髪の女性の髪や衣服を激しく揺らす。夜にはあまり似合わない光景だ。

やがて、足からの噴射を止め、空から降りてきた人影は、一面を覆う芝生の真ん中に降り立った。それとほぼ同時に、がしががしつという機械的な金属音とともに背中の中が折れたままれて小さくなっていく。

「望月ナミ、ただ今、戻りました」

そして、翼が完全に収納されると、人影、コンバットドローNO.7

3 「望月ナミ」は、女性の前にひざまついた。

「首尾は、どうでしたかしら？」

それを受けて、金髪の女性、近衛クローディアがナミに声をかける。「ふふっ、失敗するはずがありませんわね。これで、真田将仁に貸しを作りましたから、私のほうが優位に立ちますわ」

そしてクローディアはティーカップを置いてから、心底愉快そうにおーっほほほと高笑いする。

「いえ、お嬢様。本作戦、失敗しました」

だが、無機質なナミの声を聞いた瞬間、クローディアはぴたっと動きを止めた。

「し、し、失敗ですって！？どういうことですか！？」

そして、椅子を倒すほどの勢いで立ち上がると、つかつかつかつとナミに詰め寄る。

「ターゲットは、我々より先に、何者かによって救出されています。我々はその途中に遭遇しました」

ナミはそれに対し、自分が遭遇した状況を淡々と話す。

「最初は、ターゲットを別の場所に移動させる途中だと判断し、移動中の車への襲撃を慣行しました。ですが、その時に同乗していたのは、誘拐の実行犯ではないと、ターゲット本人が証言しました」その報告を聞くに従い、クローディアの表情が明らかに機嫌の悪いものへと変わっていく。

「その後、ターゲット救出に携わったグループの一員と思われる者が合流し、またイリーナ様から撤退の指示が出されたため、作戦を中止し、撤退しました」

だが、無機質で極めて事務的なナミの言葉はそんなことはお構いなしに続けられる。

「それで、イリーナはどうしましたの？」

クローディアは、ナミに背中を向けて、そう聞いた。

「離脱後はまだ通信を行っていません。推測できる可能性は323パターンありますが」

「もう、いいですわっ!」

ナミの声を遮るようにクローディアは言い放ち、背中を向ける。そして、余程悔しかったのか、親指の爪をがじがじと噛む。

「お嬢様」

その時。ナミが、口を開いた。

「何っ!？」

まだ機嫌が悪いのがありありと見て取れる。普通であれば、声をかけることですら躊躇われるような状態だ。その場の雰囲気を感じないのは、さすが機械というところか。

だが、その後が続く言葉は、投げつけられたクローディアでさえ混乱するものだった。

「家族とは、何ですか？」

「はあ？」

あまりに予想外な言葉に、クローディアもぽかんとするしかなかった。

「あなた、突然、何を言い出しますの!？」

「ターゲットが、同行者が実行犯ではないと証言した際に、私の頭部に素手による打撃を行い、『家族が*されそうになっているのを見て、黙っていられるか!』と発言しました」

いささか興奮気味で聞き返すクローディアに対し、ナミはあくまでも淡々と答える。

「ターゲットは、特殊な訓練を受けていない人間。武器もないときの勝率は0.000005%以下です。それをあえて行わせる原因、そのキーワードが“家族”であると、私は判断しました」

そして、顔を上げると、ナミはさっきと同じ言葉を口にした。

「お嬢様。家族とは、何ですか？」

「そ、そんなの、そんなの……」

すると、クローディアは急に言葉を詰まらせた。

知らないわけではない。だが、そのままの意味で答えるのは、ターゲット、すなわち真田将仁が言うそれとは違うような気がした。

そして、あの男が口にした意味合いでの「家族」は、自分ではうまく説明できないような気がした。

「そんなの、ご自分でお考えなさいっ！」
結局、クローディアの口から出たのは、そんな突き放した言葉だった。

13・ついに実力行使 その20

「判りました」

黒く癖の無い髪を背中に流した女が、座卓の前に正座して、その座卓の上にあるものに声をかける。

それは、人の形に切り抜いた紙人形だった。胸の辺りに奇妙な模様が、黒い墨で書かれている。

不思議なことに、どこにも折り目が無いぺらぺらの紙のそれは、まるで吊り下げられているかのように座卓の上に立っていた。

「では、決行する時にまた連絡する」

しわがれた声が、胸の模様が変形して、人の顔のようになると同時に、その口にあたる場所から聞こえてくる。

「ほな、よろしゅう」

女がそう「言うと、今まで立っていた人型が、糸が切れたようにはたりと倒れる。

その人型をつまみあげると、女はそれを両手でくしゃくしゃっと丸めた。

「ほかしといて」

そしてそれを、傍らにいた女に手渡す。

赤い派手な着物を着崩した赤い髪その女が、掌に載せたその紙くずにふつと息を吹きかける。

すると、その紙くずにオレンジ色の火が灯り、そしてあつというまに黒い燃えカスへと変わってしまった。

「なー、あんじゅー。あつちはなんていつてきたんだ？」

ざんばら髪の少年が、黒い髪の人に声をかけてくる。

「擬人化をどおにかせえ言われましたわ。どうやら、人海戦術は無茶だったみたいどすなあ」

女は、少年の頭を撫でながらそう答える。

「んがー！あたまをなでるなあ！ガキあつかいするなー！」

少年はそれが気に入らないらしいが、女はまるで年の離れた弟を可愛がるかのようにそれをやめようとしなない。

「しかし、如何するおつもりですか、杏寿様」

「また、あの結界を張んのかい？」

そして、その後ろから、緑青色の甲冑をまとい仮面をした麗人と、法被の上から金属的光沢を放つ縄でたすきを巻いた筋肉質な大女が声をかける。

「同じことしても、また破られてまうんちゃうかな？」

黄色いゆつたりした服を着て四角い帽子を被った女が声をかけてくる。

「麟土、貴様、杏寿様のすることにケチをつけるつもりか？」

「でも龍樹さん。同じ手を使ったら、破られるのは火を見るより明らかですわよ？」

「そうどすなあ。それにあれは仕込みも必要どすから、すぐにはでけしまへんし、あちらのお狐はんは呪に鋭いようどすしなあ」

「じゃーどーすんだ？」

玄水からそう問われた杏寿は、顔を上げると、自分の式神たちを見回した。

「もう失敗は許されまへん。気は進みまへんけど、手荒に行かしてもらいまひよ」

「おっしや！久しぶりに暴れられるぜい！」

はじめに声を上げたのは、虎鉄だった。

「ふっ、暴れるだなんて、がさつで下品ですわね」

「だが、これで、擬人を相手に出来るのは我々だけだと証明できるな」

そうは言いながらも、炎雀や龍樹も乗り気のようにだ。

「はあ、なんとか話し合いで解決でけんかねえ」

「おいらよくわかんねーけど、それがもうできないからあらっばくいくんじゃねーのか？」

「せやけど、うち、あんまりドンパチやるのは嫌いやねん」

「しょうがねえだろ、あたいらは杏寿の式神なんだから」

「虎鉄はん、真っ先に喜んどったあんたが言っても、しらじらしいだけやで？」

「でも、楽しみですわ。存分に力を発揮できる機会なんて、そうそうありませんもの」

「うむ。まあむこうは擬人、我々は式神。人は、神には勝てぬことは自明の理であるがな」

「そうなのか？ひとにたおされるかみのはなして、よくあるとおもうんだけど」

「おい玄水、おめえはどうしてそう水を差すようなことを言うんだよ」

「おいらはげんぶ、みずをつかさどるからな」

「いや、あたいが言ってるのはそういうことじゃなくてだな・・・

・・・はあ」

未だに話の意味が判って無さそうな玄水の返事に、虎鉄はひとつため息をついてしまった。

13・ついに実力行使 その20（後書き）

作者でございます。

今回で、第13章終了となります。

楽しんでいただけたでしょうか。

それで、またしばらくの間、書き溜めに入らせていただきます。

そろそろネタもなくなってきましたので、「こんなことさせてほしい」という要望などありましたら、遠慮なくお願いします。

また、そのほかにも感想・文句・苦言など何でも待っていますので、宜しく願います。

それでは、また次の機会にお会いしましょう。

14・もののけ全面戦争 その1

9月27日

その時、誰も居ない家に、俺だけがいた。

家の中を歩き回ると、大きなテーブルのまわりに13脚の椅子が置いてあり、リビングのテレビ台の上にプラズマテレビが置いてある。台所をのぞくと、部屋の隅のほうに3ドア式の冷蔵庫が置いてあり、ガスコンロの上には大きな中華なべが無造作に置いてある。

窓から外を見ると、赤いオフロードバイクが駐輪スペースに置いてある。

洗面所に行くと、鏡が俺の顔を映し、風呂をのぞくと、こぶし2つほどの大きさのスポンジが石鹸置き場に放置されている。

2階の自分の部屋に行くと、机の上に携帯電話が、充電器に挿されて置かれていた。それを手にして開くと、味気ないデジタル時計が時を刻んでいる。

部屋の隅にあるタンスの上には、ラジコンのゼロ戦が置いてあった。他の部屋をのぞくと、ビジネス用の大型の机に、閉じられた状態のノートパソコンと、それと対照的な年代モノの懐中時計が置いてある。

そして、それらが、どれひとつとして、返事をしない。

この広い家の中に、俺一人が取り残され、生きている。

そう思うと、無性に寂しくなった。

その時だ。

何の前触れも無く、突然、地面がものすごい勢いで揺れだした。

あまりに激しい揺れに、俺は立っていられずにひっくり返り、床をはいつくばった。

だが不思議なことに、まわりの机とか本棚とかは、全く揺れていない。棚の上に置いてあるだけのものも、落ちてくる気配がない。

何だろう、俺だけが揺れているのだ。

「起きろー！」

そこに、なぜか人の声が聞こえた。聞き覚えのある、女の声だ。

「さっさと起きろーっ！」

その声は、だんだんと大きくなる。起きろってどういうことだ、このものすごい揺れの中じゃ、立つこともできやしない。

「おら、将仁！いつまで寝てやがる！とっとと起きやがれ！」

その声が限界まで大きくなった時。

目の前の光景が、常盤さんの部屋から自分の部屋に変わった。しかもなんか薄暗い。

だが、俺だけが揺れているのは変わらない。っていつかそのゆれ方がすごくリアルだ。

「んがぁ！？」

「あたしだって起きてんだからとっとと起きなーっ！」

そして足元から声が聞こえる。

見ると、こんな朝っぱらからライダースーツをびっちり着込んだ女が、何を考えているのか俺の寝ているベッドの端を持って、思いっきり揺すっているのだ。

どうやらさっきの誰も居ない家の風景は、夢だったらしい。なんとなく考えさせられる内容だったなあ、なんてそんなこと言ってもらるかこんな状況で！

「わっ、うわっ、こらっ、やっ、やめっ」

起こすためにやっているんだったら、起きたからもう止めさせよう、とは思ったんだが、ヒビキが滅茶苦茶に揺らすもんだから、まともな声も出せずつかまるだけで精一杯だ。

「おりゃあー！」

「どうわあっ！？」

そして次の瞬間、なぜか俺は宙を舞っていた。

どうやらヒビキの奴が、勢い余ってベッドをひっくり返したらしい。どしゅん。

そして、ベッドの横に敷いたままにしてある鏡介の布団の上に背中

から落つこちた。

「ふっ」

鏡介の上に落ちなかつたつてことは、鏡介の奴はまた早起して退散しやがつたらしい。この前勉強したので、なんとか大事なところは打たずに済んだものの、痛いモノは痛い。

「おいこらヒビキっ！てめえなんつー起こし方しやがんだ！」

「おっ、起きたか」

「起きたか、じゃねえだろっ！ケガでもしたらどーすんだよっ！」

「してねえんだからいいじゃねえか、せこい事言つてるとせこい大人になつちまうぜ？」

「そついう問題じゃないだろ！」

ヒビキの奴は、俺がどんなに吼えても大人な対応をしてくる。さらに、見てくれがあつちのが年上なせいもあつてか、なんか俺が聞き分けの無いガキみたいに思えてくる。

「・・・いつもは、そつちのが遅くまで寝てるくせに・・・」

「たまにはこんな日もあらあな。さっ、起きたんだつたらさっさと着替えてメシにするぜっ！」

嫌味のひとつも言つてやつたつもりだったが、ヒビキはあつさりそれをスルーして、笑いながら悠々と部屋を出て1階へと下りていく。

そして、後に残されたのは、妙に惨めな気分になつた俺だった。

14・もののけ全面戦争 その1（後書き）

どうも、作者です。

なんか大げさなタイトルがついていますように、今回は戦争とまではいかなくてもバトルが中心の話になります。

そしてその相手は、前回ラストに顔を出した連中です。

どんなバトルが繰り広げられるのか。ご期待ください。

しかし、毎日こんな激しいことをやってたら、全員疲労でたおれてしまいそうですな。

14・もののけ全面戦争 その2

「おい、ケイ、いくぞー」

「ちよつとまってーっ」

気を取り直して飯をたいらげ、玄関に向かつて靴を履く。

いつもだつたらケイの奴が先回りして待っているのだが、今日はなぜか俺が先に来て待っている。

何やってんだらう。もしかしていつちよまえに化粧なんかしていたりしてな。

「お待たせしました」

「わ!？」

すると、ぜんぜん違うのがいきなり姿を現した。

「あーっ!」

それとほぼ同時にケイの声がして、だだだだっ!と走ってきた。

「もーっ、常盤さんってばっ!ケイ、ちゃんと待ってたのにーっ」

そして開口一番、俺の前にいきなり現れた常盤さんを非難するようなことを言う。

「ですから先に行っていて良いと言ったではないですか」

「だって先に行ったら、常盤さんいつくるか判らないんだもん!」

どうやらケイの奴は常盤さんのことを待っていたらしい。それを目の前でブツチされたのでお冠になっているようだ。

にしても。常盤さんは一体何をしに来たんだろうか。時間にだけはうるさい常盤さんだから、今日こそはちゃんと帰って来いと釘をさそうとでもしているのかな。

「将仁さん、今日は、登下校に身辺警護をつけてもらおうと思います」

すると、常盤さんはあっさりと予想外なことを言い出した。

「へっ?警護?」

唐突なことだったので、どういふことかすぐには判らなかつた。

「はい。これから先、用心するに越したことはありませんから」

「そんな大げさな」

「将仁さん、昨日ご自分の身に起きたことを、もうお忘れですか？」
「びしゃりと言い切られてしまう。確かに昨日のことを持ち出されると何とも言えない。」

「特に、今日はきちんとして無事に帰ってきて頂きたいので」

「いや、でも、俺はそんな」

「私が警護するのでは、頼りないでしょうか？」

「いつのまにか、テルミがそこに来ていた。」

「危険なのは、人の目が無いかもしくは少ないところで、将仁さんが一人になること。そしてそれは、登校時は家から駅まで、そして帰りは、今日の場合は学校から家までがその時間帯にあたります。ですからその時間に警護をつけて、何かあってもすぐに対応できるようにします」

「なんか、ずいぶん細かいところにまで話が及んでいる。」

「でも、テルミがいないと、家の中のことが」

「ええ。ですから、テルミさんが警護を行うのは、家から駅までです。帰宅時には別の人に迎えに行ってもらいます」

「別の？」

「あたしだよ」

そこにぬっと現れたのは赤いライダースーツの女、ヒビキだった。

「いざって時は、あんたを担いででもつれて来いってお達しでね」
そしてにっこり笑う。確かにこいつだったらできそうだが、それをさ
れている自分を想像したら非常に情けない気分になった。なにしろ
大声で叫びながら時速80キロ以上出すヒビキの全力疾走は目立つ。
なんで世の中に騒がれないのか不思議なぐらいだ。そしてそこに担
がれる男というのは、なんとというか、昔話に出てくる、妖怪に攫わ
れるいけにえになったような気分で、かなりかっこ悪い。

まあ、いざそういう場面になったら、かっこ悪いなんて言ってもら
ないだろうし、それにそういう強硬手段に出られるのもヒビキぐら

いしかいないだろうし。

「つてことは、ヒビキは昼になつたらうちの学校に来るのか？」

「ああ。中に入ると騒ぎになるから、校門のところまで待つてるつもりだよ」

「ふむ」

そこで、俺はあることを思い出した。

「じゃあさ、来るときに、紅娘をつれてきてくれないか？」

すると、ヒビキはちよつと驚いた顔をした。

「そりやまた、どういう風の吹き回しだい？」

「ん、実はな、うちのクラスの女子が、紅娘に色々聞きたいらしいんだわ」

「呼んだアルか？」

すると、図つたようなタイミングで紅娘が顔を出した。その手にいつもの赤いポットを持っているので、俺に届けに来たらしい。

「ああ、ちよつど良かった。今日の午後、ヒビキと一緒に学校に来てくれるか？」

「？なんでアル？」

「この前、紅娘が学校で作った中国菓子がなんか好評でさ。あれをうちの出し物の目玉にするから、作り方を知っている紅娘をもう一度連れてきてくれてリクエストされているんだ」

「ふむふむ、ナルホドナルホド」

「で、来てくれるか？」

「もちろんそゆコトならお安い御用アル！」

紅娘は屈託のない笑顔で答えてくれた。

「さて、話もついたことですし」

すると、常盤さんがそこでパンと手を叩いてから言葉を紡いだ。

「将仁さん。そろそろ出発しないと、電車に乗り遅れますよ？」

「えっ！？」

言われて、俺はあわてて自分の手首の時計を見る。

明らかにいつも出ている時間より遅れていた。

「うっわ、ヤバイ！ケイ、急ぐぞ！」

「う、うんっ！」

返事するや否やケイは携帯電話に変身し、俺はそれをポケットの中に滑り込ませる。

そして急いで靴を履くと、カバンを手に家を飛び出したのだった。

その後を、俺を警護するという使命を負ったテルミが追いかける。

ちなみにその後、駅まで結構本気で走ったのに、しかもテルミは俺よりずっと走りにくいはずのメイド服に黒マントという格好なのに、俺とつかず離れずの距離でくっついてきて、しかも駅前であまり息を切らしていなかったのには少なからずびっくりした。多分、例の超なりきりで何かやっているんだろぅが、そこまでできてしまうのか。

「では、行ってらっしゃいませ」

そのスーパーメイド・テルミは、駅前でメイド立ち、というかあのメイドさんがよくやる手を前で合わせるあのポーズで丁寧に頭を下げて改札口へと消える俺を見送ってくれやがった。正直、ちょっと恥ずかしかった。

14・もののけ全面戦争 その3

「なあなあ、聞いたか？」

学校につくと、いきなりそんな声を掛けられた。

「聞いたって、何を？」

「なんだ、知らねえのか？峠にターボ女が出たって噂だよ」

ターボ女。単語自体は初めて聞くが、どんなもんかはいたい想像はできる。

そしてその瞬間、俺にはその正体も判ってしまった。

「な、なんだそのターボ女って」

だがそこはとりあえず、シラを切っておくことにする。当たり前だ、本当のことなんぞ話せるわけがない。

「昨日、走り屋が事故つたらしいんだけど、なんでもそれが、そのターボ女と併走したせいらしい」

「追いかけられたんじゃないのか？オレはそう聞いたぞ」

「なんか叫びながら走るんだよな」

「見ると首が動かなくなつて事故るんでしょ」
だが、とりあえず黙っていると、なんかその話が事実とかなりずれたものになっているのが判ってしまった。どうやら、都市伝説でよく出てくる「もの凄いスピードで併走する婆さん」の類と混同されているようだ。

とはいえ、混同されてもしょうがないところはある。なにしろ、噂のターボ女の正体であろうヒビキは、元がバイクだっただけに都市伝説も真っ青のスピードで走ることが出来てしまうのだ。

ついでに言うと、事故つてえのも、俺らが逃亡中に起きた、というか起こされたアレが元になっているように思われてならない。場所はシャッター商店街だったが、事故にや変わらない。
なんかそう思うと、背筋が寒くなってくる。

「おい、マサ、どうしたんだ、顔色悪いぞ」

シンイチに声をかけられ、はっと我に返った。

「お前、怖い話は別に苦手じゃないって言ってなかったっけ？」

「へっ、あ、いや、それは、なあ」

だが、我に返ってもすぐに答えが出ず、どもってしまふ。

確かに、聞くだけの怖い話だったら別に怖くもなんともないが、それが自分に関係があるとなると話は別だ。下手すれば（事故のせいでもヒビキのせいでもないが）死んでいたかもしれないからだ。

「ホントは怖いんだろ？」

「人を勝手に怖がりにするな！これはだな、昨日の夜にバイクに乗ることがあつたから、そんなので事故りたくねえなと思っただけだっ！」

思わず、全力で反論してしまう。昨日は確かにバイクに乗って走ったから、嘘は言っていない。とはいえ、そのバイクはターボ女ことヒビキの正体なわけで、そのバイクに乗っている以上ターボ女は出てくるはずもないのだが。

それにしても、引越しの時とかは真っ昼間に大通りを走ったのにそんなに噂にならなかったのに、夜に人気の無いところを走った夕べはなんでこんなに噂になっっているんだろうか。やっぱり、事故というショッキングな出来事とのコラボだからだろうか。

そんなしょうもないことを考えていると、いつのまにか先生が来ていた。

「きりーっ！礼！」

委員長が号令をかけ、挨拶をする。

ふと、その時になって、賀茂さんが居ないことに気がついた。

風邪を引いて熱が出たので今日は欠席する、と先生が言っていた。

14・もののけ全面戦争 その4

がらっ。

「二ーハオー！」

昼休み、教室のドアががらっと開き、陽気な中国語が教室にこだました。

同時に、クラス中の視線がそつちに集中する。

「李さん、来てくれたんだ！」

委員長が、嬉しそうな声をあげて、その声の主である赤いチャイナ服のところへ駆け寄る。どうやら、本当に紅娘のことを待っていたらしい。

「お待たせアルいいんちよサン、昨日は来られなくてごめなさいの
コトね」

「そんなの、李さんのせいじゃないからもーまんたいよ」

「ねえねえ李さん、胡麻餡クッキー作って来たんだけど」

「この前のタルトみたいなもの、もう一回作って！」

委員長に牽引されたように、あつという間にクラスの女子が紅娘を取り囲んでしまう。どうやら紅娘は、この前の試食会で女子の胃袋を掴んでしまったらしい。どっかの諺で、胃袋を捕まれた男は心も捕まれる、みたいなものがあつたが、甘いものに関しては女も同類なのかもしれない。

「なあ、他に誰か来てないのか？」

「またカバンの中にクリンさんとかいたりしねえの？」

「いるかそんなもん」

ヤジローをはじめとする、声を掛け損なったクラスのおぼれものが、今度はこつちに声をかけてくる。実際はケイがいるのだが、こいつらに教えてやるのも面白くないのでそつげなく返事してやる。

それに、実は今日は弁当を持たせてもらってないのだ。昨日の皺寄せが今日に回って来ているので、早く役所へ行つて済ませようとい

う腹積もりらしい。

というわけで、今日は昨日よりも早々に退散することにする。

「おい、紅娘、後は任せたぞ」

帰りがけに、クラス的女子と一緒にあって弁当を広げていた紅娘に声をかける。色合いが派手だからあれは紅娘の自前らしい。

考えてみると、紅娘お手製の中華というものはまだ数えるほども食べていない。レイカには悪いけど、明日の弁当は紅娘に作ってもらおうかな。

「あ、将仁サン！ハイ任せられましたアル！」

すると、紅娘はこつちを向いて手を大きく振りながら、すごく元気な返事で送り出してくれた。

14・もののけ全面戦争 その5

教室を後にした俺は、そのまま玄関で靴を履き替え、校門へ向かうことにした。

さすがに今週は午後の授業がないせいか、校外へ買出しに行く連中の姿が目立つ。中にはまだ昼休みのチャイムが鳴って10分もしていないのに両手いっぱい買い物袋を提げて帰ってくる奴なんかもある。いつの間に出て行ったんだろうか。

そんな連中を尻目に、俺は迎えが待っている校門へと向かう。そこでは、紅娘を学校までつれてきたヒビキが待っているはずだ。すると、その校門のところで、俺は予想外な光景と遭遇した。

いつものライダースーツにサンバイザーで身をかためたヒビキは、確かに来ている。だが彼女は、そこにいる別の誰かと、なんともめんどくさそうに話をしていた。意外だったのはその相手だ。そいつの金髪巻き毛は、特に日本だと目立つから、遠くからでもそれと判別するのは造作も無い。

「証拠は拳がっているのです。くだらないことを仰っていないで、正体を現したらどうですか？」

「あんたもしつこいねえ、あたしにや隠すようなことはねえってえの」

「あなた、まだしらを切るつもりですか！？寛大な私にも限度がありますよ！？」

「何が寛大だい、もう怒ってるじゃねえか」

「それは、あなたが癪に障るようなことを言うからですわ！」

「そう言うお前も癪に障る物言いをしてるんだがな」

近くまで行って声をかけると、金髪巻き毛のクローディアお嬢様は驚いたようにこっちを向いた。俺に気付かないほどに、ヒビキとの会話にヒートアップしていたのか。

「あ、あなた、来ていましたの！？」

「将仁、おめえ来んのが遅えよ、おかげで変なのに捕まっちまったじゃねえか」

ヒビキは、そんなお嬢様がそうとうウザかったらしい。そんなことを言いながら俺のほうに来た。

「ちよつと！変なのとはなんですか！」

すると、いつも手に持っている扇子でヒビキのほうをびしっと指し、お嬢様が声を荒げた。

「お前のことだよ！」

負けじと俺も噛み付き返す。手が出そうになるのを、なんとか堪える。なにしろ、さつきは気にならなかつたが、お嬢様のまわりには例によつて何人かの取り巻きがいて、そこから少し離れて壁に背中をあずける迅がいたからだ。

「なんですつて!？」

「普通、知らない奴に、いきなり難癖つけられりゃ、誰だつて変な奴だと思つたら!？」

「難癖などではありませんわ!いずれあなたは私のものになるので、すから、その身边にあるものについて把握しておきたいと思つのは当然のなりゆきではなくて!？」

「まだそんなこと言つてやがんのか、いい加減にしてくれ」

「あなたこそ、無駄な抵抗はおやめなさいな!だいたい、昨日もせっかく助けを出しましたのに礼の一言も無いなんて、あなたの人格を疑いますわ!」

「んなのでめえが勝手にやらしたこつたらうが!しかも無事解決したところに出てきて散々引つ掻き回しやがつてよ!」

「それも、あなたに隙があるからですわ!」

「常時ボディーガードを侍らせてる奴が、なに偉そうなこと言つてやがる!」

そして、校門の前で口論になつてしまふ。

なんで俺は、こんなのになんか付き合ってるんだらう。

漫画とかだと、こつという我侭放題のお嬢様は、思い通りにならない

相手に惹かれるなんてえのがパターンだが、こいつに限ってはその予想が外れそう、というか外れて欲しいと思う。もしこんなのが彼女になったら、図太い俺でも胃に穴が開きそうだ。

「のうわあっ!?!」

そんなことを思っていたら、いきなり後ろから襟首を引つ張りあげられた。

「なあ、将仁。口げんかするのはいいけどよ、あたしゃいつまで待ってりゃいいんだい」

俺を片手で宙吊りにしたヒビキが、俺の顔を覗き込みながら聞いてくる。

いつもだったら「何すんだ」と言っているところだが、今回は願っても無いタイミングだ。

「あー、悪い悪い。つい乗せられちゃった」

「おいおい、乗るのはバイクぐらいにしときなよ」

「へへ、面目ねえ」

お嬢様をあえて無視して、俺はヒビキと話をする。気心が知れている分、お嬢様よりこっちの相手のほうが楽だ。

「ちよつと！話をしているのは私ですよ！」

当然、自分が話の中心にないと面白くないお嬢様は俺にかみついてくる。

「俺には話すことなんざねえ！俺は忙しいんだ！」

そう言い切つてやると、お嬢様はうつと言葉を詰まらせた。

「おつしゃ今の内だ、帰るぞ！」

「あいよっ！しっかり捕まつてな！」

どうやらヒビキの奴もいかげん飽きていたらしい。俺が声をかけたら、俺は問答無用で小脇に抱えられた。

「おりゃあああああああああああ！」

その直後、光景がもの凄い速さで後ろに吹っ飛びはじめた。それがヒビキがいきなりトップスピードにギアを入れて突っ走り始めたためだと理解するのに、ちよつとだけかかった。

ちらつと後ろを見ると、我に返ったお嬢様がなにか金切り声でわめいていた。どうやら、取り巻きたちに追いかかせようとしているらしいのだが、ヒビキの足に人間が追いつけるはずもなく、その姿はあつという間に小さくなる。

そして、あつという間に、学校すら見えなくなった。

14・もののけ全面戦争 その6

それから、どのぐらい走ったのだろう。昔話に出てくる、天狗にさらわれた子供になったような気分していると、俺を抱えたヒビキの足がぴたつと止まった。

「振り切ったか？」

ヒビキが、俺を抱えたままで後ろを向く。

「うう、なあ、いいかげん、下ろしてくれねえか？」

「おう」

それを同時に、ヒビキが手を離れた。抱えられているだけだったのに、なぜか疲れた。

「ところで、どこだ、ここは？」

「さあ、適当に走ったからねえ」

「てつ、適当って、お前なあ」

「ははっ、冗談だよ冗談。下手に時間食うと、弁護士さんがやかましいからね」

その時、ポケットの中から某宇宙人映画の呼び出し音が聞こえる。

「お兄ちゃん、まだあ？」

電話に出ると、真っ先にケイの催促するような声が聞こえた。

「ああ、悪い悪い」

あたりをすばやく伺い、近くに目立った人影がないことを確認してから、再びケイに声をかける。

すると、白い光が一瞬あたりを包み、そして次の瞬間ケイが姿を現した。

「よいしょつと。えーとちなみに、ここは倭光市わこう駅と朝賀駅の間ぐらいだよっ！」

人の姿になつたケイがさっそくナビしてくれる。

倭光市駅といえば、俺の下車駅の隣だ。どうやらヒビキの奴は、俺を抱えたま一駅半も走ったらしい。

「ヒビキ、お前なあ」

「いやあ、いつペン走り出すとなかなか止まりたなくなる性質でねえ、あっはっは」

ヒビキは笑うが、俺は笑えない。実は、今のでちよつと気分が悪くなってしまったのだ。乗り物酔いにはなつたためしがないんだが、どうも腹を締め付けられて揺さぶられたのが効いてしまったらしい。なんか、この状態で電車に乗ったら、本格的に酔ってしまいそうだ。「よし、行くか」

なんかぐらぐらする頭を軽く振って立ち上がり、標識を確認してから歩きだす。

「あれ？お兄ちゃん、倭光市駅ってこっちだよ？」

すると、ケイは俺の手を取って違うほうへ引つ張る。そっちに行くこととするということは、駅のほうが距離的に近いんだろう。

だが、後戻りすることになるから、結局は遠回りになる。それに、着いたところで、電車が来るまで待たなきゃならないのが面倒だ。だいたい、一駅歩くのなんて大した距離じゃない。

「えー！？ケイそんな歩けないっ！」

だがそのことを話すと、ケイがぶーぶーと抗議をしてきた。ここから家までって、そんなに遠いのか？

「わがまま言うなって、どっちにしても駅までは歩くんだぞ？」

「だったら歩くのは駅まででいいじゃん、倭光市駅から電車に乗ったほうが楽ちんだもんー！」

「駅に着いたらまた歩くんだぞ？」

「あう、でもでもお」

「歩くのが嫌ならポケットに入ってるか？」

「やーだー！」

ケイはなぜか嫌がっている。この前はポケットの中が好きだなんてことを言っていたんだが、やっぱり嫌なのかな。

「ひゃー！？」

なんてなことを思っていると、なぜかケイの体が上に持ち上がった。

「これでどうだい？」

見上げると、なぜかケイはヒビキに肩車されていた。

「わっ、高いっ、わっ、わーっ！」

ケイは、ヒビキの髪の毛を掴んだまま足をじたばたさせている。怖がっているのかと思いきや、どう見ても喜んでいる。そしてその2人をみていると、なんか仲の良い姉妹を見ているみたいでなんかほのぼのしてしまう。

そういやケイは、ケータイフォームのときに写メを撮るために高々と持ち上げたことはあるが、肩車なんかしたことないもんな。

「いえーい！ヒビキ号れっつのごーだー！」

と思っていると、なんかケイが前を指差し、妙に高いテンションでそんなことを言った。

「おっけー！すっかりつかまってなー！」

そしてそれに乗ったかのように、ヒビキがケイを肩車したまま、走る体制になる。まさか、肩車したままで走るつもりじゃないだろうな？

と思った矢先。

「ううおりゃあああああああああああ！」

土煙が上がり、そしてヒビキの怒号が急速に遠ざかっていった。

気がついた時には、ヒビキの後姿は爪の先ぐらいに小さくなっていた。

肩車して走るだけでも難しいってのに、あんなスピードを出しやがって、途中でコケたりしないだろうな。コケたらヒビキよりケイのが危険だぞ。

「だいたい、ヒビキが学校に来たのは、俺の警護のためじゃなかったっけ？」

しょうがないので、鞆を拾うと、俺は2人が去っていったほうへと踏み出した。

14・もののけ全面戦争 その7

「腹ごしらえ、しませんか？」

繁華街を歩いていると、先を歩いていた常盤さんがくるつと振り向いてそんなことを言った。

あの後、家についたら、常盤さんが門のところまで待ち構えていて、「時間がないから」と俺をそのまま回れ右させたのだ。

そのため今日はまだ昼飯を食ってない。当然腹は減っている。

だから、レイカには悪いと思いつつも、その誘いに乗らないわけにはいかなかった。

「いいつすねえ、どこ行きましようか？」

「ここにしましよう」

常盤さんが間髪を入れずに指差したのは、一軒のラーメン屋だった。「ここ？」

「あら、将仁さん、ラーメンはお嫌いですか？」

「いや、俺はラーメン大好きですけど、常盤さんがラーメンを食べるなんて予想外だったもんですから」

「ふふつ、こつ見えても、私は麺類には結構うるさいんですよ。ほら、麺の細長い形がぐるぐると巻いているのが、ぜんまいみたいでしょう？」

常盤さんはメガネを直しながら笑顔でそんなことを言う。まあ、強引といえば強引だが、食べ物でそういう細長いものといったら確かに麺類だわな。

だが、同じ麺類でも、そばやうどんといった和麺とか、あるいはパスタなんかのほうが常盤さんには似合うと思う、のは勝手だろうか。「らっしやーせーっ！二名様ご来店ですっ！」

店に入ると、やけくそ気味に聞こえなくも無い店員の声が、客同士の雑談を掻き分けて耳に響いてきた。

決して広くない店内は、昼飯時は過ぎていくのに結構こった返して

いる。待合席にも座れず、立って待つている人までいる。

「このねぎ味噌ラーメンは絶品ですよ」

待合席の横に常盤さんと並んで立っていると、聞いてもないのに常盤さんがそんなことを言ってくる。その口調も、いつになく楽しそうだ。

「ネギラーメンって、唐辛子とか豆板醤とかで辛く味付けしているのが多いですけど、このネギはそれとは違うんです。独自のスパイスとごま油で味付けされていて、まるやかで美味しいんですよ」

「チャーシューは1枚が大きくて、また厚いんですよ。スープと一緒に寸胴にいれて煮て作るから、チャーシューと言うよりは煮豚に近くて、やわらかくてそれがまた美味しいんです」

「スープのベースは鶏がらと豚骨のミックスで、昆布や炒り子も入っていて奥深いんですよ」

「サイズは大中小とあってですね。小は麺が1玉、中は2玉、大は3玉になるんです。昔はチャレンジメニューで5玉っていうのもあったのですが、チャレンジ達成率が高くて採算が取れないから中止にしたんですよ」

などなど、この店のラーメンについてのウンチクをノンストップで語り続ける常盤さんの姿は、なんか妙にキラキラして見えた。もしかしたら、常盤さん、弁護士になっていなかったらラーメン屋になっただけじゃないだろうか、と思うほどだ。

やがて時間が経ち、カウンター席に座った瞬間、常盤さんは速攻でねぎ味噌ラーメンを頼んでいた。しかも麺は固めにとか、スープは脂多めにとかまで何の迷いも無く頼んでいる。確実に何度もここに来ているのが判る。

俺は大サイズのチャーシューメンを頼んだ。単純に、腹が減っていて、肉が喰いたいと思ったからだ。何しろ最近のうちの食事は、レイカによる栄養管理が行き届いているため、肉より魚が多いのだ。確かにレイカの作る料理は絶品だし文句はないんだが、でも俺だって現代の伸び盛りの男児だ。たまにはガッツリ肉が喰いたいときも

ある。チャーシューが大きくて厚いと聴いた瞬間、俺はその魅力に抗うことができなかった。

それからまたしばらく経って。待ちかねたラーメンが運ばれてきた。「おおっ!？」

それを見て、あまりの大きさにちよつと驚いてしまった。さすが麵3玉だ、器がどんぶりというよりはバケツかすりばちのようにかい。それに加えて、常盤さんの言うとおりチャーシューもでかい。匂いにつられてグーグーやかましく鳴いていた腹の虫が、現物を目の前にしてついに胃袋の内側を齧りだしたような感じさえする。

「おおっしゃ!いただきますっ!」

いつものように合掌し、割り箸を持って、コシヨウをふりかけようと、コシヨウの缶をどんぶりの上に持ってきた瞬間。突然、そのコシヨウの缶が、俺の手の中から姿を消した。

ちよつと横を見ると、そのコシヨウの缶はなぜか俺が掴む前にあった場所に置いてある。

「全く口にしないうちにコシヨウをふつちゃ、だめじゃないですか!そして、なんかよく判らないが怒っている常盤さんがそこにいた。このパターンは、常盤さんが時間を止めて俺からコシヨウの缶を取り上げたに違いないんだが、何で怒っているんだろっ。」

「将仁さんはこのラーメンは始めてなんですから、まず一口食べて味を確かめてから、味を調整するべきです」

なんかよく判らないまま、常盤さんに怒られてしまう。しょうがないので、一口ズルズルとすすってみる。うん、確かに旨い。常盤さんがあれだけ熱弁するのもわかる。昆布や鰹節の風味ってのはいまいちよく判らないんだが、ちぢれた中太麺とそれに絡むこつてり濃厚なスープは、確かに素敵な味わいだ。

でもやっぱりスパイシーさが足りないような気がしたのでコシヨウの缶に手を伸ばすと、こんどは常盤さんも文句を言わなかった、

14・もののけ全面戦争 その7（後書き）

どうも、作者です。

お待たせして申し訳ありません。

次回（その8）からバトルが始まります。

14・もののけ全面戦争 その8

「ふいっ……」

まだ夜もさほど更けていないのに、俺は風呂に入っていた。

今日は、本当に疲れた。

ラーメンは結局スープも残さずきれいにたいらげてしまったのだが、その後が大変だった。

あの後、すぐに役所へ行って色々な書類の届け出をしてから、ほとんど休み無しで税務署やら何やら、中には生まれてこの方行つた事がないようなところまで行くことになり、緊張したり混乱したりで、本当に大変だったのだ。

事務的手続きや交渉ごとなんかは全部常盤さんがやってくれる（ことうい姿を見ると、本当に優秀な弁護士さんなんだなと思う）のだが、書類の中には直筆でなければならぬようなものが結構あり、それに、手続きについて説明される（説明することが義務らしい）ことも意外に多く、そういうときはやっぱり聞き流すわけにもいかないで聞いてしまう。そうやって自分なりに真剣に向き合つと、慣れないこともあり余計に疲れる。

というわけで、今日は帰ったら仮眠でも取るか、と思つたんだが、それだとうちのモノたちに「汚なーい！」と言われるのがオチなので、風呂を沸かして、今まさに湯船に漬かっているところだ。

風呂といえば、最近わかつたことだが、うちのモノたちも風呂には入っているらしい。もっともそのほとんどが湯船に漬からないでシヤワーとかで体を洗うだけというカラスの行水で、湯船に入るのは俺と鏡介、そしてクリンぐらしい。

俺だつて健全な若人だ。入浴シーンを覗きたい、と思つたことがないわけではない。ないのだが、いざ事に及ぼうとすると必ず邪魔が入る。うちは頭数が多いから誰かに見つかるなんてことはよくあることで、たまたま誰にも会わなかつた場合でも、入っている奴が邪

魔するのだ。たとえばノブに手をかけようとしたその直後に自分の部屋に戻っていたり（常盤さんが時間停止をして、俺を運んでいるらしい）、ドアノブに手をかけた直後に「ダメ！」という声が頭の中に聞こえたり（ケイのテレパシーもどきだ）、あるときなんかドアだけが凍結して全く動かなかった（レイカの仕業だ）りする。

もとがモノだって知っているから、ダメだったら「モノの入浴シーンだから別にいいや」なんて諦めてしまうのだが、これがシンイチやヤジローだったら何度でもチャレンジするんだろうな。

「まあ見たいのは判るけどなー、見るだけじゃーなー」

湯船に肩まで漬かり、誰に言うでもなくそんなことを口走る。

「もうちょつと熱くするか」

なんかこのままでは風呂の中で寝てしまいそうだったので、蛇口をひねってお湯を出す。

蛇口から勢い良くお湯が出てくる。そのお湯が変だと気付いたのは、それからまもなくだった。

色が黒っぽいのだ。墨汁のように真っ黒ではなく、いわゆる薄墨ぐらいなのだが、間違いなく黒い。

なんだこれ！？と思い、蛇口を閉めようと思った。

が、今度は体が動かない。湯船に漬かっている部分が、まるで縛り付けられたようにぴくりとも動かないのだ。湯船から出ている部分はまだ動くのだが、蛇口に手が届かない。

なんか、テレビで見たホラー映画のワンシーンが思い浮かぶ。ちょっと待て、いつのまに俺はホラー映画の世界に入り込んだんだ。

そうしているうちに、黒いお湯はじゃばじゃばと風呂桶に入ってくる。

なすすべもなく風呂桶のお湯が黒く染まり、あふれそうになった、その時だ。

湯船一杯に広がっていたその黒いお湯の、「黒」の部分が、すうつと俺の前に集まりはじめたのだ。墨つてのは本当は黒い液体ではなく、非常に小さな粒が水の中に浮いているというが、言うなればそ

の粒が1箇所に集まり始めたといった感じが。

いずれにしろ、気味が悪いのには変わりがない。なんとか離れようとはするが、風呂の湯に漬かった部分はまるで固まったコンクリートの中にいるみたいに全く動かない。

「んがあああつ！」

それでも何とか動かそうと、腹に力を入れた瞬間。

ぶお。

腹の中から、ガスが出てしまった。変なところで緊張感がねえな、オレは。

そしてそのガスで出来た泡が、目の前で水面まで上がってきて弾ける。

だが、事態はそれで収まらなかった。

その直後、今度はざばあああつと、目の前に水柱が立ったのだ。

「ぶはあ!？」

いきなり水をぶっ掛けられ、俺は面食らう。なにしろ動くのは右手だけだ。俺はその水柱、風呂だからお湯柱か、とにかくそのしぶきをモロにかぶってしまった。

「な、な、な、なんだ!？」

だが、その水しぶきをぬぐった時、俺はそこに見覚えのないヤツが湯船から飛び出していくのが見えてしまった。そいつは洗い場の下りるとげほげほと激しくむせ返っている。

それは、ケイよりちよつと年下ぐらいの、やんちゃそうなガキだった。全体的に痩せてて色黒で、髪は真っ黒でぼさぼさ、やはり黒で膝丈ぐらいの少々ボロいズボンを履いており、上半身は服というよりは黒いロープ、というか平べったく編んだ細い帯みたいな長い紐を幾重にも巻きつけている。そして背中には、表面が黒光りしている以外はどう見てもでっかい亀の甲羅みたいなものを背負っている。

そしてそいつは、本当に危険なものを手に持っていた。何か黒い棒みたいなものを持っていると思ったら、その棒は鋭く光る尖ったヤ

りみたいなものだったのだ。

「てっ、てめーっ、なにしゃがんだーっ！」

突然風呂に現れたそのガキは、むせるのが落ち着いたと思った直後、くるっと振り向き、手にしたその棒、いや、ヤリを俺めがけて振り下ろしてきたのだ。

「どわあっ!？」

その切っ先が俺の頬をかすめ、壁のタイルに突き刺さる。

突き刺さった部分を間近で見ると、その銀色の穂先は蛇の頭みたいな形になっていて、口から出た舌の先が2つに分かれて伸びている。そしてその先が、壁のタイルにまっすぐ突き刺さっているのだ。タイルのほうは、そこから亀裂が入って真っ二つに割れている。

「あ、あ、あぶねーじゃねーか！」

足があるってことは、幽霊じゃないようだが、風呂に入るのに服を着たままでそんな凶器を持って入ってくるって、一体なんなんだ、このガキは。

「うるせー！いきなりひとのがんめんにへなんかかましやがってー！ゆるさねー！」

そいつはそんなことをわめきながら、タイルをかち割って突き刺さったヤリを壁から抜こうとする。

「おいこら、ガキ！そんなあぶないもん振り回しちゃダメだって親から教わってねーのか！」

そんな物騒なもんをまた振り回されては非常に危ないので、動かせる右手でそのヤリが抜けないよう押さえつける。とはいえ、動かそうにもびくともしないから、そんなことしなくても抜けないのかもしれないが。

「うるせー！くっせーへえしやがって、はなしやがれー！」

すると、その黒いガキんちよはまた湯船に入ってきて、水しぶきを挙げながらボカスカと殴る蹴るしてきやがった。このガキ、俺が動けないのをいいことに好き勝手しやがって。

ふと、俺が動けない風呂桶の水の中でなんでこいつはこんな元気に

動けるのだろうという疑問が浮かんだ。

だが次の瞬間には、俺を殴る蹴るするこのクソガキに対する怒りに変わっていた。

「いいかげんにしろこのガキ、怒るぞコラ！」

「オレはガキじゃねー、げんぶのげんすいだ！」

そのガキはそんなことを言ってくる。

玄武っつーのは陰陽五行で水を司るもので、蛇がからみついた亀の形で表わされる。なるほど、そういえばこのガキが背負っていたのはどう見ても亀の甲羅だし、この壁に突き刺さったヤリの先端は蛇みたいだ。玄武を擬人化したら、こんな感じになりそうだ。

俺しかいない風呂桶から出てきた時点でなんとなくは判っていたんだが、やっぱり、このガキは人間じゃないらしい。

「うりゃ！」

「ぐひゃ!？」

いい加減腹が立ってきたので、一瞬だけヤリから手を離し結構本気の水平チョップを食らわす。それは、玄武だと言うガキのこめかみにヒットし、ガキはひっくり返って湯船の中で水しぶきを立てる。

ヤリは壁に刺さったままだが、良く見るとそのヤリの尻のほうには黒くて平べったい紐が繋がっていて、それがガキの体に繋がっている。つまり、こいつが体に巻いているヒモの先にこのヤリがついているのだ。

っーことは、この風呂桶から出ることができれば、俺はこいつから逃げられるのではないか？

14・ものけ全面戦争 その9

「いつてー！」

ガキがひっくり返った瞬間、俺の周りの水が動くようになった。体が動かなかったのは、やっぱりこいつの仕業だったようだ。

これ幸いと湯船から左手を出し、風呂桶から出ようとしたが。中腰になったところで、また水が固まって動かなくなってしまった。

「やりやがったなー！」

そして、起き上がったガキは、何を思ったのか、俺が入っているお湯の表面を、自分の拳でぶん殴った。

悔しがっているのかと思ったが、その直後、バカンという音が天井から聞こえた。見ると、天井が1箇所凹み、そして、その天井から水がポタポタと落ちている。

何があったのか、それはすぐに判った。

ガキが再び水面を殴った直後、目の前の水面が盛り上がり、そして塊となって天井目掛けて飛んでいったからだ。

とっさに上体を反らせてかわした直後、その水の固まりは、バカンという音とともに天井にぶちあたり、天井をまた凹ませて水しぶきをばら撒く。

「てめーよけんな！あたらねーじゃねーか！」

「バカ言つな、当たったら痛いどころじゃないのだから！」

実際には、当たったら痛いどころじゃないのだから、売り言葉に買い言葉でそう口走ってしまう。

「うるせー！だったらつぎはこれだこのやるー！」

玄武のガキは、そんなことを言うと、突然頬を膨らませた。

「ぶっ！」

そして、何かを吹き付ける。反射的に体を右に倒すと、俺の頭があったところを何かが通り過ぎていった。見ると、タイル張りの壁に銃弾でも打ち込んだかのように、タイル張りの壁が一部砕けている。

「てっ、てっ、てめえっ！殺す気が！」

思わずガキに怒鳴り返す。このガキがさっきからやってることは、どう見ても俺を殺しにかかっているものなので、今更といえば今更なことだが。

当然のごとく、ガキは返事のかわりにたてつづけにその何かをこっちに吹き付けてくる。まさか唾や痰じゃねえだろうな。

「てめー、なんでよけんだよ！にんげんのくせに！」

「人間じゃなくなつてよけるわい！」

紙一重でかわし（必死になれば結構なんかなるもんである）ながら、反撃か脱出のチャンスを狙う。隙がないわけではないが、足腰が固定されているせいでパンチも届かないのだ。

くそー、誰か助けてくれー！

と口には出さないがそう思っていた時だ。

「あらあ？」

その場にそぐわない、のんびりした声が聞こえた。

見ると、玄武と名乗るガキの後ろに、いつの間に入ってきたのか、すばらしいプロポーションをした銀髪の女が、素っ裸で立っていた。

「うわ、クリン、なんでお前!？」

思わず叫んでしまう。

だが、その突然の登場に驚いたのは俺だけじゃなかった。

「な、な、な……」

素っ裸のクリンを見た玄武のガキも、顔を真っ赤にして硬直してしまったのだ。どうやらこいつは、女の裸に免疫がないようだ。

「あらあらあ、どちらさまですかあ？」

一方のクリンはというと、全く動じる様子が無く平然としている。ふとその時、下半身を感じていた圧迫感が無くなっていることに気が付いた。試しに力を入れてみると、さっきまでコンクリートにでも埋まったかのように微塵も動かなかった足腰が動くようになっていたのだ。

玄武のガキの注意がクリンに向いているからだろうか、このエロガ

キめ。だがこれはチャンスだ。

「クリン！取り押さえる！」

とっさに俺は、クリンに向かってそう叫んでいた。

「へっ？」

さすがに叫んだらガキも反応したが、次の瞬間にはまたクリンの又ードを見て硬直してしまう。

「はあい、捕まえましたよお」

そして、げんぶのげんすいと名乗っていたそのガキは、逃げようともしたのか後ろを向いたところで、クリンにあっさりと抱きすくめられた。

「この子、誰ですかあ？」

硬直しているのか脱力しているのか、耳まで真っ赤になりながら微動だにしないそのガキをぎゅっと抱きしめたまま、緊張感のない声でクリンが聞いてくる。

「俺もよく判らん、その蛇口から出てきた」

と、そいつが出てきたらしい、ざばざばとお湯を出し続ける蛇口を指差す。

その時になって、俺は水を出しっぱなしだったことに気がついた。すでにお湯は風呂桶からあふれて床に流れ落ち、そして排水口へと勢い良く吸い込まれている。

あわてて俺はその蛇口を止めると、そのまま風呂桶から飛び出した。

「クリン、ちょっと待っててくれ。助けを呼んでくる」

「あ、この子、どうしましよおかあ？」

「ん、とにかく、捕まえていってくれ、逃がすんじゃないぞ」

「はあい、わかりましたあ」

タイルがいくつも割れ、天井にはでかい凹みができて亀裂が走っているという散々たるこの風呂場の状況に似合わぬクリンののんびりした返事を聞きながら、俺は風呂場を飛び出した。

「くそ、なんだったんだ」

全力で体を拭きトランクスだけ履くと、俺は脱衣所を飛び出した。今はクリンが押さえているが、あのガキンちよが本当に玄武だとすると、それに並んでいるのは確か青龍とか白虎とかいう猛獣みたいな奴だから、やっぱり玄武もそれ相応に危険なんだろう。

援軍が必要だ。それも、なるべく水に強い奴が。そうなると鏡介か紅娘、あとヒビキか。りゅう兄もいるが、クリンの裸を見せるのはもつたいないというのは冗談で、いくら強くても人間の身でアレの相手をさせるのは危険すぎる。

そして、紅娘は、今頃だとレイカと一緒に夕食の準備をしているはずなので、キツチンに駆け込んだ。3人の中で、もつとも近くにいると思っただからだ。

「あら………将仁君、着替えぐらいちゃんとしなさい」

だが、そこにいたのはレイカひとりだった。ガスコンロの前で、だし汁にぶつ切りにした野菜を入れている。かつおだし独特の香ばしい匂いが鼻腔をくすぐるが、今はそれどころではない。

「れ、レイカ、鏡介か紅娘、知らないか!？」

「え?紅娘なら、テルミさんがケイちゃんを連れて、迎えに行っているけれど」

そういわれてみれば、そうだった。紅娘はまだ学校にいるから、醤油とみりんが切れたからスーパへ行くついでに迎えに行ってくるって言うてたっけ。くそ、肝心なときにいないな。

「どうしたの、そんな鬼気迫った顔をして」

「き、緊急事態だ、いま、風呂場に、侵入者がいるんだっ!」

「………それは、大変ね」

レイカは、驚いているのかそうでもないのかよく判らない返しをしてくる。レイカは素面だと感情表現が乏しいからな。

「それは泥棒かしら」

「あ、いや、それはよく判らないけど」

ただ、冷静で落ち着いているレイカとやり取りをしているうちに、俺自身も落ち着いてきた。

そして、レイカに、今さっき風呂場であったことをかいつまんで話す。

「それで今、クリンがそのガキのことを捕まえているんだが、一人だと大変かもしれないから」

「手助けが欲しいということね。確かに、ほおつてはおけないわね」とすると、レイカがこちらに向き直って聞いてきた。

「まだ、その子とクリンはお風呂にいるのかしら？」

「ん、ああ、多分」

「そう。少し待っていて、火を消してくるから」

どうやら、レイカが来てくれるらしい。どうやらあのガキんちよは水を操るみたいだから、氷と冷気をあやつるレイカは相性がよさそうだ。

だが、そのレイカがガスコンロに手をかけようとした、その時だ。鍋がかけられたガスコンロの火が、不意にポツポツと妙な音を立て始めたのだ。はて、コンロの調子が悪いのだろうか。

と思った直後だ。

突然、ポウンツ！という爆発音と共に、ガスコンロがオレンジ色の火柱を吹き上げたのだ。

「!？」

さすがのレイカも、これには驚いたようで、目を見開いて硬直している。

「見つけましたわよ」

そして、その火柱の中から、聞き覚えの無い女の声が聞こえた。気のせいかと思っただが、その火の中に人影が見えた時、それは気のせいではないと思った。

今度は、火の中から、何者かが現れたのだ。さっきの水道の蛇口と

いい、うちの家具はいつからそんな妙なものが出てくるようになったんだろうか。

「この朱雀の炎雀が」

炎の中に見える人影が、澄ました声でそこまで言った、その直後。ばしゃ。

目の前に立っているオレンジ色の火柱が吹き飛ばした、鍋とその中に入っていただし汁と具材が、その火の上から降ってきたのだ。

「きゃあああああああ!？」

見事なまでに頭からそのだし汁を被った、その炎の中に見えた人影が、悲鳴をあげる。最後に、アルミ製の鍋がコンという間抜けな音を立てて人影の頭にヒットした。

なんかマヌケな光景だが、これは火の中の人にも予想外だったらしい。だし汁が落ちきると同時にオレンジ色の火は消え、そのかわりに、真っ赤な着物を着て、染めたように赤い髪を冠のように複雑に束ねた女が、頭を抱えてうずくまっていた。

ここでもまた、さつきまではいなかったはずの人が、現れるはずのないところから現れた。しかも、今度は朱雀のなんちゃらと来た。

朱雀つーのは、陰陽五行の考え方に出てくる奴で、火を司り、孔雀のようなニワトリのような姿の真っ赤な鳥で示される。さつきの玄武のガキ同様、火の中から出てきても良いような気はする。

朱雀のなんちゃらと名乗ったその人は、頭を抱えたままで何かブルブルと震えている。やつぱりさつきまで火の中にいたぐらいだから、お湯でも冷たいのかな。

「……………よっ……………」

へ？

「よくもよくもよくもおおおおっ！」

だが、その直後。その女は、そう叫びながら立ち上がると、ガスコンロの上で身構えた。

赤い髪に赤いアイシャドウとか口紅とか、ずいぶんケバいい女だな、と思った、その直後。女の全身から、火が吹き出した。それはまるで、ガソリンか何かを頭からまんべんなく被ってから火を点けたかのように、頭のとっぺんから足のつま先までが炎に包まれた人型の火柱と言うにふさわしいものだ。

「よくもこの炎雀を、莫迦にしましたわねえええっ！」

その女は、炎に包まれたままヒステリックな声を上げる。そしてそのままガスコンロから飛び降りると、俺のほうを睨みつけて、右手を高く掲げた。そこにひときわ大きな炎が灯る。

自分で間抜けなことをやっていて逆切れされてもこっちは困る。しかもそいつの手には、明らかに危険な巨大な火種があるのだ。あんなのをぶつけられたらヤケドじゃ済まないだろうし、外れたとしても燃えるものに当たれば火事になるのは間違いない。

その時。レイカがすっとな俺の前に立ち、身構えた。

そして。

「はあああああっ!」

いつものクールさはどこへやら、気合と共に左手を突き出した。その直後、ごおおおおおっという轟音とともに目の前が真っ白になり、室温が一気に低くなった。

数秒後、その白いスクリーンが消えたその向こうには、すっかり雪化粧をしたキッチンが、そしてその真ん中に炎雀と名乗った女が、右手を掲げたままで硬直したように立っていた。何があったのか判らないといった表情をしており、そしてなにより体中を包んでいた炎が、右手の火の玉共々すべて消えていた。

「・・・な、なんですの、今のは」

「火の用心」

左腕を伸ばしたまま、レイカはそう言い切った。

「将仁くん」

そして、首だけをこっちに向けたレイカが口を開く。

「鏡介くんは2階にいるわ。ここは私が引き受けるから、早く行きなさい」

その口調は、落ち着いてはいるが、同時に静かな怒りを含んでいる、ような気がした。

「くっ、行かせませんわよ!」

我に帰ったらしい赤い女が、俺に向けて手を突き出す。

すると、その女の手のひらから、オレンジ色の炎の塊が襲い掛かってきた。映画とかで見た火炎放射器を、こっちに向けて発射したかのようなのだ。こんなのに包まれたら、命はないぞ。

「うわわわ!?!」

情けない声が出てしまう。だが、俺の前に立つレイカは妙に落ち着いていた。

そして、自分の口を左手でスッと隠すと。

「フッ!」

その手を退かすと同時に、何かを吹き付けるかのように勢いよく息

を吹きつけた。

すると、その息が目の前で白い霧となり、火の塊をかき消してしまつたのだ。さすがはリアル雪女、こんなもんで動じないらしい。

「生憎、火事なんか起こさせるわけにはいかないのよ」

そう言つと、右の袖口から麦茶のいっぱい入つた麦茶ポットを取り出し、そしてその場で一気にあおりはじめる。

あつという間に、2リットルはあるはずのポットが空になる。

レイカは空になったポットを流しに放り込むと、軽く口をぬぐつた。「どうしても火事を起こしたいのなら、この氷室怜香をスクラップにしてからにするのね」

その右手は、何かを待つかのように左の袖に差し込まれている。

「……………ふふっ」

すると、今度は炎雀と名乗つた赤い女のほうが生をあげた。

「ずいぶんと、素敵なことを仰つて下さいますわね。たかだか電気冷蔵庫ごときが、朱雀に勝てると思いかしら？」

そう言いながら右手に火を宿し、そして円を描くように大きく振り回す。すると、その火が鞭のように引き伸ばされ、そしてその先が床を叩いた。

雪化粧が一瞬で消え、床があらわになる。

「あなたこそ、少し頭を冷やしたほうがいいんじゃないかしら」

だがレイカはそれに微塵も動じることなく、左袖の中から右手で何かを引き抜くと大上段から振り下ろした。

それは、ゆるやかに反り返つた、そしていつもより幅が広く厚みもある、氷の巨大包丁だった。

「放火は罪だということ、教育してあげるわ！」

そしてレイカはその刀を構え、炎雀に切りかかる。

炎雀は、それを踊るようなステップでかわす。その軌跡にオレンジ色の火が残像のように残る。

「できますかしら、この炎雀に！」

そしてステップを踏みながら炎の弾丸をばら撒き、炎の鞭を振り回

す。

「心配しなくても、全力で教え込んであげるわ！」

それに対抗してレイカは右腕を振るう。袖口からニンジンやナスやトマトが飛び出し、弾丸を打ち消す。そして鞭を氷の包丁で跳ね返した。

なんか、特撮を見ているみたいで圧倒されてしまう。氷と炎のエクスタシーなんていうわけのわからないフレーズが頭に浮かぶ。だがそれは、どんなに間違っても、妙齡の着物姿の女性たちがリアルに繰り広げる光景ではない。

「早く行きなさい！」

ぼけっと突っ立ってたら、レイカにそう怒鳴られてしまい、あわてて俺は2階へと飛び出していった。

14・もののけ全面戦争 その12

「鏡介！いるか！」

2階に上がると、俺は自分と鏡介の部屋に駆け込んだ。

「将仁さん、何かあったんすか!？」

すると、まさに今部屋から出ようとしていた鏡介とはちあわせした。

「し、侵入者だ、人の姿はしているが多分人じゃない、侵入者だ!」
そこまで一気にまくし立て、一息つく。そして改めて鏡介を見ると、何か混乱した顔をしていた。

「ちよ、将仁さん、落ち着いてください、話が見えないんですが」
うん、どうやら伝わっていないようだ。

一息ついたところで、風呂とキッチンに信じられない形で現れた侵入者のことと、それぞれをクリンとレイカが相手していることを告げる。

すると、鏡介の目つきが真剣なものになった。

「それで、悪いが、どっちかの援護に向かってくれ。判断はお前に任せる」

「わっかかりやした!」

そして鏡介は部屋を飛び出し、どどどどと激しい音を立てて階段を駆け下りていく。

これで、少しはマシになるだろう。鏡介は元々鏡だから耐水性もあるし、あいつのバリアなら炎もものともしないだろう。

少し安心したところで、自分の格好がトランクス一枚だ、ということとを思い出した。

タンスに飛びつくと、シャツとトレーナー上下を適当に引っ張り出し、それらを身につける。

そしてひととおり着替えが終わり一息ついたところでふと窓の外に目をやった俺は、思わず息を呑んでしまった。

ありえない光景がそこにあった。俺の部屋は、東側にちょっとした

バルコニーがあるのだが、そのむこうに、うつそうとしたジャンゲルを思わせる、太さも種類も様々な蔓植物が絡み合って立っている光景が見えたのだ。その中にはこの前俺が枯らしたはずのバラっぽいトゲの生えたものも混じっている。

そしてその前、ちょうどバルコニーの縁に、誰かが腰掛けているのが見えた。それは、人のようにも見えるが、木の枝やつる草が絡み合ってそう見えるだけのようにも感じられる。

俺がそこまで把握した直後だ。

突然目の前のガラス窓が割れ、そしてその何かが部屋の中に飛び込んできた。

そいつは、部屋の床に着地すると、すつくと立ち上がる。

俺らが学園祭で仮装として着る、中国の甲冑によく似たものを身に付けている。ただその色は少し緑がかった青色で統一されており、しかも必要以上にがさばって見える。そして染めたように見事な青色の髪をポニーテールにし、小さな角が2つ生えた仮面で目許を隠していた。

「真田将仁ッ！貴様の命、この青龍の龍樹が貰い受けるッ！」

その甲冑を着た奴は、腰から引き抜いた剣を八双に構え、少しハスキーな女の声でそう言い放ちやがった。

「とうっ！」

そしてすかさず間合いを詰めるとその剣をなぎ払ってくる。なんとかかわすが、すぐに次の攻撃が繰り出されてくる。

「はっ！」

「うわっ！」

とっさに、仮装で使う予定だった削りかけの丸棒を拾い上げ、振り下ろされる剣を受け止める。すると、かんっという有機質な音が聞こえた。

見ると、その青龍を名乗った女が振り回していた剣は、木でできていた。幅も厚みもそれなりにあるので当たれば痛いのは間違いないが、それでも刃がないだけやりやすい。

そういえば、青龍つてのは玄武や朱雀と同様、陰陽五行のひとつの象徴で、木を司どっている。外見はその名のとおり青い色をした龍になるらしいが、ここでいう青は、ブルーだけではなくグリーンも含むらしいから、なんとなく目の前の奴のイメージにも合う。

それはともかくとして。

「おりゃあつ！」

「くっ!？」

渾身の力を込めて剣を押し返すと、そいつがバランスを崩し、数歩後ずさる。そして体勢を立て直すと、その場で身を屈め、木の剣を横にまっすぐ伸ばした。

その様を見た俺は、もしかしたら自分でも相手ができるかも知れないと感じた。

そのため、俺は手にした丸棒を改めて構えなおすと、青緑の甲冑女を睨みつけた。いい加減、逃げるばかりというのも癪だったからだ。だが、甘かった。

「ほう、たかが人間が刃向かうつもりか。私も甘く見られたものだ」
言うなり、甲冑女はすつくと立ち上がると、剣を頭上に振り上げ、そして勢い良く振り下ろした。

その瞬間だ。ジジツツという音と共に、木でできた刀身の表面が青白い光で包まれ、そしてその周りを小さな稲妻が取り囲むように光りだしたのだ。

それは、以前暴走した時のバレンシアの目をどことなく連想させる。そしてそれは、あながち間違いはなかったのだ。

「受けてみよ！」

甲冑女が剣を軽く振るう。ヴンツというさつきは聞こえなかった音が耳に入る。

そして切っ先がカーテンに触れた、その時だ。

バシユウツ!!

そんな耳障りな音と共に、青白い火花が飛んだ。そしてカーテンは見事に切り裂かれ、切り口には雷が落ちたような無残な焦げ跡が残

されていた。

「な、なななっ!?!」

「わずかとはいえこの私に本気を出させたのだ。責任は取ってもらおう」

「それは関係ねえだろーっ!」

そんな俺の言葉もどこ拭く風、甲冑女はまた間合いを詰め、放電する木剣を遠慮なく振り下ろしてくる。とっさにさっきと同じように丸棒で受けるが、今回はそれでは済まなかった。

何か焦げ臭いにおいがするので見てみると、あっちの剣が触れたところが黒く焦げ、そしてえぐれていたのだ。ってことは、体に当たったら痛いどころではない。

「そら、そら、そら!さっきまでの威勢はどうした!」

防戦一方になった俺に向かって、甲冑女は遠慮なく剣を振るってくる。なんとか受けても、その度に丸棒は少しずつえぐられ、細くなっていく。

そして逃げようにも、そこに踏み出すタイミングがない。なんとか攻撃を裁けているのも、それに集中しているからで、そうでなければあの電気木剣の餌食になってしまう。

「せいやあっ!」

そして、甲冑女がそう叫んで剣を閃かせた時だ。

ぱきっ、という情けない音と共に、攻撃を防いでいた丸棒が、真ん中から真っ二つに折れてしまったのだ。

「これまでだな」

すかさず、甲冑女が俺の目の前に剣をつきつける。

どうやらこの女、本気で殺る気満々だ。これは、やばい。

「恨むなら、おのれの血筋を恨むのだな」

そう言うわりには、奴は仮面の奥から残酷な光をぎらつかせた(俺にはそう見えた)目を覗かせながら、稲妻に包まれた剣をすっつと振り上げた。

14・もののけ全面戦争 その13

くそ、これまでか。どーせなら18歳になって 本や DVDが堂々と見られるようになってからがよかった。いやそれ以前に、彼女が出来てからにしたかった。

またしょうもないことを考えてしまった、その時だ。

「だりゃああああああっ！」

「ぐは!？」

視界の横から突然、雄たけびと共に白い光が飛び込んできて、甲冑女をぶっ飛ばした。

そいつは、甲冑女と入れ替わるようにして、俺の前に立っている。

その両手には、不自然な白い光が点っていた。

「きよ、鏡介!？」

「怪我はないスか、将仁さん！」

そう。それは、ついさっき階段を駆け下りていったはずの鏡介だった。

「お前、さつき下に行ったたんじゃ」

「洗面所の鏡に、将仁さんのピンチが見えたんで、急いで戻ってきたんすよ」

鏡介は、そう言って後ろを指差す。そこには俺の本棚があるのだが、その上に小判のかわりに鏡を持った招き猫の置物が置かれていた。

そんなもんは買った覚えがないんだが、鏡介はそこから飛び出して来たようだ。

「くっ、不意打ちとは卑怯な奴」

一方、鏡介にぶっ飛ばされた甲冑女は、壁に叩きつけられてからようやく体勢を立て直し、そんなことを口にする。

と、剣を持っていない左手を振り上げると。

「受けてみよ！」

と指先をこっちに向けて振り下ろした。

直後、バシバシバシ！という鋭い音と共に、眩しい光があたりに飛び散る。

甲冑女の指先から、微妙に緑がかった電撃みたいなものがこっちに向かって無数に放たれているのだが、それが、鏡介が突き出した手の前に現れたぼんやり光るガラスの壁みたいなものに当たって、色々な方向へと飛び散っているのだ。

初めて見るが、鏡介の前にあるあの壁みたいなのは、この前言っていたバリアって奴だろうか。ビームといいバリアといい、鏡介ってもしかしてヒビキヤシデンよりずっと強いのではないだろうか。

一方、甲冑女が放つ電撃はバレンシアの目から出るアレによく似ているが、こっちは切れ目がない分タチが悪い。それを防ぐので手一杯なのか、鏡介もバリアの後ろで構えたまま動かない。

「ここは任せてください！将仁さんは避難を！」

バリアで電撃を受け止めながら、鏡介が叫ぶ。

「な、そんなこと！」

「こいつは俺じゃなきゃ相手できません！早く！」

鏡介は電撃を防ぎながら叫んでいる。だが、俺はそれに素直に従えなかった。

鏡介は俺と同じ姿をしているから、見守らなければならぬような気がしたからだ。

だがその時、俺は突然襟首を掴まれ、有無を言わずに部屋の外へと引っ張り出された。

「将仁、これはいつたい、何の騒ぎだい？」

俺を引っ張り出したのは、赤いライダースーツの女だった。ヒビキだ。いや、それだけじゃない。

「何者だあれは！」

そこには、真田家モノ軍団の武闘派ツートップのもう一人、シデンもいた。

「し、侵入者だっ！ムチャクチャな侵入者だ！」

俺は、そう答えるだけで精一杯だった。

「そうか侵入者か！」

するとシデンが色めき立って腕まくりして乗り込んで行くとしたので、俺はあわててそれを止めた。

「上官っ、なぜ止めるっ！」

「ちよつと落ち着け！あいつはおまえとは相性が悪い！」

「相性だと!？」

「見る、あいつは雷を操る、電気製品のおまえじゃヤバいだろ！」

雷と聞いて、さすがのシデンも納得したのか黙り込む。そしてそれはヒビキも同様らしく、手を出しあぐねている。

その2人に、俺は他にも侵入者が居るということを教えた。

「シデンは、常盤さんとバレンシアにこの事を伝えてくれ！」

「む、心得た！」

返事と同時にシデンが廊下をとって返す。

「それからヒビキは、下の誰かの援護を！」

「あいよ！」

返事するや否や、ヒビキが階段を駆け下りる。

「頼んだぞ鏡介！」

最後に、部屋の中でバリアを展開する鏡介に声をかけ、俺も階段を駆け下りた。

14・もののけ全面戦争 その14

一階に下りると、ヒビキがクリンの援護のために風呂のほうへと走っていった、

だが、これでなんとかなるだろ、と一息ついた、まさにその時だ。どごおんっ！

いきなり、玄関のほうからものすごい音が聞こえてきた。

「な、なんだ!？」

玄関に向かってドアを見ると、見計らったようなタイミングでどごおんっという音が聞こえて、玄関のドアがまるで漫画のように、こつちに向かつて大きくかしいだ。

なんというか、ビル解体現場とかにある、クレーンに吊したでかい鉄球、あれをドアにぶつけたらあんなふうになるんじゃないかなるうかと思うような光景だ。

と思っっていると。

がiiiiiiiiんっ、がiiiiiiiiんっ！

すると、今度はドアのほうから、金属同士が激しくこすれあうようなとても耳障りな音が2度響いてきた。

それが収まった直後、俺は目を疑った。

玄関のドアが、バラバラの破片になって吹き飛んだのだ。

みしり。

そして、床に積みあがった破片を素足で踏みつけながら、ひとつの影がぬゅっつと現れた。

はじめは、本当の化け物かと思った。なにしろそいつは、ドアがなくなっただけでできた四角い穴を、わざわざ首をすくめるようにして入るほどにでかかったのだ。多分、身長2mはあるだろう。

廊下の照明の下で、ようやくそいつの姿が明らかになる。

研いだ刃物のような色合いの髪を逆立て、さらしを巻いて法被を羽織った御輿でも担ぎそうな格好の上から、太いワイヤーの束をたす

き掛けした、筋肉質な大女だった。

だが、ただでかくて筋肉質なだけではなかった。両腕の肘から先が、金属的光沢を放っていたのだ。それはまるで、両腕が鉄か何かでできているように見える。

「あんた、真田将仁だね」

そのでかい女は、俺を睨むと、金属のような色の指で俺を指さした。「あんたが無事ってことは、あいつらは失敗したんだな。まったくけえ口叩いた割にやあ情けないねえ」

「お、お前、あいつらの知り合いか!？」

「おう。あたいは白虎の虎鉄。あんたにや恨みも何もないけど、ここで仕留めさせてもらうよ」

言うなり、その白虎のなんちゃらって奴は、金属的に光る左手の指を横の壁に突き立てた。

信じられないことに、その指はいとも簡単に第1関節ぐらいまで壁に突き刺さった。そしてそいつが腕を引くと、コンクリートできているはずの壁が一部引きちぎられ、そして俺の目の前で木っ端微塵に握りつぶされたのだ。

一連の動作で、判ったことは2つ。まず、あいつの指は、単純に考えてコンクリートより硬い。そして、コンクリートを握りつぶすぐらいのパワーがあるってことだ。

確か白虎ってのは、今まで出てきた朱雀や青龍と同じ陰陽五行の象徴で金気の象徴、つまり硬い物の象徴らしいから、硬いのは確かなんだろうが、それにしてもこれは凄すぎる。

と、そのでかい女の手が、動いた。

反射的に頭をかかえてその場にしゃがみこむ。

その直後。ガツツという音が頭上でした。目だけで上を見ると、白虎のなんちゃらと名乗ったそいつの腕がちょうど俺の頭があったあたりを貫いており、後ろの壁に指先がめり込んでいた。

「うわわわわっ!？」

思わず、しゃがんだままであらずさっしてしまふ。これは、凄すぎる

なんてもんじゃない。明らかに命の危険を感じるレベルだ。

「そんな嫌な顔すんなって、痛えのは一瞬だからよ」

そのでかい女は、壁から自分の指を引っこ抜くと、俺のほうへと手を伸ばして一歩踏み出した。

14・もののけ全面戦争 その15

嫌な顔をするのは当たり前だ、俺はまだ死にたくない。死ぬならちやんとした彼女を作ってからだ、ってさっきも同じことを言ってたよな、俺。

これに耐えるのが、西園寺の家を継ぐことなんだろうが、知っていたら、遺産相続なんかしなかったぞ。

なんて、自分でも混乱しているのがわかるほどテンパってた時だ。

「おりゃあああああつ！」

赤と黒のライダースーツが、銀色のマフラーをなびかせ、未だに立っずにいる俺の頭上を飛び越えていった。

「むっ！？」

そして、大女の顔面に、底の厚いライダーブーツがめり込んだ。

大女は、なすすべなく吹っ飛ばされ、そのまま後ろの壁に叩きつけられて壁に亀裂を走らせる。

「将仁、ケガはねえか？」

そして、大女にライダーキックばりのとび蹴りを食らわせたそいつは、こつちを向いてバイザーを突き上げる。

「ヒビキ！？」

「なんだなんだあ？腰でも抜かしたのかい？」

「いや、お前後ろ！」

そう言った時、何かヒビキの肩にポンと手を置いていた。

「ん？」

「にひひひひ」

ヒビキが振り向くと、さっき蹴り飛ばした大女が復活していて、ヒビキの肩に手を置いたまま、彼女の目の前にたーっと笑った。

「ふんっ！」

「ぐふっ！？」

その直後、大女がヒビキの腹を思いつきりぶん殴った。やばいんじ

やないかと思うような音がして、殴られたヒビキが廊下を吹っ飛んでいく。そして、そのまま廊下の壁にめり込んだ。

「ヒビキ!？」

思わず叫んでしまう。あのヒビキをぶっ飛ばすなんて、シャレにならない。ってそんなのは判りきったことだが、さすがにこれは怖くなった。

「つと、へへへ」

だが、ヒビキは頑丈だった。めり込んだ壁から自力で這い出すと、またこつちに走って来たのだ。

「どっせえい！」

「んがつ!？」

そして、大女にダツシユの勢いを載せたパンチを叩き込む。またもヤバいんじゃないかと思ってしまう音がして、大女の体がきりもみしてふつとび、床に落ちてなおごろごろと転がっていく。

「へ、へへ、将仁。悪いけど、こいつの相手は、あたしがやらせてもらうよ」

自分でやっておいて痛かったのか、軽く手を振りながら、ヒビキは俺にむけて少し痛そうな顔で笑ってみせた。

「だ、大丈夫か!？」

「あたぼうよ!このあたしが本気で殴れる相手なんざ、初めてでワクワクするぜ！」

今まで聞いたことが無いほどに興奮して楽しそうに答えるヒビキを見て、これは確かに俺じゃ手も足も出ないってことを痛感してしまふ。

「言ってくれるじゃねえか」

やっと我に返った大女が、こつちも本当に楽しそうな顔をしてそんなことを言う。信じられないことだが、この2人、殴り合いを本気で楽しむつもりらしい。

「大見得切ったんだ、楽しませてくれよお？」

「あんたこそ、あっさり倒れるんじゃないやねえぜ？」

そして、止める間もなく、2人はシャレにならない殴りあいを始め
てしまった。

生き物が立ててはいけないような音を撒き散らしながら殴りあう2
人を、俺は見ているしかできなかった。

「こいつあてえした話だな」

そこに、野太い声が掛けられた。見ると、ごっつい大男が後ろに立
っていた。

「りゅう兄！？お前、なにしてやがった!？」

「さっきまでそのソファで寝てた」

つたく、このバカ兄貴は、この緊急事態に何っー緊張感の無さだ。
なんて思っていたときだ。

パリーンッ!

今度は、さっきまで兄貴が寝てたというリビングから、ガラスが割
れるような音がした。

「今度はなんだ!？」

目まぐるしさに半分キレながら、俺はリビングへと飛び込んだ。

14・もののけ全面戦争 その16

「何だてめえらは!？」

そこには、怪しすぎる連中が、リビングの窓を割って入って来ていた。

そいつらは、全員が黒いツナギを着て、手には木刀やら金属バットやらの得物を持っている。そして、フルフェイスのヘルメットやサングラスにマスク、中にはガスマスクなんかで全員が顔を隠している。

その姿は、どう見ても過激派か銀行強盗かテロリストだ。

「おーらあああああつ、しねえええええええつ！」

その一人が、いきなり木刀を振り上げて向かって来た。

それを皮切りに、過激派が次々と得物を振り上げ向かって来る。この過激派も、俺を狙っているらしい。

「うるせえええええ！」

その時、リビングのテーブルが舞い上がった。

テーブルは、天井にぶつかってルートを変え、過激派の一人を巻き込んで床に落ちる。

「だりゃあああああ！」

その直後、それと別の過激派が、りゅう兄のパンチを食らってひっくり返る。

「ぬおおおおつ！」

そしてそいつから木刀を取り上げると金属バットを両手で持った過激派に接近し、腕の間に木刀を差し込み、腕と交差するほうに力任せにぐるりとひねる。

「ぎゃっ！」

そいつは、悲鳴を上げてバットを取り落とす。そしてがら空きになったそいつのどてっばらに、りゅう兄は前蹴りを入れた。

過激派がうっとうめき、そこにうづくまる、かと思ったが、りゅう

兄の蹴りをもろに喰らったそいつは、バックステップして一瞬後には体勢を整えていた。

そこに、別の過激派の回し蹴りが飛び込んでくる。

りゅう兄はそれをさっきの木刀で受けようとした。しかし、その蹴りは、バキっという音と共にその木刀を真っ二つに叩き折ってしまった。

そして、かく言う俺も、決して余裕はなかった。バットを蹴飛ばしたところで、ガスマスク？を被った別の過激派が向かってきていたからだ。

そいつは、手に光るものを持っていた。それがナイフだと判った瞬間、俺は本気で避けていた。

「こっ、殺す気か！」

某3人組コメディアンの台詞を思わず叫んでしまう。

しかしその過激派はひるむどころか余計に鋭い攻撃を繰り出して来やがった。

こいつらは、マジで俺を殺しに来ている。やらなきゃ、やられる。

俺の生存本能が叫び、俺はかわしざま、パンチを顔面めがけて叩き込んでいた。

変なところを殴ってしまったらしく、拳に痛みが走るが、手ごたえは十分あった。それを示すように、過激派もぶっ飛んでいる。

だが、フィルターの缶がひしゃげたガスマスクをつけたそいつは、ダウンしたと思ったその直後には跳ね起きていた。こっちは未だに手が痛いつてえのに、えらい頑丈な連中だ。

こんな連中を相手にして、兄貴は大丈夫だろうかとそっちを見てみると。

「ばっきゃろーてめこのざけんなちっくしょうめいこのべらぼうがああ！」

やっぱり、認めたくないが兄貴は強かった。あの頑丈な過激派3人を相手にひるむどころかそいつらを圧倒するほどの立ち回りを見せている。さすがに無傷ではないみたいだが、今も、過激派を一人ぶ

ん投げて壁に叩きつけたところだ。

その時気がついたのだが、兄貴が相手している過激派の背中には、一様に何かでつかい文字が書かれている。一文字で、漢字っぽい、それ以上は見る余裕がなかった。

なんでって、過激派は俺にも襲い掛かってきているんだからしょうがない。

「こんにやる！」

渾身の右フックを繰り出す、からぶつてしまう。くそ、いい動体視力してやがる。

だが、かわされた右の、肘を突き出すと、あつちはバランスを崩した。この攻撃は予想外だったらしい。そこに左のボディブローを繰り出したら、それはうまいことあつちの腹に当たったんだが、どうも手ごたえが鈍い。

と思った瞬間、俺はそいつに胸倉をつかまれてしまった。

そのまま軽々と持ち上げられると、あつと思つ間もなく後ろのほうに放り投げられた。

ばりいんっ！

なんかとんでもない音と共に、光景がめちゃくちゃになる。そして、ごん、という音と共に、頭に激痛が走り星が散った。

どうやら、窓を割って外に出てしまったらしい。だが、痛がっている暇もなく、ガスマスクをした過激派がすでに枠だけになった窓を開けて飛び掛ってくる。

なんとかかわした横をナイフが通り過ぎる。

立ち上がると、ガスマスクの過激派はまたナイフを突き出してきた。

「こなくそおっ！」

それをパリングの要領でかわすと、伸びきった腕を一本背負いの要領で投げ、ようとした。

そのとき、足元が、突然、ぐらりと傾いた。

14・もののけ全面戦争 その17

「わ!?!」

突然のことにバランスが取れず、俺は一本背負いで投げた状態のまま、そいつと一緒に転んでしまった。

ごん。

さつきも聞いたような音がする。だがあまり痛くは無い。

見ると、俺がさつき背負ったガスマスクの過激派が、大の字になってひっくり返っていた。

変なところでも打ってしまったんだろうか、ぴくりとも動かない。

「はあ、はあ、はあ、な、なんだってんだ」

とりあえず一安心、と気が抜けたところで、俺は自分の体が傾いているような違和感を持った。

正確に言うと、少し傾いた所に座っているような感覚だ。

立ち上がってみると、それがよりはつきりと感じられた。明らかにバルコニーが庭に向かって傾いている。

まさか、さつき足元がぐらりと揺れたのは、これのせいなのか？

「おこんばんはー、お久しぶりです、将仁はん」

ふと、聞いたことがあるような声で呼びかけられたので、頭をあげる。

バルコニーから5mほど離れたところに、その声の主は立っていた。そして、俺は、そいつの姿に見覚えがあった。

昔の中国の道士が着るようなだぶついた黄色い服。前に角が生えた四角い帽子。そして鬘のように広がった黄色い髪。

そいつは、バレンシアが暴走した時にコンクリートの壁の中なら現われ、そして壁の中へと消えていったあいつだった。

「あの時は名も名乗らんと帰ってしもてすんまへんな。うち、麒麟の麟士いいますねん」

そいつは、怪しげな関西弁でそんな事を言いながら、親しげに手を

振ってくる。

「てめえ、俺んちに何やった!？」

「何って、地盤をちいと緩ましただけですやん」

なるほど、地盤が緩んだから地盤沈下が起きて家が傾いたのか、ってそんなことを言っている場合ではない。

麒麟という名前は、俺も知らなくは無。ビールのラベルなんかに印刷されている、龍と馬を混ぜたような想像上の生き物だ。詳しいことは知らないが、世の中にいいことがあると現れるらしい。

でも、その麒麟と土気とつながりがあるとは知らなかった。

って、論点はそんなことじゃない。

「てめ、ひとんちになんて事しやがんだ!とつと戻しやがれ!」

「そら、できまへんな、これがうちの役目やさかい。ほなもちつといきまひよか」

そう言つて、その麒麟を名乗る黄色い女は、手に持った棒の先で、足元の地面を突いた。

直後、家が違う方向にまたぐらりと揺らいた。それは俺が立っているバルコニーも一緒に、バランスを崩して転んでしまった。

「ありや、ちやう方に傾いてしもたわ」

「てつめえつ!」

人の家で遊んでいるようなそいつの態度に、俺は腹が立った。

それで、思わずそっちに向かって飛び出した時だ。

ずぶん。

着地した足に、妙な感覚が。

見ると、足が、足を置いた芝生と一緒に、泥と化したの中に沈んでいた。

「な、な、なんだこりゃ!？」

「へっへーん、掛かりよつたね?」

麒麟のなんちゃらと名乗った黄色い女が、意地悪そうな顔で俺を見ている。

「て、てめこの、うわっ!」

それに余計に腹が立ち、本気で殴りに行こうとしたのだが、両足が膝下まで泥に飲み込まれていて、抜けなくなっていた。くそ、飛び出したのが失敗だった。

それでバランスを崩してしまい、前につんのめって地面に手をついたところ、今度はその手までが地面に沈んでしまった。沈んだと言っても実際はめり込んだ程度だったので、手はすぐに抜くことができたのだが、どうやらうちの庭は、泥沼にされてしまったらしい。

くそ、麒麟ってのは縁起のいい生き物じゃなかったのか。とりあえずそれ以上沈む様子はないので、なんとか体を起こして身構える。

と、その黄色い女が、地面に沈むこともなく平然と芝生の上を歩いて近づいてきた。

「なあ、将仁はん。うち、殺生するんは嫌いですねん。せやから、ここは話し合いといきまへん?」

そして、2メートルぐらいのところまで立ち止まると、そんなことを言ってきた。

「話し合いだと?」

「せや。うちは興味ないねんけど、あんさんが遺産を受け継ぐのが嫌な人がおるみたいなんや」

「……遺産を放棄しろってえのか?」

「多分、そういうこっちゃね」

黄色い女は、いけしゃあしゃあとそんな事を言ってきた。

「このアマ、ふざけたことを、わっ!?!」

だが、反論しようと思った瞬間、足元が揺らぎ、足が数センチ余計に沈んだ。

「何べんでも言うけど、うちは平和主義者やねん。なー、話だけでも聞いてくれへん?」

女は、そんなことを言いながら顔を覗き込んでくる。だが、イヤだと言おうとしたらまた俺の体が泥の中に沈むんだらう。これは話し合いというよりは脅迫なんじゃないだらうか。

だが、その時だ。

「あだだだだだ!?!」

いきなり、その黄色い女が変な悲鳴をあげて頭を抱えて、そこから少し後ずさった。

見ると、その髪の毛や帽子や服に、細長い針のようなものが数本刺さっている。

「きさまあああああ!」

同時に、黄色い女のは違う、勇ましい声が頭上から聞こえた。

そして、深緑色の影が、黄色い女めがけて突っ込んでくる。

「ひゃあ!？」

その影は、黄色い女の頭上ギリギリのところをかすめるようにして急旋回し、そして高々と舞い上がる。そして頭をかすめられた黄色い女は、バランスを崩してすっ転んだ。

「な、なんやねん」

転んだ拍子にそのままでんぐり返しをした黄色い女は、落とした帽子を被りなおして空を見上げる。そして、目を見開いた。

「人の家の庭で何をやっておるのだあああああああ!」

さっきの影が、自分に向かって一直線に、空から突っ込んで来ていたからだ。そして多分、あの黄色い女は、その影の正体が判って、余計に驚いているんだろう。

その影は、さつき常盤さん呼びに行っていたシデンだった。多分、家が傾いたことで様子を見にベランダに出て、そしてあの黄色い女を見かけて飛び出したのだろう。

「うひゃあああああ?」

「逃げるなあああ!」

そして、立ち上がって逃げようとする黄色い女の左右を追い抜くように、シデンの「機銃」が掃射されていく。

昨日初披露されたシデンの機銃は、一種の空気銃らしい。ただの空気銃ならたいしたことはない(空気の圧力にもよるが)が、この機銃の場合、弾として爪楊枝を使っているので、当たり所によっては痛いでは済まない。

「天誅っ!」

「ぐえっ!？」

機銃掃射は外れ、爪楊枝は地面に一直線に刺さったが、その直後、すぐ近くまで来ていたシデンの足が黄色い女の後頭部を蹴っ飛ばし、女はまた無様にすっ転んだ。

なんか、妙にコミカルな絵に、一瞬自分の置かれた状況を忘れてしまっ。そして、そのシデンは、勝ち誇ったように上空を旋回している。

その黄色い女が、ぶるぶると震えながら体を起こしたのは、その時だった

「……………うちのこと……………よつこここまでコケにしくさったなあっ！」

そして、今までと違って変わった荒々しい口調で叫び、上空を旋回するシデンをにらみつけた。

「ブチ落としたるあああああっ！」

そして、すっかりヤクザ化した口調でそのシデンに向かって手を伸ばす。

すると。女のまわりの地面から、何か灰色の小さなつぶてがいくつも顔を出し、そしてそれが一斉に上空のシデンに向かって飛んで行ったのだ。

「うわわわわわっ!?!」

全部は届いていないみたいだが、この反撃にはシデンも驚いたらしく、体をひねってよたついた軌跡を描きながら飛び回っている。

だが、狙いが下手なのか、それともシデンがかわすのが巧いのか、命中した様子はない。

「ふっ、張り合いが出てきたわあああああああ！」

そして、つぶてが止むと同時に、反撃とばかりにきりもみ急降下で接近しながら、黄色い女目がけて機銃を再び掃射する。

なんか、シデンを戦闘機、黄色い女を移動要塞と考えると、テレビゲームか何かみたいでしっくり来てしまう構図だ。ゲームの場合は戦闘機を操ることが多いので余計にそう思うのかもしれない。

だがおかげで、黄色い女の注意は俺から完全に離れていた。

「将仁さんっ！」

そしてその時、俺は誰かに声をかけられた。

足が泥の中に沈んでいて動けないため、体を懸命にひねり、顔を後ろに向ける。

「怪我は無いですか!？」

「と、常盤さん!？」

「無事でしたか、じゃあはやくこっちに!そこは危険です!」

バルコニーに出ていたのは、誰あろうモノ軍団の総司令、常盤さんだった。

「こっちにつて、庭が泥沼になつてて!足が抜けないんすよ!」

とはいえ、常盤さんの位置からは俺の足元が見えていないらしい。

そして俺の足がはまつているのは、バルコニーのコンクリートからちよつと離れたところ。うかつにも飛び出してしまったために、変なところでハマつてしまつていた。

「それじゃ、これに捕まってください!こっちから引つ張ります!」すると、常盤さんはどこから取り出したのか、紐みたいなものを投げた。それは、先のほうに錘か何かがついていて、俺は無意識のうちにそれを受け取つていた。

受け取つて判つたんだが、常盤さんが投げたのは、輪になつた金色の鎖だった。しかも、その重さと手触りから、金属製であることがうかがえる。

だが、その先についていた錘らしきものを改めて見た、その直後。

「うわああっ!？」

思わず、俺はそれを放り投げていた。

なんでつて、それは、人の手だったのだ。こんなものを投げつけられたら、普通は驚くだろう。

だが、その手は、俺が捨てようとした瞬間、俺の袖をぐつと掴んだのだ。

その手首から先に繋がっているのは、2本の金色の鎖。それが、常

盤さんの右袖の中へ繋がっている。

うん、こう言うとまるつきりホラーだ。

「その鎖を掴んで、引っ張ってください！」

一方の常盤さんは、まじめな顔をして俺に声をかけている。

なんか、こうして見ると、どっかのマンガのサイボーグみたいだ。

ちなみに左手は、黒装束の連中に割られた窓の、残ったさんの部分に絡みついているので、普通の腕っばい。

そういえば常盤さんの正体は古い懐中時計で、その懐中時計には鎖がついていたな、なんてことを思い出す。

それはともかく。今はまず、泥から足を抜こう。そうしないとどうしようもない。

「行きます！」

念のため一言声をかけてから、鎖を引っ張る。

そして間もなく、俺の両足は泥の中から引き抜かれ、バルコニーの上に横たわった。

「はあ、と、常盤さん、右手、大丈夫、ですか」

「はい、私は、大丈夫、です。少し、驚かせて、しまいました」
ちよつと息を切らせながら、常盤さんは金色の鎖を袖の中へと収納する。そして最後に右手をはめ込むと、調子を見るかのように指をわきわきさせる。そういう動きをされると、本当にサイボーグみたいに思えてしまう。

そして改めて俺に向き直ると、えらいことを口にした。

「それはそうと、将仁さん。さつき、バレンシアが、手製のれえだあで、司令塔の存在を突き止めました」

「司令塔？」

「はい。おそらく、それを潰せば、指令系統はバラバラになります
そしてすつくと立ち上がり、門のほうを見やる。どうやら、司令塔はあつちのほうにいるらしい。

「私が、相手をして来ます。将仁さんはここで待っていてください」

「と、常盤さんが！？」

「今、庭は泥沼と化しています。私なら、時間を止めて行けば沈む前に移動することができます」

そう言われると、さっきまで泥に足を取られて身動きが取れなかった身としては、反論できない。

だが、正直言つて、不安だ。こう言つてはなんだが、常盤さんってそんな強そうには見えない。

「心配しないでください。これでも、11ヶ月の間、遺言書を単騎で守り抜いた身です」

だが、それを見抜いたように、常盤さんは俺を見てにこつと笑った。そしてその直後、音も無く、姿を消した。

門を出ると、そこは黒いアスファルトで舗装された何の変哲も無い道路があり、それを挟んで向かいの家の門が見える。

将仁の前から姿を消した次の瞬間、花音代の姿はその門柱の間にあつた。止まった時間の中で引き出したのだろうか、振り上げた右手からあの金色の鎖が、まるで刀のように振り上げられている。

「はあっ！」

花音代は、その鎖を、何も無い空間めがけて力いっぱい振り下ろした。

次の瞬間。その何も無い空間から、パリーンツというガラスが割れるような音がして、空間が碎けるように割れ、そしてそのむこうから、存在も、気配も感じなかったものが姿を現した。

それは、黒い狩衣、昔の日本の貴族が着ていたような服を身にまとい、烏帽子を被った、まるでそこだけ平安時代にタイムスリップしたような姿の人物が座っていた。

「あららあ、見破られてしまいましたなあ。気配もちゃんと消してたはずなんですけど」

その狩衣の人物は、自分が施していた陰行の術が破られたというのに、慌てた様子も無く上を見上げる。

「やはり、あなたでしたね。賀茂杏寿」

その人物を見下ろしながら、右手の鎖をまるで鞭か何かのように手に持った花音代が声を吐き出す。

髪をまとめ、服装も雰囲気も全く違っていたが、そこにいるのは、確かに、将仁のクラスメイトの賀茂杏寿その人だった。

「うちの正体、いつから、気いついてはりました？」

「最初に気になったのは、賀茂という苗字を聞いた時です。その時はまだ敵になるとは思いませんでしたが」

「ふうん、さすがは付喪神、伊達に長生きはしてはりませんなあ」

そう言いながら、杏寿は袖の中に手を引っ込めてゆつくりと立ち上がる。

「しかも、あんさん、時間を止めることが出来るようどすなあ。ほんま、かないまへんわ」

「それならば、早々に引き上げることをお勧めしますよ。これ以上被害を出すのは互いの利益になりません」

花音代は、右手から伸びる金色の鎖を左手で持ち、いつでも動けるように身構えている。

「そうどすなあ。ほんまはうちも手え引きたい思ってます」

そして杏寿は、引っ込めた手を袖から出し、その手の中に何かを隠すようにして前に差し出す。

「せやけど、戦争いうんはそういうもんとちゃいます?」

「!?!」

その直後。杏寿の手の中から、目を潰しそうなほどの閃光が放たれた。花音代は、とっさに手でその光をさえぎり目を護る。

光は、ほんの目くらましましたらしく一瞬で消えた。

だが、その一瞬の後に目を開いた花音代は、自分の目を疑ってしまった。

目の前に、狩衣姿の女が立っている。だがその横にも、そしてその後ろにも、同じ姿の人物が立っていたのだ。そしてその隣にも、さらに隣にも、まったく同じ姿の女が立っている。

いつの間にか、花音代は、大勢の杏寿に取り囲まれてしまっていた。花音代の目をして、どれが本物な見分けがつかない。

「ほんで、質と量の戦いは、常に量に軍配が上がるもんどす」

「くっ!」

歯軋りした花音代は、忌々しげに右腕を振り上げると、声が出たほうへとその腕を振り下ろした。

右手につながった金色の鎖がジャラジャラツツという音と共に宙を舞い、そして何人もいる杏寿の一人に襲い掛かる。

金属製の太い鎖である。普通に当たれば、骨の2、3本は砕けてし

まうだろう。だが、その一撃を、その杏寿は避けようとすらしな
い。そして鎖が命中した瞬間。手ごたえを感じるかわりに、その杏寿は
まるで幻のように姿を消し、かわりに何かがひらひらと舞いながら
地面に落ちていった。

「人型!？」

それは、簡略化された人の形に切り抜かれた、一枚の紙だった。

「あんさんにごつぷり四つ組んだらうちのが不利やさかい、足止め
さしてもらいます」

その花音代の耳に、杏寿の声が聞こえる。だが、まわりにいる杏寿
が皆一様に口を動かしているので、どれが本物なのか見極められな
い。

と、その大勢の杏寿たちがいっせいに指を口元に立てて、呪文のよ
うなものを唱え始める。

「っあああああっ!」

花音代は、ときの声と共に右腕の鎖を振り回し、当たるを幸いと近
くにいる杏寿をなぎ倒していくが、鎖が命中するとそれらはすぐに
紙の人型へと変わってひらひらと舞い落ちる。そしてその後ろには、
やはり全くおなじ姿の杏寿が同じように立っている。

まるで湧き出してくるようなその姿に、さすがの花音代にもあせり
が見えた。というのも、時間を止めると彼女以外全てのものは動か
なくなるが、同時に鉄の塊のようにこちらから影響を与えることも
ほとんど出来なくなるからだ。

「っ!」

杏寿の群れから、短刀を手に数人が飛び掛ってきた瞬間、花音代は
時間を止めた。狩衣姿の黒髪の女が数人、片足を踏み出そうとした
形で止まっている中をすり抜けるが、その後ろにも同じ姿の女が集
団で立っている。止まっているせいで、本物と偽者の区別が余計に
つけられない。

本体をどうにかすれば、人型はほつといっても紙にもどる。しかしそ
の本体を見つける方法も、対処する手はずも、今の彼女には持ち合

わせてはいなかった。

14・もののけ全面戦争 その21

常盤さんが去って、どのぐらい経ったのだろうか。

「お兄ちゃんっ！」

「将仁さんっ！」

「将仁サン！」

聞き覚えのある声がした。

見ると、家の陰から、外出していたケイとテルミ、そして紅娘が飛び出してこつちに駆け寄ってくる場所だった。

「お前ら！」

つい嬉しくて叫んでしまう。

「何があつたのでしょうか!？」

いち早く駆け寄ってきたテルミがそう問いかける。

「わ、わからんが、何者かが俺の命を狙いに来た」

そして、俺が帰ってから今まであったことをかいつまんで話す。細かい話をしなくても、目の前でシデンが黄色い女とドンパチやっているで判ってくれると思う。

「厨房荒らすなんてゆるさんアル！」

それに真っ先に立ち上がったのは紅娘だった。

「引導渡してやるアルーッ！」

そして土足のままでバルコニーからリビングへ駆け上がると、鍋とお玉を振りかざしながら走り去って行った。

「では、私も」

それを見たテルミが、すっと立ち上がる。と、眼鏡の中が一瞬砂嵐に変わり、それが収まった瞬間、テルミの目つきがすっと鋭くなった。

テルミの得意技、超なりきりを使つたらしい。

だが、驚いたのはその手に持っていたものだ。それは、銃刀法違反になりそうなほどに大きなサバイバルナイフだったのだ。しかも両

手に一振りずつの二刀流でだ。そんなもん、なんで持っているんだ。と聞く間もなく、奇声を上げたテルミは、その2つのナイフを振りかざしながら、こっちは裏庭のほうへと飛び出していった。後に残されたのは、あっけに取られたケイと俺だ。

だが、ぼけつとする暇はなかった。直後、ドゴンツという音と共に、玄関横の壁をぶち破って、何かが庭に飛び出したからだ。

「んなるおっ！」

それは、ヒビキだった。ヒビキはすぐさま起き上がって壁の穴の中に駆け込んでいったが、そのほんの少しの間でも、ヒビキが結構なダメージを受けているのは見て取れた。

あのヒビキが、力のぶつかり合いで押されている。これはピンチなのではないだろうか。

ふと前を見ると、シデンと黄色い女の攻防がまだ続いている。こっちも、シデンが回避に専念して撃墜を免れているようで、攻撃の回数もさつきより少なくなっているように感じられる。

もしかして、俺たちは押されているのだろうか。少なくとも、目に入る中で互角以上にやっているのは、過激派もどきとバトルするりゆう兄だけだ。しかもそれもさつきほどには余裕はない様に見える。さつき見た限りでは、レイカも鏡介も互角だったが、今どうなっているかは判らない。

「ど、どうしよう、どうしよう」

そして、俺の横には、しつかりとしがみついてくるケイがいる。無理もない。ケイには、直接バトルする能力なんぞこれっぽっちもない。あえて言えばテレパシーで精神集中を邪魔させるぐらいか。だがそのせいで矛先がケイに向いたら非常にまずい。それに、ケイのアレはラジオで周波数を合わせるようにチューニングしないと聞けないらしい。（初めてのテレパシーの時は、ある程度の幅を持たせていたため複数同時に確認できたが、あれだと関係ない人にも感じられてしまうらしい）

「……………ん、待てよ」

だが、そこでひとつ、思いついたことがあった。

「ケイ」

俺は、俺にしがみついで震えているケイに声をかけた。

「お前、うちのモノたちに、個別でテレパシー飛ばすことはできるか!？」

すると、ケイはがたがた震えながらもこくこくと頷いた。

「よし、じゃあ、ヒビキに伝えるんだ。金気は火気に弱い、お前が相手しているやつ弱点は火だつてな」

そう。りゅう兄の戦っている過激派と、常盤さんが戦っている何かはちよつと判らないが、それ以外の連中はこの前教わった“五行”に色々と沿っている。つまり明確な弱点がある。

誰がどんな奴を相手しているのかは大体判る。そいつらに、弱点を教えてやれば、少しは手助けになるかもしれない。

過激派以外は、俺ではどうにもできない。だが、何もしないわけにもいかない。

やがて、ひとつ頷いたケイの目が赤く光り、髪の毛がざわざわざわつと逆立って来た。

14・もののけ全面戦争 その22

「ぐあっ！」

ヒビキの体が、天井に叩きつけられ、そしてその反動で床に叩きつけられる。満身創痍のその体は、いまやボロボロと言っても差支えない。

「へっ、さっきまでの威勢はどうしたんだい？」

法被姿の大女、虎鉄がヒビキのほうを向き、手招きと共に挑発的な声をかける。こちらにも満身創痍ではあるが、その立ち姿にはまだ若干の余裕が見て取れる。

「くっ………そおっ」

一方のヒビキは、苦悶の表情を浮かべながら、氣力をふりしぼって立ち上がる。その様子には余裕が無い。目はあきらめてはいないが、勝負は誰が見ても明らかだ。

そのヒビキに、虎鉄は大またで歩み寄り、そしてつかみかかる。

虎鉄がヒビキの襟元を両手でむんずとつかむ。お返しとばかりにヒビキが虎鉄の襟元をつかむが、さっきまでの力は無くなっている。

「作り物の分際であたいに挑んだその度胸と、あたいにこんだけ食い下がったことは褒めてやる」

そして、若干の余裕を見せた虎鉄が、腕に力を入れる。すると、ヒビキの体が少しずつ浮き上がり、ついには足も床から離れて宙吊りになった。

ヒビキの顔に、今まで見たことが無い苦悶の表情が浮かぶ。

「ほら、どうするんだい。負けを認めりゃあ、ぶっ壊すのは勘弁してやるぜ」

虎鉄が、ネックハンギングツリーでヒビキの首を締め上げる。

「………随分、余裕見せてくれるじゃないかい」

その時、ヒビキがか細い声を吐き出した。

「ん？」

いぶかしがる虎鉄を前に、ヒビキは自分を吊り上げる虎鉄の手首を掴むと、それにぐつと力を込めた。

虎鉄の腕はほとんど動かないものの、指が少しだけ開き、ヒビキを締め上げる力が緩んだ。そして、重い観音開きの扉をこじ開けるように、虎鉄の腕を少しずつつ開いていく。

まだ、これだけの力が残っていたのかと、虎鉄は感心する。

そして、虎鉄の手がヒビキの首から外れた瞬間。ヒビキは、首を動かし、虎鉄を正面から睨みつけてにやりと口元を歪ませた。

「ひとつ、教えてやる。切り札つてのは、最後まで取っておくもんだ」

「なんだと？」

さっきまであれだけ追い詰められていた奴のものとは思えないその台詞に、虎鉄が返事をした、その瞬間。

「んくつ、ごはあぁっ！」

一瞬えずいたヒビキが、腹から搾り出すような声と共に、何かを口から吐き出した。

「うわわわあぁっ!？」

それは、そのまま虎鉄の頭にばしゃつと命中する。

「てめえええっ！」

それで頭に血がのぼったのか。虎鉄はヒビキを思い切り振りかぶると、全力でぶん投げた。

ヒビキの体がゴム鞠のように弾んで転がり、数メートル先の壁に叩きつけられる。

「ったくあのクソアマ、なんてことしてくれ……」

一方の虎鉄は、ヒビキのことなど眼中にないように自分に吐きかけられたものを両手で必死に拭おうとする。だが、その手がふと止まった。

その場に到底ふさわしくない刺激臭を、彼女の鼻が感じ取ったからだ。水でも、アルコールでも、ましてや胃液でもない、揮発性の油の匂い。

「やっと気がつきやがったね」

顔を上げると、そこにヒビキが立っていた。

「そいつはガソリンだ。あたしは元バイク、エンジンを回すにゃガソリンは必須だろ」

そう。ヒビキが虎鉄に吐きかけたものは、ガソリンだったのだ。

「あんた、火が苦手なんだってなあ。ガソリンはよく燃えるぜ？」

「！」

その一言に、虎鉄が一瞬身を固くした、その直後。

「おらあっ！」

ヒビキが、虎鉄に向かって全力で飛び出した。

「げふっ！？」

そしてそのまま、虎鉄に渾身のリアートを叩き込む。完全に不意を突かれた虎鉄は、そのままひっくりかえり、床に仰向けに転がされる。

「今だ！魅尾！」

すかさず、腕を押さえたヒビキが、振り絞るような声を上げた。

「承知じゃ！」

すると、いつからそこにいたのか、階段の上から廊下を覗いた、真っ白な髪に狐のような耳と尻尾を生やした子供が、ふっと、何か光るものを口から吐き出した。

それは、マツチの火程度ではあるが、立派な火の玉だった。それが、まっすぐ、虎鉄めがけて飛んでいく。

虎鉄は、あわてて体を起こしたが、その火の玉は虎鉄を追いかけるように軌道を曲げ飛んでいく。

そして。

「うぎゃあああああああああああああああああ！」

虎鉄の頭を、オレンジ色の炎が包み込んだ。

「あああああああああああああ！」

虎鉄は、その火を消そうとしているのか、廊下をのた打ち回る。だがガソリンに点いた火はそう簡単には消えてくれない。

そして、耐え切れなくなった虎鉄は、外に飛び出すと地面の上をのた打ち回った。

「はあ、はあ、はあ………」

それを複雑なまなざしで見つめていたヒビキだったが、すでに立つ気力もないようだ。

だがそれでも、自分が勝ったということを証明するため、右手を高高と上げた。

14・もののけ全面戦争 その23

「はっ！」

炎雀が手を振るうと、その手元から前の壁に向かって数本の光の線が延びる。

レイカがそれをギリギリでかわす。するとその光の線はそのまま壁に突き刺さった。

そしてその直後。

ばばばばばばんっ！

光の線が、まるで爆竹をいくつも同時に炸裂させたかのように爆発した。しかもただ破裂したのではなく、その爆発のひとつひとつがまるで花火のように爆音と火花を撒き散らす。

光の線をギリギリでかわしていたレイカにその火花はよけ切れず、着物の上からではあるが火花を被ってしまった。その熱気に、表情の乏しいレイカですら眉をひそめた。

その火花が消えると、光の線も消えており、その先に炎雀が仁王立ちしている。

体制を立て直したレイカは、炎雀に向けて、手に持った氷の包丁の切っ先を向ける。

「ふふふっ、この炎雀をここまで手こずらせるなんて。見事なものですわね」

その炎雀が、拍手をしながらレイカに声をかける。その物言いは、余裕さえ感じさせる。

「放火魔を楽しませるつもりはないのだけれど」

レイカは、切っ先を炎雀に向けたまま、冷静にそう言い返す。

だが、口で言うほど、レイカには余裕がなかった。

製氷のための水が、足らなくなってきたのだ。本物の雪女であれば氷など無尽蔵に生み出せるのだから、生憎レイカの正体は冷蔵庫である。製氷用の水が無くなれば、氷が作れなくなってしまう。特

に彼女が相手をしている炎雀は火を操るため、応戦するためにはどうしても氷や冷気を使わなくてはならず、水の消耗も激しい。

「でも、あなたは所詮、人の手で生まれた作り物。限界があることを、見抜かせてもらいましたわ」

そしてそれに気がついたのか。炎雀がレイカを指差し言い放つ。

「ですから、そろそろ終わらせて差し上げますわね」

続けて、両腕を左右に広げ、双方の掌を天に向ける。その手の上にそれぞれボーリング玉ぐらいあるオレンジ色の炎の塊が現れた。

見せ付けるかのように、炎雀はその火の玉を自分の頭上でひとつにした。

直後、その火の玉が膨れ上がり、何かを形作った。

それはまるで、羽を広げた巨大な鳥のようだった。その大きさは、はるか昔に滅んだ翼竜を思わせるほどだ。

その圧倒的な大きさと熱量は、今まで多少なりとも手加減していたことが判ってしまうほどだ。

「くっ」

レイカの喉の奥から、焦りと手加減されていた悔しさが入り混じった声が漏れる。いつもクールなレイカが、僅かだがあせりを顔に出してしまった。

「さあ、この炎雀の必殺技、鳳凰天舞で、灰になりなさい！」

炎雀が天にかざした手を振り下ろすと、炎の鳥がまっすぐレイカに向かって飛んでいく。

そして、それが爆音と共に炸裂し、視界がオレンジ色になった。

その光景を満足げに眺め、炎雀が独り語つ。

「レイカさん。あなたの力、中々のものでしたわよ。でも、この炎雀を倒すのは百年早かったようですね」

そしてどこからかキセルを取り出し、優雅な動きでそれを吸う。

だが、煙を吐いたその時だ。

「やあーっ！」

突然、直径1m以上ある、黒くて丸く、光沢がある何かが、炎のス

クリーンを突き抜け、炎雀めがけて突っ込んで来たのだ。

「えっ!？」

あまりに予想外で理解しがたい光景に、炎雀は反応ができなかった。がんつ。

それが巨大な中華鍋の底だと判った時には、炎雀はその鍋に突き飛ばされていた。

「くはっ!？」

バランスを取り直し何とか転倒を堪えた炎雀は、自分の前に赤いチヤイナ服を着て中華鍋と中華お玉を持った女、紅娘が立っていることに気が付いた。

「人んちでなにしてるアルカーっ!」

紅娘が叫ぶと同時に、炎雀の頭をその手に持った中華お玉でボコンと殴りつけた。

「いたっ!？」

「放火は重罪アル!タダおかないアル!」

「きゃっ、ちょ、ちょ、なにっ、やめっ」

「ナニもヤメもないアル!この、この、このっ!」

予想外の反撃に頭を抱えて身を護るしかできない炎雀を、紅娘はまったく遠慮することなくお玉でボコボコと殴ってくる。

「い、いいかげんになさーいっ!」

だが、やがて我に返った炎雀が、腹のそこから叫ぶと、彼女を中心として爆発的な勢いの炎が爆風と共に吹き荒れた。

「アイヤーっ!？」

その爆風によつて紅娘の体が吹っ飛ばされ、後ろの壁に背中をしたたかにぶつけて、床に座り込んでしまう。

「この炎雀をぶつなんて、100年早いのですわ!そのお鍋もろとも、完全に溶かしつくして差し上げますから、覚悟なさい!」

その紅娘を、全身を炎で包みながら怒りと恨みが入り混じったような目で睨みつけた炎雀が、指を差して宣言する。

「盗人猛々しいはこのコトアルな!やれるもんならやてみるアル

！」
売り言葉に買い言葉か、立ち上がった紅娘が、テレビゲームの勇者のように中華お玉と中華鍋を両手に構える。

「ただし、少し頭を冷やしてからね！」

だがその時、全く違う方向から声がした。
ばしゃ！

そつちを向いた瞬間。水の塊が炎雀を襲った。

「ひゃあああああ！？」

情けない悲鳴と共に体を包んでいた炎は跡形も無く消え去る。

そしてその視線の先には、洗い桶を構えたレイカがいた。

「そんな！？」

炎雀は目を疑ってしまった。ほとんど力を使い果たしたはずのレイカが、鳳凰天舞を防げるはずがないと思っていたからだ。

実際に炎を受け止めたのは紅娘の中華鍋だったことを、炎雀は知らない。

「もういつちよアル！」

その際に、紅娘が鍋を振りかざすと、体を一回転させて勢いを乗せ、投げつけた。

「がつ！？」

巨大なフリスビーのようなそれは、うなりを上げて炎雀の肩に命中し、彼女をキッチンの床になぎ倒す。

「ふ、二人がかりなんて、そんなのありですよ！？」

「放火魔が文句言うなアル！」

顔を上げた炎雀に、紅娘が蛇口に手を当てて直接水しぶきを飛ばす。そう。台所には、彼女の力の源である炎や可燃物が豊富にあると同時に、弱点でもある水も豊富にあるのだ。

「ひいひいひいひいっ、や、やめてええええええっ」

立て続けの攻撃に、今度は炎雀が悲鳴をあげた。水しぶきは炎雀に当たると水蒸気となるが、同時に彼女の顔を悪くしていく。

「じゃあ、次でとどめにしてあげる」

その時、炎雀の耳に、万年雪のように冷たい言葉が投げかけられた。見ると、レイカがさつき流しにほურიこんだはずの2リットル麦茶ポットを右手に持ち、左手で口元をぬぐっていた。改めて水を補給したのだ。

そして、左手を腰ために構える。次に何が起きるのか、判ってしまつた炎雀はなんとかして逃げようとするが、立て続けに水を被つたせいで体力が入らず、ナメクジのように這つのみだ。

「はあああああああ！」

「ごおおおおつ！」

そこに、地の底から響くような轟音と共に、真つ白い塊が襲い掛かつた。

「いやああああああ！」

そして、炎雀の悲鳴は、その真つ白い塊の中に消えていった。

それが収まると、台所は真つ白に雪化粧されていた。そして炎雀がさつきまでいた場所には、その跡を示すようなふくらみが見えるが、動く様子はない。

「ふう………」

「や、やたアルな」

直後、レイカと紅娘の2人は、力を使い果たしたようにその場へたり込んだ。

そして、座つたままで、二人は互いの掌を音が出るほどに強く打ち合わせた。

14・もののけ全面戦争 その24

同じ頃、2階の将仁の部屋では、1人の青年と、鎧を着た青い髪の女が、互いに息を切らせて対峙していた。いわずもがな、鏡介と龍樹である。

2人は完全に膠着状態になっていた。龍樹の攻撃はそのほとんどが鏡介のバリアで防がれてほとんど効果を上げていない。また鏡介からも反撃に移るチャンスを見つけれないでいる。

特に、龍樹が繰り出す攻撃は、先に見せた剣や電撃によるものだけでなく、窓の外から入り込んだ蔓までが鞭のような攻撃をしたり槍のように突いてきたりしてさらに多様に、そして激しくなっているのだ。

今は持ちこたえているが、なにしろ実戦でバリアを使うのは今回が初めてなので、どの程度まで持ちこたえられるのかは鏡介本人にも判らない。しかも、以外に体力を消耗するのだ。

と、その時。

不意に、龍樹の攻撃が止んだ。甲冑の上からでも肩が上下している。ラッシュをかけて息が上がったのだろうか。

バリアを張り続けた鏡介も消耗している。だが、待ちに待った反撃のチャンスに、彼の体は素早く反応していた。

「うおらあああっ！」

バリアを解除すると同時に、気合一閃、左手をすくい上げるように振りぬく。その手に白い光が宿り、龍樹のいた空間を切り裂く。

「ちっ！」

舌打ちした龍樹がバックステップを踏む。背後から蔓に持ち上げられた龍樹の体は、ワイヤーアクションのような動きで窓をくぐり、ベランダにまで後退する。

「待て！」

それを追って鏡介が駆け出す。その両手にはすでに追撃用の光が灯

っている。

だが、その時。

「かかったな！」

突然、龍樹がそう叫び、剣を持っていない手を振り上げた。

すると、龍樹の攻撃が止むと同時におとなしくなっていた蔓が、いつせいに動き出したのだ。

その蔓は、それぞれがまるで意思を持っているかのようにいつせいに鏡介の手足に襲い掛かり、絡みつく。そして瞬く間に、鏡介の手足は無数の蔓に絡み取られてしまった。

その鏡介をさらに動けなくするため、胴体や首にもまるでへビのように蔓がからみついていく。

「はあっ、はあっ、はあっ……」

その鏡介の近くへ、肩で息をしながら、龍樹が近づいていく。

「か、鏡の、分際で、この、龍樹を、ここまで、追い詰めるとは、大した奴だ」

そして、余裕を見せるように、鏡介の目の前で息を整える。

「くそっ、この、ちつくしよう、こんなのありかよ！」

「ふん、兵は詭道なりだ。恨むなら、私の計略が見破れなかった、貴様の迂闊さを恨むのだな」

「くそおおおおお！はっせえええええっ！ぬおおおおおっ
！」

鏡介が、自分の手を絡め取っている蔓を引きちぎろうとするが、びくともしない。

「本来の仕事を済ませたら、好きなだけ相手をしてやる。それまでおとなしくしている」

そして、剣を収めた龍樹が、鏡介が守っていた扉に目を向ける。

その時だ。

ばんっ！

そのドアが、それごと吹き飛ばしそうな勢いで開いた。

ドアのむこうには、黒い人影が立っていた。本当に蹴破ったらしく、

片方の膝を上げ、フラミンゴのように片足で立っている。

よく見ると、それはメイド服の上から黒いマントを羽織った、黒ぶちの四角い眼鏡をした女だった。だがその眼鏡の奥の目は、顔つきに合わない冷たさを帯びている。

そのメイドの体がすつと傾く。

「シユ！」

その直後。そのメイドは一瞬で龍樹のすぐそばまで間合いを詰めると、マントの陰に隠れていた片手を何のためらいも無く振り上げた。「!?!」

龍樹がとつさに体を後ろに倒した直後、ヒュ、という空を切る音と、銀色に鋭く光る何かが、目の前を通過していく。

それは、刃渡り20センチはある大きなサバイバルナイフだった。

しかもそのメイドは、ナイフを両手に持っている。

突然、そのテルミの体がふわっと浮き上がった。

「ガッ!?!」

その直後、側頭部に丸太か何かで殴られたような衝撃が走り、龍樹の体がなぎ倒された。信じられないことに、テルミはメイド服にマントを羽織るといふ動きづらい格好で、旋風脚を繰り出したのだ。

もんどりうった龍樹は、そのまま本棚にボディプレスをかましてから床に叩きつけられる。さらにその上から本棚が倒れ、龍樹は本棚の下敷きになってしまった。

「ふうっ」

片やテルミのほうは、何事もなかったようにさっきまでいた所に立っている。

「き、貴様、何者だ？」

本棚の下敷きになったまま、龍樹がいきなり現れたメイドに声をかける。

「当家に仕えるただのメイドです」

テルミは、ナイフを持ったまま平然とメイド立ちをして答える。声の調子も非常に事務的だが、その目だけが非常に挑発的だ。

「ふざけるな！」

激昂した龍樹が、本棚を跳ね飛ばすと指先から電撃を放つ。だが、その時にはすでにテルミの姿はなかった。

気合と共に黒いマントを翻して横に跳ぶと、サーカスの軽業師もかくやという身のこなしで壁を走るように蹴り、そして両手両足をからめ取られた鏡介の前に降り立ったのだ。

ぶつつ、ぶつつ！

そして、2度空を切る音がしたかと思うと、鏡介の両腕を縛っていた蔓が切断された。

「ありがてえ！」

やっと腕が動くようになった鏡介が、自分の腕に残った蔓をむしり取りながら、感謝の言葉を述べる。

テルミはそれに答えることもせず、流れるような動きで振り向きざま龍樹に切りかかる。

テルミの持つナイフの切っ先が、龍樹の鎧をかすめる。当たった証拠に、鎧の表面に一筋の傷が走った。

「くっ、貴様っ！」

バランスを崩しかけた龍樹が、数歩離れたところで何とか体勢を立て直し、剣を振り上げる。

すると再び、部屋に侵入していた蔓が動き出す。次はテルミを捕らえようというのだ。

だが、今度はその動きが異常に鈍い。いや、鈍いと言うより、瀕死の状態でもがいている、と言ったほうが良いかもしれない。

「どうなっている!？」

「ぶぶっ、やっと効いて参りましたね」

あせりの表情を浮かべる龍樹に、眼鏡を軽く突き上げたテルミが答える。

「上に来る前に、除草剤を根元に撒いて来たのです。これほど急速に成長する植物ですから、効果もすぐに現れるはず」

そして、テルミは挑発的な笑みを浮かべる。

「うわあああつー!!」

光線を喰らった龍樹は窓の外に吹き飛ばされ、窓の外に密集していた蔓植物のジャングルにその体をめり込ませた。

その直後、ジャングルのように生い茂っていた蔓草の壁がぐらりと揺らぐと、龍樹を巻き込んだまま、力なく階下へと崩れて行った。

「……………ふう……………」

さすがに疲れたのか、鏡介がそこにへたりこみ、天井を仰いだ。

「お疲れ様。大変だったでしょう」

後ろから、テルミが声をかけてくる。

「いや、こつちこそ助かったよ。テルミさんが来てくれなきゃ手も足も出なかった」

そして鏡介はひとつ大きく息を吐いた。

14・もののけ全面戦争 その25

「ぐはっ!?!」

かわしきれなかった石つぶてのひとつが、空を飛ぶシデンのわき腹にめり込む。

その衝撃でバランスを崩したシデンの体がふらつき、高度が落ちる。「おっしや!どないや!」

そしてそれが判ったのだろうか、麟土がガッツポーズを見せる。

「負けるかああアアアッ!」

だがそこは負けん気の強いシデンのこと、気合で体勢を立て直すと、地表ギリギリで身を翻して墜落をまぬがれる。

だが、そのシデンも、今の状態はかなり危険だと判っていた。

こちらの武器として機銃があるが、その正体は圧縮空気で爪楊枝を飛ばす空気銃である。しかも、空気の圧力が下がってきており、当たると痛いダメージはほとんど与えられないのだ。

片や麟土の攻撃・石礫は、石という時点で爪楊枝より強いし、地面のどこからでも飛び出してくる。むこうは庭のほぼ真ん中に陣取ってほとんど動いていないのだが、とにかく撃墜されないためには礫をかわさなければならぬので、こちらから狙って撃つような余裕もない。

そして何より、地面に降りることが出来ないのが辛い。彼女の最大の武器である零式柔術は、他の格闘技同様、足を地に付けた状態で使われることを想定している。だが、今地面に降りたら、そのまま脚が飲み込まれて身動きが取れなくなる。

したがって、回避に専念し、注意をひきつけるぐらいしかできないのだ。

その時。

「シデンちゃん!」

シデンの頭に、ケイのテレパシーが飛んできた。

「今忙しいんだ！後にしろ！」

「バレンシアちゃんが作戦があるって！いったんベランダに引っ込んで！」

シデンの返事には全く答えず、ケイのテレパシーは一方的にそれだけ伝えると、一方的に途絶えた。

一方的なのは気に食わなかったが、今の自分は相手のまわりを飛び回るだけで、倒すための決定的な手が無い。もしその作戦を用いることで相手が倒せるのであれば、掛けてみるしかあるまい。

そう考えたシデンは、少しふらつきながら家のベランダに飛び込んだ。

「なんやーっ、もうしまいかーっ！人に喧嘩売っついて逃げるんかいこの卑怯モーン！」

残された麟士は、ベランダに向かって杖を振り回しながら、完全にヤクザ化した怒鳴り声で怒鳴り、そこ目掛けて石礮を対空砲火のようにバンバンぶつける。

だが一向にシデンは顔を出さない。

「このヘタレーツ！カトンボーツ！とっと出てこんかーいっ！」
さらに言葉は汚くなり、石礮をバンバンと手すりにぶつけるが、それでもシデンは出てこない。

と、その麟士の目が、バルコニーに座り込んでいる将仁とケイを捉えた。

「おっとお、そっぴや本来はこっちを仕留めるはずやったんや」

そして、顎に手を当て、にやりと笑う。

「おいこらーっ！早う出て来んかあーい！出て来いへんやったら、おんどれんとこの総大将をいてまうでえーっ！」

そして、その2人を手に持った琥珀色の杖で差すと、再度ベランダに向かって声をはりあげる。

すると。

「ぎゃあぎゃあとやかましいわ！」

ベランダの手すりを乗り越え、シデンが顔を出した。

「おおっ、来よつたなこのカトンボ！」

「誰がカトンボだっ！まったく人の家に勝手をしおって、仕置いてくれるから覚悟致せ！」

「やかましいわっ！今度は墜落させたるわっ！」

「ふん、これについてこられるかっ！」

そして、シデンがベランダから飛び降りると、麟土めがけて再び飛び出した。

まってましたとばかりに、麟土は再び石礫を飛ばし始める。

だが、神風特攻隊よろしく体当たりでもするのかと思われたシデンは、寸前で進路を変え、地面に立つ麟土の横を通り過ぎた。

自分の目の前を通り過ぎた瞬間、麟土はシデンの背中にさっきまではなかった赤いナツプザックが背負われているのを目にした。

身を翻したシデンは、今度は自分のまわりをグルグルと回り始める。そして、麟土は自分の体に紐のような何かが食い込むのを感じた。

「な、なんやこれは！？」

その紐のようなものは、シデンが回ると同時に自分の体に巻きついていく。

あっという間に、麟土はその紐のようなものでがんじがらめにされてしまった。

だが、縛り上げられたとはいえ、麟土にとってはさほど不利ではない。

「ふん、動けんようにする作戦か。甘いで、動けんでも石礫は撃てるんや！」

そう叫ぶと、それがハツタリではない証拠とばかりに、シデンめがけて地面から礫を飛ばす。

「うわっ！？」

シデンが、麟土からはなれるように、ベランダと反対方向へと飛んでいく。

そしてシデンは、近くにあった庭木の枝ぶりの中へと回り込んだ。

「逃がさへんでえ！」

麟土が叫び、その庭木の下を睨みつける。

すると、今度はその庭木がぐらりと揺らぎ、そして倒れはじめた。庭木の下を、泥へと変えたのだ。

まるで船が転覆するかのよう、太い根が地面から飛び出し、木が横に倒れていく。

そして、木の裏側にいたシデンの姿が麟土から見えるほどまで倒れた、その瞬間だ。

「バレンシア！」

シデンが、ベランダに向かって叫んだ。と同時に、倒れた木の幹で助走し、上空へと飛んでいく。

「OK! Entrust me！」

そしてそれに答えるように、頭上から別の女の声が聞こえた。

見ると、ベランダに、シデンとは別の人影が姿を現していた。袖は白くて体の部分が水色のブレザーを羽織り、豊かな金髪と特徴的な丸眼鏡を月明かりにきらめかせたその人影は、自分の胸をベランダの手すりに乗せるようにして麟土を見下ろしている。

「んなつ!？」

その姿を見止めた麟土が、表情をゆがめた。

誰あろうその女は、数日前にこの家に忍び込んだ時に、暴走したように目から電撃をばら撒いて麟土を心底びびらせたバレンシアその人だったからだ。

バレンシアは、手に何かを持っている。それが、自分を縛り上げている紐の端だと気づくのに、時間はかからなかった。

「This wireは、electric wireデース! Youはあの時、lightningがhateとweak pointをconfessしたデースね！」

そしてバレンシアが丸眼鏡を額に上げる。すると、彼女の目の周りに青白い火花が飛び散った。

その瞬間。麟土の顔色がさっと悪くなった。

「な、ちょ、あかんって! 待ってや!」

そして、必死になって自分の絡みつく電線を必死になって解こうとする。だが、両端から引つ張られたようにその電線は麟土の体に食い込み離れない。

それが見えているのかいないのか。口元に冷笑を浮かべたバレンシアが、手に持った電線の端に目を向ける。
そして。

「You're an angel, baby!」

妙に朗らかな最終宣告の言葉と共に、バレンシアの目から手に持った電線の端に、青白い稲妻が放たれた。

そのスパークは、ひととき大きな火花となってスパークし、そして電線を一瞬にして包みこんだ。

「うぎゃー！ー！ー！」

その電撃は、電線が絡まったままの麟土の体を容赦なく包み、麟土はマンガのような悲鳴を上げ、全身から電撃を放電しながら飛び上がった。

「チエストオオオオオオッ！」

そして、そこに狙い済ましたように、勢いをつけたシデンのとび蹴りが直撃する。

麟土の体は、エアガンの的になった空き缶のように宙を舞い、そして地面に転がった。

そして、電撃が放電し切った後には、コントの実験失敗のような黒こげ姿になった哀れな麟土が、しゅうしゅうと煙を上げながら地面の上に転がった。全身がひくひくと痙攣しているが、起き上がる気配は無い。

「ふう」

丸眼鏡をかけなおしたバレンシアが、電線の端を手放すと、電線はそのまま地面へと落ちて行った。

「やったか!？」

バルコニーに着地したシデンが、再び麟土のほうに向き直る。
そして、片足を地面に置いた。

体が沈まない。もう1歩踏み出す。やはり沈まない。

庭は、いつもの地面に戻っていた。

「敵将、討ち取ったりいーっ！」

シデンは、地面に倒れた麟土のところまで足早に駆け寄ると、拳を天高く突き上げ、宣言した。

「Reallyにburstしたのはミーですけどネー」

そのシデンをベランダから見下ろしながら、バレンシアはそう呟いた。

14・もののけ全面戦争 その26

ちなみに。

他の侵入者たちがモノたちと死闘を繰り広げていた時。

それと全く違う雰囲気だった場所があった。

「は、は、はなせえ」

「うふふふふつ、だあめでえすよお？」

いわずもがな。クリンに捕まった、玄水である。

その柔らかい体に抱きすくめられただけで、玄水は何もできなくなっていた。

「う、ううう」

「逃げようなんてする悪い子は、お仕置きですよお？」

クリンは、玄水の耳元で囁くと、舌をのばしてその耳を舐め上げる。

「うあああああ」

その刺激に、玄水の口から、今まで出したことが無いようなそんな声が漏れる。

「うふつ、かあわいいですねえ」

クリンは、玄水を抱きしめながら、体に巻いている紐の下に手を差し込み、這わせて撫で回す。撫でるたびにその手からクリームのような泡が出てそれが余計に光景をアレにする。

その度に玄水はもぞもぞと身もだえしながら変な声を上げる。

玄水は知らない。スポンジであるクリンに体を密着させていることで、彼自身から水分が吸い取られていることを。そして水を得たクリンの玄水を抱きしめる力が強くなっていることを。

「うふふふふつ、きれいきれいにしましょうねえ」

「や、やめろよお、くすぐりたい」

「だあめです。お風呂はあ、体を綺麗にするところなんですよお？」

玄水は、搾り出すような声で抵抗するが、体のほうは完全に成すままになっている。

その様は、大人の女におもちゃにされる少年の図にしか見えない。

「あらあ?」

そのクリンの手が、玄水の下半身をもぞもぞと撫で回すと、彼女の目もつと面白いものを見つけたと言いたげに輝いた。

「ほうあつ!?!」

「あらあらあ、式神さんでもお、ちゃあんと男の子なんですなえ」
そして、ズボンの前をさわさわと撫で回す。

「うっふふふふ、玄水くんはあ、いけない子ですねえ。人のうちでえ、こんなところをこんな固くしちゃうなんてねえ」

「あうっ、そ、それは、おおおまえがあああ」

「ふふっ、悪ぶっっちゃってえ、かつわいい」

「うふあああ!?!」

体を密着させながら、クリンが長い舌で首筋を舐めあげると、玄水は悲鳴とも歓声ともつかない声をあげた。

14・もののけ全面戦争 その27

「はいっ！」

気合と共に、花音代の右手にある金色の鎖が振り下ろされる。

それは、何人いるのか判らない黒い狩衣姿の1人を捉えるが、その直後、杏寿の姿はかき消すように消え、かわりに白い人型がひらひらとその空間を舞う。

そしてその背後から、全く同じ姿の杏寿が短刀を手に押し寄せる。その度に時間を止め、攻撃を回避すると同時に相手の位置をずらしてそれぞれ相打ちに持ち込むが、時間を動かすと同時に互いを攻撃すると、それらは例外なく人型となる。

完全に足止めされてしまっていた。

そして、大勢の杏寿に囲まれて花音代から死角になっていたが、その群れの一番外に、6人ほど地面に座り込んでいる杏寿がいた。

その中の1人が、呪文を唱えながら、手に持った束から1枚ずつ人型を投げると、それが一瞬で杏寿と寸分違わぬ姿になり、花音代を取り囲む大勢に紛れていく。

その人型を投げているのが、本物の杏寿だった。

本物を含めた6人の座った杏寿は、呪文を唱え、術式を完成させようとしていた。

その時だ。

「うおりゃああああああ！」

家の玄関のほうから、叫び声があった。

何事かと、本物の杏寿が振り向くと、体格の良い何者かが、玄関を飛び出し、こっちに全速力で走ってくるどころだった。

はじめは、虎鉄かと思った。だが良く見ると、髪形も服装も全く違う。

それは、過激派もどきを一扫したターゲットの兄、龍之介だった。

「役に立たへん連中やねっ！」

一言悪態をついてから、杏寿はそれを迎え撃とうと印を結んだ。その時だ。

「うわっ!?!」

奇妙な声と共に、何かにつまづいた龍之介の体が、宙を舞った。

「ほえっ!?!」

何があつたのかよく判らないうちに、その龍之介の顔が、空を飛んで杏寿にもものすごい勢いで近づいてくる。

どったーん!

そして。

気がつくのと、龍之介に押し倒されるような形で、杏寿は地面に押し倒されていた。

それだけではない。

お互いの顔が、ものすごく近くにある。

さらに言うと、お互いの口のあたりに何か妙に柔らかい感触が。

自分の心臓の音が、すさまじく大きくなって聞こえる。

「うわわわわわわっ!?!」

先に我に帰つたのは、龍之介のほうだった。バネ仕掛けのように体を跳ね上げると、数歩離れたところまで離れ、ぜいぜいと肩で息をする。

一方の杏寿は、仰向けにひっくり返つたまま、口元を押さえてばっとしてる。

「だ、大丈夫か?」

変なところをぶつけたんじゃないだろうな。やってしまった本人として、心配になった龍之介が、近くまで行って顔を覗き込む。

「きゃっ!?!」

杏寿は、悲鳴と共に全身を縮こまらせ、龍之介に背を向ける。

「ううーううー、どないしょ、どないしょ」

そして、顔を隠したまま、なぜか足をばたばたさせる。

「せ、せ、接吻、されてもたわあーううっ、どないしょーううー」

っ！」

どうやら、偶然の事故とはいえ龍之介とキスしてしまったことが原因らしい。

実は、これが彼女のファーストキスだった。彼女は、職業柄他人と深い関係になることを避けてきたため、異性との接触も手をつなぐ程度止まりだったのだ。

彼女も年頃の女の子であるから、キスに多少なり幻想を抱いていた。それが、想像だにしなかった形で成されてしまった。パニックになつてしかり、というところか。

「あー、うー、なんつーか、その、ごめん」

そんな都合など龍之介は知る由もない。だが、大変なことをしてしまったことは、杏寿の様子を見て容易に想像できた。

「謝つてすむこっちゃんええだろうが、今は、お互い、不幸な事故つてことで」

龍之介にしても、こういうシチュエーションを簡単に乗り切れるほどの経験を踏んでいるわけではない。どうやって謝ればいいのか、杏寿ほどではないがこっちゃんもパニックになっていた。

懸命になって、謝罪の言葉を絞り出していると、不意に杏寿の動きが止まった。

「あ、あんたはんは、不幸やったと、思てはるんどす？」

「へっ、あ、いや、俺としちゃんこなべっぴんと出来て嬉しい、つてそういうこっちゃんなくて、何言つてやがんだ俺は」

「そうどすか、嬉しゅうおすか」

そして、自分で言った言葉に慌てまくる龍之介に背中を向けたまま、杏寿は体を起こした。

「ほな、うちと接吻した責任、取ってもらいましょか？」

「へっ、せ、責任!？」

いきなりの展開に目をぱちくりさせる龍之介の前で、杏寿はくるりと体を返し、正座をして龍之介に向き合った。

それにつられ、龍之介も地べたに正座してしまう。

互いが正座で見合ったところで、杏寿は龍之介が想像すらしない言葉を発した。

「うち、賀茂杏寿言います。不束者ですけど、よろしゅうお頼みします」

そして杏寿は、三つ指をついて、深々と頭を下げてきたのだ。その様子は、見合いというか、輿入れというか、とにかくそんな感じだ。あまりの超展開に、龍之介の理解がいつて行かない。

そして、頭が追いついた時、さすがの龍之介でもとんでもないことになったと思った。

だが、NOと言っていい雰囲気ではない事も感じていた。

「さ、真田龍之介です。よろしく」

そして、龍之介も（こちらはどう見ても土下座だが）深々と頭を下げた。

「はあ、はあ、はあ……は！？」

その時、人型の群れを潜り抜けた花音代が、息を切らせて現れた。かなりの激戦だったらしく、着衣は乱れ、髪柄も乱れ、眼鏡も飛んでいる。その後ろには、いくつもの人型が散らばっている。

花音代は、今日の前に展開している光景の意味が、理解できなかった。

だが、これが戦争の終結を意味していることだけは、何となくわかってしまった。

全員が庭に揃ったのは、それから10分ほど経ったあとだった。人間の俺とりゆう兄と賀茂杏寿。うちの擬人化が合計9人。本当の妖怪の魅尾に、付喪神の常盤さん。そして賀茂さん配下の式神が5人。さらに、気を失ってふんじばられた黒装束の過激派もどきが5人。さすがに20人を超えると、うちの庭でも狭く感じる。

そして、その横に目を向けると、ちよつと前までは普通に建っていたはずの俺の家が、ボロボロな廃屋となっていた。

「どうすっかなあ」

そんな家を見てみると、自然とそんな言葉が口から漏れてくる。

なにしろ、ここから見えるだけでも、玄関のドアは切り崩されて無くなっている、リビングの窓も残らず叩き割られている、壁にでかい穴は開いている、そして全体が傾いて今にも倒れそう、という悲惨な状態なのだ。そして中に入れば、キッチンが焼け焦げ、風呂場は天井も壁もボロボロ、そして俺の部屋は謎の蔓植物に侵食されてえらいことになっていると、もつと悲惨だ。

「やあ、ほんまかんにんどす」

そこに、その原因のおおもとを作った賀茂さんが声をかけてくる。

「まあ、大怪我した奴がいなくて、良かったじゃねえか」

それに並ぶようにして、りゆう兄も声をかけてくる。

「怪我人がいないって、言っつていいのかこの状況は」

なにしろ、賀茂さん配下の式神5人（一応“神”とつくから5柱と

言っつたほうがいいんだろうか）のうち虎鉄と麟土の2人はそれぞれ火災と落雷で黒こげになっている。炎雀は外傷こそ無いが燃え尽きて灰になりかけたのか顔色は悪く髪の毛部分的に白くなっている。鎧を着て仮面をしている龍樹は、体の傷がどのぐらいなのかはわからないが鎧はボロボロになっており、唯一意識がある玄水はクリン

に悪戯されたことが相当ショックだったのか庭の隅で膝を抱えてしくしくと泣いている。一方、うちのモノたちも、正面から殴りあいをしたヒビキや石礫を喰らったシデンは傷だらけの痣だらけだし、レイカは着物が所々焼け焦げているし、蔓で締め上げられた鏡介は腕や首に痛々しい跡が残っており、クリンがそれらの傷を治すために舌で舐めている。ついでに言えば、過激派もどきたちを相手に大立ち回りしたりゆう兄も決して無傷ではない。一番の渦中にいた俺が何発か殴られた程度で済んでいるのが不思議なぐらいだ。

それでも、繰り広げられた壮絶なバトルの数々からすれば、（死ぬのかどうか判らない奴らも多いが）命を落としたやつがいないのは幸いなかもしれない。

だが、俺にはもつと気がかりなことがある。

「しかしこれじゃ、明日から住むところがないぞ？」

当面の最大の問題について、つい、横にいるケイに愚痴を言ってしまう。ケイに言ったところでケイを困らせるだけなんだが、口にせずにはいられない。

俺一人とか、もともと屋外に置いてあったヒビキとかなら、吹きさらしでもなんとかなるかもしれないが、精密機械だったケイやテルミヤバレンシアはそういうわけにはいかないだろう。

一応、法律の都合上、この前住んでいたアパートの部屋もまだ俺の住まいではあるのだが、あそこにこの大人数はどう考えても収まらない。また、実家にみんなで押しかけるといふことも考えたが、この家より狭いから全員が寝泊りするほどの余裕はない。

「うちの神社はんに来ます？部屋やったらなんぼか空いてますけど責任を感じているのか、賀茂さんがそう声をかけてくれるが、さっきのバトルが再燃して今度はその神社が崩壊の危機を迎えそうで怖い。」

「ホテルで寝泊りさせるわけにもいかんだろうしなあ、ああいうところは名前や住所を書くみたいだし」

「将仁さん、それでしたら、心当たりがひとつありますよ」

無い頭をひねって考えていると、常盤さんがそんなことを口にした。常盤さんは、確かに人間ではないが、本職の弁護士だし、なによりうちの事情がよく判っている。俺を心配させないためのでまかせでなければ、俺の浅知恵なんか意味がなくなるほどに良い案なはずだ。

「ホントですか!？」

「ええ、でも、将仁さんは嫌かもしれませんが」

だが、俺が聞き返すと、常盤さんは妙なことを口にした。

俺が嫌って、どういう意味だろう。何か変ないわくつきの物件なんだろうか。いわくつきの物件なら、妖怪を2人連れて行く時点ですでに相殺なんじゃないだろうか。

しかし、話を聞いてみると、どうもそういうわけではないらしい。

「将仁さんの通学圏からは外れていますが、敷地面積はこの家より広く、また建坪も大きく、部屋数も多いし、また電気ガス水道は完備されています。建物自体はこの家よりさらに古いですが、各種設備も充実していますし、まわりには自然が豊かで、良いところですよ」

この家よりでかいということとは、相当な物件のようだ。この家より古い、というのはちよつと引つかかるが、雨漏りがするとか隙間風が寒いとかいうボロ家ということはないだろう。

しかしそうになると、ますます俺が嫌がる理由が無くなってくる。

「えーと、常盤さん、なんで俺が嫌だと」

思い切って聞いてみる。すると、予想していなかった答えが返ってきた。

「そこは、西園寺の本家の屋敷なのです」

「………本家」

常盤さんが言い渋った理由が、ちよつとだけ判った。常盤さんは、俺がまだ西園寺の名を継ぐことに抵抗があると思っっているのだ。

確かに、俺にも全く抵抗が無いわけではない。仕方が無かったこととはいえ、俺を捨てた連中が住んでいた家だ。進んで行きたくなる

ようなところではない。

だが、背に腹は変えられない。野宿をするのは、ちょっと問題がありそうだし。

「本当に、大丈夫なんですか」

「ええ。法律上は、屋敷も敷地も西園寺家の所有物です。そして、残りの手続きさえ済ませれば、将仁さんは西園寺家の当主となりますから、同時にその全てが将仁さんのものになります」

こういう話を聞くと、本当に俺は金持ちになったんだなあという気分になる。

「それに、会わせたい人も、いますし」

そして、常盤さんは妙な含みのある言葉を口にする。

だが、聞き返してみても、常盤さんは「まだ、ヒミツです」としか言わない。

血縁者はみんな死んでいるわけだから、それ以外となると、長年西園寺家に仕えてきた人とか、常盤さんとは別の形で遺産の管理をしている人とかが、妥当なところだろうか。でも、そんなのはわざわざ秘密にする必要は無いだろ、それが俺の知り合いだったりするから話は別だけど。

まあ、考えてみても、他にこの大人数で雨露をしのぐ良い方法は思いつかない。

「ええい、判りました。本家に、引越しましょう」

「では、明日迎えに来るよう、手配をかけますね」

そのことを伝えると、常盤さんは嬉しそうな顔をしてそんなことを言った。

「それじゃ、ケイちゃん。ちょっと、頼まれてくれますか？」

そして、ケイを呼ぶ。常盤さんの部屋は誰も入っていないのいつもの黒電話を使わないってことは、電話機ではなく電話線がだれかさんのせいでパーになったようだ。

とりあえず実家への連絡は常盤さんに任せておくとして。

「あとは……」

この家をこんなふうにした諸悪の根源に、俺は目を向ける。

そいつは、りゅう兄に寄り添って肩をあずけている。

「おい！賀茂杏寿！」

そいつが幸せっぽいのが妙にむかついて、思わず乱暴に声をかけてしまう。

「はい、なんどす？」

「なんどすじゃねえよ、お前、俺のこと殺すつもりだっただろ」

すると、そいつはきよんとした顔をして、顎に指を当てて何か考えた後、ぽんと手を叩いた。

「ああ、すっかり忘れてましたわ」

あまりにあっけらかんとした杏寿の言葉に、なんだか地軸が傾いたような気がした。

「忘れてたって、お前、ここまでやったってことは、西園寺家に恨みか何かあるんじゃないのか？」

「うちが？あはは、そないなもんあったら、こん程度じゃすみまへんえ？」

俺の疑問に、杏寿は妙に明るい口調で答えてくる。今の状況も相当なものだと思っただが。

「うち、雇われの身いなんどす。あんさんとこの擬人化はんらを始末せえつちゅうお役目でなあ」

「雇われ？」

「へえ。成功したら報酬が貰える筈やったんどす。まあ、今回は作戦が悪うおして失敗しましたけどなあ」

なんか、仕事に失敗したと言っているわりには、妙に朗らかだな。今の話だと、失敗したら一銭も貰えないことになると思っただが。

「んー、まあ確かに、ごつつ大赤字どすなあ。ほんでも、しくじったあげくに敵方に捕まってしもたら、使いもんにならんつちゅうことで、切り捨てられまっしゃるなあ」

そして、なー、とりゅう兄に同意を求める。つーことはなにか。杏寿はりゅう兄に捕まったってことなんだろうか。

「まあ、そういうことだ」

一方のりゆう兄は、なんか妙に緊張した面持ちでいる。

「おい、りゆう兄、何がどうなってるんだ」

「俺だってちつとばかしおどろいてんだ、俺に聞くな」

それでも、りゆう兄が困っている様子が面白かったのでしつこく聞いてみると、その結果は個人的に面白くないものだった。

りゆう兄の奴、杏寿とキスしやがったらしい。そしてそれがきっかけで、杏寿はりゆう兄に捕まってしまったんだそうだ。

一週間以上毎日机を並べて来た俺を差し置いて、りゆう兄は、さつき会ったばかりのくせにこの京美人をものにしやがったのだ。

キスひとつで陥落できるんだったら、この前とか、あの時とかに、雰囲気とかそういうったものを考えないで強引にやるときゃ良かった。デリカシーが無いとか言われそうだが、その時は本気でそう思ってしまった。

まあそれはともかくとして。

「誰に、雇われてたんだ」

とりあえず、何か情報がゲットできるかもしれないと思い、聞いてみることにした。

「それは、いえまへん」

するとまあ当然だが、そういう答えが返ってくる。

「一応、こちらにも守秘義務ゆうもんがあるんどす。堪忍な」
だが。

「何でもいいから教えてくれないか？」

「うちを雇わらはったんは、筆村ゆうお名前の御老人どす。胸にかかるとぐらいの見事なお髭生やしてはりましたな。でも、あの雰囲気はどうもただもんとはちやいますなあ」

りゆう兄が聞くと、あっさりと答えてくれやがった。

なんか、個人的に、兄貴にボロ負けしたような気がして、少し落ち込んだ。

14・もののけ全面戦争 その29

「お待たせー！」

「よいしょー！」

庭に引つ張り出したテーブルに、紅娘とケイが二人がかりで持ってきた中華鍋がどすんと載せられた。鍋の中には、なみなみと入った白濁したスープが湯気を立てている。

匂いからすると鶏がらスープっぽいが、なんか違う匂いもする。何のスープなんだろう。と見ているそばからそのスープがぐらぐらと煮えだす。そりゃそうだ、この鍋、紅娘の分身というか本体だからな。

「はい、具材。好きなのを各自で入れなさい。足りない人は言いなさい」

そこに、ザルに山盛りになった野菜類を抱えてレイカがやってくる。確か炎雀戦でナスとかトマトとかをぶつけて火の玉を消すなんてことをやっていたが、全部使ったわけじゃなかったらしい。

「肉はないのか？」

そのザルを見てヒビキが不満な声を上げる。

「それじゃ、これでも入れる？」

それに応えてレイカが袖の中から出したのは、霜がびっしりついた白いビニール袋。

中には、白くて半月形の物体が業務用冷凍食品のごとくいっぱい入っている。

それは、何日か前にみんなで食べた餃子だった。みんなしてあれだけ食ったのに、まだそんなに残っていたのか。

そしてそれ以上に、色々なものを着物の中に持ったままであれだけの機動力を発揮するとは、実はレイカって物凄い体力の持ち主なのかも。あの着物が実は某マンガの猫型ロボットが腹につけている四次元ポケットみたいなのなのもかもしれないが。

まあそれはともかくとして。

火が無いのにぐつぐつと煮える鍋に色々な具財が投入され、それが煮え始めると、かなり遅くなってしまったがようやく夕食が始まる。椅子は無い。過激派もどきと兄貴がバトった時にいくつかぶつ壊されたせいで全員が座れなくなってしまったためだ。ついでに言うところ、みんなが使う器や箸なんかは、レイカと炎雀と紅娘がバトった余波でゼーンぶダメになったので、近くのコンビニで買ってきた使い捨てのやつに変わっている。

「なんだこれは？」

「さつまあげよ。見てわかるでしょ？」

「そうではない、この汁にさつまあげは合わないと言ったのだ」

「ミーンはfeel yummyデースけどネー？」

「お、この餃子、ゆだつたかな？」

「さつき入れたばかりでしょう、ヒビキさんったら食い意地ばかりはって」

「大根おろしい、投入しまあす」

「そんなに一気に入れたらタメアル、湯がぬるくなるアル」

「ええー？こおんなに煮立ってますけどお」

「ワタシが大変アル！鍋の温度上げてるのワタシアルから！」

「なんどすか、これ？マロニーか思たけど」

「マロニーとは何でしょう？これはしらたきというものでしょう」

「しらたき？なんや風情のある名どすなあ」

「ふーふー、はいお兄ちゃん、あーん」

「あむ！？あつひいいいいいいい！」

「元気でいいツスねえ。お、豆腐がいい感じで煮えてる」

「麺類を何か入れて食べたい味でしょう」

「ああ、最近シメにラーメンの麺入れて食うところが増えてるらしいツスよ」

「残念ながら、ラーメンの麺は切らせているのよ。ラーメン好きの常盤さんには申し訳ないけれど、うどんて我慢して」

「我慢だなんて、麺類なら私は何でも好物ですよ」

さっきまで殺すか殺されるかといったやり取りをしていたとは思えないほど、穏やかで賑やかな雰囲気の中、鍋パーティーが始まった。その中に、さっきまで敵の総大将だったはずの杏寿まで混じっているのを見ると「何でお前がいるんだ」と突っ込みたくもなるが、そうすると「野暮だ」とりゆう兄に笑われそうなので我慢しておく。ちなみに、杏寿の式神たちは、みんな送還されてここにはいない。それから過激派もどきの連中は、みんなふんじばられて庭の隅に転がされている。飯も食わせてもらえないとは、敗残兵の扱いというのは無残なものだ。

それはともかくとして。

「常盤さん、明日、やっぱり、屋敷には行かないや駄目ですよねえ」シメのうどんをすすりながら、俺は常盤さんに質問していた。

明日の朝、西園寺の本家から、迎えが来るよう常盤さんが段取っていたからだ。

個人的には、本家の屋敷に行くのは構わない。構わないどころか是非行ってみたいんだが、朝から行くってえのが問題だ。

なにしろ明日は木曜日、学校はちゃんとある。しかも学園祭2日前だから、準備のほうもかなり大詰めになる。それを、ぴんぴんしているのに休むというのは申し訳ないような気がするし、さらに言えば授業の皆勤賞が取れなくなってしまうことが個人的に悔しい。

だが、こういうときの顔合わせとかで本人が行かないのは、失礼に当たるような気がする。実際に俺がそれをやられたら、どういってもりだと文句のひとつもいいたくなるだろう。

「そうですね。法律上は問題ありませんが、これから共に暮らすわけですから、良い心情を与えておいたほうが良いのではないでしようか」

常盤さんは、予想通りそう答える。

まあ正直、常盤さんが会わせたいと言った人がどんな人なのか、それが知りたいというのもある。

だがそうになると、やっぱり気になるのが学校だ。

「あー、どうすっかなあ」

頭を抱えてしまう。サボるのは嫌いじゃないが、サボった後のしっぺ返しは大嫌いだ。あーくそ、体が2つあればなあ、なんてことを考えてしまう。

「えーと、将仁さん？」

そうやって頭を抱えていると、鏡介が話しかけてきた。

その鏡介を見て思いついたのが、鏡介に身代わりになってもらうことだった。少なくとも外見は俺とほとんど同じだし、声に至っては全く同じだ。

「良かったら、明日は俺が学校に行きましようか？」

そして。鏡介は俺の考えを読んだようにそう提案してくる。

渡りに船、と思ったのだが、そこでちょっと躊躇してしまう。

この前、クローディアの家であったパーティーに身代わりで行ってもらったときは、その場に居合わせた迅にあっさり見抜かれた（迅がすぎるのかもしれないが）から、意外と通じないのかもしれない。特に学校の場合、ほぼ毎日面を合わせている連中だから、入れ替わったことにもすぐ気付かれそうだ。

そうになると、最終的には学校にもばれるし、内申書にも……

「どうでしょうか？」

「うちは構いまへん。そもそもそうなるきっかけを作ってもたんはうちどすし」

「そいつは心強いツスね」

なんてなことを考えていると、常盤さんと鏡介が杏寿と何か話をしている。

「ねーお兄ちゃん、明日一緒にお屋敷に行こうよーお」

「I think soデース。Masterがnew houseにnot aliveはno goodデース」

その一方で、モノたちは俺と一緒に西園寺の屋敷に行くことを望んでいるっばい。

「だって、西園寺家の頭首はまさしく将仁さんでしょう？ 私たちみたいな取り巻きだけが行っても、むこうにいる方々はいい気はされないのでしょう」

テルミにはつきりそういわれると、そのような気もする。取り巻きて言い方はあんまりのような気もするが。

「心配は要りまへんで、明日のことどしたらうちも学校で援護しますよって」

「それに、事情をお話しすれば、徳大寺様も助けてくださるでしょうし」

と思つたら、いつのまにかそういう話が出来上がっている。おい、俺の意思は無視かい。

「だあってえ、将仁さんに任せておいたらあ、いつつまでも答え出さなそうなんですものお」

「だつ、お、俺だって、俺なりに考えてだな」

「考えても意見はまとまらぬのであろう。だから我々で決めてやつただけのこと」

「そもそも両立できねえ話なんだろう？ だったらどっちかにするしかねえだろ」

どうやら、俺が西園寺の屋敷に行くのは決定事項のようだ。こいつらはそんなに新しい家に興味があるのか。

まあ、俺も興味はあるわけだから、それでいくことにするか。そう決めてしまつと。気が楽になった。

そして、どうやって引越しの準備をするか、ということに頭を切り替えることにした。

14・もののけ全面戦争 その29（後書き）

どうも、作者です。

今回で、かなり長かったです。その14もののけ全面戦争は終了です。

全面戦争と言いながら、一対一のバトルがメインになってしまいましたがいかがでしたでしょうか。

というわけで、これからしばらく、また書き溜めに入りたいと思います。

もしご感想などありましたら遠慮なく下さいませ。

それでは。

15・とうとう来ました西園寺本家 その1

9月28日

ぶーん、ききーっ。

2週間しないうちに半壊してしまった我が家の門の前に、ぴっかぴかの黒塗りの長い高級車が現れた。一般的にリムジンと呼ばれるアレだ。そしてボンネットの先についているのは丸を3等分した、ドイツの高級車のエンブレム。

「すっげ……」

俺には縁がない世界のもを目にした俺は、なんとかそれだけ口にした。

そのリムジンは、門の前をゆっくりと横切って行き、門の前にドアが来た所で音もなくぴたっと止まった。そして、こちらから手を掛ける前に、がちやりと音を立ててドアが開いた。

すごいな、自動ドアかい。

「どっぞ」

中から、低い男の声が聞こえた。

「さ、将仁さん、どうぞ」

常盤さんがそのドアの横に立って手を差し入れる。

「え、えーと、じゃ、その、おじゃましませう」

高級車の雰囲気は圧倒されながら、俺はリムジンの中に脚を踏み入れた。

そして、中がまた凄かった。窓全部にスモークが掛かっていたため外からはほとんど見えなかったのだが、中は真っ白いソファが窓際に並んでいて、カウンターバーみたいなものもあって、テレビとかでよく見る高級クラブみたいな感じなのだ。

どうも落ち着かずに中をきよきよとしてみると、前のほうに運転席が見えて、そこに運転手らしき人が座っているのが見えた。

近づいてみると、かなり年配なその運転手の人は、つばつきの白い

帽子を目深に被り、紺色の背広を着て、白い手袋を手にはめて、まさにお抱えの運転手という感じだった。

さすがこんなすごい車ともなると、専用の運転手つきなんだな— と思っただが、俺はそこになんとなくだが違和感を持った。

その理由は、間もなく判った。その運転手は、全く動かないのだ。

「え、えーと、運転手さん」

「はい」

「これから向かう屋敷って、どのぐらいかかります？」

「この時間帯であれば、3時間ほどで到着致します」

声をかけると、運転手の人はしわがれた声で返事をする。しかし、こちらを向くこともしなければ、ハンドルから手を動かすこともしない。

まさか、ロボットじゃあるまいな。

「ねねね、どうしたの、お兄ちゃん？」

いぶかしんでいると、ケイが後ろからのしかかって声をかけてきた。「ん、いや」

変なことを言っただけで不安がらせるのは止めとこう。

でも、一応、俺は西園寺の最後の頭首なんだからもうちょっと愛想よくしても……

そこまで考えて、はたと思いだった。

もしかして、この人は、擬人化なのかもしれない、と。

確か常盤さんは、先代・西園寺静香が生み出した擬人化は、人の姿はしているが、命令されたことしかしないロボットのよう存在だ、と言っていた。そうだとすると、必要以上に動かないのもわからない。くは無い。

まあ、運転中に余所見して事故られるよりはましだが、それでも”個性豊かな”擬人化に囲まれての生活に慣れた身としてはいささか寂しく感じてしまう。

「うっわ、こりゃすっぱえや」

「まさか私がリムジンに乗る日が来るなんて、思いもしなかったの

でしょう」

「あら、これ、冷蔵庫かと思ったらワインセラーなのね」

「のうレイカ、わらわは醍醐チースが欲しいのじゃ」

「貴様、朝餉あさけを済ませたばかりだということにもう空腹を訴えるのか？」

「Maybe 魅尾は growling child なのデースネー。
ヨーシヨーシ」

「これだけ広いとお、掃除のし甲斐がありそうですねえ」

「クリンサン、ココ水浸しにしたら怒られると思うアルよ？」

だが、感慨にふける間もなく、その“個性的な”連中が乗り込んできて、リムジンの中はあつというまに狭くなっていた。

ふと、窓から外を見る。スモークがかかっているので少々見づらいが、そこには制服を着た鏡介が立っていた。

「鏡介！」

俺は、一度車を出ると、俺の身代わりとして学校に行くことになった鏡介に声をかけた。

「悪いな、俺の我俣につき合わせちゃまって」

鏡介には、また影武者をしてもらい、迷惑をかけていると思う。すると、鏡介は平然としてこう答えた。

「そんな、気にすることないツスよ。俺も、将仁さんが通う学校には興味がありましたし、助け舟も色々出してもらえるんですから。」

それに、西園寺のお屋敷にも鏡の1枚や2枚あるでしょ」

そして、鏡介は俺を回れ右させると、背中を押して車の中に押し込んだ。

「将仁さんは、しっかりと自分のことをやってください。それこそ、将仁さんにしかできないことなんですから」

そして、リムジンのドアがボタンと閉められる。

「では、出発してください」

常盤さんの号令と共に、鏡介が見送る中、俺らが乗ったリムジンは静かに走り出した。

15・とうとう来ました西園寺本家 その1（後書き）

どうも、作者です。

長らく間をあけてしまいました。が、ようやくものけがいつぱいの新作が投稿できるようになりました。

メインステージが変わったということ、新しい登場人物がいつぱいいます。

どんなのが出てくるか、想像しながら待っていてください。

15・とうとう来ました西園寺本家 その2

「ほれ、座った座った」

ヒビキに引つ張られ、俺は真っ白いクッションの上に腰を落とす。

「はい、おしほりでしょう」

「ささ、ぐぐつと一杯」

すると、なぜか左右にテルミとレイカがいて、テルミがおしほりを、レイカが冷たい飲み物を差し出してくる。ここはどっかのキャバクラかおい。

「よいしょ」

そしてなぜか魅尾が俺の膝の上に乗ってくる。

「おい、魅尾お前何やってんだ」

「ここは寝心地が良いのだ。ふみゅ」

そう言いながらそこで丸まってしまふ。

正直言つて結構重い。これが子狐バージョンだったら苦にならんが、今は半人モード、つまり5歳ぐらいとはいえ人の姿のままなのだ。

「あーっ、場所とられたー！」

そのすぐ横で、ケイが今更ながら叫んでいる。

「あらあらあ、ケイさんは膝枕がお好きですかあ？私の膝なら空いてますよお？」

「お兄ちゃんのじゃなきややだもんっ！」

ケイ、それは贅沢というものだぞ。俺なら大喜びでそっちにいくのに。

「Hey, everyone! spiritsをfoundしたデース！」

「でかしたぞバレンシア！おっ、ジンにテキーラか、こいつはマニアックだな」

「アイヤーこれはシャンパンアルな！前祝にぱーっで行っちゃおアルか？」

「止めぬか馬鹿者！こういうものはな」

なんかむこうではリムジン内に置かれた冷蔵庫に群がってワイワイと騒いでおり、シデンが殊勝にも暴走しそうな連中にツッコミを入れている。

偉いぞ。と思ったら。

シャンパンのピンを紅娘からぶん取ったシデンがいきなりそれを振り出して。

「よく振って屋外で撒くものではないかあああああつ！」

走り出したリムジンの窓を開けてそこから飛び出してしまった。つてちよつと待て。シデン、お前、腕を広げないと飛べないんじゃないのか！？

あわてて窓の外を見ると、そのシデンがいない。まさか落ちたんじやないだろうなと思って後ろを見たが、そっちにもいない。あのアマ、シャンパンなんか持つてどこへ行ったんだろうか。

まあ、いないのはしょうがない。シデンならなんとかするだろ、と思っ直して中に引っ込む。

そして案の定。しばらくすると、さっき飛び出した窓から、シデンが入ってきた。さすがに飛び込んでではなく窓枠に捕まってからだった。

「褒めろ上官！世界最大のしゃんぱんしゃわあをやってきたぞ！」

一息ついたシデンは、空になったシャンパンのボトルを見せながら興奮気味にそんなことを言っ頭を突き出してくる。

なんでも、また成層圏まで行って、今度はシャンパンを撒き散らしてきたらしい。本当にそんなところまで行ったら、シャンパンも凍っつてそうなんだが。

「な、なんか勿体無いような気もするけど、うん、まあ、よくやった」

頭を撫でてやると、シデンの奴、すごく嬉しそうな顔をしゃがった。「わあつ、シデンちゃんやるう！」

色々言いたい事はあったが、その顔を見たら、「まあ、いいか」と

思ってしまった。

15・とうとう来ました西園寺本家 その3

リムジンに揺られて、どのくらい走ったのだろうか。

途中で高速道路に乗ったのは覚えているのだが、気がついたらなぜか山の中を走っていた。

このリムジンは、走っているのにおっそろしく静かだ。どのくらい静かかと言えば、カウンターに置いたグラスに入った飲み物に、波が立たないほどだ。

本当の高級車というのはこういうものなんだろうか。

そんなことを考えていると、不意に右側が森から壁に変わった。壁と言っても味気ないコンクリートとかではなく、時代劇とかで武家屋敷のまわりに築かれているような、屋根のある白壁だ。

そして、その壁が何百メートルもずーっと続いている。

いつまで続くんだ、と思っていると、不意に車が止まった。

何事かと思つて前を見ると、そこにはそれこそ時代劇で出てきそうな門が、でーんとそびえて道を塞いでいた。

俺たちはいつの間にも江戸時代に迷い込んだらう。そんなことを思わせる光景だ。

と、その門が、木が擦れあうような独特の音を立ててゆっくりと開いていく。

門が開ききると、今度はリムジンがまるで流れ作業のようにスムーズに動き出し、その門の中にゆっくりと入っていった。

門を潜り抜けたむこうは、テレビや写真でしか見たことがないような、見事な日本庭園だった。今までそういうものに縁が無かったから詳しくは判らないが、手入れがかなり行き届いているのは間違いないだらう。

そして、その日本庭園の中に道路があつて、そこを車で、しかもリムジンで走っているという今の状況に対して、贅沢なような、そして不自然なような感じを受けた。

「こつて、もしかして、西園寺の敷地なんですか」
なんとなく気になって、常盤さんに聞いてみる。

「はい。敷地面積は約8000坪。東都ドームの6割弱に相当します。ただしこれは庭園として壁で仕切られている範囲だけで、実際に西園寺家がこの近辺で所有する土地の総面積はその約20倍になります」

8000坪という時点ですでに十分凄いなと思うのだが、その20倍なんて言われたら、どのくらい広いのかも想像もつかん。

あらためて、とんでもないものを引き継いでしまったと思知らされた。

前を見ると、リムジンの向かう先に白い建物が建っていた。歴史の教科書で見た、鹿鳴館を連想させるデザインの、かなり年季の入った建物だ。

あれが、西園寺の屋敷なんだろうか。外壁と言いい門構えといい庭園といい純日本的な感じだったので武家屋敷みたいなのを想像していたんだが、なんかちょっとイメージと違う。

まあ、レイカやシデンならともかく、テルミヤバレンシアが武家屋敷に住むのはちょっと想像できないのでこのぐらいがちょうどいいのかもしれない。

そんなことを考えながら、俺は長いリムジンに揺られていった。

15・とうとう来ました西園寺本家 その4

「ん？」

ふと、視界の端に、人の姿が見えた。

それは、脚立の頂点に立ち、庭木の手入れをしている、庭師らしき爺さんだった。ハンチング帽を被ったその姿は、日本庭園とは合わないはずなのになぜかそれほど違和感を覚えない。

その老人をぼーっと眺めながら、この人も擬人化なのかなー、なんてなことを考えていた、その時だ。

突然、その爺さんが、脚立の上で背中を丸めて苦しみだした。

何事かと思っていると、爺さんの体がぐらりと傾き、そして脚立の上から落ちてしまったのだ。

「お、おい、ストップ、車を止める！」

ロボじみた運転手に向かって叫ぶと、ドアのハンドルに手をかける。そして、キツという音とともに車が止まり、ドアロックが解除されるや、俺は外に飛び出し、生垣を乗り越え、その爺さんのところに駆け寄った。

爺さんは、雑草が入り混じった芝生の上に横たわり、体を痙攣させている。なんか、すごく危険な状況のような気がする。

「おい！しっかり！えーとしっかりしてください！」

どうすれば良いのかは判らないが、とにかく抱き上げ、声をかける。この爺さんとは縁もゆかりも無いが、人としてほっとくわけにはいかないだろう。

一緒に乗ってきたうちのモノたちも俺を追ってかけつけ、俺たちを取り囲む。

「ケイ！救急車！119番だ！」

「う、うん！」

そして、ケイが目を閉じ、電波を飛ばそうとした時だ。

「通話しないでください」

突然、常盤さんが有無を言わせない口調でそう言い、ケイの左肩を突き飛ばしそうなほどに強く叩いた。

びっくりしたケイが目を開く。目の色が鳶色、ってことはまだ通話モードじゃない。確かにケイの左肩には通話終了のマークがあるが、本当に切れるとは思わなかった。

あれ、常盤さんって超アナクロな人じゃなかったっけ、ってそんな事を言っている場合じゃない。

「なにするんですか！」

わけが判らない常盤さんの行動に、俺は食ってかかった。

爺さんの様子は、素人の俺が見てもかなり危険そうだ。ほっといたら死んでしまいかもしれない。それなのに、常盤さんは、ほおって置けという。

「・・・・・・・・あ、あんたは」

その時、俺が抱きかかえていた爺さんが、全身を痙攣させながらも俺の腕を万力のように強い力で掴み、俺を見上げ、しわがれた声で、俺にそう聞いてきた。

「・・・・・・・・西園寺、の、新しい・・・・・・・・」

「あ、ああ。俺は、西園寺将仁。先代の、実の息子だ」

爺さんの言葉に、俺は思わず答えていた。これで少しでも力になれば、それでよかった。

だが。

爺さんは、俺のその言葉を聞いた直後、ふっと表情を緩めた。と同時に、あれほど強く掴んでいた手からも力が抜け、全身の力を抜いてだらんとなった。

そして、俺の両腕がその重さを感じたとき。

爺さんの姿が、まるで陽炎のように音も無く消えた。

かちゃん。

そして、芝生の上に、古びた枝切り鋏が無機質な音とともに落ちた。

「これが、遺書の有効期限の真実です」

皆が黙り込んだ中、常盤さんが、事務的にそう述べた。

「物部神道の力は、あくまでも道具にかりそめの命と姿を与え、擬人に変えるだけ。完全に人にできるわけではありません。擬人は、力を持つ者からそのエネルギーを受け続けなければ、擬人としての存在がだんだんと希薄なものになっていくのです。そしてそれが限界を超えたとき、人の姿を保てなくなり、もとのモノに戻ってしまいます」

そして、芝生の上に横たわる枝切り鋏に、いたわるように手を添える。

「静香様が亡くなってから今日まで、多くの擬人化たちが人の姿を失いました。おそらく、静香様の命日を迎える頃には、静香様の手によって姿を得た擬人化たちは、全員が人の姿を失うでしょう」
そう言われて俺は、背筋が冷たくなった。

それは、言い換えると、俺が死んだらケイもテルミもヒビキもクリンも鏡介もレイカもシデンもバレンシアも紅娘も長くは生きられない、ということだ。

もしかしたら、うちのモノたちが俺を守るために命を駆けたバトルを繰り返して来たのは、それを直感的に感じていたからかもしれない。

そう思うと、なんかちょっと寂しいような気がしたと同時に、俺は簡単に死ぬことは出来ないかと、意思を固めることにもなった。

15・とうとう来ました西園寺本家 その5

やがて、鹿鳴館みたいな建物の前に、俺たちの乗った車が横付けされる。

「到着致しました」

運転手が座席から微動だにせずそう告げる、それと同時に、リムジンのドアががちゃりと自動的に開いた。

車から降りると、目の前に両開きの大きくて重厚なドアが俺たちをさえぎるように立ちふさがっている。どっかの歴史博物館みたいだ。常盤さんがそのドアに備えられた大きなノッカーに手をかけ、2度打ち鳴らす。

がんつ、がんつ、と、ドアの雰囲気には違わない重厚な音が響く。

すると、ガゴンという鍵が開くような音が鳴り響き、そのドアが、ゆっくりと音も無く開き始めた。

「なんか、ずいぶんと勿体つけた感じだな」

ちよつと失礼かもしれない言葉が、つい口から出てしまう。そして、何が出てくるのか判らないからか、無意識のうちに俺はモノたちと身を寄せ合ってしまう。

だが、そのご大層な開き方をしたドアのむこうにいたのは、執事っぽい黒い礼服を着込んだ、アインシュタインみたいな感じの爺さんが1人だけだった。

「ようこそ、お待ちしております」

その爺さんは、入ってきた俺達に向かって深々とお辞儀をして来た。「久しぶりですね」

どう反応したらよいのか、俺らが困っていると、常盤さんがすつと進み出る。

「はい、常盤様」

常盤さんが声をかけると、アインシュタインはどことなく無機質な声でそれだけ答えた。

ふとまわりを見回すが、家の中は薄暗く、人の気配がない。こういうお屋敷だと、客人を迎える際には使用人とかがずらりと並んでいるイメージがあるので、1人だけだと、がらーんとしてすごく寂しい感じがする。

「そちらの方が、我らの新たな主ですか」

「ええ。真田将仁、改め西園寺将仁さんです」

常盤さんがそう告げると、アイنشユタインは数歩俺に近づいて、俺の顔をじっと見つめた。

何となく、生気のない目だ。そう思うと、動きにも生気がないような気がする。

もしかしたら、この人も何かの擬人化なんだろうか。そんなことを考える。

「よ、よろしく」

「承知いたしました。それでは将仁様。中に御案内いたします」

そんなことを考えていると、アイنشユタインはすつと俺から離れ、そう言つて頭を下げた。

そして、機械仕掛けのような動きで横に向くと、薄暗い廊下を奥へと歩き始める。

「……なんだ、ありゃ」

「なんだか、変な感じのおじいちゃんだね」

ずいぶんと人間らしくない振る舞いにあっけにと取られていると、俺にしがみついていたケイがそんなことを口にする。

見ていると、自動照明なんだろうか、その爺さんが進むのとほぼ同じタイミングで、廊下の照明が点灯していく。だが、俺らが立ち往生してしまっているのには気付いていないのか、止まる様子も無ければ、振り返る様子もない。

「さ、行きましよう。他にも、会わせたい方がいますから」

常盤さんに促され、俺たちは群れになつたまま、すでに小さくなり始めたアイنشユタインの後を追いかけはじめた。

15・とうとう来ました西園寺本家 その6

明かりが灯ってやっと判ったんだが、この廊下には赤い絨毯が敷かれている。小学校の頃、社会科見学で国会議事堂を見学したことがあるが、あれを思い出してしまう。

その廊下を小走りしてアインシュタインに追いつくと、その爺さんは廊下の突き当たりにある扉の前で立ち止まった。

がちやりとノブを回す音がした後、爺さんの前のドアが音も無く開く。

「どうぞ」

アインシュタインっぽい執事さんは、開いたドアの横に立つと、また丁寧に頭を下げて来た。

促されるまま中に入ってみると、そこは応接間のような感じだった。応接間と言っても、二十畳ぐらいありそうなその部屋には、品が良く季節の入ったテーブルや調度品が置かれ、俺らが今まで住んでいた家のリビングとは比べ物にならないほど高級な雰囲気が出ている。

「アイヤー、この壺高そうアルなー！」

「My goddess、このtable、made at 1862とあるデース」

「むむむ、これだけ広い屋敷なのに、塵ひとつ落ちていないのですよ」

「本当ですねえ。舐めてみたくありません」

「止めなさい、そんなにおなががすいているの？」

「あたしは腹減ってるぜ。なにしろまだメシ食ってねえしよ」

「うわあ、いい眺めー！写真撮っちゃお」

「うむ、今日は天気も良いし、絶好の飛行日和だな！」

「ふむ、ならばわらわをその背に乗せてくれぬか。楽しそうじゃ」
部屋の中に入ったモノたちは、みんなしてはしゃいでいる。女三人よればかしましいと言いが、今はそれがトータルで10人もいるの

だ。騒がしくもなるだろう。

だが、部屋の雰囲気はそれでも揺らがない高級感に溢れていて、何となく居心地が悪く、つい部屋の中をきよろきよろと見てしまう。その時、俺はその部屋の奥のほうに、一枚の絵が飾られているのに気がついた。

それは、華やかな色使いのドレスを着て、椅子に腰掛けた女の人を描いた肖像画だった。肌は白く、黒い髪をアップにしてまとめ、穏やかな笑顔を浮かべている、どこことなく気品を感じさせる若い女性だ。背景は暗くてほとんど判らないが、それだけにこの女性の姿が目立つ。

だが、なぜか俺は、この肖像画の人を、どこかで見たような気がしていた。そんなこと、あるはずなのに、だ。

「常盤さん……」

やっぱり気になるので、常盤さんにこの人が誰かを聞いてみようとした、その時だった。

「将仁……」

俺は、誰かに呼ばれたような気がした。

振り向くが、誰もいない。それに、今の声には、聞き覚えがない。

「どしたの？」

不思議そうな顔をしながら、さっきまで写真を撮りまくっていたケイが小走りで駆け寄って来た。

「ん、いや、誰か呼んだかなと思って」

「？ケイは呼んでないよ？」

「こちらです。あなたの後ろ」

すると今度は、俺の後ろから声が聞こえた。

振り向くと、そこにはさっきまで見ていた肖像画があった。

「……まさか」

嫌な予感がする。描かれた絵が喋る、世にも珍しい呪われた絵とでも言っただろうか。

今時、呪いなんかあるわけがねえと言いたいが、生憎、この部屋で

かしましくしているのは1人残らずそのありえねえものに近い存在
なのだ。

だが。

「はい、私が、呼びました。将仁」

俺が見ている目の前で、絵の口元が、明らかに、動いた。

15・とうとう来ました西園寺本家 その7

「うわあああああ！絵が、しゃべったあああああ！」

「きゃあああああ！」

つい、叫んでしまった。ホラーな体験もオカルトな体験もここ数日で嫌と言うほど体験しているのに、それに加えて平面に映る顔とはしょっちゅう喋っているのに、なんでこんな悲鳴を上げてしまったのだろうか。後になって考えるとすごく情けない。

おかげで、うちのみんなが、一斉に俺のほうを向いてどやどやとやってくる。

「なんだなんだ、どうした一体」

「Whatがspeakしたデース？」

そしてみんながその絵を見るが、絵が動いているというのに、あまり驚いている奴がない。やっぱり自分たちが元々喋らないようなものだったからだろうか。

「将仁、将仁？ほら、何もしないから、顔を見せて？」

改めてその肖像画を見ると、絵の中の人が立ち上がって、まるで窓から覗くようにこつちを見ている。

「な、な、なんだこれ！？」

なんかよく判らない状況に、俺の頭はかなりパニックっていた。

「将仁さん、落ち着いてください」

常盤さんの声でふと我に返ると、俺はなぜかその絵に向き合うような位置に置かれた椅子に、腰を下ろしていた。

「常盤、説明していませんでしたか！？」

「申し訳ありません、少しバタバタしていました」

見ると、絵の中の人に、常盤さんが怒られている。なんか常盤さんが怒られるという光景が非常に珍しいので、なんかちよつとあつけに取られてしまう。

「い、今から、説明しますから、少し落ち着いて下さい」

「全くもうつ、急いで下さいねっ」

絵の人は、なぜかむくれながらさっきの位置まで戻って椅子に腰掛けると、またこっちを向いた。絵のくせに常盤さんを叱り飛ばすなんて、どういう素性なんだろう。

その絵の横で、常盤さんがごほんと咳払いをする。

「将仁さん。こちらは」

そして、絵に手を差し伸べると、こう言った。

「西園寺家の先代当主、西園寺静様です」

そして絵の人はにっこりと微笑みかける。

先代当主、西園寺静香。何度か過去に聞いているその名前について、記憶を掘り起こす。

「あーっ!？」

そして、思い出した。

「母さん!？」

その瞬間。絵の人が、ぱあっと表情を明るくしてこっちを見た。

「気付いてくれたんですね、将仁!」

よっぽど嬉しかったのか、絵の中から飛び出しそうぐらいにアツプになっている。加えて、目に涙までためている。その横では、常盤さんがなんかほっとした表情をしている。

だが、気付いて、といわれても反応に困ってしまう。なにしろ俺は、生まれた直後から別々に生きていたから、この人には何の感情もない。

「いや待て、母さんなわけないだろ。一年も前に死んでるわけだし。うちの鏡介みたく、擬人化なんじゃないのか？」

すると、その絵の人は見て判るほどしゅんとしてしまった。

「……そうですよね、母親らしいことなんて、何一つしてあげられなかった女ですもの」

だが、一転して顔を上げると、とても真剣な口調でこう言い切った。

「でも、私は、擬人化ではありません。今はこんな姿ですが、私は、自分のお腹を痛めてあなたを生んだ、西園寺静香なのです」

なんか、また判らなくなってきた。俺が絵から生まれたなんてわけがないし、死んだはずの人が今こうしているってことは、幽霊の類なんだろうか。

「本当に、西園寺静香さん？」

「それは、私が保証します」

そう言ってきたのは、常盤さんだった。

「将仁さんは、魂がものに宿ることはご存知かと思えます。こちらの絵には、先代の当主、西園寺静香様の魂が、宿っておられるのです」

「……へ？」

一瞬、常盤さんが何を言っているのかよく判らなかった。

今まで、擬人化とか付喪神化とか、沸いて出た魂？が物に宿って云々というのは見てきたが、魂を別のものに宿らせるというのは初めてだ。

「私、一目でいいから、あなたの姿が見たかったです」

そして、自称・俺の生みの母だと言い張る西園寺静香、の肖像画が話しはじめる。

俺を生かすために俺を手放した後、彼女は、そのことをずっと心に秘めて生きていたらしい。だが、自分の周りで自分の親族が次々と死んでいき、ついに自分も倒れてしまったとき、彼女はどうしても俺に会いたくなっただろうだ。

その、俺に会いたいという気持ちが強かったせいなのか、気がつくのと彼女の魂はこの肖像画に入り込んでいたらしい。

なんか、この世に未練を残した人が幽霊になる、という話によく似ている。

「それに気付いたとき、私は、静香様の最後の望みを叶えて差し上げたいと思いました。成長した一人息子、将仁さんの姿を、一目だけでも静香様にお見せしたいと」

そして、常盤さんは眼鏡を持ち上げ、目元を拭う。

そこまで言われると、こっちとしてもあまりひどいことは言えなく

なってます。

「本当は、生きているうちにあなたに会いたかった。この手で抱きしめて、キスもしてあげたかった。母親らしいこともしてあげたかった。今となつては叶わないけど、でも、あなたはこんなに立派に成長してくれた」

絵の中の人も、言いながら、感極まったように泣いている。

「静香様ああああ！」

「常盤ああああ！」

そしてついには、常盤さんと抱き合つて、本当に泣き出してしまった。傍から見たら、常盤さんが額に抱きついて泣いているようにしか見えないのだが。

おかげで、こっちはちょっとしらけてしまった。

「どうしよつ？」

「どうしよつと言われましても、これはどうしよつもないのでしよつ」

「だよなあ」

「Miss Tokiwaがeasilyにcryするのはin my knowledgeです、but、Masterのmotherもeasilyにcryするpersonとはout of my knowledgeです」

「クールが売りの私だけど、少しだけ、もらい泣きしそうだわ」

「貴様ツ、そのようなことを言うでないツ！我まで、我までツ、泣けてくるわっ！」

うちのモノたちの反応も、もらい泣きする奴もいれば妙に冷めた奴もいてまあ様々だ。

ただ確実に言えるのは、静香さん（まだ母さんと呼ぶ気にはなれない）と常盤さんが泣き止まないと、話は進まないということだった。

15・とうとう来ました西園寺本家 その7（後書き）

どうも、作者です。

新キャラ、先代西園寺家宗主にて「子煩悩な二次元」西園寺静香の登場です。

実年齢より精神年齢が若めとなってい（るつもりであり）ますが、それはとり付いた「絵」に描かれた年齢が若い頃だったため、それに引っ張られてしまったためです。

とりあえず、彼女は絵の中で動き回って喋る以外特に何もしいはずですので、ご了承願います。

15・とうとう来ました西園寺本家 その8

「もういいか？」

2人が泣き止んだところを見計らって、2人に声をかける。

「ごめんね、将仁」

「つい、感極まってしまい」

「いや別に泣くなどとは言わないけど、泣いても話は進まないだろ」として、絵の中の人の方がまた感極まり始める。

「将仁、こんなしつかりした子になって」

「そうですよねえ」

「だああっ、こらそこの絵と時計ッ！また泣くんじゃねえっ！うっとうしいっ！」

怒鳴ると、2人は一瞬びくつとしてからしゅんとしてしまった。めんどくせーな！もう。

「あのさ、俺、本当にここに住んでいいんだよな？」

すると、まず自称俺のお袋な絵の人がぱつと顔を上げてこう言った。

「もちろんです！この世の何処に、自分の子と住みたくない親がいますか！？」

そんなのはいくらでもいると思うんだが、これ以上虐めるとあっちが沈没してしまいそうだから止めておこう。

「えーと、住むのは俺だけじゃなくて、こいつらも一緒なんだけど」「え？」

すると、絵の人はそれに始めて気がついたようにあたりを見回した。「誰？」「誰？」

「誰って、俺の擬人化だけど……常盤さんから聞いてないの？」

「ほら、この前、お話したじゃないですか。将仁さんも覚醒されていると」

「あ、あら、そうだったかしら」

全く、これだけ大人数なのに俺しか見えていないなんてどれだけ視野狭窄なんだ。

そう思っていると、自称お袋の絵の人が枠の中で咳払いをすると、済ました顔をして言った。

「もちろんです。あなたの家族であれば私の家族でもあります。それを追い出すようなことはしませんよ」

「ならいい」

言質をとったので、みんなのほうに向き直る。

「というわけだから、みんな、挨拶を……」

してもらおうかと思っただが、ケイ以外は相当ヒマだったのだから、各自で勝手に喋ったり部屋の中をいじったりしている。テルミなんかは率先してアインシュタインに家のことを聞いていたりして偉いなどと思うが、シデンよ、いくらやることがないからって部屋の中を飛び回るのは危ないから止めてほしいんだが。

「まあいいや。とにかく。みんな。今日からこの家にお世話になるから、挨拶してくれ」

二次元にしつげがなっていない（しつげしたこともないが）なんて言われるのもなんか悔しいので、挨拶ぐらいはしてもらおう、と思いやらせてみた。

「携帯電話の擬人化のケイです！お兄ちゃん共々よろしくおねがいします！」

「プラズマテレビの擬人化、三石輝美と申します。テルミとお呼びください、大奥様」

「あたしはオフロードバイクのヒビキ。人間名は川杉響だ。よろしくな」

「浴用スポンジの擬人化のお、安房久倫ですう。お世話になりますう」

「私、冷蔵庫の擬人化、氷室怜香といます。不束者ですが宜しくお願致します」

「自分は零式艦載機二二型、の模型の擬人化、中嶋紫電であります

！総司令殿、宜しくお願い致します！」

「Hello, my grand Master! ワタシは Valencía McQueenデース! Masterのlap top computerからtransformしたデース! I'm glad to see youデース！」

「二ハオ！ワタシ、広東式中華鍋の擬人化、李紅娘ですアル！よろしくおねがいするのコトね！」

「む、わらわは、この家に厄介になっておる気狐の魅尾じゃ」

とりあえずみんなに一言ずつ挨拶させる。しかしこうしてみると挨拶だけでも個性が出るもんだな。

「私は、先ほど常盤のほうから紹介がありました、西園寺家先代当主、西園寺静香と申します。皆様、よろしくお願ひします」

絵の人、もとい静香さんは、一通りの挨拶が終わると、妙に改まった感じでみんなに挨拶する。

「さあ、皆さん。今日からここが皆さんの家ですから、好きなようにくつろいでくださいな」

そして、なんかどっかの寮母さんみたいにそう宣言した。

15・とうとう来ました西園寺本家 その9

「ねえ、将仁」

大半の連中がこの応接間を後にしたので、俺も出て行こうとしたら、静香さんに呼び止められた。

「何スか？」

「もう、そんな他人行儀なことしないの。親子なんだから
絵の人は、額のむこうからニコニコ顔で語りかけてくる。」

改めて見てみると、どう見ても俺の母親と言っほどの年には見えな
い。まあ、肖像画だから若い頃の姿なのかもしれないが、おかげで
俺の母親と言われても余計に実感がわかない。

「ところで、彼女たちのことなのだけれど」

「ケイたちのこと？」

声が出たので横を見ると、ケイがいた。出て行ってなかったらしい。
「あなた、彼女たちにお芝居とかさせたりしていない？」

「芝居？」

「そう。いかにも自分たちが個性的であるように見せているとか
ああ、なるほど。俺の手による擬人化が個性的すぎるんで疑ってい
るのか。」

「なんで芝居なんかさせる必要があるんだよ」

「んー、たとえば、私を楽しませるとか」

「ああ、楽しんでくれたならそれはそれで嬉しいけど、あいつらの
前でそんなことを言ったら、俺は怒るぞ？」

「えっ？」

「あいつらは、このケイも含めて、あれが素なんだよ。なっ！」

そうケイに同意を求めると、ケイは首を大きく縦に振った。

「あ、あら、そうなの」

すると、絵の人は少し面食らったような顔をした。

「以前も話しましたとおり、将仁さんの力は、私が見てきた中でも

かなり特殊かつ強力です。それこそ、一個の人格を生み出してしま
うほどに」

絵の人の横に控えていた常盤さんが言葉を添える。なるほど、やつ
ぱり、うちの擬人たちはこの家系の中でもかなり特殊な存在らしい。
でも俺から見たらアレが当たり前だし、逆にあいつらからキャラが
無くなってしまったらつまらないことこの上ないと思う。

「ケイもそう思う。お兄ちゃんのこと、お兄ちゃんって呼べなくな
るのはケイも嫌だもん」

ケイもどうやら俺と同意見のようだ。まあケイの場合、いつかのア
レみたたく人の姿を無くしても携帯電話の中で生き続けそうな気もす
るが。

「それじゃあ、私が残した擬人化たちを、あなたが作り変えたら、
どんな楽しいことになるのかしら」

すると突然、絵の人が妙なことを言い出した。

「作り変えるう？」

「ええ。西園寺家の資産は、この屋敷の梁一本から、山の雑草一株
に至るまで全てあなたのものですから、それに付随する擬人も、あ
なたのものでしょ？」

絵の人は、なんか倫理的に問題がありそうなことを言ってくる。

「人身売買みたいだな」

思わずそんな言葉が口をつく。しょうがないだろう、相手は人の姿
をしているんだ。

「それは違います」

だがそこで、常盤さんはそう言い切った。

「将仁さんが最近ハマってらっしゃる三国志に例えると、私たちは
将仁さんという大将に仕える家臣です。将仁さんが曹操であるなら、
私たちは夏侯淵や司馬遷のようなもの。もっとも、私は、将仁さん
は曹操というよりは劉備のほうが近いと思いますけどね」

そして、フォローのつもりなのか、そう言ってにっこりと笑った。

まあ、俺が曹操か劉備かはさておき。確かにそういう時代の家臣は

2代に続けて仕えるというのもあるから、そう考えれば納得できなくもない。

「それに、静香様の手による擬人は、人としての静香様が亡くなったことで、姿が維持できなくなり、やがて消えてしまう運命にあります。それを防ぐ手段は、彼らを、将仁さんの手による擬人にする
ことだけ」

そこに、常盤さんがダメ押しをしてくる。

俺の脳裏に、さっき庭先で遭遇した経験が思い浮かぶ。

「……………それをやれば、彼らは、生き延びるんだな？」

「生き延びるといふより、将仁さん、あなたのもんとして生まれ変わる、と言ったほうが、的確でしょう。擬人は、力の行使者と対になる性別を持ちますから、今回のケースでは性別も変わりますしね」
「そういうええそうだった。最近やってないから忘れがちだったが、そういう法則があると常盤さんが言っていたような気がする。だから
うちは女だらけなんだ。」

まあそれはそれとして。俺の目の前で消えられるのは、非常に後味が悪い。

「どつやったらいい」

偽善的な感じもするが、とにかく、やってみることにした。

15・とうとう来ました西園寺本家 その10

絵の人が手を2回叩く。すると、部屋のドアを開けてあのアインシュタインが部屋に入ってきた。

今から一人呼ぶから、と言われ、待っていたらやってきたのが彼だ。アインシュタインは、ドアを丁寧に閉めた後、絵の人に向かってうやうやしくしく頭を下げた。

「お呼びですか」

「ええ。私は、西園寺の全てを、私の息子、将仁に譲り渡しました。それに伴い、あなたの主人も彼となります。そのこと、承知してくれますか？」

絵の人の言葉を、じっと立っただままできいていたそのアインシュタインは、言葉が終わると口を開いた。

「承知いたしました」

感情も抑揚も無いその物言いは、本当にロボットっぽい。

「将仁さん、さあ」

アインシュタインの返事を聞いて、常盤さんが俺を前に促す。そして、俺はアインシュタインの前に立った。

生きているのか死んでいるのか判らないような、ガラス細工のような目。表情の無い、皺と髭で包まれた顔。近くで見るとそれが余計に判る。

「右手を、出してくれ」

アインシュタインに言つと、彼は何の抵抗もなく右手を差し出してくる。

俺はその手を取ると、ぐっと握り締めた。手袋の上からも、冷たくて、手の皮がたるんでいて、生気がなくて、死人の手（握ったことは無いが）のような感じが伝わってくるが、そこはぐっと我慢する。

「これから、世話になります。よろしく願います」

俺がそう口にした、その瞬間。

かなり久しぶりに感じる、耳鳴りのような音と、暴力的なまでの真っ白い光が、その場を包んだ。

「き、キターッ！」

なんか知らんが、そんなふうに叫んでしまった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そして、俺が目を開いたとき、そこにはアインシュタインの姿は無く、かわりに品のよさそうな女の人が立っていた。長い黒髪を首の辺りでひとつに束ねている。服装は確かにさっきのアインシュタインが着ていたような礼服に似ているが、アインシュタインの時は執事に見えたのが、彼女になるといきなりマジシャンかバーテンダーみたいに見えてしまう。

てっきり、性別だけが変わると思っていたので、マンガとかで定番の老メイド長みたいになるかと思ったんだが、どうも俺の発想は貧困だったらしい。

「これが・・・・・・・・新しい、私」

その礼服女は、すっかり変わってしまった自分の体を見て、そう呟く。

かと思ったら、今度は両手で、俺の手を掴んできた。

「あ、ありがとうございます！私に、これほど素晴らしい体を与えて下さるなんて、感謝の言葉もございません！」

そして、満面の笑みを浮かべ、俺の手を大げさすぎるほどに振ってくる。

うーん、喜んでくれているみたいだが、いいんだろうか。

「そ、そか、じゃ、悪いけど、手、離して、くれないかな」

なんか想いがこもっていきそうな手で、力いっぱい握ってくる。別に痛くは無いんだが、初対面の人にやられるとなんか変な感じになってくる。

「あ、も、申し訳ありません」

すると、礼服女はぱっと手を離し、一步離れて頭を下げてきた。うちのテルミ並みに礼儀正しい。

「えーと、そういえば、君って、何の擬人化だ？」

俺もちよつとどきまぎしてしまつたが、黙っているのもアレなので、気になつていたことを聞くことにする。格好が変わつていないから、あの礼服の擬人化かな。

「私は、この屋敷の擬人化です」

だが、俺の想像は全く外れていた。

「へ？」

「この屋敷って、このおつきなお屋敷の？」

「はい。この屋敷です」

ケイの言葉に、礼服女は真顔でそう答える。

ちらつと自称俺のお袋の絵を見ると、ニコニコしながらそうだと言わんばかりにうなずいてきた。

どうやら嘘ではないようだ。もとのモノが自分と別に存在する、というのが紅娘とかと同じケースだが、この場合スケールが違う。

「じゃあ屋敷さん、何ができるんだ？」

「はい。この屋敷の扉、窓、照明、全てが私の管理下にあります」

「……そうか」

こんなでかい屋敷の擬人化なんだからもつと派手なことができるかと思つてはいたんだが、ずいぶんと微妙な能力だな。まあ、戸締りや消灯のし忘れはなくなりそうだが。

「なんか、微妙だね」

ケイも同じような感想をもつたらしい。俺を見上げて、ぼそつとそんなことを口にした。

「他にもいくつかできることはありますが、お子様には少々刺激が強うございますので」

どうやら聞こえてしまったらしい。礼服女は、ちよつとむつとした顔を見ると、なんか妙に勿体つけたことを口走る。

刺激が強いとはどういうことだろう。まず想像したのはエロいことなんだが、今さっき女の姿になつたばかりだからそういうことではあるまい。まさか、実はこの家は幽霊屋敷で、幽霊を召喚できる、

なんてオチじゃあるまいな。

「ところで、ひとつ、お聞きして良いでしょうか？」

そんな妙な想像をしていると、今度は礼装女のほうが聞き返してきた。

「さきほど、私を『屋敷さん』と呼びましたが、それは一体？」

「へ、あ、ああ、うちのモノたちには名前をつけているんで、つい
そういえば、この人は俺の前の代、今では絵に入っている人が生み
出した擬人だから、その人がつけた名前とかあるかもしれないん
だよな。」

「えーと、その、君の名前は？」

「執事、です」

だが、今回もまた俺の想像を超えた答えが返ってきた。

「執事い？」

「はい。静香様には、いつも執事と呼ばれていました」

その答えを聞いて、俺は妙な脱力感を覚えてしまった。

「なあ、役職名じゃなくて、もうちょっとマシな名前はなかったの
か？」

「だって、必要だと思わなかったんだもん。誰も文句言わなかつた
し」

絵に文句を言うと、絵は拗ねたようにそう言い返してくる。そりゃ、
ロボットは文句言わんだろぅが、いくらなんでも命名・執事はあん
まりだろぅと思う。

「ねねね、じゃあさじゃあさ、この人の名前も、お兄ちゃんがつけ
ちゃったらどうかかな？」

そこに、ケイがナイスだが無責任なアイデアを出してきた。

「よし、せつかく新しい姿になったんだし、記念に新しい名前をつ
けてみるか」

「ええっ、そ、そんな私に名前なんて滅相も無い」

すると、現行名・執事さんは、態度ではものすごく恐縮しながらも、
ものすごく期待に満ちたまなざしを俺に向けた。

どうやら、期待されているらしい。そうなるとうざけた名前をつけるわけにはいかない。

「うーん……苗字は、さっきから屋敷さんと呼んでいるから、屋敷でいいか。実際にそういう苗字はあるし。で、下の名前は……うーん」

とはいえ、この建物のことは良くわからない。なるべく、この家に関わった名前がいいと思うのだが……と色々考えているとまだインシュタインだったこの人が、歩くのに伴って照明が点いていく光景がふつと頭に浮かんだ。

「そうだ、あかりにしよう。屋敷あかり、どうだ？」

その瞬間、現行名・執事さんはまた俺の手を取り、さっき以上にキラキラした目で俺を見つめた。

「ありがとうございます！最高の名前です！私、この屋敷あかりの名、一生大切に致します！」

うん、どうやらこの人は感激屋のようだ。後から、ちよつと演歌歌手っぽいなとも思ったが、本人がいいと言っているんだから、良いとしておこう。

「んじゃ、あかりさん。先代から仕えている擬人化さんがいる所、案内してくれないか？」

「はい、喜んで！それでは、どちらに参りましょう？」

「んー、じゃあ……」

と言っても、思いつくのは俺が乗ってきたあのリムジンか、あとは俺の目の前で消えた枝打ち鋏ぐらいしかない。

「そうだな、俺が乗ってきた車の所に行こうか」

「承知しました、どうぞ！」

そして、あかりが部屋のドアを開ける。

すると、なぜかドアのむこうは外になっており、玄関前に横付けされているはずのあのリムジンが、目の前に横付けされていた

はて、この部屋、玄関から、長い廊下を通って、もうひとつドアを開けたところに、あったはずだよな？

「……………あれ？ここ、玄関に面してたっけ？」

「先ほど、いくつか出来ることがあると、言ったじゃないですか」

「……………まさか、知らないうちに、部屋が移動した？」

「いえ、ただ単にこの扉と玄関を直接繋いだだけです」

聞き返すと、あかりが、妙に楽しそうにわけのわからない答えを返してくれる。

どうやらあかりの奴は、扉のある部屋同士を、間をすっ飛ばして繋ぐことができるらしい。便利といえば便利だが、なんか、異次元に迷い込んだ気分だ。

うちの擬人化もかなり非常識な存在だけど、あかりの力は年季が入っているせいかさらにその上をぶっ飛んでいるらしい。

他の擬人化たちもこんななんだろうか。ちょっとだけ怖くなってしまった。

15・とうとう来ました西園寺本家 その10（後書き）

どうも、作者です。

またも新キャラ、「家の気持ち」屋敷あかり登場。なんと今度は家の擬人化です。

擬人化というよりは、分身、あるいはブラウニー的な奴だとも思ってください。

それにしても、ただでさえ登場人物多いのにこれ以上増やして、話が崩壊しないだろうな、と、今更ながら心配しています。

玄関を出ると、リムジンのドアが何もしなないのに開く。

だが、俺はそこには入らず、前のほうに移動すると、助手席の窓をノックした。

「ここを開けてくれないか」

そう言うと、後ろのドアが自動的に閉まり、そして目の前にある助手席のドアが開く。

「邪魔するよ」

中に入ると、初老のハイヤーの運転手が、ハンドルを握ったままでじっと前を見ていた。

「何の御用でしょうか」

運転手が、首だけ動かしてそう聞いてくる。

近くでその様子を確認して、やっぱりこの人は擬人化だと確信した。女体化前のかかり同様、生きているのか死んでいるのか判らないような、ガラス細工のような目をしていただけからだ。

「話するのは、これが2回目だな。俺は、真田将仁改め、西園寺将仁。西園寺家の新しい当主だ」

「はい」

「それにあたって、俺はこの屋敷にあるものを全部引き継いだ。この車もな」

「はい」

こっちが話しかけても、むこうは「はい」としか言わない。反応がここまで薄いと、本格的に面白くない。

「ってわけだから、よろしくな」

説明するのも面倒になったので、俺はさっそく右手を差し出して握手を求めることにした。だが、運転手はその手を見ただけで手を出してこない。

「ほら、握手。右手をだして」

そう促して、やっと運転手はハンドルから右手を離し、左手の上から手を差し出して来る。

なんかもどかしかったので、こっちから手を伸ばしてぎゅっと握り締める。

「これから、よろしくなっ！」

その瞬間。耳鳴りのような音と爆発的な光があたりを包む。

そして気がつくと、運転席にはさつきと似ても似つかない、なんか派手な雰囲気の女の姿があった。

やや色の薄い金髪をショートカットにし、肉感的なその体を長袖の黒いジャケットにタイトな感じの銀色のスカートで包んだその姿は、運転手と言うより、テレビで見たことがあるモーターショーのイベントコンパニオンのようなのだ。しかもジャケットの下はエンブレムがでっかく印刷された真っ赤なチューブトップで、いい感じに引き締まった腹回りをむき出しにしている。

なんとというか、リムジンとはかーなりイメージが違う。

「わお」

目を開いたその人は、新しい姿がよっぽど意外だったのか、ミラーに映る自分の姿を見て歓声をあげた。

「んー、いい感じじゃない」

彼女は、自分の体を確かめるように手で撫で回している。

「後継者が男の子だって聞いた時点でこうなるとは判ったけど、予想より断然いいわ」

すると、突然なれなれしく話しかけてきた。さっきまでのほとんど喋らない姿から思いつきりかけ離れたその様は、そう仕向けた俺でも驚いてしまう。

「え、えーと、念のため確認するけど」

「ん？なに？なんでも聞いていいわよ？」

うーん、ギャップが大きすぎて、対処に困るな。

「擬人化、だよな？」

「そうよ、キミが乗ってるこの車の擬人化。よろしくねっ！」

そして、今度はそのコンパニオン、車の人が俺の手を握ってぶんぶんと振ってくる。

「あ、ああ、よろしく、えーと……名前は何？」

「あたしの名前？んー、そーねえ。さっきまでは運転手って呼ばれてたけど」

運転手かい。全く、あの二次元は擬人化をみんな役職で呼んでいたんだろうか。

「でも、こう言ったら怒られるかもしれないけど、ちょっとダサいと思ってたところだし。記念に、ばばーんとかっこいい名前つけてくれない？」

すると、俺が言う前にあつちから名前の話が切り出されてしまった。

「う、か、かっこいい名前ね……」

なんか、トークで圧倒されてしまう。

「そーいや、お前、日本人って風体じゃないよなあ」

「そりゃあMade in Germanyだもん」

「っーことはドイツ風か……って、俺ドイツ語なんか全然わかんねえぞ？」

「別にドイツ生まれだからってドイツ語にしなくってもいいけどね」

「……こいつ……」

なんか調子が狂う。ドイツ人っていうと真面目でお堅いイメージがあっただが。

しかし、ドイツ、ドイツねえ。ドイツってえと、ビールにソーセージにジャガイモ、って、食ってどうするんだ。

うーん、ドイツ、ドイツ、ドイツの科学力は世界ーイイイイ！
っていいかげんにしろ俺。

ふと顔を上げると、ボンネットの先にあるエンブレムが目についた。丸を3つに分けたような、メーカーのシンボルマークだ。

そーいや、このメーカーのフルネームはメルセデス・ベ……んっ！？

「メルセデス！」

思わず口にしてしまった。確か、メルセデスってのは女性の名前だ。昔は男の名前がついていたが、柔らかいイメージを持たせるために改名したと、誰かから聞いたことがある。

「メルセデス？ふうん、単純だけど、悪くないわね」
「だろ？」

彼女も気に入ったらしい。

「で、苗字は？」
「へ？」

「ほら、ファミリーネームよ。今時の人はみんなファミリーネームぐらい持つてるじゃない」

「……こいつは。苗字まで要求してくる奴なんて初めてだ。」

さっきのあかりの場合はなんとなく屋敷さんと呼んでしまったからあつさり苗字も決まったけど、でもドイツ人の苗字なんか判らんぞ。うちの連中みたく、自分で考えてつけてくれれば楽なのに。

「あー、じゃ、車、じゃなくて、字違いの久留間！さっきドイツ語にしなくてもいいって言ったよな。お前はもともと車なんだし。どうだ？」

「久留間メルセデス……ね。なんかハーフっぽくて面白いじゃん。いいんじゃない？」

「そ、そうか。んじゃ、決まりつてことで」

とりあえず、どのぐらい満足しているかは別として、納得はしてもええたらしい。

「呼ぶときはメルって呼んで。じゃ、よろしくねっ」
「うわ!？」

次の瞬間。俺はそいつに横から抱きつかれていた。

腕に柔らかい感触が。サイズはレイカと同じぐらいかな、なんて余計なことを考えてしまう。

「ああーっ、マサっち、鼻の下伸びてるぞっ」
すると、ぱっと離れたメルセデスがそんなことを言ってくる。もし

かして、俺って、遊ばれているんだろうか。

「ほ、ほっといてくれ」

図星を指されて、俺はぶっくらぼうにそう言うしかできなかった。

「………そうだ」

ふと、思い出したことがあった俺は、ドアに手をかけた。

「どつたの？トイレ？」

「違うわっ！こんな所で立ちションなんかするか！」

「あら。どっか行きたいんだったら、運んであげてもいいけど」

そんなのいいよ、と言おうと思って、思い返した。

用があるのは庭のほうなんだが、ここの庭は、かなり広いのだ。足で歩いても行かれないことはないと思うが、確かに車に乗っている以上、近くに運んでもらっても誰も文句言わないだろ。

「んじゃ頼むわ。さっき一時停止したあたりまで」

「オーケイ。じゃあシートベルト締めて。面白いものを見せてあげるから」

そしてメルセデスはキーを回してエンジンを起動させる。

「レディ、ゴー！」

そして、楽しそうに声を上げたときだ。

「どわあああっ!？」

いきなり、車がすさまじい勢いで揺れ始めた。と同時に、いきなりプレス工場の中突っ込んだような騒音が四方八方から響き、そして目の前の光景がすごい勢いで変わっていく。

「な、なんだなんだなんだっ!？」

一体なんだ、敵襲か!?なんてワケのわからないことを考えているうちに、その騒音と振動は静まった。

まわりを見ると、自分の座っているところがずいぶんと狭苦しく、またかなり前に傾いた形に変形している。後ろを振り向くと、シートのもころはなぜか壁になっている。

そして、なぜか窓の外の風景がさっきよりずいぶんと高い。

一方のメルセデスは、狭くなった運転席も全く気にすることなくハ

ンドルを握っている。

「何なんだ今の、うわ!？」

いきなり、また車内が揺れた。

そして、ずんつ、という感じの衝撃が車内をゆるがす。

「おいこら！一体何やった!？」

「外見ればわかるからさ、窓の外見てごらん？」

その声と同時に、窓の向こうを、柱のようなものが通り過ぎた。

同時に、また、ずしんという音と衝撃が襲ってくる。

窓もドアも開かないので、窓にはりついて下を見る。地面までの高さは3メートルぐらいだろうか。変な落ち方をしなければ怪我はしないと思う。

だが、そこに、機械を寄せ集めた柱みたいなのが立っているのだ。

「わ!？」

そして、下を見ていると、また椅子が揺れ出し、柱が動いた。その様は、何かが歩いているようだ。

「………歩く?ってことはこれは足か？」

「ピンポン。ロボに変形してみましたー」

どうやら、俺たちの乗っていたリムジンが、どういうわけか人間型ロボットに変形したようだ。俺たちが今いるのは、その胴体にあたる場所らしい。

「お前はトンス オーマーかっ!」

「またまたあ。マサっちは男の子だから、こういうのは嫌いじゃないでしょ?」

「まあ確かに変形ロボットは好物だけどっ!」

「だったら楽しまないと損じゃん。ほら、進むからスマイルスマイル!」

そう言うと同時に、また座席が揺れてずしんという振動がおそいかり、舌を嚙まない為にも黙らざるを得なくなる。

人型ロボットに乗って運ばれるという、ロボアニメ大好きな連中とかロボット工学博士とかが泡吹いてのた打ち回りながら喜びそうな

体験の後、俺はそのロボットの手にぶら下がって庭の一角に降ろされた。

外に出て改めてリムジンから変形したロボットの全体像を見たが、全長が5メートルぐらいありそうなそのフォームがかなりロボアニメのそれっぽかったのは、驚きを通り越してちよつと笑ってしまった。ちよつど胸の辺りに運転席のフロントガラスがあり、そのむこうでメルが手を振っている。そしてその下あたりに自動車のヘッドライトやフロントグリルやバンパーが見えて、もとは車だな、というのが伺える。

なんというか、二代に仕えることになった擬人って、（まだ2人目だが）想像以上にぶっ飛んだ能力の持ち主が揃っているような気がする。

こんな連中、本当にコントロールできるんだろうか。

俺は、今後のことがすごく不安になってしまった。

15・とうとう来ました西園寺本家 その11（後書き）

どうも、作者です。

またも新キャラ、「ひとりモーターショー」メルセデスの登場です。トランスフォーマーネタなのは、DVDで見た時に思いついたからです。

もう少し新しいのが出てきますので、全員揃うまで待ってください。

とりあえず、道路に出て轟音と共にリムジンへと戻っていくロボットを尻目に、俺は下ろされた所にある物へと近づいた。

庭木の前は、倒れたままの脚立と、年季の入った枝打ち鋏が、さっきのまままで放置されていた。

「さっきは、ごめんな」

俺は、その枝打ち鋏を拾うと、そう声をかけた。

その鋏こそ、俺がここに来た理由、さっきまで人の姿でいて、俺の腕の中でその姿を失った、あの枝打ち鋏だった。

目の前で擬人としての寿命を見届けてしまったためか、どうしても放って置けなかったのだ。

「やっと休めた、と思っっているかもしれないけど、もう一度、がんばってくれ」

その瞬間。耳鳴りのような音とともに目の前が真っ白になる。

目を閉じると同時に、腕の中にずっしりと重量がかかってくる。

目を開けると、俺の腕の中にそいつが横たわっていた。

年のころは20代前半ぐらいだろうか。紺色のツナギの上から体の前面を覆うような草色のエプロンをしている。エプロンと言ってもガーデニング用の丈夫そうな生地で出来たもので、ポケットがいくつもある。また、なぜか迷彩柄のバンダナで頭を覆っているが、その端から茶色い髪の毛がはみ出している。そして、腰には座布団がクッションになりそうなほど大きく、年季の入った革製のウエストバッグがくくりつけられている。

なんというか、この前のはまだ庭師な感じだったが、今は花屋かガーデニングショップの店員にしか見えない。

それに、こう言うては失礼だが、かなり野暮ったい格好に起伏の乏しい体つきをしているので、もしかしたら鏡介に続く2人目の男かもしれないと思ってしまう。

「・・・・・・・・ん、ん？」

その子が、気がついたらしく小さなうめき声を上げる。そしてすぐ目をかっと思開くと、勢いよく跳ね起きた。

「・・・・・・・・あ、あれ？」

そして、きよるきよるとまわりを見回すと、今度は自分の手や体をぺたぺたと触りまくる。自分に何があったのか、把握できていない感じた。

「気がついたか？」

声をかけると、その子は素早く体を返して俺のほうを向いた。俺を見るその目は、誰が見ても明らかに驚いている。

「な、なんで若がそこにいるんで!？」

「ああ、悪い。蘇らせちゃった」

「よみ・・・・・・・・って、うわっ、女になってるう!？」

うん、色気は全く無いが、やっぱり女なんだ。

それはそうと、彼女は自分が置かれている状況が判らないらしく、傍から見ても明らかに慌てふためいている。あかりとメルはずいぶんとあっさりとな体化を受け入れていたが、みんなそういうわけじゃないってことか。

とりあえずでも落ち着かせるため、俺は正面から彼女の両肩を押さえ、目を睨みつけた。

「と、とりあえず、今から説明するから、ちよっと落ち着け。ほれ深呼吸深呼吸」

俺の言葉に従って何度か深呼吸すると、徐々に枝打ち鋏女が落ち着いてきた。

「落ち着いたか？」

「・・・・・・・・へい」

多少なりは落ち着いたらしいので、女になったそいつに向かって色々説明をする。まあ、説明と言っても、俺が西園寺の家に来たことと、静香の許可を得たこと、そして俺が擬人にした、ということぐらいだが。

「んじゃ、こうなったのは、ゼーんぶ若のせいと」

「やっとな得した、という感じで、枝打ち鋏女がうなずく。」

「まあ、そういうことになるな……もしかして、迷惑だったか？」

「へっ？」

「いや、もしかしたら擬人になるのはもういやだったとか、男のほうがよくったとか」

「そうっすねえ……」

すると、枝打ち鋏女は、何やら考え込むような素振りを見せた。

「まあ、あつしは枝打ち鋏ですから、働くチャンスが貰えるのはありがたいこつてすよ」

そして、こつちに目を向ける。

「でも、いっぺん消えたはずのあつしを、なんでまた呼んだんです？」

「ああ、それは……」
と答えようとして、ふと思った。

素直に、本当の理由を言ってしまったてよいのだろうか。考え方によつちや俺の自己満足だから、怒らせてしまつかもしれない。

ちよつと困つて視線を泳がせたところ、中途半端に剪定された庭木が目に入った。

「ああ、この木、剪定の途中だったろ。えーとまあ庭師やってたわけだし、心残りだったんじゃないかと」

「はははははっ」

すると、突然はさみ女が笑い出した。

「全く、若つて嘘が下手っすね。その話、今思いついたんでしょ」
「そ、そんなことはないぞ」

と言いながら、声がひっくり返ってしまう。バレバレじゃん、俺。

「気にすることありません。50年も鋏やつてりゃ、人を見る目もつきまさあね。ま、そういう時に気い使ってくれる若が、いいお人だつてえのは判りました」

そして、はさみ女は軍手をしたままの手を差し出してきた。

「若、今後ともよろしくお願いします」

「こちらこそ。えーと……」

そういえば、名前をつけなきゃいけないんだった。あの二次元のこ
とだから、“庭師”なんてふうに呼んでいたんだろうし。

「確認するけど、お前、名前、あるか？」

「え？あ、そういや、ないっすね」

すると、彼女はちよつとめんどくさそうな顔をして、こう言った。

「でも、若も考えるのが面倒でしょ。はさみでいいっす」

「え？」

向こうから名前のリクエストが出たのは初めてだが、でも、「鋏」
じゃ、いくらなんでもそのまんますぎないだろうか。

「いや、“江田内はさみ”、ってすりゃ、それらしくなるっしょ」

うーむ、いいんだろうか。世話がかからないのはありがたいが、子
供につけたら間違いなく苛められそうな名前なんだが。

でも、他の名前と言われても、江田内はさみでいいって言われちゃ
ったせいか他に良い名前も全然思いつかない。

「ん、ま、まあ、いいか。よろしく頼むわ」

なんかいまいち納得できないが、本人がいろいろ言ってるんだから、
いいとしようか。

「あっしのほうこそ、よろしく頼みます」

そして、改めて握手をする。

「そんじゃ若、ちよつとどいてください」

手を離れたはさみは、そんなことを言っただけで俺を押しつけ、さっきま
で切っていた庭木の前に立つ。

「庭木の手入れの続きをするためにあっしを呼んだんでしょ？だっ
たらやんなきゃっすね」

そして、自分よりはるかに背の高いその庭木を見上げる。そういえ
ばさっきは、脚立の上に腰かけて作業してたっけな。

「ああ、ちよつと待ってな、脚立起こすから」

「いんや、そんなのいらないつすよ」

「へ？いや、いらないつて、手がとどかねえだろ」

「まあ見ててくださいや」

見ててつて、こいつ、何をするつもりなんだろう。テレビでやっている林業のおっさんみたく木登りでもするんだらうか。

と思ったが、結果は俺の想像の斜め上を行っていた。

どいう仕組みなのか、はさみの奴の脚が、突然伸び始めたのだ。

「はぁー！ー？」

おかしなスピードで、はさみの体が上へと上がっていく。ツナギは伸びないらしく、生足がむき出しになっているが、その膝下だけでもすでに俺の身長を超えている。

見上げると、地上から5mぐらいのところには体があつて、草色のエプロンがひらひらと靡いているのが見える。なんか、どっかの大道芸を見ている気分だ。

と、シャキシヤキという音がして、何かがパラパラと落ちてきた。剪定した庭木の切れ端だ。

「ぶわっ！？」

顔に落ちてきたそれをあわてて払いのけると、上から声がした。

「若あゝ、下にいると、カスが落ちてきますよあー」

「そついうのは先に言えーっ！」

答えながら、また顔に落ちてきてはたまらないので少し離れる。そうすると全身が見えるんだが、その姿は今まで見た擬人たちの中でも最も異様だった。なにしろ、脚が異常に長い。それに加えて、両腕も同じように伸ばして、さらに高いところとか横のほうとかを剪定している。さらに言つと、手に何も持っていないように見える。なんとというか、エイリアンの庭木職人を見ているような気分だ。

「えーとこつちは」

なんてことを言いながら、はさみの奴は脚を伸ばしたままで庭木の周りを回る。あんな脚でもちゃんと膝があるんだな、というか足の大きさがそのままなのに転ばずに歩けるのは感心したほづがいいん

だろうか。

「よし、出来た」

最後にその手足のまま1歩（と言ってもその1歩が数mあるんだが）離れ、その木の全体を見てから満足そうに頷いた。

と同時に、しゅるしゅるしゅるといった感じで腕と脚が縮んで、元の姿に戻る。

「若、終わりやした」

そして、ニカツって感じの擬音が似合う笑顔を向けてくる。

「そんなフツツーな言いかたをすんな！一体なんなんだ今の、脚が伸びるのは！あんな芸当が出来るんだったら脚立なんか要らないだろ！」

「あん時や、初対面だから脅かしちゃいけねえと思ってああしてたんでさ」

そう悪びれずに言われてしまうと。こちらとしても文句が言えなくなってしまう。

あの二次元は、生前は擬人たちにどんなことをやらそうとしていたのかと、ちよっとだけ不安になってしまった。

15・とうとう来ました西園寺本家 その12（後書き）

どうも、作者です。

3人目新キャラ、「万能のびのび庭師」江田内はさみの登場です。
女らしくない、というかおっさんじみたキャラですが、かわいがっ
てやってください。

15・とうとう来ました西園寺本家 その13

俺の目の前には、木製の大きな扉が立ちふさがっている。

この家にある、地下室の入り口だ。

なんでも、この扉のむこうに、先代が残した擬人の1人がいるらしい。

地下室というと、なんとなく怪しげなイメージがあるが、ここもそのイメージを裏切らないような、ダークな雰囲気を持っているような感じを受ける。

「本当に倉庫なのか、ここ？」

その妙な雰囲気から、そんな言葉が出てしまう。

絵の人や常盤さん、そしてこの家の擬人のあかりが言うには、この地下室は倉庫として使われているらしい。ちなみに、地下室に向かう階段まではあかりが案内してくれたんだが、「ここから先は私の領域ではないので」と言っただけで案内してくれなかった。

「まさか隔離されているんじゃないだろうか」

そんなしょうもないことも考えてしまう。あの二次元は、こんなところで何をやらせようとしていたんだろうか。

だが、待っていてもしようがないので、腹を括ると、俺はそのドアをノックした。

返事は無い。だが、俺は、取っ手に手をかけると、そのドアを開いた。今までの例を考えると先代の擬人たちは感情が無いような連中ばかりだったので、今回もそんなだろうと思っただけからだ。

扉のむこうは、上のほうの本はどうやって取るのかと思わせる巨大な本棚が並んだ部屋だった。蔵書倉なんだろうか。天井には蛍光灯が灯っているのだが、それがかなり高いところにあるため、本棚の下のほうになるとかなり暗い。

そして、その本棚と本棚の間、部屋の奥のほうに、オレンジがかつた明るい光があるのが見えた。

その光に引き寄せられるように、本棚で区切られた通路を進むと、だんだんと光が近づいてくる。

やがて、光の正体は、燭台の炎だとわかった。きらびやかだがアンティークっぽいその燭台は、図書館で司書の人が受付とかをやりそうなカウンターの端のほうに立てられている。

そして、そのカウンターのむこうでは、白くて長い髭を生やし、同じく真っ白な髪を伸び放題にした1人の爺さんが、百科事典のようなどでかくて分厚い本を読んでいた。

だが、よく見ると、衣装がやたらと派手だった。服の形は、古代ギリシャや古代ローマの哲学者が着ているトーガとかいうやつに似てるんだが、そこに使われている生地の色が、なんとというか、七夕とかに使う色紙の短冊を布で作ってたくさん繋ぎ合わせたような感じで、やたらカラフルなのだ。

「どちらさまかの？」

そして意外なことに、その老人は俺達が近づいたのに気がつくこと、顔を上げた。顔を前から見ると、髭だけでなく眉毛もものすごいことになっている。どうやら目があるらしいあたりに丸い鼻眼鏡（鼻と口ひげがついたパーティーグッズのアレではなく、鼻柱に挟んで止める、つるの無いやつだ）がついているが、あれじゃ前が見えないだろうと思うほどだ。

「あ、お、俺は、西園寺、将仁。西園寺家の、新しい当主だ」

「ほう、お前さんが」

そう言っただけで老人は鼻眼鏡をちょっと下げてこっちをみるが、俺からだ目が見えない。

「そういうあんたは、誰です？」

改めて、その爺さんに聞いてみる。

「わしか、わしはこの書庫の管理をしておるモノじゃ。本の王とも呼ばれておる」

その爺さんは、そう答えた。

「本の、王？」

「うむ。だから、ここではわしが一番偉いのじゃぞ」

髭と眉毛のせいで表情は良く判らないが、口ぶりから得意げになっているのが判る。

なんか、この爺さんは、ちゃんと自分の意思を持っているっぽい。ということは、この爺さんは擬人ではなく、人間なんだろうか。

でも、絵の人も常盤さんも、家の擬人のあかりも、ここにいるのは「擬人」だと言っていたよな？

「なあ、爺さん、あんた、人間か？それとも、擬人なのか？」

「どちらか、と問うなら、わしは、西園寺静香様の手によって姿を得た擬人だ、と答えよう」

「えっ、でも、この家のほかの擬人たちは、そんな人間らしい反応はしなかったぞ！？」

思わず口走ってしまった言葉に対し、その爺さんは妙なことを口にした。

「わしも、初めからこうだったわけではない」

「どういうことだ？」

「わしが静香様の手で人の姿になったばかりの時は、お前さんが知っておる他の擬人たちと同じだった。しかし、管理だけというのはいかんせん暇なものでな。いつからか、ここの蔵書を読むようになり、やがて知識を得ていくうちに、考えるということをするに至ったのじゃ」

ということとは、他の擬人たちも、同じようなことをしたら、同じように自我を持つようになるんだろうか。なんか、SFなんかにある「コンピューターが自我に目覚める」というのを連想してしまう。

「一体どのくらい本を読んだんだ、あんたは」

「そうじゃな、20000冊までは数えたが、それ以上は覚えておらんの」

「20万冊う！？」

想像したくない数だ。1日1冊で何年掛かるか、とか考えてしまったが、とんでもないことになりそうなので考えるのを止めてしまっ

た。となると、ここにはそれだけの本があるってことか。

だがそこで、俺は、この爺さんが何の擬人化なのか、まだ聞いていないことを思い出した。

「ええと、そういえば、爺さんは何の擬人化なんだ？本の王って言うくらいだから、百貨辞典か、哲学書か？」

改めて聞いてみることにした。すると爺さんは首を横に振った。

「わしは、こここの出納台帳じゃよ」

「へ？だ、台帳お！？」

「ふむ、意外、という表情じゃな。先ほど、この蔵の管理をしておると言っただはずじゃが」

「だ、だって、その格好、むかーしの学者みたいだし」

「あいにくじゃが、昔はジジイではなかったのな。先代・西園寺静香殿が亡くなられてから、急激に老化が始まって、今ではごらんの通りじゃ」

そう言われて思い返すと、ここで出会った、先代が残した擬人たちはみんな老人だった。ということは、俺が死んだら、うちの擬人たちも一斉にじじばばと化するのだろうか。

「そして、いずれわしも消える。これも、擬人の運命というものじやろうな」

そう言う本の王は、なんとというか、もうすぐ自分が存在しなくなることを受け入れているように思えた。

「なあ、本の王。あんた、生き延びたいとは思わないか？」

余計なお世話のようで聞きづらかったが、思い切って聞いてみる

「俺は、物部神道の擬人化の力を受け継いでいる。モノを擬人にする力だ。だから、それをあんたに使えば、あんたは俺の力で生まれた擬人として生まれ変わって、同時に命を繋ぐことができる。ただし、俺が男だから、あんたはその対、つまり女になる」

最後に、どうする、と聞いてみる。俺としてはいなくなっただけじゃないが、今までと違って相手に意思がある以上、それを尊重しなければなるまい。

すると、本の王、この爺さんは、こう言い返してきた。

「わしはここを管理する出納台帳、こここの持ち主に仕えるのは当然のことじゃろう」

そして、爺さんは節くれ立った手を差し出してくる。

「わしの存在が必要かどうか、決めるのは、おまえさんじゃ。当主殿」

それは願ってもない返事だった。

「じゃあ、これからの仕事、よろしく頼みます、本の王!」

俺は、叩きつけるような勢いで、その爺さんの手を掴み、ぐっと握り締めた。

その瞬間、目の前が真っ白になり、何も見えなくなった。

毎回毎回こんな大げさな光を発さなくても良さそうなもんなんだがな、なんて思いながら、頃合を見計らって目を開ける。

正直、あの古代ギリシャの哲学者がどんなふうになったのか、ちょっと期待していた。ギリシャ神話に出てきそうな人が出るかと思っただけだ。

だから、その現実を目にしたとき、ちょっとだけ拍子抜けしてしまった。

なぜなら、そこにいたのは、少し茶髪ではあるもののどこから見ても日本人な風体の、穏やかそうな目の細い女の人だったからだ。

元があの本の王だという証拠のように、鼻のところに鼻眼鏡をつけていて、着ている服も、形こそ変わっているが七夕の短冊を無数繋ぎ合わせたようなカラフルな色合いのものだ。ちなみに、その服がかなりがさばるデザインなため、ボディラインはほとんど判らない。「あらあら、こんな姿になってしまったんですね」

その人は、自分の姿を見て、そんなのんびりした感想を述べた。しかし、なってしまった、か。何か、不満があるのだろうか。

「あー、えーと、ごめん」

とりあえず、謝っておく。とはいえ、どんな姿になるのかは、俺でも判らないからどうしようもないのだが。

すると、その元・本の王は、きょんとした感じで俺に聞き返してきた。

「どうして、あなたが謝るんです？」

「え、あ、いや、なってしまったって言うから、不満なのかなーと」

「あら、不満なんか無いですよ、女性の体も、体験してみたかったですから」

そして、元・本の王は、にっこりと笑う。なんとというか、この人のまわりだけ、時間がのんびり流れているような気がする。本の王の

女体化だから本の女王かな、と思ったが、女王というイメージからは程遠い。

「そういえば、将仁さん〜」

不意に、本の女王（仮）が話しかけてきた。

「へっ、あ、はい」

「将仁さんは、擬人化に、名前をつけているそうですね〜」

「・・・へっ!？」

いきなりそう言われて、俺は面食らった。

なぜって、俺はまだそのことをこの人には話していない。それに、

この人は多分この部屋から出ていない。なのにどうしてそのことを知っているだろう。

「だって、ほら〜。ここに、書いてありますよ〜」

面食らっていると、その本の女王（仮）は、さっきまで自分が読んでいた事典のような本のページを指差した。

見ると、そこには、読んで目を疑うような事が書いてあった。

『西園寺家第40代当主、西園寺将仁は、歴代でも数少ない、意思を持った擬人を生み出す力を有している。そして、彼は同時に、擬人に名をつけ、彼らを自分と対等に扱うことでも知られている。西園寺本家に住まいを移したときに、先代の西園寺静香によって生み出された擬人を自分のものにした際、今までは名前が無かった彼らに名前を与えている』

「な、なんだこれ!？」

なんと、俺のことが書いてある。しかも、どう見ても手書きではない。一体、何なんだろうかこの本は。まさかアカシックレコードとかいうもんじゃあるまいな。

と思って表紙を見せてもらうと、こげ茶色の革張りの表紙に、金色の文字で「DAIRY RECORD」というタイトルが書いてあった。

「というわけなので、私にも名前をつけていただけませんか?」
本の女王（仮）は、穏やかな笑顔を浮かべながらそんなことを口に

する。

「その本には、どんな名前がつくとか、書かれてないのか？」

「あゝ、この本には、すでに起きたことしか書かれていないんですよ。」

そして、本の女王（仮）は朗らかに笑う。

「ですから、ほら。ここに今の私のことが書いてありますが、名前は書いてないでしょう？」

見ると、確かに、出納台帳の擬人化が若い女の姿になった、とは書かれているが、名前については書かれていない。

「というわけなので、期待していただけますよ？」

そして、本の女王（仮）はにっこり笑った。

そこまで言われてしまったら、考えざるを得まい。

なんとなくあたりを見回す。あたりには本棚しか見当たらない。なんか図書館にでも入り込んだような気分だ。

この人は、この本を管理していたんだよな。まあ、管理というか、誰も来ないから見守っているだけかもしれないが。

図書室を見守る。本の間を見守る、本見守る……ふむ。

「本間、みもり、なんかどうだ？」

そう言いながら顔を上げると、その本の女王（仮）は、手持ち無沙汰だったのか、また読書を再開していた。

なんか、真剣に読んでいるっぽいので、声をかけるのが躊躇われる。「あら？」

その中で、ふたたびあのアカシックレコードもどきに目を落とした本の女王（仮）は、緊張感のない声をあげた。

「私の名前、本間 御守ですって。」

「えっ!？」

思わず、俺も覗き込んでさっきの所を見た。すると、さっきまでは記載の欠片もなかった「本間 御守」についての記述が、しっかりと書かれていた。

「嘘だろ、こんなびっしり書かれた本の中身が変わっただお!？」

「だから、日々の記録、デイリーレコードなんですよ〜」
そして、その本の女王（仮）は笑って見せる。

「素敵な名前ですね〜。それでは私は、今から本間 御守と名乗ります〜」

笑顔でそういわれると、やっぱり嬉しい。本当は音しか考えていなかったんだが、字として目にする、それしかないように思えてしまう。

「それではお礼に、面白いものをごらんにいれますね〜」

そう言っ、命名・本間御守は、その両手をすつと掲げた。
すると、信じられない光景が目の前に展開された。

たくさんの本が本棚から抜け出して、音も無く空中をすべり、俺たちのまわりに集まってきたのだ。

そして、俺たちのまわりに集まった本は、俺たちを取り囲むように空中に並ぶと、触れてもいないのに一斉に開き始めた。

そして、それからがすごかった。
開いた本、一冊一冊の上に、まるで立体映像のように、様々なものが映し出されたのだ。

ある本の上には元気に跳ね回る鹿の姿が映し出され、またある本では高速で失踪するレーシングカーの映像が、またある本の上では甲冑を着た中世の騎士同士が馬上試合を繰り広げ、それと別の本には幻想的な巨樹がそそり立つ姿が浮かび上がっている。

中でも圧巻だったのは、大きな写真集の上で、大海原の中で潮を吹いたクジラが、大きな尾ひれを見せて波間に消えていく光景だった。あまりに幻想的なその光景に、俺は声を出すのも忘れていた。

「これはですね〜、それぞれの本の内容なんですよ〜」
声が出ない俺たちに、御守が説明をしてくれる。

彼女は、はじめに本の王と名乗ったとおり、本を自在に動かすことができるのだそうだ。

そして同時に、本の内容を、映像として浮かび上がらせることもできるらしい。

ここまで来ると、本当に魔法使いの領域だ。

「でも、これが出るのは、この地下室でだけ、なんですけどね」

そう言っただけで、舌をぺろっと出したが、俺はそんなことも聞き流してしまっただけ、その光景に見とれてしまっていた。

15・とうとう来ました西園寺本家 その14（後書き）

どうも、作者です。

新しい擬人化4人目、「書庫の天然女神」本間御守の登場です。

はじめは司書みたいなイメージで考えていたんですが、話を作っていくうちになぜか今のようになった。

ちなみに、こいつの服の「七夕の短冊を無数繋ぎ合わせたよう」なデザインというのは、実は本の背表紙をイメージしてます。

次が、先代から仕える擬人化としてはラストの1人が登場します。

何がどんなふうになるのか。

ちよっとだけ期待してください。

今、俺の横にはさつき女体化したこの建物の擬人、屋敷あかりがいる。彼女に案内されて、俺は建物1階の真ん中にある部屋に來ていた。

どうやら、先代の擬人化で、俺が敷地内に入るまで生き残っていたのは5人らしい。そして、一度は消えたはさみを含めると、そのうち4人が、俺の手によって新しい姿を得ている。

ここまで来たら、最後の1人も今日のうちに会っておこうと思ったのが、俺がこの部屋まで来るそもその原因だった。

そこは、あまり装飾の無い、地味な部屋だった。もともとこの屋敷はそんなに派手な装飾は無いのだが、この部屋は作った人が「目立つちゃいけない」と思っていたかのように余計に地味だ。

「おい。そいつってどこにいるんだ？」

だが、俺たち2人以外に、人の姿が見当たらない。今までのケースだと、先代による擬人化の成れの果てな爺さんがいるはずなんだが、そこには俺たち以外誰もいないのだ。

「彼は、特別なのです」

そう言つて、あかりが指差したのは、部屋の奥にでーんと置いてある、古びた黒い金庫だった。

横幅は俺が手を広げたより少し小さく、高さは床に直置きされながらも俺の胸元に届くぐらい。扉は珍しい両開きで、レバー状の大きな取っ手と、普通はひとつだけのはずのダイヤルが左右の扉についている。だが、古いデザインと、人が入りそうなほどでかいことを除けば、どう見てもただの金庫だ。

「こいつが？どう見ても普通の金庫なんだがな」

つい、俺も指差してしまう。その金庫には、どこをどう見ても爺さんの姿は無かったからだ。

まさか、この金庫を開けると、中から爺さんが出てくるとかいうオ

チじゃあるまいな。

なんとなく、その金庫の上に手を置いた、その時だ。

その金庫が、突然がたがたつと震え始めた。

「な、な、なんだなんだなんだ!？」

もしかして、本当に中に誰かが入っているのか?と思っていたら、事態は俺の想像の斜め上を行っていた。

いきなり、その金庫が、ガギガゴリゴリグオングオンというものすごい音とともに変形を始めたのだ。その様子は、さっき外で見たメルセデスのリムジン変形を外から見たらこんな感じなんじゃないだろうかと思うような感じだ。

やがて現れたソレは、ゴー ドライ ンを思わせる変形ロボットみたいな奴だった。金庫を胴体として、上に頭、左右に腕、下に脚が生えた感じだ。ちなみに、片膝について若干前かがみになっているが、それでも部屋の天井に頭が触れているので、身長は3mを軽々と超えているだろう。

うーん、これは、擬人化と言っていいんだろうか。一応手足と頭があるから人の形に見えなくはないが、あの二次元はああ見えてロボットアニメ好きなんだろうか。

と思っていたら。

「うわ!？」

その金庫から変身したロボット?にいきなり胸倉をつかまれ、俺は宙吊りにされてしまった。

金庫の上に乗った、西洋の兜をかぶった大魔神みたいな、金属製の仮面の目が俺を睨む。

「な、何すんだっ!」

そいつにむかって、声を張り上げる。

「こらっ!下ろしなさいっ!その方は、西園寺家の新当主、将仁様ですよ!」

そして、俺を下ろそうとしてか、あかりが俺を下に引っ張る。

だがロボの手はびくともしない。

「こ、こんのやるおおお！離さないなら離させてやるあ！」

俺はとつさに、その金庫ロボの腕に組み付いた。腕ひしぎの要領で肘関節に負荷がかかるように力をかける。真田流兵法術にシデンの零式柔術（時々、シデンにも教わっているのだ）をミックスした、オリジナル技だ。

だが、金庫ロボの腕は予想以上の力があり、全身の力を込めても、びくともしない。

「どわっ!？」

それどころか、逆にそのパワーで振りほどかれてしまった。

同時に金庫ロボが俺の胸倉から手を離しやがったため、俺の体はつるつと腕からすっぱ抜けてしまった。

宙を飛んだ俺は、そのまま反対側の壁に激突すると思い身を固くしたが、マットレスかクッションに飛び込んだような柔らかく受け止められ、そのまま床に軟着陸させられた。

改めて見てみるが、壁は壁のままだ。クッションなんか切れ端も無い。壁が柔らかいんだろうか。

「将仁様っ!？」

そこに、あかりが悲鳴のような声をあげて駆け寄ってくる。

「おっ、お怪我はっ!？」

そして、心配そうに俺を覗き込んでくるが、当然ながら怪我なんか擦り傷一つありゃしない。

「あ、ああ、大丈夫だ」

「はあっ、良かった、間に合いました」

あかりがほっとした顔をする。どうやら壁が柔らかかったのはあかりの仕業らしい。戸締りやドアをつなげる以外にも、できることはあるようだ。

「貴様あっ、我らが主、将仁様を傷つけようとは不届き千万！」

そのあかりは、俺を投げた金庫ロボを指差すと、いままでとがらりと変わった男らしい口調でそう宣言した。

そして俺は、とんでもないものを見てしまうことになる。

ばたんっ！とドアが開いたと思ったら、黒い服を着た何者かがわらわらつと部屋に入ってきたのだ。そして、恐ろしいことにそれからは、みんなあかりと同じ姿をしていた。服装だけならともかく、ヘアスタイルから顔まで同じだった。言うなれば、あかりが束になつて部屋に入ってきた感じだ。

しかも。その手にはバットに木槌、金槌、バールに花瓶、中には鎖つき鉄球のようにどこから持ってきたんだと言いたくなるような様々な鈍器が握り締められている。

「処分してくれるっ！」

そのあかり軍団が、一斉にその金庫ロボに鈍器を向けて宣言する。

「ちよつと待ったっ！」

とっさにその中の1人の手首を掴む。すると、飛び出そうとしたあかりの集団が一斉に足を止めて、俺を見た。同じ顔に一斉に見つめられるというのは、ホラー映画のようでちよつと怖い。

「なぜ止めるのです!？」

一斉に言われると余計に怖いんだが、そうも言ってられない。

「ほら、ケガはしてねえし、それに相手は金庫だから、何か重要な物をしまっているのかもしれないし、だから警戒しているのかもしれないし、な」

それに、同じ擬人化（片方は見かけ上ロボだが）同士が殺しあうのは当然ながら見たくないし。

「……ふう」

すると、あかりの集団は一斉に呆れたようなため息をついた。

「将仁様がそう仰るのならば、仕方ありませんね」

そして、俺が手首を掴んだあかりがそう言う。

と、そのあかりが再び金庫ロボに向かって、手に持ったバールを突きつけて、

「この次、将仁様に同じようなことをしたら、その時は貴様をビス1個に至るまでバラバラに分解してくれるから、そのつもりでいる」と、嬉しくない宣言をしてくれた。

そして、あかりの集団が、俺が手首をとった1人だけを残してぞろぞろと出て行き、ばたんとドアが閉まると、妙な静けさが残った。

「な、なんだったんだ今のは」

「あれは、私の分身です。今後、人手が必要な時にはいくらでも」

「ああああ、わかった、わかった」

空間を捻じ曲げて応接間と玄関を繋いだり、壁の硬さを変化させたり、何十人にも分身したり、なんというか、始めに話を聞いたときに「しょぼい」と思ったことを土下座して謝りたくなるぐらいの能力だ。

そして、とんでもない光景を見てしまったせいで、金庫ロボへの怒りは完全に静まっていた。

「おい。さつき、なんで俺を掴んだんだ？」

それが証拠に、俺は比較的平常心でその金庫ロボに話をしていた。だが、金庫ロボは黙ったままだ。

「聞いても、無駄だと思いますよ。彼には、声が無いのですから」
かわりにそう言ったのは、あかりだった。

「………声が、無いって、どういうことだ」

「言葉のとおりの意味です。私は、静香様がまだご存命の時から彼を見て来ましたが、一度として声を出したことはないのです」

なんでも、この金庫ロボは先代・西園寺静香が亡くなる少し前に姿を得たらしいのだが、その時すでに先代は色々衰えていたらしく、色々中途半端な存在になってしまったらしい。だから、擬人化でもモノと人の中間なロボットのような姿で、喋る能力も無いのでは、ということ、あかりから説明された。

真っ先に消えてもおかしくないそんな半端な存在が、なぜ最後まで残っているのか。それは、あかりにも判らないらしい。

だが、知らなかったとはいえ「口ぐらいあるだろう」と言ってしまったのは軽率だった。

「んー、まあ、喋れと言ったのは、軽率だったと思う。ごめん」
すると、金庫ロボが頷いた。ってことは、ハイかイイエかぐらいは

反応できるということか。

「お前、俺の言うことは判るんだよな」
こくり。

「じゃあ聞くが、おまえ、えーと、金庫。俺、西園寺将仁は、新しい当主として、西園寺の全ての資産を受け継いだ。それは、判るな」
金庫ロボは、ひとつ頷く。

「それで、そこにはお前も含まれる。だから、おまえも俺のものになった。判るな」

ロボは、少しの間をおいてから、頷いた。

「そういつわけだから、仲良くしよう。な」

そして、俺は自分の右手で、その金庫ロボのでかい右手を掴む。

「よろしくな」

その瞬間。閃光が目の前を包んだ。

頃合を見計らって目を開けると、そこには俺よりちよつと年上ぐらいの、ポニーテールのえらく厳しい表情をした女の人が立っていた。色白で髪が暗い銀色なのも手伝い、到底日本人には見えない。

服装は、上は半袖の黒いシャツの上からやはり黒くてごつついライフジャケットみたいなのを、かつちり前を閉めて着込んでおり、下は黒いたぶついたズボンの裾をジャングルブーツのようなごつい靴の中に入れて纏めている。なんというか、どっかのSWATを連想してしまう格好だ。

ちなみに、金庫としての名残なのか、ジャケットの前面には、レバー状の大きな取っ手と、ダイヤルみたいなものが左右についている。その人は、鋭くつりあがった眼差しで俺を睨みつけながら、ごわごわした手袋をした右手で俺の右手を握っている。

「と、とりあえず、よろしく」

「・・・・・・・・」

挨拶をしたが、俺の手を握ったまま、怒ったような怖い顔で俺をじつとにらんでいる。

俺、何か、悪いことしたか？もしかしたら嫌だったのか？

「えーと・・・・・・・・」

なんか間が持たないので、何か喋らないといけないと思った時だ。

「！」

いきなり、その女が、俺の手を振り払った。

嫌われたか、と思った直後。振り払われた女の右手が、勢い余って後ろにある金庫に叩きつけられてしまったのだ。さっきは金庫自体が変形していたが、分裂したみたいだ。

「うござー！」

その人は、腹のそこからうめく様な声を上げ、右手を押さえ込んだ。うん、ちゃんと痛いらしい。ってそんなことを言っている場合では

ない。

「だ、大丈夫か？」

今までに無いパターンの反応をされたため、勝手がわからない。

「・・・・・・・・つづ・・・・・・・・」

相当痛かったんだろう、その人は顔を顰めて、今ぶつけた手をさすっている。SWATみたいな勇ましい格好のわりには間抜けな光景だ。

その時。彼女がいきなり顔を上げると、何やら発音練習でもするよ
うに、声を出しはじめた。

「・・・・・・・・ん、あ、あー、あー、あーっ！」

そして、いきなり大声を出した。一体、何事だろう？

「・・・・・・・・声が出る」

それが、その金庫女のまともな第一声だった。そういえばあの金庫
口ボの時は、声が無かったんだっけな。

「・・・・・・・・何をした？」

すると、金庫女は、いきなり俺の胸倉を左手で掴み、俺をじろつと
睨みながらそう聞いて来た。痛みで腹が立つのはしょうがないかも
しれないが、その怒りを俺に向けるのは間違いだと思っただが。

「あなたは、将仁様の力で、生まれ変わったのです。私のように」
俺のかわりに答えたのは、ここまで俺を案内したあかりだった。

あかりのその言葉を聞くと、金庫女は手を離し、自分の手足や体の
あちこちを見回してから、また俺をじつと見つめてきた。

「・・・・・・・・な、なんだよ」

「・・・・・・・・説明を、要求する。・・・・・・・・私を、この姿にし
た、理由を」

金庫女は、しばらくの沈黙の後、そう言うてきた。口が重いのは、
金庫だったからだろうか。

「理由ってそりゃ、お前を残すためだよ。先代は自分が生み出した
擬人が消えるのを悲しがっていたから」

「・・・・・・・・静香様が？」

「ああ。まあ残すためには、俺の手で擬人にするしか手がなくて、おかげでみんなまるつきり別人になっちまったが」

「……そうか」

金庫女は、やっと納得したのか、自分の手とあかりを交互に見ながらそう言った。

「……では、私は、あなたのものなのだな」

その金庫女が、何かつぶやく。顔を見ると、表情は全く動いていないのに、顔色だけが熟れたトマトのように真っ赤になっていた。こいつは無表情なのに顔色だけ変わるのか。

「あー、その、将仁様？彼女に、名前をつけてあげましょう」

と、そこにあかりが声をかけてきた。

そこで、俺は改めて金庫女に向き直った。実は、名前はもう考えてあったりする。

「クレア・ハルトマン。これで行こうと思う」

クレアというのは、以前見た映画に出てきた女SWATの名前だ。金庫女の格好がSWATっぽいからだ。そしてハルトマンは、さっき金庫を近くで見た時にちらっと見えたプレートにそう書かれていたため。たぶん、どこかの金庫のメーカーの名前だろう。

「……了解。私はこれから、クレア・ハルトマンと名乗る」
そして、金庫女改めクレア・ハルトマンは、俺に敬礼をした。

「では、将仁様。戻りましょうか」

すると、待っていたように、あかりが俺の手を取って引っ張った。

「……待って」

だが、その時、反対側から、今度はクレアが俺の手を取って引っ張った。

「……見せたいものが、ある」

俺の手を握ったまま、クレアが相変わらずの険しい表情のまま、俺をじっと見つめる。

「見せたいもの？」

クレアはひとつうなずき、言葉が続けた。

「……………私が、守ってきたもの。あなたには、知る権利がある」

「う、わかった。あかり、ちょっと待っていてくれ」
守ってきたもの、という言葉に、俺はつい引きつけられた。

すると、クレアは、自分のジャケットについたダイヤルを自分で回し始めた。カチカチカチという音がするあたり、本当に金庫なんだな！と思うと同時に、そのダイヤルのつまみがちょうど胸の上あたりに（しかも左右ひとつずつ）あるので、ちょっと卑猥なことを考えてしまう。

やがて開錠ができたのか、クレアがジャケットの真ん中にあるレバーに手をかけてひねると、まるで観音開きの扉のようにジャケットの前を開いた。

わざわざそんなことしなくても普通に脱げないのか、と思ったのだが、それは思い違いだった。なぜなら、そこには、クレアの体も衣服も何も無く、真っ暗な空間があったからだ。脱ぐのとは違うらしい。

クレアは、その空間に手をつっこむと、掌に乗るほどの小さな木箱を取り出した。

「なんだ、これ」

「……………静香様が、生前、とても大切にしていたもの」
大切にしていた、そう言われると、扱いが慎重にならざるを得なくなる。

そつと開けてみると、中には綿が敷き詰められており、干からびたミミズみたいなものと、色あせた赤ん坊の写真が入っていた。

「……………それは、あなたの臍の緒と、あなたが生まれたばかりの時の写真」

クレアが、静かな口調で、言葉少なく説明する。その瞬間、俺は頭を殴られたようなショックを受けた。

「……………静香様は、辛い時には、ここにきて、その写真を見て、独りで泣いていた。……………私は、慰めの言葉を、かけて

あげたかったけれど、喋ることができなかつたから
「……………そうか」
クレアという言葉に、なぜか、涙が出てきた。

15・とうとう来ました西園寺本家 その16（後書き）

どうも、作者です。

西園寺家最後の擬人化、「鉄壁のバンクギャル」クレアの登場です。個人的には、変身前の大魔神ライタンのほうがインパクトが強い子です。

他のモノに比べ口が重くて目立たないと思いますが、かわいがってあげてください。

15・とうとう来ました西園寺本家 その17

応接間に、新しい、というか生まれ変わった5人の擬人が勢ぞろいしている。

絵になった先代・西園寺静香と、懐中時計の付喪神・常盤花音代に、そして2代に渡って仕えることになった擬人同士で、顔合わせをするためだ。

とはいえ、部屋に戻った時には常盤さんは席を外しており、あの絵の人だけがその応接間で壁に掛かったままで待っていた。

「あらあらまあまあ、ずいぶんとかわいい子が揃ったのねえ」

かつては自分のものだった、この家にいた擬人化を見て、先代が述べた感想が、これだった。

「はい。僭越ながら私も、将仁様はセンスが良いと思います」
そう答えたのは、あかりだった。

「それに、度量も広い。あん時やもうダメかと思いやしたから」
これははさみの言だ。確かにはさみは、一度は擬人ではなくなったからな。

「……私も、彼と出会えたこと、喜ばしく思う」
クレアも口数少ないながらそう答える。

なんか、ずいぶんと持ち上げられているような感じがしてこそばゆい。自分が仕える人だったらこのぐらいは当たり前だ、ということなんだろうか。もしそうだとすると、それはそれでかなりのプレッシャーだが。

「将仁さ〜ん、読書しませんか？面白い本があるんですよ」
「それより、ドライブしない？今のあたしだったら何処まででも走れるよ」

そして今、俺の横には御守とメルセデスがいる。その二人は、なんか知らんが熱心に俺に話しかけてくる。

なんか、親戚のお姉ちゃんたちに囲まれた弟分になったような感じ

だ。

そういえば、見かけ上、だが、あかりもメルセデスもはさみも御守もクレアも、俺より明らかに年上っぽく見える。俺がいままで一緒にいた擬人化が、ヒビキとレイカは別として、俺とほぼ同年代か年下に見えるのがほとんどなのと対照的だ。

やっぱり使ってきた年季の違いと言うやつなんだろうか。それとも、擬人化させる際、俺のイメージが多少なりと反映されるらしい（だから紅娘なんかはマンガチックな中国人っぽいのだ）ので、爺さんな姿を見せられた俺は、年長者のイメージを多少なりとも持ってしまったということだろうか。

「こら、その2人。将仁様はこれからこの屋敷の中を検分するのだ。邪魔をしないでもらえないか」

話が終わったのだろうか、あかりがその2人に声をかける。微妙に怒っているような気がするのは、気のせいだろうか。

「だったらあつしだって、庭を案内したいっす」
そこになぜかはさみまで入ってくる。

どうやら、彼女らはそれぞれのエリアがあって、住み分けをしていたっぽい。たとえば、あかりはこの家の地上部分、御守は地下部分はさみは庭の緑地部分、メルセデスは庭の舗装部といった感じだ。だが、そうなる、クレアはどうなるんだろう。どこにもならないんじゃないだろうか。

見ると、どうやら本当にそうだったらしく、腕組みをしたままでこちを悔しそうに睨んでいる。

だが、やがて何を考えたのか、クレアは自分のダイヤルを回し始めると、金庫のようなジャケットの前を開いて、その中に手を突っ込んだ。

「……離れる」

そして、何か黒いものを掴んだその手を抜くと、それを俺たちのほうに向けた。

「って、オイ！それピストルじゃねえか！なんでそんなもん持って

んだ！」

そう。クレアが持っていたのは、日本では銃刀法違反になるので持つてはいけないはずの、リボルバー式拳銃だったのだ。SWATみたいな格好をしたクレアにはものすごく似合う小道具だ。

さすがにピストルには勝てないと思っただけか、4人はさつと離れる。だが、そこから負けていない。

「ここは、私のテリトリーだ。そんな豆鉄砲で勝てるか？」

「ハネられても文句は無し、だからね」

あかりとメルセデスが、クレアを睨んでそう言う。

するとその直後。後ろのドアがバタンと開き、そこから何人も火縄銃をもったあかりをボンネットや屋根に載せたリムジンが、ぬつと現れたのだ。

「な、なんだあ！？」

リムジンが入る家、という時点ですごいが、そのリムジンに何処で乗ったのか想像も出来ないあかりズたち、そしてそいつらがまた一様に、今度はなぜか火縄銃を持っているのが、なんというかあまりに非常識な光景だ。

「ささ、若はこつちに下がって」

「怪我したら大変ですから」

そして、はさみと御守が俺を引っ張って非難させる。

だが、誰も乗っていないリムジンが高らかにエンジン音を響かせ、それを合図にあかりズが一斉に銃口をクレアに向けたのを見た瞬間、俺は怒鳴っていた。

「ためーらいいい加減にしろーっ！と。」

「お前らはバカか！ケンカならともかく、俺の目の前で殺し合いなんかして何が面白いんだ！俺はそんなの見せてほしくておめえらを呼んだんじゃない！」

一息でぶち上げてしまったので、息が切れてしまった。

だが、殺し合いが見たくないというのは本当だ。昨日、うちのモノたちの死闘を見てしまったから余計に、なのかもしれない。

息を切らせながら辺りを見回すと、みんな硬直していた。ちよつと言い過ぎたか？と思った時だ。

ピストルを下に向けたクレアが、ぼそりところ言った。

「………騒ぎの原因は、私。責任は取る」

言うなり、何を考えたのかピストルの銃口を自分のこめかみに押し当てたのだ。

「ふざけんなつ！目の前で死なれんのがイヤだって言ってるのがわかんねえのか！」

殺し合いは見たくないが自殺なんてもつと見たくない。飛び出した俺は、クレアの手からそのピストルを叩き落とした。後から考えれば、そんなことをしたら暴発してもおかしくなかったが、平和な日本で生活する俺にはそんな頭はなかった。

「こんなもん、しまつとけ！」

そして床に落ちたピストルを右手で拾い上げると、左手でクレアのジャケットのレバーを捻って開き、右手をピストルごと突っ込んだ。はずだった。

むにゅ。

だが、妙に柔らかな感触があつて、右手が入っていかない。クレアにしか入れられないのか、と思つて、よく見ると。

ジャケットの下は、闇に包まれた空間ではなく。黒いシャツを羽織つた女体そのものだった。

しかも俺がピストルを押し付けていたのは、明らかに女性であることを主張する膨らんだ部分だったのだ。しかも、けっこう大きい。

「………あ………」

俺とクレアは、顔を見合わせて声を出してしまう。

クレアの場合は、恥ずかしさからだろう、無表情ながらも顔を真っ赤にしている。

だが俺の場合は違った。

背後から、もの凄い数の視線を感じたからだ。なんとというか、振り向くのが怖い。

「将仁様？」

最初に聞こえたのは、あかりの声だった。

朴念仁と言われ続けてきた俺だが、さすがに2週間も（擬人とはいえ）女と共同生活してくれば、多少は言葉の裏が読めるようになる。この声は、確実に、怒っている。

「いいっ!？」

後ろを見ると、ずらりと横に展開したあかりズたちが、一旦は下げた火縄銃をこっちに向けて構えているのが見えた。思わずホールドアップしてしまう。

そしてその後ろでは、メルセデスがやれやれといったポーズをとっている。

横を見ると、御守があたふたとしている横で、はさみがなんかニヤニヤして見ている。

「こらその庭師！にやける余裕あるんだったらなんかしろい！」
それが妙に余裕癪癪な感じだったので、つい言ってしまった。別に何かできると思ってはいないが、言わないと気がすまなかったのだ。すると。

「全く、若はホントに世話が焼けるツスねえ」

なんてなことを言うなり、はさみは腰にくくりつけたウエストバッグから、どう考えてもそこには入らないブリキの如雨露を取り出し、両手に持った。

「頭を冷やしやしようぜ」

そして、自分の頭が天井にあたるぐらいにまで脚を伸ばすと、その如雨露から水をあかりズに向かってまき始めたのだ。

そのとたん。じゅっ、じゅっ、という音と共に、火縄銃の火が消えた。火縄銃は雨に凄く弱いというが、それが証明されたような光景だ。

後から考えれば、そんな簡単に火縄銃の火が消えるのかとか、そもそもあのウエストバッグに水の入った如雨露がはいつていることがおかしいとか突っ込みどころは多かったのだが、その時点ではなん

とも言えなくなっていました。
なぜなら。

「くおらあああああああ！はあさあみいいいいい！応接間で水をまくとは何事かあああああ！」

そのあかりズが、火の消えた火縄銃を手に、勘違いした方面へ怒ってはさみのことを追いかけ始めたからだ。

「ふう〜、想像していた以上に、騒々しくなりそうですね〜」

「落ち着いて考えると、あんたに腹立てたっしょうがないんだよねえ」

「.....私も、軽率だった。許して欲しい」

ちなみに、他の3人の擬人は、仲直りしてくれたようだ。うん。ケンカするほどなんとやらとは言うけど、いつもギスギスしているのはいやだからな。

「ところで、マサつちい？」

ふと、メルセデスが何かたくらんでそうな様子で俺を見てきた。

「あたしとクレア、どっちの胸が好きかな？」

「ぶっ!?!」

いきなり何を言い出すんだこのドイツ車は。だいたい、クレアのそれは判るほど見てないし。

「.....」

答えあぐねていると、頬を赤らめたクレアが、無言のプレッシャーをかけてくる。

「あらあら〜、それとも〜、モンゴロイドの胸のほうが〜、好みですか〜？」

さらには、なぜか御守まで顔を出す。

言つとくが、俺は御守の胸がでかい小さいかなんて判らない。なにしろ御守の格好はかなりかさばるため、首から下のラインが全く判らないのだ。

つて、そういう話ではないだろう。

答えあぐねた俺は、元そいつらの主だった絵に助けを求めた。俺の

母親だつて言うぐらいなんだから、息子を助けてくれると思つたらだ。

「おい！もとはあんだのдар！黙つてないでなんとかしてくれ！」
ところが。二次元は妙ににやけ顔のままこう言い返しやがった。

「あら、もう西園寺の遺産はぜえんぶ貴方にあげちゃったから、もう私のものじゃないわ」

「はあ？」

「つまり、私が何を言つても、彼女たちはそれに耳を貸す必要はぜえんぜんないつてこと」

「おまえその何が楽しいんだあ！」

つい叫ぶが、それで何か解決するわけもない。

今更ながら、もの凄い失敗をしてしまったような気がした。

15・とうとう来ました西園寺本家 その17（後書き）

どうも、作者です。

西園寺本家のモノ編は、ここで一端終了します。

次からは、学校に行った鏡介を中心とした話になります。
どんな話になるのか。それは明日を乞うご期待！です。

そのころ。

「ふぁーあ……」

将仁のかわりに学校に行っていた鏡介は、昼休みに入ったところで大あくびをしていた。

結局、授業のほうはほとんど身に入らなかった。そもそも、鏡介は本来鏡の世界の存在である。声や会話はともかく、特に文字は、一般人が鏡文字を読むのと同じ苦勞を強いられるのだ。

「ようニセモノ、今日は弁当はねえのか？」

ぐったりしていた鏡介に、ヤジローが声をかけてくる。

将仁と鏡介が一日だけ入れ替わることは、クラス担任の徳大寺に伝えられており、朝のホームルームでそのことを公表したことでクラス全員が知るところとなっていた。

「あー、ちよつと事故があつてねー、弁当作ってもらえる状況じゃなかった」

そうやって手をひらひらさせ、鏡介が答える。

「しっかしマサもよくわかんねえコトするねえ。学校の授業にわざわざ代理人立てるなんてよ」

「いや、将仁さんは授業より学園祭の準備のほうを気にしてたよ。

なんでも、2日も休んで全然手伝ってないから心配だった」

「学園祭ねえ。俺んちがマサンちみたいなハーレムだったら毎日休んでたいけど」

「真田君は真面目なのよ。あんたといっしょにしちゃ可愛そうですよ」

以来、休み時間になるたびに鏡介は質問攻めに遭うことになり、昼休みになるころにはなにもしていないのに疲労困憊になっていた。

「まあいいや。腹へってんだつたら、メシ行こうぜ」

そのまま、鏡介は疲れている体を引き起こされ、昼飯へと連れ出さ

れる。

そして、廊下をずるずると引きずられていると、廊下でとある集団とすれ違った。

「ああ、珍しいところでお会いしましたわね。西園寺将仁さん」

その集団の先頭を切って歩いていたのは、近衛クローディアだった。鏡介が遭うのは二度目だが、むこうには将仁との区別がついていないらしく、そちらの名前で話しかけてくる。

「同じ校内にいるんだから、遭うのは当たり前だろ」

鏡介は、いかにもめんどくさそうに答える。

実際、彼はこの近衛クローディアという女が、先週パーティーで出会ったときから気に食わなかった。本人には何もなくて親の七光りで威張り散らすこの女が、棒高跳びのレコードホルダーという名誉を自分の努力で掴んだ自分の主、西園寺将仁に比べ劣っているように思えたからだ。

「そ、そういえばあなたのお宅、昨日、何やら災害に遭われたそうですね」

そのクローディアは、こめかみをひくひくさせながらも言葉を続ける。

「ああ、おかげさまでね。なんならその現場に招待してやるつか？」

「結構ですわ」

「あっそ、んじゃ用はねえな」

そして鏡介は、手をひらひらさせて立ち去ろうとする。

「ちょ、ちよっと、お待ちなさいっ！」

「やだね」

「なっ!?!」

「俺はあんたの家来でも部下でもなんでもないし、これからもなるつもりはない。お願いとかいうんだったら聞いてやらないこともないがね」

鏡介は、非常に憎たらしい台詞をクローディアに投げつけた。テレビアニメの中で悪役が言っていたそのままの言葉だったのだが、「

言われたら腹立つだろうな」と鏡介自身が思ったほどだ。

案の定でも言おうか、クローディアは顔を真っ赤にして怒りに身を震わせる。

「わ、わたくしは、あなた方が難儀しているだろうと思って!」

「恩を売ろうとも思っただのかい?それで泣いて感謝するだけでも? あいにくだが俺たちは、お前に恵んでもらうほど落ちぶれちゃいな
いんだ。もつとも、仮に落ちぶれても、あんたを頼ることは無いっ
て断言してやるがな!」

「っ!」

何も答えられなくなったクローディアの顔を一瞥すると、鏡介はく
るりと背中を向けた。

「悪い悪い、待たせちまったな、そんじゃ行こうぜ」

そして、唾然としているクラスメイトに声をかけると、さっさか歩
き出した。

取り残されたクローディアに、取り巻きが何か言葉をかけようとす
るが、オーラが出てるんじゃないかと思うほどの雰囲気、声をかけ
あぐねている。

「……………く、く、く、屈辱ですわっ!」

やがて、閉じたままの扇子を両手に持ったクローディアが口にした
言葉が、それだった。

同時に、その扇子が、ばきっという音と共に真っ二つに折れる。

「迅ッ!あの男を始末してらっしやいッ!」

そして、鬼気迫る表情で近くにいる迅に声をかける。

だが迅は腕を組んで壁にもたれたまま、動こうとしない。

「迅ッ!」

「少し頭を冷やせ。状況を理解しろ。ここは日本だ、アメリカじゃ
ない」

さらにヒステリックになるクローディアに、迅が冷たく言い放つ。

「っ!」

それでさらに怒りが燃え上がったクローディアは、真っ二つになっ

た扇子のなれの果てを近くの取り巻きに投げつけると、頭を激しく搔き毟った。

整えられた金髪がぐしゃぐしゃになる。

そして手を頭から離れたクローディアは、見るからに不機嫌そうな足取りで、ずんずんと廊下を歩き出した。

「く、クローディア様、どちらへ」

「帰らせていただきますわ!」

「な、午後はどうするんですか!??」

「あなたたちでなんとかなさい!そのため午後に授業がないのでしょう!」

取り巻きの言葉にも、クローディアは一切耳を貸さない。

そしてクローディアは、そのまま玄関への階段を下りはじめた。

15・とうとう来ました西園寺本家 その19

「あー、疲れたー・・・」

その日の夜。鏡介は1人、人気の無い路地を歩いていた。

「うちのモノたちも人使い荒いけど、将仁さんの友達も人使い荒いよなあ」

彼の口からそんな愚痴が漏れる。そして首を左右に動かすと、コキコキという音が鳴った。

結局彼は、将仁が2日休んだから、という理由で、仕事を沢山押し付けられてしまったのだ。それは買出しに始まり、ギミック作成の手伝い、広告の印刷の手伝いなど、ほとんどが雑用だったがそれだけに手抜きができないものばかりだった。

「とりあえず、今後は代理で学校に行くのは、考えてからにしよう」そんなことを言っているうちに、彼は丁字路に設置されたカーブミラーの前にやってきた。

鏡介は、あたりに人影が無いのを確認すると、その鏡をじっと見つめる。まだ行ったことがない、西園寺本家へ向かうためだ。

彼の目の前で、鏡の中の光景がめまぐるしく変わる。目標を探しているのだ。もちろんこれは、鏡介だけにしか見えない光景だ。

だが、鏡介はその探査を中断すると、頭上を見上げた。頭の上から、聞いたことがある爆音がしたからだ。

見上げると、何か光るものが飛んでいる。それが、足から火を噴いて空を飛ぶ、人の形をしたものだ。と判るのに、時間はかからなかった。

そして彼は、その飛行物体に見覚えがあった。

やがて、轟音とともにこちらに向かって来たそれは、激しく渦巻く風で砂埃を巻き上げ、地面に降り立った。

それは、背中に大きな翼を生やした、銀髪の子供のようだった。だがその翼は金属のような光沢を放っており、まだ半そでの人が自立

つというのに、足首まで届きそうなロングコートを羽織っている。また、顔はその半分を隠すゴーグルと、鳥の風切り羽根のようなアンテナを左右から生やしたヘッドギアで覆われていた。

あっけに取られている鏡介の目で、その人影の背中に大きく展開していた翼ががしがしつと音を立てて見る間に折りたたまれていき、間もなく背中に隠れて見えなくなつた。

「ターゲット、捕捉」

ゴーグルに緑色のラインが灯り、顔を上げると、その人影は機械で合成したような声でそう告げる。

「ターゲット、真田将仁。データ照合、90・83%合致、本人と断定。モード変更、レベルB」

そう言いながら、人影は左腕を前に突き出し、手のひらをその青年に向けた。

はつとした青年が、とつさに横に飛びのく。

その直後、赤い光線が、うなるような音と共に青年のいた場所を貫いていた。

光が消えた後、その光が命中したブロック塀にはゴルフボール大の穴がぽつかりと開き、その穴を中心に無残な焼け焦げが広がっていた。

「ターゲット、回避。攻撃を続行します」

その人影 コンバットドール「ナミ」が、左手の角度を微妙に調整しながら、機械的な声でそう告げる。

「ちよつと待てーっ！」

ナミが、あの光を放つ左手を自分に向けるのを見て、たまらず青年が声をあげる。

「い、いきなり何すんだよ、てめえ俺を殺す気か！」

「私の任務は、真田将仁を成敗することです。私はその任務を遂行します」

青年の激昂に対し、ナミの回答はあくまでも機械的なものだ。

そして、間髪を入れず、ナミは左手から光を放った。その光は、掌

の中心に見えるレンズから発せられている。

レーザー兵器だ。その高出力のレーザーはコンクリートブロックを易々と貫通し穴を開けてしまう。人体に向けて使えば、命中した箇所は瞬く間に焼き切られてしまうだろう。

だが。

光が消えた後も、青年は平然としてそこに立っていた。しかも、腕を交差させ、防御するようなポーズを取っているが、全くの無傷で。「……………まったく、人間相手にしちゃ、やりすぎなんじゃないのか？」

その青年は、クロスさせた腕のむこうで、そう呟く。

そして腕をほどいたとき。青年の表情は、今までとまったく違うものになっていた。

「まあいい。ふりかかる火の粉は払うまでだ」

口元にはやりと笑いを浮かべ、挑発するように右手を前に突き出し、くいつと動かす。

応じるかのように、ぶうんといううなりのような音と共に高出力のレーザー光線が放たれる。それは、寸分の狂いも無く青年の頭を狙っていた。

しかし、人の頭が骨まで消し炭になる出力のレーザーを、真正面から受けたはずなのに、青年は平然と立っている。

いや、受けてはいない。突き出した手を返し、手のひらを向けているその前に、ガラスのような、向こうが透けて見える壁が立っており、それに当たったレーザーが様々な方向へと反射しているのだ。

青年の口がにやりと動き、レーザーを真正面から受け止めながら、一歩踏み出した。不思議なことに、彼の前に立つ壁もそれに合わせて一歩分前へと進んでいる。

「モード変更、レベルC」

ナミが、右手も一緒に青年に向ける。うなるような音と共に、両の掌からレーザーが青年に向かって放たれる。それも、青年の体の各所を何箇所も打ち抜くように、短く、ばら撒くように発射する。

だが、そのいずれもが、青年の前にある透明な壁に阻まれ、拡散されて青年には届かない。

そして、その弾幕の中を、青年はナミのほうへと進む。はじめはゆっくりとした歩みが、少しずつ加速していく。

ナミは、レーザーの間隔をさらに短く、その分発射回数を増して弾幕を張るが、青年はそんなことはお構いなしに右手をこちらに向けたまま駆け寄ってくる。そしてその右手の前にある壁は、レーザーをどれだけ受けても、傷一つついた様子が無い。

プログラムにも、過去のデータにもないその動きに、ナミは次の判

断ができなかった。

「おりゃあああああああ！」

青年が、目の前で弓を引き絞るように左の拳を振り上げているのを確認して、ようやくナミの電子頭脳は次の判断を下した。

自分を、拳で殴ろうというのか。特殊複合金の装甲は、人間ごときの力では傷1つつかない。はずなのだが、彼女の電子頭脳はその攻撃の回避を選択した。

射撃のために固定していた各アクチュエーターに動作命令を発信し、一步後ろに下がる。

その目の前に青年の拳が迫る。不思議なことにその拳は得体の知れない力場に包まれ、白い光を放っていた。

とっさに、右手の拳から爪状の高周波カッターを出し打ち返す。超振動するその刃は、本来であれば戦車の装甲でもコンクリートでも紙の様に切り裂く能力がある。

だが、青年の拳が放つ光には妙な力が発生しているのか、拳に届く数ミリ前で跳ね返された。

そのようなケースは想定外だったため、ナミは体勢を崩してしまっ

た。

その光に発生した反発力は、青年の拳も同時に跳ね返していたが、予測していたぶん彼のほうが先に反応できていた。

「ぶん！」

体勢を立て直した青年が、右からの一撃を放つ。ボディーブローだ。

「!?!?!?」

命中した瞬間、ナミは自分の体に鉄球が当たったかのような衝撃が走るのを感じた。それはつまり、光に包まれた青年の拳が、鉄球の威力を持っているということになる。

自分がこうむったダメージを掌握する。そのわずかなタイムロスの間に、青年は何のためらいも無く次の攻撃を繰り出してきた。

ボクシングというアッパーカットだ。ボディーブローでくの字になったナミの、前のめりになった顎に、光をまとった拳が見事に噛み

付いた。

衝撃が頭部の下から上へと突き抜け、頭部のカメラとセンサーに確実なダメージを与える。

ナミは、アッパークットを受けつつもブースターを噴射させ後ろに飛び、ダメージを軽減させる。そしてその間、ナミの電子頭脳はこの状況を分析していた。

目の前にいる体格の人間が、自身に施された特殊複合金の装甲を貫通するほどの打撃を、素手で繰り出す可能性は、0%。つまり、自分が戦っているのは、人間の形はしているが、人間ではない。

ターゲットが人間でなければ、リミッターは必要ない。

「モード変更、レベルD」

ナミは、自分の全武装のスイッチをオンにする。

そして、数m離れたところで体勢を立て直すと、背中に翼を展開しながら次の攻撃に備えて青年をロックオンする。

グオンッ！

そして、翼が広がりきる前に、ナミはブースターを噴射させてまっすぐ飛び上がった。

青年は、身構えたままそのナミの姿を目で追っている。さすがに飛行能力はないようだ。

ロックオンしながら、ナミは相手となった青年の武装を分析する。

遠距離攻撃が可能な武装の所持は、投擲も含め認められない。また、正体不明の障壁は、手を向けた方向に発生している。ならば、多方向から一斉に攻撃すれば、障壁のない方向からの攻撃は防御できない。

そう判断したナミは、地上から10メートル、ターゲットからさらに数m離れた空中に停止し、両手でコートの裾を後ろへ跳ね上げた。人と言う太ももがむき出しになる。しかし、コートの下に隠れていた腿の外側には、親指程度の丸い何かがびっしりと並んで埋まっていた。

バシユバシユバシユ！

軽快な射出音と共に、その丸い何かが腿の外側から射出される。左右3つ合計6つ射出されたそれは、火花を噴出しながら空中で大きく弧を描き、そして青年めがけて跳んでいく。

超小型の誘導ミサイルだ。射出後、ナミの誘導でターゲットへと向かっていくそれは、ある程度の距離であれば外すこともないし飛行ルートも変更できる。

ナミは、その6つのミサイルを誘導し、6発全てが違う方向から向かわせ、さらに少しのタイムラグの後さらに6発のミサイルをさらに違う方向から命中するように誘導する。

ターゲットになった青年は、どうしたらよいかと立ち尽くしている様子だ。

ドドドオオオン！

街中にはあまりに似つかわしくない轟音が鳴り響き、爆煙が吹き上がる。そして立ち上る土煙の中に青年の姿が消える。

「ターゲット、ロスト。サーモグラフにチェンジします」

各ブースターの出力を下げ、ゆっくりとナミが地上に降りてくる。降りながらナミはカメラをサーモグラフに切り替えた。

随時誘導による100%の命中率を誇り、一発当たれば人間を肉塊にしてしまうミサイルを、合計12発も叩き込んだのだ。普通であればカケラも残らないはずだ。しかしそれは、さっきのレーザーも同じだ。このターゲットに対しては、仕留めたことを確認する必要がある。

サーモグラフで、ターゲットを確認する。そして、彼女は自分の判断が間違いではなかったこと、それ以上にこのターゲットの打倒が困難であることを確認した。

爆煙が晴れる。その中から、その場に似つかわしくないものが姿を現した。

クレーターのように丸く爆風にえぐれた地面。そこから生えた、巨大で透明な六角水晶の柱。その中に、ターゲットとなる青年が立っていた。まさか、あんな脆そうなものでミサイルを防いだというの

か。

その水晶のようなものが、まるで煙が散るようになくなる。その時、ナミはその水晶のようなものがあの障壁と同じものだと理解した。と、そのターゲットが、自分を見ながら、なぜか両手を己の胸元へと添えた。

「光線技は、お前だけの専売特許じゃねえんだよ！」

そして叫ぶと同時に、その両手を自分に向けて勢い良く伸ばした。すると、その両手を白い光が包み、そして、その光が2筋の光の帯となって自分に向かって伸びてきた。

「!?!」

その光が自分の体に当たった瞬間、ナミはさつき殴られたのと同じような衝撃を受けた。

100kgを超えるナミの体が、まるで枯葉のように吹き飛ばす。そして地面を数m転がり、ナミは体を何度もアスファルトに打ち付けられた。

「……腕部損傷、超振動カッター使用不可、レーザー砲出力35%に低下」

地面に突っ伏した状態で、ナミの電子頭脳が自分の損傷状況をはじき出す。

現在、自分が受けたダメージに比べ、ターゲットのダメージはほぼゼロ。だが、真田将仁の成敗という自分に与えられた命令は絶対。

「分析を再開します」

この戦いで得られた情報を、再度分析する。ターゲットは“壁”によってダメージを完全に防いでおり、“壁”を破らなければ、ターゲットにダメージを与えることは不可能と判断したからだ。

だが、何度計算しても、自分が持つ武装ではあの“壁”を破れる、という結果は出てこなかった。

そうすると、ターゲットを倒すためには、“壁”の内側に入るしかない。ガラス板のような“壁”にしても、六角水晶のような“壁”にしても、ターゲットとの間には空間がある。

だが、その狭い空間で有効な武器、超振動カッターは、左右ともさつきの衝撃で破損し使えない。レーザーは出力が低下しているためダメージに？がらない。ミサイルは、距離が近すぎるために照準がつけられない。

その間にも、ターゲットは近づいてくる。とどめをさすつもりだろうか。

地面に臥せった状態からナミが上体を起こしても、そのターゲットは気にもせず近づいてくる。

そのターゲットが2 mまで近づいた時。ナミは、最後の行動に移った。

顔を上げた直後、脚と背中ブースターを噴射して飛び出したのだ。体を起こしたのは、その予備動作だった。

「なっ!？」

そのまま立ち上がると思っていた鏡介には、完全に不意打ちになった。その結果、バリアーを張るのが遅れてしまった。

「どわあ!？」

そして、ナミの体当たりを食らってしまった。額から突っ込んできたためアンテナが刺さるようなことはなかったが、それでも200 kg近い金属の塊がぶつかったのだ。いくら鏡介でも平気ではいられなかった。

ずぞぞぞぞぞぞ。

ひっくり返った鏡介は、同時にナミに捕まえられて、アスファルトの上を数m転がった。

「つてえつ、おまえもしつこい奴だな、まだやるつもりかよ!？」

鏡介はナミにその声をかけるが、ナミは答えない。かわりに、鏡介にしつかりと抱きついたまま、非常に不穏なことを口にした。

「自爆装置、オン。今から1分後に爆発します」

それと同時に、横1本線だったゴーグルの目が、60という数字に変わり、それが59、58、57、とカウントダウンを始める。

突然のことに、鏡介は驚いた。このロボットは、はっきりと“自爆装置”と言ったのだ。

さすがに、この状態ではバリアーが展開できないので、自爆したらいかに鏡介といえどもただではすまない。そのためなんとかして引き剥がそうとするが、自分を抱きすくめる腕の力は非常に強く、また足が潰されてしまいそうに重いため、持ち上げるどころかびくともしない。

そうやってあがいている間にも、カウントダウンは進む。

やがて30秒を切ると、鏡介はあきらめたように引き離そうとするのを止めた。

そして、代わりに、独り言のようにこう言った。

「自爆してまで相手を倒そうって気概はたいしたもんだけど、俺を殺しても西園寺将仁を殺したことはないぜ」

その瞬間、ゴーグルに浮かぶカウントダウンが止まった。

「……説明を、希望します」

「つまり俺は、西園寺将仁じゃないってことさ。考えてもみる。生身の人間が、バリアを張ったりビームを撃ったり出来ると思うか?」「……それは、あなたは、人間ではないのですか」

「ああ。俺の名前は、加賀見鏡介。真田将仁改め西園寺将仁に受け継がれた物部神道の力を受けて、鏡から擬人化した存在だ」

鏡介の言葉に、ナミのゴーグルに浮かんだ数字にノイズが走る。

「……………擬人化……………データにない言語」

そして、ぽつりとそうつぶやいた。

「簡単に言えば、物に人の姿を与えて動かすんだ。例えば俺は、将仁さんが映った鏡が人の姿になったもんだ」

「……………西園寺将仁は、無機質な存在を、人間に変えるのですか」

「それこそが、将仁さんが受け継いだ、物部神道の力さ。本来は命を持たない道具に魂を与え、そして人の姿を与える。俺はその力でこの姿を得た」

すると、ナミは、何かを考えるように黙り込んだ。黙っただけではなく、まるで電源が落ちたように、ゴーグルが真っ暗になった。

「……………えーと、もしもし？」

機能停止したのかと思い、鏡介はナミに声をかけ、ヘッドギアに手をかけて揺すった。

すると、ナミのゴーグルに緑色のラインが走った。数字が出ないということとは、自爆は中止したのだろうか。

「えーと、悪いけど、離れてくれないかな。重いんだけど」

その鏡介の言葉を受けて、ナミは腕を離れた。

すかさず、鏡介は近くにあるカーブミラーに視線を向ける。

そして、鏡の中に西園寺の屋敷を見つけた鏡介が、通学用力バンを拾うために立とうとした、その時だ。

「加賀見鏡介」

不意に、ナミが声をかけてきた。

「まだ、やるのか？」

素早く立ち上がった鏡介が身構える。変な形でナミの重量を受けていた足が痛んだが、気にしている場合ではない。

だが、身構えた上でナミを見ると、ナミは手も足も向けず、鏡介に

顔だけを向けている。

「……………私は……………私は、本物の、西園寺将仁との面会を希望します」

そして、唐突に妙なことを口走った。

「なに？」

「私は、人間に、なりたい」

鏡介は、耳を疑った。

どこかのSFのように、ロボットが、人間になりたいと、言っているのだ。

「人間になりたいだ？なんでまた」

「私の、夢です」

「ゆゆゆ、夢え？」

そして今度は、夢とまで言い出した。

「現実とかけはなれた考え。だが将来実現させたいと空想する願い人はそれを夢といいます。そのフロアに当てはめると、私は、自分が人間になることが自分の夢であると言えます。」

そして、それが叶う機会があるならば、その状況を経験することを、私は希望します」

だが、淡々と語るナミの言葉は、鏡介には真剣なように聞こえる。

「だから、私は、真田将仁との面会を希望します」

鏡介は、悩んでしまった。なにしろ相手は、さっきまで真田将仁という人間を抹殺するためにレーザー兵器やら誘導ミサイルやらを遠慮なく使った、戦闘兵器だ。そんな相手を将仁の前に連れて行って、その場で命を狙われたら、目も当てられない。

だが同時に、「人間になりたい」という言葉には、同じ立場を経験した身には、切実なものに思えた。ただの鏡だった時には、人間のように生活することなど夢にも思わなかった自分が、人の姿を得、人として生活する今の状況は、何物にも代え難いと思っている。特にナミの場合、かなり人間に近い姿をしているから、余計にそう感じるのだろうか。

「……………会わせてやってもいいが、条件がある」

しばらく考えた後、鏡介はそういう答えを出した。

「その条件とは何ですか」

すると、すかさずナミが聞き返してくる。その様子は、ナミがどれだけ真剣に人間への憧れを抱いているかを感じさせるものだった。

「今後2度と、将仁さんを襲わないこと。それが条件だ。できないなら、将仁さんに遭わせるわけにはいかない」

「……………理由の説明を希望します」

「理由なんて決まっているだろ、将仁さんのおかげで俺はここにいらる。もし、お前が将仁さんを少しでも傷つけたら、その時はお前が軍事最高機密だろうと何だろうと、スクラップにしてやる」

鏡介が、ナミのゴーグルに突き立てるように人差し指を差す。

「……………理解しました」

その気迫に圧倒されたように、ナミが答えた。

15・とうとう来ました西園寺本家 その22

駅前広場の片隅にある電話ボックスで、鏡介がどこかに電話をかけている。

「……はい。んじゃ」

やがて、黄緑色の受話器をフックに戻すと、電話ボックスから鏡介が出てきた。

そのボックスの前には、軍服の上からロングコートを羽織り、頭の左右に角のようなアンテナを生やし巨大なゴーグルで顔を半分隠した人物が微妙な猫背で立っていた。

ナミだ。鏡介が将仁と連絡を取り合う間、そこで待っていたのだ。

「待たせたな」

「待機時間、5分27秒」

「それは、待たされたって、言いたいのか？」

「待機状態が5分27秒だったというだけです。それだけバッテリーを消耗しました」

ナミの返事は機械的だ。人間に近い形をしているとはいえ中身は機械なのだから当然だが。

「……まあ、それはいい。それより、お前、西園寺の屋敷がどこにあるか、判るか？」

「それは、住所という意味ですか？」

「んー、住所でも何でもいいけど、そこまで1人で向かってもらいたいんだ」

「……説明を要求します」

「あー、まあ色々あって、俺達は今、将仁さんも含めて、西園寺本家の屋敷に住んでいるんだ。それで、場所が判るなら、俺が案内するよりも、空を飛んで行ったほうが早いんじゃないかと思って」

実際は、鏡介は西園寺の屋敷の場所も住所も知らないため案内ができない、そのための口実だった。

「理解しました」

だが、ナミにとっては都合が良かった。住所はGPSのデータを取り込んで割り出せば済むことだし、空を飛べる彼女は、一人であれば地上の道を通らなくともそこへ到着できるからだ。そうになると、徒歩の人間に案内されるより確かに早く到着できる。

「あなたはどうかやって移動するのですか」

「心配しなくても、俺には俺の足があるから大丈夫だ。お前こそ、約束は守れよ」

「了解しました」

そしてすぐに解散し、というわけにはいかない。なにしろここは駅前、人の目が沢山ある。

そのため、二人はすぐその場を離れると、人気のない路地へと入っていった。

しばらくの後、轟音と共に翼を広げたナミが空へと飛び立った。

15・とうとう来ました西園寺本家 その23

離陸してからおよそ30分。市街地から少し離れた山林地帯の上空を飛行していたナミの視界に、塀に囲まれた広い庭と、その中に立つ建造物が入ってきた。

鏡介に指示された、西園寺本家の屋敷だ。窓に光が見えるので、無人ではないとわかる。その時だ。

ナミのレーダーが、空を飛んで自分に近づいてくる何かをキャッチした。

大きさはほぼ人間大。だが、それを改めて確認したところ、ナミはレーダーのバグを疑った。

なぜならそれは、明らかに人間だった。しかも、飛行するための道具らしきものを一切身につけていない、本来飛行能力を持たない、生身の人間。それが、まっすぐ、自分に向かってくるのだ。

ぎゅおっ！

そしてナミは、その『何者か』と、空中ですれ違った。その風圧で、ナミは空中で若干姿勢を崩してしまった。

なんとか体勢を立て直した時、今度は自分の下に、その『何者か』が後ろから現れ、空中で並んだ。

映像で確認できる状態になって、ナミはさらにバグを疑った。

その人影は、深緑色の羽織袴を着込んだ、人間の女性だった。

「貴様が、ナミとやらか！」

空を飛ぶ女が、自分と平行に並びながら、ナミに声をかける。

「はい。私は望月ナミです」

「我の名は中嶋紫電、零式艦上戦闘機二一型の擬人化である！上官の名により、貴様を我らが屋敷まで案内することになった！」

擬人化、という言葉を他人から聞くのは、鏡の擬人化と名乗る加賀見鏡介に続いて2回目だ。ということは、この女も、西園寺将仁の

力を受けたのだろう。

「ついで来るがよい。着陸のための設備などはないが、貴様なら問題なかるう」

そう言うなり、紫電と名乗るその人物は、体を翻して急降下をはじめた。

向かう先は、屋敷の庭らしい。そしてその庭に、動く光の点がいくつかあるのを、ナミは検知した。

建物の光とは別になっているので、おそらく誘導灯のかわりなのだろう。

「目標確認。着陸します」

すでに小さくなったシデンを追って、ナミも降下を始めた。

適当な高さまで降下してから、背中の翼と足のブースターの角度を調整して頭を上にする。そして足と背中のブースターを調整して体勢を立て直し、ホバリングしながらゆっくりとその光の近くへ降りていく。

近くまで来てようやく把握できたのだが、光を発しているものは、それぞれが人の形をしていた。

その1人は、体のラインがはっきり判る、いわゆるツナギという類の衣服を身につけている。だが、なぜかその目が光っている。比的表現ではなく、100m先でも照らせるほどに明るい光を放っているのだ。

もう1人、いや、人と言うには大きすぎるそれは、身長が5mほどもある、アニメかSF映画に出てきそうなロボットだった。その胸には車のヘッドライトのような光源が左右にある。ちなみにその頭の上には、さっき上空でナミを案内すると言った女、シデンが座っている。

その2つの光源は、ゆっくりと降りてくるナミに光を向けてくる。その様子は、ちょうど舞台の上からワイヤーで吊るされた役者がスポットライトに照らされているように見える。

いずれも、ナミのデータベース内には存在しない、情報の組み合わせがおかしいとしか判断できないものだ。

やがてその光の中でナミが芝生の上に降り立つと、がしががしっという音と共に背中の翼がたたまれて背中へと消えていく。

すると、今度はロボットのほうガギガゴリゴリという音と共に潰れ始めた。そしてそれはほんの数秒後にはクラシカルな外観の自動車になっていた。突然だったのか、ロボットの上であぐらをかいていたシデンがバランスを崩してむこうに落ちていった。

「あんたが、ナミかい？」

ロボットから自動車への変形を眺めていると、もう1人の目から光を放つ人物が声をかけてきた。

少々低いが、女性の声だった。

「はい。コンバットドールタイプ73、コードネーム「望月ナミ」は私に違いありません」

「そうかいそうかい。あんたの名前、望月ナミっていうんだ」

目を光らせた人物が、その光で自分を照らしながら近づいてくる。

ふと、ナミの電子頭脳に、その声の声紋が類似する記録を思い出した。

「・・・1日22時間18分44秒前に該当する音声を確認。その人物は時速83kmで走行して跳躍、23mの跳躍を行い、着地と同時にアスファルトに半径3mの放射状亀裂を発生させる」

「良く覚えてんなあ、あたしゃ自分がやったことだつてのに全然覚えてねえわ」

「あら、ヒビキ、あんた知り合い？」

そう言いながら、車から降りてきた人物が声をかけてくる。こちらも女性だ。しかもこちらは、女性だと言うのがよく判る格好をしている。

「あー、知り合いってワケでもねえが、一昨日、将仁たちに何かろくでもない事をしようとしてさ。そこにあたしが駆けつけたら、そのまま飛んで逃げちまったのよ」

「へえ、こいつが」

そして派手な女はナミをじろりと睨みつける。すると、さっきまでその女が乗っていた車がまた轟音と共に変形をはじめたかと思うと、今度はドアやらボンネットやらから銃身のようなものが出現し、さらに屋根に戦車砲のようなものが現れ、そしてその全てがナミに向けられている。

「おいおい、ちょっと待てよ。まあ確かに腹が立つことはやってくれたけど、一応は客なんだし」

「それもそうね。悪かったわね、機械人形さん」

派手な女はナミに向かつて少々いやみつたらしく言うが、ナミにはまだそれが理解できない。その後ろで、再び自動車が轟音を立てて変形し、砲身も銃身も全くないものに戻っていった。

「判ってないみたいだけど、まあいいわ。あたしは久留間メルセデス」

「よくないわあっ！」

そのとき、また別の声が出た。と同時に、自動車の後ろからひとつの人影が飛び出して来る。

「こらあ久留間あつ！我を振り落とすとは何事だ！」

シデンだった。どうやらそのまま地面に落ちたらしく、頭や衣服に芝屑などがついてる。

「そんなところに座っているのが悪いのよ、だいたいあんたは飛んで避けられるんじゃないかな？」

「突然で対処できなかつたのだ！」

そして、噛み付いてくるシデンにメルセデスが受ける形で口論をはじめてしまう。

「やれやれ、ふたりともむきになるような事じゃねえだろうに」

その2人に、目からの光を向けていたライダースーツの女が、自分の頭を掻きながら呟くと、ナミのほうに向き直った。

「あたしは、川杉響。あいつらと一緒に、おめえを迎えて来いって言われてんだ」

そしてヒビキは、口論を続けているシデンとメルセデスに声をかける。

「ほら、そろそろ行くぜ。喧嘩はそのへんにしときな」

その声に2人は振り返る。

「そ、そうか、ならば我は先に行って知らせて参る」

ばつがわるかつたのか、シデンは早口にそうまくし立てると、屋敷のほうへと文字通りすっ飛んで行く。

「悪かつたわね、口論なんかしちやって」

「誤んなくてもいいって」

「そう？じゃあ、待たせるのもアレだし、さっさと行きましようか」
そして2人はナミに背を向け、屋敷の方向へと歩いていく。

ナミは、足の裏から空気を噴射させて地面から少し浮かび上がり、
角度調整バーニアを後ろに噴出して、ホバークラフトのように進む。
実は、ナミは非常にゆっくりとしか歩けない。人間が無意識にとっ
ているバランスを逐一計算してそれをフィードバックさせるとい
うプロセスを秒単位で行わなければならず、どうしても遅れてしま
うのだ。

最初は驚いていた2人だったが、すぐ前に向き直ると、「ちゃんと
着いて来いよ」とだけ言ってまた歩き出した。

「お前、本当にそんなことを言ったのか？」

ホールに向かう階段の上で、俺は正面のドアを眺めながら、横に立つ鏡介に声をかけた。

「正面から『人間になりたい』なんて言われたら、断れなかったんすよ」

微妙に苦い顔をしながら、鏡介が答える。

「そいつ」というのは、下校時に鏡介を襲ったらしいロボット、望月ナミのことだ。俺たちの前に現れるたびに武装を増やしていつている「そいつ」と正面から戦って勝利を収めたという鏡介も凄いが、俺は「そいつ」がこの屋敷にやってくるということに驚いた。

なにしろ、そいつは今回、俺を殺すために現れたのだ。そのために自爆までしようとした奴が来るというだけで、とんでもない話だ。

「鏡介！そんな危険因子、なぜ再生不可能になるまで破壊してこなかった！それどころか、将仁様の近くまで案内するなど、言語道断ではないか！」

「ナミ」がうちに来る、という話を鏡介から聞かされた直後、目の色を変えて部屋に飛び込んできたのは、あかりだった。あかりはこの屋敷の化身だけあって、どんな話でもすぐ聞きつけてあらわれる。特に今回は俺の身に危険が及ぶかも知れない話だから余計なのかもしれない。

だが、あかりのその逆上つぷりを見て、俺は逆に「そこまで言わなくてもいいんじゃないか」と思ってしまった。

「そう目くじら立てるなって。結局そいつは鏡介のバリアーを破れなかったんだから、最悪、鏡介の裏にいれば大丈夫だろ」

ミサイルの直撃にも耐えるバリアーだなんて鏡介はただだけ強いんだ、なんて話は脇に置いて。

「それに、人間になりたがるロボットなんて、見てみたいじゃない

か

というのが正直な俺の気持ちだ。そんなのはマンガかアニメかSFでしか見たことがない。

うちのモノたちは全員が無機物から成った連中だが、その際に相手の意見なんぞ聞いているわけがない（御守は例外中の例外）ので、自分から人間になりたいと主張する奴ははじめてなのだ。

そのことを話すと、あかりはちょっと不満げながらも納得してくれた。

「ただし条件があります。ソレと面会するのは、屋敷の中にするごと。屋敷の中であれば私のテリトリー、機械人形ごときの好きにはさせません」

なんか最初からケンカ腰だ。鏡介を俺だと思つて襲つた、その時点であかりはそいつを敵だと決めてしまつたらしい。

そして、あかりがみんなに一齐にそのことをふれ回つたため、うちのモノ総出で、正面玄関ホールで出迎えることになってしまった。

この屋敷は、さっきはわからなかったのだが、正面玄関があるホールは2階まで吹き抜けになっていて、1階と2階を繋ぐ階段が正面玄関の真正面にある。そして天井からはきらびやかなシャンデリアが下がっていて、正直言つてどつかの映画セットみたいで俺が住むには似合わない感じた。

そして俺はその階段を上りきつたところに鏡介と並んで立っていて、下の階には他のモノたちがずらり勢ぞろいしている。もつとも、ヒビキとメルセデス、それからシデンは「そいつ」を迎えるために外に出ている。

ちなみに、下に勢ぞろいしている連中はお互いにおしゃべりとかをしているが、何を喋っているのかはよく判らない。声は聞こえるのだが、あまりに色々入り混じっているので何を言っているのか判らないのだ。まあ判つたところでガールズトークについていかなれない自信があるんだが。

そのときだ。大きく開けてあつた天窓から、何かが飛び込んできた。

「来たぞおおおっ！！」

そいつは、飛び込むや否やホールの中を旋回しそんなことを叫ぶ。シデンだ。やがてシデンはホールのご真ん中に着地すると、階段の上にはいた俺たちに大声でこう叫ぶ。

「敵襲だあああっ！総員戦闘配備しろおっ！」

いきなり戦闘配備と言われて、階下は騒然となる。そりゃいきなり戦闘配備なんていわれてもとまどうわな。

「シデンさん」

そのシデンに声をかける奴がいた。最初からホールのご真ん中に陣取っていたあかりだ。

「客人をお迎えるのは私の役目。少々、おとなしくしていただけないでしょうか？」

「なっ！？」

シデンが何か言おうとした時には、シデンは両腕をどこからか沸いてきたあかりズにがちりと捕まっていた。

「お、おいつ、ちよっと、待てえ！」

そして、じたばたと暴れるシデンをあかりズが数人がかりで連れて行く。

シデンのやつ、別に悪いことはしていないのになんで連行されなきゃならないんだ、と声をかけようと思ったたら。

「来ました！」

狙ったようなタイミングで、一人残っていたあかりの音がホールに響いた。その一言でざわついていたホールが水を打ったように静まり返る。

おかげで、俺も言いそびれてしまった。がごん。

全員の視線が注がれる前で重厚な音が響き、正面玄関のドアがひとりでに開いていく。

そして。全員での出迎えをしたメインゲストが、ゴオオオという音と共にホールに入って来た。

見間違えようがない。目どころか顔半分を隠しそうなゴーグル。ヘッドギアの左右から生えたツノみたいなアンテナ。季節外れのロングコート。そしてメカメカしい足。この前、誘拐犯と勘違いしてケイたちを*しようとしたあのアンドロイド、ナミに間違いない。その後ろを、監視するようにヒビキとメルセデスがついてくる。

「ようこそ。お待ちしていました」

あかりが、全く臆することなくそいつを出迎える。

噴射音らしいゴオオオという音が静まり、ナミが地面に降り立ったその背後で、テルミとクレアが扉を閉じると、そのドアの前に立ちふさがる。

うちのモノたち（妖怪2人と絵1枚を含む）にぐるりと取り囲まれる形になるが、ナミは全く慌てた様子もなく、まわりを見回すように首を機械的に動かしている。

と、その首が少し上に動いて、俺らを見た。あのゴーグルで本当に見えるのかよく判らないが、少なくともゴーグルは俺のほうを向いている。

「本当に来たな」

そんな言葉が、口をついて出る。

だが、その後、ナミが全然動かなくなった。バッテリーでも切れたのだろうか。

「どうしたんだ、あれ？」

「バッテリーでも切れたんすかねえ？さっきレーザーとかばんばん撃ってたし」

思わず鏡介と顔を見合わせる。鏡介の奴も俺と同じことを考えていたらしい。

とにかく、あっちが動かない以上はこっちから近づかなきゃならない。俺はそのナミの前まで続いている階段を下りることにした。

鏡介も、俺と並んで階段を下りる。なんかもう1人の俺が並んでいるみたいだ。

まあそれはそれとして。近くまで来てみると、ナミの顔はちゃんと

俺たちのほうを向いていた。首が動くつてことは、バッテリー切れとかじゃないようだ。

「おまえ、人間になりたいんだってな」

声をかけると、そいつは我に返つたみたいに動き出した。と言つても、ゴーグルに映る緑のラインが一瞬消えてまた点灯しただけだが俺の声は聞こえているらしいので、もうちょっと声をかけることにした。

「なんで人間になりたい？」

「私の、夢、です」

すると、間髪を置かず、そんなおよそロボットらしくない答えが返つてきた。さつき鏡介から話は聞いていたが、改めてそう言われると驚き以外の何物でもない。

「『家族が*されそうになっているのを見て、黙っていられるか！』
2日1時間32分53秒前、あなたが私の頭部を殴つた11秒後に発した言葉です」

俺たちの驚きを他所に、ナミは俺の声を真似（録音していたのかも）しれないが）してそんな事を高らかに述べやがった。

なんとというか、改めて言われると恥ずかしいセリフだ。

気がつくつと、俺の隣にいた鏡介も、ナミの横に立つて目を光らせていたヒビキヤシデンやメルセデス、そしてそれを取り囲んでいたモノたちのほとんどが変にざわつき始めた。

「その言葉を聞いたとき、私の中に、不可解なノイズが発生しました。理由は解析を重ねても未だ不明ですが、私はそのノイズを良いものと判断し、きつかけとなるその言葉をメモリーから消去してはならないと判断したのです。

その言葉を繰り返し再生し、私はキーワードを見つけました。それが、家族という言葉でした」

だが、ナミは機械らしく動揺も何も見せず、機械的な抑揚の乏しい声で、ただ淡々と言葉を続ける。言っている内容が妙に人間くさいだけに、余計にナミの口ボつばさが強調されて感じられる。

「それを、クローディア様にお聞きしたところ、『ご自分で考えなさいっ!』と言われてしまいました。そのため、私は自分で考え、人間になればクローディア様の家族になれると結論づけました」

「お前、クローディアの家族になりたいのか?」

自分でも動揺しながら、ナミに聞いてみる。すると、ナミは用意していたようにこう答えた。

「わかりません」

と。そして、少し黙ってから、少しポリウムを落としてこう言った。

「私の電子頭脳には、クローディア様の命令に従うプログラムが組み込まれています。ですが、それ以外の何処かから、クローディア様に仕えることを優先する信号が出ているのです。どれだけ解析しても、その信号が何処から出ているのかは突き止められないのです。……今の私は、どこか壊れているのかもしれない」

その様は、しょんぼり落ち込んでいるようにも、自分を責めているようにも見えた。

そして、なんだかよく判らない答えをするそいつが、俺には、すごく人間くさく感じられてしまった。

「望月ナミ」

かわいそうになって声をかけると、ナミは顔を上げた。

「ひとつ言っておく。俺には、お前の希望を完全に満たすことはできない」

そこまで言っつて、ちよつと失敗したかも、と思った。話が違つとか言っつて暴れ出したら、まあまず助からないだろうからだ。そしてそれはうちのみんなも同じだったらしく、一斉にざわついた。

幸いにもナミは聴きわけが良かった。暴れることもなく、じつと俺のほつを見ている。

「俺ができるのは、お前にかりそめの体と命を与え、擬人化させることまでだ」

ナミは、判っているのかいないのか、やはり反応を見せない。なん

か、あかりやメルセデスが爺さんだった時みたいだ。

「それでよかったら、お前に力を使うことができると思うが、どうする?」

すると、ようやくナミは返事をした。

「私は、力の行使を希望します」

相変わらずの無機質な声だが、なんとなくそこに意思があるように感じた。

念のため、横にいる鏡介に目配せをする。鏡介は、俺の意図を汲み取ってくれたらしく、小さく頷いた。

「じゃあ、手を出してくれ。この力は、相手に触れないと効果が発生しないんだ」

「判りました」

ナミは、素直に手を出してくる。SF映画で出てくるような、金属的な光沢を放つ手だ。だがとても繊細な感じがするので、重労働には向いていないような感じがする。

握ると、金属的な冷たさが手のひらから感じられる。本当にメカなんだなーと思う。

「頼むから、お前、これから俺のことを襲うのはやめてくれよな?」と、声をかけた瞬間。

今日何度目だ、とちょっとうんざりしてしまうほどの光が、あたりを包んだ。

15・とうとう来ました西園寺本家 その26

頃合を見て、目を開く。

「あ、あれ？」

そして、目の前にいるはずのナミの姿を見て、俺は愕然とした。ものすごい美人になっていたとか、とんでもない姿になっていたとかではない。

ぶっちゃけて言うと、『何も変わっていない』から驚いたのだ。相変わらず、頭にはどでかいゴーグルと鳥の羽にも耳にも角にも見えるアンテナがついたヘッドギアをつけているし、コートも、その下の軍服も、ごつつい足もそのまま残っている。

まさか、失敗！？15回目にして初めての失敗なのか！？

「!？」

我に返るや、ナミは俺の手を振り解きやがったのだ。

そして、自分の頭に手をやる、もちろん、ヘッドギアがある。続けて下を見ると、相変わらずごつついままの足が目に入る。

「~~~~~」

と、そのナミがぷるぷると体を小刻みに震わせはじめた。

「.....あ、えーと.....」

「西園寺将仁おおおっ！」

と、いきなりものすごい大声で怒鳴りやがったのだ。

あまりに突然だったので、ちよつとだけ後ずさってしまっ。

すると、ナミは拳を振り上げてこう叫んだ。

「これはどういうことですか！何も変わっていないではないですか！私が、私が、どれだけ期待したと思っっているんですか！」

「そ、そんなこと言われても、俺だってこんなケースは初めてで

「言い訳無用！」

俺の言い分を全く素振りすら見せず、ナミは手のひらをこつちに向ける。って、こいつの手にはレーザー砲が装備されてるじゃねえか

!?

なんて思った時には、そいつの手のひらは確実に俺に向けられていた。

「きゃあっ!?!」

次の瞬間。ナミは、うちの数人のモノたちに取り押さえられていた。

「だ、大丈夫ツスカ!?!」

ナミが押さえつけられるのとはほぼ同時に俺の前に立った鏡介が、バリアーを前に立てながら俺を見る。

「あ、ああ」

そう答えながら、自分の体を見る。どこにも痛みはないし、焦げた跡もない。もし撃たれていたら、レーザーは光だから、一瞬で届くはずだ。

と、その俺の足元に、何かが転がってきた。

拾って見ると、それは、でかいゴーグルと角みたいなアンテナがついたヘッドギアだった。ちょうど、ナミの頭のメカメカしい部分だ。それがひとかたまりになって転がってきたので、最初は、ナミの頭が外れたのかと思った。

まさか壊れたか!?!と思ったときだ。

「離せー!?!」

聞いたことがあるようなないような声が聞こえた。

そこには、数人のモノたちに完全に押さえ込まれた、クレアより明るめの銀髪の女の子がいたからだ。見覚えのないその子が、聞き覚えのある声で喚いている。

どうやら、失敗ではなかったらしい。

「えーと、まあ、離してやってくれ」

俺が声をかけると、その子を押さえつけていたモノたちが納得いかないような表情をしながら彼女の上から退いていく。やがて最後までその子の右腕を押さえ込んでいたシデンが離れ、その女の子はようやく開放された。

「!?!」

その子は、右腕が開放されるや、がばつと起き上がり手のひらを素早く俺に向ける。

「……………あ、あれ？」

だが、レーザーが出るどころか何も起きない。

「ふんっ！ふんっ！」

その子はおなじような動きを何度か繰り返すが、何も起きない。

そして彼女は、自分の右手を自分の顔の前まで自分の手を持って行き、そして目をひん剥いた。

そして。俺が手に持っているヘッドギア（というかヘルメットというか）と自分の手を何度も交互に見返すと。

なぜかふるふると震えだし。

「う、うう、うわあああああああああああああああ！」

いきなり、大声で泣き出した。

……………どうすりゃいいんだ。

いきなりな展開に、俺は呆然とするしかなかった。

「ふう」

あの後、なんやかんやしているうちにうちのモノたちと打ち解けたナミをうちのモノたちに任せて、俺はあてがわれた俺の部屋に引込ませてもらった。

なんか、今日は色々あった。体のほうはそれほど疲れていないが、精神的にはすごく疲れたような気がする。

なにしろ、朝からいきなりリムジンに乗って大豪邸への引越し、二次元になった先代にして俺の生みの母・西園寺静香との対面、先代からのモノたちの変身、そしてアンドロイドの擬人化だ。本当は鏡介が学校で何をしたかも聞かなきゃならないんだが、その鏡介は万が一の時のためモノたちと一緒にナミのところにいる。

「優しいのね」

声がある。そっちにあるデスクの上に油絵が立てかけられている。

先代・西園寺静香の肖像画だ。さっき、あかりが置いていった。

「あの子、あなたの命を狙っていたんでしょ？それを許してあげるだけじゃなくて、望みを聞いてあげるなんて」

「命を狙われたのは、これが初めてじゃないしな。恩を売っておいたほうが後々有利になるし、それに」

「それに？」

「たった一人で敵陣に乗り込むなんて、いい度胸してるなと思ってさ」

「感動しちゃったのね」

「………そうなのかもな」

なんかそう言われると、認めるのがちよつと恥ずかしい。

まあ確かに、心配しなかったわけではない。今ではゼロになったが、あかりが言うように、「夢」という言葉がフェイクで、本当はここで自爆するつもりだったらって可能性も、なかったわけではない。

「でもまあ、ロボットは嘘をつかないって言うし、それに、夢が叶うから来た、と言われたら、追い返すのもかわいそうだろう」

そして、なんとなく、自分を嘲笑してしまふ。

「やっぱり、俺って甘いよなあ」

「……………それは、違うと思うな」

すると、肖像画は意外なことを言った。

「それは甘さじゃなくて、優しさだと思っわ」

「へっ!?!」

つい、変な声で返事してしまふ。

「常盤からも聞いたわ。あなたは、あの子たちにも平等に接し、叱るときは叱り、許すときは許しているって。甘いだけだったら、叱ることはできないものよ」

肖像画は、妙にしみじみした口調でそう述べる。

「あなたを捨てた、私が言っつていい台詞じゃないけれどね」

そして、自嘲気味にそうつぶやいた。

「その時はそうするしかなかったんだからしょうがないさ。おかげで俺は今生きているんだし」

「ふふ、そういうことが普通に言える、その強さが優しさの元かしら」

そう思うのはただの親バカだ。俺はそんな強くもないし優しくもない。

でも、まあ、ここで言うぐらいなら許してやってもいいか。やれやれ、どっちが親かわかんねえな。

そんなことを考えていたときだ。

こんこん。誰かが部屋のドアをノックした。

そして、がちゃ、とドアを開けて入ってきたのは、礼服を着て髪を後ろで束ねた女、あかりだった。

「将仁様、静香様。客人が、そろそろ帰るとのことです」

あかりが、恭しく頭を下げてそう報告する。

ああ、やっぱり帰っちゃうのか。なんか寂しいや。でもまあやっぱり、

モノの気持ちは持ち主に向くみたいだし、当然の反応なのかもな。

「あら、もうそんな時間？」

絵の人が、今気がついたように声をあげる。

「そんじゃ、見送って来るか」

俺が腰を上げると。

「あつ、ちよつと待って、私も行きます」

絵の人もそう言う。

「あかり？」

「はい、静香様」

そしてあかりに声をかけて、自分を額縁ごと持ってもらつ。

「客人は、玄関ホールでお待ちになっておいでです」

「ん、そうか。他の連中は？」

「皆さんも、お見送りするために集まっておられます」

「そつか。んじゃ待たせるのも悪いし、とつとと行くか」

あかりにそう声をかける。すると、返事かわりに、部屋のドアが勝手に開いた。

「どうぞ、将仁様」

ドアを開けてくれた別のあかりが、そう言って声をかける。

そのドアのむこうは、玄関ホールの真正面で、うちのモノたちが勢ぞろいしているのが見えた。

そして、勢ぞろいしたみんなの真ん中に、ヘッドギアを手に抱えたナミが立っていた。

「西園寺将仁様、そして擬人化の皆様、いろいろとお世話になりました」

ナミは、俺に気がつくのと、改めて俺に向き直り、ぺこりと頭を下げた。

「別に、泊まっていっても良かったんだぜ？部屋ならあるみたいだし」

「お心遣い痛み入ります。でも、あまり遅くなると、クローディア様がお休みになってしまいますので」

声をかけると、ナミは丁寧に返事を返してくる。

うん、なんというか、うちのテルミにも匹敵する礼儀正しい子だ。ただでさえ戦闘用アンドロイドなんていう男のロマンの塊だったのに、ますますあのワガママ傍若無人なクローディアの元へなんぞ帰したくないと思ってしまふ。でも、本人が帰ると言っている以上、無理に引き止めるのも悪いしな。

「まあ、何かあったら、また来てくれ。爆撃とかでなければ、歓迎するから」

「はい。そのときは、またよろしくお願いします」

につこり笑いながらそう答えると、ナミは持っていたヘッドギアをすぽっと自分の頭に被せた。

その直後。強烈な光が視界を覆い、俺は自分の目をおおった。

頃合を見計らって目を開けると、あまり変わっていない姿のナミがそこにいた。ただ、顔半分を覆うゴーグルにさっきは無かった緑色のラインが灯っているのが、ナミがロボットに戻ったことを物語っている。

「今日は、これで、失礼します」

そう言う声も、無機質な合成音に変わっている。

と同時に、ごうっという音と共に、風圧が俺たちに襲い掛かった。

ナミが、足からジェット噴射をしたらしい。その証拠に、ナミの体が床から1mぐらい浮かんでいる。

はた迷惑な突風の中心で、がしがしっという金属音と共に、ナミの背中にメタリックな翼が展開される。

「それでは、皆様。ごきげんよう」

そしてナミは、翼を広げきると、前も言ったようなセリフを口にす
る。

あんまりこの状況はご機嫌よくないぞ、と言おうとした矢先。

ナミは空中で方向転換すると、ひときわ大きく噴射して、大きく開かれた玄關からロケット花火のごとくに勢い良く飛び出して行った。

「遅いですわね・・・」

ネグリジエを着たクローディアが、デスクに向かって何かを書いている。

日記だ。つけることを寝る前の習慣にしている彼女は、その日にあったことをすらすらと書いていく。だが、今日は彼女にとって腹が立つことがあったため、時々ペンを走らせる手が止まっては、せっかく整えた見事な金髪をかき乱している。

「クローディア様」

その彼女の耳に、ふと、聞き覚えのある女の声が聞こえてきた。

ペンを置いて振り向くと、そこには、物々しい格好をした人影が立っていた。

「ナミ？こんな夜更けに何をしていますの？充電は？」

大きなゴーグルとに角のようなアンテナがついたヘッドギアで頭を覆い、軍用コートを羽織ったその姿は、クローディアにとってはよく知っている姿だ。だが同時に、「今ここにいること」に違和感を感じていた。

「申し訳ありません」

だが、その人影は、矢継ぎ早に投げかけられる質問をさえぎると、クローディアの前に膝をついて申し訳なさそうに頭を下げた。

「コンバットドール73号、望月ナミ、西園寺将仁の成敗という命令の遂行に、失敗しました」

「なんですって!？」

その報告を受けて、クローディアはがたんと椅子を跳ね飛ばすように立ち上がった、その顔はうつすらと青ざめており、ナミの言葉が悪いほうへ予想外だったことを表している。

そして、立ちくらみでも起こしたように額に手を当てると、崩れるように椅子に座り込む。

「クローディア様!?」

「・・・・・・・・なんということですよ・・・・・・・・物部神道が持つ力は、最新兵器をも超えると仰いますの・・・・・・・・?」

がっくりとうなだれたまま、クローディアはぶつぶつと小声で何かをつぶやく。余程シヨックだったのだろう。

その姿を見て、一度は顔を上げたナミもまた頭を垂れた。

「・・・・・・・・私は、物部神道の力によって作られた存在と、対峙してきました」

だが、頭を下げたまま、独り言のように、ナミは口を開いて淡々と話し出した。

「実際に対峙して、実戦を経て得たデータを分析した結果、私は、それが今までのデータを覆すものと理解しました。そして、私は今後戦うのであれば、データの収集を優先させるべきと判断しました」

「・・・・・・・・それで?」

顔を向けもしなかったが、話は聞いていたらしい。クローディアは大儀そうにそれだけ口にし、話を促す。

「物部神道の力が具体的に起こす現象、そのサンプルの入手に成功しました。今回は、それを届けるために、命令に背き戻りました」だが、ナミの「サンプル」という言葉に、クローディアは反応を見せた。元々、西園寺の家に伝わる「物部神道」には大きな関心があった彼女だ。彼女の本当の望みは、魔法のような「物部神道」の力を手に入れ、それを好きなように行使することだったが、その一環として実際に何ができるのかを知るのも、彼女にとっては興味があることだった。

「・・・・・・・・その、サンプルは、どこに」

椅子の上から少し身を乗り出し、クローディアはナミに声をかける。どんなものが見られるのか、彼女は少しながら心が躍るのを感じていた。

それ対し、ナミはゆっくりと立ち上がると、まっすぐクローディア

を見つめ、こう言い切った。

「クローディア様の目の前にいます。…………この私が、サンブルです」

そして、自分の頭部を両手で掴むと、何のためらいもなく、それを上に持ち上げた。

クローディアの記憶の中では、それは頭部と一体になっていて外れないはずのもの。だが、クローディアの目の前で、頭の上半分がまるでヘッドギアか何かのように抜けると、その下から明るい銀色の髪と緑色の瞳が印象的な、クローディアとほぼ同年代の女性が現れた。

「……………あ……………」

信じられない光景に、クローディアがぼかんと口を開けて硬直する。「物部神道の力は、無生物に人の姿を与え、擬人とするものでした。その力を受け、私は、人の体を得て参りました」

そして、クローディアの前でロングコートを脱ぐと、背中に備えられたブースターと一緒に外れる。

膝下のごつい脚部を引くと、引き締まってはいるが女性的なラインの脚が姿をあらわす。

そうして現れたナミの姿は、クローディアより少し大人びた雰囲気、紛れも無い一人の少女の姿だった。

「……………あなた……………人間になったと言うの？」

「申し訳ありません、クローディア様……………でも、私、人間になることが、夢だったのです。機械が夢を持つなんて馬鹿げた話かもしれません、少なくとも私は、人間になりたかった。

そうすれば……………」

「そうすれば……………なんですよ」

「……………もつと、クローディア様に近づけると、思って……………」

そして、ナミは床に両膝をつき、両手をついて、額を床にこすりつけるほどに深く下げた。

「こんな、クローディア様を裏切るようなことをしてしまい、申し訳ありません！こんな愚かな私を、お許しくださいっ！」
搾り出すように言うその姿は、二人の関係がどんなものを象徴している。

それを見たクローディアが、すっと立ち上り、静かにナミの近くまで歩いていく。

近くで見ると、ナミは小刻みに震えていた。それはまるで、追い詰められた小動物のように見える。少なくとも、その正体がジェット戦闘機をも凌駕する軍用ロボットとはとても思えない。

ナミに、少なくともロボットの時のナミにとって、クローディアは絶対な存在だとインプットされている。歯向かうことはおろか口を出すことも許されないとして、今のナミにも記憶されていた。

「ナミ」

クローディアが声をかけると、ナミはびくつと体を振るわせる。

と、クローディアがそのナミの前で膝をついた。そして、かたかたと震えているナミの肩に、優しく、手を置いた。

「顔をお上げなさい、ナミ」

そして、さっきまでとは打って変わった優しい声をかけた。

ナミが顔を上げると、クローディアはとても穏やかな表情でナミを見ていた。

「この程度のことであなただを責めるなんて、私は、そこまで心の狭い女ではありませんわ」

「……クローディア様あ」

「あなたは、それが一番良いと思ったのでしょうか？もっと、自信を持ちなさい」

そして、にっこりと微笑む。

その瞬間、ナミの中の何かが弾けた。

「クローディア様あああああー！」

そして、クローディアに飛びつくと、まるで子供のように泣き出した。

いきなり抱きつかれ、一瞬驚いたクローディアだったが、すぐに穏やかな表情に戻ると、妹でもあやすかのようにナミを抱きしめ、優しく頭を撫でた。

15・とうとう来ました西園寺本家 その28（後書き）

どうも、作者です。

第15章、西園寺本家初日編はとりあえず今回で終了です。

新しいキャラがいきなりいっぱい出てきたので作者もちょっと混乱してしまっただとか旧キャラの出番が非常に少なくなってしまうました。

特に、ファンの多いクリンの出番がほとんどなかったのはめずかったかなとちょっと反省。

さて、次の連載までしばらく間が開きますが、よろしくお願いいたします。

16・新旧おやくだち合戦 その1

9月29日

「将仁様」

なんか俺を呼ぶ声がある。

「将仁様、朝です。ご起床ください」

……この声は、あかりか。

信じられないぐらいに豪華なベッドの中で毛布を被った中で、そつと腕時計のライトを点ける。

……って、おい、まだ6時前じゃねえか。学校が始まるまで3時間あるぞ。

というわけで、あかりの声を聞き流して二度寝することにしたのだが。

「将仁様、朝ですよ。もう太陽は昇ってますよ」

あかりは、しつこく俺を起こしに掛かる。でも、声をかけてくるだけだから、無視すればこっちの勝ちだ。

「将仁様、昨日までとは場所が違うことをお忘れですか？」

「」

……なんか、声が増えてないか？

「はやく起床されないと、遅刻致しますよ？」

「」

……間違いない。増えてる。

「将仁様は、皆勤賞を狙ってらっしゃるのでは

？」

「だーーーーーっ！」

思わず毛布を跳ねとばしてしまう。1人だと思っていたことのない声でも、それが増えるの問題だ。それだけポリウムも大きくなるし、いろいろな方向から聞こえるようになる。

そして案の定。俺のベッドのまわりは、同じ顔・同じ服装・同じ髪

型の、10人ぐらいのあかりに取り囲まれていた。こいつはこういう芸当ができるんだっけ。

「……………おはようございます、将仁様」「……………」

その10人のあかりが、一斉にそう言うてにっこりと微笑みかける。うん。これが1人か、せいぜい2人だったら、いい気分になるんだろうが、10人で一斉、というのは正直いただけない。だってパニック映画でしかお目にかかれないう光景だもん。

「……………将仁様、顔色が優れないようですが、気分が優れないのですか?」「……………」

うん、顔に出たらしい。でもその最大の理由はお前にあるんだけどね、とは言えない。

「と、とりあえず、1人になってくれないか?」

怖いから、とは言わなかったが、あかりは「承知しました」と言うと、俺の一番近くにいた1人だけを残してぞろぞろと部屋から出ていった。

「これで、よろしいでしょうか?」

「あ、ああ、うん」

朝からいささか刺激が強すぎる光景を見てしまったせいで、眠気は完全に吹き飛んでいた。

「それでは、本日のご予定ですが」

すると、あかりはどこからかクリップボードみたいなものを取り出して読み上げる。ってちよっと待て。今日は学校に行く以外に予定は無いはずなんだが。

「学校以外に何かあんのか?」

聞き返すと、あかりは眉を八の字にして俺を睨んだ。

「将仁様、ノリが悪いですよ?」

「へ?」

「こついう時は、当主らしく振舞えばいいんですよ」

「寝間着のままですんなのできるわけないだろっ!」

すると今度は、あかりは破顔一笑して。

「でっ、では、お着替えいたしましょうっ、私がお手伝い致しますっ」

目をキラキラ、というよりギラギラさせ、手をわきわきさせた。なんか身の危険を感じてベッドの上であとずさっつてしまっ。

「え、そ、だ、やめろっつて！自分のことは自分でやるからっ！」

「そんなの、いけません！将仁様のお世話をするのは私の役目ですから！」

あかりが鼻息を荒げてベッドの上に乗ってきた。っつて落ち着いている場合じゃない。

俺はベッドの上で後ろに下がった。これは怖い。怖すぎる。そのとき。

俺の尻の下からベッドが消えた。

「うごお！？」

その直後、後頭部に鈍痛が走り、目の前に星が散った。

それが、ベッドから落ちて頭を打ったことに気付くまで、時間はかからなかった。

「あ、ああ、だだだ、大丈夫ですか将仁様！？」

顔を上げると、ベッドの上からあかりが身を乗り出して俺を見下ろしている。

「心配するなら、最初からこんなことをすんなよ」

俺にはそうつめくしかできなかつた。

16・新旧おやくだち合戦 その2

「どーんっ！」

廊下を歩いていると、突然何かが俺のどてっ腹にぶつかって来た。

「ぐふっ!？」

本日二度目のダメージを食らい、俺は廊下のカーペットの上にダウンスさせられる。

「おにーちゃんおはよー！」

そして俺を突き飛ばした奴が、俺の上に乗っかってどアップ満面の笑顔で俺の顔を覗き込んでいる。

「け、ケイ、お前、なんなんだそのテンションは」

「えっへへー、お兄ちゃん起こしに行こうと思ったら、おうちが広くって」

なんだそりゃ。

「走っているうちに興奮しちゃって」

その結果、俺にどーん、か。まあケガは無いみたいだからいいけど、と言おうと思った矢先、そのケイの体が俺から引き離される。あらら、といった顔で遠ざかるケイの横に、日焼けした彫りの深い顔が現れた。

「まったくこんな朝っぱらから元気な奴だねえ」

猫でもつまみあげるようにケイを片手で持ち上げているのは、ヒビキだった。そして大きな口をあけてあくびをする。本当に起きぬけらしい。

「えへへ、ごめんヒビキお姉ちゃん」

宙ぶらりんになりながら、ケイがなんともかるーい感じで謝る。

「あ、えー、その、ご無事ですか、将仁様？」

一方で、あかりがひっくり返った俺の手を取って心配そうに聞き返してくる。

「もし何処か痛めたのでしたら、学校のほうに連絡を入れて、お休

みを取ったほうが」

「だ、大丈夫だって」

なんか大げさなことを言ってきたので飛び起きることにする。あかりが残念そうな顔をしたが、さすがにこんなことで学校は休みたくない。

「お兄ちゃんは頑丈なんだよっ」

そこに、さっきドーンしてきたケイが腕に抱きついてくる。うんうん、元気なことは良いことだ。

と思ってふと前を見ると、あかりの姿が目に入る。そしてその瞬間、背筋が寒くなった。

表情はにこにこしているんだが、なぜか明らかに不機嫌なオーラを出しているのだ。

「お、おい、何怒ってんだ？」

「いいえ、怒ってなんかいませんよ？」

そんなわけないだろ、と言おうと思ったが、それすら躊躇われるほどのオーラを出してこっちを見ているあかりには何も言えなくなってしまう。

俺、何か彼女を怒らせるようなことをやってしまったんだろうか？

「ケイ、将仁様から、少し離れてはもらえないだろうか」

だが、そのあかりが低い声をかけたのは、俺ではなくケイのほうだった。どうも、あかりは、擬人化たちとは男言葉で会話をしているらしい。

「昨日も、不必要なスキンシップは控えていただけないだろうかと進言したはずだが」

「必要だもん！ケイはお兄ちゃんの携帯電話だもん、だからお兄ちゃんと一緒にいるのは当たり前だもん！」

ケイは、それがさも自分の当然の権利だとも言うように余計に強くしがみつく。

あかりが、さらにいつそう不機嫌になる。それが証拠に、近くの窓やドアがガタガタと言い出す。もしかして、あかりもそういうキャ

ラなのか？

「な、なあケイ、ちょっと離れてくれないか」

「やだっ！」

ケイはケイで俺の言葉に即答しやがるし。

しょうがない。俺のキャラじゃないし、やるのは滅茶苦茶恥ずかしいんだが。

「おい、あかり。ちょっと来い」

あかりを手招きで呼ぶ。

「ほれ」

そしてケイに捕まれていない左腕をあかりのほうに出す。

すると、あかりは一瞬きよんとしてから、ぱっと顔を赤くし表情をほころばせた。

「よ、よろしいのですかっ!？」

「いいから、気にするな、ほれ」

「そ、それでは、んんっ」

あかりは、何やら咳払いをして、襟元を正し。

「失礼いたしますッ！」

そう叫ぶと、がばつと俺の腕にしがみついてきた。せいぜい腕を組むぐらいかと思っただのでちよつとびっくり。

ケイにはまだ乏しい、むにゅつとした、でも張りもある感覚が左腕の二の腕に。

でも、あまり嬉しくない。というか喜んでいるほどの余裕はない。というのも。

「むむむむむむっ！」

今度は、ケイが不機嫌になったからだ。なんかざわざわと髪の毛が逆立っている。

「なあああんであかりお姉ちゃんがそこにいるのおおおおおお」

おい、ケイ。テレパシーが漏れてるぞ。

「ケイよ。携帯電話は携帯電話らしく、ポケットに収まっているベきなのではないか？」

一方のあかりは、笑顔ながらも明らかに青筋を立てている。本当なら両手に華の状態なんだが、はつきり言って嬉しくない。というか、処刑台に連行される死刑囚になったような気分だ。楽しむ余裕がない。

ちらつと横を見ると、やれやれといった様子でヒビキの奴が見ている。お前、見てないで助けてくれてもいいだろうに。

逃げようにも、両腕にケイとあかりがまるで錘のようにしがみついて全く放そうとしない。

仕方がない。もうヤケだ。

「行くぞこんにやるっ！」

「えっ!?!」

「ぬうおりゃああああああっ！」

「きゃああああ!?!」

気合を入れ、俺は二人を引きずって進むことにした。

ケイはうちの擬人化では最軽量だからまだ楽なんだが、あかりは大人だから片手ではかなり辛い。さらに言えば、あかりが掴んでいるのは左腕で、利き腕ではないので余計に辛い。

だが、止まったらそこで負けのような気がしたので、気合と底力で二人を引きずっていった。

16・新旧おやくだち合戦 その3

「何をしているのです？」

ケイとあかりを両腕にぶら下げたまま頑張つて廊下を歩いていると、不意に前のほうから声をかけられた。

見ると、なぜかドレス姿の女の人が、腰に手を当てて俺を見ている。

「!!!?!!?」

だがその瞬間、俺は目を疑ってしまった。

「しっ、静香様っ!?!」

俺以上にびっくりしたらしいあかりが、裏返つた声をあげる。

そう。今、目の前にいるのは、昨日まで絵の中にいたはずの、先代当主・西園寺静香だったからだ。その姿はあの絵のままだったので余計にわかりやすい。

つてことは、まさか、絵から出てきたのか？

「二人とも、離れなさい。将仁が嫌がつているでしょう？」

静香さん（まだ母さんと呼ぶ気にはなれない）がそう言うと、あかりはさつと離れて1歩下がる（先代の影響力は未だ健在らしい）が、「やだもんっ!ここはケイの居場所だもんっ!」

ケイは駄々っ子みたいなのを言つて離さない。

そのせいで、あかりの奴も「その手があつたか!」みたいな顔をして見ているし。

どうすりゃいいんだ、と悩み始めた、その時だ。

「.....動くな」

いつのまにか、静香さんの後ろに、誰かが立っていた。立っているだけならともかく、そいつはなぜか手には拳銃を持っていて、その銃口を静香さんの頭に突きつけているのだ。

「.....貴様、何者だ」

うちの中であんな拳銃持っている奴なんてのは.....実際に何人かいるかもしれないが、少なくとも俺が知っているのは一人し

かない。我が家のSWAT（と言っても実際の強さは知らんが）、クレアだ。

これにはさすがに、静香さんもホールドアップをする。

「こ、これは、何の真似かしら、クレア」

「……白を切るのは、お勧めしない」

そう言いながら、クレアは銃の撃鉄を上げる。

「お、おい、クレア！？何やってるんだ！？」

「やめないかっ！貴様、静香様になんという無礼なっ！？」

俺たちの声にも、クレアは耳を貸そうとしない。

「わ、わかった、ふざけすぎた、わらわが悪かったあっ！」

静香さんが悲鳴をあげる。……ん？わらわ？

「お、お前、まさか、魅尾か？」

我が家で自分のことを「わらわ」と言うのはあのチビしかない。

だが、見かけがあまりに違いすぎるし、なにより身長がアレの倍以上ある。

だが、なみだ目になってこくこくと頷いているところを見ると、どうやらマジらしい。狐が化けるといっつのは知っていたが、こうやって目の前に出てこられるとやっぱりびっくりする。

「おい、クレア。銃を下ろしてやれ。ただのいたずらだよ」

少し呆れつつクレアに言うと、クレアは眉ひとつ動かさずにその銃を下ろした。

ほっつ、という表現がぴったりな仕草で、静香さんの姿をした何かの肩を落とした、その直後。

その人が、何の前触れもなくいきなり宙返りをした。そして着地すると同時に、ぼんつ、という音と共に、そいつが煙に包まれた。

煙はすぐに散ったが、そこに静香さんの姿はあとかたもなく、そのかわりに、巫女さんみたいな服に真っ白い髪、そして狐みたいな耳に大きな尻尾を生やした、見覚えのあるチビスケが現れた。怖かったらしくなみだ目になってぺたんとしゃがみこんでいる。

どうもそれが魅尾だっつてことが把握できていないらしく、俺と当の

本人以外はぼかんとしている。

「こんな朝っぱらから何やってんだお前は」

「うとう、うまく行ったから、脅かしてやろうと思ったのじゃ」

「そうか」

よく判らんが涙目で拗ねているような魅尾の前にしゃがむと、俺はそいつの頭に手を乗せて頭を軽く撫でた。

「ひゃ!？」

「おまえ、凄いことができるんだな」

「ん、そ、そうか？凄いか？」

「ああ、凄いよ。化けるなんてそう出来るもんじゃないもんな」

「あ、え、えへへ、わ、わらわは気狐じゃからの、このぐらい、朝飯前なのじゃ」

うん。このお狐様はわかりやすく扱いやすいからいい。

「あー、そういえば確かにまだ朝飯前だったな」

「あ、そうなのじゃ。ではわらわは先に参るゆえ、早く来るのじゃ!」

言うなり、魅尾はくるりと身を翻すと、しっぽをぱたぱたと靡かせながら廊下を走って行った。

「あ、ケイも行くー!」

それを追いかけるように、ケイも俺の腕を離して魅尾の後を追う。なんだか平和だなー。自然と目じりが下がるのが自分でも判る。

「そういえば、クレア」

ふと気になって、クレアに声をかける。拳銃をしまったクレアが、何事かとこつちを向く。

「お前、どうやってアレを偽者だつて見抜いたんだ？」

「……人の姿をした静香様が出てきた部屋の中に、……絵の静香様がいた。……静香様は、あかりと違って、分身できない」

聞いてみれば、なんてことはない話だった。そして、魅尾のやつが本当に気狐、言い換えればお稲荷さんなら、我が家の平和にもっと

貢献してくれと、本人が聞いたら怒りそうなことを考えた。

「じゃ、俺たちも行くか」

「はい、将仁様」

ほったらかしにされていたあかりが返事をする。

声は出さなかったが、クレアもひとつうなづいた。

16・新旧おやくだち合戦 その4

「将仁さん、5分ほどお時間よろしいでしょうか？」

朝飯を食べ終わるのを狙ったようなタイミングで、常盤さんがそんなことを言ってくる。

「本日、将仁さんの里親さま方をお呼びする予定となっておりますが」

「ん、ああ、そっぴや、そっぴやなね」

俺は、返事をしながら、昨日の昼さがりのとある1シーンを思い出していた。

「親父やお袋がこの光景を見たら、どう思うかね」

自己紹介がひととおり終わってみんなでワイワイやっている時に口をついて出てきたそんな言葉。それが事の発端だった。

親父やお袋というのは西園寺家の人ではなく、俺の育ての親たちのことだ。西園寺を名乗ることを決めた以上そのうち離縁しなきゃならないんだが、そうドライに割り切れるもんじゃないし、まだ離縁の手続きをしていないから、法律上はまだちゃんと俺の親なのだ。ちなみに、絵の人と違って2人ともちゃんと“人間として”生きている。

だが、そのセリフは特に深い意味もなく出た言葉だ。実際にどうこうしようというつもりはない。

「でしたら、明日、お二人のことをお招きしましょう」

だから、常盤さんがそう言った時、俺はその話の流れが把握できなかった。

「それは良い考えです」

あかりのその言葉に、俺はやっとその意味が判った。

「え、常盤さん、それ本気で言ってます？」

「ええ、もちろんです。将仁さんの今を知っていただく、良い機会ですから。明日は私も時間の余裕がありますし」

常盤さんは、にっこり笑ってそう言いきつてくれた。

ちなみに、常盤さんは俺の知らないところで何度か俺の両親に会っていて、相続の話だとかなんだかんだの話し合いをしていたらしい。自分の知らないところで自分の行く末が勝手に決められていたのは腹が立つが、事ここに至っては文句を言ってもどうしようもないのであきらめるとして。

「親父やお袋が、擬人化のこと納得するのかね？」

今更ながら気になったのがこれだ。なにしろ、うちの連中は普通にしていれば人間にしか見えない。それがいきなり携帯電話ですとか冷蔵庫ですとか言われて、素直に聞き入れるだろうか。

「大丈夫だよ。りゅう兄ちゃんはケイたちのことすぐ判ってくれたもん」

にこにこ微笑みながらケイがそういういい切ってくれる。

言われてみれば確かにそうだ。りゅう兄の性格はあの親にしてこの子ありつてな感じだ。下手すりやりゅう兄以上にあっさり受け入れやがるような気もしないでもない。

「松子様、お元気でしょうか」

「そうね。多分元気だと思うけれど。相変わらず、祥太郎さんを尻に敷いているでしょうね」

テルミとレイカの話が聞こえる。

松子というのは、育てのお袋の名前だ。うちの大型家電は、お袋の手を経て俺の元に来ているし、レイカに至っては俺がまだ実家にいた時から使われていたから、少なくともモノたちの中では一番お袋と接点がある。まあ、人の姿で遭ったことはないんだが。

「……………そういうえば、気にしたことはなかったが、レイカってうちのお袋に面影が似ているような気がする。」

それはそれとして。祥太郎というのは育ての親父の名前だ。りゅう兄と俺に真田流兵法術を叩き込んだハゲオヤジで、どういう経緯なのか鍼灸院を営んでいる。

「Who is it? Masterの parents デース？」

「ってことは、お兄ちゃんのパパとママ？」

「そう言えば、りゅう兄さんはよく顔出してくれたけど、親御さんはまだ遭ったことがないっスね」

「兄君から聞いておるぞ。父君は真田流兵法術の最高の使い手だそうだな。ぜひとも手合わせしたいものだ」

「おいおい、ケガしても知らねえぞ。龍之介の奴より元気なんだぜ？」

りゅう兄を知っている旧真田チームはすっかりその話で盛り上がっている。

そういえば、俺も一ヶ月ぐらい両親に会ってねえなあ。なんてことを考える。りゅう兄がこつちに顔を出して引つ掻き回す度に思い出しはするんだが、その後何かばたばたしているうちに忘れちゃうんだよな。

「そういえば、将仁さんって、養子だったんですよ」

例のでかい本を広げながら、御守がそんなことを口にする。

「へー、この人がまさつちの育ての親かあ」

「血のつながりはねえのに、なんか若に似てる気がしやすねえ」

「……………一緒に住んでいれば、少しは、似てくる」

「ふむ。だが禿げる体質は似てほしくないな」

年長組（昨日、俺が変身させた擬人化たちのこと。トータルで擬人化していた時間は長いはずなのでこう呼ぶことにする）が、みんなしてその本を後ろから覗き込んであることないこと話している。

「どうやら、うちの家族の写真が載っているらしい。」

「なんか賑やかでいいなあ。」

「あ、将仁さん。そろそろ家を出る時間です」

そんな中、常盤さんがそんなことを口にした。

時計を見るとまだ6時40分。いくらなんでも早すぎだろう。

「でもお兄ちゃん、こつて駅からずいぶん遠いよ？」

「Certainly. Hereにnearestなstationにも、carでabout one hourかかるデース！」

最寄の駅に1時間つて、ここつてそんな山奥なのか？あんまり気にしてなかったが。そう考えて時計を見ると、確かにあまり余裕はない。

「心配いらないつて、そんなこと気にしなくてもあたしが送つてつてあげるよ」

だがそこで口を挟んでくるのがいた。

パツキンのキャンギャル、メルセデスだ。

「まさつちの学校つて県立扶桑第一でしょ？場所判るし、1時間もあれば余裕で送り届けてあげるわよ」

「バカなことを言うな！上官は昨日まで電車通学であつたのだ。いきなりあんな長い車で行つて上官を好奇の目に晒す気が！？」
すかさずシデンが文句を言つて阻止しようとする。

「そついえば、常盤様。将仁さんのご苗字が真田から西園寺に変わられるつてのお話、学校には伝わつているのでしようか？」

一方で、テルミが常盤さんに別の話題を切り出す。

「ええ、それは大丈夫です。いつからつていう期限は、将仁さんの意志を尊重したいのでまだ決めていませんが、将来的に変更するつて話を通してあります」

「ねえお兄ちゃん、早くしないと遅刻しちゃつうよ？」

また一方で、ケイが俺の腕をぐいぐいと引つ張る。

「ハイドゾ、将仁サン」

反対側からは紅娘がいつもの赤い水筒を差し出してくる。

「あ、将仁サン。ワタシ、今日、学校行くアルから」
「へ？なんだいきなり？」

「忘れたんスカ？昨日言つたじゃないスカ、クラスの人が、今日は追い込みだから紅娘に来て欲しいつて言つてたつて」

そついえば、お茶菓子チームが、作品の完成度を見てもらつつか言つたらしいな。委員長の真剣な顔がありありと浮かぶ。

「ああー、そうでしたあ」

と、今度はクリンが声を上げる。

「そういえばですねえ。将仁さんの衣装がですねえ、ほとんど完成したんですよ」

そして満面の笑みを浮かべる。

衣装、ああ、曹操のコスプレか。持ち帰っていたのをすっかり忘れていたが、一昨日のアレでも無傷で残っていたからそのまま持ってきたんだよな。

「手間がかかりそうでしたので、私も手伝いましたよ？」

「兜は私がほとんど作ったのでしょ？」

負けじと、女執事と黒マントメイドが口を出す。テルミはともかく、あかりは昨日ほとんどずっと俺のそばにいたような気がするが・・・
・・・あ、あかりは分身すりゃ可能か。

しかし、明日はもう学園祭か。普通なら年に一度の心躍る大イベントだから興奮するもんなんだろうが、ここ数日は拉致られたり妖怪大戦争したりといった超イベントがてんこもりだったから全然実感が無いな。

「全く、そろそろ何も無い日をのんびりすごしたいもんだよ」

まだしばらくそんな日は来ないんだろうな、と思いつながら、俺は登校の準備をするために立ち上がった。

16・新旧おやくだち合戦 その5

「ふうう」

逃げるように車の中に飛び込むと、自然とため息が漏れる。

「あらら、まさっち、こんな朝からずいぶんとお疲れみたいね」

運転席に腰かける金髪のねえちゃんが無責任に声をかけてくる。

「お疲れじゃねえよ、まったくあかりの奴、俺を何もできないガキかなんかだと思ってるんじゃねえのか？」

つい、愚痴が出てしまう。

朝飯の後。俺は登校の準備のために自分の部屋へ行ったんだが。

ネクタイを締めようと手に取った直後、いきなりあかりの大群が部屋に押し入って来たのだ。

「将仁様、ネクタイ、お締めします」

「ジャケットをどうぞ、将仁様」

「今日のお弁当です」

「お財布に一万円を追加しておきました」

「はい、カバンです」

「あ、寝癖がこんなところに」

そして、俺のまわりに群がると、そんなことを言いながら、俺のネクタイを締めたり、俺のジャケットを着せたりし始めた。

あまりに唐突で、何をされているのが全然把握できずにもみくちゃにされる。

ひとつの意思の元、多数の体が動くという恐るべき特性を持つあかりらしく、俺をもみくちゃにしたあかりズが一斉に離れると、俺は何もしていないのに登校準備が完了していた。

そしてそのあかりズたちは、来たときと同様唐突に部屋から出て行く。やがて、パタンとドアが閉じられると、嵐の後とでもいうか、妙な静けさが部屋の中を満たした。

こんにちは。

「お兄ちゃん、準備できた？」

そこに、ひよっこりとケイが顔を出す。

いつもどおりなケイの様子を見て、俺は思わずほっとしてしまった。ちなみにそのケイは、今は携帯電話に戻ってポケットの中にいる。

「そいつは、大変だったみたいね」

走り出した車の後部座席（リムジンのままだと目立つから、普通自動車ぐらいまで縮めてもらっているのだ）に座ってしばらく、金髪のキャンギャル、メルセデスはやれやれって感じな顔をした。

「でも、あたしはあかりの気持ち、ちよっと判るな」

だが、次の瞬間、メルはハンドルを握りながらちよっと遠い目をした。

「それって多分、あかりなりの決意のあらわれなんじゃないかな」

「決意？俺のモノになるってことか？」

「んー、それもあると思うけど、ほらそれ以前に、あかりって本来はあのお屋敷じゃん。家は人が住んではじめて家なんだって言うし」
「ってことは、あかりは俺に「住んでもらっている」って思っているってことなんだろう？俺からすれば、こっちこそ「住まわせてもらっている」って感じなんだが。と思っただけでもないらしい。」

「それにさ。あかりって、自分の主だった静香様を、護れなかったことがあったから。だから余計に、新しい主のまさつちのことを大事にしたいんじゃないかな」

「そっいえばそんなこともあったらしいな。まあ正直、ちよっと前まではそういう人がいることすら知らなかったし、それに、二次元になったとはいえ今でも普通に会話ができるからあまり深刻に感じていないけど。」

「でも、お兄ちゃん相手にあれはやりすぎと思うな」

と、その俺の耳に、ちよっとすねたような、聞きなれた女の子の声
が飛び込んできた。

いつの間にか、ケイがそこにいた。最近、慣れてきたのか音もなく

変身するんだよな、こいつ。

「あ、あらケイちゃん、いたの？」

「ケイは、お兄ちゃんのいる所どこにでもついてく携帯電話だもん」
メル言葉にケイが口を尖がらせて反論する。

「話は戻るけど、お兄ちゃんって、自分で出来ることは自分でやりたい人なんだよ。だから人にやつてもらおうと落ち着かなくて愚痴っちゃうの」

「ふうん、そうなんだ」

「そうなの。ケイたちはずっと前からお兄ちゃんを見てきたから判るんだもん」

「でも、それってここに来る前の話でしょ？環境もかなり変わっているわけだし、今のまさっちには出来なくなっただこともあるんじゃない？実際、駅までは車じゃないととてもじゃないけど行けない」

「出来なくなっちゃったことはしょうがないよ。でも出来ることまで他の人がやつちゃうのは、お兄ちゃんも嫌がると思うな」

なんか、二人のやりとりの声が、微妙にとげとげしいように感じる。もしかしてこいつら、仲が悪いんだろうか。ふと朝の光景を思い返してみると、年長組と年少組は、メシ時も別のグループになっていたような気がする。

俺としては同じ擬人化同士仲良くなっただけなのに、能力はともかく中身は人間に近いわけだから、気心の知れた仲間でするもうとするのは当たり前といえは当たり前だ。

でも、それだと俺が困るのは目に見えている。

「ね、そうでしょお兄ちゃん？」

「ん、え、あ、なんだ？」

「んもう、聞いてなかったの？もしかしてもう疲れちゃってる？」
ケイがずいっと顔を近づける。ってなんか目が怖い。自分の意見を押し通そうとしているみたいだ。そしてふと顔を上げるとバックミラー越しにジト目でこちらを見据えるメルの顔が見える。

「まあ、そりゃ、今までやってたことをしなくなるってのは落ち着

かないもんだが、楽しい怠けたいつてもその通りだし、でも怠けるとすぐダメになるし」

二人の視線に圧倒され、自分でも判るぐらいにしどろもどろなことを口走ってしまふ。本来の関係なら俺のほうがかうしろと言わなきゃならないはずなんだが。

「と、とにかく二人とも、こんな所でケンカすんな。居心地が悪い」
なんとか、そんな言葉をひねり出すのが精一杯だった。

16・新旧おやくだち合戦 その6

その後、ケイは携帯に戻ってもらい、メルに最寄の駅まで送ってもらい、乗車距離の長くなつた電車に揺られることで、ようやく俺は日常の世界へと戻ってきた。

ちなみに今日は、到着が一昨日までからまた1本遅くなつちまつたので、シンイチとも委員長とも出会わず、ひとりで通学路を学校へ向かつて歩いている。

「ん、じゃあそろそろ学校だから、終わるぞ。……っだから、文句言つんじゃないって」「いや、ケイといっしょか。」

ああ、学校への通学路がこれほどほっとする時間になるとは思わなかった。

「あら、真田将仁さんじゃありませんの」
だが、学校の校門まであと少し、というところで、俺はあんまり聞きたくない声に引き止められた。

言うまでもない。近衛クローディアだ。相変わらず校門の前に白い高級外車を停めて、その前でたくさんの取り巻きに囲まれている。条件反射で迅を目で探すと、案の定少し離れたところで壁に寄りかかって立っている。何度か組み伏せられたせいで、このお嬢様に会うと迅を探るのがクセになつてしまつたようだ。

そういえばこのお嬢、昨日、鏡介の奴が怒らせちまつたんだよな。あのときは俺と区別がついていなかったから、ナミを飛ばして俺をそうとしたわけだし。謝つといたほうがいいかな。

「おはようございます」

「え、あ、おはよう」

なんてなことを考えていると、むこうが挨拶をしてきた。つられて俺も挨拶を返す。

そして、あれ？とそのクローディアの様子に違和感を持った。

妙に機嫌がよさそうなのだ。怒りを押さえて隠しているようにも見えない。

「それにしてもあなた、あのような心憎い演出をされるなんて、ただの無礼者かと思いましたが、なかなかの策士でしたのね」

そのクローディアが、雰囲気もそのままに変なことを言い出す。

「策士？なんのことだ？」

「もう、おとぼけになって。私の放った刺客を、使者として送り返して来たではありませんの」

「刺客？」

刺客、と言われて思い出すのは、夕べのコンバットドール・ナミの襲撃だ。結果として一度擬人化してからお引取り願ったんだが、そのことだろうか。

と思ったら。

「まさかあんな可愛くなつて戻ってくるなんてっ！私、私っ、感激してしまいましたよおっ！」

ぼかんとする俺の目の前で、クローディアは自分の胸元で手をぎゅっとしながらまるで舞台俳優のようになると一回転する。

「まったく、あんなものを送られては、私、貴方に懐柔されるしかないじゃありませんのおっ！」

なんかよくわからんが、クローディアの奴がすごく喜んでいるのは判った。

「いや、あれは、あいつがそうなりたがっていたからなんだが」

でも、俺に言わせるとその程度でしかない。っーか、明らかにアンドロイドの時より能力はダウンしているから非難されそうなもんなんだが、ナミの奴に何か思い入れがあるんだろうか。

「そんな貴方に、お見せしたいものがありますの」

そんな俺のことなどお構い無しに、クローディアの奴は勝手に自分の話を進める。相変わらず人の話を聞くつもりは無いらしい。

「おいでなさい、ナミ」

そして、クローディアは、自分が乗っていた白いロールスロイスの

ドアに声をかける。

「って、ナミ？ってことは、ナミの奴もその車に乗っているのか？」

「ほら、早く出てらっしゃいな」

「思ったら、自分から車の中に頭を突っ込んで何かを引っ張り出そうとする。」

「え、あ、え、その」

「何恥ずかしがっているんですの？」

「普段からは想像できないそんな光景を見ると、なんかほのぼのしてしまう。」

「やがて、クローディアが車の中から引っ張り出したのは。長く癖の無い銀色の髪と緑色の瞳が印象的な、色白の美少女だった。そのクローディアと違う美少女っぷりに、とりまき連中がどよっとどよめいた。」

「顔を見れば、確かにナミだ。だが、それがナミだと判るのに、少しだけ時間がかかった。というのも。」

「なんで、うちの制服を着ているんだ？」

「昨日のナミは、どっかの軍隊の制服みたいな服にロングコートという可愛らしさのかけらも無い格好をしていた。それが、いきなりうちの高校の制服を着て現れたのだ。すぐに判れというほうが無理だろう。」

「ちなみに、その制服は元々クローディアのものらしく、丈とかサイズとかが微妙に合っていない。特に胸のところは、って俺はそんなところばかり見ているのかオイ。」

「それは勿論、私と一緒にこの学校に通うからですわ！」

「そんな俺の混乱をよそに、クローディアはふんぞり返って偉そうに答える。」

「あ、ええと、その」

「その後ろでは、そのナミが所在無くおろおろしている。クローディアと対照的だ。おろおろする軍用アンドロイドというのもなんか」

妙な感じだが、実際にそうなんだからしょうがない。

「……もしかしたら、もともと人にかなり近い姿だったから
そう思うのかも。」

まあそれはともかく。

「あ、あの、クローディア様、私、どうしたらいいのでしょうか。」

「堂々としていれば良いのですわ。何らやましいところはないので
すから。」

「そんなこと言われても、私、写真撮られるのって苦手なんですよ
う。」

取り巻き連中が焚くフラッシュの嵐に、ナミは更にしどろもどろに
なってクローディアにすがりつく。だが、クローディアの奴はにっ
こり笑いながら全然助言になっていない助言をナミに向ける。

本当にこいつら、昨日俺を しに来た戦闘アンドロイドと、その命
令を下した奴なんだろうか。

「……全く、お前らは。」

なんとというか、（直接襲われたのは俺じゃないからかもしれないが）
そのことを攻める気もなくなってしまった。

かしゃ。

「!?!?」

とりあえず、携帯を向けて1枚撮らせてもらおう。

何の騒ぎなのか見たいというケイのテレパシーがうるさかったので、
見せてやったのだ。

『へへーん、帰ったらみんなに見せちゃお。』

ナミの制服姿を写真に収めてご満悦なケイの声がスピーカーから聞
こえる。

「あんまりいじめてやるなよ。」

とりあえず、電話口からケイに釘を刺しておくことにした。

「そんじゃ俺は行くぞ。」

で、一晩明けて妙に平和になった連中を後に残したまま、俺は学校
の校門を潜った。

16・新旧おやくだち合戦 その7

「おーす」

教室に入ると、クラス中の視線が俺に突き刺さった。

「な、なんだよ」

「お前、今日は本物だよな？」

その俺に、疑り深い目をしたシンイチが声をかけてくる。

なるほど、昨日は鏡介を身代わりにしたから、疑われているってわけか。

「本物だよ、なんか文句あんのか？」

あつちが挑戦的だったもんでこつちもそのつもりで答える。

「いや、文句はない。そのかわり、なあ」

「なあ」

いつのまにか来ていたヤジローが、俺に肩に手を回してくる。って、なんかその腕が妙に重いんだが。

「お前、昨日、俺たちが文化祭の準備でひいこら言っていたってえのに、何やってたんだあ？」

「そーだなあ、わざわざ代理なんか立ててよ。聞かせてもらいたいねえ」

それが合図だったかのように、クラスの野郎どもがわらわらと群がってくる。

なんか最近、こういう展開が多いような気がするんだが。

「何って、そんな大したことはしてねえよ、またちょっと訳があった引越したただけ」

「引越した？お前たしか2週間ぐらい前に引越したばかりじゃなかったっけ」

「あ、いやー、それが、ちょっと事故があつて、うちが半壊しちゃまった」

うん、まあ、嘘は言っていない。信じてくれるかどうかは別問題だが。

「話し合った結果、建て直しが完了するまでしばらく別のところに仮住まいしようってことにしたんだ」

だから今日はいつもと来る時間が違うんだ。と言うと、渋々ながら納得したらしい。

「でも、あの美人たちと一緒になんだよな」

だが、ヤジローのいらぬ一言でクラスの野郎どもが再びいきり立つ。

「うおおおそういえばそうだった!」

「ちくしょううらやましいぞおおお!」

なんとも、進歩しない連中だ。

「心配しなくても、ちゃんと午後になったら紅娘が来るから」

そう言つてやると、一斉に身を乗り出す。

「まったく、うちのクラスの男子って、ホンツトに進歩しないわね」

「こーんな美人が居るつのに」

一方の女子連中はそんな様子を半ばあきれて見ている。こういうときに男子がバカにされるのは、共学のパターンだな。

しかし、俺も人のことは言えないな。ちょっと前まではそいつらと一緒にバカなことを言っていたんだし。

「ところで真田君。さっき校門のところで、近衛さんと何話してたの?」

男子たちの隙を縫って、委員長が俺に聞いてくる。

「何って、別に、面倒だから喧嘩すんのは止めようぜって」

「おい、マサ」

すると、後ろから野郎どもがまた声をかけてくる。

振り向くと、また嫉妬に血走った目で俺をにらみつける目が。

「お前、今度はあの近衛とお近づきになろうって魂胆なのか!？」

「てめえこの、実はスケコマシだったなんてよくも1年半もだまからかしてくれやがったなあ!」

「キミを信じたこの1年半を返してくれたまえ!」

「だーっ勝手なこと抜かすなこのバカヤローどもが!そんなわけあ

るはずねえだろーが！」

そいつらがひがみながらそんな無責任なことを言ってきたので、つい大声で叫んでしまう。だいたい、本当にもっているんだっ
たら俺だって遠慮なく言いふら・・・しはしないか。

「だいたいだな、昨日まであんなに険悪だった奴とすぐに仲良くな
んてなれるわけがねえだろ」

「それを口説き落としただろうが、この天然ジゴロが」

「んな芸当、できんならソツコーでやってらい、それどころか高校
に入っただけで彼女作ってらい」

なんか自分で言っていて悲しくなってくるようなことを言っている
と、さすがにむこうも悪いと思ったのか、それともめんどくさくな
っただけなのか、追求が甘くなってきた。

それでようやく、そのネタにされたクローディアのことを思い返す
ことができた。

確かにあれは、横に連れていたらすごく鼻が高いであろう存在だ。
家柄も文句なしに良いシルクスモスタイルも抜群、それに、噂で
聞いただけが成績もいいらしい。

まあ、あの性格がすべてを台無しにしているが。
そこまで考えると、今度はそのお嬢様がつれてきた元アンドロイド、
ナミを思い出した。こっちはあいつに比べて性格は良さそうだが、
戦闘アンドロイドだったとは思えないほど大人しそうな感じになっ
ていたな。

自分の妹分（と思っているかどうかはわからんが）の気弱なナミを
かばう気丈なクローディア、という本来と立場が逆になった姿がな
んとなく想像され、ちょっとだけ許してやってもいいような気にな
る。

うん。こんなことを考える余裕がある今日は平和だ。

「真田はん、ちょっとよろしおすか？」

と、いつの間にか登校していた賀茂さんが声をかけてきた。

「今日、真田はん家に親御はんがおいでになるゆう話聞いたん

すけど」

「……………なんで知ってる」

「いやあ、うちの子たちに聞いたんどす。まあ色々ありましたさかい気いなりましてなあ」

うちの子、ああ、あの式神たちのことか。本人曰く、賀茂さんは転校してきた頃から俺の家をあのかしに監視させていたらしい。しかし、賀茂さんとは和解したはずなんだが、まだ監視をしているんだろうか。

「まあそんなことはどうでもよろしおす。うちが聞きたいんは俺にとつちやどうでもいいことじゃないんだが、それ以上に大事なことって何なんだろう。」

「龍之介はんもおいでになりますのん？」

「……………は？」

「せやからあ、龍之介はんもおいでになりますのん？」
その質問が予想の斜め上をかつ飛んでいたため、俺は思わず間抜けな答えを返してしまった。

何でここであのかし兄貴の名前が出てくるんだ。と思ったところであることを思い出す。目の前にいる京美人は、あろうことかあの筋肉ダルマのバカ兄貴に口説き落とされたんだってことを。

そう思うと、なんか悔しいので素直に喜ばしくなくなる。

「んー、どうだろうなあ、今日は平日だし、兄貴も学校があるから今日は来ないかも知れねえな」

そんなふうに出てから賀茂さんのほうを見やると、明らかに落胆したような顔をしていた。

わざと意地悪な言い方をしたことにとちよっただけ後悔したが、もとはといえば彼女のせいな所もあるので今回は謝らないことにした。そうこうしているうちに徳大寺先生が来たので、席について準備をすることに頭を切り替えた。

16・新旧おやくだち合戦 その8

「今日集まってもらったのは、他でもない」

その将仁が学校で授業を受けている頃。

西園寺の屋敷の居間に、擬人たちが何人が集まっていた。

「さつさと終わらせましょ、これからお客さんを迎えに行かなきゃならないんだから」

丸いテーブルに両手を置いてあかりが深刻そうに切り出した言葉に、最初に、だが面倒くさそうに反応したのは、メルセデスだった。

「あつしも同感っす。旦那方が来るまでじゃあ、芝刈りもやつときたいし」

続いて、はさみが口を開く。こちらもどちらかといえばめんどくさそうなニュアンスを含んでいる。

その横では御守がずっとお茶をすすり、その後ろではクレアが腕を組んで壁に寄りかかっている。

「私たちが5人だけというのは、何か意図があるのでしょいか？」
やがて、お茶を飲んで一息ついた御守がのんびりと口を開く。

「ああ。ここにいるメンバーは、私が意図的に集めた」
あかりは、それに真顔で答える。

その言葉通り、その部屋にいるのは、将仁が「年長組」と呼んでいる、昨日その姿を得た擬人化たちだった。

「単刀直入に聞こう。皆は、自分の今の立場に、不満はないか？」
そして、あかりは、彼女らに向けてそう問いかけた。

「不満、ですか？」

「私は、将仁様に、蔑ろにされているのではないかと思うのだ」

「はあ？何言ってるの、マサッチがそんなことするわけないじゃない」
「い」

真つ先に反論したのは、またもメルセデスだった。

「……私は問題ない。……必要とされるときに応

じればいい」

後を追うように、クレアも重い口を開く。

「あっしも同意見つすねえ。そもそも若はつい最近までお庭に縁が無かったわけつすから、関心が向かなくてもしょうがないっしょ」
そしてはさみも同じような反論をする。

「それにですね、将仁さんは、私たちを必要と思ったからこそ、新しい姿と名前をくれたのではないのですか？」

最後に、御守もそういった意見を述べる。結果、あかりの言葉に同意するモノは誰もいなかった。

だが、あかりはそのことを予測していたかのように、更に語気を強めて発言した。

「それは私も否定しない。だが、考えてもみてくれ。皆は自分の役目を、奪われていると感じたことはないか？」

その瞬間、思い当たる節があるのか、そこにいるモノたち全員が反応を見せた。

「たとえば、御守。最近はどうな情報もインターネットで調べられるようになってるから、書物の地位は低くなっている。そして、インターネットに繋がるモノが、新参者たちの中に2人もいる」

御守は黙ったままメガネをくいくいと直す。さっきより表情が少し固い。

「それに、将仁さんはまだお若いから、乗り物に乗る際には自分でハンドルを握りたいと思っっているようだ」

メルセデスは短くうめくと困ったように頭を掻いた。

「正直なところ、遺産の管理は人に任せきりで、ほとんど関心を向けて下さらないし」

「………発言の意図が、掴めない」

クレアは、ほとんど反応しない。もっとも、返事がいつもより遅いことが、動揺を伺わせる。

「そもそも、我々は長年西園寺家に仕えてきた存在だ。本来であれば我々があの立場にあるべきなのだ。それが、どこの馬の骨とも判

らぬ新参モノどもに追いやられて良いはずがないのだ」

その前で、あかりが拳を握りまるで演説でもするように声高に言葉を並べる。

「でも、仕えたって言ったってさあ、まさつちに会ってこうなるまで、あたしらは所詮は道具の延長でしかなかったじゃん。静香様が危機に陥られていた時にも、何も出来なかった。それで『仕えた』なんて言っただけなのかな？」

「くっ……」

だが、反論されるとは思っていなかったのか。メルセデスの言葉に、あかりは早くも言葉を詰まらせた。

「それに、これを見て下さいな」

後を追うように、御守がいつも持っている大きな本を開いてテーブルの上に置く。そこには、将仁とケイやテルミなどの『年少組』擬人化たちが乗り超えてきた危機のことが事細かに記されている。

「あの子達は、将仁さんと一緒に、何度も危機を乗り越えています。それはつまり、あの子達と将仁さんの間には、それだけ強い絆があるということです」

「……昨日出会ったばかりの私達には……ない」
そう呟いて、クレアががっくりと肩を落とす。

言われるまでもなく、彼女達は同じ擬人化として、将仁と一緒にいた時間も短ければ、共に何かをやったということもない。そういう意味では、関係を築くには遅れているのだ。

彼女ら個々の能力は、確かに高い。だが、彼女達は同時に、将仁自身が努力の人であり、能力だけで人を判断しないことを知っているのだ。それはイニシアチブにならないことも判ってしまっているのだ。

そのことを改めて思い知らされ、年長組たちはそろって肩を落とす。

「だから、この話をしているのだ」

だがその時、見計らったようなタイミングであかりが口を開いた。

「すでについてしまった差を埋めるのは容易ではない。だがそれな

らば、同じスタートラインに立てるフィールドで勝負すればよいだけのこと」

「同じスタートラインっすか？」

「そうだ。あるだろう、あの小娘達がまだ関わっていない人脈が」

「人脈って、静香様がらみの関係？それはまだまさつちとも関係が無い所なんじゃない？」

「そうではない。ほら、もっと近い関係があるだろう」

「もっと近い関係ですか」

あかりの意図が汲み取れないのか、擬人化たちが考え込んでしまう。

「……親子関係、か」

やがて口を開いたのは、クレアだった。

「そうだ。今日ここにおいてになるのは、将仁様の育ての親。今の将仁様を作り上げた存在。こう言っては語弊があるが、将仁様との関係は静香様より強い。それを味方につければ、将仁様との関係に優位性を得ることができはずだ。

そのためにも我々は、御両親にあの小娘たちよりも信頼されなければならぬのだ」

ここぞとばかりに、あかりが再び拳を掲げて言葉を連ねる。その様子はまるで、声高に演説をしているかのようだ。

「やれやれ、あかりさん。わざわざメンバーを選んで集めてんすから、もっと素直になりやしようや」

だがその時、不意に、はさみが、横から口を挟んできた。

「あかりさん、もっと若とお近づきになりたいんでしょ？」

その瞬間。拳を掲げたあかりが、ポンツと音がしそうな勢いで顔を真っ赤にした。

「な、なにふざけたことを言ってるんだ、わわわ私は、住まいとして、その、これから共にあることが絶対であるのだから、それなりの扱いをだな」

そして、言葉までがしどろもどろになる。

「はいはい判りました判りました、まったく、子供じゃないんだか

ら

「……真剣に受け取った、私がバカだった」

「あかりさんって、そういう性格だったのですね」

そんなあかりの様子に、皆が一樣に呆れたような態度を見せる。

「お、おまえたち、その態度は何だ！おまえたちは、隅に追いやられてもいいと言うのかっ!？」

さすがにここまで不利になるとは思っていなかったらしい。あかりがヒステリックな声をあげる。

「そんな顔で言っても、ぜーんぜん説得力ないっすよ」

「はさみいっ！元はといえば、貴様が変なことを言い出すからであつてだなあ！」

「まあまあまあ、落ち着きましょう、あかりさん」

そして、御守が、諭すような口調でとどめの一言を口にした。

「あかりさん。古人曰く、『人を感動させたければ、まず自分が真心を吐露せよ』です。他人の信用を得るには、何より自分を包み隠さないことが大切なのです」

「~~~~~っ!!」

とうとう反論する言葉が無くなったのか。

あかりは顔をこれ以上ないぐらいに真っ赤にして。

「ああ、そうだ、そのとおりだ！私は、私は女の身になったその瞬間から、将仁様をお慕いしているのだ！ぎゅーってしたいし、なでなでもしたいし、きゅきゅふふもしたいのだ！一日中見ていたいし、匂いだって一晩中嗅いでいたいし、そっ、それに、優しい声なんかかけられたら、天にも舞い上がってしまうぐらいうれしいのだあっ!!」

まわりで聞いているだけでも恥ずかしくなるようなセリフを、大声で叫びたおした。

「はあっ、はあっ、はあっ……こ、これで、満足かっ」

そして、まるで100mを全速力で突っ走った後のように息を荒げる。

聞かされたモノたちは、それに対して様々な反応を見せる。

「あ、いやあ、そこまで言ったつもりはなかったんだけどさあ」
すこし表情を引きつらせたメルセデスが、困惑したような声を上げる。

「一見クールビューティー、しかしその本質はムツツリスケベだつたと、あかりさんへの認識を変えたほうがいいかもしれませぬ〜」

御守は、困ったような笑顔を浮かべつつ哀れむような目であかりを見る。

その後ろでは、あいかわらず無表情で腕組みしたままで頷くクレアの姿があった。

「きつ、貴様らっ！言えと言ったのは貴様らだろうが！人にさんざん言わせておいて自分は澄ましたキャラを演じるなど卑怯の極みだあああああっ！」

洗いざらいぶちまけて今更恥ずかしくなったのか。顔をトマトのように真っ赤にしたあかりが鼻息も荒く反論する。おそらく、将仁も静香も、ここにいない人は誰一人として想像できないあかりの姿がそこにあつた。

「ううう、なぜ私だけがこんな恥ずかしい思いをしなければならぬのだ」

そしてそのまま、がつくしと肩を落とす。その姿は、全国大会に出る前に敗退した高校球児のようにさえ見える。

その時、あかりの肩をぽんと叩く者がいた。

「そんな落ち込むこたあないすよ。それがあかりさんの素直な気持ちなんですよ？」
はさみだった。

「まあ、あかりさんのはちつとばかり行きすぎな感じあしやすが、でも若に氣い向けてほしいってえ気持ちがあっしも同じっすよ」
そして、メルセデスたちのほうを見やる。

「で、その点だけは、ここにいる皆が同じ気持ちっしょ」

すると、少しの間の後、前髪をかき上げながらメルセデスが口を開いた。

「んー……………まあ、そりゃあ、ね」

「……………持ち主のことを、知りたいと願うのは、当然」
クレアが頷く。

「お前達……………」

その様子を見たあたりは、感動したような表情を浮かべる。

そして4人の目は、まだ何も言っていない御守に視線を向ける。

「あゝ、皆さん？私に、何を期待しているのでしょうか？」

「ちよつとお、御守、みんなノツてんだから空気読みなさいよお」

メルセデスがちよつとあきれ気味に言葉を投げかける。

「御守さんも、若に大切にしていほいでしょ？」

「知られたからには一蓮托生。付き合ってもらおうぞ」

結局は自分の目論見どおりに事が運びそうになったため、あたりも元気を取り戻して御守に詰め寄る。

その後ろでは、相変わらず無表情なまま、それでも大きくうなづいたクレアが、やはり御守を見ている。

「ふう、やれやれ、皆さん下心がみえみえですね」

これは説得できないと思ったのか、それともはじめから説得するつもりなどなかったのか。御守は大げさにため息をついた。

「まあ、私にもそういう気持ちはありますし？誰かが第三者的な立場でフォローしないと収集がつかないそうですし。仕方ありませんね」

そして、御守は吹っ切れたように笑った。

16・新旧おやくだち合戦 その9

そのころ。

「Hm m、theyは、somethingをcontribute）
たくらむ）しているデースネー」

中庭では、また別の一団が集まっていた。

そこにいるのは、学校へ将仁と一緒に行ってしまったケイト、先代
当主・西園寺静香の話し相手をしている鏡介を除く年少組の女7人
だ。

ちなみに、魅尾は朝食を食べた後さつそく二度寝を決め込んでいる。
輪の中心にいるバレンシアは、どこかのオペレーターがしているよ
うなインカムらしきものをつけ、手にはいつものディスプレイのか
わりに、卓上スピーカーを持っている。

そのスピーカーからは、女性同士の会話が聞こえていた。

「あいつら、メシの後なんか集まってるなと思ったら」

「ずいぶんとくだらないことをやっていたのね」

それを聞いていたヒビキとレイカが、あきれたような物言いをした。
そこから聞こえたのは、年長組5人が屋敷のとある一室でしていた
やり取りのものだった。

「それにしても、よくバレないアルな」

「Maybe、Mrs．Akariは、not built-in
（備え付けでない）な thing はcannot notice
ce（気づけない）なのデース。This is wireless
s な tap（盗聴器）だから、cannot notice
なのデース。But、念のタメに、Everyone を out
of the house に usher（誘導）したデース
ネー」

そう。バレンシアは、年長組がいる部屋にある、無線式の盗聴器を
通して、会話を聞いていた。と言っても、彼女がわざわざ年長組の

話を聞くためにセットしたのではない。ネットを通じて盗聴器のこ
とを知り、盗聴探知機を作って調べてみたところ、何者かが仕掛け
た盗聴器の電波を拾ってしまい、予想外のやりとりをジャックして
しまったというのが、今回の顛末だ。

ちなみに、バレンシアがつけているインカムのようなものが、彼女
お手製の盗聴探知機、その名もカベニミンゾクガクである。

「うーん、聞いている限りでは、あかりさんが中心になっているよ
うなのでしょう」

「といたしますかあ、あかりさんが焚きつけているみたいですねえ」

「全く、わざわざ敵を作るとは、一体何を考えておるのか」

シデンがそこまで言ったときだ。

「ああ、そうだ、そのとおりだ!!」

突然、今までと桁違いなポリウームのあかりの大声が、スピーカー
から鳴り響いた。

完全に不意を突かれた一回は、まずそのハウリングの混じった大声
に驚かされた。が、その次に今度はそのセリフの内容に驚かされた。

「アイヤー、これは恥ずかしいアルな」

「聞いているこっちが、恥ずかしくなりますねえ」

スピーカーから聞こえるあかりの告白は、聞いているだけでも身も
だえしたくなるほど恥ずかしいものだ。

「Hmm、but、ミィは、emb race（ぎゅーってする）モ
stroke（なでなでする）モ、do（する）よりdone（
される）のほうが happyデースネー」

「っーかさ、そんなこと将仁にされたら、みんな嬉しいんじゃねえ
か？」

「うう、悔しいですがそれは否定できないのでしょうか」

「ううむ、我的場合、本当に天に舞い上がってしまったからなあ」
そして、にやけながらも彼女らは自分の主にしたこと・されたこと
を思い出し、恥ずかしくなったりにやにやしてしまったりする。

「でも、恥ずかしい性癖とかは別にしても、敵視されたとなるとか

なり厄介ね」

だが、レイカのなにげなくひどいこの一言が、彼女らの妄想劇を強制的に終わらせた。

「何を言う、我等に喧嘩を売ったことを後悔させる良い機会ではないか」

「おいおいシデン。お前、もつと考えて発言しろよ」

「あかりさんはあのお屋敷自身。つまり、屋敷の中はすべて彼女の手中ということよ。バレンシアの推測通りなら『置かれている』ものは彼女の勢力範囲外なのでしようけれど、天井・床・壁・窓・扉ぐらゐまでは意のままに動かせると見ていいでしょうね」

「ええとお、レイカさん。つまりい、どうということでしょうか？」

「つまり、屋敷の中にいる限り、色々な意味であかりさんが有利ということでしょう」

「アイヤー、それでワタシたちがこれから生活するのにとてもとても不便アルな」

「これでもまだ喧嘩上等って言えるかよ」

「むう……」

さすがに、不利な現状を突きつけられては、シデンも強気には出られない。

だが、助け舟は意外なところから出された。

「ですが、勝ち目はあるのでしょうか。古人曰く、天の時は地の利に如かず。そして地の利は人の和に如かず。彼女が地の利を抑えるのであれば、私たちは人の和を以て立ち向かえばよいのでしょうか」

今しがた、敵の手強さを説明した、テルミだった。

「Hmm、確かに、Miss AkariがPartnerを集めたのも、そのparent's certain(親の関心)をgetする為だと推測できるデースネー。Maybe、her powerがどれほどgreatでも、only oneでbattleするのはnot goodとdecide(判断)したデース」

「でも、むこうが私たちを敵視している以上、応戦もやむなし、ね。」

まあ、食料のほとんどは私が押さえているから、その点は強みかしら

「はああ、もつと穏やかに納められないのでしょうか」

「何を言うか。宣戦布告してきたのはむこうなのだ。我々は応戦する権利がある」

「And now、ミーたちのquietry（沈黙）はneedlessデース！ミーたちもMasterのparentsにhave not show（会ったことがない）デース、ここdedoing quietryハ、no good about us（いいことない）デース！」

「売られたケンカは、買うのが礼儀アル！」

それに引つ張られるように、再び強気な発言が飛び出す。

「よし、それでは我々も一致団結して徹底抗戦を宣言する！いくぞ

！えい、えい、おー！

「「「「おー！」「」「」

そして、シデンの音頭で、ときの声まであげていた。

16・新旧おやくだち合戦 その9（後書き）

どうも、作者です。

申し訳ないのですが、書き溜めたものが本当になくなってしまったので、しばらく投稿をお休みします。

お休みと言っても、今までのような「毎日投稿」をしないというところで、休載するということではないので、なにとぞご容赦願います。

16・新旧おやくだち合戦 その10

「んじゃ、行って来るわ」

玄関に横付けされたリムジンのドアの前に立ったメルセデスが手を軽く振る。

その目の前には、執事服を身にまとった女性が立っていた。あかりだ。

「うむ、粗相の無いように、安全運転でな」

「心配御無用。あたしが何年車やっているとってんの？」

「その姿と意識を得たのは昨日だがな」

「あはは、それは言わないお約束でしょ」

そして、車に乗り込んでハンドルに手を掛け、さあスタートしようとしたところだ。

「もういくのかい？」

反対側から別の声が出た。

そっちに顔を向けると、ライダースーツにサンバイザーをつけた女が、窓枠に片肘をつけて車内を覗き込んでいた。

「何か用？」

メルセデスはその女、ヒビキに声をかける。

「別におめえにや用はねえよ、あたしが用があるのは祥太郎さんだ。でもまあ、一応声は掛けておこうかと思つてよ」

「ふうん、そう？じゃあ、良かったら乗つていく？」

「いんや、遠慮しとくわ。あたしにもプライドってもんがあるんでね」

そう言つてずっと窓から離れるヒビキ。その足はまるで暖機運転でもするように小刻みに駆け足を始めている。

「ふうん、その2本の足で、あたしと勝負しようつての？あらかじめ言つておくけど、あたしの最高時速は230キロだからね？」

「へえ、そりゃたいしたもんだ。でも、この日本でそんなぶっ飛ば

したら即お縄だから注意しなよ」

「忠告ありがと。まあ知ってたけど」

そしてメルセデスがエンジンに火を入れる。ぶおん、というリムジンらしからぬエンジン音が響く。

二人の視線が交差し、バチバチと火花を散らす。

「ちよつと、あかり。スタートの合図、出してくれる？ いっぺん、はつきりさせなきゃいけないみたいだから」

「全く、なんでそんな安い挑発に乗るのだ、お前は」

盛り上がっている2人を傍から見ていたあかりが、軽く頭を押さえる。

と、その横に何者かが駆け寄ってきた。

それは、二人目のあかりだった。手に何かを持っている。それは、昨日も何処からか持ち出していた、火縄銃だった。

「今から空砲を撃つ。それが合図だ」

一人目のあかりがそう宣言すると同時に、2人目のあかりが片膝をついてその火縄銃を構える。

「おいおい、大丈夫なのかよ？」

火縄銃を構える二人目のあかりをチラツと見てそんなことを言いながら、ヒビキが再び暖機運転よろしく足踏みをはじめ。

「心配なら降りてもいいわよ？ その時は当然、あんたの負けってことになるけど」

「そんなやる気になってんじゃあ、逃げるわけにやいかねえなあ」

二人は互いに、牽制とも挑発とも取れるやり取りを繰り返す。

やがて。

ずどうん！

火縄銃が、火と轟音をぶつ放した。

「うおらあああああああああ！」

直後、ものすごい土煙と高らかなエンジン音。そしてヒビキの怒号が響き渡った。

土煙の中で、エンジン音と怒号がものすごい勢いで遠ざかっていく。

そして煙が晴れた時には、1台と一人の姿は跡形も無くなっていた。

「事故など起こさなければいいのだが」

音が遠ざかっていったほうを眺めながら、2人のあかりが、口をそろえてそうこぼした。

16・新旧おやくだち合戦 その10（後書き）

どうも、作者です。

すっごく久しぶりになりましたが、続きを投稿します。

ただ、次がいつになるかは自分でもわかりません。

何話か書けてはいるのですが、実はPCの調子が悪くて……
モノのせいにしちゃいけませんね、すいません。

これから、ぼちぼち投稿したいなと思いますので、よろしくです。

「んーっと、今日もまたいい天気でやんすねーっ」
庭の芝生を踏みしめ、大きく伸びをしたはさみが、紺色の袖を腕まくりする。

「さつてと、今日も張り切ってやつちまいますか!」

両方の腕まくりをして、気合を入れた時。

「二ーハオ、はさみサン!」

いきなり、声をかけられた。

見ると、赤いチャイナ服を着て髪を頭の左右でわっかにし、背中にでかい中華なべを背負った女の子が立っていた。

「あつれー、紅娘さん、なんでこんなところに?」

突然現れた紅娘に、驚いた様子も無く、それどころかおどけた様子で答える。

「それはこの足で歩いて来たアルね」

紅娘はそれにとぼけた返事を返す。

二人の間に妙な空気が流れる。

「……ぷっ」

と、その空気に耐えられなかったのか、どちらともなくふき出した。

「あつははは、ボケ返してなかなか難しいアルな」

「そりゃー、あつしらはお笑いでもなきや大阪人でもないっすからねえ」

「それもそうアル。そもそも人でもないアルな」

「それを言っちゃあおしめえよ、って奴っす」

そして和んだのか、たわいも無い話に花を咲かせる。

「で、話あ戻りやすが、何しに来たんで? 先代のへそくりの隠し場所とかだつたらあつしよりあかりさんに聞いちまったほうがいいっすよ?」

「アイヤーワタシお金に困っていると違うアルよ。ちよと、ここの庭、

案内してほしいアル」

そして真顔でそんなことを言ってきた。

「この庭、これだけ広いアルから、ちよとぐらい菜園つくれないアルかな」と思たのコトよ。この前のうちの庭にもちよとしたの作てたアルけど収穫前に引越してしまたアル」

「へー、家庭菜園つてやつつすか。なんでまた」

「そりや、当然、採れたて新鮮の菜のほうが料理して好吃（良い）だからアル。ワタシ調理器具の端くれ、美味しい料理作るのが一番大切アルね！」

紅娘のその言葉に、はさみは素直に感心した。どこまで本気なのかは判らないが、確かに元調理器具なら考えそうなことだったからだ。「えーと、菜園はないっすけど、似たようなもんならありますぜ？」
「似たようなモン？何アルか、はつきり言うヨロシ」

「まあ平たく言やあ、果樹園ですかね。3代前の当主、将仁さんから見るとお婆さんに当たるお人が草いじりが趣味でしてね。あつしもそれに関わりやして、よく覚えてるんでさ」

はさみが懐かしがるような口調でしみじみと語ると、紅娘は身を乗り出して来た。

「アイヤー、それは很有興趣（興味深い）アルな。ワタシそれ見たいアル、早速連れて行くヨロシ！」

「ああ、あつしは構いやせんが、そつちはいいんですかい？」

「無問題無問題。というか、ワタシ午後なら将仁サンの学校行かなければならないアル。時間ないから早くしてほしいアル」

紅娘はよほどそこに行きたいのか、ずいっと身を乗り出してそう言ってきた。

「んじゃ、ついて来てくんまし」

はさみは、紅娘に向かって軽く手招きすると、くるりと背中を向けずたすたと歩き出した。

そのせいで、ついてくる紅娘が一瞬小さくガツポーズしたことに気がつかなかった。

「このへんっすね」

「アイヤー、ずいぶんと遠かたアルなー」

15分ほど歩いたところで、ようやくはさみがそんな言葉を口にした。

そこは、同じ種類と思われる、あまり背の高くない広葉樹が、等間隔に植えられていた。

「このへんは林檎の区画で、林檎の樹が植えられてんです。こっからあのへんに植わってんのが「富士」って品種で、このへんからあのへんまでは「紅玉」、あっちのほうに「王林」が植わってます。

こっちのほうにもうちよい行くと葡萄の区画になって、あっちにいくと梨の区画、あっちには桃、もうちよいあっちに行くと栗とか胡桃とか」

はさみが指をさしながら説明する。

「………なんかすぐくいつぱいいつぱいあるみたいアルけど、この果樹園で、一体全部でどのくらいあるアル？」

「んー、広さは全部合わせるとだいたい1000坪ぐらいっすかね。種類は、えーと、林檎に梨、桃、梅、葡萄、柿、琵琶、栗、胡桃、つてとこですかね」

さすが8000坪あるという西園寺本家の庭。紅娘は、その数字を聞いただけで圧倒されてしまった。

「そいえば、蜜柑とかの柑橘系はないアル？」

「んー、寒さに強い柚子がちよいとあるぐらいっすかねえ。柑橘類はあつたかいところじゃないと育たないっすから」

「そんじゃ、ライチとかマンゴーとかも無いアルか」

「温室とかなら育つかも知れねえっすけど、うちの温室は花がメイソなんスよ」

そしてふと、あることを思い出す。昔、と言っても半年ほど前だが、その温室にはそれを管理する擬人がいたということだ。

彼が消えて以来、その温室は放置されており、今どんな状況なのかははさみにも判らない。

もしかしたら、作り変えるいい機会なのかもねえ。などとはさみが考えていた、その時だ。

「はさみサン、ちょっといいアル？」

紅娘に声をかけられ、はさみは我に返った。

「あー、すんませんすんません、別のこと考えて……」

さつきまでと同じ、軽い調子で振り向いたはさみだったが、途中で声を詰まらせてしまった。

目の前にいる紅娘の様子が、ちょっと違っていたからだ。さつきまでは軽くおちゃらけた感じだったが、今度はかなり真剣な感じだ。

なるほど、ここからが本題ですかい。はさみも、頭を真剣モードに置き換える。

「ここ、あかりサンの領域からは離れているアルか？」

「んーまあ、あの人は屋敷から離れられないみたいですけど……」

・なんで彼女の名前が？」

「別に？ただ、年長組サンたちがあかりサンに集められて何かコソコソやてたみたいアルからね」

はさみの中に一瞬、戦慄が走る。

「何やてたアル？まさか私達と喧嘩しよなんて馬鹿な事言わないアルよね？」

問い詰めるような紅娘のその言葉で、はさみは理解した。あかりが自分たちに持ちかけた話は、原因は不明だがあちらに筒抜けだったと。全く、何が他言無用だよ。はさみは心の中で悪態をつく。

「勘違いしないでくれませんかね、あつしは別にケンカする気はありませんぜ？」

はさみは、とりあえず、正直な考えをを告げる。

「じゃ、ナニを企んでるアル？あかりサンに何吹き込まれたアル？」

「企むなんて滅相も無い。ただ、あかりさんが暴走してたからちょっと手綱をいじっただけで」

「アレが、手綱をいじる、アルか？なんだか……」

そう言われ、紅娘ははたと困ってしまった。これ以上話すと、トリ

ツクについて話してしまいそうだったからだ。

「……………なんだか、誤魔化されたような気がするアル。ちょっと納得いかないアル。でも、ワタシも喧嘩ふっかけるのは嫌アルし」
誤魔化すため、ぶつぶつと考え込む仕草をする。

「とりあえずは、信じることにするアル」

「そりゃ、どうも」

「でも、菜園作りたいのと果樹園に很有興趣なのはホントアル。だからもうちよと案内してほしいアル」

「それならお安い御用でさ」

そして二人は、その果樹園の中を歩き出した。

毛足の長い絨毯が敷かれた廊下を、クレアが歩いている。

SWATのような服装をして、厳しい表情をして歩く彼女のまわりには、近寄りがたい雰囲気漂う。それは、「中のものを守る」ということを役目とする金庫故だろうか。

「お、おおおおお、お、お、おいっ！」

そのクレアの背後から、誰かが声をかける。

振り向くと、誰もいない。

「こらっ！どこ見ておるっ！わっ、わらわはここじゃっ！」

下のほうから声が出たので、視線を下に向けると、彼女の身長の三分の一程かなさそうな子供がクレアを見上げていた。

魅尾だ。二度寝から起きたらしい。

「………何か用？」

じろりと睨みつけ、あまり関心なさそうに、クレアはその狐耳の幼女に声をかける。

「おっ、おっおまえっ、さっきは、よくも、わらわに怖い思いをさせてくれたなあっ！」

魅尾は、目を潤ませながらもクレアに向かってビシッと指を差す。

クレアは、そんな魅尾を興味なさそうな冷めた目で見下ろすと、興味なさそうにふいっと顔をそむけて背中を向ける。

「なっ、こ、こら何処へ行くんじゃ！待たんか！無視するな！」

魅尾がギャンギャンとわめくが、クレアは聞こえないようにすたすたとそこから去ろうとする。

「うっう~~~~っ！」

軽くあしらわれた上に完全に無視され、プライドを傷つけられた魅尾は、目に涙を溜めながらも怒ったように顔を真っ赤にし、歯をむいて唸り声をあげる。

と、その魅尾がいきなり大きく息を吸い込むと。

「かあっ！」

何を考えたのか、口から、こぶし大のオレンジ色の狐火を吐き出した。

火は、一直線にクレアめがけて飛んでいく。そしてクレアの背中に当たると、パシュツと花火が弾けるような音を立てて火花を撒き散らした。

そんなものをぶつけられたら、普通は熱いどころではない騒ぎになる。実際、クレアのジャケットの背中にはその跡が残り、うっすらと煙が上がっている。

「……人に向けて、火を放つのは、良いこととは言えない」だがクレアは、蚊にでも刺されたかといった様子で平然と、それどころかめんどくさそうに振り向く。彼女の元である金庫には高い耐火性があるため、彼女自身にもその特性があるのだ。それでも多少は熱かったのか。眉ひとつ動かしてはいないが、口調が微妙に怒っているように感じる。

「うるさいうるさいうるさいっ！気狐たるこのわらわを無視したお主が悪いのじゃ！」

だが、魅尾は、悪びれるどころか更に声を大きくする。傍から見たら、子供が我侭を言っているように見えなくもない。

「だいたいだな、お主はわらわの扱いが悪すぎるぞ！わらわを何じやと思っておるんじゃ！」

「……不審者」

「ちつがーう！わらわは気狐じゃ、白狐じゃ！稲荷神の御使いとして、はるか昔から敬われる存在なのじゃ！」

地団駄を踏んで悔しがる魅尾。2人の様子を横から見ていると、預かった手のかかる親戚を前にどうしたもんかと眺めるお姉さんのようにも見える。

「……稲荷神？」

「そうじゃ、わらわは神の使いなのじゃ。じゃから、ちゃんとわらわを敬わなければバチがあたるんじゃぞ」

そして魅尾は、腰に手を当ててふんぞり返る。

だが、クレアは、肝心の稲荷神、というものを知らなかった。

「……………宗教なら、間に合っている」

「こっ、こらあっ！古今東西この日の本の津々浦々で数限りなく奉られておる稲荷神を、怪しげな新興宗教と一緒にするでない！」

「……………それで？」

「じゃから、その使いたるこのわらわを、もつと敬えと言っておるんじゃあああっ！」

クレアの前で地団駄を踏みながら魅尾が声を張り上げる。彼女としては、無意識に尻尾まで逆立つぐらいに怒っているのだが、傍から見ると子供が地団駄踏んでいるようにしか見えない。

「……………わかった」

そして、周りが見えなかった魅尾には、ひとつため息をついたクレアがすつと腰を落としたことにも気がつかなかった。

「うひゃあ!？」

自分の目線に、クレアの無表情な顔があることによく気がついた魅尾は、その直後腰を抜かしてその場にぺたんとして座り込んでしまった。

「な、ななな、なんじゃ」

偉そうなことを言ってしまった手前、強気でいようとは思うが、頭に銃口を突きつけられた恐怖は簡単には拭えない。

さらに言えば、クレアの顔は、感情が無いのではと思わせるほどに無表情なので余計に怖い。

「ううう、お、怒っておるのか!?狐火をぶつけたことを怒っておるのか!?それとも、ままままさか、このわらわを、いじめるつもりなのか?!?いたいけな子供を、いじめるつもりなんじゃなっ!？」

何も言わないクレアの目の前で、魅尾はだんだんと泣きそうな表情へと変わっていく。さっきから軽く涙目ではあったが、今では完全に泣き顔になっている。

すると。

「……………敬ってあげる」

クレアが、魅尾の目をじっと見つめ、ぼそりとそう言った。

「……………ふえ？」

「……………もう一度言う……………あなたを、神の使いとして、敬ってあげる」

「ど、どという風の吹き回しじゃ？はっ、まさか、わらわの気持ちを持ち上げて落とすフリなのかっ!？」

「……………そうじゃない」

何かと騒がしい魅尾を、その一言と眼力で黙らせると、クレアは淡々と話し始めた。

「……………あなたは、自分を、国中で奉られる神の使いだと言った。……………稲荷神がどんな神かは知らないが……………それだけ奉られるのには、相応の理由があると考えた」

そして改めて魅尾を見やり、こう続けた。

「……………だから、敬ってあげる」

「あげるって、お主……………」

上から目線で敬うというのは、裏を返せば自分達を見下している。本来は信仰の対象のはずの魅尾にとっては屈辱なのだ。

「……………そうじゃな」

だが、魅尾は、ちよっと考えた後、ちよっとだけ悪い笑みを浮かべた。

「ひとつ聞くが、神を奉るときに付き物なのは、なんじゃと思う？」

「……………判らない」

「答えは、御供え物じゃ。神が好むものを捧げ、見返りとして祝福を得る。つまり、お主が敬おうとするなら、お主が働きかけねばいかんということじゃ」

そして、しらじらしくそっぽを向いてから言葉を続ける。

「あー、くちさみしいのー。うまいものは別腹と昔から言うからの

」

これは明らかに、何かを食べたいと言っている。

「…………お菓子の持ち合わせはない」

だが、稲荷神を知らないクレアには、それが何なのかも判らない。

「こ、こら、わらわを子ども扱いするでない。誰が菓子など欲しが
つておる」

「…………じゃあ、何が欲しい」

「醍醐が食べたい！」

魅尾が、謎の食材を即答する。

「…………それは、何」

「知らんのか、醍醐味と言つ言葉もあるである。乳を精製したもの
じゃ」

「…………知らない」

「むう、お主は何も知らんのじゃな。以前、レイカから貰うたぞ」

「…………そう、それなら」

そう言つてクレアは立ち上がると、魅尾に背を向け、胸元で何やら
ごそごそとやりだした。

そして、再び魅尾に向きなおる。だが、なぜかクレアは自分のジャ
ケットについているレバーに両方の手をかけていた。

「…………レイカのところへ、連れて行く」

そして、腰を下ろすと、レバーをひねった。

がちや、という重い金属音の後、ジャケットの前が開く。するとそ
こには、クレアの体の代わりに、真っ暗な空間が口を開けていた。

「…………な、なんじゃこれは!？」

「…………入って」

驚くと同時にびびりまくる魅尾に向かって、クレアはずいっとその
黒い空間を近づける。外からの光が入らないのか、そこに何がある
のかはほとんど見えない。

「は、入るって、ここにか!？」

「…………担いで行くより、私が楽」

クレアがそういつた瞬間、何かを感じたのか魅尾がびくんっと体を

震わせ、くるりと背を向ける。

だがその直後、逃げようとした魅尾の襟首を、クレアがむんずと掴んで取り押さえた。

「……………逃げないでほしい」

「いやじゃー！ー！普通逃げるわー！ー！離せ、離すのじゃー！ーっ！」

クレアの手から逃げようと、魅尾は手足に頭に尻尾まで総動員して全力でじたばたと暴れる。

だが、体が小さく、今は体力も幼女並みしかない魅尾にとって、自分を軽々と持ち上げるクレアの腕力には到底かなわない。

「……………大人しくして欲しい」

「うぎゃー！ー！ー！ー！」

悲鳴にもわめき声にも聞こえる声をあげながら、魅尾の体がクレアの体に開いた空間に放り込まれる。

そしてクレアがジャケットの前を閉じると、その悲鳴も聞こえなくなった。

「……………レイカ、冷蔵庫の擬人化」

レバーから手を離れたクレアが、魅尾が口にした名前を、確認するように口にする。

「……………行ってみれば、判る」

そして、廊下の先を見つめると、すたすたと歩き出した。

16・新旧おやくだち合戦 その13

「Mmmmmm、a little bit tired.」
豪勢かつ重厚な木製の机の前で、バレンシアが大きく伸びをする。
明るい金髪の巻き毛がゆれるその下で、ずり落ちた大きな丸めがね
をなおすと、いかにも疲れたと言いたげに両肩を回す。すると、髪
以上に自己主張が激しい、屋敷内で最大サイズの胸も一緒に上下す
る。

机の上には、3つのハードディスクのほかに、A4サイズのノート
ぐらいの大きさの、薄型テレビのような板 - 彼女のディスプレイと
電話線の端が無造作に投げ出されている。

バレンシアは、引越しをしてまだ24時間も経っていないというの
に、すでに仕事を始めていた。

とはいえ、今回行ったのは「西園寺」名義の投資の運用状況のチェ
ックだけだが、それでも普通ではない額の金が時々刻々と変化しな
がら動いている。把握するだけでも非常に大変なのだ。

そして同時に、彼女は別のことにも注意していた。

彼女がいる部屋は、西園寺の屋敷にある。そしてこの「屋敷」は、
対抗勢力「屋敷あかり」の手の中も同然。考えすぎかもしれないが、
それが気になってしまい余計に疲れていた。

そんな作業に見切りをつけ、一息ついたとき。

「こんにちは」
のんびりした声がバレンシアの耳に入った。

そちらを振り向くと、ポットやサンドイッチを乗せた妙に分厚いト
レイを持った、色使いがやたらと派手な古代ギリシヤの女神のよう
な服を着た鼻眼鏡の女性がにこやかに立っていた。

「お仕事、ご苦労様です」。コーヒーを入れて来ましたから、一
休みませんか？」

その人物、御守は、トレイをテーブルの上に静かに置くと、ポット

を手に取り、一緒に持ってきたマグカップに注ぐ。

よく見ると、トレイだと思っていたのは、大判の本だった。表紙には大量のカラフルなマグカップの写真と、「コーヒープレイクの効能」という意味合いの言葉が英語で書かれている。

「バレンシアさんは、アメリカンが好きでしたよね」

コーヒーの入ったマグカップをこりとバレンシアの前に置くと、あかりはもうひとつのマグカップにコーヒーを注ぐ。

マグカップに一旦視線を落としたバレンシアは、それをすぐに御守の顔に戻す。そうしながら、机に置いていたディスプレイをさりげなくしまいこむ。

その何気ない仕草の中で、バレンシアは自分の頭をフル活動させる。それは勿論、目の前に現れた御守の真意を測るためだ。なにしろ、バレンシアは、偶然もあつたとはいえ「年長組」たちの企みに一番早く気づいた女だ、目の前に現れたその「年長組」の1人に警戒するのも当然と言える。

そして、いぶかしむようにそれぞれのマグカップと御守自身をかわるがわる見てから口を開いた。

「Daily Recordでresearchしたデース？」

「ええ、それはもちろんですよ。差し入れに嫌いな物を出したりしたら、失礼じゃないですか」

全く隠す様子もなく、御守はあつけらかんと答えると、問題ないとはばかりにコーヒーを一口飲む。

一方のバレンシアは、マグカップを手に取ったものの、口をつけずに鼻を近づけにおいを嗅いでいる。かと思うと、眼鏡越しにカップの中のコーヒーを、奥底まで見透かそうとするようにじっと見つめる。

「そんなに警戒しなくても、変な物を入れてないですよ」

だが、明らかに警戒しているバレンシアの様子を見ても、御守は全く怒る様子もなく、それどころかそう来るのが判っていたように答える。

「Hmm、たしかにthis drinkはcoffeeデース。Thanks。」

一旦考えることをさておくことにしたのか。バレンシアは自分に出されたコーヒーを一口すする。

「Ah、ちゃんどweak roast（浅煎り）なcoffee bean（コーヒー豆）でmakeされているデースネー」
そして、賞賛の声をあげる。ちゃんとしたアメリカンコーヒーだったことが嬉しかったようだ。

「砂糖は要りませんか？」

「ミイはblack派デース」

そしてカップ半分ほどを二息に飲んでから、トレイの上に置く。

「But、Miss Honma。ミイはacup of coffeeやapiece of sandwichでfix（買収）されるほどfoolではナイデースよ？」

そして、考えても埒が明かないと判断したのか。バレンシアは、カマをかけるようにそんな事を言った。

「買収だなんて、私は、お話がしたいだけですよ」

御守は、表情を崩さず、口調も崩さずにそう切り返す。

「Really？」

「Of course。敵意がありましたら、1人で丸腰でな来て来ませんよ。ただでさえ、ここでは私の力はほとんど発揮されませんし」

「Well、OK。ミイもユーのsayingをlistenしたいデース」

サンドイッチを口に運びながら、バレンシアは御守から目を離さずその行動を観察していた。

情報収集には余念が無いのが、元コンピューターのバレンシアである。御守のみならず、「年長組」の能力や性格については、年少組の中で最も把握しているという自負がある。

その中で、最も情報が不足しているのが、目の前にいる女、「本間

御守」だ。あかりのようにわかりやすい動きをしているわけでもなく、メルセデスやはさみのようにあけっぴろげでもなく、クレアのように危険を匂わす雰囲気でもない。そのため、優先順位を下げていたのだ。

一応、地下書庫で見せた現象については将仁から聞いている。そして、さつき御守が言った通り、書庫の中でなければ本当の力は出せないということも。そういう意味では、確かに丸腰だ。

だが、彼女たちがいる部屋は屋敷の一室。そして御守は年長組、つまり「あかり」の仲間だ。もしかしたら秘密裏に情報のやり取りをしているのかもしれない。

「実は、将仁さんのことなのですけれど」

「What? Masterがwhatしたデース？」

「いえいえ、そういう意味ではなくてです。これから、どのようにお付き合いしていけば良いのかな」と

「Hm m、ユーはMasterのsteadyになりタイデース？」

「すっ!？」

その瞬間、御守の顔が真っ赤になった。

「わわわ、私は、もっと、プラトニツクな関係を、って、そういう話じゃないのですよっ!？」

それほどに想定外だったのか。御守は落ち着きなく手をわたわたさせる。

「私はですねっ、将仁さんがどんな勉強をしているのかとかっ、どんな悩みを持っているのかなとかっ、そういうことが知りたいんですっ!」

そして多少落ち着いたのか、少しむくれたような表情でバレンシアを睨みつける。

「H a h a h a h a h a、s o r r y、s o r r yネー。まさかここまで慌てるなんて、想定外だったデース」

その様子を見て、バレンシアはいかにも面白そうに笑った。

「But、ユーにはDaily recordというspecia

1なweaponが有るデース。ミーのcoffeeのコトが判るデスから、Masterのコトも判るはずデスよネー？」

「いえいえ、人が何を考えているかは、判らないですよ」

そして、御守はひとつ息を吐く。

「ただ、将仁さんは、私たちに、喧嘩はしてほしくないと仰っていたので。仲良く出来ないものかな」と

その言葉を聞いて、バレンシアは腕を組む。

「Of course、friendly(仲良し)なのは、ミーたちもpleasure(喜ばしい)なコトデース。But、ユーたちのparty(仲間)には、not friendlyなpeopleも、いるみたーいなデース」

その瞬間、御守の目元がぴくりと動く。

「あ、あらあら、それって、誰のことでしょうか」

「それは、ミーには言えないデース。Because、nowこのmomentにも、sheはsomewhereでlisteningしているかも知れないからデース」

そして、まるで自分をどこかで見ているであろう誰かに睨みを効かすように部屋をぐるりと見回す。

その仕草が何を意味するかは、御守にも十分すぎるほどに理解できた。

「ユーにもcounsel(忠告)しておくデース。Masterをconfine(監禁)するのはrecommend(お勧め)しないデース」

「あらあら、ひどい言われようですね。私はそんなこと、出来てもしないのでよ、将仁さんに嫌われるのがオチですから」

いつからか、二人の会話は、その「第三者」へも向けてされるようになっていた。

16・新旧おやくだち合戦 その14

「今日は肉料理にすべきかしらね。祥太郎さんも松子さんも肉料理が好きだから」

テーブルの上に山と積み上げられた食材をひとつひとつ確認しながら、リアル雪女ことレイカはそう独り言を口にする。

目の前にある食材は、この屋敷の冷蔵庫（しかも業務用サイズ）に入っていたものだ。

出してみて判ったが、中身の管理はろくされていなかったようで、特に生鮮食品のほとんどは干からびたり傷んだりしている。さすがに冷凍室に入っていたものは無事だったが、それでも若干霜解けているものがある。

「やっぱり、買い出しは毎日行かないとダメのようね」

食用に耐えないと判断した食材を片端からゴミ袋に投げ込んでいく。その様子は事務的だが、それでも包み紙やラップはちゃんと分別する。この屋敷には生ゴミ処理機がちゃんとあるので、そこに投げ入れるのだ。

ちなみに彼女は知るよしもないが、その生ゴミ処理機は、先々代の当主の趣味で作られた果樹園の肥料を作るために導入されたという、金持ちとは思えない経緯がある。

そして、残ったものは袖の中や懐などに手早く収めていく。それだけでも結構な量になるのだが、衣服が膨らんだりは全くしないし、彼女自身も重そうな素振りを見せない。

そのほとんどが衣服の中に納まった時。

「・・・・・・レイカ」

何者かに声をかけられ、レイカは振り向いた。見ると、SWATを思わせる格好をした、厳しい表情の女が厨房の入口に立っていた。

「あなたは、確かクレアさんよね。何か用かしら」

二人の視線がそこで交差する。

元々口数が少なく、表情も豊かでは無い二人だ。妙な沈黙が場を支配する。

「もう一度聞いわ。何か用かしら？お昼のメニューはまだ未定よ？」
耐えられなかったのか。レイカが再び口を開く。

「……聞きたいことがある」

それにワントンポ遅れて、クレアが重い口を開く。

「……醍醐とは何かを、教えて欲しい」

「……えっ？」

「……もう一度言う。……醍醐とは何かを、教えて欲しい」

「ダイゴ？聞きなれない言葉ね。誰から聞いたのかしら」

「……この子」

言うなり、クレアはジャケットのダイヤルをカチカチと回しはじめる。

そして、レバーに手を掛けて、前を開いた、その瞬間。

「うわああああああん！」

泣き声と一緒に、何か白いものが、レイカ目掛けて飛び出してきた。

「レイカあああああ、暗くて狭くて怖かったのじゃああああああ！」

魅尾だった。レイカの首根っこに全身でしがみつき、まさに泣き喚いている。その様子はまるで、もの凄く怖いものに怯えて母親に抱きつく、幼い子供のようだ。

「よしよし、あのお姉さんに苛められたのかしら？」

「うわああああああん、いきなり閉じ込められたのじゃあああああああ！」

この前よりさらに子供っぽくなっていないかしら、などと少々失礼なことを考えながら、レイカは泣きじゃくる魅尾を宥めに入る。

一方のクレアは、表情はそのままながらも、どうしたものかといった様子でジャケットの前をがっちゃん閉める。

「もしかして、欲しいのってこれかしら？」

心当たりがあったのか。レイカが、どこからか銀色の小さな塊を取り出す。

それは、ベビーチーズだった。

それを見た瞬間、あれだけ泣き喚いていた魅尾がぴたりと泣き止んだ。

「お、おお、これじゃこれじゃ！やはりレイカは頼りになるのじゃ！」

「ぱあっ、という表現がぴったり来るような表情でそのベビーチーズをレイカの手から取り上げると、テーブルに腰掛けて包んでいる銀紙を手早く剥く。そしてぱくりと一口かじると、にんまりと笑った。

「はあく、おいしいのじゃ〜」

実年齢はともかく外見も仕草もまるつきり子供な魅尾のそんな姿は、二人をほんわかした気分にした。

「ところで、クレアさん」

魅尾の姿を眺めながら、レイカが口を開く。

「用事は、それだけかしら」

「………これだけ」

「そう。てつきり、喧嘩でもしにきたかと思ったのだけれど」

「………どうして、そんなことを」

「あなたたち年長組には、私たちを目の敵にしている人がいるですよ。年長組はその人を中心として動いているようだから」

「………」

眉ひとつ動かさないクレアだが、内心では驚いていた。あの場にいなかったレイカが、そのことを知っている。となると、他にも色々筒抜けなのではないだろうか。

「………何を勘違いしているのかは、知らないけれど」

だが、クレアはその程度では動じなかった。

「………私は、金庫。専守防衛がその本質。………先制攻撃は、不本意」

「そう。それなら、良いのだけれど」

そして、それはレイカも同じだった。

いずれも素面では感情の表現に乏しい2人。会話は非常にそっけない。

しかし、同じように攻撃的ではない同志では、争いになりようもなく。

幸せそうに2つ目のチーズの包みを開ける魅尾を、同じような目で眺めるだけだった。

16・新旧おやくだち合戦 その14（後書き）

どうも、作者です。

久しぶりのアップになりました。

こう言うてはなんですが、この作品の初期の「毎日のようにアップしていた」時期が懐かしいです。

しかし、書けないということとは、やっぱりスランプなんですかねえ。

「　　」
廊下に面した大きな窓のひとつに、白い髪のメイドが張り付いている。

その両手はまるで窓を拭くように動いているが、手には何も持っていない。そのため、手のひらで窓を撫で回しているようにしか見えない。

さらに、そのメイドは顔までもその窓に当たりそうなほどに近づけ、同じように動かしている。

そのため、張り付いているように見えるのだ。

「おい、そのメイド」

傍から見たら奇行にしか見えない行為をするその白い髪のメイドに、声をかける者がいた。

執事服に身を包んだ、長身の女性だ。

「ひゃい？」

そのメイドが、気がついたらしくこちらを振り向く。そのメイドの様子を見て、執事服の女は驚いたように一歩後ずさりした。

なぜなら。そのメイドは舌を出していたのだが、その舌が異常なほどに長かったからだ。

その舌を、うどんかきしめんでもするように自分の口に引っ込めると、白い髪のメイド、クリンはあらためて自分に声をかけた女性、あかりのほうに向き直った。

「ああ、あかりさん、何かご用でしょうか？」
そして、ほんわかしめた笑顔を浮かべる。

一瞬毒気を抜かれたあかりだったが、振り払うように頭を振ると、クリンをきつと睨みつけた。

「お前、何をやっていた」

「ええ？何ってえ、窓拭きですけどお」

「嘘をつけ嘘を、窓ガラスを舐めて掃除する奴がどこにいる」

「あらあらあ、ここにいますんですけどお」

「だからそれを止めると言っているのだ。私はこの屋敷だ。そんな気持ち悪いことをするな」

「むう、気持ち悪いとはひどいですう。私はお風呂のスポンジなんですよお？拭き掃除はあ、私のお仕事ですう」

はじめはのんびりというかのらりくらりと答えていたクリンだったが、話の内容が言いがかりに近くなるにつれ、だんだんと声を荒げるようになっていく。もつとも、口調がのんびりしているため怒っているようには感じられないのだが。

「あなたたち、何をしていますでしょう？」

そこに、新しいメイド服姿の女性が出た。黒いほうのメイド、テルミだ。両手に大きな洗濯かごを抱えているので、今から干していくのだろう。

「あ、テルミさあん」

地獄に仏、といった様子のクリンがテルミにすがりつく。

「いっぽうのあかりは、忌々しいものでも見たかのようにその黒いメイドをにらみつける。

「お前には関係のないことだ。さっさとその洗濯物を干してきたらどうだ」

その高慢な言い方は、さすがのテルミでもカチンと来た。

「そういう貴方は何をしていますでしょう？まさかどこぞの小姑娘のように文句を言うためだけにうるついているのではないでしょうね？」

「ばかなことを言うな。私はこの屋敷だ。ここに住まわれる将仁様のためにも、隅々まで綺麗にしておかねばならんのだ。

それをこの女は、あるうことか舌で舐めていたのだ」

「そんな悪いことでしょうか？舌で舐められるほど綺麗だとも、言えるのでは？」

「ふざけるな。なら訪ねるが、貴様は自分の体を他人に舐められて

嬉しいのか？」

「でもお、将仁さんはあ、喜んでましたよお？」

だがそこで、クリンがうかつな発言をしてしまった。

「な、な、な、なん、なんだとっ!？」

その瞬間、あかりが色めき立った。

「だって、私はお風呂のスポンジでしたからあ。お風呂にだってえ、一緒に入った仲ですよお？」

「ちよつと、クリンさん!？なんてはしたないことを言うのでしょっ!？」

「ええー? だってえ、テルミさんだつてえ、似たようなことお、していたじゃないですかあ」

「に、似たようなつて、私のは全く違うでしょうっ! 確かに私はDVD再生もできますし、将仁さんもそういうことに興味あるお年頃でしょうから、そう言った類のものをお見せしたことはありますし、自家発電されているのを間近で見させていただいたことも、あるでしょうが」

「あのお、私い、そこまでは言っていないんですけどお」

いつのまにか掃除の話から自分たちの主の話に切り替わっているが、彼女らにとつては掃除より興味深い事なので、話が止まらない。

「お、お、お、おおおお前たち、そん、そんなつら、違う、けしからんことをしているのか!？」

そして、3人のなかでただ一人そういうことができているあかりが、目の色を変えて裏がえった声をあげる。周囲の窓がガタガタ鳴り、ドアがバタバタと音を立てて開閉している時点で、すでに落ちついていない。

「私たちは、自分の役割を果たしているだけでしょっ。それをけしからんなどと言われるのは心外なでしょっ」

「そうですよお。そんな言い方をするほうがけしからんですっ」
優位に立った白黒メイドは、その優位を保つためさらに強気に出る。そもそも、目の前にいるあかりという女は年長組と年少組の対立を

はじめにけしかけた奴なので妥協する気は毛頭ない。

おかげであかりの機嫌はますます悪くなり、シャンデリアが揺れたりポルターガイストじみた現象まで起きたした。

「あらあ？もしかしてえ、うらやましいんですかあ？」

「う、うらっ、うらやましくなんかっ……」

すでに冷静さを失っていたあかりに、クリンが挑発的な言葉を投げかける。

「あるに決まっているだろうがあっ！」

そして、あかりが叫んだ。

「だって将仁様は、本来であれば、この私と共に生きていたはずなのだっ！それがっ！17年もの間、私と全く関係ない所で暮らっ！私ができるなかった、あーんなことやこーんなことをしただなんて言われてっ！うらやましくないはずがあるかあっ！」

「それなら私たちを目の敵にするのは明らかに筋違いでしょうっ！だが、テルミにぴしゃりと一喝されると、あかりは黙り込んだ。

「それに、将仁さんは、同じモノ同士、仲良くしろと仰っているでしょう？私たちは将仁さんのモノ、将仁さんの意思は私たちにとって絶対なのでしょう」

「でもお、将仁さんはあ、私たちをそんな目では見ないんですよ
え」

クリンが、すつとあかりのそばに近づく。

「それにですねえ」

クリンが、すつとあかりの首に手を回し。特徴のひとつである長い舌ですつと舐め上げる。

「ひっ！？」

「将仁さんも若い男性ですからあ。こっというのがお好きなんですよ
お？」

こんなことをされるのは初めてなあかりは、顔を真っ赤にしてびくつと体を硬直させる。

「ぶおっ！うほとお、ひてひゃひあげひゃらあ、ひよろほばれると

「思いまふよお？」

「そう言いながら、長い舌を器用に動かして首筋周りや耳の周りを嘗め回す。それに加えて体のいろいろなところを、こちらは手でいじりまわす。」

「んあっ、ちよ、や、やめ、ちよ、やめっ、ひいんっ」

「免疫が無いらしく、されるがままのあかり。逃げようにもクリンにしっかりと抱きすくめられてしまい、それすらできない。」

「いつもならすぐに止めそうなテルミも、今日はメイド立ちでニコニコ笑いながらそのようすをじーっ見つめている。と、やにわにマントの前を閉じると、さっとその前を開いた。」

「テルミなので、そうすると当然60インチのプラズマディスプレイが現れる。」

「そしてそこに映されたものを目にした瞬間、あかりは目を見開き絶句した。」

「そこには、クリンに体をまさぐられ、身悶えするあかり本人の姿が映されていたのだ。」

「ふふふ、クリンさん、良い仕事をされるのでしょ」

「そう言うテルミの目は、かなり意地悪に光っている。」

「もしこれを、将仁さんにお見せしたら、将仁さんはどんな反応をするのでしょね」

「その瞬間、あかりの顔が真っ赤になった。」

「おいこら貴様ら、んっ、こんなことしてっ、はあっ、ただですむとっ」

「仕掛けてきたのは、そちらでしょっ？」

「そう言い切るテルミの目に、すっ、と冷たい光が宿る。」

「私たちは、あなた方も仲良くやっていかれる。そう信じていましたしそうするつもりだったのでしょ。それを否定したのはあなた方、もっと言えは、貴方でしょっ」

「仲良くやっていたら、一番にはなれないじゃないかあああっ！」
「うがーっ！とばかりにクリンを全力で振りほどき、肩で息をしながら」

らテルミをずびしつと指差す。

「一番になる必要が、何処にあるのでしょうか？」

だが、テルミはそれに対し極めてクールに、事務的に答える。

「私たちは、モノ。それぞれ果たすべき役目、役割、立場も違うでしょう。一番にこだわるならば、それを成すことこそが、将仁さんにとっても一番なのではないでしょうか？」

「うぐっ……」

真正面からの正論に、あかりは一瞬言葉を詰まらせる。

「し、しかしだなあ！今は、モノであると同時に人であり、そして女なのだ！女として見て欲しいと思って、何が悪いのだった！」

だが、すぐに気を取り直すと、そう言い返したのだった。

16・新旧おやくだち合戦 その15（後書き）

久しぶりです、作者です。

なんというか、間があくと、内容が收拾つかなくなりそうで怖いです
すね。

次は、なんとか年明け前に投稿したいなと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3861g/>

もののけがっばい

2011年12月5日00時56分発行